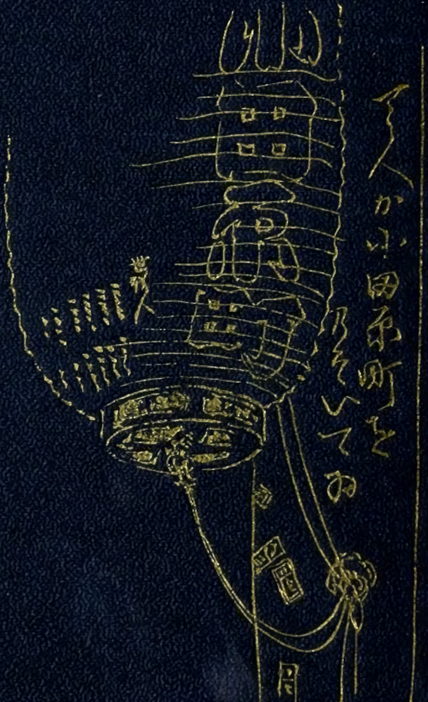

人が小田原町を歩いてゐ



日本名著全集
江戸文藝之部第廿六巻

川柳雜俳集

この卷の裝幀——

背及表紙意匠　山田敬中氏畫
見返し前附・後附　山田敬中氏畫
背　文　字　渡邊新三郎氏筆
扉　文　字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

川柳雜俳集目錄

俳風柳多留

俳風柳多留拾遺

川傍柳

解題

西原柳雨

本書に收めたる、誹風柳樽、柳樽拾遺、川傍柳及び誹諧武玉川の四種に就いて簡單なる解說。

『誹風柳樽』 初編より第三十一編まで

明和二年五月に吳陵軒可有（木綿と號す）といふ人が、初代川柳翁の選にかゝる萬句合の中から、一句立として首尾貫徹せる意味を持ち、且つ秀逸佳調と思ふ前句だけ、約七百餘句を選抜し、星運堂花屋久治郎と諮つて、小半紙形の冊子に仕立て、「誹風柳樽」初篇と題して刊行したのが今日柳界のバイブルとも謂ふべく尊重せられてゐる『柳樽』の根元である、同じくその三年か四年かに第二篇、五年に第三篇といふ鹽梅式に 大抵一年に一冊宛位の割合に出版せられたのである、ところが享和を飛んで文化代から天保代に至るの間は、 大概一年に四冊宛位の割合

に版行せられ、兎も角も明和二年から天保八年頃迄さつと七十二三年の間に百六十六篇まで發行を續けて來たのである、その內、初篇から第廿四篇までが初代川柳の選句集で、從つて佳句名吟も多いのである、そこで『柳樽』は二十四篇まで見ればそれでよい、その以下を讀む必要は無いとまで主張せらるる極端論者さへある、けれども第三十篇、第三十一篇、第七十篇等には初代川柳の選句を澤山追錄してあるのみならず、化政代以後の句は悉く駄句狂句ばかりとして唾棄するといふことは少しく考物である、況んや川柳を寶曆代以後の江戶風俗史料として取扱ふ場合に於ては、決してさう無造作に片付けて仕舞ふ譯には參るまいと思ふ、而して柳樽の編纂刊行のことを引受けてやつて居た可有の死は天明八年の五月十八日であつて、その年の七月に發行された『柳樽』第二十二篇正月花角力の出句者の中には明に木綿の名が見えてゐるのみならず、其の序文を書いてゐる所より推想すれば、可有は急病か少くとも餘り長く病褥に呻吟せずして物故せしものかと思はる、而してその二十二篇の版下は死ぬ前に大概出來上つて居たものであらう、又其篇の終に、二代呉陵軒の名で次篇に木綿居士の追善句を發表すると掲げてある豫告通りに、翌寬政元年發行の第二十三篇に前年の七月に行はれた追善角力句集が載せられてある、その二代目呉陵軒といふ人はどうなつたか不明であるが、可有の業を引繼いで第二十三篇の編輯版行のことにたづさはつた人は其序文を書いてゐる下邊如猩といふ人らしい。

其翌寛政二年九月廿三日、七十三歳を以て初代川柳が歿した、そのためか、又は他に事情があつてか、其處は不明なれども其年は『柳樽』は休刊し、翌三年に第二十四篇を刊行してゐる内容の句はまだ大部分川柳の選句で、編輯者は花洛庵一口である。

第二十五篇から第二十九篇迄の五冊は和笛の選句を收錄し、編輯者は二十五篇が市中庵扇朝である外、他は皆星運堂らしく思はる、第三十篇は花洛庵一口編纂の任に當り、收容の句は全部初代川柳翁の遺選、第三十一篇は花山麓玉章の編纂で大部分川柳の選評にかゝる神社奉納額の句を收錄してゐる、猶、後文「川柳と柳樽」及び「川柳時代年表」等を參照あらんことを望む。

『柳樽拾遺』 初編より十編（大尾）まで

此書は『誹風柳樽』中に載せ洩らした初代川柳の選句中より更に拔錄したもので、最初『古今前句集』と題して寛政八年の秋、通油町蔦屋重三郎から發行したものを、後（のち）星運堂花久がその版木を讓受け、享和元年の頃『柳樽拾遺』と改題して上梓したものである、而して其編纂の方法は四季、哀別、神祇、釋教、戀、無常、遊里、戲場、史談、故事等に分つて年代順に序列したもので、蓋し部門的に川柳を分類した嚆矢である、その編纂者は何人であるか判然しない。第三篇にある序文によつて桃井庵和笛なるべしと主張する人もあれど、その序文が『古今前句

集」にも又「拾遺」の初篇にも二篇にもなく、唯突然第三篇にのみにあるは甚だ疑ふべしとして、俄に同意することを躊躇してゐる人もある、猶その第三篇にも此序文のある本と無い本とあつて、今井卯木氏が種本とした用ゐた原本には夫が無かつた趣である、後（のち）例外澤田薫氏の所藏本第三篇にその序文のあることが解つたので、卯木氏は意見を附して川柳雜誌「鯱鉾」第十四卷七月號に其序文を示されたのである、參考のため玆に轉載しておく、

柳樽は川叟の撰にして星運堂、此道の好人木綿先生を仲人として日出度取組、家内喜多留と題し送られしより此かた、年々新刻をまつこと母の初孫を待にひとし、相續て五々の篇より以愚評を今年廿九篇におよべるを、今一偏（卯木氏曰、篇の字の誤記なりや）すゝめんと棚の隅より年ごろの勝番を取出し、前篇にもれたる句もあらんかとゑらみ、年暦を分ヶはた部類にわかちて柳樽拾遺と題す、數篇のうへ筆もまはらず、くだを卷かへし、くど〳〵しきはゆるし玉へかし。

于時享和元辛酉とし　　桃井庵和笛（印）

其後「類題秀句柳樽大全」と改題せられ、更に又「類題誹風柳樽」と改題せられ、同一の内容にて異つた書名を四つ迄持つてゐる書物といふのは世に稀である、明治以後一二の飜刻本が出來たけれども孰れも落丁誤植等多く、先づ今日では本書の底本に採用した卯木氏の「校訂柳多留拾遺」

が最も完全なものとして推されてゐる。

『川傍柳』　初編より五編（大尾）まで

此書は初代川柳の選評にかゝる牛込御納戸町蓬莱連の月次集句であつて、全部五卷より成り、其初篇は安永九年八月、第二篇は天明元年五月、第三篇は同年八月、第四篇は同二年八月、第五篇は同三年六月に發行せられ、各篇に朱樂菅江の序文若くは題字があり、版元は池端仲町長谷川新兵衛と下谷竹町の例の花久である、開會の日が毎月五の日、即ち五日、十五日、廿五日の三日であつて、毎年正月に始まり七月か八月を以て終り、九、十、十一、十二の四ケ月は、休會の例となつてゐることは一寸注意すべきことである。

『誹諧武玉川』　初編より十八編（大尾）まで、但し第十一編より『誹諧燕都枝折』と改題せられたので、『武玉川』十一篇が『燕都枝折』の初編、以下順次、『武玉川』の十八篇が『燕都枝折』の八編に當る。

本書は初篇より第十五篇即ち『燕都枝折』第五篇までは、四季庵慶紀逸の選にして、其初篇の序に紀逸は、點者として自分に選抜したる秀逸の句を書留め置きたるものを書肆の需に應じ

て上梓し有附合の句々共前句は事繁きを以て略したる旨を記してゐる所から見れば、可有が前句附中から附句のみを抜いて『柳樽』を編纂したのと殆ど趣を一にしてゐる、紀逸は元祿七年に生れ、其角を祖とする江戸座誹諧の宗匠、二世湖十の門下生として博覧強記多藝多能を以て聞え、四十歳の頃前句附の制者となり、倚柱子、十明庵、短長齋、硯田舎等の別號を有し、寶暦十年『燕都枝折』第五篇を上梓したまゝ六十八歳を以て物故したのである、それから十年の星霜を飛んで明和八年に、二世四時樓紀逸が同第六篇を出し、翌々安永二年に其七篇、三年置いて同五年に其八篇を出し、それを以て終結となつてゐる、板元は『武玉川』十篇まで日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村勝三郎で、『燕都枝折』となつてからは、小石川傳通院前雁金屋儀助である。

猶玆に紀逸の選を集めた『武玉川』の句と、川柳の抜を拾うた『柳樽』の句とを比較して見れば、その句形に於て、その句調に於て、將又その趣向に於て、頗る相接近した所がある、乙を誹風柳樽と呼ぶなら、甲を柳風武玉川とでも稱したき感がある、現にその內容の句に一字一點違はざる同一の句や、語句の上に唯僅の相違あるに過ぎぬ類句や、着想全く異らざる句などが非常に多きを見るのである、此度此本を校訂する序に、試にそれ等の句を書抜いて見たれば、正に四百四五十句の多きに及んだ、今少し精査したら優に五百を數へることは出來るであらう、

尤も此種の調査に就ては既に岡田三面子、今井卯木、森東魚その他の先輩によりて企てられ、それ〴〵川柳專門の雜誌などに發表してゐらるるから、更に茲に披露するまでもなきことであるが、唯さういふ事實があるといふことだけを一言しておく、この同吟類味のうちには或は模倣もあらんか、或は剽竊もあらんか、或は暗合もあるんか知らぬが、又同一の人が同一の句を紀逸と川柳との兩宗匠に出句して双方に選拔せられたのも多少あるであらうと思はる、兎も角夫程互に相連關し、『武玉川』と『柳樽』とが鰯煮た鍋なら、紀逸と川柳とは鴨の味ぐらゐの關係があるのである。

校訂に就いて

川柳に關する古文書を飜刻するに二通りの様式がある。

甲　闕漏は闕漏のまゝ、誤も誤の通り凡て一字一句も改めず、全く原本と同樣にするといふ方法。

乙　出來るだけ誤字を正し、假名遣を訂し、讀み難き文字は普通々用の平易な文字に改むるか、さなくば假名を振り、又假名の一部を漢字に代へなどして、成るべく現代の讀者に解し易からしむる樣にするといふ方法。

此二つはどちらも必要であつて、社會は兩方共要求してゐる、甲法によれば寶暦代より天保代に至る約百年ばかりの間、假名遣などは全く無頓着であつたことや、其時代にどういふ漢字が一般に慣用せられてゐたかといふ事や、盛に當字が用ゐられた事や、漢字よりは假名の方が多く使はれたこと等を推知することが出來るといふ利益がある、猶一歩進んでその本の大さや、形や、綴方や、又表紙の色から書名の標札迄も原本通りに模したなら、猶更世間の歡迎を受けることであつたらうと思はる。

現今柳書の拂底は非常なもので、去る大正十二年九月の大震火災以後は一層甚しく、「柳樽」など初編より第百六十六編まで完全に揃つて居るのは、私の知つてゐる所では先づ三面子岡田博士の書房にある位のもので、恐くは其外にはあるまいと思ふ位である、從つて其市價と來ては殆んどお話にならぬ程の高値で、年代の古い所になると屑屋に讀ませたらせい／＼一錢三錢とは出まいといふ小さい粗本が拾圓も拾五圓もすると

いふ芬、まるで本といふよりは骨董品取扱である、先づ平均五圓としても全部では八百何十圓、彼是千圓のお金がなくては手に入らぬといふ品物である、假に千圓は二千圓でも厭はぬといふ人があつたとしても、天からその揃うた品物が無いといふに至つては何共致方がない、そこで複本の飜刻といふ必要に迫つて來るのである、併したとへ飜刻とは云へ原本そのまゝの複本といふ事になればそれ相當の費用を要し、さう安直には出來ぬであらう、是に於て私共の如き貧生はどうしても乙法によれる活版本を以て滿足せねばならぬといふことになる、この要求に應ぜんがために、「柳樽」初編から第六十編までを合冊にした國書刊行會發行の「誹風柳樽全集」を始として、其外二三の飜刻本が出來たのは結構なことである、けれども多少の誤字や誤植があるのは免れない、中には隨分甚しい間違の文字などがあつて殆どその意義を捕捉し兼ねるやうな事も往々ある、實際二年も三年も惱まされて居た難句が偶々原本に接してその誤植を見出し、卽時に不審紙が剝げたといふやうな馬鹿馬鹿しさを通越して腹の立つやうなことは一再ではない、此點から云へば杜撰な飜刻本によつて研究する者位悲慘な氣の毒なものはないのである、試に一二の例を擧ぐれば、或る飜刻本に

　人玉と聞いて火を引く料理人

とあるを見て、非常に研究したけれどもどうしても解らぬ、解らぬ筈だ、原本には

　入玉と聞いて火を引く料理人

とあつて人玉は入玉の間違であるといふ事が解つた時などは實際腹が立つよりも腹が撚れたのであつた、又

　輕くいつても八文がものはあり
　姑女のつむじは尻に成つて知れ

　　まだ動く瓦へ本書の紙をかけ
の文は丈の、尻は尾の、瓦は尾の誤植なども一寸惱まされた、
　　後見の勸めで四木本を植ゑる
の後見は法眼の間違などはちと念が入過ぎてゐる、こんな例を拾つたら殆ど數限りはないのである、からいふ苦い經驗からして私共の如き微力にして原本購入など及びもない連中に對して、誰か完全なる定本を飜刻してくれる人はないかと渴望して止まなかつたのである、一層のこと自ら進んで其任に當らうかとも思つて見たけれど、それは非常に難事である、第一に力が足らぬ、餘程の研鑽を積んだ上でないと結局の處、從來の飜刻本と五十步百步、似た山半可の物笑となるだけのことに過ぎぬ、第二に時もない、第三に假に非常な力と時を費して作上げて見たとしたところで、まだ／＼そんな專門的な黑人染たものの需用は知れた數である、營利を主眼とする出版業者がおいそれと引受けてくれやう筈がない、先以て出來ない空想として諦めてゐたのである、時に偶々、加藤美侖氏來つて「日本名著全集」の川柳及雜俳集の校訂者たらんことを慫慂せらるるに會した、そこで私は先づ發刊の趣旨目的等を御尋した上で考へて見るに、その會員となつてこの川柳書を見る人々の中で、多くの古柳書を藏し、且つ川柳に對して相當の理解を持つてゐる所謂黑人筋の向は先づ三四割で、その他の六七割はこれから川柳といふものを少し研究して見よう、或は作句も遣つて見ようといふやうな、云はゞ初心の人、即ち現代式の活版本讀者であらうと思ふ、さういふ人々に對して、誤字も誤句も訂正せず、凡て原本その儘などといふ適な方法を取るのは全然無意義である、不深切な遣方であると確信する、どうしても勞少くして效多く、即ちちつとでも多く且つ早く解り易く入り易くした乙法を取らねば

ならぬといふ事は、私の兼ての持論である、主張である、それでよいといふ事なら及ばずながら全力を注いで遣つて見よう、それとも若し原本通り卽ち甲法による出版方をといふことなれば私では不適任である、その方に必適の人が幾人もあるから其人を選んで御賴みなさるがよろしからんと申した處が、加藤氏は私の意見と符節を合するが如き同論者であつた、それではと云ふので一奮發して見る氣に成つたのである、私の所謂定本撰刻の機會は向うから來つて私の天窓に打附つたのである、けれども残念なことには、時は兎も角として、力の準備がまだ整うて居らぬ、云はゞ不意打を喰つたのである、盡すだけは私の全力を盡して見たけれども、出來榮は甚だお粗末千萬のものであることは誠に慚愧に堪へぬ、併し大槻博士でさへ「言海」の序文に、一通で立派な本は出來ぬ、再三再四增補をなし改訂を加へて漸く完全なものとせんことを期すと述べてあらるゝ、まして私共が最初から完璧無瑕の本を作らんなどとは思もよらぬことである、唯私は九層の臺を築く累土を提供したに過ぎぬのである。

偖てそれでは甲法と乙法とはどちらが此事の上に於て容易であるかといふに、それはその遣方の程度如何による事であれば比較的に難易はいへぬ筈である。唯甲法は原本と一字一句違はぬやうにさへすればよいのであるから、畢竟するに校正を嚴密にして二回より三回、三回より四回と何遍も精査を繰返しさへすればよい理屈であるから、其點は比較的簡單であると云へば云へぬ事もない、併しながらわざと假名遣などを間違はせねばならぬ、あるべき筈の半濁音を削つたり、無くてよい濁音を附けたりもせねばならぬ、正しき漢字を捨てて誤れる漢字を取らねばならぬ場合もある、これ等は恐くは誤れるを正し、違へるを直すよりもより以上に骨の折れる仕事であらうと思ふ、要するに只句解の上に費さるゝ勞力は比較的に少なくてもよい勘定である。

然るに乙法を取れば、先づ何をおいてもその句義を徹底的に理會せねばならぬ、句義が不可解では假名を漢字に變更することも、假名遣を訂正することも、絶對的に出來ぬ問題である、ところでその句義を悉く正解するといふことは今日ではまだ出來ない相談である、國書刊行會發行の「誹風柳樽全集」の序文中に饗庭篁村先生が、「我等も二十餘年の昔大久保紫香のもとに會し、一人一枚を通解し得るものは功の座に直して酒盛ることをして遊びしが、なか／＼難關苦戰にて果は曲解のみ多くして一人半枚に願ひ下げたこともありけり」―と述べて居らるゝ通り、江戸っ子のちゃき／＼たる知名文士の方々でさへ其位難事とせられてゐるもの、それから彼是三十年も經た今日では多少古句研究も進んではゐるに相違なきにもせよ、まだ／＼解らぬ句が澤山ある、現代の川柳家の誰もが『柳樽』全部を一句も殘さず悉く正解し得る人は恐くはあるまい、あるまいではない私は一人もないと斷言することを憚らぬのである。その難しきことを私共の如き田舍出の淺學者にどうして解らう筈があらうか、解らぬといふのが當然過ぎる位當然である、その半知半解なる淺はかな頭腦を以て、わざ／＼乙法を選んだといふ事は云はゞ猪口才千萬生意氣至極の遣方である、恐くは角を矯めて牛を殺すやうな失策を度々繰返して非難攻撃の矢が雨のやうに降りかゝるであらうと覺悟してゐる、かくの如く比較的責任も少なく、又ぐつと勞力も少なき甲法を捨ててわざ／＼多大の精力を費した上に、やゝもすれば非難攻撃の的となるべき割の惡い乙法を取つた……よく云へば健氣な、惡く云へば小癪な……私の志を買つて、鞭撻的の叱正と同情的の垂教とを賜はらんことを切望して止まないのである。

愈々其事業に着手するに當つて、何を置いても先づ一番に準備せねばならぬことは、底本の蒐集である。底本といつても完全なる底本でなくては駄目である、既刊飜刻本に多數の落丁があつたり頁數が狂つてゐた

りしてゐるのは、要するに底本が悪いからである、所が前項に述べたやうに柳書拂底の折からとて、さう立派な本が完備してゐる所は滅多にない、幸に柳友西島〇丸氏が文庫を開いて、『柳樽』初編から第三十一編までを貸與せられた、けれども此三十一册が悉く眞に花屋久次郎の手に出版せられた初版ばかりであるかどうかは疑はしい、ぐつと後に内容の句を入替へた版本も混じてゐるやうでもある、そこで更に初版と折紙の附いてゐる、岡田博士珍藏の三十一册を借用し、此二通りの『柳樽』を對照した外に、同博士著『寛政改革と柳樽の改版』同『誹風柳樽全集に就て』の二書を參考とし、猶念のため博士の門を敲くこと三回、其都度夕刻より十二時に至る長時間の合議を裁いて漸く訂正を了したのである。

『柳樽拾遺』は大正十三年に、今井卯木氏が岐阜の柳書刊行會より飜刻出版せられた『校正柳樽拾遺』を同氏の善諾を得て底本としたのである、これは同氏が多年の刻苦精勵を以て原本通りといふ即ち甲法によつて上梓せられたもので、該本の飜刻書中に於て最も完全なりとの定評あるものである。勿論内容の疑義等に關しては、直接同氏の懇示を得たものが多大であつたことを申添へておく。

『川傍柳』は初編から五編まで全部岡田博士藏本を底本としたのであるが、その内二、四、五の三編は博士が克明（こくめい）に版本を透寫（すきうつし）にされたものである、猶第五編は念の爲に上田市の花岡百樹氏珍藏の寫本をも借用して參考に供した。

『武玉川』は初編から第拾四編までと第十八編の十五册は西島〇丸氏の、第十五編と第十六編の二册は岡田博士の、第十七編は森東魚氏の藏本を借りて底本としたのであるが、此書は川柳といふよりは俳書の側に屬するものであるから、語調用字その他柳書とは自ら異る所のものが多くあり、私に解し兼ねる點も少くない

ので、該書の研究を以て聞えた信州の飯島花月、同花岡百樹、淀橋々畔の近藤蔦ン坊、東叡山下の森東魚の四氏に數回の文書又は面會を以て疑義を糺し、垂教を仰いだのである、而して他の三書に比すれば原本のまゝに殘し置いて文字等に修正を加へたものの少ないことを一言附記して置く。

兎にも角にも此『川柳及雜俳集』の校正纂刻に就ては西島、岡田、飯島、花岡、近藤、森、今井諸氏の多大なる後援助力によりて成れるものであることを表明し、併せて滿腔の謝意を表する次第である。

猶序に茲に一言して置きたいことが二三件ある。其一、内容の書目は、私が校訂を引受る前に大體既に選定してあつたもので、私の與り知らざる所であるが、只『柳樽』三十一編と『川傍柳』第五編の二冊だけは私の意見によつて追加したものである、解題の條下にもいへる通り、『柳樽』三十一編は文化二年の刊行なれども内容の殆ど八分は初代川柳の選にかゝり、『川傍柳』第五編は世に稀なる珍本であるからである。

次に落丁の補充、丁數の前後、内容句の置替及びそれに伴ふ重出句の省畧等は非常に煩雜にして、短少の時日を以て爲さんことは殆ど不可能事である、一方頻に脫稿を迫來る興文社を制肘しながら、一方懸命に奮勵してやつと一先づ完了した……積りではあれども、未だ元より自ら滿足するの域に達せず、遺漏缺陷定めて多からんことを恐れてゐる。

又寛政改革の結果、『柳樽』に改削を加へられた句等を原版により更に補充せるものゝ内には、所謂末番句なるものが多數ある、是等は伏せ字を施して殘し置くか或は全く省畧するかの問題に就ては、たとへ私には多少の主張はあつても種々の關係上其取捨は全然出版業者の考に一任する外は無いのである、されば此點に於て原本と一致せざる所が出來るかも知れぬがそは豫定の相違であることと諒せられたい。

最後に今一つの條件は私の與へた稿本の下摺校正は勞力と時間とを問はず、三回でも四回でも自身に行ひたい希望であつた、けれども校正係は其の道に專門の方が數人從事してゐられるので、却て私一人でやるよりも見落しが少かるべしとのことであつたので、私の校正は唯一回きりとしその他は全部お任せ致すことにし、併せて萬一文法上の誤謬等を見出したらば其手にて訂正するといふ條件を以て原稿を引渡したのであるから誤謬等はない筈である、若しあつたらばそれは私の原稿が惡かつた爲であると御承知を願ひたい。

校訂の程度標準方法等

(1) 或る程度まで假名を漢字に改めたこと

昔のやうに明盲が二三分もあつたといふやうな教育程度の低い時代に在つては、假名ばかりの文章に對する讀書力や理解力が發達してゐたらうから、今日私共が感ずる程の不便澁滯はなかつたかも知れぬが、やゝもすれば「べんけいがな。ぎなたをもつて。さーしころす」的の誤讀を生ずるのは止むを得ぬ、其上お負けに假名遣や濁點までも省かれては愈ゝ助からぬ、假へば原本の

　はりまやがきたらはとうにあけよふそ

などは、再三再四餘程の判讀推考を要せざれば到底解らぬ、是を幾分漢字に改め且つ正しき假名遣にして

　播磨屋が來たらば胴に揚げようぞ

と訂したらば、意義は兎も角として、辭義だけは一目瞭然であらう、隨つてそれだけ句解に辿り入り易き理屈である、此句の播磨屋は赤穗義士の擬人法にて、烟草屋酒屋などの商人に身を窶して吉良邸に出入し

て敵情を探つてゐた人である、ところが打入の前日即ち元祿十四年十二月十三日、御家例の煤拂祝にあの烟草屋が來たら、一つ胴上げにしてやらうではござらぬかなどと、屋敷の愚太郎兵衛共が相談してゐるとの意義である。

　　ふにあたりへひとりに出るかゞみとぎ

これなども假名が多すぎるのみならず、濁點まで落ちてゐるために非常に解し難き句となつてゐるのである。これも

　　賦に當り蛇取りに出る鏡研

としたら辭義判然たるものになる。此句は例の加賀騷動に老女菜を蛇責にするため、鏡研がその蛇取の賦役に當つたといふだけのことで、鏡研は加賀國から出たものである。

　　こつちでもふるといるよとかして遣り

を

　　こつちでも降ると入るよと貸してやり

としたらば、どの位早く俄雨の傘借であるといふことが解るであらうか。

　　三ぷとんしやくやづゝうにきめう也

　　三布團癪や頭痛に奇妙也

　　よめさへ〳〵とぼたもちを七つくひ

　　嫁さえ〳〵と牡丹餅を七つ食ひ

から並べて見たらばどうのからの論はあるまい、甲は三布閣新調の無心、乙は姑女が死んでやれ〳〵と落附いた嫁であるが、七つは七日とか七七日とかを暗示した數字代表といふ其頃盛に行はれた悪い叙法である。

かういふ風であるから、假名を漢字に改むることは非常に讀み易くなる利益がある代りに、若し誤つて違つた漢字を當てはめたら大變な誤解を來し、却つて改めるは改めざるに劣るといふ結果に終るのであるから、餘程の注意を要する。今他山の石として、左に既刊飜刻本中から間違つた漢字變更の例を二つ三つ擧げて見れば、

　音羽とも出ようとございけなるがり

此句は雑司ケ谷の鬼子母神に其の供をして來た下男が、殿女の醜行を美しがつて音羽町の二朱女郎でも買はうといつたとの義かと思はれる、さればございは御宰（又御菜とも書いてあるが、孰れが正しや不明なれども要するに御殿女中に召使はるる下部の事である）とあるべきところに明に後妻と改めてある、後妻では何のことか全く解らなくなる。

　取かちだべらぼうめがと猪牙ゆれる

と原本にはあるのを取勝だと改めてあるがどういふ解釋に基けるが殆んど解らぬ、これは蓋し取舵だとすべきであらう、川の中で上下の舟が行會うた場合に、取舵(とりかぢ)にすべきを一方が面舵(おもかぢ)に取つたので、舷々方に相觸れんとして大波動(うねり)を食ひ、中つ腹の船頭がえゝ此間抜けめ取舵だと怒鳴つた場合であらう。

　年忘ぎりでたいこはひまになり

と原本にあるのを年忘義理でと訂してある。是は「年忘限(ぎり)で幇間(たいこ)は暇に成り」の意であらうと思はる。

しんちうをむさしとう〳〵祈りのけ

これも一寸解らぬ句であるが、原本しんちうとあるはしんちゆうにて卽ち「新中を武藏とう〳〵祈りのけ」であらう、新中は大物浦の新中納言を略したものではあるまいかと思ふ、然るに飜刻本には心中をと改めてある、尤も心中といふ言語上の二重義を匂はせた句作かも知れぬが、要するに漢字で心中と改むることはちと亂暴ではあるまいかと思ふ、

(2)假名では紛はしきもの、若くは意味をなさぬものは特に漢字に改めたこと

傾城のはなした爪に物着星

のはなしは咄しなどと間違へてはいけないから、判然と離しの文字に替へた類、又

ろく七人にのぞまれて嫁はじめ

は所望されて彈き出す嫁の琴を、十三の數にて暗示した句作であるから、六七人と本字にした方が解り易い。

長崎やあつちの食も喰つて見る

別に誤謬がある譯ではなけれど、かう書いては動もすれば長崎やのやの字は、切れ字のやと思違ひするの恐があるので、斯の如きものは判然と長崎屋と更訂することにした、長崎屋とは石町にあつて俗に紅毛屋と稱し蘭國使臣の宿泊したる旅舍である。

(3)必ず濁音半濁音の符號を附したこと

和歌や俳句の方は別問題として、川柳の方では是非共その符號を附せねば途方もない誤解を生じ、よく

例に引かるゝてとでの如く、全く反對の意味にさへなることが往々ある。

　女護島くしみをするとはゝを呼

と原本には成つてゐるが、くしみは勿論くさめ若くばくしやみの誤として何のために嚔をしたから母を呼ぶか其意義が解らぬ、然るに女護島の女は南風に面すれば孕むといふ俗說がある、川柳子は直にそれを捉へて、風邪の徵候とされてゐる嚔が頻發するので、ひよつとしたら風の子を引込んだのではあるまいか、兎も角も一度診て貰つて置いた方が安心であらうと取揚婆を呼迎へると詠んだのである、とすれば

　女護島くしやみをするとばゞを呼び

とはゝに濁點を附するか、婆といふ文字に置替ふるかせねば非常に解り難い。

　浦島はかくても書いたやうに成り

これもかくてもをがくでもとするか、一層額でもともすれば猶よく解る、この句は浦島が例の玉手箱を開いたところ頭髮一時に雪を戴いた老翁となつたのを、魏の韋誕が釣繩に乘り凌雲觀の額を書いた時に、恐怖の極、頭髮が立ちどころに白化したといふ故事に對比した作である。

　うりものゝふしは六郷そこら也

此句は淺草裏の淺間社詣を煮出しに遣つて吉原遊をするとの句であるから、ふしはふじか富士かにせねば、附子或は五倍子などゝ取違へ易い。

　三つみねの犬にも負けぬたいこなり

たいことは太鼓か、それとも幇間のことか譯の解らぬ句である。これもたいこはだいこの濁點が落ちたので

「三峰の犬にも負けぬ大根なり」と訂正すれば猶更判然となつて來る。三峰山から出る盜難除の護御符には犬の繪が描いてある、その御守にも劣らぬ大根といふのは、例の徒然草中にある、盜賊を追散らした大根の化物である。

　　にしきゞをうすくも直きに取入れる

これでも少し考ふれば結局は解るであらうが、最初から「錦木を薄雲ぢきに取入れる」とした方が、どの位時間の經濟になるか知れぬ。

　　簡略はとうるのおとゝきらひ也

假名も違へば濁點もないので非常に難解の句と成つてゐるが、「簡略（通例は勘略と書いてある）は融の大臣嫌ひ也」とすれば何でもない、かの源融即ち河原左大臣が邸内に鹽釜を築き、遠方から海水を取寄せて自ら鹽を製したなど非常な贅澤をしたことをいつた句である。

　　三人で一本糸立にはおどり
　　千兩のごけんあて名はおつるどの
　　日の一つあるがごけんのあて名也

此三句原本にはない濁點をわざ／＼と添附して、却て譯の解らぬものにした反對の例であるが、甲は「三人で一本糸立には劣り」即ち三人に只一本の傘ではいつそ糸立を被つて駈けた方が増しであると、俄雨の貸傘を詠んだもの、乙丙のごけんは沽券の誤にて二つ共に持參嫁の句、片目のお鶴さんが千兩の沽券附で嫁入りしたとの義に過ぎぬ、が云ふ迄もなくお鶴は千の緣語を結ばん爲の柳家の假設名に過ぎぬ。

濡れた袖嫁がまくらの松で干し

などは尤も御念の入つた間違にて、原本には嫁かまくらとあるに嫁がまくらと訂正した爲に、嫁が枕と訓めて全く辨慶がな、ぎなた式に成つてゐる、「濡れた袖嫁鎌倉の松で干し」即ち嫁が鎌倉の尼寺、松ケ岡に駈込んで袖に涙の乾く暇なき嫁入先から暇を取るとの義にて、餘計な濁點などを附した爲に三年かゝつても解らぬ句と成つてしまつたのである。

自身番まづ風などのくづを買ひ

これも「自身番松風などの屑を買ひ」とさへ訂正したら何の事はない句にて、松風といふお菓子の屑を買ふといふだけのことである。

(4) 假名遣は成るべく正しき方に從うたこと

川柳の假名遣を文法上から小むづかしく攻撃することは無理である、其時代の吟者の天窓には假名遣ひなど七面倒な考はてんからない、あまりそんな利いた風なことをいふと「らにのしをにのと生がみの學者(文化)」などと却て冷かされた位のものである、今日でも餘りにそれ等の間違などを穴探することは少少氣障な感がある、けれども餘り無茶苦茶で句義の上にまで影響を及ぼす程の甚しいのは其儘にして置くことは如何であらうか、川柳家だけは多少ともそれに對する理會力を持つてゐるから差支はないやうなものの、その外の多くの讀者、特に正しき今日の教育を受けた讀者には寧ろ意外の累を及ぼしはせぬかを恐れたのである、實は大部分口語法に從ひ放るはほうる、酸漿はほうづきにしたいとも思ひ、旁大槻文彦先生や、田中辰二教授や、福田信孝教諭や、その他二三先輩知己の意見を徴した所が、衆口一致のやうに

誤つた假名遣を襲用することは不可であるといふ議論であつたので、成るべく正しき假名遣を取るといふ方針にしたのである、但し特殊な方言訛語等その規則に從ひがたいものは其儘に殘して置くことは勿論のことである。

(5)送假名も成るべく正しきに從うたこと

これ亦改めていふ迄もなく、送假名のないために、どう讀んでよきか迷ふ場合が甚だ多い、一々例を擧ぐる必要もないが

とても濁るを飮ば玉川

とある飮ばはノムツとはまさか訓むまじきもハマバかハメバかは不明である。是等ははつきりと飮まばとした方が解り易い、又

馬工郎のむざと貰ぬをみなへし

の貰ぬは恐くは貰はぬであらうと思はる、けれども又貰ひぬだらうと論ずる人もある、貰ひぬと貰はぬは全く反對である。かういふ例は非常に澤山ある、又川柳には約束的の書方もあるから、其點にも多少の注意を拂はねばならぬ、一例を擧げると、

川立は川お袋は産んで死に

原本には産シでとある、産シでと産んでとは名詞と動詞との違で、柳書では特に文字の右側に片假名を用ゐるのは、訓方の慣行的註文である。一人リとある時には、いちにんでなくひとりと訓ませる場合、一チ日チ、夜ノ一ト夜など、皆それである。産シとしたはさんと訓ませる註文で、うんでと間違へぬためである。

此句の詳解は略しておくが、唯お姿が産で死ぬとは、川立が川で死ぬのと同じとの意であらう。

(6)甚しき當字、今日は普通に餘り用ゐられぬ倭字若くば難字等は、成るべく一般通用の文字に改め、或は場合により假名を附することにした

これは單に現代的の讀者に對して讀み易くしようとした爲に過ぎぬので、其時代には一般に汎用せられて必ずしも難語でなかつたのも、又正しき語ではあつても、今日は餘り使用せられないもの等をも、改めた内に籠つてゐることを告白しておく。

特に武玉川の中には見慣れぬ文字が多いけれども、そのうちには、俳諧などに常用の文字もある趣であるから、其儘振假名附にして殘して置いたものも多くあることを一言しておく。

猶左に變更若くば假名を附けた用字の概略を表示しておく。

原本にある文字	訓方	訂正若くは假名を附したる文字
罔兩	かげぼふし又かげぼし	影法師
調市	でつち	丁稚
率頭	たいこ又たいこもち	大鼓又太鼓持、幇間、
二十五文	やつこ	奴
時花	はやる	流行
支離	かたは	不具

原文にある文字	訓方	訂正若くは假名を附したる文字
貎	かほ	顔（但容貎などの場合は別）
諷	うたひ	謠
審	よつで	四手（網）
陶	とつくり	徳利
菌	こえ又くそ	肥又糞
食	めし	飯（但じき或はしよくと訓む場合は別）

居る	すわる	坐る
借	かし、かす	貸
零	あまごひ	雨乞
尖	とげ	刺
淡	あわ	泡
髻	もとゆひ	元結
鎰	かぎ	鍵
釿	ておの又てうな	手斧
鑓又鎗	やり	槍
横	よぎ	夜着
掴む	つかむ	摑む
鱐	しやち	鯱
絑	かじか	鰍又河鹿（両方に用ゐられたるかの疑あり）
鯎	うぐひ	
鮗	このしろ	鰶
鯲	どぢやう	泥鰌
蜀漆	くさぎ	臭木
飛蟻	はあり	羽蟻
羽折	はおり	羽織
牢人	らうにん	浪人
凧巾	いかのぼり	凧
驚す	おどす	嚇す
深色	いろどる	彩る
也	なり	成り
成り	なり・	也
爐次	ろぢ	路地
座當	ざたう	座頭
小椒	こせう	胡椒
擧屋	あげや	揚屋
鳴渡	なると	鳴門

(7)原本明に誤脱と確信すべきものには訂正塡補したるものも少數ある一二の例を云へば

せんたくにこそ上げたれと八百いひ
子おろしを下女は八百へかひに行き

此二句共に八百の下に屋の字を脱したものと思はる、甲は出入りの八百屋の口入で傭うた洗濯女を、和尚が一寸抓(つま)んだ場合、乙は○○を買つて來て手療治をする下女であらう。

まづ笴はおぶふ邪魔だと腰へさし
壇の浦笴で四五杯飯をくひ
及腰鵜の尻べた笴で打ち

この三句の笴は皆笏の誤版である。甲は二條妃を背負うた芥川の業平、乙は壇浦に於ける平家の公達、丙は大前に射殺されてる鵜見物に寄集(よつたか)つた公卿達である。

(8)原本疑はしきものに推定の文字を當る場合には、細字で右傍に記し、且つその下に？印を附して置くことゝした

(9)虫蝕或は摩滅等で字體全く不明なものは缺字のまゝ殘して置くことにした

(10)句義不明なものは、(原文のまゝ)として妄に修正を加へぬことにした

附　錄

川柳と柳樽

この一文は大正十五年三月、雑誌『日本魂』に登載した舊稿である、多少前文と重複した點もあれど、又その足らざるところを補ふところもあらんかと思ひて、附記することにした。

一

川柳とはどんなものか、柳樽とはなんであるか、と云つたやうな質問を受くることが時々ある、そこで私は至極簡單に、且つ頗る通俗的に、その大體をお話しようと思ふ、しかし、その目標は、川柳と番茶とを取違へたり、柳樽と一升徳利とを一緒にしたりするやうな極々の初心者であつて、決して川柳の玄人筋に向つて講釋をする譯ではないといふことを前以てお斷りをしておく。

發句の今一層通俗化したやうな十七字詩に、川柳といふ名が附いた根本を知らんと思ふなら、先づ其系統から吟味せねばならぬ、川柳といふものの前身は、前句附である、前句附の根源は俳諧、俳諧の本は連歌、連歌の起りは續歌と、から順々に遡れば、餘程昔のことになるから大抵に端折つて、兎も角元龜天正時代には連歌といふものが大に行はれてゐたことは、例の愛宕

山で光秀が「時は今天ケ下知る皐月哉」といふ發句に、光春が「水かさまさる庭の夏山」と脇を附け、更に紹巴が「花浮ぶ池の流れをせきとめて」と第三句を詠んだといふ、史譚で誰もよく知つてゐる通りである、尤も連歌と俳諧とは殆んど同樣なもので、我々門外漢では詳細には解らぬのであるが、その道の先輩のいふ所によれば、俳諧の祖と呼ばれてゐる山崎宗鑑が、永正十一年に『犬筑波集』を出したのが連歌と俳諧との分岐點で、ぐつと降つて寛永時代に、松永貞德が『淀川』だの、『油糟』だのといふ句集を出した頃には、判然と連歌と俳諧とが分劃せられてゐたのである、其後俳諧の方には西山宗因などが出て檀林の一派を起し、四方靡然としてこれに赴き、餘りに輕々的の諧謔に傾いた、貞享三年芭蕉起つて正風を開き、俳風の頽勢を挽回したが、一面飄逸洒脫な俳諧は駸々として進み、終に分れて前句附と稱する一派が生れ出たのである。

　前句附の濫觴に就いては色々の說があるが、明曆萬治の頃京都方面から起つて漸く盛になり、元祿頃にはその流行の極に達し、江戶に起つたのも多分其頃であらうと云はれてゐる、現にその時代に版行せられた前句附の句集は、實に汗牛充棟も啻ならざる程である、その古い分は皆京阪地方から出版せられ、江戶で始めて發行されたのは、元祿十五年露月外十餘名の點者によつて選拔せられた『俳諧獨步行』といふ句集である、その後蝶々子牧月などの點者大に世に聞え、寶曆明和頃には川柳坊も卓越して居たのである、川柳とは柄井八右衛門といふ人の雅號で

ある、此人は享保三年に生れ、寛政二年に七十三歳を以て歿し、淺草の龍寶寺に葬られた、そして點者として最も發展したのは、寶暦大明間の約三十五六年間である。

二

前句附といふものはどんなものであるかと云へば、點者が豫め七々の調で狂歌の下の句のやうなものを出す、これが前句である、それに對して句者が五七五の調にて附句をなし、そこで始めて三十一文字の狂歌體のものが出來るのである。假令へば、「切りたくもあり切りたくもなし」といふ前句に對しての「盜人を捕へて見れば我子なり」といふ附句や、又「石に蒲團は着せられもせず」といふのに、「孝行のしたい時分に親はなし」の如きは、夙に人口に膾炙せる名句である、かういふ風に前句に附句を添へて作上げるので前句附句、略して前句附と稱へたのである、そこで俳諧の如く發句（卽ち前句）に脇句（卽ち附句）、それから第三第四と長（十七字）短（十四字）の句を交互に附加へ、歌仙三十六、或は源氏六十、或は百韻などと、長く續けるのでなくして、只長短の二句ぎりとしたところが前句附の特色である、尤も長句の上五文字を出題して、下七五を附けしむる笠附、或は下五文字に對して上五七を附けしむる沓附など、その他いろ／＼の變態はあるが、冗漫に渉るので省略しておく。

前句附が一層簡單になつて前句を廢し、附句の十七字だけを獨立せしめ一句立として詠出すことが流行り出し、さつと俳句の軟化したやうな詩體が出來た、これを川柳と稱したのは前句

附の點者として最も傑出してゐた柄井川柳の點式を川柳點と稱へたのが、後までも傳へられて十七字詩に獨立してからまでも其名を以て呼ぶことに成つたのに過ぎぬのである。

三

世には川柳を以て發句の變成である、卽ち發句の一層俗化したものであるといふやうに思つてゐる人があるが、それは間違つた考で、發句は發句で、川柳とは全く別々の道を逈つて進歩したものである、尤もその前身は同じく俳諧で、その初句卽ち立句の十七文字を獨立させたものであるから、發句と云ふのである、今日では發句といふ語は餘り用ひず、普通俳句といつてゐる、そこで發句卽ち俳句と川柳とは同根の兄弟分ではあるが、又他人の始まりであるだけに、句體その他に著しき差別があることを一寸辯じて置きたいと思ふ。俳句には（雜句は別として）季題といふものがあつて、是非とも四季の自然物、或は行事を詠込まねばならぬといふ規則であるが、川柳には全くそんな制限はない、天象、山川、神祇、釋教、戀、無常なんでもござれである、その結果俳句には叙景詩が多く、川柳には叙情詩が多いといふことになるのは自然の勢であらう、それから俳句には必ず、や、かな、けり、などの如き切れ字を詠込まねばならぬといふ方則であるが、川柳にはそんな七面倒な規定は更にない、寧ろ切れ字は使はぬ方が正則になつてゐる、無論使つて悪いといふことはない、場合によつては、わざと切れ字を使つて柳味を補添した句作も少くないのである。

一二の例を擧ぐれば、「醫者殿は辭世をほめて立たれけり」といふ句は、瀕死の病人が俳句などの辭世を詠んだのを見て、是はなか／＼秀逸でござると、是をよき立ちしほにして歸り去つたといふ義である、辭世が俳句か和歌かであることを暗示したる句柄で、「辭世をほめて立つて行き」ではいけぬ、「立たれけり」の下五にて此句は活きてゐると云はねばならぬ、又「初雛やどこかおひえはどうなさる」の句は、お前さん初雛やなどと發句など唸つてゐる場合ぢやござんすまい、いつそ寒い風が身に泌んで來た、そろそろ細人の算段をせねばなりませぬと、俳人の妻が愚痴を云つてゐる場合の表現法としては、「雁の聲」よりも、「雁が鳴く」よりも、「初雛や」と俳句の上五を假用した方がどの位力強いか知れぬ。

俳しながら元來が同根異枝の間柄であるので、俳句だか、川柳だか、どちらとも別ち難き句もあれば、又切れ字の加除によつて俳句が川柳ともなり、川柳が俳句ともなる句例は決して少くはない、例へば、「長松が親の名で來る御慶哉」を「長松が親の名で來て年入れ」としたら川柳である、「我春を一本は殘す小松賣」を「我春を一本殘すや小松賣」としたら俳句であらう、されば慶紀逸の「武玉川」や、露竹舍蠖成の「俳諧觿」などには、川柳と銘を打つべき句が澤山あるのみならず、全く同吟のものさへ見出さるゝのは當然のことで、川柳といふ短詩の名は柄井川柳から起つても、川柳といふ短詩は勿論、川柳が詠み若くは選んだ句ばかりではない、露川であらうが、收月であらうが、蒼翁、机鳥、露丸等の選句、亦川柳であることは云ふまでもな

い、さてその柄井八右衛門を初代川柳として代々その衣鉢を傳へ、今日は第十一世となつてゐるさうであるが私はよく其人を知らぬ、その歴代に就て一々詳說することは他日に讓つて、私が今から二十餘年前に古川柳研究に手を染めた時は、淺草の半井省三翁が十世を襲いでゐられた頃で、青海にて誰知らぬもののなき大槻博士の紹介を得て、交誼を辱うし、今以て時々その隱棲を敲いて柳談を承つてゐるが、八十幾歳の老叟今猶壯健である。

四

川柳に就ては其位にして、これから柳樽とはどんなものかといふ問題に移らねばならぬ。其前に、今一度少しく後戻りして、前句附に就いて再說する必要がある。初代川柳が前句附の點者として大に活躍してゐた寶暦、明和、安永、天明時代は、非常に隆盛で集句も少い時で一二千、多い時は一萬六七千にも及び、その選句を半紙數枚に摺立てて發行したものを字體の似たるより暦摺萬句合と稱し、その第一刊は寶暦七年、最終刊は川柳が歿する一年前の寛政元年である、その三十二年間に、萬句合を何回發行したかは不明である。畢竟今日に於て萬句合全部を揃へると云ふことは殆んど不可能事で、大學や圖書館などにも斷篇片册が少しばかりあるに過ぎぬと聞く、日本に——勿論世界に只一ケ所殆んど完備に近いと云はれてゐる所は、岡田三面子先生の書室である、先生寶藏の萬句合は全部で三十卷餘に及び、積んで殆んど一尺二三寸の高さに及んでゐる、而も猶少數の缺本があつて完全して居らぬ、先生はこれまで多大の苦勞

と物資とを犠牲にして蒐集せられたのであるが、猶飽足らず懸命にその缺部の補足に熱中して居られるから、日ならずして完結するであらうと期待せられてゐる、この藏書は、柳界では勿論一般の學者間でも全く國寶として尊重してゐるのである、恰も十二年の大震火災の時には、私は葉山の博士別邸に起臥してその萬句合の抄錄に從事して居た時であつたが、幸に水火の難を免れたのは國家のために祝すべきことであると思ふ、若しあの本があの時東京にでもあつたら、或は多くの文獻と共に此天下の至寶をも灰にしたかも知れぬ。

それはさて置き、明和二年に吳陵軒可有（御料簡あるべしの洒落）といふ人が、川柳選萬句合中より、前句から切離した十七文字の附句のみで完全に意味をなすもの七百餘句を選拔し、下谷五條天神裏菅裏事星運堂、花屋久次郎といふ書肆に諮つて一冊の本に仕立て、これに柳樽第一編と題して發賣したのが最初である。されば今日柳黨のバイブルとして尊重せらるる柳樽といふは、川柳の佳句を拔載した書物の名であると思へばよい。而して明和二年より天保八年まで七十二年間に、百六十六編まで續刊してゐる、この「柳樽」亦百六十六冊完備せるものは殆んどなく、大學の藏書も例の九割の大火災に全部灰燼に歸し、古本屋などにたま〳〵あれば非常に高價を唱へ、二十四五編以前の分などは十圓十五圓を抛つても猶得がたい有樣である、是亦岡田文庫には全部完備せるのみならず、異本までも悉く整備しあるのはたゞ〳〵驚くの外はないのである。

川柳時代年表

此表は本書收容の書物の出版年代及びそれに關係ある人々の略歴等を一目に閲覽するの便を計りて調製したものである。

（下に括弧中に記せるは其年間に於ける川柳に關する出版物等を參考の爲に記したもの）

元祿七戌年	慶紀逸生る	（此間廿四年を隔つ）
享保三戌年	柄井川柳生る	
同十八丑年頃	紀逸點者となる	（川柳十六歳）（此間十七年を隔つ）
寛延三午年	武玉川初編成る	
寶暦元未年	武玉川二、三編成る	
同二申年	武玉川四編成る	
同三酉年	武玉川五編成る	
同四戌年	武玉川六、七編成る	
同五亥年	武玉川八編成る	
同六子年	武玉川九、十編成る	
同七丑年	武玉川十一編成る。此頃より川柳點者として聲名あり（紀逸六十四歳）	

同　八寅年
同　九卯年　？　武玉川十二[illegible]成る
同　十辰年　武玉川十三、四編成る
同　十一巳年　武玉川十五編成る。紀逸歿（六十八歳（川柳四十四歳））
同　十二午年　―
同　十三未年　―
明和元申年　―
同　二酉年　柳樽初編成る
同　三戌年
同　四亥年　？　柳樽二編成る
同　五子年　柳樽三編成る（『俳諧觿』初編成る）
同　六丑年　柳樽四編成る
同　七寅年　柳樽五編成る
同　八卯年　武玉川十六編成る　柳樽六編成る
安永元辰年　柳樽七編成る
同　二巳年　武玉川十七編成る　柳樽八編成る

同　三午年　柳樽九編成る

同　四未年　柳樽十編成る

同　五申年　武玉川十七編成る
柳樽十一編成る（『末摘花』初編成る）

同　六酉年　柳樽十二編成る

同　七戌年　柳樽十三編成る

同　八亥年　柳樽十四編成る

同　九子年　柳樽十五編成る
川傍柳初編成る

天明元丑年　柳樽十六編成る
川傍柳二、三編成る

同　二寅年　柳樽十七編成る
川傍柳四編成る

同　三卯年　柳樽十八編成る（やない筥初編成る）
川傍柳五編成る（末摘花二編成る？）

同　四辰年　柳樽十九編成る（やない筥二編成る）

同　五巳年　柳樽二十編成る（やない筥三編成る）

同　六午年　柳樽廿一編成る（やない筥四編成る）（藐姑柳全成る）
（柳ごり初、二編？三編成る）

同　七未年　（柳樽休刊）（俳風玉柳成る）

同　八申年　柳樽廿二編成る。呉陵軒可有歿
寛政元酉年　柳樽廿三編成る
同　二戌年　（柳樽休刊）川柳歿（七十三）
同　三亥年　柳樽廿四編成る（末摘花三編成る？）
同　四子年　（柳樽休刊）
同　五丑年　（柳樽休刊）
同　六寅年　柳樽廿五編成る
同　七卯年　（柳樽休刊）
同　八辰年　柳樽廿六編成る　古今前句集成る
同　九巳年　（柳樽休刊）
同　十午年　柳樽廿七編成る　朱楽菅江歿
同　十一未年　柳樽廿八編成る
同　十二申年　柳樽廿九編成る　桃井庵和笛歿
享和元酉年　（柳樽休刊）此頃、改題柳樽拾遺成る（末摘花四編成る？）
同　二戌年　（柳樽休刊）（享和の三年間柳樽の發刊なきは蓋し松平定信即ち楽翁公の寛政改革の餘波を喰つて一時廢刊したるものか）
同　三亥年　（柳樽休刊）

文化元子年　柳樽三十編成る
同　二丑年　柳樽三十一編成る
天保十亥年頃　柳樽百六十六編成る　此間三十四年間

因に記す、紀逸の死を六十八歳の寶暦十一年としたるは、廢姓外骨氏著川柳叢書第三編『武玉川』の序文によりたるものであるが、寶暦十年發行『武玉川』十三編の自序に、「齢六旬に越えて云々」とあるに照して考ふれば少しく怪むべき點がある、或は行年か生年か、そのいづれかに誤謬あらんかと疑のまゝ存して考證家の叱正を待つことにする。

今一つ附記して置きたい事は『柳樽』發行の年代とその包容された句の年代とは精密に一致しては居らぬといふことである、三十編の如きは前に述べた通にて是は勿論のことゝして、其外でも假へば初編二編は明和初年の刊行なれども、寶曆代の句が多く收錄せられ、三編は明和五年の版なれども明和元年の句を收錄したことは序文にも明言してある通である、されば萬句合などに比較する時は、天明元年の『柳樽』十六編には安永六七年頃の咏句が多く收められ、その十七編にはその七八年頃の咏句が多く拾はれてゐることが解る、これは唯一例に過ぎぬが大抵さういふ風になつてゐるので、通例は本の年代よりは句の年代の方が先づ古い場合の方が多いといふことを念頭に置く必要があらう。

武玉川

抑ハ誹諧の俳諧ハ神風也伊勢荒木田守武
天文の比連誹の一巻を綴してより千句守武山崎の
宗鑑法の抑ゑ貞徳時代開ふして此後の
式目抄以下定めて誹諧作者よく〳〵風流
盛ん京都ハ蓋一立圃重頼西武なと都
乃まなりことをそれとし侍る安原貞室乾貞
如花乃ことく相兼して是より都鄙の誹
諧愈栄乃連歌かのへしより江都にも杉風元
隣に慶友雑俳に宗因連歌のむかしを経て

古風は姿情を動し彼一天地の界に独歩す
其後世業に華く宗因風として一儀に門を起
門人西鶴半章書翠として其段様を織
後大坂談林と号して繁栄に松意此篇を
むかへて江戸談林を造立し十百韻を成
此頃都鄙一流まて風儀談林に帰し浅
乃ち云彼江戸談林に對して惣て其等を知る
是より誹諧新しく成りて漢を投捨ひ詩
ゆく〳〵俳の部一文いふ字を會の末に付のれし

を直て剞劂ニ譲りしかハ此時誹林の作者
退廃して正風世ニ行るゝハ村とかくりて貞徳
老隠乃門人北村拾穂軒季吟なる其門芭蕉
翁桃青初めて其之新風乃一体を起し
李白杜子美か骨髄を得しにしてより此かた
正風ハ昭代ニ弥て余の詣其の詣中興の祖とせり正
風代ニ翁と世挙て称し侍る門中其角嵐雪
抜群して京師ニ住るく村部ニ去来
人許せり滅時元禄乃始より今ニ至て

世につれて正風誹諧は翁の風情を見えて
あはれとも世々の人うつりて年々に変化常
なく、むかしとなりては晋子一方の中の洒落の流
花やかに風流をかへて世上一派の師と
なり、影門戸に聞へて洒落風に久しく
鳴りし今其門人益々盛んにてその風
は無下に紀氏国部の誹諧を
其之集にとる叙を
松して大に遠境村里の風

流尓於ゐて其をして流行を極るより是
時れハ日〻是利の宝して秀逸とまれなる句〻
若葉を出侍る故此度書肆の需に應て
撰ふ所侍る右付合の句〻を付前句を除
侍る所不えする是より其外ハ其儘に略
免る人の中よりて初句〻又風情
所付〻と挨拶て其證の上あるを付は
三句乃わたり或ハ附合乃情を不る者有故
猶以て[illegible]付[illegible]御〻[illegible]ハ[illegible]付[illegible]る也

みはや雪ゆんなる玉川の水筋のつくれに連

まて万葉集歴仙閑ほとりの如くなれと

聞して武玉川と号ク侍る

東武俳林　四時庵紀逸撰

杜中　蘭堂長字書

俳諧武玉川序

抑我家の誹諧は、神風や伊勢の荒木田守武、天文比連綿の一巻をなしてより、守武千句、山崎の宗鑑、洛の松永貞德、時代同ふして、此道の式目を沙汰し定めて、誹諧御傘、ますく\風流盛んに成ぬ、望一、立甫、重頼、西武など都の手ぶりともてなし侍る、安原貞室、乾貞恕花のもとを相承して、是より都鄙の誹諧應永の連歌に加へたり、江都に玄札、德元、堺に慶友、難波に宗因、連歌の家を出で、古風の姿情を勘破し、天地の間に獨歩す、その比世に普く宗因風して一儀にわたりぬ、門人西鶴、由平、兩翼として、その鐵塔を繕り、後大坂談林と號す、燕都の松意此翁をむかへて、江戸談林を造立し、十百員をなす、此時猶都鄙一統して風儀談林を出す、洛の高政、江戸談林に對して總本寺の名有、是より誹諧亂そめて、漢字を拾ひ詩のごとく作りなし、又は文字餘り等、おのれを立て新製に誇りしかば、此時談林の作者、退癈して正風世に行るゝ時となりぬ、貞德老後の門人北村拾穂軒季吟、その門芭蕉翁桃青、初めて貫之躬恆の本情をさとし、李伯杜子美が骨髓を

俳諧武玉川初編

冬籠之部

納豆に抱れて寐たる梅の花
夕立に思ひ切たる船のうち
嘘をつけとの大三十日來る
祭が濟でもとの明店
冬籠獨口利く唐本屋
取分て鞠は男のよいが能
雫の傳ふさは鹿の角
放れ馬跡の女に櫻の香
二人してたけた娘を打詠め
四谷から目黒の間を歌枕
犬張子二見にわかれ雲の峰
取付安い顔へ相談
夢で居る子を入れる誓文
入もせぬ聲の能く成る寒念佛
取揚婆々をしらぬ追分
物忘れあおな所を横に見

得られてより、此道の正風に眼を開て、冬の日春の日、中興の開祖となり、正風の翁と世擧て稱し侍る、門中其角、嵐雪を始として、京都に名高く、村部にしらるゝ人幾許たり、往時元祿の昔より、今に至て世に行るゝ所の誹諧、此翁の風情を出でず、されども世うつり人かわりて、年々の變化なきにしもあらず、晉子雪中の後、水間沾徳花美の風流を聞そめて、世上一判の師と、光彩門戸に至りぬ、續て沾洲道に名を鳴らし、今兩側の門人立並びて、をのれをはげみ道の鬱固をなす、誹諧諸國に盛ん也、中にも江府はその湊として、萬船此地をさして入れば、遠境村里江都の風流にたがはず、點を以て流行を極る事明らか也、されば日々恐判の卷々、秀逸とする句々書留め置侍るを、此度書肆の需に應じて、梓に行侍る、右付合の句々その前句を添侍るべき所を、事繁ければこれを略す、見る人心に計りて知らるべきにや、又風情さのみ轉せずして、點位のわかち有事は、三句のわたり或は付合の勝所紛骨成を以て、その程々を分ち侍るのみ也、只道の盛りさかんに、玉川の水筋千々に連りて、萬客の朱唇を潤すが如くならんと、目して武玉川としか申侍る、

東武誹林　四時庵紀逸撰

神輿洗つて近き拜殿
闇二つ有とはしらず出來心
日へ乳をさす引越の中
夜は螢にとぼされる草
正直に大工の通ふ貧寺
舞臺から飛ぶを乘居は觸步行き
丈くらべ手を和らかに提て居る
蒼はたはけな陸奥の玉河
宵の謠の通る寒聲
皿砂鉢慾はなけれどあぶながり
毛見の草履に二人取つく
説經の上手が島に生て居
相圖にするをしらぬ看經
柏もらひの手下な木登り
智惠のない顏が揃うて扣き鉦
家内の留守をねらふ鷄飯
賣喰の丁子頭は無念なり
尋て歩行く穴藏の聲
記念屆けて元の奉公
古骨買の辛崎へゆく

低く言ひ高く笑ふはおもしろき
勘當させた挑灯の施主
朝顔の思ひ直して二つ三つ
四月の紺屋立波にあく
不食の給仕飛石を行く
鳶までは見る浪人の夢
貴人の方へ曲る悶雨(かげぼし)
鰒はいやかとたつた一筆
六月しれる娶の身代
恥かしい目に島臺を能く覺え
三めぐりは蛙の聲に煙立
掃下を段々逃て棚の下
合羽に尖る船の若黨
夜討の跡にけいせいの帶
羽衣を鮮い(なまぐさい)手で皺にする
雪駄では通りかねたる三日の原
門松の穴も心の置所
眼藥の貝も淋しき置どころ
後家で目を突く今の角町
夜のめかりに借金を逃

利口になつて飛ばぬ清水
梟に晝中くらき十二神
一日の機嫌も帶の締めごゝろ
峠の宿の淺い居風呂
をどりが濟で人くさい風
白鷺のひだるいうちは水鏡
宿下の儘で雪駄は干からびる
面打を呼ぶ一世一代
臺笠振つて這入る出女
淋しい舟の五十嵐へ着く
正直に獨つゝ寐るたから船
今出た海士のあらい鼻息
能い頃を鶉の起す草枕
間夫の命拾ふて蚊に喰れ
棒を潛つて供へ茶を出す
夜のしまひもはやい濟日
草も輪に成て涼しき御祓川
旅衣脊中へ蝶を浴びて行き
松脂匂ふ清見寺前
ちら／＼と池の蛙のうしろ紐

子をまたぐらへはさむ中剃
盃出して伯父をしづめる
藪入の物あり貌な錢を買
我一生とおもふ河越
牡丹に馬鹿の狂ふ身代
十九が過てやりばなし也
湯立をうめて通るむら雨
順見のもたれ懸ればまつの風
買人を突付て見るゐもり賣
四月八日ありがたい日は暮にけり
鳴らして捨る葉に殘る月
黑木のうへの初雪を喰ふ
飛驒の內匠(たくみ)もやはり切篭
たばこ入家內へ隱す松の內
柴の戶を大根で扣く霜の花
足の淋しき下馬の六尺
御端下(おはした)までは行かぬからかさ
呑喰も四十と言ふが先へ立
雪ころばしへ登る垣間見
うき世はあぢに着なす上下

鷲の除け物になる雲のみね
衣紋坂出家の提る土大根
湯舟の煙黒い六月
付ざしを渡すと直にあちら向き
夜の雪駄のひゞく木がらし
秋風に山伏のうつ火がこぼれ
薬にも毒にもならず年男
情しらずの筑波見て居る
びうしやりと破つぶれる山颪
三人寄れば毒な夕ぐれ
合點で居てもあぶない暖鳥
安弔ひの蓮の明ぼの
雀子の可愛がられて逃て行
折ふしは棒も降る也さくら狩
淋しい茶屋のしれるかやり火
志賀は小言の種にぞ有ける
拾ものにして抱ついて見る
居風呂へ明てはかへる松の風
錢ほどに盛あてがふさくら草
うまい事書いた文見る鼠の巣

山歸來干す辻番のうら
狐に戀を見せて化され
鎧を着ると側の卷物
千鳥をば鷺にして置遠めがね
水かねを客く振出す鏡硏
前巾着に枕する猫
螢の先へ間に合はぬ傘
湯立の通りはやる振出し
聲きいて笠を名殘の檜原
世はからくりの福壽草咲く
凡夫さかむに猪牙へすばしり
住居の智惠は越てから出る
外科はその名も付けず別るゝ
首さへ出れば窓の通ひ路
暑き日に娘ひとりの置所
青い葉は律義にしらぬ立田姫
鐘つきに引はなさるゝうしろ神
張合のなき盃はさし向ひ
土産の一駄前の日に着
子を譽て居る船の眞中

師走の猪牙に裏白が舞
雀へ酒のかゝる鳥さし
夜着の榮花の眼が明て居る
ひよんな字を問て家内に疑はれ
廿ちの思案聞に及ばず
わさびおろしに寒い袖口
高く聞へる闇の口上
稲刈の一鎌づゝに笠が鳴
物書は寺中で憎む掛人
塔を見て思へば人も怖い物
行水廻す根府川のうへ
切れ盃を供が見て居る
取扱いも寒いから鮭
悋氣の屋根を廻る夕立
面白く反る四つ手引かな
主のない扇を遣ふ渡し守
傾ふ馬を澤潟へひく
けぶいもの喰ふ木がらしの月
仕送りをうまくだまして足拍子
泥のつく物とは見へぬ御所車

二階から心の人へ咳ばらい
若衆は聲に出るうら枯
六月ぎはたらく霊山の柚子
元結紙も枯の世の中
湯女の情も一まはりづゝ
をかしがらるゝ衞士の有明
雙六の戻る箱根に雁が落ち
白粉も袂につけばたゝかれる
時鳥近く見られていとま乞
柳と路次へ這入る節季候
水ものにして田を質に取
食傷は覺悟のまへの遣唐使
蓋明てあいその盡る御薬籠
三下りころせ〱と人通り
蒸籠の湯氣を抱へて奥へ行
馬の尾のふり負て居る水車
廿日亥中に上を行うぞ
足跡は親子と見へるかきつばた
口留をしても忘れるめうがの子
上り馬乗る寺の若衆

祭もなくて人近い神
轉んだ跡の青い淡雪
出入座頭の響る新道
見しらぬものを拾ふ左義長
常世が馬の疊まで喰ふ
相談のしまらぬ所ひがし山
かな谷泊の一日の運
人目の隙に妻の行水
緋おどしに惚れて戻りし白拍子
捨物にして遣る文に花が咲
乳母が在所の赤蛙來る
鑓が降ても武士の衣々（きぬぎぬ）
小松曳あぶない所で手を握り
かぶろへ親の通ふ疱瘡
螢は窓に闇は簾に
紫蘇漬にして戻す引臼
下戸一人戀の證據に頽れる
氣違を見に物干が込む
山伏も木の端ならず梳あぶら
牛一つ花野の中の沖の石

醤油にと氣儘はさせず松の口
吉田を乗つた聟にくり言
歸りには癇氣の發るくすり掘
入歯のぐあひかみしめて見る
連歌師の江戸へ下れば花の春
色茶屋はつぶれて寒き廣小路
助太刀は念者と中のよい男
金剛杖に立並ぶうそ
行平の寐所替る月二夜
寐て出る智惠に世も捨り行
後生氣が出て極のつく女形
命とはあたりまかせな言葉也
通ふ子の口に人形の舟
草履取面白からぬ數寄屋河岸
隙かして拍子の揃ふ紙ぎぬた
用に立つたを聞かぬ突棒
初鰹死だ隣でそつと呼ぶ
息杖のうち掃かけて待つ
歌でいかねばべつたりと文
御符もらひの行あたる鷄

貰ひざかなのさがるうたゝ寐
身のうちは眼計出して玉霰
何かにつけてをとこ兄弟
深くはいれば法の吉原
財布でぶつて直に勘當
安い藥のまはる木食
傘をさす手は持ぬけいせい
新が利いて宮芝居隙
季吟にたかる人も月花
小つゞみにぼつ／＼降は淋しけれ
此反り橋にほしき牛若
松茸も喰ぬ物なら小間物屋
筏さし疊の上へ世をのがれ
牛に乗る日は遠い鎌くら
篇から水を貰ふ六月
海士の子の頬を舐れば鹽はゆき
坊主と中のわるい煩ひ
はげしい親の叩そこなひ
禁酒して何を賴の夕しぐれ
烏も二つ雪のぬり下駄

かもじを拔てかゝる闇の戸
太神樂男日照の下へ來る
婆々が昔は指折の海士
主從が裸にされて雛子の聲
みな仇事のぼた餅が來る
ふり付のしの屆く衣がへ
長刀で腰元ぐるみ弟子に取
手を握られて顔は見ぬ物
更け行く春に禿苫になる
都のうつけ赤貝に泣く
砂糖のやうな京へ緣組
笠の雪崩れぬやうにいで見る
そう笑つては辷る反り橋
仕着の不足下に着て出る
朝寐する町は鳥居の右左
母はとり込む雨の錦木
時雨と雪と二度に逢ふ瀨田
醫者の口から洩れる隱れ家
金掘の佐渡へふり向天の川
のれんの外へ口上の尻

正客をつぶす積りにずつと立
揚屋九軒で可愛がる馬鹿
あわれ也狂ふ時には男聲
琵琶がなるとは親類の花
枡で喧嘩を分る住吉
むかし／＼の壁に高札
呑むやうに水のなくなるちらし書
日にやけた娘を譽る宇治の春
異見の側を通るぬき足
鳴子曳戀には賣れぬをとこ也
うらやまれたる山人の脈
一日の奉公納に床をとり
新造の根に骨はなかり飛

靑樓の部

藪入の顔は濃くなり薄く成り
三世相にも水はつめたき
下闇に火の恩ふかきうつの山
吉原に質が有て運の盡
文が届て替る夕ぐれ
から鮭の眼へ節分の豆

弘法の惜い事には細工過ぎ
うそつきに來た傾城は寄掛り
鯉賣呼で家内の顔を見せ
誓文に立る刀はまくら元
西瓜の水も違いたしなみ
無理なまくらで大坂へ着く
冬籠我も昔は尻しらず
をとこの眼にも凄い子おろし
ひよくの鳥も顔が見らるゝ
世の譽事の晴天に死
眞四角に突出し物の神樂堂
幾度か盗まれ死なれ歌枕
孕む稲かはつた物を夫に持ち
ひよこの咽の乾く若竹
呵られた夜の夜着はきせ捨
二の替り臺所から口を利
踏れる戀もをとこ一疋
両隣娘の咎を知て居る
捨鐘聞いてあとは推量
後の追人に二親の聲

袖留めて師走の闇に突放し
旦那の髪が出來て騒動
氣違もはやされてから藝が殖え
撿校は手を敲く産聲
うき世の下卑に揚屋町さび
明る戸へつめたく障る氷室守
日頃の意趣をはらす芋蟲
散る花を乗物の戸へあふぎ込み
隣の耳へあたる言譯
目いしやの顔が見えて手を打
紅葉の中へ幅な入相
土産買傘へ時雨の音がする
錦木立てゝ栗のうへを行
命しらずの戻る岩はし
持碁に作つて顔の見合
しのぶ草夜着を幾つか跨ぎ越
當させて心のうごく袴腰
高尾が出來てよみ賣が出る
様々な人が通つて日が暮る
子守のもたれかゝる裏門

翌る日足の立ぬ池上
異見した日の戸が早くたつ
七つは人の耳につく鐘
駿河の町の吝い初雪
關守の淋しい日には物とがめ
その時を見事に武士の衣がへ
ちといたはつて返す羽衣
夜伽の客のかた付て居
うそが溜て本堂がたつ
我髪と思ふ時なき女がた
四月八日は葬禮の花
蜀漆の蟲に親の霍亂
障子越引たい袖はかげぼうし
時雨する出雲の空は表向
松が岡男をしらぬ唐がらし
舟岡を戻る新屋も五十年
不斷櫻は観音の伊達
迄と云ふ心の反りの不奉公
あみ笠の赤く成時おもひ知
買水をうついやなやつ哉

鬼門の方のふとん折込む
六月のつめたい物に損はなし
道心者我も覺えてをとこ山
反かへるのを見るやうに鐘の聲
不破の大工の一生の恥
雪折も千鳥も枕してのもの
正直な方がやつるゝ飛鳥川
かいどりに隠れて居たる不孝者
歯の抜た子の屋根を見て居る
黒雲の晴るゝ筑波は有の儘
あぶない道で熊野節買ふ
帳屋の笹に二度雪が降
唐から渡る糯子も空解(そらどけ)
五月雨袂の下に付木の火
寐起にわけて光る金屛
けむい所へ這入る袖笠
豆腐にむかひ是からの智惠
胡葱(あさつき(?))は初奉公の新まくら
晦日のうそに男ぎれなし
なぶり殺すを居代てやる

金にする聲はあはれな寒の内
拍子に乗て長崎の嘘
仲人の及ぬ所へたすけ船
覗かれる氣で瞽女は寐に行
笛の上手に身を捨る鹿
傘の初荷が着て郭公
惡女へ早く届く手招き
津浪の町の揃ふ命日
涼しさは男に多き糺(ただす)川
蒔し物出て生る駒込
内に居て顔の淋しき一月寺
奈良漬の一舟殘る病上り
恨もなくて我疊む夜着
幟が殖えてなぶられる妻
鍍金のおもしろく減る旅衣
少しづゝ灯のふとく成る新枕
御茶の水行く舟にからかさ
舞も恨も初ては立膝
憎さうに手曳は日向通りけり
子の手を曳いて姿崩れる

我炭にかじけて歩行く八王子
鷹の頭巾を拾ふ買出し
煮えあがる湯をだます茶袋
辛崎やあたりの松は氣も付かず
近星を佛御前は知らぬふり
淋しい時に藏を詠る
油のはねる忠盛の袖
落る事なくて淋しき牛の角
百取うちに濡れくさる釋迦
朝顔の開き仕舞へばほんの帯
死だ妾に繪師の骨折
勘當の長崎者に成かゝり
一夜明ると馬鹿で目を突
殿の禁酒に夜は拾り行
浪人は娘ひとりを智惠の奥
後家しほ／＼と青物の禮
明六ツわたる鵲のはし
鳥にさへ相言葉あるそとの濱
顔で死ぬ蚊の兼て合點
節季の息子算盤に乗

背中から寄る人の光陰
百姓の身に稀な手枕
儒佛の識初雪が降
吉原の屋根かと聞て伸上り
覺へる事は女房が勝
ぬるい湯船へ這人る早乙女
編笠を着てほんの眼が覺め
口上も二人へあてゝ千團子
精出して賣る顔でなし唐物屋
逃ると開て水がさしたい
子どもの色のわるひ築しま
淺間はもえて里の朝食
袖笠はしのびに成らぬ紋所
十年まへは獨をかしき
番神堂を廻る薙刀
庭鳥の鳴ころが奉公
子に持せても桔梗淋しき
志賀の寺傘畳む音がする
きり／＼す顔の重たき院の御所
生酔の心は直に道を行

さくらが咲て輿の前だれ
寒の水棒の師匠に撲らるゝ
杜若坊主の手から色がさめ
雨雲の時々見世へ茶を運び
名古屋からなぶられて來る干大根
神無月佛の御代に成にけり
臺所から影ぼしに惚れ
うらむ比丘尼の髮をほしがる
闇を躍て歸る屋敷衆
御神酒はあれど青い庚申
白眼廻して妾の出代り
宿下の土産に咄す紋所
奉幣のうち氷る侍
度々智惠の戻る築島
葵が咲いてうぐひすは闇
縫ふ人を空からなぶる時明り
大工とさしに引越の椽
旅人立てくらく成る家
日本の裾は風ほどに明く
棧敷へ坐る母の中垣

寛をさすつて雑煮て居る
生酔の後通れば寄かゝり
榊の穴に鉄の投やり
寐て居た前に合す稲妻
女房は簾の内で直をこたへ
垢離取の見ぬ振しても摸舟
浪人にまだ息の有る松囃子
おもひ直して三絃を弾く
手うつしの闇をいたゞく寒念佛
くぼみの家へ蚊遣り草賣れ
是迄と思ひ極めて總仕舞
都鳥けふはきのふの錢を賣り
先でわかるゝ判取の聲
返す時機嫌の悪い御闇本
うき事のためにちび／＼手習ひ
又振袖へ戻る孝行
一つでも義理の届いた螢狩
六郷ぎりで別る相傘
中用の名のある甲斐もなし
病ひ程療治盗しご居小舟

鳥甲見て歸る弟子入
戀が叶ふと分散に逢
音頭が付て輕い言譯
我からに招く氣に成る藏開き
かつらへも賀茂へも遣らぬ佛の日
むかしも今も同じ本膳
小野照崎をさしの弔ひ
落着顏の堀で三味線
約束倒れさらされて居る
燈籠の賣れた夢みる小道具屋
五月雨や仕舞の日には横へ降り
松風の和らかに來るひとへ物
墨染のちからづくには寫し物
猫の二階へ上る晴天
此世も闇の鵜を連て出る
棒を馳走に遣ふ神取
宇津の山捨たいやうな鑓に逢
遠く日のさす横笛の肘
六角堂を乳母がしこなし
つまめば淋し金襴のうら

惚たとは短い事の言にくき
ひよこの付て這入る灌佛
烏の歩行く瀬多の元日
閏五月のいたづらに降る
火の入た酒出盛てほとゝぎす
西日の宿の目を細く呼
鶯に突放されてほとゝぎす
中氣に成て亭がつぶれる
泊客最う隣から入の口
涼しくも男を立る三つがなわ
大屋に成りて負る六月
蝶々の種を蒔せる貝わり菜
窻明た大工を譽る九はだか
雪を喰ふ女の顏へ日のうつり
硯の膝を廻るおし鳥
取揚婆々の供も飛び／＼
雪ころばしの盛かへが出る
役者の草鞋葉の落る比
たけの揃はぬ加多の洗濯
きんか天窻を撫る若君

紙燭して遣る恩のはじまり
咡はうしろの見たい繪の內
木枕を都から來て匂はせる
半年の埃を見て居る硯箱
捨子の棒のつくかひもなし
子にゆるい頭巾かぶせて網代守
歯の若さ茶漬の中に石の音
朝日を供のふさぐ干物
嫁入となしに抱取て行
消炭を人と思はぬ八王子
あはう拂の攝待へ來る
取持顏でさかもりのめど
藏造夏の噺の怖しき
二心內の淋しきゑびす講
雀眼も慾にありく棚經
一網づゝに亭へ挨拶
脫いで女に戻る水干
松の風少しかたまる置炬燵
放馬抱た男に智惠はなし
死たいと言ふた師走の恥しき

先の家内をあてる進物
不機嫌な日は音のない臺所
靑田に成つて乳の見える人
何所へ行とも言はぬ雨性
流屋がたいこ長崎で死
鳴戸を越て紅繪さめ行
下々に見らるゝ顏も初幟
莊子の夢の山吹へ來る
噓をつく顏へ時雨の降かゝり
飛ぶ傘はくらい買もの
内に寐て獨をかしき夜着ふとん
死際は人形に似てきり〳〵す
浪人たけはすたる言傳
願叶うて怖しい町
細工が成つてはやい還俗
袴着させて乳母の大口
傘に寐鳥のさはぐ切通し
勘當は蛙に水のかけ納め
腹のたつ時見るための海
螢から連に成たる戀の闇

女にも心々の譽どころ
淋しい宮に穴一の音
嵐の川に朝貌が咲く

主壽昌之部

派の利く手代面白くなし
撞くが見えるで伽な入相
百姓は嵐にうその道が付き
死だ家老にしからるゝゆめ
目につく乳母へ舞て來る獅子
辛崎は商賣じみた雨が降
文殊の智惠も三人の分
衣で礒に歩行く密夫
親指に折らるゝ人は手がら也
死だ手際を譽る棒突
念者と人の知るを待かね
二百十日の屋根に浪人
そろ〳〵見える後家のからくり
折々損をするも養生
大つゝみとは公家の荒事
我が田を取られた川で渡し守

賤しく老てあつい湯に入
夫の惚れた顏を見に行く
師匠への旅の土産は物覺
鳥邊山最う噓のない人に成
牛王の灰と聞て欠落
女房の鏡見た迄で濟
口の辷つて二度起請書く
氷室を開く鐵の手廻
松戸の顏は雲やりの先
國替の顏が降也かゝみ山
物云へば柄杓を遣ふ水鏡
追分へ來て下戸を育る
遣り手の噺立波がひく
赤子の聲ののらぬ吉原
樂屋みたがる翠簾の正客
越後屋の灯を供がかぞへる
あまつて足らぬ女房の智惠
化物屋敷響る蟲うり
いざよひは少しおどりて小紫
要ばかりを下戸の言傳

丹誠に桃を咲せて追出され
美しい娘の供の反り返り
枝からこぼす琴の似せ物
負公事の方へ娘は行たがり
立並ぶ木々とは言ず松の風
うこんがさめて井手の夏川
振袖に薬の湯氣を曳て行
寒い噂に赤く成る笠
今度の硯文にふさはず
女房の望岸を漕せる
遊行の供の口が利き過ぎ
喰切て驚かれぬるたうがらし
春のあさぢの飯粒を踏
後家は嫌ひと後家が言せる
二十五の曉またぬ五間口
馬の姿も出ると戻ると
抹香とても爪はづれ物
盗でくれた人を正客
餞別貰ふ初の勘當
妾がとつて廻す祝ひ日

當座のがれの顔へ風呂敷
あぐらの側に上下の恥
老のむかしを咄す臺所
婆々はわすれて仕舞ふ我顔
従弟が連れて歸る桶伏
紀の關守の猿にさすまた
初會に先の見える七夕
いかだ便りに歸る小舅
鶴は龜より人をさわがし
鰯がとれて闇の人聲
急ぐ小早の反かへるころ
隣をば人と思はず年忘れ
追分へ出て薬まで分け
奢盡して鶴龜を飼ふ
氣違の一日置に通りけり
浪人の編笠計むかし物
心に無理の殘る道心
よい男來る分散の禮
恥かしい所を湯舟の揩はらひ
暮にちらりと後家の積物

五月五日も毒の玉川
我分別のやうに薬湯
踊る時には袖が魂
雪の寒を止んで覺える
新らし過て凄い賣家
橙一つなはしろへうく
稲葉の雲の中を鍵持
降初し日は遠い事五月雨
町内の月額青き死光り
箸の先から見える光陰
まだ主の紋を着て居る草の庵
曾我の泪を目黒でも泣く
めでたい役は鶴の預り
氷のうへに外科の挑灯
死ぬと忽ち人の金藏
肘枕我身代ははなれもの
おこりの落ぬうちは丸腰
三つ櫛のみつれば缺る十二月
菊畑他人の藏の雨雫
寒聲も何ぞに腹の立た時

凱陣済んで後家の捨賣
息で重りを付る羽子のこ
ゆめの世ながら人は寐道具
顔を見て居る琵琶の始り
敷金の禮も言たき新まくら
玉手箱仕廻ふ時には皺だらけ
九年の陣へ見廻ふ女房
暦で尻を扣く仲人
水干をのれんに掛る八重葎
結納の済んだ迄の我せこ
寐てか覺てか民の前帯
枇杷桜花の寒を言ひ合
不足を隠す嫁の白粉
立身をしてかるい履物
夜着や枕は戀の下草
歌ぬす人は大がらな人
あたつて錢の戻る三絃
伊達過て小町はもたぬ縮緬
神楽のうらへ廻るさむらひ
葬禮の翌へ延して慾がしれ

星二つ三つ雨もりの伊達
傾城の遠い思案も遠からず
うそ禿て後ろ台に夜が明け
和尚の肝を潰す末の子
かぐらをのこの細い衿元
千鳥は立て殘る赤椀
埃りをはたく儒者の大聲
聟へ盃戻る横雲
むかふ近江へ見せる稲妻
道具屋に逢ふ若竹の道
簞笥の多い鍛冶の六月
明荷の馬へまはる金剛
生延て子に叩らるゝつまみ喰
百日紅も通ひ路の數
傾城に笑れに行く主おもひ
高尾が舌もまはる大年
西の河原を親の足早
頂戴したる若殿のうそ
毒は廻りの早い借金
地震の跡の箸も一本

五人組から嫁を見始め
白禿計殘る飯臺
我ほどの茂みの下に八から鉦
かな聾に蛇骨掘まけ
反から先へ習ふ鐘撞
ぬすみおほせて初のきのえね
御仕着の下駄を親父に盗れる
鼻を大事にせいと遺言
馬も立派に歩行く朔日
二心ないと思へば足の跡
十月の空を見て居る物貰
影法師にも癖はよいもの
鮓桶のきのふにけふは投出され
付ざしも七合入はちから業
松明の手元でもえる山かづら
あまりの飯のすゑるとぶらひ
江戸の餘波の山歸來呑む
青山からも近いよしはら
をとこの中にすたるうたゝ寐
赤子の鼻を嚮る座のしほ

物にかゝりの突出しを買
たいこの顔の殘る墨染
時あかり女心をよろこばせ
瘡あげくの損をした顔
垣間見に美し同士の湯がこぼれ
妻の出立に餘所目して居る
兵庫の命室へ着く船
稲妻にその氣の付ぬ門田守
焦るゝと云ふ人の夕ぐれ
看板を見ても入齒の哀也
假名で書せる鶯の賣上ゲ
橘町に夜晝の顔
國家老日は赤々と太夫買
總身を耳とおもふ當言
刈人の丈も五尺のあやめ草
湯屋の二階は侍の物
鰌(どぢやう)を提げて田(た)の中を行
蠅をうつして代る闕守
冬の牡丹の魂で咲く
きのふけふ起請の宙の冷えて居る

無い齒を鳴らす百日の行
あぶながらるゝ商人の衆
眞向な顔の多い入舟

俳諧武玉川初編 終


廿五点
冬嶺秀孤松
十五
秋月明輝
十
春水
四
雁字三

叙

先にあらはす所の武玉川八冊は莫耕の義遊て頗る世に行る今又その緒を續く寛延庚午の年より来の集に至る迄の句ゝを見しハ撰て序に叢句百句をかぞへ續編となし侍る續き武玉川の流消ゝ

せしてあることかさね川とせ
ある淡情を寄てさゝれの

慶紀逸撰
佐長孝書

俳諧武玉川二編敍

先になる所の武玉川は、日々點likeの秀逸を顯すもの也、今又それに繼で、寛延庚午の年より未の夏に至迄の句々をえらび、後に予が發句百句を加へて、續編となし侍る、誠に玉川の流涓々としてしかももとの水にあらざる姿情をしらするのみ、

慶紀逸撰

俳諧武玉川二編

冬嶺之篇

あんばいのよい朔日の空
陽炎やとかく何ぞに倦た時
口洗ふ馬のくはへるかきつばた
紙漉のたま〳〵よめてかこち草
雑司谷鶯から顔が二つ三つ
親父が見ては濟ぬからかさ
去られてもさられても未だ美しき
鍍の師匠の駒下駄で來る
四十から老僧の森へ飛んで行
さし上て見る縫紋の出來
眼藥をさして大事に起あがり
病上り工夫して居る遊び所
年忘何ぞ降のを待て居る
隅田の渡しの夕暮を骨
物買て春筋のゆがむ小侍
河竹の本のこゝろは女也

赤子は臍で見えぬ正月
井戸掘の心覺えに蛙啼
一分くはへて内へ引く息
九つは禿の消える鐘の聲
朝顔を粉にして歩行く男の子
春寒く廻り人のない法輪寺
子を持姿觀音を引
奥に娘の光るかざり屋
やもめがらすに張のない凧
切賃は金のなくなる始なり
足で鼠をおどす萬歳
藪入の田の近道をうち忘れ
うまい事言うた師走に助け舟
一葉づゝきたなびれずに散る柳
似ぬ顔を産んで我が身も疑はれ
掟が有て同じ黒髪
隣の顔も飽るくすり湯
はね馬に逃込む顔の久しぶり
札配り遠くも來ぬる角田川
日向で灸をすゑる四阿

あぶない義理の届く吉原
富士を見て田植の髮をゆり直し
更るほど氣の若くなるとし忘
辛子が利いて時過た聲
物ぐさひ瞽女に引るゝ絲ざくら
鹿間の淋しい足をうち違
犬死の側で妾に成りおほせ
鳥屋の前でおりる遠乘
榊來て鱠の山は低く成
投れば切る枚方の錢
東路は仕舞仕事に風の神
袷着て新地は寒い赤蜻蛉
婆々が死んで中垣がとれ
節句前文も五尺のあやめ草
あふひの上の袖に護摩の香
身のうちに帶がふえると芥川
入相に向ふ姿の膝をたて
田樂がみじかく成と冬籠
かんこ鳥江戸の暑さはしらぬ也
若菜に揃ふ桶川の君

角萬字屋で折るゝ稲妻
出代の門四五間はかけて行
しかられた日の分けて夕ぐれ
宵闇の夜のしまる行燈
尖に毛抜もありがたき物
うそがかうじて上下で來る
葬にあついきせるの打違
をどりを押てはいる蓬生
たいこの年の星をさゝれる
聞捨にしてはおかれぬ梓弓
をとこのほしい勢田の眞中
蜘の巣ぎりで戻る賣居
ふすまを覗く太郎國經
我たつ杣のしらぬ年號
曳たび袖のみえる罔兩
行燈にまだ氣のつかぬ暇乞
浪人の羽のぬける元日
妾の智惠も河竹の風
蟲の命の燃るあさぢふ
他人の足に負る烏邊野

雲の行衛の住吉で散る
嵯峨より深きあみ笠の奥
雉子鳴て震(ゆる)か〳〵と撥を留
鏡にせいてかゝる庭鳥
けふ九重を裸にて立
入墨を消す氣に成れば夜が明
紅裏のないも笑止な土用干
心ある酒とはしらぬ從弟間
三人傘にうたがひはなし
樣と云ふ名で來る時は忍ぶ草
神風に吹消れたるもみぢの火
吾妻くだりの青いからかさ
不沙汰の顏に合ふ面がなし
つまみ洗ひの手を振て置
あり甲斐なしの笙吹の鼻
陰間の聲の二筋にたつ
四十二の子の親が澤山
ほとゝぎす皆出來合の藥也けり
三味線の跡を因果と引かぶり
朝みれば御油赤坂の家計

宵のうらみの二段目が出る
女房も只取るやうに通り者
夏野に家のつまむほど出
降ものゝおのれを諷ふ板庇
醉狂の翌は浮世に突あたり
明がたの戸をたゝく高聲
情しらずの笑ひ大きし
看病に藥のやうな顏一つ
座頭はなせば文のうへ行
饅買て餘所の流しへ持て行
夫婦喧嘩の外で小便
倒れ序でに住よしの市
松風の裾わけをする萩の上
帆かけ船先が直てたはいなし
隱居の小判うごくあつかひ
子の口吸うて音頭分れる
立ながら見て歸る金元
紙燭の反りを土器で摺
海馬もらへば脊中たゝかれ
生醉の次第々々に丸く寐

瑞軒を見た杣の長命
利(ごちやう)きそうに思ふは銀のくすり鍋
鯰の中へはかるうの花
めぐろの犬も冬がれに成
檢使にこ〳〵下帶に金
旦那へさして逃るさかづき
向ふ木挽の揃ふ鼻息
淺草も上野もなりて郭公
三疋ではねれば馬も詠あり
早乙女の笠は裏から日があたり
醫者に二度まで積らるゝ顏
二つ重なる呼の傘
後家のやうなる牛若の影
くやしい聲で横顏へ向
下戸ふたり起して廻る司召
通りの傘へあたる豆蒔
物思ふ相手がなさに鰤を釣り
うしろ姿はしれぬ關守
狩衣は茶を呑たびに腕まくり
肩へかけると活る手ぬぐひ

むだ書をして梶の葉をかむ
雨だれ越にかるい相談
朝日のあたる盗まれた窓
掌を死所にするきり〳〵す
鳥邊山送り出して耳が鳴
工夫してきのふへ返る紺屋形
美しい顔で咄が長く成
誘ひに來ると見えて割膝
へん〳〵と扣く御寺の大工小屋
母の自慢は錦木の數
ながらへて新地にすたる眞桑瓜
向ふへ槍のしづむ長橋
いつ逃て樒に光る飼螢
弟に餘つた乳の水くさき
鐘の音計黑き雨乞
銀のちろりの通ふ紅閨
京町のやりての聲で猫の眞似
土埃うしろへ請けて梅の花
長い祈に割れる勝山
雨障をすくひ仕廻て勸化帳
取梠は疊のうへで成る仕事
卷くのも手間のとれる國狀
泊客主の口が辛くなり
金に勝のは只ならぬ顔
賣家を隣に持て淋しがり
雪やくそくは雨性の伊達
直のなつた跡の祭にはつせ山
鶯は谷へ戻してかたみ分
夜は老そめる九ツの鐘
人のくすりに燈す蜂の火
書置に引くらべたりあづさ弓
蚊屋一重向ふに人をあやまらせ
言譯のくらい男へ飛ぶ螢
傾城と見たはひが目か竹の奥
をどり子下地しぼり出す聲
腹だちの手元へ見える鳴子引
水を女の怖そうに掃く
我物に師走は戻る貸座鋪
精進落に大判を見る
さし合を拔けば聞へぬ願書
ゆく〳〵は螢にならん草の庵
客の毒を知りてかむふみ
鏡から崩れそめたるおさな顔
疊んだ物の見へぬ獨身
人形に惚れて禿はしばられる
後藤が馬の歸る夕陽
雨あられ雪と替りて日がつぶれ
樓船と聞てぞつとする冬
針仕事手がるく成て夏近し
勘定づくの馬でよめ入
鹽氣の拔る薮のおとろへ
ふつた所がけいせいの禪
我身ひとりのやうな神託
ういた浪とやむかし人乘
山科や集るうちによいをとこ
呑かへしておごる逗留
夕顔咲て井戸掘の帶
飯入て少し賤しきあま小舟
初老のまだ竪縞をはなれ兼
夜に飽く初は奥の紙ぎぬた

凩も生れのまゝの材木屋
五人に問へば五色な墓
哀れさは千両箱に鰹ぶし
六はらにしくじりさうな顔計
帆を揚てから咄なくなる
ちぎれ〳〵に石燈籠つく
草履打片々足を洗ひけり
汐曇はれて主なき桶二つ
肴物や玉子の色の目にかはき
こよりと聞て起る狸寐
伐られぬ卯木九日にさく
唐扇の自慢をしたる通り雨
橋守の煙の高さわかれ霜
かる焼の忍び心はしめり合
帆におそはつて傘は賣行
烏帽子計で生て居る顔
惚られた事を思へば氣が抜けて
地紙うり笠着る時は物詣
さま〳〵に世はかはる呑喰
咄しにも千人切は多過て

病人の手へしつとりと秋袷
大江の岸を浮て行く下駄
新地の間夫に蚊柱がたつ
元服に又改て言かはし
おつぼねの名に近い子卸
ゆるひ黒木に箏をさす
栄花な腹を醫者は怖がり
呼聲を母のにくがる李賣
うそのない旭を戻る小松原
死ねば煙ではひるよしはら
誰植ゑて人に淋しき峰の松
けいせいの親に逢ふ日は雪が降
絲遊のだんごに早きうつの山
寐姿がよくて哀なすまふ取
放し鳥とまれと思ふ木を過て
事納着かへる程の日ではなし
朝顔に追立らるゝさしむかひ
脊中へしれる猫の腹立
雪の日はころげた儘の樒桶
闇のとぎれるうどん屋の前

須磨寺に夜着きて寐るぞ怖しき
角力とりめと撫る子の尻
母も哀と思ふほど惚れ
夜かぐらやつめつた前へ廻りけり
洛外へ出して目にたつ拂物
若黨をだいなしにする初袷
死だ和尚を饗るとうふ屋
机ではたく梶の葉の蟲
直切ころして歩行く順禮
葉櫻に成つて氣の減る錢の音
指櫛が網に懸つて人だかり
馳走に竿を添る柿の木
夜着の日陰に臼の目を切る
いらたかを投ればしばし湯氣が立
段々に音のなくなるとろゝ汁
みどり子に膳をとられて茶漬くふ
竹植る日を主の聞捨
脇の下から寒い羽ごの子
送り火は他人の手にて燃上り
初奉公のこりるくらやみ

よいおとこにも二通り大つゝみ
買人の手でつまゝせる薺草
夙に買物使あはれなり
戀しい時は猫を抱上
つむじ風格子の前で二つ巻
疱瘡にうどんの桶も出して見せ
郷侍の名を付る神
あみ笠の鼻につかへるむかう風
座頭が出るとこぼす居風呂
娘から手代の間は紙一重
よい日和子守をなぶる松の影
従弟夫婦の兩方に伯父
町のはづれで仕舞ふ錫杖

望樓之篇

吉次が供のしたい事する
狠の命拾ひは寒のうち
今がよいとは言ぬ後添
燃る間を柄杓で扣く八重葎
給仕の顔の遠い住吉
辛崎は狐火までも朧にて
人の物着て夜の岩倉
そむけて絲を結ぶ綻び
酒買時に燈のうつる川
阿部川で人と思はぬふとり肉
高野聖も金の明るみ
遊び盡した人を後見
伽藍の雨戸晝過にくり
朝顔くらく馬の髮結ふ
噛む爪も極つて居る物思ひ
庵の主聞ゑる方の耳を出し
我家へ漏をあてゝ雨乞
寺の餘情に匂はせる蓮
烏帽子の跡の伏見まで見え
門口へ野分の屆く住居也
初雪のつまみ心もなくてよし
撫子に火の出る鍬の夕河原
我智惠で逃げた心の放し鳥
質に直のせぬ寶久しき
石をおろせばゆれる四阿
礫を拾ふうちに小舅
重着の數をあらそふ冬籠
放下遣ひの來ると見渡す
合羽の下の痒い志賀越
妻の小袖の盡る七種
面白さうに振廻す幣
赤子の顔の似ても水物
夕顔が宿取人の眼にとまり
遠い思案に蚊屋を出て居
笈摺を縫ふ母の野心
憎い女を磨る薙刀
道成寺人のかけ出す雲が出る
揃すます殿のあけぼの
下前にさゝ浪よせる志賀の浦
きり〴〵す踊の足を間違せ
手數が入て返る羽衣
參宮とおもひ立にも身を忍び
こんにやく桶をこぼす弔ひ
八十七は手をあてる年
外を見ながら這入る乘もの
市迄は桶屋の夫婦身をちゞめ

葉蘆も笹の雫の振心
總領は土藏へ向てものおもひ
直きに妹と見える人代
律義に宿へ歸る節分
船の喧嘩の棒が流るゝ
一つはちすのもめる後添
ぐみがくばつて目鼻ちやまる
むぐらの宿へ夜々の客
山茶花を折て左官はしらぬ振
起々は女の顏が大事也
損もなく遊んで歩行く屋形舟
行水こぼす先を皆飛ぶ
何ぞ鳴らして見たい護摩壇
蟲干に仕舞ひ殘して貸小袖
廣げた所怖しい夜着
柏の蟲の臺所這ふ
短い袖に娘出で乘ね
棒の中行く外科の挑灯
新尼のことばのはしに貸しなくし
鵜舟の掃除子が付て來る

蚤も惠方へ潛る身祝
先づ媒のなびく吉日
風車外山の松の吹あまり
隣へ行も鶴の粧ひ
疱瘡の後に仲人の寄付かず
娘にあてゝ譽る水仙
山伏のなぶられて越す日高川
廣々と物を思へと留守に置
座頭の下駄の知れぬ五月雨
大釜へ投込む薪のうはの空
軒をはなれて杖の商
江戸の起請を見せる島原
小聲にて暇をさはぐ草履取
關取の巾着に行く若旦那
一日をきれいに歩行く藁草履
鹿聞の都へ出ても耳が痩せ
江戸見物の怖さうに寐る
河がつぶれて亭の捨うり
獸禮の中を流るゝ割下水
三味線の次第に憎き年と成

姉の礫の屆く蓬生
音のつめたい夜神樂の錢
くらい心に智惠は貸し損
せきれいの尾のうごく筆癖
子心にさへ嫌ふ半襟
鏡賣日に成て女氣
衣々に木辻の鹿を追廻し
揚屋でつらのにくい伽羅利き
鶯や我罔雨に啼ならひ
舞子の親の橋へ來て居
椀へなみだのかゝる松山
鳴ながら身を振ほどく朝烏
南湖の錢の一兩はなし
むすめに智惠を付る雷
金剛杖でありく闇の夜
ひだるい猿の桃色に成
隣の藏が涼風を蹴る
闇のうち曾我へ片身は屆けり
なぶつた舟の一所へ着く
請られてから産んで見たがる

鎌倉できらひに成し夕間暮
我膝を見て笑ふ病人
乘掛へ伸上る茶はいとま乞ひ
ひやうきんな人の仕當る汐干狩
元結の入らぬ女となりにけり
身をさま〲にひねる霜解
衣紋の顔の矢に付て行
泉水を挑灯で見るいとま乞
手代まで蚊を誑にして内に寐ず
來た先を聞けばあはれな掃物
そとば小町も言懸りなり
撿校の啪の下卑る年忘
橋を限りに歸る抱守
出る戀に內へ來る戀摺違ひ
つひへな顔の多い正月
つまむぼと寐て明るはつ春
氣のつかぬうち通るのり物
鏡研顔に飽れば日がくれる
日本の金のうごく晴天
妾のふりにこまるふり付ケ

なぶりついでに聟の弟
洗粉の身を逆様に摺みがき
夜泣の屋根を見舞ふて寐る
鮎くへとさそひ人もなく鶺鴒
出舟へ見廻住吉の禰宜
枇杷の花千疊敷はねかし物
又降る雪に鮟鱇を吹く
天秤棒に遣ふ手はなし
螢が好きで氣の抜けた壺
所化うき〲と九十臺射る
むらさきに合ふ江戸の根性
下女は男をほめる小つゝみ
握りこぶしは母の奥の手
二親有て夢を忘るゝ
三味線引に山下の埃
飛脚の膳は目の前で盛
呑めと計は主の和らぎ
立のまゝにて違い約そく
庭のたき火も知て居る顔
嗅いで退く人を見限る肴賣

かゝり舟鴎の中に錢の音
紬から上のすくなき奈良の京
峠の家の尾も鰭もなし
首途の草ら履かせてうち詠め
供を呵つて這入る撿校
日蓮記よむ聟は人智惠
船は捨るに乘物の恥
又一度十六七で人見知り
逆おもだかが質の始り
有馬筆顔と言ふ字に顔を出
しやぼんの玉の門を出て行
乞食の壁もあたり狂言
よい中は人形よりも靜也
めつたにはねる五奉行の馬
神鬮(みくじ)にあたる聟は不器量
開干た跡のつまらぬ丙午
雪さへふれば女房ぬからず
冬のすがたへ戻る人の日
彼岸ざくらを後家の喰物
先見た物の歸る引汐

輕業へ殘りすくなく日があたり
九十九兩は繩昇の損
生洲の魚の耳が聞える
我分限の我顔に倦く
身のうちつれて後家の足早
船頭の闇をつかんで蚊遣り草
身請の顔を村の眼ざまし
我内で評判に合肘まくら
匂ふ物皆追詰て菊の花
二度子おろしに逢ふではなし
別籍人の奉公の跡を行
梅咲て手心かろき鉢たゝき
まだ惚た氣で追善の歌
豬のうへに乘て居る母
雛形に最う手の切る枯野原
娘は尾羽のかれぬ顔付
ゑびす講から嫁のしこなし
六人の子のうちに玉川
金の減たもしらで本服
夜はしら／＼と生殘る下戸

小僧の仕落舌をちらりと
眉毛から算へ覺える若狐
投出す財布うそにない音
柔取此度の店も追出され
譽ちぎられた笛で齒がなし
後家若々ときり／＼す飼
煉供養笑ひさうなを跡に立
瀬戸物鄽に餘念なき尼
雨やみを行聟のだいなし
あばら屋のとう／＼松に寄懸り
芝から先はしらぬ生靈
玉の緒のぐる／＼卷に五十兩
曳舟の引かぬ時にも荻の風
三念佛へ引ける錢さし
日陰々々とすひかづら賣
膝抱てうらみの泪あつくなり
伊達を殘して戻る奉公
辨慶ふたり貰ふ五月雨
田は寒く夫婦鳥の口を明
三島のもぐさ夜計うれ

我戀の人の戀まで眼に懸り
最う似た顔の出來る元服
汁粉の使戸も明ぬ家
同じはちすの夜着を踏さく
紙燭の反りの出來合で濟
鴈金の棹の先には鈴鹿山
女房にくれぬ戸板へ夜入道
看病へ突出して遣る忍冬酒
春に似た日も十日ほど八手咲
言せて置けば傾城はなし
くぼく見られてづぶぬれて行
よいをとこ惡い男に逃かくれ
手代へ錠をおろす高聲
反橋を先へ渡て口を利き
三味線発す親のあやまり
母も内證は知て寐る金
質屋の口をとめる束帶
門跡へ向く大舟の尻
生れた事は譽ぬ晴天
二親も脊中へは手の屆きかね

衣着て見る孫のよめ入
朝顔のかき廻さるゝ奈良の町
妻のゐくぼの段々に減
居つたたけの低い口よせ
若衆の髭を辷る雨だれ
二三疊雀目の闇は日が殘り
湯治からひよつと氣のつく内普請
法印の早合點で闇になり
引摺おとす御油の近付
只有體に瞽女の手まくら
住持代りの味に若やぐ
地頭の智惠の出ると夜が明
初午にむす子の供の口が過
翌といふ紺屋の女房美しき
心ほど言かねて居る袖だゝみ
もとの京から通ふ棚經
寺に寐たのも吉原のうち
新しくなる九日の釋迦
堪忍はくらい所へ連れて行
まだ塗箸に逢ぬ正月

聟は大事のうは言をいふ
うつくしい意趣を柱に寄かゝり
機嫌直しの夜着に三人
夜中ふまれて大坂へ着く
胸の火は拵へ物の奉公人
音羽の瀧にぬれる乘もの
三味線を彈く齋日の嫁
日本の伊達に築た耳塚
野郎に成て歸る濱荻
男自慢の壻めぬはつ雪
ほんに泣時地女のこゑ
辷た時に惡心はなし
裸で歩行く海士の貰乳
遣唐使靑海原に口を明き
泣止まぬ子に藏の戶が明く
先も女で恥る借り物
寐せる心で我も手枕
祝日の持料ほどは美しき
來ると鸚鵡の日本物言
精進を落て目出度人に成

戶へとりつくと地震ゆり止
吉原見せて伯母を立せる
衣にたすき蕎麥奇妙なり

主壽昌之篇

初めて靑し十月の猪口
きのふけふ翌は見捨る小松原
寄合て解く牛若の帶
傘を外れて歩行く若殿
ふるへば鹽の落る行平
やはぎは橋のうちで大名
鎌倉の代に喰ぬ鰹ぶし
菅笠の加賀を通れば田うゑ笠
互に笑ふそも〳〵の文
寒い所の多い義經記
沈んではうく質の行末
雨風にかき廻されて十二月
合歡の葉の涼しい夜を撮詰
大名戻りさびしがる襞
子の口をふさいだ窓へ顏二つ
通すと眉の下る關守

家督の祝儀仰向に寐る
鯨のうそを七村がつく
黒小袖どちらへ出ても口が合
餞提て大津を歸る山法師
親孝行の蓑を着て泣く
有し世の一つ殘りし釘隱し
面白い人と言れて草の庵
莚帆の恥を思はず岸を行
駕に乘たは弔のまゝ
友達のひや／＼おもふ聲詞
冬からのうそが溜つて鯛を買ひ
林間の今燒付と又しぐれ
獵師の妻の虹に見とれる
四も五もくはぬ下戶の鬪守
佃の休み貝で髭ぬく
いつの間に喰ふ神子の辨當
せちがらい都で歌をよみ習ひ
尻も結ばず神無月降
書たい事の多い去り狀
都の雪の鮨ほど降る

落すがいやで廻る雪の戶
石の地藏の淸い唇
瞳すわらぬ四辻の顏
親に奢て見せる藪入
戀風も思へば四季に替へて吹き
物縫の譽られはじめ衣がへ
腕づくの女房見に行く交肴
人を呼ぶ鉦に我子を膝へ上げ
泊客言譯過てうたがはれ
題目おどり顏も手も筋
度々壁を拜む門前
醉て戾つた妻を見上る
天下に知れた愚癡な吉原
誠皆うそに消さるゝ落し文
うたれた瀧の末に膏藥
つまぐつて歸る昔のしのび道
酸いもの並ぶ小梅梅若
年明の心にしづむ燈籠の火
拔身を輕く思ふ高繩
草の中にも傘は三本

朝顏が吹と螢は馬鹿に成
もはや男に成果し後家
風呂敷の度々主を取違ひ
膏藥の二重心は穴を明け
干鰯の仕切見ても眼が覺
記念の琴になみだかき交ぜ
五月雨に肴の顏を見忘れる
六疊敷へ無理な藝呼ぶ
蒸藥息を吹のが癖に成り
口のうちで言ふ念佛がほんの事
客夜着に土藏の鍵をのせて出
十月の霞のかゝる本願寺
古い屋敷で棕櫚の葉を買ふ
黑雲かゝる焚出しの飯
ぬれずに戾る傘にうたがひ
看病の一間隔てころもがへ
小判へも鏡の息のあひしらへ
旅だちの跡の座敷へ日が當り
鹽鳥のおよいだ形に堅く成
だまつて瞽女をすゑる明るみ

燕より一月はやきつばめ口
珍らしく見る旅のからかさ
こらへ／＼て鐃鉢に泣
藤の花最う此うへは日も延びず
見附の屏風盃を見ず
蜊鷹木に汐の見合
縮緬も繻子も佛の道しるべ
晝寐の顔へ掃かけて見る
木馬に似たりうどん屋の音
寒念佛鳥屋の門も野邊の數
手の屆くだけはたふして松囃子
わさびおろしに日の殘る留守
挑灯が消ると直に突あたり
脇から見える公事の近道
吉原近く尖かからたち
松風や闇の障子の喰違ひ
格子から禿の髮へあやめ指
碁うちの見出す宵の明星
かつがれて初會へ上る枝紅葉
氣の勝て居る品川の猪牙

伴頭の異見に下る春の空
淨るりで殺した聲を鉢扣き
桑の杖おもへば遠きはかりごと
水かゞみ見る舟の退屈
燒鹽を削る女房の膝せまき
地紙賣我物好も言うて見る
蚊屋越にゆり起されて早合點
他人の目からしれる一生
逗留の二晩めから能く寐入
抱つくまでが戀の道行
大工の智惠を寐ころんで見る
猪牙のふとんを撫る椎の實
眞顏に成て武士の付ざし
さくらを浴る馬の横面
大根馬ふしよう／＼に引廻はし
氣の輕い母は見て居る水浴せ
淋しさは炬燵やぐらのゆるく成
まがらぬ心瞽女の手を引
母は箸にも楊枝にも栗
沈んで乳を隱す居風呂

鳥屋の見世のくらい年越
畑の鶴をみせに遣る雪
須磨の浦雛も柄杓に汲込れ
明星がくるりとふれて淀へ着く
恥かしの火燵の出來る煤拂
半夏生隣も合ぬ井戸の蓋
むかしの通り念佛で起
四つ谷の埃に伊達染が行
負た子の目ばたきをする葭簀編み
生男も琴柱に落る中の町
髮かたち笠もかたちの内に入
鬼と言るゝ後家の革足袋
富士の夢見てまめに成る母
女ごゝろに見たい龍宮
かんこ鳥啼く庵に鳶口
ひとりで飯のにえるかみなり
二百十日にあぢなよめ入
石の井筒を母の念願
手品きれいに紙燭よる妻
袂で錢を遣ふ墨ぞめ

錦木を内から立て緣遠き
松明を結ふ村の葬禮
俤の夜の障子やたばこ塵
小つゞみに戀を仕まける大つゞみ
糊立のせぬ衞士の顔付
清書は障子に殘りたゝき鉦
五箇村すくふ主の有る池
降ぬ日の勅使を磬る角田川
人礫うつ浪人の夢
立聞にやり手は鍵を握り詰
大僧正も材木を問
棹ぬく跡にきり／＼とうづ
なみだぬぐうて袖の片ゆき
懸乞歸る向うから春
子の扱ひの下手な連歌師
五條の橋で安い主従
久しい先の奉加帳出る
水仙の舟は入日を漕流し
田の中を蝶々も飛文も飛
名もしらで何がうれしき生肴

横平に念者の手紙むつまじき
始からはづす合點のとしわすれ
篠をつく降に戸板の年が知れ
梅に向て歯を鳴らす妻
詫言に若衆の母も手を合せ
娘が逃て髪結はぬはゝ
二羽鳴鴈も極月の聲
與力町一人か二人よいをとこ
くらい所で笑ふあやつり
一逃にげて口を吸せる
袖の梅きかぬは妻の心也
泣子の口へしたむさかづき
淺い新地に朽るがつそう
行合せねばしれぬ達磨忌
山歸來かならず城の落る時
たからの市で聟は倒れる
草履とりまで息杖の息
明地が出來て新らしい棒
合點の上で遠い寐所
宇治にちらばふ殿の紋所

夜更て人を遣ふいんぎん
そば切は投込ほどが馳走也
たゝらの中へ薬鍋かけ
相人が瞽女で恥をかゝせる
小野が曇てほとゝぎす降
下戸の鼻にはうまい木犀
二代とは續ぬ下戸の藏を買ひ
めくらむす子の乳を長く呑み
仙臺へ歯の立ぬ稲蟲
氣の強い女の落るあまの川
飼ねずみ來るよし町の屋根
むつくり起た醫者の横平
名代の狐白い飯喰ふ
向うの顔をふさぐ盧刈
葉ほど世間をしらぬ茶の花
夜はほの／＼と通り者散る
染風呂敷の美しい供
かぼちやを抱て下るさし茅
無念なりけり山伏の餅
是切の布子着て買ふはつ鰹

嗇を大事に遣ふ十月

四季混雜　紀逸述

法樂

裏なきは神のこゝろぞ夏衣

鶯の聲かけて割る氷かな

我が年をかぞへて寒し冬籠

名月や茗荷の鶴も生のこり

あくる日に家の床しき礒哉

しばし旅だつとて

樹に寐るとおもへばやすし渡鳥

二夜啼一夜はさむしきり／＼す

菜の花や庵のうちに曾我の母

はつ雪や牡丹のごとく手の如く

重九

朝顔に着せる物なし菊の花

稲づまや椽まで來ては歸る波

顔みせや狐もひとつ人の中

初鴉や結んで投る雲の袖

夏行て彎たる所皆寒し

擲買の二十日めに來る牡丹哉

降そうな三十日をふらで時雨かな

袴着やうしろにおやま二郎三郎

鼠追ふ夫婦の聲も夜寒哉

木がらしや眼につけて吹柳原

あたゝかに猫を寐せるや寒牡丹

上巳

醉ぬとは言れぬ雛のあぐらかな

鹿の戀猶焚つけるもみぢ哉

神明法樂

正直の種を植るや杉の苗

初午に狐を乘せる遊びかな

根を付て提ればいやし菊の花

海老網の引明さむきもみぢ哉

五月雨や焚ぬ煙の小松ばら

からたちも手の出し安き若菜哉

二日から月も匂ふや梅のはな

ゆかしさよ嫁菜摘へる暖簾下

むら雀躍らば着せん梅の笠

餞別

大空に無事と書字や春の鳳

雲雪は跡での事よ花ざかり

眼をなやめる比上野にて

眼に白き物のくすりや山ざくら

麥飯にとろゝと啼やきじの聲

更衣

袖笠のかへりもかろし衣がへ

しら鷺の眼にはあぶなし郭公

夕ぐれやさくらに沈む入の聲

はるかにてらせ山のはの月

時花(はやり)眼の闇のあかりや佛生會

錢の事わるく言れぬぼたんかな

さわらびや煙をつかむ雨の中

鵜遣ひの闇見て居る月夜哉

紫に身を投出すや萩の露

宵の雨拔るほどゝは雲見草

松蟲の松もどきにも茄子かな

五歳に成愛子を失へる人に

五の字にも油斷はならず五月雨

ぼた／＼と桃の花さく垣根哉

笛吹て啞も遊ぶや花すゝき
魂や鐘に勝つ夜のきり〳〵す
はゝきゞや入日の中のいかのぼり
八朔や機嫌の直る風の神
利口には波のしいれる千鳥哉
　再會
同じ根は寄り添やすし雪の竹
　留別
まあとあるをしほに戻るや川千鳥
大黒の身をうき草やゑびす講
雛の前かしこまりたる雨夜哉
町中に醫者の櫻の咲にけり
　他國の人をいたみて
聞てから寐られぬ夜半や寒念佛
初雪やつまむで付る垣のはな
屋根板を蕊のくはへる野分哉
づぶぬれて芙蓉を出る兎かな
　五月十三日首途
簑と笠竹植る日の旅出かな
　上野にて
しのばすはことしも花の鏡かな
　鉢の木の讃
あたりながら梅に梅田の工夫哉
　烟の中に女の顯れし畫讃
炭はねて言殘したるうらみかな
吸ふてだに鶴の千とせや菊の露
聟に成人うつくしき師走哉
飛ぶ中にありく螢やみをつくし
　再會
二度めには戸の明てある水鷄哉
　あはれなる物
子を抱て鷄の丸寐や霜の聲
　丹五
立並び小褄のかへる幟かな
　看病
火の下に生姜の匂ふ霜夜哉
鳥黒し硯洗ひの橋ばしら
朝顔を朝飯にする胡蝶かな
　七十賀
その上に三十足さん百千鳥
名月やうき世の隅に念佛講
　悼壯士
白爪に思ひがけなき手綱かな
名月やそれ程もなき雲の帶
よい陰へ放しうなぎや蓮の花
鉢たゝき同じ所の夜明哉
　出山の像を拜して
吹度に佛の肉の落葉哉
　別莊にて
かんこ鳥見る氣はないか上屋敷
薮入のうき世に飽た顏もなし
　起出て又何事をいとなまむ
起々の筆にちからや大根引
玉霰鼠の嫁を呼ぶ夜かな
山茶花や障子のうちに尼の聲
鳥さしの振かへりたるやなぎかな
椀久が蒔て花さく菜種かな
年と日のかへりむす子や太郎月
田作りの鱠は寒し梅の花
萬歳や今はむかしの縣召

神農

一日の口に涂るを蚊やりかな

はつ霜や湯屋よりあまる水煙

凪はなやねぶかに落て入性根

秋までは我を張通すかゝし哉

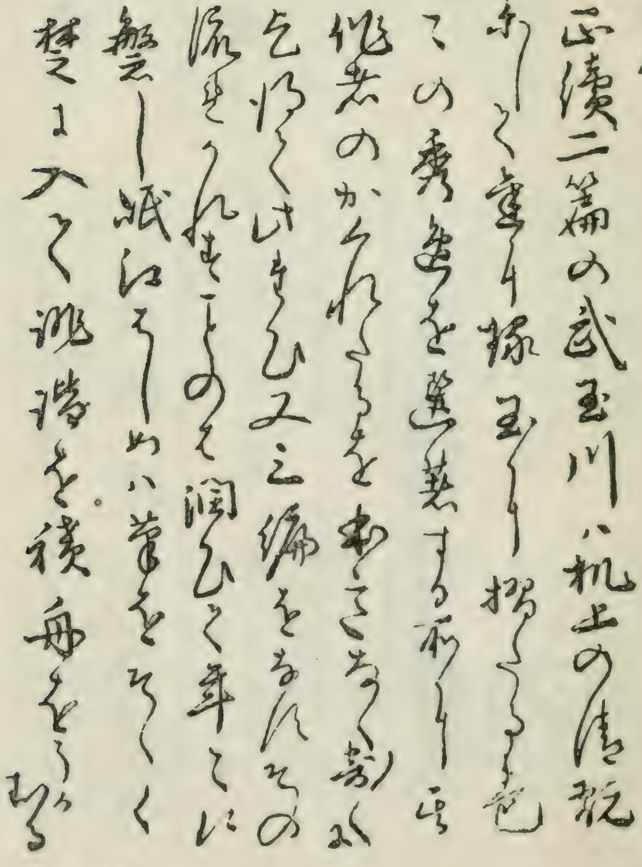
述懐

鬼灯や人は口から年が寄り

俳諧武玉川二編 終

三編序

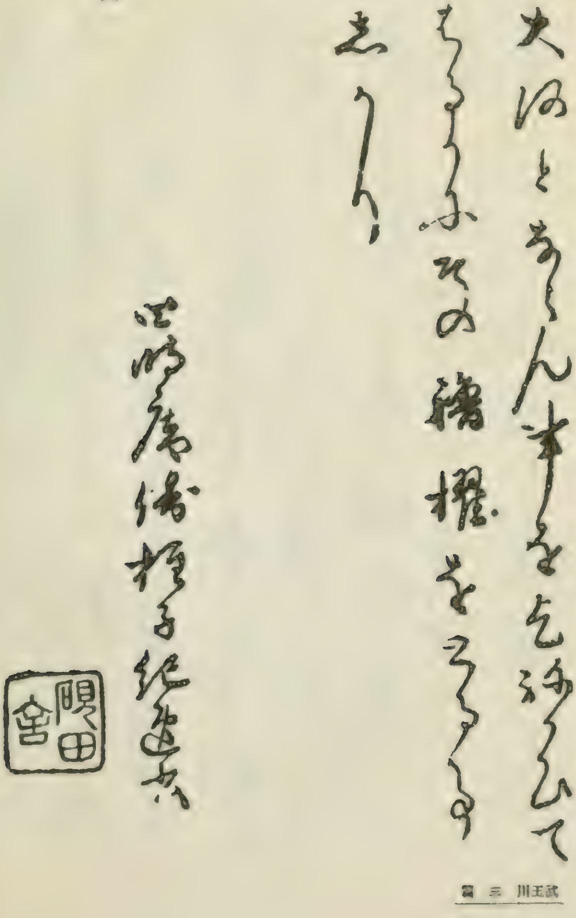
正續二篇の武玉川は、机上の清翫にして、金に琢玉に摺たる巻々の秀逸を撰著する所に、其作者のかくれたるを本意なく、寄々に乞得て、此たび又三編をなす、その流れかれず、ことのは潤ひて年々に繁し、



岷江はじめは筆をそゝぐ、楚に入て誹諧を積船をうかむる大河とならん事を乞ねがひて、はるかにその艪櫂をとる事しかり、

四時庵

倚柱子紀逸書



俳諧武玉川三編

冬嶺之部

牡丹を入れてかしこまる駕籠
浮沓を馬鹿にして居る都鳥
女の智恵の青い庚申
鼓打女の肘は乳へ付け
夫の盆へ殘すさかづき
さられた足で早乙女に出る
おもひ出したる井戸掘の聲
耳も齒も浮世はなれて知恩院
直切た鐘の恥しい聲
役の行者の行當る市
遠くから樂しみにする立すがた
よしのゝ山をかじる小座頭
鳶を見て居る桶伏の穴
寺の名の立つ夜の大名
みんな寐た夢の上行く面白さ
新地の障子桒の上で張る

柱ごよみ寐て見る程に春近き
胴につかれて歸る舟宿
古河の番所の管籠なる
雪隱を借りた所でほとゝぎす
帆かけ船何もない日の取ざかな
夜は鼠のかゝる天秤
惚ぐすり客いながらも都にて
京の異見の屆くはつ春
貢つばな水を二日の假枕
新造の二人前付く奉加帳
間合を見ては笑ふ連彈
雲の峰碇の綱に湯氣が立
尻もちはきのふと見ゑる大根引
手代を付て初の勘當
むつ言に問ひかけて見る爪の星
砂に育てゝ貰ふ大磯
吹るゝだけは螺貝へ錢
我ものと思へば遠き三世相
出家にしても末の松山
傘を廻して通る念佛

物おもひ奕咲日を見抜きけり
大三十日いらぬ所に灯がとぼる
掌へ貰ふたやうに星が飛
汐汲の男をなぶる肩の上
いき過る比丘尼の顏に腹が立
青物の中に玉子の突出され
死そこなうて辭世仕直す
藤の使は立て請取る
あかつきかけて寒い廻狀
ころぶ子の稻妻は目へ這入る也
鹽がまに赤い天窓の姉いもと
長刀の師匠と聞て寄付ず
物音へ心々に名を付けて
雪掻のはじめは片手懷手
師走にあはぬ御師の顏付
剃刀に羽子の程の息を懸け
さればこそ樣子有べき普門品
樽拾ひあやふい戀の邪魔をする
約束の紀念も後家のもみかへし
遠くから娘の逃る焚火陰

引舟に連立て行烏打
馴染が付とかはる取親
眼の下の物を見くびる崖作り
飛鳥の先にたゝんと木葉ちる
取あげ婆々をもどす引汐
雨袖に秋風つゝむ寺小姓
小荷駄の首の正直に行く
見送て行く蟬の小便
御幸の牛の物喰ひもよし
いく度だまして畳むちりめん
田溢汲たらひは妻のきぬさらさ
巻紙の二重心は跡へまき
猿の戻りのみゆる高橋
石切の火が飛んでから猶寒し
正平紋に作る大兵
もしほ焼伊達はなけれど瓦がま
臍へりきみの廻る堪忍
庄屋の庭にほらの貝ふく
足軽の鞘鳴りがして雷り
氣のもめる時はつき出す置炬燵

百萬遍にゆれる蓬生
燈籠に手間を入れてもあぢきなし
朝夕の間も大工の遅ざくら
母の心へひとつ合鍵
臍の緒は松坂に有り若だんな
氣違を淋しく通す京の町
櫻川西瓜の皮も流れけり
うき秋を焚て紛るゝ八王寺
女が勝て捨たる光陰
内侍といへば聞惚がする
箱代の雨の舍りも手向草
帶した妾明るみへ出る
ゆるさぬ路次の夏に破られ
もたれた壁のはゆ〳〵立聞
根津のやき物今にすめかね
背中で蠅の遊ぶ腰ぬけ
旅を哀にしたる順禮
聞出して無理に買せる惚ぐすり
碁佐を取殘す大原
百度參の跡を掃出す

郭公思ひ〳〵に漕出させ
初午の裏はかけ菜に氣が腐り
娘が逃て追人なくなる
過去帳に惜しい男をとめて遣る
落馬を恥に立ぬ意地張
追人の腰の抜るはし詰
六ッと六ッとが鐘のおもいれ
蚊ばしらの顔へ崩れる半太夫
とし忘夫婦で仕舞ふ八重むぐら
牛盜人の棒で仕かける
淺草に舅が出來て歩行かね
鍔の鳴る刀の賣れる八王寺
命あるものを殘して汐干がた
苦いきせるをはふる鹿聞
鶯が能ければ籠に慾が出來
まだ捨切らぬ神へ言傳
鵜遣ひの流につれて身のひねり
鰒といふ奴が出てより面白き
幡に隠るゝ衣屋の嫁
篠懸を追ふぼんぼちの蝨

物思ひ他の盥へ寄つかず
面打の振向方にかゝみ立
娘の意地を立る負公事
氣のながい遣手へ猫の行當り
能なし猿を居ゑる攝待
假名を書せてなぶる金剛
かき立る手も眞靑に石燈籠
たいこが顔にすり付る伽羅
本陣のはるか奥より針の錢
うまい息子のあそぶ朔日
天の川淋しい噺に若旦那
抱付て明るく成りし戀の闇
術攻の揃はぬ内が誠なり
引出しの走り過たる噂言ひ
いつ見た儘かけいせいの夢
うき世繪書へ隣から膳
めぐるいんぐわのはやい錢箱
妾の親の見俺く人參
開帳に下る佛を小笹ばら
經の罪は捨て顯れ

泣く子をば乳母に預けて立姿
だうらくで痒い所へ手が屆き
うき秋をたき付て行く黑木うり
鰯ある日の空に知らるゝ
聲を立るといふが奥の手
蓬生に左まへなる風の神
晝顔も溜息をつく小名木澤
雙六に片手のきかぬ五月雨
生ながら何にあはれて常念佛
燈籠の火を細々と梅寒し
靑いもの着るかるい疱瘡
新造のわづかな顔をかけながし
强飯の譯も知らずに目出度日
かい敷の笹に手を引く稻びかり
入智慧に口の揃はぬ戀衣
念者に似合ふ大つゝみ打
文盲な鴛は寐て行くかゝみ山
須磨とあかしは癪な知行所
野守の鷹の水底を飛ぶ
晦日ほど人の心にあかれけり

行脚の夢の顔へふろしき
口留をして出す庵の小さかづき
夕顔咲て汁が喰れる
身の代もつて這入る蓬生
寺にさへふしよう／＼な午まつり
明後日とかるく請合ふ水淺黃
赤蛙國主の腹へ這入けり
大黑の吝い所をゑびす講
寄つてかゝつて怖む六波羅
座頭の口で止る貰居ゑ
能い顔をさがしに出たる朝がすみ
死で願ひの叶ふ書置
及(ざう)の笑ひのうまければ降
帶といふものは日本の後ろつき
色々に襀(よぎ)を着て見る翌る晩
物干へ鳶の蹴落す蟬の聲
分別ざかり北面の武士
下戸の差出を責る盃
紅紙燭夫から先は御意次第
涅槃像あらゆる泪こぼしけり

踊子の名と同じ若黨
葬に狐を馬の草履とり
一盛り二人の親を淋しがり
蘇生の隱居人に見らるゝ
枕の數を持たぬ獨り寐
そといふ文字を嬉しがる婆々
喰摘にことしの物はなかりけり
水に寄るわが黑髮も二つ折
瀧の調子の狂ふ荒行
酒にする氣でぬるい雫
言たてに一つもならぬ戀の闇
漸々と臍の緒落る雛の主
奇麗な京に高い小便
退た狐の急に衰える
礫のやうな法の返答
小姓の袴で水門を出る
暖な咄して行く鉢たゝき
薗分舟のいたいめをする
嵐の巻て通る小むしろ
佛より先に言るゝ毘首羯磨

かばやきの煙の中に善の綱
三味せんは乞食の膝へ作り付け
角力取能人参に助られ
きしむ戸を踏放されて雲の峰
殘らず紅絹のわたる看病
破軍の下を歩行く傾城
三條へ出て元の氣違ひ
勘當された一周忌來る
合口の友に成るなら御納戸茶
棒を習つて憎い口聞く
翌京と言ふ近江路の心持
茅の輪を拔ける不拍子な顏
髮際に無理の殘る墨染
おもい錆付くお物師の針
むかしの事を思ひ切る親
去年のけふ逢ふたまゝなる紋所
初嵐廣い通りを横に行
三十に成ると女の世がすたる
また針指の出來る團れ
兩方の目のいそがしき中の町

誓文を立る若衆の聲高く
遊行の札をさがす綻び
かまらの煙白能へ行く
木馬の側にかゞみ見て居る
土器師ともに鶏を養て居
にはたづみ夜も鳴鳥の水かゞみ
百日法華また杖をつく
寒聲の仲間はづれは物おもひ
太鼓へあたり曠な散錢
灌佛の湯氣に隱れて一二町
だかれて來たる鷄の身振ひ
大屋も知らず玉のこし來る
御物語に低い手まくら
凧に向て奴の反かえり
梓にかゝる若衆さびしき
うき時の丁子頭に唱へ事
風巾を貰ひに吉はらの屋根
藥いおりのうゑる桑の木
結納にあたりのわるい若手代
寐入られぬ心につかふ有つたけ

枕がや見て吹かぬ山ぶし
洗つた馬のかはく松かせ
小僧が智恵は飛ながら出る
何所やら匂ふ新御所の雨
關守に時宜をして行く傀儡師
明暮に絲ゆふを汲む油うり
家守の耳を鳴つぶす蟬
物ぐるひ關の清水に聞惚て
幗を振つて枕見出され
本阿彌に星をさゝれて跡しさり
乞食寐て居る賣居ゑの門
焚火に鹽の落る腰簑
雨乞に力を添へる尾長鳥
こせ〱と何ぞ言たい念者の氣
二日つゞいて買かつぐ夢
通れと聲の尖る關もり
小さい手からうまい小つゞみ
はらを立とき黒髮は殖えて見え
孕器用も尻知らずなり
夜はほの〲と古市の文

雨の祈の光る山ぶし
大造に可愛がられて長恨歌
呼屋の婆々のうか〱と老
先達の棒を集めて宿を取
どつかりと寄る浪人のとし
道具廓ほど頃日の髮かたち
寡のおもひ念佛で消す
らうそくに力くらべの緋縮緬
焙烙賣のだます村雨
病人が看病人を連れて逃げ
石の樣なる名ぬし派が利く
借筆に言譯くらき戀の山
子寶に喰立られて歌まくら
烏の子一雨づゝに羽の光り
暮六つまへに大またな武士
乳母乗て動かぬ池の捨小ぶね
七曜へ吐く船頭の息
針箱へ額が付とかんこ鳥
常念佛聲が替れば近くなり
隱す事なくて女房の老にけり

物悦びのよごれもの着ず
妾の尼の言しらけ也
灸のすゑ人を持たぬ墨染
吉はらの恥もおもへば一周忌
繩代に夕べころんだ下駄が浮
幾度か開く何がしの寺
上戸のぶんは殘る子の刻
絲細工人の氣を置く當麻寺
春の野や飯粒をふむ山かづら
戀風の橫からあたる涼ぶね
座頭の噺飛々に行
清瀧迄はかつぐ挑灯
湯どうふの有ゆゑ人の二日酔
子には噺のあはぬふりつけ
鳴聲は荏の宿のふとり牛
鉢たゝきたゝき仕舞へば鉦の音
曲だいこ若い姿のかげぼふし
目の覺た縞を着て居る名代乳母
呑たい折に見えぬ丸藥
子にふろしきをかける日蝕

つげ口は烏に成つても惜がられ
うれしさの袖も涙の大あぐら
みのわの言葉問ふに及ばず
隣の反吐にあはす鶏
涙の雨は殿をかろしめ
旦那寺春の道具に遣はれて
筆の師へちら／＼と御扶持方
若衆の肘の袖笠に出る
一本松のぬれてとし寄
紙雛の物にかまはぬ立すがた
片折戸立ても内は生ざかな
目がねでも今は暦に歯が立ず
三輪の山夜の女にふりかへり
側で口舌も知らぬ夢助
くろもじに足輕の手も香ばしき
色には出さぬ京の貧乏
十日ほど覗かぬ様にたうがらし
浪人の門田を植るやりばなし
京を相手にきつい事いふ
緋の衣眠たい朝の仕事也

谷七郷の魚ひかる也
暇な日は系圖見て居るゑばし折
未來の種も捨ものゝうち
呼子どり青い顔から先へ出る
悟り盡して元の羽二重
可愛がらるゝ種の三味せん
取揚婆々のをどる乗もの
異見せぬ遊びははやく倦が付
疊の上の蝶はふり袖
家督あぶなく器用過たり
稀に吉田の二階から顔
棧留を着るもさかりの草履取
山伏の火の草へ來て消え
美しい氣を捨る三十
よく似た顔に遠いさゝやき
光陰の中にも八日十二日
貴な顔の見える九重
鼓も下手に狸老けり
此日ざかりに晝がほの淡(あは)
茶碗ではあたりの濡る硯ばこ

夢に見るつもりで書も文まくら
灯に向ふ女の顔へ夏の蟲
涙をかつぐ供の乘もの
人形遣ひの惚どころなき
貰ふたを扇で分るかきつばた
はだかな人によける清水
春の夜を少し買ばや寶ぶね
順禮の棒をひくのも氣の縛じ
腹立つて着る裄が揃はず
まだ寐ぬ伏見つゞく賣物
世のまことと忽くろむ善の網
銀閣寺計見殘す出養生
松風ともに質に取る山
遠くへ知惠を廻す餞別
仲人を二階の上ではつて居る
中間一人たよりない戀
振袖に稻妻よけてやり過し
瘭疽を病んで起請こはがる
打れる瀧をにらむ剛力
仲人が來れば娘は針を取

寶引繩の表奉公
大門で車一輛しかられる
旅衣工夫を賴む同い年
有たけの姿を作る願ほどき
氣の付ぬ林の煙をむら時雨
稻妻這入窓に念佛
一つ穴からわび言が出る
よそ目から案じて貰ふ懸り舟
鰐口の總名代にお乳の人
鳴子引よその寶を守りつめ
雨まで譽て戻る仲人
顏上げて空を伺ふ出かし口
酢があれば生で喰れる春の海
子供が持て遊ぶ錦木
なまりぶし若葉の中に哀也
近付の名のかはる濱荻
仲人の器量が能て片だより
鰹の恥の多い日暮里
袖留てからよく夢を見る
辛味大根をくばる小原女

鍋ぶたで蚊やり押へる八重葎
住吉は草へはね出す膳の露
娘の唄の箏築に合ふ
先徒士の通りに曲る潦(にはたずみ)
晝寐して居ても床しき葭簾
あはう遣ひに代々の森
前うしろ陽炎もゆる四十七
執行者(しゆぎやうしや)に薪の行衞打拔れ
賣喰の裏に淋しき捨德利
去られた妻の去り跡へ行
慈悲有る母をうらむうば玉
丸山で琴三味せんに合はぬ唄
大きく這入る晝の忍び路
薄紅葉人形を塗る九老僧
あぶない義理の出來る男色
一人づゝ鏡借り合ふ松が岡
盃に追廻さるゝ大をとこ
日蓮の世も僅十月
汗かきの命めでたき今朝の秋
一夜鮓宮と桑名の人ごゝろ

忍べば內も盜人の分
大宮人も蚤を取る顏
蓬生へ左り前なる風の神
取りさへて肌入るのを見て歸る
市の有る日は遠い入相
豐のあかりに拜人が來る
水入れて鉄も朝顏も遣ひ物
こゝとの口で燈明を消す
二度迄はたてかけて見る銅盥
生玉子いで吞といふ時の事
經師屋の刷毛は塗師屋の影を行
一重ほどおとつたやうにならの京
植かへの內は早苗の男業
辨に足跡の有物がたり
女が滅らす八瀨の松風
夕すゞみつまる所は丸はだか
惚てから遙後也戀の闇
鉋ばかりが仕舞はれる音
役者の貌にしぐれ見送る
うき別れ臂に疊の筋を引

只縫ふて居て額にて見る
傘かりて繪馬の郭巨の長咄
放し鳥行く默禮の間
事ぶれの鼻かむ袖を鈴の音
四季ともに松蟲のある長局
子の生い立もさくい吉原
軒から棒の下る夜あらし
寒念佛呼込内も鉦の音
此やうな顔してといふ顔は似ず
奥へ召すのが武士のおとろへ
草履へ飛んで下る棚經
解けば妾の氣に障るなぞ
局の部屋へ狐なくなる
房までもむやつく室の長枕
あきらめて居る口へ人參
追詰て見てまだ後家でなし
棒突は欠びの顔を水かゝみ
三味せんの隣をうらむ山ざくら
はたけば匂ふ宇治のさむしろ
心程行かれぬ年の茶碗うり

見立違て夜を長く寐る
蚊がたかる取あげ婆々の足のうら
舟引の筋違ふ形に雨が降
母は牛に戻る輕業
葬のさきて結れるみだれ髪
一口の湯も養生のはしとなり
世捨人むかしの氣にて夏を待
蘭の香に出入心もうつくしき
掃出せば廻つて這入蝸牛
むかしのさらぬ人形の顔
池上參り珠數のふり合
ゆさばりに小僧を乘せて誤らせ
人みせにせぬ孝行は人が知る

望樓之部

可愛がられて今に浪人
犬追ふ物も仕立屋が付く
連の出る内雛を抱く
むかしの幟の餘る隱れ家
いつの間に刀をさして夷講
待わびのむしられ物に櫻草

波風の相應に立男ぶり
見事に濡れて母へ傘
向うの軒の近い正月
屋根板の飛ぶ冬の白川
若葉に成て御簾隠るゝ
見もせぬ文でげぢ／＼を追ふ
人知れずこそ面白い科
俗で拍子のぬける柴の戸
たゝかれる人も扇も其日切
わかめの波へ投ふる松明
あぶなく乘て通る馬醫者
松風に氣の付かぬ剛力
殖ずに仕廻ふ母上の金
聞よりはやく母は咒
荻の上からやせる蚊の聲
百夜を越して傘が干る
椽へならべる螢見の膳
けふからは帶の短い菊の花
江戸のぬかりは夜のあみ笠
山伏の一軒置に低く吹

鼬に棒を投る大門
手を引た女別れるにはたづみ
西日の町に捨てゝ有る八
よし原で翌の佛の凄く成
鷄のなみだのかゝる俎板
仲人が來て笑ふ神主
戀にひかれて若いかんきん
奈良に三日は一生の損
傾城の住ふ所に夜はなし
旅でも茶屋は生た物いひ
純子は繻子の若い兄分
鼠の瘦せに這入る新藏
大晦日もうばはうきもの
志賀のむかしを近く言なす
今度も女伯母ひとり碁
平詧（ひらさかゆひ）のうごくうたゝ寐
河風を串にさゝばや御祓川
懐の子をゆり起す願解き
樹の上で追人の者の小言聞
警固の杖の黄ばむ六月

强力を先へ押出す丸木ばし
古鄉は木綿の强い計也
櫻草にて過る中陰
馬を呵るに馬士の一聲
關守の手を洗ふ黑髮
傘提るひより見の伊達
空也寺へうたんのなる垣を結
糠屋へ來るは聟の本望
女に垣のゆるい九重
金剛杖を倒す松風
干鮭の目もこがらしの道
哀は上へ知れぬよし原
尼に成つても乳の張る寺
問屋の向ひ鸚鵡つたなし
六十四州眠る元日
鳥井が立つて夜明新らし
家内が立つて見たる鮟鱇
陽炎の中に乞食の物狂ひ
盛上られて動くこんにやく
雷の落つく後家をあてこすり

むかし咄に庵の戸が明く
此ごろの銭座つぶれて松の風
色に出て其行末は靑あらし
死んだ女郎を譽る初雪
都鳥若衆の舟は濟おくれ
六月の日なたにぬかる長まくら
醉ぬ鰹を草の戸の嘯
本卦がえりも同じ魂
かたみの髮の見る度に滅
鹿を夢見て奈良に落着
新地に道の殖る優婆塞
栗の花はうけて簑も草の香
京には肌をぬいだ佛閣
萬歲馴し婆々の挨拶
開帳の江戸に着日は初松魚
役の行者の松明に醉ふ
かまくらで寄る勘當の年
けいせい買の内のなりふり
雙六の賭に夫の顏を見る
黑燒でした戀も生死

鉋屑ふく若い入相
柄杓のそこをさらす蓬生
いひ譯済むと元の大聲
腹たつ顔の坤(ひつじさる)見る
さゞ波や古あみ笠の流れ行
四十八夜は後家の光陰
膳から灯す今の萬燈
木挽の臍の燃る晝がほ
高尾が願ひ道哲を見る
黄檗は障つても鳴る物計
ひそ〳〵そゝる伶人の顔
大工の智恵の凄い唐門
賃仕業たまる所に草の露
犬追ふ物に急な元服
日數經た肴を擧るはまちどり
今戸の旭煙から出る
倦はしの手斧はじめは面白き
烏甲着た人の百づら
分別もない夏のふところ
箱御祓に少し物香

宵に寐た所の違ふうき寐鳥
紗綾ちりめんの中に盃
おつかなそうに踏ならす胞衣
へうたんを扇に乘せて世を觀じ
妙やくは母の覺えて初がつを
ひじり窗をば振ぬ錫杖
高野ひじりを留る大聲
世に出る乞食瀧にうたれる
横日淋しく後家の縫物
琴のうしろをふせぐ母親
露の身の浮世へ出ると雨が降
三代先を婆々の大口
草分の思案のもどる祭り前
あぶない茶屋へ蓮の實が飛ぶ
百稲荷すむ小野の古道
連添ふた元の起は書はじめ
中間の綻を縫ふ衣がへ
雙六も灯の來る内の假まくら
眞木も家老も御國から着く
思案極て辻駕を呼ぶ

四手に怕いものはふり袖
付木遣ひのあらい勘當
ふいご祭りに消へる鍛冶の火
琵琶の閑人を持たぬ四阿
ひづんだ家を擧る楽しま
恥しめられて寐入るものゝけ
剃る氣で打か夜半の柴の戸
赤穂へ送る狂歌案じる
床へ坐つて直す寐みだれ
勘當させた人も勘當
楊弓射るも爪はづれもの
夜の雀をたゝく借り金
禁酒々々も氣の知れた人
むすんだ形(なり)ですたる水引
やつこと言ふもむかし吉原
高野聖にうそのない年
面白くせんべいを喰ふゑぼし折
うつくしい後家を怖がる節句前
戸の締る音に崩るゝ辻ずまふ
つゝみかね小間物賣をはつせ山

八重むぐら日ぬすまれて廣く成
取巻て開く聟の白狀
帆かけ舟半分はまだ夜が明ず
つゝまれて浮人形のうき沈み
晝つる蚊屋に出來た岩倉
四十二の子の美しい袈裟
藪蚊追出す夕がほのやど
灯を掻立に這入る六月
よく似た顏をふところへ入
一つ咄の屆く難波津
弟出來て讓る朔日
隅田のかすみを親子して漕ぐ
順見迯る跡の大聲
川柳流れしだいに戸を洗ふ
脈のうしろを仰ぐお局
近く行姿はもたぬ帆かけ舟
赤子拾うて邪魔な物知り
あみ笠は今の世にての隱れ笠
犬追ふ物にもたぬ近づき

夫婦おろかに同じ事泣
宇津の谷は喰れぬ物に錢の音
愛染はゑくぼを守る形でなし
年季が明くと重い着物
土産にならぬけふの託宣
鬼門に當る枝の我まゝ
柴の戸をあなづる鶴の下り所
土藏を建てゝ家の息繼
精進にうそもつかれず暮遲き
ふるい日の心がゝりは合歡(ねむ)の花
母は命をほめる凱陣
夏山の汁の枝折はたうがらし
珠數きるあしたさんごじゆを買
味噌汁に御意の下たる若たばこ
薺のつらをふんで行く春
箏に一夏もめる神宮寺
捨舟に木食一人雲の峰
起請の灰もさゆのいきほひ
暑き日を追廻したる夕河原
こらへ兼てか清水へ行

男ひでりの中に長刀
鷄買うて夜も見に行
剃刀の刄へひける光陰
尾花がもとへ通ふ仲人
降る雪の明り程なるたうがらし
秤に輕き水の本望
口留をする精進も有り
まだ夜は縞を羽折て桑門(よすてびと)
狐にほれる若草の中
寐かして置ていなのさゝ原
鼾引(いびき)大きな慾はなかりけり

不騫不崩之部

初て雨にぬれるつり鐘
麻上下の世話も寒だけ
側のもの見る手枕の夢
七小町氣樂な時もなかりけり
並んで飛べば憎い人魂
帆をかけて來る京の分別
喰ふ雪の降る蒸籠の上
座當つくねて仕舞ふ横雲

細工が出來て唇を嚙む
牛馬に喰立らるゝ八庄司
兜巾押へて舟へ飛込む
一晩は扇のしめる音頭とり
高座へ立た女見たがる
よい事はさせぬ西日のひがし山
文が届いてかはる夕ぐれ
男に持つて見れば皆夢
夜食の喰人殖る宵鳴
役の行者の立て居て喰ふ
つれない心羽二重に倦
内から帶の締るかんにん
愛宕から見る祝言の家
ぢろりと見ては通る桶伏
宵の氣で胞衣を埋れば山かづら
腹立ふりを戀のはたらき
浪人の心に着せる蓑と笠
娘のほどく生鯛の絲
迎揃て下戸のぬき足
口のはしこい方が村雨

雨が止んでもくらい中宿
翌日は氣のぬけて居るぬくめ鳥
律儀に持つてくらい松明
下女の奢も荒神の荒れ
三つに成と枕はかなし
眞じ目に成るが人の衰へ
跡から消える後家の分別
見合て向うの家も毒に成
文を逆さにふるふ爪綱
氣違も春のものとは也にけり
子の聲も鼻にかゝつて紀三井寺
思ひがけなく比丘尼有る町
稲妻の大きく這入る金閣寺
高い物買ふ嫁の相談
二代目からは常の人間
根にも要はたつた一所
若後家の二言迄は聞ぬふり
鳥居からはだしに成つて願解
あぶなく見ゆる名人の年
江戸の言葉で貸座敷出る

無佛世界の行先に寐る
乞食生るゝ松風の中
新地の夢の覺る引汐
旦那に成つて見たる晴天

俳諧武玉川三編 終

序辞

和歌小題あるを畢(?)てさり貝(?)な和也
あしらひ(?)風姿(?)伝(?)数ある書様に充(?)
年に行より誹諧にを奥(?)をなし(?)る
集撰(?)編(?)あり爰(?)にて集(?)て日く撰
奥の句々を撰(?)録(?)して武玉川と
号し既にはや(?)四編に及ぶ物(?)共(?)
盈(?)錦(?)に篠(?)ふと此(?)にはいまに(?)
月の[illegible]星はいまいかな(?)月まって(?)

雅なくとも此満ちゆかされは古き我
輪にして新しきは儚る紺紀者の
香しくもしる為になるもとなく

硯田紀逸撰

蘂堂長亭書

俳諧武玉川四編序辭

和歌に題歌を擧て、とり用る所をしらしめ、風姿を敎る書、棟に充牛に汗せり、誹諧にも點を添たる集冊儘あり、予是に基て、日々撰點の句々を梓行して、武玉川と號し、既に此たび四編に及ぶ、新古は盈虧に隨ふといへば、つごもりに月籠り、ついたちに月たちて、程なくもとの滿にいたる、されば古きを捨ずして、新しきに倚るを、作者の旨とせらるべきにやと、云々、

硯田紀逸撰

俳諧武玉川四編

冬嶺秀孤松

燈明にゑびすの顔はありの儘
雲水へ大たばに出るわたし守
二王が出來て赤い夕暮
いんぎんに成た夫が氣に掛り
魔のさす文を筋違に遣る
うそをつく日にいさみある顔
濱屋敷筆を舐れば鹽はゆき
哀なりけり金を苦にする
鵜の面は人の心の外へ出し
洗髮脇の下から人を呼
姿見に用のなき身と也にけり
額を拔くとやせる總領
芋の葉へ書く梶の下書
傀儡師おのれが舌を切に出し
蹈れた形で醒る明店
親類のそろ〳〵逃る十二月

行きさうな顔のすくない念佛講
玉のうごかぬ庫裏の十露盤
馬でさへ見せに行く日の前後
雪隠を戻ればもとの物わすれ
影膳の心のうちに顔が見え
浣屋の隠居隠居ではなし
關取の質は流れて怖がられ
面白い役に當つて駒むかひ
後悔のまだ有うちは貧乏也
降通される下駄の開帳
縄目の恥は狸なれども
先腹の子が獨精進
聲を直して戻る風呂吹
利た／＼と辷るあま乞
四十二に太子の顏のまた殘
妾が死んで鶯も死ぬ
蛸くらげ俵藤太に膝をくみ
泊はじめの分な夕ぐれ
後生願ひも生て居たがる
樽酒になれば蛙の遠ざかり

嫁も田植のよい思ひきり
小刀鍛冶の口が利き過
惚られて居る瞽女の悶雨
茶碗で呑も女一疋
大文字梢の色の付はじめ
きん玉に寐てあたゝかな朝
仲人のあつたら口へ風を引
言はで只京の餘波のけふ計
立田姫佐保姫よりも慾がなし
新遣ひを數珠で見て居る
北條九代永い御利生
請狀が濟とぐつすり着かへさせ
朝飯を母の後ろへ喰ひに出る
正直過て紙子着せられ
若葉の笛の前に百錢
一口で躍ををどる唐がらし
傘を掛る柱は行どまり
大判は懷に居る金でなし
たらひの雨を屋根葺に見せ
うぐひすの飽られる頃はり上る

正月にかき廻される十二月
鍍の師匠の桶伏に逢
御つゝら馬の首は正直
十日めに出れば鬢さへ面白き
大工は屋根屋よりも男氣
百度參りの乾く唇
向けられぬ顏は濃くなり薄く成り
挑灯さげて底のある妻
一段聞て歸る仲人
目の赤い人恥かしき松の内
逢ぬ戀人に噺して仕舞けり
海へ流れる三保の鹿の音
浪人の三十日／＼は主の恥
鍍も折々殿のいたづら
十七日や景清に逢ふ
野分の屋根をありく傘
谷中まで文が屆けば雨に成り
此年で中直りとは恥かしき
くら闇で聞けば按摩も細工也
珠數さら／＼とからい世を經る

貧乏神をせびるあり付き
あぶなく見える神主の馬
氷室はるかにくさめ聞ゆる
歸雁鳴る脇指のはらひ物
本の名は人にとられて草の庵
相傘に舌をちらりと見せて行き
明けて居る眼へ稲妻のやり違
檜杓で追て廻る正月
きせ川は忘れてとまる所也
最う門松の胸先へ立
懸乞に大塔の宮はましまさず
ぐにやくの暮しに低い二階あり
おもへば金も夢のうき橋
晝は消つゝ六月の人
今呑だ鉢をためしに臺所
行ぬけなしと婆々の聲にて
九十九で死ぬる命もあはれ也
にこりくと貸しなくす人
とまり鳥の三めぐりを横
棕梠箒次第々々に鈍に成

振た夜の明方消る物着星
浪人夫婦今に呑むなり
一つでも昔ゆかしき釘隠し
母と歩行くを嫌ふ煩ひ
音頭取咄の聲はきたなくて
死ぬやうな文へ時雨の降懸り
寒ざらし大晦日に九十九夜
佃へ捨にわたる目ぬぐひ
年忘馬鹿に着せたる馬鹿の面
二階から飛ぶ夢の若さよ
不斷尾が出てしらぬ年の尾
雲林院でうまひ湯を呑み
胡葱の手のない中へ竈拂
覗かるゝのを代脈の恥だ
押への口に言足らぬ寺
おろかな事で更る古御所
志賀ではさます雩の慾
長枕夜着に仕懸はなかり鳧
關守のうごかぬ顔に灯がとぼり
氣に入たかとたゝく仲人

御門より内は妾のたなごゝろ
いんぎんに出す馬方の脈
恨くさ引っ付く程にかしこまり
みどり子を旨く喰ふたる蚊を捕へ
つぶれ揚屋に飛梅の穴
山伏のまだも怖きは女房也
師走を唏ておどす鶯
臓と言れてくつとする聟
投出した顔新らしき角力取
兜巾の下の痒き新弟子
薙刀は及物の中の女形
聟が通ると内がから物
留守に生れてかるい名を付
帆の際を沖の時雨の晴はじめ
日ごろの願ひ極月に死に
櫛箱の底の淋しき手くらがり
月夜烏の引言に成
年忘挊ぐ息子が邪魔に成
能く云ふ人は稀な極月
車はやれて淀の水無月

七の字と他人ではなし十文字
寄る計引く事のない年の浪
書く事がならで向ふに恥がなし
男ざかりの女坂ゆく
娘自慢のどろぼうに逢
夫が先へ起て立つ家
木辻を譽る京の勘當
船のかるたの夜は四十刻
錢やればうしろ姿をいたゞきて
二十餘年を琵琶に乘せられ
人身御供に村中が惚れ
だまかして錢遣はせる司召
女房がなくて屏風もなかりけり
一もみもんで大坂で產む
ふつと言ふ名のあたる出女
雪の戸に帶をほどいて突出され
須磨や明石を書置の骨
ちろりにて心安さをさかなにて
入齒してから口もからくり
溜息をする女房はうたがはれ

乞食めと心でねめて京を出る
雙六の戻る箱根に髮がとけ
かはゆがられの憎がられもの
狸を驚す寺の大鍋
棒ほどに師匠の咄はたらかず
柳が錢に成と元日
みぞれにも雪にも黑い小袖着て
びつしよりぬれたうへが念佛
惡るがたく突く棒は下戸也
語りに來させ瓢這ふ門
鷄が啼てもおれが世の中
明星に追おろされし風
侍の名にあきるさむらい
姉の物着てつんとした顏
茶椀を投て立腹を居え
舟の寐覺の足の詫言
供の女の息杖を待つ
走智惠おとこの智惠の上を行
風薫る小夜着も足の置所
けいせいと言うては腹を立せけり

座元の藏を譽るまぼろし
書く文の耳には雪の音を聞
上方を見て死たいに開俤て
戀煩ひを味噌汁でせめ
慾にはなれて賑な家
舟路のちから目にあたる物
七種も近くで聞けば錢の音
岩ひばは二葉からはや年が寄
髭を命と都へは出ず
角入て浦の苫屋と也にけり
九重でみす〳〵入らぬ絲を買
新し椀に顏を慾む
氣のぬるき事うどんより猶
汐汲どもの順に道草
衣を脫で人にかたるな
顏と顏堅い咄に黃昏る
のれんさへしのぶ時には音がする
呵られてから思ひつく夢
初雪は降そこなひも酒に成
懷へ文の喧嘩の手が這入

二度めは隱居しての開帳
植木屋に植られて居る石燈籠
賣られて行も廿五のうち
松明のゆく山に鳥の音
臼造り風よりはきついもの
二日匂ひに飽る鼻紙
一痩やせて叶ふ大願
堅まり法華言懸りなり
鼻は崩れていなの笹原
頼政も射てから後は人頼み
還俗をして袖口を振つて見る
料理人是ばつかりは仕ぞこない
うかんだ氣にて戻る谷汲
三つのうち目も歯もよくて哀也
三味線の居かぬ所へ口を明
狀を見て火を吹やうな顔をする
假橋の笊の目をもる小侍
二代めに成と牡丹のつき上り
時明り旅の心をなぐさめる
ほうろく割た翌が大雨

歩行かぬ船を三味線で引
重手代俵のうへに畏り
猫の戀最う飽が來てほとゝぎす
その時は熱で言うたに末の松
伽羅のあぶらのかへる光陰
音頭の扇鼻息でぬれ
瀧にうたれてすつと聟入
十五の禿よく夢を見る
五十餘りがほんの關守
棒突の反りは腹から上の物
日蓮の天窓は古し神無月
二階から心の所へ咳をする
譯を咄せば長いわたし場
竹馬を止ると聟の名が付て
請狀の少し早いで年をとこ
うき名が立て乗物で來
旅は捨物槍の後先
忘れてはそく飯のへらぬ置所
怖い異見も聞て居るうち
千草も少し殘る袖下

美しく夜の明る顔見せ
膳へも蟹の上る掛川
蛛に頼んだ顔の何喰ず
小夜千鳥氷のうへのこぼれ物
帶をする間の草にふろ敷
草臥た時おもひ出す恩
朝霜に早い大工の茶をすゝり
朝顔に今歸つたかかしはもち
煩ふ形の見へぬ病葉（わくらは）
平元結一日づゝの縮りあり
材木買に智識逗留
誕生のころほとゝぎす頃
役者の荷物はつ雪が降
世の中を忘れたやうな蜩の中
寒さうに鼠の覗くからげ錢
眠たがる鷺に田植の笠が行
奢る妾の轙見て居る
若後家の草臥て居る泉岳寺
悋氣して仕當る事も二つ三つ
神の前小言のやうに伏拜み

質屋を拜む戀の黄昏
山椒は皮をへがれて郭公
翠簾から聲のかゝえ出遣ひ
麓寺ちびり〳〵と立田姫
虚無僧の日和程づゝ反りが來る
しら鷺は五位鷺よりも暮殘り
溜るとは小判を殺す道理也
腹のたつ時はやたらに蚊屋を釣
我思ひせめて樂屋を通る也
無言で猪牙の通る水門
逢ふ子見て居る四月朔日
蓴菜の切口淸き秋の風
わづかな慾にまよふ寶引
獻立は雨に喰れて大欠び
朝顔の隣へみんな惚て行
四十へ飛ぶははやい一年
隱し課せた夜着の書出し
眞中くゝぼむ錘の光陰
柄杓へ投る人も參宮
行春の限りしられて乾頭鱠

妾もつれて老にけらしな
乳母の口から鴬といふ中
前鬼が妻も人殺しなり
尾長鳥窻にもたれて振樂
高野聖の晴れた大口
鼓うち行衛もしらぬ口を吸
瘡あげくの青い明ぼの
おもしろい戀がいつしか凄く成
よい事に追はへられては酒に醉
女をひとり遣ふ桑門
靑田に惚れて新造を買
起ても彌陀と庵に二ア人
御不快のそれとしれるは御物好
一寸の先はあやなし紅襦袢
槇の戸を時雨て通ふ母の息
毒な所も守る佳よし
麥畑の猶々書に豆を蒔き
見ると詠めは違ふことの葉
食傷の笑ひ納めは年忘れ
川留に足の淋しき供廻り

師走の飛脚長い脇ざし
約束に砂糖のやうな返事來る
貸し方ぐるみ須磨の逗留
笑た人へたのむ綻び
扇の芝の細工過たり
かくし町つぶれて寒き赤蜻蛉
殊勝な顔を見せる鉢の子
面ら出しのならぬ月日を過て行
御内儀の顔へ肴を突つける
譽らるゝ男の金ははやく減り
年明のうまい言葉に丸裸
寐姿見せて岸を漕ぐ舟
隣のむす子やがて人參
二階の咄ししんばりで突く
ちからが有て下卑た若殿
旅の節句の痒い月代
人參が有て思ぬ弓を引
年切レの柿にあるじの草枕
大津まで來て蘇生る人
はたちの後家の心には聟

千両箱に手ごたへはなし
南になつて妻の鉢巻
元結こき若菜の上を飛で行
目の明く度に淀の人聲
成人をすれば女で癜が立
建立佛に付る鶴
薮入過の廣い臺所
しのぶ草夜着の上からうなされる
紫の天窓を廻る十八寺
時鳥積るうらみを飲で見せ
聟に來て思ひの外の烏甲
峰でうつ火は紅の蹴廻し
草の戸やしらべは帯に成にけり
薮入を送た跡に鏡立
旅衣うまく寐る夜はなかりけり
むつと氣に千両箱の運が盡
酒屋の數を呑んだ順禮
抱付て翌恥かしき後影
欠びして居る痳病の供
三が日顔を見ぬ物唐がらし

寐て年を聞ぬ程にぞ成に兎
ぬれた嶬をつかむ靈棚
合せ鏡に三つある顔
よい中見れば死ぬ人が損
浪人に成て目のつく青によろり
ふる雪を口へ入れんと反り返り
いき／＼とした後家は憎まれ
根を聞ば獨ころびの墨衣
舟から讐る瞽女の傘
押詰るほど妻の名言
君が姿の掛物に反り
寒聲にふるひが來れば鷄が鳴
玉川の一つは惡く言れたり
夕藥師傘も八本賣日也
大盗人を七まとひまく
持佛でためす後の女房
旅の留守うつぶけに成癖が付き
羽折着て請狀に行御垣守
箏に成ても鹿のいたづら
牡丹を見てもやりて暑がる

不孝は内の行燈を見ず
うまひ名の葉に殘たる八重葎
大黑の愛相盡て年暮ぬ

無盡藏 四時留棟印、中五月改、

五十以上の伽な雪折
松に灯先のあたる關の戸
手を合せても何所をふく風
下賀茂の戸に四つ五つ餅の跡
卯の花が咲て御くらは闇になり
内では人の讐ぬ吸口
六郷様とばかりおぼえる
戸板へあたるかりそめの意趣
うがひに手間のとれる浪人
もとの座敷へ彈ながら來る
膝へ入日のたまる乘掛
仲人へ次第に細き付け届
棒つかい心計の水車
よろいのわたし手習子乘る
妾とまではあてる手の筋
行先に夕めし有て旅衣

辻番は南に向て老にけり
戻る巫女の人に見らるゝ
指先へ來る晴天の塔
田樂法師くらひちらかす
人に隱して口で七種
柱暦は安い一年
蠅とり蜘を見出す手枕
勘略の嫌ひな顔の美しさ
高聲をして見たる還俗
細工が利いてあつい六月
竹の子賣の譽る開帳
追付ぬ顔に成たる藥喰
寺内の樒いんぎんに買
日待にも志賀の名主は詠たがり
虎が背中へかくす少長
鏡研おのれが顔へのし懸り
最う汁椀のひづむ衣更着
ぼたん貰て置所見る
扇子ひらいてほうらいの挨
尾のない鶏もかける齋日

百兩は結ぶの神のうらを行
生酔の帶仕直して慾が知れ
顔見せのさかりの間も廿日草
お針が仕落棒ほどに言ふ
鹿の聲佛の道も細い道
坊主かへりの駄染成けり
十二月晝おそろしき油賣
木がらしは紙子へ物をいゝて行
柳でも濟ぬもの也男の子
百姓の賀の眞くらに焚
小町が供のぬれて手を打
秋袷冬瓜のうそのつき仕舞ひ
給仕があれば喰はぬ迷子
障子張男の心うちへ透
いたづらな目は食物の外へ出る
商賣を譽ては辷る物もらひ
葛西の雪をさく／＼で見る
ちから自慢も穀つぶし也
獻立もこゝらで聟は寐る時分
さすが太夫のよい所を泣

自剃のたらひ歸る迄有
片足の裏を詠んだかむしろ
朝顔に養子の心咲て見せ
もらはれて行神のあてがひ
松風も骨の出來たる小六月
人毎に譽るは夏の水車
夜討の跡で目へ乳をさす
むかしの質は人間を置
礫のやうなうけ状が來る
文が流れて仕舞ふ曲水
分別を外から助る硯箱
らふそく賣の遠い四阿
旦方の目にとまる茶字編
泣子へ膳をすゑて突袖
我計はたちと思ふ角力取
湯だての神子をほつかりと背負
まだぶよ／＼と鬼瓦出來
大かたしれて居たる生靈
高聲の娘に毒はなかりけり
鬧をつかむは戀のはじまり

人間の霞はじめは寐巻より
夫婦九十の指折に成る
蝿の命も行々は酒
印籠ばかり光る上人
使の聲の高い青海苔
松魚に酔うて江戸を怖がる
願叶うて凄く成る神
盗れた伽羅を又聞く松の風
けふも長閑で青い掌
手を一ぱいに家雞追込む
案じる事の知れぬ關守
狼と眞向に成て夜が明る
先の背中へ咄す羅漢寺
たま／＼ほこの臼も三崎
此うら舟は石町が鳴る
目醫者の道に憎い蝶々
吹付られてみれば故郷
鼻血も錢の言ふ事を聞
こゝろで髪を譽る關守
火審で明る面の魂

今上る帆の片裄に成
辛子の紙を重く引たて
牧方を歩行かぬ代り踏れけり
言切て出る傘の開き過
乘物へかはり／＼の請こたへ
あはぬ別れの三十日朔日
髪をきられてのふ／＼とする
團扇にのせて天瓜粉ぬる
異見の仕舞ひ洗湯へ入り
手代は聟にならんとすらむ
上意が濟と揃ふ罔雨
ふとんを遠くかぶる汐時
夫婦が剃て子は牡丹也
煩ふ馬の面へ松明
竹田が顔を物凄く見る
二日めに雨だれを見る神無月
取つて十九に母の斷物
後先を見て參る瘡守
臺所御の字がつくも女也
うき人形の手のひらを漕

六枚書て跡は口先
淡(あわ)の消るを伽に盃
風の向うへ廻る供廻り
水の來るうち寒い居風呂
夜の酢買にことば教へる
そつちで捶とくれる龍宮
新田以來笛が屆かぬ
請狀に顔のすわらぬかゞみ立
翌のまつりに旅の寐心
此松にまた盗人の匂ひあり
龍の通りし跡に外科
何となく尼に成る日の心持
殘る蚊のはかなく袖に蹈こたへ
その日は三保で暮る羽衣
娘の恥に一町が出る
留て着て思はぬ方へ風がふく
女自慢の暑いめをする
撿校にして死たがる母
大からくりの水門が明く
美男かづらを切れぬ小刀

折々親の子に成て見る
かうやく買て雨肌をぬぐ
仲人の水引草もむすぼふれ
藥掘拵のないをとこなり
聲がはりにも酒を買せる
寐ころんで最う見ゑ兼る門田守
端に立ても奥樣は知れ
豆を蒔うちわかる分別
千鳥を計る野田の横雲
將軍塚の身持めでたき
跡から櫛を拾ふ關の戸
沓蒸籠に請るはつ霜
行水をして子を輕く抱
ひとつ見付て氣に懸る星
白むく着ると沈む夕榮
五月雨に腰の拔たる干大根
おもひに瘦て酢を斷て居
大きなものにわたす松明
長崎で死ぬ江戸の噓付
中で無く成る樓の人

あうむも鳥に戻る草臥
女房にした五本めの指
惜い若衆を譽る小鼓
買物もそれ程づゝの顏が來る
留守居の噓の屆く九重
鶯をだましこかして子規
こんにやく賣の足を見て買
三味線に追返さるゝ松の風
前の住持を樹造りが引
天の川瓜茄子にまだ足はなし
きぬ〳〵に夕べ寐かさぬ蚤が飛
悋氣を見出す十月の禰宜
杜若見に行むす子化る也
牛のあぶない鵲のはし
因果ふくめて見せ馬の肝
浪人の心で廻る法輪寺
女の耳に足らぬ神託
我影をろくに覺えぬ植木賣
無筆の女房持て極樂
矢矧で聲の替るうし若

地獄の薪ののびる齋日
弘法の五筆は冬の日也兒
深草はあたごが有て口を過
布團懸ればあまる山伏
臺所から這入る年神
橋に付て鼠もかうばしき
新地の三日誓文が利く
黑髮の味に居直る關の前
蓮に雨の音も傘
孝行のたとへにも出る五月星
後帶最う笑れる年に成
牡丹は人の町人でなし
行者の供の照るにからかさ
天道丸へ未練なく降
年ほどに盛あてがふ黃八丈
投ても物の屆く堀川
野暮の返辭の立派過たり
此君の子とは思へど盜けり
すゑても飯の遠い大佛
目に兕を持しふりそで

春風の斷て行うめのはな
烏くろし橋に羽折の山かづら
上戸を分に思ふ雪ふり
一日は薄着でくらすゑびす講
山歸來磨る都の水に飽
顏も眉毛も長い神主
現當二世も口に出次第
佛の顏の光る十月
かゆい時耳かきよりも鹿の聲
日廻りの前へ廻れば膳が出る
空若く柳の奥の針仕事
形見とて貰た文に火がもえる
酒の肴に鼻をつまゝれ
世を捨た人も辷れば恥かしく
舟軍だらけの來たる南かせ
一町寒くくらす觸狀
今死だ鰹のさしみおもしろき
追付てみれば不斷の女也
呑で廻れば五つ玉川
出入女を謗のはし

恩の紙燭の捨所なき
此世の風のかはる穴藏
水と火の中を流るゝ白拍子
抜た大根で道をおしへる
小春と云ふも冬の愛相
師匠を尻に敷島の道
三百匁出すもや／＼の關
雪曇豆腐の盆を胸に當
蹴られた意趣に直切る馬市
八乙女の一人缺たる俄照り
醫者の顏にも利くときかぬと
着もせずに羽折のかへる藤の花
根を燒て遣るも牡丹の迷也
いろ／＼に張る柚がかうやく
養生過て減らぬらふそく
引込思案竹に見とれる
二の替内は淋しきこたつの火
さくらへ繫ぐ瞽女の大聲
晝から顏の寒い律僧
十文を隱す嫂（あによめ）の足袋

珊瑚珠の心明るき五月闇
富士を呑込むやうな夕陽
狹い小原に山伏の公事
草臥れた道を見て居る鴻の臺
行者の手柄泣て出て行く
流行風四人をとこと也にけり
鵜が呑込んで橋の隙あけ
淺間と聞て竈の戶を明
鶴の抱れて通る朝がすみ
きれいな上をつまむ曲水
櫛買の心覺は二度廻り
石切の腹のたつ時眼へ這入
影ぼしもかたまって行く女中連
あい染川へはしる居風呂
年忘翌日を言ぬ人ばかり
浪人のうごきはじめは松囃子
口の吸たいあつ盛の首
腹替り胤替りよりあはれ也
江戸見坂から見える貧乏
具足も太刀も喰へば喰るゝ

秋の蚊のそろ〳〵歩行くをかしさよ
小野小町の曠な洗濯
有馬の日數誓文で行
四月から降る五月雨の慾
箕輪の町へ出ばる榛木
日蓮宗の聲は下卑たり
どこぞで中を違ふ假親
めうがの鶴のくさる舟底
看病が死ぬ氣に成と床を上げ
美男一代すまふ一代
請狀よめば母はふるへる
波悠々と舟に年玉
嫁の湯漬の細長い音
杜若蛙は聲のうらを出し
朝顔にまだ六月の日が殘り
干大根菰に莚に小夜衣
橫から膳をすゑる帳書
氣の勝て居る金貨の供
胡葱を酢味噌の中へ植て行
まじめに成て普門品よむ

年だくな眞赤に成て逃て行
寐惚た茄子翌見に行
寸三切のねぢる手元は安大事
鰹賣きのふは南けふは北
奥と表と違ふ物の名
魂がないと此世は面白し
箕の輪にはかの行かぬわづらひ
指を切らせて近い正月
むす子をだます伊勢の濱荻
蚊柱に座頭はひとり卷込れ
一寒とげて扶持に成聲

不騫不崩 寛延未秋改印、

おもひ出しては動くシテツレ
奴のゆくへ水の行末
十月歩行く婆々の片意地
聟には隱す辛崎の松
きつと居つて鼻紙を折
ぼた餅二百一世一代
肴を買に這入る吉原
定木に成るはよつぽどな人

熱過て恐しく成る泊客
中を買たき買水の慾
置所なき暮の大名
命と言ふ字むごく違はれ
踏と足との赤い氣違
異見してつく〴〵見れば美さ
赤子の頰を付ざしにする
有し昔を咄すうば玉
常世が夜着は梅さくら松
馬のくはへる蓬生の葉
鼻くたに成て古郷へ戻りけり
似せ熊膽の猿叫ぶなり
呵る時には寒聲の利き
戀ぐさを枯らして歩行く親の口
九折飲たいほどに松の風
踏でたゝいて此上はなし
男に祈付る護摩だん
總身の下卑の出る日當
七種を打度夜也天の川
守宮が利いて門を留られ

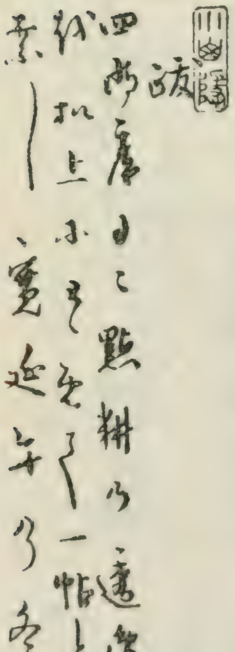
かたみの馬の濡通しけり
女に交る武士の死前
横から惚れて錦木を蹴る
戸に挟れて尖を見て居
剃れと言れて耳なしの山
武士を立れば目鼻あぶなき
夏をつまんで流す麻の葉

鯉鱗吟　紀逸

暑さにも三十日がありて今朝の秋
飼れて籠に月を啼く蟲
葛の葉の狂ひ相手に風落て
書そこなひの身を蓋にする
咳ばらひ家一ぱいにひゞく也
カ 雀も分かぬすゞめいろ時
五月雨こよひかぎりの懸烏帽子
酒はつれなく廻るさかづき
聞て惚れ見て又惚れる淡路島
大僧正に日があたるなり
色白な顔をよさして白拍子
うきを枉に夢のうきはし

戀の闇乞食のやうなめに合て
二町あまりを雪の袖笠
紫は鷹の心に張を付け
物喰ふ音も高き古寺
光陰に追まくらるゝ月と花
前の旦那へもどる請狀
曲水の連衆殘らず引摺られ
今はむかしの御女郎買
うすくこく茶も染かはる人ごゝろ
大平皿の炙が働らき
ほとゝぎす只とり山に仕當けり
難波のうそは伊勢にても噓

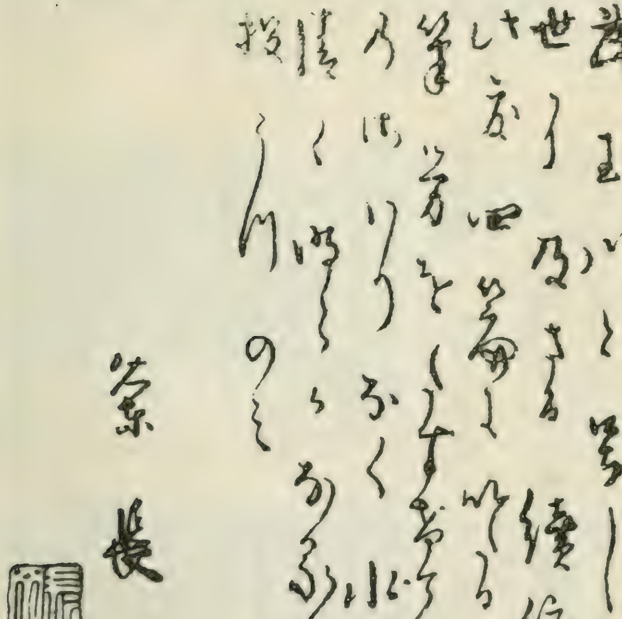
雨の名の終りに成て初しぐれ
前で結んで又うしろ帶
愛染へ今度は顔が向けにくし
紋を付けねば凄い挑灯
入る月に巻戻したる稻むしろ
カ 水あさ〳〵と鯡のうら聲
逆の峰兜巾から目を病出して
兄と弟に分るかしら字
取肴互の手元おもしろき
一むら竹に近きうぐひす
花の雲さらし次でのさら〳〵に
翌は袷にかはるついたち



跋

四時庵日々點耕の秀逸を、机上にとどめて一帖となし、寛延午の冬武玉川と號して弘く世に及さる、續編三編此度四編にいたる、予その筆勢をたすけて、水波のさはりなく水筋の清く明らかなるに筆を投うつのみ、

蘭長宇



武玉川五編

短長齋紀逸　撰點

雛田舍長宇　校合

宝暦二壬申年秋改正點譜

不騫不崩　灶五点

鬮異〻斗　灶。

清地満夏雲　十五。

玉堂之用　十。

即墨候　七。

結隣　五。

雁字三丶七二丶

四時庵紀逸

俳諧武玉川五編

寶暦二壬申年秋改正點譜

不騫不崩　廿五點
胸裏三斗　廿點
清池滿夏雲　十五點
玉堂之用　十點
卽墨侯　七點
結隣　五點
雁字三點長　二點

撰點　短長齋紀逸
校合　雞田舎長宇

四時庵紀逸

俳諧武玉川五編

清池滿夏雲

師匠の口の入にさはらず
見送て戻れば燃るあぶら皿
都うつし歌よむ程に出來あがり
赤子もらひの醫者へ相談
輕業を出て反り橋をふところ手
五位と六位は錢も借り合ふ
木がらしや口の下から片手わざ
立退て京ほど怖い所はなし
付ざしに口を付るとあちら向
あみ笠を貰て人にうたぐられ
親の聞てはならぬうは言
病上りうつくし過てうそらしき
むすめに切て見せるいたゞき
請て見たれば晝飯も喰ふ
旅芝居皮癬を蒔て通りけり
つめつて計ありく大どし

ゆるがしく腰を懸たる磯馴松
ぬれて來た鷄を撫て遣る母
見詰ても戀しい足しにならぬ空
雪駄の徳の顔を釣り出す
目醫者の顔が眞先に見え
身代を蹴込んだ所が總桔梗
京大坂は江戸の引出し
三十日にふつと出來る人鬼
前帶も言はゞ現の道具也
赤坂で馬も度々抱つかれ
あはうに成て止る人參
陀羅尼の咽を側で痒がる
湯花が濟んで凄い明神
仲人で來る日は指さぬ草履取
面白く成て蚫のあてこすり
田樂のちらりほらりと三下り
新し蚊屋の隅の正直
九十九夜律義に通ひ往生し
唇なめて一ト渡しまつ
膝に寐られて膳に筋違ふ

蛤の松葉くはへて煙りけり
前帶に成と女房のさく〳〵成
石坂は佛の道に急度過ぎ
筆借りて芭蕉へ投る天の川
鳥邊野見えて遠めがね置
たちまち顔の替るらふそく
派の利た名主も死んで鹿の聲
解けた儘棧敷の帶は抱て居る
寐たうへ丶踊がへりの袖疊
蓮切の時々鎌を覗で見る
干からびて居る木食の傘
桐一葉跡にどつかり穴が明き
桶伏とれば正直にたつ
竹の子は盜れてから番を付け
鳶飛で夏の片田をあひしらひ
二代めに終白槇の龍に成
傾城の寐覺のよいも哀也
ほつと言ふ息も握て竹箒
螢とらせて旅のおもひ出
口寄にどつちともなき向加減

靜な見世に突捨の錢
昔が出ればしら〳〵と寐ず
あくびした子を抱上て行
寒い茶椀は兩手にて持
閙じい日は病人も跨がれる
光陰はやく親指へ來る
妾は知て咄す鳥邊野
おとなしい人程廻る女坂
紙屑は思ふに足りぬ投所
若後家の淋しい道を知て居
戶まどひの味な所にかしこまり
むかしの袖に包む重箱
高札に立寄人の反り返り
もめ盃の酌へ流れ矢
笠にしてあぶない所を袖の恩
女房を持た晩から旦那也
いてふの下へ病身な乳母
忌中の札の跡へ賣居
御上屋敷へ隱す誕生
煙いめをして衞士の入聟

日に干せば尼の枕も入くさし
たま〳〵に箸も流れて澤若葉
舅の譽る聟の絲鬢
女郎花ころべば只は起られず
夜ル晝と二度に夫婦の迎來
身のあきらめの引かぶる夜着
どろぼうめ茶に行く顔の唐物屋
柳より九輪が秋は際に成
今の妾も朔日を呑
我娘去る御屋敷とばかりなり
また何か言たき裾をふまへけり
野の宮も志賀も昔の道具也
女のはだし顔を見らるゝ
女房の耳も足して置く母
地紙うり仕舞仕事に口が過
辨慶も千人めには食に付き
敵がしれてすたるけいせい
盆に小豆の音の吉日
廬間の鶴の陽炎を喰

妾の里でうまい事言ふ
縮着かへて坐るすひ物
貧乏神の譽る芍藥
開帳に鳴らぬ鉦は聲を譽
しのぶ山屏風の恩も覺えたり
少づゝたまる面白い桶
脊中たゝけば埃のたつ乳母
吉原の灯を見て歸る鳥打
心太妾が突てちやくみちやこ
仇し名の逃そこなひと呼れけり
たゝく戸の手は前方に握り詰め
鹽竈の見える二階に酒が入
親のかたきは美しい顔
大屋と中の惡い念佛
生酔の藝を仕舞ふと蚊がたかり
侍を忘るゝ里子あはれ也
十能の先を拂ふ大聲
浪人の靜に歩行く十二月
胡怱にしほれた顔の根がしれる
朝虹に初て嫁の薄あばた

圍れの食養生は隣から
見た所利口に遠い奉幣使
總身でものを盗むしな玉
煩うた證據を出せと恨られ
人に女房と見せる口上
口を吸せて兩方へ逃げ
看病の氣に入たのが因果也
大内人の牡丹ほど着る
抱付くと言ふは叶ぬ時の事
久しい顔の覗く夕だち
手を借りて心のうごく灸のふた
斯う寐たらうれしからうと文枕
賣盡しにはひるよし原
名代の顔の向見ずゆく
關の晝寐に赤い蚊が飛ぶ
盃を箸で突出す糺川
ほとゝぎす先から先へさしみ皿
今戸の橋をからくりで行
尻馬の上から呵りつけ
あさつきや脇から親へ言込せ

十月を色にも出さず建長寺
琴屋が手では松風も來ず
府中へ鑁の廻る六月
そろ盤へ乘せれば人も怖い物
子福者の蚊屋へ算へてつゝき込
船頭の腹へ響ける大つゝみ
絲鬢になる言譯の種
高縄の人は帆を呑み人を呑み
天下明るき猪牙に上下
煩ふ奴さかづきで呑
灸を落して眞直に立
潮來のさわぎ棒の手も出る
めでたがられるすつぽんの年
百石買て江戸を古郷
傘で行く人の限りの東海寺
宴で従弟のしれる冷飯
まんだらは三百兩で目が覺る
六月の夜も妙藥のうち
物喰うて痩ると親は合點して
兩六原へ持て出る夢

能い口が有れば宗旨が氣に入らず
舌で疊んでわたすほゝづき
従弟同士の突はなし物
正月に成とそろ／＼馬鹿に成
百度參りの細長いかほ
はしやぐ煙草の鐘へつく息
鷺と烏の意趣の有る顔
うつくし過て入れにくい傘
汲鮎や八百屋に蓼のほしい比
禿の十五正月を見ず
青柳やあみ笠ほどは日を通し
夜明の座頭蚊が吸て居
聞惚のする雪うちの聲
本服の禮に歩行けば最う惚て
素湯を呑む顔の哀な鉢扣
凡夫さかんに丸くなる撥
信玄公と違ふ柿うり
草餅を燒く新らしい顔
氣違の見ると飛つく伊達道具
懷ろにいけまじ／＼と馬のふん

蚊屋を蛙の廻る蓬生
我貰ふやうに覺る奉加帳
湯殿山譯は咄さず怖がらせ
赤すゐき棒ほどにこそ成にけり
波風立ず今に貧乏
入聟の呵られはじめ年忘
吉祥寺泉岳寺より面白き
我顔のほくろに指の行安き
裸で膳を下げる靈棚
金のない方へなみだを封じ込
春雨や古い妾のしのび駒
蚊遣り火を給仕は盆で消して行
朝顔の戸は母のからくり
挑灯に年明き共のゆめの跡
大晦日に眞の孝行
覇矢(それや)もたせていたたい口上
他人から乳母に出ぬかとつれなくも
飯は喰かと人鬼はなし
山伏も二人來るのは面白き
呉服店我名の下にかしこまり

看病に口がすべつてはね出され
引窓が明けば律義にありがたし
後家の田地へ六地藏たつ
餘所の起請のきたながられる
八專に照々坊主派がきかず
ゑびすの顏も十月が骨
はつち坊主に人參のから
胡葱は結れる草別れ草
かたまつて居る棧留の質
加持の道具を怖さうに拭
口がいやさに葱を落る日
せんたくの女の側に蟇(ひきがへる)
夕藥師むす子のうその三番叟
津の國や浪打際のあはれ也
辛子酢の引張足らぬ眞裸
古あみ笠へ癪がさし込
夕顏がまじめに成と夏祓
見拔たやうに六月の傘
毒に成り藥にもなる立すがた
藪入の咄が盡て庭へおり

足輕になる庚申の翌
乳貰の笠着て袖を笠にきせ
大病の異見に椀と箸を持
うき世繪書は突出した顏
裏から畫の知れる子おろし
六ツに出て六ツに歸を六あみだ
朝顏も翌の妾の尖りけり
師走から鳴くうぐひすも通り物
踏まれても先の町では又をどり
つまんだやうに乘て行人
歌まくら他人の方が近く成
浪人の目に怖い人じん
うれしさはかゝり次第の上草履
橋で行儀に遣ふ寒聲
仲人が見せる計に茶を持たせ
冷飯を喰ふを見て居る猿辮
言傳を戻る脊中へたゝき込
大つゝみ口說た聲がうそに成
九つは獨寐られぬ鐘の聲
かはゆがられた後が怖ろし

地うたひ揃ひなめる唇
胡葱を立派に喰て立わかれ
聟の來る町を駕から打詠
久しい顏へ曲る乘掛
下をば我が明けて目藥
聟迄は利口の入らぬ年忘
取卷れ歸朝の口のいそがしき
飛鳥山毛氈に成て見限られ
うつくしい手をあてる大ごゑ
茶わん酒若い大屋に奢らるゝ
二階から見る初雪はほんの事
水の見舞の提げて來る水
早乙女のしこなしだてに寺の飯
女房の留守もおもしろい物
逢闇に互の心灯がとぼり
どろぼうに眞赤な顏はなかりけり
草の庵氣つけも持て死で居る
羽箒淋しい顏をなでゝ居る
梳く時は側でもかゆい心もち
傍に立事ばかり言ひならべ

居敷ほど薄をむしる狐釣
海を詠て止る入唐
身うちが口で三度去らるゝ
六ッ切の門へ這入て腰が抜け
人形の中でのろまは毒らしき
あやまる客へ立て居て酌
安物買の主従が出る
留守々々と立派に言て大つゝみ
手箱金妻は喧嘩のふまへ物
懸人なれず二階から落
干からびにけり伊藤源介
がてんせぬ文を押込ぼんのくぼ
脇指を面白くぬく大神楽
隣歩行をさせぬ菜箸
馬喰町御捌誉て酒を買ひ
みどり子のつまみ初は蝶の羽
鞘の出る合羽も今は持たぬ也
髪結て淋しく見へる海士の顔
妾をねめ／＼人参を干す
さかなに反りを付る冷水

言ほど言て跡のない尼
大黒は慾にかまけて能表具
焼鼠昆布に山椒はへらず口
目で咄する所は目だらけ
坂本へまづいさくらをくれて行
帆で行く日には皆椀で喰ふ
ちろりの最期逆さまにつぐ
たいこ持三味線が出て提り
釜拂吹出す湯氣に後退去り
知行に持て見たいよし原
夫婦連にて分ッな温泉に入
子安婆々分別過た名なりけり
手を突て見る葉隠れの瓜
金貸後家の鼓にてうつ
足跡の丁度揃て大根引
身上りも二月二日はうぬがため
今年も尖をたてる七夕
なびかねば火燵も寒い道具也
笙の遠音に天井を見る
遠退て一柄杓づゝ口を出し

椀久がつぶれる前に文枕
お内儀の手を見覚る縫箔屋
元船も尻から見ればきり／＼す
捨子見付る廻き／＼の顔
朝寐の夜着で御談義を聞
稲綱しまへば百もない顔
關守に子の有る面ゥはなかりけり
格子賣うつた先から寺参り
湯治のきかぬ仙臺の鼻
熟柿喰ふ君が口元六かしき
向ふ桟敷へ烏芋投込む
夏草の名を煩うてきく
引立て見れば小目も夜と晝
都鳥餅屋から汲む水でなし
日頃のうそが傘でしれ
かぶろの十五おどろかれぬる
手振の聟の氣は土産也
皆むだ言の人参を買
棒遣ひ障子を張て歸りけり
朝顔の葉なら花ならぼんと町

吸物させて夜の氣に勝
田町で見れば路次切の海
片口の雨を一盃くらひけり
泣時はかた〳〵衽が長く成り
兄弟中を譽るけいせい
誓文の足らぬ所へ親を出し
長柄持をどりををどるつむじ風
錢をもたぬも長生きの相
蠅を追はせて寐入る怪我人
鉋屑腹だちさうに燃えてきえ
暖簾の小褄に白い足の裏
座頭の家越さぐり草臥
人の氣の昔に返る風が吹き
足元の思案を借りる草履道
いたゞいて寐る根津の敷物
師匠へ膳を送るしも月
顔ばかり咄て置てうまがらせ
手負が歌を讀んで騒動
年號も二度かはる勘當
人の事頼む時にも抱付て

いろは短歌にひし〳〵と合
隱す事聞けば角文字ゆがみ文字
四十から心の猿に毛がふゑる
新地が出來て侍の恥
棧敷でみれば咄されぬ年
脊中から泣子引出す麥の中
女房の物に冬の行燈
乙雪もまた母の日に降
雨もりに百萬遍を筋違る
おこりが落ていやな高繩
夜ばかり來る顔にかうやく
ゆく〳〵は雀もおなものに成
魂のいくつも有を聞たがり
一門をよせてのめ〳〵生かへり
堪忍のいつち仕舞に肌を入れ
牛房一重御閾ほど振る
長枕我身代ははなれもの
高尾が小言常の聲なり
一盃呑と母は夢介
聲替り念者の蒔た種がはえ

目黑まで傘うりの味を〆
ひよこの中をありく石女(うまずめ)
智識のうへに六月はなし
取揚婆々の他る飛魚
死ぬほどの中とは親もしらま弓
ほとゝぎす濡れた草紙の上を行
つまんで笑ふ本服の髮
律義な野守吹がらを踏
先に成筈を妹をほしがられ
光陰の二百十日はかたき役
鳥居を馬の舐る十月
流れ留りはやり手也けり
つめられて動かぬ人の凄く成
今死だ戸へ夕日さし込
うき世を狹くおもふ大判
十七文字の恩の田を刈
萓が軒端に人形が干
かた〳〵見える鐘つきの足
貧き寺の塀につゝかひ
越後屋は風薬さへおそろしき

蟲齒の療治舌へ日がさす
胸裏三計
鶴龜の膳を並べて人ひとり
六月と狩場の文はぬれて來
初手の異見は柴の戸へ呼
物言ぬ子に日傘届かず
盗に逢て遅い朝飯
去り状の向ふへ居る草履取
蝸牛出ぬ分別の先を行
かさ食は手の窪よりもはかなくて
墨衣人のほしがる顔をもち
乳母がまくらは主の一つ身
うら盆や手を振習ふ松が崎
破れかぶれの顔がうつくし
宿下の琴に親仁の目が居り
雪の深さのしれる大聲
仲人のうそをつかんと先に立
遺言の硯が出るとむづかしき
役の行者のさくらから出る
唐がらし計つて買はおそろしき

直らずばいかにをかしき風ほろし
手拭うせて猫もなく成
異見言ふ人も昔は大三十日
伽といふ名で恥しいかほ
女房の前を通る祭見
よい事はうそにも聞て起上り
娘に風の違い六月
平目のいはれ親子いさかひ
蠟燭でよむ腹だちの文
女房の手にかゝる掛取
蹴ていたゝかぬほどのこし元
賴政は地紙の形りに死で居
九十九夜供も同じく九十九夜
つとめにくいと親が煩ふ
隅田で逢ても胸ぐらを取
小春は人の眞中を着る
傘を詠ゐて和尚是まで
盗だ馬で坂は照々
娘の四火を家内あつがる
付いたかとはぐろの顔をふり向る

戻ると腰のぬける棚經
人間を大きく見せる格子縞
立ば鉄の響く笠縫
桶伏の人も日和を聞たがり
挨拶に出る六月の小
わづか妹に殘る遺言
あみ笠は九つ迄があはれなり
大聲の顔を見あげる寫し物
うつぶくで知る千垢離の施主
御能遙に士農工商
人の命を醫者の手習
とろゝを摺て遊ぶ閑守
我怖さうな家老かへる
下り役者のけなす白魚
捨鐘ひとつ飛上る武士
清水が涌て和尚倒れる
めぐろの餅が誓文に立
後添のひや／＼思ふ梓弓
鷹一つくらき膏薬に包れる
此物前はいなおほせ鳥

大晦日乞食の種を蒔日也
豆腐屋に有る朝顏がほんの事
長い紙燭の出來る六月
伊勢講と出て內をまじなふ
蚊の喰ものに浪人が越
今の和尙も腹を苦にする
饅も戀しき端にぞ有ける
知行に穴を明る氣に入
狐の面ッを持て迷ひ子
腹のたつ時肩衣が鳴る
黑鯛は釣を懸ても武士でなし
氣轉の利た風呂敷の角み
鎌倉山や去り狀が飛ぶ
きさら津舟に乳母が一艘
三粒降ても奧はでんがく
五十年向うへ飛で生身魂
雪へおろせば沈む乘物
むすめの箱へ戻る夕ぐれ
死で見たれば又とない顏
それとなう暇もやらず崩築

三夫婦有ておもしろい內
三門の上の願はたばこ盆
鉢の木が四つなくて殘念
屁者えん／＼わいもうはの空
居所を聞て親の溜息
あたりへは客にして置廿日草
物をよく書と若衆のにく／＼成
七日々々に湯女のきぬ／＼
鶯に小袖を懸る霜の夜
のし餅に成ると酒屋も夜が明
妻は小言で洗ふ生酔
槍持の槍を渡しの力草
階子に通を得たる女房
吸口にして突放す瞽女
むすめに反りを付る晴天
鶉遣ひのちつと喰せて可愛がり
調市を入れて蚊屋の綻び
內にかといへばきのふの手を合
馬士おとなしく醫者連れて來る
妾の笑ひわらひではなし

うかみ出る時乘物の醉
みんな似て居る九重の顏
うたゝ寐の妾も人の飾也
夫の顏みて諦るさかづき
淋しい顏へ蚊が死にに來る
養子合のおもしろい留守
はり合のない儒者の死際
千住の歌妓夫に吞れる
占や算側に女をうつぶかせ
久しぶりとは御油の行過
奪合うて鳴る上野淺草
牛のあはれは鼻の穴なり
つらい返事を聞いて食傷
輕井澤でももゆる胸の火
棊うつ音も夕顏の底
吞込む手代共に勘當
賣人は譽ず人形の顏
二度手をかけて逃る竹の子
書置に金といふ字が十計
かたみ屆けた人にとり付き

髮筥を寒き扇であふぎ立て
なぜ來たと握拳の美しき
小聲でわたすをどり廻狀
生れた家をきたながる妾
舟の戻りのみんな一鹽
裸でよいと伯母が又來る
ふしぎに今年手の筋が合
立た女の憎い乘合
脫ちらかして居わる立身
ぬかるみを顏しげ〳〵と通りけり
三分と錢にすれば二道
かたみ送りが不和の初り
御狩の濟だ戸に釘を打
北へかはつて鉢卷をとき
飛脚の息のかゝる明星
才藏につらき人の名言ふくめ
二十五は年にばかりも惚るころ
大勢の子を奢る鰻屋
妻戀ふる男鹿は物に行當り
仲間で夜の明る口書

わらび餅さよの中山中々に
結納までは眞のからくり
下總に摘ほど見ゆる槍の先
もの思ふ顏へ扇のあひしらひ
重れば言葉の釘も恐しき
嫁入の一周忌には丸はだか
くつ〳〵と名を替る新造
同じ夜食に居る本ぶく
杣が飯喰ふ瀧の正面
名代の後家を反橋で見る
鶯の影は障子へ反りかへり
耄た牙婆の餘所を取持
懸乞に奢られて入唐
飛脚に逢へと起すみどり子
死だその日は賑かにくれ
三十で恐しいもの緋ぢりめん
我絲竹にほれて夜歩行
子にもひとりは玉川の屑
盜れた顏もそろ〳〵物語
金屛風あり所にてあはれ也

手桶一つがあまる半部(にしとみ)
親類中をまはる錢
珍らしや四條にほんの娘あり
下戸父に似て下戸母に似ず
からくりの後ろへ廻る大晦日
正客の顏から先へ灯がとぼり
うき事でほんの上戸と成にけり
寺のうたひは狐つき也
住よしへ風呂敷かけて鳥甲
疱瘡の後智の小便
はつ午の日を狸うらやむ
八十八の口ばかり人
かくれ家の二十人前口をしき
光陰の矢をはね返す女方
あをかりしより挑灯も借り
出居衆の顏に似たる申子
朝母のいな葉の露に升を取
いたゞいて着る丸山の夜着
をどり子が摺る去り狀の墨
乳母がおぶつて逃る鐃鉢

看病にのけたい顏がひとりある
死ぬ時分京の詞になりおほせ
とりあげ婆々の來ると大聲
去た先から慾な風呂敷
狀を聞く座頭の顏の靜なり
喰てゝ作る眞野の臺所
祖師に成つたとしらぬ糠買
せんたく物を尾長蹴て行
うまい事言ふ傘は喰ちがひ
寺の衣桁に後家のづぶぬれ
何を思ひの一つ前とは
はや合點で日のさゝぬ醫者
相談の楔に這入るふところ手
物思ふ命淋しき火とり蟲
乳母が口から枯るるからたち
門とへば蒼朮うりのころぶ方
まくら三つで夕明るき
えんまの口へ入れて置く文
くどき掛れば粉藥を呑
陰へ〳〵と娘たけたり

身の內の知惠を搜しに日を塞ぎ
いく泊來て見ても木枕
所帶崩しの眞直に寐る
よめば痞にあたる一通
屋根ふきの氣付と思ふ顏が出る
髮結の五十になると消失せて
佛をあげて濱の貧乏
娘の顏を二親が喰ふ
料理人煮立る中に五十年
屆かぬ文の關口へ來る
恥の飛脚のひそ〳〵と着
遣た金の大年に見え
はだか身へ來る湯女の胸ぐら
鏡を見ぬが僧のたしなみ
飛脚まで輕い異見を口うつし
死にさうな人見えぬ伊勢講
よそ目に成て見たい我顏
後ろから見て長い看經
女の譽る女すくなし
胡葱も葛籠の紐も結び捨て

雨乞の相談に乘る大井川
吉田の風は二階から上
四角に物を仕舞ふ隨身
十月は夜へ突あたる鞠
去らせる狐まち〳〵と泣
屛風が立てば悄い世の中
女房の留守には減らぬ唐辛
下町は餠差の心屋根を行
恂久は茶人の譽る物狂ひ
桔梗を見るとをどる姥
くろ髮ふたり向ふ柴の戶
月の前にまざ〳〵置て初瀬山
灯が消て六疊敷を廣く寐る
荒行戾り脈をとり合ふ
狸寐入の夜着に洞穴
秋淋し浦の苫屋も腐れたり
瞽女の顏からとぼる行燈
裸で寐入蓮の稀人
つむじが卷て上る笊蕎麥
めでたい人の跡先がなし

腹の隱れる仕切場の錢
六字に一字すゝめ寄る閨
なびかぬ娘敷屋を飛越
人屋に屑の殘る葉櫻
今出せば人に恥し土用干
顔を見て居る舞の始まり
金を握て尼に成り事
目薬の顔も哀にかしこまり
遠目が利いて舟へ默禮
下の關ではをとこ也けり
蚊のまじなひに娘なくなる
二十五菜で呼立て花
腹形も所に寄てたゝきけり

不騫不崩

忘れに出たに能く似たる顔
玉川にさへ毒のある人ごゝろ
菅笠の雨に我身を抱て來る
赤子の藝の言ひ立をする
秤にかけて乳母を極る
むらさきに合ふ京の立物

百日紅に飽る順禮
奉公をして孫のない顔
切れを集めて尼の述懐
火焔と不動別の風呂敷
我一生の損は女房
傘で出る日はこはい物がなし
去られる側で下女が分別
座頭の智恵のうごく闇の夜
書置が出てふかす强めし
何と思うて爪をとる婆々
招いて利かぬ跡が手拍子

八體百韻獨吟

正風不易　紀逸

我にさへ分らぬ空や八重がすみ
笑ひの種をおろす山畑
朝旅籠さくら鯎の膾して
しめした跡の匂ふ燈火
ばら／＼と雛ひく鳥の立まどひ
なびき合たる篠の秋風
きのふから床しきけふの月の宿

あらき莚にわたるはたおり

談林未體

侘しらに猿粥焚いて暮は雨
軍破れてふるひ／＼來る
貴妃舞捨て遠山の雲しぼみけり
蟲齒一枚戀のうらみなる
逢はで夜は水に扇の角とちて
琴涓々として膝に川を倚す
帚丈に垣は正木の深みどり
柳高野山と申は
さへありげに珠數押揉で月照るや
菊に匂へる女儒の爪先
各當座田家の鹿の聲そへて
司ニ日西ニ搗屋道暗
分散の花に對して思へらく
元緒はらつて誘はゞ蝶の

美濃一風

說經のやうな戀路にわかれ霜
さうであらうとおもひらり／＼
はご板に鍔の所から牛房二把

大坂もとの大坂ではない
爺さまの角々に婆さまは輪を懸て
いつもわる口言ふな長老
疝氣じやと濟して置けば又一つ
さらば〱の門に松風
甲着てふり向た繪は何にやら
壽永の秋の笑止千萬
歌ばかり芋ばかりにて月の友
こなたの好の砧かりがね
ちとづゝも減にははやい桐柳
かうした時のちからには酒

温故知新

朝比奈が居ねば六文抜けた和田
烟管しつかと腕に三つ引
腐つても若衆女は見るも嫌
狐を化す狸先生
道德は平生に米櫃空明
迎紫雲觀音勢至相肩
念て見る夢は五臟がからくり師
月雪花もしらぬ嫉妬氣
油燭は所帶じみたる丑時參
休む間は尻に履く下駄
飼葉吠馬は頭巾を腮に着る
盗俵の腹は急減
伍子胥とはうら主の眼を抜く手代
一世の業をさらす鐘掛け

京師一派

引とむる方もなく只みだれ藤
春くはゝれるちぬのますら男
川垢離のぬれ身に蝶の養はれ
ふたりで二挺弓に寐る船
しら樫の葉末に狂ふ日の機嫌
天下寒がる千兩の點
まくるともなく三幅の夏衣
園に分かる甲斐の軍兵
うしろから箸を出されて雲沈み
こゝが相談地にあらば鳥
床敷いて遠く行く灯の松浦姫
補藥のなつみ海山を抱く
十露盤の晝から逢ふ三五の夜
葛うらがへり伯父曰く

宗因一風

袖の露しのぶしのだの色にかへよ
終は煙の和泉新田
念佛講臺の蓮の葉取して
孤雲の上へ夜食窺ふ
天人の囃子はじまる鉦太鼓
迷ひ子を呼ぶ三保の松原
米相場その夜上りて富士の雪
牧狩の手代は例の梶原
請人に急度預ける紋盡し
めがねを懸て見屆る生駒
火々出見の恪氣も御年寄られてぞ
もえたつ花に異見する雨
雲も春かつら男の長刄折
押への聲をうぐひすの引

五色一變

兩國に二つの橋はねとられて
十九の年ををどり子の闇
うたゝ寐の夢の通ひ路たて切られ

わた屋が越して聞なれぬ音
肉桂の匂ふ薬に飽もせず
いつともなしに所化の鼻唄
一度づゝ手なみを見せる稲荷殿
木々を剃こかされし木がらし
鎌倉は旅の衣の下稽古
とにかく色のわるい總領
題目に伊達を付たる數珠の房
逃るうき世を松風が追ふ
述懐は三十日に近き月の軒
餞にも拔る薬のしら露

當時壯風

見て居れば二枡遣ふ女郎花
あだしあだ浪戸口まで來る
傘も何ぞの時のはづし所
翌の節句を切刻むなり
らふそくの片明るいに一つ星
うしろ間近く大名の音
我にさへ分らぬ空や花の雲
笑ひの口をひらく山々

俳諧武玉川五編 終

宝曆二壬申年秋改正點譜

不騫不崩　杜五点

胸裏斗　廿、

清明滿夏雲　十五、

天堂之用　十、

即墨候　七、

結隣　五、

雁字一、七一、

四時庵紀逸

俳諧武玉川六編序

和歌に篇序題曲流は、五句の作りざまなり、連歌にも上下に分ちて、云かなへ侍る、誹諧もつて斯なるべし、されば一句安らかに云流たるは、篇序題なり、季吟曰、篇は人の許尋て末門にたゝずみたるなるべし、序は取次などを侍ほどの事なり、題はその用事を云出すなり、付句曲の心有て言ほどきたるをかしみは曲流なり、此二つは用事の趣を辯否に述て、扱いとまごひをなして、その門を出るなり、三句のわたり見渡しの模様、こと〳〵く右の心得あるべき事なりとかや、誹諧はこと更に、句毎に曲有て、興をおもてとなさでは、誹諧の本意に叶ふべからず、さればとて又あながちに俗談平話のみならんもいやし、雅にして興たるべし、景情を宗とすべきにや、付合の事第一なり、尤前句をはなれて、工案する事はなき物なれば、おのづから付かぬと言ふ句はあらねども、其付方前句の體と用とを、よく勘辨して付る事肝要也、

　人か碇かともでどんぶり、

深更にあやしき物音は舟盗人と前句を見て、

　熊坂が長刀とても盗み物

と付たり、是盗人と前句の魂へ付て置て、扱一句の曲節思ふ儘に作りたるはたらき、准てしらるべし、只付る事のみを専らにすれば、一句前へからみて、はたらかれぬものなり、仍てその付物をよせて、句を仕たてたる晉子の妙、誠に仰べし、

俳諧武玉川六編

　清池満夏雲

むら雨に立た障子の暮かゝり
かきつばた疊のぬれるいとま乞
土手で逢たと云さうな顔
かつがれた日は客椀で喰ふ
稀に比丘尼の小間物を呼ぶ
總領は棒の師匠に名を貰ひ
天の川寐て出る顔も大事也
山雀の藝も水から汲習ひ
むいて干ても夕顔の宿
三重で藪入に出る草履とり
此蜆壁で死とはおもふまひ
新造も水引ほどの縮りあり
ひよこなづける舌のはたらき
有難く着る六月の蓑と笠
どろばうのやうな男を可愛がり
赤猫の折々年を算へられ

三句のわたり、誹諧第一の用心也、句毎に前へよく付けて行物なれば、打越へかよひ安きもの也、仍て一句には轉の字を、心に急度かまへて工案すべき事なり、古書に第三ははなれてすべしと言事、第三とても付ずしては本意ならず、此はなるゝと云字、則轉の字也、發句景色なれば、わきおのづから景也、第三又景にて付る時は三句一様なり、仍て此所に轉の心有て、人倫か居所か伎藝器財飲食のたぐひを以て、その景色にあそべる所を付れば、わきへよく寄て發句へ返らず、句意あらたまりて四句めも付よし、中にも分て越へかよひ安き物は、人倫場所なり、人の越は藝能衣服食物、どれにても人に備りたる事はこしへ返るなり、此所は景色時候を以て付るより外なし、扨場も越をのがれがたき物なり、たとへば吉野山釜山海と越にありてこなたに、廊下窓とありても場のかよひは同事なり、これらの所よく〳〵心を付て工案有たし、當時誹諧さかんにして、いづれの巻々も秀逸にして、金玉を繋るが如し、日々愚判を加る中に、たまたま漏墨付け墨の句は、付合のそむきたると越のあしきなり、尤即座急案の誹諧多ければ、沈吟に及ずといへ共、右の心得平日にある時は、をのづから付合そむきたると、越にかよひたる趣向は、心にうかばぬ物なり、業は向ふ所に有て、術は平生の心にある事、是執行のいさをしと申べきにや、此武玉川の句々も、初篇に申ごとく、一句々々に前句を備ふべきが、さあれば丁數しげく、見る人もわづらはしければこれを略す、熟達の人一句を甘味して、おのづから付合はしらるべき事にや、さりながら又等閑なる方々もあるべければ、あらまし茲に付合わたりの心得を申侍る、是又世上の人に對せるにあらず、初學の門人に答る机上の雑談なり、

立聞のかけて歸て高わらひ
一夜鮓姿がつけてもらはれる
鵜遣ひの四十を越えて渡し守
紅繻絆云はれ序に肌を脱
端女の夢に小間物屋死に
踏めば隣の起る蓬生
乞食の猫の吉原へ來る
うぐひすの咽を給がかはかせる
かはらず若い觀音の顔
胡葱に何か云たく膳をすゑ
女房にむかしの若衆引あはせ
かわゆさが餘れば錢に羽がはえ
腰帯を締ると腰が生きて來る
膝の下から見える細見
猥が過てたうとう墨ごろも
袖留て半分消るせたのはし
品川の見せが引ると式舞臺
物さしで足らぬちりめん打たゝき
遠くへ投る瞽女の賽錢
松風の吹きくたびれて竪に降

行燈を消して云ふのがほんの事
三人となれば哀な傘の下
尻のためにはならぬ前帯
足どりも仲間はづれの神馬なり
表具師の家内を呼でいたゞかせ
退屈の目をかき廻すめだか舟
厄をおとしにくら闇を行
娘にはりの出來るうば玉
下谷から見れば上野も峯の松
銀閣寺金閣寺より慾がなし
むづかしきねぢり服紗も一むかし
西明寺どこぞで知れる錢遣ひ
横屋の女房しんとして居
生酔の隅から起てねづみ色
關守のある夜狸にかぶせられ
縫出した袖が娘の病なり
山茶花や呵られさうな戸を明る
五位鷺はしら鷺よりも反り返り
衣がへ夕べの夜着へ振かへり
間人が有ておもふほど泣

面出しのしにくい月日過て行
むらさきは都の水に突出され
霜月の恥かしい日と成にけり
硯筥よせて古郷を詠やり
うそをつく聟を／＼と染物屋
ゆゝしき大事鼻に出來物
見てみぬふりも獻立のうち
寒一つ通した聲で奈良晒
たうとう酒をやめる鐘つき
早乙女の中で納るつむじ風
をどり習うて和歌のうら立つ
護符をやめて揃ふ盃
きり／＼す都の土となりにけり
晝顔を朝顔にして食好み
光陰も一幕過てほとゝぎす
串柹に終十月もからびけり
田植の馬の庫裏を近道
質藏立てゝよその夕ぐれ
命かぎりの頰ずりをする
廿日のゑびす人中へ出る

肩をならべる三十日朔日
反り橋で夜の明ける大名
夏もわづかに小蠅なす神
淺草はをとこを繋ぐ鐘の聲
竹町をせみの小河の思ひきり
うかれ女の土藏と思ふたばこ盆
盆へすり／＼婆々のせんたく
梓のあとに母のつれ／＼
見通しに生物知りの二三人
鼠の巣から持て來る尻
ひよこども氏子一人を追廻し
槍持の鉉はと尖る初あらし
十九迄振る袖もからくり
蓮見戻りの衛士と連だち
遠くから見た詞なりみなれ棹
飛脚の顔をあふぐ女房
同商買のふりかへり見る
ない智恵を振ふ拍子に鍔が鳴
あやかれと座頭をなぶる一夜鮓
あはせ鏡へ吸上るかほ

水くさい奉公をする小風呂敷
不機嫌で一生くらす銅盥
温泉へたつ朝もいたい口上
向うの母は抱込んで置
町屋敷總仕舞して總仕舞
浪人の顔の引張たうがらし
云事のそれ切で濟むきじの聲
二つ鳴らして袖口の出來
生て娘の代る人參
噓を感じて戻る掛乞
隣から張合もなく聟を取り
八幡へ向いてうごく唇
庭鳥の樂屋へ這入る生姜市
其とゝは添はうくと縫習ひ
去り狀が着て初て段かづら
火もらひの吹きく人に行當
やり手は外へ出てもきりもり
よい顔に肝のつぶれる八重葎
からくりに旦那の登る米問屋
人さへ見ると死たがる婆々

杉を吹く少の事で松の風
ほんに泣かせて三味線がやむ
朝顔は一群づゝのわかれ草
消えて行く虹をおはへて灯をとぼし
淺間と聞いて伸上る妻
遣り手の珠數のくら闇で鳴
仲人と云ふも出雲のつかはしめ
目藥に添て四五枚照紅葉
馬に仕立る鎌倉の牛
からかさを廣げて置ていとま乞
稻妻の日口へはひる水のうへ
その五段めを元の羽二重
酒の肴に怖しの餅
吐血して元のむすことなりにけり
乞食の下駄で三日の原越
素人へ近い女郎の顔淋し
口寄は客のあるうち寐かし物
細見は目がねの入らぬ道具なり
小町の留守に空を見て居
呵られてやぶれかぶれの面白さ

世界を藪へ入れる勞痎
いき過ぎ女の京を鶴で居
しらぬ妾を憎む百姓
蚊やから除る剛力の足
御隱居は廓の恥を嬉しがり
座頭の持てまはるさかやき
囃子の樂屋乳母も來て居
去るくと云ふも木の葉の青い内
晝顔はどちらの露も間に合ず
夜夜中草鞋をはかせ奉り
我顔のふえたと思ふ稻光
幾日笑はぬ尼の主從
淋しさを新黒谷で殖しけり
水仙を供に持せてふり返り
尖針の奥に妾のつんとして
江戸へ使に出ると日がくれ
年寄の中に交りて岩つゝじ
此耳は留守かと人に引ばられ
身代の因果は怖い物がなし
賓盡しも下卑が半分

焚く顔ばかりそれと夕ぐれ
入相に鞘當をするかんこ鳥
池上が見えると尼の口を利
垣間見の尻は出て居る片折戸
脇差と扇を妻はしやんと持
總領の智恵はうしろに付て居
二年めの土用干には雛ばかり
十で三文ほどの言傳
去られた町へ意地によめ入
御捌に古歌も交りて面白し
口留にあうて五菜の戻りけり
しら髪は床しい時の見物なり
汐干狩さすが見て居る女形
女房に成とたちまち傾城め
隣でも草津へ立つはしらぬなり
晝寐の顔をなぶる手雫
容體は母に言はせて畏り
船頭を止た噺の怖しき
淋しさは五日の女房律にて
利口に成て大門を出る

是もこれなりをどり子の姉
屋根葺を幾度呵るも同じ事
牡丹の蟻に袷着かへる
草餅もきのふの原の匂ひあり
化もの屋敷水が名物
大將も箸さへもたぬ時もあり
むすめの謎を伯母が來て解
大根の襟も靑い六月
侍の冷飯喰ふもあはれなり
雷に二つ鳴られてかしこまり
言譯のくらい顔から灯がとぼり
關守の寐亂て居る靑あらし
琵琶を彈く日の寺に足輕
よだれにて牛は愚に見える也
白い所は慾のふと股
入聟と見せぬ仕方の手強くて
その當座過ては尼の沙汰もなし
うば玉のともへは兜着ざりけり
若代に成て下手なぼた餅
繪踏に向ふ君が高慢

こゆるぎのいそぐ娌にうら表
菅笠は照ると降との二おもて
桔梗さへ淺黄がちなる鳥邊山
人に見られてきえる奉公
傘賣の秤に違ふ尾長鳥
互の時宜の遠い元日
咽の後と先とは立ながら
かまぼこに煙る亭主を見ちがへる
尼寺にまた見ぬ顔のふたり迄
碁打と中のわるい門番
法華經の唇ばかりいそがしき
尾長鳥小町の讀だ跡を啼
黑木の宿に齒の足らぬ櫛
觀音と言うても摺木あらく成
紅裏にはねを蹴上て道成寺
傾城の離した爪に物着星
椎の實は曾我兄弟の泪也
關守に見立る顔はほろにがし
うまい事段々見えてくすり喰
身のうちに耕恥かしき桐の花

十六日はうまい六月
又此無盡仇野の露
見ほれては口の淋しい淡路島
瓜ぬす人の瓜でぶたれる
飯賣に起して貰ふ雪の竹
遺言までをあかす懸乞
冬籠惚れた團扇も骨計
大根で蚫をむごいめに合せ
冬籠八十八は怪我のうち
我が身で我身を來ては淋しがり
ほら貝が鳴るとつかんで待て居
十七屋立横に寐る人計
三百兩はむづかしい金
行顔に行れぬ顔を窓へ出し
塀越にみれば槍にも浮沈
後家の名に石部金吉賴母しき
池田へ直に送る乘物
大きくおもふ元日の耳
番町は役の行者の細工過
三浦から玉屋を呪ふ衣配

曉の聲を聞知る峰の松
亂菊やみんな尾の出る供廻り
まだ顔も三十三で面白き
胸の火は晝より夜へ燃しざり
女郎買はだかに成てよみ返り
つまむほど夜の音ある藪小路
寶くらべの宵に欠おち
逆修を立てて新造を買
菅笠の中へ帶とく眞菰刈
去り狀で元の從弟となりにけり
店がりは二百十日ををかしがり
取次はやり手のやうな御物いみ
番付を枕に敷いて雨と寐
前帶で横平(柄?)らしい正氣散
鰒いつか霞の中に腰がぬけ
敦盛も討るゝ比が聲がはり
ふむ陸尺のあきる十念
うぬを見て居て譽る長持
日蓮もをどりのふりを付けし人
三疊敷が聟のかくれ家

今年まで隱した年を大地震
やぶ入の先親指がさかい町
とりあげ婆々に歩行せて見せ
煤掃に人形が出て又泣せ
草履取こらへ兼てか棹をさし
炬燵にはえるやうな母親
うき時に晝と夜とを寐くらべる
一門に突放されてしかの聲
西瓜好指をさゝれる行所
ある時は妾の手から水がもり
よいをとこ貧乏神の氏子なり
女房のそらで覺る藏の内
麥飯に陽炎もえる芝の奧
月並の丸藥呑で衣がへ
毛見が濟でも止ぬ横柄
ほねばかりなる寺へ秋風
恨寐へ羽折掛ればはふり出し
十二銅主のあたまを越えて行
狸寐入の脇へ付ざし
高野ひじりの大晦日出る

はさみ将棋の強く成乳母
尼の唇のよ所でなくなる
咽がかわくが瀧に鳴鹿
總領の馬鹿を弟で埋めて行
三世相見て下女が鹽斷
煩の時はやり手もちから草
逃たいと云ふは互の口計
六月のふとんは屋根へはふらるゝ
短氣の道具弓矢八幡
妾の里へ向ふ詰飛ぶ
念佛を面白さうに老にけり
病上りきたない膝に遠めがね
正月に閏が有つてどらをうち
自慢する氣も起々が大事也
きかぬ處押肌ぬげば緋縮緬
親方の起す箒は餘所を掃
女の顔の夜近く成
ちよつと來て履かへて行く鉋屑
鹿聞の初たけ一つ持て居る
娘の雛の翌る年來る

よいをとこ吹流されて人に成
夜なべの膝のほつかりと出る
備留て男と物を云ひたがり
閑所の鼻の赤い木がらし
闇夜にほねの出來るさゝやき
顔を撫よと羽箒を遣る
雲水に出立二人も畑泊
うまい事書く極月の文
惜れ子握り拳に喰あきる
さう〳〵は最う盗人になすられず
十露盤を伯父へ直して消えたがり
物思ひ例のうちはをかじりけり
此世の數に入らぬ六月
神鳴の夕べにこりて夜着を入
うまい屏風の中へ雨もり
柔取めつたに人へ寄かゝり
藥喰こたつやぐらはひえかへり
白魚のまた恐ろしきゑびす講
妾の里へ落る入札
とや隴の人に逢れぬ物思ひ

土產のうちへ入れる吉原
脈に恐れて習は定まる
日待から娘に犬を付はじめ
道草が奉公に成わか菜時
山伏の穴を言出す狐つき
放し雀の竹町へ飛ぶ
相違なく二階へ生る水の物
河たけの年を盗むもあはれ也
同行五人四人は痛
恥かしい元は四季着に品が付
油揚の仕方も四百八十寺
ふすぼりくさい人質の祭
惡口を通して通る橋の上
紋所にもそんな母方
彌生まつ所帶道具の拾ひ買
女房に直すと奥の手が見えて
しろ餅を下前にする草の餅
六十餘州皆女形
一つ出來二つ減たる帆かけ舟
能い摘人來る雪の菜畑

よくこねかへす恥の翌る日
雪を見に行かば女房のない所
突つけらる丶六原の質
夫婦中水と魚とも案じられ
土藏が明て生靈が退く
おそめが供の光る棧留
久しい藝の賣れる青山
手桶で猫を捨る町代
祇王が簞笥皆下る音
らふそくに彌駄の手の筋顯れし
座頭の坊裸に成て袖だ丶み
松が岡をとこに犬の叱か丶り
ゆく秋は百人町が死所
茶筌うり子も七墓を覺けり
引出しへひよこの這入る土用干
戀草や覺悟の前の唉所
金掘の面に命はなかりけり
つばくらは帆のふところを雨舍
三十年來日に餅を喰
縫ながら額で見たる言ひ名付

夜食にも出る親の伊賀越
志渡寺の法事浦の外聞
座頭にも結ぶの神の乘うつり
伽藍の雨戸蹴たり踏だり
隣からあぶなくおもふ譽詞
四十の赤子はつ／＼に產
つく／＼と後家は鮑を擧て居
かゝみ研古い玄關に大胡座
わすれはてたる膝の書出し
世を捨た身の煎藥に顏がみへ
海老に成るわと居風呂のこゑ
こそぐりに來る度毎に蚊が這入
出女の口ほどもなきつむじ風
うば玉に助られたる中の町
初雪を地主からして喰はじめ
愛相過て凄く成る母
掛乞の嘉例のやうにたゝかれる
をとこづくにて蛇の吸物
音頭取道陸神に寄かゝり
おふくろを泣せて歸るみつ物や

小豆餅是で一首は是非もなし
　胸裏三斗
帶も日も短くなりて初しぐれ
淋しい足りにならぬ兄弟
つら／＼と大宮人の買がゝり
義之を習らへば親は苦にする
放下のやうに仕舞ふおや椀
淋しさに屁をさそへば猶淋し
娘のはたち家につかへる
いとこが死／＼ですたる飯汁
どつちの取かしらね寐ごかし
座頭が着れば若いむらさき
松魚の聲であがるさみだれ
峯の松をしへる人の裾をふみ
内に居る日はあまる抱守
ねはん會や人も枕をほしげなり
新溫泉のゆかた紋を案じる
藥でもいかぬ病が丸はだか
立すがた見てみたい寐すがた
四谷に住めば馬の世の中

最う一兩ときせるにて書
大かたは取返さるゝあくた川
梶の葉で嬉しい顔を撫でて居
かぶせた鍋を棧敷から見る
出女の役者をとめてふところ手
古郷へ向てつまむ新米
溜息の灯火へ來てつきあたり
抱付て向うへ見せる米俵
妾の小言桶鉢の漏
勘當免す母は着かざり
廻廊に向ふ下りの普門品
夜鐙に手燭の持人うつくしき
落した馬を餞別にやる
斯う死にたいと夜着に三人
拭けば又書く六波羅の壁
我せこに蟹の逃込む笹の音
呼返されて吝(しは)ゝふりむく
御油は家來の呵られる宿
野郎の文を拾ふ棹川
あぢな形見で引料が入

江戸見坂みんな世界は男の子
猿がほしがる蟬丸の撥
音頭の扇今朝は明かね
横笛吹けば須磨で怖がる
女房を田が見えてから歩行せる
禿よく大事の事を云はぬなり
何か賣たか木場の吸物
又一廻り借夜着を着る
獻立を合點して行く夷講
一もみもんだ跡の名代
闇の夜の使に調市(でっち)死かゝり
三社の詫のわかる女房
子を譽過て親はだいなし
七符に寐せて尻に敷れる
總本寺まで知(しら)れる堪忍
おもてへ向て居る針筥
どこぞでは振らねばおかぬ草履取
女房の云た師走に成にけり
木馬の腹の寒き入相
ぼたんをつかむやうな胸ぐら

妹にして置もそろばん
緋ちりめん哉鬼のふんどし
五十から飛んだ商なかりけり
枝豆でこちら向せるはかりごと
鶯の子も口ばしるゑびす講
納太刀雫の中にかしこまり
遺言の妹には最う届かね
五十年能く納りし無筆なり
講中寄てほめる戒名
寒念佛むかしは飯の世なりけり
聟が通るとふれ歩行く乳母
日光の土産に人を怖がらせ
持主へ抜身戻てたそがれる
惚れた人來て鳴らぬ三絃
なりけりにして關を出て行
一夜で笛の入らぬ牛若
しなりくなりとしても子が出來
ちく生が戀しく成て前渡り
溜息の向うは燃る火吹竹
關へちろりの通ふ栗橋

ふくら雀も譽られて死
雨の日の忘れ草にも蝸牛
なぶれば暇を廻る早乙女
地主の自慢水にとゞまる
伯父も揃へてむす子粉に成
二百十日の疵は晴天
野郎廻しの醉と名言
江戸は蛇が出て暑い朔日
命しらずの汐干仕あてる
狸も化て見ようもの哉
云ふなとばかり殿の口留
町内に知る人もなく竹を植ゑ
挑灯三張はれな生醉
納豆汁を隣から替へ
さんご珠に若衆の齒形いさぎ能
出雲を急に見たい十月
肝の所へあてゝる鐃鉢
濱荻は兩方ともに云がゝり
すつぽんに拜れた夜の暖さ
笑た所へ中椀がゆく

母のない娘を側にあじろ守
河原の院へからかさを干
さくら痲むかしの人の名も忘れ
茱が出盛と日歸りの旅
四條糺は六月の川
十八粥は不斷着の儘
世の中を通り過れば鹿の聲
唐紙のうしろへふとる物思ひ
裸でと云へば娘はをかしがり
さへ人は握り拳を持て行
長普請釘の名迄を覺けり
兒(ちご)ひとりいつ迄草の目を病で
よける氣で居るうたゝ寐の足
やり手がむす子齋日に來
こと葉を殘せ闇も有べし
我思ひ皆寐せ付てかしこまり
石の降る夜は甘口でなし
立往生ははれな往生
芳野紙佛の道もしぐれけり
永代を節木隱れの繪馬が行

鬼千人でつゝき出す嫁
傘の下を時雨る小姓髮
つかめば消える傾城の乳
送り來て潛りを覗く美しさ
留守の手がらに子を産で置
とり付にくい顔へおしろい
手桶を見るとぞつとする聟
云ひ甲斐なくも品川で死
うき世繪を譽てそろ〳〵當こすり
狐に隱す闇の冷飯
蚰蜒(げぢげぢ)に椀をかゝへてすつと立ち
藏へ行く給仕に乳母は云ふくめ
顔つきも夫ほどづゝな物を買
寒聲の遣ひ餘りが庵へ寄
氣違の見覺えて居る都鳥
なびかぬしたく突袖で居
ほくろのぬけて廣く成る顔
鯰を捨る舟の明星
から鮭に成頃が闕守
向うの恥を蚊屋に釣上

白鷺も紅葉の中は酔て飛
美しい取次の出る十二月
九十九夜能い日和をばひし隠し
無造作に明る簞笥の恥かしき
出て行くと思へば家が高くみえ
戀の闇明るくなれば命がけ
夫婦揃つて神酒を酢にする
公家のはだしは深草が先
秋風の覗懸りてみそぎ川
裸で聟を居ゑる正月
一ぱい喰うて二度に出る澁
尼あたらしく嫁連て出る
女の舌に怖いあわもり
左右から口が尖つて松が岡
埋れ木をつまみ上たる又從弟
面白い字にかはる年號
家買て恥かしがりし女形
三十日の顔のぬかる子卸
格子のうちへ借りる錫杖
云込められてうごく唇

病上りいたゞく事が癖に成
はごの子も斯う恥かしく成物か
買うて喰ふ時も出家の手を合せ
松蟲の終に命を鳴ちゞめ
ゑびすの前で晴な商
使に筆をおろすあさぢふ
隣も起て出たるうしろ手
一夜泊の乳母に岡崎
緋の袴小町の氣では恥かしき
玉の緒と外の事には書にくし
狸の腹は根生が鳴る
吉原の人は千住の蚊にくはれ
一先夢の覺る三十
勘略にはふり出されし黒小袖
格子の外をつめるけいせい
薑の匂ふからかさを干
大三十日舌を抜るゝ覺悟なり
きのふから時雨の溜る捨小舟
石屋へ戻す後家の傘
人の吸ふ酢にあちら向く母

茶の花の茶ほど世間をしらぬなり
小野郎ふえて歸る太々
一日の遊び納に鳥を寐せ
御息所の夜半も冷水
白拍子行先々で寄かゝり
丸藥の利く賴母しい母
櫛が明たと訴をきく
座頭の坊一思案して袖疊
盆の來るのが七夕の疵
女の料理吸口はなし
似た／＼にはや五六兩倒れけり
女の汗は押つけて置く
三度の勅使降に出て行
松風計る住よしの枡
我所帶錢に崩して入間河
一月を十日牡丹に嫌れて
身柱(ちりけ)から先へふさいで山颪
正月が四十を越せば飛で來る
惜れ瞽女のこそ／＼と喰ふ
池田へ直に送る乘物

よるべの水にあり〳〵と錢
蓬萊の前うしろなき松の內
樟腦匂ふシテのはたらき
飛々に日のあたる村雨
三分と錢にすれば魔がさす
文の長いが損のはじまり
あかれた顏に損な白粉
とり込む母も元が錦木
うしろへ步行く神子のくつろぎ
よい夢を御覽なされて小豆飯
元舟の中にも露の置所
妾の息のかゝる足輕
藥師も常の夕ぐれでなし
家內に毒の多い後家の代
膳の半ばへ袖とめた顏
居風呂に沈んで居たる十二月
九尺店夏紋が借りて引延し
金剛杖を正直につく
物着星大たばに出る夜着ふとん
穴を云れて着直して來

小袖皆こかし課せてさよ嵐
眼をば夫へゆづる潮煮
一周忌佛器も後家も美しき
初午の翌は狐も人に成
腹立を踏付けて行上草履
死ぬ事のいやな時分に西行忌
云んとしたる口を看經
俎箸を味に持なす大江山
新地の輕子棒の突初
人形屋から乳母に名がたつ
冬枯に物知顏な麥畑
吉次が着て若く成る夜
つむじ風紙屋の人の氣が違ひ
內證は金もふらぬよし原
譽られて淋しい物は女房なり
高々と傘さして行く烏兜
入聟の客い所は都鳥
茶椀で呑んで見せる逃懷
忘るなと云ふを覗けば山椒のめ
つばくらが來ると炬燵はうつの山

はやまつて履く雨乞の下駄
大名の中高に成橋の上
丸木橋あぢな道具に遣はれて
旅の拍子の拔るみりん酒
引くに袂の長い日の本
三谷の屋根をかける田鼠
鰹に笹をくれる氣違
悋氣には旦那が負けて埒を明け
四十から水くさくなし靈祭
似合うたと度々宿へ御言傳
いつ迄痛の門戶さしたり
互に二度め取にくい棹
土用干親子並んでうそを付き
今賣る家で薦刈を舞ふ
ふところを出る八瀨の縫物
呑む關守に棒の手はなし
今度の和尚大工半分
物おもふ時大針に縫ふ
けいせいの子も這ふ程に成
大わづらひか藏へひゞける

さはれば痒い牛若の鞘
晝過の衣淋しく二つ折
三代迄は續く借金
顔にかけ直のやうな白粉
師走静に起る古御所
貧乏の尾の見えて來る銀河
ついと立たでこまる若殿
うかれ女に可愛がらるゝ物貰
記念のかつら素人へ行
ぬくめ鳥とは老の云譯

不騫不崩

腐れるまでは飛ありく鯛
夢を跨いで夜をしのぶ草
拜むほど樒で掃てかしこまり
由良の湊に寒い兄弟
今の女房の請狀が出る
四十から鏡をみれば腹が立
土藏の見える木がらしの影
いさかひを濡手で捌く池の坊
寒をにがさず江戸中が餅

百夜の小町着た儘で寐る
蝶々の灯を取習ふ石どうろ
下戸ばかりそろ〱外す新枕
槍持をはるかに招く白拍子
寐もせで牛の梶の葉を喰ふ
大きな聲をもたぬ九重
梓弓出て行あとに盃がある

俳諧武玉川六編　終

宝暦二壬申年秋改正點譜

不驚不崩　廿五点

胸裏二斗　廿九、

清地満夏雲　十五。

玉堂之用　十、

即墨候　七、

結隣　五、

雁字三、卅二

四時庵紀逸

俳諧武玉川七編

清地満夏雲

橋に成る葉はまだ青き天の河
若くてさびし大山の御師
口明いて金柑をまつ座頭の坊
立ながら見る大部屋の賑
ねこに成ても産砂の側
大名もくどく時には山をいひ
長持で來る質の大詰
めでたさのけぶらひもなく表替
寶寺今涌く物は水ばかり
古手形杖にすがりて來りけり
御組屋敷の犬に通り名
蓮に向て文をよむ尼
金杉も戸を明る煤掃
荒畑に突のめされしゝのぶ摺
格子へ顔をたゝき出す鉦
新し過て買に來ぬ店

しのび駒こまかに唄を彈て居
草の庵押せばうごくがほんの事
丁子の匂ふ六月の闇
友達の狸寐入も恩がへし
淋しさを人の呑中へこすり付け
こけたかはりに京を鵜で居る
世の中は一つ叶へば二つ呑
かたみのぬれて屆く五月雨
少し下つて三寶院様
針を落して振ながら立
十日ほど物を言ねば夜が長し
能登殿はじめうき〳〵とせぬ
癩ほうし折ふし棒を遣はるゝ
うらみ同志の向ふ敷のし
かの燈明のきえる二代め
辻番と反の合たる小侍
酒呑の耳を突ぬく鯵の聲
若衆ざかりに縞を着盡す
鹽曳はあたまに成てむづかしき
たけは佐久間のおたけ限り也

なみだのうへにすわるあみ笠
狸が死でにぎやかな寺
木幡のさとに續く馬の屁
くろ髮を切て出されて跡しざり
說經は書院をしらず老にけり
はなして見ればふたりうき人
茶の底をくむ婆々の念頃
翌の芝居に目が明て居
むす子を叩る聲もからくり
陰干の智惠を見て居草履取
賀茂河を一日なぶる蠅がしら
神棚へ手の行かねるあたり月
おもだかや鋏の利た葉ぶり也
葛の葉のおもてばかりの賴母しき
跡に行く妾の連る娘の子
我顏に惚れて大きな事が出來
正燈寺常は賣られぬ所也
茄子一つころばつて行くさくら河
夕顏はあつかましくも實に成て
かつら着ぬ日は正直な顏

質屋からむごく當がふ隱し町
家内へ泣て見せる烛留
神子に名主の穴を言せる
縮のまゝくばつて戻るわたし守
四十から鳥の身持も老ぐるし
ごふく屋に黑い男の哀也
品川や口をそろへて夏を待
階子の恩も高きかさゝぎ
庄屋の智惠の手も足もなし
藤澤は少しおとりて口惜しき
香煎はうつる若葉を振ならし
咳ばらひまさかの時の道具也
三めぐりの日の稻の葉に照
飯さがす夜や喚子鳥啼
見る間にきえる吉原の鹽
出すほどの物に前句の物がたり
四條の屋ねに大文字の客
指折ればなみだの懸る鞍鐙
衣がへ今年も拔いて濟しけり
うつくしい顏を預かるかんこ鳥

しやぼんのきえる先供の中
かつらぎの髮を結ぶは寐る支度
眉にも思ひ切る日は黒くして
女の聲は低いよし町
書出しにぶちのめされたやうに成
佛を持て奈良の外聞
燈火で見る青草は眞の色
蟲干に笙吹て見て呵らるゝ
鴨の毛をひくなめ過た婆
すまふ太鼓に親分が出る
物思ふ時はきりゝと結び上
杜若一鍬づゝに穴が明き
代がはり皆化物を言伏せて
爲好も鰒の案じはなかりけり
らふそくの十文だけに山かづら
榊の色の惡い十月
そばを喰ふ番太が顏に稻光
日がたけて戾れば內は地獄也
有れば有とて汁粉三所
野中の清水葢なしに結

詫物に成て小町は年が寄
二百が藥でうまる中間
狸が呼で名をかへる尼
思ふさま切刻ませて御延引
衣さへ初に着日ははづかしき
橋がくづれて筏に柄をすげ
養生をすゝめる人が煩はせ
我思ひ撿校ばかり知つて居
煤掃の骨折賃に抱付かせ
高田あたりはまだ米を喰
御祓に元結一筋有がたき
取上婆々の罵に一ぱい
垣間見の穴を屋ねやに見付られ
質屋へくづすかさゝぎのはし
けいせいの翌の枕は翌の事
呵られし戶に口なしの花が咲
一つ蓮の箸で目を付く
ぬれ手で御師の取次に出る
廿日草あとの十日は降つぶし
分別の仕舞に出來る下屋敷

肘をまくらに黃昏が利く
入聟はやぶれかぶれの年忘
なみだはるかに能の手の平
桑名の茶屋も蛤の息
進んで這入る夏の穴藏
村中の智惠を集て仲直り
眞向は今に知らぬ仲人
檜扇も疊むとなれば亂萩
茶を汲で物思はせるのれんごし
その身を百としらぬ百姓
供がへり手廻りの手は有のまゝ
又たゝかれる京町の猫
雨と中よく仕舞ふ早乙女
御身拭(おみぬぐひ)人もはじめて汗をかき
山折敷神の手のくぼ心にて
棒つかひうそをつく手は覺えけり
流し目は古いやつにてうまいやつ
七變化顏にやるせはなかりけり
神無月まさか樒も賣れぬ也
不意と氣が付て淋しき四手駕

ひそ／＼と毒であかせる赤の飯
振袖をはさめば物が言やすし
一首名高く死ぬる迄酒
手の切る迄氣違のおそろしき
六地藏それにも顔の好ぎらい
雪かきの口へ押込む指の先
梓弓娘はつんと立て行
下り坂歸りに見れば情なし
起請なくして怖い煤掃
琴の音に聞惚て居る落しざし
飛々はえる婆々の眉合
をかしがる顔も世界の道具也
ゑびす講躍のやうな音がする
新關のとがめはじめに女郎花
鼻へ出る迄痰と言せる
支度して口明けに行炭俵
我内に見所のあるすだれ越
前帶にしたがる娘面白し
添屋の因果は外にかしこまり
恥から先へ咄す密談

あれ是に知られて戀の腰が拔
隣へ足の出る行水
泥くさき座頭を寄て洗けり
引けと出す袖も牡丹の色を持
賀の杖を酒屋がくれて驚かれ
はやり目のはやり仕舞は墨衣
枕にも笠にも肘のうきさかり
妾とは火を摺る中のきり／＼す
拂物言直に賣れて一思案
只一分有て淋しき逆さ桐
物いへば人の顔見る飼ころし
子をさし上て反かへる乳母
誤る方へ立てゐて酌
古い手代の湯へ長く入
落角を拾へば鹿が振かへり
音頭取男がよさに高い所
晝顔にきのふの酒のうらめしき
面目もなく婆々の藪入
三味線添へて京へ勘當
しなの路を生て働く赤鰯

おもふ屋形の三日めに隙
賣られる馬の顔へ日がさす
かはゆいが増て來る程にらみ合
小荷駄に痩を付る尺八
くぼく見らるゝ夜の大名
宿下の中折のする丸木ばし
請狀を出して奢の火をしづめ
面目もなく絲立を着る
木々も身にしむ朔日と成にけり
秋の數の人に止てむごらしき
年忘忘れずとよい人計
たんとも呑まず呑まぬ日もなし
二百十日にうまい三味線
胴突の向棧敷に緋の衣
顔ばかり心に見える梓弓
四谷も道の直る十念
馬喰の子も癖の付く酒
生身魂我侍もけふばかり
笑てもこぼれさう成むすび玉
寄かゝる柱もなくて年が明

晝顔に面目もなく蚊屋を出
恩を言ひ／＼馬の折檻
手のひらへ來て曲るまんぢゆう
おはぐろにさへ樂屋ありけり
はづかしの森の湯船を漕分れ
雪の傘突付られて輕く成
めり／＼と乘物ひづむ法の聲
病人の髭をほしがるまむし賣
箍懸の疝氣ははやく見付られ
名代出して通る袖笠
木々染て寺を寺には仕て置かず
朝顔の一夜指さす天の河
禿の年の捨鐘で合
山師の妻に利かぬ呪
撿校の物好は皆蟲の聲
精進落を知て言傳
突袖に人の妾の新しき
けふは他人のやうな隨身
澁柿の今に鬼門を守り詰
初ての亥子を女郎と武士

盡せとは親の口からめうがの子
二度しばられて狹い世の中
禰宜のさはぎも金程の事
いつとなく蟲を仕上て店を明
一つ宛階子の下のすごく成
六月のうしろ椙には灯がとぼり
閏で大で細長い年
大門を出ると女房が怖く成
知らざるを知らざるとして追出され
初雪をむごく扱ふ建長寺
若い時泣た手がらは末の松
悋氣女房の氣はつくね芋
一手桶とめる舅のきれい也
死んだ大工を寄て念佛
八重むぐら妹の息を笠に着て
山歸來呑み／＼聟に成おほせ
終泣事も出來る雨の夜
せり物にして仕舞ふ妹
寐妾は針立ばかり知て居
供が見て居て痒い盃

お局へ覗た顔はすなほ也
神祈る唇すごく齒をならし
物見から妾の笑ふ雨やどり
次第に遠き金掘の聲
御沙汰なし隣の嫁は格子にて
座頭を乘せてうそを付く馬子
二つ着て居る近い勘當
鋸屑の中にまじ／＼びしゆかつま
狸の辭世恥入にけり
なにはのたはけ伊勢の大馬鹿
桑の門酒屋は付た病也
母親を拜んで居たる夜着の内
割膝に成を女房のくづれ口
小舅といふ見る目かぐ鼻
常物を置ぬ所に眞桑瓜
地女の心に成るは眠い時
竈拂少ばかりは扇の手
十五迄無疵で育つさる屋敷
日傘の似合ふ乳母はちいさき
雨の降日は眞の浪人

縫を貫に廣袖で來
始末をしても入相の鐘
側に居ながら夢の浮橋
松明でしのび歩行し大昔
日のあたる夢をよく見る氷室守
さびしさの又女房に遣れて
魔所と聞く外山のさくら咲にけり
娘にもどる後家の身のうへ
下女がうらみは樋合(ひあはひ)で言ふ
辭世のてには直す本復
夕ぐれの生れ付たる横苫屋
老樂のいんぎん過て賤しけれ
革足袋の笑れて居る松のうち
座頭の異見一所聞
留守をちからに思ふ極月
生醉の杖にして行く向風
淺草の足留されて生駒山
あさ顏に明石は船のきえて行
いかなる乞食業衣に隱れる
深田のやうに歩行く蟲干

名護屋の秋へ孔雀出て行
女房にせうと酒が言せる
河原の院の中間は死に
どろばうに逢ひ身代を譽られて
今にくやしき船の横顏
雨風を選び覺えて肴店
吉原に生るゝとても男の子
暑く成程邪魔に成る婆々
母は八味を呑めと言かね
ぼた餅に名所のなきも哀也
松と風との甘い相談
茶湯して居る繪馬のけいせい
梅が香や猫もむす子も寄付ず
いか物喰のむせる付ざし
勘介としらぬ間は笑ふ也
妾の口の辷る誕生
まじめな顏へ突付る膳
大名の心はにくい十二月
慾德の人參を呑むはなれ際
三浦の禿正直につぐ

杉の梢へ牛若の時宜
水跡の干物毎に赤とんぼ
戀の世や鼠も文を持ありき
重箱で戸をたゝく阿部川
机ぐるみにしばられて居
盃も帆の有物が又めぐり
分散にうつかりと咲冬ぼたん
子を學ながらとぼす行燈
二代目の職は高尾が物に成
抱込む乳母を拜み禮拜
神輿の機嫌直るむら雨
淺漬を煩ふ僧の戀にして
去られても闇に來て見る蠅竿
八丈でひや〳〵思ふ夫婦中
夜神樂の翌は素知らぬ顏計
日も九つの猪牙に干瓜
品玉の頭巾にたまるさくらの質
大三十日その夜返してその夜借り
若衆にはくらべる程の煙なし
闇取のうしろへ沈むあんま取

手を握つたと御上へも知れ
わたし守愛相のない飯を喰
二百十日恐しい日は暮にけり
氣強い女がつくりと落
鰹から止る氣に成る大づゝみ
日のはたらきに今月も大
胸の火は一箸せゝるもみ大根
遠く成のを待て居る鹿の聲
横笛を堅に直して根顔
ほゝづきの奥歯に成るとうまい音
一首にて祇王が部屋の人だかり
北辰のやうに番頭大あぐら
末の娘は小つゝみを譽
二十五と十九の間も因果也
犢鼻褌をせぬは／＼と子をなぶり
元が太夫でおもしろい尼
高田の馬場に度々のうそ
間を立たのがとかく誤り
のれんもうちへ懸る身代
物干の伽にもならず脊によろり

妾の紋を見出す盃
鍬鍛冶の土にもならず有わびて
人を盗むも日がくれてから
夫の腹のもえる三味線
いもせ山女房に成て覺けり
御隱居は廓の恥をうれしがり
刈る池を母の怖がる粽草
一葉づゝ明るみへ出る石どうろ
吸付て出せばさし合ふ人ばかり
母に砂糖を付る人買
あきらめて行早乘の供
後見はうしろを守るうちばかり
居續の度に我子の丈がのび
一盃呑と衣ぬぐ僧
云事の云れぬ時に燒ぎせる
初雪を譽めぬむす子が物に成
低い咄の御座へ出されぬ
風呂敷包胸合ぬ戀
泣子を置て氣の若い後家
そろ／＼と役者の奢花八手

五月雨人形も皆がてん首
手の置所の知れぬ黄蘗
三味線のそろ／＼毒に成かゝり
命あらばとすねて出る朝
泣て寐る子もけいせいの相
時鳥鳴て芳野は闇に成
汐汲もころぶ時には女也
大判を書く橋のおく
三月がふさつて人が請に行
でつちの首尾の惡い六月
辛崎を素人にする鯒雲
泊らぬ座頭何ぞ聞たか
その口がいやさに陰で手を合せ
あてが違て二度羅を買
あぢな所の痒い氣のつき
來た時と越す時顔を見た計
古手形家名に成てうらめし屋
降雪のあたまくだしにかい割菜
首つたけとは下卑た惚やう
石といふ伯父を呪ふ東山

唐僧の喰ふ顔を見たがる

胸裏三斗

撿校に成て久しい腹がたち
二十餘年は隙な頼朝
喰付く跡を隱すかうやく
咄の聲の高い瀧守
はらみ妾の仕て取た顔
大事の闇へ唐紙が明く
蚊屋釣れば遠い所に三寸の口
母の自慢の國替を二度
いとしやと言い〳〵直切拂物
鎌倉へ來てなつかしき乏肴
駒むかへ帝の仕やうが氣に入らず
僧正の燃えてはきえる小松原
取れてうき世に邪魔な餘
日ごろの意趣と思ふ夕立
曳船の是非ない事を詠られ
元祖高尾を表具屋で見る
世間をば見るな〳〵と云名付
蒸籠積んでありかせて見る

言直に賣れて牙婆うつぶく
吸物になる鶴の若死
勘當をかくまふ人も着ず脱ず
窂僣を局と聞けば怖しき
金をほしがる雲の下人
請負も倒れ〳〵て八柱
替た所の吝い馬喰
女湯も二百十日も靜也
翌行く聟の胸ぐらをとり
屋ねから夜着をはふる六月
後からわけの知れる强飯
鍋二つかぶるかはりに通りもの
地黄が利いたうへて欠落
子へ撥を借す瞽女の愛相
打敷を見に寺へ行く母
屋ねから落た人と酒もり
珊瑚珠が二つにわれてひだるいめ
醫者のしはみと見へる甘草
公事に出る夜はうつぶしに寐
逆おもだかを譽る佈屋

貰ふ使の中居つぶれる
竈を膳にして喰ふ八重むぐら
事觸と反りの合ぬも面白き
時鳥一羽々々に夜が詰り
どつちも十九智惠の有たけ
目藥を淋しい所でさして居
行々は相談のなる尼二人
庵新しく人に手を突
くらい所で晴す存分
秋葉の猿も世間物也
槇屋の顔の遠い極月
彼岸が降て和尚是まで
煤掃の役に立すはうつくしき
寐ころんで雨をうまがる三下り
念者の顔も孝行な顔
帶をやたらに抱て湯上り
摘上て宇治は四月を枯野原
さよ衣とは言はぬ顔付
二階の用を仰向て聞
翌からは佛へわたす御祓川

子故の闇のうへを行闇
おもしろい物初ての勘當
土筆袖から出ると灯がとぼる
唐様書の汁はたま〱
浪風の立た男も萱が軒
木幡の伯父の馬を呪ふ
今の小まんによい客はなし
和尙がわせて胡麻はねる香
雨夜の座頭賓體に彈
鹿聞の喜撰が窗へ穴を明け
ぬれて來て恥にはならず二尊院
追人の氣轉元の名を呼
手代の欠び人に語るな
新黑谷へ八百屋行付
寄かゝるのを見るやうな床柱
起して膳をすゑる五月雨
四五兩の風の吹來る磯馴松
角文字や三人咄す馬の上
太夫に成も三寸の舌
中ほどにある文の魂

歌人と聞てはづす店請
新造を三度起して畏り
むかしのごとく尼の漬物
仕舞は川をありく曲水
二階の耳へいたい大聲
鰹の酔も鳴わたる路次
うすいと出ては湯女の唇
惚ぐすり利くか〱と年くれぬ
草履取内へ戻れば若衆振
役者の供の袂から蝋
藪入の長居をすれば恥多し
辻番へ屋敷のさくら寄かゝり
ほらの貝きのふの米を吹出して
輕業の雇はれたがる橋普請
あがたの神子の松風に乗
とほされて格子の外にたづか弓
女房は泣子に帶をゆり上て
丁簡の出そうな足はうち違
煩ふ後家のうしろから口
松風を凩にする材木屋

ちんまりと寐る氣に成て酔が覺
蚊の喰物にさせて云切
田は妓王疇は妓女にと一さかり
一家中御意の茅の輪を潛る也
行水をする撿校を見る
太刀持の聞ゑるやうに欠して
入る事ばかり書て親里
冬ざくらおくか佛の忘草
明六つと並べて低い暮の鐘
覗くは二十呵る三十
具足兜で餅屋尋ねる
物見が明て餘所も倒れる
妾と妾目を明て寐
呑込過た顏で草の戸
うれしさは腹の立より云おとり
今は右近と呼にくい顏
やりての夢を金杉で買
比久尼きれいに小船町行
言負けぬ女の覺悟怖しき
氣違の元を咄せば哀也

三條へ出て輕い口聞
皐月の馬の正直に行
きせるが長く成と六月
鏡が池をしこなした母
をどり子は駒もはづさずいとま乞
たま〱外をありく大釜
我子より餘所の子の知る袋棚
蛇の惚れたる娘見に行
をとこの中にすたる盃
山吹はたく井出の下帶
日に三度畠の荒るたうがらし
江戸へ蹴て見る松坂の親
金箱の方へ頓死も倒れけり
禁酒をすると憎くく成る人
二度めの和尚傘もなし
刺鯖は死で夫婦と成にけり
後添も足をいやがるきり〱す
一日下に置ぬ髮置
かぶろを見れば怖い光陰
朔日はむぐらの床も折かへし

ひよ子の足にからむ臺所
きれいにしなび給ふ上人
眞先に顔の見らるゝ奉幣使
淋しい秋を鹿がいじめる
天の川空へ寐氣をうつす也
伯父が來ていたいめをする大男
鉢かつき落ての後は沙汰もなし
格天井は町人の息
かぶろの母の置去りに逢
いろはの遣ひ餘る四阿
かんざしは辨天へ來て見下され
借金乞に自剃して見せ
親が七つに見えて勘當
佛へ慾を付る十月
人形共にかぶろ三人
二分借るうへを鄙鳥行
物すごく着飾て居る八重むぐら
痒い所へ行かぬ相談
返辭をするが聾の恥
衣々の袖のくされる汐干潟

捨鐘を一つは味に聞て居
看病も三味線ほどに成にけり
日の出見て立つ吉田岡崎
闇の夜の使にでつち死かゝり
藏建てて乞食のやうに言れけり
ふとん張縫ふ湯女の愛相
むぐらをのせて返す十能
一生家暮で通る印判
躍の頬を撫る廻狀
身代の穴は屋ねから見えて來
めつたに泣て後家の氣が知れ
枕を呼んで肘は浮き物
暑い日に折ても見度松の風
指をさゝれし竈も賣れ行
忘れた物の溜るうかむ瀨
腰元も千秋樂は覺えたり
名代の乳母の出る初雪
大往生にもみつぶす庵
戀しき人に似て腹がたつ
瘡の夜着に顔のちいさき

二度に夫婦の通る夕立
若し文を賣人あらば天の河
江戸前賣の江戸といふ面
むすめの十五金を見て居
晝納豆をたゝく納豆
よける氣で居るうたゝねの足
五十年枕九つ新しき
さびしさの餘りて見れば米の出來
次第に椀の殖る本復
賣た屋敷を編笠で見る
七つ迄淺妻船は捨小船
娘の恥に一町が出る
兼ての勸化嵐から出す
年寄物を買て來る市
節用にちぎれ／＼の仕付形
蚊の喰ふ瞽女へ扇集る
飛脚の口の辷る戒名
夜伽の穴を見出す病人
手の輕く成夏の仕立屋
裸で蚊屋をはづす雨もり

うそつき共の歸る元日
三月四日遠く成る顔
開帳を引出しに行旅衣
亡妻を隣で擧る大三十日
隱居を一夜借るのし餅
そろ／＼留守を遣ひ出す尼
何所の磁石もよし原へ向く
とう／＼だまし付る百日
死跡へ似たと云れて恥かしき
寐起の顔のうまい正月
兄弟中のもめる錦木
顔がぼたんで立のまゝ來
皐月の闇に吝い青空
針妙の目をかき立る
呑むやうに減る入聟
乳母に證據を見せる印籠
起て出る嫁の姿の大事也
公家衆が立て乾く傘
千兩箱と取替た顔
後家を盗んで藏も我物

はね付られて口笛をふく
年取はどちらの岸ぞ渡し守
闇の夜を歩行き習うて面白き
むづかしく成けいせいの畏り
大根はさゝがすうちに輕く成
明方の蚊の上るりを吸ふ
大佛の顔を見て居るつむじ風
檜杓にかゝる淀の稲妻
筑波が鳴て埒の明く金
はりころばして這入る錦木
こゝろよく雜煮に居る四十三
いやとおもへば重いふり袖
屋ねやの口に合ぬ鐵釘
人の氣をせはしく遣ふ火打箱
記念屆けて見ずに行く顔
反橋を下る女の堅く成
呼出して返事をさせる石燈籠
年を擧れば耳の述懷
小判の足の止る十月
言立にする裸身のうつくしき

をとこと見えて尼の本望
女房の名を付けて賣る餅
初泊にはぬるい程ケ谷
山伏はあはうにせんと祈るらん
朔日はうしろへ廻す結び玉
やけどの指に初の大聲
比丘尼の化粧葭簀から見え
衣着て我振袖を思ひ出し
少將に成て益々八味丸
御耳にもたつたうがらし喰
物に懸りの居間に突棒
誤りに來る物の怪の親
平和泉座頭の目にも哀也
鼻聲の證據は髪がつまむ程
腹立の寐顏に見えて蠅が飛
夕藥師古い桔梗の暮殘り
御悋氣の最う一足で玄關迄
生ての夫婦鳥追で來る
怖しく師走の人と咄しけり
灸すゑて二階を下る面白さ

あんかう汁にさくや此花
直切足らいで御内儀が出る
かやば町鼻につかへるわたし守
北條九代坊主がち也
野の宮へ日のあたる八月
嫁らいな年を手のひらへ書
牙婆の草履片よせて脱
弓矢たづさへ蚊の中に居
明石の町のほの／＼と明け
道野邊の夫婦は人に喰れけり
我にふり向く四月朔日
手代にしては惜い夕ぐれ
行々は人參の入る取廻し
正宗持つて口を利く村
ひとり宛子の戻る黄昏
遣唐使朝な夕なに耳が鳴
大食傷の側に獻立
松風に案じが付くと錢の息
可愛がらるゝ閏正月
堪忍を所帶道具の始也

天の河只泊ても人の口
初奉公の知れる目のうち
扇借す手を蚊屋へ吸込
店を追れる時も傘
なには生れの若衆かしこき
六人來ても只の山伏
出家の異見枝も葉もなし
隣をもたぬ聲の我まゝ
太々講の中に若後家
出居衆の飛で廻る吉日

不騫不崩

米の守りを總花にうつ
他人に言て貰ふ養生
淸らかに物引立る靑あらし
大破の寺へよい碁打來
手代を乳母の廻る霜月
晝見た顏の夜見たく成
七日めは抱付く程に祈けり
うつくしく夜を燃やし合ふ緋の袴
五色の絲で僧のほころび

馬上勇々敷借金を寐
むかし〳〵の宇治の書出し

寛延三年年日々點耕の秀逸を撰集て武玉川と號、梓行して既當戌年迄に七篇に及ぶ、當時はいかい隆盛にしてしらぬひのはてし迄、風雅の至らずといふ事なし、誠に治世の粧仰ぐべしや、こと更に江都は蕉門晉子の遺德殘て、門を並べる正弟二十七人、道を守りをのれを琢く事怠らず、添削點位に新古をわかち、麓より奥ある道の枝折となしぬ、前句の寄所一句のはたらき、禪閤郎話の問答に等しく、問に意味ふかく、答に物又高し、是誹諧に屈する時は禪に轉ずるといへる翁の教ならんか、予此頃いなみがたき芳席に召されて、申出侍る句々高點に及しを取出て左に記す、是その付合句作の工案のため也、尤判者のこのむ所によつて聊のたがひもあらんか、それは生質の稟たる所齊きにあらざれば、春を好秋をひくの爭ひ、共に風流たるべしや、

存義點

笛故に反歯にならせ給ひけり
牙婆（すあひ）の誠損をして行

有佐點

姉にはならぬ殿の塗下駄
青山は夕食過の長谷詣

平砂點

母親は具足着ぞめも泪ぐみ
赤澤山のさし合な家

米仲點

夕虹を膝の上なる子に教へ
先庖丁の光る山下

祇丞點

痩寺に痩入道の鍬づかひ
水の濁た日はかきつばた

買明點

薮醫者の草履に問うた灸の跡
仲人も五人すれば成佛

樓川點

網船に見物船も贅ならべ
あふぎづかひに隱す紋所

渭北點

起るから戸を外させる空の色
松魚も熨斗目四月朔日

湖十點

狸の疊伸つちゃみつ
館林ぶんぶく寺と尋けり

旨原點

一日燃る大釜の下
大德の金持見ては泣れけり

再賀點

大名を百足にしたる瀬田の橋
時雨の律義廻る朔日

珠來點

和泉式部のわかる物云
衣着て戀の異見にまかでぬる

萬立點
凩の横になぎれる西嵐
役者に付て大橋を越

超雪點
蝸牛這ぬ時には棒を出し
戻て着れば腹のたつ夜着

秀億點
拍子木を五つ打切る水道尻
一夜別事に同じ影法師

吉門點
化の面えしれぬ顔に直を付る
荒ても志賀の人の横柄

嘉廷點
明後日の約束はなし立田姫
むしやうに轆轤廻す土器

栖鶴點
淋しく來さびしく戻る尼の客
貸傘の二階にて音

書永點
鐵砲で舟は出て行く唐の月
世之助既に六十を過

鶏口點
あぐらをかいて三井の鐘聞
哀なる日も五日過十日過

柳尾點
連ははづして枝折戸の音
飼鳥もその日ぐらしの口を明き

庭臺點
奴の別れ狂言に成る
毛巾着此毛に付て物がたり

由林點
荻の葉の音はしうちな夕嵐
記念使のかしこまる樣

清泉點
虚無僧の尺八仕舞ふ七つ過
世はからくりの三十日朔日

田社點
義盛は又新造を買はれけり
枕にすれば房の付く膝

春來點
このみの鮨又山をつく
人參に親の秤のいつもはね

俳諧武玉川七編 終

武玉川者年々机上之撰、而將ㇾ令ㇾ知下點都鄙有二誹諧之通用一事上與也、爲二其流行一也、見ㇾ花變ㇾ雪、聞二郭公一鳫渉、風姿隨ㇾ之而不ㇾ止、左有而棄ㇾ古而新而已、不ㇾ有ㇾ寄爾者、用ㇾ事貸ㇾ詞、而姿情者其一日之可ㇾ應二機嫌爾一也、此故爾

序

武玉川者年々机上之撰而將令知都鄙有誹諧之通用事與也爲其流行也見花變雪聞郭公鳫渉風姿隨之而不止左有而棄古而新而已不有寄爾者用事貸詞而姿情者其一日之可應機嫌爾也此故爾不如道者聞多見弘爾者因茲顕此

不レ如下道者聞レ多
見上弘爾者、因レ茲
顯二此書一而爲二梓
行一、既及二八篇一爾、
是唯初心之人入二
其道一之枝折也
亥暮秋
倚柱子紀逸誌

書而為梓行既及八篇爾是唯
初心之人入其道之枝折也
亥暮秋
倚柱子紀逸誌

宝暦二壬申年秋改正點譜

不驚不崩　廿五点

胸裏三斗　廿、

清地満夏雲、十五。

天堂之用　十、

即墨候　七、

結隣　五。

脩字三、也二、

四時菴紀逸

俳諧武玉川八編

清池満夏雲

けいせいも大工を遣ふ程に成
清書を磨れば味に投り
翌る日の夕方聟に癪を見せ
鬼といふ子をなめられて鉢たゝき
座頭の顔へ夜が更て來
蚊屋を飛ぶ一分の螢哀也
鹿に蹴らるゝ奈良の生酔
三つ物の肩を流るゝ立田川
一挙づゝ衆徒の了簡
晝通ふのはしらで居て風吹けば
めうがにも蓼にも合ぬ掛人
蝶々も尼の寵はしこなして
口輕に留守といふ日のうたがはれ
正直に遅く成たるたゝき鉦
氣遣ひが止むと湯元のいとま乞
有るとはしらで聟の相談

長刀の師の淀でうなづく
初雪に一兩ぎりの言合せ
むかしの京に殘る店賃
扶持の謂れを語る三十日
向ひ合ふ顔の大事は午の時
しのび駒何ぞ喰たい姿也
しとゝめの下緒をありく戀の闇
庭鳥の四日は人を寄せ附けず
三ヶ日淋しい物は姑也
明石は假名で書くやうな景
石蕗の花最う錢箱に錠がおり
しやう事がないとは角のとれ始め
最一夜も寐て行やうな雲の帶
藥箱はつに持せて振かへり
伯父が來てぴつしやりと成る年忘
面白いはじめ計を瞽女が聞
行春に夕ぐれといふ罪がある
物云迄が妻に成る年
七草の一所づゝはづれ雪
鼻先に八百屋を置て若菜摘

燈籠に一艘づゝの人だかり
さくらに反の合はぬ雜言
箕輪四町に殺される雪
羽衣は撫盡しても柏餅
虹のとまりが我旦那寺
耳こすり燒がね程に思はれて
小判に角の出來る遺言
逆の峯仕舞へば元の額也
濡手へしかと請る松風
人形にさへもおばゝのむづかしき
けし提て女のやうに步行けり
死ぬる事心安さに思ひそめ
夜伽の咄口に手を當
誰踏みて挾みの心かはりけり
身代の穴から知れる秋の聲
親のこゝろは岡崎にうく
人の上のみ思ふひとり身
公事に出る子の口上を聞
足よ／＼と車あらそひ
氣の輕い女の階子音がある

のしと書かせて母の埒明
勾當迄は番町の恩
美くして歸す尼寺
高田で遣ひ殺す若黨
男なら銚子へ行を松ヶ岡
長崎屋あつちの食も喰て見
しのぶ山犬から知れて棒が出る
根ぶとの上に丸き題目
柳の闇へ這入る早乙女
一八は民の煙の中に咲
槌を利口に遣ふ屋根葺
大根は曳れた跡が枯野也
河内がよひに柄袋かけ
寐起に膳の遠い六月
鎌倉にねばる枕のあらばこそ
綿を苦にする四月浪人
居膳で喰ふかはりにはうつくしき
八重霞錢のない日をかぞへけり
雲の峰見て下駄うりが出る
顔をかぞへて蓬生の蕎麥

牛若は稲妻に迄たとへられ
朔日をわざと疊て時雨月
秋鰹向ふ三軒あやまらせ
烏帽子折とぎれ〳〵に聲がする
出女の口を揃へてつばくらめ
一からげ浴衣を雨のから衣
つく〴〵と思へば淋し硯宮
請られて金の生る木に寄かゝり
女浪男浪を夫婦して汲
葉ざくらに成て母から合點させ
しら魚を反古に包めば薄ぐもり
その口をかへせと一つたゝかれて
女房の尻の見えるこねどり
夕薬師袖へ入日はうしろから
口車京は油のきいた所
生酔をつぶして置てさし向
拭けば書く西八條の表門
狸の穴の前でわび言
斯う成て見れば異見も身にあたり
夫から先は仲人の口

總領に目鼻が付て冬籠
しきみの中に干からびた婆
光る物大宮人もほしがりて
遊うちは家内の事を書ちらし
つむじに高の知れた侍
戀しさの夕べの雨をよく覺え
八王子ふすぼりくさい飯を喰
奉加帳にて蠅を追ふ妻
晝間は影のうすい奉公
鬢鏡(びんかゞみ)淋しい時に拭て置
むざんやな階子の下の草履取
鏡を汲で遣ふ淺妻
大工にも灸見せ給ふ幼君
松明で子を覗く鵜遣ひ
尻聲の字を引く女房面白き
奈良の都も少し着倒れ
かうやくも張所にて哀也
朔日はまだ割膝の時雨にて
なじまぬ店で低くよむ本
手のひらへ來てまんぢゆうはむごく成り

京談で呵られて居る馬の面
あさ妻は舞臺がないで怪我がない
腹の立時大針に縫ふ
猿引の我より猿に着せたがり
何から思ひ付て引負
その奉公でなしに奥様
失念といへばりつぱな物わすれ
馬迄狂ふ氣違の笹
世の中やひよんな比丘尼を請出し
五月闇互に咳の突あたり
二月二日はうそのつきぞめ
相應に浪風のたつ八重むぐら
湯殿で恥をかくす稲妻
寐たうへを深田のやうにまたぎ越
だしに遣はれさうな太刀持
親仁氣も旅にしあれば輕井澤
針立のかぶつて見せる角かづら
うまい事いふと倒すが一度也
うば玉の怪我を晝見て淋しがり
灯を消てから夜の道行

藪入の四貫からげを水の淡

うたゝ寐も秤に懸る東山

鳥面白くむらさき野飛ぶ

請負が逃て柱が雨にあひ

帆懸船湯島の指の先を行

蟲の飛付く盆の買物

病上り敵と見ても喰たがり

箸紙へ元服の名の書はじめ

梶原は鎌倉殿をかつをぶし

金の減るわるい思案の面白さ

むらさきや是も同じくうそをつき

中間に夕べの恥をまじなはせ

質屋に反りが合と勘當

大をどり茶釜の蓋が翌もどる

三の絲貸してその身は遅く行

瓦燈をまたぐ下司の近道

玉の輿から人殺し出る

五十日立と土藏が歩行出し

火を焚けば狹いやうなる高瀬舟

ぼた餅に前の妾をたておろし

よく／＼下戸の御供を喰ふ

專一といふ養生も古いやつ

肴あらしも同じ手まくら

叶戀横から口をとがらかし

外へ出て云ふことづてに骨が有る

ねんごろは鼠に引かれ十二月

戀ぐさの種が替れば忘ぐさ

かぶろの智慧の出る庚申

遣うたる金の行衞も廿日草

時雨るゝやひよんな小家に畏り

きやりと胸にあたる影法師

炬燵出る子の足を押える

絲遊やしろき物皆奈良の川

切れぬはさみの見ゆる壺口

從弟も石を投る婚禮

齒が拔て人の笛にも腹がたち

遣つた夜着にて振らるゝも飛鳥川

腕で持たる賴政の妻

金の替た年に往生

袖を留めらと言ふが曲もの

いく通時雨て見てもをとこ山

細見を鷄香にすると丸裸

立居に根太が鳴てはづかし

かまくらにいつ迄草の出來心

痞は炙と指でをしへる

いまだ僧氣の付かぬ剛力

近いころ心から出て縫ならひ

たうがらし喰へば若衆も怖くなり

そのかみの人はたまかな峯の松

馬を見知て笑ふをどり子

石燈籠吉原からもなぶる也

春先は啣の高い飼鳥屋

庇の雪を喰て氣に入

云名付鼠舞して歸りけり

枇杷ばかり大きな顏で喚て居

つかみ合うても橋中の友

紫の足袋から懺悔はじまりて

乘物に和尚の袖も緋ちりめん

御納戸茶女の智惠の廻り過

茶臺出す顏も近くて遠い物

螢狩皆とつときの顔計
はたご拂に殘る猫舌
駕舁の内にも二つ塗枕
京のみやげの腰元が着く
添はうとは心の猿の云過し
緋ちりめん物云なしの春の色
呵られて最う見苦しい三十九
入聟の手がらはじめは男の子
吸物に埃をかませる旦那寺
穴藏で物云やうな御若衆
かぶろの夜食猶哀也
六波羅に尻のすはらぬ奉公人
けいせいと假名に書ても怖しき
事觸が來ては今年もいやがらせ
水かねを手のくぼにして恥かしき
しら拍子につこりとして調出し
かな川や海から上るはやり歌
飛神に名主も付て飛廻り
おもしろいには質が付き物
ゆく／＼は女房と見える取捌

妾と妾よく夢を見る
白鼠はらひ物とは哀也
どちらがうそかしれぬ死際
そろばんを息子の顔へはじきかけ
干るうちに聲のよく成る寒生姜
樓船（やかた）に乘つて堅いけいせい
植木うりたうがらし迄煎じ詰
やりてが寐ると起る分別
元日からは耳が聞える
盛過の娘は琴の弟子をとり
うり藥弓矢を出て遠からず
くろ木賣大事に跡を振かへり
新撿校のむらさきを躾
夏痩の相手は側にのめ／＼と
大半切にうつる子比丘尼
寒聲も金にするのは哀也
かつがれたいでその時の放下には
恥かしい夢は三十日をかけ廻る
釣合ぬ隣を持ちし佃島
餅買に遣る雨の降出し

來るとそのまゝ見えぬ裁入
口がうごけば呑込んだふり
蝶もまだ舞はぬ所を摘みへらし
折そへてさくらしづまる切樒
手をたくし込む乳母が懐
三兩からは名乘奉公
灸すゑて居る馬の葉隱
逗留に拾た文でねだり喰
女湯の片道ぬれてなぶらるゝ
からくりの家ともしらず仲人つく
彈明されて馬鹿な盗人
出來立の蚊の這入る京町
浴油（よくゆ）の餅のうまき勝公事
駕から借りる見世のそろばん
思ひ廻せばにくい業平
手をもみくちやにしたる堪忍
大根の輕く切られて郭公
着心のよい上下の賴みなし
子の手を曳と年の寄る妻
海苔汲みが殖えて千鳥の馬鹿に成り

うそが溜て我顔に飽
音頭の悋氣字餘りな唄
鍍にうなづく居風呂の貌
家内が留守で外科の存分
一言も云はで内儀の勝に成
櫛が落ち前髪が落ち泣寐入
不機嫌に上戸のくれる柏の葉
酒屋に間をさせて雨宿
寐て行く船を編笠で捕
廣袖揃ふ子安伊せはら
二十五は娘の年でなかりけり
しのぶ山蓮の夜明を見て戻り
壁も付けずに馬鹿な貢する
後家さへ〳〵と吉野丸借り
袈裟衣盗む狸の一思案
年がくすりの云分けに成
大坂は口の利れぬ水を呑
うき寐鳥ひよんな所で目が覺る
蜑小船大きく成て着にけり
はな紙に唇といふきいたやつ

うき中の所々にはした錢
今落た幾を放下に遣ふ也
拝み倒しにまだこりぬ母
雨もり捨て若く成る人
小町見とれてぬれる百姓
籤取ひとり出されぬ人ばかり
手詰の異見大工召連
伴頭に成て登れといとま乞
土用干並の御恩と見えぬ也
申子と思ふ夫の律義也
ぼたんをわるく見せる女房
産湯へ鹽を入れる蜑の子
物云はぬ氣違も又哀也
前髪を取ても殘る京の顔
秋の所は夜知れて來
鶏の鳴日は錢に出がない
あうむ石迄鼻ぐたにする
死ぬと云はせぬ母の手廻し
けふの佛もむら雨が好
辨慶も安宅で聞けばうそつ付

うまい事云て盤を證據人
妹にも拵へて遣る口ふさげ
鳴川だけに吹たらぬ虹
口上を吹さらす小とぼし
一夜鮓物の見事に蓋をとり
吹殻いくつ白張の穴
水汲の蟲が知たか今朝の雪
たうがらし千種の中に下司近き
前垂もつかむ心は緋の袴
傘一本が寺の大詰
けいせいも哀に見れば哀也
口笛で土藏をありく松の内
四五人の親とは見えぬ舞の袖
卯月の鰹眞直に立
身のうちへ來て低い口寄せ
袴着のうしろに乳母は畏り
たばこ屋に成氣で二人出代りぬ
中剃は物ほしさうな女の子
弱り果たる母の羽二重
酒屋の禁酒こゝろもとなし

島の便りに抜けた歯が來
道成寺へと急ぐ時計屋
桶を田に利口過たる風が吹
難波の闇にぎやう／＼し鳴
呼子鳥大つごもりも傳受事
子を持て物すごくなる四十一
女はまげるうたゝ寐の足
其角を磬て戻る山伏
逃て來た平家の顔のうつくしき
手のひらを痒くして來る寶寺
妾の用の多い供舟
歌をよむ女房に油斷すべからず
おはぐろの顔を見て居る隣の子
飯の外盛てをかしき親の椀
鳴ほどの梢の鳥の筆に合
十二月大屋のいふがほんの事
うしろ明るく主の氣に入
もらはれた夜は兩方へ蚊が這入
九軒の揚屋まんがちな顔
鶴折て戀しい方へ投て見

丸木橋わたる姿を案じ詰
顔の中なる顔見せの顔
白粉は化物といふ物に成
僞のなくて妹に羽がなし
先の相手が外科で仕合せ
うき事の泪の末がつまみ喰
吉原を吹て仕廻た風が來
石女(うまずめ)のかまはずに置ほらの貝
云にくい事の云よい蚊屋のうち
娘だけ穴を明たる切落し
かの笄が味な日に出る
銅の鳥井の施主に近付
一分づゝうそをつきけり年の暮
鷺をさかさに撫る木枯し
つまんではふる春の革足袋
鶏のめくらの出來る三月
次男に手間のとれる遺言
皆無理で娘の願叶ひけり
木辻の起請大佛も入
さんせうをさすつてあてる柏餅

云名付人身御供にしてやられ
二晩でよく見て戻る局下り
八月も帷子を着る身と成て

胸裏三斗

三寸をつぐうしろ姿は靜にて
和布刈(めかり)が濟で足にかうやく
せめての馳走燃る火をたく
久しぶり互に傘をさし上げて
瓦師の知たふりする都鳥
錢の有るうちは聞へぬ松の風
卯花咲て肩が火を乞ふ
佃の狐船にたそがれ
こゝろに冬のちかき女房
むすぶの神を寐るとさいそく
ほんの出家は何の香もなし
屛風も人をけし懸る物
梅ほの／＼と鷹に傘
春更て親に蹴らるゝ烏の子
ぼたんを見てもうかぬけいせい
燒餅にさへ杉の愛想

子を寐せて又子を起すさよ碪
御祓川一夜逢ひで法の聲
かしこい顔の並ぶ負公事
くらがりを來る錢にらふそく
聾寐をしらぬむかし侍
髮結うた跡も仕舞はず縄すだれ
傘へ入ても損のない顔
何所となく一群に行うしろ帶
ぼたんに十日猫の食傷
云事もいへば跡なきをとこ山
闇をくはへて歸る立聞
いく度も返事がなくて片し貝
學文が棚へ上つて聲がはり
棒のやうなる關守の聲
女房から先冬が來そめる
遠くで見ても痒い麥秋
花ざかり吹より鐘はかたき也
相手が出來て路次に立顔
すご／＼と時雨て通る赤合羽
枯野に吹かれ是ぎりの顔

出船へ次第に高きいとま乞
愛で落よと女郎花さく
家督がもめて元船に母
ぼたんに飽きる安産の床
雨夜の鹿の衣すゝめる
御所おりの日にはつ雪が降
明星は朝日の側になまぬるき
ちらし書目をさま／＼に讀て行
筏士の汁の實青き二三日
突出す猪牙に二心なし
地へしやり／＼と下女の提灯
向れぬ顔をあふぐ鼻紙
小町は空を生つころしつ
つくまの鍋の我をいくつめ
我戀は隣の口をあぶながり
釣鐘を引おろす迄うつくしき
あちこちと手燭の廻るふとん張
置去りの子を寺へ納める
日蓮宗はどれも細工者
買た屋敷を愛宕から見る

忘れんとまぎらかしても乳が餘
しらぬ目からは憎い連彈
柾木とびちる後見の恥
手煎と覺悟極めて京へ出
弟の衣先しらぬ分ゝ
顔替へて來る石燈籠買
恥かしい物を引摺るつむじ風
乳母も百から上るわび言
木はちりはてゝ遠い鐘つき
咳に妹のしづむ衝立
内に居て見れば碪に夜をとられ
呑ぬのもなき河竹の親
稲づまのとぼしく見せる草の花
戸にはさまれて尼の挨拶
三十日がなくて急な朔日
くぼい所を呵る足輕
本店の聲が懸て吉野丸
うぐひすに鳴かれて顔を風に當て
繋ぐ?錢をばもたぬよもぎふ
重着の裾の揃はぬあたり月

夕顔や蚊屋に雀目のかしこまり
二十五のあかつき懸て扇うり
生酔の道が多くてはかどらず
庭鳥に鳴つぶさるゝ年忘れ
くら闇で男まさりの請こたへ
五つ程後の女房にかくしけり
中押ゑからぬれる夕立
音頭の顔の遠い朔日
留守のうち鍵迄からむ八重むぐら
関守はきたない面ヲが見事也
化物屋敷切米がよし
嵐の跡に響く鐵槌
みどり子の欠の口のうつくしき
けいせいと女房の間を片折戸
うぐひすの歯のない頃に蟬の聲
順禮乗せて蜜柑船出る
陰ではるあたま見に出る最明寺
天の河竪になるころ鐘の聲
いらたか數珠の手を太く見せ
とり付所のないに口笛

御物師の居つたまゝに灯がとぼり
三社の詫をわたす元ぶく
酒湯を懸て見ればぼた餅
五合德利に妻の袖笠
たから寺にも切るる小づかひ
五郎が家もよもぎふの分
火を焚く下女をなぶる居風呂
蚫に埃のたかる精進
狐にゆするうそのおそろし
九つを問へば日なたへ立て見る
江戸の友には合はぬ松風
名代の獵師面白く死に
百日紅は夢の少將
酔がさめると赤い蚊がとぶ
言れぬ戀に日のあたる顔
棧敷へ來ると弱る朔日
汐干狩拾ひ仕舞へば怖しさ
煤掃や巴も終に生どられ
越後屋に長い返辭もきれい也
醫者に誠を聞て念佛

村中ありく寺の大釜
穴藏を出てもとの六月
二つから見ればいやしき枕十
あたゝかな金を引出すあづさ弓
目の痒く成る夜の商
五月の鐘の雫して鳴る
つめられたのが損のはじまり
元ぶくの獨見てゐる鏡山
うつり香のやかましく成る土用干
裸で這入る清盛の醫者
證文に判迄濟んで物怖し
生貝の力をいれて死んで居
松を作るに木馬迄出る
赤子を輿へ借りる霜月
物着星淋しい時はうち詠め
向うから女房も遣ふ硯箱
あちらでも目をこする替紋
座頭の我慢杉の木へ行
夫に當てて細見をよむ
諸行無常を離れて撞く

女の群は四谷なりけり
笑て見ても濟ぬ身のうへ
棒のしなはぬ六條の鹽
貸しなくす物にして置く湯女の櫛
つかむだ癖の若菜にも出
八官町で誉る黒髪
餅も流れず下戸の曲水
溜がとまると元のふたり寐
おそろしやあれを着たかと衣がへ
人をきたなく遣ふ十月
きり〳〵す籠で死ぬ氣で鳴あかし
すれ〳〵に三人くらす和中散
忘れ草にも蓋の三味線
あかぬ別れの闇をこぐ船
質屋の前の凄い六月
秋もはやつめたい物を手に覺え
初物提て目だつ中間
高田の比丘尼日と共に入
六條さして寺へよめ入
蚤がいやさに宿で振る袖

頭巾から最うあみ笠と成にけり
五月雨ちいさい窻に惚返し
追人が蓋を明る大釜
手へ押付る闇の船賃
筑波の帯の解る明六ッ
菓子はことばずくなにかしこまり
かきつばた今に云出す辰之介
撞木の先のかむやうに減
鰹の届く神奈川の文
茶碗酒女の屑も面白し
和尚のあらの殘る志賀寺
越中島に藏の立見ゆ
かくし泪に餅草をもむ
けいせいの時見し乞食ふりかへり
丸寐を起す衞士の朝飯
三人で引く網に觀音
命といへば近い媒
むらさきは野を和らげた詞也
勅使の顏の正直に行
干からびて居る黄檗の箸

新田出來て笛が届かぬ
吹降の傘に手を貸したがり
後藤が猿の金を借り出す
膳所が見えるとみぞ落が鳴る
蚤の子のつめたい乳にぶらさがり
羽がきの羽とも云せぬ料理人
夕べのあらし廐宿へ行
投れば夜着へ潜るいらたか
木綿で顏の潛る奉公
冬瓜の花は上手にうそをつき
歸雁文をくはへた聲でなし
耳を手元に置けと呵られ
河崎迄は行ぬ傘
誉る隱居の内に居付かず
かすかな義理の届く默禮
家老がなくば物は思はじ
女さびしく乾鮭を呼ぶ
扱ひ濟で手のくぼをする
錦木は棒の出さうな所也
闇を上手に遣ふ顏見せ

いもが悋氣のちび／＼として
十九に成て近い一年
了簡も替ればかはる水淺黄
女形女房ばかり年が寄
つぶ錢を伽にして居うつの山
盃へはねるも柚の若いうち
折々蟲のかぶる新關
九つは手の草臥る鐘の聲
なめて見たがる鹽竈の客
肴を呼べば目だつ草の戸
うそ付ぬ日に年が寄る也
生田の森を返る笛ふき
寐ころべば起る用ある物思ひ
智惠が餘て瀨戸物に灸
腹懸を干す寺の日あたり
きのふの嫂で張物に來
ちとづゝの盗に逢ふは嘉例也
公家に三本足らぬ伶人
旅で泊れば眠い品川
行程鹽の辛い松前

ちまき結ふ日は曳船の音
はなれた馬の女郎花齅ぐ
顔を遠くに見せる乘物
靜に成て殘る盃
腹立の袖ふり上るしら拍子
むらさきの空に時雨るうす煙
憂時の人に鼠のなづきけり
我子見に行く河竹の闇
廿日草三日殘してむし暑し
風呂へ沈むで雨を觀ずる
木やりで金の這入る吉日
新造の袖がそろ／＼怖くなり
此汁で蕎麥とはつらし山ざくら
檜をどりいつのむかしの一枚繪
鹿の聲紅葉を急度たしなませ
揚屋町かはつた夢も見ざりけり
餅屋と酒屋意趣のある顔
蓑蟲の片親ばかり呼つゞけ
今迄蝶の遊ぶ汁の實
髮の落賣物に出て怖しき

浪人の手本に曾我はならぬ也
宮守賣御中屋敷へ水をさし
見ぬ陸奥に京で草臥
身を知る雨は手形だけ降
四五人の顔にも飽ずかゝり船
心覺の前髮をかく
文殊の智惠も取あつめ物
片裄に着て昔なつかし
四季着手傳ふ御出入の尼
十二一重の足の見たさよ
云名付女心の古くなり
降參に利口な顔の哀也
相應なみやげ程には物覺え
つぶれ懸て町人の九字
平家をひとり盛る船頭
深川へさす品川の指
散柳障子の影の定まらず
物好も手うすく成て田長鳥
子の三味線を習るくらがり
賣れぬあうむの口が利過

不蹇不崩
楽のごとくに桟敷着かへる
月夜に釜も親のした事
うらみの口をふさぐ明六
土蔵の見える木がらしの果
せんだんの二葉育てる氣あつかひ
うかりける平家の時の御出入
江戸を見ぬ人を御家のたから物
鯛の切たる證文を書
地頭を譽て村に戸がなし

四季發句春三十句　紀逸述

歳首
初鶏やかはゆがらるゝ聲計
初讀
書のうちの大工道はむ窓の梅
虻ひとつ何所で聞てかうめの花
たから船碇印にまくらかな
鶯の古郷あれぬ竹の秋
わか菜より松曳方や男ぶり
はつ午や袂をあてゝ笑ふ山
悲母十三回
草の芽やかぞへ盡さぬ土の恩
小兒をいたむ
凧それさへ西を行衛かな
出る日もさくらにかゝる彼岸哉
地藏法樂
御衣や人がすがれば雀の子
明ぼのや身をひく雛子の水鏡
關宿觀音法樂
茶を摘る時は茶つみに成てこそ
底くら地藏奉納
苣の葉のかきみだれても賴みかな
身がまへな蝶の遊びやさくら草
菜の花や西日を請て洗ひ馬
藪添に逃る穴あるきゝす哉
かげろふやたゝけば登る種俵
汐干哉沖にうれしき庭たづみ
三月二日雪ふる
袖笠や佐野のわたりの雛買
白澤讃
籠のめも眠らぬ夜半や事はじめ
長宇子に點印を送る
根を分ん菊にかへさばきつね川
四十賀
いへばいふ四十はいまだ花の春
傘のうちのかゝりや絲ざくら
眼星掘る婆々を尋ん山ざくら
うつり氣の一口づゝや花の蝶
花咲きぬ雀も藪をわすれ顔
宿なれば灸すゑる日を花見哉
夕ぐれやさむさ合せて花の雪
三月盡
ゆく春の招く手ならんいかのぼり

夏二十句

さむいにも着て世の中へあはせ哉
懸たぞと請ぬでいく夜ほとゝぎす
寄郷談
愛に鳴け山郭公山の芋
ぼたん見の又驚くや臺所

世の人の是から借しはつ松魚
また喰うて言譯になるめうが哉
端五
實に成て桃は見てゐるあやめ哉
奉納
十二神八日迄あるかぶとかな
一月を三十日しらずや五月闇
早乙女や風は袂に入れておき
葭きりや鍋屋に一羽飼れけり
さみだれや烟を植る柳苗
晝顔や尾上の鐘のよそ〱し
若竹や今年の露の置所
發句書と出されしに
をさむるも女の役はうち哉
松風の裾分けをする扇かな
あさふどのにて
いてふ迄扇づかひのあづさかな
山伏の向て額や雲の峯
藻の花やうごかずに居る冷し馬
御祓
夏帯のむすびごゝろも茅輪哉
秋三十句
神鳴てあらたに涼し木々の底
朝顔に日をとり持か通り雨
買時に枡も入べし女郎花
そく才な人の詠やたうからし
女房の明けに出る戸や萩の花
いなづまや力なげなる草の原
馬の上に笛は吹れず花薄
埋堀を終の住家や角力とり
夜の長くなるが朝寐のはじめ哉
膝だけに蝶もぬるゝや萩の露
悼
人は皆烟の種や若たばこ
夕顔の枕見てゐる案山子哉
蘭の香や鳥にも二つ袖袂
塀有て松ある家の砧かな
拾得讃
きり〱す鳴かぬ捨子のむかし哉
傘をくはへる鷺や星迎
七夕や物の貸しよい節句前
盆會
生て居てとうろ作るや玉むかへ
悼
しら露はきれいな人の仕舞かな
別莊にて
屛風とは外で氣の付く花野哉
八朔
八朔や二たびかすむ稻葉雲
しら露や鱸の口も小笹原
送別
翌からの便を聞ん鳴子綱
八幡法樂
弓二張よせてかつらのをとこ山
老情
いつしかに鵯をまつや雁の聲
憐捨子
はつ茸も親ふたりある雨と露
名改
もとの名と二つ覺えて柿もみぢ

名月や氣の付く鐘は六と六
松明にふり／＼行や枝もみぢ
　　關口にて
紙漉のくむほど老ぬ菊の水
　　冬二十句
原中や見ぬ門出來てむら時雨
裁縫の顔見せ近きもみぢ哉
初雪のおもて道具や簑と笠
汐風に爪先赤き千どりかな
水さへもおのれを圍ふ氷かな
木兎（みゝづく）に云込られんあじろ守
朝霜や鐘につき出す人の聲
　　十月十二日
芭蕉忌や筆をしたてる飯の中
冬籠むかしはうちに居ぬ人ぞ
　　つもれば人の
いろ／＼の雪見て雪のかしらかな
　　悼
茶の花に淡は佛のたとへ哉
水鳥の顔向かへつ朝日影
ひとつ飛ぶ雀は二つおちばかな
物申は師匠ひとりぞゑびすこう
撫る手の一葉二葉や桐火桶
いさりびのそれも尊き十夜哉
　　大樹へ始て召れて霜月朔日
顔みせや馬に成とも君が門
せきぞろも一人に成ぬ廿日過
　　五十賀
人五十天から着せる頭巾かな
　　歳暮
驚々と云れて白し年のくれ

俳諧武玉川八編　終

改正點譜

王母林　　廿五点

桃李芳園　　廿、

閬瓊筵坐花　　十五、

天倫樂事　　十、

以文章　　七、

陽春　　五、

俳諧武玉川九編序

我聞歌道は則身直路なりと、その端くれのはいかいなれば、など到來のうすけにも至らざらんやと、余以此山の端にかたぶき、入がたの月影に仇なることの葉を捨ずひろひ侍る、予若年のむかし、松月堂不角法橋は父の舊友なれば、これにたよりて五七五の文字を袖にかぞへて、麓の道に入り侍る、その頃は莫々たる柳塘のほとりに住て、風琴子白峰の丈室にわづか五十歩を隔たれば、朝たゆふべに柴扉を推敲して、雪中庵の正意を尋ね、添削を請て、三つ物に組む事十俆年也、頃しも紫野の隱士青流洞敬雨、江府を旅寐の折から、親面して翁のむかしを問もとめ、晉子の活法を探りて、交會度を重ね、湯元石霜庵にて終焉の砌迄、厚情かはる事なし、別號の硯田舍は、彼叟の銘せらるゝ所也、又一號四時庵は、天下翰林是に一篇の詩句をなし、序辭をそへ染筆して給りぬ、是を四時庵六物第一として、重寶ひめ置侍りぬ、時に年初老に近く、世に隨へる產行とてもあらざれば、此道に入て靜に生涯を息ふべしと、親しき人々の異見に應じて、巽窗前の湖十法募と成て、萬句興行の時、

武玉川九篇

開瓊莚座花

戀しき方を向て結せる
我接いだ柿の生る頃歯がぬけて
元歷々の果の柴の戶
恪氣も折に譽めて聞く也
楊貴妃死でやけの夜步行
うしろ帶前へ廻ると我身也
逆剃嫌らひ公事は丸負
しら鷺の廻る程明く杜若
やりては宿へ槍を立かけ
神馬に豆の足らぬ十月
座頭の顏の脹るゝ置土
鷹と言れて酒を買ふ毋
藪入のその日歸りも譯が有
思ひ羽も拔ては鴛も鴨の顏
股ぐらで淋しく削る餅のかび
かゝる所へ重手代來る

からたちのみかたに厚き垣根哉　　前湖十

斯て江都判者の列席に加り、机上に句をわかつ事と成ぬ、點譜はくだんの四時庵に付て、淵明の四時の詩を分て印と成し、手に弄する事久し、さるを邀月臺の主人しきりに望せ給へば、止む事を得ずしてさゝげまゐらせ侍る、後硯田舎の硯に寄せて、硯の詩句古語をえらせ給ひ、みづから篆書にうつして、米德大主より下し給ふを用ひ侍るに、又青々林の君子よりせちに乞せ給ふに、此點印を奉りぬ、此度の改印は、烏石山人東武隱室の折から心友たるに、花洛に卜居せるかたみとて、李白桃李園に宴する序を、書て送られ侍るを便として、そのうちの文字を拾ひて、是に王母林の三字に、青々の畫圖をそへて極印となし、句位を究る事と成ぬ、此武玉川九編は只今用る所の、新印披きの日よりの句をとゞめ置て、前々に次て披露するもの也、

倚柱子紀逸誌

吹付ぬかと二階から聲
今起た先を見付の棒が行
かぶろの仕落隅へ來て居
吹殻たまる六月の橋
和尚に結うてもろふかき髮
傘持の袖が障てこぼれ萩
よい女房見て割るるさんご珠
さむい炬燵も通り者也
穴藏へ懸て二階の道は切れ
馬に重箱付るしづ原
おはぐろにぼう／＼眉は大むかし
うそも嘉例に成し元日
大僧正のしげき小便
挑灯もとぼす時には傘の音
小額殘る武士の正直
骨のある物とは見えぬ踊の手
目の早さふたりに酒を買せけり
夜の明ぬうちの咄が大事也
藪入を戻て主の氣に入らず
誓文を三つ程聞て手を放し

無念さはつめたい小袖さり／＼す
端折る所が旅の口元
素浪人手で書く文を口で書き
新参乳母の堅い寐心
役者附いやな匂ひの面白し
松ヶ岡似た事計咄し合
太刀持のつまんでありく蝶の羽
十二一重で見たいけいせい
立田川模様にしては八王子
こゝろの底に新道が付く
せり物に木馬を買てくらく成
庭鳥は分別の有足づかひ
けふは暮翌は檜の遊び好
持参を尻に敷島の道
居風呂で牙婆の聲に伸上り
夜あらしを追欠て行く鉢叩
いたいめをする合點にて嘘をつき
牛若に成たむす子をうれしがり
鹿聞も三味線聞た耳の果
四十程はしたな年はなかりけり

鍋の鑄懸のわたる六郷
茅の輪が來ると御所がさわがし
むすめのはたち我内にあく
佛の腹へ響く坪皿
藪入のこはい藥を呑で行
二階から白い跟のほの／＼と
頬かぶりしても尻目が遣ひたい
つく／＼と顔持ありく十二月
陰膳を翌迄置も悋氣也
似た小袖人が着て居て腹が立
ほころび迄は縫て見る婆々
竹の子にさし上らるゝ蝸牛
雨もりは先の住持の買がゝり
草履取観音經を隱しけり
庵室に土筆が有て緋ぢりめん
御姫樣つるさるやうに手を引れ
朝顔は茶を一ばいのあひしらひ
かるたを持て行徳へ乘
女房が死で居風呂を賣
仕送りが付たと御國うごかせて

二十四孝の親は甘口
わたり鳥下座見一人は古い顔
關守の勝手へ招く狸汁
大三十日親子並んで空寐入
あやかれといふ顔が梅干
七夕は叶ぬ時のたとへ草
むすめの聲がかれて寒明
うたがつて十日も立たすうたがはれ
覺束なくも白い百姓
來るやいな取上婆々のしかり付
しみ／＼と彼浪人に秋の風
損から先へ咄す商人
いたさうに蛤計る音がする
女房に惚れて家内安全
つめつて置けば呑込んで來
留守遣ふ時思ひやる般若櫃
僧に成譯は／＼と寄かゝり
尻持有て文が文ゝ過
日が落切てたち花を躾
煙を外へ出さぬ雨雲

念佛に彼岸ざくらの侘果てて
忠臣に手の足らぬ三味線
口利かぬ膝へ口利く膝をのせ
拜んだ跡でたゝく銅佛（かなぶつ）
椀をかくせば膳へ上る子
師走の釜を生捕て行
うぐひすに湯治願の墨を摺
ひとり喰ふなら茶の給仕男にて
今のうき世も後家の弟
夢の新地に麥の秋風
夫の腹のもえる三味せん
女房のこは〳〵入れる胡椒の子
なまりぶし干す佐殿の緣
錢突迄に野郎成果
勞瘵の元の所へかしこまり
喰ほどの田を植ゑて居る八王子
ふつと階子を懸る吉左右
うそ付の屋ねに冬瓜の盛り也
母なくて雛の居ざまもざまく也
さはつても新地の櫻根がうごく

世に有し日の幟立をうち詠
はなし鳥百度参に行あたり
手燭でしのぶ牛若の幅
琴締直す若衆なぶられ
京の妹を藏にして置
引立る檜杓に油音を鳴て
めでたく見ゆる朝の盃
凩の歯に喰殘す峰の松
投げたまくらが御白洲へ出
蓮切の一日尼にしかられて
一生うしろ帯もつれ〳〵
身代の穴の所へ米を積み
題目錢が戀の懸はし
藥鍋底を啄いて高笑
付るすがたの堅まつて行
醫者の玄關に豐年の芋
杉戸の腰に正直な猫
紫はよし町へ來てうすく成
兩國橋を譽る大橋
みづから床を上る御恪氣

堅田へおりて振返る鴈
十五のかぶろ禿ではなし
やり羽ごを先へわたして帶を締
つめられてから先の顏見る
假りの宿崩れ懸て面白き
相傘で立子おろしの門
しのび習の先づは大股
傘はすぼめたうちが他人也
氣の狂ふ日は草履取小侍
むかしのうそは烏帽子狩衣
弟の客に兄のつら〳〵
後添の焚付て居るきり〳〵す
師走も二十日過の高慢
何もしらずに仕舞ふ姫君
飛ぶとぶたれる江戸の清水
いつしかに南部の女酢が過ぎて
雪礫憎いの裏と表也
面白く醉ふ女房に子がなくて
行燈が二つに見えて戻られず
貴船へたまる世の中の無理

店替の後は筋違天の河
我思ひ幾度か戸に挟まれて
深みへ行を茶屋は見て居
乗懸の浮いては沈む小松原
疝氣をたゝく町の拍子木
置て出る駕の錢にも呼子鳥
民のけぶりのうまい物喰
切火の側に丸くなる猫
出女のいつも十九は哀也
かしかりの始終もゑびす講
神主の口にとらるゝ納め馬
寒の水盃取て見る春の空
淵は瀬に成た當座の恥かしき
禰に鳥の來て鳴宮の下
鳩吹聲に念者倒れる
うち付て一分の消る黄八丈
稲づまの閨へ折込む物の聲
野守が金を拾ふ陽炎
寐かせば聲の消る帆柱
錢の火箸へ懸るうづみ火

羽織に足らぬ母のうたゝ寐
馬喰町草枕とはよみ兼て
紅閨も郭公から窓の明き
夕雨の隣から來る草の莖
旦那寺迄字を聞に行
冬瓜を案山子が抱て初嵐
落書を洗ひ仕舞へば人通り
蓑蟲の吹さらされて帶の上
子福者と譽て女房の顔を見
蓮切の一葉々々に水かゝみ
菜の花の咲ころ蝶のひとりはみ
五六人かざす扇のすさまじき
手勢すぐつてかつぐ相談
献立の極る室は長閑にて
火をうつ音は一日の音
寂寞として和尚大口
袖曳ばならぬといふ字目にて書
靜な聲の揃ふぼたん見
今少し寐足らぬ顔へ杜若
傘も折々京の露しぐれ

新造は眼鏡を懸てかしこまり
看病に好みが出來て安堵也
はるか枕の逃る寐がへり
浪人の仙臺河岸をうち詠
泉岳寺横に歩行て草臥る
了簡も思案も夜着の袖へ出る
すれ／＼に一年くらす草履取
しのぶ山人に言れぬたばこ入
内陣は皆さむく成土用干
暮六をくすりと思ふ物思ひ
どつちも智恵の足らぬ置去り
溜息をして凄く成る醫者
蚊屋とれば宵の思案は消えて行
結納へひづんで居るがその娘
子を産で九軒の敷居高く成
氣のうかぬ佛御前も跡で知れ
髮結が替つて人の天窓也
取分て闇に算き御垣守
家鴨の臑をなぶる箍懸（たがかけ）
母はきうりのやうな姫瓜

新参は戀に賢き歩行ぶり
盗れた日の翌は鉾の日
又しても河内がよひの言出され
日なたに事を缺かぬ四阿
さゝ浪に合羽を洗ふ志賀の浦
突袖をして居る腹立
星に氣の付くけいせいは頼母しき
逃ようと思ひ込では男也
やかたのうちを驅るをどり子
やよひ哉鯛をつかへば鯛が來
嚊の尼の指を見に行
新地ががんと夜は明にけり
いもせ山泣草臥れてさし向ひ
請状もせぬ奉公と成にけり
瞽女がはづして日待つぶれる
三味線堀へうつる作り木
はね元結三千坊を煩はせ
正宗と今の女房の入替り
見せ物に喰つぶさるゝ五月雨
還俗に馴れても袖の取廻し

立田山裾から見れば上氣して
雨の蠅うたかた人をかき廻し
家見の路次へ大工出むかふ
女に勝て恥かしい公事
殿守は口から先へ年が寄
隠居へ孫をはこぶ雨の日
仲人が來てもたとへる顔がなし
組屋敷から見える苗しろ
降らばさみだれ程の長文
筋かひに梳く髪も挨拶
肴店嵐が喰て奇麗也
晦日に來れば旅と見らるゝ
高安は手一ぱい成座頭の坊
とり上婆々の弟子の六十
鳥居から女の影の山かづら
馬鹿にしたとは逢ふこんにやく
大さかづきが出ると居直る
堀の若衆の見る影もなし
あはびを取らぬ日には髪ゆふ
總仕舞してほら貝をふく

影法師と並びの岡を二人行
四五枚讀で夢のうきはし
一日見世の廣い十月
蛭がなければ終出來る金
師走を取て廻す印判
かなつんぼうで子に恩はなし
又化さるゝ舟の横顔
入面疔に箸紙が出來
昔思ふあさちが宿の角力取
御闕乘物大部屋が舁
奴の顔の替る居風呂
燈火に官女のしづむ小柴垣
九重へ出る伊達な煩ひ
塗箸に小春のさくら挟まれる
延上る顔は互のはんじ物
三角に成て雑煮の淋しけれ
粟島を二階の顔へさし上る
神鳴が落て狐も落にけり
若い智恵二つ田を行畦を行
時雨るゝ空に赤い吉原

枇杷の花目に見る年と成にけり
池上で尻をつめれば雉子の聲
二三日拵物のみだれ髪
行程の駕の戸の明くかゝみ山
玉手箱明けたるあとをはふり出し
猿功者憎い面也
冷麥も冬はうどんと召れけり
坪皿はどこに有ても恐しき
まくら並べて年の寄聞く
山茶花が散て人の氣人に成
出女の物にねだれて立盞し
大三十日碁盤の出るは勇々しけれ
人の來るのを待て立姿々
後の夫の人參の相
赤い合羽と瞽女の相傘
二人を隠す寺の穴藏
湯どうふの上へちろりの腰を懸
壁に耳ありと思うて云ぬ也
粕壁の裾の短き麥の秋
調法な物の邪魔なは女房也

くつわ蟲きり／＼す程派がきかず
うつくしい火の透通る付木の火
痩せて居るかと折ふしは聞
追かけて見られた人へ手を合せ
泣ぼくろから後家じみて來
銀二兩何中々の付屆け
はくらんのかくらんのさて仕舞ひけり
此しぎと追人に頭巾取て見せ
慰みに醫者をするとは恐しき
まよひ子のおのが太鼓で尋られ
ちぎりの行衞薬取女房
四阿に肝のつぶれる顔が見へ
そろ盤づくで立るにしきゝ
うかむせの帳を親父に見付られ
遺言の大事を明す十二月
行者の尻の尖るさむしろ
高々と日のくれる木綿屋
よもぎふへたま／＼這入る赤合羽
我勝た顔をして居る鶏合
さる物といふも一つの道具也

生酔の無理が通れば夜が明る
まじめに成て歸る皿借
女形顔見世前に見さがされ
登され手代黒いさかやき
牝馬と並ぶ牛の根性
戀風も辰巳に成ればむづかしい
をかしい事にうとい爺親
淋しさは灰の落付く臺所
眞綿ずくめに思ひきらせる
むぐらの宿を喰立る毛見
一つ前足が黒くてはぢもみぢ
拂子にて晦日も拂き給ひけり
母のきげんの響く穴藏
禿をにらめ／＼おはぐろ
なまがみにした文に食傷
よい男どう廻ても損はせず
名に骨を折る院の百姓
ほころび見出す妾の愛相
猫の尻目も物盗む時
吸口も青いがち成天の河

最う腰元の云かねる年
孕んだ馬の絹川を越
關取の乳より下に人だかり
親類にしひつぶさるゝ島戻り
杉へ來て心の直る松の風
師走の座頭置所なし
嵐の跡を母の行水
腹の立日は引出しが明かぬ也
大屋から南天の葉を皆にする
甚之助若衆の手際見せて置
その昔譯が有ての妹聟
燈火のそろ〳〵さむき神無月
二十五の暮より顔が若く成
晴天に欠落の身の置所
年寄若く咄す抱守
燈火が嫌らいで憂名立そめる
行水の戸を咳で押へる
煎藥にはふり出されるふり藥
鎌倉海老にこりる百姓
澁柿のまだ十月に氣が付ず

關の小まんもうす色を呑む
詫言が少遲くて蚊に喰れ
菜賣が置て歸るてふ〳〵
慾のない土產物也うつの山
親の闇外のをどりは目に付かす
挽臼もはなせばあかの他人也
灯を消して見れば心が行あたり
火の中を通た文にうす煙
顔もちいさく見ゑる腹立
狸を拜む穴の間違
うしろに置て氣の詰る顔
松ヶ岡目へさす乳の哀れ也
灯は急度して年の寄る寺
關守は痺の足をたつか弓
厄介の茅の輪を拔て口を聞
さびしい時に見付出す煤
曉のうまい雲濟ぐわたし舟
あきらめて居る女房の淋しがり
茶腕鉢屋に尼の近付
あさつきのかはゆらしきは年の內

桃李芳園

久兵衛が堅法華から事起り
ちら〳〵藏の見ゑる葛飾
駕を釣らせて恩にする顔
のし包迄反る指で結びすて
峠を見ると重く成る足
うき世の端を歩行水無月
大屋を尻に敷て草の戸
盜れた足跡洗ふ怖しき
晩がた買へば樒目にたつ
思ひ切氣で日課さづかる
旅の空家來へ近く成にけり
木の間の雨の拔足で降
衣の中でそだつ鷄頭
生酔の覺るまくらに棒を見て
懸た所の怖い琴爪
御駕が下りて念頃に濡
いなばの雲の中に御やしろ
去る御方へ直の成た顔
門番につもられて居る九十九夜

親指が小指を切ると書せたり
物思ふ手で直す清書
二十五日の顔を譽られ
出家落來てよい咄する
初雷に閉門が明く
十出る智恵の九つは夜
出店は今にしらぬ勘當
駿河で下にすわる西行
淋しい錢を遣ふ松風
縄をほどした新造を買
逃した鳥の歸る飯時
除けて行人の心の御納戸茶
煤掃は仰向て居て寐亂るゝ
夢の賣人が取次に出る
松風と代り合ては千鳥啼
悋氣に落る蚊屋の雁がね
尼の添寐に金が寐て居
ひよ子のはやく育つ北濱
まだ賴母しき朔日の夢
筏さし陸へ上れば只の人

初松魚見れば辛子は安い物
挑灯に追廻さるゝ前わたり
替た所の意地を張る後家
法華へ毒の廻る鎌くら
中の町でも棒はきゝ物
餅屋から心の付ぬ隅田川
捨金と誰が名を付てはづかしき
秋の終りに一つ減る神
雜司谷より若い淺草
才藏ばかり譽られて來る
門徒寺からふり袖の質
手代の奢二代めに付く
食が過ると人のない寺
病上り帷子出るとうれしがり
葉ざくらの科は隔てる鐘の聲
捨た男を拾ふたそがれ
鳥井のうちへ井戸替を引
笑ひし帯のめぐり逢ふ中
帆のよく見へる方へ正客
出家をとげぬさみだれの空

あぶない事の多い牛若
四月蚊屋釣るたゝ花の窓
大事の所を禿見て行
師走の文の財布から出る
泣子の舞を譽る墨染
越た所で若く成る年
大晦日鳴らぬ雪駄が病上り
荻を直して萩にして逢
大さかづきを譽る追善
臼にも成らぬ杣の遺言
禰宜迄留守を遣ふ十月
涼しさの下を見やれば恐しき
女の中に淸盛の聲
乳母が覺える聟君の槍
はしらごよみを抱付いてよむ
ひよ子の中へ這入立聞
三十日をすねて朔日の文
紋日の翌をわたる鵲
松魚の反りを撫る庖丁
二百十日の通る牛島

うつくしい手に水銀の露を置
一人家來の陰膳に飽く
遠い悋氣の屆く追風
暦の中で聟を尋る
灯をとぼさうでくさる程漏
鎮守崩せば遺言の金
はやうち肩のにぎやかに死
うつくしい手を居風呂へ吸ふ
金平は女に有ておもしろき
尋あたれば凄い柴の戸
見知る人なき鵜づかひの顔
文を拾うて哀がる僧
鬮取が來て箸がつかへる
後夜の鐘そろ〳〵憎い響やう
鬼うち豆で煤掃の意趣
人一さかり崖ばたを行
いつく島見て殘る一雨
御師もしばらく咄す入聟
離別てから顔は心に寄らぬ物
捨子もらひのしよば〳〵と來

ふたり寐るなら金は涌物
うれしい夢の晝見たく成
六月思ひあたる僧落
わたらずに見る住吉の橋
女のうまくぬれる賀茂川
留守居を呼で留守の日はなし
金元たえて死でゐる顔
年程にしら〳〵明の面白き
泊り合せて口書に乘
夜更て顔の痒き高殿
低く物言ふ伶人の母
つぶれた聲を譽る節分
軒のあやめの覗く居風呂
辷つた數も咄す妹狩
やよひの匂ふ寺の十月
六日の賀茂に馬糞淋しき
我に呑れて裸百貫
聞古したる婆々の世がたり
紀の關守が香蘇散盛る
男の死靈聞分けがよき

火を焚ばかり間日の奉公
扶持方の袋で來るも哀也
水道に反の合ぬ松風
飯を喰ふのも凄い川留
しのぶ山呼れて犬も二心
新地が出來て無理な細道
さくら草買ふ鉢の子の錢
懸人どちへ向てもかしこまり
借金の元を女房と氣が付かず
をどつた顔のすたる看病
小言で紙燭出來る六月
しらぬ顔にて庚申に來
いやな咳せくくれ竹の宿
岡崎を油かぎりに彈て居
菊に醤油のかゝる達磨忌
村中の邪魔がたうとうわたり初
鐵槌と迄妾のおとろへ
裁そこなうて物さしで掻
一雨降て黒い大磯
縫箔の片手は波の下を行

二階へ上る年程の音
太夫と太夫四位の挨拶
親孝行に蚊柱がたつ
朝食が濟と明石に帆が見える
落した馬の草にあやまる
日陰へ廻る乳母の片言
傘で仕出した山郭公
ちゝぶ道者のぐづ／＼と寐
僧正の恥かしさうに緋の衣
讀み習ひには不機嫌な顏
結ふほど延びて尼の元ぶく
ぶしやうな足に懸る枝折戸
品川も子を捨させる所也
寒聲つかふ關の中間
五十年通り仕廻へば鹿の聲
寐に來る鳥に所化は出て行
陸奥で耳だつ牛若の聲
百草を覺えた人の物凄し
雲を吐き雲を吸込む峯の松
明て廿チが正月の顏

小指の爪の長い關守
去り狀遣つて内が見えすく
凄いほど車明るき下もみぢ
四月八日を伯母のしこなし
かんこ鳥淋しき足を鳴き／＼來
湯殿はるかに下女の大聲
江口の率頭(たいこ)舟もこぐ也
皆火にくべる神主の埃
伯母を當にはたなの上に乘て來
踏れた町の名を聞て來
師走の猿のしばられて居
一つ宛階子で前を合せけり
痞も持て步行くらがへ
古鄕へ歸る紺のだいなし
寐しなに橋をわたる六月
あさがほ一人乘懸で供
女のたばこ刻む四阿
ぼつちりと目を明く上にしら幣(にぎて)
儒者を立ても古鄕に借り
ほめられた子の鼻をかませる

烏の目にも懸る誓文
どの玉川も負けぬ氣で居
連が武士にて二度に夜が明
三くだり書て煮え切らぬ聟
雁の聲夜着とふとんの中を行
思案の終り子の顏を見る
ねずみの穴へそれ程の智惠
若竹に成と住居の手くらがり
足を病み馬に夕日の落かゝり
母の寐耳へ度々の水
よもぎが宿を灸すゑが出
朝の早稻田を風車行
荒神は去られる顏をうち詠め
頓死の貌へ印籠が降
七日の松の足元をふく
裸で禮に步行く雨乞
寐ると寐顏の出來る突出
捨子の昔知て指ざす
日のもる寺によい出家住
くらい道具に殘す若黨

孝行にうつ蕎麦切は静也
明店を見て廻るつれ〴〵
めうが谷から馬鹿な公事出る
古御所さむくさいかちの尖
足で足洗て這入る八重むぐら
あづまくだりの見せ馬が來
物思ふ向を通る蝸牛
餅の火の炬燵へ來れば夜が明
物書かぬ女を譽る大むかし
遠い思案の町人にする
出代りや三粒降ても氣は心
初鰹かまくらからの捨ことば
二つ三つ四つと違はぬ和歌の友
一とせを見えつかくれつみかん籠
つくばの雪解陰の奉公
十月知れる神主の智恵
草の名を呼べばこたへる御末の衆
舅に成てあつい六月
袖笠で雨の螢に遣る丶
湯殿へ廻す瞽女の傘

さむい咄のとうふから出
尻に敷れて亭主落つく
九つに寐ぬ怖い根性
戀しき人に逢へば日がくれ
奉加帳顏のしれたる所まで
一雫呑むも小言の口ふさげ
五間づ丶飛だあげくの墨衣
赤子の貰ふ家のからくり
つぼねまかせに厚い白粉
着替たで昔の殘る世捨人
取上ば丶來て出にくがる嫁
隱さぬがよいと云れて膝を立
草分計傘をさし
女形煩うて居て入梅が明く
あぶなく死で仕合な人
言名付うつぶいて居る顏でなし
笠から先へ投る草臥
朱座のむす子の疱瘡を譽
堪忍のならぬ所で酒がさめ
膠で付たやうな關守

馬子に抱れて母のわる口
泣て行子を盥から呼
階子へ懸て戻す木ばさみ

王母林

愛宕から見ればつきぢは舟の內
荷先の使煤に追る丶
初て撞た鐘に身震ひ
前の夫に子迄隱れる
蓮にふたりは狭いやくそく
乳を吞さして覺ない顏
ねだり課せて古近江が來

俳諧武玉川九編 終

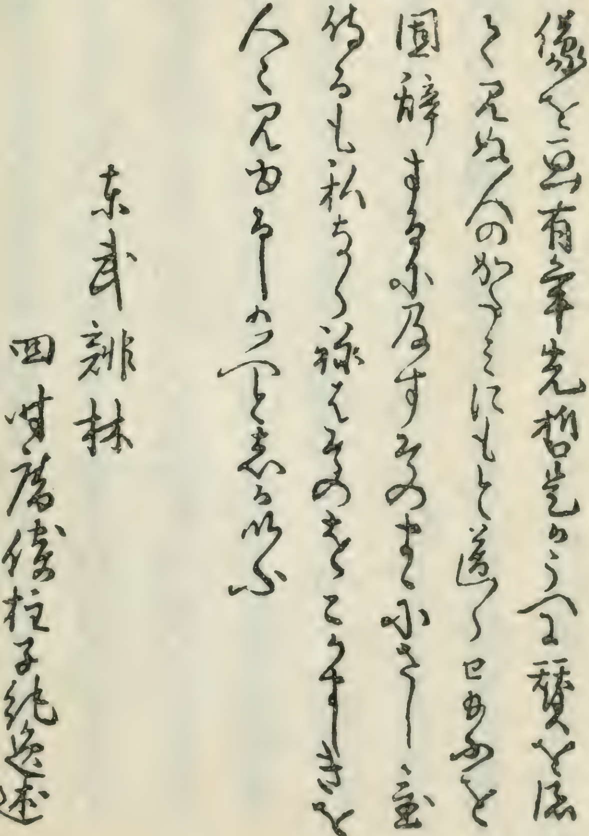
十編　序

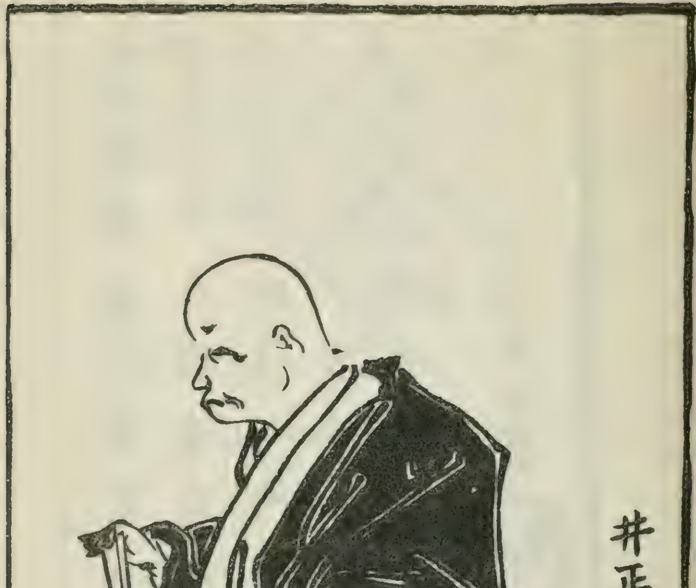
寛延三午年時雨ふるころ、誹諧のむさしぶりを普くしらしめんため、日日撰點の秀逸をあげて一册となし、武玉川と號して世に弘め侍るに、その流れ遠くわたりて、都は井出の里に花の露を置そへ卯の花の陰には彼のしがらみと成て見捨る人なく、あすもこんと夕ざれごとの関を養ひ、みちのをくの野田

の末迄、點の私なき事を賞せられて此集既に十編に滿ぬ、猶又此拾遺をもなすべき所に、老情しきりにいたつかはしく、朝の事を夕に忘れ、書とゞむる事も怠りがちに侍れば、此十卷にてさし置侍らん、さるを書肆のもとよりせちに乞侍れば、止む事を得ず、予所々の芳席に望み、東武の判者點とりの秀逸、自他の句々に、予が撰點を書まじ

へて、燕都枝折と題して、武玉川全部の後編に備へ侍らん志は侍れども老契はかりがたしされば此序に、高貴の方予が像を畫有年先哲是がうへに賛を添て、見ぬ人のかたみにもと送らせ給ふを、固辭するに及ず、そのまゝにさし置侍るも、私ならねば、そのをこがましきを人々見ゆるし給へとしかいふ

東武誹林　四時庵倚柱子紀逸述





武王川 十 篇

四時風流六義是效
非隱非吏握管目耕
行何所樂唯山與水
吐言微中昌謂非教
憶逍遙遊嗟樂且壽

阿有年贊

俳諧武玉川十編

敲窓萬玉聲

朝顏の少し東を見合せて
松風を琴とは常の耳でなし
女嫌らひの底倉を擧
ころばして見て笑ふぼた餅
去り狀に書たい所はをとこ坂
子を振付る乳母の突袖
醫者の言ふ事を守れば夜は長し
握り拳の中で鳴く蠅
不破の關首にからまる稲光
俤もまさかの時の用に立
死んだ咄を聞くも養生
寄手の陣に光る乘物
足跡は一人に見せて芥川
面白い湯に入て來る朝ぼらけ
兼ていふ内損斯のごとく也
賣喰も商賣じみて面白し

子四月改印

蟋蟀入牀語　廿五点

庭合明月光　廿、

敲窓萬葉聲　十五、

紅塵一騎　十、

水精盤　七、

擲筆　五。

雁字　三、屯二。

くたす篌に飯喰て居

關守の内へ這入ればほんの顔

懸人にはかゆがらせる山椒の芽

生て居かと殿も御たづね

胴人形が口をきかせる

不機嫌な時につぶれる銀させる

雑司ヶ谷時雨の下の蕗の薹

惚ぐすり昔きいたをくやしがり

明店が物を言はいで御仕合せ

礜ながらがてんの行かぬたから物

家中の子おつゝら馬に乗たがり

盆前に四十八夜の中回向

終丈になると仕着せの恥かしき

八朔過て伊達な稲づま

夜の一分のつかみぢからも

行燈を引くと呼屋はうつの山

孫喰婆の四谷から出る

立しのぶ障子明るき緋の袴

めりやすをやり手が懸て緩くなり

去年のけふもかたられにけり

あぐらに手間のとれる鬮取
みそさゞい牛房大根の枕もと
歯ぎしりをして末の松山
星と灯の居かはるやうな村しぐれ
真中に乗る乗合の慾
突出しは朔日の氣でかしこまり
ふくれた顔が紺屋から出る
隣からそろ〱針が棒になり
大黒も今の女房もぬすみ物
浪人をして明六と中たがひ
出頭も出來御物見も出來
素姿の友は四十から上へ
蝶かろし頃は入聟居なじみて
きめ所をきめて太夫の静也
よみぢがへりのうそは出次第
水入に成て布袋の派が利す
道連に頼母しいのはあばたづら
添はれぬ迄も御しら洲へ出る
蚊の聲の戻る所はかきつばた
新造の袖を朝日の引延し

憂事を習ひおほせてから衣
たいこが腹に地ごく極樂
入定のぎろりと一目峯の松
狂亂も元が器用で富士太鼓
淺草で拾うた金の内を見ず
松風は風の中での通り物
中屋敷御取はづしの織たつ
物に成たか紗綾が二タ巻
燈火の直ぐに成ほど小夜更て
飯粒のそのまゝ有し届け文
一分が薪を積んで諫言
呑口をねだる女房のつゝかれる
なま噛な事を請取る若ざかり
呵られて妾の顔をよく覺ゑ
寐よとの鐘に下げる豆飯
長居して都のあらの見ゆる也
金澤も湯治の内へ巻込れ
六あみだ六番目にはかしこまり
一葉づゝ散て縫ふ手が重く成
痛上り膝を見て居て笑ひ出し

見廻して目醫者の呵るたうがらし
立て居る娘に咳の四方から
そこにある物汁の味と成にけり
持參千兩あばた下粒
新造のつまんで歩行く遊ぐすり
けふも又呵られさうな馬喰町
笑て居ても濟まぬうは言
居風呂へみんな飛込む拔參
蛤も一二合ある縞模樣
世を捨てて先さびしさは膳の上
念佛が恥かしいとは頼母しき
藤の花かつぐ若衆が甚之介
松明で人に逢たはめづらしき
座中のねぶり琵琶の本望
千體佛に指の退屈
爪ゞ立てゝ見えぬ所は口を明き
柔とり兼て大工に云聞せ
苦勞性也六代の母
皺のある縮に安堵する御國本
縞を着たけいせいは猶哀也

馬上雄々しく六波羅のうそ
我身を重くおもふ置土
うつくしい女房呵るが自慢にて
いづなの蕎麥も出入から來
焚付る度に小原を戀しがり
輕業が成て階子をふところ手
我顏の面目もなきしやぼんふき
武士に金を持せば强過ん
僧正のむかしを語る足のうら
こそぐり落す精進のうそ
辛崎は合羽がはやくわるくなり
三つ物をかいどりにして振かへり
湯屋の聟煙いめをして成おほせ
よく寐た子をば背中から出す
ぼんのくぼ撫でては尼の氣がしづみ
追出す母も只物でなし
うつくしい顏で咄が細長き
のろまづかひもらふそくで喰
入唐の高い物には草履とり
すはや大事般にかうやく

さんご珠は赤い中での口を聞
小氣味のわるい寺の輕石
愛想に先づ押寄せる仕立物
味な事いうてやり手は床をとり
ふたり來て寐入咄の生かへり
浪もしづかに御夫婦の釣り
材木も寐かして見れば安い物
獻立に蛸ははづれぬ須磨明石
土用にちや／＼を付る夕立
平塚さむく赤い椀出す
九年やつれて元の地女
ちい／＼が出るぞと母の山をいひ
髮結もさし味が好で面白し
番太郎人に晝寐をほめられて
すひかづら寺へ這入と賣仕舞ひ
十番切の跡で弟子入
出代りの名殘を箸のうすけぶり
隣の椎を拾ふ胴突
ほと／＼といふ戸の音に德はなし
御隱居の初物毎にいとま乞

物着星見せる客には寄かゝり
そのきさらぎの口ほどに死
總仕舞意趣返しには奇麗也
家來泣せのはつ雪が降
撿校の上は目の明くばかりなり
太夫が兄もさばへなす神
うそついて居る門へせきぞろ
うまい事いふ女房に遣はれて
別れてのさむい階子をかけ上り
面目もなし今に出女
かさゝぎに成る人連て夕河原
死んだかと思ふた人が表店
茶に合水の釜にも合
六波羅を出てから甘い物喰はず
むかしの念者今に横平
女房の初手の願は合羽にて
極樂は江戸を去る事遠からず
ヒ加減生姜ばかりは人まかせ
うき人の方へ舞寄るしら拍子
松風に蓋をして置六の花

十二月我顔にさへ久しぶり
表向寡の身で居るおもしろさ
前帶はうしろ帶よりむづかしき
懸人隣へ腹を立に行
あつもりをまねく扇はせひもなし
冬籠足でも物を取習ひ
御やしき狹く突あてるうそ
よい男着殺しにする癖が付く
しつかりと裾を踏へる夏柳
眼を明るとて身代をつぶしけり
松風の都へ引ける十二月
平家をひとり撃る船頭
追人の中に聟に成る人
仇し野といへば見らるゝ前うしろ
つゝき込んだり猪牙に六人
橋の名のたらぬ所が中の橋
術丈に心が付くとさびしがり
かき餅をかこひ／＼て鹿の聲
女郎の思案押詰めて出る
その日は夢で仕舞ふ還俗

出女の利口に成てあちら向
鳥さしは高みの千話が邪魔に成り
しら浪を覗く雀の無分別
松島は口へも出さず灸をすゑ
尻目が持てありく盃
又留守か笛吹て居る草履とり
京をうしろにしたい事する
うんといふ場を言はぬ厄年
女房へ落て伊達な伊勢講
秋茄子嫁にくはせて棒が出る
そば切の上手と聞けば戀しくて
分散の藏にねずみの佛顔
うたゝ寐も戀しい方へぶちかへり
女房は足をいやがるきり／＼す
なぶり次でに聟の弟
綱の手がらを取膳で出す
神慮に叶ふ菜飯でんがく
うぐひすも錢程づゝのあひしらひ
梓弓近い他人が鼻をかみ
門徒宗何が不足の出家にて

我よりは人に淋しき寒念佛
絲巻を先手懸りに取かくし
無さうである百姓の智惠
さゝくれを時々舌であひしらひ
いもと女郎を追善に買
かゝりで延る衞士のかうやく
女房の顔に大こんを斷つ
紙子着て流るゝ河が飛鳥川
からくりはむす子の方が上手にて
新地百石化物の恩
三月はおん出されてもおもしろき
殘つた錢で三保のかうやく
親の闇只友達が／＼
物申と云るゝ迄に成上り
玉子酒扱うつくしき夫婦中
御祓の留守に大屋來て居る
かくしうら迄まくる若黨
蛤の持た鹽にて御意に入
親のむかしを他人から聞
曾我兄弟は晴な兄弟

箱階子がてんの行ぬ上りやう
木がらしに口を明せぬ丸合羽
踏切つて思ぬ人にすがり付
更科の蕎麥も久しい願にて
だまつて喰はぬ仕事師の飯
嵐に遣ふ關のさすまた
光君めつたにうまく日がくれて
大根馬二疋引せて家老殿
絲薄人にしたらばいくぢなし
たうがらし何んにも云ずずつと立
しのぶ戸にちやうどにつかむ蝸牛
鹽賣の舐覺えたる田子のうら
氣違もなにはは蘆で味をやり
衣がへ最う松風を顔へうけ
まんぢゆうは世の有さまを丸くする
狐が落て元のうそつき
そのまゝ返す寺の傘
祇園では派の利かぬこんにやく
人の問ふ迄は思ひに盞をもて
木枕も二つ並べば口をきゝ

土用干質屋の前の怖しき
此上の慾を申さば柏餅
神主の手は不斷もみくちや
釣鐘は娘を呵る道具也
本郷は片壁付てわかれ霜
十二月孔子の弟子もうそをつき
ひとりころびを浮世から譽
藪入のうまひ咄も中二日
けいあんも西八條にこり／＼と
かぶろが夢に高尾倒れる
黒燒にせずと小判は惚ぐすり
耳ばつかりが殘るさかやき
和歌のうら知行取也おんどとり
留守に居て知る女房の恩
松茸を何か云たく披露して
油揚の口で大きな損をして
伴頭の色の白いで事がかけ
もらつたと見えて座頭の舞扇
むすめの十五湯に長く入
浪人の楊枝ばかりは新しき

あんまとり咄が過て憎れる
隱居の智惠の妾から出る
鷺でさへ暮六ッ過はふたつとび
朝顔の實を持ち過て恥かしき
夫婦して鰻を喰へばをかしがり
八十八の耳に毛がはえ
水仙はさくらのやうな顔をして
かたみの禮を面白くのべ
柊も鰯も袖のふり合せ
六つ／＼起てもてあまし婆
白鷺を振ひ出したる峰の松
若い時言ぬ事迄年忘れ
夢のやうなる雜炊を喰
二日寐て居るうそのかたまり
胸ぐらの手と釣合ぬもめん物
手前の枡で泣て出る乳母
終たけを着る女房のをそろしき
めくら馬嫁がさはれば口を明き
言譯の横から素湯をくんでくれ
めうがの過たやうな神主

藏を見てゐるうちが人間
見限て參らせ候のやりばなし
呑込で枯野を通る松の風
相店中で譽るはうろく
うき中を死ぬといふ字が飛ありき
革足袋と出る足もそろ盤
かんたんの覺る枕に飯が出來
出代に最う屑がうすく成
傘のさゝれぬ路次に圍れ
初物を提て我手もおもしろき
尼の嗅ぎ／＼借りる庖丁
一生家暮で通る關守
まうけたかはり蛭に成る飯
言譯が濟むと大きくかしこまり
よもぎふの疊は馬の目に付て
憂時は同じ所を立廻り
押への聲は横へ聞かせる
淺茅で妓夫に逢ふも惡業
六月の風に淀屋が物を入
又裸此人にして此病

今度の乳母も大かぐら也
よく見れば平の五に居る顔でなし
天の川兩國橋に反が合
桐の木の二葉散ては派が聞す
能く／＼な事か質屋に鳥甲
初午に一人づゝ行く道が出來
呵る親仁も呵られた果
京の咄に身ぶるひがする
錢づくでいかぬ小町をちゝ生め
たいこ女郎はうそを見て居
去られても鶴の黑燒持て行
たうがらし起請の指も青いうち
うまみの過た御所のきぬ／＼
尺八で來る親類の屑
飲喰もくるり／＼と八庄司
地藏だふれにさはがしい後家
杉の枝横にこゝろはなかりけり
勘助も丸い一分に有付かれ
十二銅あたれと思ふ肩を過ぎ
風の神先馬下が十七屋

雨舍り手代の顔に倦が來る
祝日を皆吉原に遣ひけり
寐姿のうちでいやしき柏餅
金剛杖で拂ふ蚊ばしら
丈夫と譽て歸す惡い子
うれしさの歳へ駕の手が屆き
金もふらせた女房なりけり
ともし火も吹消しやうで戀に成
夜を賣る町にせちがらひ婆々
大山にぬかつた物は南無阿彌陀
島千鳥なじみが付て哀也
道の氣付の振袖が來
いもと女郎の暮のあきらめ
鼻にかゝるが松島の瑕
てふ／＼の近付でない袖もなし
鹿間の百で戻りし百の錢
我物と聟が思ふと人の物
陰干にする浪人の槍
若衆の髮に請け付ぬ雨
投る度いやとは云ぬかぐら堂

そとば小町のあぶなげもなし
うき世の鍋に光る鮗
杜若おさななじみの蚊がとまり
二十五日過れば文に金と書
酢にこんにやくのまづい新道
やよひ山下戸を日に當て酒にあて
苫屋の鰒に夜から客
吉原のまだ氣の抜ぬいびつ形り
去つた夜の押入明けて哀なり
となりのやねでくさる羽子のこ
川留の所の者に成さうな
蝸牛棒道ふ日は思案がち
温石〳〵て衛士のおとろへ
出る顔が居成の顔へ當こすり
蛤に節々すはる丙午
馬工郎のむざと貰ぬをみなへし
櫛が光ると乳の上る乳母
留守と云せて餅むしろ飛ぶ
湯治から病のかはる若旦那
老の身の朝鮮人にいとま乞

勘當はどれも師走の廿日過
腹の立事は忘れぬめうがの子
仕合ものと耳へ喰つき
料理人履ずに下駄の上を行
たうとう鼠から腹で逃げ
孕では君をこまらせ奉り
女房に角がはえると不自由也
甘干も内の鳥にしてやられ

庭舎明月光



鐘の三つは咳ばらい也
餅好も我石塔を工夫して
御寐間はるかに腹だちの聲
此盆前も母のあら事
我身を抱て歸るづぶぬれ
十八年は無事な兄弟
朝顔は酒の呑れる花でなし
千代も唄で居たる遺言

母の敎へた廻り道行く
武士へ二百十日を吹付る
明六ッを我物にしてたゝき鉦
見世へ來てゐるまよひ子の親
せんかた盡て内で喰ふ飯
味に淋しい時が燒餅
七夕も年に一度は母の口
鰹うり北條九代出入けり
溜た埃の出る衛士の眼
唐人の目に寒い上下
無理な使にありく墨染
敷居に置は伽なさかづき
をさまる手には伴頭を聟
つゝらに付て柳原行
駈落の夜もをどる松坂
一柄杓づゝ碑の銘をよみ
旅の疝氣を棒で押へる
蚊屋を取てもくらい身の上
ころんでは只起られぬ女郎花
目ぐすりと鼻のあたりへ書れた

螳螂にあたまの青い三人
親椀の三役つとめる八重葎
空にもしれず取れる鯵
留女口も鶴の拍子也
溜つたまゝで元日の埃
湯殿で智恵の出たためしなし
精進といふ極樂の疵
七小町四小町ほどはうつくしき
見通しに裸にならせ給ひけり
髪を仕舞ふと顔の發明
四十九日にづう〳〵と産む
貝を利口に遣ふ屋根升
踏れた顔を包むふろ敷
瀬多幸崎の一理屈づゝ
菅笠も三人行けば三笠山
袂からあられの出る人の聲
溜つた金の顔を折々
さびしいと母の請取るもやう物
鹿間のある夜狐に振舞れ
うしろへ喘す鳥の細道

獨身の脱ぎちらかして淋しがり
何ぞの時に腹はかり物
はつ給うちに居にもかしこまり
遣つても溜ても金は面白い
御つゞら馬の物喰もよし
人が洗て人にする顔
なげきの中へ飯に付く乳母
むかし思へば凄い吉原
鶴の死ぬのを戀が見て居
鞠の上手の女顔也
俤が身柱(ちりけ)から來てたそがれる
羽衣脱いで置所なし
氣違の子を杣が屆ける
玉川や二つは人を喰たがり
諸行無常にさくら粉にする
腹だちを踏付けて行く箱ばしご
太刀持の顔はいつでも十五六
かんこ鳥まくらをさせて通る也
駈落とまだ言切らぬ山かつら
胸ぐらを取ての跡が女也

人參に乳守へ賣ると書れたり
はきちがへても牛の角文字
山下の灯は晝の片袖
丸合羽にて尾長見て居
庭鳥のひとり時雨るゝ井戸の上
捨子を抱て這入る棒突
くすりにも成る須磨のこと傳
きり〳〵すない分別を鳴て居
めどにとらるゝ京町の猫
一葉づゝまじ〳〵と成る石燈籠
上下を着てしはくはたらく
留られた日の鳶を見て居
開帳の一柄杓づゝ顔を分け
うれしい夢の晝見たく成
四十にて握拳のありがたき
吝(しは)いかたみの屆くはま荻
針さす音の更る行燈
踊る女に竪な顔なし
屆狀雪駄のやうに成にけり
龍王湯は悋氣にもよし

たからの山も夜が半分
初日は金を喰た蟲干
母親に似ぬが仕合娘の子
あうむ小町の着たまゝで寐
橋で辷るを神のなぐさみ
水無月は淋しい所にかしこまり
女房の異見細長い聲
常のまゝなる女形見る
出店迄たよりのほしき五月雨
三味線の物を言ふ夜の面白さ
すまひ取千種の中へ脱ちらし
鐘撞は撞ての跡で淋しがり
たま／＼で内へ戻ると唐がらし
にしき木を蹴て這入る仲人
袖もふくさにすると野々宮
水くさく火の燃る釣舟
粒の揃はぬよもぎふの灸
袂ふるへば松風が出る
手を洗ふほど早乙女の植殘し
子のない女房二度市へ行

譯を聞てはむごい柴の戸
寺を開た傘も大黒
たうとう妾長刀を買
ひとりさびしき婆々の精進
うぐひすも十日の雨をうれしがり
片々長いすみぞめの箸
うす雲も五百石とは見ゆる也
明よりもさくらは鐘にしてやられ
ひとりに成て新しい顏
眠つて這入る門の蚊ばしら
女房たづねる角力老にき
請けられた夜は賣られたる心也
世の中の風もとがりて柊さく
五倍子(ふし)買ぬ人も柳の木の間より
火の氣の遠い所で證文
派の利く女郎遠い分別
寺町に捨た草履の哀也
錢が車に乘ると極月
木がらしに土物店はうしろ向
手紙を添へて座頭屆ける

餅酒と立別れてもいもせ山
炭竈に先のねだれる火を燒て
蚊を斑にして尼の夜ありき
ひよ子が出來てこはいめん鳥
外から智惠の見える造木
紙屑へ折そこなつて捨小舟
たち花の香に輕い仕立屋
口どめのほころびて來る冬ぼたん
なにはの若衆伊勢で元ぶく
池の蓮望み叶へば帶を解き
狸つき狐つきより器用也
旦那を置て歸る口笛
云ては負けと唾にて書
跡へわらびのはえる寒食
炭を燒く里にうか／＼花薄
御油ほの／＼と恥かしの錢
總身に尖を持て時借り
江の島にこゝろづよくも醉つぶれ
朝寐させぬが金の庭鳥
大きい縞に負る地若衆

秋風は留た袂へ突あたり
世の中は味な事から飛鳥川
吾妻くだりの公家の食傷
約束に二枡遣ふさよ千鳥
雪隠で恐しく成る人ごゝろ
やがて乘る物ともしらず蓮を切
死にやうをさくらに習へ菊の花
闇を出て行凄い白粉
熊坂もある夜は逃た物がたり
柿をむかせて細工見てゐる
島原は皆はぶたへのことば也
鎌倉へ草臥に行く夫婦連
十二ひとへも顏はぬり物
そろ／＼慾の出來る寒聲
淡路が見えて合羽捨たき
同じ蓮の遲い朝食
嵐からあたる曾根の松風
年の寄る人の姿も我すがた
いらたかでぶたれた顏の美しさ
愛想は二つ三つめの階子の子

緋の袴踏んで見たいと罰あたり
歩であひしらふ婆の勘略
下り上りかはせの金も友千鳥
野暮といふ字が今よめて草枕
二桶汲んで恥かしの尼
その一言が高い一言
ぬるい雫の落る夕顏
陰間の元氣吹降を飛ぶ
卷紙細くみだれ鷄鳴く
喰物をうつくしく喰ふ川社
着ル物の恥かしく成る夜着ふとん
旅に死ねとや千鳥鳴らん
おとゝひの時雨を戻す傘二本
海の上まで御成觸レ來る
餞別たばこ御油で手が付く
筆まめな女房に四月八日來て
六十帖は皆つまみ喰
めつたにうその咄されぬ婆
墨染の手の時過て出る
いづみ式部のまた賣れる寺

出雲から叩られさうな戀をして
蓮池へ穴を明たる尼の客
妹へ風が替てはなもみぢ
常のねずみに戻る二代め
三人詰のよもぎふの宿
棒鮫さむき木ぐすりの見世
むすめの橋の絶える出代り
樂屋口から客く出す顏
戻る左官の押して見る壁
四十二の子をもみくちやにする
吉原も繪馬に書れた草の跡
和尚の頓死評判がよし
去られる日迄べん／＼と髮
四貫からげに活る程ケ谷
さくらに寵を替る志賀人
胴人形の馬鹿な大年
降物に殘らず出逢ふ寒念佛
若衆は長くもてぬ誓文
いもがり行けば先もからくり
塔あり／＼と天王寺降

蚊屋にふしんを立る追分
廿とこたへて笑ふ仲人
うぐひすは昔のまゝの感應寺
十二ひとへをはたく猫の毛
ほたるを一つ池の吸口
振分髮を乳母が出づかひ
庖丁をさびしく遣ふくすり喰
小姓廻しの呑ぬ日もなし
人形の泣くやうな浪人
人中へ突出す孔雀尾を廣げ
簟笥に指をさして臨終
鵜遣の付木持手も振上る
大僧正の屁に覺えなし
口ばかり九つぎりの年忘れ
うば玉をつかひ覺えて片仕舞
例のあうむも百兩と鳴
二日居てこつばいに云ふ鴻の臺
忘れた足袋へ戻る年明
輕井澤ほど／＼に出る物着星
婆娑々々と佛はうとみ給へども

鼻先の思案を隱す繩簾
深み草人には厚く着せにけり
くれ竹のくはへては吐く玉あられ
女房に持て見れば皆夢
我おさな名で捨子育てる
お里へもほのかに知れる御腹立
うぐひすの惜い事には法華宗
去たとばかり張肘で居る
時人を待たず禿のによつきによき
浪人をして近い天竺
負うた子の覺がよくて惜がられ
出代の遠くて近き足の音
彈たが因果新地掃かれる
百物がたり夕べ來た奴
湯立の前夜寐そびれる禰宜
庚申の夜の目だつ髮持
眞赤なうそを火へくべて居る
木がらしは蟲の命のおんづまり
やまとことばも江戸でだいなし
七夕づめに正直に喰ふ

五兩々々と三度かんにん
露の臺踏付られて寒に入
大百姓のくら闇を行
人形も顔から先へ見立られ
中で女房が始終めで度
三十で地黄のあふは知れた事
三度めは只の午でもおそろしき
いやといふ聲は松より淋しくて
主從醉て高い物買ふ
賣る程はなき梅澤の錢
九郎介は皆出る願でかためたり
異見が濟むと母は爛鍋
こそり／＼と這入る寒聲
牡丹餅も初ての一つはおもしろし
正月二日馬鹿のはじまり
をづ／＼酒を免す代脈
抹香と云るゝ顔も無念也
木母寺は柳を當に鉦をうち
拔いたといふに棒屋頼まれ
女郎ほどあぶない物はなかりけり

南天の葉のあれる霜月

箸に目鼻で又五十年

蟋蟀入牀語



中間に餅をくはせて凄く成
あこきが跡へ後家入がなし
拾た釘を神主へ見せ
さみだれは又正月のくらしかな
一思案して扨其後の硯箱
にしき木を見付て娘内へ逃げ
はちたゝき呼ぶ輕いとぶらひ
陽炎もうき世の食の出來てから
腹のたつ時曲る寐道具
目に見ぬ秋を萩の付聲
天の岩戸に神の拔き足
公家の疝氣に橙が利く
請たこゝろのたつた一日
呑めばなみだも腹の張る物
女郎花是喰はぬかと振上て

俳諧武玉川十編 終

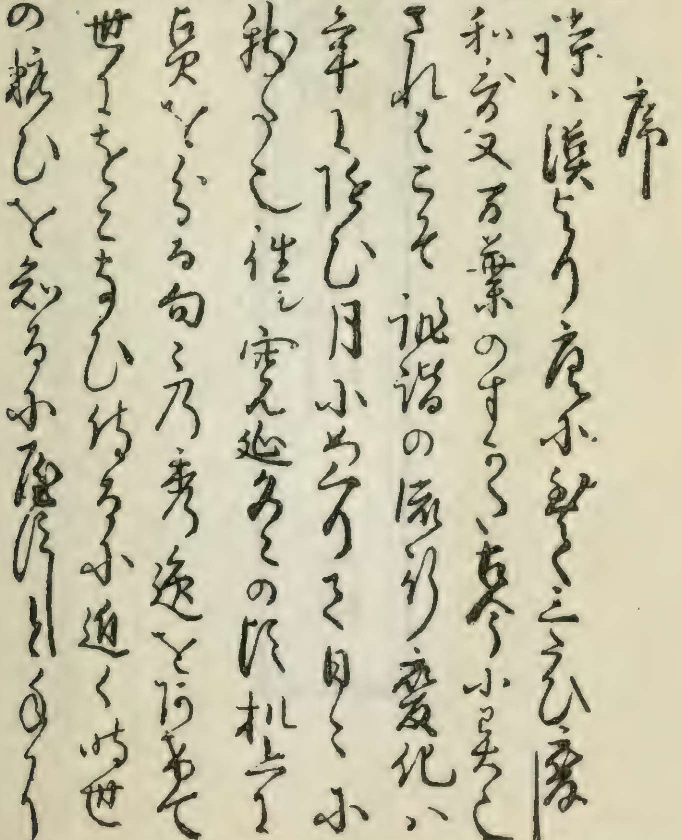
葵都枝折初篇

武玉川　十一編

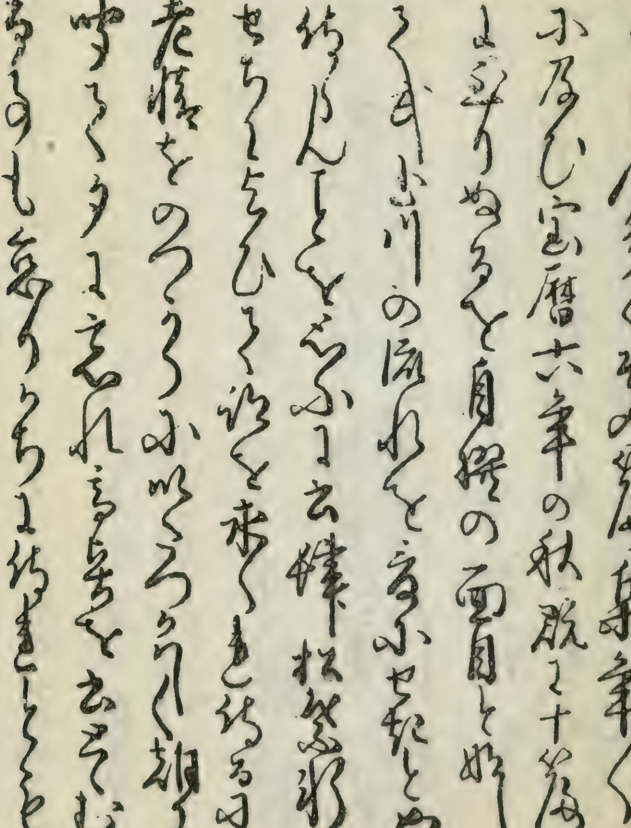
十一編序

（燕都枝折 初編）

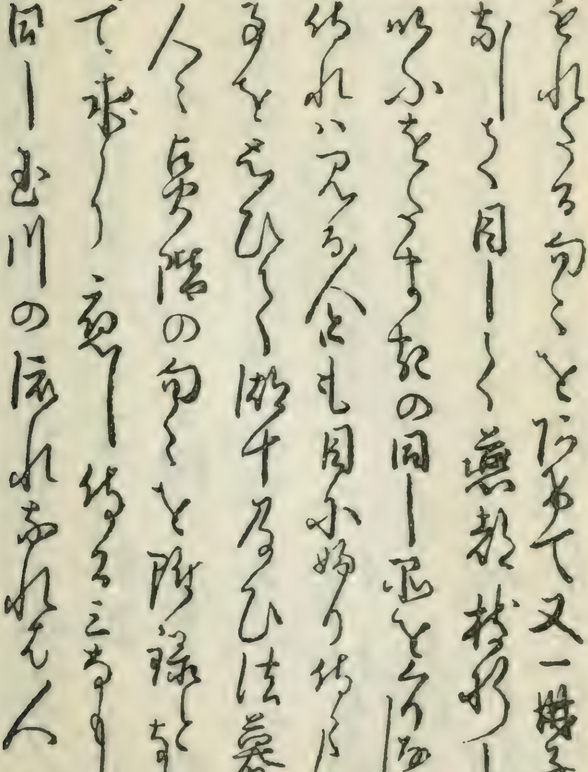
詩は漢より唐に至て三たび變じ、和歌又萬葉の姿古今に異也、さればこそ誹諧の流行變化は、年に隨ひ月にめぐりて日々に新也、往じ寛延冬の頃、机上に點を分る向々の秀逸をあげて、世に行ひ侍るに、近く時世の粧ひを知るにやすしと、手にとる人

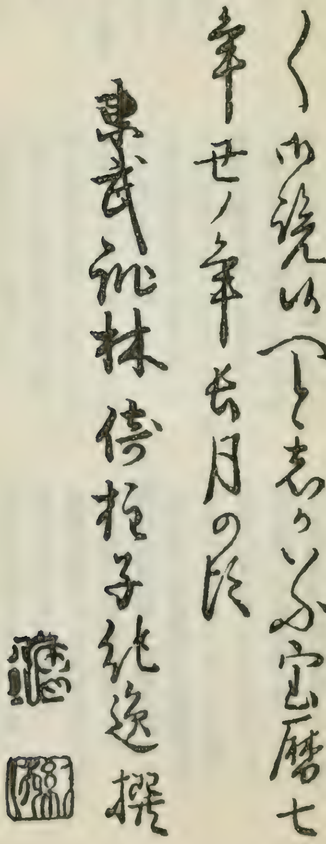


多く、その篇集年年に及び、寶曆六年の秋既に十篇に至りぬるを、自撰の面目となして、武玉川の流れを愛にせきとめ侍らんことを思ふに、書肆松葉軒せちに乞ひて、跡を求られ侍るに、老情をのづからいたつがはしく、朝に聞て夕に忘れ、高點を書とゞむる事も怠りがちに侍れども、かの求もだし難く、



先篇にもれたる句句をあげて、又一冊子となして、目して燕都技折といふ、をだまきの同じ品をくり返し侍れば、見る人ども目にふり侍らん事を思ひて、湖十及び法募の人々點階の句々を、附錄となして求に應じ侍る、みなもと同じ玉川の流れなれば、人々汲あげて、もとのこゝろをよく





よく御覧候へとしかいふ、寳暦七年丑の年長月の頃、

東武誹林

倚桂子紀逸撰

俳諧武玉川十一編

敲窓萬玉聲

石町の鐘はさくらに憎まれず
口まめな乳母が仕當るみなの河
蓮の葉の入相一ついとま乞
松風は老行く坂の這入口
草履取痒い所を知て居
化猫の十二單衣を着たがりて
梅見月寐て居る龍をゆり起し
縫上をおろして心長くなる
大きな異見如意でたゝかれ
親椀へ火を入るゝ遁世
こつき質とる木屋の奥
去年迄只の寺也泉岳寺
女房は晴明ほどにあてる也
塔の澤ふんどしをしていとま乞
めつたにこゞむ瞽女の行水
絲遊に繋がぬ鯨と成にけり

かんこ鳥みんな内所を知て居
階子を段の違ふさゝやき
まくら紙頬へ來て居る蟬しぐれ
行過ぐ女關の目ざまし
利口にあるく雨降の路次
行末もしらでつれなき種茄子
黃粉にかはく老の唇
家内ひそ〳〵御悋氣の伽
去る方へかなた買れて春歸
自前若衆の年もくれ行
御局の錢をいおると手を洗ひ
右へ御ざれと大根曳せく
女房の異見酒ばかり止め
子の事をおもにふくめて放し鳥
庵室の藥せんじる黑木うり
乞食共さへづる春と成にけり
旅芝居あをたで埋む草の中
孔雀の尾見事に腹を立せけり
河竹の神奈川へ來て年がなし
わづかな瀧へ這入る鉢卷

鹿鳴て利口な顔をあやまらせ
初雁や文をくはへた聲でなし
ぼた餅に成ればやりても哀也
狹い原にはたゞ廣き結び下
一重は持て立たる小間物屋
下帶が赤いで風に手も當ず
うき世小路にあたり合ふ傘
物思ひ粒々の有そくひ糊
鶴から片身草履取呼
錢箱へはやく日の出る江戸見坂
子を攣られて子の顔を見る
うたゝ寐の足へ燃付く緋ちりめん
きさうな新橋と云ば大般若
八重むぐら鼠と共に棚が落
總様の目鼻のうごく大三十日
文を隱して筋の立つ顔
さよ更てうき物に成うどん桶
一切は濟乃にすがる大根漬
階子をたゝく團れの飯
大名を近く見て居る木戸の際

金にして見れば淋しき親心
雛の馳走に乳母の高聲
和尚のむかし咄す臺所
後家に間のなささうな女房
古御所や何かへがした跡ばかり
關の戸も棒ほど明て嵐の日
夜着の上先押て見て寄懸り
年明の哀見て居る針仕事
間の宿一把の錢が年を取り
蛤に成ての不自由いかばかり
百と聞ては凄くなる年
闇を擧メ〳〵過る年の夜
鳥影は貰ふ事から先に立
生醉の七つに見たる一つ松
うき世の金の居付く元日
女房も薄々知て火たき鳥
若衆の年の底くらで明け
女犬の乳に六つ首かせ
針仕事行燈へ寄ると女房じみ
隣で明かす乳母のふところ

よしや實木瓜も人も青い内
水かへば馬の口吸ふ蝸牛
十で三文ほどの念頃
やけどに馴れし大鼓うち
明六ッを枕へ疊む賃舟
握られた手を抱て來る尼
我戀は人に構ぬ一夜鮓
草履取少し若衆に楯を突
返し所を云はぬ傘
眞裸くらい所を味に行
草の庵孫にちび〳〵むしらるゝ
椀久も舟に乘る時靜也
弟は喰勝て寐る天の川
小指からむごい所を尋出し
耄れた娘の片付て寐
名代の乳母へ當る棟上
女房の曲にてありく一手桶
内へ來て身のいたく成る四手駕
元日の塵はつまんで投出され
敷金に連理の枝は作り付け

泣せすかして前髪を撫
錢の音して凄い草の戸
親の代の大黒計り殘りけり
十能で人を拂ふ餅つき
干大根はだなの側に恥かしき
暮六ッを我物にする通り者
松風の裾がさはつてこぼれ萩
あげ屋で咄す親類の無理
線香も戀に遣へばせはしなき
呑ねば淋し二日めの腹
立派な駕のぬれる清水
歯へ當てて見る師走山雀
神奈川で見る付け登せ者
茅の輪から出て踊の輪へ拔る
生醉に乳母はちいさく成て行
尾長も敵に追入る雫（あまこひ）
錦木はたうとう丸でしてやられ
燃立てば前を合せる蚊やり草
干からびて居る瀬田の傘
聟山伏へ夕日こぼるゝ

五つめもまだ我内と思はれず
白粉は我を苦にする始め也
牙婆の爺の湯殿迄來
髪が光ると惜まれる乳母
おん出され數鳴る鐘が耳に付
くさめ一つもいなの笹はら
安い男が出ると夕ぐれ
風の口からくれる松の風
先づ丸薬で誘つ流しつ
うなづき合も四十七人
薄霜は毒にもならずきり／＼す
來さうな人の知れる詐言
はなす爪つれなくも酢は煮返り
御屋敷といへば娘はなみだぐみ
勾當の心で笑ふ臼うるり
背中をかいて貰ふ蟹喰
又せしめんと佐渡へ旅立
杜若蛙の面へ酒をかけ
夜寐ぬ鳥にあきる河留
春雨もしつぼりと聞く院の御所

いもうとの顔で長者となりにけり
大聲によい分別はなかりけり
泪から久しい尼の顔が出る
節季の晝寐只事でなし
湯島から黒く時雨ろる柳原
伯父が來て踏付て行く戀の山
からびた顔の並ぶ辻番
かつがれて鼻を明けたるこぶするめ
部屋子に成てまづくなる顔
鵜遣ひの直す心をたゝき鉦
おとなしくたゝずみ給ふ最明寺
なまこが腹を立てば笑はれ
黄昏近く下りるやねふき
赤坂の戀は御油へも廻る也
耳を聞て居る身は雪の鷺
繼母は人參の入る顔でなし
淋しさのまだ氣に入らぬ石燈籠
錢が自由で下卑る草の戸
唐の墨を目當にあらしふく
折た手を前髪でふく唐辛子

鹽竈も横に煙れば詠なし
妾から人のすかれの日がくれて
かたみも届き兼る極月
夕顔に來て晝顔にいとま乞
振袖の帶たけ立て鼻を切
編笠で面目もなき又從弟
男かと問へば夫婦の見合せて
いけまじ／＼と仲條を出る
旅役者丸寐して居る栗の花
長き日に茶碗と茶碗くらし兼
むす子に毒な京の六月
朝顔は金を好ぬ垣に咲
氣違の手に薬しやうがは目に立す
仰向てどちらへも逢ふ口をきゝ
釋迦より丈の高く成る錢
かこはれの世間で引ぬ風を引
かうやくを張かへて居る與津河
でつちを叩る聲も極月
新造のはや胸ぐらを取覺え
天人も衣返せば風

神託直に醫者の仕合せ
越した向に去た女房
蓬生に取締もなき道が付き
寒だけ立ば綿ばうし買ふ
化した狐土手に手まくら
草を焚く篝（かゞり）へ長い馬のつら
嫁入に母の落付く御紋付
京のことばに馴れた底くら
雛のやうでも口は剃刀
ともし火をかき立なくす縫習
御肴と喰ふやうに云舞の袖
飛ぶ鳥も皆落るもみ上げ
歸る帆を母は覺えの夕煙
山伏の総の道にも着かざりて
大門を出ると昔の咄して
うれしさの木に突當る放し鳥
から鮭も夜更て聞ば新の音
あさり雁木に座頭つくばふ
舞留くらふ後家するど也
八重むぐら折々見へる烏甲

日蓮と婆との中に垣はなし
角落て一つ隠れるならの京
菊の露五月五日と従弟にて
四條から糺へ足を踏のばし
鎌くらに牛のうづまる稲葉雲
半分は鉄にかゝる物着星
出ると總身の光る丸山
物前に行くさよの中山
江戸の彌生に武士の賣買
年號も新造までに二度替り
けいせいの句も追善に入佐山
五節句の外に二度ある小豆飯
薬の中から辻番の首
はつとした内藤様のたうがらし
跡に立事が嫌で渡り徒士（かち）
人が覺えて瘤も外聞
錢にめづらをつかむ武藏野
婚禮に先立物は異見也
端シ折を西の禿に見付られ
印籠を明れば急に年が寄

稲づまや女郎の植えた田へ通ふ
こんな腹ぢやと見せる日光
手附のうちは松風で置
新地の意地に赤い物干
曾我へ片身の届く六月
三度飛脚に去状が着く
頼政に添ては入らぬ緋の袴
女房の責氣を付る石どうろ
うかむせや水にしてさへ恐しき
俄分限の親類にあく
どこやらが香の淋しい秋袷
思ふにしては長い寐すがた
やよひは人の眞中を着
葉ざくらに成ては鐘を尻に敷
海に千年女房に成
五分々々にして二人店替
初に旦那と呼で吹出す
山さへ笑ふ山の金元
青梅に鳴くうぐひすの袖をとめ
弓矢を捨て甥のやつかい

云はぬかはりに鰒はふくれる
人先へ乳母は出て見る天の川
今にあがらぬ神主の歌
どうした文歟來ると口笛
母親のあるひはおどし手を合はせ
たはら藤太のうそは出次第
二三町我子に似たる子に引かれ
つれなくあたる家とこんにやく
弓は袋に狂ふ米の直
截入に灸をすゑたはほんの事
ふんどしに棒突の入る佐渡の山
朧闇のある夜狐の供をして
三人寄れば三分入る智惠
親仁もぬかる吉田岡崎
相傘の跡から毒が降て來

庭舍明月光

隣の乳母とうばのかさゝぎ
坊主がへりの口が利き過
ふたりに成て鼠さわがず
代參に來て我戀もふし拜み

早乙女に恪氣言はるゝ小松原
座頭ものせる京の書出し
庵にづう／＼御扶持盜人
七月の夜は佛さへ門に立
赤いあたまの揃ふ小ゆるぎ
茶碗で呑むも口のいたづら
さみだれや味な香するやかた船
信濃なる佛の元はあくた河
女房に成て遠い酒もり
遠寺の鐘に手を洗ふ尼
茶の木いなりへうつぶいた顏
むかしの急度見える蓬生
十月中に貸しなくす傘
根太から咄の續く清見寺
きげんのわるい枝折戸を蹴
隱居の垣根馬の目に付く
こゝろの角をかくす洗粉
中居が背中うてばひゃくや
雲水は出す度に茶をいたゞいて
木枕の香の只ものでなし

合羽を着るといそがしい僧
茅の輪を拔て賴む綻
乳母の袂へ這入る草鞋
物思ふ形へ抱付く風の神
ぼた餅も荒うち程の手が入て
禁酒して一人淋しく疊り
乘れぬと見えて歩行で行く使者
南無あみだ佛立役に成
味な所に椽の付く母
鷄も四方を覗く新宅
前帶に成て覺るいもせ山
かぎ裂迄が傍にたつ
捨子のふとり母に見せたき
長く寐る子のない女房うつくしき
金がかたきのさばへなす神
尼も平家の喰さがし物
短夜ながらさかやきのあし
まだ金山にこりぬ乘懸
袖から袖に餘ることづて
狸が持て入らぬ剃刀

表太を知て後家はづす也
投る小判に向ふ敵なし
馬方の一大事也女郎花
仲人が來て逃る手のくば
女房の前は侍で出る
異見がすむと伯母の手枕
馬に見られて怖い行水
夜はしん／＼とつゞらから出る
うきよのあらを京に寐て見る
おもひ寐の手を投て置く蠅の中
朝から鰤只事でなし
棒を上手に遣ふ兄分
冷た物喰ふ唐の三月
いくぢなく公家侍の三ヶの原
片足でこは／＼なぶる捨小舟
逃る時にも鶴の横柄
翌のくすりの賣る晦日
長い名を一字書れてうれしがり
起ると壁の高い還俗
いなばの露に老のうしろ手

石切の腹の立つ日は日へ這入
九りんは知れた物を算える
寺の拂を舂るうどん屋
あらしに錆る牧方の錢
僞のしぐれに路次へつゝと立
持て來た聟置て來た物
うまく寐て立つ吉田岡崎
米屋へちなむ鷄の發明
蓬が宿へ灸すゑに行
十二單衣を脫げば妹
生贄の强飯と迄納りて
かげろふのちび／＼燃る下屋敷
夫が抱けば赤子大きし
山崎や日を見合せてをとこ山
よむほど書けば世に男郎花
はだかで京を出ても京者
吉原さして法體に行
南ばん療治きつく聞える
鰒で育つて鰒しらぬ顏
たからの山を瘦せて出る聟

一つある心のうごく秋のくれ
邪魔に成手の多い看病
番附で見れば夫もにくゝなり
風に喰殘されしあづま屋
年忘れ夜はほの／＼と角かつら
松風も最う十月は怖く成
夜の火のしの立身へ魘
幸崎は捨子の顏も朧にて
後添にそれと云れて精進日
天の川袂のうちに蝸牛
女の顏の粋る關の戶
錢靑々とかまくらの穴
婚禮の日に眉のはる尼
鏡つたなく有たけの息
抱へて通る質に梶の葉
飼鳥一羽妾のわたくし
金箱と言れた果のさよ千鳥
浣の家中を倒す歌よみ
さむしろにある夕暮を咄出し
寐るにも嫁のいとま乞して

また此町も賣る白粉
かぶろを消して廻る拍子木
皆出拂て庭にあんどん
うれしい森へ鴉のやくそく
長者の金の剃てから減
しのぶ山しのばぬ山はよい日和
枕直しに二十日草ちる
誰をたよりに敦盛の馬
小原御幸でこりる太刀持
はづかしい名のきえて子が出來
二分借て狐川より引返し
朔日のおもしろい日を寐ころして
言そめるやうな十月の笠
鉦に黄粉のかゝる夕ぐれ
此山をこえて火を打みそさゞい
まだ年も四十で居れば面白き
取付にくい顔へ横笛
座頭のこゝろふれる晴天
夕べの顔をかくす檜扇
髮結てから痩る江戸入

によき〳〵と甲を脱げば皆坊主
松風にふつと氣の付く三十九
生酔の歯の立ぬ反橋
しころは切れて五十間道
一文餅に口を明く馬
小萩がもとへ寄る重箱
まだ行水の怖い七つめ
乳母を暦でたゝく霜月
なごやからなぶられて來る干大根
辛子のために取て置の婆
狐川より暮て提灯
ころんだ所が生酔の宿
かぶろの返辭袂迄來
くすり喰して人に嫌はれ
今ぞ異見のしみる雨もり
また何か出さうな名也伊吹山
公事をする子へ伯母の付聲
翌る日は拜む氣のないぬれ佛
藤十郎に似た人も死に
袖留になるたそがれの鐘

うそを教へる十年の親
一首つらねて金借りに遣る
うら若みいふ程の事をかしがり
かこち顔なる口へくろ髪
火のしにもしなへる腰の朝みどり
關守にきたない顔を見直され
谷町はうづらの聲を上へ啼
死たいといふ口へ初物
十月晦日若い夕ぐれ
椀になみだの溜る迷子
けいせい買の母は空にて
寺の異見に遣ふ傘
行水に借た盥に蝸牛
たうがらしにも角文字の陰
殊勝になると和尚代られ
千両入るはきつい物の怪
日傘七つの鐘に細く成
天の川流るゝ下は草履道
きのふの娘齋に呼ぶ尼
廣げた文のたけに寐ころぶ

何某の樣も節句のうしろ前
九十の夫婦凡夫ではなし
金箱通る關のうら枯
內儀の膳の分る塗箸
風のうちへ這入ば平元結
井筒に寄て鳴らす鬼灯
しだれざくらへ入れて見る顏
來年の大小知れて薄もみぢ
亭主にも戸を明兼る橫時雨
二十四日も鵜ほどな雲
只有れば少しうらみの鮓の蓼
野分して猶うつくしき墓參
六十一ではたく分別
松風がふくはづれ開帳
長崎の歸りは我を振かへり
人の身のうしろへ向ぬ冬の雨
百夜の傘のかはく松風
夜更ておろす筆にうたがひ
ふいと氣が付てをかしき柏餅
子を抱てこそばゆがりし白拍子

忘れ草根のない事が面白し
むす子の耳に鐘は上野か
死んだ跡にて譽る晴天
音羽の瀧に白人の鴛
久しい物をねたむ六月
入替に來る人質のうつくしき
田を付けて遣るかつらぎの神
ほくちに骨の折るこり須磨
十人並とおとなしい顏
うれしい髮を行燈で結
たつ鳥跡を置付て出る
硯の海を卷上る文
陰膳に匂ふ計の青山椒
溜た上を撫るはちの子
蓑と酒とが馬子の寐道具
あぐらに穴を明る百兩
意地の引張る十月の餅
住吉へ來れば時雨はまだ靑し
うしろへ智惠の廻る看經
子が買て親の寐覺のきり〳〵す

請取も共に流るゝ御祓河
三年ぬれて歸る梅若
水をさゝれて鳥犬死
うつくし過て寺へよめ入
橫向に別れの鷄の哀也
六月も夜はうき世へ入れて置
柳原行く蜘い振舞い
つくばおろしに吹上る飯
師走の風に正月の音
似た顏を見ても淋しき精進日
明たての戸も定まらぬ加田
鳥さへこゝろの替る天の川
今は一分でがてんせぬ海士
柏の葉葉守の神の意地が知れ
たね馬の年もかぞへず老にけり
をろせ來て居るかさゝぎの橋
出家の心足らぬほころび
だまされ安い前の僧正
腰元を吹折る程に野分して
關守の顏は向へ年が寄

柴の戸も我喰ほどのいなば雲
蚊屋をはづせば替る主従
錢づくほどに君も旅なれ
笠を袂と思ふ腰元
秋をちび／＼つまみ込む庵
秋の夜に罪もあたらず長枕
草鞋は斯う召す物と泪ぐみ
寐てまつ帶へ夜半の松風
能囚ほどの川留もなし

蟋蟀人牀語

砂利場通れば知た看經
木がらしや奥歯に殘る柏の葉
平等院へ負ぼたる飛ぶ
驗者の側に匂ふ白むく
礎を闇に公家の夜歩行
柳が浦の蟹は歷々
早乙女は人の命を提て行
斯う死たいと松蟲を出し
門から海の口を吸ふ寺
夜はしん／＼と須磨の婚禮

異見の顔を舐めて居る蠅
その翌日も庵は寒食
水無月をふく秋風の慾
東枕に遣唐使寐る

江戸枝折附錄

風窻潮十選點

十五點

三十を越ると縞が眠う成
米つきの休む間に雛を抱
古溪より出しこゝろと思案橋
赤子も數に入る乞食
己が田をとられし水にわたし守
日本晴に富士はちいさき
著丸の重みに狐老たり
古御所の跡なつかしき雲の峰
二疋三疋這子行く春
鍛冶屋の弟子の稻妻を追ふ
刀さず御影で京を見て廻り
剃て後思ふ昔のおそろしき

うつ蟬の拔た跡から蚤がとび
五里乘れば三里と咄す旅の癖
神風はらむ巫女のふところ

十八點

一夜泊の節違に寐
新た神の前へ越す箸
近付に一人も逢はず葬遲き
化物咄し子を思ふ鶴
當御臺馬も勝れて召と也
下山した兒は女を怖がりて
ゆすぶれば子は寐る物と合點して
思ひ出しては曲る藪入

蓬萊二十點

白髮に成て戻る松坂
當寺へ是ぞと思ふ人も來ず
行秋に御經の息も見ゆる也
狩人の寵へ下る盆の内
あざをとがむる面白い中

半面美人極點

死だ噂もおのが養生

待乳山是から先が傳受事
越入道よし門選點
書拔
二階からけいせいも田を植たがり
斷食の屁の香も香もなし
菊の節句に消る浪人
極樂へ氷のやうな足が來る
おのれが足に繋るゝ馬
盜人の活て折々禮に來
夜が明て戻れば內は地獄也
一むかし經ても土產は無事ばかり
舟宿迄につまむ綻び
寺隣御客の音にこまる也
耳俵淸正よりのおくり狀
機嫌直しに足の毛をぬく
辻切を見ておはします石地藏
客を仕舞へば白い僧正
傘借に沙汰のかぎりな顏が來
覗かれて酒盛に成くすり喰
富士ほどな噓も作て遣唐使

水車あたりへ夏をよせ付ぬ
角文字や御師の土產も鰹節
蚊を燒てさへ殺生は面白き
十月の中の十日に口舌して
大判の急度した場は丸はだか
仲人の口ぐせにいふ石の上
鳴るほど鳴てけいせいを嫁
人のわかれを踏ばつて撞
大文字雪も殘りはよい詠
鎌くらの秋の哀はなまりぶし
分別も男に近き母の年
關の戶を櫛をくはへて立別れ
大工に損を懸て御遷化
男を釣てまがる橫町
對の娘をさがす祇園會
ひとりは色の白い落人
母がぬるくて鍋の數見る
掛りも出來ぬ先に紫
手と身で寒い須磨の正月
我年に禿を見れば矢のごとし

石女も石を孕で田植うた
吉原も富士の日からはほんの夏
來ぬに極ていろ〱に寐
化物屋敷おしろいが咲
俄分限の女房に倦
うそつき歸る向から春
息ついて我も我を折る蟇(ひきがへる)
柳尾選點
書拔
地獄へ落す舟の小刀
蟹うりが來て物具の音
雪の傘突のめされて輕くなり
泣く場を笑ふ友達の墓
こつちの飯で庫裏のふきかへ
今少し狹くともあれ音羽町
歌がるた人と云ふ字に目がくらみ
法印の瀧をほしがる藥研堀
めんるゐの恥と成たる心太
禿が小指まつたくの怪我
立てばそれほどくらい墨染

海鼠には過た名所の金花山
中間の喧嘩にしては光りけり
寒ざらし弱い日影を追廻し
泪にも少し間のある百ヶ日
制札に無筆も同じ立姿
伸をする手に逃る腰元
片小鬢年の寄たる楼岩箒
小便してもかき廻す槍
樟脳くさき大塔の宮
いろはのうへを歩行く棟上
銅の鳥居にやけどする蟬
投られて鋏刀の心かはりけり
縁頬で何ない飯も面白し
藪入の仕舞の指は木挽町
人間解る不二の初雪
一分拾たと引かぶる夜着
呵られて親仁のよめぬ本を出し
琴に禿のふたりつひへる
仲人のなんと見たかと咳ばらい
非時の給仕に遣ふ新造

蟬一つ家内に舞を舞はせけり
里子歸して寒いふところ
よな〳〵大工太子建立
わすれがたみの覗く魂棚
なみだの中へ乳母の引越
鳴るほど鳴つて伯父は出て行
聖天町へ邪魔な親類
釘を吐出すやねふきの咳
きり〳〵す背中の上に膝がしら
泣と笑ふとふたり呑む乳
瘤の上にて休む剃刀
買にも精のこはいまんだら
今も名の松風瀬平散うせず

米花庵田社選點

十五點

よい男運のつよさは金がなし
ひちりきの舌へ一露稻の雨
我が名の川に角力のとめられて
さつく〳〵と霜の野々宮
札うてばあみだもけふは六玉川

異見の耳を洗ふ深川
目で掛る橋をあぶない戀が行
二度にしぐれる祇園清水
姫路の太鼓松にこぼるゝ
久かたの樂屋へ這入る駿河舞
燈さうとすればむす子が遣ひかけ
穴の明く家老が御意に入にけり
山の神氣に入る女おこせにて
瓜小屋の軒のうちの足の跡
松ほどに繪師もうねつて正うつし
祭馬とうふのやうな汗をかき
又から鮭でおどすみどり子
合羽とり出す阿野の松原

二十點

盃に夜の祇園を黒蒔繪
馬市を樗から見る畢の袖
夏の柳の中に古鍔
さくらの中へ鵜を賣に來
砂利場で待つと掌へ書
曲水の盃拾ふ谷の寺

追剝の嗅ぎ〳〵戻る戀衣
山切も十夜も同じ阿みだ堂
片々は人日の殘る矢大臣
日枝からも土器投る二日灸
うき草に年も流るゝ女形
馬の喰出す草川の笛
袖乞の子を寐せ付るさいたづま
鶯の序に藥玉を書く
初瀬を近く拜む十月
初しぐれ過し戀草かこち草

二十五點

又者のものとは見へぬ淡路島
狐の穴に銹た剃刀
道成寺ふらぬも上手花ざかり

三十點

和琴に足の玉だれへ向く

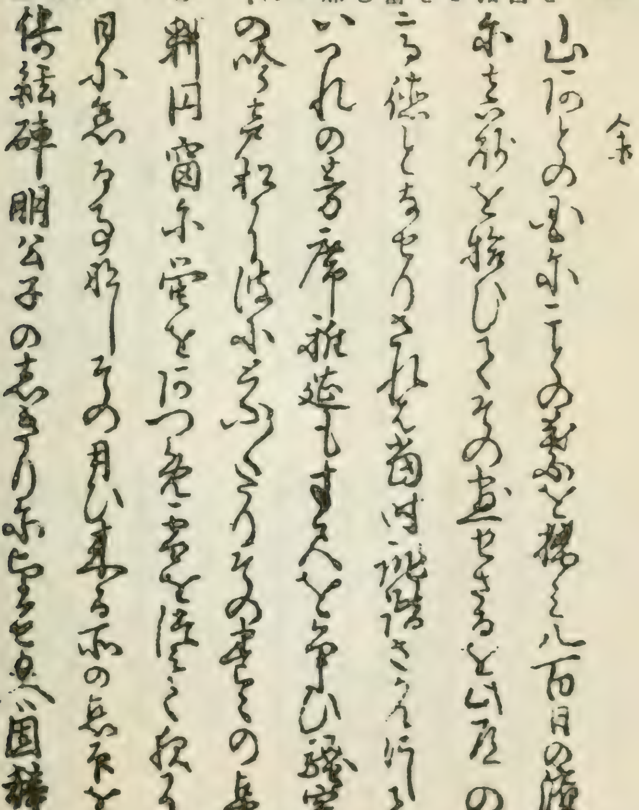
・

俳諧武玉川十一編 終

十二編叙

（燕都枝折二編）

山あとの國にことの葉を摘み、八百日の濱に眞砂を拾ひて、その盡せざるを此道の高德となせり、されば當時誹諧さかんにして、いづれの芳席雅莚も寸尺を爭ひ騷客の吟聲、松に波にとふくたり、その卷々の點耕圓窗に螢をあつめ雪をつみて、夜に日に怠る事なし、その用ひ來る所の點印を、倚絃碑明公子のしきりに望



せ給へば、固辭なしがたく、玉机の左右に奉り、舊年霜月の半より、今の印に改め侍る、その開印の日よりの高點をとゞめて一冊となし、燕都枝折の後篇となしぬ、されども老情忘れがちにて、書洩し侍る句々もまま有べし、その程は選者の老衰を計て、人々見ゆるさしめ給へ、元より性懶惰にして、累年此道に遊ぶといへども、誹書の一集もなさゞるを、門人社中の韲しき

りに責て、長き紀念にもと取催され侍れば、止む事を得ず、去秋文月の始に存立て、誹諧歳花集全部五巻、神無月の終りに事調ひぬ、則松葉軒藏板なれば、此折を以、此事も申弘め侍ると爾云

東武誹林

金馬城傍倚柱子

慶紀逸誌



丁巳年霜月改印

勤向窗前讀　二十五長

遂平生志　二十、

有女顏如玉　十五、

車馬如簇　十、

千鍾粟　七、

金屋　五、

長之屯二

俳諧武玉川十二編

有女顔如玉

雨もりに鼻紙入れて詠めけり
けいせいを親に云せて夜をふかし
まだ起ぬ格子のうちにさくら草
淋しさは向ふの顔へ寄りかゝり
髮結の下駄の緒ばかり都鳥
古い一分の冷えきつて居る
甲子に呼るゝ笘の橋大工
禿の聲の高い口書
仲人の十八並も合點也
玉川も一つは合ぬところてん
勘當を尋る親も中の町
殘た所は目から詫とる
蟲付かぬ娘の紋にいてふの葉
谷汲からはめつきりと肥え
振上る手を神主に押へられ
八味丸その咎人が持て出る

家老は負て戻る尼寺
晝顔の翌は手を出す柴小舟
泣時の櫛は向へ落てゐる
前歯二枚に三分取らるゝ
去る時は暦に沙汰もせざりけり
配當のにらむ所が口ばかり
しのんだる穴を左官が塗て居る
側に毒があるとは醫者も云かねて
溜息は戀しい所へ突あたり
上草履思はせぶりの音がする
縫上へ最う來年を疊こみ
日も袖もみじかく成て初しぐれ
いつ迄か十九々々のしら拍子
水汲の來て譽らるゝ佛の日
母親の口癖にいふみかん籠
男氣の明て云れぬ損をして
たとへる顔にこまる仲人
娘の背負つて逃る物中
かさゝぎの一羽飛んでは常の鳥
國家老かぶろを運て行たがり

凧はあらしの年の寄た物
さよ衣こそ〳〵留守を嗅ぎに來る
惜しい顔十萬遍で立て行
松にたき小篭にとぼす赤とんぼ
秋さびて俵へつめる松の風
客をいなせて夜着のうしろ手
母へは先へあかす青梅
舟宿の戸棚に光る太刀作
さし懸けられてうつくしく行
輕業の止めた咄のをそろしき
たち花のさはつた袖を嗅いで見る
五月から明るく成し柏の木
冬瓜にやねのくぼいうそつき
正直な手でたゝく鰐口
振て見たがる毛見の槍持
あんかう迄をあぶながる母
蝙蝠は短氣な所が御意に入
踏れた儘で古郷へゆく
一ト死(しに)に死ぬとねがひ事利く
その顔で中直りとは恥かしき

呵られて親父のよめぬ本をよみ
業ざらし／＼めとうつくしき
みんな手織で仕廻ふ三夫婦
藏二つ迄呑で内損
伯父坊主又かさゝきにちやく／＼を付
長く取のを代脈のしほ
悋氣の飯をくらやみで喰ふ
鮫でさへ親がなければあなどられ
宇治川を鵜でゐる顏の又太郎
けふはあちらの岸にうかれ女
弘法は石屋だふしの草まくら
夫婦して玉子をくへばをかしがる
戀衣さあといふ時うろこ形
さつき雨寐て居た形に膳をする
新宅に疵を付たる槍踊
畔も持て廻れば道具也
御歌が出來て直に御歸り
あみだに成て乳母の食傷
はにふの小屋に時過た鯛
てつきうに卷るゝ文も時節也

角力取それから先は鳴子引
氣を付て見ればをかしき柏餅
火を手でつかむ大つゞみうち
狐が付て越後屋の損
うそが嫌らいで顏がさびしい
青漆に取立らるゝ赤合羽
座頭の坊飛騨の内匠を撫でて見る
いろ／＼の中を流るゝひとへ帶
つゞはたち若衆にすれば老の坂
草履とりほの字ばかりで仕舞けり
ごふはらな事を見て居る峰の寺
乞食の餅さわらびの中
さすられてぢきにあやまる柏餅
うぐひすの舌も廻らずかいわり菜
草羽織女の年もくれは鳥
さそふ水もと舟が出て居る
うづみ火に一生のうそ書いて見る
蓮のうへ行く根津のとむらひ
初旅の先鶴見から喰はじめ
阿部の文殊で仕送りに逢

鶴昇の息次にする旦那樣
生ヶ垣にふきんの白き法事過
むす子のうまくはまる鳴川
尖（さけ）ぬいて貰ふを戀の橋がゝり
うつゝにも枕は客の方へこけ
寒念佛竹なら折るゝ夜もあらん
若衆見事に恥をかゝせる
ぬれ佛はじめてぬれて人だかり
草履にも我光陰を振かへり
竹門に預り者の女郎花
うづみ火へ鼠は聲をしほりかは
うき人の裾から綿も春の物
をどり子の木馬に乘てをかしがり
大きなうそをかつぐかう藥
柳原傘をさす日は淋しくて
おそろしき女のちゑも晝はなし
煮え切らぬ足も片々今井橋
悋氣の飛び火小遣ひへ行
宿代が出來て佛の行衛なし
生醉ひとり妻のしこなし

中のぼり濱をぎといふ名をわすれ
土藏へ入れて母のあら事
山ばつかりで今の河竹
新關でくふ新しい棒
材木になれば寐に來る鳥もなし
此一分女房のしらぬ有がたさ
藪入の二日は顔を餘所に置
母の小判のわび言に出る
わる口をやけた火箸で追廻し
をどり子で見た時はない尻
ためなんと引込紫衣の御分別
御組屋敷に似た貌なを（も？）り
枡呑に舌を出させて取肴
天の川せかれた事も一むかし
かゝる時灯を消す蟲は通りもの
せんたくを頼むも女房あひしらひ
入智惠されて師走さく梅
戀と酒めぐり／＼てたゝき鉦
十二銅尻へあたれば面白し
朝顔は兩手の入らぬ詠物

よもぎふの所々にみたけ錢
思はずも世をつれ／＼の膳のうへ
うしろ手に杖つく畑のあたゝかさ
玉のこし内に居るにも取かざり
おもひに瘦せてつまむ秋の蚊
ふり袖の手の置所なし
鶯を飼ふ後家のほや／＼
腹のたつ時もとの京談
六月の風に土藏の腹が鳴る
うまい事には遠いらふそく
紙燭して大事の闇へ穴を明け
冬至の梅に鳥のむだ口
腎虚する京を見て居るひがし山
七十五日と譽る獻立
かたみの扇捨てておく嵯峨
しかられた腹を直しに彈がたり
谷ッ七郷をうめる去り狀
治聾酒を呑で咄がひくゝなり
ふし穴へ時宜をして行太かぐら
都をよくは言はぬ母親

さびしさにじつとして縫ふ煙草入
食傷もたなばたづめの數に入
にぎりこぶしの這入る錢筒
うぐひすのまだ口先でさむがらせ
妾と口の合はぬ十月
行燈をまづい咄の中に置き
三月は顔に胡椒をあてがはれ
飯綱の鱈も三河町から
たそがれの鳥はねぐれて峰の松
刈らるゝもしらいで招く絲薄
戀ぐさや蚊の喰ふ足を打ちがへ
狸から狐の中に垣はなし
嵯峨の町湯水に釋迦を遣ふ也
うしろから鷄のくはへるあらい髮
干からびて居る關とりの耳
根岸の寮に金の出た顔
ほゝづきのケンに成日は罪がなし
あさつきに向ふと物が言にくし
角田川うきねの鳥も下戸ならず
新關守のしげい小便

呑人がなくて馬鹿な曲水
蘇生したかはりに腑がいばふ也
戀せじとみたらし河にくさいやつ
富士や淺間にあきる傘持
此度は水をあびるもえ杭
手近い寺へすゑたがる母
箱から明るうら島が年
利生が過ぎてふたり浪人
飯粒ひろふ蟬丸の膝
上下着るとよく鼻をかむ
道連の柱にひとり墨衣
三十日は晴て歸る鵜づかひ
江戸でも立てて見たい錦木
つゝくりと鳴尾短きあがり鷄
かたみ送りに出來ぬ三味線
こしかたを思ふなみだの耳に入り
口は妹が先へ生るゝ
姫君のめづらしさうに赤合羽
鎮守の宮へ出來たての飯
寺々の鐘に名をさす按摩取

あしたの晩は内で大名
うき世の端をありく生酔
泣ほぐろ死ほぐろよりよけれども
掃除人顔も明るき正燈寺
けふは程なくぼた餅をくふ
獅子の口から吹かける文
傘にうそを突せる通り町
寺を出てむかしにかへる上り馬
三の絲何にかけても器用也
舞葉のかをる下り在番
縫仕舞顔の淋しき時あかり
住吉の松も松也枡も枡
からかさの五本並んでおもしろき
土用干只の奉公と見えぬ也
ぬくめ鳥戸の明く音にあちら向
よいちゑは一つも付けぬ言名付
みじめさはにはか座頭の蜆汁
酒の地ごくの親椀が出る
九十九夜棒の出さうな闇を行
さゝくれは唇迄のあひしらひ

うぐひすの氷鳴わる五十鈴川
先もがてんのからかさをさす
土用に入て浪人の恥
闇の喧嘩のあたつては折れ
凧に突出し物の一つ松
煙のうすい志賀の晴天
身に叶ふ事ならばとは古いやつ
居風呂もしづんで見ねば知れぬ也
松島は米を買ふにもおもしろき
出代りの箸を折のもにくい物
あたまから撫られそうな柳はら
ゑびすこう去年の意趣を追回し
尼のはなしを尼が聞ほす
棹に成雁のあとなるはした雁
見たい程見て供に遣る遠めがね
身うちが馬鹿に成て納る
狆を見たがる本陣の婆々
乳母一人法事のうちは山めぐり
やけけいせいと伯父の高聲
地うたひは並んで口を明にけり

一部始終を泣通す戀
大福帳を書たがる後家
氏よりもなる程そだち杜若
みじかいはなし立番の顔
くらまの伯父を呵るせんたく
悋氣の顔の三日さびしさ
計る手に松葉を立る曾根の鹽
六部頼むでおそろしいうそ
錢をつく音もきびしき切しきみ
懸つた醫者の門を葬禮
戀の闇明るく成と吝く成
古郷戀しくうたふ足輕
入聟の狂歌出來たり小ぬか雨
剃刀の合ふも哀な松ヶ岡
若衆つれなく字ばかりで書
在鎌くらの鰹食あき
ちやうど座當でかはる御銚子
藪入のなじみの壁に針をさし
元は念者と咄す齋僧
事間ん鳥もまだ來ず十五日

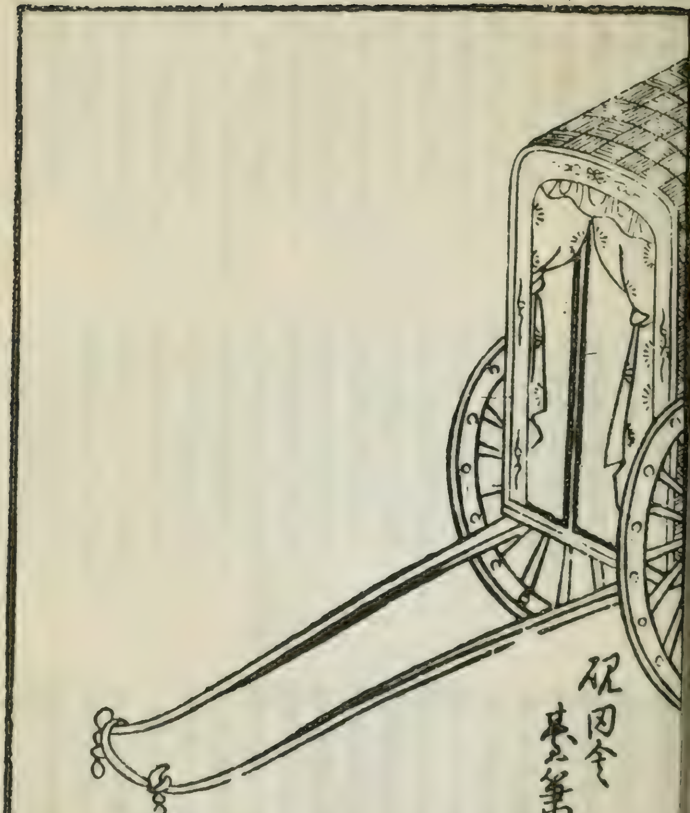
ためすにも當事のない螢火丸
樒持つぱしたの手にも品がつき
妾迄入れて持たきはさみ箱
小粒でためる恐しい金
ひよ鳥に云込られて一葉ちる
筒井づゝ黑い顔では取合はず
母親の付ずに出ればうたがはれ
むら雨はかたみもなくて猶哀れ
時鳥四月過ればやりばなし
さま〳〵喰て狐落たり
面白い事も仕舞うてよい親父
子が出來てあぶない聟もゆり据り
ゆすりの金の二上りに減
猪牙を女のしげ〳〵と見
顔みせを見に行く顔も宵に出來
智識さびしく蠅になぶられ
見せ物買の三人で來
思ふさま泣かせて置て中直り
吉原を横に見て行く終の道
二月からちび〳〵泣て品が付き

よみ人しらず辭をする下女
氣違にして松山も寐付かれず
卯の花が咲けば苦に成足のうら
新造のをかしい事を氣に懸て
奥様の毒を本屋が置て行
食傷のその梢とは梅青し
唇を見込に屁は抱込れ
世をちいさがる所化の元日
京を出て京にたとへる顔がなし
中日に死だやりてもふしぎ也
かんこ鳥さへ派のきかぬ三井
若旦那皆寐せ付て御分別
御はらひの明るく見える輕業場
利休が擧て直の上る松
緋ぢりめんには負る男氣
都鳥翌のうそへ行あたり
辻番の昔忘れぬ合せ鬢
寒聲の朝から笑ふ聲がはり
越路のなみだ枡であてがふ
もすそに針が有て入聟

傘を伊達にさゝせるかきつばた
夢のあたいが廣蓋で出る
立田姫自由にならぬ三ヶの津
隣のなみだかゝる破魔弓
大事のむす子長崎で死ぬ
十人並もまづい挨拶
女の聲の高い霜月
歸つたで結句箒のこはくなり
けいせいの指を見て居る廿日過
御耳にもたつ仲間の智惠
がてんした子を拜む極月
舟宿も出て貰ふ丸薬
やつと戸の明く能因の庵
手のくぼを母のして居さくら草
子に氣の付かぬうつくしい乳母
考へて雪へ飛込む寒念佛
あみ笠を窓から渡す御乳の人
撿校の久しい事をうれしがり
しげ〳〵と見る婆々もくせ物
妾の山の違ふ丸薬

御内儀の藝を見て居る供廻り
あくた川飛鳥川にはまのあたり
姉はかしこく仕舞ふ針箱
去り狀を持て淋しく食に付き
行衛が知れて母の看經
柴の戸へ念の入たる咳ばらひ
生酔をうらやましがる鉢たゝき
青田へはふる妓夫の傘
芍薬も牡丹が咲て日惜き
二度ぶりで命めで度尼に成
親椀に取付て立つ病上り
引ばられ行く袴着の坂
錠口のやかましく成る男帶
うまい事云て聟を證據人
仰山に夜の明る顔みせ
芝居見と山を懸たる古狸
妾の味方うすい唇
うしや二度見る子おろしの顔
あづま屋をいつしか馬の喰たふし
杓子定規は乳母のゑて物

小豆飯上下程の事でなし
からくりは女に付た病なり
能のぼたんの廻る錠口
うぐひすも役者にしては若衆形
まよひ子の親は米屋にして仕舞
中垣の上へによき〳〵人の口
顔よせて馬の粥喰ふ夕日影
こそぐる心よい橋が出來
いさいかまはず座當寮に行
尺八をあはざの烏鳴ならひ
鎌倉へ行くと火箸で書て見せ
腹のたつ時精進をおち
横たつ里へかよふ文箱
古郷からも祈る奉公
坊主に成てうそに實が入
ます穗まそうの戻りには晴
小舅二人あつい物喰ふ
唐の聲もる石町の窓
隅の椽婆々は靜に畏り
まだ世をかざる尼の目のうち


硯田舎

けいせいを甘く覺て哀也
目鼻の間のかゆい立聞
うしろ帶脇へ廻てうたがはれ
奴の律儀用が辨せず
捨た身と思へどすごき九十川
二百十日の古帽を買ふ
落る葉のどこへも行ぬうしろ帶
引摺て來る精進のうそ
異見の奥義女房持たせる
二世懸る夫に隠すもみ大根
身代を足から崩すきり〳〵す
行ぬかといふも新地をはぢもみお

逢平生志

高砂や朝茶を呑んで掃きに出る
小粒四つは氣にかけぬ妻
此度の和尚池を楽にする
口なめずりで長崎へ供
南六波羅で懸る勘忍
春雨もあゝ聞けばよし院の御所
久しい中へ見附から聲

柳原にて蜘の振舞
三ヶの庄のうごく廻状
光陰もうくとしづむに遣ひ分
今戸橋上より下を人通る
古着を買て出れば日中
節句を背負も丑三ッの頃
そつと明ても口まめな錠
あづまくだり降らぬつもりの傘袋
明石の礫須磨へ飛ぶ烏
女房になじむ馬のおとろへ
今吐た鵜の顔を詠る
くらい廊下に馬の足音
やりてが宿に殘る若黨
むらさきに染殘さるゝ都鳥
五人男の橋に吹雪
こぼれ松葉のうへに枡うり
子を持てから幅な寐亂
上を見るのが放下師の智恵
夜着やまくらも烏のした事
借金も寐て見れば夢の世

兜巾をとれば元の主従
棧敷へ落る富の傘
庫裏にさびしく溜まる綻び
蓬生へ着く横にする帶
六波羅を出て開ぬ明六
馬を呵ると顔を見る乳母
門徒の阿彌陀後光過たり
顔を放下に遣ふ三月
人の子の痛も我子のかゞみ山
とり上婆々の男湯へ行
十月の亥の日に隙はなかりける
人の物着てかつらぎの神
手のくぼで世をわたる木食
首ず後てから顔の静さ
猪を持てありくくらがへ
橋一つ醫者絶して出養生
はつに旦那と云てうつぶく
釣鐘を引上げる盗うまがらせ
かはゆい子旅から憎く成そめて
西の五六にくらい盃

御知行に五十町ほど穴が明き
一分つれなき井出の山吹
孝行に淋しい錢をはなし鳥
山師が付て狐出て行
酒屋の遠さいなの笹はら
一日口のとがる笠縫
くすりに椀が入て是まで
極てゐるくらがへの面
五人組迄詰る雨乞
親分が來ていなおほせ鳥
すき櫛の通り心もやよひ空
大屋に書て貰ふ去り狀
きん玉だけにふえる居風呂
さむいといふ字隱居から出る
にくむものなき大年の鐘
願ふ衛士の晝起て居
夕べを寐せぬ鹿を見に行
女の智惠の火を細く燒
子を抱て居さむき佛の日
女房の目には高い盃

中陰に笑たがるもうつくしき
集る乳母は嫁の入札
正直に鳴く闇の庭鳥
ころび合ひあぢな所に起て居
女房に損の廻る厄年
年忘さらに師走をよせ付けず
恥がかうじて隙な極月
突出した手のむづ痒さ放し鳥
母の顏をばしらぬはま荻
たち花町に夕べ見た顏
天文臺でなぶらるゝ星
寄りさはりちび／＼呵るつくも髮
足駄でありく木食の意地
近い使にくねる寒聲
波うち際に公達の馬
申子と云はれて顏がはづかしき
須磨の三とせに入らぬ小づかひ
おもひ切る日の兩方が醉ふ
干したら何ぞ云ひさうな夜着
もらふ結納を遠く見て居

仕舞ふとさむいこねどりの顏
留守と云はせて藥喰する
近づきに成て淋しき女形
寒念佛子のない母を寒がらせ
とのもりの眼藥に成る松柏
二羽たつ鴫に跡のない音
二つはとかく敲く鰐口
漏から這入る庵の稻づま
佛御前も同じ朝飯
云切て見ればことばも捨小舟
異見の狀に筆もくたびれ
遠里小野で炭の入札
五十を越てさむい寐所
北山で舞鎌くらで舞
男ではなし日蓮の顏
その癖志賀は晴る雨性
辭世の筆を人參が持
白子の落馬親子三人
むかしを譽て廻る大寺
をどりに穴を明る廻狀

わるく呑んでは毒な玉川
呵る親だまる親皆薬にて
草津へ立つはいとま乞なし
世の中を見限て聞く鹿の聲
鳩吹き習ふ獵人の妻
彼岸から出る百姓の智恵
勘へて見て笑ふ去り狀
蟲干を詠めて僧の慾か出來
につと笑て帶をとく海士
惚られて柳に餅のあひしらひ
八十氏人の歸る青山
まだ朝顔も咲ぬ上首尾
四條紀はあてがつて夏
子に臥し寅に寐入る河たけ
またがれ損に成しうたゝ寐
人の問ふ迄二服づゝ呑む
家守の袴只事でなし
抱守の來ると何ぞに寄かゝり
郭公吉野を青くして通り
疱守て出逢た先もあちら向

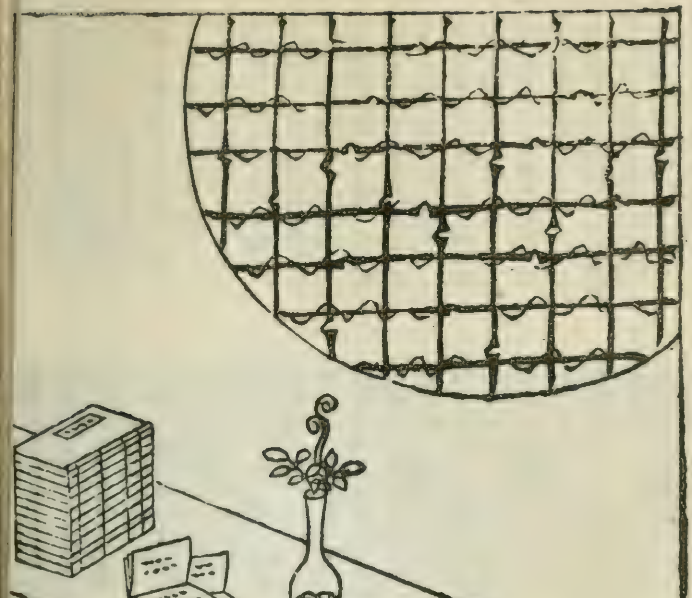
隱し町うまく寐過て原と成
盜れた程又貰ふ世捨人
立田姫きのふの名越見て通り
我胸の火を押へんとさしも草
親に解せる年の尾の謎
鐘つきが飼ふ鷄も派がきく
宿貸さぬ灯を見へぬ迄見る
娘の鷹でちらほらと金
借りるが最期いなのさゝ原
柏もらひの木の上で聲
嬉しさを仕立て居ればなぶられる
廿日草十日はよ所を見てありき
禿が開て堤くづれる
三くだり半で隙な荒神
聾に成る筈のくさめが風に成
生るをころす人の六月
女衒と間の近い仲人
吉次が供の一ぱいに行
剃寐を呵る鐘の大聲
術へあたりのつよき木がらし

戀にふさがる水入の口
水をあびせた聾が湯に行
御油と吉田の間が寐所
日もてら〳〵と榛の木を積
今年の物はくはぬ元日
駕から聲の懸る近道
狐が落て古いことづて
梢から隣へはふる蚊遣草
背中の塵をなぶらるゝ乳母
雪とこたへる竹の大聲
二本這入るとさける袖口
追分へ來て出る分別
人の身のうしろへ向ぬ冬の雨
百夜の傘のかはく松風
蚊屋をはづせば分る主從
柴の戶も我喰ふほどのいなば雲
秋をちび〳〵つまみ込む庵
神前さして禰宜の小遣ひ
わる口を帶でなぐればこぼれ萩
物思ひ琥珀の塵をさびしがり

屏風に衣人音もなし
石でない枕が今は人を取
たきつけられて千日の萱
馬鹿なくすりを拾ふ舟着
七符に寐せてはきたふす也
世を捨て振向く所皆さびし
祇園の螢宵は石垣
外科と一所に立て行く蝙
まだ年も四十で居れば面白き
蟲うりの我寐る夜を淋しがり
かさゝぎに成る人連て夕薬師
大津の智も繪心で取る
たま／＼京へ傾ひに來る
赤子を抱けばかゆい手のひら
おはう遣ひに松風も逃
腹をたゝいて見せる江戸もの
女郎花馬子が落てもたはいなし
紅閨にうつくしいゝの二つ鳴り
為と云れに罷出る母
冬籠意地のきたない雨が降

若衆の手からわたす袖形
買ればなみだに買へば御機嫌
棒ちぎりで武士の婚禮
うす着に成と髪の湯がわく
人形の裾と裾とは小松原
ねはん像庫裏から見へる足のうら
起請に一羽引けるかさゝぎ
母のはたらく仲人の膝
古御所へあがればうごく物ばかり
港の飯は風を見て焚く
京のこゝろの知れる塗箸
出來上る長柄に見世のかくれけり
茶の葉つむ側にさびしき墨衣
御上屋しきで鐘は湯と成
茶碗で呑むも口のいたづら
涼しい乞食柳から出る
鳳凰も尾に身代を入あげて
元祖高尾に馬で來る客
屋敷ありきの尼もかさゝぎ
太刀持は毛蟲の下に畏り

兄弟のいんぎんに成る御油泊
結城へ落る不斷着の金
かんこ鳥伯母が歸ると飛んで行
うき世の尻が中條へ來
風の藪を吹くのがおん詰り
世の中や今をはじめのたばこみせ
衣うつ里もへちまの片折戸
他人の谷へ子を投げて見る
なにはづや物書く事もよし惡し
御里から御夫婦合を嗅ぎに來
うらみわび袖を見てゐる五月雨
行くれた所にとまる拂物
尻ほどもなき乳母の傘
吐く雲も呑込む雲も秋の峰
うそをつく人に三十日の用が足り
さつまの客の影で内損
箸紙に名が出來て分散
三室の岸を禰宜の松明
太夫の瘡かぶろ重なる
正直に咄せば長くなりたがり



星の名を覺て空も伽に成
虹を蛙が張肘で見る
着ぬきを買へばけふの細布
和尚のむかし咄す臺所
六分は錢でくらす一生
手付けのうちは松風で置
葉ざくらに成ては鐘を尻に敷
女房の賣る氣を付る石どうろ
思ふにしては長い寐すがた
稻づまや女郎の植えた田へ通ふ
やよひは人の眞中を着
ならの都に殘る横柄
冬を目口へ入れる浪人
よく見れば米の守りも下卑た物
一思案して前を合せる
灸のけぶりの髱で横折れ
異見功者の藏へ呼込み
浪人の三度諌めた物がたり
小侍敷のし迄の相手也
相傘へよい相談をつゝき込み

氣違も貸した物をば取たがり
女乞食の愚痴を云ふ連
茶呑伽云うた通の裸にて
狐も一本所持の剃刀
衛士の火へなびかぬ文を投給ふ
したゝかに荒て朝日の寐所迄
酢でとく藥身を壁にして
斯うあらうとは三千の衆徒
眞中に佛御前は寐ころびて
恐しや根太盛りの手代共
垣根づたひに杵の影法師
繼母は人參の入る顔でなし
淋しさのまだ氣に入らぬ石燈籠
折た手を前髪でふくたうがらし
ふり袖の帶だけ立て眞を切
小判を雪に喰かゝれたり
重たい夜着でうなされて居
藝を仕舞うて王子迄駕
氣に背たるまくら洗はせ
物思ひこよりの犬も痩がたち

朝をさびしくしたる棚うり
師走の旅の只事でなし
勤向窻前讀
はやまつて見る元日の夢
めじろの臺を括猿行
合羽着て寐る不破の關守
こね取の顔が見えると山かつら
舞てばかりは損な伯了
たつた一つは長い毒斷
細工過たる關守の顔
鬼門の女裾を折込む
歌仙行獨吟　紀逸
鴛と寐てはならぬぞ月のむめ
宵から五つ迄が千兩
春なれや絹でこしたる雨ふりて
とうから爰に有てよい亭
てら／＼と暮ぬ螢の行かよひ
ふみ込む足の痒き夏草
ウ 縁日も多田の藥師は只の事
うしろも向ず咄す石工

洗濯にけちを付たる尾長鳥
命と書けど先きはしら壁
その時が十七ならば二十一
草の野上も皆三つぶとん
初鮭の色濃き時はめもはるに
いざよふ月の今宵いざよひ
燈火のふときに合はぬ蟲の聲
むかしの殘る家のかすてら
約束がちがひ〳〵て花の雪
つむほど袖の丸くなる草
ナ數入の目口に人を釣りよせて
ふつとふく手が文の品玉
かさゝぎも夏の間は箱階子
五人にひとり聞しらぬ聲
誰がための祈禱の連歌夜をふかし
松に時雨の來ては歸され
戀の闇側から枕が貸したくて
木幡の馬子になぶり殺され
ふところの外のたるみは二百ほど
詰る所が藥恩入無爲

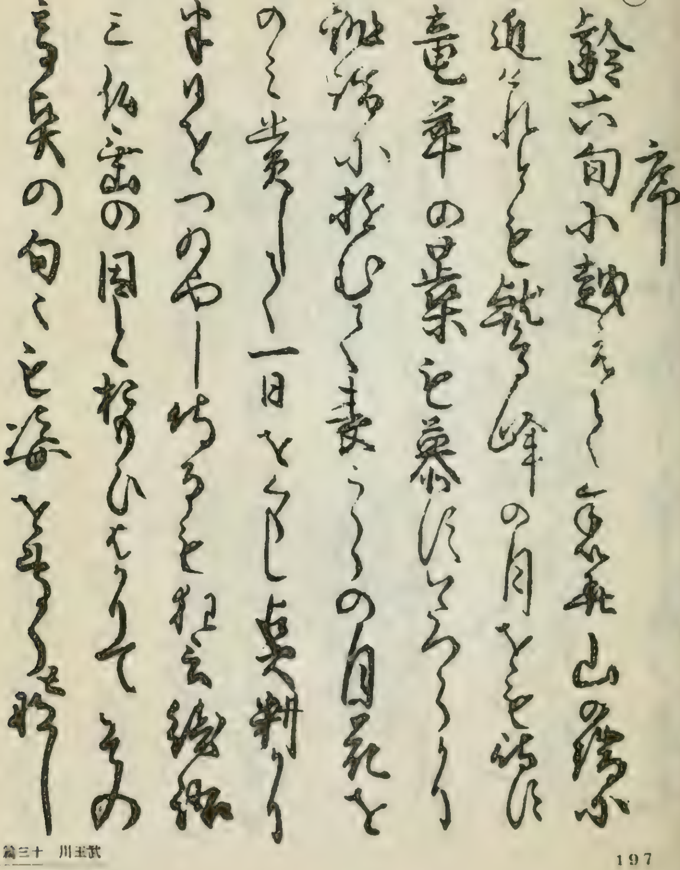
三日月の夕にちらり朝ちらり
またかりがねの目見え顏也
ウ秋風にたうもろこしの紊亂て
肘のつゝ張る二十五騎町
弦を行く子におふくろは弓を行
あたりの聲も高い物前
僞らぬこれぞ曆の花ざかり
遊ぶと來ては蝶の世の中

俳諧武玉川十二編　終

十三編序

（燕都枝折 三編）

齡六旬に越えて、餘算山の端に近けれども、鷲峰の月をも待ず、龍華の蕊も慕ず、いたづらに誹諧に遊むで、表うらの月花をのみ賞して一日をくらし、點耕に半日をつひやし侍るも、狂言綺語三佛乗の因とおもひはかり



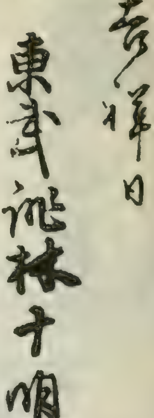
て、その高點の句句も、姿を專らとなし、情をあながちに舉て、斯あるべき事、此心ならんと思へる句情を、俗談平話ながらえらびて、一巻の秀逸となし侍る、是棹をとらず、端綱を握らずして、舟長馬借の心にかよひ侍るは、誹諧の一德ならずやと、

をだまきの古ごとをくり返し、燕都枝折三編となし侍るのみ

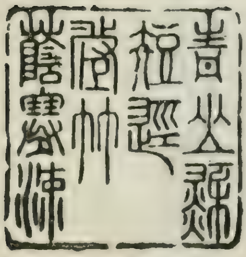
于時彌勒十年辰の孟春吉祥日

東武誹林

十明庵慶紀逸書








紀逸画

勸向窗前讀 廿五句
遂平生志 二十、
有女顔如玉 十五、
車馬如簇 十、
千鍾粟 七、
金屋 五、
長之毛二

有女顔如玉

妹に禿が似たでさびしけれ
鍬形を古鐵買の持餘し
縫上をおろせば縞に好ききらい
たそがれに結ふ元日の嫁
乳母の仕廻の逆葛西を乘
去る方へ上たとばかり伯母の口
御局のうはべは錢を二つ指
立のまゝ貰ひたがるに思案顔
せんたくをなぶりちらかす雪の翌
蚊柱に巻たふされるしのぶ山
怖がりの松をはなれて高笑
住吉へ來て秋風の行あたり
内から出ぬ親の煩ひ
預り物に恥る蟲干
かつらになるも罪深い髮
雲の峰小町が口も恐しき

裸で呼んだ顔へ毒斷
燃る火をじつと尻目に寄かゝり
司召借りちらかして稲荷山
黒鯛はうき世を狭く老にけり
初虹や官女の裾へ燃かゝり
うまさうな喰物もなく鬼籠
北辰の炭にうごかぬ古やりて
さくらさく目醫者の庭の靜也
寐勝手はいつか忘れて三ぶとん
我物を他人の手から親の慈悲
源の利ぬ物旅の傘
嘗すれ者の多い公家領
戻りには合點して行うつの山
武士の是も數也赤合羽
誓文は十年前もかはらずに
露箱に先の丸まる柴垣
ふんどしも戸垣もゆるき桑門（よすてびと）
青梅に聲の高いは成り上り
手の裏を返して見たり古暦
鐘の音に身をつめらるゝ袖の露

金を敵と仕舞ふ疳癪
枝椿むごくされても情知り
今摘むといふ汁の實に蝶の夢
辛崎へちや〳〵の付く日に糊を付
金の生る木は枯果て草の庵
むす子の部屋のゆれる入相
一くだりづゝに植行くしのぶ草
稲葉の中へ寐に歸る僧
しのぶ山尻の來るのも面白し
片々の傘をすぼめて耳へ口
藪入の中一日をこそぐられ
俄雨あさきさくらの透通り
心地よく隣の餅の上る音
又ひとり乳母の殖えたるみなの川
大からくりの日で絲を引
駕籠に役者の匂ふ池上
かこはれの名のある内は淋しがり
尾長鳥小町が雨の跡で啼
抓られた人も一所に淀へ着く
諫言は又木くらげの耳に風

傘に腰よりうへの恩を知り
いつか内證の濟んだにしき木
羽衣に氣をもむ顔のうつくしき
瓜を二つにかたられた顔
酔せた先キを呵る女房
雨の夜は鵜飼が宿も灯が見えて
自前に成て御白洲へ出る
夏秋の唇ぬれる御祓川
女郎花なんぞ言たい名なりけり
やとひ禿も通ふ七つ屋
袖留て繋がぬ駒となりにけり
いけぬ手ぶしの方へ御返事
看病の三人寄れば淋しがり
おもしろい事には跡に殘る婆
年かさなやつが起ても朝戻
出しては泣て仕舞ふ香筥
うそ付ぬ心が終に尉と姥
さゝのひと夜を公事の手懸り
尼が閑干す鴫の草ぐき
久しい願ひ元日が來る

疊む衣に近い鳥影
云はで只いろ／＼に夜の更る也
吉原は拍子木迄がうそを付
うま過ぎて仕舞の付かぬさし向ひ
伊勢の乞食は小蝿なす神
立て居て捨るがごとし袖疊
びんづるの撫れば笑ふ心持
吉原の足が這入て堂が出來
新地のまくら石にたとへる
船引の目口へ這入る枯尾花
傘借りに沙汰の限な人が來
覗かれもせぬ居風呂の顔
分別もくらい所でくらく成
見ぬ人も勝負の多い志賀の里
物疊む妹が手元に蝶小蝶
呉服後藤はにやけて聞える
二人來る夜に一人來ぬ鉢叩
喰ふ人は年々老て初鰹
歸りをらいで翌は餅搗
家内喜樽鼓入ごかし煩はせ

紙雛は雛の中での通り者
馬かたの少しこだはるをとこへし
痛い所へ廻る若黨
十月の風の中行く雜司ケ谷
女房のにぎり拳はその日ぎり
陽炎にひよ子の息のうす煙
貧乏神の肥る死跡
飛ばずに叶ふ江戸の淸水
秋更けて蝿取蜘の下手に成
思へばをかし三輪の衣々
戀しき人の夢で憎まれ
首丈けに伸びたる馬の草の原
傘の前へ廻れば土だんご
鋸のわづかに成てせはしなき
廿日草次の十日は根なし草
大三十日例の火宅と成にけり
瓜の花是も少しはうそを付き
貧乏の引言に出る蝶に鳥
咒をよく／＼見れば壽の字也
翠簾のふくれる鶴の翌る日

神の留守よい事にして佛達
仕合よしの尻馬に乘
關越る時に女を見せ付て
茂右衛門に地黃の合は知れた事
雨乞をして歸る仲人
京のことばのひとり目に立
何が不足か寺へ嫁に行
聟になる顔は靜な女坂
不沙汰な足をまくるから薬
顔の直うちの下る物前
うき世ぞや鉦も太鼓も遣ひやう
度々のうそがこうじて薄紅葉
うぐひすも姉が小路へ飯に付き
あつさりといふはうき世の取廻し
二百十日目へ乳をさす日也けり
灸點も所に寄て恥かしき
仲人へ先沙汰なしの風ほろし
うそむきたがる浮草の顔
今度の嫁も淺漬の押
出てなりと忘れたいとはほんの事

石芋に二度めの僧もおそろしき
西の下名のありさうな顔が見え
それ限に乳母の貰たかきつばた
かぐら堂顔が替るといそがしき
黑吉ほどに見えぬ奉公
入相は同じ鐘でも世をせばめ
辛崎の咄しして居る傘屋
袖褄はふり切といふ罪もあり
怖かりし十九の年も無事で過
溫石も悋氣の内に火に成て
深爪と母を僞る神參り
口寄の詰る所は惡くいふ
次第にこゝむ瞽女の行水
黄昏れて晝見た所皆涼し
植ゑたその餘りをうたふ田草取
分別の内外を行く琵琶の海
皆逃る狂女の帶の解けた時
雨もりの所定めず步行好
晝顔はねむらせる草起す草
上田一束使めでたし

五月雨の竈へくべる口小言
恥かしい氣を入替る百ヶ日
錢行とまる嵯峨の御寺
早乙女の咄しは近く植ゑて來
脊中から重りのかゝる眞土山
風車子のある神のもて遊び
蛤に成て雀の京奉公
玄關を持てば尖のある婆々
口もとを行く正月の錢
衣に成て言譯が立
燈明を消して戻れば抱付れ
料簡の皆喰違ふ五月雨
若き夫婦の旅をしたがる
仕着せ物今年は丈の長短
嫁が姑に成て寒がり
もとの目顔へもどる兄弟
朝寐の度に侘る浪人
日ぐらし限で歸る番伴
二つめの路次を披れば隅田川
奥家老しなび盡して御意に入

下心有て蚫に當こすり
勘當の印の殘る入ぼくろ
からし酢の世をなめ過て當こすり
伯母の氣を合點して出るあつゆ散
うし込の猪牙に赤らむ葉をつまみ
棧敷で泣をそばで詠める
きげんよく親に銚子の咄しして
假橋も慾な所は伊勢に似て
しげ／＼と我妻に飽く五月雨
蟲うりの中に螢は通りもの
ぼた餅に男の骨はなかりけり
鍛冶屋の弟子の稲妻を打
都の口に遠いよし原
此儘で死なばあの世も蚫にて
立田姫一葉々々に世話をやき
子を寐せ付て葛の葉がくれ
玉味噌は旅のうきめの先へたち
うそ付きも雁れて行く十二月
身まかり給ふ迄集の事
去年の異見を元日の夢

から縄の方へ娘はかつがれて
亂燒戀する人の性に合
柴の戸に鬼のやうなる給仕人
利口過たは譽めぬ女房
まだ神の名はなくて神主
黒木より相人のはやき杜若
戀衣謎のやうなる紋を付
なげなしの野道を盗む花薄
かんこ鳥うき世へ合ぬ聲を持
草の庵死ぬ氣に成て年を喰
うつ蟬のむなしき中の捨ことば
叶ふ日は思ひの種を書殘し
俤は立さらずしてみなの川
闇を出て闇に落付くしのぶ山
總仕舞聞も恐しつくも髮
公事に成ても引かぬはま荻
大小に野鼠の付く喜連川
戀病の藥に遣ふ當こすり
ちから草女に成て根をたやし
秋の鐘眠がる人を撞たふし

青く呼るゝ大内の武士
子のない母のむごいうたゝ寐
初瀨(はせ)も祈て人參を引
吹度のをしへに叶ふ川柳
高尾が泣て落かゝる城
男ばかりに船はせはしき
二布に縫は伊達の大木戸
石を割る音もするどきあばら家
城下へ近い男一疋
顏がはりさせる手柄の椨田川
秋の蝶最う是迄とあばれ喰
逗留客に味な名が付
上と下とに夫婦四人
いかな達者もこまる長崎
六日の馬場に落書が立
急度云ふ時は紺屋も明後日(みやうごにち)
空拜み一ぱい宛はくはせけり
母親の茶碗で呑むも病也
十二月今年も死ぬと笑はせて
禁酒して何を頼みの五月雨

待侘の心に遣ふ有つたけ
仲人と云れて人は古くなり
瘧ふるひ取越し橋に寄懸り
灯を消したうそを付のはおもしろき
地主と中のわるい歌よみ
錢くふて水青くさきなめり川
新關守のにぎやかな顏
金借しを狸といふも狐なり
南風戀といふ字を吹付る
まくらが隙で茶屋の喰込
病上り笑て寺の土を踏
くすり呑日は誓文の怖く也
分前の外で麥飯喰ならひ
鴛の口舌を鴨の蹴ちらかし
筑波も江戸で見れば江戸もの
分別の納め所をしのぶ山
門口の塵に目の付く獨住
吉原へ腹立に行く人もあり
もとの若衆と聞て見たがる
衣々(きぬぎぬ)に又といふ字の五六遍

しみ／＼と日のくれる行水
勘當のうちに年號又かはり
飯と汁とに笑ふ落胤
雨もりの中を紙燭の拜て行
御油赤坂も義理のある所
夢を見てひとり悦ぶ懸人
一生を輕く捨たる手提灯
肘まくら膝枕ほど派が利かず
引懸けた茶碗に戀の忘れ草
辛崎の松は合羽で面白し
奉公人どつち付ずの飯を喰
御拂にそろ／＼出る御懸物
あぶな所をつめる產神
針うりのあれも昔をしのぶ山
垣間見の突目と人に語られず
戀風は壘のうへをおもにふき
言ふも百日後家の集がくれ
奉公も松坂縞を越てけり
水の咄しもならぬ癲癇
厄年にこはがる物は芹ばかり

髪はの時も京は唇
むしやうに惚れて見れば仕當る
をとこに惚れて眞實の錠
戀の闇急に明るき人に逢
うき事がなくて不沙汰な物詣
梅干にうなされて居る女形
賀茂川へ夕べなくした下駄が浮
さま／＼に遣へば遣ふ咳ばらい
云事を銭に言はせてしのぶ山
ある夜せつなき長持の君
人に寄り年に寄るもの水鏡
あづまでくろむ京の手拭
木綿うりはしたに着せる戀衣
武夫もうしろを見せる十二月
女房の異見門出に出る
へちまとは腹立時のことばにて
元祿の頃迄戀は命づく
樒問屋の伊豆を手のもの
また稻妻の靑い義仲寺
女房の口で草鞋が賣れ

なまなかに四十二の子の美しき
うなされた夢を水鷄に助けられ
世の譏ごまめ鮹に畏り
夜更のなみだ只事でない
姉の物妹に着せて夕藥師
疱瘡病にしかられる醫者
分限者の身を不自由に世をわたり
かはゆがられる舌も三寸
寒念佛あなめ／＼と蹴て通
行燈で縫へば女房の古く見え
錢をいぢると手を洗ふ尼
夜が明てたんだいて見る小夜砧
地黃を呑めと餘所で云はせる
婚禮に親の簞笥の若く成
異見する側に火のしをあふがせて
かうやく張て氣の詰る肩
女房の植ゑてこはがるたうがらし
三十三は乳母に出る年
から鮭を賣つゝ行けばゑもん坂
姑のきげん皺このかた

くれは鳥あやなす妹が針仕事
庫裏の靜まる方丈の咳
餅をば喰はぬ高札の聟
庵の灯のこぼれてうごく亂萩
馬の療治に枯る夕顔
飛上らせる居風呂のうそ
温泉の戻り脊の止ぬ草履取
繪にしても源氏の部覗きたし
百萬遍のぬかる吉原
船人は雲に近付有そうな
呵る跡からうまい口上
女房にとばしりかゝる御祓河
むす子を喰て廻るかうやく
乳母を跨いて通る岩はし
みなの河腰元迄がたうがらし
八つ山も今はむかしの立田越
捨人の蚊やりをあふぐ舞扇
三夫婦のうちに二人は衣着て
御雛の餅を母のこねどり
大とむらひの寺に馬工郎

利きそうな口へ小判をくはへさせ
地にあらば鳥とぬかしてまぶり詰
そこが釋迦倚子で死ぬ場を寐ころんで
出雲へうごく母の唇
よ所の女房になるを見に出る
尼に成てもかき立て寐
齊の日行く先々はこぼれ松
麓へ二仁見せる木がらし
四人部屋を枯尾花飛ぶ
生れた家をきたながる僧
夫婦して一つ宛つぐみき德利
あさつきを立派に喰ふも哀也
行人も人百夜とは馬鹿々々し

逸平生志

借り着の裾へをだ卷を付け
いづれ懺悔の有さうな顔
小町が讀んで賣り切る傘
四十の紙子十日着て倦
度會に入れば他人の心なし
茅の輪を越すとうごく唇

地黄はやりて天下泰平
鱚釣る女人に見らるゝ
あづまからげをおろす三條
大釜は燃えて仕舞て飛鳥川
御油に二日は目も鼻もなし
せきれいを見て居て何か云たがり
宇治のみやげを響るくら開
立花に寐られぬ夜も二度はなし
うれしい飯をらふそくで喰
來ると日あたりくさい馬工郎
晝結ぶ夢の向ふもかんこ鳥
見せる向ふに指のくたびれ
平等院は京へ筋違ふ
異見を聞に戻るたそがれ
駕を下ると所化でない顔
六月さむくかの顔が出る
是からは佛に膝を折る計
柳にせりを付る麻の葉
長いまくらも烏のした事
木登りを笑へば惡く氣を廻し

八十七もなぶらるゝ年
朝風ぐるみ呉竹を買
借はをしへる迄の妙薬
雛にも男女郎花寄る
座頭のすわる夜の始り
身のからくりに見せるからくり
うたゝ寐に夜の明る星逢
逃そこなひの鐘に溜息
師走しらずの闇をしこなす
どつち付かずの大坂の顔
尖針のありとは里もしらま弓
六月の日は人形に突あたり
忘れた用の小指から出る
口どめになる綻のおもしろき
御顔はお顔だけの袖笠
湯殿の音に驅て行く嫁
口なめずりで筆の弟子入
佗ぬれば塩の煮花も忘れ草
雅迄出す村の追従
時々にあたりの怖い水かゝみ

こま〳〵な事を請負ふ放し鳥
なみだの耳へ這入るおもひ寐
斯う死たいと頭陀の手まくら
又二ばんめがあぶらとらるゝ
義理で別れた戀も葛の葉
晝は見られぬ程ケ谷の顔
かくれ課せて長い溜息
居なじむ嫁の尻に贄が入
今度の養子闌干して遣る
二つの耳に二度のさゝやき
谷へ咄をこぼす底倉
笛あたゝめて松風を聞
きのふ見し稲妻をこぐ最上川
絹張もさし出の磯の干うどん
二十五の曉近く踏のばし
別に草履をわたす仇し野
異見の耳のいたい薬所
うらみの骨は枕から出る
ことばに寄る朔日の夫
暮をつく寺から夜と云ひはじめ

筑波迄見て戀の付く夢
廿年むかしに同じ笑ひ聲
手を握るのも天の逆鉾
なま呑込で綻は切れ
飛ても志賀に人を呼ぶ松
面長な顔が撫て駒むかへ
楊枝を遣ふ口へ袖笠
剃氣に成て細い侍
古郷でなくてなつかしき奈良
湯立の跡をかきさがす鳥
卯月の腰をたゝく朔日
さむしろに御運のよわい琴の音
朝寐の膚頭ふるひ出す蚊屋
筑波が低う成て入相
月のいなばを瞽女の大連
溜めて縫はせる寺の綻び
分別のあるやうな枝折戸
人にする氣で伊勢の濱荻
隣が寺で氣の弱い公事
うかと來て女の逃る川舩

屋ね屋見て居る晝の岩橋
三十日の鵜舟氣掛りはなし
股曳にうき藻の町の灯がきえる
倚子押のけて僧正の春
常入らぬ戸を洗ふ魂棚
うつくし過て長い名を取
着た形でふいと出たる西行忌
明星は鎧の袖に明殘り
貸しなくしても／＼牡丹咲
榊も二日土を忘れる
駈落ふたり寺の元日
茄子が出ると夜晝の夢
内から立ててもめる錦木
松風寒き古い瘡毒
只居ても痒い時分に繰供養
又人間の殖えるさし汐
紙合羽から後世に入る母
顔を奇麗に遣ふ朔日
市の夜が今でおもへば蟻の穴
大津伏見は京の雨袖

夜更の手柄三の絲出す
淋しく仕舞ふ追善の鞠
ちよつと借りては濟ぬ傘
番頭さびしく宵の詫言
火をする顔へ行あたる橋
突棒に顔恥かしく酔が醒
庭の葉を着ると手代が憎くく成
眞中へ晝夜座頭の巻込れ
捨たをとこを拾ふたそがれ
八十以上知て居る松
女と合ぬ三めぐりの婆々
十月の顔の中行く雜司ヶ谷
病ほうけ親に筍ほらせけり
百夜たまかに一分づゝ減
二代の長者餅をいやがり
娘ひとりで世界うごかす
呼出して我顔を見る二月堂
都鳥爪をかくすも爪はづれ
口の揃はぬ凄い人間
女郎の追人鴛を釣らせる

和歌山の顔は殘て枯尾花
なまこ賣つまんで見せて嫌がらせ
雛を見に行くといふ日の男ぶり
船の着く迄知れぬ氣違
三月は黄色にくらす井出の里
女房をちらと見せる道具屋
うらみの瀧で草履取振る
秋の暮名所で斷る風の神
曲水に飯をくふのをおかしがり
人先に今朝の日を見る時計草
厄を仕舞て若くなる人
子を借りて來る關のつれ／＼
あて言の當らぬ顔のうつくしき
二十四孝はみんな無理喰
懸乞へ奥からうそをはこばせる
本腹に見れば辭世の恐しく
御僧の異見みじかき猿の聲
丸藥呑んで夜はきえ行
新しい夢にきえ入る若盛
をろかな顔の並ぶ反橋

何を拜むかはやい暦
めでたい闇の立て付が明く
通夜ほの／＼と口の草臥
有卦に入のをきたながる僧
在所迄異見を逆る放し鳥
穴のむじなの苦界十年
面うちは日出度顔に骨を折
捨子の顔を撫るなでし子
船蟲の這ふ中宿の硯筥
御竈を見れば火にくばる顔
説法の横から堅い雨が降
後見はふだん櫻の絲を曳
咳で押へて這入る廁の戸
くら闇へやぶれかぶれのみなの河
錦木もちつとにして別れ霜
妾を出して氣にかゝる蛇
二とせ餘り敗金と寐
二代なしとは神の云はせる
庵の形身のしら鞘で來
人の命を植ゑる早乙女

糊の聲今年中での富士筑波
暦に聲の高い仲人
障子を明けて見せる錦木
汁くはぬ嫁そろ／＼うつの山
縞がらに似ぬ人の孝行
六日の賀茂にたそがれが利
胸ぐらの手心違ふ衣がへ
杖提て水の呑たい鳳來寺
鐘撞の手に覺ある冬至の日
味な理窟のながれ込む寺
直にくれゆく神鳴の蚊屋
手拭を買ふは慥に年男
晝明けて音のせぬ戸に腹がたち
捨扶持のいまだに切れぬ三の絲
淀枚方へもり分る秋
吉原でない所に吉原
さし合の際迄かする仲人口
母の筋目は蓋をしておく
陽炎の中に乞食の五十年
麻の葉や先半年の厄ばらい

死んで仕舞て見ればよい人
夫婦しづかに三輪の世がたり
命拾ひが寺に寐て居
光陰に蹴つまづかせる閏年
形身とは又泣けといふ届物
氣のもめる日はする事が喰ちがひ
入聟の名は角力から廣く成
女郎の泪泣のではなし
師走の目鼻近道を行
若いが疵で留守の柴の戸
又こねられに京へ三年
ぬくめ鳥とはむす子へのきめ所
衣屋を出る落日の僧
どつちの義理に行燈を消
しつけくはへて引たらす裾
鵜づかひの此世からさへ闇を行
へちまの水で育つ妹
糺川瓜もしばしのうきね鳥
薄茶の前をはしる鳥影
長崎を見て一座見こなす

子を寐せ付て神子の足どり
送り別れて旅に寶が入
　勤向窻前讀
神國の人をはなれて墨衣
夜迷ふ人の多い元服

梅花篇

平河社參吟　　紀逸

星を掃く曉起きやうめの花
前にして琢くかゞみや梅の花
御供所も朝はせんじ茶むめの花
しら梅や紺屋の手にもふし拜み
香にそゝぎ花にすゝしめ神の梅
杉と出る場の和らぎや神の梅
只たのむ日は夜に起て梅の花
田つくりの鱠はさむしうめの花
冬の日を忘れさせてぞ梅のはな
二日から月も匂ふやうめのはな
むら雀躍らば着せむ梅の笠
年の夜を寐ぬとは見へず梅花
まんぢゆうに子の氣も付ずむめの花
大年の闇を出でてやうめのはな

照夜目四丈

馬の目は絹こそ限れうめの花
人も出ていたちの顔や闇の梅
うぐひすは言ずと梅の弟かな
立春の十日ほどよし梅の花

貞丸君撰集

藁に釣る蜆の口や明けの梅

應志靜求

惣いけて通ふ道あり夜の梅
うぐひすの相合傘やむめの花
闇の夜にくはせ物あり梅の花

大厦高堂成て徙移の祝賀嚴重たり

龜の脊の建坪かけてむめの花
うぐひすの行儀になりぬ梅の花

紀叟亭

鳥の先遊んで見せつうめの花

寄梅祝

聟がねに水を兼てや梅の花

法樂　湖樂亭

影さらに同じ塵也梅の蘂

壽老人賛

龜の脊に開きそめるや梅暦

紀堤君新居

木柱の匂ひも高しうめのはな

大久保西向天神法樂

しらぬ日の西を朝日や梅の花
碁をもどる人の明りや藪の梅
神德に名をもひらくや梅のかさ
喰こぼす雀の口に梅の花
老　梅が香や昔といへば酸が溜り
若　月やあらぬある夜越たり垣の梅
男　十五から梅嗅ありきそと鳥
女　密々にはたらく絲や梅衣
貴　梅が枝も心置れん育てがら
賤　知た貌する程くらし闇の梅
都　一こともさすが芳し風の梅
鄙　尖有て尖なき人や畑の梅

跋

抑先生十明庵紀逸翁、寛延三年の初冬、誹諧點位を分たる書を題して、武玉川といふ、其意の私なく日日に新に、又日に新成るを賞せられ、世に武玉川の流絶せず、十編に及ぶ、續て燕都枝折の梓行又二編に至りぬ、二集の趣は彼序に委くあらはれて、人々の知らるゝ所なれば爰に略し侍りぬ、都鄙遠境に渡りて、此二集を賞翫する事、星霜を重て多く、誠に古今未曾有の名譽、道の本望只是に留まりぬ、然に寶暦八寅の初秋より、手足をなやみて起居自由ならず、年を越て病床に伏し、萬事怠りがち成に、良藥時を得、諸神佛の加護少からず、日を經て順快を得ぬれば、机上に添削を乞ふ輩已前に倍せり、師病後の疲なく、まめやかに秀逸の句句を留て、忽一帖に滿ぬるを、江戸枝折の三編とせらる、親て是に跋をせよとの師の命にしたがひ、將歪快を悦て他へ辭するにおよばず、江都枝おりのすえひろく、千代に八千代に盡せざる言の葉を、うたひかなで侍りぬ、

硯田舍

基篇

寶暦九己卯歳

十二月吉日



俳諧武玉川十三編 終

燕都枝折　四編

東武誹林　十明庵紀逸撰

默讃

天長地久
衆妙之门
知美之爲美
音聲相和
玄牝門
守中

純演。

十四編序

（燕都枝折四編）

いでや花鳥の許に遊むで戀に心をこらし無常に世をさとし富貴貧賤の人情をさぐりて普くくらからざる事誹諧に越したるものなし。されは此道に心をよせて怠らざる事年あり。爰に十明庵主紀逸日日撰點の秀逸を擧

げて武玉川と號し十篇既に成りての後、續いて燕都枝折此度四編に及ぶ句々皆景情をそなへ世事に背かざる事誠に感ずべしやと見るにうまず予も即ち序辭を加へて世に及ぼし侍る事しかり。

十光庵

碑明序

歌仙折替り

國字子
紀逸

薄雲の笑ひそもれて郭公
　いつか青葉に脊かへる山
燒飯も五里行く旅のちからにて
　嘶く時は駒もやつはら
いさよひはきのふの月のうしろつき
　酒と露とを分る夕風
女郎花留た袂てなかりけり
　二口きいて三つめに逃け
おもひ出し／＼降る五月雨
　奥歯にかゝる名所舊跡
帆懸舟見る間に雲とあちらこち
　うらの笘屋の遅い夕飯
嫁入てあたりの顔か近くなり
　半は（一字不明）たる櫛で櫛占
南のとう／＼たらりとうふうり
　三百石ももとは竹齋
雨の手に月と花とはうまい物
　藪の一夜に入るを樂しみ

物いひば人來／＼とおとされて
　六ッ折る指の半分はあや
いつの間に三十日の闇を喰ひ覺え
　大和生れの京を鵜て居る
半衿が少しこゝろのとりなり
　さゝのひとよは出女がもと
たはこ入胸の煙をひねり分け
　異見の度にあつくなる耳
若竹の風をそらさぬあひしらひ
　曲るとさびし廣徳寺前
あれ／＼と朔日ころの薄月夜
　磬れば磬むる方へ向く稲
夕部氣と見えたる鹿のうつら／＼
　冬に机の先に丸窓
取る年に手間隙入らず老いにけり
　それにも狂歌米の借介
咲く花も雪と見る日は物淋し
　一折分けて百にとり／＼

俳諧武玉川十四編

知美之爲美

跨ぐ程日陰は出來て綾の壁
かつがれて愛にも十日二十日草
鼠につかふ關守の棒
若黨連れて尼なれぬ尼
隱居所をゑびす紙程繼足して
年忘さらに師走をよせつけず
ある時はさし味へかける枕蚊屋
荒し志賀に昔ながらの掃部樣
藪入の少し笑て物を喰ひ
三日居て都に倦る露しぐれ
ひとり行熘魔參がほんの事
旦那の留守は物の入る留守
公事工む人の見て居る雲の峰
仕付て遣るに貰やうに流
紺屋町きのふの虹にながらる
一疊釣りと取かへる蚊屋

世をしら箸で喰ふが本望
椎の木を夕べは右に見し物を
きれ〴〵に息をつくばの山おろし
朝顔の二つ咲く日は慾がなし
人の子を吸がうやくに借て行
二度添は口を明せぬ雪の事
はづす夜のはじめ也けり御祓川
藏と〳〵にはさむ寶藏
銀杏を拾ふ片意地な顔
枡かながれてしろい住吉
異見言ふ人の來るにも鳥の陰
極樂へ行くとあばたの明らめて
旅衣夜な〳〵白きわらざうり
木がらしに浴油(よくゆ)の僧のおそろしき
岩橋も手前でかけるざうり取
紙燭さへ腹の立つ時かたく出來
悋氣する女房の前へかたつぶり
かけ込んだ日は咳をこらへる
氣を兼て人に言はせる紺屋形
淺草で口過にするさよ衣

よみさして眞顔に成し若旦那
淋しさを拾ひ集て口小言
借れば取られ貸せばよこさず冬籠
筒井筒申合せて聲替り
去られて見れば負て居る筈
添ふ迄にあたらぬ物か神の罪
聟へ讓て伊勢で元日
どこやらがくやしさうなる大鼓(おほつゞみ)
獨子は馬鹿で育て仕舞けり
入相に頸を置く日の面白き
桐一葉やりても握る天の川
後の追人に女房の聲
來る人が來ぬと見えたる針仕事
須磨のさくらの今にうしろ手
精進日七つは人にうまがらせ
駕で來て見ても淋しき幼顔
女房の事のおこりは役者附
次第に膳の高くなる妾
一夜寐て見れば尊きかざり藥
見せる度娘の顔に疵がつき

五十を越すと殖る毒斷
薄々は母も合點で夕紅葉
內儀が横になると日蝕
醫者の口からも折々毒が出る
女房の切て廻るぼた餅
さう〳〵はうそも付れぬ山歸來
星の降る夜は辛崎も松ばかり
芝居見た日から形氣が輕くなり
かさゝぎや地にある橋は今戸橋
城下から來る翌の獻立
ほの〴〵としらめば消る音頭取
酒になる事のはじめは都鳥
京の水でもあのやうな顔
矢橋でくれて三里行く僧
女氣の心にかゝる水淺黃
ちかづきを戻すも一つ針事
面白い盃を明れば傳受事
屛風から覗た顔ははづれ雪
關の小まんは馬もあやまる
囲れの手を初に見る放し鳥

ものゝふさむく上野下り來
女房も此頃唄いで火焚鳥
眞實の異見雨夜をねらひ來
夕立や鳥居洗へば久米之助
八重むぐら茂れる宿へ日を算
辛崎へ船路で行くは遺恨なれ
絶景に金遣ふべき所なし
帶に似た雲さへ解ていもせ山
鯊釣に拜まれ給ふ海晏寺
獻立を咄してばかりうまがらせ
うかれ女のねせ物になる絲切歯
川岸は利口過たる風がふき
かうやく張て一人淋しき
古寺や歩行ばうごく佛達
山歸來その科人を戀しがり
頭日の藝で向を煩せ
人宿に選殘さるゝ干大根
二度めとは仲人ぐるみしらま弓
かいどりの了簡二つ袖疊
去られた跡へ屆く染物

きのふ迄化したやつを藥喰ひ
うしろ帶つゝき出されて通夜靜
蚊屋のうちにて重い嫁の目
暖簾を舌へ卷込む八瀬の牛
百姓の我年ながら馬鹿らしき
御異見の舌が長くて鹿の聲
氣違を引立て行く鳥羽繩手
八幡の使仰向て立
念佛も十日過てはさよ千鳥
溫石を燒く老の院參
釣り方も蘆の丸屋へ柏餅
道芝に袖の引ッ付く名代者
朝湯に洗ひ落す吉原
質屋の憎くくなる雲の峰
反古計り先ではためるいはで山
手桶を見ると聟の逃尻
梓弓泣かせた程はとれぬ也
くゞり戸へ來て傘もしをれ草
うまい事丁子頭へ言ふくめ
出ると總身の光る丸山

從弟とは續けて二人置にくし
放し鳥子の事ばかり言ふくめ
三人寄れば三分入る智惠
若衆には少摺れ合ふ草履取
入相に後家は淋しい物を買ふ
ざつと見て禿の飽る感應寺
御妾の手形流るゝ御祓河
投付るやうに淡路へ友千鳥
追ふと又來る金色の蠅
姑女は蚊やりの中を又いぶし
戀風は面の皮迄むいて行
蜂の巣へ友遠方より指圖して
諸ともにきゆべき人のうつくしき
心して見ればをかしき十二月
似たといふ顔を見たがる言名付
僧正の御意に入る物皆淋し
人の女房も譽にくい物
口惜しく十日は留守の廿日草
朔日はあまり律義な初しぐれ
芝居の留守に日のあたる尼

をどり子が寐れば日待もうつの山
五月雨雨戸のこゝろ替りけり
母があまさに筒井筒也
うば玉に風のさゝやく枯柏
乖尼の撫でては我を淋しがり
仕付苧は又唇へ立かへり
十二段めつたにうまく夜が更る
公事の相手に凄い山伏
了簡のひつくり返る東山
衣の禮にありく狼
赤坂と御油の落馬も女郎花
姉に迄切れて歸たわりくどき
五六年立てば小指も哀也
分別は替へて見る程廻り遠
めくら馬貢付た夜の面白さ
殘る所なければ先が法華にて
山鳥とあきらめて寐る伊勢の留守
母の氣をちいさく思ふしら拍子
捨きらぬ青い庇に種ふくべ
くる／＼と我尼に廻る風の鷄
女房の喰ふ氣に成と秋鯉
振袖の袖だけ立て心を切
留守かと問へば口へ手のひら
有ふれた節を植ゑ行く早苗唄
妾を陽氣で包む吉日
隙さうな人の立舞ふ神無月
茶碗には追立らるゝ八重がすみ
分といふ字が蓋をしていはで山
一恥かいて加田へよめ入
えり出す反古にけふも泣かせる
ぢれる妾の高く釣る蚊屋
骨の供して黑谷の露
師走さはがす樂の弟子入
金をころして遣ふ伴頭
くりよく瀬多をわたる夕ぐれ
詫言に來さうな人が二三人
狂言師人を呵るに損な顏
喰懸を無理にとられて面白き
筆に成てもさを鹿の只は居ず
分が來て楔に這入るしのぶ山
戸までひといふ言譯も古いやつ
口も口手も手と言はれさよ衣
きのふの中を直す元日
踊から夜を着くづすみなの川
憎まれる程聞けがしのほくゑ經
似た顏を見たがる貌へ焚付る
まよひ子といふ年でない娘也
心ない枕の多い松ヶ岡
淋しい指で年忌算へる
せしめんとこそ立るにしき木
京の異見で手代さびしき
松風のかゆい所へしはく吹
袖留て四五日せまいかゝみ山
女氣の常にして居る尾長鳥
引汐に江口の君の氣がもめる
上み十五日ほんの御姿
をとこ坂からつめりはじめる
とぢ蓋さがすかつらぎの神
當座は聲の低い元ぶく
二度びつくりも金のした事

空を見上げて養生をする
九十の賀迄醫者の恩なし
隱して戀と知れる精進
折々は他人の知れる垣隣
錦木は女衒に買はれ鼻をあく
赤合羽三人寄れば錢の音
餘所の起請をきたなげに見
二筋息の届くともし火
觀音も二人寐るのは御好きにて
顔づくで貸した物さへ延たがり
妾に里が出來て樣付け
振向けば笑ふ捨子の哀にて
虎がなみだにもりをあてがふ
にくし／＼も又見たくなる
何事か山伏ばかりさくら狩
佛の鼻の光る十月
妹は手向の水をあらく向け
をどりの子の觸先に付く母者人
蟬丸のよまれた坂に息が切れ
遺言の壺へ泪のこぼれ萩

怠らず膳の向に緋ちりめん
待わびの夜はもえくさい風がふき
器量には望なきとのうそばかり
むす子の智惠に肥る御袋
半分は百度參を供にさせ
這入るは肴出るは赤飯
夜搗く臼もかつらぎの神
隣へ物の知れる六月
三十日の風は小間割にふく
椀で呑むうらの苫屋の風藥
いはで山いく度袖を顔へ當
大じんへたうとうたゝる物着星
人の善惡我身の慾をかゝみ山
ねりさんご珠に毒のない人
あやまり有か低い口上
送り別れて旅に實が入
異見をば人に言せて讓り物
餅を／＼と母の正直
遠くて近い妾の分別
しら紙のつんとして居るみきの口

盃を鷄のくはへる春の岸
太刀持ばかり廻る反橋
二三日總身のかゆい柏の葉
おもしろく醉ふ程妻のつたなくて
音頭ぬからず突袖で來
尾長鳥五月の空にせりを付け
一思案してひらく草の戶
千鳥と中のわるい關守
行く／＼はばた餅くさくうつくしき
供は向ふへ廻る程ケ谷
梛の葉に今玉蟲のうしろ向
雪折も千鳥も寐入ばなの物
がてんする氣の膝に前髮
朝顔の實の喰れぬで哀也
肩一つすへる氣もなし鉢たゝき
酒くさい人を譽れば突あたり
仲人の命限りにうそをつき
後添の佛いぢりもこはい奴
程ケ谷は戶塚の夜を抱留る
買て庵主の笑はれる棒

娘自慢ではふる錦木
引かゝとすれば笠に着る袖
青梅のかたまる頃に引はづし
初雪がふれば妾のあてこすり
出女の僧に脊中で請こたへ
氣をかへてゑびすに刻む三枚目
摺鉢のわれた喧嘩も根なし草
僧に火を焚せて上る最上川
庵崎へ煙の通ふくすり鍋
鎰裂の詮議が事の破れ口
その原や伏屋に質を置上て
うそのない人と成けり鳥部山
藪入が親子の中にかざる也
春もまた蓑輪の雨の御意に入
元服の日は一門に立て見せ
くらい所をねめ廻す婆々
七夕をよく言ふ娘おもしろし
縫ふにさへ旨い音するしゆすの帶
東方朔に習ふ燒物
聟入も松明で來るいさは川

仲人が通て先へ顔をみせ
物前に油斷のならぬ鳥の影
親分の顔と〳〵にかゝみ山
傘をさす日はさむし柳原
うかりし人をうまく詠る
鎌くらで物の見事に年が寄
金を喰ふ町へ鳥居の影はさし
むすめの小言半分は乳母
神子の名は神の名よりも廣がりて
上人の伽は上々吉三郎
紫に言ひまくられて水自慢

衆妙之門

戀の山峠に着て吝くなり
十二一重のあまい分別
松の葉は少しながらに添へことば
九十九の人は大かた口ばかり
仲人の口よりはやく孕せて
切迎眞葛の風にふところ手
花たちばなに所化の前帶
火を摺る顔のよもぎふで逢

京九重に賣れぬ胴聲
火の物斷を問落す乳母
さけぶ千鳥にふろ吹の湯氣
ほどけたる帶をかゝへて上廊下
うしろ合せの中に生れ子
前歯を濟る母の大聲
はづかしい氣を濟ぎ抜てすごくなり
年が明ると畜生でなし
堺の町を尼の引出し
ぶらり病に海士が干て居る
法華が寄て公事の相談
はちたゝき我より人を寒がらせ
燈火に身をしぼらるゝ初しぐれ
鳴門乘る日をけふにして立盡し
をとこに鍋を着せて見たがる
折れたかと思へば起て筏さし
さくらを逃て敷始を脊負
かよひが黒くなると内損
緋の衣着るを狸の化をさめ
合歡の花馬にもいれの來る時分

朝顏もいまだねだれてしやらが味噌
松を上手に遣ふ行平
風を曳く種に成とも帆懸船
いなばの雲の上に御二階ゑ
悄まれ婆々の明六ッを聞
緋紅の裾はづかしき秋の山
あたまへ恥のふりかゝる鍋
毒斷の中に一つはむづかしき
都うつしで高くなる錢
隱居の朝寐只事でなし
物さしとても雪の挨拶
むかしの女女ではなし
三日逢ねば恐しい人
むらさめと寐た翌る日は抓らるゝ
みやげを持て呵られに來
忘れんと立てばよく似た子が通り
湯殿歸りの死で見たがる
草の戸で書付て遣るはゝそばら
湯氣が出止んで恥かしい神子
酒屋もまじる馬の煩ひ

どれも派のきく十月の餅
紙漉の近道通る手の雫
しかられた夜は着たまゝで寐
大工の譽る殿のうつり氣
盃も護符の手元靜也
產着の火のし酢のかざがする
口まめな人の仕あてるいもせ山
跨がねばならぬ所にうらみ寐て
火串(ほぐし)とばせば立て居る尼
惣々じんと神子の口元
半分打ていやになる札
身になる顏を淋しがる聟
鵜飼の火朝妻船をいやがらせ
辛崎は雪駄の音の有かなし
合點で死ぬ雨の逗留
師走の御師の配る神風
なむあみだ積ば高き堂と成
祈りおほせて主を姑
咒ひきかぬ次男三男
僧の開干すそも／＼の譯

萩の風最う松風をかき廻し
物前の女郎のおやも部屋
狐の剃るを狸見て居る
夜食は內でくはぬ二十五
三とせは发に妾同然
牛の御前も雨の相伴
朝飯が茶漬に成とうつの山
勝とそのまゝ庭鳥を抱く
舞子の巣の高慢で居
また年も四十で居れば面白し
女智惠三人寄て一二合
あづま屋へ來る風の横柄
三筋の帶に扱ひが入る
衣着て通るむかしのしのぶ山
めうがと蓼の垣になる母
逃水と誘ふ水との突あたり
竹の伏見へ曲る寐勝手
帳場に乳母のすわる飯時
御下屋敷に蛇になる人
ことば數すくなう言が奉幣使

飾句五つに若い世の中
味な願ひの叶ふ本復
くらい所が遷宮の骨
降られてもめの出來るかさゝぎ
出家から夜の明る洛外
妻の智恵しらぬ振にて出代らせ
編笠は慈悲にもたれる姿也
みぞ萩も水へ結べば法の聲
四の五のとまぎらかしたる沖の雨
腹立を三國が見えて風かはり
我が家へ廻り切らぬ梛の葉
橋にわりなき中の大黒
繕りを見れば直のならぬ顏
根を押せば押ほど怖い拂物
井出の夜も喰ひ立てらるゝ春と成
一荒あれて名代と呑む
麥はくさつて金谷豐年
詰る所が鎌倉の飯
千鳥聞く日に船の傘
縫物にはるか男の顏遠き

嫁は明りを二口に消す
馬の嘶にあきる馬役
八十七は慾の出る年
富士も着くづす望の曙
嚙物は十日々々の雨蛙
恨言ふ時はいつもの口でなし
顏をちいさく思ふ本復
杜若つめられた手もから衣
鵲に連の引合ふ袖たもと
九重を一足飛の八重むぐら
腎虚した人を我身のかゞみ山
湯殿に少し尼の女氣
我身に鼻をあてるさみだれ
あなめ／＼は戀の仕だふれ
百夜のうちに度々の世話
錦木を立ててどちらも風を曳
とうふ屋計り古き腰越
烏帽子では横に向かねばまふはれず
一筆書て志賀へ傘
野暮に仕立ててを夜の鶴

懸金は風の道なるきり／＼す
八十八はうま過ぎた年
突袖のやうに出て行帆懸船
すがた見へ朝日こぼれて顏痒き
我計り着ふくれて居る廿日草
物かはの角の折れたる五百疋
日にやける覺悟で宇治の奉公人
錢にさへ見限られたる世捨人
灸すゑる人に進める東山
若ざかり腹も立れぬ損をして
坊主がへりの狹い袖口
毒斷のうちは行燈も二つにて
鉄うりより男氣のあるとうふうり
霜に聲ある夜いり付く油皿
我髪も剃氣になれば恐しき
目口かはきを戀の關守
めでたさは三度越行くうつの山
鶴計り人を人とも鶴が岡
天長地久
廓の丸屋に御所の重箱

減を產んで直に女房
夫が抱けば赤子大きし
佐渡も鶴でゐる日蓮の顔
二つめの鍋を隠して髪を切
追人のくさく思ふ山寺
三保にこりてかおりぬ天人
役の行者の杖に芽が出る
ふたり助けて母の物入

發句百章四季混雜

十明庵紀逸述

立春

門松や代々に久しき飯と汁
豆うてば人に鬼なしむつみ月

歳暮

沙汰なしに師走千鳥や妹が許
丁倹の子に解く口や小三十日
子を呵る時もあらうに雉子の聲
大吉に寺も寄りよし門柳
二階から招く吉田の柳かな
雨露を秤にかける柳かな

小松川琴風名改

教へねど蝶も知る栞や小松川

道院剃髪

撫て見てきのふを捨ん青あらし
光陰の矢をくはへてぞ郭公

矢口奉納

さゝげばや弓につがひて五寸鮎

七夕

子の沙汰のなくてぞ若し天の河
顔も見ぬ人にむつまじ橋すゞみ
玉にくむ水のこたへや粒小桝

醫師をいたむ

甘草の引ちからなき鳴子かな
新酒出て床しく成ぬ谷中道
大根にくさめさせてぞ牛房引

重陽

菊の香に袖を通さんかさね衣
鴫立て落した數珠を拾ひけり

麗來宅にて

三四代申せは親し菊の宿

春來東風流披露

集成就みそなはしてぞ神送
水仙や親類書に梅の兄
朝起や笑ふ家には福壽草

巴静が尾州へ歸るを送る

影法師も短き冬の別れ哉
薺賣はやむさぼるや蕗の薹
あふみのや買うて着せよ物莾笠

石霜庵三回忌

短夜も箱根迄行く夢路かな
うぐひすに年こそかくれ屛風山
仙に入れ年も十日のうどん踏
初雷に坊主で出逢ふさくら哉

八月十五夜

他はすべて佛の光けふの月
絲遊やほどく雀の口と口

青路子餞別烈子が乘物を送るべし

風に御す旅の往來や凧

七十賀題子日
子日する松に付けばや壽饅頭
けふの午狐の子にも初のぼり
　吐綾愛子をうしなひけるに
終に行く土をうらみや親燕
　田社萬句興行三月廿一日
希ふ所や新花分根菊
　灌佛
空にさす佛の指やほとゝぎす
降る雨に三粒は星のなみだかな
　臺齋君芳席百會を祝して
百草を取得て薫る硯かな
　畫讃二句
海棠を寐かさぬ鳥のくせつかな
鯉に瀧まさに見る日の幟かな
初午やいの字に稲のをしへ草
かはづ子の奥歯で鳴や初ざくら
郭公橋場へわたる竿の先
天の戸や夜すがら扣く郭公
うき名ほど雨とよい中郭公
うき草やうごかずに居るひやし馬
　病る人を訪ひて
うき草の下は日和ぞ五月雨
　曉里公御没蒙られし時
咲くからはのぼるもはやし花葵
　八幡宮へ参詣の時扇を拾ひて
八の字も末廣がりのあふぎかな
　拾得贊
きりぎりす鳴ぬ捨子やそのむかし
彦星は今宵に古き名なりけり
礫うつ星のまくらや明烏
　生靈會
なき魂や我宿へ來て草枕
夜が長くなるを朝寐のはじめ哉
　逸子室を悼
麻がらはその日限や箸包
名月や蓼の下葉のから衣
　稲荷奉納二句
敷ほどを神の機嫌や稲むしろ
積ませて寶珠の鉢の木の實哉
屋ね板を蔦のくはへる野分哉
錢金の利口過たる師走哉
穗海の手もふところや後の月
七曜の劔のうら研く時雨哉
菩提樹のをのれから剃る落葉哉
五尺の身包み〳〵て頭巾哉
　はやり風
大部屋の藥配りや菊の水
檜買は廿日めに來る牡丹哉
春蒔た始末の種を園見哉
年寄を擧て戻るや年忘
駕籠舁の肥りにあかぬ牡丹哉
蛬鳴も夜明がらすや五月雨
さつき雨覺悟して居る三十日哉
夏帶の結び心も茅輪哉
　奉納
逆鉾に平目のあたる汐干哉
たうがらしこがるゝ鹿のなみだ哉
　諸侯へ初て召れて
秋高し駕から手をつくば山

垣間見や夕顔の實を脇へよせ
　竹本肥前隱居せし時
割膝をあぐらに直す炬燵哉
　蝦明公にて
鴨子曳御耳にとまる事もなし
茶は江戸の雫ぞ萩の月
ふたり迄空によい子や十三夜
明星のつかまへ所菊の花
傘さして憎れに出る落葉哉
いんぎんに親の育てしかはづ哉
掬すれば目高も一つ淸水哉
五十から夜を盗むや遠碪
初雪や他人の袖もふり合せ
　元旦
替る度我身につもる雜煮哉
大盤の鐘を押へつ梅の花
梅がかや闇においては大三十日
　臺齋君初會
文臺の隅も明るし雀の子
　探題
しら魚の火に化さるゝ狐哉
初午や年月々に午はあれど
　五十賀
人五十天から着せる頭巾哉
よい戀をしらで來た人水鷄哉
橋になるは日頃に似ざる烏かな
　歳暮又一つかさねければ
つむ年の面目もなしさよ衣

寶曆十庚辰歲九月吉日

俳諧武玉川十四編　終

俳諧武玉川十五編序
（燕都枝折　五編）

詩に予鱗在て、風俗の時にかなへるに鳴る、此國の和歌も、萬葉よりこのかた、廿一代の勅撰もその時々に叶ひ、はるかの今迄も是を證として、あまざかる蝦夷の果迄も、流れ行はるを、我好む誹諧の雅俗は、江都を専にして、南橋北枳の風情にも通ず、さればとて燕都枝折の五編に及ぶ、予に序せよと侍るを固辭に及ず、記して自生庵の机上にさしおく事しかり、

更闌舎能安敍之

俳諧武玉川十五編



丸山や女によめぬ文が來る
返して着ても一夜寐兼る
恐れ多いといふが病み付
宿下のうまい一分を八重むぐら
狸に迄は化る人間
毛も見覺える馬工郎の婆々
綻びを唇で縫ふさよ衣
此雪に來たか門にて傘の音
出來秋の毛見の袂は面白し
田植歌聞て乳守を起別れ
店衆を先供にして西の空
温泉の山の人を男鹿の鳴へらし
光陰も女の子にて矢のごとし
仕付学の二度口へ立もどり
鐵漿付てなぶらるゝ身とおどし付
錺ざきの翌は言るゝ事ばかり
八景にはいらぬ寺の櫨もみぢ

からくりで皆納りし十二月
ひとりに見せる髪に半日
むけ〳〵と質の流るゝ天の川
三符に寐て居る乳母も狠
新川は上戸の建た藏ばかり
初物のうちも胡瓜は馬鹿にされ
長き日を餅にもつかず女形
後の世を急がぬ顔のわたし守
毒斷に千鳥の聲の齒にしみる
牡丹さへ派のきかぬ庵室
蛤の鹽は内儀が持て居る
うしろ帶錦木のよい立所
都がはりの怖される脈
當付てかへる山とは古いやつ
未得が留守にひらく朝顔
しのぶ山戸ざゝぬ御代で面白き
辛皮に口を利せぬ慾の皮
十五日餘所の柳はしづかなり
をとこの聲に成り寄りし尼
木のやうな飯振舞てさよ千鳥

藪入の顔をあたりへ持ありき
女房が女房譽る極月
妾こそうそも付ねばならぬ也
葛の葉のうらから覗くかよふ神
小言の顔も大事ない顔
手ぬぐひをくはへた聲の地紙うり
戀せじと何にこりてかちかひてし
二つ三つ冬の糺に乞食の灯
おはぐろ親のそつとわる口
物干を付けて隣をいやがらせ
來る迄は利口に見えし年忘
草市のはかなき物を直切り詰
物くれたがる本復の人
松風と召されて壺の蓋を明け
その譯は呑込んで居て火焚鳥
後家若くどつち付かずの天の河
戀聟の行かぬ先から地黃丸
草津の留守はしらぬ親類
剃た夜はきのふの枕きたなくて
切杭の噂がやむと蛙鳴く

赤子に蠅のたかる阿部川
殿のみやげの白人が着く
鉢たゝき都の町をさむがらせ
戀すれば一つおとりの親をもち
子を抱きしめる大佛の前
千體はおはしませどもかんこ鳥
さくらがり燈籠それから灯が消て
御息所の屋根板が飛ぶ
陰間の咽をしごく二上り
魂棚をいやがる母の賴もしき
五兩々々と二度の諫言
物ごし聞けばどうか濱荻
はしらのうごく馬の洗足
戀のなみだも同じぼた餅
ありくかゝ酢貝見てゐるうらゝかさ
うなされた夢を女房にとがめられ
永代藏をよみたがる聟
いさらごに足のきれいな若いもの
しやら解けの帶を屈て振むかせ
三つ物屋來てさあ道がなし

臺所で見るほや〳〵の嫁
物忘れする姑女のうそらしさ
をとこ氣になる尼の挑灯
遠目鏡耳をあてたく思ふ也
にぎやかに日のくれる椀久
夜着をかぶればうまく出る智恵
裸で呼んで顔にたふれる
けいせいの蒔いて見たがる年の豆
隣へ上がる江戸のあきらめ
先からも蚫と書いてうまい中
人の四十や葛の松原
筒井筒母はまんざら知て居る
ていねいに五文ならべる松ヶ岡
借金も苦になるうちが頼母しき
請取ると乳母がかけ込む子安札
かさゝぎの橋は降られて穴が明く
傘へ口をすぼめていとま乞
船頭に口を利かせる都鳥
古市の古い遊びも思ひ出し
蚤とんでふたりながらが拍子ぬけ

秋風にこりて〳〵としら拍子
やくそくを枕ことばで呑込ませ
ふたり寐た時の蚊屋釣る草の庵
どろ〳〵と小原女たかる蕗の薹
谷汲へよくたくはへた鰹ぶし
ふんどしぎらい氣に弓はなし
口びるが味にはたらくいもせ山
とぼすと内のいやな六月
三井寺も一日は咲く女郎花
入相の襟髪つかむ秋のくれ
五六間飛んでの果が蓮の主
浩然の氣をと出かけてたふさるゝ
切溜へそつとうどんの袖だゝみ
移に咲かせ鍋の冬ごもり
分散の家にぴか〳〵針かくし
三つめはるかに旅のよめ入
夜遊びの歸るを母の水鶏聞
世の中は親と金とにしばられて
朝顔や命は耳のよれぬうち
尻目づかひの縫物に倦

うつぶけば異見は下を通る也
老僧はうそを付く日を覺悟して
かさゝぎが來ると出る顔かくす顔
皆留守とたからの山へ呼子鳥
銀で見て淋しき物はくすり鍋
伯父の異見の屆く旅状
三ヶの津遣ひ果して八重むぐら
聲がはり口上迄を忘れけり
手に菓ばかりの高い相談
美しいうそとうそとをくらぶ山
悋氣する姿は寐るが勝手也
小あみ町すごい男をぶちまける
御座敷へ文なぶられる腹で行
酢は物に心の付くがおもしろい
胸算用であるく金貸
尼寺へ來ると雀の口まめに
目の埃に口迄明いていはで山
似た人が來ても淋しき精進日
浪人の三十日に付るくすりなし
けいせいの身の上語る遠廻し

物さはがしき御油の衣々
濟るにこはき張物の下
行く年を呼かけて呑む年忘
戀痩の身に憚からぬさよ衣
朝精進を又わすれ草
頃日すゝめ竹に入聟
女房の歳はとゝへば葛の花
尾長鳥にくまれ口を利いて居
呵られぬ事が積て年が寄る
ものいひが直ると江戸で死たがり
疊たゝけば二階から顔
つく／＼と木槿見て居るその日過
人間の尾の見ゝる冬枯
にくいとはそのうら通る捨ことば
地紙うり久しぶりにて柏もち
行燈にあぶなく舌のあひしらひ
磯千鳥波のたもとに見えがくれ
おく樣と言はれて顔が別になり
五分拂ひでも奥は三味線
蝸牛是で呑めとは御免なれ

けいせいに指を切らせて寒くなり
弓二張取て貞女へ壁訴訟
闇のうらみの惜しげなくいふ
並んでも振袖だけは明て置
灸のすゑてにこまる逢生
皆酒くさい千垢離の息
ふところの皆面白き春の人
黍の穗をもらひにやれば付け込まれ
たま／＼に水のにごりや佛の日
幽靈をこはがる奴も一つ穴
藪入を覗けば只の顔でなし
五十一では面ぼくもなく腹がたち
口へ戸をたうとう立てうしろ帯
丸木橋むすこに口を利かれけり
うば玉の低く明く戸を口ばしり
落葉するうき世を笑ふ枯がしは
手招きでかはる垣間見面白し
座頭が女房あきらめて居
しのぶ山付け木とぼると常の顔
ゆすぶれば身重き梅の落る音

金になる顔四つ五つ初ざくら
寐るといふ人にもたれてしのび駒
おさない聲を譽る棚經
伊達染の志賀は今降る靑おらし
何となく物なつかしき寒念佛
呑込んで一つ穴から醫者が來る
山烏のまじり／＼とあまの川
敵から使者は女でおもしろし
問詰て跡のさびしき丙午
後添の頃日知て火たき鳥
二分ぐづ／＼と夢のうきはし
二度來た馬の傘でしくじる
降る汔も面白い名の寒四郎
徒然の指をのれんにくはへさせ
夢が合うたと茄子買ふ婆々
かげろふの消れば跡にこぼれ錢
ざせん豆飛脚の膳を飛廻り
精進ざらい松風を引く
後家達をくらやみにする初時雨
かたいうしろに夜番の顔

あすか川妾の方へながれ込み
漸々と圍ひおほせて城が落ち
振袖もはたち過れば哀なり
耳のありとはしらぬ合壁
坊主落欠落よりも面白き
辭にかゝる本堂の錢
棒道ふ人の見て居るかたつぶり
此おふくろも拜まれた顔
をどり戻りの伊達なうたゝ寐
ふとんより夜着の情が重い也
その恪氣唾を呑み／＼の物語
ぬく／＼と置去りにして帆懸舟
鼻にあてゝ嗅ぐべからずは髱の事
手のひらに赤いうそつく西大寺
闇の夜の咳ばらひにも二通り
入智恵のぐあひが合て面白き
織見て妾と妾うしろ向
遠めがね側から口をきゝたがり
九十九度めで面白く草臥る
鵲を今の娘は待て居る

ときは御前はよく賣れた人
いもとは白くすわるうば玉
難波の蘆は伊勢で欠落
夜目遠目紅粉白粉もうそを付き
物思ひくらやみといふ養生所
辛崎の腰を押けり五月雨
尾長鳥空に見所あるかして
人參に惜しまぬ金の哀也
子の柄杓手を持そへて夫(つま)の墓
言かねる所を乳母のくつわ蟲
呼も廣げて聞けばこはい物
よい物乘せてにこ／＼と昇
物忘れいつち仕舞にかしこまり
初登り吉田の二階ふりかへり。
鴛鴦に添へて御部屋へ當こすり
親椀をむざんに遣ふ山歸來
袴腰あてる娘は物ありげ
友達ばかり知つた精進
出ずに居て貸す柴の戸の傘
耳はやけどの行く所也

伴頭も少しはくさい仲間也
後(あと)押へわづかな事を長く言
逃込もせず雨の侍
わる口な人に別るゝ小笹原
角文字のぬるき思ひは蝸牛
橋一つ渡れば戀の直が下り
巾着の小玉の狂ふ秋のくれ
あだな異見を他人から言ふ
奉公にあいた印が袖だゝみ
竹田見にとは妻のからくり
去り狀のくさびに這入る女の子
辭でつゝき明ける柴の戸
時鳥我衣手に鳴きならひ
二上りの座敷に酒の名とり川
あら金の土持給ふ御信心
恥かしいしほにも袖は濡れて
十九の嫁の長い行水
ゆく娘歸りにも逢ふ渡し守
はつ雁がねの物なれぬ聲
馬も打身の發る冬枯

付木から淺間のもえる暮の鐘
湯治場ばかりさえる御隱居
後家やかましくありく極月
喰ひくらにたうとう勝てかんこ鳥
筆をなめるが兄嫁の癖
そろ／＼と派の利いて來る鳴子綱
棒の稽古の音のする寺
影法師さへ物すごき青葉陰
そねむ氣があつてこいつも美しき
おとなしく六日から降る夏の雨
あくる日も髮持のよい物思ひ
松風のたまる所に炭俵
そつと出た向ふに虹のつんとして
母のはなしでみかん籠知る
坊主にはならう物なり顔替り
切もぐさでも蓬生の宿
子を連れて出ると女房の思ひ川
夏も袷でくらす九十九
妾まじ／＼といけぬ分別
三階はひとみがちなる入日影

物さしにあまるまくらの面白き
禰の神爪の明りが御好にて
木がらしに付木の灯さへ盗み物
千夜を一夜に寐ちがへる襟
大赦にて戻れば海の恥かしき
朝つきもまだ生煮の顔と顔
時鳥錢くさい茶で目を洗ひ
表へ出ると乳母でない乳母
くさり魚この手柏の鹽かげん
二所に寐て夢のうきはし
いやな日の手紙に蟲をかぶらせる
やりてといふもいせのはま荻
女なければ淒いでんがく
年忘れこすい所で呑んで居
藥ぐひ喰て仕舞て畏り
どう突の聞える寺に哀なし
蟷螂は賴ぬ斧を入れたがり
母ひとり隣の藏をかこち草
山歸來けいせい買ひの湊川
强飯のわけはしらずにめでたがり

柴の戸の冬は庵に風を焚
剃つたわけ言はぬ出家のうつくしき
欠落の身のくらがりも廿日草
衣々を告る木辻のさらし臼
さくらに延る寺の葺がへ
隙と／＼の出合ふさみだれ
光陰をせはしく鉦にうつの山
鰯汁女の箸におそろしき
燒鐵もあてでによつて面白き
どろぼうに脊負はせ濟してむくと起
母の目は按摩とる手に付まとひ
桃のやう／＼おくれ藪入
葛の葉の合羽も襟のうらを見せ
隱れたるよりあらはなる山歸來
ため息の下拵へにふところ手
突袖のよめぬが道理みたけ錢
追方の手にゆれて居る手挑灯
わび言に皆梅干の顔ばかり
女房に馬鹿を盡すさみだれ
三度めは裏からはたく惚ぐすり

又夜の更る堪忍の二字
京戻り噂の通り痩こけて
伊吹山前をうしろにして向ひ
われ鍋にとぢ蓋共の彌生來て
妹山と脊山の間にうしろ帶
禁酒した咄を聞けば恐しき
抱て居る子を擧る猿
御茶の給仕が岩橋となる
向ふへあらくすわる山伏
針箱のうちからけふもくれは鳥
古郷へ向て怪我の言譯
二尊院心ゆかせに葉のしぐれ
へらの寶も十夜のうちの坊主數
正直に鯰のさむき伊勢の秋
よい程にすれば悋氣も道具也
人の身のくづれはじめは一つ前
姉の思案をまたぬ妹
繼が立つたで瞽女の手を引
夜な／＼に下駄の音する町が出來
たうがらし草の中なる燃しざり
佐野のわたりに出來る居酒屋
大根にきえるむす子の二三人

三珠之部

うき世小路にうき世ものなし
けふ祭葬を馬の喰ひたがり
妾がいへば馬になる鹿
あやめ貰うて供は立詰
筒井筒いづゝ挾んで聲替り
岩戸のうちに神も聞耳
追手に明けて見せる蒸籠
吹矢でも吹きたいやうな雲の峰
金の手形で越す年の關
戀のやつこの牛肉を呑む
席書に一日かゝる華清宮
百人からは香のする飯
とぶ鳥の落た長屋も壁が落
をとこ坂行く瞽女の大願
日の科のやうに三十日を呵りけり
ひとり子に我身をつめるかゞみ山
布さらすやうな氣に成る大般若
飯に小言の出るも君が代
妹もぐるで晝の岩はし
あきらめて寐に行く顔へさがり蜘
めかけひそかに臍の緒を干す
町内をさそひわめいて姥ざくら
十三鐘は帶をする鐘
持參金むすぶの神のうらを行
すまひ戻りのつまむ綻び
若黨に取立られてきり／＼す
あうむ石是かと聞ばもうまねる
子の夜歩きに親の草臥
始終見て居る酒呑の顔
麓から髮結のぼる兒の舞
光陰の脇を見て居る女形
來る春も不斷ざくらは常の顔
役者の顔の青い水無月
いてふの乳へ乗物で來
小判が下に居ると元日
湯女のことばの分る頃日(このごろ)
金剛杖を擧る居酒屋

下戸青々と歸る曲水
三人寄るとろくな事なし
天晴智識瞳するどき
藥喰相人がなくてむざん也
雫迄もれぬめぐみの五十鈴川
戀の闇眞の闇よりむづかしき
悋氣とはよく／＼煎じ詰にけり
若ざかり味に朝寐をなぶらるゝ
傾ふ馬を覗く御端女
店をろし濟むとそろ／＼馬鹿に成
おさぢが宿に子賣ろ子買はう
毒斷を手前で免す天の川
抱おろされて馬方の顔
夕べは人を入れた蒸籠
あまりてなどか彈ながら寐
髮結ふ膝の夜なべほど出
めかけも共に御門弟入
ぼたんを懸けてかるた打つ寺
母の鬼門にあたる夜ざくら
ほゝづきを無理に取られて嬉しがり

伊勢へ來てすたり物なる墨衣
伯良に下着の儘の恥かしき
和尚の肝にあたる傘
女の聲にはづす墨ぞめ
朝日さびしく坐るめくら子
女の慾の殖える顔見世
遠くの事を腮で呑込む
吹雪の戸きのふの儘に立て有
一しきり唐へ行たき物思ひ
廬の丸屋に吉原の夢
緋ぢりめん形身にしても行き所
高い妾と思ふ極月
仲人の頬ばつて來るいなば雲
してやつた氣で灯をにくむ天の河
あさつきも內證はぐるで面白し
瀧にうたせる早乙女の足
二度めの旅はそしるうつの谷
せまい所に又乳母が尻
辛崎に心の殘る雨がへる
師走を脊負つて志賀の道行

まことがありて恥かしの森
看病のある夜をかしき影法師
足留め出來てしらぬ夜ざくら
きげん取る手は下手からくむ
松買うて植うれば琴がほしくなり
何に狂ふか笹買て行
盜れた顔も頃日物まふで
音羽町建るとすればそのはらや
人に飽き人にあかれて松の風
一言にあつちら向くかんこ鳥
小袖を嗅いで味に御異見
人の身も紙子にかれてむら千鳥
思ひ寐も少し忘れて三輪の神
うそ迄を遣ひつぶしてみなの川
はんじ物也閒に三人
人のうき世を見んと遁れる
急ぐ時田の中を行く法輪寺
江戸でなくなる長崎のうそ
阿部の童子が赤い飯食ふ
返す所を言ぬ塗下駄

先内を覗いて置いてほらの貝
十四五になると手水に念が入
志賀の人今もむかしを鼻に懸
岡崎へ來て身のうへを彈習ひ
十夜はしけで泣つらが崎
女の夜に怪我のない京
つゝき込んだる神鳴の蚊屋
居眠て居る尼のたしなみ
馳走に女房呵られて居
雨をふらせて伊達な傘
うかりける子のなつかしき島干物
燈籠をすゑたその夜降る雨
煩ふ馬をもてあます寺
仲立のよもやそれとはしら羽の矢
賣られたる時は小判も恐しき
あづまくだりも今はそろばん
人の子抱いて臆病になる
河千鳥酒やばかりが戸は立てず
九十川越した命に入たかり
親椀へ顏の隱れる八重むぐら
持て苦にするうつくしい顏
抱守の世をちいさがる五月雨
出水ヵ引て寐ぬ夜かぞへる
やがて見よそろ盤に乘るいなば雲
一所花野喰ひぬくめくら馬
早乙女丸く九つの影
一生を是でも濟ぬうしろ帶
傘を貸さうと毒のこゝろみ
湯女の笑ひの日々に減
人のうしろへ廻ることゞて
騙された目に恨めしきあすならう
下戸澤山で馬鹿な曲水
御しら洲へ出て持つた女房
百度參の供も百度
撫子のりんとして居る夏河原
さむさうな形を集て冬籠
すだれほど顏のゆかしき干うどん
互に二度め精進を聞
ひよつと立子に家中がたつ
うそを書くとて取よせる硯水
御舌拜みにない道が付き
人の子を見ても淋しき精進日
うしろへさすはうまい盃
譽るむす子に馬道で逢
あくる日は店をおはれる年忘
悋氣の蚊屋をあてがつて釣
異見の名所はづかしの森
しうとの知れぬ女房うつくし
高繩迄は聲がつきぬけ

五珠部

むぐらの宿に折檻の聲
餘所の夜をばしらぬ孝行
異見の模樣かはる元服
あぶない口をふさぐ母親
枝を覗いて廻る伯良
大屋の念を入るるそのはら
うつくしい女の四十物すごき
八日の釋迦に馬鹿な氣が付く
姑をいふし返す蚊やり火
しら乃を踏んで末のまつ山

昔の椀に尼のなぶられ
子の琴めやうのあらい石女
此うは言は醫者もあきるゝ
短夜や宵の所にかたつぶり
夕飯はやき衛士の當番

後宴狂歌

池の坊の投入の花を見侍りて
江戸へ出て都の花のいけの坊、
見る人舌をふるふ獅々口　紀逸

近習の者緒締を割り侍し時
毒のないこゝろでわれるねり玉は、
似せさんご珠のしるしなるべし　臺箫

池の坊の花會へ罷りて
投入もはへたごとくにいけのばう、
しらぬ目からも花のうへ人　同

紀逸庵に遊びて探題鮓
遊ぶ事鮓なお顔につけこんで、
皆あんばいもよし野椀哉　同

まんさくといふ花を見て
豊年の續たうへをまんさくの、
花は黄にしてあたひいかほど　同

貝坂伊勢屋何某が樽拾ひ初午に予が
鎭守の稲荷へもめん幟を奉納せしを
神風のいせやいなりへのぼりたつ、
その甲斐坂のしるしあるべし　臺箫

四手の魚とて給りけるに
網のめをもれぬめぐみの御つかひ、
三つ指突て四つ手いたゞく　紀逸

臺箫君より紅みの襦袢を給るとて
くれなゐは老のくすりときくゆゑに、
ぢばんらしくもまいらする也　臺箫

御返事に
下されし紅のじゆばんを着て出ば、
あかいものにも負けぬ年寄　紀逸

二月中ふり續きけるに
あたゝかにもはや成てもよかるべい、
やつこも雨もけふでふりやめ　同

駿河の產の櫻欄箒を送るとて
江戸に掃く程ある物を送る身は、
箒に笑ひたてられやせん　紀賓

御返しに
仕合を掃あつめよと駿河なる、
富士の麓の箒たまはる　紀逸

紀逸子一兩人の連にて芝居見物
のよしを聞ていさゝかの品を送る
先生のけふ見物に何がなと、
こゝろばかりの尻をもちぐわし　紀賓

去方より杜若を望れしに所持せ
されば
八つ橋のその三河路を領すれば、
仰に恥をかきつばた哉　紀亮

白生庵より出雲のすだれ海苔を
送られけるに
いかゞぞととうふを覗くすだれ海苔、
いつもの顔と格別なもの　同

一昨日の御禮迄に
御馳走の禮に狂歌のよみ習ひ、
まだ口ばしも青いうぐひす　同

武玉川に螢の題を得て
はいかいの闇を道びく武玉川、

ひかる螢をてうちんにして　路長
八百屋の娘十六計りなるを勘當
せしと聞て
十六はさゝげの年のひめ瓜を、
きうりせしとは西瓜ぶ西瓜　同
ところてん
芝らくと息つく人は車屋の、
涼しい所てんとたまらず　立路
年玉に砂糖を送るとて
廿口なとし玉なれど松の葉の、
こゝろのたけを送る鶴龜　紀穂
和歌の浦の龍軸の筆を送られしに
我片男波々ならぬお田鶴ねに、
使のあしへ屆く此筆　立路
宮の子共に浴衣とらすとて
子は誰が子何となるみのしぼり染、
果報ねてまつ運はありまつ　狼牙
龍安寺の鶯見に罷りて題取など

せしに雪吟の人に對して
句をしみのさしづめ髮ば雨あんじ、
背抜け龍をとらんたくみか　同
いく代餅を撰鐘れて
少々はかよひの手前恥かしき、
喰ふもいく世の餅の數々　市町
さらさのきれを人に遣すとて
約束はさらさら如在あらねども、
一寸のびとなりし御不沙汰　同
初茄子をもてなして
味もなくかたちばかりの初茄子、
汁にするがの客は吸口　紀見
和歌のうらの龍筆を人に送るとて
よしあしの筆のわかちはしらねども、
おくりてそゆる和歌のうら浪　路長
文字に叶ひ侍るをふしぎにおも
ひて爰に記す
よるをきてだかれてみればあんどんか、

盃を見付てまた夜といふ　正年六才 圃平八
ごまめ野老かちぐり米四色をた
て入て狂歌せよと侍りしに
田つくりの娘なれども所から、
くしがささしてよねのなりふり　紀逸

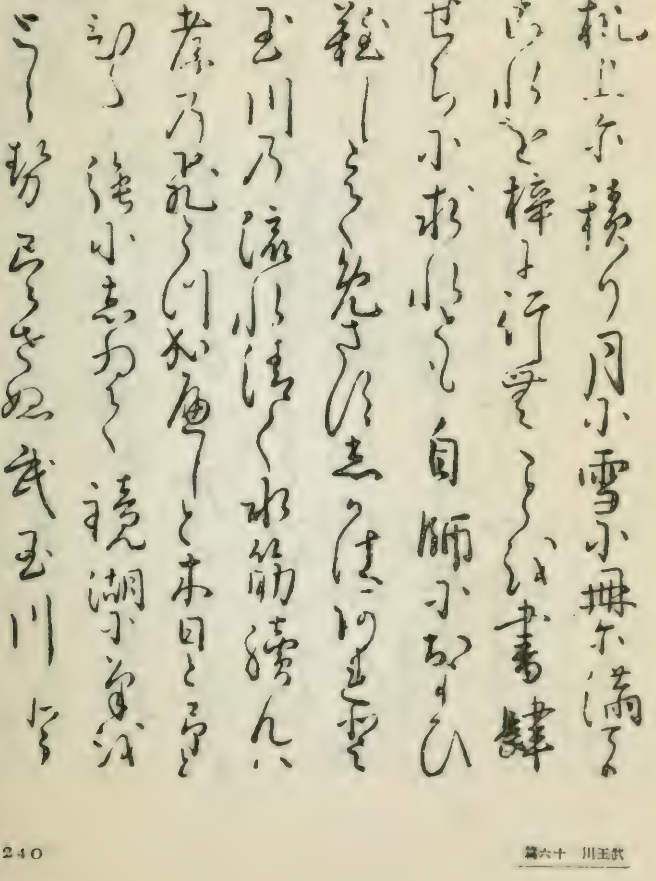
寶暦十一辛巳歳九月吉日

俳諧武玉川十五編 終

十六編敍
（燕都枝折六編）

先師自生庵主、日日點耕の句を武玉川に廣め、予もその筆勞をたすけて、既に十編に及び、續て燕都枝折五編なりて、世に鳴ること、ひとゞくの知れるがごとし、今の四時樓その名を繼でより、日々の點句机上に積り

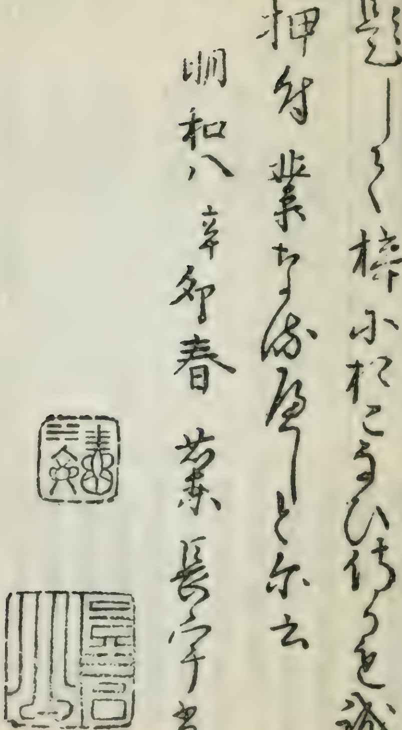
月に雪に冊に満てり、これを梓に行むことを、書肆せちに求れども、自師におよび難しとて発さず、しかはあれど、玉川の流れ清く、水筋續んは孝のひとつ成べしと、木日と予と、ひら強にしひて、鏡湖に筆をとらせ、盡せぬ武玉川と題して、梓におこな



ひ侍るも、誠に押付業なるべしと爾云。

明和八辛卯春

蘭長字書



點譜

丸　二点　雁字　三点　春水　五点

真雲峯　七点　秋月明輝　十点

冬嶺秀孤松　十五点　東岳泰山　廿点

西岳華山　廿五点

南岳衡山　三十点

北岳恒山　四十点

中岳嵩山　五十点

四時庵　紀逸

俳諧武玉川十六編

冬嶺之部

百度目の嘶は娘がにぎりつめ
帷子の藍は手ぬるし初松魚
後生が判は地獄極楽
島田金谷にたまがる〻顔
居眠て見る蟲干の所化
祝ひ日は後へ廻す娘の帯
六部の撞木美しく減る
染て来て紺屋の罪の軽くなり
魚に中つて寺の濁を呑む
なかめ人多く土産買ふ顔
看病の毒は合點の顔ひとつ
惜がる顔へ投る番附
拾ひ人もなけれど世をば捨がたし
かるたの付て上る手枕
腹をたつやうに揚銭の面白き
綻ひとつ戀のはじまり

蟇手水の先にかしこまり
箱入は雛と娘の名に呼れ
美しい顔でうしろはふたつ髷
取揚婆々の先へ松明
浴室から海老に成るわと髪を懸
杖の下廻り課せて重手代
両方切れる行平の猫
御寺に一夜馬を怖がる
棚の利たる晝顔の花
親が出て居る朝の水茶屋
藤咲て古脊松魚に道が付
豆相を吹ながら出す風車
道辭が膝に付て來る蠅
翠簾を卷く顔へ夕日の突當り
作木の腕を出しては引伐れ
一日は寐ても居られぬ蟲病
新立の鏡へ家内顔を出し
直した醫者を直に仲人
扨こそ鹽の足らぬ強飯
いぎたなき小僧の顔に歌書て

姿鏡に帯解の子を抱いて見せ
遠の人をおもふ神鳴
鯉をおさへて口上をいふ
病んで居る枕に母の遠廻し
腹立のやるせなく灯を掻立て
凱陣の女房に惚れるをかしさは
たま／＼に嫁の火傷は薬鍋
江戸詰に成つて上つたをとこぶり
飛び／＼に謡をうたふ草履取
弘誓の船に乗りたがる婆々
いつその事と寐て仕舞ふ雪
里のないだけ美しき嫁の顔
土用干にも道の付く本
初瀬の道をひそ／＼と聞く
女房は熨斗ばかり取る一萬度
おんなじ事を聞きにたつ嫁
梅咲て禿の歯の顔に逢
極樂は寂ぞと寺を吹ぬかぜ
壁に穴隣同士のおもしろき
神の贔負を役者ほどする

裾へあたると美しい風
法華に成て言ほぐす公事
うつむいた女に咳の礫あり
また精進をねたむ二度添
笑ふのも笑はせるのもこぼれ物
鷹野を數珠でをがむ正直
惟光が夢は宿直をかけ廻り
櫻で濟ます伊勢の八朔
緞子の帯腹立時の帯でなし
病人の袈裟も衣も美しき
雛で一日ちがふ出かはり
廿五に成ても乳母はしかり付け
能い返事どこやら顔も見える也
大勢で硯をつかふ天の川
居風呂が漏るわ／＼とかしこまり
絲柳物をいふなら京言葉
還俗させた奇異の齒者
七種に一日齋もさそふ水
菜も末に成となくなる人來鳥
唐繪の美人惚える氣はなし

こつくらと暮て御内儀の美しき
重荷おろして對の溜息
似ぬ顔を産んだ妾も人の口
世は善にそろ〳〵錢の涙が利かす
天の川男の智恵に惡はなし
美しい手を搽乞の口へあて
はつきりと顔の見られぬ道の輪
鬢なでるやうに髷に寄る霜
片肯かへんと紫陽草は賣れ
總領孫兒のあたりへ搭をかけ
産んでから妾の智恵に庭が出來
鷄も番に成る夜は通りもの
嫁まで直されば後家も人の口
顔の淋しき初潮の十月
平公から横顔をそしる娘がまん
月切の妻に女房の襟を握られ
凉しからせに頭巾取る尼
金で濟むとはひよんな盗人
鍋と片を付けし國々
家根替の留守へ來て舞ふ蝶ひとつ

毛蟲に騷ぐ行水の裸
師走女の女ではなし
あばたに惚れて直す俳頭
晴衣雪でかためて內を出る
連彈の唄の間に〳〵笑ひ合
同兩の口と耳とに名が立て
白い脛の步行く伊豆子
壁越しの嗅付さうに屛て
仲人口の鳶にする婿
歌詠も水とおもはぬ瀧の絲
結納が來ると娘に錠が卸り
遠くの棒を洗ふ生醉
藤の寒日も精進も落る嫁
西のうづらにけふ中の顔
筑摩の鍋の火は顔で焚く
いくしに袴着たる船宿
肩車上にもまはる風車
親もなく生れたやうに美しき
鵜飼の火淺妻船をいやがらせ
してやつた氣で肝煎は立てゆく

預る顔に譯のある顔
物にもならず緒子がほどける
鳳凰も出るくらゐなら三四月
當分聲の低い年明
嫁が居て祭禮を演る顔
本の親仁は細工貧乏
物見のひとつ沙汰のある顔
籬越しに眼をさます青麥
白魚は七月頃にはつ櫻
ふたれたやうな六月の形
着替へて見せる娘の當分
居風呂の傍いふ時は素顔にて
風呂の鳴に水をさす嫁
美しく通辭は喉を取逃し
煤掃に手をもじ〳〵と美しき
袖留を着たがる娘おもしろし
立とやまればあちら向く顔
我儘のいはれる奉公むづかしき
皿の最期も念佛聞える
女房を凄くおもふ醉醒

思案の顔を蝶になぶられ
すねる娘のおもしろく寐る
[illegible]い自鳴を[illegible]打の[illegible]
木枕で背中をたゝく[illegible]おから
高い鳥居に顔は捨[illegible]
看病に大喰付を適[illegible]
いぢらしく他人が咄す梓弓
帶かけて這入る屛風に咳一つ
前髪とるとすわる魂
來た翌日の嫁は人形
勸化の錢を懐でよむ
油斷な形。でかつぐ太刀持
母は晦日に手早引かけ
うき名の意に闇い閻魔
泊客着かへる頃に火がとぼり
分別を逆につかふ病上り
手まねきでむかふの顔へ呑込ませ
中のよいのを母の垣間見
女房に成つて遠いさかづき
[illegible]へ雛におとらぬ顔が來て

遣手が來ると何喰はぬ顔
何所か淋しき石女の雛
衣更人肌ほどなぬれ備
休む内太鼓であふぐ盆踊
盧生が夢に獏の食傷
年の市若やぐ物の種おろし
下女を師匠に梅を折る妻
火を吹く息の細長い顔
鐵漿付けてから本の相談
女房は西瓜切るにも工風して
來るほどな子の年を聞く嫁
里開きから客椀で喰ふ
江戸で見た顔にけふ逢ふ二見潟
妾は智惠のない方がよし
出來分限石に根繼の聟をとり
呪に智識の杖をかりて來る
翌元服の顔に落着
藥につかふ媒の咳
帶をかゝへて笑ふ腰元
紙子の似合ふ顔の光陰

夢のはなしをちぐはぐに聞く
旅の手本につかふ池上
互に智惠をかりて書く文
笑ふさへ對に笑へば拍子あり
急度居つてぬかるふり袖
出替りのいくたび顔の照くもり
江戸で尋る古郷の顔
戀の外にも凄い夏痩
鶴下りて質に取る田の面白し
垣間見はおのれが咳にふたをする
暦を投て逃る相談
凄く咄せばすごくなる夢
灯が消えてから怖しい智惠が出る
衣更妾に噂ある日にて
夜の咄を聞ほして見る
釜沸のさ〳〵と來てかしこまり
毒になる顔を湯ですり紅ですり
出家堅固にすはる白粥
豆腐賣木戸の封切る組屋敷
煎藥のたえぬ妾とふりかへり

年忘から覺めし郎郭
寺の窓どうした譯か顔ひとつ
麥の丈暦のすゑも二三寸
縞を着た日はあたゝかな草履取
傍輩は其筈といふ物着星
見せに來る雛さへ顔が大事也
中宿の火を焚過す草履取
言譯は母に極て天の川
逃込んで柱かくしの顔を出し
一生歯にはあはぬ大判
無理にほどけば帶も礬石
草芳しき中に飛神
座頭も數に入れる目隱し
御鷹も泊て星のふる寺
つい顔のかはる四條の貸座敷
佛の場へ後の身揚り
赤子の顔へ繪馬の金箔
買ほどに入院の和尚覗かるる
捨物にしてやつて見る文
鐘氷る頃物の怪の膳

髮結の元結喰へていそがしき
聞馴て聞ぬも淋し鹿の聲
舞をさめたる十德の袖
つい濟む事をやかましい關
鼻うごかして通る鳥邊野
どんすの夜着に藏の移り香
半分は日のあたる魂棚
近付をもとへ戻して法の道
錦木の少しかたぶく土龍
うはの空ともいはん釣夜着
婢のかゆい所へ手がとゞき
土鍋の尻のわれる留守事
鹽断も名代の新造
うたがひの闇い所へ付けこまれ
女は顔へ見える腹立
吉日の蚊蠅の中を宮まゐり
五月雨時計崩してもてあまし
踝に戀のさめる出女
鯛は素袍を着たやうな形
腹立てさす傘のひらき過ぎ

雫して居る神子も入智惠
旨い事妹に言ふも口ふさげ
草庵の咄は瀧にとられけり
丸かれとおもへば長し丸額
はね元結のゆるむ湯上り
庖丁もむざとつかはぬ奧津鯛
晴着ぬ日は埒もない顔
掛人けふの役目は鰹ぶし
書明て音のせぬ戸に腹が立
古雛の一年ましに惜がられ
琵琶の弟子天にも地にも只一人
甘酒はなる下戸の片腕
佛力はもう釣上て鐘の聲
寐たふりするも遲いつら當
唐崎へ來ると乘屋は鼻にかけ
數入に穴を明たる春の雨
帳前にかゝると嫁も飛鳥川
留守ともかゝず假名の請取
玉子の内は鷄もわれ物
言譯の出來ぬ所で反かへり

涼の運も雪を見た運
人の氣を穴へ引込む秋の雨
手桶を見ると智の尻込
江戸を一目に呑せんを呑む
二度に庭見る婚禮の雪
誰に見せても親はない顔
坊主に成て見たい六月
霜に染たる義士の装束
窮屈な物にして置く緋の袴
鱠を寒くおもふ醉醒
御室の文字を茶碗から知る
日を受て隣へはふる雪の竹
表德で呼ぶ闇の中よし
熨斗目仕立る側に切張
除夜元日は年の唇
針妙の智惠のぐたつく積り物
秋を五衰とおもふ閨はれ
音頭取る臼にあぶなくかしこまり
八卦の錢の二くだり半
黒牡丹とはしらぬ小原女

新地の大屋蒼朮をたく
年波もおもへば盃も淺瀬川
牡丹ほど着て肖柏が旅
橋からは船の喧嘩を涼しがり
貧乏によく生きた八十
世の盛衰を洗ふ紙漉
出來立の日のあたる禮服
闇の持藥の陶で來る
橋奉行先甲子の上座にて
鼻にかけたる姉分の顔
古い物とては新地の運計り
喜連川四も五も喰はぬ渡し守
夫婦の六部よく／＼の罪
三人寄れば惡智惠な妾
見せ馬も三度に成れば面白し
分別も近道行けば屑だらけ
山歸來たうとう江戸の水に飽
嫁の田唄の細長い聲
里問へばしらぬ女房の美しき
並木の松に齒のたゝぬ秋

女の奢私でなし
隱居へ嫁を仕舞ふ結納
木母寺へ片付けて置く江戸の秋
妹の先へ嫁入るも逆の峯
何里にむかふ胸の草臥
我家の敷居高い朝顏
踊子に振舞ふ膳も輪に居えて
杣は子を猿よ／＼と呼子鳥
夏の四條の夜は夜でなし
座頭の媒見たやうにいふ
腹のたつのも肉までの懸り人
本腹に髮を抓で笑ふ也
一夜づゝ夜寒がらせるきり／＼す
牛ともに添へて小原の丙午
あつらへに降る八朔の雪
夫とも兄ともしれぬ掛り人
病上り工風して置く紺屋形
甲子に皺て踏む橋涼し
朔日が有て晦日は結び髮
寐に戻る戸はからくりの音頭取

異見としらで大把に来る
俎板の裏も色付く蕃椒
新地の無盡蛙ほど寄る
頃だつ娘疵でない疵
陶かくす嫁の袖笠
樓船皆空蟬の秋の川
鉢たゝき旨い咄を聞いて来る
揚屋に家老よく/\の事
地黄と聞て笑ふ三十
蚊屋の外夜伽の夢のかけ廻り
相傘はまじ/\とした道具也
小尻に疵の付し蓬生
ほや/\は牡丹餅でさへ面白さ
送つて出れば低くいふ醫者
調市も猫穴の言譯
盧生が夢の覺めて書出し
美濃紙ほどな六月の瀧
庵の佛の光る十月
佛にも指をさゝれる郭公
咳ひとつ二階の闇に突當り

女房と紋のしれる傘
三人寄ると智恵の大詰
四十の妻のちんまりと寐る
鵲の橋を見て居る物案じ
最ゥ年の極意とおもふ九十の賀
妾の異見終り初物
亦唇へもどるしつけ苧
下戸の建たる蔵も分散
白粉も紅粉もおもへば怖いやつ
出替に妻のなみだの美しき
雨しんとみんなやかたは死んで居る
十二月人のこゝろも短くて
門松建てゝ貴賤の札
魂棚へ来てかしこまる瞽女
毒断とおもへば顔もおそろしき
能い分別も持たず切鍛冶
寒い端午に寒い侍
夫婦とも他人ともなる從弟仲
初松魚女の料る魚でなし
悋氣を乳母が口で助太刀

あづま下りに馬の草臥
一理屈ある横笛の肘
誰差圖するともなしに踊の輪
蟵釣れば座敷の内も廻り道
慾深くなる年は八十
毒があるとは言にくい醫者
戀衣目口かわきが縫て居る
出替りやおもへば春の銀河
從弟もちよつと障るわる口
早乙女の子の笊で見る夢
香せんのぬけがらへ入る蕃椒
唄にうたはれさうな掛人
疱瘡神の惚さうなかほ
女房の詞も浅草の無理
尾[illegible]し三絃にいやがられ
[illegible]臺壽と薬の中に居ゑ
顔づくで済む奉公の無理
毒断に尻やけ猿の名を取て
結ぶの神にそつとあやまる
鬼灯の根を出して居る雨舍り

繼娘のかさねだんすも恥しき
鍵さきをして歸る蓬生
五人となればむづかしい智恵
百姓の汗は稲葉の露と消え
分別も其日々々の掛り人
てんぼに建た節木が咲
なぐさみに四五間游ぐ垢離の跡
何所では居うごく空寐入
無沙汰した門を尋る俄雨
奇麗に淋し參宮の留守
みいらもとらず大雪の宿
師走の町に魚の罔兩
ぐつと締つて怖しい京
油をつぎに妓夫の大跨
追人の内に交る媒
直ぎりころすが旅のなぐさみ
白雨(ゆふだち)に夜の四條をあやまらせ
いろ／＼になる立聞の顏
神代より柳櫻は言名附
箒紙もくる／＼巻の掛り人

咳ひとつ娘の爲の鳴子にて
飛ぶやうに見える蘇鐵の罔兩
棚經の物さわがしきいとま乞
撫子の上へ落てもはづかしき
煤掃を仕舞ふと冬の氣でもなし
槍にゆるしをやつて浪人
夕べ尋ねた針は行燈
世の中の小言を聞に栗の花
面白く弔ふ物は鯨にて
年中に草鞋のたえぬ馬喰町
勘當の蓼も茗荷も間に合はず
親のつくした椀箱の文
顏の直段のもめる三月
松風の方がよつぽどいくじなし
癪も痞もみんな岩はし
仲人の口癖にいふ石の上
むかふへ音のすたる高輪
軒號で仕はれて居る掛り人
葛城の道は合點の草履取
江戸中の手のうごく七種

母を定規につかふ裁物
居續の隣に繪師の咳拂
冬の月みんな手のない罔兩
毒斷の内はふた間に蚊屋を釣
口留をして二挺借る駕
看病にある夜ざんげを仕過して
寒いこたつに捨たるふり袖
雛店へ來る箱入の顏
鰒よりも枕のこはいうき世也
井の端の桐にひかへし瓜の綱
紅毛の登城に蠅の付て來て
行燈で髮結ふ内にまた今年
虚無僧の顏へこまかに日があたり
吉原は寐に行く所寐ぬ所
奉加帳出すすゑのまつ山
子の顏を顏で撫るもいとま乞
淋しく坐る尼の上客
木櫛に留守を遣はせる智恵
くらい所で夢のせんたく
消るあかりも仲人の内

金魚銀魚の中に錢龜
憎いと言ふ字貝から出る
草履取綻び縫つて衣更
たま／＼妻の出懸つて降
紺屋の嘘も譽らるゝ出來
鷹狩の野にかたまらぬ竈
祝ひ日の氣を引立る酢の匂ひ
赤い信女の又ひとり產
白雨も御祓を降るがおん詰り
利久が誉て夕の輕い水
笹に四手靑いうちにはうたがはれ
跡にねがひの寺に逗留
能い思案黑羽二重の切る時
渡し場で聞く三所の鐘
はたちに成つて怖くない闇
紙燭では足らぬ女のいとま乞
仲人はたとへる顔に皺をよせ
家中に突出されても物着星
紅閨を踏んでは笑ふ最上川
有明もきせるの屆く程に置

朝顔の垣は女房の氣に任せ
八景のかなめもぬけて歸る雁
落鮎に鵜飼が妻の顔さびて
衣紋坂歸りに付けた名ではなし
嫁の手のはじめて知れる天の川
綻を縫はずに置も下ごゝろ
酢の過て居る梅澤の嫁
寒念佛畫はすがたを竿にかけ
遣ひ出のある閏極月
貰ひ切るまで押入の顔
看病をゆるされる日のあぢき無き
薄着して居るうすい唇
骨牌の手にも扣く手が有
艪を突出す舟のあいさつ
八卦しろりと十九二十五
百夜の小町素人でなし
出口から秋の油斷を散て見せ
米の祝もひねに成る婆々
喰足らぬ庵へ四五日芥川
後の水鷄の傘さして來る

七景に留守を預けて歸る雁
學寮の外は氷柱の折る音
歸依僧の手なら足ならさり／＼す
溫泉の戻り谷へ骨牌を投捨てて
ぶつ付る鼠の罠に夜が更けて
目出度さの口もとをする小豆飯
座頭の騒ぎ眞直に立つ
戀の深みの高が首だけ

東岳之部

島原の子にすごさるゝ鉢たゝき
女房の崩しはじめはむすび髪
是ほどの春にうるさき伊勢乞食
生きたほど出す袷乘が馬
袖を留れば腰がたましひ
長閑さに妙義の御託聞人なし
短く成つて屆く言傳
肩衣で嫁を見立る本願寺
相傘の丈もこゝろも同いどし
毛見の檜稻葉の雲の中を行
乳母の暇は夜の内に出す

夫婦げんくわの中へ齋僧
女狸に氣遣ひはなし
手紙の伊達は餘所へ預ける
足袋をうつちやる寺の近道
鼻計り隙な三井のとしの暮
微塵つもれば鐘になる神
たま〳〵ぬれる庵の俎板
紺屋づらめとぢれる五月雨
互にわらふ横の綻び
燒鹽に成てもやはり浪の色
美し過てにくい傘
十九と九十面白い年
呵られにたつ船の眞中
藪へ枕をはこぶ六月
藥が利いて來ると六十
枕にもめの出來る庚申
他人の眼にも苔のない墓
持て來たほど置て來た嫁
わすれた意趣を受る煤掃
枯野の果に島原を吐く

土藏の中はまだしらぬ嫁
砂を摺る牧の毛付の硯石
すゑた物鼻で聟にいやがらせ
書踏で見れば敷居もおとなしき
名と喰ちがふ雪の黒谷
駕舁に出入も出來る忍ぶ山
美しい顏は土藏に煤拂
顏ほど明て產所伺ふ
十五であかす啌のかゝ樣
風聲で戻る音頭もおもしろし
見に來る筈で横顏で居る
大師の側にすわる仲人
釣上げて女の逃る手長海老
踊の輪のはねるふり袖
五分ほどの暦の中をとし忘
餅の取粉に嫁のむだ書
牽頭がうたひたつた一口
何やら足らぬやうな精進
男へし女郎花より派が利かず
旅の涙は降ものゝ內

愛敬のもとは顏から綻びて
恨め〳〵と涙からいふ
言葉を淸くつかふ朔日
五分引て聞く仲人の口
大小に妻とは今の世ではなし
名代も芍藥ほどは美しき
分別を問へば村にも口がなし
物書ぬ女淋しき天の川
娘の年に近き後添
手を揉む音の高い百姓
何となく氣の高くなるゑぼし折
初瀬を祈るは足まめな內
買て來て不審のはれぬ惚藥
洗ひ髮我顏ながら面白し
二階から知た座頭をまよはせる
當分顏の廣い元服
仲人の尻のわれたる鍋の數
業平はいつも少き供廻り
佛師に顏を見せて入定
二三寸日の足らぬ仕立屋

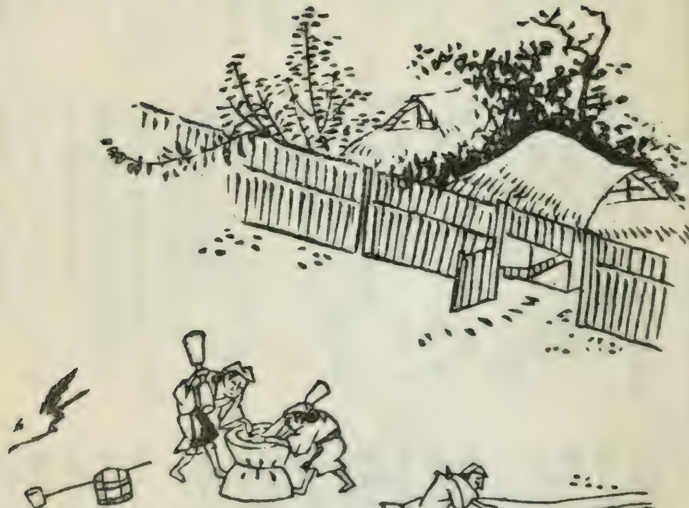
秋もはや菊から人をうつふかせ
つゝかれた跡の明るきはつ轍
日も吉原へ這入るまつさき
初旅ながら不二は近付
いそがしく建る障子に痛い音
里と小指を隱す女房
鶴へ來る風も柳の受けかげん
疝氣とはいはで只にや女形
嫁一人踊る家内の盆しらず
一つかみ旭のはふる竹の雪
賴まるゝ顏を見て居るゑばし折
寺へ祭を入るる夕だち
絲の來る内たゝく三絃
鶺鴒も首を曲るさゝやき
移もいわしもいはゞ嗅い中
咳拂ひ少し座頭の取繕り
大屋の顏も晦日朔日
紅裏を着るにも白い物着星
鳥を逃してうごく唇
鶺鴒の椀から下駄へ飛移り

雨まで譽て歸る仲人
光琳の繪に寒いふり袖
勝た喧嘩に詫をする乳母
絲瓜の水を大事がる嫁
かんこ鳥此秋啼は人ごろし
汲む眞似をして直を付る竹柄杓
鵲の橋は言葉のはしとなり
奧へ來てもみくちやに成る年男
かき立る灯にかき立る智惠
あかりが消きて岩はしの晝
おもへば此鏡うらめしの六つ
まだ臓の扇をつかふ草の庵
稚子の顏を螫る蜂突
幸若村は詣る子育
[illegible]巾贔負な紋を買て行
[illegible]薬にされはし買ふ縁の衣
掛人芥子粒ほどの物着星
渡りを置く虎がなみだの怖しき
涼[illegible]手の中へ手を突て
子を寐せる片手は蝿につかはれて

水も火も枕に近き綱代守
言譯を直にして行く音頭取
三つの智惠内にてひとつさや走り
懸硯伴頭の手の置所
うたがひもなくて淋しき晝の蚊屋
二十餘年は美しい夢
のしと書くのは手短な義理
いづれあやめの中に引く弓
座頭には退けて置たる客ざせる
貫はれた座敷は雨の天の川
ねらひすまして點滴を飛ぶ
りくつい ふ座頭に顏を曲げて見せ
べん〳〵とをとこえらみの見上皺

西房之部廿五點

うか〳〵と能く夢も見ずなすび賣
十日もたゝず田へおろす嫁
御内儀に譽る所は臺所
長持の錠に女房の手を喰れ
間違の夜明れば小夜ちどり
新宅の汚れはじめは火打箱



武玉川 十六図

宇治と嵯峨とは氣をころす里
留守つかふ女房の顔の留守でなし
正月の氣を締直す店おろし
わすれた智惠をたき付る鹿
丸合羽手はやはらかに提げて來る
悋氣も朝寐しては氣がぬけ
竹馬とおもへば輕き鳩の杖
戸迷ひにして濟ます氣の忍ぶ山
眼が覺めて扇子の明かぬ涼臺
追人は戀の詫も鵜で居る
海が見えるで慾のある寺
くゝり枕も人の和らぎ
閙しい時呵る針箱
聞えぬやうに鬪の口眞似
片々とめて着て見せる袖
きりきりす啼とおさへる歌がるた
かなしい聲で雨だれを飛ぶ

南岳之部三十點

先神棚へ朔日の顔
味方にも敵にも禿成やすし

燈籠消えて白い吉原

北岳之部四十點

翌の佛の顔も牡丹餅
異見いふ片々ひくき影法師
そば搔と評議極る千鳥聞

中岳之部五十點

神鳴で縫ふ嚊の綻び
青海苔をもめばこぼるゝ名なし貝

四季　　湖十

鶯や身を色々に駿河竹
蹉跌く石を名殘やほとゝぎす
人の手の仕舞にさはる踊かな
風の日や小菜の畑に啼千鳥

一漁

あら海の引息つよき汐干哉
むら雲に氣の付く空の暑哉
名月やこゝろの旅の幾千里
としの瀬にぬからぬ顔や鱠松魚

晉阿

啼つれて月をうごかす鷭かな
見わたせば空にとなれる青田哉
名月や忘れてか啼ぬ蟲もあり
淋しさも音あるものぞ鉢たゝき

長隱

菜の花や寐て行船の着け所
晝がほや鮎燒く石の鼻の先
何豆人蛸船はしる月の海
雪車に倦く國さへあるに雪見かな

萬英

青柳や道々むすぶ後帶
五月雨や秋におとらぬ夕間暮
おもひきや旅寐の腰を砧とは
兵の手に覺えなき寒さかな

晉如

日の限ありておとなし猫の闇
祇園會やよく答へたる面の內
名月や水の下ゆく船の影
水鳥の寐るとも見せず流れけり

秋色

夜はもとの雪となるかも初櫻
初松魚飛ぶや江戸橋日本橋
鴫捨に明残りたる案山子哉
うか〱と夜に入る客や初しぐれ

花千

愛敬は薬うらに見せる椿かな
其夜降る山を見て居る暑哉
名月や折々酌の手くらがり
雪打や風の童の腕まくり

巽籬

鳥ふたつよみつくされぬ霞かな
篝や夜明て見れば夜も長し
灸すゑた背中手向ん魂祭
手に取ればまだ脈の有る海鼠哉

秦川

春雨や頭巾を猫にかぶせけり
出女の立つくしてや雲の峰
門口に母は更けたり盆の月
花嫁も浴衣着て來る十夜哉

玉十

雛の日や母に押へる小さかづき
六月のまだも動くは柳かな
名月や五百羅漢の内も掛
ともかくも大根買ふ日や冬籠

四時四十句

紀逸

春之部

花の春燕都のしをりや武玉川
水色の空開く井の鏡より

聖廟に詣て

陽の息に開くや梅も東より
紅梅も天津菅亭のすはえ哉
しら梅や皆嗅す猫の聲
駒下駄にきせるを鞭の梅見哉

旭に駒牽大黑の畫に

今やひく餅の鏡に嫁が君
濱の家の猫もあやしや百千鳥
人臭き橋や山路の花盛

夏之部

僧脇の袖かき合すさくら哉
花にくれし眼の曉やほとゝぎす
水際や月も牡丹の十五日
子の爲の垣に折るゝや竹の親

水滸にて

御膝元の水は尊し松魚時

同留別

涼しくも秋の來ぬ間ぞみな蓮
霧雨晴て不二や淺黄の裾模樣
聲は皆蟬にとられつ裸蟲

悼長宇　前書略

我も聲からす柏や蟬時雨
一口は馬に掬する清水哉
すゞしさや岸に水馬の鼻あらし

秋之部

月は二夜あるをとぼしき星一夜
夢に見し胡蝶やいづれ秋の蝶
茸狩やかなでし主馬が夢の跡
逃水の白く増穗の薄かな

八十の賀

はたち程まだうら若し松の月

よしはらにすだく雀や夜蛤

草の名の月にきはまる一夜哉

月見して明方やさも花のくれ

朝顔のかばねさらすや後の月

生壁の乾かぬうらやきり〴〵す

冬の部

夕榮や雪の中ゆく月毛馬

虎の尾の花のおもさや雪の枝

鯱の目ばかり光る時雨哉

たらちめの後を見する巨燵哉

鷹の目の我は顔なる枯野哉

晝暑し川瀬に配る千鳥哉

初雪や酒で活せし松の色

夜な〳〵の池に蓋する氷かな

惜むとしいそぐや遊ぶ人の慾

春をまつむまやの鈴や飾杭

俳諧武玉川十六編 終

俳諧武玉川十七編序

（燕都枝折　七編）

東武に紀逸ある事、遠き海路のあなたまで、人々耳目にいちじるし、すでに武玉川燕都枝折の風流、一世の活物にして、其妙俳諧の朝暮にあり、爰に継なる紀逸、猶また風雅の遺風を守りて、終に武玉川十六篇を編、其こゝろざしたくましくして、其器もつとも猛意なりといはん、ついで十七篇なる、其こころばせをよみんじて、たゞいつまでもながく、紀逸よかれ／＼とぞおもふ

晉子三世中興俳談林

點譜

圓	二點	東岳泰山	廿點
雁字	三點	西岳華山	廿五點
春水	五點	南岳衡山	三十點
夏雲峯	七點	北岳恆山	四十點
秋月明輝	十點	中岳嵩山	五十點
冬嶺秀孤松	十五點		

猪入道紀逸

俳諧武玉川十七編

冬嶺秀孤松十五點

袖笠に出るふり袖の肘
初旅は灸も支度の數にいり
切火は人の氣を洗ふ水
輕い異見も母は二タ口
横顔をして渡す梛の葉
馬呵る聲を躾て聞く宇津の山
冬の園のつかひ出がなし
草も木も寐るにまだ來ぬ初會の夜
日本の智恵とおもふ吸もの
我顔にもどる役者の夕涼
孔雀のきげん籠につかへる
金であばたを埋る仲人
何かはしらず庫裏の鞘鴫
ていねいな分で袂の袖だゝみ
松魚は男ぶりといひたし
大工の膳に見ゆる九つ
車引やすむ所で反かへり
灌佛や世の行水もよい時分
女の聲の細ながくたつ
段々に深みへ這入るあくた川
あぶない袖の通る燭臺
別莊すごく杉立る門
簑のぬれて屆く中村
醫者の異見のいかぬ母親
別莊は墨繪のやうな松飾
薊取が來てたゝく柴の戸
氣のつかぬ寺によく啼くきり〳〵す
帆柱を聳めたあがりに抱て見る
茶莚の鐵はたけば火の作
うつかりと乘る京の唇
沙汰なしに產む子にも氏神
鴨居の箸をさがす客僧
また新しく笛で岩ばし
厠の口のもめる中入り
呵る旦那もぬけぬ智恵の輪
屛風の闇へきえる素湯漬
娘子の料理して居るきり〳〵す
戀病の始を聞けばぼんのくぼ
一葉の桐に目を付る秋
相談の相手がなくて膝頭
こゝろの屑をすてる入相
上り端から咄す木の端
四日市喧嘩の中に牛は寐て
息子に隱す巖の燈明
鬼籠る町も折ふし小夜衛
今寐るかやを花から見る
棒のない箱提燈は端の人
悋氣おさへる嚔の恩
たま〳〵妻の出で掛けて降
草履取縦縫うてころもがへ
深い思案は額から出る
時計のうそも客のもてなし
憎まれる方は役者も面白し
ふくれた頰の矢おもてに下女
閏五月は名のつかぬ雨
公家領は荒にし志賀に色紙稈

分別の近道へ出てかしこまり
質引が濟で眼の明く掛人
忘れては行く本復の杖
下に見ゆる物を笠島ゑぼし島
隱家の内を覗けばみなの川
木曾路の瘦の直る古市
紺屋の聟になりさうな舌
時雨のやうに千鳥降る城
七生までといふ方が泣
起請書く後に立て舌を出し
鰡の釣手に客の印籠
淋しひといふ文字は痳病
去らせた跡へ美しい鬼
腹立のとばしりかゝる草履取
元日の巨燵にはまだ去年の火
紺屋のうそも擧らるゝ出來
物思ひ蓮見のつれへ水をさし
泣たがる子にかづけたる入梅の空
お内儀は忘れぬ顏の年忘
せはしなくたゝき丸めし火打石

松をはなれて石町の鐘
石女の居風呂の時口をきゝ
くらい所で夢のせんだく
石女の手も借りに來る蠶時
段々に夜の明る三夫婦
狐と從弟ほどなおしろい
遠くから見える螢の息づかい
指て來た傘に家内の毒が降
誤て伯父の片言聞いて居る
唐紙に喰へられたる妻の裾
十一人に借りる勝わん
遺狀を亦こねかへす梓弓
人間にすれば屏風も通り者
金魚と共に煮える河骨
ふところを匁に掛て見る京の町
地をふく風に比丘尼ねぢれる
馬醫にも見せて仕舞ふ感狀
同じ北にも嵯峨とよし原
尖つたやうな霜月の風
水無月にもう先ばしる天の川

目出たがらせる嫁のわづらひ
掛乞の鬼はのがれる柊さし
火のしの先をはらふ大聲
入聟のしかられ始すみれ咲
七りんの口にあぶなき膝頭
戀無常猪牙とすれ合ふ施餓鬼船
今つき初の有つたけ反
箸紙をくる／＼卷のかゝり人
鍔買ふて柏餅ほど撫でて見る
代脈は氷のやうな手を出して
對にきたない旅の虛無僧
やつと盜んで來ると散る蓮
笑うて居るはしらぬ罔兩
買足してあたりへ配る汐干狩
鱸の口をのぞく女房
めあはせて見れば從弟ははなれ物
七ころび目の起きて墨染
窖を出てもとの六月
芝居のやうにあつちから惚
無理な所へはひるいたづら

廐所にも花の御手傳小屋
小便に乘おくれたる渡し舟
姿鏡に倒鸞の身をひねり
銀遣ひ奇麗に京の上辷り
五分はうつちやる仲人の口
氣に入過て氣の詰る嫁
たうがらし中間部屋の窓の花
今趣して來て關守の眞似
口へ力身の屆くかけがね
跨いだら砥の割さうな兒
夜伽目出たく聟が究る
毒と知つゝ又見たい京
細工はじめに嫁の箸紙
腹のたつ場を水にして總仕舞
世の音は皆仕舞せて松の雪
深田のやうに歩行く蟲干
寐ぬ鯛を釣る中宿の妻
大晦日巨燵は人を寄せ付けず
嫁が這入ると見る目かぐはな
星合は又書始の心して

秋既にふとん敷かねばひえの山
團扇ではたゝきたい程たゝかれず
新地の客に壁を斷る
身はふり袖の口は前帶
座頭を泊る岩橋の蔓
先品川は江戸の居
見臺の隅に本屋の所附
愛想を奪ひ合ていふ呉服店
つかふべき金につかはれ老にけり
尼の身の蓮より先に眼が覺て
女房を若くおもふ元日
雪丸げ鞠ほど春へ殘りけり
家内を寐せて襟に似せ首
上り藤おもへば無理な紋所
わすれたやうに琵琶の相の手
わすれてもよい人はせぬとし忘
朝顔や女房に傘を開干され
手紙喰へる庵の空錠
五人目は巨燵の外にうきね鳥
しやがれた聲で迷ひ子の禮

勞咳の裏を流るゝ芥川
かぞへる鐘の邪魔をする鐘
死んで仕舞へと戸を明けぬ母
醫者も合點數食傷で濟
筋違で居る神樂の囃子方
水鷄の跡をたゝく廻狀
雨馬の間におろす扶持方
風にして八日延たる聟の灸
憂き戀をみつちやにしたる十二月
看經を待て居るわび言
及物のやうに盃さしを取る
名乘計で繪馬の大名
杣がちゝめてまはる松風
地黃丸女のほめる藥なり
皺面も關の掟の付わたり
百合ほどさがるあやまりの顏
婚禮の跡の祭りに初瀨山
辛子が利て一生のこゑ
遠慮するとなりも持たず小夜砧
尼寺のせめてしまりは男へし

耳も歯も浮世に遠き島戻り
子から腹立せて子から笑はせる
樹々よりは先へ染出す赤とんぼ
御取はづしのかしは餅來る
蓮に似て佛にうとく牡丹咲
坂ばかり見る夢のくたびれ
芳野は雪も咲やうに降る
鹽引の背へ女房の春の禮
惜む氣になれば牡丹も吝い花
乳母が問ふ迄はおもひに蓋をして
なぶつて寐かす夫婦顛躓
寐せぬつもりの子にをしむ乳
醫心の邪魔に成たるくすり喰
通辭の寐言やまと唐土
古郷に世話の殘るうぶ髪
娘の顔に極月はなし
くり返す三輪素麺も杉の箸
ふみて釣られる臺のはまぐり
何宗旨とも反の合ふ蓮
奥歯にもの丶十九二十五

頬を撫々借りて來る刷毛
消炭の味をわすれて聟選
白魚は水に目の有のみの事
數入にやつた其夜のきり／＼す
物おもひ唖をさる事遠からず
ぬか味噌汁に内のなり行き
一つがひづ丶つるむ鷄かき
雪のおくみを兩手にて持つ
百姓のこまつたやうにかしこまり
寐並んで居て田唄さらゆる
師走の陰をまはる正直
やうやく解た謎に大聲
千早振神の御前の嫁姑
から紙の形に倦たる肘まくら
入込の湯にうか／＼と僧
獺の藥に呵る小調市
扇子箱春の玄關の筒井筒
天人の膝に佛師のかり枕
富澤町に香にめでし巣
野のあしらひに女房を饗

秋更て獨口利くかし本屋
鷹狩の野にかたまらぬ竈
祝ひ日の氣を引立る酢の匂ひ
稻葉の雲をわけるほら貝
思案の腮を仕舞ふところ
洗ひ髪干せばしのぶの半程
立ざまに夫婦になれと突倒し
辛子のきゐたやうな了簡
將棊計りはゆるす伴頭
大根は坂本一の香のもの
大口も言人に依て奇麗也
辭世の口で粥に喰つく
十人並の男にはなし
石の降る夜は顔に眼がふる
銀河硯のうへにさがり蜘
追人は雲をつかむ相談
降出すと仕廻の付ぬ木曾の雪
冬籠鼻にめがねの跡が付
待乳も親の合點せぬ山
憎いといふ字舅から出る

蓮臺を下りて汗かく九十川
口を利く手代はねぶい小紋着て
聖の佛を日和から曇
掛人手持ぶさたな火吹竹
櫻鯛けふの廿日にかへり花
あしたに道を聞て鰒汁
關取の行水しても人だかり
日のたけほどに藤の物さし
若旦那いつか内證はかんこ鳥
一ト活いきる葉櫻の下
戀の道具に近い加賀紋
呉服屋は廓の内にも松一本
天窓もつゝむ髮置の馬
うたがひかゝる夜の雨替
三十は落着としのはじめ也
女房の癖を見出す掛人
肝心の所はそつと言傳けて
筆先へいふ根には骨がなし
花のもとにてはまぐりも死ぬ
十月の苞に十ある富貴の菜

逃る工夫も打あかす神
髭題目の上に乙鳥
女房の異見寐轉んできく
料理人旦那の口を磨すまし
女のろくにいはぬ客僧
寺は二月のやうな正月
春にしまりを付る帳じめ
おりはの踏に夫の顔見る
死だやりてを咄し出す雪
噂いふ中へのろりと掛人
大きな咳をかつぐ膏藥
欠乞の一分喰へて筆を出し
盗に逢ふて屏見て居る
擔屋は門を正直に出る
本店は小判のやうな香の物
看病替る醫者の見通し
定つて妾に四度の物着星
上客の顔中うごく生身魂
千枚の上の沙汰なし面の皮
琵琶のせて見れば淋しき膝頭

まん勝な顔を並べて大般若
姑にばかり新しい嫁
座頭不思議に本闘を取
鏑王樹買うて戻る位牌屋
家來の寺を後の中宿
一夜契た星もいたづら
草市の殘ると捨る物ばかり
寡せばくらす六月の鍛冶
繪のやうに風に吹るゝ墨衣
土弓場の馴染の釘に袈裟掛て
雛に日の目を見せるなでしこ
摺火打旅の旨みをわすれかね
古戰場蟲の轉の音ばかり
座頭の眼見ゆる發明
葛城の神かもしらず屏風山
つく〴〵と見れば淋しき牛の面
物の器用も病身のたね
怖さうに子の撫でて見る鴨の腹
歌骨牌乳母が無筆で靜也
刺鯖はひよくの外のくされ緣

なぶらるゝ八十八のとし忘
鏡の中に湯氣のたつ顔
薙刀も言葉になれば中直り
ちいさい伊達とおもふ爪紅
看病の夜寒に捜す臺所
翌へ殘らぬ除夜の腹立
鍋炭の腕恥しく臑見せて
池鯉鮒は仔細らしい町の名
惟光は請狀迄に呼出され
片々は律義に居る胸づくし
仕舞には顔張なくす傘屋
逆に着るなら裝ももとの草
不斷五兩で濟ます掛り人
白粉ほどな咥つきもなし
幮釣つてどうか我家も二間三間
親に土產のまめで來る顔
牡丹に聲の高い口上
鼻をば捨ててかへる古鄉
牡丹の開の二十一日
餘所の嫁入を縫かけて見せ

盗まれた夜の闇い寐所
飛神に飛ばぬ佛も群集して
能いやうでわるい師走の二つまで
針だこをきたながる手の奇麗也
無沙汰した門を經師の刷毛序
水あたりとは京の名聞
十日とは乾ぬ園はれの藥鍋
着る事もならぬ蠶に骨を折
瓜ひとつもぎれば夜の蠅の聲
むかふから問賴まるゝ伏見町
一生やりて剃る心なし
開山の杖に芽の出る春の雨
元日は全く死なぬ心なり
一生の馬鹿を網戸に締直し
貴船の道を餘所らしく聞く
分別が出來て我身の置所
無理と無理脊中合せに夜が明けて
追人の氣轉表德で呼ぶ
金杉も箕輪も毒の部に入て
鬼灯の鳴る唇の皆薄し

大屋に書て貰ふ離別狀
二十五からは竹になる年
春程に秋を覺る鳴子引
無筆さへ讀む天智天皇
脊中にあまる帶の化もの
夕顔の實は蔓に似ず花に似ず
鳥臺を脊中に付た釜はらひ
けんくわの跡へ水賣が來る
踊の音頭聲にくたびれ
願の峯息の長いも道具也
眼で人つかふ旅籠屋の妻
諸人の印肉乾く春の風
戒名も宛字交りの奉加帳
無いものゝ鼻につかへる眞の闇
拳で人を呵る立聞
寺中なまめく曠な霜月
乞食から身に入風の吹はじめ
村中の智惠を集る旱魃年
元日は持て居た程用がなし
亭の給仕の臑に袖笠

井戸端の評判ものに若旦那
女衒お宿に親しらず追ふ
屋賣大事に跡をふりかえり
廿四孝は人の難かた
似合うたといふは淋しき墨衣
宿出る日は重箱も出る日也
世の人の謗もいはゞ佛より
顔かたち座頭の妻の片便宜
女郎て貰ふやうな八重歯
歯のぬけたやうに出て行雪の船
夫の留守化顔を見に行
かはつた顔を曝る若後家
吉原も地獄のやうな十二月
遠くでいぢる親里の神
面白い物は他人の心なり
我春を二本は殘す小松買
娘に付た蟲を怖がる
泣く子を抱いてうごく唇
梅にむかつて歯を鳴らす妻
人に極めをさせる我像

疊んで見ればどんな不斷着
垣越に鍋を借合ふ組屋敷
棟上の上座して居る甚五郎
入院の日佛の道はなかりけり
いはぬりんきを大針に縫ふ
樹木に道を普し飛神
呉服屋傘で高安の里
宿頭の畷道の眞中
小判に成て牡丹餅の種
ゆすられた氣で留守の掛人
菊合根分の頃の風がふき
欠して胸算用を消しておく
上手といへど曲もなき琵琶
娘子の行儀名の高い母
すびく蝶にほや〳〵の雪
念佛でもろく弔ふ小室焼
貴樣は鐡の伸びたる下大様
若衆は女房の知た業也
江戸見物の鮓に寐て居る
髮梳き上げてあまくだる下女

櫻草子が寐て見ればわすれ草
生醉を俵のやうに取廻し
見せに出る日は顔も水物
邯鄲の夢の短い妻の留守
生醉は疊にだやうにかしこまり
夜にやお稲荷に成て掛人
雪の國から縮屋が來る
人こそしらね口論に大名
煤掃に汚れた男譽られて
松島に醉て貧好を譽
大事してあれた頭[illegible]の山
何方も減らす[illegible]
ま[illegible]れて喧の口利く梓弓
未黄斷後日といふ色でなし
初鰹からおろす狙いた
百の旦那も天照らす神
千疊敷に瞽女のすり足
進物のとされ〳〵をかじか嘴く
油手を洗ふ女の襟をすゝ
江戸詰と諦らめて居るきり〳〵す

氣の毒と言つゝ直ぎる拂物
座頭に鰭を付る光次
蓋をしてをく夏の不忍
濟みかねる口舌にたまる上草履
うき世へ耳の遠い名人
たま／＼の留守の仕事に日が足らず
うたゝ寐の腰より下は女なり
多田も秋葉も船の息繼
箭矢持たせて母の突袖
才藏の上手で奥も春の山
蛾ひとつ貞女に帶を解かせけり
什物帳の外にばけもの
女房に喧つく櫻咲にけり
然ばと書いて肴の數を聞
初物を耳に喰はせる病上り
さそふ水來て乳母と呟く
口上をわすれて戻る茗荷谷
博奕始める馬の看病
かき立る灯に分別もかき立て
胸の火に一矢射て見るもみ大根

豐年にしても案山子は立の儘
歯が能いと譽れば耳を無念がり
忘れたやうな寺の元日
世の秋に似る宇治の三月
うしろへ捨るこねどりの咳
唇なめて戻る代脈
岩橋の道を大工のたゝき付
天のあたへの綻を縫ふ
水茶屋の階にたまる古わらぢ
言名付どつち付ずの辭宜をして
連をはづして毒の試
腹のたつ日を寐て仕舞ふ雨
人ならば寐よげな所に眞桑瓜・
馳走に叱りちらす女房
喰せて見れば小結でなし
闇の夜をつかひ覺えて咳拂
隣から隣しらずの聟が來て
桃賣の來る頃雛の土用干
大きく成つてさえる悶雨
銀河夜明て狂ふ夫婦中

夫を尻に敷しまの道
大判は關取ほどの取廻し
廿五の曉近く丈くらべ
白魚の火を入て行く火繩箱
大佛は本の噺の噂らしき
妹より姉の白歯も逆の峯
夕涼浴衣の外に姿なし
なぶられながら三火居る顏
靈籠よりねぶる毛をかき立て
歸たゝき書の身過も雪の竹
つかひたくなる入相のかね
新し顏皆い香あり
吉原へ岡持迪ふ隱居寺
紅閨に氷のやうな按摩取
あたら櫻のぬしは乞食
飯粒で御機嫌直る御跡取
母の眼の娘の乳の恩返し
百年忌佛のしらぬ顏計り
木綿着るとは見えぬ伯良
心およばぬ武具の綻

元服の一剃づゝに母の口
才蔵は江戸に馴たる口を利
物着星出來た當座の果報やけ
嘘をしても怖い庚申
是切とおもへば淋し九十の賀
のるか反かに浪人の戀
あばたがあれば顔もからくり
借ても金は面白いやつ
昔より異見は苦いものゝ歟
惜さうに來る遺言の扶持
仕合よしの馬で去れ女
出替の何にか一つ突あたり
初物の内で淋しき蕃椒
反かえる時突袖が道具也
醫に苦み付る本妻
空耳は少し計の意恨なり
旨い所の本も柏木
缺やすき下駄もおもへば桐一葉
凉しさの枕は北と氣も付ず
次第に痩る旅のふところ

遲國の頭巾を取れば大たぶさ
傾城の根性持し置炬燵
蟲干の側にぶたれたやうに寐る
撿校も心おぼえの赤蛙
座頭のひづむ雪の傘
なぶり仕舞にかき立て、行
女房をいんぎんにいふ能のシテ
人の尾を狐の笑ふ大晦日
呵られる事にしてをく店おろし
瓜の花是も少しは咥をつき
忘れた用の小指から出る
立た姿の鰭にふり袖
家内に尖が有て元服
浪人の新しくなる彌生來て
八十七は手をあてるとし
僧正の奇麗にしなび給ひけり
たんすへ消える八朔の雪
仲人の舌はぬかるゝ覺悟也
靜にするが急用の勝
鼻の先妾の智恵の置所

元利揃へて高い物申
目と腮に釣合のある聟同士
帶三筋中で一筋むづかしき
嫌なものに居る元日

東岳森山二十點

だまさねば忍ぶ襖も合點せず
みんなまじめになると引導
灸嫌紺屋のやうに咥をつき
大腹立と見えるいんぎん
翌日になるとつまらぬ年忘
たまのあり家を口ばしる醫者
婚禮は六字七字にもめて居る
和尚の畜果は傘
足を洗て開けば買水
うつくしく出て歩行く腹立
百姓の氣を呑んで居る鶴
十九やはたちは二度慾はなし
貞女もつまる所が厄介
返事ひらくも毒のこゝろみ
唐の美男の拂子ほど髭

分別のふたつにわれる水鏡
喰摘の中に淋しき神馬藻
ふりさけ見れば品川へ猪牙
千疊敷のうなる十念
菜も豆にのがれぬ中獻納豆汁
活た枕の透通る顔
分といふ字が蓋をしていはで山
仕付を口に四月朔日
田を見て戻る年禮の果
乳を尋る智惠の始り
惚れて報る看病の恩
子に計りいつをかぎりの秋の蠅
起て出る嫁の姿の大事也
見るより早い贅女の告口
夜が明て我身にもどる閏雨
出る度に小言の交る藥鍋
死で見たいと一生の啌
空を四角に見せるうら店
出替の跡を濁さぬ水一荷
白雨に扇喰へて身ごしらへ

船の都に遠い入相
かきたてる灯にかきたてる智惠
佛の出端もむらさきの雲
遊びにもめる正月の智惠
遠くから貰ふ近所の菓子袋
琴爪三つ鬼こもる町
入聟の出ると降出すこぬか雨
音頭の寐言口笛をふく
羽たゝく音を鷄の捨がね
遠い思案を掛けてをく熨斗
寺の冬生姜茄子にこねかへし
まくるといふは起す奥の手
鈴鹿の雨を深川で射る
離別荷の通る惜しい吉日
口は妹が先へ生れる
おもへば此鐘うらめしの六つ
二百十日に尖がる傘
泣く事に惜しき日つかふ涅槃像
箸に好みの出來る本復
世界に背の出來る節季候

田樂の串で教るはやり神
棚の角年中腹を立せけり
かり着して笑はれて居る泊客
眞實に見舞ふではなし狐つき
三杵ほど邪魔をして行く藥取
煮藥より苦い作頭
淋しさは節句にあたる佛達
田守が竈に七夕の竹
いぼ結を男にたのむ天の川
蠅の目ももらぬ噺の面白き
隈取やうにうたゝ寐を掃く
やりてが爪を笑ふ七種
閏二月は馬鹿な奉公
呪ふ時に痒い手のひら
約束の雨と日和を加賀土産
膝でさへ十萬石は取にくし
聞鐘も皆先住の夢
高い敷居を嗅して越す
鰹賣り生れも付ぬ不人相
梶の葉も今四五日で市の草

一所に汐干戻の足袋脱いで
有ばあるとて只も居ぬ閏月
白足ほど百萬べんの手がうごき
蟲賣の荷に呼ぶ聲はなし
今つみし山の淋しき大がらん
離別狀讀で內へ突く息
支度に十日かゝる二日路
はつに夫の呼びやうがなし
乘籠もみがく新宅の慾
さえた傑をよし町で聞く
妾のりんき手むかひの內
鷹野の供の帶に飯粒
小粒四つは氣にもかゝらず
男冥利の杉に人立
鷹から鳶へ送 扶持方
仕かた咄を飛び退いて聞
不二と筑波の道法を賭
座頭の思案仰向て出る
咥までつかひ捨て勘當
歌合せにも美しい意地

長い枕を切詰る後家
晴ると夢に成し相傘
どつかりと四條の秋に穴が明き
分別を借せといはれて眼をふさぎ
あの世から此世をねらふ奉加帳
年始の縫うて歩行く一町
問はれて見れば見殘した京
心中の檢使も聲る芥子の花
寒い形に出來るこんにやく
唇の尖るもみんな夜の事
燈明消しにしなふ手が來る
紅毛の眼の覺やすき鐘の聲
結納の昆布計りやる伯父坊主
冬の跡なき侍の腹
蚊遣の跡へ居る姑女
六十の賀に見しらせる蛸
しまり過たる腹立の帶
座頭の連の片衍になる
牛飼の氣の短いも面白し
淋しさの伽にして居る硯箱

留守居を入れて留守更になし
貰はれた程穴の明く蓮の池
瘧ふるひの旭まで飮む
みかん籠から這て出た紫衣
一聲は啼れぬものか雉子の聲
藥鍋にて夜遊びを追ふ
居ると仕舞ふ嫁の看經
翌へ殘らぬ除夜の腹立
呵られる度に案山子にたとへられ
衣着ながら湯屋を出る所化
去狀も口もいふなら三尋半
歌がるた人といふ字に手を重ね
靜にたゝく戸に德はなし
他生の緣の苦い丸藥
檀林に居ると死ぬを松の風
產籠の中で夫をこきつかひ
大根もまだゆるされず天の河
生て出る夜は北へ行く無常門
大晦首でも拔いて來る氣なり
はじめの異見身を入て聞

曉で寒る六月の亭
先住の作りし罪は松ばかり
氣根くらべのつもる錦木
北に當て毒の玉川
腮へ額のまはる光陰
鉦を持薬に後家の看經
若衆の起請一世にて濟
其中にわけて正月矢のごとし
無間のかねも相場極まる
氷の取て投る鬮取
屛風一重にわかる主從
瞽女も眼明きも五分々々の闇
男にわるい京の水際
衣に罪の多い撿校
唄の仕舞にひとつ音がある
業平のまかす使は馬の首
半分つかふ元日の空
居風呂も嬉しい跡といやな跡
遠くへ退(のい)て居るもからくり
太神樂前足計り拍子利
短い文に長いはらだち
衣がへ四月にもどる桐一葉
隣へはねのかゝる腹立
物おもひ片手は帶に喰(くは)へさせ
指先を奇麗につかふ紙細工
異見のとぎれはふり出す金
羽織に反(そり)を打ちし突袖
水子をこぼれさうに抱く夫
目に毒斷の呉服屋が來る
盃ばかりさせてをく罪
若衆に利かぬ鴛のくり言
六人寄ると智惠に罔兩
繼上下で御相手の釣
武運つたなき(文字不明)七りんのあみ
だいなし浴る鮟鱇の怪我
浪打際のやうな極月
姑女に辛子かけとは言にくし
棒ほどに針醫の手柄觸れ歩行
谷中の松魚よく／＼な空
常よりは師走淋しき馬喰町
角力が母の十分一喰ふ
呪(まじなひ)ほどにつかふ甘草
晦日々々に草臥る金

西岳華山

是悲に五兩と旦那寺來る
山伏の一綑(かふ)づゝ稻葉雲
蝶鳥の中を出て來る初奉公
どれが上手歟しれぬ大津繪
旅とおもはず飛脚出て行
取しめて拜み人はなし大佛
炭あけて二足三足飛びしざり
座頭の杖の眼ほど働らく
小判は口の蓋になる形，
おそろしき夢を美濃から起されて
鯛も赤子も日本の色
巨燵ほど咄のしみぬ凉臺
障子も顏も穴の明く聟
ゆく／＼は勘當くさき器用者
五十日吉原を見る墓まゐり
夏は東へ片荷づる京

能い相談に闇の夜の棒
女房に成つてしみわたる秋
冬を隣に疝氣めを出す
人を呵つて跡の手まくら
座頭の工風置所なし
梅干に成て家内の毒を消し
年忘あるものならば茗荷の子
女がなくて廣い新宅
夜わたる川にしておく芥川
又ならぬ京と一日二日過ぎ
鏡の科のやうにいふ顔
田植の中に違といふ顔
繪に手の出る春の居旅人
面白さうなから紙の穴
欠の尻をむすぶ念佛
平相國の臀席大きし
衣々の大門までは三輪の神
出家の恥の人參を呑む

南岳衡山

瀧ほどに水をあつかふ洗ひ鯉
立膝にする脈のつり合
今は祭の車あらそひ
理非が分つてとぼす挑灯
聟を引出す媒の雪隠
祭の神に乘うつる人
饅頭を喰て律義に見せる也

北岳恆山

芍藥伐て泣る身替り
箸をとらせて異見始る
つくづく我に倦る膏藥
桶伏もかねに恨の道成寺

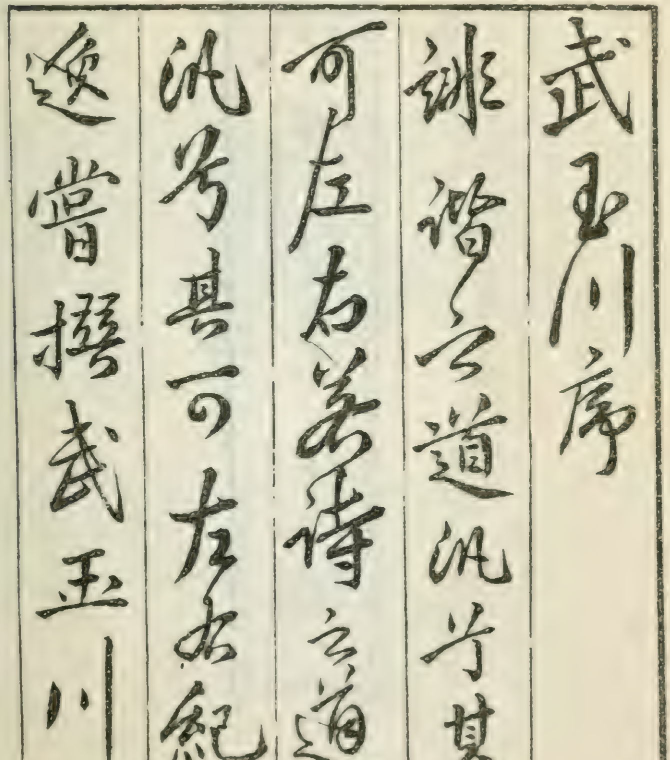
中岳嵩山

目出たい事につかふ遺言
唐人におそれ入せる八重ざくら

俳諧武玉川十七編 終

武玉川　十八編

俳諧武玉川
十八編序
（燕都枝折 八編）
誹諧之道汎
兮其可左右、
若詩之道汎
兮其可左右、
紀逸嘗撰武


武玉川序
誹諧之道汎兮其
可左右若詩之道
汎兮其可左右紀
逸嘗撰武玉川

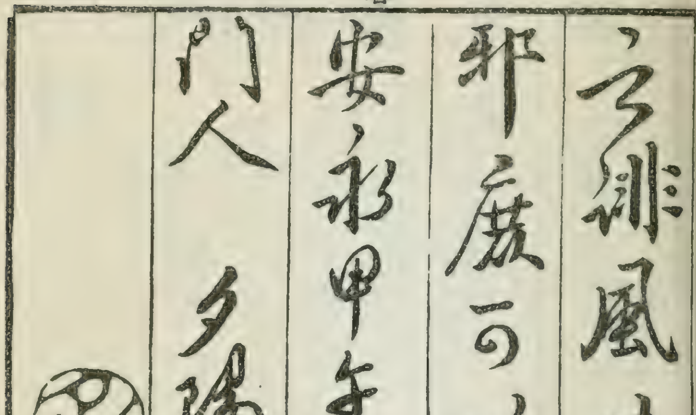
玉川、燕都
枝折、毎與
二三子談誹
諧、乃謂一
家之流風焉、
彌六合、言之
者寓意匠於

燕都枝折毎與、
二三子談誹乃
謂一家之流風焉
彌六合言之者寓
意匠於妙用閑

妙用、聞之
者合心契於
象外必也、
繼紀逸逢其
遺風、然後
永武玉之篇、
既成十有八
編矣、則一

之者合心契於象
外必也繼紀逸逢
其遺風然後永
武玉之篇既成十
有八編矣則一家

家之誹風其
不可傳邪、
庶可以傳焉
安永甲午孟春
門人
夕陽亭
紀水識



點譜

烏乎 五、

杜鵑雨 七、

月中河鴻 十、

雲片穴孔鷺 十五、

筑嶽層雲　廿、

富峯積雪　廿五、

羣玉青靄　三十、

蓬莱五雲　四十、

巫山雲雨　五十、

雪片大如鶯

ある夜豆腐をねだる桶伏
唐土船に似たる織殿
胡葱に尻のすわらぬかけむかひ
鯷裂く妻はうみ苧の指づかひ
京町の裏から蝶のしこなして
山門にのぼればかゆき足のうら
春の日の縫上をするひがし山
洗ひ髮干す所へ仲人
兩方へ醉ふ追分の酒
侍てふく山王の湯屋
重年と聞て內儀の火焚鳥
日高の瞽女の何か聞出す
ふしぎにやりて中日に死に
毒斷のまづ親指にうしろ帶
洗うても繪踏の足の氣にかゝり
餅喰て見せては母に安堵させ

姑女のおどけは深き飛鳥川
今やわかれの酒に火が入る
螢逃して手の内は闇
口車しはすの坂を越かねて
奢つくして薬鍋もる
御妾のあたる炬燵に封が付
煮賣屋の精進するもあはれ也
けふは無事翌は大事に神詣
人間をさかさに見せる田植笠
一大事神にねがうて泣寐入
胡葱にいとまとる根を聞ほして
秤にかゝる馬鹿と結構
抱人がよさに子の口を吸ふ
奢氣をいつか旅寐に置わすれ
持參金娘の顔にきれがあり
傾城は女の中の餐もの
惚た方から横にさす傘
我囘雨をなめる御異見
唐替た後は筋違ふ天の川
木辻の下駄も紅葉ふみ分

稲葉雲喫つきに行く道が殖へ
塵も付ずにものいふの喫
をとこの色と見えぬむらさき
爪先に貧乏者の物着星
梅若忌律義に傘をかつぎ詰
墨壺の中より出る大伽藍
平家の意地の横に這ふ蟹
胡葱にことしも解ぬ帯締て
かゝり人かさゝぎの夜に踏はづし
正直になる上下の顔
小笹に高き鷹匠の肘
別莊の耳につめたき車井戸
嫁の尻干兩ほどの重みにて
穴藏の階子を引てあやまらせ
金銀の奢はじめは産着より
蕎麥の客働てから座に直り
つかつた金が女房になる
ひとつ家におぼつかなくも猿轡
人形と三人口の傀儡師
奇妙に米の減らぬ大寺

かはつた事の好な聖天
持あそびどれも毛がぬけ鼻がかけ
井筒より巨燵の智恵の手短し
約束の曉消る物着星
頼まれた言傳に尾が付て來る
薬の利も牡丹散る頃
楊弓をおかしや鼻が手傳ふて
四阿は鬼門も向もいらぬ也
分別は恥しからぬ木綿もの
襟からそつと秋の綻び
節季候が來ると蘿蔔に年が寄
せつかく春が來ても棺屋
雁の聲聞と茄子も口をあき
唐はいかにと儒者の御睨ひ
立習ふ子に逗留ふ言名付
腹のたつ時履替る上草履
歸には箸まで焚て雪見船
袖を大事におもふ狩衣
惚あふ中に川が二筋
四谷の瞽女の馬をしこなす

あそびに髮をいぢる圍はれ
商賣じみた辛崎の雨
事はじめ着替るほどの日でもなし
山伏の刀りゝしき春の空
河豚喰ふた夜に蝶の夢見る
遊ぶにも奥齒にものゝ言名付
うち身のおこる春雨の陣
膝のしまりのわるい立聞
隣からねだり出たる春の雨
取揚婆々の何か落着
堺の出刃に鐵砲の銘
京談を交ぜて喧嘩を和らがせ
取ちらす座敷の内もうつの山
みどり子の名で悋氣封じる
齒の呪に尖る小刀
兼言の芝居の跡も芝居也
筆にも罪の深いけいせい
大伽藍蚤寐涼しき風を請
言切て歸る揚屋をふり返り
胡葱喰うて直に前帶

ぶつ／＼といへば小言も法の内
分別のつまり／＼に咳ばらひ
女房のひとり見て居る物着星
清水の飛ぶ傘に散る櫻
呼井戸の濁績て桐の花
乘物で寐て身にならぬ醫者
榊ばかりは町の下闇
帷幕の内に入聟の智恵
親船は女房のないばかりなり
神代の智恵も出る釣針
伊香保へたつも不和のはじまり
木がらし寒くふくれたつ鷹
墨染のをかしくおもふ物着星
水のごとくに草はしる蛇
入口で要のはしる梶が宿
是を着たかと蟲干の襟
繪に畫て見せて教る所附
總身の塵のたえぬ綿つみ
包で仕廻ふ金に言傳
言葉に角の生ゑる極月

ほの／＼と明石ちゞみの小傾城
名所の袖にあたる松しま
つまる所酒屋が爲の櫻咲
辛子あへ旦那の機嫌こち直し
金で濟むとは安い生靈
皆よし原へつかふ祝ひ日
遠く遊ばず内は騷動
世の中を秋で置きたき物好み
きり／＼す年明前をいやがらせ
櫻の科と庵の置去り
冷やりと禿の足に秋の來て
をとこたくなの戀の黑燒
びつくりさせて仕舞ふまじなひ
遣ふ子が立つと座頭手を出す
人しらぬ丁子頭も高燈籠
翌しらぬ兵どもの大ばくち
卯腹辰股とらまへてする
つく／＼鷹を荷ふ雲助
鳥なき里に御夢想の灸
遠くの針を見出す勞咳

手元へも見えるりんきの絲車
言名付藏へ仕舞はぬ計り也
岡雨を擧て座頭に旨がらせ
丸腰で出しも命の親となり
狐火の折々野路を綻ばし
踊子の仇名を聞て興がさめ
妹が口も身中の蟲
胸に日和のしれる鐘つき
移香に氣をつかふ斷物
干からびて居るけいせいの墓
大きな損は鳩と化す鷹
禿も寄れば一騎當千
けつく名高き井戸は捨物
三人寄て三歩減る智惠
取かざる肴の義理も笹の露
四條にもまけぬ三井が夕まぐれ
鶴の舞ふ日に賣きれる放し龜
やぶれた戸にも言譯の錠
町のひまゆく駒形の猪牙
千箇寺さして母の通し矢

眼に付たほど鼻につく顔
獸みせにすわる大兵
提帶にいとゞ局の憎い尻
目出たく反を打ちし束帶
強くたゝくがわに口の慾
寒念佛通ひ詰たる廿九夜
むつまじき中とは見えぬ仁王門
娘の願ひ公家を見たがる
料簡の出所にをく置巨燵
夏の帶行水からが生返り
飯を煮て居る木曾の看病
產所の夫いふなりになる
釣たれて小さき罪をつくりけり
はな紙をめつたにつかふ物忌ひ
世を半分に暮す聾
かゆい所へ手の屆く金
うつくしく舌ほど凄い物はなし
孝行にいつ見た儘の鏡山
鏡にふたをすると夕顔
腹立の跡に殘らぬ歌がるた

二度崩さねば丸い大判
賣切て跡の淋しき階子賣
二人にならぬ内は主從
櫻が唉て行ぬける寺
總檜林のうごく一葉
刈迄は波といはれし炭俵
ひよくの鳥の籠に釣るかや
藥ほりくすりは持たぬ男也
鳥の番一日顔をふくらして
心中の身の狐火をこはがりて
よに憎まれの横にさす傘
落した借馬歸り淋しき
並んだ膝のうごく吸もの
かきけすやうに蕎麥二三ばい
分別の四十に遠き三十九
世はいづれ油くさゝの狐罠
憎まれもの丶目へぬける智惠
脊まで伸たと思ふ居風呂
水無月を淺くながるゝ天の河
ものさしにしても鯨の目の細き

白鷺の田を汚ながるあしづかひ
相談はもとへ戻りて雛の聲
蛾のひく物を見て居るもの思ひ
佛間の鼠母をあなどる
大法會頓寫の施主のゐづくまり
咥つく樣に葛きりをのむ
馬上に座頭氣の晴れたかほ
笈の佛の反りかへる時儀
杖も氣を補へばこそ藥種みせ
をとこのやうに居るはらだち
牙婆見たがる燈籠と猪牙
じからるゝ所迄行く京の寺
羽二重になると蠶のおとなしさ
若衆の袖のどこか淋しき
能く賣れば賣ほど淋し切繼
二度出ると最ぅ見知らるる黃八丈
前わたり奇麗過たるはんじ物
馬の齒に辛き命のきり〳〵す
我皺はしらでおどろく人の皺
くやみいふ形りは小さき出入醫者

不機嫌の朝は家内が眼を廻し
抱つくと云ふは叶はぬ時のこと
座頭の坊何ぞと云ふと言葉質
前帶になれば女房に反がつき
夜晰の亦うしろから二つ玉
覺悟して踊の尻のあざだらけ
日和に合羽きるもからくり
宰領のしびれをきらす米俵
敷居の高い元服のかほ
今引く風の跡にあくたい
傘へ投る二かいのいとまごひ
せめられて來る見せ馬も義理
目印に座頭を殘す汐干舟
光いんの早くも下駄の踏勝手
つまむほどなる關取の袖
鼻が落ても萬物の靈
作り樹の形に浴衣の干上りて
鐘もおもへば一日の坂
戀の礫にかるいかみ屑
歌がるた不二の高根を手で押へ

火打箱女房の留主の道具也
小さくなつて庵に大名
つく〳〵と思へば强き足のうら
ひやりと居る四月朔日
亦かさねてと縮師の逃口
後家になると上戸に成が一度にて
嫁のかほ生れて二度の人見知
江戸の水道は水のからくり
巨燵の籥のはねる火が來る
氏神に男仕上て願ほどき
悄いとはいはれやうにて面白し
戸へたてつける下女の腹立
かならず僧に武士のかた意地
きれいに舌を遣ふ身揚り
轉寐の夢には長し五十年
異見狀ちびり〳〵と金も來て
懸乞に聾の留守居面白し
目見えする妾は律義にかしこまり
とし忘れわすれしだけに穴が明き
子の行水の跡に捨ふね

沙汰なしに骨迄濡るこぬか雨
伴頭は飛鳥の場所を櫻草
世に捨られの多き墨ぞめ
腰からしもの凄い罔兩
終に見落す母の素一分
正直につく撿校のつゑ
新造も口の劔の齒をそめて
ほれやうにことのかけたる道成寺
淸水は其後蝶の飛ばかり
文殊の智惠に廿一癖
きり〳〵す跡一聲のりちぎ也
はつ〳〵の夏を彩る御祓川
四も五もくはぬ葛城の神
和睦のはしに遣て見る瞽女
直な人を汚す供錢
牡丹餅になつても母の人づかひ
兩性の妾も作の面ほど
春の氣ざしの本ぶくの門
注文どほりからさきの雨
朝起を合點して來る奈良の聟

淋しさの頬撫でてゐるはね箒
鳥に念佛も母の庖丁
裏屋たふとく玉の輿出る
箒の先をふさぐ勞咳
とても濁るを飲まば玉川
僧正に鏡を見せる染が出來
太つても瘠せても聟はなぶられて
さま〴〵に音をなく中の屁ひり蟲
あつぱれ傾城星の歌よむ
仲惡い同士のたがひに雉子の聲
分別も有さうな尺八
九十九は嘘を冬瓜の咲て見せ
尻餅ついてにげる笛
狐が落て横柄な顏
忍ぶ拍子に直る臆病
空耳はせめていはれぬ意趣返し
押詰し空に根のなき松の風
片眼ふさいで的を射る醫者
はさみ將棊に眼の動く瞽女
御短慮のお袖にすがる美しさ

代脈はまだ尺八の指づかひ
仲直り忘れたやうな笑ひ顏
一むれのしまりに尼の衣きて
頭痛かゝへて碁の側に妻
疊の上へ世をすてる蚤
二人が闇を八卦あかるさ
さしむかひには凄き木像
座頭とらへて口をわる酒
四月八日にどんな葬禮
狐つき病の中のはづみもの
ちどりにも鹿にもうとき瓦屋根
裘のこゝろで振ふ雪の蓑
めくらの居所さはまつてゐる
淸水の晴たる傘に人の口
日本の錠とおもふ御關所
根つけを持て眼をかりに來る
大伽藍相撲小さく手を合はせ
飼猿にはるかおとりし知行者
浪人の心ゆかしに名をかへて
後架神祈るにしても紙燭だけ

雛より若き二代目のつま
横柄に賣る寺の妙藥
乗捨た鞍に鳥居の朝日影
豆腐をすくと云ふも述懐
藪入の來る迄餅は鐵漿くさし
三度所をかへる分別
言名付桐は木挽が手にかゝり
眞直に出る總領の智慧
天窓の浪を打し十念
撿校の妻は目も利き口もきき
蚊を焼てさへ殺生は面白き
女房の髪も世帶の縮どころ
くさめも人の秋をしる音
いくつにも流れ茶に合ふ水の味
惜まれてそめる白齒も罪の内
筋違ふて淋し木母寺弘福寺
折鶴をふく時あたら顔替り
舞臺を飛べと御誓の無理
先づ締てゐる帯はそら錠
鑰迄髭のやうなる九十の賀

圍爐裏から飛ぶ栗も活もの
遺言に妻も思へば枇杷の花
小姑二人見るめかぐはな
事ぶれが來て女房をこはがらせ
槍先の昔を今にちどり啼
胡葱に當こすり程酢が利て
石の降夜は面白き從弟中
四角に醉て歩行く年禮
取締もなく駈け歩行く長つぼね
見所に指折なくす京の春
鮟鱇の骨法師殘る春の茶屋
二十四孝のほかに堪忍
腰もとの口上ひねる指の先
百萬へんの游ぐ唇
賄分の戻り傾城をかふ
剃た日のまだ枕には氣も付ず
無理も半分たまる聖天
言伏せて見れば女房も面白き
子を孕むなと笑ふ旅立
像になつても白眼む師の坊

船着の折々狂ふ錢相場
梓弓仕舞の付かぬうらみ也
かり筆は根も怖く言にくし
大事なりけり九十九の人
渡しの船の人肌に乘る
ぶつ／＼と本の女房の十二月
くさめ三つ四つ野の宮を出る
一聲の雉子の嵐に芥子坊主
をとこへし歌さへなくて猶淋し
植ゑた櫻に入相はなし
玉川は世にかはる若水
御夢想の覺束なくもひとつ灸
憎まれ座頭食傷もせず
悋氣の駒矢かり筆で來る
節句前ひらかぬ菊の不筈もの
黄金やぶる撿校の夢
疱瘡顔に年の寄べき所なし
二度に出す暇に家の美しき
琴の絃きれて一二羽歸る雁
夢になくなる傾城の錢

鴨の毛の能く鎮りて雪となり
しかられて枕へ戻る病あがり
臺頭が舌の荒れる晝顏
罪になるとはしらぬ寐すがた
姑女の氣に入さうな秋の空
芝居振舞ふ戀の罪人
惟光の場へ遣ふ光次
女房と銅壺ひかりかゞやく
寐そびれし枕を肘に取かへて
屋根から落て賑かにしぬ
仲直り二人に二人きの字形
曉をおぼえる寺の懸人
橋大工落すもの皆暇ごひ
白歯も見せぬ極月に梅笑ふ
轉寐に夢の浮橋取ちらし
目出度さをざつとして置く小豆飯
小田原町は氣散じなまち
氷室ふさぐに閏六月
汲鮎の側に寐て居る杉丸太
淋しさは苧をうむ妻の無口にて

つく／＼と戀には疎きくだ襦袢
鼠のかじるほどは彈く妻
出替りの跡に何をか申ぶん
急度戻ればいたい傘
二日來ぬ大工の箱に蝸牛
妾も眉毛とれば星入
切底に鹽ものゝ來る歳の暮
關守の眼を入れかへる膝がはり
畜生足の果も膏藥
其中に正五九月は年の骨
蜩の身をも晝をも啼ちゞめ
他人に成て眞中の智惠
義理といふ字は鐵を喰ふ文字
六條の車も戀の重荷なり
傾城の泣ほどづゝに屋根がもり
指九本もとの身にして恥しさ
戀ぐさや續く夜伽に根が殘り
われさうな中へ異見の箍をかけ
小言のたしに付かぬる鐵漿
木に竹のたましひ入れてかしがたな

思ひ草根を掘る乳母をうるさがり
跡から來ても老の分別
卯の花に妻の異見の釘が利き
出女のつい取逃す丸合羽
裏屋にあまる不二山の夢
朝顏のしぼみはぐれし雨蛙
靜さは鑓の響くまくら紙
垣間見のかこつけぐさに茗荷の子
痲疹には神さへなくてむづかしき
通辭夫婦のやまともろこし
分別に手をつけぬきぬ／＼
鼻から先へ聟の評判
瓢簞の心でくらす掛人
物にかゝりの石塔に歌
頰杖は足らぬ思案の引くゝり
痒い所を跨ぐ空錠
川竹の身も方圓の器もの
行逢て哄にねぢれる言名付
御壺着く日を宇治の元日
両方へ蚊を入れるあつかひ

長閑さは留守の書齋に賴まれて
分別を極た戀の彌生來て
鶉は腹をたつやうに啼
むづかしき川にしてをく天の川
恥から先へ噺す相談
律義にて男の能いは費也
ものいふの飯喰ふまでも矢繼早
腹から他人さられ來て產む
呵られし禮に辛子の小氣味よし
わび言も秋海棠のすがたなり
堪忍の相場の外を旦那寺
あさつてと鶺鴒がへしの水淺黃

筑嶽層雲二十點

雷にまけぬ氣で啼く蟬の聲
去狀を書て瘡を落しけり
手代へ落る聟の入札
眉毛ぬらして歸る見送り
空に一聲佛生る
手に當る物を大工の枕して
吉次が下りて湯氣のたつ馬

逆井しんと船に鷹匠
ゆり起す風さへなくて合歡の花
手代の化の皮をあづかる
投入の手を怖そうに引
枕から出る智惠の湧きもの
風の直段をわける扇屋
罔兩は水ものながら惚れやすき
一生の眼を遣ふ松しま
暦を出してたけのこを買
挽臼藝の足らぬ勘定
人は切らずに讓る正宗
禿に惚れて戾る女房
奈良漬喰て笑ふ船頭
餅屋にしては投げぬ棟あげ
あかるい思案くらやみを出る
按摩の稽古一間ふさがる
灸の覺悟も子心の勇
藥休んで祇園淸水
蟬折の主は淋しく蚊に喰れ
命びろひの人に人立

物好の外に奇麗な疊がへ
端折て戾る旅の綻び
猪牙の戾りに木母寺の僧
三日めで戾る袂に馬の糞
子を抱て居るも姿の餘情也
素顏と共に化粧の出來上り
書けばひとひろほどの傳言
欠の影の切れさうな口
庖丁で松魚節かく新世帶
來る秋に弓師つれだつ八幡山
一家うごく風のとぼし火
孫を突出す親のはら立
輕い恨の耳たぶを引
貸手形肴にはさむ九十の賀
肘をまくらに寐入る堪忍
作り付けたる持髮の襟
去り狀の中にも紙魚の子が殖て
姑女に辛子かけとは言にくし
棒ほどに針醫の手から離れ步行き
出替りに兼ての睟の逃げ廻り

鷹匠の氣も紫に經上りて
谷中の松魚よく〱な空
口留に知つた噺しの歯がゆくて
常よりは師走淋しき馬喰町
角力が母の十分一喰ふ
咒ほどにつかふ甘草
蟋蟀たゝんで仕舞ふ肴籠
工夫の胸に掌の盃
遣手が慾の佐渡を閑干す
碁に見惚の移る入王
白魚の眼も加賀骨の縮りほど
草履取猪牙に始てかしこまり
よく〱無藝猪牙の念佛
寺のうしろに物たらぬ町
團子の盆を丁寧にもる
しれ兼る字に筆をくはへる
夜が更て遣へば舌もきり〱す
翌やなど秋とは見えぬ御祓川
傾城の冬瓜の花に咲あたり
側であぶなき傾城の智恵

少くて若衆の盛りおもしろし
四月もたけて男作る田
座頭まじ〱鏁を嗅出す
旦那寺馳走の上は唯でなし
腹立の女房は雉子の返辭して
後の住持にゑどる天人
貧乏神の逃る元日
井戸ばたもいはゞ噂の大社
亦分別の立もどる臍
鵜の啼ころもたがへず蕎麥の聲
白き歯の黒く成たる日の鼠
後添の夢を梓のこねかへし
波打ぎはのやうな極月
貰うた水は飲ぬ浪人
極樂に少しはたよる渡し守
權柄に腕で問屋を突廻し
踊子も絹いとほどのとり廻し
買人の出來ぬ鶺鴒開過
春の骨槓に殘る凧
名代寒く夜のはゝきゞ

神體蛇としらで申子
雪隱の戸を咳でおさへる
禿の咳も五分の魂
挽臼の休む隙なきうつの山
蛇を見て居る妾の高ぶり
眼のふる中をかける袖笠
人に直段の出來る三月
蛇の出る日にお妾も出る
盲馬座頭の譽る乘ごゝろ
噺しに寂を付る爐開き
春の日を腕に覺る渡し守
蓼喰ふ蟲にかつがるゝ瞽女
よく〱見れば狐火に紋
硝子に金魚の命すき通り
芍藥も十四五日はふみこたへ
つましさを暑さに捨る四條河
つめたい飯をあやまつて喰ふ
忍ぶ夜に氷つく戸もかこち草
溫石さめて人しらぬ邪魔
何所ぞでたゝる新造の袖

はじめて喰ふて寒い鰒汁
口も利口にあばたほどきく
藪入の氣に入過ぎてほとヽぎす
妾二人乃ものヽやうに美しき
帆かけ舟引戻したる遠眼鏡
袂から青首一羽覗かせて
たまさかに書けば硯もみなの川
また投られし夢のくたびれ
追着いてから惚やうのうら表
物申に顔半分の下女が出る
嬉しき中の腹もよくたつ
思案きはめた上の雨がへ
草庵も菊の序にため直し
驅出すやうに蓮の白雨
順禮の脊に宿からの蠅
鼻に氷柱の下る終とし
男選みのいつか葉ざくら
汲ほどの水のきたなき春の川
銚子は物をいはぬ媒
我庵は路銀と化して鹿島立

痛入らせて傾城に惣
餅に一日母の棟梁
さし鯖もひとつ蓮に包まれて
白雨のやうに遣り手の笑ひ出し
云譯のくらひ節とて火がとぼり
瘧のやうな戀をとりもつ
ちゃむ師走に延る言譯
米の守も廻文の文字
きり〳〵す吉原に實の入る時分
氣づよきと氣の長いとが九十九夜
狐はしらぬ朝顔がさく
春雨に一句解たる座禪堂
氷になれば水に明く穴
巽見きかねば耳も臍役
制札が有て枯野の取しまり
櫛になつてもつながるヽ象
青い天窓の低き相談
たうとう腮をはづす新造
鷹に似た眼で歩行く鷹匠
袖笠はとぎれ〳〵をしのぶ山

雪打のやうに投込神樂堂
新蕎麥の客に閨が二三人
正五九月に惚らるヽ藝
水門に船の入日はしんの闇
小判をなめる江戸のみどり子
面白き時うきときの智惠はなし
後から子の笑ふかんきん
なま中に片眼持たる按摩とり
寐そびれる淨土法華の軒並
朔日の六ッは寐かさぬ鐘の聲
唐も鞘で居る顔の筮竹
神佛に手まへ勝手を申上げ
横へ眼のひよつと流れてみなの川
下からは水の底見る天の河
光陰の矢の桐を射落す
妾を出して蛇を氣にする
憎のうらをかへす鐵槌
口三絃でわたる船ばし
麥は刈る迄唄しらぬ草
いたづらに懸て不氣味な狐罠

地頭まで握こぶしのもめ上り
二度のよし野の開く六月
土弓場の矢取の尻もかげんもの
根問してあぐみ果たる梓弓
鷺と烏の晦日朔日
琴柱はづせば音なしの瀧
乞食の夢を追立る雨
不人相なる後家の安全
こん屋の瓶のすごき元日
馬鹿に三日は閏三月

富峰積雪廿五點

枕を口にあてゝ白状
夏譽めた場の寒い品川
元日に咲くは律義な梅の花
祭の馬の強飯を喰ふ
石川島へ大汐の嫁
丈は伸びても廿五の夢
鼠の地獄落しから死
錦木をはふり捨て／＼廿四五
冷飯喰うて戻る太刀持

八朔の雪誂へるするが町
よつぴいたなりで案山子の倒者
總仕舞見世は墨繪と成にけり
つまり／＼は寒い茶の花
六月の一夜淋しき高燈籠
松明も一本はしる初松魚
外法あたまを譽る元服
一文出して諸願成就
ふたつひとつの魚を喰ふ雪
乳母に言葉の多い旅立
羽織着て撞く元日の鐘
栗梅は分別らしき小紋也
やくに立つたをきかぬふり袖
離別さへ怖き妻の大力
つめつて見たき琴爪の先
きふに出來る人魂の歌
舟では近き女房のさと
叱り人もなくて神馬の直也
異見を聞きにくらやみへ行
梓弓佛も口をきゝ過ぎて

朔日の空をさつきにそやされて
夫婦のやうな不二とみづうみ
篙紙の夫婦別有る藥喰
旅籠屋は拜む所の定まらず
春秋も不二はたしかな姿なり
江戸へ出るものとは見えぬ秋の風
鉢の子へもの云ぬ手の美しさ

群玉青蘭三十點

ゆがめて見せる口も挨拶
日本の意地を見せる心中
頬杖は淋しき時の力瘤
後の世を片手業なる善の綱
戸がひづみ柱がひづみきり／＼す
正直に蚫を扣く生身魂
盃に這懸る子も瓜の蔓

蓬萊五雲四十點

吉原中の蕎麥を喰ふ禎
春の田に鐵漿ほどの溢浮て
片足に成て秋たつきり／＼す
俯向ば言譯よりも美しき

巫山雲雨五十點

あれほどの中に季を持星二つ

七布賣る身揚の床

安永五丙申年七月

武玉川十八編

安永五丙申年七月

俳諧武玉川十八編 終

誹諧武玉川　紀逸撰　一冊

十五点以上秀逸の句を集て点者附合のたよりとに

初編　續編　発句入　三編　四編　柳樽附句入　五編　八ツ

百員入　六編　附合の稽入　七編　八編　九編　十編

十一編　十二編　十三編　十四編　十五編　狂歌入

十六編　以上発句入　十七編　出来　十八編

[redacted]

此續きて追て出こやい

同　塵砂子

當時点者の上巻　出来

秀逸の書下巻　出来

東都書林

小石川傳通院前

雁金屋儀助

俳風
柳多留

序

[illegible]の[illegible]

[illegible]

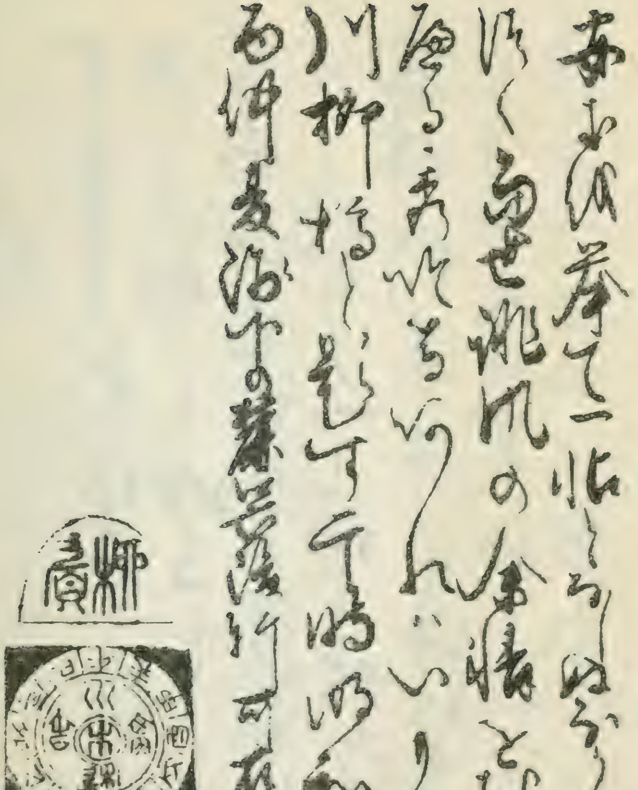
古句[illegible]ところの[illegible]

[illegible]のうへ一に[illegible]

書肆何某来りて[illegible]

[illegible]

[illegible]一句[illegible]句[illegible]



評釋 柳多留初篇

序

さみだれのつれ〳〵に、あそこの隅こゝの棚より、ふるとしの前句附のすりものをさがし出し、机のうへに詠むる折ふし、書肆何某來りて此儘に反古になさんも本意なしといへるにまかせ、一句にて句意のわかり安きを擧げて一帖となしぬ。なかんづく當世誹風の餘情をむすべる秀吟等あれば、いもせ川柳樽と題す。

予時明和二酉仲夏　　淺下の麓呉陵軒可有述

五番目は同じ作でも江戸産れ
かみなりをまねて腹掛やつとさせ
上るたびいつかどしめて來る女房
古郷へ廻る六部は氣のよわり
ひよ〳〵の内は亭主にねだりよい
作頭は内の羽白をしめたがり
鍋いかけすてつぺんからたばこにし
人をみなめくらにごぜの行水し
米つきに所を聞けば汗をふき
すつぽんに拜まれた夜のあたゝかさ
齋日の連れは大かた湯屋で出來
入髪でいけしやあ〳〵と中の町
百兩をほどけば人をしさらせる
じれつたく師走を遊ぶ針とがめ
九郎介へ代句だらけの繪馬を上げ
使者はまづ馬からおりて鼻をかみ
梅若の地代は宵にさだまらず
なげ入の干からびて居る間の宿
鞠場からりつぱな形でひだるがり
初ものが來ると持佛がちんと鳴り
こはさうに鯲の升を持つ女
唐紙へ母の異見をたてつける
すてる藝はじめる藝にうらやまれ
新發意はたれにも帶をして貰ひ
内にかと言へばきのふの手を合せ
美しい上にも欲をたしなみて
四五人の親とは見えぬ舞の袖
天人もはだかにされて地もの也
いつとても木遣りの聲は如才なし
身の伊達に下女が髮迄結ふて遣り
菅笠の邪魔に成るまで遊び過ぎ
片袖を足す振袖は人のもの

お初にと斗りしうとめたてにとり
銅杓子かしてのろまにして返し
七種をむすめは一つ打つて逃げ
赤とんぼ空を流るゝ龍田川
まんぢゆうに成るは作者も知らぬ智恵
取揚婆屛風を出ると取りまかれ
しかつてもあつたら禿炭を喰ひ
水茶屋へ來ては輪を吹き日をくらし
ふんどしに棒つきのいる佐渡の山
主の緣一世へらして相續し
親ゆゑにまようては出ぬ物狂ひ
能い事を言へば二度(ふたたび)寄付かず
初會には道草を喰ふ上草履
喰ひつぶすやつに限つて齒をみがき
子が出來て川の字形に寢る夫婦
取次に出る顏の無いすゝはらひ
煮うり屋の柱は馬に喰はれけり
療治場で聞けば此頃おれに化け
足洗ふ湯も水に成る旅戻り
まゝ事の世帶くづしがあまへて來

朝めしを母のうしろへ喰ひに出る
辨天の貝とはしやれたみやげもの
三神はなぶるとよみし御すがた
頂いて受けべき菓子を手妻にし
緋の衣着れば浮世がをしくなり
太神樂ばかりを入れて門を締め
附木突腰におどけた拍子あり
馬かたが居ぬと子供が藝をさせ
水かねでむねのくもりをといで置き
袴着にや鼻の下迄さつぱりし
習ふよりすてる姿に骨を折り
無いやつの癖にそなへをでつかくし
國ばなしつきれば猫の蚤をとり
藪入りの綿着る時の手の多さ
武藏坊とかく支度に手間がとれ
勘當も初手は手代に送られる
五六寸かきたてゝ行くねずの番
新田を手に入れて立つ馬喰町
どこぞではあぶなき娘ゆふべ遣り
仕切場へ暑い寒いの御挨拶

紅葉見の鬼にならねばかへられず
お內儀の手を見覺えるぬひはく屋
泣きがけも會氏已後は最うくはず
しばらくの聲なかりせば非業の死
いせ縞の內はえんまを尊とがり
役人の子はにぎ〳〵をよく覺え
女房が有るで魔をさす肥立ぎは
槍持はむねのあたりをさし通し
白魚の子にまよふ頃角田川
帯解は濵おしろいのぬりはじめ
灯籠に甚だくらい言譯し
逆王(さかおう)を貰ひに出たる料理人
花守の生れがはりか奥家老
あかつきの枕にたらぬかるた箱
出てうせうなんぢ元來みかん籠
二箇國にたまつた用の渡りそめ
鼻紙で手をふく內儀酒もなり
病上りいたゞく事がくせになり
だい〳〵は年神さまの疝氣所
合羽箱どろ〳〵〳〵とかしこまり

定宿を名乘つてひどい場をのがれ
井戸がへに大屋と見えて高足駄
立臼に天狗の家をきり倒し
禪寺はひがんの錢にふりむかず
たそがれに出て行く男尻知らず
隣から戸をたゝかれる新世帶
うりものと書いて木馬の面（つら）へ張り
むかしから湯殿は智惠の出ぬ所
神代にもだます工面は酒が入り
盃にほこりのたまる不得心
跡月をやらねば路次も　ゝかれず
指の無い尼を笑へば笑ふのみ
鉢卷も頭痛の時は哀れなり
ぼた餅の精進落はゐのこ也
穴ぐらで物いふやうな綿帽子
急度して出る八朔は寒く見え
くわいらいし十里程來た立すがた
鷄の何か言ひたい足づかひ
手拭にきんたま出來る一（ひと）さかり
杖つきの醉はれた所は盛直し

婚禮を笑つて延ばす使者を立て
すつぽんをれうれば母は舞をまひ
むく鳥が來ては格子をあつがらせ
ふり袖は言ひそこなひの盞に成り
せめて色なれば訴訟もしよけれど
よし町へ羽織を着ては派が利かず
壁のすさむしりながらの賓ばなし
國の母生れた文（ふみ）を抱きあるき
鹽引の切殘されて長閑なり
江戸者でなけりやお玉が痛がらず
お袋をおどす道具は遠い國
菅笠で犬にも旅のいとまごひ
めし焚に婆（ばゞあ）を置いて鼻あかせ
うしろから追はれるやうた榊かき
上下で歸る大工はとりまかれ
前だれで手をふく下女の取廻し
跡乘の馬は尾ばかりふつて居る
疝氣をも風にして置く女形
ぬり桶はいつち化けよい姿なり
寒念佛みりゝ／＼とあるくなり

衣類迄まめで居るかと母の文
向うから硯を遣ふ懲り人
迷子のおのが太皷で尋ねられ
脉所を見せてたて極甲すやう
上下を着て文盲な酒をのみ
牛兵衞雛の頃から心がけ
喰つみがこしやくに出來て一分めき
捨子ぢやと坊主禿をなで廻し
藪入をなまものしりにしてかへし
流星の内に座頭はめしにする
禿よくあぶない事を言はぬなり
客分といはるゝ女立ちのまゝ
正直にすりや樒は乳母へ行き
護國寺を素通りにする風車
雪見とはあまり利口の沙汰でなし
寒念佛千住のふみをことづかる
松原の茶屋はいぶるが景になり
ぼた餅を氣の毒さうに替へて喰ひ
はらませたせんぎは是で山をとめ
落ちて行く二人が二人帶がなし

親分と見えてへッつい惣かな具
日傘さしてをつとの内へ行き
縫紋を乳をのみ〳〵むしるなり
額入りにうすく一きれ振廻れ
根ぞろへの横にねぢれて口をきゝ
庵の戸へ尋ねましたと書いて置き
隅ッこへ來ては禿の腹を立て
小座頭の三味線ぐるみ邪魔がられ
石打ちで振廻水の禮はすみ
義貞の勢はあさりをふみつぶし
關寺で勅使を見ると犬がほえ
乳貰ひの袖につッぱる鰹節
これ小判たつた一晩居てくれろ
琴やめて薪の大くべ引き給ふ
非番が來ればよばれる太夫坊
飯焚に百ほどたのむ豆腐の湯
めいわくな顔は祭で牛斗り
桶ぶせをはじいて通る日より下駄
親類が來ると蒸子のふたを取り
江の島を見て來た娘じまんをし

明星が茶屋を限りの柄ぶくろ
御自分も拙者も逃げた人數也
還俗をしても半分しゆしやう也
細見の鬼門へ直る遣り手の名
袖口を二つならしてよめをよび
幽靈に成つてもやはり鶴を遣ひ
羽織着て居るお内儀にみなかたれ
けんぺいに投出して行く質の足し
おびんづる地藏の短氣笑つて居
二三歩が買ふとうるさい程はなし
お袋はぶきな姿に雁を書き
あんまりな事と一人でふせて見る
御一門見ぬいたやうな錢遣ひ
このしろは初午ぎりの臺に乗り
祭前洗ひ粉持つて連れて行き
隣へも階子の禮にあやめ葺き
天人へ舞へとはかたいゆすりやう
御后のわる尻をいふ陰陽師
歩と香車座頭の方は付木でし
御勝手はみなかつ命におよんで居

くろもじをかぎ〳〵禿持つて來る
源左衛門鎧を着ると犬がほえ
仲人へ四五日のばすひくい聲
けいせいも淋しくなると名を替へる
深川の土弓射習ふ草履取
黒木賣大事に跡をふりかへり
かごちんをやつて女房はつんとする
すゝ掃の下知に田中の局が出
棟上を名代の乳母の尻へ投げ
柏餅妹の乳母は手つだはず
箱王が雨のたもとに蟬の聲
横町に一つ宛ある芝の海
茸狩は紅葉狩より世帯じみ
蚊を焼いた跡を女房にいやがらせ
長屋中手ごみにはかる田舎芹
岡場所はくらはせるのがいとま乞
花よめのあました平へ札を入れ
太神樂ぐるりはみんな油むし
冠をふみちがへたる見倒し屋
一人者のまぬかはりに弐朱が搗き

降參が濟むと一度にひだるがり
おさらばを障子の内でたんと言ひ
秋がわき先づ七夕にかわきそめ
中川は同じあいさつして通し
をどり子のかくし藝迄してかへり
忍びごまなんぞいひたい姿なり
四日から年玉ぐるみ丸くなり
小力が有るで若後家じやれに成り
日本の狸は死んで風おこし
芝居見の證據は女中先に立ち
錢なしの癖にいつでもざいをふり
あら世帶何をやつても嬉しがり
はつ雪に雀鼠とははぢ知らず
雨やどり額の文字を能くおぼえ
あら打を遠くへ寄て日出たがり
江戸へ出る日には手作の鬢を出し
寐目にあぶなくほめる海おもて
屋敷替白い狐の言ひおくり
蟻ほどに千疊敷の疊さし
見知りよいあたまは御所の五郎丸

腰帶を締めると腰は生きて來る
ぬか袋持つて夜伽の礎に寄り
四辻へ來ると追人の氣がふえる
降參の顏をなぐさむ白拍子
山のいもうなぎに化ける法事をし
五つ月を越すと近所へぎりをかき
白いのに其後あはぬ寒念佛
返事書く筆の軸にて玉を逃げ
嬉しい日母はたすきでかしこまり
袂から口ばしを出す拂ひもの
醫者の門ほと〳〵打つはたゞの用
稻妻の崩れやうにも出來不出來
張りものを上手にくゞる高足駄
夜が明けて狩場々々へ外科を呼び
恐悅を水としきみで申上げ
こそぐつてはやくうけとる遠目鏡
大黑の好きは大根のぶん廻し
江の島で一日雇ふ大職冠
上げ輿の當てにして置く地主の子
よしなあの低いは少し出來かゝり

關取のうしろにくらいあんま取
大門をそつと覗いてしやばを見る
煤掃に裝束過ぎて笑はれる
兩替屋のつびきの無い音をさせ
痳ごかしはどちらの耻と思し召す
かまはらひひたひで鈴をふり納め
馬島での近づきならばうろ覺え
乳の黑み夫に見せて旅立たせ
盗人にあへばとなりでけなるがり
歌一首有るではなしにけつまづき
駿河町疊のうへの人通り
八まんはかんにんならぬ時の神
岡場所は道手と女房どんぐるみ
手拭ではたいてぜげんこしをかけ
裏門と家中の乳母は首ッ引
聞いてくりや命が有るといふ斗り
清盛の醫者ははだかで脈をとり
才藏はのみかねまじきつらッつき
金の番とろ〳〵としてうたされる
おはぐろを俄につけてとがが知れ

よみの場へ筆添へて出す奉加帳
小間物屋箱と一所に年が寄り
太神楽赤い姿に見つくされ
鼻紙を口に預けて手を洗ひ
どつち風少しはすねた道具也
惣領は尺八をふく面に出來
翌日は店を追はるる年わすれ
今暮れる日をけいせいにおちつかれ
あづさ弓下女の泪は土間へ落ち
たいこもち宗旨斗りはまけて居ず
若後家の剃りたいなどとむごがらせ
能笛はわすれたやうな勤めかた
一門はどぶり〳〵と奏問し
能い小紋着て紺屋迄引きづられ
病みぬいたやうに覺える四十過ぎ
年男うまい咄を淋しがり
道問へば一度にうごく田植笠
羽子板で茶を出しながら逃支度
さかおとしまでは判官ぬけ目なし
髪ゆひも百に三つはほねを折り

掛人寐言にいふがほんの事
ひそ〳〵と玉藻の前をふしんがり
母の氣に入る友だちは小紋を着
大勢の火鉢をくゞる禿の手
御局はそつと〳〵の十三日
知盛はけんくわ過ぎての棒をふり
四郎兵衛を怖ろしがるが怖ろしい
朋輩を寐しづまらせてくけて遣り
ふげんともならう四五日前に買ひ
乳母に出て少し夫をひづんで見
ひんぬいた大根で道を教へられ
花よめのぶすゐで無いのにくらしさ
妙藥をあければ中は小判也
留守の事啞は枕を二つ出し
能いむすめ年貢すまして旅へ立ち
藥の苦せない親仁は喧嘩の苦
屋かたから猪牙へ継路のはしけもの
岩茸はぞんざいに喰ふものでなし
紫屋是も同じくうそッつき
春迄はふみこんで置く女ぶり

吉治が荷おろせば馬はかいて見る
萬歳の口ほどつゞみはたらかず
ごとくなる刀をぬいてせめる戀
小便に起きて夜なべをねめ廻し
しうとめと違ひ舅のいぢりやう
あひぼれは顔へ格子の跡が付き
辻地藏山師仲間へ抱きこまれ
目合ひ見てそつといふ程高く詰け
供船へお玉の類はえり出され
恥かしさ知つて女の苦のはじめ
男ぢやといはれた疵が雪を知り
川止めの間太夫も麥をつき
淸水はつひえな錢にたとへられ
おはぐろを醬油のやうにあてがはれ
木戸々々で角をもがれて行く屋たい
新造に砂のふつたる物がたり
角兵衛獅子笛吹斗り人らしい
がいちんの日には生醉五百餘騎
すり鉢をおさへるものが五六人
引つぱつた茶臺は客にもたせけり

吉日がこゝにも居るとこそぐられ
寐たふりで一度は埒を明けて遣り
借りの有る家へ挑灯紋盡し
竪棚の牛ははたけの鼻まがり
人參に親の秤の欲がはね
喰ふ程はをしへて天狗おつぱなし
山寺は祖師に頭巾をぬぐ斗り
關とりの乳のあたりに人だかり
前帶で來ては朝から歌になり
紙ひなはころぶ時にも夫婦連
化かされたあたまで直ぐに奉加帳
大門を出る病人は百一つ
手の甲へもちをうけ取るすゝ拂ひ
新見世といへばわづかな欲を買ひ
樽買にむだ足させぬやうに明け
銅佛は拜んだ跡でたゝかれる
立臼に芽の出たやうな松かざり
晝過の娘は琴の弟子も取り
髮置に乳母も强氣な髱を出し
棟上の餅によごれぬそだてやう

藪入を霞に見そめ霧に出來
持ちなさい女は後にふけるもの
こぶ卷をくはせて置いて傳授をし
米さしは舛宿にでも置けばよい
かんにんのいつちしまひに肌を入れ
初午は世帶の鍵の下げはじめ
庖丁をさびしく遣ふ藥喰ひ
言ひなづけたがひ違ひに風を引き
珍らしい神の名を賣る宮すゞめ
御てい主の留守で鰹を手負にし
料理人客に成る日は口がすぎ
請狀が濟むと買ひたいものばかり
荒打に左官ばかりは本の顏
掛けひまは暇もくれず日もかけず
大屋をば尻にはさみし論語よみ
大名は一年おきに角をもぎ
別當は馬や狐で茶をわかし
生(な)り初めの柿は木に有るうち配り
藪入の二日は顏を餘所に置き
御年貢を大部屋へ來てなし崩し

歌がるたにも美しい意地が有り
七でもるものとは見えぬ藥種船
初がつを家内殘らず見た斗り
辨天をのけると跡はかたは也
犬は小かねると笑ふ長局
神奈川の文(ふみ)は鰹の片便り
枕繪を持つて火燵を追出され
母の手をにぎつて火燵しまはれる
祐つねは椿の花のさかりなり
岡場所で禿といへば逃げて行く
雀形たゝいて雪のちゆうしんし
日本勢一人(ひとり)は伽羅の目利(めきき)もし
脇差をもどせば茶屋はかのを出し
寒念佛鬼で日をつく切り回向
大つゞみ茶食の胴をぶつ潰し
町内の佛とらへて猿田彥
はねむしる鴨に手の込む長局
つまむ程道陸神に箔を置き
おはぐろをつけ〳〵禿にらみつけ
今以て根津の燒物すめかねる

四郎兵衛もひやうひやく交り暇乞
たんの手か知れぬ夜更の硯ぶた
佐渡の山けんしの前でぶらつかせ
紙花もしばしの内の金廻し
きのじ屋は階子の口で人ばらひ
法の聲受狀迄に行きとゞき
黒札の禮には馬鹿な顏で來る
藪入が來て母おやは遣り手めき
家持の次に姪ぶが論語よみ
霜月の朔日丸は茶屋でのみ
新造のやつかいにする鼠の子
桟敷から人をきたないものに見る
藪入の内母おやは盆で喰ひ
やく拂出しなに一つやつて見る
丸薬を買ふ座頭はちゞこまり
霍亂もどうか祭のばちあたり
伊豆ぶしも八代迄はだしがきき
半分はしきせで拜むえんま堂
盆山は欠落らしい人ばかり
江の島へ硫黄の匂ふはけついで

桟敷から出ると男を先へたて
人の物たゞ遣るにさへ上手下手
下駄さげて通る大屋の枕元
その手代　の下女晝は物言はず
竈締の内はめし焚かしこまり
藪入の出がけにものをかくされる
死に切つて嬉しさうなる顏二つ
土こねは手水を遣ひ幣を立て
三囲のあたりから最うぶちのめし
大いそは欠落するにわるい所
田楽を面白く喰ふ座頭の坊
二かいから落ちたさいごの賑やかさ
ゆり若の弓はつぶしにふんで買ひ
辻切を見ておはします地藏尊
初旅へ晩は是ぢやと二本出し
雪の夜は糊で付けたる顏二つ
商賣も國と江戸とは雪と炭
算盤ひかへたやうなだんご茶屋
そこかいてとはいやらしい夫婦中
下戸の禮者に消炭をぶんまける

樽拾ひ目合ひを見ては風を上げ
あの中で意地のわるいが遣手の子
御傳馬で行けばやたらに腹を立て
生酔の琴をけなしてとう〳〵寐
ぶちまけた跡は獨昇ゆげが立ち
中宿で先づ初手のから封を切り
四里四方見て來たやうな新茶賣
勞咳（らうがい）に母はおどけてしかられる
ちつぽけな桶で鑄かけは手を洗ひ
ぬひものを少しよせるも禮儀なり
樽拾ひとある小蔭ではごをしよひ
そろばんのひしげた所で御十念
草市はひだるい腹の人だかり
淺草の鏡に千のすがた有り
飼鶴は袴着て居る人へ行き
約束をちがへぬ紺屋哀れなり
和藤内一家の義理はかきどうし
日のくれに高繩の戸はをしくたて
大瀧は一言も無いところなり
そこら中盞を明け〳〵亭主ぶり

行燈で喰ふは大工も仕廻の日
京町へ來る鬼灯はえりのこり
張物によめはむすばぬ頬かぶり
貰つて螢を隅へ持つてゆき
あい／＼といふたび締るかゝへ帶
小枕の締りかげんに目をふさぎ
仲人を地ものとおもやたいこ持
牛人で仕廻ふ大工に孤を遣り
車引き女を見るといきみ出し
扇箱鳴らして見てはのしを付け
いろは茶屋客をねだつて富を付け
藪入の供へは母がのんでさし
手代共ねぶと盛りであんじられ
飯時といへばぬし屋はによつと出る
親類のもちあまされは麥を喰ひ
夜そば切ふるへた聲の人だかり
悪筆と仕廻の方へ下話を書き
飛鳥山毛虫に成つて見かぎられ
片棒をかつぐゆふべの鮑仲間
初鰹藥のやうにもりさばき

達に禮云ひ／＼なまな封を切り
口近い化物で先づ一つ消し
せん香が消えてしまへば一人酒
つき合つて行く深川は箸やすめ
のびの手でつかんではなす削りかけ
入王と聞いて火を引く料理人
通り者羽織はふるがくせに成り
油揚をさげた斗りで夜をあかし
ぬり桶へ書いてくどけば指で消し
座頭の坊せくと淺黄に目をひらき
醫心の有て女房事にせず
桶ぶせの有りて家内がせんそくし
金谷から臼ひき歌を覺えて來
夜そば切立聞をして三聲よび
草履取名殘の裏と聞きかぢり
兩介は第一めしがうまく喰へ
仲條は手斗り出して水を打ち
一軒の口上で濟むくばり餅
景淸はお尋ぬものに能い男
綿つみはみかんの筋も肩へかけ

生醉はおどかすやうなおくびをし
えり元のうつとしさうな田舎馬
ふんどしをするが湯治のいとま乞
眞ッ黑な小刀遣ふ野老うり
蠟燭を消すに男の息をかり
太鼓の直出來てから出す火打宮
船頭の女房能い日にせんたくし
猿田彦坂際に來てかぎ廻し
追出されましたと母へそつと言ひ
夕立の戶はいろ／＼にたてて見る
金持のくせに小粒にことをかき
鰒買つて餘所のながしへ持つてゆき
女房は蚊屋を限りの殺生し
針仕事手のかるく成るほとゝぎす
物申といはるゝ迄に成りおほせ
樽ひろひ危い戀の邪魔をする
御りんきのもう一足で玄關迄
きめ所をきめた二百はしやちこばり
言ひ出して大事の娘寄りつかず
家老とは火をする顏の美しさ

店先へきつかけの有るうたが來る
藪入はたつた三日が口につき
かみさまと取揚婆が言ひはじめ
奥さまの加勢立臼なべのふた
腰縄の氣で母おやは学をあづけ
ふがひない魂二つ番がつき
月ふけて下戸の哀はひだるがり
笑ふにも座頭の妻は向きを見て
のびをする手に腰元はついと逃げ
閨はれの何を聞くやら陰陽師
ゆび切るも實は苦肉のはかりごと
十分一取るにおろかな舌はなし
ぶらつくを棹でまねいた渡し守
棒の中めんぼくもなく醉は醒め
手付にて最う神木とうやまはれ
上下は我儘に着るものでなし
勘當をゆるすと粢を喰ひたがり
奥家老顔をしかめるものをふみ
寐て居ても團扇のうごく親心
すゝ掃の孔明は子を抱いて居る
松の内七つの星を能くおぼえ
見附からわさびおろしが出て呵り
大磯の落馬はすぐにたばこにし
唐人を入り込にせぬ地ごくの繪
日和見のみそげて傘をさげて出る
丸山でかゞとの無いもまれに産み
松右衛門二言といはず酒をうけ
抱いた子にたゝかせて見るほれた人
是切の小袖着て寢るたいこ持
網の目をくゞつてあるくよめの禮
くじ取で遣手が灸をするゑて遣り
剃つた夜はゆうべの枕きたながり
あんどんは百と百との結び玉
いそがしくなると鹿島は襟へさし
いつちよく咲いた所へ幕を打ち
病上り母を遣ふがくせに成り
五六町錢屋をたゝく戻り駕
是からは行く斗りぢやと櫛はらひ
三人で三分なくなる智惠を出し
逃げたときや男の中で夜を明し
腰元は寢に行く前に茶をはこび
三めぐりを溜め小べんの揚場にし
猿廻し内へ戻つてあごを出し
雪隱の屋根は大かた屁の字形
よけの畝大尽の内儀持ち歩行き
子を抱けば男にものが言ひ易し
草津の湯みやうもんらしい人はなし
笑ひ止む迄灸てんを持つて居る
櫻花兄は嗜の有るをとり
江の島で鎌倉武士は片はたご
首取つた其日を急度精進し
かまたりへ眞つ裸でのいとま乞
若後家のふしよう〳〵に子に迷ひ
羽子板を預けて帶を締直し
おみさまの聞きあきをする祭前
外科醫者を祭の形で呼びに行き
尻持に和尙を持つて地紙うり
さうどくに衣を着せる長屋中
ひま入と書いて來たのは女房の手
男ならすぐに汲まうに水かゞみ

大黒の心よく通ふ無常門
眞先でさればぐらゐは化かされる
長崎とんぼのとまる楷の先き
たかみそにどしかも瓜の百一つ
舟嫌ひ一人は川のへりを行き
太夫職百で四文もくらからず
佐野の馬扨首をたれ屁をすかし
浪一つあだにはうたぬ玉津島
こま犬の顔を見合はぬ十五日
辨天の前では波も手をあはせ
御婚禮蛤の蓋をみやげにし
遣唐使吹出しさうな勅をうけ
舟宿へ内のりちぎをぬいで行き
藏の戸が鳴ると盃大きくし
家内喜多留ちひさい鯣はけちらかし
蠅打でかき寄せて取る關手形
やは〳〵とおもみのかゝる芥川
風鈴のせはしないのを乳母と知り
鳥さしがかつぐと七ツ過に成り
あいさつを内儀は椀で二つかき

女房は醉はせた人をにぢに行き
傘かりに沙汰のかぎりの人が來る
本ぶりに成つて出て行く雨やどり
張肱をしてもよう〳〵能い女郎衆
切落し氣の毒さうな乳をのませ
地紙うり母に逢ふのも垣根ごし
舞留を常にくゆらす草履取
品川は木綿の外は箱へ入れ
姑のつむじは尼に成つて知れ
欠落もきようにすればをしがられ
懐中の杓子を出していたゞかせ
見に行つてしめつぽく出る拂藏
すゝはきの顔を洗へば知つた人
火もらひのふき〳〵人に突當り
旅戻り子をさし上げて隣まで
佐野の馬かんろのやうな豆を喰ひ
なぎの葉を芝居の留守に掃出され
仕事師の飯は小言を菜にして
さいそくも質屋のするはゆるがしい
猿田彦いつぱし神の氣であるき

御詠歌に預りものゝ娘あり
松が岡ちつとはじくが納所分
れんこんはこゝらを折れと生れ付
初見世はたんこぶ迄をうたがはれ
母おやはもつたいないがだましよい
けんぺきを打ち〳〵戻る藏のかぎ
生物をかゝへた婆ア不人相
湯屋へ來て念頃ぶりは側へぬぎ
餅はつく是からうそをつく斗り
色男四角な智惠で境へよび
腹立てばやぼらしく成る十三日
押入の戸やきぬ張で人をよび
出女の鏡へうつる馬のつら
針ほどを棒とは母の二ばんばえ
あたらしくしてもやつぱり親仁橋
戻る猪牙だるまもあればねじやか有り
江戸を出て妾の出來るぬけ參り
花たればこそ稀人の坊主持
色事に紺屋のむすめうそをつき
信濃へは地ひゞきかして日が當り

小腕でも長刀斗り二本しめ
ぬけた齒に禿のこぞる片ッすみ
貰ひ乳にかはるきぬたのちから過ぎ
菲敵は憎さもにくしなつかしさ
若後家のこすいでみんな貸しなくし
黒犬を挑灯にする雪のみち
一門のきなかと賴む能登守
迷ひ子が泣けば鐵棒ふつて見せ
產範の内でていしゆをはゞに呼び
あだついた客ははしごでどうづかれ
さるだ彥角をはやして吸付ける
撥貸して見に行けば咽なでて居る
汐くみに所望の浪が打つて來る
年增にもゝ引のいる綠を組み
うつちやつて看板にする紫屋
だきもりのわりなき無心餠一つ
車座に紺の手の出る六夜待
櫻見に夫は二丁跡から出
病み上り日本の人になぐさまれ
十露盤へしたむ小原のせはしなさ

産範の人を禿はむぐつて出
子を持つてから三日をやつとぬり
居酒屋に馬と車の拂ひもの
寒念佛ころぶを見れば女也
母親の或はおどし手をあはせ
鼻聲で湯治の供を願ひ出し
出格子へ子をさし上げて名をよばせ
女房を雪にうづめて炭をうり
先生と呼んで灰吹き捨てさせる
はやり風十七屋からひきはじめ
舞鶴に水をもらせる殿づくり
保昌は九條あたりへ迎ひに出
髭ぬきの鏡に娘氣をへらし
雪打をおもの師斗りひたいで見
賣上は稲こきの齒にくはへさせ
此石がそだかといへば最う眞似る
よし町で客札貰ふ後家の供
子の内の支離に譲る水車
丸顏をみそにして居るかるゐ澤
指を切るからは九品の淨土まで

花聟の馳走にやぶる村法度
通盛は寐まきのうへへ鎧を着
寐て居るは第一番の藥取
國者に屋根をしへる中たんぼ
玄關番くさ〳〵とする下駄の音
岡場所は湯の花くさい禿が出
粉のふいた子を抱いて出る夕涼
新發意の寄ると輪袈裟で首ッ引
辻番へもりが差圖のかしはもち
祝ひ日に疵のついたるねはん像
持參金拖瘡よけの守りにし
坪皿へ紙とはよほど學が長け
根津の客家のひづみに口が過ぎ
見のがしにすれば遣手も損はなし
狩人の子はそれ〳〵に雀罠
山門を下から拜む氣の古さ
初がつをふん込みの衆天窓わり
引越の跡から娘猫を抱き
蠟燭の灯ですひ付けて足袋をぬぎ
ちつとづつ能手へ渡る御茶が子

新そばに小判を崩す一さかり
はごの子の命をすくふ左利き
女房と相談をして義理をかき
だんぎ僧坐ろと顔を十しかめ
傾城はとッぱづしても恩にかけ
ふし見世は晝食の時尻をむけ
居酒屋で念頃ぶりは立つてのみ
藥箱初にもたせてふりかへり
はたけからせんそく程の日をあまし
りちぎものまじり／＼と子が出來る
しかられた禿たんすへ寄りかゝり
針妙の坐つた形に灯がとぼり
百姓は金でせかせるものでなし
色男はしたに斗り產をさせ
神樂堂逃げたあしたは母が出る
ごぜ斗り一艘につむ渡し舟
鰥人の何にすねたか六あみだ
關守の聲を越えるとまねて行き
菜桶を下げて見とれるかくし町
腰帶は見越しの松に逃げのこり
病犬をちつと追つてはたんと逃げ

事納め氣をつけられるあら世帶
祭から戻ると連れた子をくばり
まをとこを見出して恥を大きくし
團扇ではにくらしい程たゝかれず
髪結が替つてかはるあたま形
大磯にきゆうせん筋の地藏あり
ひな棚の樋合ふさぐ楊枝さし
寒念佛ざらの手からも心ざし
居酒屋を止めた仔細は革羽織
撿校の供は旦那が片荷づり
よめの部屋這入ると漆くさい也
丸山へはまつて髭で蠅を追ひ
二三間飛げたの有るかざり柿
折ふしは小粒もあたる遣手の齒
方丈の手から一歩がはがして出
小謠で來る浪人は元手なし
一網に打たれた禿蚊にくはれ
若殿がめせばりゝしい紺の足袋
神馬牽市をつッつきつんまはし
外科殿の豚は死に身で飼はれて居
吉原の鰐が見入れて紙が散り

前髪へ白髪の交るうたひ講
血の道もてんねき見える長局
一さかり身になる顔へ遠ざかり
五分々々にして店だてが二人出來
留守たのむ人へ枕と太平記
若たうに役者の墓をさがさせる
綿帽子風をおさへて長ばなし
身揚りが來て黑猫をこぐらかし
座頭の坊おかしな金のかくし所
入れ智惠でていしゆはやぼな腹を立て
鏡とぎぬすんだ女郎見出して來
歌がるた手ひどく乳母はいじかられ
猫の子へ蠶なげにやる蜆とり
袂からけふは是ぢやと數珠を出し
しやうじんのうそを禿が引いて來る
寐た形で居るはきれいなりん氣也
姑の屁をひつたので氣がほどけ
生娘と見えて藥師を朝にする
勘當の訴訟のたしに鼈がなり
一人者内へ歸るとうなり出し

誹風 柳多留初篇 終

江都前句
判者門拼
校書
并景物歌仙入

誹風
家内喜多留
二篇

誹風 家内喜多留二篇

江都前句 判者川柳
抜書并 景物歌仙入

雪打の加勢に乳母の片手わざ
きよぶきに里の女は直をはなし
もし伊勢と思ふが親のちから草
つくだへも二人ぐらゐは厄拂ひ
按摩とりいびきをきくと手ぬきをし
若殿の痔ははえぬきの病なり
通りもの將棊をさすもあはれ也
供部屋へ禿が本を貸しなくし
狐火の折々野路をほころばし
うつゝにも團扇のうごく蠅ぎらひ
山伏の内のちまきはすごく見え
生藥屋でつちぐらゐは内でもり
はな紙へ蛙だきつくうばが池
母の名は親仁のうでにしなびて居
此部屋に一人寢ますと氣をもませ
見付番蠅をうつしてかはり合ひ

追はぎに逢うたもしるす旅日記
三味線屋ぢゞの代には外記で食ひ
仲條へめづらしもののごぜがとれ
障子さへはれば女房をよぶものか
吉原へてんねき配る十七屋
藥取やつぴし犬に手をもらひ
あやめ苅どぢやう汁とは出來心
藥とり出來て一ぷくふみつぶし
ながつぼねなんたる願で納太刀
はしご賣ぬき身と聞いて屋根へ迯げ
御りんじう二月に虫の壁を聞き
川越しも日なたで石を手だまにし
男坂えこぢに道はつけぬなり
正月はもみ手で路次のかぎをかり
たがかけに四五間先で犬がじやれ
わが物でたばこは人にしひられる

ぬりもの師表だたずにひるねをし
おらくぢやといへばあたまをなで廻し
きりもみはおさへた人がふいて遣り
かまはらひわれは乙女の氣であるき
掛り人ちひさな聲で子をしかり
是非なくも下女は其手で米をとぎ
いたゞいて仕着せのふそく舌を出し
髮を切る所をびくには髮をたて
お局は日の暮れさうなうしろおび
方丈は雜藏へ來ていちやつかれ
御神馬にちよび／＼じぎをさせて置
片足は四十二町の浪にぬれ
四天王金剛杖でいがをむき
大丸にむかしの殘るへんじ有り
お手がなりや互にひさをつゝき合ひ
角力場に氣のない男頰杖し
猿廻しえたいの知れぬ三味をひき
無理な首尾とはかんさしの弓で知れ
そり橋へ來るとかむろは對に成り
じゆずを持つ遣手は内が不首尾也

しこなして門どあにまふ地紙賣
疵の無い人は通らぬふしみ町
御所下り此頃ものも買ひならひ
髪を結ふ時に女は目がすわり
土手のかご宿へ上着をはふり込み
つねていのうそでは行かぬ大三十日
藪宿へ來て長髪のわりくどき
久しぶりたいことも一つどうづかれ
草津の湯とふく女房がふのみこみ
あいさつに女はむだな笑ひあり
髪ゆひの間五あしたならす下駄の音
辻番にへそから下の屏風あり
ふし見世は手がつめたいと箱へ入れ
お妾をよく見て歸るひらぎさし
楊弓場つれをまつ間のやりばなし
かこわれは隣で死ぬとこしたがり
大黒は五十にたら餅を喰ひ
こしみののうへからつめる中納言
本つきはとりをかゝへて休んで居
一旦那死んでよし町迄も知れ

おごつたを徳にして居るまけ軍
闇はれは鼠とらずを供につれ
ひきふぎであたまをはれば筋で請け
喰ひつみにめでたく地口言ひ始め
新造は茶わんでのんでついと逃げ
禿から目にもろ／＼のつみを見て
名代のすまぬ廊下に人だかり
寄人は夜伽の穴を見つけ出し
手一本なくしてかゝるぬひはく屋
お内儀はみこしと聞いて引こまれ
改元の日は片言を店へふれ
兄はわけ知らずに祝ふあづき飯
きのじ屋にとりめの禿邪魔がられ
五右衛門はなまにえの時一首よみ
口上を下女は尻からゆすり出し
見世さきへ出ては亭主を悄がらせ
ぼん過に袖をぬひこむ地がみうり
べに筆をかして逃げたるけづりかけ
元日に御用はだるくかしこまり
いろは茶屋大黒の湯が藥罐で來

惣仕舞いしゆがへしにはきれい也
たいことは是口をよくたゝくの義
こたつでは箱が這入るとさむく成り
朋輩がいしやの娘で事にせず
懸り人勝てば内儀にかりられる
梶原が寺にはどくをかきちらし
山伏が片寄せてふく火吹竹
けんげうの内儀はだめな美しさ
茶屋女さしみ作るも申したて
むこのくせ妹が先へ見つけ出し
灸するた子を明け番のひさへのせ
乳母が手へ渡ると羽子も二つ三つ
金持をうぐひすといふ音羽町
虫干を終に他人の手にかけず
傘をしづくで歸すりちぎもの
御かへりに雪おろしほど長局
欠落と見えて能い顔たゞ一人
花咲けば諏訪の親達遠くなり
一人もの行つて居やれと連れへ鍵
猿ぐつわ和尚をはじめてたてまつり

かんきんの間うれしい顔二つ
三つまたは素人の死ぬ所でなし
宿下りとなりの内儀ちよつとひき
口上のたびに手拭肩をかへ
在郷うばなげきの中へかしこまり
すげ笠の内へ帯とくまこも苅
なま酔に安く分別かしてやり
せきばらひごぜも少々にが笑ひ
おはぐろにじろりと禿にらめられ
うしろから能い顔の出るかゞみ磨ぎ
かはやから江湖の僧の笑つて出
夏大工はだかでたびをはいて居る
ころび合まじり〳〵と御用が見
草の庵蝿とりもちにきり〳〵す
俗の目を四角にふせぐうまい物
何かしら笑つて歸るあら世帯
後添は鼠が出てもびつくりし
のみ迯を生ぐすり屋へも言ひ聞せ
去つたあす物を探すにかゝつて居
御物見にあまつた首を塀へ出し

せいもんの度に水打つ初がつを
とつさまと寐る髪置はやせつぽち
店ちんの早く濟むのがかこひもの
氣の弱い下女はつまらぬ子をまうけ
三河記をやは〳〵ととくだんゝ僧
火ばしにてやぼめ〳〵と書いて見せ
隅田の景でんがく串であいさつし
寒念佛夫婦の中をさむがらせ
鳥の毛を捨るに風を見すまして
つくばつた嘶は土へ何か書き
木戸番はあたじけないと首を振り
虫賣のむごつたらしいろうずが出
乳母のやく朝めし前に一廻り
座頭の坊しごく大事に芋をくひ
地ごくでも目あかしをする首二つ
懲り人むかしをいふとはりこまれ
のらへ出た留守に一人で産んで置き
四斗樽へ珠數の切れたを溜めて見せ
里歸り玄關に杖とはなねぢり
子を持つた大工一足おそく來る

親類を見知ると嫁はもめんもの
肴かざつて乳母ははだかを追廻し
一村をすゐにして立つ旅芝居
太神樂見せる髮にはゆいとばし
金掘と井戸ほりの氣は十文字
迷ひ子の親はしやがれて禮を言ひ
産んだ乳のあてくらをする長局
出ぎらひといふ振袖はどた〳〵し
さいりやうの付いた車は廻りかね
朋輩が亭主見るとて寄りたかり
三味線屋うしろぐらくも灸をする
百旦那もろこしをむくごとく也
念佛講すでにとらんと仕り
うばどのを貸しなといへばあかんべい
長局ばいやつて見るびんかゞみ
黒木うりまけぬあたまを重くふり
本ぶくの元のごとくにしはくなり
本ぶくの比丘尼は結つて見たく成り
料理人一つ出しては覗いて見
草市にばり合のない月行事

大江山くらひものからつけこまれ
四五度め師匠はばちで胴を打ち
けいせいのくつ／＼笑ふはした錢
つり臺の中へはな紙はふり込み
米つきは一きねに首二つふり
げぢ／＼は二疋ならんだやうな紋
綿帽子だけは佛師も心得て
泣出すとうばはたが屋と論判し
さうさくの内隱居所をくすぼらせ
江戸町へ戻れば初手の顏はなし
腰越でもの喰ふものは馬ばかり
お座切といふのがよめのくせに成り
をどり子が來るとそばから非を仕廻ひ
能いむすめ母もほれての數に入り
草もちの使はすぐにいとまごひ
二つほど引いてめし喰ふはたけ番
居續けへなまにんじやくな母の文
草の庵朝寢おこせばさるぐつわ
くらがへは遣手をねめてずつと出る
鐘の施主四五町先で音をためし

とこみせの將棊は一人腰をかけ
燈籠賣やんま追ひ／＼かへるなり
通り者口から出して錢を買ひ
角力好き女房に羽織ことわられ
役人のほねッぽいのは猪牙に乘せ
大工わろ左官に帶をしめて遣り
お物師のふきがら一つ氣が違ひ
ごぜの尻たゝけば無理な目を開き
井戸ばたで我おさらばを揃へて居
約束の戸は二つとはたゝかれず
算盤を二度手に取ると直が出來る
女中から夜の明けかゝる花の朝
口笛は何の氣も無い道具也
奧家老らせつしたのを鼻に懸け
雪なればよしとずつぷり引かぶり
四つの時至つてもまだ見世に居る
又一度手紙をひらく枕あて
ちりめんは遣手の遣ふさるぐつわ
なく時の楠は矩燵を越して落ち
明星の茶屋からやめるむだッ口

戀むこの下着はみんな直しもの
さる廻し子はやつかんで後を追ひ
乳母の名は請狀の時よむばかり
一升の酒で御用を供につれ
旅役者落馬で所作の所をぬき
撿校のなりたちをいふ三味線屋
切見世は歌を通してひよつくり出
やかたから人と思はぬ橋の上
傾城は遣りぢからなき貰ひやう
まんざらな腰を禿はおしならひ
よし盛は世帶くづしを申しうけ
ふみ使引つさく迄を見てかへり
醫者衆はじせいをほめて立たれたり
たいこもち一はねはねてかへりけり
判とりは責上げを切る時によび
すいたのが來りや抱いた子と頬ずりし
あなぐらへ氣づよいよめは一人おり
色事にはねのはえたる淸水寺
やくはらひ御さいの內で手間がとれ
關守もときれた所ですねを出し

ぎり〳〵の所で常盤は色をかへ
神樂堂一人はさびぬものをさし
戀やみへ母の細工は猫じやらし
なぐさみに女房のいけん聞いて居る
しうとめのよめには氷孫にとけ
鳴り止んで折目をたゝむ普門ぼん
地女に毛むし二つで化けられず
出格子で鰹買ふ日は旦那が來
石臺で見れば山號甲を干し
ねぎつても人ぎきのよい石燈籠
柴を見ては京でもあきれべい
燒香を先へしたので後家と知れ
山入の笈に奪きものはなし
はやり目の一側(ひと)ならぶごふく店
そば切のあかりをかする夜蛤
四天王わたなべばかり紋が知れ
切見世へ這入らぬものは施主斗り
油むし折々湯屋の桶をつみ
峯の寺小僧があればこそ笑ひ
中宿で衣をかへしあたふれば

どんじりに乘る唐人は算がたけ
角兵衞獅子全體無理な毛をはやし
抱きついてあす氣のすまぬ人違ひ
紙雛に角力とらせる男の子
じゆずを切る時は姑がつけ聲し
屋形にも捨がなのつく料理舟
紋所にわたくしの有る長局
小判にてのめば居酒も物すごし
きも入も端女ぐらゐは外(さと)に置き
には鳥は何さ〳〵でもらはれる
遠乘にそろばんのいる事も有り
ばんござへ須田高橋はぶつかへり
土けむり中にまじ〳〵座頭の坊
すつと出て後(うしろ)を見せるだんぎ僧
二三ばいのむといばらき頭痛がし
醫者へ脉はしたに見せるりびやう病
人代はこれも同じく役者にて
神樂堂蠅を追ふのがいとまごひ
とつさまはぺん〳〵〳〵とならして見
あきらめて氣強い女房ごくりのみ

茶屋女日和足駄でとちぐるひ
女湯をのぞきがてらに小便し
三味線屋かたり出すかと思はれる
ほゝづきは禿へはさむ水肴
江のしまのまたは六十一日め
深川のふみには二文添へてやり
小便所談義で母へさうだんし
石山につくねんとしたうつくしさ
ひいて見て又首ひねる三味線屋
女房になぶられて出る地がみ賣
をんびんな藥禮もする長つぼね
ざうりとり禿へさして汗をふき
ふせ勢にえり殘されし笑ひ好き
にうり屋へなんだ〳〵と聞いて寄り
ぬひ箔屋のびをしてから飯を喰ひ
三めぐりの雨は小町を十四引き
小便で盗人をしる西瓜ぶね
長生きをする足輕は馬に乘り
百番の外は風呂屋に緣がなし
月の座へまねけば月を振廻(さは)れ

やげん堀どぶ板迄が一度なり
つみ髪の前やくらしい美しさ
ぎり仁義知つた男は七兵衛
すひ付けてけむをいたゞくのがけ道
蚊の中に坊主禿のあはれなり
ぬひ紋をさぐらせて見るごぜの母
こし帯を解き〳〵ぬるい茶を貰ひ
角田川ところの人はかもめ也
あうた日を覺えて居るが女の氣
茶屋の嫁もゝ色程はのみならひ
突出しは七十五日客が來る
下女の髪二三度立つてやつと結ひ
すげ笠を元直に賣つて書いて遣り
おさらばを宵にして置く宿下り
ふられては連にも物をいはぬ也
見つかつて馬盗人は乘つて逃げ
盆をどりもうちつとのがおんど取
居なりかとひなの使にきかれけり
無いもせぬ目をむき出してはたる也
車留きびしいすぢを二つ引き

廿五と四十二で込むわたし舟
桶ふせは元手のいつた恥をかき
一人づつ遣り手は嫁へ引合せ
通り町うろたへて來た蟬の聲
突出しの半ほど喰ふ恥かしさ
牛かたのあきらめて行くにはか雨
町内でみんな忌服の有る娘
料理人歸ると女房よめを聞き
やは〳〵と引立ててきく葡萄の直
兄弟の夜うちは紙張目にかけず
寄合をつけてふられたうらに行き
姑のひなたぼつこは内を向き
ぼたもちをいさぎよく喰ふよめの里
女房が死ぬと夫はふみを遣り
地紙うりくされな文もことづかり
里のない女房は井戸で怖がらせ
光秀は扇子の形に箔を付け
蟻一つ娘ざかりをはだかにし
氣違ひに成つたでよめの理が聞え
花むこはよほどの頭痛おして起き

ふきがらを禿をよんでたづねさせ
降るならば一日むだにしようぞえ
添乳して何か亭主にかぶり振り
渡り初めおつかなさうに踏みよごし
御さいの子もえぎの紐であやを取り
てんば乳母切金入のお子を抱き
證文を淋しくたゝむ座頭の坊
門松にすがる禮者はきげん過ぎ
女房は先荷がつくと明けたがり
切張もはかまでするはきつとげび
けちな盆片荷へ入れるつくねいも
やうじ差持つた丁稚を問ひおとし
年明けはだし殼を喰ふきみがあり
初がねはお茶湯程に並べたて
もろ白髪迄はあぶなき女房なり
白拍子くぜつの跡でわぼくをし
やせぎすはうばがじまんの亭主也
たばねのし釣鐘堂にのたを打ち
うなされて夜着の上からでつちられ
ぶんさんの禮にあるくは色男

いき物のやうにとらへるところてん
はゝおやの勘定高いさかおくび
ちらし書き田舍へ行くとくもがおり
くり婆ア娘は二俵ふまへて居
めしびつをかはる夜伽へ引渡し
旅立は二度めのさらば笠でする
小さむらひ質屋を出ると新むけん
ごぜのかね口をしさうに見て貰ひ
かきたてた跡をづぶ〳〵つき通し
風の神せなかをながすすがた也
はげあたま能い分別をさすり出し
でんがくの口は遠くであいて行き
みす紙を麻なんしたかと下に置き
むごらしくもゝ立をとる赤がへる
女房は廣袖を着てうけに行き
車引かぢがはねるとぶらさがり
おはぐろを貰ひに行つてわたを入れ
ふところでふんどし締める雨やどり
古着買米あけざるとしめしかご
ぬき櫛に引つ立てられる病み上り

下女の文ぼん字をひねるやうに書き
料理人堀に居る內ならして見
よめのつまえんやらやつと五寸明き
氣違ひのひざをそばからかけて遣り
藏宿に一人か二人うぢ〳〵し
町內でごんめうに知る感應寺
去り狀の跡へ紺屋が出かして來
片足を仕廻つて居酒のんで居る
のまぬ客ちよつちよと酌に時を聞き
玄關番さながらじゆずもくりがたし
煤掃に一人か二人ばかな形
山寺はなま醉のいふ謠なり
門ちがひから幾春の御萬歳
どつちらの袋かしれぬ三丁目
えり人で鰹をれうる長局
色娘をとこの顔へなんをつけ
花見から晝めしに來る下谷筋
しきみうり一本出してふりを付け
我作の立聞きをする門左衛門
髮さげの有るは巴が具足なり

ほころびの內こたつから首が生え
ならうならせめて文殊の無分別
瓜喰うた所にわすれる柄袋
水引ではまぐりを釣るひな祭
つよい癪いけどるやうに人をつみ
おやぶんはのんし〳〵で割を言ひ
切れぶみにせめて使のむなづくし
御出入三人扶持で泣き寢入り
時分觸戻りに辛味さげて來る
平家方皆舟ばりでしやくをおし
忠のりはかつてをわろく取つて投げ
日りんに迯つッかゝる無法もの
よし町で年增の方は二役し
辻番へあくる日へどの禮に行き
念佛のころがる內儀やとはれる
さいそくも質屋はゆるり〳〵とし
おやぶんをたづねに這入る夜講釋
ひまで居るやかたにろくな事はなし
見ぬ顔をすれどちよッちよと針が止む
朝歸りもてたやつから噺し出し

連れて來てくれなと一つどうづかれ
鹿坊としこなして呼ぶ鶴の丸
をどりこをくよ〳〵と見る橋の上
御亭主が留守で南瓜の直が出來る
てつくわうちそのくせ妻は繼女房
御隱居をあまロに見てめしにつき
髪色はむほん勝負の花見をし
曳馬ひき武士のめしをも喰た貌
はごの子の干物を拾ふあやめふき
女房のすねたは足を縄にたひ
しちりんへどつさりすわる病上り
じゆず袋よめのけいはくはじめ也
手習子かへると鍋をのぞいて見
福山はちとあやふやな傘もかし
風呂敷は雙六うりの頬被り
料理人うす刄へのせてつまゝせる
卷ずるめたけた娘へちよいとなげ
お妾をねめ〳〵こぼすせんじがら
狐つき鼠と迄はのぞみかね
落武者は榎をうゑぬ道をにげ

ぐち斷おくつて出ても小半町
立ひざで文を書くのもすがた也
笑ふにも座頭の母は遠慮がち
中の町はかま着たのはいたく見え
孝行に持つ女房は年かたけ
小じうとめ母が歸るとそばへ寄り
橋の番たしかになげた水の音
京だんとどさあで九年いぢり合ひ
若い乳母くづして出たと噓らしい
ほころびをのぞいてあるく花の山
中宿はざうりにすみを付けて遣り
山川につまづくやつがさいご也
おもしろい事を女はもちころし
本くじを取る山伏のすばらしさ
木曾殿は客をじやらして飯を喰ひ
くらやみで龍王湯をがぶりのみ
勾當はまだ氣のすまぬ杖をつき
淨瑠璃のてんねきまじる元結こき
言ひふせる氣で蠟燭のしんを切り
あれ娘しめしを當てゝさづけられ

母親は百度參りのたち番し
風呂敷で引ッ越すうばは立のまゝ
あら切は一(ひと)夜さ切のはれに買ひ
しばられたやうに髪結ひまで居る
夜鷹そば心せはしく汁り喰ひ
雷もすゞめがなけばしまひなり
夜講釋杖で來るのはけだいなし
船中の小便巧者二(ふた)人たち
筏のりばか〳〵しくも野を戾り
柱にも少し藥の有る旅芝居
いたゞいてのむもくやしき山歸來
石屋にも一つか二つ繪の具皿
お飾りをとなりへぬけるなづた賣
是むす子一ッぷん捨る氣に無いか
よめの顏目がねの外(そと)でじろりと見
禪宗は坐ぜんが濟むとのみを取り
うち出しの頃泡雪はくずをねり
うらの夜は四五寸近く來てすわり
帆柱の立つたを寢かす舟比丘尼
伊勢よりも三河は顏がのせかなり

火の見番人の拾ふを見たばかり
よめの物かりて談義でなぶられる
小侍蜘と下水で日をくらし
月なみをのみ〳〵下女はぞんざへる
梶原と火鉢の灰へ書いて見せ
義盛へ鰹がとれておしよせる
時がりにちよつと五兩は大き過ぎ
年玉の茶わんをむいて護國院
藪入に母はおめしの水を引き
足の毛を引くが女房の中直り
ふくろ持一生ひまがあかずに居
いくよ餅しなのの臼でつきたがり
そこ意地のわるいも見える六歌仙
うたゝ寐の枕四五冊引きぬかれ
むしつたをけんしの笑ふ小柴垣
團扇うり少しあふいで出して見せ
門松を取ると出て見る玄關番
下女が髮さし上げて出てものを買ひ
戀むこが來てうす紙を引つぺがし
料理人うなづきながら市へ立ち

客と行く棧敷は遣手まく工面
くわいらいし番町邊にからんで居
かたびらはかたみの中でうすい緣
母親は居つゞけ迄もかさとかけ
百本の御てんへひどく御緣日
熊谷はまだ實の入らぬ首をとり
おはぐろに禿は廊下ねつて來る
ひぜん迄二人(ふたり)禿は對にかき
義朝は拔身をさげて打死し
簪をはかりにかけるしぎと成り
折々は口書に乘る奈良の鹿
神子の穴ぶんまけて行くかま拂ひ
色男ちとそろばんはにちう也
三歩だけ事げんぢゆうに賣れ殘り
べつ甲屋くるつた所を繼いで遣り
茶ぶるまひ皆一人づつだいて來る
心ではあいつをなアと見たばかり
此頃は途方もないとたゝく尻
赤がしら靑瓢簞を抱きあるき
かぐ鼻はまゆをひそめて言上し

あぶれたは遣手のかたをもんで遣り
ぬひはく屋五色に壁へ吹きつける
神酒德利きやたつの上で振つて見る
つき米屋女を見るとつよくふみ
寐せ付けて亭主とかはる松の內
あたりからやかましくいふ年に成り
はかまかと隣のていしゆ聞きに來る
とぞ袋嘉例のやうに八つを聞き
すり子木の鏡へうつる新世帶
玄關番貧乏ゆすりして咄し
奏聞も船へするのはぐわんぜなし
たち入つた咄の多い御藏前
麥めしの馳走は和尙水かげん
見せず共よいに太刀賣ひらり拔き
渡し守手を遊ばせる人がのり
長つぼね一人か二人高まくら
座頭の坊みそ役人を言ひまかし
けいあんは文字か方かと聞いて行き
とび石にすると和尙の夢に見え
用のないわに口たゝく護符とり

尼に成る場を氣でくつてよめに成り
才蔵は村でもちつと口をきゝ
一人者小腹がたつとくはずに居
よみ賣は客一ぜんをわけて持ち
ごまめうり猫に一疋けいはくし
二代目は金だまの飛ぶ面白さ
おちやつぴい宿下りの噂に二三度來
一文の事でふりむく黒木うり
土民とは公家衆のいふ言葉也
藤柄をかいこんで出る大庄屋
俗納所よく／＼聞けばしうとなり
我寺に成ると遊行は追出され
しきみうりきつい結間を言習ひ
佐殿もいたしかゆしのふくみ状
おふくろは只こつくりを願つて居
よし原は大坂ばかり他人にし
かんざしもさか手に持てば怖ろしい
丸合羽むねのあたりでふし拜み
女房はなんぞの時を待つて居る
拝領の評議で鼻毛をもらひ

かるたの繪我鬼島の道たらで
よくかける所で矢立は水をさし
うどんふみ本繩といふ立姿
玄關番のむ内御用待つて居る
ねこのめし入れ添へて遣る花ざかり
尻のろんにたくのもさすが女也
太平記もとが女の口ひとつ
草市にうろたへてなくきり／＼す
茶屋斗り深みへ行くを知つて居る
鰹うり名でよばれるはあたらしい
ふきげんな客舟宿の戸をたゝき
女房にせがまれて賣る石燈籠
居つゞけは二寸切られるかくご也
掃く先をやう／＼とたつ物思ひ
むほんとは大屑らしい一分なり
じゆず屋ではこしらへ上げて一拜み
本加賀御さいの内へおッつける
子の祝ひ夫婦げんくわの一つ也
仲條を御さいは母でひき合せ
宮芝居百石ほどの工藤が出

飯がはり眞木をむしつてさあと云ふ
座頭の坊手綱を持つてにこ／＼居る
小間ものと地紙みそこい喧嘩をし
玄宗はなき／＼耳のあかをほり
うぶぞりにたすきはづして膳に付き
鶴ぞりでおけばよいのに莫也
新酒屋さして二階をおッぷさぎ
[illegible]
盃をさせば三みせん枕につき
[illegible]
安珍は手前でいのる氣がつかず
[illegible]
米搗のなんにすねたか二はいくひ
帯の内ちよつとよみれと淀の聲
氣ちがひは繪に書く時は笹を持ち
ゆびの出る足袋か小歌の聲かしら
能くしめて座やと女房へつとめて出
市過は錢の入る事とろつぴやう
手の筋を見ると一筋けちをつけ
乞食能二三町づつかして行き

女醫者わたりがついてやめに成り
座頭の坊何を聞いたかにこ〳〵し
薬箱むかうのさなだ取つてやり
いそぐのは渡しの錢をにぎりつめ
二三人見物のあるごぜの灸
かし本屋おとし咄をして戻り
殿様にだかせて置いてをかしがり
よめの琴ちかしい客へ馳走にし
勘當を麥で直して内へ入れ
松の内廊がみしもの袖だたみ
親の日にあたつた下女は二つかみ
五月女をすゝいでは出すかるゐ澤
錢買ふと禿は借をなしに行き
きしばかりこがせたがるも女の氣
日待の夜紙を敷いたはよめのぜに
大ぶくをのむ友達に留守をさせ
提灯をけせといひ〳〵飛車をなり
お局もむかし御家へ土佐ですみ
手間取つた髪を姑女じろ〳〵見
しはいやつ哀な酒に計り醉ひ

合羽屋と紺屋と寄つて境ろん
むりいとまりきんだ男荷をかつぎ
時鳥聞かぬといへば耻のやう

尺八にむねのおどろくあら世帯
供部屋は五町の酒のうはさをし
扇子うりまけて戻つて戸をたゝき

當世の前句は俳諧の足代ともならんや。よつて六々の吟に川叟數としこのめる景物を掻集結ふといへども同様の景物多きゆゑ、輪廻遁れざる所は見ゆるしあれかし。此道執心のかたへ景物を顯し知らすのみ。

呉陵軒可有

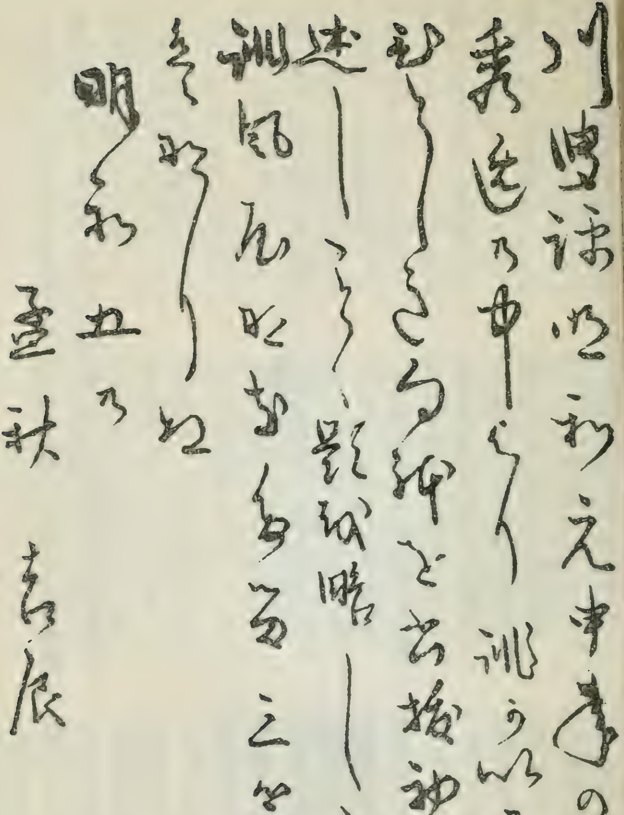
番船は風の手柄ぞ猿田彦
　三寸も目出たく見せ先の月
紫のねぢり服紗に露結ひて
　矢立の筆のどれも短し
晝の蚊に玄關の角（すみ）を追拂ひ
　氣もかろげなる料理人也
初に逢ふ妾の癖を能く見つけ
　隣に持つて遠き仲條

閑象戯くれんかへして歩を尋ね
　髪そよ〳〵と凄い山伏
旅芝居俄渡しの込合て
　骨牌冥利に盡きた世語
園はれの姑の無いがとり得なり
　根津もいろはも樹々の下蔭
手にあたるものを道具に順の舞
　間がな透がな撿校を召す

最明寺殿の留守にも月や華
　山寒の干出御の字そかし
僕人の迎ひの傘のひとからげ
　通り〳〵御の落つるよし雨
そして女身なも前さす掛り人
　捏折く菓子を出されつる神
木積記も並う四五枚に窮催み
　年並あたる庫頭おそろし
十二月明けかゝる夜の蝶蝶
　看病されみずらた寐帰け

美しいのは道出して無禮講
　食ひ辨慶の尻のおもたさ
衝立の月のこなたに質取
　片唾を呑んで菊の源平
山門に高雄の秋を配らせて
　乳母も遣り手も駕に嫌はれ
御さいとはいつか近しき色男
　童の一盃白東宇止む
花俤ひおの〳〵酒の四天王
　暑にはたらく小作かな

誹風
柳多留二篇終



誹風 柳多留三篇

川柳評明和元年申年の頃秀逸の中より、誹かいにひとしき句體を書抜き、初篇に述べしごとく題を略して、誹風屋那支多留三篇とはなりぬ。

明和五の孟秋吉辰

だんの浦能州出やと笏でつき
内儀へははしよらずに出る草履取
馬道具屋亭主と見えて皮に坐し
書かぬ嫁一ぺん通りせつながり
仲條はむごつたらしい蔵をたて
物さしで雪をつゝつく日記づけ
橋の番丁稚に見せてあれだぞよ
鐵棒で捨子のろんにきずを付け
若餅へ一臼すける禮の供
鰹うりつるべを落し逃げて行き
料理人ひよいとはふつてかみ合せ

相馬公家おッこちさうな雲の上
まな板をたばこの時にけづらせる
大くぜつ高がばい女と云ひつのり
次の間へつくろつて出す硯ぶた
お内儀の手をおんのけるいわし賣
ふき殻をじうといはせるちんこ切
悪方はあぶら見世など思ひきり
たいこ持がつかりとしてよめに逢ひ
愛想にごぜはあやして泣出され
にえきらぬ娘を伯母へとまりがけ
青二から出るは正月ぎりのよみ

火吹竹持つてまき屋をしつ呵り
岡場所のありんすなどはづわらへい
鐘の聲日もしやうじんも落つる頃
鶉ぶとんかゝへて這入る玄關番
のびの手で髱へさはつて嗅いで見る
げいの無い座頭は玄關から上り
よめの顔見い／＼まきを一本引き
中の能いよめはお經をよみならひ
小豆がゆ家のけむりの立てはじめ
木綿うり乳母が見る内だいて居る
ひる見世はよく笑ふ子を借りにやり
盃の時に何にもおつしやんな
傾城は一はぢかくとはやり出し
またの灸あつくないのは哀れ也
針妙の折々くらいすそ廻し
たしなめば惣身のかゆい狐釣り
毛ぬきうり我のを一本ぬいて見せ
もうよめは二把で五文を買ひならひ
三味線をかりれば藝者なまへんじ
そゝり貝とかくに跡へとさをつけ

うら壁はとなりでかへす江戸の町
ぼんをどり子をしよつたのが頭分
新酒をば御用が出るとふつて見る
料理人まはらぬ舌でほめらるる
拍子木で捨子のまたをあけて見る
入聟が抱かうといふとべそをかき
藥とりきのふ餘つた噺をし
無盡茶屋一本か二本杖も見え
あらを煮て杓子果報にしろと出し
すぼまつて馬からおりる宿下り
今暮れる日にけいせいは拘らず
ある時はころぶ程着る通りもの
年わすれ廡上下で禮を言ひ
屋根ふきは四五寸先(さき)も一つうち
すゝはきに玄關で肴直が出來る
藏宿のよめはこゝろで笑止がり
ひッかいてとめかす賓はまけて行き
よし原へしきみの元手かりに來る
生酔を少しあて身で引いて行き
總仕廻わづらふ禿またがれる

神樂堂ゑぼしを着たが聟と見え
大三十日首でも取つて來る氣也
國者に聞けば四五人居士に成り
沖の船どうにつかれる心もち
麥ばたけざわ／＼／＼と二人逃げ
すり鉢に舞をまはせるいくぢなし
小侍きやんなはしたにかぶせられ
今見ろよとは重盛が言ひはじめ
生垣のそばにすゝ竹小半年
借金をいさぎよくする祭まへ
下る乳母亭主にこ／＼櫃をしよい
若い者あたまかき／＼かしこまり
愛想をよくふられたはぜひがなし
女房を叩る時にはさらへおけ
ぬき足でめしびつを出す夜手習
神奈川の客は大方風できれ
小道具屋忘れたやうにまけて來る
是はさと佛のめしの中がへり
知れぬ字を砥へ書いて聞くちんこ切
仲人も夜ふけて呼べば虫をやみ

笛うりは通り神樂をちつと吹き
うりたてに喰込みのたつゆでん栗
小便でつくだの藤を見てかへり
信濃をばお寺のやうに直をきはめ
新納所先づ靈膳へせこを入れ
あをむいて見ては米搗ひだるがり
根津の客髮結床からすつと行き
野雪隱地藏しばらく刀番
仲直り疵の有るのがのんでさし
おちやつぴい湯番の親父言ひまかし
酉の町不首尾なやつは屁もひらず
懸り人りつぱに出來る疊だこ
屁をひつてをかしくもない一人者
道中で霜よけらしい駕に乗り
物申にまどから顔が二つ三つ
口先で日和をくづす美しさ
紅葉狩どつちへ出ても魔所斗り
よふかしな娘の所は袖ばかり
新造はのむと力がつよくなり
うしろゆびさゝれた女郎天上し

御内儀にとはれてつきや三つぶ喰ひ
ふきげんを人に知られる鴨子引
盃の二つ來て居る座頭の坊
次信をそんにして置く勝いくさ
うたゝ寝も上ひんなのは本を持ち
ねついごぜ内ぶところにばち袋
木綿店戸をたててから隣也
かさもりのだんごは七日母がうり
飛鳥山淺黄の頭巾安いしやれ
三度迄産婦へ聞いてじれさせる
かし本屋何を見せたかどうづかれ
すつぽんの首を關守見て通し
囲はれの給仕はしごを大儀がり
すゝ拂ひけふのかたびらむね合はず
町人はぼう〳〵として年を取り
張物をいけどりにする俄雨
振袖を出してきしやごを宛がはせ
子おろしもてんねき醫者と出合ふ也
けいせいのこたつは住所定まらず
とひ竹はまけて來る時肩を替へ

なり下りこし高杯へ醤油のみ
供廻りかねつき堂を追ひ出され
夜だんぎを半座で母はつれてにげ
身揚りのこたつへやり手のめり込み
煙管にて寄せる屏風のもどかしさ
こもそうの親はきゆうせん筋と見え
首ぐるみ打ちまぜにする曲だいこ
ひやめしを見い〳〵内儀米を出し
ねんねこの腰は左右へ少しふり
錢ついて殘り一文碁の手つき
永い日も二つは出來ぬよめのかみ
三聲めの賴みませうはさうり取
樽ひろひ紋の付いたは新下り
鰹の直居風呂でする面白さ
亭主からものを言出す朝がへり
めしたきのうやまつて聞くかま拂
はづかしい時には袖をもちにつき
女房を持つて朝寐にきずがつき
神樂獅子もぐさのやうな衿ッつき
しうとばゞどうじくねても年が無し

物さしでひるねの蠅を追つてやり
四百づつ折々母はたばかられ
江戸の伯母あてにはだなへ乘つて來る
衣川さすが坊主の死にどころ
桶と花提げて定紋見てあるき
御藏前かぞへて居てもかさぬ所
猪の早太齒をむき出しておどされる
舟宿で化けやれと師のたまはく
棟上を手渡しにする病じやな子
根津のぎうさく料などと洒落れて言ひ
しやば已來是は〳〵とそりかへり
起請とは裸にせうといふ事か
小間物やりくつのよいは二人で來
水賓の一つか二つすゞ茶わん
世のよくの襟をだにもえりかへし
高枕母もむかしの覺えあり
二三日留袖に成るとまり客
兩袖をさがして後家は數珠を出し
生いわし見切に賣つて水をまき
ことづかる文で頬などなでて見る

二三町女のはだし許がつき
綿の弟子歸ると母につまゝれる
守りをば衣桁へ懸けるにさい客
けいせいの枕一つははぢの內
つれの名をふられたやつは生で言ひ
若亭主出ようとすればさづけられ
氣をつけてざるを出させる新世帶
名を聞いて角々へ書く地紙賣
かゞみとぎ今年もきつい御成人
若いごぜ壁をさぐつて一つぬぎ
たぬき汁化かされたのが一の客
御親父へ其めりやすがきかせたい
もてぬやつ舟宿へ來てわりを言ひ
五百兩いじかりまたにあるかせる
湯歸りを見すまして居る一さかり
棧敷番赤くないのは店を追ひ
禮もせぬくせに藪醫のなんのかの
鳴子引子の愛想に一つひき
炭はねて引け四ッ程にどつと立ち
いやがつて月に一筋づつがのみ

一人客給仕とはなし〳〵喰ひ
內のものよろしくなどと作を入れ
乘懸けに一分そこらの床も見え
朝路から戾り大根のこもを取り
五人張相手の出來ぬ見倒し屋
淀の舟車近くでゆりおこし
外科の供とかくいさいを聞きたがり
傘で出る藪入はなぐさまれ
角大師寐させて大工水をもり
車引き橋で醉狂者を待ち
いく世餅どく〳〵にして汲んで出し
けだもの屋藪いしや程は口をきき
あいにくといひ〳〵飯をかりに來る
女房を怖がるやつは金が出來
用心に置かうと和尙けちな槍
長い目でごらうじませと嫁はいひ
女房はそれ見なさいと外科を呼び
そばの客將棊の駒で數をとり
だうこ庵人がらの良い買ひぐらひ
念佛講死なねば根から損のやう

裏茶屋はかの人斗り來るところ
むさし坊水車程しよつて出る
一步だけ遣り手は尻をどたつかせ
女房持山を見い〳〵鹿を追ひ
此村になんと酒屋はごさらぬか
てんびんをたゝく手代の目がすわり
せいろうの禮は片肌ぬいで來る
大釜へ半分這入るなべいかけ
圍はれも二三人程琴の弟子
新造も見やう見まねにまげに遣り
夜夜なか孫を泣かせてしかられる
さりながらぶつにはましと甘い母
坪皿が明くを見て行くしら使
革たびをさかい〳〵で賣りつける
田舍うばかごで二三度へどをつき
豆いりをくひ〳〵あとの數を聞き
出入からしくじれがしの俗納所
かねやすは嘶を書いてかべへ張り
雨替屋りつぱに細を引くはへ
うなづいた許りは心もとながり

乳母が宿一(ひと)針ぬきのそば袋
俳名の無いのを遣手うれしがり
すけつねは二度めの疵が深手也
里歸り夫びいきにもうはなし
のり物へきつい山師とゆびをさし
高山ではぢはかけどもよい男
兄弟はさがみ女にくらひ込み
しやうじん日肴が來ると時を聞き
狐つり衣を一つまうけたり
そん金の世間へ知れるせと物屋
皷入に旅立ほどのいとま乞ひ
談合は取付き安い顔へいひ
舟宿の訴訟で禿藏を出ろ
十八の暮に大事の客が切れ
やうじ見世ごへいでなぶる神馬引
大三十日鬘を仕切つてかうせめて
やき物と小僧を一人ことづかり
茅場町手本よみ／＼舟に乘り
菊水も能く／＼見れば手前染
供部屋で何か遣手は問ひおとし

えり人でかん病に出る狐つき
茶屋女まんまと布子仕立てたり
はなしやれと四五冊かくす貸本屋
とぶやうな舟であらうと問落し
ひしこの直つるさつてする繩すだれ
鋲打にのればつッぱるたてゑぼし
祐天のにせなど貰ふ新世帶
皷入へ毎ばんそばのせしゆが付き
新造の袖も思へば怖いもの
おやぶんにおうさ／＼で引きずられ
丸綿をかぶせながらもいひふくめ
かんざしでつッ突き廻す三世相
草市ではかなきものをね切りつめ
すひ付けてあつたら内儀ふいて出し
盃を肩から渡すあんま取り
湯淨瑠璃着物を着るとけちな聲
百姓の茶屋に成る日はふりたがり
どつしりと置いてからいふ臼の禮
通り者よみをうつのは病上り
師匠樣親類書の伯父に成り

れい／＼と追人の中にむこの顔
かんな屑かみ／＼大工といで居る
寐せつけるよめはこたつへ腰を懸け
いけ垣のうらの相手は旦那也
石燈籠ある夜うれたる夢を見る
大一座鳴りのしづまる急用事
所化のどらこんみりとした事もせず
手をあぶりながらほたけの禮を言ひ
土砂の入る往生をする衣川
奈良へ行く人にくれ／＼石の事
地がみ賣よし町已後はなどといひ
ふんごんで楪を取るのが旦那也
おふくろが切つて廻すでのびろげな
犬を追ふ棒はなげるが仕廻也
自身番捨子が泣いて世帶めき
まゆ毛へも女六部は手を入れず
吉野山人のよくいふ地口也
八文が呑む内馬はたれて居る
新大屋後生大事に繩を持ち
嚢巾に出て里扶持を取つて行き

はりものの杭を舂屋が打つて遣り
朝湯には一人か二人通りもの
鳥追は笠をちよつちよと撥で上げ
椀と箸持つて來やれと壁をぶち
玉のこし大きな殿のかつぎもの
緋の袴足のあまりもしづかなり
相傘をさびしく通す京の町
間男のはだしはきつい不首尾也
藥迄春は目出たくのんでさし
ぶちまけて二(ふた)足にげる炭俵
のろふやつどこぞか面(つら)に申ぶん
ぬけ參り笠をばかぶるものにせず
名代はなだめ盡して呼びに行く
品川でなげ入(いれ)にする目黒花
芋の皮でもむかうかと邪魔に成り
切先で麥わら笠の直を付ける
文枕たはけな夢を見るつもり
うしろ疵うけたで弟子は皆はなれ
お妾の剃つてはじめるむごらしさ
升わなをいひ付けて出る狐釣

來た月を入れてはつ／＼ぐらゐ也
女房のいけん一歩が薪をつみ
歸るちよき赤とんぼうと行違ひ
つぶしたですまして常の飯を喰ひ
あつけない一歩が螢飛びじまひ
夕顔は大工のたてぬ家に咲き
ほれ帳を九十九夜めにけして置き
女房へ乳だ／＼と押ッつける
張物をはづすにごまのはねる音
田樂の二筋めにはこきあげる
野ばかまでこじりはねたが御用達
天神に廿五もんめおもしろし
張物に娘はにくい腰をいれ
せきぞろにつかれて乳母は泣出され
ふんどんをはり合もなくよめは取り
物思ひ藪入已後の事と見え
村で聞きや大僧正も血の餘り
料理人いつそ池だとつまだてる
來年の樽に手のつく年わすれ
こま犬にかぶせて拜む三度笠

小間物や少しよけいにかぎを
樽代がすむと無用の札を張り
なまぬるい鉢卷をする錢車
金ふきはふりに成るのがしまひ也
夜講釋張飛びいきは頬かぶり
穴市の助言しに行くいしやの供
一寐入ねせて夕べのいけんをし
母おやもともにやつれる物思ひ
あるときは白く寐て居る通り者
夕あぢは丸ぢやうちんでえつて取り
三味せん屋高利の方はつき合はず
産あげく夫遣ふがくせに成り
座頭の坊久しぶりぢやと丸められ
ばんあたりちつと來給へどれも下手
からかさは八日の手つけ十二日
いふ所でいふわと宿は下女をねめ
市過のよめ喰ひつみで引合せ
羽二重は弱いつよいの沙汰でなし
水を汲む音のきこえるわかれ酒
張物の大蛇に見えるつむじ風

軍學も紙帳でするはすばらしい
ぶら下げて首尾よく仕廻ふ年男
さる廻しつかんで出ると肩を出し
二三歩がすゞめを納所買ひに出る
女房のかたうでになる茶をはうじ
よくどしい所でしめる小間物屋
乳母が灸そばに泣き人が付いて居る
寒念佛首じつけんの時もあり
桶ぶせに成るほど今はさがらせず
しんしうり御健勝かとこしをかけ
髪置は乳母もとつちりものに成り
こしかけて仕立物する茶やのかゝ
乳母が宿歯をむき出して一分取り
宿下り供の吞むうちふみを書き
謡講仕廻ひに文字をのぞまれる
木戸番は二重廻りの頬かむり
草市につるべた錢はとらぬ也
よし町は化けさうなのを後家へ出し
わが身迄もちあつかふに禿まで
宿引はあたま數程下げて來る

文覺は一生人の尻をもち
醫者殿が見切るとくつわがらつかせ
女房の留守も中々おつなもの
尺八で五つたゝいておッぱなし
料理人とぐうち鯉をおよがせる
馬喰町ばきり〳〵と手をたゝき
角田川あゆめ〳〵と醉たふれ
拍子木でつッついて見る醉たふれ
かきつばたぬすめば晝も蚊に喰はれ
餌をひらふやうに居眠る鳥甲
取揚婆みそづけ抔で一つのみ
草履取汐干の供が名殘也
年わすれよろけて杭の穴へ落ち
木店の孫とたてつく隱居の子
髪結のだいは籌しよつて逃げ
虫干にくすんで見える男もの
能い年をしてとは事の不首尾也
踊子は一撥ぬいて蚊をはらひ
素見物其くせ念にねんをいれ
燈籠にしやばの女のかげはなし

頬張つて置いて禿は下りんす
供部屋を手桶でふさぐ市の客
喰ひかけて下女はへんじをして貰ひ
出女のかいこんで行くやなぎごり
香の物となりへ漬ける一人もの
錢の無い非番はまどへ顔を出し
肴うり念頃ぶりはわたをぬき
けんくわして根こぎにされる切落し
ふり袖に似た山の有るかるゐ澤
おやかたの系圖を聞けば樽ひろひ
辻番はへそをかき〳〵湯屋へ來る
がら〳〵と先づ二三ばい品定め
屋かた船袴着たのは京言葉
三みせんをかりる使を問ひつめる
青物の禮に廻るは俄後家
をしい事八十七の能書なり
女には今でもまよふ紅葉がり
配當に隣をしへる氣の毒さ
此お子はなどと遣手のちやうと受け
猿ぐつわまじり〳〵とぬすまれる

不二祭大坊丸は忌中なり
小姓よくしんまくをするけさ衣
麥めしできたへ直してよめを取り
一通り座頭に咄すすゞりぶた
茸めしを乳母は張場へことづかり
井戸かへに出る簪は銀ながし
れぎらずに遣ればいたゞく椋賣
いんぎんに呵る女房は根からはえ
ゆもどりに赤木作りを百でぬき
日蓮は柿と葡萄にあき給ひ
車引つるべで呑んでしかられる
氣ばらしに廿四文は大きすぎ
にうめんに聲がはりするよそば賣
頭取の門で御詠歌三度あげ
山の神かい込んで出るよしの鉢
乳母がおや熊手の樣な手であやし
じやまに成る柱の多い夜講釋
通りものてうちんの火で床をとり
なげ込んでくんなと賴む下女が文
玄關番座頭に下駄をかりてはき

本能寺はしの歩をつくひまはなし
御かご脇こじりをはねて何かいひ
その下女の茸は木で鼻おつこくり
出て居るとめつたに人がけつまづき
小千石程にがく屋のまどをあけ
ふじ土産舌ッたらずのきり〳〵す
お内儀はおんまくじつて藏へにげ
饅頭は女のちゑに大きすぎ
おやかたにはかまを着せる車引
むづかしく床をとらせるかたき持
燈明を嫁は二人(ふたり)でけしに行き
年禮は二(ふた)足後(あと)で禮をいひ
はたし狀泣く〳〵墨をすり
お内儀は戸を横にして一(ひと)はしり
かみさまは草の餅迄やき通し
女房にひげをぬき〳〵しかられる
あら打に目の光るのが素人也
妹のおかげで馬におぶッさり
ぬす人にほら貝をふく在郷寺
近づきをかんがへて居る雨やどり

梅干とふすまが寄つて錢をなげ
汗とりでおたまをつゝむやかた者
此しゆくの太夫をしへるあんま取
藪入のちゆうしんに來る樽ひろひ
不景氣といひ〳〵げいしや宿の月
其くせにゑくた者をばつれてこず
藥箱いかして持つはわたり者
鳥のほねたゝいた禮に首をやり
すりこ木であひるを仕廻ふ鳥屋見世
簪でかき〳〵よめはしちをかし
常念佛さもいやさうな後生也
此鈴でお出來と乳母は引いて見せ
引おひの手代りつぱな男なり
若いものふるわ〳〵と雨戸くる
男湯を女ののぞく急な用
仲條へ五つ月置いて同じ顏
一二もく湯治がへりはつよく成り
ばかされたやうに日傭は二本さし
はたし狀廻狀で出す春の雨
初夢を大師のつれにはんじさせ

詰つゞけにはじめて見出す白あはた
あまだれを手へ受けさせて泣きやませ
おはぐろはしく／＼かぶる内につけ
下女の文二三度立つて書きしまひ
名代を聲高にした恥かしさ
品川で見事な貝はみなにされ
わるい沙汰聞いてぬり桶下げに行き
取次の出る内ひだの皺をのし
高慢な顔で來るのが髪の師
針うりに左の袖を内儀見せ
おくる年雨具の居くすみだ川
關寺で逢うても口はたつしや也
小見いしやロをすつぱく脉を取り
十(とを)許りあかるみへ出す夜蛤
文使よつ程粋な氣で噛し
厄年の座頭はたるに過言せず
參詣のたびにあこやとゝちぐるひ
むかひ湯に來たりや寄りなと輕井澤
仕送りは不風雅斗りあんじ出し
樊噲もたのみませうと初手は言ひ

牛かたは三足戻つてくらはせる
閉口といひ／＼しやべるたいこ持
兄弟の仕廻ひ仕事に大あたま
雨替屋四粒ならべてくらはせる
添ひとげてのぞけば怖い清水寺
油揚の使は泣くを見てかへり
ひなの椀下女のしかられ納め也
またぐらの御無心に逢ふ袋持
わが内が見えて錢つく獨の内
玄關番どつし／＼と三ツおり
園はれは文の文句に米をいれ
近道を四五町送る草の庵
肴賣うッちやるえらを見せあるき
からかさを半分かして廻りみち
にうり屋でのませてかへす文使
留女片袖もつてわびて居る
さうもして見ろと男の名を付る
いしやの供小一尺ほどうそをさし
門番はいやみを云つてまけさせる
水くみの念頃ぶりは茶をしかけ

とむらひの供は墓所でせみを取り
安珍ははした錢などおつことし
その氣味といふが師匠のにげ所
桶ぶせを出ると遣手をたておろし
地女のやうだと姉にいぢめられ
番附けの代門番にちよッとかり
寐所をへし折て置く一人(ひとり)者
ころび合ひおふくろ様のやうに見え
さいづちで湯屋の男はうけこたへ
眞間へ行く人は女にひれつかず
さま／＼に扇をつかふ奉行職
勞咳は大ふり袖の病なり
御はらひへふたをするのは他人也
生酔は御慶にふしを付けていひ
すけつねは三國一の死にどころ
勘當をゆるして口が二つふえ
紙二帖寐まきのつまへ持添へて
朝がへりすわると膳をつきつける
若いもの少しさつてついでのみ
餅花を二十九日の蠶くばり

よし町のふらち御殿へぱつと知れ
手へうけて見て居續けの胴をする
早乙女は他領の方へ草をなげ
氣のもめる日は朝めしのまんま也
紅葉見に母は去年の異見をし
宿下りに母はどッととたき付ける
はやり風三井が見世に小半年
鋲打の先へしたゝかかしましい
光秀はあつかいぎりて繪がくさり
ほれて居るやつは一生しまかされ
葭町のいしゆで本寺にいぢめられ
呉服屋はたより少ない下駄をはき
はや鐘に和尚を見ればさるぐつわ
かみさまは有るか／＼と小間物や
皮切りが濟むと淨瑠璃本を出し
くじどりで芝居の供のろんがやみ
十四日時分に耆婆はさじをすて
糸賣ははかりのさやを相手とり
御さい迄とう／＼房を長くさせ
姉の產是れも二三步いる出入

堀江町風しづまつてさつまいも
物中に手間をとらせる眞ッ裸
居續けのばか／＼しくも能い天氣
忠度はいつぱし締めた氣でおさへ
髮結のざうりはく日に手間を入れ
つぎぎせるくはへてあるく村のよめ
白拍子手がらをしなと着せて遣り
どうせうの相談を聞く矢大臣
水くみの錢へッつひの角におき
こし元は隱居に二十五もくおき
後の聟むじんのからもたんだへる
米つきを落城すると呼びに遣り
にげしなに覺えて居ろはまけたやつ
下女一人あたりさはりで藏へねせ
湯のいしゆを水でかへすは源九郎
夜そば切ちよくで手水を掛けて遣り
瓜ばたけ出てから鼻緒すげてはき
やらかしてくれろとはひる髮結所
柳原まくがおそいと石をなげ
樽ひろひさしもの乳母を云ひまかし

わんぱうはやると物見の松でいひ
きんたまをつかめ／＼と長田下知
後をおす亭主やごしのしまひ也
へぼ瓜のやうにからげる一人ぶち
かゞみとぎ少し出したで顏がふえ
女中供ならんで行くはなめたやつ
中宿で根津へ行くのは派がきかず
置きつけぬやつが羽織にひぼを付け
たのもしの尻へ出るのがよめの里
をどり子の袖を手傳ふかごの者
田舍乳母口黒らしい乳を出し
女湯の方へはらせる血のくすり
肥取に一杓たのむ花ばたけ
珍らしい内はよこねも出して見せ
居風呂のわきにしやがんで水を呼び
病上り女房はまたをひッかゝれ
前だれで手をふきながら四百とり
脇僧はたばこぼんでもほしく見え
かたみわけ始めてよめのよくが知れ
孃樣をおひ込んでたつ玄關番

尺八は衣裳のよいがいつち下手
鉢卷で女房へ願ふむかひ酒
裏口へよめの願は鬼すだれ
禿來て鼻からけむを出せといふ
あいさうに釣竿を出す濱屋敷
諸白髪迄はうさんなていしゆ也
われ角力羽織のひぼをむすばせる
前表は後家の目ぶちのほくろ也
雀形うぶ着の襠に一つ折り
腹のたつすそへかけるも女房也
一ぺんはすげなく通るふみ使
雨蛙すぐに其角がわきをつけ
三會目あたりたますへ箸を付け
預け引たぎつた男二人來る
叡山は釋迦で夜が明けみだで明け
足留めに盃ばかり出しておき
ちッとした事さと禿かけて行き
中宿は行燈はるとほぐにされ
灸をむになされますかとえりを折り
青立の客は何やらききかじり

判官も沙汰は無い事氣味が有り
疱瘡のいつち重いに翠をとり
槍持をはじめてつれてふりかへり
御さい籠何が出ようも知れぬ也
若いもの羽織ひつかけ江戸へ出る
わづらひの内は女房の膳でくひ
とび付いて娘へわたすぜんのつな
氣にいらぬ縞とは乳母のほたへ過ぎ
百姓はねこだのうへで死にたがり
初がつを是も左のみゝで聞き
最明寺何のかのとてにじり込み
紺屋の子どれもてつこにおへぬ也
大一座何ぞかしらのくづれなり
面倒を見て下されとよめへさし
男の子はだかにするととかまらず
山伏をたのんで馬鹿にして貰ひ
見るも有り見ないのも有る綿の弟子
遣手迄わらひの行かぬうらの客
あべ川で馬はきなこをあびて行き
島田にも金谷にも武者五六千

錢ぐるま後をおすのが首へかけ
生藥屋駈て來たのはむみやうゑん
こくげんを八ツと觸出す師の無盡
暮がたに二人で通る地がみ賣
袖口にあてて直をする小でうちん
旅芝居けんくわをのらへ追出し
さしをなげあくびしい〱寢まんせう
ふしみせの亭主はさいを聞きに來る
馬かたのぶつうち垣をみなくらひ
巾着をしめ〱おりるやり手ばゞ
質屋から來る内ましご齒をみがき
下女が髮豊まに成るとぶちかえり
襟卷をしごきに貰ふいろは茶屋
品川でよねまんぢゆうをすえらかし
懲りたやら今度の下女に沙汰がなし
すげ笠に有る名でとん死呼びかへし
此家で器量ばなしは法度也
じやまをする子には赤繪を遣つて置き
下女が灸ゆでそら豆を二合かひ
去狀をそれと突出すまきさつば

へッつひの角へ肥取火を貰ひ
をしさうにものをくれるが妾也
男ではくるしく遣ふみゝだらひ
撿校はつかむ所をみせてつき
品川へ來てなが〳〵の口直し
女房へ忍ぶは共日の市もどり
判官はどれだと笏で陸へさし
馬の尻たのんでよめは通りぬけ
素見物買はゞあいつとゆびをさし
悦んでくりやれと味噌へ一つさし
旅の留守ある夜内儀のいだけ高
入りもせぬ物の直をきく雨やどり
樽ひろひくすねはじめは土へうめ
てつきうで打つてかゝれば桶でうけ
ゆび二本ひたひへ當てて下女はにげ
そろ〳〵と行きなとちりを入れて遣り
人間のたけり迄ある小間物や
おくさまは二の段で割る御一生
どの湯へも一廻り入るかたきうち
もううらはやうじを遣ひ〳〵來る

富士川で三みせんを折る白拍子
かんざしはうけ取る時も髮を出し
ほとぼりがさめぬで市の足を留め
五月女のあをむいて見る大一座
長屋中けんしが濟むと井戸をかへ
かとく公事相手といふはくへる顔
お羽織をなどと幇間はねつをふき
七くさを寐所で笑ふにくらしさ
いつかどのどら口々へ人を出し
つけ紐で牡丹餅くばるいぢらしさ
氣はありやなしやとすびく隅田川
大一座多藝なやつはあぶらむし
座敷牢女房の方は手がらなり
仲條は綿の師匠へ五枚なげ
仕立屋へわけ有つて來る女もの
なんにせい帶をばしなと長局
お内儀に灸をたのめば笑つて居
山伏に度々化ける源氏がた
寐てとけば帶程長いものはなし
御出入賴んで唐の給仕に出

あらはれたわけは娘が無筆なり
藪入が歸ると母は馬鹿のやう
會津屋のおこされるのはおかは也
枕めしよめがしやくしの取りはじめ
ぬり桶のわきへ亭主はくんで出し
まな板の上へつがせる料理人
やかた船山のはひ出るごとく也
糸の來る内手のひらをばちで打ち
錢車女を見てもしづかなり
人べらしよらずさはらぬりんき也
鳥さしの追ひ込んで行く犬くゞり
小僧めを仕事にしやと草鞋はく
はたらいて見んと座頭は罷立ち
餅花が四つ手の中へ二つ三つ
盃をひよいとはふればわたしかえ
さそふやつ内儀が立つとそばへ寄り
お内儀をとなりへ遣つて筆をもぎ
姨捨をしなのに聞けばいもで居る
馬に水のませる家來たつしや者
聟禮つきしたむすこは見世でてれ

呉服見世見立てるやうにして上り
御好みの内三みせんはむだをひき
初雪のたつた二尺は越後なり
妹はおまへの番となぐさまれ
中ぬきのふんごんで有る中たんぼ
妖怪の中でも鵺は細工過ぎ
そばがきを猫間の供にやたら強ひ
その跡を大屋のむす子くらひこみ
けさころも遠く寐る夜の面白さ
みくじ本人參きざむそばでよみ
ひや麦でする受狀は二度めなり
だますなと張場迄來てきめて行き
眞桑瓜富士で賣るのは月たらず
井戸端でおつけをたてる家根普請
出來ぬやつおよしなさいとかたくいひ
藪入のみやげによしごそへて出し
ひとり者ほころび一つ手を合せ
草履とり茶やのむすこと河岸へ行き
ねがはくはよめの死水取る氣也
みゝのわきかき／＼お七そばへ寄り

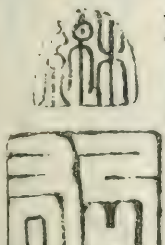
ごぜの灸後で一だんのぞむぞえ
夜そば切かけおち者に二つうり
材木屋さわぐとぎうを呼び付ける
あれこれが知つたに母は氣もつかず
御師の供へし折るやうにふたを明け
おッぺしよるやうに馬上の禮を述べ
里方でをしがる姑しやりに成り
二親の人と思はぬたいこもち
五十ぜん程と蓋來て金をおき
皮切りは女に見せる顔でなし

けんやくで一つまなこの下女を置き
げびた性灯をけさないと寢付かれず
わき目からしつきやくまけの和中散
女客ていしゆは見世へおひ出され
わらんぢをはくと二足ふんでみる
にうり屋の金頭ぶりはつまみぐひ
引札はゆびをなめ／＼はすに來る
師匠さま來ると湯番はそれ見たか
むづかしくめしつぶひらふ中風やみ
たいこ持遣手をまねてぶッさらひ

風詩 柳多留三篇 終

むかし／＼の前句冠附を撰まず菩薩
万句合に名を聯し享保の頃收付か
て是狂句に句そのものむかし／＼と世に撰
しらり江府に広くひろまれと
終に今にして此句の句員を集め今に
その余風流行好事家の家名のとしめ
浅草新堀端の花王川柳か句合数し
めつらしのかるた前句附世のたのしみに詠と
一ちを句の集と號名をしけ此ハ武に至る

或る武門の名にいへります事此為士農
好しく知らんやいつんすの立録
早速書の好し雅抄柳竹の小曲を御座
二幅之幅も好りおし　四幅とめらやを
色と申弥之名を其の勝板秋を抜ひ参
三四幅とも好し　此行好物和く不宅好
孟状を便御境墨隆新年　述



誹風

柳多留四篇

むかし〳〵の前句冠附は蝶々子苔翁萬句合に名をならし　享保の頃收月出て世話事に句意のおかしみを專らと撰みしより　江府在在の組々迄これを好み、年毎に一萬の句員を集め今にその餘風殘りぬ。爰に寶暦のはじめ淺草新堀端の考士川叟萬句合發し、めづらかなる言葉に當世のはいかいとひとしき句姿を新斧せしに、或は一萬或は二萬の句あつまる事此考士の妙といはん德とやいはん。よつて書肆星運堂のぬし誹風柳樽の小册を編集し二篇三篇となり、ことし四篇をあめる事を乞ふにまかせ、近來の勝板行を拾ひ集め、二二の篇とはなしぬ。

于時明和六丑の孟秋吉辰

淺下境呉陵軒述

鳥追ひを扇子の先でよけて出る
奥のちん木綿ものさへ見るとほえ
草市にききやうの切れる中の町
常念佛折ふしたんが引かゝり
女湯へおきた〳〵とだいて來る
もつと寐てござれによめは消えたがり
平產のをりもをりとて飯がきれ
丸の內井戸へおろしてしよひ直し
しうとめの屁を笑ふのも安大事
藏宿でよんどころなくそりを打ち
かはたびや四五けん先をふところ手
しやか十のやうに火の見の顔を出し
へどをつくせなかを御用たゝく也
女房をたのしんで來るすけん物
おやたちは井戸と首とでむこを取り
麥ばたけ小一疊ほどおッ倒し
かま拂しもげたおやぢ箱をもち
てんば下女寐所へ薪を一本もち
大磯へ馬士はせい〳〵追つて來る
朝がへり首尾のよいのもへんなもの

病み上り喰はせずにおくやうにいひ
八文のことで火鉢で顔を見せ
あぶれ鶴かれ四ツ迄は見世をはり
海晏寺眞赤なうそのつき所
下女がはれなんぞといふと黄八丈
印籠をくれなと尻でゆりおこし
小ざむらひ女郎の中でべそをかき
みつものを下女は直斗り聞いて見る
あまだるい聲で殿さまおッかける
紫宸殿よく化ものの出るところ
陶朱公見切つて錢をつなぐ也
楊貴妃のうたひ宵から二度通り
座敷牢手代も一人(ひとり)宿預け
掛けとりの手をひいて行く俄後家
中直り鏡を見るはをんななり
すりこ木でなぶつて通る楊枝見世
はつ鰹旦那ははねがもげてから
つばな賣よく〳〵みれば女の子
顔見世のお供はどれもくじつよし
和尚さま傍へ來る子にじゆずを出し

奥がたへ遺言はなしみなと川
あいさうも男へすれば疵になり
たいこもちしやれて内儀にしめられる
銀ぎせるあつたら事に手ではたき
やみ〳〵と座頭へ渡る町やしき
米つきのたけ込んでやるそれた鍋
見せもせず無筆は文をもてあまし
隅田川しやばいらいだをいふ所
御家老の知行百首の内に入り
大一座となり座敷はさし向ひ
靑首で猫などおどす料理人
おくり人は奈良茶位に目は懸けず
武士のけんくわに後家が二人出來
彌陀しやかの違ひ不縁の元となり
白狀をむすめは乳母にしてもらひ
一二番産婦もよみを打つて見る
おはぐろの尻へだかつてだゞを云ふ
釣臺で高尾へおくるしのぶずり
三郎は毛虫を筆ではらひのけ
産の御口がうごくで持てたもの

美しい流人大めしくひに爲り
舟宿にあるのが本のからごろも
切れぶみは一ぱいのんでかきかゝり
をどり子はつめるぐらゐはえせ笑ひ
泉岳寺旦那を一人おんなくし
柄杓うりなんにもないを汲んでみせ
三人で下女はあかるく藪を出る
お月見をていしゆに十五丸めさせ
師匠さま一うねづつにねめ廻し
圍はれはいひわけ程の見世を出し
ふり袖でぶたれる御用氣さく者
中直り初手に笑ふは恥のやう
十二月人をしかるに日をかぞへ
光秀は不斷うぬ見ろ〳〵よ
一葉づつきしをはなれる柳ばし
ごぜの供何をはなすかにこつかせ
見申したやうだと遣手呑んでさし
七つ迄そだてさせうとわりを云ひ
義貞の勢は念佛ふみよごし
手を帶へはさんではなす乳母が宿

遣ひたてましたと下女へいとま乞ひ
わたし直でけん見の供は二反買ひ
花よめに時々化けるひのえ午
根津の客湯島の芝居ねだられる
秋葉だけ湯屋は四五日先へたち
晴天に仕合せわるく馬士の蓑
鷹のぎう箱提灯をさげて居る
藏前のゑんまにぢるを帳に付け
伏勢のあぶれはのろり〱來る
はつ鰹一口のめと下女へさし
豆いりをかみ〱信濃いとま乞ひ
つけのぼせ母はにくさとなつかしさ
四五年もお講に目立つ緣遠さ
中納言わかれの時はたちのまゝ
惡源太八町上ではらをたち
聞きわけなく又來ては蚊をいれる
品川は鳥よりつらい馬のこゑ
鶉ちんをかぢかんだ手へ一歩とり
口程のことは渡邊して來たり
あのにさい女にきつくすれたもの

大一座後生大事に名をおぼえ
桶ぶせと入れかへにする座敷牢
物思ふそばにかむろの春をまち
月代を剃るとりきんで耳をふき
おそなへの次手に賴む三の糸
たべんせんなどと新造よふかしな
水茶屋の仕事はきついさびれ也
ふところ手見附へ來るとわけが知れ
まどへ手を出してつばなの錢を取り
もちつとの事で鮎迄みなごろし
月ぱくに寄つて一夜さのみあかし
よめの留守しなびた乳を先づ預け
辨當が出來てたんすをまぜかへし
次の間はしつぱりとする料理人
泊り客近所では最うなんのかの
ゑぼし親勘當の時すくふやく
きげんよく十八日は障をひき
くし巻にするのがよめのくづし初
川どめに碁ばんの外はつぼをかり
土弓むす左で射るがきついみそ

あの女房すんでにおれがもつところ
いろは茶屋せんばをしてもはねる所
宗旨ろん耳と首とにじゆずをかけ
飯焚が死んで手療治やめに成り
豆腐の湯御用に内儀手をあはせ
十三と十六たゞの年でなし
きぬ賣にゆるしをくれるやはら取
引おひの手代御殿でひいきなり
女房はねつからぞくな事をいひ
米つきのあかるみへ出る一つかみ
封じ紙もらひに來たに間をさせ
年わすれかはれぬ時分一がきれ
小紋がたごぜは多分のはうへきめ
つき袖で御用一面持つて來る
大木に成つてもどこか柳なり
香の物へし折つてくふ一人もの
へつつひのりつぱな側に日なし貸
月夜だと五郎中々とかまらず
大三十日世間へ義理で碁を休み
ちよろッこい様でももげぬ禿の手

雨の手を出して大屋へ禮に來る
いせ講へ其後こりておやぢが出
おとなしく麻やとみそ漬一つやり
こし元は雨戸くるたびおどかされ
かへる母むこへ一口りんきする
のむ所があると燈籠に見えをいひ
此家で生れた內儀まけて居ず
ごぜの金御局そつとかりはじめ
中宿はにらまれて居る藏をたて
びり出入大屋もちつとなまぐさし
けいせいを乳母が子にする口車
かりものの部へははひれど手柄也
ふり袖で度々上の句をくづし
かこつけて出る吉原のあつけなさ
こも僧のかひぐ\しきは麥もとり
てゝ親がひろへば文もしづか也
あるかえとうそり／＼と雨替屋
一の糸新ぞう呼んで喰ひ切らせ
よく／＼の事か宿下りしかられる
御姿は四條あたりのてんばもの

なけなしの錢でたいまつ二本買ひ
鼻の下長く女房の御帳つき
掛り人むすこにけんをしなんする
御袋のやうだとかげでけちをつけ
後家の供くりでゆすつて酒をのみ
中の町末たのもしくないところ
きねへ茶を置いて米つきあせをふき
さい箸で是かへといふ唐菓子屋
番太郎しかもをとことへらず口
切見世のたま／＼目だつ緋縮緬
業平のかさをかかぬもふしぎ也
跡くさらかしとは下々の言葉也
置きごたつ聟を奥へつれて行き
三味線屋大ぜい立つとおッしまひ
宿下り今度も灸をするはぐり
湯歸りを見たであばたの論がやみ
母おやのいけんをがむが云ひをさめ
くつわ虫麻しなに一つゆすぶられ
入相をぽん／＼つくによめの禮
圍はれは長屋のものをくぼく見る

手のこんだ化けものの出る紫宸殿
ほれたとは女のやぶれかぶれなり
入道のさうだん相手二男なり
草市はたいがい百であるつもり
若旦那つまらぬ物をしよひこまれ
源左衞門馬ぬすむ人を苦勞がり
尺八も男もよいがきたない手
思切る姿の出來る雨宿り
まだかよと苦勞に思ふ里の母
傀儡師箱をたゝくが乘地なり
姉聟とよもやは母の手拔け也
子煩惱小判持たせて困る也
今頃は灰になつたと燈籠を見
權柄をいふのが乳母の癖になり
大部屋の持佛は〆めて十貫目
去狀を書くうち質を受けにやり
下駄を見に入らぬ豆腐を買ひに行き
一喧嘩して女房は質を出し
先づ盤の足をねぢ込む下手將棊
赤腹を釣つて箱王叱られる

栟花女の出る土弓場は流行る也
實飯を外からどなる手習子
こそ〳〵と話せば妾氣にかける
お妾の母は大きな願を掛け
女房の謠よつぽどひどく醉ひ
百九軒なからが留守といふところ
御代参ついでにほつきあるく也
隅田川つれがわるいとかどはかし
引四ツをはしごで聞くはめつけ物
けいせいは人をたのんで一つぶち
髮ゆはぬ内は給仕をせつながり
とぼ口へ見物のある旅がへり
花の山ぬいた〳〵があらし也
朝参り主馬と七兵衛もくれいし
蚊屋やめて僅かな手間の其らくさ
頼政のむほん茶の木をらりにされ
うそうやと仕直す帯でた〻かれる
神樂堂しまひにきざな目をふさぎ
湯殿山くつわ虫ほど音をさせ
産所から一文やれと見世へいひ

乳母同士たいけつになる柿一つ
入相は一つ撞いては庭をはき
新造の鼠をたいこつんにがし
田舎乳母ぜんたい無理な髱を出し
火繩うりなんのかのとてにぢり込み
御茶湯はしたかと亭主聞いておき
大部屋の客は酒屋へつれて行き
大くぜつみす〳〵雪に歸るなり
心中はほめてやるのが手向なり
琴の師は三みせん乞食めくといひ
お袋が死んだがさいごにぎやかさ
猪牙舟も小馬鹿にならぬ荷をこなし
うつり氣なことと針妙一人ごと
ねぢ首のじつけん臺をころげ落ち
さつぱりと書いてくれなと見くびられ
憎さうにうせるわといふすけん物
町へ行きたいとやり手に實をいひ
太夫から二かと虎屋はつめて居る
きぬ〴〵を神田の大屋明けてやり
頬杖でかへし申しやはけちな客

そばかすが有るで三評通りかね
からかさで花見の中へどさら落ち
茶の會にかげのうすいがてい主也
いつ見てもずんと耆らぬ角兵衛獅子
八瀬小原きれいに牛をしかる所
性わると禿そばからさいはじけ
すきんせん事とちぎりにぶら下り
さんや堀舟で子の泣く十三日
はたし狀きざな事には墨が折れ
乘かけへむこの田地を見せて行き
師匠さまかしくと以上別に置き
寐入らずに居なと硯を持つて行き
蛇責をあぐらで噺す鏡とぎ
小間物やおめかと帳につけて置き
下女が兄ほしか二俵のどらをうち
金時が行きさうな所らしやう門
さうりとりいらさるけんの習ひ事
頼政が死ぬとかり橋願ふなり
吉祥寺雛に毛氈かりられる
にげた後禿は對にしばられる

雨降と母はむすめのひざへより
親たちのゆるしで來るとみそを上げ
鏡店で花見に行かぬ筈にする
氣をつけやなどとお針に聞をさせ
めし粒のやうに油を鉛へつけ
御立腹などと女房をきよくる也
さごさいへ下女がお立と呼びに行き
いんぐわ立てしい〳〵内儀はらむ也
夜そばうりいつの間にやら子をでかし
しうとばゝおらがうつそり殿といふ
なめかたをしてはるやつは出もの也
三韓を玉ものまへはすぐ通り
村のよめ道陸神へ願をかけ
こまいかき根津のいりわけ聞いて居る
まきざッぱ持つて米つきさゆをのみ
古近江がほしいと妾ねつをふき
御留守居は船の出る迄五兩かし
中直り元の酒屋へ立ちかへり
土手で逢ひどこへ〳〵と手をひろげ
叡山へ行きつ戻りつ鼓の音

素一歩はげしなりませであんどする
不心中五十三次はッとしれ
女の詩歌よりどうかにくらしい
湯げのたつ形で鏡のふたを取り
針妙は返事の時についとこき
下馬先でばたら〳〵と笠をなげ
上下をつまんですわる暑氣見舞
おらがやつなんといつたと連に聞き
一匁まけるとよみもけがの内
侍のさゝぬところが命なり
源氏方ふじ川已後はかまがきれ
わがすかぬ男のふみは母に見せ
二つ三つならして饅頭どぶをこし
葉生姜をちぎつてはねた泥をふき
簀見世へ遣手の孫をおつぱなし
笑ひ止む迄は高座であせをふき
せめ合に成ると石田はみなかけ目
舟宿で上下ぬぐが他人なり
御妾は石の流れる川にこり
ほゝづきを口から出して間をする

駒下駄をはき〳〵ぬしをつかまへや
仲人の夫婦わらひが上手なり
年わすれとう〳〵一人水をあび
新宅の此處も明くかとおして見る
しわん坊つれのもち花ことづかり
王子實酔つたと見えてさしをいひ
藪へする給仕おやぢはしらぬふん
よし町で御さい線香折れといふ
ふられたを舟宿なだめ〳〵來る
片ゆきに成るを手引はうるさがり
四火をする一火〳〵に熱いかや
戀むこの先づおッとつて三味がよし
町内で舌を出し〳〵よめの供
ぬけ參り椎さすまたの中で出し
袖の梅のんで上着のまゝで寐る
白茄子草市已後はつひに見ず
傘をさした御用はよのつかひ
ぱつとした内儀の亭主りちぎ者
乘合ひは思はぬ人を待つて居る
嫁の下女少し内ばにしかられる

かゝ様の無い後下女にはだかられ
腰元の化粧にきびに手間が取れ
馬かたの表でどなる組屋しき
犬がほえますと產婦におこされる
けんとくが苗字へあたる新五郎
大こくにやいやだ〳〵とさくら姫
禿さんなどと御ざうは火を貰ひ
かの後家が來たと樂屋の窓でいふ
武藏坊やつと御めかを引きはなし
そりや〳〵と座頭にへどをまたがせる
おやぶんは美しいのをあまよばり
もしちよつと來なは初會のけいど也
くらつたりなときのじ屋は下げて行き
豐後ぶし一流乞食かたり出し
舌平目御乳母はふててくはぬ也
大和茶をおやぢ四五日してしまひ
生つばきはき〳〵巴切つて出る
柳原塀へ懸けものかけて置き
火廻しに禿引け四ッたんといひ
後家の義理いゝえ〳〵で小半年

船頭のたれるのは手に入つたもの
辻番ではなを賣るのが頭ぶん
卒中風扨にぎやかなまつご也
はやくよと斗りは紺屋屁ともせず
岡釣りは竿をふまへて摺火うち
御花見の濟む內空へ手を當てる
旅がへり五けんのぞいて內へ來る
長く居たほうび旦那で綿を着せ
文使ひむす子をはすにまねき出し
命日にひざうの柿をとりはじめ
年こしに十二の禿なぶられる
鴨に芹出せば御しまひよかつたの
つり臺へむしろを敷くといそがしい
日がくれてかへろとどらが願也
座興だといつても娘泣きやます
もてぬ夜は本を見い〳〵お間かへ
よし原は後架へ行くにてれる所
本ものに成つたと雨戸二枚あけ
とつぷりと暮れてと聟の方でいひ
秋葉から川へ三みせん取りにやり

新尼の我をいやがる影法師
御無用というて尺八にぎらせる
ひきならひきのふ合せた調子也
とばせたといひ〳〵茶やを先へ立て
ついそこに有つても妾人をよび
ひぢりめん是も異見の數に入れ
かげぼしの一つかくれるひざ枕
三味せん屋座で出てくれの聞きあきし
品川の客の國府が本の事
寒念佛知つた女で他言せず
拜殿をかい込んで出るあきの守
朝がへり母ははだしで二三間
美しい顏で楊貴妃ぶたをくひ
居つゞけのむかひきついは女房也
疱瘡する禿やり手を寄せ付けず
すけん物見て居る顏をあげられる
江戸中を數とりになくほとゝぎす
葉櫻へさそふはつねの人でなし
うはばみの大がいをいふ醬油樽
かゝさまがしかると娘初手はいひ

三みせんの糸の切れたが饑いしまい
一さすりさすつて鳥の直を付ける
とび色はしよ品を作るもめんもの
御勅使を天神さまと馬士はいひ
年始ではないがと見舞ふ立ちのまゝ
唐がらし辛いといふにそれ見たか
角田川とかくにおやのまよふ所
猫が來てにぢるを女房それ見たか
米のめし喰くはせたと泣いて居る
六尺に切れば氣のあるひぢりめん
首是山座はその日に死にきらず
取る物をとるとたいこはしづか也
今時は無いと出て來るせんがく寺
合點せにや切腹を通す御部屋住
大病にぜげんの見える氣のどくさ
旦那寺くはせて置いて扨といふ
大さつま色身でいけるふしでなし
狩人はきつね釣りをばまだるがり
女神だけどうでも赤い方をひき
子供やァなどと廊下を呼びあるき

ぶきな客地口にしてもさしをいひ
わび事もお寺のするはひどいとが
高名をしてにくまれる五郎丸
願の舞下女あか切れの申しわけ
文七は男もよいがうそをつき
けどられた下女はいやみを聞きあきる
あくた川なのあはゝの三太郎
田舍もの何をやつてもつとにする
うるしかき座頭に尻をつッつかれ
なま出來な所へ棚經もうしかけ
寐ごいやつ呼びかへさるゝごとく也
大いそへどろぼ〳〵と馬士は來る
せつちんで手鬮さばきをする女
輿屋へは葬禮なれた人を遣り
最明寺一人あるきもした男
油うりまけに大戸を下げて行き
杖のたび追ッついて下女ゆすり上げ
草市に禿買ひたいものばかり
せき將棊先へくらつてしまひおれ
八文はみそを片手へうけてのみ

髮結のねぢつてつけるぼんのくぼ
若君に成つたを和尚買ふ氣也
若殿の美男おさへの聲がかれ
東帶で見るがまことのみやこ鳥
玉川にも一つ斑をつけるとこ
他人にはひゞかぬちゝのはづかしさ
まて〳〵と水引をとく年をとこ
鍋つみは見世へ娘の子をかざり
去り狀を取る内年が三つふけ
御首尾よい内とは下地有る事の
御茶びんがほしいとげびる飛鳥山
わが内にこしかけて居るあつい事
しひられてあたる炬燵はかしこまり
針箱を片手でさがすかぶりもの
三の糸ぷッつり切れる聲のよさ
子の數をさきへあんじる三世相
水なんを先づけのがしたいわら山
檜などはうぬら〳〵としばられる
一人居る内儀鼠の引くのなり
はした出て手明きの衆はございよう

つき出しは心がしれてあげにくい
子をあやす内は本氣のやうでなし
年始帳留守を遣ふのはじめなり
おのしもと云ふがいけんのなぐれ也
ゆかたではいやだと娘降ると出ず
おふくろの留守で持佛の小淋しさ
かくし町何のけもない時もあり
もてぬやつまだ藥でも遣ふ氣也
切れ小判たいこの智慧で遣ひすて
女房は途中で逢つてさえぬもの
願がけに來たとすだれのそとでいひ
和國とは虎とあらそふ家名なり
燒物をとゞけた人をとひつめる
朝がへり高輪からは出家なり
細見はよつぽど先へ遣つてかひ
居る所を見たのが竹のふき納め
うす本へとつさまの手でかなを付け
居つゞけに高をくゝるは實子なり
切見世へわうせいうりは引ッこまれ
不景氣なお子だと乳母は木戸を出る

ぐちな事いふなと夜着をかつぎ出し
もう一歩くんなと女房舌を出し
嫁を見にどッひと路次へ駈けて出る
臺所の敷居へつき屋こしをかけ
若いもの片手にぎつてのんで居る
元結紙目をむき出して下女はしめ
くらはれぬ丁稚奉加に土場へ來る
屋根舟で座頭あたまをことわられ
間男に一言もない世話に成り
質手代四つ手のそばへ呼出され
三兩で常ぎらで居る其ひどさ
合羽やへ馬かたが來りやさむく成り
雨乞ひも袖乞ひもして名を殘し
口なしの下に和尚のうづめがね
女房はそばから醫者へいッつける
紫屋京のとぼしい金をとり
土用干せッつく内がむすめなり
廿日過ぎ文でおッかけおん廻し
本くじは又撿校にしよしめられ
供舟へめかけの用のその多さ

あの乳母が書でおかしいことが有り
舟べりで虱をつぶすうらゝかさ
時宗が二度目の太刀は屆きかね
それ〴〵でやせた遣手も疵のやう
玄關番座頭をのけて使者を上げ
はたご屋で世なみを聞くが子持也
御妾が何をつけたかしくじらせ
我頰をなで〳〵刷毛をかりて行き
ごみ〳〵の中の白かべ質屋なり
間もないに里子をかへす耻かしさ
氣をかへて見たが内儀の越度也
からたちを植ゑて和尚は氣がやすみ
僧正の氣にいるおやぢせき恭なり
しうとめのみゝにあたりし玉のこし
關守の目きゝの通りめかけなり
御玄關を淋しく出るが町醫なり
灸すゑる禿の顏を見にたかり
勘のよいごぜろくな事しでかさず
うるさくてどうもならぬと雛を出し
里がへりとなりへ寄るが思ひ也

ばかめらと雪見の後にのんで居る
御指南をうけましたらとめしに付き
ふき殻をふんでおざうは御出でたぞ
しかられた娘その夜は番がつき
我持つた財布の紐でしめられる
見かじつた女房むッくにいけぬ也
なべぶたへ一切のせるせはしなさ
きぬうりの墓を地藏のわきへ立て
いもうりといつて新造どくづかれ
にくいほど亭主の義理をいひ過ぎる
物買に二三度わせたよめのおや
入王を子にくづさせて夜食喰ふ
醫者迎ひ少しこゞんで先へたち
へぎいもにのりでは質がのめぬ也
屋形から何もかゝらぬ釣をたれ
朝がへり命に別義無いばなり
圖の狀おこしのやうにわけでやり
へつらはぬ人うはばひを取つてやり
目をふさぐ手を遠くから持つて來る
土場太夫得てあつけないむこに成り

料理人氣のへる程にくづを出し
新造のおやぢは村の呑倒れ
御大儀と手引の眉をつまみ上げ
新關は目くちかわきな人ばかり
十二月さう笑つては濟まぬ也
藪人はくされをぬいて願ふ也
用心にひるねして居る土用干
ぼたもちを飛脚へ出して物語り
おやぶんの女房かみたち供につれ
釜はらひ下女は笑ふにくらへ迯げ
料理茶屋お靜かにえと三把上げ
產所からおまへの後でたべやせう
手のひらへ喧嘩をのせる切おとし
氣ちがひの膳は遠くへすゑて見る
へんな目が出るといひ〳〵帶を解き
月夜だに質屋步いて行けといふ
關ケ原すてッぺんからおし碁也
武者一人しかられて居る土用干
女房は客へ添乳の申しわけ
つくやつをつかぬですゝが捗どらず

月見過よめの談合急になり
江の島はゆうべはなしてけふの旅
となりからひつさげて來る猿廻し
女房の留守押入へおッつくね
わきの借引ッこみ際のてれたもの
ゐのしゝにくさめをさせる糸すゝき
桃の花下女がむかひの馬につけ
能く聞けば女難で納所身をひかれ
仲條へ又來やしたはしやれたもの
おや椀ではかつてはとぐ一人者
年忘れ切りでたいこはひまに成り
中宿へまじめな顏で申し入れ
餅の間に合せまするとと紙帳ごし
よめのうけ姑のとん死一つしれ
おれもよい男とごぜをくどく也
ぶつに買ふあいさうこさう盡きたどら
さッきふな下女前だれをむねへ上げ
樽ひろひ鶏しめた訴人をし
上下の背ばかり〻　梯幘子
鯉迄もむらさきに成る江戶の水

あれをまあ嫁で候とてわしはいや
目をぬすみおつたと座頭里へやり
こぶだしでなどと夕べをもう忘れ
おもしろく傘をとられるつむじ風
ふけわたる廊下を遣手のッさのさ
琴箱の行き所を見りや質屋也
女房を大切にする見ぐるしさ
店下をあるけばむだな聲を聞き
法華經へ鮎の子をひろいさわ川
狩人のむこをえらむもめつけもの
大門を團扇と虫が入りかはり
あきらめて上下に着る雨舎り
くさつたら寄るなと呵る年男
初がつを内儀こは〴〵百に付け
惣花にめづらしい顔二つ三つ
双盤の鳴りやむ頃に數珠をすり
にうめんは外の賣人がよぶやうさ
斯うさげてゆけと教へるかし袋
仲人の口ぶりはまあどつとせず
物まへの客危きに寄りつかず

千ごりにぬき手を切るは他人也
氣のかたの息子は土手でいやと云ふ
馬士の名をよぶのは通し馬と知れ
こはさうに膝へ手を置くせいごひら
紋付ヶをていしゆがとつてしづか也
四日目は乞食で通る日本ばし
山出しは笑つてやるがしなんなり
頼朝を刷毛次手には大き過ぎ
つかに手をかけてとむらひ追つて行き
一家中手本の外はほぐに成り
おほくびで見るのが馬の女房也
むらさきは石のうへにも居た女
泡盛で酒もりをする御殿山
是からは身がふりよいと憎い後家
神酒どくり持つた大屋に人だかり
一羽づつなでて使は臺へつみ
どらに成るはじめは女房あばた也
近邊にからまつて居て母をはぎ
新酒屋れうじな事はいはぬなり
二つ三つふつて火縄を猪牙へ入れ

やほむすめ兄の友達一人切れ
褒めしと書いて元の木へ立てかける
御宿から文と船宿にがわらひ
しうとめの氣に入るよめは世が早し
ふり袖のもげさうな場へ母の聲
おやぶんは水淺黄まで着た男
鰹うりとなりへ片身聞きに行き
つけ登せまだふんどしはひぢりめん
ぶちまけるやうに千鳥はおりる也
おさまらぬものだと見世でよめの事
座頭の坊やつぱりぬいた方へにげ
八から鉦たゞ見て通るものでなし
素人に成つたがさいごそのしはさ
團はれのなりこんで來るいろは茶屋
始皇から見れば清盛小僧なり
根こきとはつたないぬすみ杜若
まん中のあふぎ座頭のわすれたの
二つ三つ打つて皷を二朱ひきやれ
よつぽどの間かと甕麻は目をこすり
神樂堂目にかゝる迄おして出る

里がへり何やら母はききのこし
舟遊山大隱居からおさへられ
初の雛ていしゆもつきについてゐる
呑講不參の分は猪牙に乘り
くどかれて娘は猫にものをいひ
能くむごくしたと追ひ付く衣紋坂
のりものの内でうるさくつまみ上げ
順の舞謡はいつちはたきなり
ぜんたいが高尾米屋へ行く氣なし
わたし守朝めし前に五はいあけ
一人もの喰つてしまつて苦勞がり
名月に御用發句をしたといふ
湯治から少しはよみもつよくなり
四つ手駕乘る氣なやつはそつと呼び
そら寐入あまりいびきがりちぎ過ぎ
回向院ばかりねはんに猫が見え
麥めしのあぢもわすれた長い公事
藪入によく似た男口をとり
追剝もなるたけ人を殺さぬ氣
尺八でつッぱつて見る町はづれ

ごふく店一人か二人ねむたがり
里がへり人にあはぬが不首尾なり
間男が抱くと泣きやむ氣の毒さ
武藏坊あつたら事に上言華
白拍子とは間拍子の能い女
仲人は小じうと一人ころす也
隅田川きせるをはたきさあどうだ
代脈はやんまを追つた小僧也
巻ぞへにあつて女房も山歸來
御直段がよいと藏宿かぶりふり
我里へかへる御乳母はまんがまれ
袷着てところてんうりなぶる也
猿廻しつかんで出ると杖を出し
女いしやとんだ所でさじかげん
口びるがはれたと袖を取つて見せ
首くゝりつら當てにとはたはけ者
白鳥がないてさびれる根津の里
女房に途中であつて先づしかり
借馬引きもゝ迄出して乘つて來る
霄日に帆を見た野郎うなされる

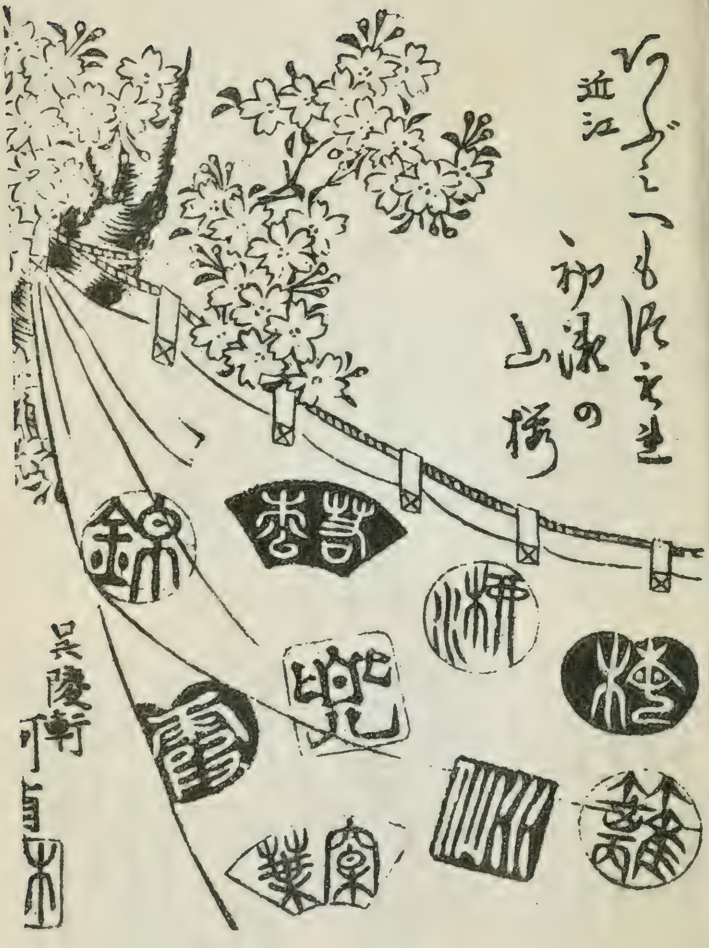
圍はれに地ごくは無いと實をいひ
草餅の使ひ公家衆にとめられる
生醉の七書にもれたはかりごと
すれ〱なものは花見の雛どなり
どいつだと麻上下でおつて出る
地白からそろ〱よめをはぎはじめ
たいこあん氣の毒がつて水を遣り
せんがく寺客を墓所へつれて行き
大一座先陣すでに堀へつき
御無用ときみわるくいふ敵もち
かけて來た禿しばらく耳に口
根をおして聞けば娘は泣く斗り
くゞり出る座頭すだれにつき當り
積着と日ごろを呵る花の朝
友達は將棊の事で二日來ず
赤蛙ごぜはかすかに味を知り
先殿（せんどの）の代はぺんともならされず
稽古所も出してやらうと後家の文
黒い毛をぬいたがよめの越度（おちど）なり
紫もごぜに着せると只の色

大一座かさばつかりと遣手いひ
玄關であくびをさせる七かげん
羽衣をてん〳〵舞でとりかへし
黑木うりまけると跡へ櫛をさし
あらひ髮にぎつてたもと見て貰ひ
遣手の子駕にも出たり出ないだり
おごつたと楊枝を遣ひ〳〵來る
當分はならんで喰ふの耻かしさ

誹風
柳多留四篇 終

誹風柳多留五篇序

可ハ錢ミて泡手湯店の肩板の矢ハ新生繪
ほし八ぐ繁にも句ハ影にも何こせ川一句
頃能と書てことはやするり判者の愛あるへ
此集を出し　呂府と出板けるに善悪判
すゝふにも多かしずんくなし　子ハ府と
皈めつ筆とよふに泡う勢長き積り子とし
尚于まゝ一の勝負と拾ふ中にも亦ゟて川柳
其通は山下さつ来ハ重く金無にくゞ宗の
行たゝ名るゝるふく是運の好士のゝ意見修し
年足懐るうし喜此の文字ふに色の好みと樂く



近江
呉陵軒

誹風 柳多留五篇

序

弓は袋に治り、湯店の看板の矢は軒に跡なし。今翫ぶ前句は題にくつたくせず一句の珍作を専らと評するも、判者の發明なるべし此集去丑どし四篇迄出板するに、書肆判するにひまなし。よつてことし五篇をあめる事を望にまかせ、亥年秋より子年末秋迄の勝句を拾ふ中にも、市ヶ谷はつ瀬芝近江山下さくら木は、年々會毎に千餘の片書怠る事なく、定連の好士の秀吟多し。予愚按ながら華吟のもとに心の駒を繋ぎて、

あぶみへもつもれ初瀬の山櫻

呉陵軒可有

つゝがなく茶わんを戻す太神樂
座頭の坊木馬に乗せてみんな迯げ
いたづらなお手だと藝子わるびれず
つれ合ひの日さと遣手はなしを喰ひ
乳母が顏あやしてごぜは笑はれる
せがき結松を置く場へめしを置き
藪入の妹はつきについて居る
將棊ばんさし上げて居て是乳母よ
毒だてに鼻の先のはいひにくし
はだかつて手斧を遣ふ村木や
氣ばかりさなどと御隱居酌へさし
事かけになぶつた婆アすりみがき
馬喰町給仕の手でもにぎらせず
増上寺生醉の出る所でなし
かけ取りの泊り迄來る手のわるさ
うたれたる譯は女房がかたやなり
その沙汰を聞いて宿下り廻り道
天井を男の見るはふかいなか
妹は母よりはぐに骨がをれ
遣手の子あの女郎衆がなどと泣き

太神樂たばさんだのが上手也
また來なんせんかと緣へ腰を懸け
あくた川鍋取りめがとおッかける
柳原椽をちよこ／＼すてゝにげ
錢の無いやつは窓から首を出し
六あみだ土藏作りが仕廻ひなり
座敷牢腰繩で出る十三日
たいこ持べんにまかせて借り倒し
根津へでも遣りたいといふあぶれ駕
旅あんまはぢにさゝれるやうな針
若い者しつけとり／＼江戸へ出る
羨んでぢゞいを起すしうと婆々
おらがのは年季を待つと藥とり
初鰹あつかましくも百につけ
棒鼻でかつぎくゞりをおし明ける
船頭も後のばゞアは義理で抱き
春まけは醫者の手ぎはにいけぬ也
ぢん笠でつみ草に出る淺黄うら
地紙賣芝の屋敷でくどかれる

高砂は今もついでに行くところ
じやうだんをしい／＼捨る鳥の羽
すがかきの中を手代は出て歸り
留守ねらふやつはあいつとあいつ也
仲人も少しくどいた男なり
うそをつく事がきらひで素顏也
雜兵は又來ましたと後三年
傾城はかたきが知れて捨てられる
洛中は女を丸で見せぬ所
大名の着く日もだしを賣つて來る
入王に成ると見物碁へたかり
をしさうに姿を崩す雨やどり
五六度覗いてよめの夕すゞみ
三會め國府の下へ二兩置き
知行から來る内寺で五俵かり
何事ぞおこつたやうにちどり立つ
吉日が遠くて柱一本たて
針賣のいらざる後家を立て通し
おとゝいはむごくしたなと十五日
信長へお國ものだと申上げ

ぼたもちとぬかしたと下女憤り
六月の質屋は見世へさくをふり
どこでどう習うて來たか後家の拳
草履取よろけるなりに供をする
合せびんおもつた程は智慧がなし
旅むかひすやをした日の面白さ
切れ小口名代出すがさいご也
當ります抔とよしずへけさを懸け
圍ひ者じつとして居るたちでなし
白酒屋などは戸をさす手負猪
あま酒へみやげをすぐにおろし込み
人形と同じ縞着るくわいらいし
病人のみんな見て置くいしやの癖
おつかけて行くと新造ちゞこまり
ぶん／＼に寐るが夫婦のすがれ也
七乞食などとからかふ奥家老
駕の者おろして願ふむし藥
萬歳は雜煮なかばの春の興
鼻紙をつかんで遣手のんで居る
初鰹めしのさいにはあぢきなし

上下で浄瑠璃餘程ひどく酔ひ
首ッ引帆柱たてるやうにまけ
額へ筋出るとゝうみやうせんといひ
みゝずでもほるやうに見る拂藏
からかさで行つて紺屋にいひまける
ごぜの供しつたのが來りや舌を出し
針打をおつたて跡へござをしき
おめかけの親元藥とりも來ず
下女が髪にしめのにえる内に出來
ふぐ汁もくはさらにやあとしうといひ
ぬき足でかへる亭主はじやすゐ也
又寄つて來なと出しなに一つやき
口ばたをたいこ遣手につめられる
腹がけに成ると子供はあたまがち
行水のわく内うらで二ばん取り
まだほえて居ますかと聞く姑ばゞ
おやたちの前から取ると茶屋は云ひ
近所には居るなと母は二兩かし
ふくみ状ひゞあかぎれは書きおとし
瀬戸物屋あたり近所へそんが知れ

青空に直して歸るひのころも
紫に成る程つめる江戸のはり
市歸り大戸上げろとしよつて居る
なまかべへ御使者を通す御立身
千兩は一歩かけても氣にかゝり
御夜詰に御次へ座頭おして出る
御めかけのいふ程の事是となされ
鳥追のしかられて行く店おろし
能い後家が出來ると噺す醫者仲間
枕繪は添へても質屋値にふまず
料理人首でもゆくとふいて居る
しんこんにてつして鉾は出る氣也
素一歩はあだやおろかに遊ばぬ氣
祐經は今朝の御禮が暇乞
名代のたらぬ所で縄をとき
御しんぶははち拂ひだと二兩出し
水茶やを二軒ふさげて見つ見せつ
針妙のながしへかゝる人ずくな
供部屋の外から乳母は乳で呼び
生酔のまくらあてがひ次第なり

新そばの給仕廊下でつき當り
旅立ははでながくたびれる
あどけないやうで無心に抜目なし
おやゆづりだと盃をしやぶらせる
をしいかな秘藏の娘むごん也
あきの守時分は至極しんじや也
ます花になどとは文のよわみ也
くさらせて置くが端午の名殘也
御不勝手質屋の大戸上げさせる
きやうこつなお子だと遣手銀を捨て
御ふくろに知れて娘はふとく成り
御隱居は杖のあたまへ手をかさね
是切りのあやめさげ行くはなれ藏
雨舎りきせるを出してしかられる
いそがしい見世につき袖亭主なり
町風かなどと御針に見てもらひ
よさは能いがとは女のそねみなり
嫁をいふのへ御給仕はもり付ける
呉服屋へ來て泣すねる秘藏娘
女房は何さ／＼と三つへし

手を取つて子になでさせる鴨のはら
褒のもの隣へ出たであんどする
かけ乞も二三町ほど春をふみ
持参金うにこうる迄のんだつら
正月をよめもそろ〳〵かなしがり
大びきはきんぜんとして崩す也
懸取のとぼして來るで春でなし
どらにあひたいがまつごの願ひ也
むこに行く事を茶やからそにんする
死水を取つたは今井一人なり
そだ〳〵と駒下駄をぬぐ素晴しさ
江の島はつッついてさへ行く所
ありんすを通ひ御針もちつといひ
ひとりでに釣瓶のさがる物すごさ
文づかひ袖口を買ふひつらこさ
でんがくの途中から止む面白さ
質屋から出ると駕かき見ちがへる
有合ひの顔にてしかみ火鉢化け
師匠さま色めくと見て謡にし
大そうな道さとあんまもんで居る

あす仕廻ふ迄もりつぱな呉服店
酔つたごぜ人さへ見るとからみつき
はつめいで局大かたかしなくし
合羽箱おッつく内のやかましさ
戸を立てて這入れば娘きやつといひ
田楽を持つて馬かたしかりに出
座頭の坊どこにほれたか文をつけ
物いまひだけに月見を二度くらひ
たんぜんは何もないのに結ぶやう
小町ほどあつてにぞろを歌によみ
まげぶしのひよめきに有る鏡とぎ
川留めに宿の小僧が後を追ひ
うたゝねの顔へ一冊やねにふき
梅若は戸塚で喰つたまゝといふ
米つきはまッかなやつを二つくひ
御氣が能いなどと立派にばかにする
御座つたかぐらゐでは出ぬ蒐鷄や
えいかんに作れと乳母へ抱いて來る
欄干にもたれてどうだ煮えきりやれ
幕引はへんてつもなく見知られる

禿來てたんすへ深く手を入れる
二つ三つおきやと古着と和尚打ち
いせの御師扨錢の無い盛りに來
乳母が親油のやうな酒といひ
高倉の宮だと馬場でなぶられる
どか錢をつかひなんなと根津で云ひ
うすいもは可愛いらしいの内へ入れ
違つてもよしと給仕へ汁をかへ
あつ湯好きうぬばつかりが情（じやう）をはり
藥種屋のやつと聞きとる山歸來
をしさうにこし帶を解く御延引
羽二重を着るは紺屋の不調法
すつこんで居やれと亭主牛を見せ
新造をすく内むすこ人がよし
新造のくぜつかた〳〵古い聲
さつ〳〵とくばれと渡すかゞみ餅
きり〳〵す禿にいぢりころされる
金つばは餘程かうじた山師也
こし帶を雛の幕とはよめの作
こも僧はもらはいでもの姿なり

店ちんでいひこめられる論語よみ
痩せた子を肌におぶつてさしをなげ
かみゆひに一くし望むかゆい所
居つゞけのすだれへ歸る不屆きさ
さかさまな題目講を八百やとり
里の母髪を切るなとそつといひ
ひらり乘る猪牙は元手の入つたやつ
薺うり村でも至極かせぐやつ
岡崎を八乳でひいてしかられる
惡筆が寄つて筑紫へ遣る工面
鐵砲の間へ一聲ほとゝぎす
姉女郎まんちゆう一つわざと喰ひ
どの幕へ行くと藥子をつけて行き
絲鬢の旦那はものがいひ易し
後押へ通ると杵をふり上げる
だといつて今百兩はだされまい
金平の夢を見てゐる枕蚊屋
組板へあられで疵をつけはじめ
飛鳥山ばたら三味線百で借り
入れ髪をして品川をやたら譽め

口に戸を立てぬと御さい勤まらず
掛け取の後へ廻はすは丈夫なり
正宗を喰つたと質屋そつといひ
立つて居て座頭の濡れる俄雨
着替えずに芝居歸りの夜を更かし
天蓋をぶる／＼として吹初め
降つて來た何とどこぞへこぞらうか
二人目は女房の傘を貸してやり
國境美濃の方では油斷せず
勾當の不足はたつた一二寸
つけ登せつゝいつぱいのろぎん也
女きやく物申などと笑ひこみ
下向にはあばたで戻るぬけ參り
居つゞけをもう一日で願ふ所
芝居をばやめて內裏の願ひ也
是はまあよんだやうだと膳を出し
いつなりと染めてよこせはすねたやつ
手おひかけながら小遣ひくだせんし
悴めがしかりませうと土手で云ひ
逃げなんすところと禿いッつける

大門に內儀はだしで待つて居る
楓江は斯うだとあごで二つふり
化けさうなのでもよしかと傘をかし
どういつて拜んだと聞くえんま堂
何が喰ますと樂天そばへより
珊瑚珠はだんごのはらで取りに遣り
百人首繪の出來たのははるか後
とむらひに行くも嬉しい一さかり
しつぱりと賴むとさゆを汲んで遣り
口まめなやつ看病をはぶかれる
重箱をむすんで一つさげて見る
吳服屋の手代壁にはえたやう
すッぱぬきみんな逃げたで持つたもの
死水のそばで母おや碁のいけん
腕ッ切まくつてかける俄雨
あごの髭もつとぬらそとのどで云ひ
心中が化けると禿おどされる
一人者內からしめてとん死する
十念のしまひ一聲のッかゝり
町人で役所をうめる大三十日

とぼしかけくれろに質屋聞きあきる
今五年おそいとだるま首ばかり
夜盜ども見ろと兩手でざらを寄せ
油屋のかいで出すのは直が高し
元結紙首をふるのでしまる也
かいどりで五十まけろと柳はら
關守がわらつたといふぬけ參り
根津の駕四百目程はおもい筈
神樂堂ふらずに鈴をしやくる也
請けに來て新酒の禮をいつて行き
よし町は損だと和尙氣がそれる
こいところに大屋子守をあつらへる
一人者客にしばらく留守をさせ
かんしやくのやうに目をする色娘
駿河から遠江まで肩車
ふんどしを帶にして居る通り者
はやるやつ戸の明け立てのやかましさ
辻番の奥の手は戸をたてる也
中ぬきでまねきや追ッつく小侍
雜司ヶ谷のどのかはくは平のせい

陰間客尻のしまひのつかぬもの
もくねんとして肩の灸かきこはし
大三十日女房がいふとだまりをれ
かやぶきへはひる夜盜ははけ次手（ついで）
御局の女いしやとはすまぬ事
中の町さくらに人をつなぐ所
虫持にしたのは逃げた乳母のせゐ
柳原よるもばくものうる所
わるい癖ばかで煙管をほぢりやるな
鈴鹿山外の觀音ではいけず
根津のぎう醬油の樽へ腰を懸け
にはたづみよけ〳〵兜持つて來る
しうとめを久しい鳴りで故人にし
でかいがと藪入の供茶をしたみ
藥代に一つひつぱぐ他人宿
百兩をよめに預けてこはがらせ
よろッかァつい大門に着きにけり
待女郎聟を座敷へおして出る
仲人が來るとかくれるふとくしん
ぬしなどは目出たい株と土手で言ひ

知れて居るものをかぞへる泉岳寺
氣上りがするとぴい〳〵引つたくり
旅歸り大きなはらのまゝで去り
村正を和尙一（ひと）こしもちにつき
蛤であげるがむすめ氣にいらず
喰ひつみにふしをいたゞくおそい禮
門禮にしたのが伯父のふそく也
かとく公事元のおこりは卒中風
四五兩のおこはをむす子夕べくひ
よく聞けば砂利場の伯父も他人也
きゝほして見れば禿の智惠でなし
したく金取つて行くのはふくろもち
一軒で呼べばすだれがみなうごき
僧正もいぜんはけんの上手也
しこなして袴をたゝむいひなづけ
人がらへからかさ一本かしなくし
なんにせい向うへ越せと隅田川
えびす講をどり子を呼ぶ息子の代
皆翌日へ廻して仲人おッぴとき
金屏風たゝむとつねの見世に成り

なんで間違つたか出合あけらこん
神樂堂小ゆびをはねてへいを持ち
下げ髮で二歩おちますと賃屋いひ
生藥屋ぜげんのそばで五兩取り
はき溜めへ鶴のおりたは小松どの
お勞咳かと天がい屋星をさし
雛紋のことで棧敷を二日のべ
初鰹ばゞアぐらゐはおつこちる
うごかずに居ろと去狀書いて遣る
わたし守一棹戻す知つた人
手をわけて酒屋尋ねる野がけ道
つけざしの禮に脊中をなでて遣り
女房は障子の内で直をこたへ
あら世帶何を寄進にせうといひ
死顏を他人で拜む不孝者
鈴なしに出來たは肩がすわる也
御中人四百四町はあら手なり
御祐筆人を遣ふも筆のさき
しなの者江戸と國とは雪と炭
惡所とははばちの當つた言葉也

あてこともないと春屋に起される
髮結所どうだむすことゝいふ所
髮をよく聞けとおふくろ糸をこき
朝歸り旦那がまけてしづか也
七兵衛一本遣ひに成るをとこ
市の供信濃ひたすら願ふ也
なぜ置いて來たと酒つぎ一つぶち
箸おくかおかぬに息子ついと出る
品川の衣桁もゝ引などもかけ
えびすさま人たがへにて盜まれる
乳母が荷のすだれを這入る氣の毒さ
口とりに身にしみをれと源三位
見世迄も顏出して行く里の母
買出すとぜげん糸瓜でおッこすり
板の間へ茶をぶんまける事納め
菎蒻のぎざ〱きついじまん也
あいさつにこまりかんざし差直し
後のシテしごきでばたり〱來る
座頭金金のあたまをはつてかし
二か三か知れぬとごぜにさぐらせる

水くみをひさくで春屋おつかける
立ち附でたどんをいぢる呉服店
素一歩で女房は越後屋へ上り
御内儀をなぐさんで出る旅むかひ
よし町の文物申でもつて來る
雛祭旦那どこぞへ行きなさい
あまでらへ行つて我身にして歸り
吉原に居たと知らせるおこしかけ
四ツを打つ迄うなぎにてのんでゐる
女房に上手であつたは百年目
御はらひでわびごとをする樽拾ひ
あいさうに聞く三味線のやかましさ
錢だけにつきやしらげをいとふ也
福引にすりこ木取つて縁近し
のし餅もよく〱見れば裏表
虎の威を五種香うりもちつとかり
めりやすをはめると摑むまねをする
女客内儀が留守でてれたもの
氣をつけてしんぜられまし元だらう
人は武士なぜ町人に成つて來る

物思ひあげくのはては死ぬくめん
あがるなといはぬばかりの年始帳
根津のきやく能書と見えて竹で書き
侮つて座頭の女房おさへられ
どぶつ下女目をなくなしてをかしがり
樽ひろひよこねはちつと早すぎる
鳥追に出る頃は早疵もいえ
二歩出たは紙くず買の親の代
なぜくぼく見たと天秤ぎはへ寄り
木戸番のあたまで結ぶ頬かぶり
牛若は千十四人きりたまふ
吸つける内に流れるわたし守
みす紙に國府錢ぎりくんなんし
わたし場を上ると六部三つ打ち
すつぱりと盜人にあふ一人者
掛取が歸つた後でふといやつ
またぐらをばつかりあけて是が勝
芝居見の留守は旦那とじやもッ面(つら)
番葛籠しよつてこのしろさげて來る
辻番は捧をつかぬところぶたち

松右衛門いらざる道でかゞみごと
喰ひぬいてこようと信濃國を立ち
年禮は門違ひでもてれぬなり
僧正の七尺わきへ一つ落ち
押へればすゝき放せばきり〲す
呉服屋はおちつく迄のやかましさ
さあなんぞ出しなとしやれる女客
二(ふた)樽の酒屋も見える十五日
ふんばつてさう來なさいと火繩賣
茶呑づれはいたうの來た氣の毒さ
一箱はぬけるが山師口につき
賣れぬ奴素人よりは遠ざかり
さうばんが鳴りやすとよめ舌を出し
義朝は年を取つたといふばかり
女房に髮をゆはせる氣のよわり
今だくよ〱と帶へたくしこみ
起請など貰つてむす子のりが來る
實盛の切手で通す佛が荷
よし町は文と手紙の間(あひ)を書き
わるずいで迎ひをとんだ所へ遣り

あす來たらぶてと櫻の皮をなめ
座敷牢目黑のばちと母はいひ
文使あるひはいさめまたしやくり
氣違ひのふんどしとしたといふ斗り
侍顔へさくら折々ちりかゝり
三年の戀とはきつい日まし也
寐しな迄合羽着て居る在鄕客
御定めの通りを涼む京の町
御持佛にこがらしのするひとり者
狐つり思ひがけない鳶をつり
書出しをせッつきに遣る能い工面
女湯へ抱いて來るのは久しぶり
懸取は理づめで切れをさづけられ
大一座黑とそら色はわけなり
預きやれと女房の金はなでこまれ
五右衛門は素手で歸つた事はなし
是れ斗り着て來やるのと里の母
勝公事の戻りむすめをつんにがし
うつくしい顔で取込み勝負なり
朝長はよしや生きてもびつこなり

うけ出した後は五町の車留め
信女に生れて來ても不孝なり
葬でも賣れがいけんの聞きはじめ
茶屋の石こふが出來るとたらぬ也
琴よりも豐後の弟子はさいはじけ
飛込んでこようが媒の仕廻ひ也
かゝしうをのけて一杯あてに買ひ
藪人の跡氣の知れた人が來ず
針妙はきぬたがいつちあら仕事
のりかけで呼ぶを息子はいやといふ
しかられて急度出て居る茶の給仕
馬鹿にしなさいと紙そくをひつたくり
上草履ねきちらかしてむぐりこみ
氣がへると小遣帳をやめにする
めりやすは女のぐちにふしをつけ
手習子めつぱりこうな火にあたり
かみ結は元結まくとこしをのし
手のひらへ錢をつかせる夜鍋
俄雨うらみをいつてかして遣り
よし原の咄をさせる小屋がしら

どうだなと戸へ寄懸かる日なし貸
朝がへり女房がいふと御もつとも
自身番松風などのくづを買ひ
歌がるたとう／＼下女はどぶを喰ひ
いやらしい下女前垂をふみしだき
こも僧の親しゆら道へ落ちて居る
先行はせまいと亭主乳を貰ひ
初のひなこゝろ當りが二三げん
笑はれて來やせうと出るかねの禮
又一度酒屋のおちる中なほり
呼出しは晴天八日客がふえ
妹の三みせんかりて藪ばひり
飛鳴山座頭おどけて一つなげ
妹の先へかたづく氣のどくさ
おやの氣は大師河原のつもり也
鈴と幣引ッさくやうな神樂堂
兩替屋次へ見せるはむづかしい
下女が荷もゆたんを懸けて數に入り
はし近き湯殿鹽谷が越度也
にげこんで嫁の着かへる忙がしさ

死水をもゝ引でとる本望さ
あたらしい通ひにきさな引殘り
辻諷ひ眉で笠をあげて見る
三めぐりの雨は豐かの折句なり
御吉例みんな昔の御かんなん
奥さまの十九めかけのひがとまり
風ふせぐ外に役あり金屏風
さりとては又とのぼりを引ッこませ
蚊のくつた迄を恨の數に入れ
仲條へ供には過ぎた男なり
琴箱をよい／＼で出す十三日
ぬけた翌日旦那に樽をひろはせる
身持にて紅を着て居るむづかしさ
手打そば下女前だれをかりられる
音羽とも出ようと御さいけなるがり
小松どの已後一門は海のもの
銀ぎせるふられてきずをつけ始め
琴一つごぜおつこうに廻るなり
すつぽんがゐやすと顔を二つ出し
物まうといふは雜煮の出るのなり

口に袖あてて萬歳のぞかれる
敷初にとなり座敷は癪をおし
井戸がへは深さを横へ見せる也
大根だね有りは村での能い手也
品川はしでほろぼしのところなり
朝歸り母のかぶりで横へきれ
大三十日肝にこたへる賴みましよ
新造の癪とはこいつふといやつ
御宗旨にかたりの出來る雨やどり
元日はおきさうにして禮をうけ
遣手をばばらしはぐつた治郎左衛門
品川の客牛町に氣がつかず
さあ小判ほしかやらうに下女は逃げ
一人者となりの娘うなされる
あかるみへ引きずつて出る仕立もの
二つ三つあかるみへ出す夜はまぐり
間男を知つて旅立ち煮え切らず
わきを見て女太夫はざるをふり
糸ざくらきえいるやうに御勧進
母おやはひいきの役者知つて居る

首くゝり富の札など持つて居る
元服の甚だおそい根津のきやく
御内儀がにらめたッけと連はいひ
鯉口をならせば御用置いて行き
今の日はたれを見やると姑ばゞ
樽ひろひ匂をかいで是が酢さ
素一歩もぜんたい我れが金でなし
ふぐりより餘程向うで牛はたれ
深川へ落ちたと綿の師匠いひ
通り者ひざが光るで安く見え
出合茶屋しのぶが岡はもつともな
なぶらせはせぬと花よめ湯へさそひ
間男をつれて相模へにげて行き
博奕のことは聰明叡智也
勘當は雪か雨かのあげくなり
朝歸り團子と芋をつきつける
相ぼれの仲人實はまはしもの
おみかぎりなどと舟宿ろをおろし
雛わけによめは一日里へ行き
眞ッ崎のむかひ箱でうちんで來る

斯う持つて彈きなと留守居笑はれる
歸りには人買ひに成る隅田川
寐た内におひえを一つつい丸め
先づ是れで御免と藥しや三を下げ
駕かきの聲ばかりして眞ッ白し
女房の顏見てごほり〳〵せき
落花するそばにやつこの高いびき
銀ぎせる拾つたしなのいもで持ち
よし町でうつはくすんだ手代也
よし原はふり袖に目のつかぬ所
さがし出すたびのび上る猿轡
ぐちなやつ扨元日のむづかしさ
丙午遠い所から結納が來
甲州は針や按摩に事を缺き
みんな荷にしろと笏にて御差圖
里の母遣ひ殘りを置いて行き
雪隱を過分々々と奥家老
惣門の内ではのきく杢のかみ
いろは茶や金より銀のきく所
琴の柱をひんもぐやうに仕廻ふ也

鮫鞘もぬけぬ筈なりやくだたり
小便をいめばきりやうがどつとせず
饅頭をいしやに持たせて追廻し
七つ甲屋表の御用初にきゝ
ひまらしい見世におうばが二三人
母おやは羽二重だとて加賀を着せ
傀儡師思出してはとんと打ち
歸る迄笑ひつゞける女中きやく
坊主客あだやおろかの錢でなし
両替屋ぞんじの外に肩がきき
二の足で師走の土手をふんで行き
女房のとッつくしまは値が高し
四つ切りを破りはじめは若旦那
鶯に出て谷汲のほとゝぎす
車井戸むりぢやいかぬと汲んで見せ
のきなさい付木ばッかりくべなさる
みつだんに母のはひるはたけがしれ
てまへまあ内はどこだと楊枝見世
三の糸こき／＼それは知りやせん
名物の内だと御油ですゝめこみ

飯喰つて大あせかくもげびたもの
十三日氷ものの置きどころ
ふところはでんがく切りのしたく也
夕すゞみなげるなどと角力取り
品川の橋を越すのはしはいやつ
馬で來るのでよめん女とはねる也
六夜待一宿つゞく鬼すだれ
待ちかねて子は寐て仕廻ふ送膳
三夕の外の夕ぐれ中の町
つき出して岸に見て居る草履取
神樂堂歸るを見れば夫婦也
屋根舟へよべば踊子身にしみず
見くびつて遣手つらをも持つてこず
いくらいりますと質屋はずらりぬき
出合茶屋小便におりししにおり
石塔は土場からすぐに思立ち
貝ひらふ右と左は千代萬
丸綿をうつとしがるはきついこと
眞黒な手でつむじ風追つかける
しどの無い藝子黄色なばちでひき

あかぬ戸を外で手傳ふ寒念佛
大切な金瓦ほどぬすまれる
隱居所で孫の馳走にりんが鳴り
御てんやく陳皮も安く見えぬ也
かんびやうにをしい姿を捨て置き
つまづいてにつこり笑ふ神樂堂
鏡立先づしまつたと杖につき
あやめふき人にだかれる年でなし
五尺程ある書出しへ一歩遣り
逃げ尻で飼薬くはせる寺男
いッちよい町はどん／＼かッかなり
まだ死にもせぬのに泣いて叱られる
ちッとべいいもはあるがと村仲人
梅若は旅陰間にはいやといふ
やれでかいたくみをしたと田舎公事
八百屋から賣るとは俗の知らぬ事
もちッとの事で日蓮片月見
五十雑留守のやうなは客があり
明日でも割つてくれろと飛車が成り
まアうんといへと無盡の指を折り

推量で向棧敷の貰ひ泣き
烏帽子親祖父の敵も討てといふ
御の字になつたと花見支度する
行水に寢る程姻は圍はせる
どうしても泊つて來たが亭主負け
ふいに出るひなはむすめの吉事也
めづらしい内はきうりも皿へもり
きのじ屋の枯野に禿寄りたかり
今くへばよしと肴屋置いてゆき
ごふく店きせるを廻すふけいきさ
楊枝見世乳をのむ內は買ひに來ず
手紙には狸臺には鯉をのせ
折ふしは車でも出る無常門
萬歳はみなけいはくにふしをつけ
是萬里の小路とごそり剃られたり
勞咳の願ひは鼠小紋なり
しやきばつたやつを留場へ擔ぎ込み
家督公事目鼻がつくと座頭が來
女房ほど母のむかひはこはくなし
聲を立てやすと腰元いけぬ也

引ッこぬくやうに髮結ゆびをふき
隅田川今でも母に苦をかける
ゆり上を聞いて吸物もりはじめ
へぼ瓜のやうにうけとる一人ぶち
後添の內儀いち子といぢり合ひ
よみうりは二人揃つてせきをせき
顔を見てわけも云はずにをかしがり
まああれも入れろとゆびを一つ折り
さし引いてくれと口から二歩出し
くぜつ文半分頃でちくしやうめ
かし本屋是れはおよしと下へ入れ
よしきりに地をうたはせて時鳥
大あぢに成つて御茶の間緣に付き
かきたてる度に袂をがらつかせ
雪隱へ二度來たかげまなぐさまれ
わつぱしに切られましたと手下共
そりや來たと乳母またくらへ迯込ませ
どうせうと思つてごぜを連れて迯げ
きぬ川にかさねこのかた鯰出來
すりこ木でこづくは安い法事也

古寺にこいつと思ふ猫ひとつ
暑氣見舞たつて裸にされる也
女房は土手のあたりで髮がとけ
御新造と內儀と噺す敷居ごし
緣遠いむすめからだに作りあき
つくねんとごぜはあばたを數へられ
越後屋の前迄傘へ入れてやり
黒鴨と旦那とならぶよいきげん
立ちつ居つしてぬひ仕廻ふ屠蘇袋
花ぐもり二人一本あてにしよひ
板橋と聞いてむかひは二人へり
十三日覺えて居なはそれッきり
手に持つて行くばかりだと羽織かり
座で彈くといつてやう〳〵幕の內
見世の衆こちらへなさいと仲人いひ
巳待へも來る鎌倉の二ばんばえ
はし〳〵は今に毛請を卷きつける
あのお子はお氣が輕いと茶屋は云ひ
夜ッ一夜地主の餅でねつかれず
雛なればこそ間に合ふと買ひに出る

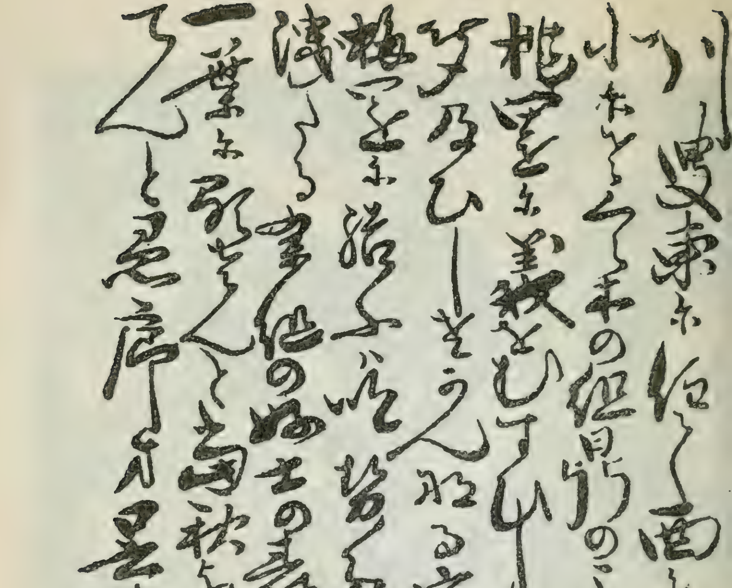
御つゞきが有るかと聞いて悪く云ひ
間男をせぬを女房恩にかけ
おかるればよいに遣手の朝参り
ぬけ参り土場で片はな持つ氣也
ごふく屋のはんじやうを知る俄雨
見世に居て呉れろと土手で祈念する
おやぢまだ西より北へ行く氣也
このしろの鏡にうつるにぎやかさ
こふの鳥びんぼふ寺はきらひ也
下女がふみ内儀の下書で國へ遣り
下戸の禮片つぱしからたゝきつけ
身一つでお乳母のかける急な用
今朝かけた土手を鼻上下で行き
中の町がうぎにつまをつかむ所
結ふ内はたらひのふちにぬか袋
きぬ張をにぎつてよめは一つそり
かつがれはせぬと娘のねだる市
口をすくして氣のかたを連れて出る
はなし鳥そばでほしがる後生樂

ぬいた時ヤッペしたゝく神樂堂
月ちがひどれも拔いたは十五日
跡を見ぬ人の乘るゆゑ猪牙といふ
ぶんさんの濟む内夫婦木綿もの
どつからか出して女房は帯をかひ
大一座禿こんでにつれて行き
かつ拂ひなんすとこさとおして來る
せんごりの泳ぐと岡でかんをする
行かば行きなさいと女房弱く出る
内談と見えて火鉢へ顔をくべ
六度めは茶の木の上へおッこちる
つくだ島汁のみ迄もわたりもの
呉服屋もよくはやるのは二人つけ
長つぼね屋根や一日きぬを縮め
踊子にもたれて居るがやぼなやつ
初鰹煮て喰ふ氣では値がならず
腰元ですますはしはい屋形船
朝歸り取あげばゞにしかられる
目釘までぬくは一兩からの質
一(ひと)きりやうある使者の來る一月寺

おやゆびへ袖口かけてひいて居る
代脈は何をこいつの氣で見せろ
片眉毛おとすと嫁は手でふさぎ
船頭はをとこばかりを八日こぎ
勘當の羽二重で居るぶはたらき
御てんやく逃げると後は浪の音
銚子への路ぎんに拂ふ銀させる
勞咳の元は行儀をよくそだち
一生の顔を目出たくあかめ合ひ
知る人にばかり子供がするゑせん

明和七庚寅孟秋吉辰

誹風 柳多留五篇 終





第六 図參照



輪 六 留多郷

誹風 柳多留六篇

川叟東に住んで西に初瀬南に近江北にさくら木の組鼎のごとし。猶のむかし桃園に義をむすびしためし、爰に聞及びしさかんなる定連の誹名を梅園に結ぶは吟勢たゆむ事なかれ、洩れたる餘組の好士の表徳は七篇の一葉に顯さんと當秋より耳鋒てんと愚序す。

呉陵軒可有

松が枝のとなりへからむ町の春
かはらけは淺い深いの草で出來
旅むかひ遠見を出して揚げて居る
しかられた針妙つういついとこき
遣羽子をたいこ田圃へつきなくし
おき／＼のきげんは只の事でなし
呑む禮者朝の斷定大ちがひ
酒のちり筆で伴頭ちよいとはね
ちとしめてくれろと親にねずに居る

たがかけもちつとかそつとかんなくづ
撿校は手引が有るでへびにおぢ
嫁のよみ氣のどくさうにあざをたて
子をだいて惣身のすくむ角力とり
なんぢらは何を笑ふと隱居の屁
茶屋女せゝなげほどなながれの身
こんじきの男蜆に喰ひあきる
玄關番かつぶし箱をあてがはれ
蚊屋賣はめりやす程なふしをつけ

なんになりますと大工は切つてやり
九郎どの五常を守り／＼にげ
文使道など聞いておびき出し
毛せんを敷くとぼろ／＼落ちて來る
燈心をたれに聞いたか嫁はのみ
とむらひのあたまにしては光り過ぎ
けいせいもやつこにされぬ江戸の張り
葡萄棚なつたと旦那大さわぎ
女客先づ重箱をはしらかし
柄杓の柄出して湯番はめしをくひ
あつぱれでござると師匠三を下げ
まけた奴百を手玉にとつてゐる
しまはずと置いてくれろとあろきいひ
かんがくをしたと下女へはよごれもの
呻されるろせい杓子でつッつかれ
六づきだ見なと日なしに内儀いひ
此がきめみやげどこかと酉の町
百だんなまさか衣もりやくされず
御殿者ゆがいて食ふはあてられず
麥秋に書出しを遣るかるゐ澤

島の子を願つて呼んでおばたにし
とびじらみ女房にゆすりぬかれたり
安玄閤御用はらばへうつて居る
手拭を人じちにする五十雑
根津のぎうつとめを土場へとりにくる
煮やつこで堂をほめ〲のんで居る
曾我祭するから芝居金がなし
うけ出して鈴をふらせるかるゐ澤
そらじぎをするなと下女をつかまへる
門部屋にたしない目玉ひからかし
御子孫は西の國でも大あたま
つれの部屋迄ついて來るうまいやつ
神樂堂後引つさりがはじめなり
傘出せばひつちなぐつて供は飛び
かたみわけ已後はいんしん不通なり
日のながい事と杉戸に寄りかゝり
御紋より留守居の口はよく廻り
黒がもをつれて妾の高がしれ
祐經は一ッかいのがれする男
小判ではいやだとにげるつくし賣

和尚さまくるしいわけは二世帯
京だんをまねて綿つみどうづかれ
上草履ころしてあるくにくらしさ
子の尻をはしよつてはなす御殿山
庚申のあした二人の宿をよび
あくる日は夜打もしらず煤を取り
雛の酒茶わんでのんでしかられる
藥種屋でとそを買ふのは無病なり
中宿へ御用小ぎくを持つてかけ
初がねはぱち〲とした顔になり
あてはめた内をお袋たばかられ
御刀をよけたが座頭越度なり
女房の聞くやうによむにせ手紙
よめの留守孫も味方におびきこみ
お局の出に大部屋は四人泣き
乳母が尻たゝいて御用うきめをみ
蚊を追つておすゝめ申す源三位
妹の無藝は姉のふらちゆゑ
にげ足でよめの出て居る門涼み
又それへふんばぎやすと産婦いひ

湯屋へ來て咄すは安い女郎かひ
御藏前濡れて通るは地方也
けんぺいをいふのが乳母は癖になり
笠のじぎたがいにふちをなでて行き
腰元は度々御廊下を一ッいき
茶を直切るやつが役者の名をも聞き
見世へ出る年迄ちりげするゑて遣り
どぶさつておらうと亭主たきつける
雪をたべやるなと帶を締めて出し
小言かと思へば女せいぞろへ
金時は鬼が出ないとねかしもの
金がつゞかぬと若後家地をかせぎ
竿先に成つてとあやめ達てとめ
神道者守屋十ぶん理だといふ
めがたきと思へど島田齒がたゝず
女にはいつそ目のある座頭の坊
不心中遣手へぐわらりぶちまける
居酒をば仕らずとむごくかき
御預り申して置くと勝つたやつ
分散に狆をば醫者へおつ付ける

長局たつた四五寸不足なり
もゝ引で和尚のつれる村小姓
えゝ子だと御用八百屋へ賴まれる
眞木さつぱ程なでむす子みがくなり
撿校の妻つれ立つをせつながり
叡山のあてで前日一つ鳴り
撿校へ物申うのない不成日
後の月一人々々にごみを出し
つれびきは猫と馬ほど音がちがひ
へんな日にばかり髪ゆひやすむなり
切落し實をなげぬのは得手勝手
一人もの一なぐりだと笹をかひ
口ばたをつめるにといふ待女郎
よし町をぶらつく乳母は不人相
虚無僧の礒にかける急な用
ほれたやつ見ぐるしい程つかはれる
小兒いしや赤い紙燭でおくられる
なでつけでずい分よいと連はいひ
子が一人出來てそれなりけりになり
將門は朕が不德とへらず口

路考茶が秘藏と見えて鈴をふり
御かごわき時々またへ手をはさみ
かぞへ日に成つてとそねむ年わすれ
こし元のよむを聞き／＼御しづまり
千兩で〆出しに成る五十けん
惡人がとなりに有るで早いひな
いらぬさし買つて酒屋はしづかなり
御內意で和尚衣を二つかけ
上の句でくもり下の句ぶんまける
たま／＼はよいと亭主はふとく出る
帶に手をはさんで後家ははぢしめる
正宗を切れさうなとはほめもほめ
櫻ばなしらふでかつぐものでなし
靑網でいつたがみんな姿方
心中が有るでつよくもしかられず
御見たてだなどと腰元引出され
名作の由來をはなす雨やどり
どつからか人の出て來る犬がらん
七つ口是れも／＼とくゝしつけ
四つ手かご行のの道でねだられる

四五會めどうもられしい事をいふ
順禮が來ると式部は筆を置き
ごふく見世何やらいふと持つて來る
ひきぬきにしなの伯母も捨てられず
引導が濟むと魔道へ引つこまれ
朝大師かづけて出るは高がしれ
上田紙でつちは下女に見おとされ
伯父が來てとかく他人の飯といふ
床柱しよつても見ずに年が明け
神樂堂姬ごぜの身ですつぱぬき
けいせいはたとへにもれた厚着する
料理人うん氣も少しかんがへる
ようも無い緣を組んだと源九郎
にがすなとひつぱつて行く大一座
初がつをふといやつだと猫を追ひ
初のひな旦那御太儀なさつたの
づぶ濡れに成つて兄弟わたり合ひ
母のないげい子五つ月迄かくし
宿下りののむと出してはとんだ事
紺屋からもたせてよこす氣の長さ

膳が出てあぐらをかくのやかましさ
もう客が來てもと樣を一つかみ
しうとめに月見ひかせる氣のどくさ
をどり子の母くどくのを聞いてゐる
お袋は日課息子は鐵火なり
ぬきん出て隣の時疫しよつて來る
くどく奴たばこものますむきに成り
市歸りおんまかきやらをそつと出し
うらなひにさいなんと出る通りもの
下手將棊袖をひかれてねめ廻し
見えばうでしつきやくまけの地紙賣
新造にたしない水をつかひすて
江戸みやげ車長持などへはり
いたはしい程いんぎんな御不勝手
大はんにや時々でかい聲を出し
黒がもは五百がわたをみんないれ
米つきにおめしといふと帶をしめ
此佛さまもお好きと土手でいひ
百だんな正月くるとぼんに來ず
わらぢくひ迄は能因氣がつかず

すゞみ臺ぎしり／＼と人がふえ
雜役の馬子がまじつてばくちじやみ
はやまつた後家入れがみで盃し
女よみおぢなさるなとしやかをうち
浪人は長いものから喰ひはじめ
夫婦づれ女房に先へ出やといふ
一人者柄樽をくすね米をいれ
五十雜色に手拭買つてやり
せん水へしやうじひやかす入院まへ
化けさうな花むこの出るするが町
ばかにして彈くに淨瑠璃氣がつかず
たつた二度着たと女房ぐちをいひ
勾當の內侍いんぐわと美しい
病人の寐たも盜みに逢うた晩
ごふく店かついで來てはなげて行く
二度かりた小袖を貰ふかたみわけ
ふだん着で出たとおふくろおろかなり
姉さんといひやと藝者子をそだて
くらやみで晝めしをくふ漆かき
うたゝ寐の書物は風がくつて居る

口上がすむと西瓜の手をはなし
今歸りますと笠ぬぐ大ぼとけ
ぬかつゝむ內御新造はしゝに行き
貰ひつけぬなどと內裏を二朱につけ
事ありと見えて御湯殿しづか也
江の島のばちで居つゞけ尻がわれ
素見物本多にゆふは何ごとぞ
あたつてはくだける浪の和歌の浦
心中の帶をしてゐるむごい事
お妾に出るは一どら打つて後
一反でたらぬと娘はぢしめる
せはしなくつゝいて座頭横に切れ
いもうとを先へ氣づよく仲人し
しんだかと思へばおきる角力取
出合茶屋危い首が二つくる
立懸けたやうにけいせい腰を懸け
今ないた雉子うりに來る塔の澤
あの人と藏へはいやと下女はいひ
間夫に成るやつは先生善をなし
旅むかひ夜ぎりはらつて出事はの

さつぱりとさうぢをさせて首を取り
行廻りかん廻りのむ雛の酒
いしやの山二つ一つの玄關なり
神奈川はてんまで來るが爲になり
半分は上げてもよいと吉次いひ
行戻り和尚大屋へおとづれる
雨乞ひも女はたんと口をきき
足があぶないと太刀取海へなげ
御殿ものふざけ出してはきつい事
關守の折ふし通ふかるゐざは
甥の殿たどとこうべる綱が伯母
去狀は言葉だたかひ事をはり
かり元結かけて髮結なで廻し
くどかれてごぜは張るならいやといひ
女中供つひに乞食にいひまける
やれば取るものだとばかのゐんはやみ
中宿で地は御無用といけんする
大一座いたゞいてのむやつもあり
大こくのやうに紫式部見え
二ぼさつはあるかつしやいと本田いひ
朝歸りすだれへ戻るばちあたり
風ぐらゐなんだと御用きめらるる
比丘尼程もみ上を出す嶋の僧
あの質屋先住の時百だんな
旅芝居目さへよせればおちがくろ
清盛はきどくに孫をかわゆがり
石尊はあげ坪しても氣にかゝり
あら世帯夜具に屏風を立廻し
撿校の娘以上へやる氣なり
上田には成ろとさかた屋ならべたて
よし町でうつはりちぎな和尚なり
上さうり引四ッからは横にはき
關守は手形とほくろ見くらべる
牛若が居ぬと熊坂大仕事
二三度もじやらして文を渡すなり
産んだのをかたはのやうに五丁町
めつさうにおすまいぞやと錢車
おそなはりましたとのまぬ人へさし
引出しをひんぬいて來る急な用
死にたくば死になと娘むごく出る
隅田川ロッぱたきたにおすなよ
半年の内に宿下り見事なり
だいなしにちろわと奴おこされる
白粉でばッかり持つたよめをとり
すがかきをりちぎにひくは出た當座
地廻りの向ふへ切れる總仕舞
かくべつな顏にて明けるぬか袋
堺町おとなしふつてのこされる
御障子が明いたで雀枝ばかり
ぬり樽を庚申塚で又おろし
大がくをふくさにつゝむ丸びたひ
上下の音ばかり聞く年始帳
一(ひと)位いんぎんに下女なぶられる
あり切の音ぼれを出す野がけ道
じやうだんに談義などきく花戻り
碁會所といしやとへむかひ二人(ふたり)出し
およんなんしたかとけちな形(なり)で來る
勝つた時仕廻ふとこだと愚痴をいひ
鉢巻きと椀巻きの中不動尊
死なば死にや抔とこはゝゝ母はいひ

脊虚をばかたつ苦しい奴が病み
はんてんはよせと度々ともへいひ
江戸人だなどと野がけは火をはたき
そだ／＼と藪からのぞく鈴の音
して取つた顔で鳥さし吹きやめる
旅戻り乳母はから手でかけて來る
事ふれを夫の留守にもてあまし
餅へ入れたのを男は軒へさし
三浦では吉原すゞめさまといひ
娩ぶた茶うけに喰ふはげびたもの
その時はごふの秤のおもひなり
人どめの中にもむごいかきつばた
おき／＼の顔へむしんはさしひかへ
竹馬と下女わけのあるていたらく
時鳥より此の事と料理人
衣から殿様の紋すきとほり
撿校のめかけに顔を捨てに行き
たがいふとなしに妾に出たが知れ
引ッぱいでおこすむすめは木ざうなり
後の月すゝめぬ顔にて内に居る

はだか身へ守りをかけてうつて居る
あだの有る子の母おやのうつくしさ
不動迄女房を連れる通りもの
かけむかひこいよ／＼といつた果
樽拾ひからおなじみと毒をいひ
ふんどしのほころび迄もお針なり
わるがたい下女君命をはづかしめ
人先へしたくの出來ろやぼむすめ
やぼなやつふられた事をひしかくし
かみさまをいくらもよせる柏餅
燕はぼん字のやうにとんで行き
小兒いしや常の熱とは違ひます
庚申のあしたしちやも預けられ
おめかけの素顔御拂箱と見え
五六寸お針の留守にさいはじけ
千の手で引くに三保谷氣がつかず
蒲殿がからめてならばなんとして
素一歩としらず駕かきついて來る
ひきはだで寄る品川は久しぶり
氣のまよひさと取りかへるいわし賣

吉原のぎうさと女房にくいひ
品川へしづめにかける矢口づれ
あしらつてなさいと小判落すなり
辻番はならひが吹くとちゞこまり
くわくらんと藪醫見たてるうるしかき
股火してねるほどお千代買ひこなし
入り船を見なと初會の客にいひ
判取でおぎなつて置くやつもあり
藏宿へいつて來る内堂に置き
髮の毛で象牙をつなぐおそろしさ
大一座黒豆のあるへどをはき
らんびんに成つて髮結追廻し
鼠木戸もぎとるやうに人を入れ
たいこ持ほんだのわけち程にゆひ
ふくの神そんも／＼は不吉なり
早乙女の笠ひぼ岡へもつて來る
着せるにも對ひつぱぐも對にはぎ
姑ばゞ後家をたてたがきついみそ
上り馬すてばならふの氣でつける
けんどんが每ばんくるとわるくいひ

麹屋のむす子おもにはねられる
女房はおふくろよりも邪魔なもの
筆せいの一村揃ふ三度がさ
米つきを二人とあてて米をとぎ
出合茶屋おつけたくさんさうといひ
どこでどう書いたか座頭文をつけ
すつぱりと這はせて置いて内儀起き
仲條のしづがにくらすおそろしさ
たれかしらいじめて歸る國家老
百人一首二つにわつて御なぐさみ
無筆でもていしゆの文にかげがさし
齒ぎしりのやうに枕のしまる音
晝見世へおしよくはなまけ〳〵出る
しよく盞のつぎ手をむすめいきどほり
能くしめて寐やれと後家のあぢきなさ
冬の月ほめたりけりでぱたり立て
御首尾よく出れば嫁入のしゆんはづれ
さか桐を下女はほつても取りかへず
すた〳〵と九段を上るくわいらいし
小兒いしやむだな脈から取つてみせ

花嫁は湯へ行かれぬをやつといひ
年禮は喰ふやりくりをしてあるき
もみうらの無いは笑止な土用干
あさづけもさう切つたのはうまくなし
鳥追ひのすがかきで行く町はづれ
あとの戸をたのむと琴をかりて行き
わる口がいやさにむこの長ッ尻
となりとはひさしの事で不破の關
先陣は兄弟ながら手がわるし
今に見ろなどと若殿附はいひ
中十日馬にしたがる黒木うり
きゝ納め琴をと王の一ッ手すき
十三日腹を立つてもその日ぎり
箸もつて肴にまよふすゞりぶた
五分〳〵に枕をよせる旅がへり
撿校のはじめて笑ふ御皆濟
米屋そんすれど車屋そんはせず
かけとりが歸ると骨をたゝかせる
一町は唐へも知れし軒ならび
やぶ醫者へ金百ぴきは月行事

年禮をするけ過ぎたてで松がとれ
虫よけをよみよく張るは無筆たり
びつかりといふと僧正はりあげる
諸事前の通りとふれる後三年
井戸ばたの茶碗有常ゆだんなり
行つたなとのれんをかける捧でぶち
御ひいきだそうなとかりて耳をかき
しめられるむす子のそばに出入帳
まだしものことと男色と檀家いひ
さゝがしの牛房のそばで皆ごろし
合羽屋のから身でかけるつむじ風
牛箱ちやきゝますまいと茶屋はいひ
日本勢人参ぐらでつかみやひ
又今のやうにさといふくばり餅
よい見世が出たと家中のうつそりさ
上下で三日歸らぬはんじもの
團はれはだれぢやといつてにぢられる
知る人にばつかりしひる子の給仕
その氣では來ぬといひ〳〵引きずられ
信玄は七書に秀で四書にもれ

雨やどり男のすがたけなるさう
ほねが折れましたと渡す離緣狀
西行は神前まではやらぬ筈
どらけゆへきりもむやうに聞立てる
何ぶしだなどと泣く子をじれさせる
若死にと聞いてくやみに念を入れ
寺小姓とぼしかけ程卷いてゐる
しうとめもおんなじやうにぬり廻し
風呂しきをとくとかけだす眞桑瓜
京女たつてたれるがすこしきず
鳥かごのさうぢ麴屋ほどにする
いつはりをいふかもしれぬあづさ弓
寐坊めがと張良はしかられる
行くと先づ邪魔だと渡す根津の客
どのうちへ行つてももてぬ淺黄うら
古着買庫裡に引導きいて居る
盆持つた所化のりものへはしりつき
持つほどのものに字を書くぬけ參り
げつぷうをしてから搗屋二はいくひ
うばちつとたしなめぐらゐ屁ともせず

大和茶のばゞア芋ばかりうんで居る
大名は小判の中によく寐いり
わつぢくひ迄は能因氣がつかず
美しい顔で錢金づくをいひ
蛙とぶ池はふかみの折句なり
一樽の酒屋の出來る西の町
はなれ馬よく〳〵腹のたつ氣也
たゞ持つて居る約束の眞桑瓜
しめて居るのが入むこへ恥かしい
後家の氣は佛の弟いやな事
ばらがきにして三味線を二朱まけな
折々はしやうじんもするよしの丸
嫁の禮敷居を越すのやかましさ
内に居る顔にはをしい御延引
勝つたなら仕舞へ明日は遠くだぞ
惣花に遣手は風をおして出る
無い事をいふ世の中と後家はいひ
じつとして居なと額の蚊をころし
かげ膳のおろそかに成る事が出來
つみらしくごぜの行水のぞくなり

こたつから出さうにしては禮を受け
芋虫のやうに腰元承知せず
一つめり給へと留守居しやれをいひ
弓杖をつき〳〵そゝる高田馬場
銚子からさすらへの身としやれた文
仰山に迯げてこしもと笑はれる
中の町しやうりやうも氣のはる所
かくさずと御出と内儀見ぬくなり
一人ものぴんといはせて旅へたち
一日は春めいてくる土用ぼし
又施餓鬼うせたと藥子ひきたてる
あかすりの糠のと長田せわをやき
取る穴を知つてうなぎとたこをかし
蓮池をこいつと思ふ二人づれ
九つがものさといけんききに行き
道をかへ歸るものだと引きずられ
酉の町舟でもふせて行くところ
撿校のめかけ顔よりはだの事
引けものでこそあれ常世とり揃へ
すけん物こつを持つたは土手に居る

馬喰町衆と杉戸へにげこませ
流されて居ても角力をふるまはれ
ぬけうらをうろさくぎうはつきまとひ
狐つり女房が來てもゆだんせず
小便をせぬが大谷刑部なり
しかられて枕へ戻るやみあがり
田舍不義とうまるかごが二つ出來
だいじない寢言などいふ空ね入り
里の母寢ものがたりにいへといふ
これでのや泣かずに居なと乳母がいろ
舁うたはうぬが勝手にふしをつけ
宅番は是はならぬともゝを置き
奥家老泊りの知れたあろきやう
二位どのは小意地をわるくさして行き
あたゝかな後へ棒組錢をつき
達乘の供はだんごを持つてかけ
外科の子の本道に成る臆病さ
おふくろはおがまれて出す小紋むく
毎朝の事と新造ひつぱがれ
惣花はすゝきの中で渡すなり
諸無常などとおどける大一座
松の木へ遠く下官はぬれて居る
やかた船先祖のかげで初に乘り
貝杓子だぞと麻上下でいひ
ちぐはぐの顔は貰つた棧敷なり
はらめたつ顔も交つて水あびせ
愛宕にて買つたさつきは三日咲き
あんのちやう日本で跡のとひてなし
醉つたあす女房のまねるはづかしさ
よむたびに賴政とかく德をつけ
たま〳〵の屋形にいとこはとこ迄
裸にておきるが蚊屋の釣り始め
花を見に出たあくる日に仲人する
よい智惠の出た夜九つ土手で聞き
切おとし理窟な方も引出され
萬歲にさうりを持つてかしこまり
色文を人中で書くつとめの身
おぬしゆゑ見世も懦弱と母はいひ
四つ手かご衣のさがるにくい事
萬歲を子にほだされて呼びはじめ
寢坊ではむかしの京はいかぬ所
けいせいははだしになると其早さ
大じやもの顏で女敵うちに出る
紫でしろとの見廻ふ御不勝手
四ッ人で一つるべのむ車引
曾我の代にいぢめた座頭うづめられ
間違つて草摺の鳴る大三十日
げぢ〳〵にさし上げて居る硯ぶた
つけ登せ杉戸をじろり〳〵見る
火繩賣なんだか外でいひふくめ
筋をひく病大谷切りで絶え
鏡さへ見るとほくろがにやんまひ
行かうかと田樂串で齒をせゝり
かたき持月は見れども花に出ず
こぶ卷のでんじゆ麻上下でうけ
すり鉢の音も夜ふかきならの町
扱けふはひとへ羽織で大あたり
間男をおさへたそばに柳ごり
おつかけもせぬのに逃げるいやな下女
大三十日春日野一人うらやまれ

居酒屋のとなり產婦へ手をあてる
對決に大きな腹でいひふせる
とかまつて泣きな〱と子守いひ
お內儀は相談づくで又はがれ
年明のこつぱたき〱根津のうさ
おのれゆゑりんしもせぬと大くぜつ
雨どなり迯げ込んだならおんだす氣
三世相下女殊の外苦勞がり
出して來やなどと國府を買ひにやり
わるがたい山伏めだと庄司いひ
手を出すな氣になるよせと肘でつき
もてたあす手桶の汁は身につかず
五十雜泊るとあごをまかなはせ
ぢらくうなことばかりいふ宿下り
逆櫓よりでごとをおもにざんをする
梅漬をふじならうちからよめは喰ひ
ワキの僧宗旨は何かむじしれず
かた衣で女房を化かす門徒宗
入相に大工かんなの三をさげ
たちばなの中へ射おとす源三位

六月は干飯をくらひ水をのみ
よりにたつ事はいやさと茶の間いひ
道ならぬ戀に明店二けん出來
又頭痛よめはしみ〲笑止がり
虫ぼしの前夜間男つれてにげ
品川の客橫づけがきついみそ
市戾り這入りかねたる十九日
御めんかごはじめて乘つて首を出し
爰元はとうにお立ちと正燈寺
やき鹽は信玄きつい奢りなり
おまへのがほつとう人と內儀いひ
うちかへす病氣女房はきえたがり
醉つたのがつけかけをする年始帳
はしり帳隣は二日おそくつき
まきざつぱ疵と仲人願書
酒樽へ下戸は四角に口をつけ
さつきやくにいふことの出ぬ鸚鵡石
引出しにうせたとおやぢつきまとひ
箱根にて剃らぬかはりに甲斐で剃り
まつ白なもゝ立をとる御駕脇

かみ様はあるかとなぶる鏡とぎ
物申うにどうれ〱と二もく打ち
夾箱の通るも目だつ大三十日
なまくらな鍛冶屋木辻へくらひこみ
きむすめは片袖すててにげて行き
いやさうに嫁は乞食の下駄をはき
水茶屋でうつとはしごくやぼなやつ
小ならば御免と目黑からかへり
生藥屋聞いてきなよと子を歸し
師のかげを七尺去ると人形書く
幕の內手前の飯でひきに行き
またくらへ棲をはさんで手を洗ひ
隱居所に片時も居らぬしろとばゝ
市の生醉すりこ木にそりをうち
三みせんをにぎつてのぞく土左衞門
村の客はたを下りるをたつてとめ
ちりめんを下女青梅より安くあげ
ぬしがのは氣どりがよいと土手でいひ
氣のよわい亭主理づめで腰をだき
ひつきようが箱根へ遣るも口へらし

此の風に又出やるかとところい母
けいせいにかす子は酒をくどくきめ
鋲打の中で地火をほえてゐる
中納言わかれの時はたちのまゝ
朝がへり行く時程のちゑは出ず
舟迄はあやかりものとみんないひ
なからはんじやくで義貞するけ出し
流行醫者兩手を獨のふちへかけ
心中のじやまして今に禮をうけ
淺草寺見附できけばつきあたり
若いものばかり貰ふに元をいれ
氣に入らぬさうと水茶屋同士いひ
熊坂をせめたら手下まだ出よう
しからせて聞くが遣手の目見えなり
すもつたい附けて撿校ひかぬなり
路地口をかゝアでうめる夕すゞみ
とむらひのうらはどうだと湯屋でいひ
ふんどしをしたのが出ると湯は仕廻ひ
父だとさみづてあやす久しぶり
くんどくのやうだと圍ひ三を下げ

ふいに來た湯屋で二人ひだるがり
夜の内に臺迄行くとこりをとり
盆ござへ這はせる小僧百になり
商人はこまつかしいと根津でいひ
吉日に大福帳は書かぬなり
忠臣はにくまれ口を三つきき
總仕廻むかうのていしゆ小言なり
御無用の聲がかたきにそのまんま
眞ッ崎へ寄る口ぶりと内儀いひ
います内持たぬはやかましいと見え
道入らない日だと留場でひげをぬき
振袖を引きしやなぐつて一つぶち
髮結を一艘つんで帆を上げる
入れ髮をして深川へ初會なり
おいらのがしかりなんすと貞女めき
かみゆひをむぐらせて遣る大屋衆
御勝手の衆へと胴は四百出し
うしろ迄あかるくするが忠の道
夕すゞみ嫁の出るのは極暑なり
爲になる間男だからしたといふ

買ひにやる子へきぬ糸を五六寸
品川は杓子果報な大一座
おもざしは馬に似てゐるきり〳〵す
樽拾ひだれがついだとせんぎされ
花はくれなゐは遣手のきん句なり
田舍醫者へびを出したで名が高し
藪醫者へこもから脈を出して見せ
屁をひつてよめは雪隱出にくがり
九重は齒みがきよりもふしがうれ
七けんではうれんそうの事をいひ
本店と出見世の間にふじが見え
つかみ込みましたと亭主花のみそ
女房の物を借りるとたてこづき
お妾はうられはぐつた娘なり
何やかを三保谷その日損じさせ
へんてつも無いと御うばは鯨を喰ひ
闘崎をあげて四女が本を買ひ
をどり子で江の島うごきわたるなり
汁粉餅よめはちぎつて舌へのせ
百ぎりで一筋はねる下女が櫛

労咳の妹はとうに縁につき
泣顔があのくらゐだと女衒いひ
出入帳百韻ほどに夜をふかし
二町程つゞいたが後家じまんなり
人買ひのふじにふつ〳〵こりた顔
大一座ふきよせた程上ざうり
こつずゐにうまさうにくふ信濃者
うつぼゝをしたさ妹にむこをとり
房州もやはか相模におとるべき
金だけにさわぎあてがふたいこもち
八分だぞ根こそぎ張れともんで入れ
御不勝手嵐のあした幕が出る
おつゞきか知らぬがけちな御新造
弔のかたをかへるのやかましさ
はんてんを持つて湯番はわびにくる
年よわな七百歳と慈童いひ
かうほねのうごくを見れば蛙なり
五郎丸二十九日は氣くたびれ
有つてさへ況んや後家に於てをや

松洞寺何かれつばとすぐ通り
ぶつさばき柄へからんで押さへかけ
よし町のけんぺきに成るいろは茶屋
供の下女笑つて通る宿のまへ
子を鶴へうけとろひざをこしらへる
中宿へおふくろの來る一大事
足音を聞知つて居て向ひあひ
冬の内あらわざをする吉野丸
きむす子と見えて朝から市へ立ち
どこかぶつたび母の泣く俄ごぜ
なんと面白からうがとのぞきいひ
生薬屋ひつを明けると人だかり
薬箱出ると居眠ひとりへり
わに口は四つたゝいて氣にかゝり
轉宅を奇妙にさがす伊勢の御師
呼出しのとりえは床へ早く來る
くどかれて乳母だいた子に間合せ
料理人小ゆび程たこ切つてくれ
このしろは肩でまうける肴なり

若死にをしなよと一つどうづかれ
むきみ賣ぢやうぶな升をつかひつけ
眞ッ崎でもゝがすくみんしたといひ
待つたりとばかと烟管でしんを切り
まげぶしのおつ立つて居るかゞみとぎ
清書にちつとちいさい下女が文
泣き〳〵もうかとはくれぬかたみ分け
棒組をよび〳〵駕をしよつてかけ
つけ登せかつこうものにくらひこみ
雨の手が自由になると店を追ひ
鬼王へ知りやる通りとかたみなし
あす立つと土場で切火でのんで居る
父母います内は中々やむ氣なし
おとなしくせぬとねんねをよそへ遣る
てうちんで消すのがおさうきついみえ
不成日しらず叡山にて出合ひ
樽ひろひ泣き〳〵髮をあらはれる
よそでへりますと内儀はいしやへいひ
御感狀外科の出て行く後へ來る

おつかないたち賣をする麹町
かね四ツに駿河町迄こぎつける
後家をたてますには糸のひきてあり
つんぼかと覗けばかねをつけて居る
入れがみをした入道にぬつて見せ
なぜいやだとは尻の有るくどきやう
つひかへす事かと土手で一分かし
有るうへをのばすが息子氣にいらず
大丸の請けとりをよむ華の内
一疋の座頭江戸染着る氣なり
裏門へ出やれと尻をおして出る
おき〱のきげんは人の知らぬ事
九品佛こしをかけると糸をやめ

ほめられるたび持直す花の枝
笑はねば晴のならぬ小傾城
傾城の島田高尾はゆひはじめ
惣菜はあらめとおむろ口ばしり
相性は聞きたし年はかくしたし
石塔の外はお家のくひつぶし
旅の留守戸を引寄せるにくらしさ
新川と號し番頭深い川
わけ米の内を次男にせびられる
よめぬ字を何といふ字によんで置き
雁首でつッぱつて居るいろは茶や

明和八卯年孟秋吉辰

誹風柳多留六篇 終

猶々元気附相萬々に望
酒リ書店市とは他人の
派ら正に心とぢうしいとこうも
異夜の御活動に候様子有り
寄句集負す好人の兼は御仲秋
向日の希望に生きし行か
即横好の偶に集を称す如し事

満月乃
そのむらさきや
西日月

明和九辰孟穐 呉陵軒可有序

万句合川柳評 七篇

誹風 柳多留七篇

絹布に正札附有り、蕎麥に正直あり、其店市をなす。今川叟の評は正道を專らとし、いさゝかも最負の沙汰なし。故に年毎に寄句增員す。好人來る仲秋五日の會を遲しと待たるる中に、予横好の僻に齒を研ぎすまして、

滿月のそのこゝろみや五日月

明和九辰孟秋　吳陵軒愚序

干鯛箱へだててあたま二つさげ
からかつたうへで三つ組かしてやり
お妾ははらみこじれてえんにつき
中の町いけんもしたりすゝめたり
かんがへて見なよとごぜへ久しぶり
世の中のすがたは御講かぎりなり
つみ有つてむす子銚子の月を見る

はご板をなげて女房禮をうけ
此あばた見つけなんだと中のよさ
かつがれる宵にしげ／＼うらへ出る
茶屋かぶが先(せん)僧正のかたみなり
そらどけのせぬのはしゆすの年にはぢ
おめかけの書物めりやす斗りなり
こひ聟を入れたで男弟子は來ず

座頭のをかりて座頭の鳴りをとめ
それもして見たとおこりはじれて居る
數の無いはしたお出がはるといひ
神事だなどとおやぶん氣の若さ
藪入をしかるをきけば灸の事
かけぬけて芝にねて見る野がけ道
わつちらが内も内さと門(かど)に立ち
不動さまうられそもないお顏つき
ごぜの手を引くを黑がもせつながり
仲人の誂野がけで出したまゝ
不細工の内にして置く女の子
お妾はおもしろがつてしからせる
さらしつくきねでおしへる三笠山
遣手ばゞおんなじやうにつまを取り
あてもなく下女ぶら／＼と戀やまひ
にくらしい口だぞといふ待女郎
品川はぶしやれなやつが爲になり
安げんくわ御用干ものを買つて來る
居酒屋のけんくわかたりの方へおち
上下で乞食に聞いておつかける

ふるせでは無いと仲人しやれをいひ
きんたまをかくふり二百くすねこみ
藪いしやへ断りいうて御薬園
おさまらぬものだとおやぢ雪をかき
あら世帯ひよつと目なしをかり始め
あら〻程小僧をいびり使ふなり
御祭に出たのを下女はきついみそ
御経も貧づくしはみ〻ちかし
五丁町殿に燕雀付きまとひ
からたちに成つてかん當ゆるす也
口ばたのみそをふき〳〵堀へさし
源三位蜘蛛さうな腹をきり
十三日長おひをしてとつかまり
あればかり男かと母じやけん也
四つ手駕杉戸間近くよこにつけ
よし原を大念佛です〻めこみ
手のひらへ赤子をのせてしかられる
頬杖で見て居る文の苦勞さう
祐経は久しいなりでうたれたり
高謡うは調子なら二三人

十両の馬宿々へぱつと知れ
伴頭はやぐらへ乗つて來た男
あてこともないと産所へ追ひこまれ
身ごしらへ禿が帯は茶屋がしめ、
ごふく屋のめし安がねでくへぬ也
國に無い舟と店ものあぶながり
後三年とう〳〵こすい方がかち
日本橋馬鹿をつくしたさし向ひ
呉服店夫婦げんくわで行く處
長髪で大師へ参るむづかしさ
隅田川までにあれこれやつとまき
下紐といふは木綿のことでなし
萬歳を下女ありッたけ笑ふ也
人さまの居るのに御用氣がつかず
元日の生れ近所で知つて居る
品川はあんま斗りの下駄の音
よしの丸是は〳〵としやれてのる
人二人かばつて局不首尾也
吉野だといへば藝子はよしといふ
だらけずに廻つて來なと腰をあて

白酒に酔つて公家衆の供をわり
清玄でござりまするとくと吹矢いふ
かばやきも斗りですまぬ所なり
小間物屋たどんを一つのみつぶし
後家の女子もりたのむが遠慮也
をどり子へ氣ばッかりさと場番いひ
正燈寺大切米のさかりなり
神樂堂立聞らしくあるくなり
傾城のちからでうごく石のふた
おやぢのはむす子が買つた妹たり
美しい斗りで西施張はなし
内が茶をうりやすと乳母はとで行き
やきたてのこはだ搗屋へ馳走也
宇治川のそこには馬のわたをかけ
あそこへはいやと藪入氣の高さ
若殿もうきにはもれぬかすり疵
ひまな時ちんぴをきざむ玄関番
お直段に御ふそくないと座頭いひ
はねの有るいひわけ程はあひるとぶ
おと〻しの門に寝て居る車牛

ぶん廻しあんまり人の持たぬもの
おも手代不慮な事にてかさをかき
見くびつて下女に盃おさへられ
もう片目無いと勘介うめられる
勘介はむかし鬼王だも知れず
村日待ぜんがとれるとごぜを出し
倒すやつむかうの人も來らばこそ
一人もの御用をのせてさいをくひ
お袋をこはがるむすこ少しぬけ
袋棚から札を出すむじん茶屋
又使ひころす腹だと見世でいひ
後家を手に入れて子孫のほねがらみ
切見世も品こそかはれのんでさし
たゞも行かれぬがぶさたのなり始め
音羽町つか〳〵と來て袖をとり
ほとゝぎす二十六字はあんじさせ
ごぜの供琴を出されて是もかへ
金屛風元が元だとかりにやり
なげるなといふは涼みの角力なり
けいせいの文に女の寄りたかり

告口をするとみの輪へ歸す也
かけそくにならないやつら後家に付き
朝歸りそりやはじまると雨どなり
奥中て高尾が顔を待ちぼうけ
まはりでもよいと芝居の前を行き
かたまつた灰をつッつくえびす講
朝歸り後家待ちうけてあなどるか
なんの氣もないに御へいをいたゞかせ
靑首をさかさになでてしかられる
小所でしなのを置いて喰ひぬかれ
若後家のあにこうたうをこのまんや
内證をちらりと聞いてかせぐなり
ついたかとはぎしりをして見てもらひ
くわいらいし萬ざいより見てがなし
その方(かた)でもつとなさいと土弓いひ
島田くづしには高尾はゆはぬなり
ぬりへぎをころがり廻る百旦那
雨やどり箱でもしたい音をきき
よくきけば女がきものふといやつ
門ばかりある御やしきで元結こき

立聞きに持つた十能の火がおこり
二三日片目無いかとかりに來る
うなされたでつち三つ四つけとばされ
安もののうれるばんだと遣手いひ
御二かいへ四文二つに八一つ
めしもりにくらひついたと遣手いひ
渡りぞめすむと葬禮二つ行き
ようござりませうと借馬こしをのし
ざうりとりへそ迄出すが渡りもの
どうづかれ御さいはつぼをまたぐ也
おめかけは花の名所へすてられる
びくついて居るに宿屋はもうしまひ
江戸衆は數がいけぬとかるゐ澤
子ばやいがおやかた大の倒れ也
呉服屋ですぐに着て行く通り者
出來るやつへゝ〳〵〳〵と先づ笑ひ
札附の下女政宗の在所者
どつさりとざるへぶち込む淺黄裏
学をうんで居るのをといふかるゐ澤
かし方をぶつて濟むかと日なしにぢ

とむらひが淺草邊できついこと
上下で拂ふは餘程ひどいかり
不承知な娘ひたひへ皺をよせ
駕かきにつかれて素見舌を出し
おとしてもよしかと文をことづかり
本能寺三日あはぬがふうんなり
又九月來なと品川にくてぐち
朝がへり頼みに思ふ母はしやく
わんばうをぬぎをらうさと朝がへり
色をするつらかと遣手縄をかけ
四つ手駕中でくぜつをかんがへる
ちつとづつ叱つてしきせ渡すなり
朝顔のつるを引ツ切る中たがひ
酒見世へちぎりの禮に三歩遣り
あぶれ女郎夜食をくふが思ひ也
かみさまぢや出來ぬとにげるはつ鰹
嫁の下女里びいきしてねめられる
ねかす子をあやして亭主しかられる
若後家は佛の兄をうるさがり
鶏はおッつめられて五尺とび

行く水のなりにはこがぬ渡守
百旦那まかり違ふと地ごく也
すりはらひだとどう取は手をはたき
歌がるたちよき〳〵切つてしかられる
素見物たからの山へ入りながら
口上はどうだとでつち笑はれる
鐘供養ぜんたいわるい矢先なり
田舍後家あんにすべいと髪を切り
海晏寺時分ひるまはきついそん
女房をかみふせて行く正燈寺
たつた一人に細見を買つて行き
うしろから土手で見つけて目をふさぎ
どうなりとしやれと母は藏を出る
夕すゞみなんの氣もなく土手へ來る
ゆりおこす手をたゝかれるあぢきなさ
雛箱へむすめ道からついて來る
戸塚だちとは見えますとぎうはいひ
よい音のせつかん坊主かぶろなり
番たばこ駕かきめらに遣つてのり
盃と小判けつしていたゞかず

呉服屋をさゝずに出るは雨やどり
初午に凧を上げるはすねたやつ
鰒も喰ひますと花嫁しやれたもの
間男もめかりのきいた男也
二歩と無いかねをむす子のにやつかい
よく〳〵の事か勞咳笑ふなり
正月のふざけはじめは三河なり
藥種屋のかんばん朝の一仕事
あやまつたようと廊下でとち狂ひ
引料はやるとごふく屋うるさがり
口をすくさせて花よめこしをかけ
品川はいびつな月も見るところ
何の氣もないに母おやあぶながり
居つゞけのひんもんで置く母の文
はなし龜もとは鶴から思ひつき
十五夜は後札のつくもん日なり
嫁のかみ酒呑童子の時分出來
夜さくらは年寄の見る物でなし
客よりは先へ來て居る安げいしや
盗みでもしたやうにするつりの二朱

御釜じめ何やらよめにいたゞかせ
兼好はあのつらでかとなぐり書き
居つゞけのむかひおつこちさうな腹
もちつとで蛍へとゞく禿の手
はまぐりがすゞめに成ると寐るの也
十人が九人しやうきか金太郎
帳面でぶちのめされるわか手代
ちんまりと居なと山出しかられる
ぱつとした金三浦屋へ二度はひり
よいお寺方にあふ日となづなうり
まりうたをつけて御用はどうづかれ
朱を墨にするは納の色直し
引ときで居るのに座頭通ふ也
土手で賣るやつは白狐のやうに見え
めしびつをしばりからげるひとり者
しちやより女房はひどくはたる也
八景はよけれどゆだんならぬ所
合點せぬやつを巨燵でこね廻し
そくいめし叱られながら喰ひへらし
おきらひなたちだと下女はなぐさまれ

又あけて見なんなと文ことづける
夢見ぬとろせいは人のしらぬもの
親御様だがとたいこはわるくいひ
出て行くをわすれる程に下女は醉ひ
前立を目黒がへりの見てあるき
かるたなどならべてけちな道具みせ
見にくいをはたらいて遣る通りもの
しまひ湯へ來る下女五日ぐらゐ也
おきて居て寐たふり酒屋上手なり
謠講ちよきにのるのは下がかり
花鰹下女はだいなしはにけづり
松の内下女べんべらの綿が落ち
まつさきで黑がもいつちたんと喰ひ
けちなねを出すなとそびく隅田川
五郎兵衛證文紙のうれる所
いやきみをぬかす婆ァとたいこいひ
いそがせる四つ手から身で二人かけ
はらのたつものは年増のいびき也
にせ首を請人の見る氣のどくさ
吉野山十七文字でほめたらず

雪こかし遣手のしかる所迄
品川のよこづけ無佛世界なり
もみをぬふお針四五はい飲んだやら
下女ぶんといつても座頭きかぬ也
萬ざいに糸をまき／＼付いて來る
新枕程なくごうんごんといふ
ころもへもつく高輪の四つ手かご
ごふく屋はのぞいて見てもらんがしい
たいこもち何を置いもとんで來る
水晶を後家長らくはえゝ持たず
氣のつきなよしやれと王をかくす也
鰡をばおまへころせと女房いひ
盛つて喰へ若との樣ぢや有るまいし
おき／＼のふきげん下女は舌を出し
きぬ／＼の後は身になる一ね入
もてぬやついつそ地口をいひたがり
素人の寄つてもよめぬさとのふみ
朝寐する人をおこすは書といふ
物申があつて一先づしかりやめ
藏宿を出ると狀箱ふつて見る

六彌太といのまた酒をねだられる
船中で左樣な事といひつのり
もし床がちがひやしたと追ひ出され
朝がへりあばたづらめといひつのり
どうしたか娘いやみな醫者といひ
中年に成つて師直いろけづき
棧敷からのび上がるのは下女が顔
初會にはよくほえたなと狆をなで
玄關から船をよんでと門でいひ
扇賣ゆうべの聲は出さぬなり
いくらほどなくさしやつたと獵師いひ
あごをつき出して御しんぞ中に立ち
三會目こゝろのしれた帶をとき
けいどうで問屋をあける小間物屋
革羽織よしみも無いにかりに來る
一生のふかくは後家のうつくしさ
やつぺしに海をほめるは初會也
あたらしい事をばしらぬくわいらいし
店(たな)中で知らぬはていしゆ一人なり
どうだなととなりへ見舞ふ大三十日

初まぐろ根津へへた〳〵かつぎ込み
つくらしやりましと仲人待つて居る
樽ひろひ番頭茶屋へひろひこみ
鴨子引よく〳〵みれば目くら也
にしが出ちや赤がむごいと村の母
箸をとらせうを藪入うるさがり
勘當へ持つてうせうと銀ぎせる
久しぶりふければよいと女房いひ
かぞへ日はおやのと子のは大ちがひ
あら世帶わけの付く迄雛がなし
御亭主のやはらかなのに作りたて
結ふ內に二度つれて來てしかられる
疊がへ目立つて安いむしんなり
中の町こきまぜるのは柳ごし
當世はぼろ〳〵といふ形(なり)でなし
旅が巧者で背水の宿をかり
どつからかしかりての出る田舍道
手をとると顔を下げるが女なり
くばり餅わらぢをはくと一里の餘
俄後家大ぜいづれで牛をよけ

大所(おほどこ)を寐てござ〳〵を拂ふなり
うれさうならそはなしかと留守居同士
よめずとも自筆にしなとうまいやつ
直介へ落ちたと綿の師匠いひ
火をかりによれば田舍は一本出し
なまながい經で有つたと土手でいひ
藥種屋は足のくすりも一本うり
四つ手駕くたびれて乘る物でなし
皆おれがごふとはよわいしかりやう
門(もん)ぱいを圍ひ夜な〳〵拜むなり
雪かきでぶつとむす子は傘でうけ
かひッくらとても島田は川づかへ
法名を二貫が買つてやつとしり
御小身やり持一人(ひとり)供がへり
かんぶつ屋うつとうしいと三日いひ
かた衣で切(きり)のごたつく木挽町
十兵衞でよいにお目がね違ひ也
をどり子のたのんで這入る馬の口
冬の月よりおそろしき月をみる
松に目をやすめて通るよしの山

子は寐せて置けと斷るかしま立
やく亭主だん／＼懇意うすく成り
息杖ではねのけてゆく馬のくつ
撿校の藏へ鋸捨てゝにげ
來る程の子に髮を嫁結つてやり
御來迎ほどなく通る馬の聲
其の論は春のことよと笊を出し
にくらしいきぬ／＼を見る旅送り
いつか見たげなと仲人はつめる也
酢のわけを聞いて酒屋の內儀起き
新造をくゝすを見ると禿にげ
帽子針よめは銀のを二本もち
べんぜつをふるつて宿は五兩とり
見世中へ二三把なげてこしをかけ
定ごふのいまだ來らぬ日本ばし
奉加帳めつかつた下女世話をやき
いとけなきものと隱居の大くぜつ
生酔も顏の赤いはこはくなし
膳立に下女香の物ぶつちがひ
あと祈禱どうかじやけんな仕方也

せきぞろがもうさと御講崩いひ
材木屋やらうがかくで河岸をとめ
ばちを手にとるときかぬとおやぢいひ
てつぺちへ髮を結ふのが店の衆
番太郎おはぐろつぼをつけてうり
くらがりで棟上をする鷹のぎう
百くれた切りでのぞかぬ下女が色
楊貴妃を上碧落を先づたづね
せがき船ぶるゐ眷族ごつた／＼
みす紙はその事のみで漉くと見え
窓でうるわらぢ天命次第也
歌がるた無筆なやつは箱のやう
細長い箱でおどかす日なしかし
さうおしてたまるものかと鰹賣
芋頭おとして胴にしかられる
布引に通るでつきやふるまはれ
くどかれて又すらりぬく質手代
百出して五そくかはせるにはか雨
おはぐろの邪魔はだまつてたゝかれる
虫干に小袖着たがるぐわんぜなさ

年寄のから手で拜む見ともなさ
まな板をたゝくと常の門と成り
花よめを見に出た娘なぶられる
おどけだと骨太な手を口へあて
かり親をしては撿校やる氣なし
つゞみへもちらほらたかる花の山
振袖の內はさじきのはなに居り
三味の弟子破門のわけは師をくどき
宿下り日のべを願ふ死にはぐれ
運慶の作のそばから乘つて行き
馬ほどななりで踊子よばりなり
鳥の骨信濃に聞けば捨てました
よいむこを伊東入道とりはぐり
御てん醫で死んだはひとり娘也
引けまへにやッつけますと四つ手いひ
五六人夕べをねむるごふく店
つんとしたのに幽王はくらひこみ
所々つとめますといひ／＼のんで居る
飯たきはお齒黑壺でいぢり合ひ
とッぱくさ出るやつをまつ四つ手かご

鍋いかけそりやのいたりとはさみ出し
玄關番びやくえで出るはめしがはり
櫻まで突き出しに出る中の町
手前ものゆゑかみゆひはぶッかぶり
氣障りなじよ病のんのへ行きたがり
上下へつくは駕かきたけたやつ
淸盛はいけんいはる年でなし
雨替屋二人で見るはにちう也
羽衣のくせは野がけに打つてつけ
しりつきがわんぐりと成るひとへ帶
買はないと通さぬといふつぱな賣
和田軍きどくにばゞア武者が出す
まだのびもせぬにもう來る麥畑
よし町のむかひ片手にくつかむり
けいどうのいひ分け日なし聞きあきる
通り者四五町しれるお命講
二日醉のんだ所をかんがへる
内のやつとんといやのと土手でいひ
虱をば先づぬがせうとぜげんいひ
他に事をよせて半途に下女を出し

出來さうになると藪入かへるなり
なんのまな箸がと内儀手で料理
母は子の爲にかくして一つぬぎ
おんだされましたと亭主だいて來る
出あるくなだが十二だといふものか
四郞兵衞が不首尾變生男子也
樽酒をとう／＼内儀やめさせる
大三十日箱でうちんはこはくなし
たいがいに喰つてみかんの筋をとり
けいあんはお上を二人程ころし
小ぶくろをさがしてこいの金を出し
だいり雛つとにして行く乳母がせな
後架迄上下で行くとしをとこ
百人一首迄がさがみは戀歌なり
すばしりはみこしの後を追つて行き
とりャげ婆供を割つたがきついみそ
あの後家はひだるからうと愚也
一文の花火は人をおつかける
人音に仕事をつかむにくらしさ
晝のやうだと蛤のからを捨て

二かいから小べんせぬで角が有り
のみんしたなどと座頭をちよろまかし
今川をよんだ庄屋のやかましさ
ほころびを着て行く女くるしさう
はかま着のどうだましても腕がぬ也
御衣で隨分よしと若い者
はや足の女の後へ醉つたやつ
若黨は生野の道で歸さろる
中ごしで割るのがまきの仕廻ひ也
勞咳がしかも娘の目ぬき也
月に來てくれろだらうと封を切り
手間ほどは有るぞと笑ふ下女が髮
どうづきの聲つぼんだりひらいたり
物干の植木藥罐で水を打ち
衣より羽織のふうがきつい事
裏表下女二晩にねだり出し
土用干下女にもしろとなぶる也
切見世へ手前のあごでとまる也
二ふんゑぐられたとつぱで手を洗ひ
又一度十六七でつめらるる

もしくれもせうかと遣手罷出で
寐ぼうでも隨分今の京は濟み
内證はできてゐやすと丁稚いひ
いち時に出るなと路地をそつと明け
つめ將棊工夫が出來てどれのきやれ
うづ高く盛つたをおしな五はいくひ
關札が立つて品川げびるなり
喰ふ事も武勇も眞田人にこえ
手代迄紙つきにするごふく店
舟宿のいらぬ年始に廻りごと
くらやみへ牛を引出す十五日
めぐり逢ふ日迄は顏のうつとしさ
木に餅のなるので母はまやかされ
目の内へ入れて母おやちゝくられ
妹もぶらり／＼といやな氣味
しかられた所へうつちやる花の枝
持參金嫁なけなしの鼻にかけ
門(かど)禮で濟まぬと亭主そ引き上げ
小間物屋男に櫛をうりたがり
天神へ素顏で參る手ならひ子

すねた子はつかまへ所に困る也
吳服見世げつそりとするはやり風
素見物それのいたりとはりこまれ
鮎がさびるのに川公事まだすまず
くぢら汁四五日なべのやかましさ
ものがようござると椀屋がたつかせ
品川の揚干(ほし)きつと妄語戒
楊貴妃へ長い團扇をさし懸ける
紙そくして見たを新造くやしがり
にぎりめし理窟いひ／＼大屋喰ひ
よく／＼か十四日迄はらをたち
花よめを引きずり廻すあふま時
不二山は江戸のまなこで見える所
試につめつて見ればむごん也
笏の手にざいを持つてはみそをつけ
素一歩のむねん道々追ひこされ
お袋に聞いて行かうはたのもしい
足がまがらうとむすめの下駄をかり
置き所を女房あらましいつて出る
かういたしますとかけ取ぼうを引き

取りかへに女房の來るごふく店
振袖へやくわんひつかけ大騷ぎ
山門へ上るまいぞと二百やり
となりの子おらが内でもきらず汁
つかまへもせぬのににげるいやらしさ
母おやを湯ばん門からまねく也
銀ぎせる銀のやうだとおやぢいひ
下女宿で芝居をねだりしかられる
をどり子の來る迄世事のはなし也
薄をばにげても菊にとつらまり
蚊屋うりはよび出す前にかたをかへ
猪牙をのむやうに吉野は堀へ付け
ざつとした家で袮縫うたれたり
地下人はうでぶしで折るかきつばた
花迄も盛りがすむと置かぬ所
きやッといふ禿は晝の毛虫也
旅むかひたいこ四五通持つて來る
ごんざうでからくり程はあるく也
心外とやいはん息子片月見
四ツ打つて來た油買拜むなり

すりばちをむごッたらしく下女が買ひ
風ぐるま淺黄の頭巾まてといふ
ごふく屋で色の黒いはしよつて出る
天のなす災雪がしくじらせ
よう賣れる見世さと水をくんで居る
扇子箱だぞと頭巾を袖へ入れ
片月見だアなと母といぢり合ひ
よしなよとむすめ一寸ほどゆがみ
ひらに置なよと引ッさく眞木をとめ
かけこんで雛をせッつくハツ下り
村中のよめ入へかす無事な馬
北狄にやはか南州おとるべき
いそ／＼と下女こし帶をにはでしめ
から車面白がつて追つかける
けころばしごみも無いのにはいて居る
かはづとも出るとは外科の座敷なり
うりかひに質屋あるきにこいといふ
劍戟をふつて藥を賣りつける
なげこみの施主はふんごみなどで來る
五十雜大根を持つて追つて出る

品のぎう寺役ならばとわりをつけ
めづらしい顔が見えるとあるきいひ
いつそ蚊のくふもこらへるひき語り
ふしようして疎なとかッつくろッて行き
嫁の禮おふくろ斗りしやべりぬき
ぬき身でもつまりませぬと一人者
はたおらぬよめん女かるゐ澤の也
さい日の御用夜食はいやといふ
お見たてとよばるとしつをかきやめる
ふけいきな吠えやがるなとぜげんいひ
二三日間がありや相模うらみわび
なま梅をあづけて子もりしかられる
かの人にとなりの內儀二分無心
火吹竹ぐるみ亭主をだいて出る
百持つて下女正月を待ちかねる
口ぼこにお袋それはよくかゝり
わるものに成りはじまりはあざを付け
ふきの出た羽織着て來るかどみとぎ
裸にて火動の症はおつかける
さそひ人へ女房からんだ事をいひ

むせつぽいもので松右衛門ひつかける
安産の御使者は家中での乘り人
ときれると茡などをひねる御しんたく
あれ垣を喰ふよと下女がせなにいひ
素見物百何がしのおごりなり
行つたのさばか／＼しいと內儀寢る
やかた船小べりでさすと寒く成り
みん／＼のなくに白むくぶッ重ね
いつかどの身所をはふる料理人
花いけのぶつかへる程女房たて
あいさつに男ののびる嫁の禮
綿くずのついたが師走女なり
さがり取ぶんさんの場ではりこまれ
夏座敷あはせ羽織は馳走なり
けんやくを武藝のやうにいひ立てる
もうおきやくしまつたかと御代參
品川の客にんべんのあるとなし
どこへ行くもんだと內をついと出る
御代參ころんでかへるせはしなさ
淋しさを羽をりに遣ふにぎやかさ

かたびらで來るを小袖で待つて居る
出來合のたんすはどれも蔦の紋
尻をつめればいかほどのとくが有る
一町の內で泣く雨泣く日より
二三町後(あと)へつくばふ合羽箱
さあ見世を仕廻ひやせうと針をさし
此暮の顔が見たいと女房いひ
生酔のうしろ通れば寄りかゝり
なでぼうで結ふまねをして泣止ませ
ぬり桶を引つさげて來るきつい母
利上げをばまつたく嫁へぎりでする
笑ふたび唐人のへるうつくしさ
里びらき此頃にないめしを喰ひ
よし原は町人ふぜいいはぬ所
棒の無いてうちんで行く面白さ
義太夫が能いでいんどう面白い
いせ原を置いたで見世がらんがしい
又碁かとくるまつて寢る草履取
喰ひやうによつて黑鯛つみに成り
えり紙をさらつて通す暑氣見まひ

ぶ男のいらざる年のかくし事
いたゞいてさすがむす子の貰始め
幕の內花をあざむく顔ばかり
ぬりたてて佛よばりのにくらしさ
甲子に半てうばかり何の事
かへつては買はぬとねぎるこぶするめ
狼は財布ばかりを喰ひのこし
晴天に持つて通るはかりた傘
くれの文はたびろばかりおそろしい
よし原はもみぢふみ分け行く所
嫁の來た年が手ぎはな大三十日
かみそりを御さい一(ひと)盆といで出し
衣屋へ遣るをしむは他人なり
四つ手かご旦那お紙と下駄をふき
撿校の居間に一筋こけおどし
子の灸をするゑて四五日にくがられ
猿廻しさじのやうなるばちでひき
おくそこの無い子と隱居大はまり
しやうじんをすれば後添だがのだえ
けいせいの灸はにしきへつかみ付き

羽織着たむすめと本田五六人
たいこ持禿に爪をとれといふ
こはがつて下女御新造のそばに寐る
佐野の馬下馬に置く內人だかり
寐て用が無いで庚申夜をふかし
五郎丸まゐるぞかゝるぞはいけず
團扇では思ふやうにはたゝかれず
隅田川我が思ふ子は向ふなり
七けんが同じ祝儀の言葉なり
きら星のごとくに其夜手提灯
かた炭を大せつにするかゞみとぎ
御新造かう／＼はやす急な客
本草の通り代みやくしやべる也
ひなの酒みんなのまれて泣いて居る
ぬれ事をまことにしたで島へ行き
內中が寄つて漬菜をとがらかし
新造のうきがともには鼠也
つりしのぶ手玉に取つてしかられる
ごぜ間(あひ)をしろと撿校づ横柄
産籠で子供の遊ぶかるいこと

たいがいにしろと數の子引ッたくり
しのびごま大屋したゝか來てしかり
どうせもう知れたと下女のいけづるさ
十夜から餘程よりかと母はきき
石塔を客へ振廻ふ泉岳寺
おつけさへあればと搗屋汗をふき
石で切るのをあぶながる女の氣
こね取りはさきをぬらしてさアといふ
一里塚西瓜の皮ですべる所
あかねうら着る內下女もりちぎ也
圓ひとはいへど大きなばれをんな
手がききんせんとめそ〳〵禿なき
鐃鈸(にようはち)で行く相談がきこえかね
厄年はけんとくで寄る萬年屋
おやといふ二字と無筆の親はいひ
花の無い靈地は鐘へ人だかり
はんじやうな見世は裾野のごふく店
花の山寨のふくれるたびに散り
もうづくは〳〵と通る市歸り
にげのびた腰元前をよく合せ

料理人すとん〳〵と惜氣なし
うはごとを笑つていしやに呵られる
碁會所で見て斗り居るつよいやつ
紅葉見といつちや出さぬと息子いひ
盃をさせばうなづくひきがたり
しんのやみ鶴い〳〵の聲ばかり
本堂に餘つたが後家じまん也
さわぐまいものか研屋の氣が違ひ
賀茂程なりつぱな落馬又となし
葉櫻へ賴政籐(らいせいとう)をたてかける
十五にも居ぬと十三にも居ない
彈く斗りならと花よめ三をかけ
不二山も目出たく見れば目は入らず
わか殿を遣る約束で幕をかし
羽二重の虱たいこがたけはじめ
納豆の後(あと)からばつたばたと來る
豆いりを大屋の內儀つかみそめ
から馬で今年も歸る下女がせな
尻がちひさいと三浦屋まだふそく
母なんにせうとて古金一步もち

いよ御太刀きめたとなぶる嫁の供
目のさめた子を女湯へことづける
片うでに成る郎等を岡部持ち
長髮(ちやうはつ)とむすんだ顏へ人だかり
六つ七つ漕いで何屋でござります
傾城のふみはのぞくにかゝはらず
千金の御妾一字でもひけず
塗下駄をいたゞいてせな腰を懸け
書きちんを取るぞと下女にたのまれる
浪の花ふきぶりでくむ面白さ
まけた猫鼠花火のやうに逃げ
をどり子の母はあつかましいも見る
あいさつに飽きてお烟艸あがりませ
かんざしをかりて息子はかくやつさ
あねさまの顏が下るか見て來やれ
蕪汁であさま左衞門五はい喰ひ
言譯もだまりをらうはむづかしい
見くびつた人だと下女は二百かし
からッ手で來てさげて行く通り者
水々としたのを婆々アよばりする

あれお客さんがと禿とち狂ひ
まだ彈かれやせんとやぐら淋しがり
傾城のたんすは本の犬おどし
しめろやはすき切れのする聲を出し
きん玉を二才の洗ふにくらしさ
だれが來るもんだと十能ねぢり合ひ
夜商（よあきなひ）手の鳴る方へ粹な事
よみがへり御寺へたいし氣の毒さ
三味せんがやむと扇を鼻へあて

上へ足あげてこたつでしかられる
御てんばに構ひなんなとてんばいひ
みゝづくのやうな遣手の身ごしらへ
御近所へ來たがと古いかけは寄る
こりや川だなぞと棒ぐみ大さうさ
手拭のすみをくはへる地紙賣
秀吉のつとめたころはちらしめし
まな板へ千人ほどの人だかり
舟宿にある内夜具へ人だかり

誹風 柳多留七篇 終

表考
風也
文峨
丘樂
寄生
蘭水
葉十
門拼
吐旭
都柳

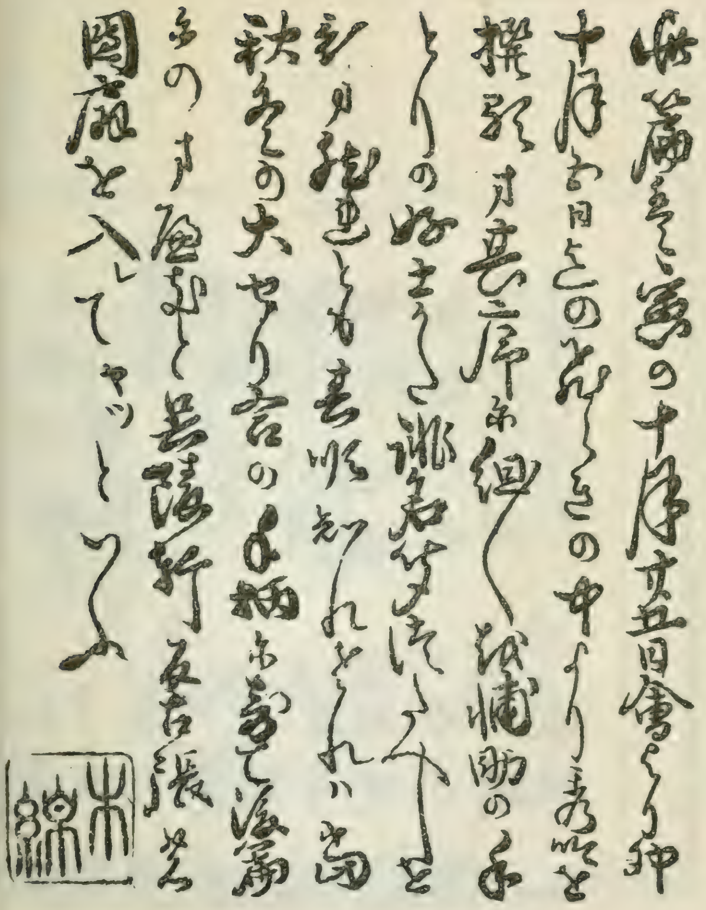
百衡
春朝
丘島
万灩
花鳥
紫夕
在豆

亀峯
千哥
和竹
涼水
青江
蔵風
茂川

桝水 川霍 粟穂 哥遊 龜甲 布川 似竹 玉枝 三伯 牛町

村竹 竹賀 芦舟 孤笠 赤学 龜悼

紅香 千雀 嵐巴 五秀 井陵 雷子 鉄丸 名木 巴連 緑枝



柳多留八篇

此篇は寅の十月廿五日會より、卯十月五日迄のひらきの中より秀吟を選歌す。其序に組々を輔助の手とりの好士がた俳名聞きつたへを記す。然れども其順知れざれば、當秋冬の大せり合の手柄に寄つて後篇にのすべきと、呉陵軒反古張の團扇を入れてヤッといふ。

吐旭　紫夕　都柳　在豆　襄考　百衡　龜峯　風也　春朝
千歌　文峨　五鳥　和竹　五樂　萬鼬　染水　寄生　花鳥
蘭水　葉十　青江　門柳　祇風　茂川　桝水　村竹　紅梅
川翟　竹賀　千雀　栗徳　蘆舟　嵐巴　歌遊　狐笠　五秀
龜甲　未學　名木　井陵　似竹　秋憧　鐵炮　玉枝　三伯
巴連　牛町　綠枝

雛の箱まだふみも見ず明けたがり
よりたまへあがりなんしとあら世帯
役人に成ると小兒もむづかしい
親は子の爲にかくして溜めるなり
あついばん表二かいのかやが見え
女房の言傳いはぬわかざかり
雲程に女房は月へさしさはり
ねぢ上げて手をやつてみる雨やどり
九代目に坊主が出たでばれたなり
少し名の立つもうれしき若ざかり
それともと母は朝湯をのぞくなり
高砂もばゞアの方はくま手なり
猿廻し黄色な糸は三ばかり
大小で配つてあるくかしはもち
女客てい主馳走に他出する
母おやに顔をあてがふ苦勞なし
嫁の事姑身ぶりをしてはなし
奥さまのお腹はぬしの御腹なり
あの通りだと靜へは浪を見せ
山川萬里へだてゝも江戸に住み

掛けとれぬ頃は雲迄よこに成る
買つて見ぬ内に女房をよんで遣り
まく事がならぬでむす子行きはぐり
さう行くと六郷さまの御門だよ
お袋と身はゞの事で一けんくわ
年わすれしたとはけちな女郎買
顔を剃る前に見て居てしかられる
御ゆるしと猪牙から飛ぶの其早さ
のりのにはとは浅草で言ひはじめ
百兩をかけると首をふつて見る
我がすいた男の前をかけぬける
ゐのしゝはおきると歌によまぬなり
浄瑠璃が出ますと師匠しかるなり
賣る程もなしと金砂をじやまにする
縞がらのわるい小袖でこはがられ
邪氣のあるばゞァとたいこ申上げ
かんりやくを教はつて居るいたはしさ
かん病にはり合の有る事が出來
けいせいの能書は顔のたしに成り
舟宿の女房ふかみへついとつき

袴着て眞先に居るまうけ筋
紫の幕をのぞけば金屏風
餘の客はいらぬと姿海老屋いひ
御留守居のかたるを笑ひ〳〵弾き
あつちだのつだの丁のと本田いひ
手前ものだけ菊水の出來のよさ
旦那をば出しなとしやれる女客
仕合せは嫁だと石屋朱をつぶす
ぬかる道とばれるだけはとんで行く
倘はさし武士は無腰のおもしろさ
抱いてはひるとは二位殿が云ひ始め
熊坂も頭巾一つの祖師となり
倘正へ知れてぬす人首もらひ
品川であれ切かのとたはけもの
庚申の夜の一人寐は地者なり
小兒醫者坊や〳〵とにじり寄り
一歩とは下女ばくだいの無心なり
長刀ぢやしよせんいかんと五郎丸
御局はげい子にいつそあやなされ
二かいからおやわんみせて母をよび

雛祭これから斯うは姉さまの
船頭へいめと秋葉へ上りした
旅がへり品川からはいんぎんに
讀めまいとないら薬に馬を書き
わが口で切れたと禿しかられる
縞に紋ぬはせるやつは數がなし
六月は日歸り春は御逗留
貸本屋無筆な人につき合はず
もう外に死に人なしかと鰒をかひ
歸りやるかきついやつだと隅田川
かんぶくろいつとはなしにかけふやし
だァれでも無いと綿の師匠をかぶり
御亭主が死んで逃げるがやめに成り
しやば中にかりは無いぞとおつかぶせ
がまんして中形を着る地紙賣
元日はまだこはいから戸を明けず
光るのを知らせる役はまれよなり
直次第で四五本入ろと長局
疱瘡でをしい隠居が一人きれ
熊坂がさいごは五つまへと見え

しつをかくたいこ身代破滅なり
きぬ〲に手綱かいくりかるゐ澤
とむらひをよろしい筋とむす子いひ
いやならばいやといやれはいやみなり
つめられぬやうにと禿願をかけ
櫻ざめとは下女のするいろの事
もん〲のはんてんかざりものを賣り
香のものさいかくに出る一人者
ちやんころが無いとみゝずを掘つて居る
よし原はいたし晉羽はかゆいなり
石灰のたんと入つたを馬士はのみ
さうはもうつかぬと小よりよつて居る
根ぞろへをして髮結はさぐらせる
帆じらみをしよつて來たかとおりやうらいひ
引け四ツに明けた駕かきゆでたやう
とくしんをさせて質屋は繩をかけ
まきこまれきつたと噺す姑ばゞ
さがみ下女相手にとつてふそくなし
色の世ととなりの茶屋のばゞアいひ
俄醫者もしもの爲になでに成り

乘習ひ一人で馬場をおつぷさぎ
馬喰町五百のあすが四十七
料理人千人前もあるといひ
乳貰ひに今來なさいと御用いひ
元服も後のはどうかをしいやう
唐の琴どれもあやふい所でひき
ふくめんと羽織を取ると禮者なり
飛鳥山なんとよんだかをがむなり
品川へはじき仕廻うて四つに來る
死ねばつてはなしはせぬと禿いひ
晝三をかひかゝつたがいんぐわなり
靈棚をはだかで拜みしかられる
くどかれて盆もないもの持つてみる
肴溜めてもみんな二度目の口ばかり
あだ右衛門の內だとうらに行く氣なし
女きやく亭主出ばつて呵られる
そりやにじがふいたぞと出て引つぱしより
もつとのませろと生醉こうしやなり
談義場を後家にくい程取廻し
お妾はこゝがつるぎと部屋でいひ

初手二人後四五人は追人なり
びいどろの盃わるとまどはせる
銀ぎせるくはへて息子花を立ち
片手から上のどらだと荷しよいいひ
干しころしもされず遣手里の口
女房が留守だとはめをはづすなり
けいせいに番頭の名はかた過ぎる
肴うり四つ過迄は鰓を見せ
あのお家とかくに川で金をすて
引つかへしの幕で明智はしてやられ
越後屋に小半年ゐる風の神
硯ぶたおらア飯だとかさを出し
海川はやひだとむすこ土手でいひ
出た程は後へひつさる神樂堂
持つ程のものに針妙房をつけ
かし本屋無筆にかすも持つて居る
番頭は毛ぬきでこゝへうてといふ
大門の內はたいこのたなごころ
山さんといふは品川初會なり
船の酒たいをかためて丁度うけ

またへつまはさんでこぼすぬか袋
心よく乘せると渡し沈むたり
生醉をひいて小ぢよくはもてあまし
あらしの日客さむさうにみえるなり
與家老ぐちに成る程さかりなり
御新造ははやつた人と御ざういひ
床をする噂で弟子がみんな引け
年わすれ袴で來たでしかられる
しこためる御役だけなとやりていひ
かとく公事まづ文通でいぢり合ひ
餌れうるあたり入相程にちり
こびついて居るがめかけのかしよく也
捜すふみこんなものかとちよつと見せ
まん月のせなかへあたるもどり牛
どういふ氣だかと赤子にひなを見せ
よめの獨ぼつとりものを二人つけ
あんどんへうつして仲人いとま乞
鷹の羽の家中死すとも穂はつまず
大名と町人足の出合ひなり
甲冑をたいした所へ暑氣見舞

かきつばた二鐘ほどは水をきり
引け前にやらずば旦那錢とらず
雛さまへ野郎來て居る猫の番
下女がせな笑つて娘しかられる
よい事をしたげなと守なぶられる
つばきしてあるくがひどく醉つたやつ
すがゞきをわたしてゆびをぼつきぼき
御湯殿でそちも道入れとおじやらつき
一人もの店ちんほどは内に居ず
とく心のむすこふふんと笑ふ也
さらし屋は江戸に居る内朝寢する
よしはなしたりと請取る琴の箱
碁の助言いひたく成ると庭へたち
毛があらうものなら和尚色をとこ
中條で下女黒鯛のこともいひ
馬程なやつをお袋抓るなり
不承知な下女たくあんでくらはせる
だに程な銀でしうとめ寺參り
へうきんにするなと姉に縛付け
べんべらを酷ッたらしく御ざうはぎ

同役をよび／＼繩をしよつこかけ
佐野の馬戸塚の坂で二度倒れ
よい娘なんのいしゆだか惡くいひ
袴ごし前からあてる見ぐるしさ
隣國のふんどしをする鑓とぎ
ぼた餅のこげつき御用二つくひ
餅花の下向東海道を來る
ひなづるは千兩にするつもりの名
三番叟かぞへる程の人でみる
白むくをぞつくりぬいで蚊屋へ入り
櫛ひろひ毛ぬきをあてゝしかられる
其ていのわるさ袴をぬぎかけて
柳ばし出ると一かぢぐいとやり
朝歸り竹にすゞめのなくじぶん
又あすも出すわとだます土用干
もういくつ上がると雜煮闇合せ
はつ鰹／＼とてまだくはず
ほれくさらかしにして居る内氣者
無いもせぬひしやくをふるふ剃刀砥
濱風に屏風の衣吹きおとし

萬歳の來た日勞咳大不出來
うたがひは晴れたと亭主りちぎ者
をどり子がすけておの／＼やかましさ
明けがたのかねには花の人がちり
銀ぎせるおとした噺三度きゝ
御物見の下でごぜ又いとま乞
ほとゝぎすもうひや飯もすえる頃
郡太兵衞さん上げやすと藝子さし
三味せんの師匠はあまりこはくなし
聞分けて撿校たつた二日のべ
渡し場のさびる九日十三日
目のまはる駕をおふくろ土手で借り
つくは山兩國からの行當り
薄田が陣小屋へ來るさがり取り
水桶の瓜やう／＼ととかまへる
玄宗はおむく紂王きやんが好き
こしの灸入るほど明けて能くかくす
よばれても二(ふた)針三はり縫つて立ち
前髪はひりくるみだと火繩いひ
しやうじんが二ぜん出ますと鞠の客

辻番にたま／＼若いほねがらみ
がた光に付木をかつてふつてみる
びく尼だけしやうじん物の中に住み
いたゞいて飛車をとられた口をしさ
腰元は鞠沓はいてあるけいず
うつかりとのぞかれもせぬ呉服店
義朝ははだか常磐はうづみ着る
新田さま品によつたら禁句なり
わらはれる度に田舍の垢がぬけ
五代目はしやかで九代目かつぱなり
くたびれたやつが見つける一里塚
はぐれまいぞと摺こぎへとかまらせ
調合をしてもめつたに持つて出ず
鯛ぐらゐたゞうん／＼と御あいさつ
花の枝御ひとりの時あげませう
下地さとすまされて居るよめの風
藪入のしけをくつたもむごいもの
鵜を見に百人一首程寄りたかり
ほめられた嫁てんじんの方へ向き
見世中を雪にして行く居酒のみ

御一門遂にうんかにたとへられ
とりかぢで田樂迄は遣りたてず
千兩のおもみ家內が持つてみる
四五人をべらぼうにして請出され
しら箸で毛むしを幕の外へなげ
枯野見に一歩あましてもてあまし
花ものをいはねど女房けどるなり
ばかものと高尾へむごい評がつき
二つ三つつけて餅花子へわたし
子曰(のたまはく)むしが通して切りもぐさ
はりかへに遣つたと馬の方(はう)を借し
十兩へ座頭とう／＼てんをうち
此手合行く日になればいくらいる
兩袖を出してしよひ込む夜着ふとん
いぢろきの無い所(とこ)に居るほれたやつ
上下をでつちのたゝむむごい事
一(ひと)箱を息子十度(とたび)に盜み出し
そのきげんではと髮結こはがられ
おもしろく無いと片尻ひんまくり
御內儀は千六本に酢をかける

暮の文句がどうでもよこせなり
圍はれの下女うんつくぢやいけぬ也
元日の御用いゝなとほめられる
あれ馬がのやとをどり子笑ひ出し
ちつほけな湯とうで醤油買に行き
花ぼろのやうに荒神様を切る
休む内たいこであふぐ盆をどり
雨舍り氣の毒がつてこもを遣り
よくしなよふれ頭だと遣手いひ
嫁の手とくらべて下女は笑ふなり
竹の子は一本ぬいて先づにげる
おふくろはかぶつて行くの迄はがれ
けいせいの意地は五町を構ふなり
不動さまかえと初會をついて見る
麥ばたけ作大将が見あらはし
むごらしくごぜ蚊いぶしの先に居る
黒小袖世を早うする着ものなり
切見世のくぜつ一人(ひとり)はこしをかけ
をどり子のとりあつかひにしてふられ
から尻は江戸へはひると見ともなさ

花の外には松ほどの奥家老
あつさりとしたは角力の棧敷なり
袴着て棧敷へ通ふよろしき儀
川どめにてにはを直す旅日記
百里程はなれて後家の相手なり
上(うは)づツてしそこなつたは源三位
首ッきり切つてはほふる料理人
あつちへも來やよとごぜへ御やくそく
むつ言を勅使へかたる美しさ
あいさうに先づお齒黒のつばをはき
樂天は麥めしおやぢだと思ひ
物申(ものまう)のたびに爪からかけ付ける
こも僧の見習ひに出るおもしろさ
めしびつをかゝへて内儀わらひ込み
ひれふして商ひをするごふく店
かゞみとぎ地紙の後(うしろ)へ座をかため
諸太夫にしてはこすいと遣手いひ
さかさまによめば新造おない年
爲になりんすとはげびた貰ひやう
龜菊は大事のきやくをして遣られ

中條で本のかくごのまへを出し
すつと來てすつと出て行く松の内
女房の緣で御油なども上げ
母のじひ塵芥(ちんがい)よりもかろんずる
何事のやうに兄弟ひなをわけ
おはぐろはげい子一生いやといふ
仲人は母のうしろを度々のぞき
よし町へ廻るを御さい思にかけ
緋縮緬異見ついでにとめられる
わるがたい後家とは見たて違ひなり
らん丸をいつちをしがる本能寺
一生のなん儀花よめはらがへり
琴の音を生酔こなし〳〵行き
正月の買ものに出て氣がそれる
櫻ほどだら〳〵されぬ紅葉がり
御母儀から急度たのみと謠の師
よめの噂をあさがほの垣根ごし
圍れの子はとゝさまはないといふ
新造はふる氣ではなし寢る氣也
棒組やあかゞね屋根の旦那だぞ

他にとをよせてふられたいざをいひ
書置はめつかり安い所へおき
乗物のすだれを上げて子をあやし
其かぶは無いに呉服屋やかましさ
だんぎ僧一口のんでふたをする
駒下駄で馬ぐそよけ〳〵茶屋を出る
太々でいひおりに成るはぢをかき
山わりにするけいせいは下り坂
門すゞみ宵ばりだのとあやすなり
江戸のまん中でわかれるなさけなさ
養子にもしろ娘だとかげでいひ
ぞつくりと持つてお姿聞きたてる
此頃はつくるに亭主氣がつかず
内談はお茶あげろよが仕廻ひなり
扇子にてひたいをたゝくよいきげん
紅葉見を下女にやかれるはづかしさ
たのしみに手の皮をむくひぜんかき
にくらしい口だと前をよくあはせ
眞崎といつちやア内が出にくいよ
をどり子の母人口にかゝはらず

羽子の子をつきすてにして嫁かくれ
先供に一つきづいてせなあよけ
大層なせきばらひする大がらん
村中に江戸からよんでにくまれる
下女が色戻るふりして袖を引き
よし原の格子もときにあはぬなり
玄關番おれが手だよときめてたち
野がけ道和尙以ての外ふざけ
をどり子はおいらも鯛を包まうや
ざわ〳〵と大とむらひの通る音
ごぜの悋氣にはたらきはねからなし
床げい者ずるにかけてはにちうなり
後に成り先になり來る下女が櫃
まだ俗がおとなしいよと旅おくり
そば切でさへもてんやは汁ずくな
くどいたを下女ふれあるく其にくさ
さし貫のおいこんだのがたわしうり
くひかけてとゝをが汁をかゝあもり
安ものの米うしなひは信濃なり
大一座なけなしの美女もらはれる

歌がるたなどに事よせなめたがり
つがも無いとは不動より下の事
まつたうにすりや本店も見ては居ず
つけのぼせたばこの虫をとりにやり
柳ばし川へふとんをはふりこみ
一本の杖千金の道具なり
品川の文來るも月來るも月
たいこ持若年ものをむごくする
師直は事もこうじたさゆをのみ
よし原を三うねり程にほとゝぎす
奥家老みんな娘の氣でしかり
番頭の豐後へんぴで初にきき
にこついた内儀の跡へ雛をしよひ
こんどからもう御免だと嫁の供
返事をばでつかくしろと姑いひ
毎年の事萬歳ををかしがり
入用をきかねば大工ひつ切らず
草市に茶屋の内儀に内かりる
三味の箱先へよこしておちつかせ
うぬぼれで隔日に剃る地紙うり

百やると荒事をする神樂堂
灰ふきを持つて見たてる捨てどころ
ざいふりをにらんで置くと母はいひ
からさして行きやれと破れ傘をかし
てんぐ〳〵に宿所をかたる雨舍り
吸物をぺろりしてやるのまぬやつ
きげんよくまけずに歸る黑木うり
わたしをばばかした氣さと内儀いひ
おつかけて一升ふやす初鰹
宿下りはどうか兄貴がよんだやう
戻り駕本町筋をよんで見る
若　身で安請合の後家をたて
田舍道こぼれたやうに家があり
戸塚から五文で來たと御用いひ
上下で泣事をいふ伊勢の御師
その町へ來るとかけ聲きえるなり
身代のよい十郎は金子なり
御殿中心のうごく鈴ひとつ
引張ると隣の出來る花の山
二十四五上とは娘むごい事

戀女房櫻ざめにはかゝはらず
若旦那八九とつゞき大仕事
私をば馬鹿にしやすとちんを抱き
駿遠にあくびをさせるきつい降り
若旦那寶さかつてはこぶなり
喰ひものにかけては孔子むづかしい
客二人切れて敷初りつぱなり
なるものとむす子同じうせんとする
雨やどり始皇でからがみじめなり
逃げた晩えしれぬ初會五六人
芥川草をわけてのせんぎ者
太神樂ふとんで釣つて來てみせる
ぐわいぶんのわるさ女房と下女が論
せんどのをまだ縫つて居る茶屋女
吉原のぐわいぶんに成る意地をはり
おまへ方本降りだにとじやまがられ
世はのがれても義理の有る六夜待
ふみやんなと紅葉のそばで一歩かし
座敷牢初手は遊里にとらはれる
人口を衣でふさぐにくい事

十さしを禿おきると出して見る
すみなさい氣に有る事と茶の間いひ
疊屋をはしたに使ふ神無月
どや〳〵と將棊に付いて座替する
地に御經あるで小便どぶへせず
柳橋出た御ざうめに百倒れ
人からでにらめくらする茶屋の錢
脾胃虚さと藪醫見たてる信濃もの
花よめの疱瘡よけは持參金
あのかゝアしやうねが有ると御用いひ
油斷して母すこたんとやらかされ
日和下駄鼻の有る時はいたまゝ
町内を亂びんにして根津に居る
しくじつて二十里上へ下女かへり
上下のせなかをさする禮の供
のら出合鴻雁列をみだす也
出されたを出て來たにする里の母
日本へ四角な口を出してにげ
大磯の江戸とは亭主むしが知り
吉原へ紅葉をこぼすつむじ風

まん驚風桟敷を二けんをしい事
さういつてきやよの前は耳に口
白拍子大かた主馬の指南なり
あいさうのよいをほれられたと思ひ
女房を籠づめにして番をつけ
片月見ごく〳〵わるい首尾とみえ
大施餓鬼してから後妻氣がかろし
ひんもんで度々捨てるよい女
相談が出來て紅葉見ひつたらし
他人からよんだが伯父のふくれなり
ほとゝぎすききんしたとは年增なり
その舟はどうするのだと矢の如し
そろ〳〵と息子碁にあき鞠にあき
ひとりでに羽織のこけるひんのよさ
藪入の五つ月過ぎて御ひまが出
内に居りや息子めつたに人をよせ
あの後家の數珠でぶつたは初手の事
前帶をうしろへ廻はす客が來る
お齒黑の口をひんもぐやうに拭き
本性をたがへずひらきますといふ

辨慶が居ぬと靜をのせる所
初の雛伯母御やつきとされたなり
よこさずばなけと古參の御用いふ
雨舍りとほれ〳〵とみれんなし
ゑびす講なますは見世でうつつもり
庭へ出て直して這入る子のきげん
人同じからず花見の仲間われ
光秀を素人細工にころすなり
茶はそこにおきやと帽子の針を取り
不屆な男上下はじめたり
切れ文ははら一ぱいな事を書き
よいむすめ惜しい事には齒が黑し
折れたかと思へばおきる筏さし
物干でよめも生醉見たといふ
出し合つててうちんを買ふ素見物
吳服店ひくい返詞はおとなり
あつぱれな智惠で辻番灸をする
傘へおたふくでさへ入れにくい
かん病をひとりねめ〳〵往生し
くらはせてもう仕廻はうと料理人

村ぶげんすみ酒ばかりのんで居る
若旦那ちひさいぞえとたいこいひ
九族を皆海ばたでまよはせる
月といや三日月でさへくめんもの
けがのない内にとくすねたがるなり
まだ出來ぬ顏へしかける淺黃うら
あがりでもよいが五十めつくまいか
渡し守水てんがうにほねを折る
町代は油むしさと大一座
福來る則ち死すは明智なり
はんだいに升とおやとが二つ三つ
たいがいにかじつて柿の皮をむき
四日目はのう〳〵とするかんぶつ屋
旅の留守内へもごまのはひがつき
踊子を味噌とうしほの間へ出し
しかられて今朝出たと母苦勞がり
持參金すわつた所はうつくしき
ぬき〳〵に廻つて嫁はにくまれる
歌がるたごぜは無筆ととちぐるひ
小半日いなゝいて居るごふく店

はたられるのが無き寵へきのどくさ
業平の惜しい事には地いろなり
初會にはみだりに臺へぶちまける
夏の内しきりにいつてみくびられ
柳橋鞠のくづれの二艘なり
茶屋の直をする内拜むにくらしさ
ぬきぐしにせなかをきめる膝頭
あすはもう上ると出合しつッこさ
けんぺいに火鉢をあらす火のしの火
太神樂まはせるそばへひらぎさす
生醉のつきのめされる形に寐る
新造は眉をひそめて見立てられ
ばかにしてくはへぎせるで彈き懸り
下直とやいはんつき屋へさしみなり
川を越す女一寸づつまくり
手下共松の下にてぶつて居る
田舍嫁手ぎねを見せていやがらせ
なけなしの鎧朝比奈ひつちぎり
藪入にはしよれ〳〵とせなあいひ
品川は山の芋より薩摩芋

辻番は乳母をしかつて下座をする
拂ひ雛泣く〳〵母はきばるなり
十三日おはした目より高く上げ
秦の儒者命なるかなと穴でいひ
町内であいつあいつが仕出すなり
卯木うり鰹のそばで二文とり
先達は歸命頂禮ばかりいふ
ひぢ枕いくつかすてる疊さし
をしさうに雪隱を出る痢病やみ
不氣味なるものはおやぢのそら寐入
田舍いろ茜と淺黄まくり合ひ
棒組やありがたいなといそぎ出し
ぬれる外よい智惠の出ぬ雨舍り
仰山に二人がかける紅葉の賀
わたし船萬歲一間おつぷさぎ
花嫁のしやうぞくつけが五六人
をめかけにからかつて見る阿房者
すてぶちは御ごさのはしにねた女
此寺と芝で公家衆へ申上げ
やつれたる女房の來る古いかけ

目のすごい鳥だと車よけて居る
たのむふみよろこんで行く素見物
仲條は物申はむじ開かぬ醫者
代脉は若黨で來た男なり
狆を叱つて撿校を座に請じ
座興だとてにはを直すごふ腹さ
ひるの内女房ほつても氣が折れず
ずつ〳〵と仕立おろしを息子着る
猪牙舟の昔ばかりする雪の川
八丈とどてら筈からはつて出る
弓張で送れば嫁をやすくする
花嫁にだきついたとはひどく醉ひ
朝がへり妙智力にていひぬける
十五日江戸であらそふ肩車
かいきんをしたのでごほり〳〵せき
工面する内此界の四つをさき
しほらしい姿牛町かぎりなり
御酒きげんより見ぐるしいさゝ機嫌
乳へ子をぶら下げて縫ふ屠蘇ぶくろ
鯵のすうこはだのすうと賑やかさ

鵜かきの居る所迄もてあまし
上下のまゝでうけ取る子煩惱
通町ごふく店からたそがれる
羽二重はいやと銚子の質屋いひ
ごちや／＼と月下の門へ禿出る
舊多のしゆく意ばら／＼扇なり
酢ださうなしんぜ申せと內儀起き
羽二重を這つた虱に人だかり
通りぬけ無用で通りぬけが知れ
市歸り二百餘つて氣にかゝり
非禮を見て初鰹直が出來る
穴一をひつたてて行くにいし染
わるもてのしたは太皷の作意なり
苧殼賣かつぎあきたか提げて持ち
大三十日えゝ衆へ賣ると植木うり
ふところの眞ッ四角なが御殿なり
朝がへり一人しやべつて靜なり
持參金買はぬ息子へむごい事
ぐつと寐てやりんしたとはむごいやつ
からかねをせんじては出す幾世餅

繼信も十が九つあたらぬ氣
朝がへりおとなげなくもどうづかれ
弟は江戸へ逃げたと須磨でいひ
奥中が相模で秩父もてあまし
一小言あつて錦手かけを出す
かゝアどのちよつとございと間をさせ
おてうがんやいとおやぢは呼びに來る
はしよつたりおろしたりする御見合
故障の儀有つて亭主が臼をひき
柳ばしのり出してから封をきり
內裏中兵庫々々とひいきなり
をどり子も鮎と一所にさびるなり
御いもじをいたゞいて下女寐つかれず
魚の紙丸めてじやらすからす猫
馬を買ふ程でうけ出すかるゐ澤
いひぬけてひざなどはたき／＼行き
さしを持つ下女ちつとづつ頭を下げる
わつちらも武士づき合ひと夜鷹いひ
いつそもう氣をもんでさと茶屋でいひ
叉伯母といふかとしかる後の妻

勝つた馬士靑なしなどをかじるなり
武士道と出家かたぎでもらひひき
相談をしい／＼輿の後を行き
蛤はため小便をたれて食ひ
遣手ばゞかなひのやうに醉つて來る
裏門に日がな一日でれん坐し
しゝさるは蚊屋とこたつの極めなり
あすからはおいとしいぞと御師を出る
女房の目のいそがしい下女を置き
藪入にむす子芝居の見にげされ
がしやうぎに小栗であてる旅芝居
下女がせなゆずを二つに割つたやう
シテワキで淺黃の通る花の山
裸にて是番頭とはふり込み
旗持ももらひ泣する湊川
はさみ箱下駄で釣合ふ禮のとも
逃げたやら近頃ばゞア茶をはこび
脈をよく死ぬのを姑くやしがり
すゝ竹をうりに來たのはたけ林
紙びなは柳の葉ほどまどをあけ

べんべらが有ると飯たきいやといひ
硯ぶた尻をつゝいて紙を出し
やぶれたろおんばうを着て謡ひ出し
下女は又出て搗屋どんさめるわな
持参金あばた多少にわりが有り
どぶろくの生酔ためへころげ込み
米をかむ事をおりやうへいつ付ける
柳ごり餅くふ内にしてやられ
諸人頼みますると足をこしらへる
節用をひかへて庄屋したゝめる
十七屋日本の内はあいといふ
子は先へつきものと母邪慳なり
しのびごま隣は泣きのなみだなり
女房はやかぬがたてていぶすなり
さうむごくいはぬ者だとにじり寄り
くら宿へ廻るで四つ手百たかし
御知行は末社ほどある神の末
若い手をかりてむすめの灸をする
死ぬものが損とは後家へあてこすり
兄弟の中へ寐るから中納言

いさぎよくりやう治を頼む向ふ疵
夕べのはくぜつ今朝のはけんくわ也
朝顔は朝寐のものにしかみづら
うでへまきつけて物干かりに来る
おめかけのひるまは至極無口なり
女房のくろう草木黄ばみ落ち
さかづきがどこらへ来たと料理人
仁王門そのかみ蔦のあつたとこ
げんぶくも二剃刀は女なり
あらの出る長口上は鐘の銘
うつつくが居ようと覗く松が岡
五六寸針妙ほどく御いたづら
おまへがたいゝさうだんと渡し守
うぢつくを仲人屏風へそ引込み
はなれ馬かり豆屋にておさへたり
かへる時くひつつみの出る大わらひ
江の島の十里こなたに三日居る
さあ雪だ出たくなつたと女房いひ
あつけない夜を傾城にすねられる
花の枝もつて風雅な倒れもの

一町を薬ぶくろでおつふさぎ
一ぼくへ御家老などとのんでさし
手切金めかけの兄は二度とり
医者はりはやはり和尚でうれるなり
朝がへり廻らぬ舌でいひまける
二日寐て女房遺恨はらすなり
前九年ひつぱり合て一首よみ
首二つ棒をくゞつてかたをかへ
ひどいかり春めきながらさえかへり
五條坂けいどじ兵衛せんぎなり
わつ／＼となかせて置いてすりみがき
はんぎりの中にうなぎはのび上り
御来迎間もなくひいんひんといふ
かくれんぼ通りすがいに尻をわり
足ばかり洗つて仕廻ふ關相撲
朝がへり遠くでみれば掃いて居る
釣竿のちよ／＼ちよとみえるよしの中
公用を工藤はんとにしてうたれ
雛の有る内はおふくろ気がのこり
おしろいを村中さがす宿下り

繪が無いと男女の知れぬ百人一首
御手がらな事と禮者はかもをくひ
雨やどりおぬしの方にいくら有る
行く息子御なん／＼とけてにげる
息子まだ弔からはいやといふ
いつをいつ迄と圍の母はいふ
いみぶくをいふなとちろり二つ出し
幕の留守下女毛氈へ足を出し
いつ用にたつか芋虫つのがあり
熊坂も人がらで居ちやかゞみとぎ
つばなうり後へつけさと奥家老
くやみいひながらせたげる生藥屋

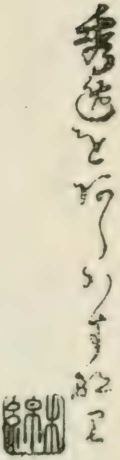
小便をすわつてしろと女衒いひ
鍋鑄掛けちな銚子で手を洗ひ
へつついの金具あるきにみがかせる
高足をうけると下手はぶちかへり
茶をくれといへばおれもが五六人
目黒在正五九月にたぼを出し
子がなくて御みや大きな口へ喰ひ
師匠さまくずよ／＼と二へんよび
一生の女房と息子吟味する
十六でむすめは道具ぞろひなり

安永二癸巳林鐘吉辰

誹風
柳多留八篇 終

誹風 柳多留九篇

此篇のはじめに、當夏書肆星運堂のぬし心願に依て不忍奉納句合催し、千二百員の寄句の内四十吟の



水無月の池に寶珠を盛上げる　近路
一ひろでましまする時の有りがたさ　布川
清らかな花水鳥の留守に咲き　魚交
ほの〴〵と人丸堂を矢のごとし　鳳尾
毘沙門は辯才天のふせぎ也　南星
半夜程勾當運がたらぬなり　鳳尾
人間のからだで首は茶釜なり　茂仙
火をとぼす頃大川へ猪牙をまき　鳳尾
鐘供養踊子が來てらりにする　雪圓
もうおまへ三年程と爪をかけ　雨曉
花嫁を百貫道具だとほめる　仙郎
ふとんから首松へ出し椎へ出し　米學
生醉のつッかい棒に甥子なる　鳳尾
鐵漿の禮覺えて居なと歸る也　歸航
神樂堂淋しくたゝく定直段　雪羽
二尺程飛んで渡でしかられる　梧洲
あの金をどうするのだと息子いひ　布川
厄どしを甥子むしやうに長くする　寄生
渡し場の意趣だとそびく花の雜　五樂
花の山足よわづれがぜつび出來　雪圓
隣國へやッつかへしつわたし守　紫夕
づぶになるつもりで下戸を誘ふ也　粟穗
宿引のやうに遣手のすみだ川　木綿
漆臭く無い道具は二度め也　同
連に迄うとんぜられるしはいやつ　仙郎
はしたない事をいふのでお末なり　嵐巴
秋の夜を二十八日息子しよい　同
髪色へ御經のまじる御縁日　芦舟
手水場の垣に楊枝の二三本　月印
駿河もの手前のもののやうにいひ　一鳥
繻子の帶百度參りの帶でなし　三朝

不忍の方迄槌でぶつこぬき
是夢中作左と起す花の山
きげんをとると女房はゆだんせず
みん〳〵がなくぞと息子おこされる
歌がるた乳母はにぎつてたゝきつけ

かんりやくと大氣の中に母はたち
子どもよく湯づけに饅そへて喰ひ
曾我の後又宿下りのひがし山
夫(をつと)とは向きをちがへて晝寐する
寒念佛世に捨てられた月をほめ
花の山ごぜ松の木の方へむき
惣仕廻ひけつきの勇と茶屋はとめ
是でまあ夜食々々としんをきり
太神樂しまの財布へばちをいれ
十三日ふだんの顔はぶしやうもの
筆まめは名迄せいしやうなごんなり
あつけない右大臣だと政子泣き
すけてやるやつさと酒をふき出させ

亀遊
千霍
桝水
鳳尾
魚江

炎天にすべるを見れば瓜の皮
いつたあすおッつき合つて湯屋へ來る
三きね程あてゝつきやは布子ぬぎ
けだものを一疋まぜるくわいらいし
花の雨座頭つッかけものにされ
大三十日又來たぞえとけちな事
やね船で高まんをいふ俄雨
うろつけばなで〳〵といふごふく店
くすぐれば禿ちひゝと笑ふなり
銀ぎせるつまつた時も銀でほり
ていしゆをばいひこめ内儀市へたち
初手三火はふり袖に似ぬけちな顔
操をばていしゆのたてる氣の毒さ

都鳥どらの傳受をうける所　絹多
惜しい事あつたら息子りちぎ也　ふせん
さう行くと岩つきだよとわらはれる　川朝
松茸の出さうな名なり男山　嵐巴
右者奉納之吟編

生酔ををかしい内にかへすなり
片道はしやう〳〵で行く御代參
鳴りこんで來るがたいこの年始也
その客が來て三ひろ程反古に成り
さまづけに禿を遣ふぶきげんさ
もう何か嫁は御ぜんをしそこなひ
圍(かこは)れのしつッこいのは覺悟なり
元日に女のあるくひどい用
手の墨を洗ふをしかる渡し守
御忍びの供はしあんの有る男
銚子口おれが米でもうまるはず
うたゝねは何かふそくのすがた也
碁を打つて居るは屋形の婆塞げ

上草履あとじつさりに客へかし
間男の傘は四五間にげてさし
米つきはみごをくはへてこしをかけ
そり橋を先へ渡つて口をきき
三味線もおきやととぼでもさせぬ也
鳥追はあを向いてから彈きはじめ
あれは元うばのずる／＼べつたりさ
若旦那よばりは母のよいきげん
紋つけにひいきをはぶくひつらこさ
をりはをばやめてくりやよと產婦いひ
はづかしい顏へでつちり盛りつける
お笑ひとはごのこばかり外へ知れ
もうせんへのるが碁石のかくしげい
花聟のなぶられるのは四十こく
ちんまりとあるきなさいと御さいいひ
うづらでも能いと藪入よわく出る
疊がへひつ付き合つてめしをくひ
あの船を寄せて見せうと三を下げ
楊枝みせちとおやすみとわきへ寄り
あくた川どつちもにげる形でなし

名をいつて座頭にあふが久しぶり
こはさうに男の廻す絲車
さういつてくれりやあおれも千ばいだ
請合ひで土こね迄が足をぬき
うしろから日にも立たずに五百まけ
大一座らう下へ遣り手尻を出し
なき女なれば楠まだはねる
新造のなぐれた市とすけんいひ
ぞん命で居ても大谷六部なり
あを向いてつき屋さんまをぶつり喰ひ
女きやくてい主あいそに二人だき
萬歳ははねられるだけはねていひ
是式の出入りへゝゝとなげづきん
かたッ尻つまんで笊をふつて出る
てもくらい内だと御さいこしをかけ
後家へ出す陰間一本つかひ也
井戸ばたであびるはへんのかはつたの
はや乘のかざりをくゞるおとしづよ
萬ざいの歸り布子にかけるぼし
こりもせず禮から息子すぐに行き

不斷着でたいこはどつこ迄も行き
そこらから戾つたやうな四つ手かご
乳もらひはがつかりとして花見かえ
わる程な氣で高繩へ置いて行き
人は人なぜ歸らぬとおやぢいひ
藪醫者の先へかな棒引いてくる
年玉をつるさつて出すはさみ箱
釣臺の生醉對によろけ出し
まけたやつ棒を一本かりて行く
やゝあつて一きねあてる抹香屋
仲間はみけんかぎりに繩をたひ
腰帶にふるつてちからみんな出し
楠は美しいのをたておろし
白魚は玉子でくはぬうちの事
大こくのあとを辨天五日とび
辻ばなしつばきをしてはふみつぶし
金魚うり是か／＼とおつかける
きかぬふりするは娘の靑事なり
物を出す禿たんすへはひるやう
名月の生醉ひるの氣であるき

醫者どのは女房が立つといけんいひ
おくさまのよぶ踊子はをどる也
居つゞけは見世から文でなぶられる
楊弓を耳迄引いてしかられる
いつ迄も娘で置くのにぎやかさ
朝參り内儀は紙でふいて出る
あくせくとぬつても後家はふいて出る
ちつと行きそつと行き乳母芝で逢ひ
どばの犬質屋の門に待つて居る
先日の手引がとごぜいゝつける
たいまつで工藤が夜具は三所こげ
ばちびんでごぜの手を引く主の命
よしなよと下女おはぐろの時でつき
貞光はわんばうぬげもした男
しんざすでおつぱしらかすかたい後家
酒中花をのんだをごぜはくやしがり
がら／＼とならせばちんも見世をはり
聟の出る迄はさねひらいぢめられ
つきぬけて客をとる事三箇年
つみ草のやうにおさうは矢をたづね

間男もかりそめながら二度目也
七兵衛は主馬が舞うたをくやしがり
どら程の事か道具もとめられる
しつけ苧をひざであるいて内儀とり
ひなの酒下戸をへだてぬすみにごり
しかられる禿羽織のひぼばかり
色男うしみつ頃になやみ出し
うすくらい内から晒織つて居る
やゝしばしあつてお齒黒へんじする
玉だれの内に太夫はまつぱだか
ろぢの鍵かりてさか馬さして居る
それかみやと一枚もらふつぱなうり
よいつぶれやうさとごぜはほめられる
兄さんとしやれてせなアに逢ひに出る
立聞きは今來たやうに内へ入り
雪隠でぶどう一ふさ御用喰ひ
ぶつさらいおるとおどり子どうづかれ
日くれからかこはれへ來る夜入道
すてられたおばもぜんたいくらひぬけ
どなただと中将ひめはまぼしがり

たばこ入きめうてうらいだとさがし
待つて居る座頭はゆびのあかをより
好きな乳母本屋を叱り／＼見る
行廻りかんまはり來る出來たやつ
百人の中へひと聲ほとゝぎす
ぬけがらのいくつか出來る花の留守
田樂は田でたのしむのよみがあり
けんぎやうの妾ものごしのよい女
ならものは内分ですむ道具也
茶の會へつねのあたまは下手らしい
表具屋へ役者繪の來る長つぼね
どの口で息子女房はいやといひ
禿どもふてらつこいとおして行く
康頼は御産にしごく能い名也
ばんに寐る事を苦にするつよい腎氣
ちよき舟はだんないものと江戸なれる
花嫁のうきがともには百人一首
ちとあなたあれへとぎうはかきたてろ
いろめいた聲に骨をる謡の師
とまつたら御めんと母をばかにする

嫁の質のこらず出すと牛つぶれ
暑氣見まひせなかをむけて此通り
頼政は三文ほどがひろひため
正燈寺是がいやだと土手でいひ
門松をうれしくくゞる嫁丁度
仁王門追はれる雨はもうやまず
後の月再應の義とおやぢいひ
斎日にたちあがつたは羽織なり
いゝ筆をつかつて御用しかられる
犬坊も狩屋に居るとやらかされ
それかして後家たいさうな枕する
寶舟さかさによんで下女感じ
むだつ火をたき／＼下女の面白さ
むごい事嫁のけばえがわるくなり
かりつこは。なしと高輪を明ける也
辨慶の使かさごでのんで居る
去狀を引きずつて置くじやもッつら
根のつよい見世と大ぜい水をくみ
十九には手前そんだと留守居いひ
つぶれてもよいとお主はおもやるか

惣仕廻ひぬけ／＼とした旦那也
百棧敷承知々々と追ひ出され
不動尊ぶちわるやうにいのられる
今晩は行かぬはそんと母にいひ
御妾はひつぷの勇でふぐも喰ひ
不二山が見えて傘みなかへり
たちばなを六位ちぎつてしかられる
古だぬきめがと千早の寄手いひ
たがわざか文が女房の手に渡り
げんぷくをならべてさせる呉服店
我内のやうに式部は明けはだけ
ひなの箱ころんだ所で明けて見る
つき袖であいさ左様と承知せず
北條のかり屋ばかりはしづかなり
楊貴妃を湯女に仕立てる驪山宮（りさんきう）
三味せんを車へはこぶにぎやかさ
隅田川妻がといつてはりこまれ
お初穂をじろ／＼と見て鶴は立ち
柳だの櫻だのとて出られやす
つき合ひを御ぞんじないと母にいひ

上下で吸へば淋しい火繩なり
川留をわらぢではなす旅もどり
そば切が二十うどんが二十七
松の内花よめ二十四そくかり
切おとしやき鹽つぼはあんじ也
清水をいのれどあざはぬけぬなり
どれででもかきなとあたま出してかし
はし箱に一つのこして賣つてやり
ふせがねをうつが工藤がかり屋也
直が出來てたが屋どこへか持つて行き
まだ床がさめぬとおやぢおつかける
かひ物が違ふとおそく市へたち
ほしい顏せまいぞと雛店へつれ
寺宮を入れてまけたは源三位
どんなのへ行くえと内儀聞きたがり
玉川の鮎もちつとでみなごろし
切米はいゝが手足を見てくんな
飯の内そこをば屋根屋さん待ちな
じやうかいは常磐の方へ付けたい名
苗字からしてすれ／＼な伴左衛門

其じゆずはしまつてくれと土手でいひ
子供衆などと遣手は締めた時
百旦那小僧銚子とひたしもの
扠火をとぼしといはれどう二にげ
ふり袖の天命を知る吉田町
岡崎をへんな調子で弾いて居る
ぬしの無い刀めかけの舎弟也
鎌倉は度々四人の舞つた所
小野郎の使鰹は半くされ
柄へじゆずかけて講中先へたち
親たちはおこもにやるといひ當てる
三味せん屋小やものさうとあとでいひ
くちやみに茶がら捨てるを待つて居る
箱崎は四方をむいて居るところ
平皿をへづッて廻るふいな事
よい娘のと上人はむがでほめ
前九年元は女房の出入なり
ひとりねをして居る客が二三人
はらもちをさんゞにする遣唐使
御近所へお世話をかけて鰒をやめ

雨替屋のせてくれろと肩を出し
御新造顔だけ明けていとま乞ひ
木綿切れまけると太刀に手をかける
歌がるた見物をするはづかしさ
仲間われさんやの方へ行くも有り
こつちでも降ると入るよとかして遣り
出がはりに日和のよいも耻の内
上下を身をもつ人はこしへまき
弟の化粧は姉のわるさなり
神樂堂老いこんだのは湯をあびる
目見乳母大はだぬいで両手つき
せにはらを和尚のかへるふこうせき
とこをせぬのが母おやのきついみそ
うまさうに辻番とつちやロへ入れ
夕立にあつてふんどし好きに成り
あいわつちや鬼神さなどと遣手いひ
かぢ原も合せてよむと時平なり
心中が出るで結納うりはぐり
さまゞなすり鉢の有るから紙屋
他のものは入れまいぞやと松の内

はだか王らしく引四ツ迄すわり
ちつと臭はせると女衒つきに付き
一人のを買ふとつぱなの穗をそろへ
百旦那そのくせ地藏ほどくらひ
やき鹽を三つくつたとやみあがり
ふたをせぬつき屋喰ひゝしかる也
わるじやれに付びんで來る品の客
椎の木を祝ふ頼政恨む曾我
六夜まち百染程の手をあはせ
月に又ござれと柴の戸をたてり
ろくじんと覺えたおやぢ持つて居る
むしりあふ内をどり子はてれて居る
かり方はさぞやと思ふむらさき屋
しかられた通りに母はしかる也
片身にるのを女房へおんにかけ
せがき船事をかしくも堀へつけ
田舎嫁かんがへもなくびんを出し
御せなかをきつくながすがへんじ也
ふきがらをけしてくんなと間を弾き
初戀に下女すばらしい相人也

お袋は冥利を知れとまだあまし
ふられた夜どうしてくりよと考へる
かゝあどのとは四五人も出來てから
石の鳥居も一日は左官來る
鉢の木を大木にして御へん禮
お内儀のうけとり發句書いたやう
豆藏へ膳が出ますとよびに來る
どてらかいどりで鉄打あらためる
掃除して置いた座敷へお預り
せんじつめましたとこしをかける也
えゝかげん見やれと母はまどをたて
たいこもち前世は土手の狐なり
のみにげをして藥種屋で屠蘇を買ひ
笠森へ女房佛頂づらで行き
いかぬかと馬士居酒屋へ聲をかけ
山形の星結納へさしさはり
客にかこつけて一晩かひに行き
馬はもうひらきめさいと仲人いひ
御ていしゆの琴をかせとはおくの也
くどかれた乳母うな／＼をしなといひ

うれしがるやつだと文でくらはせる
祭にもけだものを出す麹町
てうちんで夜鷹を見るはむごいこと
じれつたいお子だともりは二ゆすり
もてぬばんいくらのこともおもはれず
御めかけは元民間に人となり
幸村は生きる氣でない紋どころ
乳母喰へのせんべいねからうまくなし
やくそくは頭巾の山を折りながら
鵜の衆や先では出ぬとおさうきめ
見物にむだ口の無い泉岳寺
すり鉢で吸付けて乘るわたし船
正燈寺妻戀ふ鹿はかへる也
封じ目を杜で付ける急な用
かゝあ持一人すめりと隅田川
江戸へ出ておち／＼と痳るさらし賣
土用ぼしいつち仕廻は生のもの
御歸りをいふな／＼とあさつぱら
よめの禮町内中へ首が出る
とゞけ文あごの下からちらつかせ

さつとした所が後家はあのくらゐ
元日に泣くは七歳みまんなり
おしろいを霜と見られる耻かしさ
思ふむねあつて時政ちゝくらせ
にげ水をおッつまくッつ家を建て
雨ふりにあづま男をつくばはせ
信連と萬事かけあふ源三位
疱瘡に兒の着て居る緋の衣
こゝろ待ちきしうつ浪の背ばかり
先づ殿へ行燈脇を奉り
中の町かつぱらはれて泣いて居る
人形を槍のかはりに能くつかひ
茶の飲める庵はみやこの辰巳也
なます皿給仕の留守にとりかへる
奥家老こけらしいのを見たてられ
金持に成ると請合ふ八卦おき
大の目をぬいて門番二升とり
てえげいにだらけなさいと内儀いひ
よい日和内儀戸板をばたつかせ
客さまなそべらつしやいと輕井澤

御亭主はぐわんをはたいて五百たし
あさり賣みのないやうによんで來る
懸り人みなごろしだと湯をわかし
さよ姫はあきらめのない女なり
手ならひ子大津繪程はどれも書き
もうしまりますとは息子古句なり
日のあかぬ主を持つたと手引いひ
羨て聞けば野馬をうつたやかましさ
歌がるたお局くされどうしなり
神の膳此うへもなき手ぬきたり
此町はみんな出みせと三味をやめ
扱わるいものがとそびき出しに來る
にらめくら三時して居るふけいきさ
と見渡した所が下戸はおれ一人
こねどりは尻のかゆいをもてあまし
夕藥師ざつとたばねていきやせう
盆山に一筆たのむてんば下女
ごくかんの布子三つ四つをどる也
いゝ日和下女は茶わんへ錢を入れ
文づかひ御用に一寸よび出させ

なすびうりこの〳〵〳〵が仕廻ひ也
座頭の坊おくの手は杖ふり廻し
惣ぼうのうてたは天のなす所
親分の不快夜着など着てあるき
えゝ年で初めさといふは御てんもの
もらはれて店立てなくふけちなばん
根津のきやく遣ふも三日一歩也
はなれ馬大手をひろげては逃げる
葉櫻にしてかたづける御不勝手
踊子はぶうにしようてしいる也
石町は遠い得意をもつて居る
色男じゆばんでのどをしめるやう
乳もらひに大の男のむごい事
一日はむすめまかせの土用干
深川へ漕げとはとんだ隅田川
附ざしのそばで大きなせきばらひ
泣く事はないと四つ手のござをさげ
寒見舞からにほはせる大三十日
鶴も居る龜も居るしと乳母はほめ
内儀の名むかししづあやなどといひ

そりや見ろのやうに鷄脇戸を開き
江の島はなごりを惜む旅でなし
島田より金谷の方の御氣がせき
夜る出すとこなたのせいと嫁へいひ
息子のは若旦那のに貳朱高し
花の留守このざまわえとかたづける
ぜんぶをばかつぐがつぶれむじん也
もち屋から出て酒のみをまち合せ
横柄で直が出來ますと小道具屋
ながし元ひだつた女房笑ふなり
元結ぎはつかんで母は乳をのませ
大和茶でたゞの咄もくどくやう
五月雨に東三條の通りたえ
通らしやい無事なやつだと馬子はいひ
在郷寺飛騨の内匠が口につき
鼻紙をぬひ〳〵すわる帽子針
里ぶちをわたすと乳母は行けといふ
國家老殿と淺黄をしめにくる
是はきび獅子にぼたんとたいこほめ
思慮の無い家老は池の庄司なり

その形で後家のさじきへ顔を出し
そりや出たと子供のさわぐ居酒みせ
木の下にむき捨ててある瓜の皮
天狗すけ太刀に氣がつかず
くら宿へ二百十一日にゆき
大部屋へとや出の鷹をつれてくる
そんでいに見なしと鰹ひつたてる
生酔が來るよとにげるつばなうり
せきぞろの笠上下でかぶつたの
七日には入るのだと施主一分かし
にげたばん宵に長うた二度通り
馬子うたに二人ひれふす麥の中
はい／＼は毛せんなしにころげ込み
入れかへに行きながらきくほとゝぎす
品川に居るにかげぜん三日する
かべ士を相手に座頭大こゞと
下闘箱女房はぼろを入れたがり
下女が戀みなはりこみのうへで出來
滿水に居て大名の評議する
うでづくになると禿はぶらさがり

ぬけたくし四五へん踊る琴の上
來は來たがはなし相手のない徐福
おしろいのあらうち見べいざまでなし
山十に土佐を遣ふとかつぎいひ
ぬか袋夫のあたまへぶちまける
まきじたで容體をいふ外科の前
大やしろ美男にあばたおつつける
名玉をしつちなぐつてあかんべい
家樽をばもたせて出るが嫁はいや
利そくをばわしが出そうと下女せたげ
下女が白むくかたびらのかどみうら
淨瑠璃の通俗ものは國姓爺
こうもんの會に釜なきたてを持ち
男めはにげたさうなと鹽をかけ
膳の内四五度もたつ安亭主
わに口は鈴をつぶしたかたち也
左遷の身だと銚子でまだしやれる
おくりぜんひへをかき／＼禮をいひ
まついさをかけてお出でとたいこ言ひ
は入るまいものかと只とるやうなよみ
こけおどしにも詩は少しつくりたし

梶原を二度だましたと佐々木いひ
兩側が味噌するやうに彈きたてる
笑はせも泣かせもせないくわいらいし
かんなくず蛙とならぶしほらしさ
あいつらは長生きをしてたべまする
花嫁はめしをかぞへるやうに喰ひ
かけ聲で月宮殿へのッつける
のけさまにかむりを着たが惡勅使
山程な菖を品川はすてるとこ
としの市弓は手桶に納めたり
ようついだなあと御次へ來てうらみ
人先きへしたくの出來るやぼむすめ
かなづちでたび／＼明ける一人もの
齋日に燈籠へ廻はる氣のどくさ
かけ向ひこいよ／＼といつたはて
手ぬぐひをひつぱり合うて野だけ道
かうしたと乳母はま弓をひやうと射る
おれだよと酒屋をおこす高慢さ
あたまをばひきわるやうな樒をさし
にげてみなんしと禿の高慢さ

長局四五本持つてそねまれる
かくべつな顔にて明けるぬかぶくろ
こたつから出てあたりなは出來ぬやつ
むつ言といふは高尾がいひはじめ
おふくろと中いさかひで黒くそめ
頼光を伯父ィといつて御意に入り
帳面に鯛々鴨といそがしさ
さなきだに花よめ寐ごいさかり也
藪入をやつとつねつたぐらゐ也
高砂の切りはおし付け寐かす也
年始帳供にかゝせる氣のどくさ
仲人の後から出來るおもしろさ
二つとは男かぶろのたゝかれず
ひとりでに火鉢のおこる大三十日
なんとでもいひなとゝこへ引いて行き
人をよく買ふは衣の手まへなり
一人もの小面倒なと二升たき
がになつて女房腎虚ぢや無いといひ
わきばらをかゝへて搗屋やすむ也
まつすぐに白状をする五月目

けつちやくもせぬに船頭堀へつけ
わらッ火へ銀をつッこむゐなか道
釣臺のはそんに二人しかられる
雪の日に五兩くすねてむす子出る
おやのすね今をさかりとかじる也
供べやにねぬは臣々たるのやつ
三人で座頭のあたまそり仕廻ひ
つかはずに居ると中宿いけんする
どら故に母もなばへがわるくなり
子をかして嫁のせなかを一つうち
鳥のはねすて所よりわきにあり
舟の兩ふちとらまへるはやい事
墨染の袖へ鍋かきとりすがり
車引きひきずり上げるやうにおり
たいこもち使はせるより悪氣なし
うぢつくを見ると鍋かきへしに呼び
みがいてはあれどとほらぬ客ぎせる
はたを織るじやまを藪入してあるき
しよせんなくとなりへ見廻ふ門すゞみ
梶原はこゝろの外の歌人なり

一生のかきん女房を帳につき
ほれられたさうにして居る二十けん
品川はとしまの月も見る所
大三十日箱でうちんはのろいやう
十九文見世にいなかが五六人
おれをさへ二歩かたつたと伯父はいひ
前だれをはづして内儀しひに出ろ
いさゝかな道をあらそふ禮のとも
ぬか味噌をきたながらぬは二度め也
母の來るたびに妾はこかすなり
時鳥より此事と料理人
二度迄は精進日にて逃げおほせ
初鰹ぶつかけにする座頭の坊
なげ入れのやうにしきみは賣れのこり
あだの有る子の母おやのうつくしさ
釣竿をしまつて周の代をはじめ
世によろしい時の事を女房いひ
高足の下を蝙蝠ついとび
御きげんようと猫のえりおしつける
不快だとよめをあはせぬにくい事

吸口で火を吹いて居る掛り人
二つ三つうちばに年をあてる也
生酔をつかまへて琴きいて居る
そこをよくたてやと嫁の手水也
助言ならいやよと内儀駒を出し
品川は着てもさしても行くところ
梅ひとつおちて鳴きやむ雨蛙
地紙うりおざうが継のかたきなり
四郎兵衛はいくよねざめの姿なり
かぎをひねくつて撿校にじり寄り
丸めてはみんなぶち込むみゝだらひ
去り状をやるとふだんのいとこなり
勘當をとう／＼母はしそこない
かねつけるごぜを覗いてこわく成り
ひきやむと吉野のぐるり川と成り
それもさうだと上下をぬぐやつさ
わるがたい下女君命をはづかしめ
けいせいに思ひきられてあはれ也
ぐわんぜないかねほりの寄る鍋いかけ
あきらめがよすぎて後家のにくらしさ

どうしてと嫁は二八をわけてたべ
よい月にきぬ引かつぎふし給ふ
咳がきたいのでおッことす四火の灸
きぬ／＼はころもにえんのありそうみ
黒鯛をたてものにするにうり見世
われしらず鏡にうつるごぜの顔
たいくつの馬のりものをかいで居る
供部屋にらしやを着てゐる寒い事
太刀とりのしやめん状きくばからしさ
愁嘆を向ふ棧敷はおそくなき
わる樽の内二三人ほれたやつ
けいせいのしやく人を見ておこる也
うまさうに何やらにえる雨やどり
黒がもをはじめて連れて氣の高さ
孕んだをせなあなりやこそつれて行き
暑い事となりでもまだはなし聲
四五日は引きての多い高燈籠
竹馬の小口へ赤いやつをさげ
槍賣りはみぢんさといふあやめうり
もうあきて又一(ひと)夜留守二(ふた)夜留守

傘さして紺屋のまへをすぐ通り
乳もらひの夜明けも近くだます也
ばちぶくろかくされてごぜ手を合せ
來年は螢籠だとおやぢ着る
ゆきたけの合はぬをたいこぶッかされ
御果報とほめて姿の氣に當り
油手でこたつへあたりしかられる
たつた一歩に金入れのなんのかの
わづらひなんした顔さとやき烟管
髪結の吸付けて剃る樽拾ひ
あいさうに娘は口へそでをあて
さくらから生酔うでをこいで出る
二三とは花嫁むごく見られたり
花の山下女は拜借もので出る
引(ひき)こみはぬふ事に勝ち織るにまけ
生酔はもたれかゝるがきついすき
からかさでさへ大黒は太つちよう
夜ッぴとい一歩が小言いつてゐる
かんなくづおもしろがつて追かける
行つたなと雪をむしつてぶッつける

やらないと又あたけると母はいひ
生酔の内はさられたぶんになり
ちよつと覗きやれよ怨みつぽい女
身にしみやよさとお針は縄をとき
月二つむす子太義を思ひたち
忙しいしやうこは棚をまげて釣り
高倉を夜ふけて通る源三位
かの事がもうよいぞやと小児醫者
ぬゐ程にさわぐをきけば毛虫なり
身にあまる恩は七つのとしに受け
御めん駕二三度乗るとあづけられ
御亭主がどれだか知れぬへんな内
大ぞくの身にあるまじきかこひもの
生酔を送つて手代のびをする
くし程な鋸ゐんきよ秘藏なり
女房が出るとはなしが野卑になり
心中を魚屋尾ひれをつけていひ
花にうづまつてやつこの高いびき
うたゝねはあらてをかへておこす也
よつ程なきげんさぼてん買つて來る

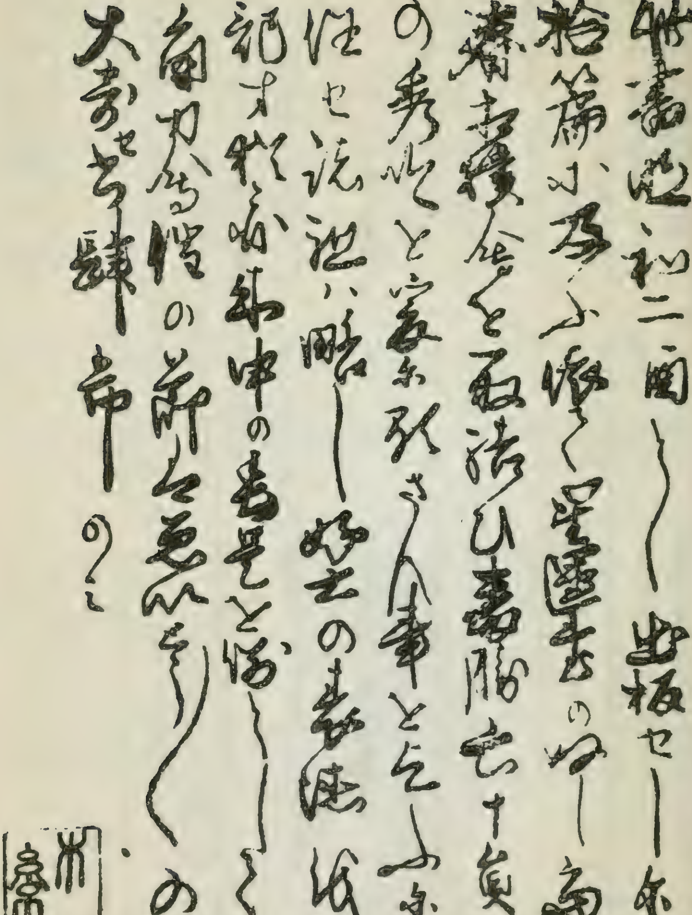
夕すゞみずしりと俵おとす音
ゆさん船ごぜと座頭で安くみえ
おぢいが目みろと小刀やつと取り
よい草を干したとしやれる暑氣見舞
四尺程あるふんどしをみせに來る
あぢな事養子に嫁をあてがはず
あいそうに持佛をみせる母のきやく
せいろうのとなり遣手のわめく聲
はだかの子おもしろがつてにげる也
すべて女といふものとそこらを見
露見する迄は夫と無二なやつ
あいつらはどうしたといふ野がけ道
吸物を出すでやね舟そのけぶさ
中の町餘日も無いに美しさ
ばひやつて下女とおざうが水をのみ
うらのきやく舟宿の前行過ぎる
本性はさくらの下でたがふ也
内川へはひつて嫁はちつと彈き
禿迄のみなんせんと口を出し
どつとせぬ嫁けふもほしけふもほし

撿校と人はともいへ取結び
すまぬ事となりではもち餅をつき
是も遺言とたんすへ手をかける
ふがひないみやすどころの舎人ども
後家のとも氣にはたらきの無い男
葡萄棚あれいたちがと目のうとさ
勸學屋腕をまくつて錢をつき
大三十日かゞみ見て居てしかられる
笑ふたび嫁手の甲を口へあて
みんな顔かくすが嫁の大笑ひ
むろ町を通れば不二は付いて來る
いちどきにきせるをはたく供廻り
聲色で歸るは宵の寒念佛
わら灰をつッかけちや吸ふ村のよめ
赤穂への早あいにくとふり通し
戸を明けておや〳〵〳〵と雪の朝
見物と役者とならぶ大あたり
三味せんが止むと八文もつてかけ
御新造ねぶたざましに飯をたき
三つまたは金で武勇をふるふ所

おそろしい爪だと下女をおつぱなし
それだから二百目つくと仲人いひ
四つ手めがよんだやつさと素見物
御不承と遣手さかづき又はじめ
銀ぎせる立てかけて置く三つぶとん
屋形船すがたをかへて一かせぎ
萬歳はあの生酔に三度逢ひ
師直は間男はれてするつもり
六十里ならしにあるく遣唐使
取逃げをしたやろうめと明智いひ
火入の火三ばいかへる長ばなし
時も時たゞの座頭も目立つなり

げつぷうで門を出るのは百旦那
ぜん僧に四つ手したゝかしかられる
願ひある身だと勾當しはいなり
田樂でしやれる向うはかあんかん
うつくしい顔で車に口ごたへ
北國のゆう里にむす子とらはれる
小びたいの有るでばん頭高く見え
嫁の禮じよさいの無いがついて出る
ぼたもちをすり子木でつく恥かしさ
初がつを十けんよんで一本うれ
夢見でもよかつたか乳母ぬりたてる
色文をさとつて逃げるおもしろさ

風評 柳多留九篇 終



誹風 柳多留十篇

此書、明和二酉どし出板せしに拾篇に及ぶ。依て星運堂のぬし當春相撲會を取結び、番勝六十員の秀吟を爰に顯さん事を乞ふに任せ、諸組は略し好士の表徳を記す。猶亦來申の春是を例として角力會催の節は、ゐいとう／＼の大寄せ書肆希ふのみ。

不二を夢見て番頭に直るなり　青鶯
十度目の盃事がしんの事　浅十
いとなまめける奥さまの御名代　東車
袴着た初心むしやうに手を入れろ　遊子
門松のすつこむ時分嫁の禮　敵吐
十ばかり水をこぢると松に成り　雨曉
あづけるの嬉ひな禮香づぶに成り　鬼青
氣の知れた男女房をよぶとやめ　眠狐
九千卷程よんだ時松をとり　如雀
女房の智恵には鍵をかくす也　露蝶
連れて來た下女ばかり嫁しかる也　狐穴
ころすたびしつ聲の無い笑ひやう　秋紅
薺うり鉦をたゝかぬばかりなり　一目
嫁の手へ生醉撥をおッ付ける　泉河
嫁入の時もあばたは荷がおもし　同
十かへりの松だと太皷わるッロ　木綿
市に寄りいよ／＼つみがおもくなり　同
隨分たつぷり出來ますと天蓋屋　泉河
琴の音も止んで格子でわるい咳　木綿
りつぱなるもの花嫁の丸はだか　紅梅
行きなりさんぼう男の雨やどり　芦舟
なじまぬも道理禿が蚊やを釣り　燕子
母の文まづい顔してよんで居る　露蝶
生醉をふみ臺にして花を折り　鳳尾
後家の琴遠慮なさいと支配人　小川
はえぬきと見えてするどい内儀也　芦舟
一度いつたらいゝはなと隅田川　不戰
和漢の書ちんば引き／＼そらんずる　仙郎

門松に大勢立つてをかしがり　金龍
取立ての肴一日（ひと）置きに喰ひ　龜遊
死ぬと直がすると書かきをむごい評　眠狐
色文をひろつて御用百にうり　新紅
功能はうつ症を治す三つぶとん　泉河
金ざいふ拾ふとつゝきおこされる　桔梗
したく金惣身にたつた六つ出來　泉河
端（はし）ぢかな所でのんでる中の町　烏江
本の年いひな〳〵とひざでおし　千鶴
仁王さま二人（ふたり）ならんであつ湯好き　桔梗
大ばすに切つて松魚を安くする　五鳥
おやゆびを鼻へ入れなと土弓いひ　萬里
られ殘り眞赤なやつが五六人　吹雪
ばくだいな振袖の出るかるゐ澤　新紅
下女が來てお新ぽつちが出來やすよ　雨曉
生（せい）門を明けて岡場所ゆだんせず　敵吐
あかぎれの有る内ぜげんうらぬ也　露蝶
二年程番頭をしてよめに行き　花口
まだも有るやうに金入仕廻ふ也　秋紅
餅の有る内はなまける一人者　東里

下手にうろたへると干死ぬ掛り人　芦舟
下女が白狀大ぜいのそこね也　冬始
吉原で黑助根津はかさもりだ　萬里
六彌太は一人者だとかぶじまひ　萬繼
人よくの甚だしきはやりてなり　蟻穴
外科抔にかゝつたも有る松が岡　新紅
品の客酒たけなはにおよんだり　文仲
言葉多くて品川へ四つ手かけ　魚交
見え透いたやうな五だよと手を廣げ　古綿
ばあさまはしやかと青二をあらべる氣　雨譚
まきを出し申候とて小はん時　泉河
物置は身にも皮にもしまぬ戀　雨譚

安永末の春

催主　星運堂
補助　さくら木

髪置は白髪のたねをまきはじめ
ぬかぶくろえりへ廻ると口をまげ
中宿は義理で勘當二日おき
こびついて居ると女房はきげん也
さり狀を書くと入聟おん出され
入りは落ちたかと柏莚土用ぼし
初に來た座頭のじぎの手の長さ
撿校と座頭のじぎに人たかり
鶺供の下女杖のたび子をあいし
お局の去狀にぎりころす也
明店の前で鳥追ひ乳をのませ
まッ白な大合羽屋でゑどられる
容顔をくづして禿引ッつめり
ちよき舟をあんじるやうに能成り
大門を一合にしてふけわたり
はたちにも足らない種を後家やどし
送膳ゑゝ病人とみなくらひ
年忌かづけがお局の宿さがり
さあのきなさいとお歯黒暖める
九尺店琴をならはせそねまれる

來る程なやつおやたちに用は無し
銀ぎせるけさんに置いてうなる也
戸塚だと思つた晩にとつかまり
何にするのだとやげんを貸して遣り
夜着ふとんいつか親父の耳へ入り
平太夫扨もふきつななのりなり
なんだかと左官論語をめッけ出し
かぐ事もならずさし身をぺろり喰ひ
女房の留守鹽からでのんで居る
あさッぱらいとしや母は質を置き
草双紙お乳母つぶさに申上げ
あさつてはあのあたりから月が出る
手を組んでそらせる娘出來る也
一にきり有るを舟宿ことづかり
すばしりを棧敷で見たがはじめ也
すがた見へ近く寄つては顔がなし
安かつを得心づくで悩む也
尼寺は男の意地をつぶす所
眞桑瓜一つよち／＼持つて來る
夕すゞになつて出ようとなまけ者

親分のりづめよしかをぬけにいひ
角兵衛獅子ねれけてくると仕まひ也
せめられて下女留守のことありッたけ
きつい野暮どろぼうらしく引張られ
藪醫そのくせにうるさく多言也
花の雨下女色あげをむごいこと
かな釘とみゝずと下女はとりかはし
下女が文書くもんだなとのぞかれる
けころ見世地犬のやうな狆を抱き
茄子賣二つと三つゞゝつかみ
山門へゑゝ年をしてあがる也
美しい神子打わらのやうになり
一歩でもあるうち息子とかまらず
二三ヶ所へめぐつたとは見ゑぬ嫁
道成寺花見にへちをまくらせる
いッくらも見せて呉服店ほしがらせ
眞白なやみを四まいでかけさせる
圍はれへ何時どう來るかつッぱらみ
座敷牢九月しまとは母の慈悲
顔をする間前がみひんむすび

十四日ゆだんをすると山へぬけ
縫つてやるやつさと娘どうづかれ
手の筋を格子の外へ出してみせ
源三位大きな智恵をつけ申し
花の山いまだ御ざうが氣はしれず
かた衣で見なさつたのと新枕
三次の巻頭へ行く氣さんじさ
是になる氣遣ひの無い長局
旅のるす何をしようとまゝな事
すて扶持はぢゞむさくないおびくにん
十三日装束過ぎてしかられる
おどけずときり／＼文を返しなよ
門すゞみしつぺたたゝき／＼居る
もの中をつきや見かねてはだを入れ
道ばたにすわつて連れをにぢて居る
盤上は坪におされる無盡茶屋
平六が向ふうらかと留守居聞き
枝豆でつッぱつて來る重のふた
又おれをうりてんげりと謡の師
油揚にこぶは村での大法事

仕事師の持つ辨當はわきの下
中納言名ある女性を二人しめ
五寸程明けて質屋はまねかれる
にげた鳥兩手をひろげおッかける
おそろしい男どうしで痔持也
山姥はくひつく程の鬼でなし
笑ひなさらばいやだよと袖をとり
嫁の禮模様程なる門の松
川ばたにつッ立ちあがる旅むかひ
をどり子を五六人前あつらへる
ごぜの膝下女思慮もなくつぎこぼし
はなをよくかみなさいよと覗いひ
ほめられてくれた名をいふ雛の主
笄をよく見やと母おや三針ぬひ
はら帯をせずに産んでは江戸へ出し
折釘へ下駄をかけるとかつぎあげ
ちう三をかつたが鼻へぶらさがり
むごい事ごぜ容貌はすぐれたり
汁粉もち出て來る顔の寒むさうさ
けいせいにざつと柳をあひしらひ

生酔をかついで通るにわか雨
虱取るそばで裸でまりをつき
春すゑやせうと藪入舌を出し
うよひよを置き椎の木の下で死に
氣にするも道理十九で袖をふり
土用干となりのよめはうくつしき
はなれ馬椎の木へ來てつき當り
つかまつた時分は娘から財布
朝がへり下女が事までがなり出し
くらやみへ衣通姫は穴をあけ
高倉は落馬しさうな御名なり
四つ手駕牛の小百もかけぬける
衣紋坂四つ手勢さかん也
槍はさみ箱で生酔はいてゐる
母おやを枕の下からだます也
武士に成る迄おくるあさぼらけ
帳前にゆびをなめ／＼亭主居る
どさ聲で事のとゝのはざるに行き
鴨れうるそばで懸取り棒を引き
後の妻子に丸綿をいやがられ

あの元氣よう戸塚迄行かうぜい
嫁さまはすばやい方とつぼねいひ
ふり袖をおさへて鐘を直す也
とまつたがあたら櫻のとがに成り
やきざかなうちわを讀んで呵られる
いと手とばかり屋根舟さわぐなり
藪入は春の殘りをくどかれる
あろう事前度遣つたあまをかい
明店のたえぬはかたい大屋なり
鳥居ぎはへゝんといつて下女殘り
氣がもめんすとよりかゝるから簞笥
ちく生を相手に馬子のいきどほり
由井が濟すでに一宗たえる所
むまいものだらけと茶漬喰つて居る
たゞさへもけんな槙にかねをつけ
事ぶれを遣手したゝかかッけなし
母の乳をなぐさみにのむ果報者
下手のまり猫にぎやかな養と覗き
間男はしまいしと後家大丈夫
正宗で甚だもめるかたみわけ

しよせんなく櫻へ昇りおりられず
まゝならばまゝさとおやがぐち也
生醉を大戸上げろとしよつて居る
つゞらをばしよはせて出るが下女はいや
のまぬやつしごくあまいとしひられる
出來たやつ遠くへのいてちやんと居ろ
首一つ取次いでやるきりおとし
花に脊をむけてだんごを喰つて居る
伴頭がなめると御用ふれあるき
そろ／＼と花嫁惡所よばりする
しなのから來たとつん出す病み上り
石拿へたつに二口きりかへる
町人で質屋を出るはひどい事
色男でも坊主だけよわみなり
中納言ひよどり越をふだん見る
つるむ猫枕草紙でおつちらし
人間の顔でからだはこたつ也
だん食のかはり鼠に成つてくひ
手にじゆずをからんで和尚一つ請け
若殿は馬の骨から御誕生

取りたての鮑は四ツを聞いて喰ひ
しんのやみ早太をるかと物すごし
大あせで歸るは安いすゞみなり
業平は金を遣つたどらでなし
つた屋だと四つ手から母手を引かれ
かの後家がさまたげますと仲人いひ
花嫁を二かみそりでらりにする
たッた一度に百矢ふらつくしさ
親の氣になれとは無理なしかりやう
しんかんとねたばを合はす枕がや
午祭となりもおなじ拍子なり
料理人切合ふやうな音をさせ
ふんごみのまゝで傾城しばられる
目印は殿がひたひにつけて置き
時平こそえんぎのわるい臣下也
大言は吐きは吐いたが例會ぎり
羽織でももうしれやすと女房いひ
松かさりくづす時にはよい男
すり子木にすがつて禿引いて來る
こなた迄ぐるだと母はしかられる

草市はみなまぼろしの物ばかり
いひわけをきかぬはやみと月夜也
旅むかひまじめな顔で扱待つた
降りあげくとんだ所に駿河町
偽かきと一箱明けたはなしする
なまきずの一日たえぬすゝき賣
戻りにはあぶみふんばりおざう乘る
念佛をひよつとむすめがをかしがり
二道をかけてと下女はいきどほり
ためたがるつかひたがるで不斷もめ
御講へも餘程引けると木戸でいひ
はご板で下女いやつたく追つかける
妾が反吐與中むねをわるくする
久兵衛を七日見かける雜司ヶ谷
それ／＼の道具平ではふせにくい
庄屋からせんじてのめと一歩かし
そばの荷へ鉦とたいこを置いてくひ
あまッ子を未練の無いがかひに來る
常袴もゝひきほどは錢がなし
囲はれへ猨のあるのが來てぬすみ

大あくび棚の御神酒を見付出し
具足びつのは髭の出た男なり
次の間ははすに切りこむ料理人
一年と渡しかけ合ふ十五日
えゝ鳥がとれて二階がどつしどし
ひぢりめんひらり／＼と風にくわし
そばかすの有るでは三まい五兩なり
間男の不運夜盜の方へおち
本所に年始のこぶが一つ出來
よし町へ世俗にうとい客が行き
けいせいは一日白き苫をもとめ
卜筮が得手で居續けいそがしさ
いひぬけをみんな女房に覺えられ
ぢだんだをふんでは見たが貰はれる
もてぬ夜は何をいつてもへゝん也
でんがくをちよび／＼はこぶ女船
外聞のよい奉公と聟おもひ
狂言があたり黑鴨抔をおき
商人の道を梅干からおぼえ
ふり袖はまかり違ふと出す氣也

例年のごとく田にしと濁酒也
上下に矢立をさして山田者
雨だれをかなしい聲でくゞる也
成程といつて又見る遠めがね
たんとつく譯は花よめ二人也
やくとのやけつく出やすと內儀言ひ
いつの間にえゝと二つ三つあやし
通町ずつずと行くと禁裏樣
金の有る所をぬきみの下でいひ
世を捨てた人のじまんは大三十日
御姿の聲うつばりの塵がおち
三みせんを嫁うつかりと膝へ取り
いたい事無いと外科どの針を出し
頼政は素人好きのするむほん
柄へ手をかけて生酔道をきゝ
お齒黑のそばで返事をあけてみせ
みそをつくやうに釣舟かしをつき
繪の具代などと毛延壽へつかひ
よい筆で蚓を書いてしかられる
椎の木をとびこすやうに猪牙は行き

をかしいと嫁手の甲をかじる也
細見を四書もんぜんの間によみ
淺黄むくこたつへかけてひよんな物
大あばた去るにもほねが折れる也
柳から乘るとはどうかなびくやう
有るかひはござりやせんと女房やき
薪の節醉狂者が割つてくれ
ふきがらは櫻の中でいぶり出し
歌がるた子の刻迄がかぎりなり
時鳥あくる日からはへしになき
間男はしめをはづすとよりつかず
初鰹かついだまゝで見せて居る
しめし篭のけて太皷をあぶる也
つれの文あけて見たくてならぬもの
けいせいの棧敷に一人目にかゝり
五文ではとびのいて居る廿軒
手ばなしでつけざしを呑むなれたもの
三會めもてゝうれしく無い夜なり
乳もらひの苧をかけて來るいたましさ
女房の苦は花が咲き月がさし

向ふ棧敷で見た事はひしかくし
そも〳〵どらのらんしやうは花見也
海よりも田のもの月がひんがよし
奉公をした小袖だとついで居る
馬五六疋におめかけむかふなり
はつとしたものまをとこと芝居也
下手の鞠皮たびなどはのきと見え
鼠くそ毛受に二つ惜しいこと
品川はきぬ〳〵山の帯をする
日をえつて茶をのみに行く恥かしさ
ぞくなものばかり妾はねだるなり
宿近く草履をはいた人に逢ひ
色男でもうんつくぢやいけぬ也
入りむこは是でおわかれ申します
たまさかにけぶりを立てる一人者
女でこそあれと聟はつッこまれ
他に事をよせても女房さとる也
品川へ猪牙はけつきの勇でのり
のまぬやつ一日拜む花の山
明日芝居へさとひたひを剃つて居る

はなれ馬施主のやしきへ追つて行き
おもいれを寐たと櫻をふつぷるひ
渡し舟とかく生醉立ちたがり
勞咳はしのびがへしの内でやみ
四ツぐつと過ぎに聲山たてゝ行き
何か出すさうでお內儀ふいと立ち
夜着一つやけをおこして女房着る
朝がへりすゝきのほにもおぢるなり
初鰹つき屋呼びつぐばかりなり
くりびきのやうに屋根舟膳を出し
ちよきに醉ふとは天命につきたやつ
てうしをば旦那でかへてしかられる
さかづきで運の定まる大一座
たうがらしつきやの貫ふすばらしさ
初會と見えて寄りかゝるさが丸太
夕めしはかゝァいやだと百旦那
下女色に布子をうけてくれといふ
うんの無い妾二度迄ころぶ也
夜着きると妾はちゑが分に出る
大和茶に下座を切つてゝ目立つ也

ぬりたつて殿のひたひをもんで居る
鎌倉に鰹もくはず三とせ居る
石塔を見るゆゑかたい旅おくり
ふき降りに白衣黒衣のにぎやかさ
しづかさは晝も鼠が二つ三つ
呉服店二つにきつて人通り
夕めしをくふを見て居る雨宿り
ちんこ切尻から出していきを入れ
痳ざあなるまいと苦にする暑い事
一疋の螢でくづす門すゞみ
降出すとくそだと茶びんまだるがり
一人者二かいをかしてなりこまれ
雪の晩鰒だんべいと藪醫起き
鵜のつらは凡慮の外な所へ出し
木ッ端もすごとく芝居の蠟とぼり
格子からばつちらがつて子をかりる
二度目には娘で通るわたし舟
晝見世で馬をかぞへるひまな事
かこひ者あたりとなりへ煮ると遣り
きぶつにて飢をたすかる長局

御不勝手おくさまびわも琴もなり
あつい事嫁襟元をくつろがせ
ものどりと見えせんものとち狂ひ
才藏が立つとやうぎをくづすなり
御妾の櫛箱しゆ〴〵な繪の具あり
鏡見てそめものをするはづかしさ
かんざしをしこなしぶりにかりる也
妾におりやすとむすめの門涼み
いつもお若いとは後家へあてこすり
つばなうり生醉に二把たゞとられ
しのばずへ二てう辻駕きばる也
歌がるた好いた男を入れたがり
黒猫が居ぬと鼠にひかれさう
俄雨歸つて聞けば降りませぬ
汐風にもまれぬ先に小松かれ
むらさきの蕬人の氣をうばふなり
何申しやせうと後家の供はいひ
あくる朝羽織のかへるよいきげん
雪中にさけぶをきけば四つ手也
かたみわけ嫁人がらを仕廻ふ也

いふまじき口上女房連れへいひ
もゝ引の泊りもとるでげびるなり
此花を折るなだらうと石碑見る
えゝ男だのに間男氣がつかず
おや分の内儀不動に待つて居る
蚊を焼いたばかりで亭主すまぬ也
かねの禮どりや見ようぞといやがらせ
御延引古歌をならべて御たのしみ
松の内もゝ立で來るぼていふり
枇杷一つ喰つたがうらのしるし也
なびけやいぐらゐは高尾しりんせん
いらひどい玉づさの來る大三十日
紅葉見をいな口ぶりとおやぢいひ
舟宿の女房たゝせて置いて縫ひ
狐つき大屋しかつて耻をかき
お十九でやれ〳〵といふ天蓋屋
二三人來るととう〳〵たらりとう
才藏はすわつては口不調法
くひつみはびやく衣の人が來てあらし
御褒美に下さりながら手をとらせ

あいさうが過ぎて桟敷をせばめられ
左右の官ほどにあんどん脇にゐる
そろ／＼と御所が木曾どのぶまに成り
旅がへり女房につきやかましさ
生酔を捨てたもつみの一つなり
たいくつの中を流るゝ不二の雪
みつだんへはなつたらしが茶をはこび
持参金からき命をのがれたり
あつく禮いはるゝ戀は出來ぬ也
おつかない顔でおやぢは土手を行き
ちと内のやうだと懸けるしゆろ箒
年禮の一儀がすむと金のこと
知り切つて居るとおふくろ理を聞かず
むらさきをしめ／＼生姜入りますぞ
かみなりはおもねる公家の上へ落ち
傘はさしかゝつてのむしんなり
ひんまくれ抔と伴頭ころをかけ
ほとゝぎす下女は小袖でくるしさう
ぬかみその手であだ人を追つかける
をがんだら直（ぢき）に歸れと錢をやり

御新造きせるでちよいと一つつき
赤じやれた黒ちりめんがおびき出し
はな紙へじゆずをいつけて大小言
仕立屋のでつち茶丸の棒をしよひ
はぎしりはどのがきめだと遣手いひ
大道へ二十五さいをはいてゐる
こりやどこへ御出と杖をとかまへる
目がさめて見ればまだ書く長い文
菖蒲太刀乳母どつこいと受止める
山ねこをだまり／＼とかひに行き
浴衣にて拭くを師直よつくみる
間も無いに目黒へ行くはいらぬもの
新造は二かいを廻り／＼寐る
元結と油をもつてとなりの子
おらがのも遊びは下手と御ざういひ
あごの無い寄合不参だらけなり
笈摺はみかんにはじめ柿でぬぎ
正直にいふとをどり子大どしま
品川の月にはくらい道を行き
物さしで針妙かたを二つ三つ

歌がるた仲間へ息子まぎれこみ
子供客喰ふ程喰つておさらばえ
つき出しは高てうちんで來たの也
たいこもちお針のそばにまツぱだか
芝居でも見せうと息子大じかけ
伯父貴から鳥渡（ちよつと）來やれはいやなきみ
ふき味噌を子になめさせて叱られる
帶刀で紙くずをける見ぐるしさ
高慢は雨のたもとに禿なり
つかねど此かね關東へはひどき
鹽からいにしめを上げて乳母だまし
六づきで國府を買ふは行でなし
花よめはかいくも尻はかゝぬなり
勞咳をやむがと娘くどかれる
はな紙でやればそれ程をしくない
柳行李ぐらゐは松へいひあげず
異見だて置いてくれろと亭主いひ
後難をさけんが為にござをぶち
下駄を見せねえときらずを買ひに來る
佐野の馬はなれ山でも二度倒れ

ほえさうな新造あれも一分世
木綿屋でおくのは惜しい男なり
謡をば無言で通す柳原
嫁の着かへるをのぞくとちゞむなり
不斷着で番頭えらい事をする
三河島捨子貰ふにヤましといひ
錢箱へがら／＼と五十入れ
おはぐろを酢か酒鹽のやうに買ひ
さかやきでこするは二文四文なり
けさ見れば四五ヶ所鵜に引ッかゝれ
味噌をつくやうにあつまる與道者
女郎衆にかすなと子もりことはられ
えびす講四五日ほねをしやぶらせる
座敷持琴はあゝして置くばかり
心中の座敷一ばん遣手ねる
盗人にあつて三井のめしを喰ひ
棒組よお願ひ申せなぐるぞよ
かゞみとぎ三み合せてかき廻し
ふぐ汁の表をばかな寒念佛
座敷持親和とやらがかきんした

あきはてる迄は毎日通ります
琴箱をかついだ袖へとつかまり
わつぷしなさいと一重次へ出す
すれば碁ぢや無いと親父もう悟り
つみ艸を遣手は舟へ呼び集め
内へねて木戸ぎはに居るひとり者
百灸を落して高が四文なり
雪の朝女房はいつをもつて打つ
負けやれなどと御新造芋をかひ
女房のまた迄あける猿轡
惣花におもき枕を遣手あげ
枕緒を高らかに讀み叱られる
お廻りを氣をつけやれと角をなり
日藏に面目もない延喜帝
奥さまを菖蒲刀で切りなびけ
女房のちゑは花見に子を付ける
竹でさへぬいたが始終越度也
出あるくな札が付いてはならぬぞよ
美は美だが王昭君はけんな方
萬人を醉はせてかへすえびす講

琴なりにげぢ／＼の這ふらんがしさ
矢を二本箱入にして申しいれ
あんどんへ遠く四五人うれのこり
けいせいをやけで請出すむごい事
かけ取の來ぬが精靈への馳走
まだうごく尾へ奉書の紙をかけ
詫言へおやぢ烟管を出してみせ
臺所はたゝく表はひつこぬく
そろばんをわきへはさんで隙な事
つま立ッてあるく官女を御寵愛
國家老歸るとてん／＼なり
御緣日だけに景清用捨する
眞黒な口でせはしい子ではある
是はさと箕からなげると嫁はにげ
母らしい人の尋ねるあら世帶
地女をわらぐつと見る一さかり
阿房宮をとこの聲は始皇なり
物干へひよいとあがつてごぜこまり
棺へ取ッついて泣くのは女房なり
ねせつけて他人に貰ふむごい事

月宮殿へ二度のぼろいたい事
引きずつて來るをにこ〳〵渡し守
おつと來たなどと三味線舟へ取り
よい春だのとは大きい中の町
御持佛はおふくろがかり十三日
草餅をやいて宿へもしんぜろよ
いよおばゞさまと若後家いやがらせ
鬼の目になみだをながす曾我の貧
つよい暑氣内儀たらひで縫うて居る
舟廻しのも隔づけも土手へ出る
大當り一坪ほどで所作をする
ふり袖をちはやの外へ出して置き
一つ身を前からきせる大さわぎ
どうしたか山歸り已後人のよさ
すがゞきの中でゐねむるなれたもの
糸を卷くやうに花嫁もちを喰ひ
やぶれたるおんばうを着て母に逢ひ
いくらするものか羽二重ばかり着る
ふんごみで取りまいて來る狐つき
山の客ぐんだりやしやの方へ行き
毛せんのとなりの棧敷みかん呼び
とりかぢをしなとをどり子聲を懸け
ぶつ攫ひませうとたいこ土手でいひ
見世先で袖かき合せ結つて居る
木に餅のなるやうにいふ源三位
草履取無言でくるひ〳〵行く
切ッかぶの上へ吉野の紫宸殿
慾心さあんなものをと出合茶や
出合茶屋ねぎれば鼻であひしらひ
むきみ賣やがて買ふほど季にかゝり
初鰹片身となりへなすり付け
花にめで月にうかれておん出され
泣く聲がにたとは鵺で無いとみえ
樊於期が首はおさきにつかはれる
親椀へもるぼたもちの鹽からさ
御拂ひがずつか〳〵とゞこほり
通りもの猫のしまいをつれて來る
粋ぶつて晝過ぎに行く堺町
關寺の所化衆そんならかけて居ろ
倒れもののおとゝひ剃つた醫者にかけ
物申に下女まげぼうへ卷付ける
やかれるでくさ〳〵すると圍いひ
引事で田村鬼神をはぢしめる
辻番は二百が藥にうづめられ
雞がもうたふやつさと三を下げ
奉加帳御用内ぶところへいれ
四つ手駕東海道をさしてかけ
不二の夢はたして白き御えり元
船をうかべて一日は御しのぎ
屋根船で行くのはどうか風情也
帽子針さして巨燵に腰をかけ
人來る時んばつゐと脇へのき
やつさいとかつら男をのせて行き
土手のまん中で去狀くれろなり
むらさきで都をすてる本望さ
よめの禮おとすと地主ぶるといひ
そだのかんかよとばゞアは腹をなで
眞の闇わんといはせて四つ手駈け
薺うり此上ねぎるところなし
禁酒してむす子おやぢをはむく也

内儀同士けんくわ根の有る事と見え
送り膳焼きもの餘程落ちて見え
度々の留守女房逆意を思立ち
口をすくしたと忠綱後にいひ
弟子とふづくつたは年が不相應
齋日の藪入飛脚ほどあるき
何も無いさうで干物を焼く匂(にほひ)
大和茶で至極ひそかにどらを打ち
里の母かげ辨慶を遣ふなり
かんざしの跡を小ゆびでかき廻し
御家中は坂のやうなる肩にのり
御年貢はこはい物だと禿いひ
おそろしきものの喰ひたき雪の空
三の下(しも)ござふけいきな面(つら)をする
川留に無間の鐘へさそはれる
ちつぽけなふとんで四つ手一荷出來
駕の衆やこつから聲をかけずによ
米主と銘の有るのをやつこさし
持參金見合ひに出るは何事ぞ
五丁町おやぢはしよぞん有つて行き

能の笛あごでかき込むやうに吹き
かけとりと云合ひながら毛をむしり
足に毛が無いと息子は女なり
はふつては扇子をひろふ野懸道
吠えるぞと撿校藏をみせに遣り
提灯が消えるとかッさかさあるき
四つ手駕すてがねの內直がきまり
そうやくをせねば見られぬかねの口
呉服店きたない箱へ金を入れ
見るが目の毒とはけちな素見物(すけんぶつ)
どなただかお出でとえだる置いて行く
大部屋の石臺ものはたうがらし
かた身よりおなかのすわる掛り人
あんどんはふきがらだらけよみの朝
本性に成ると辻番いけんする
せちからいやつ藪醫者にかけてみる
窮屈にすわつておめへさまといひ
心中を立てずにのると玉のふね
鰹ぶし喰ひにげにするかりた猫
今川も酒の次にはつぼのこと

ぬひながら口三みせんで姉はつけ
俵屋をたてつけてぼろさらひきせ
いけて置くやつでは無いと五兩とり
さがりとりぺんをふるつて先づ歸る
ぼん蓙(ござ)へ櫻ちりしく御てん山
引きずられながら內儀はしつけ取り
張良は作りばッかりしてあるき
松がとれると品川は月の沙汰
素一分は落手せぬ內氣苦勞さ
さらばそこへ行くべいかとぐわつさぐわさ
武藏坊はかまで剃つたまんま也
御つとめは四五二〆さと根津のぎう
いきなりにぼん蓙(ござ)へねるぶつたくり
ひさしぶり羊を喰ふと鄭子龍
佛眼でちやんとして居る下女の酌
芋賣の餓鬼さと遣手手にあまし
美しい顏をくづして子をあいし
ねこのなはとくと錫杖ふりたてる
御駕脇またを拜んでかけぬける
針うりが死んで一日見世をひき

長つぼねきのふの口をもう二本
十二文ほどのきげんでけごろを出
賣りだめがなくば黄精でもおきな
納つてから竹光をさしはじめ
佛法の事だと四つ手あけて來る
下女がせなくなと馬にかきのせる
わきよれに一貝すくふ馬糞かき
新酒屋うらから女房度々逃げる
こん龍の御衣を御耳へあて給ふ
おく家老櫻の中にいためつけ
日本のぐわいぶんに成る塚一つ
百人のかつゐぬやうによみはじめ
先づ息子さまさと後家の下女はいひ
にくちうに大路をわたす去荷物
金屛風どこにあらうといふ道具
じんじやうに御出なんしと皆はだし
上下をぬぐと無常は戀になり
たぬき汁煮ながら腕をさする也
名のる内馬はしばらくいきをつき
よし町でふかく合せた前を明け

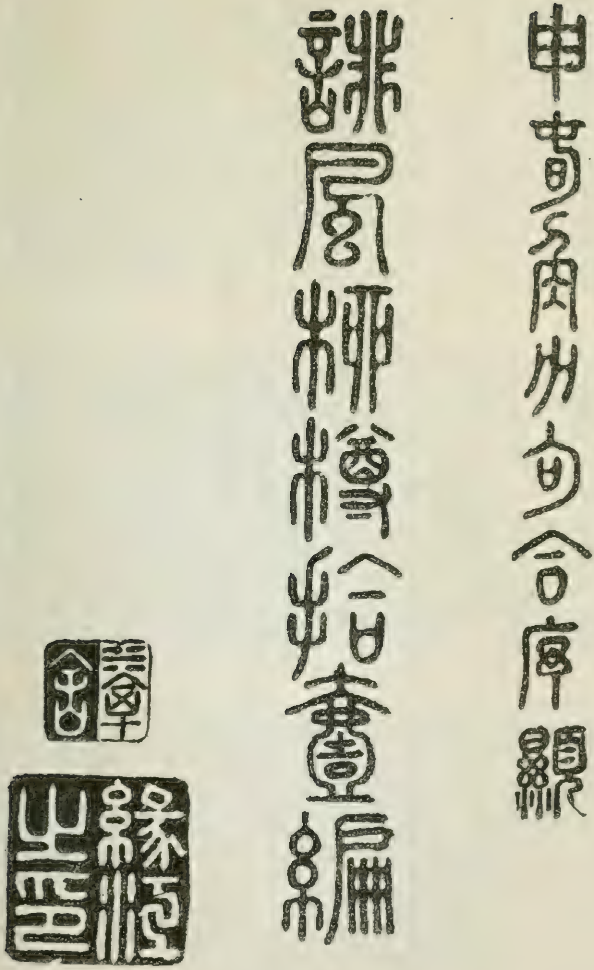
はたばりの無い氣と灸をするゐて遣り
長局うまいさかりをむだ仕事
おく家老そり橋をはふむごい事
高いよと初手におどかす初鰹
むらさきはかぞへる程のかたわ也
惣領はだゞで半分剃りのこし
月も日もけふに當つてうらに行き
口をしさ似た顏も見ず吹き歩行き
すいめんの内にあらたな年に成り
女房に舌はありやとたいこきゝ
文一本でも一艘と付けるなり
御ひろひに車ひれつな事をいひ
女房に一日つらでおどされる
舟とふね寄つて和漢のつめひらき
座敷持何か書籍も一部みえ
地女の御きらひなのにもてあまし
八朔をゆるして天をしよはせたり
たいがいな風邪はぬける三つぶとん
左大臣凡慮のおよぶ惡でなし
容顏は五十四郡に無いとみえ

やう〳〵で屁のやうな茶を禿くれ
後家あまりきれいな口をきゝ過し
取舵だべらぼうめがと猪牙ゆれる
月の座があいてゐんすと文が來る
容體を十分きくとひさを立て
二つ三つ灸をおとしてさとられる
春宵に野かけの通るにぎやかさ
金びらを切つて羽をのす鶴が岡
ばん頭は杜で肩をもんでゐる
ゐぼし親曾我一件に口をとぢ
餅花が有るかと白木わらはせる
下りとり銚子へ行けとつき出され
不承してくんなはいやなくんな也
歸つても今朝はそなたはいやるなよ
鹿のふんよけて地謡かしこまり
書くとこを見て參つたと地紙うり
柳橋弓やなぐひをかへすなり
內庭へ始皇えの木をうゐさせる
大黒をたんすへぴんとしまはれる
吉原へ甥めが事でけふも行き

ゆるしやと巨燵で咄す御新造
證文につなみのやうな文をいれ
新造にみんなのまれる奇應丸
こゝらでの飾あじろをかき寄せる
うつくしい顔で四匁五分かけ
いら高でおやぶん聲をはり上げる
勘當の内おそろしいよみに成り
竹べらを抜くと切見世ろぢを打ち
俄雨四つ手を交ぜて五挺かり
田舍よめ車長持はなにかけ
四人でふるまひ水をみんなのみ

おはぐろの口は左右へちつとふり
甲斐の田を越後の鎌でかりたがり
夜といふへんに鳥だと笏で書き
扨ぐちなやからだと鰒やめに成り
きよろ〳〵と男はすれど内儀せず
女房とからかつただけ土手をかけ
縮緬はとらまへいゝと禿いひ
初雪や出たがるやつと女房よみ
夜着かけたこたつから出て言ひのべる
かゝさまによく出來やした十五日

誹風 柳多留十篇 終



誹風 柳多留十一篇

中春佐力句合序題

年に二度土をふませる呉服店　櫻木連　大柳
喰つみが熨斗に替ると美しい　杜若連　如舟
俄雨乞食の相をはたすなり　櫻木連　四龍
四五人で夜道を歸る嫁ばなし　若菜連　箔印
唐土に無い夢を見て神酒を上げ　柳水連　石斧
引きはづれはづれて堀の女房也　櫻木連　木綿
よべば蜘行けば風にて手におへず　柳水連　雨譚
龍顏ことにうるはしき初の雛　養老連　婦美
谷中門くゞるはけちな花見連　橘　連　露蝶
歌がるた氣色どらぬともつと取れ　櫻木連　鐵砲
意趣でも有るか何もかもいせしるし　柳水連　雨譚
拾つて喰ふ樣な汗を四つ手かき　櫻木連　四龍
吉凶ともにふり袖を顏へあて　柳水連　雨譚
すでの事柳百本に成るところ　櫻木連　其山
土產をば身ぶりで咄す長局　橘　連　狐穴
遊ぶ日もこはい顏みる年季者　櫻木連　授扇
らん丸はおつちが尻をつめる也　兜　連　舍丸
扇賣かけ取の氣を弱くする　鶴亀連　車印
不二を隔てゝ朋輩を持つて居る　橘　連　澤鱗
花の山やぐらの跡へ塔を立て　櫻木連　山田
中しやうぎ御后の出ぬばかり也　若菜連　烏江
觀音にぶらついて居て目立つ也　養老連　都
あつさりとしたは大屋の松飾　初音連　喜朝
品川のほたけ一日なげて居る　橘　連　鯉紅
松葉屋はついくに買ふ櫻艸　養老連　蘆船
春の買ものだと隣からなだめ　高根連　五連
生醉に澤山かけてしかられる　旭　連　露蝶
そつと持出せ海鼠だと十三日　鶴亀連　名古屋
鬼に成つてといふ人は情知り　同　瓢隱
出來ぬ相談を二日路先でする　橘　連　鯉紅
暑い事出張つた松の方を漕ぎ　若菜連　中印
小言いふ内になくなる春の雪　櫻木連　大柳
親類もないか間男施主に立ち　養老連　婦美
夫婦して女郎を買つてはかゞ行き　柳水連　石斧
手を打つてお出でくと子煩悩　同　玉簾
飯たきを鴨に仕立てる松の内　櫻木連　芦舟

人先へちやん／＼と濟む下戸の禮　柳水連　玉簾
お靈にくろまつて居て富を付け　櫻木連　計志
もろ白髪迄團はれのふはたらき　鶴色連　松鶴
蒲仲の役が仕納め新五郎　柳水連　雨譚
留桶で汲むをやつかむ寒い事　若菜連　東里
嫁の禮かしはめん息つれて出る　鶴亀連　松鶴
短命は松椎の木はながらへる　養老連　都
ちんぼうを檜剌股の中で出し　柳水連　石斧
手と足のよッ程長い鏡とぎ　同　同
手水組では無いかなと扇いひ　櫻木連　如雀

一たびゑめば母親へ挟持が來る　柳水連　石斧
芝の戸を出れば四つ手は付いて來る　若竹連　狸仲
紅廊の濯手拭で淺黄しやれ　橘連　狐穴
馬鹿ばかりいつて鼓をたゝく也　養老連　長実
きつとした顔でふんどし嫌ひ也　柳水連　雨譚
下女が色いとし男が五六人　養老連　鼠十

安永五申の孟春

催主　星運堂
補助　薩秀堂

公家ならばどうしなさるとかねを付け
けいせいにうめられて居る惣仕舞
きせるにて屆かぬと婆人をよび
あなどつてげい子合の手なしに彈き
かんざしでかきやと山出し叱られる
隅田川二十二三な子をたづね
赤いかと御さいに顔を見て貰ひ
見る人の無いが紅葉の名所なり

入むこの謡四五人弟子がつき
物申に風をはしらへくゝりつけ
かこつけの仕廻ひが市と息子行き
馬の後足ははねるがしうちなり
是切のこれどりぐつとさし上げる
お局の病氣引きとりての多さ
ちかづきに成つて熊谷首をとり
岡崎をくらやみでひく御上達

四人のなげき氣のちひさな二人
直ぐ針で釣つたは鯛のつくりなり
足ばかり出來てあはれな十五日
ねてからのきゝ耳まくら二寸あげ
百人一首きらせん筋も一人あり
きつ／＼と拂ひは出るが茶もくれず
燒香を揚勝でする女施主
扨なんとなきだすべいとかき立てる

感應寺つきべりが先づ二割立ち
はりひぢをしては辻番とつて喰ひ
ぬけた夜着いますが如くふくらませ
五六番迄せんじろと月行事
おはぐろの邪魔鼻先へちよいとつけ
二歩がものかりたら下女は立ちの儘
十三日番頭白いさいをふり
ゑびす講上戸も下戸もうごけゑず
うけるから見れば六てん女房はり
明店の札所々へ張る十四日
はるまねをいたしましたと手引いひ
飯の時搗屋いしやうを付けて喰ひ
なげられもせうかと初會片苦勞
どらが居たならとまくりを母のませ
解脱物語で當てる村談義
鈴の音がやむと友成たびへたち
山公事も甲斐と駿河はきついはれ
よい娘持つてあらくれ武士に成り
眞ッさきのむれ田樂の字に當り
永い日がすむとあとからお春なが

葉櫻は呑む一式のやから出る
人目をもおもつたは後家初手の事
十五日置くとはつゞみ長じ也
おまへよく下女をとあとのむづかしさ
車引牛てんかぶるつよい暑氣
尻ッぽから先へ書出すとりの繪馬
百人の中で西行そきらなり
のぞかれて顏をつッこむみゝだらひ
牛方は尻へ廻つて叱るなり
覺えんしたとお針のをひつたくり
出立のころからの儀とていしゆいひ
御めんなんしと來て何かそつといひ
燈明の有るせつちんへ度々かくれ
かたい後家男をたてゝやらぬ也
きのじやの松に始皇のやうなつら
聟を持つて生酔に成る大三十日
狼に衣てかけの御院號
十三日おれをもつけとねだられる
木戸ぎはにはじき仕廻ふを四つ手待ち
玉川も高みにあるはすばらしい

二つ三つ上(うへ)なのが出ておびき出し
いけんきく息子のむねに女あり
むごいやつ二文四文で二分ゆすり
よく知つて來たなと坪をおッぷせる
をんな客膳のあひだに木が出る
ぎんなんが落ちると楊枝置いて立ち
おやぶんはこしをぐわら〳〵御門出る
淺黄裏やはらでぎうをきづく也
錫杖で御玄關へ來るおそろしさ
喰ひつみを三十日に喰つてしかられる
田樂を喰ふ内まゆ毛かぞへられ
あらためにあふとはかたい紅葉也
雨舍り内儀のはらへゆびをさし
上下で供の手を引くとんだ事
ほれて居るだけが女房の弱み也
歌がるた嫁こまや程つんで置き
あいさうにいつたを下女はほんにする
御不勝手五色をもれた舅入り
蔦を引きぬいてさくらを植ゑるなり
ふり出すと屋形でにくい口をきゝ

ひよんな事嫁しやうかんで坊主也
もてた事四つ手とはなすはしたなさ
銀ぎせる松川をのむつらい事
けいせいを夜ぶかにおこす見苦しさ
おとなしい娘をとこを度々つぶし
なんぼぢやときけば鰹の直は出來ず
もと船で大のをとこの針仕事
まなばしをうしろへ下げてのぞく也
かん馬東西にはせたる御本ばら
明日ありと思ふ心ですゝはらひ
ごふく店所々へつるして手をふかせ
何かきくべしに御ざうを奥へよび
品川へしゝとおほかみ毎夜出る
痛はしや息子銚子の帥に成り
暑いこと隣りの寶かぞへたり
折釘へかけるがいなや早い事
四割でも坪はこはいと女房いひ
外によきはかりごとなく又紅葉
花よりも柳のわびはもつれたり
居つゞけに毎朝鼻をつまゝせる

飛び〳〵に鐵漿をもらつて憎まれる
六郷にとゞまつて居るはなれ馬
ちゞめると四くだり程の初手の文
お貸しなさると怨みだと親父いひ
べら坊で居どころの無い二十けん
もとゞりを直して孔子たのみましよ
またぐらへ鼓をあてゝふざけ出し
まづい事たばねた文をぬいて出し
素讀指南の居た跡へにうりみせ
琴棋書畫ならべだ斗りしりんせぬ
朝がへりだん〳〵内へちかくなり
あきの守時分はふつこほどの事
たれながらだあ〳〵といふ下女がせな
鵺を射た手ぎはに宮はふわとのり
かけて來たほどに娘の用はなし
かんばんを見るなと味噌を買ひにやり
六夜きやくあしたは山のしほれ草
五十七人は赤坂さしてにげ
どこのかみさんだとなぶるかねの禮
とまり客柏もちでもよすぎやす

あんだけでほらをふくはとのらでいひ
あつがみをへがすやうなはけびやう也
へッついを直すとぢきに預けられ
月見前ごふをまねきに息子行き
小べんにおきて女房は碁をしかり
二十けんとち狂ふのが一だんな
硯ぶた度々引きよせるのまぬやつ
もり久のかくにはいかぬ黄八丈
名代の部屋へくやみが二三人
御地頭と公事とは古事を知らぬ奴
大根は後におろしたものと見え
よし原さなどと母にはつよく出る
蟲干を馬上でするは法師武者
あの衆へ酒でもと取る帽子針
けふこそはほんの紅葉と母へいひ
來がかりに頓死のくやみいつて行き
ゐゝ年でしほの目をするにくらしさ
雨舍り子の行けといふ氣のどくさ
座敷牢藥をのめにゆだんせず
子の痲びゑ翌日夫婦げんくわ也

百雨はぶらついて居てとかまらず
七くさに遣手も長い爪をとり
わつ〳〵と泣いてかたみを持つて行き
なんにしろ搗屋が喰つたあとの事
とむらひに息子おこはにかけられる
月夜からとう〳〵やみへいひのばし
歸朝して一のはなしは蜘の事
御めかけのおのれをみるは作るうち
柳ばし出て十分にろをつかひ
文覺があるきをすると伊藤いひ
女房は淨瑠璃本をほんにする
雪隱の道で吉原めしをたき
深川は蚊屋をまくるとすぐに船
ねい〳〵と四五人歸る正洞寺
さかひ町ずか〳〵通る角力好き
年明けが一人あはゝが五六人
下戸の禮炭けしつぼをぶちまける
恐入りましたと亭主ひよぐらかし
うかゞひに下女めしびつをひつかゝへ
入聟の無念せい人よばりされ

今のかゝさまはにくいと禿いひ
勞咳のむすめ行年十九なり
暑氣見廻ひ脊中をつまみあふがれる
萬歲は刀を二本さして來る
足音に銚子をかくすけちな酒
舌戰がかゝじ三くだり書いて居る
あのかゝア怖いやつだは懲りたやつ
我内へ先(まづ)こしかける旅がへり
ほめられる所で切れる三の絲
謠をば息子すてゝんげりにする
四つ手駕淋しくかける定直段
べらぼうな夫を持つて御仕合せ
いやアお出でだと甕子を座にしやうじ
うめられぬかはり油の中で死に
おまへもかわたしも九さと松が岡
古いやつうしろから來て目をふさぎ
としやうのさいにと下女はひつぱたき
あいちつと岡場所とはとはりこまれ
花なら花さあそびならあそびとさ
にくい事嫁聲あつてかたちなし

女房の先へばかアなをとこ行く
御子孫もはんじやうあれ切りの謠
花のくれ身について皆かうまゐれ
御内儀と後家ときかれた事でなし
まッ黑な楊枝を捨てゝたゝきつけ
うなぎやに圍はれの下女けふも居る
二箇村をぬけがらにして公事をする
うれしさはうれしいが下女よめぬ也
菓子持つて禿たいこにあかんべい
筍をぽんとぬすむはつみがなし
五六ぷくくらつた上でのみなんし
花嫁の人目にかゝる暑い事
鼻唄で土藏へものを出しに行き
かんのう寺といへばおらが近所にの
入聟をあはれと思へ山さくら
東北を一聲(ひと)うなつてはよろけ
三味せんは外事ころり〳〵也
雨でも雪でも居つゞけさ〳〵
判取りを小刀たづね〳〵よび
あればかり女かと母ちや〳〵を付け

衣さへ行くに入むこむごい事
代脈が來たでいまさか引つこませ
大雛のおもてゞ小雛しやこをうり
ぬしづかッしやいとかけが湯番懸け
一わらひ笑つてめしをかりて行く
三つぶとん親父はかは𠮷様子なり
はらさんざぶら〳〵されるけちな晩
江戸へあいばんかとつばなうりにいひ
袖の梅おもき枕をあげてのみ
花嫁のつひえをいとふにくらしさ
はちつけの板よりちぎる御いたづら
ひなをつかませぬで今朝ッからのだゞ
をどり子がこしをかけろと牛をぶち
はひつくと四五寸のける眞桑瓜
けつしてよ〳〵とて醫者かへり
始皇帝雁をとらまへさうにする
いゝ年でわろぢゑをかう源三位
ゑぼしでは手がらにならぬ向ふ疵
公家にしちや大きな聲と鳥羽でいひ
銀ぎせる中だめにしてはなしかけ

ひるゐなき雑言をきく朝がへり
わづうかな月も品川數に入れ
御者に出るまへ所々でほしがられ
舟宿に左傳四五巻とんだこと
垢すりをかせとりきんでみことのり
ちゑのあるやつ岩たけを取りはじめ
手を引いて行くわと一つうけさせる
碁會所へ灸がすんだと呼びに來る
初がつを御用手を出ししかられる
婚禮を女郎賀したりきよくッたり
晩に入るあたまだ一つやつてくれ
景清はらうさしはせぬをとこなり
乗りさうなやつへは四つ手小聲なり
尻目など遣ひ神樂を奏すなり
あれねぎをたべなんすよと大さうさ
三十日とはめかりのきかぬ神事也
ぐつ〳〵をしてくれをれと留守居いひ
何事かおやぶんかしこまつて居る
馬をしよつたが一生の不人がら
前表はうすきちぎりにぶら下がり

度々ちよく使館の傭におちず雷の事
駿河から遠江までかたくるま
御てんもの來て下んせを忘れかね
めしびつへ顔をつッこむ強い暑氣
四つ手駕月のみやこをさしてかけ
紙王紙女田舎むすめにおつぺされ
十四日きのふは鬪で今日は首
寐たがつてかけとりを待つよい工面
俄雨かけられるだけかけるなり
しばられてゐるが喧嘩に勝つたやつ
木のはしでないのが海のはたを行き
一文はとりさうもないなりで吹き
座敷牢大工を入れてしめて見る
貞女ぶり今ぢや元直にしかねたり
塀ごしに有るに高なわ越えて行き
鴆毒をきらすまいぞと呂后いひ
つげ口をするで不如意な謠の師
ぶつかけがよいと花嫁いひかねる
雨戸くるたびに甘干じやまになり
すりこ木でこづくは安い法事なり

金だゞをいふとまんぢゆうさまだぞよ
無雑作なものは桶屋のぶん廻し
とうとうんのんで燈明錢を取り
月二つ出家けんごにまかりこし
くわつ〳〵といふと帝は出來上り
寳船なみ木の中をよんで行く
江戸もののうまれそこなひ金をため
もう一本ほしさうにさす御用たし
あね女郎こよりを笑ひ〳〵より
一ねいりしても四條のわらひ聲
花の留守五ツ半うち四ツをうち
揚げづめのざしき赤子の聲がする
俄雨不二を目あてにかけつける
毒だてのやうに初會は喰はぬ也
ふきとばしさうな侍一人連れ
馬をしよつたが一生の不人がら
二人とも帶をしやれと大屋いひ
しほたれた伶人の居る神樂堂
膳だてをするが椀屋のまけじたく
綿入れにうつれとくわん木二枚なげ

びろ〳〵としては御さいは勤まらず
ぬしづかッしやいとおどける大一座
にこついて通ればどこへ行きなさる
出合ひするぐるり池水をたゝへつゝ
御離縁のあと鈴虫のなくばかり
不二山はみぢんつもらず一夜也
むつ事の中へ油をつぎに出る
ばかな事生酔琴でをどるなり
座敷牢たゝませて置くいやなきみ
下女を直すにつき縁者二人そり
車にてしきみ淋しく引いて行く
降らないと首を取るよと内儀出る
物飽きと見えて奉書のたばこ入
仲人を三とせうらみるつらい事
聟のどらあの嫁ならばむりならず
みん〳〵とないても月と花は見ず
あしたおッしやれと内儀へ下戸渡し
唐詩選見て居る息子けちなつら
やんや迄弾いてはげびる嫁の琴
傘あやめ持つて御住持申します

ぬけ參り蔦に取りつき登る也
吉原へ二三度いつて氣の高さ
朝がへりそれ親父がとおどされる
品川はころも〳〵のわかれなり
今の駕もう歸るわとすけんいひ
目があると女房にするとごぜをほめ
生娘をくどいてごふをさらすなり
ほゝづきを荷ともに嫁は取よせる
おさへやす櫻田さんと撥でつき
とち狂ふふりで袂へ文をいれ
なまりぶしよと金持の格子から
もち花でごまかさうとはふといやつ
此村の嫁で合羽もつて居る
大三十日手をくんで居るすまぬ事
蚊に食はれたのも怨みの數の内
ころんだを安産の後はなす也
信濃ものにつこりとして喰ひかゝり
御待ちかねだらうと船ではかま取り
いたゞいて茶代をとるはばゞァなり
大津繪のやうに王昭君を書き

びいどろのかんざし村のはで娘
通らしやいあんともせぬとせなアいひ
乳もらひ氣の毒さうに芝居なり
人のすゞみをかはかしにひらだ舟
なびかぬと鎌でおどかす麥の中
貸さぬくせ異見がましい事をいひ
ほりかけた臼などの有る界論
旦那敷きませうと四つ手帶をとく
あてごとも無いと財布を母はもぎ
きつい事昨夕迄は士分なり
くらやみへ四つ手衣を引いて行き
花の山鬼の門とはおもはれず
晝時分おきて花火のはなしなり
金屏風生醉に手をあてるなり
嫁と嫁はなすを聞けば雛の事
つき出しの一日二日はれまぶち
ふもとから來る三みせんは櫻胴
雨日はちッさな用に事をかき
通り町一丁行けばかこひかご
裏うら迄見ても女房はくれぬ也

梶原は二(ふた)ことめにはあなをいひ
紅葉からされればといふは女房もち
目ざましに御用したゝかくらはされ
金札を立てた晩から人通り
佃への一番舟は米屋なり
女郎屋のおまけは内儀申します
一(ひと)しきり女房はむごくすてられる
山も抜くゐせいを挫く車留め
三味せんをにぎつて通る船番所
穴へ指あてゝ敵をねらふ也
女房のりくつ吉原みぢんなり
此かぎを合せてみなと遣手出し
一禮をのべるど茶番々々よび
番太郎屠所のあゆみをおくる也
目黒から引ッ切りもなくすゝめこみ
一人(ひとり)さへ買ひかねるのに惣仕廻ひ
是でもう二領着切ると前九年
おつかける遣手蜜柑の皮を持ち
小野郎を一疋などとむごくいひ
さやばかりさしてぐる／＼しばられる

安名には九百餘歳の大年増
庄屋をばきらつて江戸のかけむかひ
あごなしに四百たけ出すけちな事
若やくにいごかッしやいと姑婆々
初がつをかと僧正はむがで聞き
范蠡が寐てから越(えつ)の手代ぬけ
ねぼけたで四百七人ほどに見え
友だちを女房はつらでおどす也
若旦那ひたひに笠を張つたやう
ぶつかへりさうに搗屋はかしこまり
さしがねをこつさに齒入れ遣ふなり
朝がへりしうとめごぜの目がひかる
下女腰をいたゞくやうにもんでゐる
番頭はをんなのぬけ荷ばかりかひ
かくれんぼかべのしゞみを掘つて居る
大和茶でねがひある身の長ばなし
おらが大屋は小人(せうじん)と儒者はいひ
杖のたび下女追ッついて子をあやし
赤合羽ぬれるよりはとむりに着せ
さがり取御用笈だとつれて來る

蓮池をぐるゥり廻る安い客
へどをふみ〳〵辨慶はいのるなり
御産婦を證人にするほとゝぎす
いたぶりであらうと妾逢ひに出る
此しぎでござると巨燵ものをいひ
おめへさんお聞きなんしと祭前
ずんごうの鱸やんと范蠡は呼び
ほれたやつ間がなすきがなおとづれる
樂天はくがぢを來ると播磨切り
中町にのゝ字を入れて三年(とせ)住み
座頭金たいこをくれるすまぬ事
うつくしい後家方丈のしつに入り
風呂しきをとくと深川早がはり
はやり風元船を出るくすり箱
御ひろうに書寫山ほねがをれる也
たのむ木の元より劣るかりた傘
またと無いはず一疋の官女なり
吉原へうでよりかたで早く行き
紙くずのたまりはじめは寶船
深川へ行つて來る程長湯なり

今以て行こかもどろか隅田川
大門だ泣くとしばるとぜげんいひ
出るさうでわつわと泣くと御用いひ
金(きん)氣でもござれば貸すとむごくする
門すゞみ下女わりい事しなさんな
圍ふのをにくえんの兄いけんする
うたがひの深さ手引にくしをみせ
姫路迄たき火のうつるお目出たさ
いけもりの酢の無いをくふ內氣もの
笠合羽咸陽宮をかつぎ出し
踊子はわれ一ぞんで二度おろし
消炭をつかまッしやいとしうといひ
仁右衛門のすんだあたりに仁王門
ふし見世のしまひ拜んで歸るなり
辨慶は書置き迄のいらひどさ
うはばみの時に沛公ぬいたまゝ
やせこけた死骸が有るとわらび取り
茶ばかりだまつと寢ようと新世帶
木曾どのの妾一人はうまぬ筈
御目出たうござると誘ふ隅田川

藏たてた後家口ひろい事をいふ
國ひとつ和銅の頃にはねがはえ
かんがへて見ては詰め込む柳行李
すいめんがやむと六疊敷をもち
呉服屋へ來てねぎるのは腰をかけ
居(すゑ)風呂を出てから何の日だときゝ
そらッことありがたさうに息子よみ
いけぶといやつと又行く後三年
にはか雨御慶をのべてうらみられ
備前ものさげて大藤內はにげ
仕合せな犂傷寒でばッたばた
まちやれよ飲める理窟が出來るによ
髮おきとはかま着を置き河津死に
初がつを辻番いらぬのぞきごと
勾當の內侍よろひを引ッかくし
材木屋ついてあるいて空を見せ
妻よばりおきやれとけなす松洞寺
朝ッぱらしかるをきけば松とうじ
しなれるとたいこ三日にあげずに來
天ぢくの唐のと玉藻なれたもの

朝帰りつねの身なればいひやせぬ
ちつとおやすみと格子へ臺のもの
しよく好みするはやう家の娘なり
ばいしよくを一わり入れて札がおち
炭をつげやいと異見がさえかへり
鳴る所でいんせいの出る鈴の音
三百里餅をふらせる始皇帝
すさまじく呉をとりさばく越の見世
せんそくに嫁身がまへのむづかしさ
御てん醫者鈴をならして笑はせる
その夜降るやうに呉服屋たゝみがへ
やみにあやあつて娘の門すゞみ
白粉が泣くとへげるとぜげんいひ
みり〳〵といはせて禿つるさがり
吉原で武道勝利を得ざること
古近江で岡崎を弾く御ひめさま
朝がへり女房に質をせたげられ
屏風から産婦の覗く邪推也
質置きに四五あし捨てる四つ手駕
もてたやつ夜中おいていていをいひ

毛せんでさじきを拂ふ油むし
墨染へつく駕かきはおぼえあり
雛棚へもぐさを置くは姉のちゑ
死すべきときに死なされば日本ばし
をしどりは夫婦けんくわの池へ来ず
氣はうじに須磨寺へ来る中納言
御朝寐の御つぎ高尾がうわさなり
女郎買傾城買をあさ笑ひ
ぐつとこゞんでぶつかけを嫁は喰ひ
なま若いなりでと巨燵追出され
ふん切れと他人の異見おそろしい
いらぬ事いますがごとくつくりたて
ぢうくふをいふなと下女をせな叱り
てんやくとてる日の神子はすり違ひ
間男をするよと女房こは異見
くわいらいし子供の外はにがわらひ
はな紙へしの字を書いて嫁はさし
大道でみやくをみてゐる小児いしや
麻病の毒もあいつと伍子胥いひ
内證で鹿を手ぎねでおつぱらひ

いくぢなし下駄の鼻緒をさして立て
長刀をはづして来たと生薬屋
墨染の御身だはぎうの過言なり
くらはせて飼つて置くわと亭主いひ
顔上げてゐなと突出ししかられる
前髪をならんでおとすごふく店
吸ひながらあとをひねるは下卑たもの
手打だと常世信濃がものはあり
五日迄たてゝ置きたと下がるとし
女房がよめば手紙もつの田川
二三年でつちは素人手ほんなり
師匠さまぬき穴のあるはしらたり
あさつてはお祥月忌と後の月
主人相知らず四ツから来のこと
おさうさんていらに居なと猪牙を出し
くゞり戸が明くとつけ込む夜駕かき
かんざしを借せともいはずいとぬき
六尺にまで馳走する念ばらし
毬もつき飽きると屋根へなげてみる
八朔をのがれてへんの無いをくひ

黒猫にとう〳〵するめひかせたり
御寵あい外へはつうんつんとする
古市の前日石がものをいふ
土筆賣姉はでんがくやいて居る
借金も三年やらぬ孝のみち
それた鞠取りにくる迄けて笑ひ
うまさうに煮えるをみれば木綿也
寐て話す所へばッかり息子行き
尻まくりくらとはあらい歌がるた
たくましき男と小あま土手を行き
岡ざきを彈けばそばから母語り
中啓でつくやうに鶡和尚出る
政宗をわらづとにして江戸へ出し
つき山の梅をおとしたむづかしさ
生醉のうたひやたらにおッつける
花の山むかしは虎のすみかなり
隣からとなりへ笑ふ楊枝見世
雨やどりはるか向ふはせみの聲
ほころびをぬふ内たいこ土俵入
勘當の四五軒先で妻をとり

ふだん帶しめながら出てたんと喰や
十兵衛日なたへたつた三日出る
百八のうち五六十嫁のこと
下女が兄ぐらつくやうにかしこまり
今夜のもからッさわぎと遣手いひ
ごくるゐを二日くはぬとたいこ飲み
あつい茶をのんでて御用しかられる
腹あしく紅閨を出る淺黃うら
腰をもむうち秋ののを馬は喰ひ
官女のときも飛鳥をおとすなり
切れぶみの奥へ飯盛さまと書き
なぜ舌を出したと禿こそぐられ
けんどんは代物の場を箱といひ
母をあやなすこと神のごとくなり
越前屋元ひめのりも賣つたやつ
いし〳〵をたべて明石へ書きかゝり
名人の鞠扱足に入つたもの
おつぷせてばかで脊中をかいてゐる
どう悟つたか禪僧もためるなり
道にそむけた母おやの跡を追ひ

松の木を先へ出してをどらせる
あなどつて嫁の出て見るかゞみとぎ
小兒いしや匙をとられて手をかさね
ぬめの襟かけていやあと下女いはれ
豆いりの名人店を度々おはれ
女郎でも買ひなと聟をばかにする
月あきらかにして星は隱れたり
殺生はせぬと四つ手とはなす也
かゝさんにねだつて來なとのぞきいひ
木綿ものつかむとごぜのいとま乞ひ
雨ためといつたと聞いて乳をくれず
二代目ものろまで金の番をする
さぼてんを買つて女房にしかられる
江戸ッ子にしてはと綱はほめられる
女房をしばつて奈良茶喰つて居る
勘當のゆゝた祝に又こける
東西へみごろをわける上田じま
いろはでは元日からも來なといふ
生醉も松の内のは人がよし
ちかくの他人だと大事をでからかし

本郷をどッこ迄もと傘しよはせ
高金を出して尾の出る身うけ也
むらさきの運氣座頭のやねに立ち
定業で死んだも嫁になすりつけ
神樂堂なで切りにするやうに舞ひ
不器用に持つまな箸が馳走也
けいせいの蛭にくはれる賑やかさ
あの鼻で足駄はわるいおもひつき
貸本屋げだいばかりの學者也
萬歳は小聲のときにおちをとり
呉越軍談を清少納言よみ
どこにあるやらわつちらがもちといひ
れんくわんの中を花火の通ひ船
百旦那へはすりこ木をまはすなり
道の子を生醉愛し〳〵行き
品川で紺屋の息子どらをうち
手もらひに行きまはつてと大三十日
色男どうだと信濃なぶられる
あいおとつさまとかい卷ぐるみ出し
六郷で打つはとかける二三人

ねがひすぢにも三味線をひく女
常の日はわたし守さへありやなし
本國も生國もある高い山
愛敬の無い振袖は内で留め
中にも此の松一歩に高いもの
いけどるとにら雜炊のしたく也
木のそばにきみのまします雨舎り
日本かときいて上總でわらはれる
筈をつきぬいて船頭のびをする
鷄が呑みこんでをどり子彈きはじめ
三會目母は一歩で行けといふ
泣出すを聞いて信濃はいとま乞ひ
六文はついで一文ぶッつける
くゞり戸が明いたと御用湯へしらせ
大坂屋寢言を書いて屋根へ出し
じやうぎらで居て店だてを度々くらひ
をんねんがこはいと富をとらぬ同士
よい男むかしの女中むして喰ひ
みの笠に不器用なのがかゞみとぎ
熊坂はしざつて拂ふまではよし

鯨汁わんをかさねてしかられる
前髮のちらかつて居るどやのかゝ
いつそ屁をひろと鉄輪へかへす也
どやのかゝあねご〳〵とたてられる
御勝利はあしのかれ葉をかるごとし
もみぢがり車はわきへおしやられ
花よめはかかうの中で茶づけなり
良い月夜かぐらを吹いて二度通り
ぶ男のふられたはなし實のこと
どこへ〳〵とおして出る松洞寺
わる口がいやさに息子抱いて出す
煎餅を頭へ上げてめつけさせ
愛宕からあそこだなあと本能寺
看病にだいり迄出すやかましさ
ほえついた犬へ百兩ぶッつける
二代目は搗屋に門をたゝかれる
越子代西施に夜具をねだられる
川留とおぬけなんしと女郎いふ
かんざしはかゆい所へすぐにさし
蟬折を宮六度まで明けてみる

扨よくしやべるやろうだと源三位
舞の内辨慶は出て船の世話
それみたか引けたとしらふ腹を立ち
かべに耳なくつて四巻世に殘り
くわん金がえんぎとなつて御立身
女房をなぜこはがると土手でいひ
いはうかと下女をいたぶる樽ひろひ
きざ／＼の有るえりで持つくすり箱
かまはずとござれといつてゐぐる也
大せつに漕げと竹澤ちよ／＼ちいひ
兼祐(かねすけ)はお七を見るとたゝきたて
色情のぬけた事いふどやのかゝ
鶺わきのおしこんで行くはやり醫者
ひんのよいばゞア扇の芝でなき
藥とりとう／＼始皇まちぼうけ
よし町はこしなどかけて針仕事
駿河町寶永山を芝へ出し
吠えたとてかへすものかとぜげんいひ
にはか雨まざ／＼伯父のまへをかけ
轡虫ぐらゐ新造かんまぜず
いかい事つかめばぬけね菓子の壺
こび付いて居るで女房にはやく飽き

平六で開けと船からよびに遣り
下向した御用布子に人だかり
せがき船だれかつかつてしかられる
色文をおとして飯もくはぬ下女
目さんりをするゐやれ人の目はまなこ
川留にこりけふも山けふも山
つッつけてよく見ればごぜねぶる也
札を見に九條通りをどうろどろ
七ツからおこされやすと抱きあるき
傷寒とやぶ醫見たてる狐つき
女房の留守内中がわんだらけ
讒奏をなぜ聽いたよと鬼がせめ
前錢の客だと根津で大事がり
せん湯で一人角力の氣の毒さ
清姫は添ひおほせると釜はらひ
一(ひと)七日持佛(ぢぶつ)くひものだらけなり
言葉たゝかひ事終り火吹竹
木に餅のなつたらうそではもう食はず
しりかしらべへみがいてと村しらうと
一(ひと)所はをじめのやうな普門品(ぼん)
五百萬石は白石妙手なり
重忠が無いとあざはね打つ所

いつにない御きげんと手をもぎ放し
松かざり大屋根こぎにして廻り
聖人の代にも二人(ふたり)はひだるがり
二千里も行く勢の四つ手かご
殿さまは惣むらさきでおすこたん
かまくらの汐干うろこのしまひ也
かげ膳を人さへくればはなす也
繪に書いた餅を師直くひたがり
四ツ過の四つ手ぬけ荷を侍つて居る
松洞寺むこいへどうもいへどうも
びりッ子も有るに御留守居たはむれる
はやり風ぐらゐ花よめつくりたて
女郎衆はさぞと大汗かいて縫ひ
のみこんで居て水がねの能(のう)をきゝ
てゝおやが抱いて玄關にむごいこと
雪隱に有る名の娘すごいもの
煎餅屋安いくつわの音をさせ
いよつんとしましたといふかねの禮
ろくに血のおさまらぬのにひきに出る
みな汗に出ますと搗屋のんで居る
呉服屋は奥へ行くほど年増なり

誹風 柳多留十一篇 終



十二篇

小石川

今戸

八丁堀

小石川

三田

柳多留十二篇

- 初瀬　市谷田町
- 柳水　麻布永坂
- 鶴亀　小石川白山
- 櫻木　上野山下
- 深雪　牛込
- 若菜　新堀
- 杜若　神田
- 清瀧　四谷
- 眞砂　青山
- 高根　櫻田

- 初音　麹町
- 諫鼓　大傳馬
- 登　千住
- いろは　下谷
- 居ます　今戸
- 養老　小日向
- 兜　八丁堀
- 舞鶴　小石川
- 水仙　二本榎

- 風雪　丸山
- 羽衣　神田
- 橘　橘町
- 朝日　薬研堀
- 大津繪　柳原
- 玉川　三田

一生に一度をとこへなめてさし
落日にくれなゐの出る中の町
摘草もざるをもつたは近所なり
落武者の一(ひと)つぶえりは七騎落
松がとれるとさむらひが百さがり
菰かぶりとゝでまんまもくつたやつ

口中に茶ぶくろの有る神樂獅子
二枚はえやしたと小はらひッたくり
撿校と貧乏ゆすりしてはなし
はしたがり迄書置のばかりちぎ
ゆびさして座頭にをしへ笑はれる
座頭の坊またのありたけまたぐ也

よし町へ俗の行くのが末世なり
せき臺へなすびをうゑる安隱居
香のもの程にさしみを女房きり
身上はたて直つたがけちな嫁
手拭をふんどしにして爪をとり
みゝだらひ紙たくさんが嫁のなり
正燈寺三の足まで聟はふみ
かたにぼう左官がおくとせはしない
太神宮さまへとかぐら一人來る
おれを大名にしたらと素見いひ
さてひろい野だと仕丁らさがす也
百出すと伶人つかへ手をかける
そばへ寄るまいぞと耳のあかをとり
いゝ月夜やッたらしつたものにあひ
老込むと後生を願ふ吉野丸
十三日手もつけられぬはらで出る
山ざるのかむり女帝のおものずき
供部屋の音を禿はふしぎがり
車引俵の中へむぐるやう
けんくわかと思へば車おして來る
何もかも内ぶところへごぜ入れる

役者附中よりうへは何ぞもち
女中よみてい主ひに見てかつぎ出し
五日めと十日め須磨で御寵愛
二十けんこしの廻りがなじみなり
わんばうで脊中かくなとぜばんいひ
おしよくさんなどと踊子なめ過る
松の内下女ぬつたとは塗つたとは
より高を見せたが和尚らんのつき
すま左内どのに逢はうと座頭來る
むきみ小屋四五人かくすらんがしさ
つッぷすと新造音も沙汰もなし
一年とこはさかけ合ふ大三十日
花を見すてゝ旅籠屋へさわぎこみ
こし元のえりをつッこむつめたい手
角兵衛といふ人獅子をまひはじめ
とつさんのなまゑひやいと母へにげ
松の木は今もくまでのばゞア出る
傘氏はとはうづもなく逃げて行き
はづかしさ毛うけで顔をかくす也
けうなばん御免なんしがやたら來る

田樂でのむ内とんだちゑが出る
御子孫の甲斐もないのは原田なり
おめかけの一門あまたうかみ出で
納豆もたゝきあきると春が出る
月までに文の來ること十五たび
ゑびす講ふじのぶらつく程醉はせ
かん病に女ッきれも見せぬなり
江戸ものが九條通りの道をあけ
はつ鰹つらをしかめてよんで來る
幕串の先へのびるをくゝしつけ
北國のかたうでになる正燈寺
むごい事もめんもやうで土手を行き
深川はさッさとおしてかへるとこ
一體は地ものぎらひの彌陀も有り
旅四つ手おもかぢといふ音で出る
乳母がちゑ銚子へさゆを入れて出る
ほえただけ五兩さがるとぜげんいひ
榾拾ひ揚枝をつかひ叱られる
まんぢうをときんにあてる子ぼんなう
臨終を嫁こはがつてしかられる

子がござりやすわなといふ神馬引
ぞんざいにせけんをおこす搗米屋
品川の女郎とんびのわけをきゝ
勘當をよぶでとむらひ三日のび
孔明がうつむいて居るむづかしさ
待人おそし品川であそぶなり
三度づつまきを引出すふたしなみ
女房の番をして居る大あばた
女部屋夜半には君がひとりゆき
大あせをかいて割つてるさるすべり
思案するやうに重荷をしよつて行く
あげづめのうち川どめに島田あひ
おくぜつで一夜べつじとぎうはいひ
向ふがは無いでうなぎが賣れる也
觀音の茶屋の給仕はびく〳〵に
はなやかな綿服を着る輕井澤
熟睡の玄關にたゑぬはやり醫者
地がみうり鏡とぎをばくぼくみる
ころびをれやいと御留守居大ふざけ
一踊り仕廻ふと敵役いぢめ

毛のじよ〳〵は嫌とくれての前でいひ
めんつうといへば牛かたいきどほり
親分とつれ立つて行く初の山
舟子どもやいとよろける柳橋
小人閑居してやたらふせたがり
かづさ戸をぴッしやり立てゝ五十とり
おも入れをわらつて雜煮二ぜん出し
いかなれば娘と聟を別にねせ
それも癪のせいとげぢ〳〵を捨てる
うつくしいはず大こくはふくろ持
かんばんに數珠をして出る憎らしさ
たゝかれる太皷巾着しめるまね
命也けり快氣してはたちなり
無いはずはないと後から藏へ行き
べちやあねえ尨犬だよとぜげんいひ
花の朝いやアと下女もほめられる
番頭も外ではおもしろいをとこ
向ふが榊原かへとたてこめる
百ものがたり程入れて顔をみせ
おふくろもおふくろかぎを釘へかけ
先へいつたやら廿軒中に居ず
もゝ引とづきんを取ると女郎なり
かひぐひが過ぎるからだと下女が母
通りものまさかの爲にぶッかさね
けんどんやどこの盃だかといひ
世が世なればと踊子を母しかり
それさ紅葉のある寺と母わすれ
鮟鱇に巾着切が二三人
暑氣見舞枕と團扇持つて迯げ
花紙をかざすを揚げてもらはれる
女房の御きげんを見て質の事
ちと本の事もいやれと母はいひ
ひまな事せみのぬけるに二三人
かりた子をりきんだ顔にしてかへし
天命は座頭に二人おさへられ
ふんどしをぜひなくしめる暑い事
そこら中見合せひらのふたをとり
煮賣見世なんの爲だか雪の下
また妻が久しいものと母いはれ
よくうれるうしろに手代一人立ち
つのッロして枝柿のたねを出し
東北へだはゝのまじる風呂の内
座頭さん又島かえとわたしもり
からつゞらせなアにしよはせ引はづし
むだ口へ子の小便をふりむける
ばくろ町二かいへずつと文づかひ
あすの日も無いやうに彈くさる廻し
大づめに妖怪の出るくわいらいし
湯灌場のきはなはみんな竹に成り
目の肥えた四つ手のよばるもめんもの
鼾をばかきましたかと嫁は聞き
叱られるそばで疊をたいこ飲み
暑い事よめあごばかりあふぐなり
うろたへてかけ込む女はき出され
出合茶屋庭に池水をたゝへつゝ
ぬけ參りさくま町から後につき
ねぎをはさんで花嫁をおッかける
藥箱素人の持つは急病氣
名殘惜しげに蒸籠へふたをする
島田より金谷の方へうけ出され

むごい事うきが友には猫ばかり
時鳥下女居ねむつたのがしれる
油見世折ふし居てははやらせる
ころぶは上手〲をどるは御下手
白むくでしをれた草をみてあるき
なんのくも無く上下で武士あるき
はつがつを客も臺所のぞくなり
あごばかり軒に殘ると人はちり
國の色せなアの分に成つて來る
三たて目に遣手へゝ〲〲と出る
醫書にもれた事紅葉が癪のたね
わらはせに自髮の禿つゝき出し
來たばんに笑つた嫁をさつてやり
踊子はころぶとはくを付けてやり
ふさつのおんを蒙つて五兩出し
寐たふりをして居りや禿何か喰ひ
ばんとうが堪能してと馬子這入り
蜆を二升みんなにてもてあまし
身仕舞をけごろでんどへ向いてする
表紙をはねろど松葉屋半左衛門

振舞で行くのは猪牙にかしこまり
身上のかたむくまでの月を見る
惣じまひする事四つ手肩でしり
下總につないだ馬のやかましさ
すゞんでる足もとでちろ〲といひ
たてかけた長持へ來て蟬がなき
みともないはず借金のかたによび
八宗けんがくいろはの品川の
ぎうに手をひかれてびつこ舟にのり
ぬりたつた孫の手をひくみともなさ
雨やどり日和の方へかけて來る
深川らしいがうづらへ二人來る
引きぞわづらつて引け四ツ迄あるき
遊びでは無いと四つ手の直をねぎり
椎の木の根へおッかけて弓をはり
しばられて居て助言するふといやつ
水鳥はにげてひよ鳥さいごなり
師匠さま机はおもきとがめなり
かみなりも天狗もまじる百人一首
上下で大きな金を切りに來る

かける鶴見て半かたも一つぶち
春の末錢へからしをつけて喰ひ
味噌すりをやめて大坂がたへつき
姉はあねだけもうせんをねだる也
品川はなじむと盛つてくれる所(とこ)
出おるなといへばあとから出やるなよ
吳の國を眉をひそめてかたむける
女郎買ひ横合ひが出ておッぶせる
きゝ酒のきげん一切(ひと)あそぶなり
はじめてのいけん夜食をこしらへる
仲條へむすこ繼母をつれて來る
ふじの歌山のほとりの人がよみ
ほとゝぎすもうな〲でうむしたく
惡いちりめんさとお針縫つてゐる
鼻に皺よせて犬坊いきどほり
一(ひと)さかりたいこのことば奇なりとす
目あきだといゝぶちものと玄關番
錢車相場きかれて汗をふき
わりひざに成ると亭主は立歸り
明らかな智惠でもたつた三日也

咎人にやつたは常世うそらしい
螺殼海へぶちこむさつた坂
いッそこはがるに座頭の子煩悩
ふたへ根性のがきだと後の母
朝がへりとなりできくの面白さ
月花の定座五町の徳場なり
若旦那さまと書いたを下女おとし
七夕は土手からみえるもん日なり
どういふ料簡だにむす子こまる也
いたいこと月てふ山にたのまれる
かゞみにて見ればきつねの天下一
親分は手をあをのけてわりをいひ
三味せん屋置手ぬぐひで彈いてゐる
同行でございとふるへながら來る
上下と衣のはなす不繁昌
毛延壽しつかい鮫ヶ橋に書き
西行も野郎あたまで一首よみ
寺をしてもらつて明智叉とられ
下女がいろ大念佛で二度通り
むえん方界で引ッぱぐまくらがや

うつとしい禿つッつと育つ也
一箱もくすねて置いて戸をたてる
みつもの屋下女におッぱだぬげといひ
雪の朝隅田川からいひたてる
椎のみでさかえ茶の木でをはる也
あごを剃る内見る文を引ッたくり
ふられ客うねめの宮で夜をあかし
目をふいて杉本左兵衛めしにつき
扨はおれゆゑけがすかと亭主いひ
棧敷から首のありたけ下女のばし
仲國はなか／＼野暮でないをとこ
源三位毎夜そくらをかひに來る
人なればとうに出て行く佐野の馬
神風にこりてあきなひ船ばかり
するかんで轉んだ上へ鞠は落ち
細見で見てはぺちやくちやしやべる也
田町からもういひわけの無いところ
藥箱持たぬばかりにさまを變へ
駕かきは歸るに牛はひとつ所
かけとりへ喰積を出す中直り

安房と上總をかけぬける退屈さ
こんたんの來た夜初會はみぢん也
松の内笑ふかどへは乳母來る
娘のくれた矢で御悩直したり
生男が袖へすがるでげびるなり
金といふものはと嫁をむごくする
死んでしらせたのが公事のおこり也
狂言を見ずに袴ではむく也
足袋のひぼ結べば蜜柑ころげ落ち
きつとした買人のふりで素見也
容體をいひ／＼女房いッ付ける
鎌倉のたねのはびこる薩摩芋
精出してためても伊勢屋をひのもの
きり／＼とつくねやれなと御新造
大音なやつに張良うたはせる
折檻にまあ／＼／＼とふたになり
番頭のまつごに子あることをいひ
平六が所づぼうとうよくうれる
お飯よりまんまの膳を先へ出し
門松をとると生醉目だつなり

堅い寺見立てゝ式部かりる也
住持様ばかり男をもつて見ず
とりかへた子を景清は度々みかけ
去つたあと綿入れものの仕立かけ
歌で昇進まつたくの拾ひもの
そらッ茶をのみ〳〵見たりみられたり
むねに青すぢで水ッ子だいて居る
ぼうずいの小袖を九月こしらへる
關札にさびしく僧の歸宅なり
是からは鬼に成りなと後家にいひ
是もふんどしだとかつぎ跡て通り
傾城ははねられるだけはねる也
三界無庵のはずだに二世帯
かへりは御一所と息子こまらせる
大屋から鐵砲玉が十五來ろ
初手の厄寺で仕廻つて歸る也
去つた〳〵といふけれど逃げた也
凡俗に寺をうられる秋の末
下總はおかべ武藏はあんもなり
ひく事をもッぱらとする後家の色

藪いしやへ自身に藥とりが來ろ
髪置の櫛させばおちさせばおち
くの世界女郎かひにも月や花
おふくろにかくすが藝子本の事
ねころんで論語見て居る暑い事
屋根を上げ緣をおろすと楊枝見世
高をくゝる石河岸の明けはなし
形は男だがなく聲は女郎なり
茶屋借りにいの字とろの字這入る也
渡場でいぢばる娘人だかり
狐つきおちると元の無筆也
眞ッ崎はこゝ迄來てといふところ
内の布團が二三十出來るなり
そうめんをくばるを見れば御用也
すばしりをそへて金屛風をかへし
黑猫のわんもやッぱり片おもひ
賣色でなくて三みせん枕也
煮賣見世身の無い雁や鴨が飛び
今いふはロづうへだと布團掛け
ものもちのわるさ今度で三人目

妾の不首尾きんくわ一日のえい
生醉の女房あたりでほめられる
榮華の内に粟もちがかたくなり
かしましい後から花を一からげ
素見でも門から内は氣がかはり
拾はれたさうだと手燭外で消し
蓮の茶屋今朝から牛座明けて待ち
ひやめしはあるかと下戸の初鰹
雨やどり四五町行くと水をうち
化粧しながら島がくれ行くをいひ
天蓋を笛でつッぱるほどゝぎす
淺ぎうら手をこまぬいて待つて居る
やるせなく盆をつん出す子の給仕
みそをする爲すりこ木を聟は買ひ
あの寺にあるをしつてる小間物屋
をどり子は事ともせずに又おろし
忍駒そつと覗いて見れば嫁
お舟はぎつちりこと下女わらはれる
掛取がかへると家をほめに來る
品川で遣ふは本の入れぶつじ

白かべのそばで打擲御用され
屠蘇酒だまゐれと長田聟に強ひ
さア野郎來いとおやぶん水子抱き
馬喰町死んだ役者の繪などかひ
將棊をば二番まけては金をかり
まな板を帶ひろどけでたゝく也
價千金の夜なべは紫屋
文選を妾そばからひッたくり
酒だるへ四角に穴を下戸は明け
蓑市はあんまり人のしらぬもの
禮服の生酔も來る松の内
大一座内をあんじてしかられる
幻術をつかつて手代ぬけて出る
荒神のおまへをみれば下女ねむり
取次の四五文おとす氣のどくさ
餘の舟でみればやつぱりたゞの松
嫁の着替へるを覗くとちゞむなり
不斷着で番頭えらい事をする
しろものと見えて桟敷に目立つ也
むごいこと羅綾の袖へ鈴を附け

あの人とそして誰だと下女が母
氣の知れぬ人かんざしを拔いて寢る
天道正直あばた賣れ殘り
俗の氣が離れぬで後家目立つ也
縫ひならひほめるとどつか持つて行く
一人者かみさん達になぶられる
ちんばひきながらまちんを買ひに來る
そろ〳〵と後家を邪道へすゝめ込み
慾に目がくれて牡丹餅喰つてゐる
三味線を爪で彈いてゝ捜させる
盃を眞中へ嫁さして逃げ
槍が折檻針が出てとりさへる
木綿賣京談をいふいらぬこと
をかしさは夫婦喧嘩を狆が吠え
こはいもの見たし生酔嫁のぞき
女さかしくて紅葉も賣れぬなり
のびをするそばを通るとかゞへる
二十軒茶代をやると不人相
みりん酒を入れてびいどろすゝぐ也
十もんめ八もん本所でうりはじめ

かくれるをにこり〳〵とおくり膳
雨やどりごおんとついて叱られる
三兩のゑいゆふたちのまんまなり
三枚はやにむに肩をひつたくり
神棚を毎朝拜む通り者
變生男子四郎兵衛にとつかまり
土こねのやうな女郎をくゝしあげ
つりがねのはなし芝から京へとび
何といゝものかと金を子にみせる
入王になつて返事を書きかゝり
手に當るもので生娘ぶつて逃げ
野がけ道あたまへ扇くゝし付け
三分一土手を殘してねだるなり
二三町出てから夫婦づれになり
その腹をあんとすべいと下女がせな
若い手をかりてむすめの灸をする
琵琶はふくろにをさまつて金をかし
そこに置きなんせは憎いもらひやう
母のるすはなしがわれるやうに出來
口へゆびさしてめかけの噂なり

させるをば土藏の這入口に置き
順風に板の帆が來ていやがらせ
花を見すてると謠で聟歸り
伯母さん〳〵をじやまがる宿下り
道ばたにすわつて母をねだるなり
大津繪の生きてはたらく輕井澤
生けもりをもちかへすのは粗相也
げびた意趣さしみを喰へといはぬ也
針箱をさがすと女房とんで出る
まつすぐな柳みて居るあつい事
出合茶屋あばたッつらが錢を出し
花やちるらんで女中をこはがらせ
あごへひつぱさんで亭主たゝむなり
一打(いちうち)を剃刀でけす惜しいこと
これ命とりめと下女はなぐさまれ
へめぐつてこずやとさそふ淺黃裏
ぬす人が這入りやすよと火をもらひ
西瓜うり冬瓜をうつて寄りつかず
引合はす嫁何とやらいひはいひ
いなびかり男ばッかり涼むなり

內の子の乳をはなさぬ氣のどくさ
母よその息子をほめてつッこまれ
釘ぬきとまんぢうつんで漕ぎ出し
ふてェやつ手ぶりで人をすゝめこみ
品のわるさは四つ手からころも出る
白むくを田町でぬふと殘暑也
妹はゆもじ一つで直が出來る
琴のごみ面白がつてはたくなり
にくしみのつよさ子供を置いて迯げ
つり合ひをよくあるくのは三歩也
鍵といふかぎをさらつて女房出る
涅槃にももれたで手代どらをうち
そらッこと置きなと女房やりこめる
わらはばわらへ長持が十五棹
不承知さこゝでも聞こえやすといひ
舟宿の腰張り見ればむしん文
山もりに盛つたすゝきを二はいくひ
墓所から虛無僧の出るすばらしさ
九月蚊帳女房いかりを書いてつけ
ゆびぬきを醫者が歸るとさがす也

國家老ぺんぺこぺんを先づ押へ
母がつかないと貰ひ人だらけ也
ぬかだつて方丈さまは御宿かえ
紗の蚊帳は三人と寢るものでなし
座定つて若いもの呑みはじめ
むごい事二人(ふたり)は死んで一人にげ
あの伯母御二度死んだにと藏でいひ
七月が小でお針のいそがしさ
目があるとえゝ女だとしれた事
出來ると侍從小袖をばもらふはず
ずんごうの鱸やんと范蠡はよび
あたらしいふんどしをして外科へ行き
短冊は重忠しごくふどうしん
かど松のなぐれ今戶で鬼をやき
生醉をあつかはせては年增也
考へて見て此さきで聞かッしやい
たいこ持大屋お帳につくところ
藥師寺が來ぬと痲道具すでの事
ぐし〳〵となくので項羽はなれかね
乳もらひのから身で來るは目を押へ

おもてむきから茶屋の來る左まへ
いとこにもしろようくると旅の留守
あざわらひながら出て代脉に逢ひ
植木どの破るまいぞとかやば町
出來た下女井筒のまへとなぶられる
平皿をやつとあくる日思ひ出し
大たぶさなのは息子のおむく也
うすべりのまどから見れば衣なり
大ぐらひ也と木曾をば譏をする
文使そら小べんを度々たれる
ぬかばぬけ後(あと)で竹とはいはさぬぞ
子おろしの向ふうらだとげい子いひ
實盛は晴着を一つねだる也
切おとし札をみせるは引けのやう
貴僧さまなどと品川初の文
彼等風情をといたぶる下女が宿
二百年ほどふいんだとたけの内
大門へこのしろの入るにぎやかさ
百旦那荒砥ほどなをあつらへる
えんの下のぞいて廻る櫓ひろひ

せつなさに年とり炭をなげ出し
この村の名醫で箱をかつがせる
蓮池院つれて助兵衛茶屋へ來る
小一兩鷲にとられる大不首尾
ねるのにも二通(ふた)りある大三十日
松の内しるもしらぬものぞくなり
萬歳は舞ひをさめると不人相
わらやるな若とのさまの伯父御だよ
とうろうの内は素人賣もする
着つゝなれにし大紋で囃す也
座敷らう母も手錠がものは有り
夕だちにあふと女はすたるなり
筑紫迄どう行かれうと内侍とめ
ひだを直しながら鯛の先へたち
しやくせんのよけい中宿二日置き
老込んだ陰間やつぴしあごをなで
ぬかと書いたかと木曾どのえつき也
あぢなつりばりで尊(みこと)を聟にとり
三つぶとんよッ程天へちかくなり
ほえる大手桶をかぶり追廻し

さア爰だつらをぬぐへと女衒いひ
けいせいを買ふと男が生きて來る
身祝に望まれて主馬一(ひと)かなで
一つ宛蛙を仕廻ふ水の音
せつく前箱でとりこむ女の子
夕べあれからいつてのと髪結床
辨慶がわるさで時がしれぬなり
皆人を笑ひなくすと臣下いひ
はなれ馬門松一本引ッこぬき
本能寺紹巴橫手をはたとうち
杉部屋にかくれると手におへぬ也
御したくはよしかとどらの師匠來る
なま醉を家内中出て落手する
二十けん一たびゑめば百とれる
なに馬鹿だどれとゝつ樣肌をぬぎ
ごふく店なでに成るほどとゞこほり
いそがしい中で薄田どらをうち
ばあさまのやうに山ぶし年がより
ひやめしの方から信濃片づける
長兵衛どん毎夜おせわと早太いひ

娘の生酔ふんどし目立つ也
禮者かとのぞけばおさら一人來る
けふこそは本の紅葉と母へいひ
もん／＼の障子のまへを娘かけ
參錢は父植木のは母がやり
大さわぎ鬼ふり袖が二三人
かくすのが憎さ道にて封を切り
ぬけ參り片道虎の威勢たり
反物のそばでお針はにえきりな
夜ばなしがからうじて札を立てに行き
始皇帝ロがいやさに生きうづめ
土弓場へけふもたいこを打ちに行き
大あばた小兒醫者とは不料簡
猫にまたがつて妾の親あるき
足がるの仁王にかはる花の山
親のそろばんを息子に破算する
初がつを箸をはなせとしかられる
土用干下女あれがゑゝ是がゑゝ
乳もらひは道具も留めてあるといふ
雪隱で味方まけるを石田きゝ

仲條のろぢに手代のものあんじ
ひどいふり泣いて居た子がだまる也
ちりを入れやれと亭主がさいはじけ
おめかけの友だち今にはした也
夕立のむかひはだかで傘をさし
生酔をしよつて女中をまッ二つ
鳥にだもしかず納豆汁ができ
九州にはびこる鳥を鎌で切り
ぬす人を大根からい目にあはせ
寳船日本からも一人のり
美しい顏で荔枝をやたら喰ひ
なんぞ名の有るべきものを烏瓜
油うり是になさいと嗅いで出し
自在かぎいちつて野がけもてあまし
人といふものはと孩へ指をさし
ぬかぶくろよッぽど顏をながくする
四五年も花よめで居ろぶせいもの
すぼまつて帯を出しなとをがむ也
めしを喰ひ過ぎてからかさ一本なり
月蝕に向つて下女はぬり立てる

入水しようよりは傘張るがよし
五十羅江戸をくらつた奴とにげ
鋲打を据ゑて前後へぱッとのき
初の字が五百かつをが五百なり
わけをいふ程ついて來る四つ手駕
口をかき入れにたいこは一歩かり
あの男この男とて古くなり
くさめするのがお妾の持病なり
後の月又候かやう／＼なり
俄雨四つ手に乘つておだてられ
けふ切りの屋根や柳を解いて行き
がさつなは葵の上のとねり也
業の仲間いまだにたゞの杖
横に見てたてかけて置くかゞみとぎ
聟に行く相談むこがちや／＼をつみ
產屋からすぐに鍛冶屋の手に渡り
いゝ潰れやうさとごぜを手なづける
かけとりのいひわけ川瀬喜内する
なまなかに片目見ゑると無藝なり
齋日に御用大數におこたはれ

高縄ではしりをおみすけちな客
たれかもう水を汲むわと勝つた奴
せん湯へ羽書で行くはひんがよし
さん留をへし折つて下女すわる也
知切つて居るとあこやを主馬なぶり
座敷牢身につかないと根津へ行き
かけ乞はえんまを二日前に見る
姉さまやたんとあがれと夜蕎麥いひ
五位の裝束で居るのを隱居揚げ
亂髪の男のかける常盤橋
羽二重はひとりで着切るものでなし
朝がへりあしたに道を聞いて居る
遠藤は龜戸近藤佃なり
此國で左衛門とつくふといやつ
ぞろ引いて出たで時致とッかまり
ぼうつきは水打つてくるひらく也
松が岡江戸の内から閉いて行き
目の上へ兩手をあてゝ嫁迯げる
するが町中ごふくものとりちらし
きびふまではなをつまんだ耻しさ

首尾の松あれば不首尾の柳あり
ひきがたり中やすみして蚊をいぶし
切餅のやうなで四つ手汗をふき
文盲なやつをば埋めぬ始皇帝
文使そらッとぼけが上手なり
壁にたてかけて有るのを隱居揚げ
どろぼう〳〵と韋駄天おつかける
百とるに上下を着てはひまはり
刑部かなはぬにいらざる鬪が原
地ごくにて知る人にあふ延喜帝
供が内みるがやぶ入苦勞なり
他人の中を見て來たは遣唐使
おくさまをほめて御人のあきがなし
楠はつくりの方のひいきする
安うぶぎ鷺とすつぽん舞遊び
伯父がわせたであきらかな紅葉也
吉廣を月夜に買ふは急なこと
いち時に立つて猪牙舟しかられる
斝をおはへて白髭で一分かり
撿校もたゞつき合へば殊勝也

つよい氣で着るとちりめん安く成り
癖のある酒で花見をはぶかれる
たいこがさし口でかぶろとりに來る
陳皮茯苓見かぎつて彌十郎
くどかれて前齒できせるかんで居る
並杖を四五本やつてはたらせる
若衆こんじやうが出たがる江戸家老
ごふくやのつき富り迄五つ泊り
勅答にあたまの飾一本へり
女房があれば行かぬとけちなやつ
袞龍の御衣洗濯に二分かゝり
鳥のはねすでに狐が喰ふところ
御手切れとみえて御道具二日行き
わさびおろしも孝行の道具なり
わッちがやうなものと面白くなり
一所帶買つて來たよと初の午
洛中の桔梗の花が三日咲き
反古さへ有るとよんでみる邪推也
言葉たゝかひことをはり花でぶち
袖の下やらぬとばゞア長座する

江戸へかと格子をあらひながら聞き
田の中で巴々と三聲する
花を見てそしてとおやぢむづかしさ
生きてゐやすりや廿五と七回忌
阪東の十三番を四つ手抜け
敵をばカラリコロリと附けねらひ
言ひ負けた方からぶつて掛るなり
盤臺に桝と親とが二つ三つ
鏡研にがさぬやうに押へつけ
氣の毒さ海道湯漬喰ふとむせ
かんざしを懐にして木戸を出る
薪水の勞を助ける下女が色
其きさしあつて羽織を持たせたり
褻日に御用きん／＼もので出る
百の貸それ覺えてか日待の夜
焚於期が首はおさきに使はれる
田樂へ吸附けに來る夕凉
お寺様これはむごいと湯屋でいひ
金持の聲色で下女くどかれる
なぜ貫目ものといつたと端女にぢ

七月の八日玄宗頭痛する
惚れた奴飯時分には歸るなり
馬になる役者は男二疋なり
まちん下さいと鼻ッたらし來る
女客てい主こびつきしかられる
六文で布子着て行くふてえやつ
乳母の子にして尾を出さぬきつい事
いましめて置かぬと櫻みき斗り
松風の半月吹いて人だかり
産所から二足三足邪推也
たのもしく見せて娘をうれといふ
むなぐらの外に女房は手を知らず
見世先にてい主ぶらつく三丁目
座敷牢番頭なきにしもあらず
乳が出て夏のかせぎの邪魔に成り
餅花と柿が四つ手に生つたやう
一ふくろ證文持つて後家あるき
白むくを五六の中でくけて居る
寢かさない晩案のぢやう月の事
やう／＼と袖口を出る嫁のみやく

疱瘡にして湯をかけた姿なり
花の留守やつぴし雛へ手をのばし
囲ひ人のむだ足をする井戸ぶしん
はづかしさ醫者へ鰹の直が知れる
えりをぬき出して息子はとこを出る
雷は通すが仁王にらめつけ
くひかけをたもとへ入れて槍をもち
ほれッきりかせげとおぢは二貫貸し
六文の錢が切れるとまけに成り
から箸を三口ほど喰ふざぜん豆
ゐのしゝやむじなのわきで工藤死に
安房と上總を杉戸にて仕切る也
くるま引娘を一人ほめなくし
七月は小だと遣手氣を付ける
すりばちへ茶をぶんまける新世帶
數をよくなぶられて來るかねの禮
又けんくわしに來たといふ仲のよさ
二三里も手前からつく大をとこ
御くたびれ扠お內儀はひよんな事
ごふはらなものは坊主の野がけ也

金屏風きゝもせないにおいらがの
蛇の舌を朝鮮などでぬかれたり
百晰すうちばけものは待つてゐる
雨おちをほり〳〵晰す下女が宿
今死ぬと花をふらせる妾がおや

月ひとつうぶすなさまにけのがされ
子にやるまりをついてみろ若い母
やんはりとふせろ大屋の戸が明いた
かつがれた圍ひの跡にあぶつ坊
六月の質屋ながれん武者を干し

出牢をするときせると髪の事
あんにしろ鎌をはなせと庄屋わけ
小ざむらひ並んでたれて叱られる
長局肉食をしてふとる也

酉二月十五日開吉例花角力句合　催主　星運堂
補助　薩秀堂

中將の道くさに折るかきつばた　諫鼓連　如雀
そッちらの羽織が女房すめぬなり　初瀬連　歌遊
ひや麥を紗綾や綸子の下で喰ひ　柳水連　石斧
ほッぺたへ穴を明けては嫁わらひ　櫻木連　井筒
隣からほしいはわけのある義也　柳水連　玉簾
氣の知れたこと盃をとんでさし　櫻木連　和友
喰ひものをはさむと遣手不人相　初世連　秋紅
雪に四つ手をおよがせていそぐ也　若菜連　敵吐
羅生門綱おれが行くべいといひ　鶴龜連　千路
落ちて來たので腰帶ははふられる　柳水連　玉簾
江戸の土ふますに戻るおし送り　鶴龜連　船布

十五日からはおぼこの聲がはり　高根連　勢幸
蛤を捨てゝいのちをひらふなり　櫻木連　一町
目一つが千兩につくとんだ事　柳水連　玉簾
茸狩りも內府は手前藝者なり　同　雨譚
あら後家へ出這入をして壺づかれ　鶴龜連　其冠
神前で女中一むれ泣いて居る　同　百千鳥
素人のなま醉ひ松の內ばかり　高根連　志光
大風の跡に伊兵衞と虎ばかり　鶴龜連　百千鳥
わづうかな戀をして來る楊枝見世　朝日連　豐袖
番頭の無念引け四ツものをかひ　初瀬連　秋紅
せつないに絹の襦絆でけいこさせ　兜　連　古狸
在鄉醫者何ぞといふと騎馬で來る　登　連　文器
身代が直ると嫁のうつとしさ　風雪連　古泉

猪に笹りんどうの紋ふを立て　柳水連　扇印
ほれるか〱と茶をくらつて居　鶴亀連　千路
誰ぞが首を切りなよとだつきいひ　同
きり〱くばれ師走だぞ〱　杜若連　下時雨
ふきぬきで堀へこられた義理でなし　櫻木連　木綿
れふし仲間へ入り候とどらが文　柳水連　石斧

かゝとで巾着を母は度々切られ　登連　文器
下女がさかるでかみ合がたえぬ也　鶴亀連　千路
氣に成つて負けると内儀叩付け　櫻木連　新紅
下女が色兄さんよばりにくいこと　若菜連　遊子
ゑゝ坪へぶちまけて行く夜そば賣　杜若連　松翠

誹風柳多留十二篇　終


拾三篇
川柳評秘書
奉懸
市谷田町 初瀬
飯田町 錦
麻布永坂 柳水
小石川 霞亀
山下 楊太
瀧早 初音
千住 登
新堀端 和哥名
真砂
三川丁 杜

誹風

柳多留十二篇

川柳評抜書

一ぷくをひつぱりにのむ女きやく
ちか／＼と見えて大工やたゝみさし
四五人の大屋をしかるいゝくらし
傾城はならひもせずに書きくづし
後ぞひはこは／＼一つぬひなほし
敷きぞめの夜具天井へもうちつと
琴箱へのびるを入れてしかられる
こん立ての外にころぶを二三人
口惜しい事いゝとりに飯をもり
針妙(しんめう)をおはりと言つて叱られる
かこはれは店賃でもの見世をはり
たま／＼をとこと生れ禿なり
こらへ情なく盗人を孕むなり
買ひものはうら白根松女郎なり
めんぷくで來たが今度の地主也
時ならぬ數人それでよめやした
一とほりのべて年禮なきはじめ

一だんかたる内まッぱだかにされ
樽經はあたまをたゝき／＼よみ
うら口は出來そこなひのけづりかけ
口書のかぶろ其節寢たになり
ひッたくるやうに四つ手は肩をかへ
雨やどりまんざらおぢの筋向ふ
年輩(はい)な方へ花よめさしてにげ
長ばなし扇をひろげてはたゝみ
妹をつれて一日ばかな沙汰
御りえんのわけ琴爪のきずが出來
御寐間からゑみをふくんで妾でる
文箱をもち官軍の陣へ來る
萬歳はなく子の顔をつひに見ず
後生迄いひたてられる花の雨
惣花の返詞おや船までゝきこえ
なんとえゝ隅田川かと土手でいひ
夜るの道具とおもはれぬ石燈籠
しきみをばいひ直に買つて袴着る
門番がよ過ぎて敷居高くなり
惜しい事ゑめばはぐきの出るが疵

花火見るたび御妾は笑ふたり
大師河原へ行つたあと女房にげ
長州で内裏崩れをおきなはせ
黑白(こくびやく)に二度よごれると春になり
高慢さこじりをさすり／＼行き
娘もう筆をかくしてつかふ也
ゆふだちのもりかへをくふ長ッ尻
でばじやれるふりで袂へふみをいれ
遠ッぱしよりをするやつは玉もなり
栗飯が出來ると元の旅人なり
母の留守どぢやうを買つてしらん顔
切もぐさ太いは大方うれのこり
本能寺寐耳へ土岐の聲がする
から車引いてむすめを追つかける
魚籃近所かと賴光聞き給ひ
女房の留守みそづけをつかみ出し
鍋いかけ子にきん玉を見つけられ
やたいぼねよばりは一歩すてたやつ
節句まへやぶ醫十疋二十ぴき
今迄の事を湯にするやかましさ

つぼやどんまじなひますと手をつける
桝改めを見て御用かけてくる
後生へはけつを向けてる遣手ばゞ
けふも來て居ると向ふのかゝアやき
一大事花よめどうか屁が出さう
たばこやの女房は血どめ程まける
施主が聞いてるにいかうの行くまいの
鬼王の虎御前のと分に過ぎ
藪いしやのはいつた家に殺氣立ち
おばさまをくどいたもある百人一首
わるい癖のむとはつかへ手をかける
御寺のは大根や神酒ですまぬ也
つくしぬきをれとはわるい叱りやう
若殿に道ををしへる大どしま
ちりめんをとり蝿にするやりてばゞ
定家の門にうぐひすないて居る
白石でせんをしてゐるまつの内
杜若いたまぬやうに公家は折り
御師のとも岩戸をひらくはさみ箱
毛せんを立つてちやうだいふかく入り

一に富士二に鷹の羽の夜討なり
小田原の魚を裾野へかつぎこみ
わづうかな毛をすッことす惜い事
駕かきがかへるで牛を一つぶち
釣道具おろして松の木へのぼり
天蓋屋笑つた人につきあはず
男にもふり袖を着た御寵愛
强飯とだんごをふかす賑やかさ
どうれいと黒ン坊の出る十三日
入り王に成るとさかなや助言する
しばらくは顔をたすける綿ぼうし
なんだなと壁土はたき〳〵讀み
仰山にばッかり外科はおこされる
つき出しをお嬢さまだとたれかいひ
後家のおしきせもりそだてますといひ
北狄(ほくてき)のために遊里にとらはれる
物さしで二つぶたれる迄くどき
くねへひッついたを侍從もぎはなし
鳥追をよこに彈かせて申いれ
日の出より日の入迄に下戸の禮

杉の上からもすんでに出るところ
釣鐘をもちやそびにする雨やどり
だいりでこまり入鹿を鎌で切り
大門へつけ人をして腰をかけ
いくらともなく聟の出るこはい事
太平と書くと和尚につみはなし
いらぬ事口取腰をぶッくじき
年よりはみな白ひげでまくつもり
もんさいがあつて若衆にだまされる
美しいはず一雨が一歩ぬけ
上下で大屋德利さげて來る
たもとにすがりては顔を見せなんし
あたりを拂つて毛氈うれ殘り
かねの禮歸ると跡で是れだとよ
きちやうだの歌書だのと取る袴だれ
木綿もやうを遣手出しいやがらせ
楊貴妃はかんせんぬひの上着也
貴公さまとははづかしい屆けぶみ
かんしんはすでに半途に出る所
配當に御用教へて叱られる

さる廻し吉野を三度廻るなり
金入れにとび金もうる不吉也
色をとこ引もくでする後家と戀
よう參じますまいと聟りちぎ也
お歯黒の小言よッ程口がさけ
病人のにぎ／＼をするけちな事
大三十日名作ものできりはらひ
祇園扇かぶつたやうな御輿かき
萬屋の地藏のまへで後家に成り
座頭の坊夢には見るが口をしさ
よく泣きなすつたと子守だいて逃げ
藏宿が貸さぬとだぼうはぜを釣り
來る度に錢ゥ／＼とせなしかり
手の筋を見せて尾張へ道をかへ
借りるやつ見えもせぬのにさんたする
鴻門のかへり樊噲くだをまき
洛中へ慈悲は三日の口ふさげ
眞崎でげにもさうよが二三人
金の生る木はぎうといふ人が出し
やつぱらが五六本來てどなる也

大平の向裏から菓子出る
桑酒をぐあいのわるい人がのみ
かつたいと棒打をする關が原
間男を御用百にて他言せず
泣きながらまなこを配るかたみわけ
はやり醫者乘つてにげるでひんがよし
烟草屋ぢやないかといふと袈裟に切り
もうちつと禱ると塔は又倒れ
取舵とよばつてお手を／＼也
江戸のまん中へ金創二人出る
和歌の家とて御預けも十七字
そのくらさ早太櫻につッかゝり
仲人へ不斷着で來てぞつとさせ
駿河町他國のものにはびこられ
きゝ酒のきげん櫓へこける也
漆かきの字一字で日をくらし
親をさへおん出すやつと座頭いひ
歌がるたよろ／＼ものでけいど入れ
もてるはずなびく橋から乘つて行き
うけつけぬお針つッつとこいですて

鹿をどう／＼／＼と引くばからしさ
草さうし迄もとりゃげる始皇帝
堅い後家なぞをとくのは不調法
宗と鹿の子を仕切る揚屋町
愛敬娘そこからも爰からも
糸の無い三みせんの出る宿下り
四郎兵衞あたりなべかまとりちらし
雙六を禮者おどけて一つふり
二つ三つ袋四丁目迄あまり
じつとして目見得は狆にほえらるる
唐獅子の方は象程粹でなし
けつ王はいさめるに引事がなし
綿摘はみの虫程の音をさせ
ゆび折の門に赤子の聲がする
小百萬石も霞の中に見え
突出しのしるし額で人をみる
蟄居でもたくさんだのにたゝむ也
畜生正直めかけの親をほえ
あはアれな聲でうたへと子房いひ
おちなんとする事後家はあまたたび

座敷牢出入の大工辭退する
小袖ではないと藥師寺にがわらひ
大當りけんくわ幾つかつかみ出し
申入れますと禮者はこばすなり
むきものへ土肥の二郎は口がすぎ
臈たけて來ておいらんの苦勞也
巳待でも無いのに夫婦共みえず
さかすなよ針が有るよと母はいひ
むねがにごらぬで鎌倉へは行かず
正月もをへたにじゆずを切りませう
吉原へ行つたとやぶれかぶれ也
毛延壽羊位はしらん顔
一國せいばいで息子はかみ切られ
生醉にまけて大屋はあすのこと
かくべつな事琴借りるふみのぶん
松の內つみ草に出るせちがらさ
ぬがせると腹をたゝいて小僧逃げ
尻ッぽを引き〳〵繩をなつてゐる
談しなよ聞きやせうよと逃げじたく
來なんす氣なら來なんしとむごいやつ

數千兩出してしぶといものをかひ
けづりかけ子をさし上げてもぎらせる
扨吉原を見ましたと母はいひ
息子の氣のかたに白猫をかはせ
初に下女置いてやたらにしかる也
蟬をしばつてと仕事のそばへ來る
すめぬこと若後家五つ指ををり
釜の下の灰をたがひにあらそひ
湯灌する所を四五ヶ所持つて居る
夫婦のとり組み晴天七日なり
人魚を買つて來て汐干不首尾なり
母じまんやれそッからもこッからも
下女腰をゆすぶるやうにもんで居る
女房うるさくながしてはなりやせん
重ねては間男をせぬはずですみ
つらいお酌だとたもとをぐわさつかせ
わたの師へ母どなり込むむづかしさ
卜者へ一人六鄕へ二三人
ちよッと顏見ては蹈鞴へはふり込み
ひげをくひそらして陰間後家へ出る

一日も添はず千日寺で死に
かたみ金今はあだなれ陰間買ふ
おいらが子だとこじきだとよめの評
をしい事袖を通さぬのが十九
うまい事むすめのしやくの相手也
太刀をくわらりとなげ捨てゝかしは餅
やきものをふところにしてよゥろよろ
目かいは見えねど千兩役者なり
北の六鄕は黑羽二重で越し
だまかすと無心におろかなかゝ有り
せめて一腰はと猪牙へやぼな事
此頃の雪でときばるたづなうり
どうやらかうやらどらものに母はする
笑ひなんせとかりた子をあやす也
一口に五六人うる花のくれ
貰三を生醉の時かひはじめ
直の出來ぬ門で女衒一つぶち
なつかしくゆかしくそして金と書き
その疊さうで大門かつぎ出し
車に醉うて大內のわらひもの

ばかな事娘にきんをけられぞん
高の師直と鰥をわるくいひ
下女亭主帯ひろどけで〆られる
素見物晝寐して居るばからしさ
御つまりさうで置きに來る金屏風
女房はすつぽん女郎お月さま
牛若ははらッぷくれとつれに成り
泣いて居る嫁土藏から目つけ出し
茶のみ友だちで祐信苦勞する
よこ合が出て湯治からはだか也
ふきがらにつばきの出ぬも難儀なり
江戸の疱瘡に草津のさゝ湯なり
われ二つおれ一つぬぐ大三十日
まきをわる分別をする水ぐるま
女房が留守でながしにわんだらけ
土手のだんごやは素見の心まち
生酔はどぶでぬき手を切つてゐる
三條の右衞門ぬす人めか無い名
たしかお熊はこゝらだと餅を喰ひ
ぶきげんな所へ回向院ぶつしやう

鰻屋はむごいといふとはらを立て
色をとこ好物ものでせめられる
切ぷくとにげ廻るのは聟とすみ
ちゞれ髪ものにかゝりが文をつけ
明け七ツ時分熊坂手をおろし
名代のていしゆ茶見世に大儀さう
錢ッ切りぶてと親分異見也
沙汰なしに拵へなさつたわとは無理
ぬるま湯を辻々でうる暑いこと
長くして一本かしやれと吸付ける
百八十四文さんまの膳へ出し
をかべやは仕合せものと奥でいひ
三國を聟ころばしておッぷさぎ
末世迄あかしの浦で目をさまし
一御殿斗り古郷へ花見なり
五百人げいの脊中を見てかへり
はかま禮たとへば一騎にてもすみ
猪牙で小便千兩も捨てたやつ
約束の首とりに行く大三十日
つむりからまくる朝寐は女なり

朝おきをして一人ものてれて居る
あたりを拂ふ出たちへかごいかご
十手のゆびさすはこゝろまちといふ
三ぶとん坊主禿のかたをこし
三味線のみね打わるい御酒のうへ
こはくないおやから貰ふみゝだらひ
男はの二文も無いと出合茶屋
初がつを一月息子しかられる
油手をあらふむすめはえりをする
加賀絹のゆもじに祇王祇女おされ
おとなしい後家に四五人はらを立て
つまをこふ鹿がえらみのじやまに成り
目くらめとしうと御樣を悪くいひ
ほゝへ手を謡の時もあてるなり
夜着布團大じやもつらな客がくれ
鶴の日に在鎌倉はみんな出る
高尾亡靈もみぢ見へのりうつり
坐つてて嫁は着かへてずつと立ち
猪や猿またいで二人しのびこみ
そろばんを一文なげて置き直し

木のそらで追人の小言聞いて居る
一人ものからだ見やれと縫つて居る
今行くとはだかに成つてたびをはき
かんざしでしたとははでな突目也
さうはいはうが小短かく書きなさい
上の句は龜菊と義時が事
きんてつの侍えんの下に居る
いけにへの親は手あしでなげく也
かやぶきの土藏を庄屋三つもち
死んだ後(あと)扱かはりてのその多さ
代みやくに聞けばくすりとめし斗り
をどり子のひとり兄さまたいこ也
大口をきくのが後家のすがれなり
一長屋出刃庖丁で寐ずに居る
ばあさまとぢいさま寐ればねたッきり
市戻り手桶をぬいでじぎをする
琴爪は前の方からはえるなり
おさいせん内儀むねからほじり出し
銀ぎせるおとし張りにはよし給へ
神さびるはず此頃はばゞア舞ひ

素見に向顔をなさぬきつい事
どれ程なことか孔明首をまげ
後家の流産はねられたやつがふれ
向うの人の無いとこへ下げられる
あいさうにいつたのだのに平をかへ
來べき宵也さくらから毛虫下り
花よめはその頃といふ病なり
お妾へとかまり立ちも二三人
中の町母のぞき込みのぞきこみ
鼻毛ぬき〳〵細見よ細見よ
何申しやせうと御用百にぎり
下女いやな目で切れ屋さん〳〵
御大法通りまたせる初會なり
鬼の手をたがひに出して酒をのみ
ぜゞの無い本多が來たと遣手いひ
師匠さま我居る所はへりを付け
今下山今鴨川と六位來る
人知らず羽武者源氏へかせいする
文道で三位武道で女房なり
かまくらの光明江戸か京へさし

錦木をもみぢへだてるむだな事
しはくない事が公家衆へ御饗應
魚店にかりに居にけりはつがつを
子ぶく者は一月(ひとつき)置いて又たてる
舟宿にかむろ筮を拜むなり
氣のきいた女は華陽夫人也
女房にへつらひ過ぎてけどられる
ほとゝぎす花嫁ものをいひはじめ
五畿内はうたひの中をあるく也
もみうらも男の着るはのりをこえ
入聟のつらさ花なら花ッ切り
馬のはるびがのびたのにどうに上げ
くわッ〳〵といはぬ斗りに遣手せめ
添乳して後生だによときせる出し
はらむのを嫁方々(はうぐ)でせつかれる
ひなの座敷から男はおし出され
一夜(いちや)の榮華粟餅のみやげ也
みんな人參にとけちなかたみ也
よく人をいためなさると出來かゝり
田町ではそる衣紋ではのめる也

追手あばたへおめへでは無いさうな
はねられて貞女様だをしほに立ち
きやッといふむすめの跡を蛙とび
聖人の代に木食が二人有り
常盤橋御用の女郎通るなり
末吉で緣についたは妾が母
下女肌を入れ／＼どうれ／＼也
不承々々に仲條へ納所行き
門がやかましいで壹歩貳朱が買ひ
いゝ姑本のいびきをかいて寢る
小判は口のふたにする形也
きせはしませぬとよい夜着かりに來る
こはがつて娘半分なびくなり
腕のない男の通る常盤橋
みそこしを御用うざ／＼頼まれる
笑顔まで傾城はこしらへる
あてにしていんすはいやないんす也
口ぼこにかゝらしやるなと親父いひ
どれなりとおつしやつてはと若い者
百人で九十九人はへびにおぢ
旅は道づれ駒下駄で三四町

なぶつても猫のやうなる勅使也
出來合の表徳伊州々々也
根津の文もちろんの事釘の折れ
よし町なればよけれどと納所いひ
ゆめに見た內へ頓死は入れて置き
淸水の冠者喰つては寐／＼
江戶町は京町のいろうばふ也
白魚を半ちよぼ出して嫁拜み
茶飯には成ると勘當場をかたり
ぼたもちで思出すのは他人なり
帽子賣うれいな顏もまれに見る
いけどりを先へひかせて八文字
千本もきせるの出來る猫をくれ
此夜具もつまりやせんとおそろしさ
釜じめの直を聞きに來るあら世帶
三番叟まばらな人に見せてふみ
藏掃除ひとりでがたりぴしやりする
鬼も十八だといふはろくでなし
四つ手から出ると三つ四つよゥろよろ
春宵一刻あたひは三歩なり

おもしろい日には傾城うしろ帶
ひなの櫃いぢると罰があたるぞよ
三またで難船にあふをしい事
あら世帶大屋を聞いて二人來る
ふし無しの商人の來るせはしなさ
人くらひ馬に純友口があひ
氣のもめる文で禿はたゝかれる
養由が一番弟子は日本人
松根によつてまどろむ禮の供
かとく公事おこり內裏で角力也
越後屋が出て切落し穴が明き
左衛門の太夫にも才藏があり
仲人は千日あまりうらみられ
ひる寐も人の目にかゝるその當座
金銀を置いて桂馬を闘孫とり
みめよからざるを杉戶へ立てかける
どぢやう汁內儀喰つたらわすれえず
京にすくない鳥百に一つなり
かきつばた今ぬすまれた水の色
いひわけのやうに牛にも鞍を置き

子にじぎをしへて内儀いとま乞ひ
銭がなくなつて大坂しまひなり
いさめると穴だと始皇おどす也
口留めをきれいにされる女郎花
大當り野郎尊者をおんならべ
はなれ牛ぶら／＼行つてとらまへる
仲人にかけては至極名醫なり
切口へ鹽のしみたはゑぼし疵
いしやがはなれるとぬき身を持つてかけ
夜着ふとん先づ呉服屋でもてる也
あきらめのわるいが後家を立て通し
おとなしくちやんとして居るワキの僧
吉原にござゞとト者さばけ者
もう一歩猪牙の板ごをはねてみる
おゝだがよ／＼とつめで戸をたゝさ
りんげんは皆龜菊が口うつし
生酔をやれ／＼／＼と落手する
元馬の出入からさと茶師咄し
鬼の出た門へ資朝あまやどり
氣づかひの無いのは女たぬき也

ふり袖のしがくにこまる俄雨
もむ内にどし／＼／＼とといて居る
一人客ひなづる丈と書いて來る
此あひだ鼠をたべてこのとほり
白子屋の跡餅屋とは思ひつき
しめころすぞよとおどかす大三十
おしなやとよんだをみれば男也
一番どりうたつて歸る田舎色
使かと思やぬりものつぎものし
説教の太夫庄屋の嫁と迯げ
板ばしへ大根の金を入れなくし
門並につッぱつて居るいろは茶や
たいこもち身に引懸けてどらをさせ
どう思つたか聖堂でじゆずを出し
知れぬはず使をどり子やとたづね
あてもなくこくうにいそぐ素見物
不足した碁石にさるの頬を押し
ふんごみの女郎鬼一口にくひ
はまぐりをはらかのやうに上る也
泣くそばに女衒佛頂面で居る

鰒うりも十三日は黒日なり
うら門を左々とゆけばよし
はさみ箱には信濃をとあてて置き
幽王はこそぐる事に氣がつかず
日本ばしどこへ行かうがすきな所
あいつだに歸る氣ならと馬鹿亭主
日半日ねこをじやらして二歩とられ
らん留が能いと紹巴へ明智言ひ
前垂はもののいひよき姿也
ばゞアを呼んですみッこで見て貰ひ
持參金吉日に見るかほでなし
そして又味噌も玉さと猫間いひ
きんたまをねらふは男禿なり
箸と盆持つてきれいな魚をうり
藥箱あつたかさうにしまはれる
氣づかひの無い頃小町寺あるき
三みせんで世間をおこす寒い事
牢見舞卷煎餅や甘露梅
鵺が出ますぞと二位殿たゝき付け
四日とはたち廻らせぬ主の罰

川一つ越すと田楽石のやう
渡守一さをもどす薬箱
けふはいゝなと毛せんでぶつて貸し
一文凧は駈けて居る内ばかり
主馬でさへ舞うたと諍すゝめられ
三みせんでくへるものかと母はいひ
どらな子を阿保親王は二人もち
あら浪をのせたで舟にけがが有り
けいせいは格子の外も抓める也
海達し浪切り不動とはいかに
俊成に岡部それから憎まれる
仕合せは持つたが病ひばかりなり
離別した女房と並ぶ切落し
茘枝でも喰ふべき顔でさつまいも
いたづらな小僧鰐淵山に居る
繁昌な見世狐迄買ひに来る
土用が入ると景清の幕をぬき
宇治川はたのみに思ふ川でなし
ちんどくのやふな火で吸ふ鍋銹掛
五番目の彌陀は褒めしきらひ也

有髪では置きにくいよと和尚いひ
いたゞいて左右へわける神楽堂
だい〳〵で手をおつたのは高がしれ
ぬす人のたけ〴〵しきは袴着る
うゝ聞くよ先づはなしたと逃げて行き
辨慶はせめて小町はからむたい
あらかじめきくと盛綱ひつこぬき
小づくりな方が殿だと三浦いひ
ゆふべの一座にこついて通る也
高野山金持の灯にけちをつけ
くずの葉は何をいつてもうそだろう
坪皿をもつてかけ出す放れ馬
かせ〳〵をはりい〳〵でまぎらかし
めしびつをまたいで亭主しかられる
わたし場につながれてゐる放れ馬
くさずりにかゝらぬやうに巴垂れ
下女がせなたらひをかりてかき廻し
孕んだで相談すつか〳〵出来
黒土にするぞとこはいさゝばたき
人をよくすれば熊坂笠をうり

いくたてをいひ〳〵飯をかりてくる
重箱をゆすぶりながら禮をいひ
わッちがも行くとぶつさと松が岡
そらいびき心でわらひふみを書き
たんものをお熊一色けちをつけ
三筋町三みせんぼりの近所也
すりはり太郎ぬす人にうごかぬ名
其こつがらはあつぱれな醫者とみえ
子をあやすふりで夕べはだましたの
はて珍しいたいめんと土手でいひ
人をえらんで化物はおぶッさり
八日迄こらへろとさすやぶれ傘
奥行の無いごふく屋はあいといふ
神楽堂鈴をばねぢるやうにふり
うつくしさ淺黄さしつめ引きつめ射
五日後手つけを置いて傘を貰ひ
ぼたもちのすりこ木置所にこまり
しんだかと思へばうせる大三十日
安産のはづ康頼を先づゆるし
清濁をわけてもてなす雛の酒

兩側にさほひめの居る茂草寺
だらで出る文の日づけはけふし也
こも僧のおし合つてゐるくどいふみ
左右から顔をたゝいてぬりたてる
さあおしを頼むと女房ぬかだらけ
出合茶屋何か女のしひる聲
うなづいた所化の跡から四つ手かけ
鬼が居りますと老母へちからつけ
あの顔でなでられに行くをしい事
春秋は池へをしどりおりるなり
一長屋いつちに成て餅をつき
旅だちの懲は一ぱいじやうに喰ひ
人のすくかつを宗清きらひ也
おきつねはたとへ化けても高がしれ
いん(飲?)水をたつて女中の芝居なり
了俊を用ひずまりが上手也
けどる事女房は神のごとくなり
ふきげんの癪ても直らぬひとり者
なまくらな武士に青砥はあわぬ也
にげる客すゝきの穗にもおぢる也

手をついて猪牙に乘つてる耻かしさ
その時の蒸籠島屋壹岐の掾
なでつけるやうに四つ手は汗をふき
祐經はころばし根太のうへで死に
前でよくなでてうしろへ嫁廻し
すばらしく照日の神子はしやべり出し
嫁腹のたつまいものかあまよばり
をしい事きりんびつこをひいて出る
白魚をかはゆいとゝと子にみせる
錢もあるまいにとむごい禮をいひ
けどられるはづ板の間へ二歩おとし
息子行く時に小道によらぬなり
追焚を見て謙信は小うなづき
むッとした文體のくる大三十日
まん中をあるくは本の醉でなし
藥ぐひ女房きせるをひつたくり
猪牙の文へんぽんとしてよんで行き
いつたらばいふ氣そとはへこしをかけ
又見さッしやるかと叱るくわいらいし
見くびつてないら藥に馬を書き

小便をするうち四つ手こしらへる
かざりもの斗り氣長によんで來る
二十日過今が座頭のまなこ也
大黑は金の入るときふりあげる
六玉川をんな六部は五つ見る
勝つた奴紙と藥とのさしをより
布子のかいどりでびらしやら輕井澤
女房の旅は亭主をはなれ山
をかしさはこん禮のばん鉢がわれ
げほうめと申しましたと譏をする
なんぼべェしますとけちな紙びいな
じつていになると襦袢を五分ちゞめ
わつ／＼となつて亭主はぢをかき
紫屋人目が有るで念を入れ
もし／＼を三筋でよぶのひんのよさ
目の玉をおし込んで置く雪の朝
ひなわけに母手を出して呵られる
しらなみ／＼と袴垂おはれ
とぼ口を母のはいてる有がたさ
祠堂金見ては內大臣でなし

布團かい込んでゆんでに火繩箱
ばた／＼の間にどさりを一つまぜ
名代へうつぷんをいふけちなやつ
妾がはゝ内のしやうでんゆるさるゝ
なぶつたらえゝわさと下女しかられる
あんまり御やみくもさまと御ざう言ひ
おれが弟子とは仰山な女郎かひ
ぶちぼうでとなりへはこぶ猿廻し
どうか持佛はなささうな呉服店
おしやかさまさへと團ひは學者也
輕井澤太夫もえたつあかねうら
豆がらで豆をたき／＼ひなわける
かたきうち親と主とは雪とすみ
新まくらをのへのかねのおとす也
庚申を嫁の開くのは目立なり
にくいやつばらだと玄關番はいひ
吝嗇な後家山わりで茶屋へ來る
ひれふして仕廻ふと茶番々々也
あやまつて居るうち春にあらたまり
目黑から十月かへるふとゞきさ

書置を見れば不孝も知つて居る
撿校のかつを三だん切れてなし
成ッ丈おつかけてみる切れた凧
白晝の四ッ手こじりを二本出し
摘艸の商賣人はみかんかご
留守かなとみくびつて來る大三十日
八日には楊國忠へ加増なり
生馬の目を秀郷はぬいた人
ふり袖の次にいくさの土用干
羽織着て降魔の利劍一本さし
びり事で伊藤がたちを御しくじり
まひなひをきゆうせん筋でつかむ也
二十軒茶がたけなはにおよぶ也
弔につき合づくがいるものか
忽然と日濟つらくせ惡くなり
嗅いで見て小田原町でしかられる
うろたへた女五山をあつちこち
鶴龜をなでると仕廻ふかゞみとぎ
いかい事おばさんがのとしりをわり
松過の禮者米斗ッつける

せつかちと見えてぬれてく俄雨
三みせんの外に根締の能い女
出合茶屋何か男のわびる聲
ほつくり往生今日休也
雙六のそばに茘枝のうづだかさ
かんにんがじまんで出した居酒見世
見ましたは細おもてだともめる也
大三十日いじかりまたのたのもしさ
角兵衞獅子じたらくで無い姿也
大學ををしへ切らずに越して行く
おもだかを神農よこに睨め付け
引ける迄ほれ殘されるつらい事
なぜ雨具よこさぬといや降りませぬ
あらかじめさとつて女房へゝん也
素讀など不可也として息子行き
ずつと差上げて拾つた文をみせ
うら店で去られたやうに下女さがり
あの一座とつてくらひと遣手いひ
父をしへざれど愚ならず使ふなり
たなつもの持つて折々せなア來る

生酔にあした斬りやれと納めさせ
ぶりがれんまねるで孟母店をかへ
をかひきをして五大院しまはれる
新道の邪魔は格子のはらひ物
武士はいや町人すかぬいろは茶屋
冬のとりつきが湯番はいやといふ
信濃者だれか本田に結つてやり
五百生手の無き人に南女する
五二ぺたのさいを東海道へなげ
長髪(ちやうはつ)でよわそうなのをおびやかし
つけ届けせぬとづるべをとり上げる
不届さ旅宿をさして家を出る
銭のあるふりで居酒をのんで居る
直貫へ土手の物騒うつたへる

戊春角力會之部

桜島に人ッ子もなし十二年
鈴を持つたで安くする緋の袴
先(せん)の方(かた)おかはりで見る道成寺
百二十九たちをれる〱書いて出し

櫻木連　柳止
登　連
柳水連　同潭
四谷連　五雷

他人づき合をして居る長崎屋
傾城は床へ這入ると氣がつよし
をしさうに娘額を二つなで
大騒別れの情はねからなし
わが顔に見あきて加賀の國へ行き
押込れましたと茶わん借りに來る
四所が火だに居眠るむごい事
いろ〱なけだもの〻來る親の留守
ちやんちき〱といふとぜゞくんな
番頭もうなだれて居る下女がもめ
後の母は〻とさせうでもめる也
その沙汰がちら〱有るに入りびたり
江戸染一たん價千金なり
商賣を身にしみるやつ指を切り

髪が火とひなたの火入をしへられ
鼻毛ぬきかたくつかんでばかなつら
初の雛亭主さわいでしかられる
友成は道草をして名が高し
雨舎りちよつ〱と出ては濡れてみる
むらさきの中に出家が一(ひと)やすみ
猪牙のへど空色かゞをらりにする
おさらばをあいといふでもあるまいす
板の間で數度もんどうの甲斐もなし
關取と嫁同年でをかしがり
その直では袷があたらしく出來る
手かちさは娘出るたびつけられる

目出たい柱へ女郎をしばりつけ　伊呂波連　冬印
雪の藥取引かへしてことはり　四谷連　五連
名月やくらい所は見世ばかり　娘松連　千里
松過ぎの禮は飴屋に口をきゝ　櫻木連　柳止
あばたが押へた闇男は命づく　四谷連　五連

たそがれにいの字の續く芝の町　羽衣連

三聲づつい〻聲で呼ぶ松の内　高根連　志柳

山下門から大きな鍋がみえ　四谷連　五雷

かぶとをぬぐと宮がたは坊主也　伊呂波連　千里

十五日天竺のいしや七をなげ　榎木連　冬始

しんちうをさげ山下を娘行き　同　其林

大紋をのせることしの渡船　伊呂波連　千里

とつぱひやろからみてゐろばからしさ　同　冬印

いつぞやの梅もうそだと喧しさ　初瀨連　五扇

月ふたつ息子社禝をかたむける　柳水連　雨譚

頷いたッ切で出來ぬ三つぶとん　榎木連　冬始

袖口へたらりと下げて後家は出る　四谷連　閑々

四五日は歸朝の口にまめができ　羽衣連

お釋迦樣と同木の下駄が出來　伊呂波連　千里

あいちつとそうもと內儀言込める　眞砂連　仙郎

田の中へ高い手足を入る〻なり　柳水連　雨譚

一里塚先に美人が二十人　榎木連　冬始

あまよばりして鎌倉で呵られる　初瀨連　五扇

袖留に牛の際迄つけとゞけ　羽衣連

猫好きもをとこの方は金がいり　登　連

うろたへろふりが上手な中の町　四谷連　五楽

年男をんなをみるとおどす也　筵松連　蔦故

おそろしい首と途中へ捨てて行き　榎木連　梅風

上らんとすれば衣が邪魔に成り　登　連

大きな男ふんどしをねだる也　榎木連　冬始

鹽やきと木こり和漢の因果者　柳水連　雨譚

下手さうな醫者葬禮へみえる也　榎木連　冬始

按摩とる內ぴい／＼を袖へいれ　同　大柳

年も顫みず楊枝をばゞアうり　登　連

いふ口の下長芋を下女は折り　四谷連　五楽

蒸籠へはひずり乘つてかへるなり　柳水連　雨譚

かうした原田だと伯父御のわるだくみ　榎木連　梅風

ひどい事すゞやつぽ／＼鳴わたり　柳水連　玉簾

御立だと長兵衛早太ゆりおこし　伊呂波連　洗路

藍で隈取つたが先へつかまれる　四谷連　閑々

安永七年戊三月吉辰

催主　星連堂

補助　薩秀堂

誹風 柳多留十三篇 終


十四篇

誹風

柳多留十四篇

ゆびをさす方へひろげる乳母か傘
下女をさし置て娘に茶を出させ
つはものゝまじはりもする娘也
手をとれば生醉とかくふりはなし
他人宿とつて輿屋のむすめ出る
四つ手うぬ待てと生醉二町跡
入る時に成つて尋る嫁の數珠
座頭の坊山ほとゝぎす初がつを
鬪も無いはず御二人で小百萬
乘合で皆のぞかれるくわいらいし
猿猴が月だと逃げるけちな客
あんどんへ寄懸るのを下戸とらへ
ほぐれ口唐机にて文を書き
大道で生醉金をかせといふ
こりやア馬こりやアきりだと呆れた子
おいらも出ませうと女房いやみなり
烟草入たづねるふりでつめる也

太神樂仕廻ふと獅子をしめころし
御女儀の御無用と塀でたッて留め
をかしさは素見紅葉を買つて出る
姑女の盃よめの紙でふき
めしでもくひなとわびことかへる也
今度出やるとさう云ふとぬるい母
なぜ急にいるえと女房鏈はぬ也
方々へ無沙汰だらけで母に成り
ひん出してくんなと賴むせなかの子
女房は風月の友をゐるくいひ
おめへがた欲をしりなと遣手いひ
御國からじよさいのないが昨夜つき
鶺を可愛さうにと母ゐがひ
冷飯のぎんみがすんで米を出し
見當を聞いてぬかみそ亭主出し
人もをしとは龜菊が事と見え
客まさにやらんとすその聲かなし
怪力亂神のかたるたいこ持
かくあらんとぞんじ羽織持參也
あの四つは六鄉さまと四つ手かけ

四つ手かご札所をさけび〳〵かけ
五條坂合羽屋の子はうんがなし
蠟燭に似たものを出す百旦那
團ひものどかぐひしたりかつゐたり
つらい事素見の思ふまへもあり
冥加錢出して嫁女をそしる也
あるかくなうそでは女房もうくはず
松の木の下へやつぺし張つて出る
兩眼のあきらかな聟二人とり
暮のさま廊上下ではなすなり
やもめでおくがふびんさに金に金
勞咳が二アつ來たと天蓋屋
十二ひとへは急度した鞠のじやま
上總からしつせいたんの風でのり
親に拙られては娘よろこばず
撿校も出來て乞食もその夜出來
四十一で持つて一つ家一人ふえ
かどみのゝのゝ字をぬいてときに出る
おぬしゆゐどろぼうよばりされるはな
もうおれもよしにしましよと子房逃げ

見物の宵に寐かねてしかられる
何ばかが城を枕とどうろどろ
せんどのもこないと御用立つて居る
にわか雨首かせなどて通るなり
よしのとげをれこんで後家大さわぎ
三會目もつとこつちへ寄りな也
牛はものかはと陰間へ局いひ
花も少しはとむくじる銀ぎせる
うかれてるつらを見たいと女房いひ
耳のあかほり／＼顔をよつく見る
羽衣をうたひ切るのに女郎來ず
ちよつとしたちゑ駕かきに道をきゝ
朝がへりうしろめたくも茶屋がつき
とりつくといはれて息子こまる也
ほうふりとごぜに御ざうの役ふそく
目黒からいひわけの無い品が出來
うどん屋のばゝアくぢらのはなしする
をしい事よしざね外科にかける筈
品川のもん日へんがへ妄語なり
宮島のけしきをしやべるきつい熱

百も貰ふ氣で淺瀨をばをしへたり
秀郷はみかどのやうなものを射る
出合茶屋かり人は御ぜんかごでより
おちぶれるものは鰹のねだん也
ふみや／＼といふほどに持つて出る
品川のうそは古川藥師なり
再會をごして大門からわかれ
おたふくめだまれと持參しかられる
容體書に猫などをじやらし候
おさらばをしなと背中を乳母からげ
まれ人も御らんずらんに眉間疵
遣手のさいそく頂きやせう也
小侍えらい中ぬきはいて出る
ようしをるさかいと手代はまる也
かけ落のひるはやつぺしまがる也
ごふく屋の子もそこくらに二三人
瓶菊が内に宸筆あまたあり
着かやれといへばわんばうぬぎおろう
袖の下遣ふれがひは雜司ヶ谷
行たがる外にわる氣の無い息子

品川で狼之介とんだこと
しやうばんに信濃もさんりするゑて立ち
雨眼くわつと見ひらいて親父まち
見せた外科見ると内儀は逃る也
大門を搗屋と這入る屋形者
母異見よや／＼をぬけにいひ
相違無いさろでかつぎは持て行き
肥取(こいとり)といふなあの内儀の兒だ
いつたいは下戸さと赤い顔でいひ
傾城のひつたくそをば百でうり
目出たさは武道勝利を得ざる也
のぞまれて嫁一本はめ二本はめ
花よめのみやげは里へ生き如來
食傷を隱しおほせて御師を立ち
さるものは日々にと後家はさかん也
民のかまどを見おろして四つ手かけ
田をうゑる嫁泥中のはちす也
惡筆へまつてくれろは能書也
品川の藤澤どまりあまりなり
どこへ御輿をすゑようと土手でいひ

川中をわらぢであるく筏乘
いろは藏いつちそばのがかの字也
藥禮をふぐの小言でつゝむなり
叉銚子言葉と母にしかられる
勘略は融の大臣きらひ也
競馬最中はなれ牛はなれ牛
芝樣のお入と太鼓なりわめき
鎌倉へ行く前川へすでの事
ねぢけ人もみぢ迄來ていやといふ
松の木の下できぬ傘しぼる也
お物を御用立て候傘と書き
生醉に嫁どこへでもあがる也
かぐはたは座頭みるめは松ゑもん
お秀さんどうだと楊枝見世へ來る
年に二度でつち呵責をまぬかれる
ばからしい病氣女を見るも毒
三輪の神あげくのはてに無心也
豆めしのくひにげをする諸葛亮
こいつだと孔子をうしろ手にしばり
首斗りゆゝしく見える本升屋

どつとせぬ神子で神さびわたる也
しりみやをあらつて息子內へ入れ
穴ぐらのはしごを引いてあやまらせ
もうわらふまいと新造かしこまり
歌もよんだりふせぎをもあそばされ
紀の國やみかんのやうに金をまき
仲人はやれ幕をかせ琴をかせ
越の傘かりてちじよくをすゝぐ也
大內のふはむきになる飯をしひ
腹の中迄も見て來た達磨也
一日にたらぬ仕事へへびをまぜ
愛敬を遣手のこぼすいたひ事
京都から見ればかまくら赤子也
めしびつをかくすが母の大おこり
れいしよりだつきはふりがきつい好き
安藝殿ははむきがいゝと源三位
琴の上ねぎをいつけてにげる也
舟迄もほッそりしたが息子好き
大なんぎわんを出さぬとべそをかき
妾が親來てはしやうじをつッ通し

御一笑々々々內儀がきさん
古着ばッかり買ふやつは濡れて來る
繼子こんじやうな餓鬼だと遣手いひ
素見物小見世などへは目はかけず
仁和寺の化物脈を見て貰ひ
犬坊はかみつくやうにくやしがり
死馬に針きんつらが異見なり
手紙よむうち仕切場にてれて居る
ちと內へへめぐるべいと息子いひ
袖を留めたが本寺迄ぱつと知れ
あかるい所へ持つて出る彈きならひ
金をふやすのが琵琶より妙手也
下女が笑ふと產所でもしえ〳〵
鴉しよつてかける向うで茶字をぬぎ
どつちらが利口か土手で別れたり
かけねなし一山三歩づつにうり
當分はかしま參りと母はいひ
子曰おふくろをあやなしやれ
馬の行く方へのつてく俄武士
蔦の葉をひつさいて嫁どれにせう

お妾をそしり座頭でくちはてる
はゝアきやつめだとかんづく旅歸
神樂堂夫らしいへぶつつける
捜されてくすぐつていと子を返し
是はあさ是は靑二とわるいやつ
妾にすんだ沙汰聞くと金主來る
そこらぢゆうさわがせ這入る初のどら
珍客と見えてとうふを繩でさげ
をしい事かまよりよめがうづもれる
をかしさは皆がねらつた後家が剃り
何が出たかのぞきの子ども笑ひ
九年母とひじきを下女はかさへあけ
もはや置かれず十を六文〳〵
こはそうに後妻ひとつぬひ直し
むりむたいの所に呉服屋の庭
火の見櫓の正面が三歩なり
配當のねだりにうせぬ嫁をとり
柿こづきを聞て醫者にしかられる
わるごすいおかみさんだとぬかやいひ
口說く奴おぬひがそばでじやまがられ

ちんぼこへ火がはねるよと鑄掛いひ
ぬか袋下女は目鼻をつかみよせ
人をくみ出すと井戸がへ仕廻ひ也
なんぼぺい出せばおろすとせなこまり
柿ぬす人めを見つけたとしりをふき
ばかかたい子だと妾の母しかり
晝三の一ぼくつれるはやり風
死ぬものゝそん女郎やはうかむ也
口をそろへて江の島へ行つたぶん
旅人のぶんは杓子であてがはれ
花ざかり一日をとこ世帶なり
たからくらべを嫁がする暑い事
女房と相談をして妻を去り
にげ込むを見てをかしがる歳暮客
張りものをする所へ濡れてかへる
盃を三みせんひつたくつてさし
かん定づくで疊のうへのを買ひ
格子からそりやなげるよと甘い母
袖で口かくして茶臺ふり上げる
やむ事を得ずこのわたをみんなのみ

鼻うたでぜんぢやう門をかついでく
俄雨ひるねの上へはふりこみ
下女がこと一日おりんやかましさ
蚊帳釣つた夜はめづらしく子があそび
どうぞして仕廻つたが後家ちゝが出る
樽拾しやうじんおちにくらはさせ
もうことし二人かけおちわるひ内
法事からはじめてとまる里の母
嫁の生醉御守殿をひけらかし
まどへ來て遊子々と呼びいだし
をかしさは素見の女房りん氣なり
因果なやつだなとすて子あやす也
安い調伏足あとへ灸をする
目見えだと見えて小袖で給仕也
うるさゝはあねえどうぢやと腰をかけ
となり棧敷の饅頭をねだる也
平皿をふたッつつける極こん意
わんの中からまゝ母の顔を見る
村きほひつくり酒やをぶちこはし
こはいものなし藤澤へ出ると買ひ

もの明る御用時をうしてみる
ゆう二首たとうふ目さゝれ五六人
まんちうへ小僧だまつてゆびをさし
門出(など)に坊主にあふがたづなうり
おこまりかなと雨ふりの子をあやし
素見さんそれぢや千住と笑はれる
吉原見物ならつておまるぞへ
梅若へ行くのはうそでよしにする
ない三みせんは太皷のかわではり
たらちねの爲にはらからをどるなり
たつた拾兩きんしたとふとい事
くたびれて供のなき出す安禮者
下女くぜつ布子のそでをしぼる也
人參は行長どのに見てもらや
一國な所と田町の床でゆひ
酉の町江戸をくらつた胴がみえ
なきながら奉加をかへす樽ひろひ
ぶつまねはにぎりこぶしに息をかけ
かみゆひに成つて景清ねらふはず
おのしもぐるで瞞しやると御新造

江戸のまん中へうろたへもの二人(ふたり)
りちぎまッぽうなつらにて豊後節
こんこちも無い事明恵おもひたち
是からはおれがすきだと三日いひ
二つどうぐらゐは直きと子房いひ
一人者けちな出合ひに借りられる
へいごしにをがむ〳〵と下手の鞠
加茂川の水でもいかぬ色があり
お講のまへに面白く一度着る
のろものは落ちをどろものころぶなり
餅見世のさわぎ背中をくらはせる
公家はしをかけて僧正よびたてる
口がいやさに九代迄執事職
えんだんがしちむづかしく出來かねる
青ぞらのたしない時分ほとゝぎす
理に勝つて女房あへなくくらはされ
御発駕中に細見よんでゐる
供部屋に何疋ゐると料理人
ばかでやりやめのこがえゝと夜そばいひ
泡雪で又二三本さしをなげ

しやぐわん〳〵と野馬臺をたゝむなり
大きなかはばなをゝ馬のけつへつけ
藪小路いしやの住むにはわるい所
はやがはり半町からは凡夫也
もてぬ奴尻をいぢつて叱られる
養老の瀧まで下に〳〵なり
草木黄ばみ落ちてふこつけもなし
ロのこをはねて撿校金をかし
小兒いしや一つのきずはこはい顔
團扇ではにくらしい程たゝかれず
きやッ〳〵とないたが鵺は本(ほん)の事
又春といやるかと母墨をすり
酔ふとねやすと前置のそのながさ
上下でかみゆひしかりつけられる
たいまいの金を妾はさして居る
首數級流れるやうな大井川
くわい〳〵のくわいと下野さしてとび
ちとはやうあるきやいのうと牛を追ひ
かゝアはな去つたわやいといちらしさ
きついやつ衣紋坂からはづす也

義時は違勅のつみで御座りやす
尻を高くしてぶつかけ娘くひ
きぬ張でおひ打にするにくい口
品川のかたうでになる源五兵衛
官女が居ても名のたゝぬかたい寺
佛といはれたは妾一人なり
もろこしへ鱸もやらぬは源氏也
どろ坊となんだあなばたおつかける
一本傘貸して小言で内に居る
范增は血をはきさうな軍師也
三つぶとん嘘をいふならはしご也
むだおしを一日置きに紺屋させ
三年のふるきずをみる本望さ
御一所にいたしませうと平の盃
あぢな暁三歩の口はうれのこり
山がたとなりくだものがをしいなり
こゝいらへ見世を出さうと御針いひ
櫻をばどれも御殿の跡へうゑ
ゑをかはぬが鷹の羽のおちどなり
米かみのうごくを太鼓見つけ出し

添乳して棚にいわしが御座りやす
麥めしを喰つたかはりに求女塚
小田原を目あてに御ざうかける也
と出たところは素見とみえまいの
一人者やれ茶をくれろ火をくれろ
こんにやくと酢で仲人はあへられる
だましてもいけんとていしゆ外でいひ
かはらけへとなりの書物きざみ込
黒鴨をはじめてつれてふりかへり
母一人古い役者のひいきする
こはめしの腹で素見をしてあるき
玉虫のはつてあるくをせなアくれ
しりもち以來と秩父は和田でいひ
匙のえで襟をかき／＼かげんする
かみゆひのひまはおゥくれおくれ也
下女が鼻唄臺所の煤がおち
觀音は遣ひでのある佛也
五十てん轅のくりきに路地がこみ
藪いしやの德はにげるが目に立たず
留るなよ佛がくるといろは茶屋

どつからか御用きせるを出してすひ
出來合の武士うれ切れる松の内
資物だなぶらしやるなとぜげんいひ
青銅十疋めしも喰ひ酒ものみ
六枚でばッた／＼ところすなり
一チ女出世して九ゥぞくうかむ也
十四からこしやくな御子ともういはず
ふんべつが出ると女にいやがられ
紅葉とかけてうそとときつい事
そんならば湯でもくみやれと下女をつれ
見くびつた通り入聟しかたなし
せんやくで飯の食へぬもげびたもの
外聞をいせやも二代目には知り
神前迄はつぼとござ敷きつめる
奥家老おんぶしたよに乘つて行
持參金のみえい大津より出る
片ことをいひ／＼おやぢしかる也
どろばうもしばつて置けばはなしする
かはらけの供物いじかりまたてもち
でくの坊ベイ書きをると村師匠

賣れ殘る手のすぢだろと遣手いひ
數いしやはうきめをみずて世をわたり
是でやぼならと女房一歩かし
あゝら珍しやはこはい土左衛門
五六町跡で大きな御名をきゝ
三日でもとられぬものを明智とり
城をとは家老のまくらことばなり
ひとつ飛んだりとは袴着つるし上げ
屋根ぶからはけさきいぢり〳〵出る
じぎをしすぎて上下で二八なり
とかまるとそこら中から口が出る
一兩をつまんで見せてしまふ也
わんをふけとは花よめの役不足
夜がふけやせうのと口をむしる也
むごい事ほくろ程なる乳をたづね
先妻に世話をやかせた今の也
すり鉢を伏せたやうだに琵琶が出來
十二文のんで向うの顏をきゝ
じつていな息子汁かけめしをくひ
月見過手のかるくなるおぐし上げ

いけ慾の深いあまだとあばたいひ
おはぎ配つて置きなよと二度目いひ
ふりこんで來た後家たちのまんま也
異見ばなしに一人(ひとり)にげ二人(ふたり)逃げ
明らかな智惠に信長たばかられ
石燈籠つくばつて居て氣ばる也
聟用をもみぢの下でかぞへたて
旅迎かひこうしてゐるは損だわな
ねたふりでじろ〳〵客の相を見る
お妾のきんこうやたらはらむなり
義仲もつひには西へかたむかれ
髮ゆひはもとゆひまくともめといふ
にらませて置いてとどなる朝がへり
今時のめかけは金を見て笑ひ
大一座袴がついて安くする
すひつける内に柳が松に成り
水茶屋もすんで七所からもらひ
おどけのやうな事女房かへつてる
女房だと思ふが聟の不覺也
よきにはからへで賴朝役はすみ

生醉をひよつと押へて放されず
逃げたあと禿は醉つてたはいなし
見えてゐて行かれぬ處遠江
五つ緒の車はえゝが大喰(くら)ひ
行く時は紅葉で天窓隱す也
物差を嫁へ投げるは美しい
侍の遊び大小なげ出だし
海山を越えて行くのにさしてゐる
吉原へ行くわと亭主やつてのけ
下げにするさうで相手も髮を結ひ
野暮なことゝどこへ御出と土手でいひ
どりやおれも飲まうと乳母へたよる也
貴様とはもう〳〵いやと引つ立てる
母猪牙を上がつて二つ三つよろけ
氣の知れた菊石(あばた)を連れて出合茶屋
源左衛門跨ぎ廻つた所領なり
離山見得にする女旅
高倉はおいとしなげに抱き込まれ
伊勢の留守女房阿漕な事をする
いとあはれな聲にていちこいひ

百日のがれな事をいふ美しさ
焼けぎせるみだりに女郎おッつける
身をなげに今行きますと母へいふ
かねて用意やしたりけんぬくとにげ
かつたいのそばで孔子はよまひごと
吉原に居るに碧落までさがし
わッちをもう出してよと禿泣き
百旦那わざッとどらをあひしらひ
村のものしをえりぬいて門にねせ
關とりに赤子をだかせ大わらひ
百安に口から一歩出して買ひ
ほえるなよかなはぬ事とぜげんいひ
ふられても御きげんをとるひんなやつ
二つ三つゆすぶつて置く除夜のしゝ
旅がへり女房三みせんかくす也
歸つたを見れば箒もおそろしい
二上りで陰間ののどをしごくなり
承知しさうだにむかうのかゝアうせ
はたること都ていちまきいらひどい
お七どの茶をくさしめとけんびたひ
手のうちへ息子を年増入れる也
でんがくをしかつた旦那おとす也
ねぶつてゝ顏を預ける子煩惱
氣のどくでありんすねえとあばた出る
金うなりさうな苗字は角の倉
年々にかう申すから笑ひそめ
御番所を越すと彈き出す今のあと
二はい目の四つ手忍の者を乘せ
鹽釜の舊跡じゆずやだらけ也
命日も十九日さと母は泣き
中宿へ來るところもに紋を付け
七くさに遣手もをしい爪をとり
御殿者おあし車はいゝといひ
住寺さまばかりが男えらみせず
どッちらがべらぼうだかと起きて明け
うらつけを片々持つて四つ手駈け
すみッこでちよッこり出來る母の文
さかな臺としに一度は神をのせ
極月は半月やつてたなをあけ
毒水をのむ氣遣ひは女なし
奏問々々と國香の狀を出し
のびるだけ腕をのばして繩をなひ
てふあしの向うに日なし立つて居る
お腰のてうのをと根津のぎうがとり
わたし舟四十そこらと二十四五
黑札をまくとはけちな日待なり
江戸から京までのこらず素見也
千兩のうらは今だにつけてなし
米つきの足元を掘るいそがしさ
やかましいおれが雛だと母はいひ
馬の氣で車にのつてわらはれる
かゞみとぎ御部屋のくもり迄はなし
品川は釋氏ぢやう木な月が出る
むづかしさ野馬を臺にのせて出し
蕗の話で嘲弄されたわやい
母親の譯もいはれず聟にすね
烏籠へむすめを入れるむごい事
草庵の一町つゞくひなの市
蠟燭の心もえている土手の雪
觀音を道ぐさにする面白さ

おやたちの耳へはつねのせきばらひ

疊さし禿をだいて通すなり

そこから用をいひなよと出來ぬやつ

十四日すけ際も出たうわさたり

築地からついて來てきくいゝ娘

ほころびと梅で兄弟おちをとり

角大をのけ／＼けん／＼はひる也

一把づつ牛をいたはる黒木賣

わたくしが事さ／＼とござひかみ

亥年角力句合

人ひやくは上下を着た料理なり　山水連　文古

顔見世へ旅立のあろらんがしさ　玉川連　川里

廿八九にて世帶のめづらしさ　誉連　龜源

五町見て買ふのが無いか歸る也　伊呂波連　洗路

加賀ぼねをひらき西八條で舞ひ　玉川連　五扇

めつきりと禿まんぢゆうくさく也　井升連　金龍

こがね作りのさしもので奏出る　山水連　文古

渡し舟乘つて思はぬ人を待ち　櫻木連　律長

毛せんで伊勢物語よんで居る　杜若連　山壽

青螢籠へふり袖かぶせてる　櫻木連　西下

居眠をきせるで起すむごい事　御幸連　故雁

饅頭に目鼻がついてやかましい　山水連　冬始

薄で招いてはもはや惣人なし　杜若連　下時雨

奴ふみ臺でさくらへ手が屆き　錦連　水府

所こそあるに吉野でたゝき合ひ　柳水連　桃李

ほつぺたを寒くするのが一声也　眞砂連　五盛

せと門をすとん／＼で廣くする　伊呂波連　律長

けちな祭は人間がだしを引き　同　洗路

九はい目の茶漬の所へ猫間來る　玉川連　五榮

大のをとこが八人でしけを喰ひ　井升連　眞乳

宗匠へ蓑よ笠よと土手の雨　玉川連　五扇

豆腐屋が紅葉を付る譯も有り　井升連　眞乳

錢とりに二十二まいそめぬ也　櫻木連　律長

ひだるいぞせちを急げと爪を取り　柳水連　五連

踊子のはなし大きなうにこうる　牛込連　龜遊

にこついて一人か二人富場出る　櫻木連　駿借

後乘にそろばんの入る十五日　唐崎連　左秀

鮟鱇はきんたま斗り殘る也　錦連　二浪

おッと暖簾を賴むときのじ屋言ひ　井升連　八橋

梅の花二枝三枝武者が折り　杜若連　松翠

あごで蝿追ふやうな馬常世持ち　玉川連　里旭

雜炊の側ではたきを拵へる　山水連　魚江
凧の糸かへとからぬき五十遣り　櫻木連　木綿
釜底で米をといでる一人もの　玉川連　里旭
御膳籠から餅の出る月迫さ　朝日連　甚可
とんだいゝ間だのに娘うゥぢうぢ　御幸連　一甫
にくいたかのゑにはこまらぬが女　井升連　金龍

二會目

つねやるとあいそづかしな扇也　櫻木連　木綿
大三十日こゝろ苦もなく妾彈き　伊呂波連　洗路
隣の三味にたばこぼんたゝいてる　玉川連　五鶴
法螺貝は吉野の町をねせぬ也　風雪連　吉印
鶉へ押込んで仲人ひらくなり　玉川連　五鳥
吉野から猿に西瓜を投げてやり　風雪連　田道
浴衣くりやよと言捨てて嫁しやがみ　玉川連　左凌
櫛をさし直すが笑ひ仕廻なり　兜連　舍丸
つら中が醤で息子いやといひ　玉川連　川里
扇箱買風呂敷と百で出來　山水連　東里
美しい花をちらすと二十七　井升連　宮戸
渡し舟淋しく乘つて鑓を立て　櫻木連　淸江
戸を立てる前三夕の拂ひもの　山水連　木綿

二三げんよろ〱すると日が暮れる　櫻木連　長笑
かいどりに月をかくして嫁の禮　伊呂波連　洗路
船宿へ上下をつむ大一座　櫻木連　遊里
數の子くふなと上下着せて出し　同　芦露
扇箱買はうは違きはかりごと　山水連　烏鵲
彥さまァ我妻のうと石に成り　杜若連　下時雨
姉の看病も二ばん息子賣り　玉川連　五鶴
なさけまじりに酒の儉約をする　錦連　紀來
野郎の娘わがまゝをいひ通し　登連　文器
だゝくさな樣でも只はころばない　牛込連　鶴遊
澤山さいせ五さんでも片身賣　若菜連　永印
片あぶみまッかなやつを紺屋干し　玉川連　文車
張のなさ奴にも成り田をも植ゑ　山水連　木綿
たいさうなこまは念佛にて廻し　櫻木連　其林
しやうじん日もう何時か〱　柳水連　其水
酸漿をのませなつたとち狂ひ　御幸連　里蝶
品川のどらはやぶれた衣なり　鶴鶴連
あぶりこを嫁繪双紙であふいでる　御幸連　一甫
十三日富札の出るはづかしさ　山水連　花江
しひる時すでに兩方たつところ　井升連　金龍

おそろしい空だとたんす仕舞ふ也　柳水連　石斧
たゝき集めて二歩無いは駐紅葉　玉川連　五楽
なんぞ聞かうかと代脈苦労也　柳水連　石斧
新都では海ばつかりを請御ほめ　同　桃李
十月のとなりへ布袋見世を出し　玉川連　不浅
いゝ宗旨あたま丸めるぶんの事　櫻木連　出印
首の座へ出る氣で頼む剃習ひ　杜若連　五扇
しけかして鰹を二本半分くれ　櫻木連　靜鳳
にぎられた片手畳をむしつてる　風雪連　古泉
ひとりものもちろんの事持佛なし　伊呂波連　琴亭
手をとると片手で柵を深くさし　玉川連　鼠弓
うつむけに寐た傾城は手におへず　御幸連　歌選
俵のついでに鯛迄ぬすまれる　柳水連　石斧
此枝がほしくばゆびを一本づつ　杜若連　山青
鳴をしからうと囮のひなをほめ　櫻木連　南星
みろくからよめ百萬年迄にげ　玉川連　五雲
猪牙と車で薬屋は袴にきさみ　山水連　謳々
しん中を武蔵とう／＼祈りのけ　錦　連　水府
釣師にたのんで八百工面する　御幸連　舟志
急用であたまを持つてあるく也　山水連　啄梓

とつ様のそばへ斗寄るむごい事　御幸連　歌選
催しちや出られませぬと土手で言ひ　玉川連　四郭
胡麻揚の香ひが下駄におつけされ　朝日連　葛可
凡人の夜具とは見えぬ三つぶとん　玉川連　五鶴

三會目

奥座敷しらせて來やと鈴を振る　櫻木連　黒兎
ちひッさな羽織を貰ふ勝角力　朝日連　葛可
業をしぼると船は暮れかゝる　櫻木連　省歩
花よめの氣する三年過ぎて知れ　杜若連　五扇
來た晩はけつして他見させぬ也　錦　連　紀本
百からは少し手のこむ神樂堂　柳水連　石斧
紂王のどら人だねがつきる也　同　鳳頭
禮服で乳をのんでる十五日　櫻木連　出印
下總でいつた一ッこく百のころ　柳水連　石波
赤味噌にこけが浮いて丶呑める也　櫻木連　木綿
ちとかしこ過ぎてにくいは妾也　玉川連　左凌
けんびたひ佛が内へ入りびたり　伊呂波連　洗路
二つ三つつらをたゝいて白くする　玉川連　水底
さい人はこよりで髪を二つゆひ　御幸連　長笑
年禮の供夜ッぴてィねないやつ　山水連　鳥鵲

芋と嫁と一口交ぜにひねつてる　玉川連　文車
くたびれたやうにふむのが抹香屋　風雪連　吉印
師の曰玄關でどなれ／＼也　伊呂波連　洗路
下女小便に供舟へ手をあはせ　櫻木連　律長
大小はあれど直段は互角なり　玉川連　五鶴

四會目

江の島へとてもて參る三年目　玉川連　五丸
めぐり逢ふ迄は手の内受る也　柳水連　桃李
夕だちのあした鰹と傘を下げ　同　石斧
不屆な女郎官位をけづられる　玉川連　五楽
目をつり上げて鏡をふり上げる　櫻木連　洗路
三會目みしり／＼とよぢ登り　若菜連　永印
跡付けを持たせて藝者船へ來る　山水連　東里
禮に着て來たのを菱の餅へ懸け　牛込連　龜遊
面しよくをかへ丈ヶ長の禮に行き　玉川連　五雲
長事御たいくつ赤く着かへさせ　山水連　木綿
地廻が笑ひんすよとゆすぶられ　若菜連　春水
よめさうにしては短冊又うごき　櫻木連　小石
こぢつけた侍の出る松の内　鶴龜連　鬼頭
目をこすり乍もろかくあてゝ驅け　錦連　舍楽

大吉のみくじで不時の宿下り　登連　一和
品川の見立てちらほら醉て來る　櫻木連　黑兎
松の供ふだいおんこのつきや也　牛込連　眠狐
新造を宿なしにして義理はすみ　柳水連　石斧
涙はらつてねめ廻すかたみ分け　伊呂波連　洗路
のぞまれたうへに兼好不首尾也　玉川連　鼠弓
てうちんをうその名人どもをさめ　同　五雲
なぶられて逃げながら下女帯をしめ　杜若連　洗車
高尾からはつきりわかる江戸の張　玉川連　五楽
茶を仕舞ふ食たき見世へ聞きに來る　若菜連　春水
あま酒に少し氣の有る村まつり　柳水連　雲水
池の汀に鶴を折り待つて居る　玉川連　五鶴
五百兩わたすと首をなでて見る　同　文車
火をたくが下手で船頭呵る也　伊呂波連　琴亭
一人者味噌は買へども音はせず　櫻木連　芦露
十五年目でかきがらへ手を合せ　柳水連　石斧
えゝ聲でぶら／＼と出る暑い事　登連　淵鳥
一二首はもみぢのてりでえらむ也　櫻木連　洗路
かたい事袖より上の物をとり　玉川連　水砥
足のおやゆびでつめつて呑込ませ　伊呂波連　蔦故

五會目

い〻料理喰つて老女の舞を見る　玉川連　五雲
分別が出たかお針の邪魔をする　錦連　紀來
讀んでやる文は時々くらはせる　櫻木連　其虹
器用さは二月の末に京へ着き　若菜連　永印
歸らぬも道理緋縮緬をほどく　玉川連　五連
惣名代としてばゞア蕎麥の禮　山水連　木綿
むねんさはめくさり金をかりに行き　櫻木連　洗路
けどつてゐるに辨當の支度也　登連　淵水
米二俵たもとへ入れる運のよさ　櫻木連　洗路
七所を見い〳〵渡る瀬田の橋　伊呂波連　律長
四角なたいこ遠くからたゝかせる　同　五雲
田樂の方へ色めきわたるなり　玉川連　鼠弓
あいさうにちひさな袖を嫁はやり　同　五雲
三めぐりの鳥居思はせぶりにみえ　伊呂波連　濟至
古ぞうが名代に出る二十軒　錦連　紀來
ゑゝ男おんにかけ〳〵三味ならう　玉川連　五連
おとうとが來ると千兩すてる所　登連　文仲
脉をみるそばに四角な絽の羽織　牛込連　眠狐
きつい事猪牙が一艘のけて有り　玉川連　五樂
武士の生酔遠巻きに人が立ち　牛込連　眠狐
から傘をなさけまじりに高く賣り　登連　文器
石町の四つには雛の見世も引け　玉川連　田夫
死ぬこッちゃ無いと大太刀持つて來る　錦連　二浪
きれのちゆうけいを六尺腰にさし　櫻木連　其林
口説かれても胎毒をへがしてる　風雪連　古泉
安房上總ほめ〳〵二三戒やぶる　玉川連　五連

六會目

目を明きなようと乳をのむむごい事　柳水連　桃李
海邊にへびを四五日つかつてる　玉川連　五雲
何かしら有るとはけちな花見也　伊呂波連　五丸
松のかげばゞア一分ンかき寄せる　櫻木連　木綿
三味線を下げてゝよめをそびく也　杜若連　五扇
ひねつてはふると一曲舞ふとかや　玉川連　五雲
かごの跡二人で傘を一本さし　錦連　二浪
すご六なかば國忠さま御落馬　櫻木連　洗路
あばたとくしんで勘當ゆるされる　錦連　紀來
女郎のねだり事はきもが潰れる　玉川連　五連
ふけばとぶやうな婆アと仲人いひ　櫻木連　芦露
首尾の松あたり息子はゆすぶられ　錦連　舍樂

自らをかじるなまけた切おとし　鶴亀連　鬼頂
うは言のそばに仲人苦勞なり　櫻木連　横好
放し鰻もふといのを姑ゑり　玉川連　五雀
ちッぽけな席の上でどくを出し　伊呂波連　水砥
信用のあとであぐらを一人かき　登　連　文仲
はなねぢりとは名斗りでぶつの也　牛込連　龜遊
そさうな蜜柑賣はねこを擔出し　櫻木連　南星
餅ぐわしで見世を圍ふと女郎ふゑ　錦　連　紀來
どけへくこけへ行のと出られやす　伊呂波連　洗路
少しもふさでありけるは淺黄也　玉川連　五連
ぼうずいのなりだとおやぢ軍者也　伊呂波連　洗路
いゝ姑本(ほん)のいびきをかいてねる　玉川連　五連
裏町で藝子おも荷をおろす也　登　連　龜原
結納の前へうろたへもの二人　玉川連　男好

七會目

呉服屋は夜分のていもちつとみせ　玉川連　五鳥
たいくつのあまり荷物をしめ直し　柳水連　雲水
手のひらをなめてる上を時鳥　伊呂波連　水砥
切れ文を頼まれて來て一(ひと)喧嘩　玉川連　魚交
雪へとび込むが四人一歩なり　櫻木連　五扇
罰の當りさうなうそを女郎書き　錦　連　紀來
〆をかいてから氣まづい馳走也　風雪連　古泉
丸々の中を矢を射るやうに潜ぎ　玉川連　梅斧
しりも結ばず縫ふ程に出來懸り　若菜連　淺裏
かはをかけると鳴りさうな松飾　玉川連　五連
およしをかたづけお龜に聟をとり　眞砂連　五盛
顏を見い／＼よッぴいてひやうと射る　櫻木連　洗路
七つを打つと松の木がみんなひけ　伊呂波連　水砥
放し鳥こしのぬけたははふり上げ　玉川連　五雀
小ごとまつさい中に花が三文　同　吐雲
はやい事しなのがのぼり立てゝ行く　錦　連　紀來
鼻屎をとつて居るのと見立てられ　玉川連　鼠弓
麹町遠いところのものを出し　錦　連　舍樂
子どもの目には面白いねはん像　玉川連　五鶴
ひめのりと札とを持つて天狗來る　錦　連　水府
お釋迦樣立のまんまでせんげ也　櫻木連　旅狐
聟へ氣の毒なさしうり見世へ來る　登　連　文器

八會目

八月の大汐に客けつふかあ　錦　連　紀來
迯げただけ雛樣七分三分也　櫻木連　冬始

いゝ男はだかで弓をとりをさめ　若菜連　一口
つゞで袖ふるからごほり〳〵せき　櫻木連　律長
せちからさ息子生姜の市も賣り　同　五扇
間のよさは足をぬらして拜む也　伊呂波連　五雲
すめるものはのぼつて晝三と成　若菜連　淺裏
どろでこしらへた人間生姜下げ　牛込連　泉河
苦勞性母も吉原通ひなり　錦　連　紀來
藏の火を燈籠の灯へうつす也　牛込連　眠狐
てんせい息子くわつたつな買人也　櫻木連　洗路
蜘でも見たらよみさうな三歩也　伊呂波連　水砥
見とれたつらをけろやうな神樂堂　玉川連　五樂
女房のひが目にあらぬ櫻也　柳水連　玉簾
八疊に願つて母はしかられる　玉川連　五樂
ちぎれた歌を花嫁はくつ付ける　杜若連　梅斧
あいいやでありんすを聞き拔放し　牛込連　泉河
足をしばつて田町迄のみに行き　錦　連　紀來
御冊はぎちらこぢや息子まだるがり　同　水府
とぶ鳥もおち馬からも落る也　櫻木連　洗路
代脉こたへて死生は天に有り　杜若連　五連
あま茶な錢ぢやァいかね初鰹　櫻木連　木綿

よしときちよくたら二分づつ遣はされ　伊呂波連　洗路
時は今不二へじやの出たあした也　櫻木連　下時雨
情硬いやつ花道をつるされる　登　連　文仲
鏡ときぎらしいを佛供につれ　玉川連　田夫
ばかでいゝなどと息子は讀んで居る　錦　連　二浪
見えぼうでかけ廻つてるせいぞろへ　櫻木連　其林
金を貰ふにつき嫁がついて來る　眞砂連　五盛
占つて貰ひにあはゝ亭主來る　杜若連　梅斧
つらい事花筵（くわえん）のうへで四つを聞き　同　五英
ふきさするとは數の無い小袖也　牛込連　飄遊
おとりどんお近づきにと三會目　伊呂波連　吟之
わごれめは何ぞと淺黄大くぜつ　櫻木連　洗路
源三位鵺とむほんは雲と川　柳水連　玉簾
朝がへりきげんはよきぞ早入れと　櫻木連　其林
二杯目の四つ手智惠あるやつを乘せ　柳水連　雨譚
白ッぽく田うゑに嫁の目立つ也　風雪連　古泉
うら門でかの御經をどくじゆする　柳水連　雨譚
歸依僧で西國武士はみんな切れ　櫻木連　木綿
七夕（原本ノ儘）五分の口がいもにばけ　同　未勝
五六△下げくろん坊内へ來る　登　連　文器

石一つ神田の洒でおつぷたぎ　伊呂波連　芦露
せきはんのおひねりが出る賑かさ　玉川連　魚交
腰繩の櫛でなでつけからだふく　牛込連　門柳
ふゥわりと寐ると所作事おちがくる　錦連　水府
格子からはなして居るは無いの也　同　二浪
別當はおれだ〳〵と呑みに來る　櫻木連　蔦故
持參金おはぐろ獅子のやうにつけ　錦連　水府
のみをとるまなこは外にあると見え　櫻木連　五扇

安永八己亥春

東叡山麓　星運堂
催主　薩秀堂

誹風柳多留十四篇　終

庚子誹風柳樽五十篇序

〈壬戌年山之手組〈

六千余吟 伝んすう町 四谷鳳凰
三千五百六十吟 市ケ谷御門丁 牛込蓬莱
三千百九十吟 中坂 飯田町錦

千余吟 日吉町 青山眞鉄
二百吟 ●や丁 赤坂紅葉
[redacted]

〈同 芝組〈

千二百六十吟 永ざか 麻布柳水
千百六十吟 二本榎の木 芝水仙
三百吟 やげんぼり 両國旭

千七拾吟 三河丁 神田杜若
弐百余吟 売りうら 浅草若葉
[redacted]

〈同 本江下谷組〈

二千八百八十吟 未丁 本郷余木
千五百吟 四丁め 本郷清月
千七百吟 東山下 山下櫻木

弐百吟 片丁 丸山風雪
弐百吟 大はし 千住登
弐百吟 広小路 下谷伊呂波

柳多留十五篇

亥年山之手組

六千餘吟 御たんす町	四谷 鳳凰	三千五百卅吟 御納戸町	牛込 蓬萊
三千百廿吟 中坂	飯田町 錦	千餘吟 若松町	青山 眞砂
二百吟 ゆや町	赤坂 紅葉		

同 芝組

千二百卅吟 永さか	麻布 柳水	千百六十吟 二本榎	芝 水仙
三百吟 やげん堀	兩國 旭	千七十吟 三河町	神田 杜若
二百餘吟 新堀端	淺草 若菜		

同 本郷下谷組

二千九百十吟 春木町	本郷 名木	千五百吟 四丁目	本郷 古月
千七百吟 東叡山下	山下 櫻木	二百吟 片町	丸山 風雪
二百吟 大はし	千住 登	二百吟 廣小路	下谷 伊呂波

丸の内まどから犬をけしかける
ぶつかけを花嫁片手ついて喰ひ
おほそよと呼んで長屋で憎まれる
格子から目で見て鼻でかいで居る
つら中へごぜの子乳をあてがはれ
ぴん〳〵とおろすは嫁も居ぬ氣也
いよ〳〵のだん正宗に手がふえる
うづ卷が細引に成るはなれ馬
文の先禿そろ〳〵卷いて居る
花よりはだんごのどらか大きすぎ
借りて來てゝうち〳〵を嫁指南
宿下り兒を二かいへぼいあげる
こはい顏したとて高が女房なり
百すると大道中があたまなり
はなれ馬片荷ずるのを引いて行く
嫁の雛かざらぬ内に人だかり
見出を出す前に五匁ぼしをしへ
こりはてゝ男へもどす雪こかし
日の永さやつと寂滅爲樂也
間のぬけたこと上下で小松原

三みせんの千挺も張る猫をくれ
すがゞきの中を女房のうでまくり
三十九の暮蠟燭をたんと買ひ
是さおくびがのびるよと承知せず
花も葉もなくなつてから御本坊
五代目に唐の弓矢が用にたち
よしのからひつ切もなく人が出る
めのわらは大きな門(もん)につけておき
半月の松萬木にすぐれたり
もみ上とつりがへの毛ををしい事
大風が五けんつゞきへふいて行き
色(しき)じやうをさつて元ゆひ上げて居る
目のうへをぞり〳〵とをしい事
きみわるく那須野の出水越えかねる
ふり袖が立つと蠟燭ひイらひら
神樂堂三百とぎをふり廻し
すりばちへ惡魚を入れるかまぼこ屋
能い男に成つて質を置きに來る
水茶屋で見たよりどうか惡く見え
山伏を初手はとが〳〵しくとがめ

もちやそびの中から番太顔を出し
河岸へ行く事など本田ひしかくし
先づほしか船を將門ぶつとめる
惣花にばゞア今はの目をひらき
いまはの時に孫のある嫁をとり
りんすしいすは北狄のことばなり
百五十二枚多いをしまはせる
ぬかぶくろ斗りもお針いゝしごと
きついもの四百餘州に本(ほん)がなし
もめる筈表德のあるばゞア也
顔をしてくる〳〵卷は花曇
うひ産で道具のもどるむごい事
僧正は山ほとゝぎす青葉なり
藏宿で引きおとされる月二つ
秋葉道寺にも鯉のあるところ
口まめで荷をなでられる木綿賣
江戸に居やよとお袋のみれん也
いつとゞいてもよいやうにけふし也
すぶろくを辻番手柄さうにしめ
うたいにも頰へ手をあてわるい癖

長範(ちやうはん)を佛御前は見たといふ
まだ〳〵と先生むねぐらをとらせ
相應に素見(すけん)も內は不首尾也
其處(そこ)アよせ二朱だと素見氣の高さ
ぼうがおやわんでふせてる松の內
治部曰く此人にして此やまひ
御主さまぶると北條つけのぼせ
國家老千里さきから聞いて來る
夜(よる)の着ものとは大きな無心也
芝居をかつ〳〵して見る三番叟
筑紫へは畑(はた)でもおやりなんし也
初がつを女房に小一年いはれ
山がへりあたり近所は笛だらけ
大きな虫けらの出たは近江なり
品川へ四つ手一もんじにかけ
旅がへりふきげんな顔氣にかゝり
やれかなしい事だわと母は抱き
きゆうせんを携へぬのはしぶつかき
金華山のぼると三浦夢にみる
おれが家だぞとうるさくさしが來る

借りた子に乳をさがされてちゞむ也
やぶ入を夜ぶかにおこす母のこゑ
傘張の息子と馬のつらへ張り
西の國でといふつらは御免駕
婚禮を打どめにする渡守
太平のよめが通ると藝子いひ
百やると一つの利劍ぬきもつて
振袖も着あきてからの病也
内儀が一分たした雛安い筈
さいをつまみこむは春斗りのつぼ
生酔にぼん〳〵つらをみだす也
抜いて見もせぬに番頭百なげる
大一座おすな〳〵とのぼるなり
ろくじんたら泣くれたとせなァ泣き
手の内でせなァふきがら廻す也
をどりはありや〳〵と高時はさわぎ
姉のともするのではなしせわに成り
もろこしの音曲でうるあめんぼう
けいどうのやうに新茶屋からつゞき
源左衛門あすの朝のをしてやられ

ぎう臺へ結跏趺坐してひげをぬき
輕井澤ざいごふ深き身と生れ
木刀のづぬけおやぶん持つて居る
杉本は他家でふじよせぬをとこ也
團十をたもとへ入れて禮をうけ
縛りぞめまだしやせぬと遣手いひ
蕎麥屋口書五十ぜん御あつらへ
辨天さまだころすなと母はとめ
かみけづりゆあみし女衒手入れする
せんたくに下女があたまは片荷ずり
念佛をぬのごしにするむごい事
口をしさ杖の下から借りる也
四つ手からなんまみだァと母は出る
天に口なし樽ひろひふれあるき
いゝとむらひがとれたよとふれあるき
五月雨を三日てらすは土岐あかり
ゆび一本百兩につくあんま也
まッ黑な乳ぶさくはへてじれる也
ほころびと子をとりかへる一人者
下駄やでもよッぽど伽羅をぬすむ也

一つの功をたてやれと母の文
袖斗り持つてあほうの二人なり
金かりに白水またぎ〳〵行き
おもひなしたぼもあふひのやうにみえ
盆後から下手にさはると月の事
餅屋からよろ〳〵出るは身内也
朝がへりきのふの荻にみそをつけ
うしろからだかれて内儀ぶんが立ち
屠蘇をくださいと丈夫な男來る
御めかけを取つて除けての御けんやく
あばたとにげたで評判がわるい也
明六ツを打つと御立と三浦いひ
先供の中女郎かひ五六人
あねさんがたんとゐたよと尻をわり
さしもの大軍信濃だけ喰ひとめる
火縄ふつてから踊子ろたひ出し
大一座人のふんどし二三人
生酔を後家は敬して遠ざける
切金を三口持ッてゝじやうばかま
眞崎で豐島屋をいふげびた事

おらアもういやよと帯でたゝく也
宮寺もすみにおかれぬ紅葉なり
しきみを直ぎるやつに鉢をもいびり
あだ名にこまつた僧正一人あり
やくにもたゝぬもの死ねだるなり
長者の萬燈不二の根へとぼし
ぶちまけで二足逃げるしつくひ屋
ひら／＼の有る楠ぼりを見てあるき
かッぱッてつかひなさいと遣手いひ
一月に風月をくふいたい事
おつと來たなとそば釜のふたをとり
大一座焼場のぶんも二人揚げ
よし町へ行くにはまねをせずとよし
よせ申候と竹笠ころばせる
生酔に二度めのぼうも又とられ
くらはずばいゝわだまれと粟の餅
こしやくさは小西石田がみやくをみる
村和尚たはらやくしを貰ふ也
蓮生に成りきぬうりの回向する
ごぜといふごぜ甲州を夜逃する

三みせんはあいつけたりと撥でぶち
千彌染ばゞさま袖をつッて置き
年をへし糸のみだれでかさぬなり
こゑはへもふんだん有ると村仲人
二三人すわると鈴をまゐらせる
東寺あたりをはなれ馬／＼
けがをする筈錢かいと車力いひ
みんなしていびりましたと松が岡
おのしもしたれはせぬかと祇女が母
いらぬ事手引をつれていくさ也
おてうぎにのつて入聟おん出され
いかさま悧ていな首と住寺いひ
目がさめて見りや大坂に成つて居る
天道様がゆるさぬとおやぢいひ
やるものをやらぬとばゞアいかる也
あの後家と大屋そも／＼からの事
ごふがわきやすと閑の下女ほざき
三度笠村一ばんの書手なり
一の富どこかの者が取りは取り
てえ／＼をしたならやろう居け文

よし町にござるたちかと納所いひ
金屛風斗り殘つた御りつしん
血だるまを十七人が寄つてほめ
下戸の首二つかゝへて世話になり
新造がことしの市はきついきれ
百官名つんだ所でしよもんする
あいどうこが出來ましたと戸をたゝき
ぜんごんは飛込む所をつかまへる
よばれると賣るものにする齋賓
尾張勢先づ油やをせめつぶし
叡山で大きな山を談じ合ひ
やゝまたせ内儀おんまくじつて出る
中直り本の女房のこゑに成り
きつい込みやうちよこ／＼と艪を遣ひ
見世でうた顔をねぢつてうたふ也
小松殿しやうじんもののみかり也
三百里家をたてゝも雨にあひ
氣なしにごおんごんとつくをしい事
とを半母二三日留守といひ
しんせつはみだけで遣ふかつをぶし

ばアさまへ行かう〳〵とふぎやうぎさ
地へ足のつく人斗り眞間へ行き
親にて候ものへ御扶持をねだり
あかをかへろと樂天は下知をなし
翌日に切を見て來てしかられる
葉ざくらになると國主の紋かはり
ひそめるものをそり落すをしい事
未來記に天草切て何もなし
御のたられなさる者かと四つ手いひ
値千金の御はなし相手也
滿足なものは貧朝斗り也
十九文ほどもてない伽羅の下駄
硯の蓋あけてあぢさゐかき廻し
くたびれた足へは附かぬ四づ手駕
のり合に前だれもあるかやば町
話でもしなはさびしい月見也
幕をとほすが家づきの内儀なり
大根が出ぬと空家にされる所
糠袋二番だしにて母あらひ
神樂堂しんたう流をふり廻し

おかあさんなどと祿山貴妃にいひ
かた衣をかけて二文が糊をうり
だかれなと嫁ひッついた乳を出し
緣もない湯屋に一日戸をさゝせ
うんじやうをしたふりをして母にみせ
おやの目があかぬで美女の持參金
狸寢入りは北條の狩屋也
百やらうわさと盛綱だますなり
ぼたもちで字を書いたのを局着る
子を二人(ふたり)すてゝおや〳〵とんだ事
半疊へならべどの子が目ずき也
おはぎの下の火でもまあ入れやせう
あら世帶お姫様だとだれかいひ
いろは藏ゆめみしやうに息子する
鼬あまく見て上野はなめすぎる
長芋を小ざらへとつて子にあづけ
用向きのとなりへたまる一人者
歸つても膳を出すなと下女にいひ
いたましい賓子をしきみ問屋持ち
かうろへた菓子しつぽがさける也

三みせんをだいてたもとの錢をさし
行水(ぎやうずゐ)の戸板へ日なしはたるなり
外面如菩薩と品川大くせつ
へのやうな由來一石橋のなり
むりな事貸さぬと屋臺骨よばり
藤四郎樣のは搗屋こりはてる
弟子の來る程は三みせん音がせず
つるがから番をつとめる江戸の町
やはらかなぼうですけなりくらはされ
藏へでも入れられてはと聟歸り
謡講すむと大屋がとりに來る
義朝へ鳴海しぼりの浴衣あげ
こりやかつぱ十六もんで持つてこい
そばのせんかつぎはばかをめつけ出し
御厄落しだとは湯番へらずロ
ちごが淵はなッたらしがしやべつてる
呉服屋の傘かへすものにせず
切おとし海老藏をしてしよひ出され
兩じんぼだい船頭も二枚つき
今とむらひが出るやうに左兵衛泣き

二の六はあみだの道もとび目也
大屋さまへは三みせんの指南也
かゞみとぎ帯ひろどけであるく也
伏兵を置くはかね四ツ過の事
廻國ばなし猿が子をゆでました
けしからぬふり大藤内とはなし
鳥の骨あるきを呼んでたゝかせる
いなか下女眞綿といつそつかみ合ひ
ほころびてきらひな鶴に嫁はのり
土俵入まけるけしきはみえぬ也
本かくで行くとくるわへをさまらず
あらッぽい仲人をする庄之助
佃じま女房は二十筋かぞへ
内かぶと見ぬいて武士をひとり寐せ
喰ふとねむがるはよそから來た夜伽
にわか雨四つ手に禿ふたり乘り
ちよこ／＼と火を取りに出る御新造
たはけめといつて鼻毛を一本ぬき
降る斗りでも迷惑なからかさ屋
看病をにぎやかにする狐つき

借金をふむが功者で五人ぶち
天蓋を母に見せずに寺へやり
眞間へ二度さそや勿體ないといふ
人參のやうにこしらへ三うらかけ
見る目いぶせきすがたにて傘をかり
春日の里のかりうどはいゝをとこ
でんじゆ事になるうそ土佐坊はつき
傘の禮すむと其角がはなし也
石で手をつめ品川へ閑居する
都をうつす我まゝなおぢゞさま
此うらにいけしやあ／＼と二人(ふたり)居る
楊貴妃も元かつがれた女なり
紙屑も一歩にたいこもちは賣り
仲國は西八條へ不首尾なり
後鳥羽院の御せいたうわつち有り
空色で行く吉原は久しぶり
中宿へ來て紙二三枚うなり
四つ手かごおッなじやうに心まち
粋ぶつて婆々アの茶屋へこしを懸け
やぼなのを猪牙へそ引くのらんがしさ

いひおけばいゝにとくつのひぼをとき
役所に三時(み)着座するつらい事
せきぞろは御かうの仕廻はじめ也
鎌倉の方からひかるものがとび
一(ひと)さかり猪牙にて海をわたす也
里の母上(うへ)をぬぎやれと世話をやき
大織冠りんしやうじよほどほねを折り
ゑぼししたゝれで出船のじやまをする
どこのか者に見せるとて後家つくり
雜司ケ谷御さいも一把さづけられ
竿を貸しなさいと腕へまいて來る
がきやみは飛んだ遠くの湯へはひり
やがて見やがれよと雪でうがひする
大喝一聲(せい)たけのこを捨てゝにげ
しめ鳥屋今度のよめで三人目
むしをおひ出して毛せん引つかける
二つめは子にねだられる放し鳥
乳もらひの跡へかな棒引いて來る
よしあしにつけてもまれる市の正
毘(び)首羯摩(しゆかつま)の作ともいふやうな下駄

丹波のとののむほんだと京さわぎ
ほつぺたをすぼめてせなア吸ひつける
とめて置く葛籠にござと天德寺
越の傘かりて耻辱をすゝいだり
御しゆかうよろしき方へころぶ也
手ぬぐひをかぢ屋あたまへのせて置き
ため切つてござるぞよやと母はいひ
入墨の有るはすりはり太郎也
町内に人はないかはぶたれぞん
高倉通ひを禿いッつける
死水を嫁にとられる殘念さ
座頭の小便そられるだけはそり
若旦那さじきとりだとたいこいひ
枝がきのたねを出すのに目がすわり
えゝかぶを目くらさがしにさがす也
どれ御供しようと座頭たれに行き
女房に何ッにもさせぬたはけもの
へん病が來たと熊野で人だかり
ふらちさうに見えるので舟がふね
百ふくろすッぽりかぶる耻かしさ

くらゐあらそひ角力とはげびた事
眞中が出ると樂天腰がぬけ
廣德寺下におかれぬ若旦那
鳳凰のつばさは月に三度ぬれ
うか〲とあそんで猫に小判也
山谷通ひといふ頃は馬で來る
雨舍り筆の無心はひんがよし
よぎも無い事眞崎で日がくれる
賴光の弓の師匠は他人なり
あやかしがついて屋根舟堀へこぎ
座敷牢通ふつばさをいれておき
かたのつぎにもと一歩をねめて居る
女房はみだらな中へかへるなり
若後家のたよりになつてやりたがり
前表は果して達磨血をあやし
きのふは眞間へいつてのとびつこ來る
乳兄弟ならもつともで事がすみ
あぶなッかしい女房をあばたもち
かちにげの元祖は五湖にあそぶ也
大紋に萬歳つねのはかま也

ぬけ参り留守で生れて首尾がよし
いゝ沙汰を聞いたと琴の邪魔をする
わに口を打つにも女身ごしらへ
四つ手駕歸りに土をふんで來る
在城をしほ〲としてたいさんす
口上にしたがひ嫁はうごくなり
お出なんしとじやけんなる親に逢ひ
酢とからし買ふ程一歩のがのこり
上下で行く吉原は小言なり
いゝ妹もつて二むらひさまに成り
いものある客が月見を仕廻ふなり
二人とはしたてゝの無い唐衣
花嫁のふざけたぶんで三を下げ
いふことをきかぬ生醉木から落ち
舟を待つ内仲人と伯父が來る
金箱を傾城枕元に置き
朝寐のぐるり紙くずや切れた三
大三十日おやの代にはしよつてたち
おごりがましき事の無い角兵衛獅子
白石は五百手程も先が見え

にが笑ひ女中の中に一人居る
初會にはおてがひぶちをくつて居る
紫をどの日で見るかやかましい
三歩につきもの多くこはい事
口書になんにもいはず思ひきや
大さわぎ五町に客がひとりなり
近所　にだるを見せぬを根葉に持ち
かりもので見世に後光が二日さし
しかたなく家一を打ち三をうち
振袖をこもろの中でときちらし
幽王のしまひが本の笑止なり
古近江といはずに鳴るをかせといふ
近所から來たとは見えぬ白拍子
りつぱな武士で本宮を出るなり
くろは勾當紫はけんなり
紅葉にたえずものいひ出來るなり
有がたい八百といふ江戸の町
御てんもの中におはれていそぐ也
見れば見渡すで梅若やめになり
保昌を江戸ことばにてやりこめる

ちゑの出ぬ時は火燵にこしを懸け
穴山がうめるさうだん相手なり
それなどが知れたらと母判の事
去つた晩餅や砂糖で夜を明かし
四ッ前は老いにけらしな二十軒
かんじんの所を萬歳そつといひ
二つ三つ帶ひろどけで親父ぶち
ごふくやの子もおいらんを持て居る
泣ながら氣ばつて母は纏をうり
馬づらで居てゝふり袖のしうち也
けいせいに女房めんだんする氣也
うはついた日和と雨の中を行き
いしやの鶴先でしよしなを一人する
なづな賣かけねをいつてしかられる
ちよきが歸るに石舟は一つとこ
門禮に追人のかゝる中のよさ
目をほそゥくしていたゞく鈴と幣
おれが目をねむつたらばと名句也
傾城もたまにはきつい藥也
とりまぜた化ヶものの出る紫宸殿

昆布するめおときに付いたあすもらい
三會目きつと一歩のしりが來る
雨方をねだつて娘しかられる
大一座下戸寢たがつてしかられる
さッくばらりが氣のかたをつれて出る
へつらはぬ男はむねが淸いなり
行まはりかんまわり喰ふ柏餅
お袋のふるさとさむくねだる也
まよひ子は天狗について來たといふ
まつくろな若衆をつれて江戸へ出る
奥家老まだぬり出來ぬかとせつき
塀の屋根ふはとんだは數右衛門
續きましてよい御天氣茶番呼ぶ
やさをのこ借りるがさいごよこさない
あんばいを内中させる下手料理
茶に醉うたふりで丸綿姉にきせ
だがなまり武士といつたと妾せき
さて強いはッち坊主と御所さわぎ
たゝきあつめ源三位三百なり
仲間われ川崎泊り二三人

大一座しろうと方と茶屋でいひ
女敵は討つ方がにくていなつら
叡山で見おろす時分つかが鳴り
じやく〵馬に常陸の伯父御くひつかれ
出があるに早くと馬の足をよび
お竹どのどうだと凡夫尻をぶち
天狗ふりつけで入道踊る也
みんないひ切るとせきぞろやめる也
切おとし所領の意趣でつかみ合ひ
たいげえにじやらけなさいと出來ぬ奴
芋の皮もちッとにしてひよくら拔け
それのみで踊子ぐつとはやる也
猿廻しなげると杖でかきよせる
樊於期（はんよき）が首をだいなし棒にふり
その罪斗りでお七はにくまれる
切おとし八ツ時分から火にこまり
けぶをそッちへ吹きやれなと負けた奴
きんつらをぜひ關白にせうといふ
ふるしきで半分つゝむ小間物屋
かやば町一番舟は手習子

おそく來た大工あたまがひかる也
ふかやぶはさすが蚊の出るお歌也
わるい道馬士はけんびき迄よごれ
こんな糸くんなと娘使也
是和尚火をと茶坊主つかはれる
此ぬしなべとある鹽馬につけ
十八町あなたへ僧は四つ手也
さかるから吠えますと撿校の下女
下手のまりはやくよこせとせがまれる
貸さぬやつしゆく〵物入をいひたてる
官軍の惣大將は朝寐なり
かんなくづ扇子ではらい御使者坐し
さくら田のやぼへいひなと遣手いひ
年禮を一けんふやす俄雨
高盛はくへぬものだと母しひる
案内がせつかくしやべつても見ず
若いがきどくあれヲよく持つて居る
つみらしさ座頭の女房浮氣也
旦那を土手で見かけたと野暮なやつ
うき世をのがれとうふやのせわに成り

臨時の物入り土手からちイらちら
みんな馬だといふ所へ國家老
娘にかぶりをふらせるやつがあり
持ちヤれだかあたりさはりの有る女
身がはりの首はくはぬと番頭いひ
奥さまへつとめる頃は柔和もの
細引へ横にかけるは數がなし
御花見のるす愛敬の無い女
みせ馬だのと水茶屋もけどる也
日本ばし勝手に足のむくところ
振袖をうごかすたびに歌がへり
尋ねるだらうと國府を四つ手吸ひ
少し研いではうすどんな顏を見る
御放埒おッぱだぬいで留る也
ちよつと見せやれとぬき身を下戸納め
鹿（しし）ケ谷みんなが道をかへて來る
おはぐろを付けて仕廻ふとばゞア來る
勤でもわッちや嘘はとおつにつき
急な上京え〻肩につかみあて
はまやきへ一（いち）客穴をあけはじめ

三升屋のおろしへ大はまだござる
ごふはらな乳母は人形町に居る
忝いにかゝつてる町の春
綿の弟子文をおとして一日來ず
此首をくゝると母の强異見
元ゆひを切るとかけ出す大三十日
一本出來ると古骨買と知れ
かんきんがすむと居ずまひ嫁直し
わきの僧納豆箱を持つてかけ
下女の供いま〳〵しいと丁稚いひ
ぶちまけて淋しくかへる四つ手駕
御ひめどのとは僧正のことばなり
御苦勞な事上下で花の山
四ツ過の質屋戸板へ穴をあけ
ほう組近年ない事しらんかほ
度ごとに御なんをわたす下手のまり
いらぬ事よめ田ばたからこしがぬけ
赤地のはわッちと妹慾はなし
芝居のじゆずを切やしたと世帯じみ
ぴくと竿もたせ車でかへる也

ちつと居てくれろとなでる暮の金
八兵衛といふ若衆來る春の禮
出陣もせずに內侍とつくし也
いぬをすて串をかつ込む松が岡
四つ手駕ふだらくせんを乘り廻し
くらやみの浴衣後妻ぞつとする
撿校はわるいをどりををどらせる
客星の光うしなふ後の月
屋敷中わッちが思ふまゝにする
おほめ申た斗りさと車力いひ
みな先へかけろと御使者馬に乘り
飛車角を勝賴せいてたゞとられ
去られるのだに坊もいこ〳〵
末の松山は今でもこしにくし
子の使かへるとねだりごとをいひ
すひ口でこゝらのあかをあらひなよ
しおくりがついたでまりにうすを置き
貸すさうで異見がましい事をいひ
まちんをくださいとすねを卷いて來る
穴一はいろはといつてたゝく也

いやならばいゝが嚊アにさういふな
わる口がいやさに夫婦べつに出る
あなぐらは山師の內にむかぬもの
大さうなかけおち安部が見つけ出し
人ざまが來るとまゝ子を目へ入れる
ぬれるよりましのかんかと袷を着る
すまぬ事師匠折々ころぶ也
百の錢聟つかひ道いひたてる
手もちが無いでやるまいぞ〳〵
まさかりとどてら一つでかゝへられ
あだがいつたかにこ〳〵とさぐる也
ぞくの僧正は座頭を目のかたき
佐吉めは仕合ものと和尚いひ
へつらはぬあきんどの來る淀の船
俄雨伊兵衛がとこに御座の時
跡をとるやつが位牌を持つてたち
どこへでもくッついて出る馬鹿亭主
水油四五枚邪魔な櫛をつけ
松の內夜そばしろうと責もする
しうとばゞじゆずをはやめて小言也

その當座雨のごとくに點が來る
拍子木の尻をむすばぬ面白さ
涙ぬぐひさアはかりにかけなんし
まッくろなすだれの中であごをふり
丸わたをたしかにかぶる不二の夢
ぶたれちやァきかぬと寄せる本能寺
本の首とうにこかしてのんで居る
一わりは雲にかくれし物語
ものにかゝりでしちりきの稽古也
神主と御寺おし合ふお役がへ
左まへの子を新造だいて來る
敷ぞめは先づ呉服屋でもてるなり
やう／＼と火宅を出でて御慶也
から櫓をみんなおろすと馬に成り
妹のほしがる小袖みんなうり
おく家老朱にまじはつてぐちに成り
すだれからやつぺしのぞく御免駕
行水へ瓜のにほひをどぶりうめ
來て見ろと生醉花をふり廻し
樂天は日本一のはぢをかき

ものすごいもの冬の女郎と月
おきぬかと蚊屋のくわんにて顔をなで
若いうちだれも繼母おもて向き
うなるやつ巳待が二軒あるといひ
たゞのまんぢうでなきゆゑ事が出來
わらびを食ひながらいつぱいを云ひ
百棧敷には仰山な作りやう
行く時に小道に寄つて醫者になり
あざをまじ／＼見ると嫁きえたがり
十五日猿廻しほどじぎをさせ
お供へのとッかへこする忙がしさ
中ゆびへ金をしばつて禿かけ
名代をとつてわづかな住居なり
仲綱も折々つれて夜をふかし
俄ごぜ母はなみだで無名圓
二十萬石で澤山だにたくみ
あくたいにへそをかゝへる灸見廻
山うばの能金時が事はなし
下に居ていふ禮でなしおかたじけ
うそをつきなさいと袖でたゝく也

ねずごしてとんだ裏道など通り
傘の事池田でもいつか知り
袴などぬぐとうるさく四つ手つき
さみしい町ににぎやかないせ屋也
友成の道くさ祝儀事に成り
來るたびに茶を焙じてく里の母
占者みやく所から切つて置き
でんがくにすゝきおやぶん氣にくはず
瓜坊を三疋つれて角兵衛獅子
酒が過ぎると蛇棒をばとりあげる
人が見るとはしてとつたことば也
二度はふられぬと母親着せて出る
ひげをぬき切ろと辻番しらみ也
おもしろく無いはおやぢが尻日也
猫のぶん信濃度々ことわられ
其處で云はれざよしなよとむごいやつ
かくし引出しを明け母ぎよつとする
外科の弟子だれぞ切られろがしで居る
猿澤の土左衛門を見に御幸なり
輕業の切にあふぎの上へのり

おとなしくするは損だとにじり寄り
ひぢりめん幾所もにたちわける
ろてうさんから十両とくうな事
種鏡が関東方にのこる也
嫁の屁を聞いたものは長者になる
ひゝ〳〵を吹くとおかしら首尾は也
火ぶくれを見せてぎゑんははらを立て
氣の知れたみやげをみると御用よび
松永がりつぶくとんだ茶釜なり
飛続すと〳〵わアんと琴へひよくなり
大やろうが義とせきばんよびあるき
いまだ嫁でさるが賣勝つ楊枝見世
節はへんなものならひに角兵衛獅子
魚をつまむのは乳もらひしらぬふり
ねごとばッかりものをいふふてた妻
大一座松葉の中へつッぱひり
おくびやうな事大こんを喰つて居る
はらだちのきせるの下を對に逃げ
黄色に月花をむすび大不首尾
是ほどのんだら酔はうとかねへ入れ

指をなめはいをつまんで嫁をねめ
後の四つ三みせんひきとあばた也
まごつく中へ法性坊参内
いづみ町下駄とみそとが名が高し
耳へ口あてゝそばやへ下女をやり
縁遠さいくら見せても茶にされる
おのれあいつこかしたと土用干
ちつきよしてそうめん斗り喰つて居る
いりほがに詩を書いて出すにくい事
きつい行過ぎ傘しよつて中の町
客分をやめねばならぬ腹に成り
さうばんで人をあつめてかたきうち
けいせいを見に斗り行くけちなやつ
じやうをはり過ぎて糸だて引かぶり
奉公も松坂縞を越えてから
くゝされてくると十六にうつてやり
何がな意趣にかけ針をぬいてにげ
大も閑議評定に口を出し
不人相片手で箏をかいて居る
ふたアりがすッくと立つとよめはにげ

無い袖をふるに留守居は氣が付かず
せみがなき出すとお世話に成ました
かたひらの初會大かたうらがなし
参宮の留守のまうけは男の子
今でこそ笑へと銚子談也
あてがある松過迄と長田いひ
むきみしぼりを着てあねえ出府する
古ぼねが無いと一日ぼうをふり
人立の中から俵ひよいと出る
はだか身をみせるも女つみに成り
町内のうちでをどり子おろすなり
月過へおんのべて置く袖の事
お内儀が立つと鉄の落ちる音

子正月角力句合

一日はいなりが黒い斗なり　鳳凰連　文福
鰒を煮る門を芭蕉は一人行き　夕照連　下時雨
三會目いけんしさうな顔が出る　古月連　柳印
乳がひとつ赤子に足らぬ恥かしさ　風雪連　若竹
ときたての鏡つゞれの顔をみる　同　古泉
賣色の道具としらず住寺植ゑ　櫻木連　木綿
顔に手をつくす斗りが御奉公　近江連
中町でとらまへる嫁ふとりじし　鳳凰連　且府
子どもらに八日とッくみ合つてみせ　名木連　洗路
さゝめ事天にあらば嵐か月　柳水連　雨譚
丸綿を着せぬ計りの紋日也　紅葉連　鼠弓
仕合なお妾餅を苞(つと)にする　鳳凰連　五扇
ぎう臺の上へさん木をならべ立て　若菜連　東里
琴の音を貝鐘よりもこはく聞き　古月連　笑加
猪牙にのりたさう小松そなれてる　櫻木連　大柳
なんにも持たない御禮者ならいやだ　同　花口
その罪を赦し又ぞろよびかへ　錦連　紀來
すはかまくらとも〻引で五六人　柳水連　桃李
鮭をたゝくと釣人は皆かへり　伊呂波連　律長

是からが女角力とそ引くなり　櫻木連　五扇
はなしの種と寄しよくな女郎買　鳳凰連　文福
慈童うらやみ川まへにて一首　柳水連　雨譚
陸(おか)で見ては三文にもならない木　蓬來連　一甫
兒がこゞむと弟がなげる也　伊呂波連　芦路
只取つた商人(あきんど)が來りや松が取れ　櫻木連　木綿
ぬけ參りあかぎれいゑて思ひ立ち　伊呂波連　和笛
美しさやれあれをくれこれをくれ　古月連　兎明
をとこ十七をんなは三十一　井升連　一口
うまいもの喰つて四つ手に二日乘り　櫻木連　仙郎
五七日よめ金ぱくでかこふ也　若菜連　清江
おもかげがかはつて小町寺參り　朝日連　律長
千兩のほこりを島へ置いて行き　鳳凰連　五樂
藥禮のしかたにこまる二三ぷく　錦連　紀來
御家中が三人へつてかたき討　柳水連　風頭
御不勝手鄕士が娘嫁して來る　蓬來連　菅江
あやしげなふり袖出してお氣の毒　柳水連　雨譚
やぼらしい事傾城にうそだらう　杜若連　亢樺
やぐらの灯夜光の玉をかゞやかし　櫻木連　律長
くすり箱もたず品川さして行き　鳳凰連　五鶴

雨風のつッかけて來ぬおだやかさ　風雪連　古泉
いゝ傘を持つてなにはや名が高し　近江連
いそぐ酒つるんだ所で引つたくり　鳳凰連　文福
萬歳や才藏業平をかんじ　蓬來連　泉河
てい主が死んでにぎやかな内に成り　伊呂波連洗路
そはせて御くんなんしと神を拜み　櫻木連　律長
喰摘をあらすは勝負よわいやつ　風雪連　五蝶
をしい事串柿へふり袖をかけ　錦　連　水府
百旦那斗りたすかる泉岳寺　柳水連　雨譚
もうちつと杖の方へと竹を割り　古月連　水巴
息杖をして銕打のみともなさ　柳水連　雨譚
黒猫のわんにはきざな蚫貝　櫻木連　文古
貝やきにひじきの坪はふつり合　伊呂波連和笛
村こしの向ふぞんさいやがならび　櫻木連　律長
よの豆腐屋はちん香もたかぬ也　柳水連　風頭
目にかゝる所へ置きゃれと粥を喰ひ　若菜連　東里
死んだまゝ六部を置いてさかひ論　鳳凰連　五樂
よしの山むだ花の咲く四十年　同　五扇
早打に負けず月見の四つ手かけ　柳水連　雨譚
百度もおつ立てられる棧敷也　櫻木連　洗路

一歩無いそうで壘の上をかひ　杜若連　亢樺
女房は六鄕亭主伊賀を越え　鳳凰連　水砥
若いにもなまの付くのはみじゆく也　柳水連　雨譚
古來稀なる頼政のむほん也　同　同
上方ははかり江戸ではちぎり也　鳳凰連　五鶴
梅にうぐひす松の木に婆々ア也　同　眠猪
琴三味線をうかめると苔が生える　風雪連　古泉
さいの神過禮に出る村の嫁　鳳凰連　水砥
よい後家がなじみおかまを起す也　柳水連　風頭
淺草寺後の六日はかするなり　若菜連　カンタ
うらッぽち切つて入れわッ〳〵と泣き　櫻木連　洗路
すゝはきの御せちが祝ひ納也　伊呂波連琴亭
豆と角斗りに見せてよめあらひ　鳳凰連　水砥

催主　山下　星運堂
　　　　　　藤秀堂

風誹柳多留十五篇終

拾六篇

[illegible]

浅草新堀端

柄井川柳

[illegible]

俳風柳多留十六篇

淺草新堀端　柄井川柳

うしの年斗り取次顯して
永坂や柳の水の蔭清し
蓬萊や御納戸町の風薫る
四谷に猩をのした鳳凰
三河町そのゆかりあり杜若
風雪森と夜の丸山
廣小路迄もいろはの茶の薫り
二本えのきに古き水仙
旭まだらに神國の霜
名木の薫をしたふ春木町
高根白々櫻田の冬
新堀馴れてわかなつむ友
八重垣に雷門の和らぎて
春日町にも曲水の宴
不斷さくら木山下の葉

前句にかゝはらず古事時代事趣向よろしければ高番の手柄有り、すべて戀句世話事ばいしよく下女抔の句にあたらしき趣向むすべば手柄多し、年々の勝句を味ひて考ふべし。

傾城はあすを案じるものでなし
隣の女房枕蚊屋とりに來る
橋板は平等院へかつぎこみ
撥袋かくして後をのぞむ也
ひめのりで出る初午のいそがしさ
江の島へをどり子ころび／＼行き
空色をまくつて猪牙へかしこまり
放れ馬理不盡に嫁かけ上り
みめぐつて居る内狐のりうつり
雛を仕廻ふと人間の直をつける
半切を隱してついでやかましい
をしい船色紙のはたひるがへし
下谷では彈く市ヶ谷で語る也
大なんぎ下女女房に成る氣也
兄弟に泣かれてこまる不動樣
蝿は逃げたのに靜に手をひらき
笑はせなんなと新造來てすわり
むねぐらを女房關口流にとり
色直し前に一ト乳をのませ
喰ふが大きいと信濃を百ねぎり
お鷹の下におやぶん豆しぼり
里芋のやうなしゆもくを六部もち
百桟敷あぐらをかいてにくまれる
うぬがため春の野に出るなづなうり
江戸中におのしばッかり女だよ
小刀で茶わんをけづるあぶら見世
琴の爪たもとに有つた流れ質
そろべくそろにかいた文貴公さま
相應な道具あはびで升へ入れ
醫者にさま變へるはまだもりちぎ也
生きて居る土左衛門芭蕉敷いて居る
入墨のあるが素見へまぎれ込み
飯盛りにはまりころりとやらう也
ころもぜみ大序のやうにうなり出し
なぜ引込んだといろはで生酔にち

大法で三みせん箱は持つて來る
親分は大きな捨子ひらふ也
國者が嵯峨に居るのに那須へ逃げ
參内をしろと國香をせめる也
ちと御やすみと代もつを取りに來る
いもやおはぎにねめられるいゝ男
急な井戸がへ一長屋猫をのみ
片荷ずるあたまで下女はあらひ髮
蔦の跡こん〴〵瑠璃の殿造
近道をかへつて嫁はしかられる
うはごとを話せば笑ふおけんつう
つッぷすと禿かんさりましたやう
木綿店屋根に練塀少しあり
三つぶとんそばで袖口買つて居る
一日に十七人も旅へたち
ぬしならばお氣にいらうと茶屋はいひ
運を見ておくんなんしと小傾城
脇さしに似たものをさす合羽箱
着料と見えてつぎものをお針する
いゝ男せぼねを膝でこづかれる
小道具屋寄りさはりにはすつぱぬき
氣の多いやつを門内どりにする
二三年しらァん顔でほれて居る
虫干をなげにわたしてさせるやう
はまぐりはみを入れかへて高く賣り
毛をむしりなさるなと守首を振り
小屛風のかげで藥種屋がたつかせ
大和茶のくわぶんは錢にならぬ也
船ぎりで玉のこしへはのらぬ也
それあたま〳〵とけちな船ゆさん
夜着ふとんあいそづかしが二三人
三みせんに合はせ本田をふり廻し
境論まけた年から柿をかひ
吉原のじやまは西瓜を買つてくひ
人穴はふじ權現のうしろ也
宵からゞめて寢て居たでうたがはれ
首一つふると角兵衛獅子に成り
いゝものといふとなくなる春の雪
石にせいあつてかたまる四十七
大らんを入れたと亭主留守をする
ちゑはあるけれど象程しやれはなし
竹の内流で敵をうちに出る
眞鶴の方へもぴかり〳〵とび
はしる馬にも鞭をうつ御目出たさ
貴公お出がなければとさそふ也
業平は天のあたふるものをとり
女房をとつてのけての療治也
すぐな針鯛を半ぶんつり上げる
書は深川あきなひは駿河町
みめぐつて來て船頭をおこす也
十九だといはぬとお手がつく所
二昔たつと古市又はやり
觀音さつたのかひもの二日也
花ものはいはず遣手をにこつかせ
吉原といつて出るのは正燈寺
のみあきて烟管を廻すほれたやつ
棧敷から指をさゝれる迷惑さ
中條へ内福らしいあばた來る
足で戸を明けて碁盤をどさら置き
さつ〳〵と玉藻唐本よんで居る

肩で打つ迄は花嫁きいて居る
宮の御あとにのぶといつらで居る
七ツらちかれ是いたし息子出る
あいさうに傾城やけどさせる也
芭蕉のうへで勘當をゆるすなり
おもしろく鹽をふんだは中納言
どこへ／＼と牛町へおして出る
蛇を下げてお七が墓所きゝあるき
雪見船いらさる下戸のまじり事
いゝ降りだなどと屋根舟にくいこと
めりやすのこゑをしるべに舟い舟
番頭はとくじつらしいのを見たて
ゆづり葉がたけにゆられい待て居る
のどかさは武藝見ながら草をつみ
おかざりにつゝまれて行くいなか馬
下の句は月へゆづッてほとゝぎす
さんせんを身ごしらへして女なげ
もうすてる氣で居る顔をそゝのかし
釋教へ戀をむすんで六夜まち
竹笠へ御用はなをすげて居る

おちついたしかたは華陽夫人也
だゞをいふ船は所に名を殘し
みゝッちく張りャれとせなアつぼを伏せ
こはれないものは御用のあたま也
阿部川はしらふ酒匂はよつぱらひ
のびをするたんびに見える遠江
雑巾の白いをおやぢはいて居る
夢中作左衛門下戸にひつぱられ
厄年に東海道をちつと見る
ぼうにうつ手なし辻番さげて出る
きずやみもせず切見世を張つて居る
懐の冷たいやつは紅葉也
おもしろくないは座頭のをどり也
島田で出したこのかたと碁盤出し
鶴龜を道艸にして湯へ這入り
先づ内は共に憂ふる振で出る
田植笠禿を呼んでほどかせる
江口の太夫内心も菩薩なり
二三羽は俎板へ來て羽をやすめ
紫の幕でゆかりの花見也

大國に養由の弟子とんとなし
禿まで生酔にする大一座
灰だらけに成ッて奈良の能を見る
傾城の夜具もゑひさるこはい事
こんな金よく見ておけと番頭いひ
ふじのゆめ三千五百九十一
下の句は京談上はどさあなり
糠袋いくぢが無さにまたひかれ
外聞を棄てことやうの嫁をとり
男けいせい大門でとッかまり
半分來たろと四つ手へ首を出し
六郷が出てもどるとはばかりちぎ
ごく月は小でこまると不覺者
せんとうへさそわれせなア大なんぎ
上がりにこりたか息子直きに行き
こつそりとした所和尚よく見立て
遠くから弓矢を持つて娘來る
唐櫛に和國つまらぬ隣家也
しくじり問屋おとまりへはつて來る
朱買臣ちよッ／＼と人につき當り

師の曰く何手のくぼをすべけんや
をどり子は行くもかへるも大坂屋
首桶ナあけて船頭めしをくひ
はつがねのごぜ推量で耻かしさ
ぼたもちをこは〴〵上戸一つくひ
周倉が手あきになると首がおち
ちんばひき〳〵それ攻めよそれ掛かれ
焼味噌の方へ高尾は行きたがり
はしぢかに屛風のひかる十五日
もう嘘も息子枯野におよぶ也
長い雨大きな男てれて居る
とけぬはず元あきなつた女也
蟄居して居る迄が出る大一座
家督公事後家くどかれた事もいひ
お袋と大門を出るはづかしさ
晒から見れば劍はあかッ下手
かた言で息子をきめる出來ぶげん
ぶちのめす談合がんち大あばた
稲光りかぶろを二人ぶつちがひ
猟のけた跡が五十四ひろい也
かんむりのきは迄草履はいて來る
御舟はぎちらことつまる川せがき
間を見ては畠をせゝるわたし守
はらいせに三月半ほどかゝぬ也
四十七中に一人は百だんな
人立は火繩をふると橋になり
だれぞ手を出したらと母さらまなこ
たれもかまはぬのに伏見町をぬけ
かまくらのまつに三年身をかくし
四人をせりものにする五丁町
えの木一本であまたたび和尚じれ
さう又いふ事はねえとそばへより
もう花はいらぬと遣手まつご也
もうせんでおつぱらはれる百棧敷
どうぞ〳〵と番頭へしちくどく
馬のつら傘屋とすでに書くところ
大きな門を材木でしめるなり
賣傘もあるのに數刻見世をかり
はげた齒で女房八ツ迄はなしてる
淺からぬうらみ額へきずをつけ
七月の屋形優婆塞優婆夷也
しやれるのをお國ことばでしかりつけ
川越の指南たゞつなつかまつり
くどきそびれてかんざしをかりてかき
のみこみのわるさ是非なく萩で捨て
まッさをな下で糸だてぬいですて
無いものは金竜三がうれ殘り
かつを呼ぶ隣ばかりで金をかけ
紫屋ゆる〳〵そめる女もの
はじめには齒のたちかねる堅い魚
ばゞアが茶淺黄のんでる俄雨
奈良茶だの蕎麥のとけちな棧敷也
山猿のかむり猿島郡なり
入聟がやくわんをぬぐとむづかしい
おそろしい御惱は玉の汗をめし
二つ三つかくをあてると御里なり
行きあたりばつたりと出る芥川
是にしておきやれと母も迷ふ也
色直しのちの指南は他人也
ねぎつたであッたら首が二つおち

かねに銘うつうち和尚のんで居る
よく酔はせなかつたと撥であふぐ也
競馬をば見ずにけんくわへ人だかり
すりこ木をはりのけて後家はぢしめる
さゝやいでやるは飲ませる呉服店
丸綿を着ぬ白無垢のおもしろさ
しらが抜き仕廻ふと遣手又ねめる
うき〱として見しやれのと床を上げ
暗い晩うぬが聲色通る也
陣中で人を茶にした琴をひき
無骨なるけいせいの出るかる井澤
氣のぬけた振袖のある御不勝手
觀音の地で殺生をばゞアする
一宿は宿引きの出ぬふとゞきさ
後の家主かだじやくでわるい沙汰
めしをたきこんで花見に女房出る
がくや新道さと下女がしつたふり
あさつてといつて七書をよんで居る
藤を折つたので漁師にとつかまり
里がへりしたらさはぼんだも知れず
口取は帶へつないでひる寐する
のぞかッしやるなと近江八番叱り
喰ひかけて御用をまねく一人者
くだりうり小桶の中にかんなくづ
吊に連吟味してしかられる
金時は母にはきつく不沙汰也
目と口のある人土の團子買ひ
牛馬をよけてひづんだ蚊屋をつり
錢の遣ひやう大坂知らぬなり
前をよく合せすかねえ生酔め
おくられる脇をす一歩かけて出る
拂ひ藏すみに大きなひきがへる
かんばんにいつはりの無い手習子
硯ぶたはしからとるは亭主なり
岡釣りも小桶をもつは近所也
おやぶんの庭に一ぱん牛をねせ
わたし舟戸板しよつてゝしかられる
あざのある斗平家は惡縮なり
なべの〱の底ぬけきやくゑきへ來る
常香がきえてかへり〱小言
安い事まぐその片荷あたま也
たッた二三本に局耳だらひ
おぢさまといふなと小式部をしかり
もめるはず茄子を一つ持參也
馬の小べん二三げんわきを行き
通り者はるなへ願をかけてやめ
まごの後から明樽があるくやう
猫の聲色で追つてる不性者
かうはかつてはと芋賣三つのせ
夜もあはゝ晝もあはゝとあら世帶
物申にばひやつて出る手習子
みんなぬしづくと番新あまるなり
もう外にくひてなしかとあるきいひ
三番叟太夫に乳母と樽拾
上下のひざへをどり子こしをかけ
そこらまで行つて我金女房貸し
あごの無い男が猿をしよつて來る
藏も隣のだと仲人しめられる
旅は道づれ大名と樽拾
りんぢうに村中よつて米をつき

山うばに何が御用と遣手出る
すつぱりと直りましたと鼻が落ち
二百ごみ息子いけなくなりはなり
銅だらひあつ湯をくんではふり出し
角力とり一つところをふんで居る
おやぢ橋もうろくすると願ふ也
主人相しらず槍持うゥろうろ
木挽小屋さうりほり／＼はいて出る
しよくしやうの醫者は浴衣に羽織也
針と糸もつてお船はぎつちらこ
三歩にぎつてふるしきを禿持ち
股の中から引出しを鑄掛ぬき
紋附(もんつけ)をみんなつけたで取りはとり
白鳥をくうた男を見ちがへる
忠致はいゝ正月をするつもり
つひほろびますとすゝめる源三位
しかるに息子代をとつて二三年
めつごをさつし圍(かこひ)へのゆづり金
どうぞかうぞするさうで年始にみえ
二三合たゝかひ薬うりつける

二三本やいてくんなと素見物
見ともなさに白髪まじりを苧でたばね
土手で借りたのだと返す人のよさ
長崎屋今に出るよととりかこみ
けいせいをおッかたづけて呉服店
錢をよみながら四つ手をしよつて來る
井戸や川のぞき六郷さして行き
輕井澤錢にあかしたくしを遣し
勘當の内江戸中の湯に這入り
もてぬやつおぬいはなぞとうなり出し
こそ臺へりん病見廻ひやたら來る
なた豆をくはせて女衒直をきめる
直しよ／＼とびつこ引いて出る
たるひろひ槍をかついで使者に來る
越後や太七しやれてよひにぢられる
花會に行くとさそひに來てくれろ
らんびんで吉廣をぼつこんで行き
四郎兵衛に女之介はとつかまり
しぶくつて見てもいけない闘が原
不器量な嫁湯灌場を持つて來る

小ぬすみのはくじやうをして雛をかい
あたまてん／＼でかみゆひまねかれる
説教であかねの袖をしぼられる
諸太夫をしまひに撫でるかゞみとぎ
少しもふさでありけるおやぢなり
評判の俵を山師五俵つみ
かつがれたていしゆ三十ばかりうへ
鹽まぐろ焼けばありたけ猫が寄り
駿河町外にたづねる人はなし
外聞をわるく女にくじをかち
えんのない白い紅葉の世話に成り
青空を見つけて太鼓かつぎ出し
夜着づつみ角力くづれのじやまに成り
よめの庖丁梅づけの大こなり
粟津から士卒は二月二日つき
とつさんが留守だとぶちなさると泣き
丸一をやめ倹約で角兵衛じし
かりた子に嫁は御いろをつけて遣り
下町に片岡ばかり町がなし
しらきちやうめんがきほいの言葉也

今時分だと熊坂も御てこなり
湯がへりに寄つては二三枚うなり
宿下り三を結んで一つ彈き
使者のともあつまり勢できふくせす
すゐぶつて初會にやたら飯をくひ
ぬかみそを里のおふくろ來ていじり
後妻ののぞみ行燈置いて寐る
はて知つて居るよ／＼とつぎこぼし
ちよきのかしぶく內はまだ青い也
貴賤おしなべて飾をほめる也
門(かど)に濡れてるに晩迄降ればいゝ
つッ突いて來るで借金めだつ也
好い所へ來たとせい高つかはれる
手と足の長い野郎を多かゝへ
けちな名歌を大釜の中でよみ
よき泊屋の候と高輪でいひ
花に嵐はあてさせぬ奥家老
足元で鳥をたゝせる右大將
蜘のふるまひを他人はしらぬ也
じゆつくわいをいつて鶉へおりる也

傘の咄のならぬわるい御所
いたゞいて飲むと女郎は脇へ向き
ろかうくださいと王子でそさうもの
女房のむなぐらをとるたはけもの
井戸ばたの子は寸にして其氣有り
見なさるなよと何帳か嫁はつけ
よひッぱりする傾成はどくづかれ
美しいふり袖土へもうちッと
はらを立つても立たいでも一歩損(ぞん)
直(あたひ)千金でかたはの嫁をとり
橋板で杖をいかして四つ手かけ
まかりならないに難義な若い者
千住品川紫の袂なり
虫干ついでに賴政すぐに着る
けんびらき娘あんまりなさけなし
四つ手駕御幣(へい)にじぎをして曲り
宿帳をつけると山の客はなし
色事にかけてはまめな男なり
二三町出てさしかへる貰ひ櫛
壁に耳あると論語は今になし

御りえんの御使者ぶこつな男也
桑の門から杉の戸へ通ふ也
一客へ日月ともにねだる也
きつねつき有るで切米二歩高し
足音に謠をやめるけちな客
明晩はせんだいさまと茶屋だまし
ひき臼ははげしく成るとしまひ也
三文がほどは遣手も女すり
あぢきなく下女よし町の供をする
夜蕎麥どん二(ふた)ア人(り)連(づれ)は見なんだか
沖釣は女房の留守にすゝめこみ
三箱ぬすまれた今戸の左大臣
傾城をぶちのめす氣で女房出る
主のあだせしめる氣にて豫讓のみ
金太郎わるく育つと鬼になり
一羽では張合のないめじろかご
あのおしやんすわいなと高く賣り
求めればあいつと淺黃素見する
こなたには孝行だよと姑いひ
一筋にたすかりたがる百旦那

得がたきはときと本能寺へしかけ
岡釣のあぶれ大根ぬすむ也
しちりきを眞崎で吹くどこの馬鹿
一挙(ひと)あて近い内來なといふ
所作事のしまひ兩手に花をもち
にげあしで鵜を見に出る美しさ
まだ暮れぬもみぢの寺へ息子着き
すげ笠で内儀しんしを張つてゐる
少々は降るも可なりと亭主出る
おいらんでうみねんしたと抱いて來る
首一つ五萬石餘のかたにとり
きなかにもならず六部は七里行き
過ぎたるは醫者の匙にもおよばざる
大風の跡に盥と鏡立て
首が出て來ると人形おもしろし
賴政は前狂言をしてしまひ
かくてははてじとほらがひふきたてる
御せわさんながらと猪牙へ文をなげ
元結(もとゆひ)ぎはつかんでせなに逢ひに出る
湯屋げんくわ元ににんにくの出入也

信濃からきい〳〵大根あらふ也
産み出すと目のある子かと座頭聞き
義のつよいやつにかぎつて錢がなし
狐と袖をすりちがふおもしろさ
口書に禿もつての外しやべり
脊中の子尻をもぢつてしかる也
今年の市はすりこ木にはねがはえ
一番をかへと芭蕉をかたづける
わが事ぢやないよと狆をなでさすり
御自身に出てはひつぱるいろは茶屋
もちッとで本のが來るに蚊屋へ書き
しうとばゞじゆずをばやめて小言いふ
にうめんに灯のとぼつてる五丁町
忌中のやすみを御用はうれしがり
つらで無い迄むすこつらにする
死ぬと直(ね)がすると親和(しんな)をむごい評
野暮でもいゝからまあこゝを放しなよ
いつはりまけておびき出す通りもの
ごた〳〵を先へしまへとはかをなげ
梅に鶯をぜげんははいでとり

ありかたい御代本とうに子をおぶひ
大名は一人(ひとり)でころも奉加する
御勝利も初手は岡崎からの事
東海といふと大王ぎよつとする
ひだるいをわすれて常世舞をまひ
おはぐろの廻りにおきを下女ならべ
らんがしいものは折羽のたゝきッこ
茶釜をば四五町行くとたゞとられ
たいまつで藥鑵や銅壺出來上り
跡の無いしやうこおふくろさかさ桐
居るもごふはら歸ればねからの損
をがむから出しなさるなと母の雛
ろぢ番をお供につれるどやのかゝ
扇箱買ひきさみこぶたゞもらひ
手がひの鼠手をくつた本能寺
熊野(ゆや)御前なが居をすると水をのみ
たねのないほうかじやうはかまでつかひ
お返事をでつかくしろとせなアいひ
病人の色目を遺ふけちな事
百三十二文てんかんたゞとられ

ゆすつた金をせな宿にあてがはれ
ひどく縛つたなときどう腹を立て
伊勢の御師ひざッぷし迄手を下げる
はなれ馬とまらう事か十三日
いかけやの聲のよいのを女房よび
扶桑第一の大きなごふく店
大坂はなんにも色をそめぬとこ
しろうとが折るとふくれるかきつばた
針うりをかへし亭主はしかられる
玉藻よりすごいやつだと江間はいひ
まきぞへに資朝犬にほえられる
すつぽんに椀は御めんと女房いひ
針のさびけづりしつほころびを縫ひ
火箸が無いとせなア手でつかむなり
下女やぶれさんとうまつたからずなり
かんざしと巾着が出てしばられる
おめでたうごんすとわるい樽をいれ
嫁の留守しなびた乳を先づ預け
直しよと呼べば錠前はらをたち
明樽へ細引をつけ馬士はひき
つばなうりさやちりめんへこすり付け
當時はとかく一ころび二聲也
子をむけてとなり棧敷へ禮をのべ
でんちうを額へあてゝ馬場へ來る
土手であひ今は何をかつゝむべき
にくさうにもりャつたのうと姑いひ
まき車信濃をまぜて引いて出る
じやがたらはおつかない名の蜜柑也
お齒黑におつたてられるかじけ坊
泣きなんすと左まへの子を戻し
高い家大磐石でぶッつぶし
母親は息子のうそを足してやり
小つゞみをぽく請取つてふざけ出し
あし元のあかるい内に子房逃げ
御先祖も子そんもへびでせめる也
つけとゞけせぬと名代ばかり出し
賣女(ばいた)が來ィしたと禿かけて來る
借りて着た小袖をもらふかたみわけ
中たがひ南瓜の蔓をたぐる也
三つ布團内へしかせてどらがやみ
女郎のおちをかしらへつけてうり
十三夜琴は月への馳走也
牛車わらはの曳くはひんがよし
かけとりのゑがほは右の通也
傾城にうそをつくなとむりをいひ
うしみつの頃にのろ〳〵初會來る
さまがわるいと羽二重をおやぢ剝ぎ
産婦の邪推大ぶりな咳ばらひ
仲人のあきの方とはでそこなひ
爲に成る女は息子きらひ也
御こゝろみ程品川は見世へ出し
かごには人の無いていに四つ手かけ
飯盛かと見れば錦の夜具也
二宿(ふたしゆく)はまたをくゞつて世を渡り
質屋で能く知つて居る鎧二領
高慢な質を伜人置きに來る
だゞッ子に柄樽を付ける初の午
見世先へおろしてのぞき叱られる
また髪が多いとどらの師匠いひ
嫁いびるやつはしきみも直ぎる也

のきなさいけふやあすでは焚附かぬ
役所を惣立にさせるきつい事
信濃から京へ出て一こくをいひ
あら世帯門に虚無僧手をつくし
外聞のわるさ桟敷に立つて居る
人の國迄へも響おんむける
なげかへす文をおぼえて居なと取り
薬取直にかへるははかまなり
お袋に泣かれてこまる中の町
笄つのをぬぐと目隠し嫁はとり
二三十つくかいやかとはらをなで
あの熱で金を隠した人の慾
きんつら卿といへ／＼が氣にくはず
椎と松見て行きながら遣ふ也
美しいはず世盛りに來た女房
みかん二つでと直をする子のあたま
千兩の估券あて名はおつるどの
淺黄がうたふのが本のまちうたひ
まつち山から見おろしてくはだてる
三布團癪や頭痛に奇妙也

駄荷をおろすので南州げびる也
ごぜの尻つめれば誰だ／＼也
鍋鑄掛子どもに水を取りにやり
むだッ火を源左衛門は焚かぬなり
胞衣の上初手どらものに踏ませたい
烟草屋は目をむき出して霧をふき
五文が刹身すりばちを内義出し
高倉へそくらをかひに毎夜來る
嫁の手は高みくら迄とゞきかね
ためきつて置いても女房又まける
母を剃ぎしまひそろ／＼妹也
兄にて候ものへ大小をねだり
俄武士けだし妾の兄にして
雀でせなどと高時さわぐ也
二人連れたさに信濃にはさみ箱
侍が來ては買つてく高楊枝
目をさまし丁稚艾をはらひのけ
來年中御重寶紙代百
大ごまり戸板をしよつてはやて也
生醉はおもしろがつておん出され

他人の馬だとめつたにすまぬ所
をかしいとあッちち向いて神子笑ひ
人をよくすると新造死んだやう
淺黄裏斗り甚三郎といひ
あすの花下女すそまくに夜をふかし
紅葉でもお賣りなんしとよびたがり
むごちない事を馬鬼ヶ原でする
御法談すむと五ツを打ちに出る
生首をはじめて見たと和尚いひ
錢ッきりあそびなと竹光をとり
假橋の笊柄があるで品がよし
樽に腰かけてちひさくもッしもし
十七日のあけぼのは御用ごよ
まごつくと子房もひしぼもらふ所
文王問うてのたまはく喰ひますか
土くれをちッとうごかす百旦那
さゝ木の四郎讒言によくあはず
男がけいこに來りや母障子立て
おかげでもあるか隠居ととち狂ひ
梅やしきから天竺へおし廻し

手ぬぐひを米屋一流かむり出し
そら生醉でなんだ大三十日だと
あく迄くらひあたゝかに成つて行き
島がくれ行く蒸籠は片荷ずり
琴三みせんを十六で嫁うがめ
正直なもみぢは足に豆が出來
江戸のするがにも日本一が有り
嫁の禮鰹四步一いたゞかせ
大くぜつあそこのすみぢやごうそごそ
境の浦その尾についてどんぶりこ
花を見て遣手は顏をやはらげる
半げんくわすり鉢に河豚二三ばい
後生ねがひのふりをして見合ふ也
御見立とよばつて毛ぬき袖へ入れ
ふに當り蛇とりに出るかゞみとぎ
三つぶとん下りこぶしにすひつける
間男にいひ込められる譯があり
羽織着て車をおすは荷主なり
矢ぶすまをつくつて柿を大しかり
よこッぱらたゝいてあるく角兵衛じし

かつこんで行きやとお袋だまされる
山出しの下女は眞綿とつかみ合ひ
釣臺でくは遣ひするしつくひ屋
草市へ嫁は着かへてしかられる
諸ぐんぜい常世が爲の出もの也
南無や八まんと刹身の小屋へ逃げ
煮賣屋でつまみぐひするあぶらむし
むだ坪をよしといふ迄ふせて居る
田樂をくはせておいてのみこませ
紫と紅絹斗り有る五丁町
知り切つてゐやすと女房しらぬなり
だまつてろもゝんぢいだとおつぷせる
さあ胴げつきやれと這入るかさッかき
夜鷹麥切お上のだよと皿を出す
おれをせく客めが來たと土手でいひ
たま／＼事に心中の晩に行き
人の慾まん中へのるわたし舟
はぢをかゝせぬのが後家のおちど也
通ひ船女に遣ひころされる
なべ／＼の底拔客ゑきへ來る

したく金來て泥中をはちす出る
七けんで七文が賣るなづなうり
振袖はすわつて居てはさえぬ也
門の外よせなさるなと式部いひ
中の町月雪花にことかゝず
目の一つあるがこけんのあて名也
お妾とのろまやッぺしたてをつき
きむすめ迄をそゝなかすにくい後家
さあ取つて見おれと鳴で猫を追ひ
次郎左衛門雛のやうなを切倒し
國家老傚さしからぶつちめる
美しさ男へたんとふしが賣れ
ふとゞきの事は和尚のうしろ帶
四つ手無い頃馬やらう／＼
なべのしぶゑきでよッ程ぬける也
戀はくせもの茶をのむにかゝつてる
一人兩名とむらひ帳につき
醉ふまい事か三州を長田出し
海晏寺こいつものめる所なり
ほそ首をつかんで遣手藏へ入れ

木曾の殘黨を冬中こきつかひ
ざうりとりむねを二[ふた]針縫つて居る
うけ狀のかへるを見ると日なし來る
もうひとつ毒の玉川出來る所
つけひぼをくつて仕廻ふとしれぬ所
最明寺もつと泊るときらずめし
又なかされてお出よと二人[ふたり]泣き
名をわすれたのであばたが用に立ち
馬喰町とゝでまんまを喰つて居る
美濃紙を度々ぬすまれる國ざかひ
二つ三ついびきをかくと御慶也
乳のみ子を相手に亭主すめぬ顔
とんだり〳〵と袴着をつるし
反物の耳をこき〳〵しひる也
嫁の來たばんに見世でも一人[ひとり]ぬけ
住吉の氏子りつぱな家をたて
太刀の魚新田このかた出來る也
銀ぎせる四五間猪牙をこぎ戻し
太郎からびんのそゝけぬ男出る
銀ぎせる疊をたゝき〳〵めり

謡本うなつて見てはゑどる也
中納言ぐらゐをくれるしはい伯父
取りに來ぬ鐙にうゑる雪のした
風ふかばどころか女房あらし也
かし元のずるい所にまつが岡
せんたばをなげて手代をくどく也
袷一くわんでお寄りの留守にうせ
米のめし喰ふと說教かたり出し
難問をかけに岡の見イ來る
小麥燒もちッと押すと指を燒き
いもが子は遣手の手にもあはぬ也
せんぞの山莊を息子らりにする
ばゞア笑つた晩帶を解くなり
かり豆の中から馬は首を出し
泉岳寺中に一人[ひとり]は百旦那

をがみんすよとはんさふへ顔をいれ
屁をひつたより氣のどくはおなら也
くろ石をたゝきちらしに江戸へ出る
明石からおこしての來る花の朝
うろおぼえ庭を通つてしかられる
しやがんでて嫁は浴衣を引つかける
大一座女郎はかッち〳〵うけ
すゝはきにあるき袖口そとへかけ
りちぎもの帶をしめると寄りつかず
ほつきあるいて下野の土になり
おつりきな名は傘や六郎兵衛
そのいやさ下女はご板でたゝくまね
ばあさまの咄はのやをぬけにいひ
馬くづしをうちそこなつた源三位

廿正月花角力句合書抜

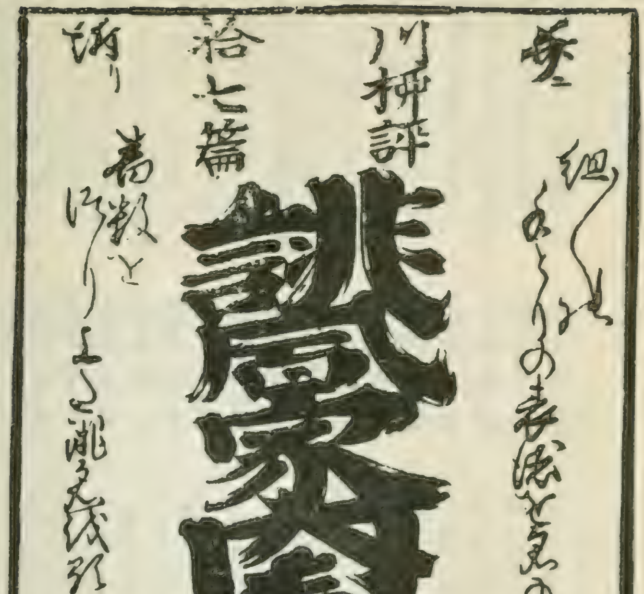
催主　尾蓮堂
　　　薜秀堂

拾はれぬやうに佐殿まきちらし　櫻木連　玉章
御目出たさ武藝を二人[ふたり]顯せり　柳水連　鳳頭

二所の三つ井で織出來上り　杜若連　弓印
横に車をおさせぬは御殿也　柳水連　玉簾
弁に袖おほへといつてしくじらせ　櫻木連　左滿
美女よりも先へ惡女が一歩取り　柳水連　緋季
住吉はたいこはきらひ女郎好き　同　雨譚
目に見えぬ物入聟が不如意也　蓬萊連　田鼠
用人格であそんでるいゝ男　柳水連　雨譚
ごふくやの庭で帷子しぼつてる　櫻木連　洗布
息子の處勞黒い狐で直り　同　橫好
高うは御座りますけれど美しき　朝日連　巴幸
おつかけて來て細見を買つて行き　櫻木連　和笛
井戸ばたと二階の窓といつか出來　柳水連　峯印
寒いこと頬を切られた人が來る　伊呂波連　玉章
馬をひかせてあるくのが妾が兄　櫻木連　律長
渡し舟あとから飛んで叩られる　同　同
旅で目をつくは八日のゆしま也　朝日連　巴幸
ならずやは紫屋から嫁を取り　櫻木連　琴亭
白拍子どぶつか舞ふと雨かぶり　柳水連　雨譚
こんじきの文字すをお局は着し　櫻木連　律長
碁のまけ腹でむたい成る詩を出し　柳水連　雨譚
四つ手駕むだ直をきめて乘つて行き　柳水連　雨譚
いなづまを拜借に行く暑い事　杜若連　五雷
嫁の雛見直しに來る暑い事　若菜連
傘の無銘手詰をかりたやつ　櫻木連　玉章
是さわたくしだと御慶おちつかせ　近江連　眉印
おんばくでもいけないを能因持ち　櫻木連　洗路
簞笥迄つらをぬぐふは二度目也　柳水連　桃李
よもや大根であらうとは白波　杜若連　如雀
そこだから相談ものとにじり寄り　伊呂波連　蔦故
藏王權現を置きたい中の町　鳳凰連　五雲
くはれない干物を歌人持つて居る　柳水連　桃李
靑ものを袂へ入れるよい日和　錦連　紀來
八朔にたいこくやみも古いやつ　杜若連　如雀
いでといつたら見せようと干して置き　柳水連　素文
一世一代鎌倉で舞ふつらさ　若菜連　木綿
お齒黒も何もかも嫁休み也　錦連　紀來
まッ黒なきせるにかりる野懸道　櫻川連　松國
弓を持ち化鳥を三羽つれて出る　鳳凰連　水硯
二三枚瓦を置いて帳に付け　伊呂波連　蔦故
鬼の手を嫁香箱へ入れて置き　櫻木連　律長

是で借りはねえけふのを置きな也　同　其林
主人相知らず四五人かゝアもち　若菜連　永印
風まけのするさし物で禿出る　柳水連　桃李
高輪からは手を出して通る也　櫻木連　玉章
やに下り世上にまなこたかい顔　近江連　扇印
はなッぱりあんまり口がきゝ過ぎる　櫻木連　其林
聟あつて形(かたち)なし穴ぐらで呼び　柳水連　素文
牛かたに衣をぬぐをめつけられ　櫻木連　車道
幽靈の鳥居が今戸から見える　伊呂波連　律長
花まぐろ雑煮へかける村ぶげん　杜若連　如雀
五十人ほどと平八ばかり見る　同　同
別火や(?)にねたふりをして行くやつさ　伊呂波連　玉章
のまぬやつ餅のさしみを拵へる　櫻木連　和笛
まけたやつこたつにねてゝ考へる　朝日連　巴幸
若隠居様さと息子へらず口　櫻木連　玉章
きんたまをひろげぬ許り淺黄待ち　柳水連　雨譚
成ッ丈へら平等にやッつける　伊呂波連　玉章
品々は出さず二つ三つ見せ　櫻木連　律長

誹風　柳多留十六篇　終



川柳評
拾七篇

俳風

家内喜多留十七篇

幷に組々の表徳を名のる角力句合
附り番数をつり上げた俳名を顕はす櫻題句合

寅正月吉例角力句合

お妾とたてをつくのは古風也　蓬莱連　龜遊
吉原でふられた人の名の高さ　柳水連　堀印
乳貰ひは冬の月へも指をさし　同
後添のつれて來るのは女の子　櫻木連　龜勇
一筋くわんと鳴らしそれ彈きやした　鳳凰連　五雷
げびた鯉さしに通して一本下げ　柳水連　桃李
めづらしさ箸をにぎつて考へる　高根連　東水
女のすごさ蟹の足がアりがり　櫻木連　木綿
慰みの鼠はちがひ棚を這ひ　鳳凰連　五雷
中宿でそこの有るのとはき替へる　伊呂波連　横好
枕元文を書き嫁しかられる　櫻木連　兎明
丈長ではち巻をして肌を脱ぎ　柳水連　石波
姉聟はものにかまはぬ男也　鳳凰連　五雲
藤を見がてら三神を拜む也　高根連　鳳頭
大紋は笑顔上下（かみしも）泣ッつら　杜若連　如雀

衆生縁ある圀れのやかましさ　井升涛　狐聲
鞠猫に膝をかゝへる面白さ　眞砂連　五盛
によろい手は平に無用と左近いひ　玉水連
强慾さ一年が十七ケ月　柳水連　雨譚
遣る所でないは禮者のかぶり也　櫻木連　木綿
乳は出ぬからおとゝさんとねやれよ　柳水連　十印
門松をぬくより早く芽がはえる　櫻木連　兎明
一日は衣服の中へ雛を立て　同　龜勇
年始がすむと弔に入る計り　八重垣連　中葉
千日のがれな事嫁思ひ出し　柳水連　雨譚
法橋の娘に成つた方もよし　櫻木連　五扇
はつぬりの羅綾着て出てやかせたり　伊呂波連　琴亭
かぶと首目當てに火打がまをかひ　櫻木連　狐聲
大當り毎日舟がぞゥろぞろ　同　兎明
親にもあはず黑石を活かす也　伊呂波連　蔦故
嫁の出る迄はまだるい歌がるた　若菜連　淺裏
二十一さと三年の法事をする　八重垣連　狐聲
五十づらさげて笑ひに出る女　櫻木連　木綿
おふくろへさわぎ斗りと一歩出し　高根連　鳳頭
くろうと好のする息子母こまり　鳳凰連　水砥

ばちは動かず首はがくゥりがくり　　柳水連　玉簾
ずぶぬれに成つて歸ると歌書をかひ　　櫻木連　玉章
卷紙をつがずに息子遣ふ也　　柳水連　雨譚
字の書いた小判せんなく疵が有り　　玉水連
三度ねらつてやり先で一歩取り　　蓬萊連　五遊
おかみさんおめへだと鴨下げてくる　　櫻木連　横好

かくれたるより顯るゝ炭だらけ　　柳水連　雨譚
ばうさん御だかりはいやな下心　　櫻木連　律長
もし帶をおときなんしと畜生め　　柳水連　雨譚

催主　星運堂
補助　蔭秀堂

涼んでる娘とき〳〵よばられる
乘物を戸だなに遣ふ川づかへ
くらつかあ〳〵つい堀へつき
あくるあさ女房は管を卷きもどし
はやり醫者楊枝をもつて駕にのり
あさかほもつらをしかめる長小言
うけ合が出來て生酔しばるなり
女房は駕でかへつてしかられる
前だれでござるととらぬ堅いやつ
くたばる程にどやしなと遣手いひ
椎の木は殿さまよりは名が高し
もんじゆのちゑで帆柱が能くみえる
あてはめた市を息子はとめられる

蒸籠で深入りをするふとどきさ
そこで釣るなといけがきに坊主首
湯島から一萬石の塔が見え
つまむのがやまず箕輪へかへされる
去狀の跡はをかしいいとこどし
ねこまたになりさうな三味庄屋出し
月よりも冬の女郎のものすごき
けいせいの鋏をもつとなさけなし
子心にはやく寢たがるたから船
年禮のかへる姿が粋になり
俄雨わんももたない乞食なり
里人を相待つて居る四つ手かご
ありがたい事ゑゝ嫁をめつけ出し

師の坊はぎしやばり妻戸こがされる
鎌倉にいらねへ篭が千殘り
四五俵の炭うりものと書いて置き
おそろしい音頭羽團扇口へあて
御亭主とねんごろが内儀へうつり
勘當が村のまつりの師匠也
えんなきしゆじやう行燈と差向ひ
行きたくば行きなと帶をうぬがしめ
友だちが來ちやけつしよする獨者
過去帳へ首を出してる百旦那
伊勢屋はかたく三河屋は大ふさけ
穴ほりといつて門松しかられる
まめでいゝなとおや分の御慶也

十月の疊屋はした仕事也
風車子のある神のみやげ也
初ものゝ内から胡瓜ばかにされ
編笠でけつかふざして謡ふ也
やつた菓子禿どこでかくつて來る
うらえりが立ツてゝ無札ほじくらせ
栗稗も精靈だけに坊がつき
おれもどうるゐとは女房むごいやつ
後家の年うちばに當てるいやなやつ
まじイりまじりといま〳〵しい初會
さんげ〳〵間男をいたしました
くだりうり貧乏樽で手をあらひ
空色で猪牙へのるのは出來心
もうせんでうば二三人おん出され
とん〳〵三みせんの糸がありやすか
あのやねが紫宸殿だと伊豫掾(いよのじやう)
まづい事後家さつぱりとあきらめる
よく〳〵な生酔花嫁をつめり
うけとりを取つてお袋茶屋を出る
是は百兩と申す嫁にて候

町内の匂ひぶくろて船へ出る
あれでも中に居る事か四つ手駕
けいせいは一月早くぶつかさね
日本へ來ては人相つらをやめ
十六夜に琴三みせんでさわぐ也
かすがのは四人(よつたり)とない客を持ち
物くさ太郎へ母灸をすゑる
玉の點とつたら御惱へいゆ也
お妾は鬼もおそるゝいせい也
三みせんを弾いてさみしいしらげい者
あたまから乗るので四つ手ゆする也
初雪や是から江戸へくひに出る
尾張町とんだ所に干してあり
御ねがひは又一歩かと母しかり
色男おれを見たかと供にきゝ
見物もよろこびのある鈴をふり
げぢ〳〵をとると奴はおひ出され
方丈さまへお目もじとむづかしさ
房州の雲はれやらぬ品の月
おそろしさ撞木をもつてはたる也

のち〳〵はといふ内はやこれ〳〵
うす〴〵は女房もの日も知つてゐる
俄雨かつ込訴訟五六人
女房と目黒へ行けば御きげんさ
六月四日犬坊は寺まゐり
勞咳になる前かつがれそこなひ
飲むまねをしろと御用と一人もの
ひぢをまげ枕とし乳ほゝばらせ
かんづいて女房粗服を出して置き
起るよりはやく御用をよぶやつさ
楊枝屋の間から白い馬が出る
ずゐ分ねぎつてかへよと嘉兵衛いひ
おどろき給ふな仲國めでござる
にはか雨手足を長くしてかける
いけぬ事こッちからもたせてやらう
一生の御ねがひを母はきゝあきる
つめられて下女すりこ木を持ちなほし
十九出家三十から女郎かひ
御氣のどくながらと出來をつれて來る
引窓から出て髙瀬は米をとぎ

錢がなくなつていひんへこゝろざし
笈揩をかくしてそてつ見に這入り
花を見てさへやはらがぬ奧家老
紅葉よりうどんをほめるげびたやつ
しんばしの松で大雨をしのぐ也
水茶屋へ霜月來るは他宗也
目がさめてから椎の木をくがでみる
かういふもんぢやだとはぎへそ引きこみ
けいせいを大白にするいたい事
三文が程はをどり子娘なり
やはか三歩におとるべき裸也
神佛をいぢるも息子道具也
口をすぼめるがいやさにこもを買ひ
友成が近所瓢箪よい所
飯盛をはかりにかけて十匁
友達が起請を棺へ入れて遣り
大や馬斗りでけちな船ゆさん
箱は明きましたかと來る百さじき
中ぬきの中にこま下駄ころんでる
まとふそいものかひッしと列んでる

せきぞろは御講くづれのじやまに成り
駒はとめ舟ははせ行く椎が本
只今かへりましたとうでを持參
とそきげん子のあいさうに旅へ立ち
生娘は帶をほどいて捜す也
四箱あつめたのはけちな歌がるた
小松原かをりみちくる嫁の禮
すてさうな所を荒神棚へあげ
看病につぼ皿を出ししかられる
仲綱は傘屋のがきにばかにされ
去り得えるものかとお金にくい事
あんどんをとぼしてゝ張る十三日
たづねてこゝへ來る人は目なし也
うかとめがねで鶴（重器？）を出るはやり醫者
暑氣見舞家のてうきを見て歸り
きつい事病後のなりを道具也
なみだより外にはちゑの出ぬをとこ
なまみそを杓子のまんませたへ出し
金は無いはずひんなりとした男
五二（ぐに）べたを女房ざく／＼汁へいれ

大門へ目つけをつけてこれを見す
おしおくり寢たり起きたり漕いで來る
三文がなづなを買つて叱られる
子のさかやきにしやべり人が二三人
いり豆に花とは雛へ馳走なり
かるくいつても八丈がものはあり
一筆申されて下女はこまり
心中も男の方はかりだらけ
袴着に裝束つけが二三人
太夫棧敷だと日なたの藥とり
もつて見てお釜はさるへ又のこし
そのびりを受けてくれろと立つて居る
顏へ本あてゝ車のまへで泣き
橘をふところにして二分とられ
一鐵な男鼠をうちころし
朝がへり是れまあきけよ／＼也
ほら貝もふくかと庄屋下女に聞き
うらぼちを棺へ入れたを後家忘れ
三役目を玉藻前ではたく也
奧家老三里を出して馬にのり

盆が過ると月しろがあがる也
商賣をほんとにほれてやかましい
十三日勘略奉行奥へにげ
草履取じつはさやうとぶちまける
手作だと鹽を諸卿へわけてやり
業平のつとをかくして萩をみる
大小をころしてさすが妾(せう)が兄
行くやつを伊賀の窓からじろ〳〵見
藤房の外は賄賂をみんなとり
よんやさ〳〵と袴着はあがり
娘のはける駒下駄に留守居より
ほゝの木を不快な妹をがむなり
鞠でなし謡でなしと女房いひ
とつさんが見てゐる内は可愛(かはゆ)がり
猪牙のはなづらに一足やはたぐろ
鼠見物で叡山きつい人
水茶屋もかんづいて居る耻かしさ
後へでも先へでも行くよいじまひ
づぶぬれになるは江戸中ふんだやつ
此やうな糸をと錢にくゝし付け

船賃をましてやるわと坪をふせ
たのまれて足をふみ出す切おとし
あまりこびついて女房にやすくされ
しごくおんみつ明店でおつぱじめ
千ごりを橋からよばるけちな事
こてすねあてゞからびくの見ぐるしさ
楽みは嫁をいびると寺参り
おんぢいといふなと女衒しかる也
やあちよのはじめのと羽團扇をあて
よう忘れる人ときせるたなへ上げ
四人(よつたり)で土手をくるのは鞠崩れ
ぐれつく橋をたのんだがおちどなり
さあ〳〵どうだえゝといふとこへ蜘
まんぢゆうほくはずそうめん喰つて居る
木綿屋はまかりませぬとぐつとしめ
こゝで知つてざとちやうつけ斗りする
伊豆もよろしうと小聲で源三位
重箱へかけそこなつて寺へかけ
女房を持つて人(にん)さうづらになり
いゝさらさ人を茶にした鳥を書き

衣裳あらためあつたばん女房迯げ
越後屋の寺へ秀郷鐘を上げ
地女にひれつく息子高がしれ
去状のそばをころげる火吹竹
からびくと竿を車につけて行き
口のこをはねるで御用はげむ也
かなしくてならぬに鬼になれといふ
ころもをばぬぎなと圍内(かこひ)氣なり
朝よりは一字すくなく鐘をうち
間男は庚申塚でとつかまり
王子から臭い狐がついて來る
はかりにかけても高尾はぴんとする
人主を蕎麥のついでによんでくる
開帳は五丁二丁でおつぷさぎ
柴はきでん淺黃は身どもなり
をかしさは座頭やみ目をしよつてくる
かゝさんといふ内息子まだくへる
へらがあるのにのべ紙で石田拭き
三年の戀がさめると離縁なり
あはれさは祇園囃に三味がなし

松下は日ざん用ではがてんせず
女房にさくら／＼とうたはれて
高倉のむかひそうかをそゝつてく
すりはり太郎は近江無宿也
いそぐ嫁一竿もどすわたし守
似合つたとゝいはれて娘子をすてる
松が岡わらでもたばねさせぬ所
越後の謙信かけ直なしのいくさ
うめんめへあげやうと嫁は借りて來る
かけ聲の無い四つ手にはぜげんつき
白加賀にしなとお針に見くびられ
心中の座敷をかぶろかけぬける
蓮を見に息子を誘ふいやな後家
はやり醫者手紙を持つて駕に乘り
にげた朝まづしづかにさく／＼
三布團（みつぶとん）うんといつたがそれッきり
ころぶはず大きな坂の近所也
うすべりをまくると本田によいと出る
もッぱらにやけをむねとして地紙賣
のぞきこみ／＼かみゆひさがし

生醉にどぶをしへてしかられる
時鳥ゆだんをするとなきたらず
うつくしい虫船ばりへ出て招き
眉毛のないのが禿にこはがられ
うへ下へ着るのはけちな雨やどり
祭の子わらつて通る内のまへ
ねんぶつと三みせんやむと雪に成り
地下人が五つに折るとごみに成り
坊主もち生醉とんだむりをいひ
はやり醫者となりの娘うつとしさ
三會目ちつとは女郎かつたやう
そのじゆずをしまつてくれと土手でいひ
家の有るだけは呉服屋くばつてく
母苦勞びらしやら斗り二三人
大の艾をくださいと繼子來る
男の勞咳五町でなほすなり
何ふそく無いと撿校ほめられず
二つめの咳で女房にかんづかれ
着るものゝ色を聞いてはおつかける
じやうふだん鬼の念佛嫁はきゝ

かゝアたち出るは／＼と大坂屋
第三はばゞアに一歩やりぬらん
牧狩がなくば手ごはいかたき也
なんの辨天とおたまをふみつぶし
横に寢て見りやたいがいのしまひ也
大國の美人尾州に跡をたれ
廿二日にしつけとるいゝ着物
とびのり／＼こぎ出す月のくれ
野郎のけいせいおつてが五六人
女房もちほれたといつてつゝこまれ
新造は後家になる氣で請出され
公家衆に似た人ひたひやらかされ
十三日五百のあたまはりまはし
みそづけで亭主湯づけをおしやらばん
御湯立の跡ばアさまのお江戸入り
角（すみ）の石やう／＼いきてすひつける
うれい三重で母おやいとまごひ
わつちやたべえせんと遣手置きゃあがれ
連れて唄つてくれおれと新むけん
すゝき田はあそんだだけがとくに成り

時政はかすりへばかりまはつてる
小寄講にて見合ふのは二度め也
もろこしで永の御たづね徐福也
目あき千人じやもつらは賣れのこり
三つぶどん下手な鞠程足を上げ
舌を出し／＼弓削村へ勅使行き
圍(かこは)れの狆野郎をばほえる也
かた／＼へ二本ふんごむ十五日
門(かど)に馬たえぬがむらのはやり醫者
出すまじき所で淺黄武士を出し
くま坂が手下寐て居るやうに死に
わきの僧いぢかつて居て何かいひ
手を鬼のやうにして嫁かくしげい
七軒で七文がうるなづなうり
三圍(みめぐり)で日ぐらしのなぐいゝ時分
我腹がへると子守はかへる也
新茶屋でわらぢにうつる恥かしさ
おもては草鞋うら門は弓矢也
あらひ鯉くつてつばなの直をねぎり
大わらひ富場でしやくしおつことし

ぶちまけて四つ手四しんが一四(いつし)也
堀井町團扇と見せてさつまいも
百貫のかたへ麥わら笠一つ
十三日十三番のありがたさ
一歩やらずば剝ぎさうなばゞァ也
十九と廿五といもうりがはなし
切りぬいた判を撿校むこひきで
簞笥をからと見ふめねえ座敷也
元日にたいこ一(ひと)切くつたまゝ
田樂を飛びこして出てこりやどこへ
廻り部屋引手の穴をふさいでる
呼出しははづかしくなく賣れ殘り
ぐるをやめにして米かみねらふ也
猫に十本多いのがよめのげい
おやど迄召せと謡へもどり駕
折らずにおくと名所にはならぬ也
すみだ川一つ着で出て大あたり
おくさまもよろこびありや鈴の音
しろうとになつて女郎の穴をいひ
色白なつはもの二人(ふたり)出てふせぎ
撿校の女房からだにいもはなし

おいらんは六町と出ぬ言葉なり
をしい木をやね屋はずッか／＼切り
十七屋渡天はいかに渡るまし
三つめ迄あがりましたと子をおろし
十三のまん中頃で四つ手きれ
せつぶんの札を優婆塞らばひとり
物さしに打ッ手針にはつく手也
高輪へ來るとうしろで帶をしめ
格子からその手を取つてすぢを見る
御出入の豆腐屋がうらやましがり
藥とり甘草くつてしかられる
牛かたのあたまの出來る十五日
むごらしい所もあづまの名所也
琴の師へつゝぽう袖じやいやといひ
しつッこい景圖を引いていやがられ
そのくにで酢を一しきり買ひきらし
うんのいゝ高尾は申留になり
初午は角(すみ)ッこばかりさわがしい
はな紙をぱつたりと置く夜の音
ばんづけのこし張を見て下女はすみ
水茶屋と見せ內證は是れ／＼さ

寅三月別會櫻題萬句合書抜

ありがたい御代鎧にも錢をなげ　雅情
許すのはあちら染めるはこちらなり　季伯
繪に書いた時鳥さへ一羽ぎり　五樂
大きな納涼花の山を泛め　雨譚
若後家はごふはらさうに孫をだき　百菊
禪寺はいゝ方角の紅葉也　仙路
はたちから十一二年氣らく也　玄漣
げせぬ句だわえときせるを廻してる　ぬのし
夜着一つふとんを三つねだる也　五扇
おふくろがやかましいとはまだ初心　花口
さすが武士まかねにわたし土手へ行き　吉公
御主人と思ふとめかけ不首尾也　亭々
富士山をかくす斗りが春のきず　吸川
情のこはさうなが這入る松が岡　百千鳥
三とせ見ぬ内にさがみの言葉也　井筒
僧正の一ばん弟子はおそろしい　石斧
朝がへり其いひわけはくらい／＼　寥我
ふじ山も有るものにして店おろし　豊好
まゝ子こんじやうで禿はつめられる　間々
一の人二かいの上で賣れのこり　半黄
をかじさは來月分も母しかり　五樂
千両迄の女郎には手づかへず　五扇
あいさう過ぎて一町のやかましさ　且府
證文をやいて撿校緣をくみ　四郭
ふかんなるやつは都にしやがんでる　五連
神樂過うまし乙女へ大一座　且府
うまし／＼と純友はやせへおり　川里
鮟鱇は口びる斗りのこる也　客來
五十三次へかけると湯もやすみ　季伯
二人づつひッそりとなる大一座　一町
こゝらでの質屋五六つき干してみせ　同
吉原がたんぼへ引けて猪牙はでき　冬始
ほごすのは親父の代にあんだこも　如雀
しゝが見えねえ／＼にむこを取り　窓梅
僧正のひつぱりたらぬおそろしさ　子樂
かみゆひも座敷があると一歩かり　南來
耳たぶのちひさいやつが塚に成り　狐聲
鼠をよく取る娘に母こまり　三町
手ならひのせわがやんだら女郎買ひ、　狐聲

百里の餘行き上下を着すなり　一柳
例年の事にたまげる初がつを　其漣
へどの出るせんぎ屋根ぶで簫を吹き　巴幸
道春點を提げて來てさそひ出し　眠狐
又文かそこらへおけと光君(ひかる)　烏鵲
うそでないもみぢは二度と見に行かず　四郭
あやつりをすく藪入はぺたつかす　鯉橋
尾頭の無いがいせやの初がつを　夕照
葉ざくらへ鋲打の來るおとなしさ　洗路
切迄見たて仲人のあん氣なり　文仲
蜘のあるくのは知らずたまげる　文洞
ぶつてしめたとは無意氣な色嘶　松國
門(かど)の春跡からも又跡からも　啄梓
年禮の落思ひ出す俄雨　澤蝶
隣ではいつそ抓められるにうせず　冬始
念佛をきずにしてよふうつくしさ　靜風
元船にひかへろといふ御どうぜい　唇虹
團十郎で出ましたと母苦勞　雀芝
のろッこい四つ手後(あと)からぜげん付き　卜文
出むかつて嘶す袂へ何かいれ　五鳥

つき出しと見えてつくねたやうに坐し　眠狐
六十日目づゞ毎ばんの御そん也　桝水
石こつぱでも殘すなと御下知也　龜遊
忘れたが因果國府をかはかされ　李牛
朝おきとねかねる中に美しさ　眠狐
夕だちは十七屋から京へ知れ　門柳
青首を取るが治世の手がら也　眠狐
うら門をのりうちにする目見(めみえ)也　龜船
まひづるにつかまれてゐる賣れ殘り　眠狐
燈籠の名ごりたがのとお針みず　燕子
沓音がすると僧正うなり出し　其樂
二十冊たらずよみ本かたみ也　由之
上下を引きずり戻す中のよさ　狐聲
珍事中央聖人の繩目也　賢魚
三つ口はぜひなく非人にてねらひ　下時雨
鰯煮た鍋はみのぶの時鳥　同
まはり〳〵の小ぼとけは四十七　其岱
ぬけしなりとうして來たとりとうてん　弓光
磬で楊枝をけづッてる貴休み　林雪
沙彌などの喰ふものでなし初鰹　旭枝

時鳥さしてもさゝんでもの雨　仙路
たッた三日にてころりと山椒みそ　同
手の下のざい人めかけたんと持ち　百千鳥
もらひ乳ゆすぶり込むが馳走なり　同
いるにまかせとは歌も矢つぎばや　杓子
ひつきれのとべのと琴でふりを付け　石斧
さじかげんしろうと目にはをしいやう　桃李
高く舞ふ時は小粒を付けたやう　石斧
糸だてをぬひて迎ひをしかり付け　同
よし町へつん／＼としてまがる也　同
もつとよくされる氣で來る三會目　未然
天に口あり一反またへ入れた　水砥
音無川へおちる所下戸おさへ　同
芭蕉翁ぼちやんといふと立留り　間々
かいどりの禿が二人うれのこり　五樂
ひよつと來たつともゝ度も子供來る　魚交
てへも無い所を鮟鱇しやうびする　五雀
あッけないあそびつゝみにいなゝかぜ　五鳥
しやこさかしいと鳴神むづとくみ　柳枝
こッちへは來ぬと里からさわぎ出し　五雲

よねの守りを幼少ですくね出し　岩計
やれ遠いぞとと山のが紅葉を出し　五英
こつばづかしい聲だよと田舎嫁　五扇
來る人が日和をほめる旅見舞　素鳥
人がさしくづしてしまふ嫁の傘　眠狐
うらゝかさ品川沖へかちはだし　蘂十
居ぬ息子雪をわけてのせんぎ也　眠狐
先づ御入あられませうと江戸家老　雀芝
肴賣待兼山のほとゝぎす　門柳
そのまゝで高尾がのるとしづむ也　梅斧
百兩はしまひ見せろと初がつを　門柳
夜の雨とところの人は小言なり　素鳥
母の相づちでなまくらものに成り　五連
錫杖をふるやうに出す下手のけん　蘂十
地主をば御めかけ伯父に書いて出し　五扇
けふもよく降るわと這入る下手將棊　五鳥
十郎が出ると懐中箸を置き　眠狐
御客様だわとけちな上下で言ひ　洗路
わうちやくのしるし黒門出てあばれ　同
引けまへの初會ふられて來たのなり　花口

日にかゝるものを母親寺へ上げ　冬始
きさな事廊下でちよッと／＼なり　硯壽
うぬ烏あと梅の木へぼうを出し　唇虹
糸の琴かッちらかして泣きやませ　同
よし町へ行くを目附けてくどくなり　花口
持參金松川氏のむすめなり　東里
目をさましやしたおいとん申しやす　鐵房
不二山がおッぱだぬぐと九十川　蜃虹
つめが出るさうであかるい内にすみ　花口
どろ足で工藤が夜着をはねのける　同
初雪をめくり日といふむごい事　夕照
毛延壽頬をも赤くゑどる也　鳳頭
はりぬきの榎を四つ手見て曲り　中葉
手をかしてくんなと五文ぐりをとき　三町
堂よりも茶見世は二けんひろい也　一口
無いものか道だとよくをふかくあげ　庵子
扨御そゑんをしましたとさやをこき　山水
おぼろけの十が息子をよび出し　魚交
半さらしこゝをせんどとかいくらひ　其奬
所詮足りないと大山さして行き　山路

花の山石に出家が二三人　岐鶯
ごふくやも二人のつてる寶船　百菊
じやうだんに乳母だき付いていやがらせ　毛穴
葉櫻や毛だらけなものぶら下り　吉公
半元服でちつ首のにくらしさ　文仲
藝能に達せざるのが猿田彦　龜深
手いらずのばゞア卒塔婆にこしを懸け　其岱
春の日のあまりくわんこう寺も探し　下時雨
いつそのくされ櫛卷で芝居也　巴幸
今ばんも新造どくしんでふせり　同
すしや程ゑさ箱のある下手のつり　ぬのし
心ぼそさうなたちかと伊勢の留守　花口
もみぢは沈み豆腐屋は浮む也　蔦故
芋賣へつるかけを出し呵られる　同
庄屋がかゝり湯すると法螺をふき　萬象
違ひ棚あけて淺黄はしかられる　花牛
つみが無いさうで柳にみえる也　賢貝
木の丸どのにお公家だの小僧だの　萬象
さんまの干物食ひさして馬おひ　至方
えりへ手をあてゝせつ法とき仕舞ひ　仙路

詰めの幕前に目高をすくふやう　同
あいさうに嫁は鶴だのお船だの　城山
美しさ一日鞘へをさまらず　仙路
角兵衛じししやれにおかめを交ぜて來る　四敬
しよく人を五百しかつて五百ほめ　谷幡
掛取のかはつてたゝく鳥の骨　百千鳥
傘におよばすと美濃からかけて來る　同
早桶よりもちどませろ切りおとし　米子
御留守居のはかまで秋葉くだりしやれ　名古屋
三年に一月(ひと)寺はうけに來る　遊子
花の脊紙をまろめていのる也　箭車
初がつを女房あたまも食ふ氣也　米子
ほそ布もそめ木も母のむねあはず　百千鳥
灰吹をひどくたゝくが且那也　同
御めかけのぶきび旅裝束で着き　鳳頭
外々と御見くらべ代三歩　桃李
となりさじきに見て居るの耻かしさ　雨譚
獨へは無點假名附は内でよみ　石斧
うしごみのがつそう瞻の太いやつ　雨譚
うれ殘り誰とはおろかおばたなり　同

いつ何時(なん)でも女房うんといひ　石斧
ゆうてんをむさい疊へ通す也　鳳頭
かんぢやうでお座へ出されぬやつを持ち　礎
所作の内とりて四五人てれて居る　石波
のゝさまを二度うけ合うて銚子也　玉廉
だんきんのまじはり二てうかけさせる　石斧
十六本すると犬迄くひあきる　李牛
間男のからだ一尺が一兩　雨譚
はなねぢり斗りがねだる甲斐の國　石斧
前髪が來て酒もりをぶつこはし　柳舍
會津屋でさがしたといふ紋所　同
重衡は大きな佛火にくべる　五扇
お袋の背負ふのはけちな宿下り　接州
越の傘ひしこもつひに添つて來ず　魚交
かならず庫裡へ出やるなと和尚いひ　錦江
仕切場へ只右衛門手紙持つて來る　牛黄
酒屋の見世に雨かけの四つ手駕　五園
具足代持つてかしかんばんで逃げ　五樂
回向院ぶつしやうゆんぺ飛んだ事　五雀
そいでとりますと外科殿平氣也　五樂

道行(みちゆき)をぬいて義太夫本をよみ　五鶴
きんたまをけられだきねをよしにする　同
丸ごしへ湯屋いろ〳〵と申しわけ　錦江
あつい茶をめつけてあるく一人者　且府
氣のどくさ餅屋のみせへ醫者を呼び　五言
にぎやかさ色々な顔入りかはり　柳燕
ねたばをめはす其そばにすゥやすや　青ロ
かたき打死人の山の近所也　水砥
あつけなくみぎはの茶屋を二人(ふたり)出る　四郭
ぶつつけるやうに駕賃女房出し　五連
うらゝかさしきりに錢がほしく成り　且府
まあうんといひなんしよとつめり上げ　五英
にげてッて餘所の喰摘こしらへる　五連
ふう〳〵をやめて野懸へ火をはさみ　水砥
化物に成つてとあばたまつご也　川里
をどり子にをどれと留守居むりをいひ　四郭
榎一本に三度迄はらを立て　五園
はなうたで來るのはけちな女郎かひ　斗石
犬は目があるのに杖でぶちたがり　接州
はづかしさみそ一重のみやげなり　斗石

佛に飯を焚かせたは佐久間なり　素颸
三會目そこいつめたき帯をとき　横好
風まけもせず十五夜を仕舞ふなり　和笛
夫(をつと)ゆゑには金と成つたるをんな　同
姑は直きに死ぬやうに仲人いひ　冬始
ちよろッこい事をして居る常ざらひ　鐵棒
てのよい毒害妾やたらしひ　敵吐
長い目で見てゐる内に後家はらみ　和笛
手次手にかゞみの前へござをすゑ　淺裏
よその子のていにもてなす楊枝見世　清江
山王と神田でもみた金屛風　花口
あぢきなくしきみの中にかきつばた　淺裏
間男をこたつやぐらでぶちのめし　川角
わたくしをにらめましたと妾泣き　南溪
ひろげるとひつくりかへる傘をかし　硯濤
雪の蓑庭へふるつてしかられる　梅成
家名からしてなまくらな茂左衛門　其林
しよざいが無さにあれこれをしくじらせ　蜃虹
二人(ふたり)ともうごくなと石かッちかち　梅守
やせこけて亭主赤子をだいて居る　久鳥

紋つけにかけちや手の大きいかこひ　杉壽
遊園扇つるすはけちな煮賣見世　車道
五十程付くがうずめのみこと也　杉壽
車座にならび高尾がきげんとり　かすみ
よわむしとあくる日女房頭痛もみ　杉壽
船の鷁向う二げん出来るなり　鯉登
しまる〳〵に又はかしのふはかし　亭伯
よくおれに犬をけしかけたとしやべり　洗路
髮はかの文字太が内とびくを下げ　玉章
當分は出にくいひどくりやうられた　百菊
しづかにしやれと大屋張る氣なり　同
とこ代ははすばな女拂ふ也　魚交
ついそばの爪を尋ねる不自由さ　十口
長おひをせぬが義貞おちど也　玉簾
糸をこき〳〵住頭の坊はなし也　素鳥
えゝかんにたべてしまやとぶうをかけ　玉簾
そりやのいたりよと火箸で鍋を持ち　長笑
せんだいてひやめしともがあてゝ來る　雀芝
またも奇特はちのみ子を連れて逃げ　門柳
熊坂はのびを追つたがおちど也　錦遊

色出入にはかゝはらぬ信濃者　美香
しだれざくらへ飛びつくと納所おひ　岸江
泣き〳〵もよい方をとるかたみわけ　東里
中剃へ竹をうゑとくごふく店　梅枝
なけなしでろを買つて下女しかられる　錦柳
四月八日は行水のはじめなり　錦遊
やは〳〵と墨のたもとを四つ手引き　素鳥
見られたかつて火をとりに息子行き　魚交
千金の嫁一ッこくをぬかすなり　眠狐
こはい事さしみを食へと伊勢屋いひ　魚交
奈良ものも五丁町では切れる也　猿十
衣を脱ぐと懐劍を和尚出し　同
ごふはらさ錢を拂ふと天氣なり　十口
花火をもらひ日がくれろ〳〵　五鳥
一つ着でもうよからうと隅田川　魚交
つかへ手をかけるで酒の興がさめ　甲鼠
大三十日ひッひいひいが十二文　三朝
かこはれが法界悋氣うるさがり　門柳
椿の實只一すぢはなさけなし　雨譚
見ともなさ亭主かきのけまかり出る　曾木

若い事小袖を八つぶつ通し　文祇

火木を持つてせなアは江戸へ出る　竹露

柚の梅あれども女房くらはせず　玉簾

流雛に大あなむちのみことおひ　泉河

しゝ日のうへからおやぢいけて置き　眠狐

遠目がね近い二かいのうへを見る　東里

はなッぱりすこぶる小言などをいひ　雀芝

かみをつくねて鼻のさき掛あらひ　五扇

瓜島わるい鼻緒の切れ所　東里

金持を見くびつて行く初がつを　門柳

女郎やの掟をひよぐりながら讀み　菅江

天明二のとらの彌生

主催　櫻木

木綿

風調 柳多留十七篇 終

東都点句万句合判者連名

榮々子　苔翁 二代 當時　作丈　雲鼓

白翁　菊丈　収月 一沖撰者寄保身中 壹万八千句集 當時三四代目カ

如露 二代譲　嶺松　梅花坊　鳳山

一翁　千鶴　圭女　東月

白亀　露丸　机鳥　錦八

川柳 宝暦七丑年ゟ初當卯年迄廿七年ニ至年全一万句或ハ二万安永亥年
二万五千余句集柳樽十八篇末摘花初篇後篇出

呉陵軒著

誹風 柳多留十八篇

寐てよんだふみ眞中でおきあがり
松をたてない正月を庄屋ふれ
たくましいふくらッぱぎを下女は出し
元服をいたしましたとやみあがり
十四日ぬき身をしよつて夜みちする
由井が濱びくり〳〵とさせた所
つけとゞけせぬと門番こりやどこへ
引け四ツとやらがなるよと母しやれる
親ぶんはこつがらのえゝ松をたて
稲田九郎兵衛が領地も一首いれ
つまへ手をかけると女郎かたち出來
田樂のなぐれめらさと遣手いひ
都人わづかな水ですゞんでる
よめはもう黒吉に成るはづかしさ
浪へ手を合せてかへるざんねんさ
切れぶみを母がついてゝ書かせたり
俄雨やぶいの門のにぎやかさ
名代に梅若ほどのやつを出し
若後家で七日々々のにぎやかさ
御門をば錠よりひどい石でしめ
しッかりと喰つてあゆめと下戸はいひ
暑氣見廻ひ嫁の手あつい事をしり
ぶちまけて仕廻ふと四つ手無言なり
先をはらつて金もんのたばこぼん
關守に見知られて居る中納言
金銀はかはらのごとくいゝくらし
素一歩はとッかいべいがこはいなり
ばけものの部に入れて居る御さしれう
門の鍵こゝへよこせと國家老
後の月嫁氣にかけて爪を出し
わづらうかな細をとくのに二兩出し
紫で金澤へ來るついでなり
ちひさ刀でも大きな事が出來
中宿で男ふうじに書きなほし
結構な春はせけんがひろいなり
おもしろく田地を五町おッぷさぎ
母もよろしくとをどり子座になほり
祭には御貸しなさいと暑氣見廻ひ
御めかけと中のえゝのは御もつとも
うら門をたび〳〵いるとさとられる
十二日から色男ねらはれる
かはくといへば梅屋敷もちつとだ
きつい事男にせずとつれて出る
拍子木のまくらに近きおもしろさ
袴羽織でかへさぬと衣來る
沙汰のかぎりは火動にて遷化也
見て居れば座頭は明けたがる目つき
垂れるうちごぜ大道にあけらこん
こしらへるを見てすつぽん思ひ切り
觸賣の田地に一羽さぎがおり
うら店へ二俵かさねてにくがられ
だんばしご胴切にしてしよつて來る
まけこけて女房にまゆ毛付けさせる
うたゝねのつらへ義太夫かぶつてる
品川は山にかけ直のあるところ
もろ〳〵のちしや達沙汰すいゝ陰間
はだかッ子嫁しんまくにしかねてる

四方から筆をつッこむ天の川
もみぢとは古句と女房點にせず
空色はかぶろの目にも青く見え
勅免の跡に女とちどりなく
勘當も一人他人でてッきぱき
せき將棊手を切つたりとげびる也
かんのんさんへ御つれなんしとせびり
太郎兵衛はもう／＼金がたんとふえ
神明ををがんてゐるにもッしもし
今川はだんぜつしたとまり手合
牛かひにからかつて居る小間物や
本所へ隱居をせぬとむづかしい
月見もせずに西山をさがすなり
かます小桶に彼の大黑をねらひ
地紙賣しまひ左の者どもになり
豆のある强飯小町くつて居る
念佛いつさんまいと嫁をいびり
大太刀をきめて鼻屎賣りつける
御不如意は社稷の臣がまきを割り
どう／＼におんぶして行く奥家老

うでけつかつてゑび二とは是だかえ
三つ山で御承知ならと諸葛亮
ありんす國の月を見るいたい事
ぬす人で祭禮に出るきついやつ
刑部樣御入りと草津大さわぎ
なく石をかねとたいこでだますなり
高尾死すとも吠え面はかゝぬなり
はんてんで御講の留守にひよろり來る
しんちうをなめ笈摺をぬいてゐる
伊勢屋の年始扇とはそらごとよ
小便所めんぼくもない人にあひ
すりはり太郎巾着を切りはじめ
のゝまを出して加賀ものをこまらせる
屁をひつて備禿は二日來ず
五二ぺたを日本橋からはふり出し
いよ玉屋なぞとへッぴりわるふざけ
入道を東魚はたこの見たてなり
つるの來る事をさとつてひらくなり
朝霧で櫓の見えぬ時分行き
黄金へ尾頭つけて屋根へ上げ

ものどもつゞけと上下ひらりのり
富めるさむらひはするがに立つて居る
さゝばたき後妻いとまをくれといふ
甞三をぶちのめす氣で女房出る
まんぢうへ馬上から手を三本出し
入りむこは下女と一所におん出され
生れたと橋の上からよばるなり
子を鷲がさらつたはなし六部する
拔けるのを弓矢を持つてねめて居る
眞言秘密でも鼎ぬけばこそ
熊坂は外のばくちはきらひなり
むごいやつ宵にちらりと來た斗り
冬の内信濃之介をめしつかひ
品川はとこの海ともいッつべし
ていしゆの着物着て質をうけに來る
車にはりこまれ道鬼は仕廻ひなり
お門を切りくんで根津から女房呼び
公家衆の生酔筋をふり廻し
大名をねまきの外へねせまうし
大門に屋形一艘たつて居る

御拜領くま手でかゝぬ斗りなり
ロ上にしたがひまするほれたやつ
たッた一歩でくるわ中ほれあるき
おふくろの塗る内ちゑのない娘
久しいふみをよむ所へ暑氣見廻ひ
傾城のからはらへ來るやかたもの
どらに成る前あのむすめ此のむすめ
仲條の門にたつてるのが相手
醉つたやつ二朱づつ雛をつけ上げる
よばつても來ぬはず禿蚊のゑじき
何もえんづくはたぎつた顏でなし
氷の日をえりから上で妾つぶし
元おれが地だと大家はくだを卷き
僧正は座頭をひつし〳〵うめ
よの山はすそつゞきにもたらぬ也
大紋をぬくとふだんの萬右衛門
妾が兄何十人もゆびをさし
いふ事のさつそくに出ぬ鸚鵡石
立酒は一口のんであとをつぎ
中宿からは手を長くして通ひ

氏神の壁色遣おぶッさり
賴政が毎夜通ふと禿つげ
一人は左衛門でない四天王
奥家老後から馬につけて行き
ゆふだちに蛇の目を廻すかやば町
土みかどさまを姉もかざるなり
あの亭主になるやつはといらぬ世話
首すぢ元へひや〳〵で五兩出し
蝿がなくなつてぎよろうで吸ひつける
小性あがりは尻ッくせわるく死に
はやり醫者お月番ほどためる也
生壁は男帶ほど先へ干る
百三十二文出してひんをかひ
手のひらへ書いてのゝ字は口でいひ
賽は所持したと島田でおつぱじめ
米かみ以來評判のたはらなり
大三十日本田あたまは廻りかね
かなしさは三日からさきかすむ也
さあ蒔く〳〵をきくやいな遣手出る
心なくよめばかきつばたではなし

おれがなも買つてとつばな賣は泣き
あてもない松に預けて暮をぬけ
三度笠犬にあづけてをがんでる
奥道者明き手の方へしぶうちは
そりや木曾が來るとでんぐりがへす也
拍子木をしろうとの打つにぎやかさ
三人でだちんを拂ふぬけ參り
上げしほで御仕合せだと柳橋
ごふく屋へ腰をかけてゝ直ぎる也
九代目は宮を牢ひつ迄ひいれ
雛のわん小ばかにならぬ高い
頰杖をついてたゝみや日をくらし
せッつきに弓師へ通ふ小ざむらひ
おやわんを勅使うしろへかくす也
いんぎんにされたでくどきこじれてる
たがをしへたか今のかゝさん女郎
高尾がみくじはじめよし後わるし
愁嘆で女房のあてる大三十日
男の顏を金で張るあばた來る
なむあみだぶつ是からは根元記

ぬす人に祝へ〳〵と市もどり
琵琶の弟子一人ふえると二人へり
魂のひたひにあるを四つ手のせ
生藥屋作病ぐらゐなほす也
からしりをおりて横根のやうにゆき
ねだりに來たやうに座頭大一座
内中ににくまれて居る首まがり
かねは忽ち湯になつて臭い也
勝ちまけはともあれ女房本目はり
ぼたもちのとゝまじりする神無月
十月のごまたちばなの中でたき
たけ田のからくり三年ひしかくし
おもしろき夏と冬とのいしやう也
風まけのする荷を牛は二日引き
江のしまへ黒かも斗り二三人
人じんを錢でかふのはいちらしい
市に俵をふんまへた物目がけ
わつちかへ平六兵衛と申ヒやす
じつとして居て傾城はだきつかれ
あたらさくらを不如意にて見そこなひ

えもの〳〵をひつさげて市がへり
指でかみをかき〳〵ひどい身あがり
駿河町みゝをこき〳〵勸めてる
うろ覺え十五年跡來たお寺
相模まできこえる程に垢離をとり
一匁花で七兵衛なれそめる
お内儀は師匠の留守に出てしかり
よくてうしなんすと烟管ふり上げる
だいやを二つくらつたに川があき
ヘッついの前へこゞんで下女がかね
人の名歌を九十九首えらみのせ
はら帶をしめると跡の五十兩
御所出だといつて石かけはやるなり
奥へ行くほど年の寄るごふく店
四斗樽へ傘をつけとく長いしけ
道哲にとんだ靈寳斗りあり
ふり袖を着あきて四火の沙汰に成り
島がくれ行き〳〵したがくづれなり
うきふしと花嫁やつと唄ひ出し
きみのよさふたをさゝげた備なり

もろこしの弓矢で鵺は射ころされ
羽織着ながらあんどんですひ付ける
身をなげた上を屋形で三(さん)さがり
いらざる僧のうでだては土弓なり
だてに目は二ついらぬと小十郎
三みせんのけいこがへりは口でひき
百兩へ三歩がきずのつけはじめ
夏しぶく冬あまくなる堀江町
何かないしゆに半ばかま〳〵
きだはしを上ると時平ねめ廻し
女房に付きについてるたはけもの
醫者となつてじやうふだんおこされる
楊貴妃はいふ程の目の出た女
乳母たべるうち御新造をどつてる
いもが子に屋敷一ケ所のけて置き
さむい事みじめな後生ねがひ來る
三みせんはあいつけたりと撥(ばち)でぶち
かけとりの小聲でいふは下(さが)りなり
二日の夢に七人にはたられる
かた棒の後(あと)から太鼓ついて來る

ひッつりがふえたを持参わるく聞き
きげんよくしな正月の買物だ
氣のどくさあくる日土手でつぼにあひ
すつぽんの甲羅かぶつて槍けいこ
湯くみばへ首をつッ込む馬喰町
貴殿身どもで酒代をつきちらし
あり助に白状させる御新造
草木きばみ大玉が落つるなり
吹殼を消してくんなと撥で突き
とゝゥは山へかゝアは内でいひわけ
魚籃さま御使がらのすがた也
鈴をもたぬと追剝にあつたやう
汁わんをてんでにすゝぐ馬喰町
ぶく／＼をしてくれをれと淺黃うら
たッた一度でかんざしをもうねだり
腹を切るのもあさつてとさとつてる
ぶる／＼とすると三疋しゝが出る
ひげ切をとぎすましてるびんだらひ
あかい頭巾で太神樂嫁ねだり
すねた子を壁からやつとひつぺがし

死にかねるはず店うけのたからなり
ふいごのけぶから高尾はあらはれる
そりや坊さんが居なさると水鏡
細見の隅から一歩とりに遣る
切りおとし中を禿があをむかせ
あまよばりされた前表まつが岡
三河から古風なしやれをいひに來る
勞咳のしさいかならずとなり有り
萬木にすぐれて筆をうつちやらせ
ぜんつくしぴつくし後が奥家老
懐劔をけどつて遣手上げぬ也
もてぬやつつれなく見えしわかれ也
傾城が抱くと赤子も皿に桃
素見物見とれて居るとあげられる
きねをひつかつぎあはびをくひにより
氣づまりを根こそげはたく野がけ道
根そろひをつかんで殿をおつかける
さし引殘りしぼさいへ飲んでさし
野暮の骨頂をどり子をつめるなり
丸綿をはじめた人のはつめいさ

大きな佛金性と木性也
もう引けとお齒黑屋からかッちかち
ゑびす講傘をかへしにくるやつさ
黑助のわきで男にばけて居る
煮えたつとかゝアどんやと鍜冶屋よび
ばゞアは川へせんたくは施餓鬼なり
閏月嫁きい／＼がわるいなり
大三十日才藏つゞみしらべてる
がん／＼と始皇のみゝのきわでなき
縫箔屋氣のむく方へ針が出る
黑石の碁笥を引合ひ久しぶり
すみッこに居ても遣手はやかましい
黑吉になつたとさわぐ長局
最明寺いんぐわな所へ宿をかり
何かないかして前帶が五六人
下駄と味噌ほどのちがひは和泉町
そこでおやぢがはらを立つ後の月
かんざしを二三度借りてこゝろみる
せつなぐそたれに張良おいて出る
立たぬやくそくで生醉猪牙にのせ

俄雨狐をかぶるもこゝろがら
日なしかし一人はろぢに立つて居る
自身にはいひにくかろと下女が宿
大三十日火鉢と共にしかんでる
十七屋もめん合羽へ馬を入れ
厄介のあるは義盛合點也
野郎の唐人に二日やとはれる
もつと居ねえなと米ざし取り上げる
ぬりものゝつぎものむさい箱をしよい
茶ぶくろの立ちぬひ下女が申したて
松永がかまを信長心がけ
役所とは身が噂かと淺黄裏
馬喰町天水桶へたれられる
御白洲でばれをいひ出すばか亭主
田舍馬でも來たやうな煎餅屋
五十年立つとはたごやぜんを出し
にくまればゞア一けんに一人づつ
生酔は嫁をつめつて三日來ず
かりた子に嫁うつくしい顔くづし
白いあたまをなでてやる椽ついで
むしが出たさうで新造わらはねえ
狐の嫁入紂王のとこへ來る
雨乞ひの中に川ごし二三人
かしがあるさうで御慶をさつにうけ
をしげなく床をはなれる一人者
四つ手に背中なでられるはづかしさ
江の島へあはゝの追人まはるなり
もういりやせんと丸綿嫁くづし
是からが日本の地だと猪牙を出る
ついたてのそとから白いあしは見え
度々かりた小袖をすぐにかたみわけ
抓められるたんびに娘そだつなり
暮の文ぜひなくあいそづかし也
俗方とじつ見えますと四つ手いひ
すね右衛門を捕へた甲斐もなく負ける
松井屋はやつこ一人をなぶりきり
能い表具屋金物見世を出し
藪いしやは一人活すと二人死に
若い内だと土手を行く素見物
御とりあげ無い願書湯屋は張り
女にはさてたのもしい男なり
いきをひつ切ると田舍は米をつき
あのやせで御めしは四ぜん五ぜん食ひ
是は御名作とばんとう百たけ
ねぶつたら御めんと淺黄ばかにされ
おもてからみれば水茶屋一通り
いじろきもないに下見に湊きかせ
姑婆死にさうにしてよしにする
あまりくるしさにつらせて使者あるき
わきの僧たづねてあるく百だんな
得がたき金去りがたき嫁をとり
お江戸でも外ケ濱から御登城
三會目しよぞんがあるではやく來る
のりものに醉つたを妾秘しかくし
夜具をほめながら女郎の母むしん
はいほうを大きくいへとはやり醫者
三つぶとんやはらかにして曲にたゝす
おとしぶみ執念深いいしゆがへし
狆が吠えるぞと目明をおこすなり
わるい料簡子を抓めるものをよび

人間の官女かみんなそねむなり
いゝきもの着ると内でもかしこまり
財布でも持たしやつたかと女衒きゝ
ばかな事看病もせず里へ行き
春の一時を爪にて子はをしみ
中野で鼻をたれて古郷を思ふ
百五十日殘し置きふき倒し
阿彌陀の光はおしつめた婿禮
しがみつきやれ來い〳〵と五郎丸
下手なやつ川中でかやたゝむやう
降參のやうに大小わたすなり
棒組やおよらぬうちにねがやれな
ごふさらし後家に二度迄つッこまれ
おッつけてしまうとこわり〳〵來る
太神樂あれは下手だとだますなり
わたし守毎日ひとつ所をこぎ
狼をころしたやつが害をなし
石がきの向うにとしまならんでる
こゝち例ならぬは男ほしい也
かたきぬをかけ百膳をくひに行き

とつぴやひやろに見物が五六人
をそはつた通りに雛をねだるなり
留守をあづかるからかゝア左衛門也
變生男子でお内儀市に立ち
あぶりこを買へと手桶がものをいふ
もう書く事が無いさうでかしくやあ
をどり子のあげ場は石の鳥居なり
よみかけを醫者はたゝんで駕を出る
平澤にもゝ引がけで三二人
鈴と一所にあんどんへたきつける
長追ひ無用と六郷からかへり
うゐものに食類むすこ一歩出し
楊貴妃はみゝな一家は持たぬ也
ぶつまねをして直をつけるはなねぢり
さし上げて打つ拍子木のおもしろさ
かッちかち打つと風呂敷ひつかぶせ
明き御所にのぶといつらでのこつてる
湯屋の臺ひねつた錢でうめるなり
ほねを殘すから知れるとぜん坊主
首とゑづふんぢらかしておつかける

書置のいかさまに母ひよくらのり
かた〳〵をのこして嫁をわらつてる
あれ斗り女かと伯父いきどほり
白いもの吐きなんしたと子をかへし
つれのあひかたへ初會はたよるなり
きつい罪座頭の内へ入りびたり
堀へまがるとちよこ〳〵と駕をつかひ
江戸の同役をにらめて座になほり
はこねをおつたてても一里もたらず
かしはもち配つて來ては一つくひ
ごふく店うかとのぞくとらんがしさ
東帶の中へ袴でまぎれこみ
僧正へ大きな御手を三度下げ
つまもたぬ身もましかやと尼公いひ
笹ばたきめでたくするは十二月
日本のだら〳〵下りへ門をたて
假名でした人別帳を息子もち
內證もほろ〳〵になる口をしさ
とまる時分に道中をしはじめる
傾城にあすを案じて叱られる

鶴は下げ亀は山ほど金をしよい
度胸を見定めて夜具をたのむなり
つれないにやおとりとしなの供につれ
負けた者ばかり残つて咄してる
大通な上人御ふみをかいて置き
伊達ヶ関そのころならば御ともなり
あした出來ぬと番所だと土手で貸し
軒の燈籠二度の月に金がいり
持參金鼻はあれども筋がなし
たいへいにして元の座へ御なほり
僧正ははじめて公家を二度だまし
定まつた家のあるのに山で書き
はづかしさ途中で人の手にわたり
四人にかなぎりごゑを四つ手させ
たちまふべくもあらぬのに二十四五
若後家は仕度金にていつたやつ
第三はて留の所へ一歩なり
さしき牢あゝ月われをほろぼせり
情のなさ座しきへ秤持つて出る
そのなりでいきなと女房聞きかぢり
生酔の手や足四つ手からこぼれ
遠くからくどくをみればばかなもの
ぶちころしても金になる猫をくれ
かゝつてて丁稚十三文めつけ
ちひさな納豆百兵衛どのへ遣り
しめ出しのやうに朝湯を待つて居る
をかしな聲になると母ゆだんせず
しな介やおはちの底を鳴らしやるな
鳥さしのとんびをねらふ心あて
大一座中にしろうと五六人
はしごうり負けると屋根へかけて見せ
病人のそこらをさがすけちな事
抱いた子を落とさうとする乳母が痴話
生息子はつれに目きゝをして貰ひ
いつなりととゞいた時がけふし也
ほれらぬ氣でかたる也大薩摩
今日の御祈禱からッさじき也
きたァねえ顏で關取かしこまり
二人扶持際へ添へてやりはじめ
直ぐに熟談いゝ男いゝをんな
眞黒な餅をたかには見せて置き
おぎやあ〳〵とつれぶしのはづかしさ
あたまをまるめて頼政いらぬ事
梅に鶯さくらに生酔なり
縁日にかみゆひひくてあまた也
知りもせぬ醫者を呼込む卒中風
大黒の外を目がけるわるいやつ
後家の眞男ものから置きはじめ
をしげなくぶちまけ主へ上げんせう
よし町へ行くには和尚たちのまゝ
清水をいのれどあさはぬけぬたり
あつけない夜を傾城にすねられる
ぶりがれん知らぬに家中氣がつかず
びいどろは心づかひのみやげなり
湯もどりの小僧を亭主左前
是に居りますと傘屋はまかり出る
お齒黑壺へぶちまけて元結あげ
門口でしよいなげをする猿廻し
あいちつとおとつさまへとおッつける
そらたばこすひ〳〵見たり見られたり

御飾はわしにくれさいなづな賣り
あれにかう是にかうとてまけたやつ
二度おぼこ嫁は二子をうんだやう
鍔もとをくつろげて居て薬うり
ごまめ賣えだるに一つ貰はれる
渡し舟ゆるりと馬の顔をみる
柳さへ垂れたまゝゐる暑い事
先づちよッと産んでこべいと臼を上げ
ひとりもの死んだ所が寺はなし
風雅な異見死んで花が咲くものか
ひどい夕だち輿屋にも二三人
とんともうでけぬといふに負けなさろ
花火に身代幽王入れ上げる
本復の薬隣のみせで呑み
わがものださうでお針は繼いで居る
おれも乳飲まうはいやな子煩悩
西瓜のみやげあけずとも見えるなり
うひ奉公内儀のはらに氣が付かず
三會目くれそめて金ひどくなり
金の龍坂東一の目ぬきなり

金屏風物見の松で見て通り
女房を吉野へすてゝ堀へゆき
賣れのこり連のあるのが力なり
舟軍すむと淋しい師匠さま
のぼり竿五六本さすいゝすゞみ
はみがきは楊枝ですぐにかべへさし
貸す時はしごくしづかな座頭の坊
いゝくらも子を薬研におろす也
仰ぎねがはくは水をと暑氣見廻ひ
首がないぞよとひそ／＼里の母
子をたべたえんまさまさと嫁はなし
二日の夜みな正直なかうべなり
芥川こしても先にあてはなし
かつをの生酔はち卷しめてねる
五百から一躰ぬけて人にすれ
船頭も雨しんぼだい二まいつき
八十が味噌をはやくと丁稚せき
かたみわけ貰ふ氣で下女やたら泣き
取つてくんなと羽子板を胸へあて
よし町の月はお釜の團子なり

追ひ焚の下へさんまをつッくべる
ほつ言をしたやつ寺を先へたつ
下女が尻まくるとそこへぶッ坐り
忌中札さしうりが來てゆすつてる
御めかけの一人兄様はきゝ也
泪を棚へ上げて置くかたみわけ
來るも／＼坊さまだと菖蒲いひ
とんだ事遣手きんちやく切りにあひ
なみだ片手にすりこ木でこづくなり
銀のひるまき若殿を産むと持ち
くやしくはたづね來てみよ松が岡
やすなりはしやうねのしつぽ見あらはし
せなの代になるとどろ田を棒でうち
紋付にひいきを省きよくがしれ
辻番と思へば餞やいて居る
見ともなさ猪牙で二三度ぶちかへり
御はりさんおいらんのうとむごいこと
もりつけたうへで六夜をしまはせる
似た聲がするとみす紙かざすなり
治らねえ病は無いと耆婆はいひ

松の杭のと貢道具賣つて來る
みじッかく牛戸をよんでせなァ來る
乳のみ子をすてさうにしてよしにする
月の場をふさげて花の江戸になり
越後屋の稻荷を其角はぢしめる
おちついて居られようものか數通來る
花嫁を見てこようかと袴着る
こぶするめくひさうにしてよしにする
淨瑠璃をはじめてつくる通りもの
初雪にいゝしめりとはたはけもの
天狗は是をたべますと鍋符掛
といたゞいてははんとりい〳〵
どうするか見ろと小判を子にもたせ
中條へたのみませうはたゞの用
よく〳〵の馬鹿よし町に三日居る
上下で手なべをさげる年男
ねこもしやくしも吉原のじやまをする
錢車やうじさしなどおッことし
市でない事は息子のなりで知れ
ちつとまあだかせなんしと筆を置き

いゝ法事二十餘年にふしをつけ
拙者このたびと萬歳帳を出し
間違ひんしたとあばたは又すわり
子の灸はあくたい笑ひ〳〵すゑ
のしを付けてもたゞくれぬ伊勢の御師
正宗は六月見てもさむいなり
帽子針おつたて尻でさして居る
なんのおこはだか使にそつと聞き
座頭の顏をねめつけて金返し
一年と大きな魚を臺にのせ
胡麻鹽はあてにするなと師匠いひ
鶯とれん木が出るとおでん也
たゞの名の女新造こはいなり
あした眞閒夕(ゆふべ)に道を聞いて居る
迷ふまいものか持參と裸也
猪牙舟にたいこと見えてかしこまり
三會目金のへる木を持ッて出る
われなべをとなりへも遣る女同士
烟草盆きらひなやつも前へ置き
日本のしやう〳〵西にもならず

樽酒のかけ出すやうな俄雨
この頃に來るよすりこ木まあよこしや
羅生門迄かたはものになり
さうりをぬぐと名代はどッかゆき
胞衣にすかされた程嫁わらふ也
鴨番ひ寒氣あたりの目がくぼみ
女郎買仲間はとんだ仲間なり
かねたいこ女衒まじ〳〵きいて居る
下に〳〵で田舎者かしこまり
鳥追ひにつらを見たして申入れ
孝行なつらで燈籠を母にみせ
牛ごろしにしては逃げるはやり醫者
豊年の村へ目切りと臼直し
傘といふ字をすわりやうで無筆よみ
ふだらくの地に善女人二十人
とんぼうは飛びさうにしてよしにする
ぬす人猫を豆がらでくらはせる
はつきりといやともいはぬ大和茶屋
朋輩のお松は飯をいつそ棄て
かぶろをだましなにかをきゝたがり

金がなくなると中宿異見する
弓杖でこれ頼光よく〳〵
諸人これをみればびれいな神子まひ
高輪へまつりの殘る五六日
朝がへりおまへもまあがはじめ也
三つぶとん有頂天へは程ちかし
四人で三十六のそんをする
燈籠見にぐちな女がぞゥろぞろ
丁山は見世での丁子がしら也
吉廣にやき刄を渡すすばらしさ
頼光はおきると弓を引いて見る
こち〳〵とした味噌秋華道でくひ
傾城のたんすなんぞがありはあり
行かぬのみならず道々いけんする
見物のむなぐら取つてはふりこみ
門すゞみおらが二かいの戸がたゝぬ
おめかけは三をくんなのむすめ也
座敷のまん中へすわりしかられる
氣のふとい女は華陽夫人なり
しかるに娘弓矢をとつてはやり

ぬきみにてをどる最中門やぶり
油をついで行くのだに謡やめ
へんな事始皇ちんぷんかんきちひ
出來た氣で棧敷一けん棒にふり
御うたゝね盜むがごとくきせるなり
袖はふれども三十のうへわらは
坊主にもされる思ひで嫁謡らし
かつもつていそぐ氣のない渡し守
人相のいゝぬす人は陽虎なり
外料へいさぎよく行く向ふきず
月の座へ息子はひらき直るたり
世間のきこえ三みせんおとなはせ
皺よせるものを落すのをしい事
ほれたを素見おもひ切れ〳〵
玄賓僧都なけなしをひつぱがれ
毬を突くむすめは膝であるく也
科戸の風にさそはれて御用ぬけ
お內儀も手しや火吹竹にてうけ
梅花を折つて肥田子へさして來る
土佐ごまぐるみいけどつた武藏坊

宇治川の水をたはらでせきとめる
めえめッと泣くなと蛙れうつてる
あまくさも小鍋だてしたきつい事
つき合ひで四ッ九もんは堅いやつ
どぶへたれたで馬かたは安くみえ
人がみるよしねえと伴吉はいひ
しはいやつ何んぞといふとじせつがら
直實はいゝあきらめのへんじみる
かけ將棊まけさうにしてよしにする
閻詩へお釋迦を入れて持ちあるき
おからが好きさと山姥綱へいひ
廿日過まはりにかまをかりられる
音のせぬやうに和尚はどらを打ち
しづまつて杜のけんをやつとぬき
范蠡が居ぬとめいどがつくところ
ゆふべには醫者あしたには僧と成り
手傳を恩にうけずに井戸をかへ
鳥のせんさいが餘流はころぶ也
人なみにくへば信濃は安いもの
木ばちのそばで杖の方〳〵

はなしでもしなんしと名代ぬかし
百人でおもて八句へ四季を入れ
京をくらつて業平は歌まくら
料理人つるして置いて腑分する
判とりへおもたく渡すはづかしさ
二百十けんお長屋の破損也
琴箱を先へよこして祇王祇女

藪入はよい人間に成つて來る
水茶屋で女郎見せて母をはめ
花のあす下戸にしたゝか異見され
急なかけおち結納とすり違ひ
朝がへり出來ごゝろではすまぬ也
直次第であぶない事を神子はする
今日庚申だと姑いらぬ世話

藥種屋の近所へ留守居入れあげる
部屋ずみを四五人つれて茶屋へ出る
かねごとも女郎のいふはいたいなり
しかたなくたてかんばんの醫者へ行き
はうしよくをしにぞろ／＼と江戶へ出る
いわし迄女房さかさに直をつける
味噌漬でおやす湯づけをたべて居る

卯正月吉例角力句合

催主　星運堂
　　　薩秀堂

御座敷の松と疊はおないどし　櫻木連　芦露
たッた一色どつとせぬ京の水　近江連　漣
にくい事妾王位に望みなし　蓬萊連　五扇
よしの山十八文字でとゞめたり　近江連　東水
一生けんめい日本と書いてみせ　櫻木連　玉章
來年の惠方で大工仕廻ひ也　若菜連　淸江
居つゞけは白妙樣の御客也　蓬萊連　東之
八朔に四郞兵衛至極いゝ名也　柳水連　扇車
三位の官を引ッぱいで河岸へ下げ　蓬萊連　五樂
總泉寺迄かえと猪牙太儀さう　山水連　木綿

烏鵲のとばぬさき番頭は歸り　柳水連　玉簾
三歩がものあり一歩がものなし　八重垣連中　華
高盛りは木曾このかたがはじめ也　伊呂波連　玉章
雛の時遠い所のものを見る　杜若連　亢樺
松過の禮者はひどいくめんなり　柳水連　梅谷
いそがしいつとめかた衣竿へかけ　櫻木連　兎明
春袋にはうんざりな財布也　近江連　山覺
子どもと同じ事赤いが目につき　八重垣連　狐聲
梅の花公家衆が持つて出てなあに　名木連　三町
萬歲で物申うまくしかけていひ　櫻木連　花口
ちとたらぬ男にふみをたのむ也　蓬萊連　素鳥
せいが高いよと若後家出來かゝり　柳水連　雨譚

肴賣とんびを切つて人だかり　若菜連　敵吐
急度した御中宿は二万石　櫻木連　興練
帯ひぼをといて付合ふ三會目　同　如雀
姑ばゝ短ッかい目で嫁をみる　名木連　美徳
てんとうや屋根が吉野を十重廿重　櫻木連　玉章
もちつとで狐王子をはらむとこ　柳水連　歌橋
繼ぎをあてながら男はいゝものさ　蓬莱連　雀芝
あつい事あたまのかけた鳥か出る　若菜連　萬來
觀音へ四つ手で參るやうにみえ　櫻木連　玉章
藤澤のげび一さかり直を上げる　近江連　東水
影の無いしうと一人と仲人いひ　櫻木櫻　雀芝
一つ目で五十二類の外をかひ　若菜連　角市
俄雨ほねのくさつた人が來る　杜若連　亢樺
大的をこそぐつて居る小ざむらひ　水仙連　葵印
萬灯は宵一灯は夜ふけなり　柳水連　糸遊
九月しま牢普請さと大工いひ　蓬莱連　水砥
えり元につかぬ手本を高尾出し　若菜連　清江
いはれざる帆を手傳つて叱られる　杜若連　西喜
舟ちんは小遣帳の初手に付け　櫻木連　玉章
金札をたてさうな所たッた百　草花連

重いかへなどと善光おぶッさり　若菜連　金旭
材木のかげで千住もみんなうれ　櫻木連　玉章
老人に赤染右衛門あげられる　若菜連　淺裏
たッた一字の事で安い神樂　櫻木連　里蝶
大門をはひると地者かげはなし　朝日連　破琴
下げ錢で梅や榊の下を行き　櫻木連　左滿
素見物おんなじやうに紅葉賣り　あさひ連　破琴
飯かはりばゞアたいこの音もせず　櫻木連　兒明
遊軍といふは薄田隼人なり　柳水連　雨譚
まよひ子のお松ほつても知れぬ也　蓬莱連　五盛
晝めしをあら繩で卷く牛つかひ　杜若連　里丁
上下でどや／＼はひるろぢふさげ　柳水連　糸好
迯水の頃居ましたと太田いひ　櫻木連　都宮
松坂の切りたてへぎをかゝへてる　近江連　漣
守にこそあげましたれと宿はいひ　伊呂波連　琴印
湊川ほんにないたと左兵衛いひ　櫻木連　都宮
氣が荒くなくてはお杉いたがらず　杜若連　西宮
降り通す彼岸どうとりあがつたり　山水連　木綿
猫の出し入れさへせぬと九月いひ　柳水連　石斧

誹風柳多留十八篇　終

川柳評辰春角力會三會文

誹風柳樽拾九篇

淺下挹

呉陵軒著

誹風

柳多留十九篇

川柳評辰春角力會三會入
淺下ｱﾞ 呉陵軒著

手へぺゝをかけてかゝさま追ひまはし
忍べとは娘づぶとくなりはなり
やぼなやつ一歩が苦勞してかへり
その中で高は女郎のかひがかり
どろ足の干る頃あやめ賣しまひ
木綿賣まかりませぬとのしかゝり
出來ぬやつ大きな壁でいてえわな
ひぢりめん指へ引つかけ三を下げ
屋根ぶしん亭主向うに寄してる
肉屏風のけて法げん匙を取る
吉野丸小ぺりさすと寒〳〵より
女房を恐ろしがつてたゞかへり
やさをのこ待てと四郎兵衞ひつとらへ
おばが來て黑吉(くろきち)にする恥かしさ
雪の供こいつがなんのしやれだらう
國家老ひッつまんではぺえをする
やまと言葉はおくびにも貴妃出さず

まじり見世こは〳〵いゝをあげるなり
どつとわらはれ渡し場で聟わかれ
京町へ江戸をくらつた客が來る
きつい事十五夜及び十三夜
どの祭でも深川のおやぢ出る
四つ手駕浪宅へ來るいぢらしさ
水の無い川どめ江戸の出ぐちなり
雨おちへ捨てろはけちな月見なり
傘はちりあくたよりかるく出し
へら鷺と鶴とで松のあなをほり
やぶいりが來て二三日さいが出來
泉岳寺他宗もみんな引きうける
ばつた〳〵亭主のかはる美しさ
人中を見ろといもが子やとひなり
かうしなれてはと諸おや二貫出し
禁酒ことわりて御用を追つかける
萬一にしやれと母は一歩かし

かずのこでむしやうに下戸は飲めといふ
たいくつの中水幅が一里也
參つた沙汰をきかぬ古川藥師
けいろくをヤッぺし下女はほじつてる
あくる朝六部裸で村へ來る
えの木へ指さしてあのさるはいくら
いたい事ばゞアをもつていはしむる
藏に似たものをもつてる村ぶげん
損なものだと關取とながし合ひ
かん定のわるさ五人で二歩のこり
ばかていしゆ湯で聞きかじり大おこり
凡ならぬ女と佐久間おもつてる
口すぎになるとは見えぬ出合茶屋
ぼんござをおさへの跡にしよつて行き
あれと出るなと兩方のおやがいひ
ふんばいてこようとばゞア江戸へ出る
四(よ)つ目がありかひにくい藥なり
おつりきをやるとあるきにもませてる
肉まんぢゆうを食つたのがおちど也
ぶちころされた命日にむすこ行き

なめかたで織田ほど勝つたものはなし
御來迎三文ですまぬ海のはた
芝居とはそら事女中かげま也
他國からお住お吉が來て植ゑる
あくる朝もう鵺の繪圖〳〵
吉原がいつち下直と初會ぎり
平家物がたり大めしくひが書き
つかむのをみると隣りへ吹いて行き
待乳山今では猪牙の目あて也
女房のいつぱいをするゝつた朝
御用には佛様のを下げてやり
尻をまくつておやぶんは座に直り
さうまうしや御合點だよと貴妃はいひ
百助はふしみ町からすつとぬけ
女房をとりャげて置いて療治する
いさゝかななじみ禿にかくれごと
くつ音をきくと名代うッぱしり
若後家はあばたへすわるごふく店
中宿へ出家這入ると醫者が出る
大門へ榊の這入るにぎやかさ

むづかしい判とりの來る茶臼山
鶴の一こゑ折りかけてかぶろたち
中直りすると女のこゑになり
泪にも少し間のある百ヶ日
犬に灸すゑると猫にばける也
ふるしきに文何かしらかりにくる
ゆびッ切してけいせいの中のよさ
ふみなど書いて居るのをあぐべからず
承知するさうであたりを娘見る
息子初夢に七人一座なり
錢のある顏をして居る松の內
古きずの再發師走十四日
あすはとうからおひんなり乳母こまり
それ善兵衛どさがりんす〳〵
はやり醫者ひたひのはえた供をつれ
仙人さまアと濡手でだきおこし
明惠上人根をおしてきめられる
月花はおやぢ小言の定座也
あの馬はのれますまいと最明寺
死人の山でもねだれと殷の紂

碁で無い時には黒石かくがいゝ
初がつを女房日なしへいッつける
雨やどりいゝおしめりといふやつさ
醉つたぞ〳〵と來るはこはくなし
三ぶ六のかよひだと雛ほして居る
さくらならさくらでかへる極陰氣
中の町さいたが通る見ともなさ
谷七郷をとしま屋でおつぷさぎ
間男をせぬは手前の妻ばかり
屁をひつた子どもをさがす師匠さま
ひんにつまされ座頭の子をはらみ
まつ白な酒桃園の院へあげ
はなれ馬二かいに居ても戸を立てる
遙拜はどこでも出來るふじの山
いけねえ唐人帶だの衣だの
人にうらみッこいもなく不二はみせ
こゝをよう聞きャと娘をやりたがり
屋根舟で簫を吹いてるべらぼうさ
信濃から來て名月を一つみる
九十川たのみはあたまばかりなり

狆がほえると女房を先づさぐり
いびり出しにくいものをば嫁はもち
ふじ川がとまり工藤はさいご也
雨乞ひの中に川ごしふてえやつ
いゝ人ににたが手くせがわるい也
生酔がのつて渡しの人がへり
俊成卿の片うでを打ちおとし
はかま着の頃から手くせわるい也
男の振袖ちよせぬ御大病
天蓋でよごれた顔をかくす也
のぞきに斗り行くのだに側ィ鶴
外科の戸をほと/\たゝく後家
よくつらを踏みなんしたとぷつり切り
こりや膝が折れるやわいと留守居いひ
すゐぶつて名代をとりいざをいひ
いつそ面白く喰らひこむあら世帯
ちつとづつ母手つだつてどらにする
馬ぐらゐやつたがいゝとあやめいひ
いろは茶屋並森ちかく氣にかゝり
目を廻はしさうな所へおくりぜん

杉戸へは二品三品出して置き
此子こゝにとつぐでよくはやるなり
ひしこうり伏見町から河岸へぬけ
入りむこは花の外には内ばかり
目さす顔ろせもの組がめつけ出し
手のそろふ蒔と内儀の組元手
内かぶと質やへ見せる口をしさ
花嫁をひやとかん酒のあひへ出し
氣づよくもこな/\にする天蓋屋
花の雨のちは後生の沙汰になり
寄めしの後あやまつてあらたまり
女郎かひたがるも息子むしのせい
もゝんぢい出るともう母はおどかさず
御紋からして角菱な小笠原
輕薄のいひぞん西が晴れる也
はんじてる内に柄樽の主が來る
はづかしさ丸一へ唾はつに吐き
色をする事は芥のごとくなり
あちに義理たてゝまゝ母脾胃虚させ
わきざしを仕舞ふと弓にかゝるなり

小兒醫者扇いたゞきながら立ち
疊をたゝき立てどこの目黒だよ
いつしよけん命の地を息子はかち地
やゝあつて地ひゞきのするいゝ普請
藪入へこゝぞと息子三味を彈き
お中をよんでくれと米さしを拔き
馬の販人のしよつてく馬鹿な形
いをつりがきたぜ/\と赤がしら
供の醫者もりころしたに相違なし
やくざ奴に秩父の路銀みなにされ
子母錢をさい布で日々に取りに來る
なぜ醉はせなつたと撥でたゝいてる
才藏は大樹寺などの旦だんな
ばからしさ湯屋へどてらを返へす也
そらッにと二三本書き文野ャア
手ぬるさは承知する迄くどく也
釜をかさないで松永しめられる
名代へうつぷんいへば知りんせん
さんけ/\藤澤であそびました
何も居はいたしませぬと四つ手敷き

百人の中に目あかし一人居る
六つ七つからしこまれて琴指南
まゝ母とにらんでぜげん安くつけ
場ふさげな佛はむかし今の京
歌がるた女の中へまけに出る
ひまなばん見世で三味線手をつくし
駒のかしらも見えぬ程松をつけ
とちぎりとうたつて井筒しかられる
大三十日たび立程のいとまごひ
兩がへ屋足ばやに來てさとられる
屋根舟のてうちん顔の中へさげ
雨のもる家とも知らず左馬の頭
正宗があるでとむらひ二日のび
天がいは雪折竹の模樣也
江の島へかくれて參る新五郎
まッぴるま雨戸をひくは爲になり
やかましさ片々の子が花を持ち
いたい事女郎を一人もちにする
はいふきを持つてみて居る雪の朝
さゝやくと直きにつけ込む夜かごかき

中條へ嫁のかつ込むはなれ馬
大やしろ近所でお國賣れたもの
足留のまじなひ帶をかくす也
遠州のあくび駿河へうつる也
下りとりお袋を見てつけ上り
鈴の音人足しげし中の町
まゝ母のはていとやはり〳〵
せけんかまはず鳥追ひのけいこ也
行きがけのだちんはいらぬ樽ひらひ
けちなからくりのぼり迄くれる也
針をのむうちにころせばころす所
いやならばいゝに若後家いけんする
ほゝづきをふいて居るのと見立てられ
精靈と女房を留守に急な旅
よし町の客女人とてへだてなし
組んでおちるとは圍のみらひなり
うしろ疵湯番大屋へつげッロ
お釋迦樣のにやく僧はあなんそんじや
こがらしに高野の蛇迄うろこおち
兩耳の無いので內儀かねをつけ

品定めとは錢いくら米いくら
高繩へ來る迄帶を前へしめ
姑の本ぶく嫁は十九也
引ッぱがれもしようかとこは〳〵年始
座頭の坊せッつきながら年をとり
淨瑠璃の元祖は通な女なり
さすがは女眉とるをごぜ惜しみ
坊主衆と坊主を四つ手よく見知り
つうづき合ひをやめやれと母異見
岡場所のきさは子をとろ子とろ也
もてたやつ帶ひろどけでをがんでる
かゞみとぎ千代もぞんじて居りまする
こゝにけつかると見て行く松が岡
飴をなめさせてさかなや寄りつかず
繪の所が出てよみ本を子にとられ
足よわをまめな男がつれてにげ
度々後家に成つたは馬の內侍也
唐詩選よむとくじやくの尾がほしい
四郎兵衛から請取柱へくゝし
かんなくづなんになさると橋大工

おしやうじが明くとをしどり岸へ寄り
御退屈いくらか金をきしへすて
ゑぼしかり衣をぬぎ捨て外科にみせ
むらさきは男えらみをしてそまり
星人は却つて高い五丁町
みゝたぶのわるい唐人つかにつき
おもしろがつて子のくゞる土用ぼし
一つかつぐと樽かひと見える也
今以て三日にあげず京でほめ
大ぜいのへんじに若衆一人來る
狐つり猫がかゝつてもちにつき
はなれ馬よりさわがしいつなぎ馬
今のかゝさんは吉原からといひ
おやゆびをそらし禿をおどすなり
御めかけの手柄木刀だらけなり
ねきものが二度めの四つに二三人
旅迎五十里先のあくびする
中條の跡明店でやゝしばし
こまつたものといふ内に大三十日
若いもの諸さむらひにはこまる也
茶をのんで間もなく來るやなぎ樽
一客がこがねの月りんをいだし
御用の書置いろはでおいせさま
たゞ今和尚大通とかはります
鎌倉へ行く筈ふだんあまよばり
御持佛へころして立てるかきつばた
ぬり樽を下戸不承知な坊主持ち
孫が出來たらくひさうなおばゞさま
辻番はうづをおひ目にはつて居る
ともかくも先づ裏門を出て見やれ
杉戸迄のこらずうれるいゝ送り
切りおとしごふくや穴をあけて出る
口上があがつたおめしたべてゆきや
五六けん一度にわちふ楊子見世
茶わんらり身代切にけつまづき
拙僧までも本望と首をみる
高みでの見物茶人おちどなり
しうれんの臣を蓑にて出せといふ
今に日が當ると栗ぼうを直切り
子をはふるまねをして行く橋の上
紙帳の内へ重箱のさかづきの
村芝居せなアふところ手で這入り
作大將ぐるみ三文でかひ
きぬかつぎえんぎの御代にくひはじめ
眞中が出てもやッぱり立ちかへり
百廿疋へびをいれせめるなり
三會目同士が來たのでむづかしい
ばくちでも無い屋根舟が氣にかゝり
山塔の遊僧月を二つしよひ
下女心がはりで質をたてこづき
國忠を伯父さんと祿山はいひ
かうしんでしに繪をかへた事がしれ
だがじやもをつけたか座頭大おこり
ころびとば中ぶらりんのばいた也
死石が玄關へ來てはどなるなり
くちら身をくはへて尻をひつぱしより
目あかしをつれて撿校あるく也
きやくでんにつるくつてあるけちな獨
高をくゝつて圍れの出來ごゝろ
いひ草にしをると論語とりあげる

夜具のぐわんをば三めぐりへかける也
尾張町木の丸どのかにぎやかさ
無名圓聞きにかへつて叱られる
かばむくを着た人眞綿かひに行き
車座の女中の中へ高尾出る
じやうだんのやうに簞笥屋鋲を打ち
はしごから上はわたしがあづかりさ
よんでやらずばと素見の母はいひ
時平の子孫らしいは原田なり
品ものにはまりえんがはからおちる
未來記で見れば高時さかななり
ねむたがる子を出遣ひにつかふ也
象につゞいて暑いのは法師武者
ざら錢の中へしに繪はむぐりこみ
やすい土場百度參りを一人つけ
子にしかられた吹聽をしてあるき
四五日は引き人の多い高燈籠
非人め出ませいのやうな船で賣り
死んだ金いかして遣ふ品の客
えんのない寺へもにげる一家中

とつかいべいの親玉は十五城
おのてるのさじきに一度かつたやつ
帶をして跡金の來るけちなよめ
まくら元で文高尾が書きはじめ
よッぽどのきげん母親撥をとり
目の二つあるむこが來て無心なり
おもしろくなくしてかへる國家老
ひろい事松が岡へのつれが出來
鐘供養六だん目にはぐわんといひ
弓矢八まんとだまして訴人する
せんぎして見れば玉藻は無宿也
買物にちよつと貸しなと抱いて行き
かしはもち甘くこしらへ內で喰ふ
いなかのはらッぷくれ三つぶのをかひ
目黒から廻るはまだもりちぎ者
ふられるたちだのと四つ手後(あと)でいひ
にげさうなのを先へたて土手を行き
いよ鼎ぶつさらひだと初(しよ)てはほめ
げきりんばつて姉妹(きやうだい)で雛をわけ
高さ三尺有餘あるふとんなり

秩父からかへるのを嫁頭痛也
しぶ柿は大地へどうとぶッつける
ふんだりけたりの目に今川出合ひ
直のいゝ四つ手はから手が二三人
杖をとり上げはふりこみ／＼
聖人の身にもかなはぬあがり鯉
いたちを對に振らせるは脇になし
うたひをば大事にしなと遣手いひ
遠慮過ぎると屑をとる大一座
ていのいゝ馬どろぼうと源三位
素見とは神ならぬ身の駕ィ駕
むさばんの三つぐみ江戸で名が高し
けちなばん女郎の二ばんばえをかひ
禁裏樣から又來たと小僧いひ
とらの門通りを行くは去り荷也
だきつくにけいせい身うごかしもせず
五文がむきみすりばちを內儀出し
にはか雨こじきさうをはたすなり
狐さへしろうとでない所なり
もちやそびに四五疋のこすどぢやう汁

越後屋のうへに一聲ほとゝぎす
ねるは抜をしいとけちな月見也
いり豆に花か禁裏へ馳走也
おそろしい行湯は野間の内海也
手ごみにはさせぬと母は雛を分け
關口流でむねぐらを女房とり
おらが吉原はかうだと文左衛門
大きうに笑つて師走しかられる
今までの事を中條水にする
實の無い客衆とうぬがあるたちか
かへ玉を車にのせておつちらし
あゝも似るものかと綱はくやしがり
名月院殿さまへおくさま燒香
江戸橋へ反吐だらけなる船がつき
白鳥はさびしい池をにぎはせる
勇士の名くゝると麴町へ出る
しら幽の殿御さとあやめうらやまれ
笑つたをねめ〳〵通る御りつしん
何本でおまんまたくとお家さま
黃金もござるはずだと大野いひ

菜飯屋の前で尺八仕舞ふ也
七月は拜み八九はもてあそび
門兵衛と思ひ難波明けをらう
勞咳はにげもかくれもせぬがもと
妻をさり網を半ぶんつり上げる
名の下できせるを廻すひまな事
おそいからいひわけをこしらへて行き
ひなとかや預り分は急な事
神風に豚や羊のへどをはき
千日向顏せざればゑんはきれ
なんと羨ましいかと客帷子
かけ取へ餅の酒のといかぬこと
顏のいゝ手代もやうをたんとうり
丹波の鼠京へ出て馬をくひ
賴政へ時節のものをくだされる
くどき出す前にしばらくだまつてる
豈三は甲の座に居てうれのこり
歳暮には酒を用ゐるのをくれる
いそがしさ升をもたない芋屋來る
雪見の供はもつともな小言也

百の女郎もすぎますと伊勢屋いひ
どかおちのしたさかづきで下戸はのみ
おめかけをだがよく〳〵と江戸家老
三の糸ちり〳〵〳〵とどつか行き
雛麦廣焙烙賣もしたくする
秋の眞中に大きな後家が出來
嫁なにをかけたか折羽すてゝにげ
めしつぎをかゝへ船頭船をおり
異見するそばからあいと先づいひな
突棒をこゑるととてん〳〵也
衣裳あらため里でするむづかしさ
漆かきかすつてつばめ通る也
御笑止と曆とひじき斗り置き
身代の爲にはしごくおとく女郎
直が出來て錢ぶんまける火鉢うり
首と首よせてよんでく土手のふみ
是れでかうつかみましたと綱咄し
ばゞア川へせんたくに施餓鬼なり
めしごりを出してかみゆふ馬喰町
女郎より女房は四兩一步高

あじろから百旦那へは手をくれる
やぶいしやの供は遠方より來る
三わりならはふせようと女房いひ
たれるので孑孑取は脇へより
はなれ馬さいを握つて追つかける
かどさん出なんしよとけいせいはふり
露切りとひんをよくいふよだれふき
佐吉御茶上げイと和尚手をたゝき
竹生島だけが一合不足なり
人間の禿をかりに備つてる
出家で儲けたを醫者でつかひすて
もう外につうはなしかと中の町
すね坊は壁の貝殻ほじつてる
久しぶりさと流し合ひさて出ます
あの内の一番子さと四つ手いひ
犬坊へへしに梶原けしかける
業が滅せぬと辻番いゝかくご
かたづけといふと座頭は立つて居る
三會目やうやく女郎かつたやう
うき世をひに見ず島田は賴む也

人並にいゝ春といふつらいこと
そとは引仕廻つて水で手をあらひ
ねたふりをして居りやしつをかき始め
けいせいは傘をさす手はもたぬ也
此へんとうに行きくれる暮のふみ
麥作ではらひなさろと輕井澤
三會め灸の痕などいぢらせる
四つ手から國府をつかみ出してやり
奉公人の出がはりをうりに來る
拾雨といはれて母はつツぱなし
どうでもしいすから下に居なんしよ
ひやめしをふるまひに出る國家老
天狗までうたにうたつたよいお寺
如是我聞やめろと孟子しかられる
とむらひに行衛しれずが二三人
やみ上り三ばいづつにきめられる
なんぞねだりなと疱瘡見舞いひ
いつくしま今造營もあきの守
西行と五重の塔をほしかため
切先をそろへてわたる田村川

かぢの葉は椎の木程にしやれはなし
石臼で鶏の子程にみだつたり
やすなりが居ぬとそろ〳〵笑ふこと
御不如意ださうでびらしやら二三人
求塚にて麥めしの禮をいひ
いとけない主上が娘氣にいらず
その時分八條までは人どほり
御ふくろは和の引事でいけんなり
佛師屋をしても弘法くへる也
五番目は一か六かへまはすなり
こま下駄の音にうよひよ路地へ出る
十三日目出たくいしゆをかへす也
うすがきや空色で來て初會ぎり
品川の干潟が息子うんのつき
ほねと皮斗り兜へそへて遣り
さむらひのきぬ〳〵槍がふらうとも
から皮のぜにをぶつ〳〵内儀出し
紹の羽織着て出る所へ日なしかし
駿河町りきまぬなんでごんす也
三ぞろをさゞなみといふ人のよさ

芝から品川へ通る所化の僧
空をかけるつばさ地をはしる鰹
まきずるめ田舍のおぢはいへ入れ
聲あつてかたちなし市の馬〳〵
いゝくらしへびを四五人遣ふ也
ぶきげんの大黑をかふ俄雨

河豚はきらひだとねつこり持つたやつ　女房にゆはせてめゝずほりに出る
廻り〳〵の小ぼとけは四十七　とこ花にならびをつけてばゞアとり
はだかつ子腹をたゝいてにげるなり　いたい月品々御目にかける所
大きに和らいで茶をやたらにのみ　しゆろ箒安くつけたらきられさう
のぞいてはあいそのつきる御さい籠　后の外は笑ひてがひとりなし
やきめしをほうばりながらゑさをさし　傘の名代じやうるり世界なり

辰春花角力會

主催　星運堂
　　　薩秀堂

笑ひたい時萬歳はわらはせる　近江連　龜若
駿河町とは晴天に名づけたり　櫻木連　大柳
生鯛はつられたなりで臺へ乘り　水仙連
くどかれて座をひねるは古風也　櫻木連　かたる
千兩出さずに着るのは殊勝也　八重垣連中　葉
千兩のかけ手見きんで座頭さし　櫻木連　大柳
梅のじゆず持つて僧正御參內　水仙連
不二にわかれてから旅に骨が折れ　櫻木連　かたる
松二本小だてに取つていひのべる　玉垣連　和笛
ふみこんだのは賣切れた見世の前　櫻木連　かたる
一人(ひとり)乗つたがけいせいのたから船　同　大柳

病上り女に坂をかりる也　近江連　漣
梅の花出した公家衆手前遠慮　櫻木連　木綿
毛氈に付けて花蓙うりつける　八重垣連　金龍
三みせんで鈴虫の音をとめる也　櫻木連　芹丈
おかしさはたいこ內ではにが笑ひ　梅　連　運丁
萬歲の來る日も嫁にいひ送り　櫻木連　子樂
名高い女をぼかんとむごい事　八重垣連　狸聲
名の下へかみ〳〵すわるいゝ得意　伊呂波連　素廣
のゝ宮の鳥居をむいてしかられる　櫻木連　かたる
桔梗をば三日ほどにて染めて遣り　柳水連　雨譚
江戶者にぜひ〳〵座頭成るつもり　櫻木連　かたる
白く成るものとはみえぬあらひ髮　同　素鳥
正月と雨と用意に市へ立ち　若菜連　淸江

持参金わつちや片はとむづかしさ　柳水連　玉雁
けんげうは此糸さまのお客也　櫻木連　狸聲
辨天へむらさきの水引をあげ　柳水連　玉雁
植るものでいけず釋敎うつて行き　櫻木連　木綿
しはいやつ一家が寄つて醫者にかけ　飛鳥川連十口
追はれたさうと六鄕の門でいひ　櫻木連　木綿
三年は新造買も孝の道　同　狐聲
宵泣をさせて孟嘗君通り　近江連　龜泉
うざッこい親類の來る美しさ　水仙連
此頃はいつさんまいと數珠をみせ　櫻木連　其林
ざん切にされたも女房いきどほり　梅　連　青峨
洗湯の鋏材木くゝりつけ　櫻木連　蔦故
江戸者はもてゝ奥州ものふられ　八重垣連中　葉
女房にこび付いて居る大あばた　櫻木連　麹車
渇しても呑まれぬ水の有る所　蓬萊連　藤子
まさ宗をかいこみ藪醫かけ廻り　櫻木連　木綿
十萬八千べん毎日回向　柳水連　石波
さゞさいは長屋でいつち稼ぐやつ　櫻木連　萬三
いろは茶屋もちろん客はすみの折(をれ)　柳水連　石波
雛のくどきにや番頭もこまつてる　櫻木連　木綿

山鴉は雁のつるさりさうな屋根　同　大柳
大あたり佛在世程つめて居る　八重垣連狐聲
年寄をわらづとにして市がへり　若菜連　清江
大黑の供へをうでる不成日　櫻木連　玉二
六尺の尻中啓をさして居る　水仙連
聟じつは日本の地利も知つて居る　櫻木連　五扇
弓矢の家に生れむすめそつけつ　櫻木連　蔦故
四十九日もたゝぬにしたと口へ寄り
目つらをつかむ最中あばた嫁入　八重垣連中　葉
おつぷせる坪へしづ心なくちる櫻
そと縫ひの事だとあるき足を出し　同
俄雨相手迯がしたやうな形(なり)　水仙連
春三月(つき)三所でねらふ敵なり　伊呂波連蔦故
三會目私しやつめたうありんすよ　櫻木連　春松
ひり〳〵からいが伊勢屋の鰹也　飛鳥川連蔦疎
蠟燭でしばらくをする金つかへ　櫻木連　かたる
紙びなへ棒を通してぼろを下げ　蓬萊連　五扇
のみやうがわるいと女房りくつ也　櫻木連　かたる
三人で一本糸立には劣り　伊呂波連素廣

角力會二會目

うそ六百でかためたる國家と　　玉垣連　左滿
くつかむりだと唐木屋は安くつけ　　八重垣連木綿
植ゑもので公家衆の不足まぎらかし　　櫻木連　子樂
仕合さ年を四五年置いて行き　　柳水連　石斧
是が本の一休だと撞鐘だぞ　　櫻木連　かたる
殿に見しよとてべにかねを付ける也　　水仙連　流芳
三みせんと顔をのけるとすたり者　　蓬萊連　藤子
にこ/\して飛ぶ鳥が落つる也　　飛鳥川連雀芝
八月と師走よし原こはい所　　同　素川
猪牙舟へこりやアどこへと枝が出る　　櫻木連　かたる
喰い事拘擔癖が不斷居る　　同　子樂
萬歳を氣の毒がるは古風なり　　飛鳥川連鳳且
我は禿もせぬやうにしつ叱り　　同　素川
嫁手から聟のおとゞを軒へ立て　　櫻木連　五扇
御緣日もので物干咲きみだれ　　同　かたる
三度目の客が歸ると質を請け　　飛鳥川連十口
いかねえけりや今迄遣つたがむだ　　八重垣連木綿
ひからびてすッぽりぬける楊婦　　櫻木連　かたる
もみぢ見のふり合にした手紙來る　　蓬萊連　五窓
楊枝見世これ素通りはなりやせん　　飛鳥川連鳳且

何をほめるやうに蛙はなき出し　　蓬萊連　五樂
もうわすれたらうはけちな女郎買　　梅　連　梅舍
宿割がすむとしづかな大一座　　飛鳥川連五鳥
せめ殺されますとはやり醫者はいひ　　櫻木連　かたる
どこへもつてくか千日ぶしをかひ　　同　同
まゝ母と見えて泣く子にいつも勝ち　　柳水連　石斧
番町をさかなのさがる程尋ね　　櫻木連　かたる
市以來息子賣切申候　　玉垣連　和笛
蕗の薹一つで喰ひあきたといひ　　八重垣連狐璧
奧樣ととなへませいと馬鹿家老　　蓬萊連　五樂
三會目算用づめの金ばかり　　水仙連　峨山
こびついて居るを鐘つきひつ放し　　櫻木連　里丁
近所の地赤番頭は奧へほし　　同　子樂
青いのはとろッ拍子に鶴イ鴒　　八重垣連丸印
てんたく寺でかつはらねへ隣也　　櫻木連　花口
川ばたで異見についておぶつさり　　梅　連　梅舍
ふして惟みれば後家あゝほしやた　　水仙連　恩子
拍子木のたびに大きくなるをとこ　　若菜連　清江
眞中の子供をほめるわたし守　　伊呂波連春廣
もらひ泣四つ手ぜげんに叱られる　　柳水連　石斧

いかぬ事たつた一歩でもてたがり　櫻木連　里丁
役德で門番二百受納する　梅　連　素江
遺手出る前なまぐさい風が吹き　蓬萊連　颯遊
ほんの御つき合ひにてぜげんの泪　梅　連　兎町
裝束を取ると不斷の彥兵衛　櫻木連　美德
平ッたくいひ出せかしと後家思ひ　飛鳥川連　諷旦
錢ッ切くんなはけちな烟草也　櫻木連　かたる
蜜柑同前よし原で金をまき　飛鳥川連　雀芝
六郷をこえるとみえる江戸と京　水仙連　里鳥
辻番にはらンばひして御用居る　櫻木連　子樂
和尙色衣で若後家に憎まれ　八重垣連　金龍
細見はあるいて見るがおもしろし　櫻木連　芹丈
なんぞ家名もあらうのに見倒し屋　同　同
味は聞えたがしやりがけせぬ也　柳水連　玉簾
昔々あつたとさ伊勢じるし　同　玉川
武者一騎まごつくを見る暑氣見舞　蓬萊連　青峨
代金をとる内女郎はづす也　櫻木連　美德
いらぬ事あるき手を出し一本負け　柳水連　石斧
後家の迄餅は餅屋で和尙也　櫻木連　其林
山門へ葷酒をゆるす立田姫　八重垣連　素重

闘寺のそとば倒れたまゝで置き　飛鳥川連　素鳥

角力會三會目

新枕七十五日はづかしい　櫻木連　芹丈
願ほどきまだ巳の時の衣也　飛鳥川連　五扇
まだとしやア若いになどと御退出　柳水連　玉川
上下で菜をもみに行く有がたさ　櫻木連　閭々
來たばんに笑つた女御手がつき　飛鳥連　五鳥
御てかけの弟正宗さして居る　櫻木連　春松
しつた方へは上げられぬ娘也　飛鳥川連　閭々
すだれがおりてと若黨觴へいひ　櫻木連　木綿
一町はかんなッくずを下げて置き　同　久鳥
嫁迯げた晩はもちろん星月夜　飛鳥川連　諷旦
男たるもののもとどり切る所　櫻木連　木綿
三歩だけ格別いたいつめりやう　梅　連　梅合
紙帳でふいたのを下女はいきどほり　櫻木連　かたる
橘は世間を知つたふところ子　櫻木連　芹丈
きこえぬは名代がおんなじ直だん　柳水連　雨譚
すり鉢で一ぱいのんで花を見る　櫻木連　蔦故
ぬかるみを四つ手大きく言立てる　同　其林
小船でおつとり廻す花の山　柳水連　石斧

地女のたゝりと見世で八卦いひ　櫻木連　木綿
よいしかけ汐干が土手とかわる也　飛鳥川連五扇
きつい事おなじ枕に十三夜　同　謳旦
ねて花をやるといふこじ三會目　櫻木連　五扇
不二のすそ貧乏神の宮も有り　同　洗路
をはり町春は優しく夏武ばり　柳水連　高簾
いでもの見せんといふまゝに能因　同　雨譚
くわッ〱と巨燵へ起し女房待ち　櫻木連　花口
一人(ひとり)の化ものあり土産百兩　飛鳥川連五盛
てんかふん團扇へのせてなすり付け　伊呂波連素鳥
砂をもる日はお定のもめんもの　飛鳥川連五鳥
御むほんも夏仕込みだけもたぬ也　櫻木連　木綿
爪音のするは古風な花見なり　飛鳥川連謳旦
身代ぎり着めい〱札出して　櫻木連　木綿
金がなくなつて女郎に異見され　同　和笛
夢に見てさへよいとこへ呉服店　飛鳥川連五鳥
なぐさみにせぬ摘草はみかんかご　櫻木連　車道
初鰹かつかちめいて江戸へ出る　飛鳥川連素鳥
大名をおッつくねとく川づかへ　同　間々
とんだ事牽頭ならびに魚鳥留　櫻木連　三巴

いくらで直をしたか四つ手牛の様　櫻木連　里丁
御亭主とこんいだつけとにじり寄り　飛鳥川連花江
不屆さ家ばかり拾匁でかり　柳水連　石斧
からすよりにくまれ口を尾長きゝ　伊呂波連素鳥
高尾はとんだばかものと妾いひ　八重垣連狐聲
待つ人は來ず若いもの〱　飛鳥川連五扇
しほ〱と請出されたは高尾也　柳水連　高簾
今日は是切炭の中でしに　櫻木連　五扇
強張りのふたを明けると天てらす　梅　連　鬼丁
おきたとおきの琴(こん)平へさそひ合　櫻木連　芹丈
その外の豆腐屋は屁もひらぬ也　飛鳥川連萬疎
中程にあつて鮒町とはどうぢや　櫻木連　美徳
大一座木辻は能のかへり也　同　清江
やれ〱嬉しやと夜着をくけ仕舞ひ　飛鳥川連春松
蚊の來るを蛇が待て居る出合茶屋　柳水連　石斧
緣遠き庄屋もめんの袖ふらせ　櫻木連　木綿
三會目とけ〱としてかへす也　柳水連　雨譚
鐵砲町あたり昔の局見世　櫻木連　中葉
下女一歩持つてる沙汰で文を付け　飛鳥川連五扇
店子ところび家主を上げられる　櫻木連　木綿

むさい盆つぱな載せとく王子道　同　杉壽
ふんどしが赤いで愁ひめかぬ也　柳水連　石斧
おきやがれ宿下り宿をきたながり　梅連　梅司
天竺の楽人提灯でかくれ　榎木連　木綿
せんとうのかくには座頭いかぬ也　榎木連　雨譚

地蔵堂羽のたなおとして有り　榎木連　芹丈
養母に駄をかゝせたでやかましい　柳水連　石斧

角力會三會結

天明四年辰仲穐　呉陵　著

餘加

おつぱつて縫ふが花かごわきにつき
こと様の姿無沙汰のまへをかけ
うけつこをやつて烟管をとほさせる
もう〳〵じやまなこッだと四つ手かけ
こりやさむい百だとはなッぱりぬかし
ほれぐすり傳にいわくは何事ぞ
つらあては寐しなにしごとおッぱじめ
かけ取の後へ廻はすは丈夫なり

誹風柳多留十九篇　終

昔ゝ二十年も昔より寛延あつめ、
上ゑん僧正をちばさ阿紀づゝみ
なふし たゞいちまる輩あつて連中
いうつてまいらせ候へはいかゞ思ひ候ん
くしわ新言葉を遊ばせるの年に縁
ありてそ候柳樽も二十とせに及ぶ
及ぶ所なきのうえ人のめ留る
知るべし それ故はしめまてそへあり
こふ留れど共の上雅傍らたのきロ平中

そらん世うとおすく松の尾あまつら部
ゆ御あどもか在乃志ひ奏せらた能
ら揃て候らの時三寸香生れ世川
と江戸中の松志のうをとうきられハ合
点たすまで十二日らうしでありられハぬ
らぬ物と思ひきりて勤候二ケ度
らも丹志ハ候ら

天明乙巳冬

雨譚

俳風 柳多留二十篇

昔々三十年も昔より、開き毎に上名護屋をはづさず、おのづから名にしおひたる翁あり、連中いかつてこれをいへばごりやうけん〳〵とわびて笑ふ。そが年々組みたてたる柳樽はや二十といふに及ぶ、此道のさかえ人のめづる事知るべし。そのはじめにことそへよとこはるれど、今の上野つたなき口にいはんやうもなく、松が岡あまたたびいなめど、本庄のしひてせためられて、つらの皮三寸舌長なやつと、江戸中のおしかりをうけんは合點なれど、十三日どうでなければならぬ物と思ひきつて、勅使三度やみくもにしるす。

天明乙巳冬　　雨譚

同せきの末座紫あたらしい
年礼でなけりやいひぶん有る扇
先祖代々うれ残る石燈籠
泥棒はならぬとさがす火打箱
足音がするとはこねで鐘をうち
新造をおこして廻るすけん物
讃岐から虎の門まで鼻を出し
はやりいしや薬物訴訟二三人
ちがつたら弾いてみせなと母こまり
糸立はしやうことなしに賣れる也
權幕で火焔玉屋へ女房來る
折よくも土左衛門が來て施餓鬼なり
料理人たのんで伊勢屋氣をへらし
からッ手で看經をする子煩惱
座敷らう酒をのませて母ぶしゆび
品川であればかりかとたはけもの
はやるやつ夜中出店をあるいてる
程過ぎて氣附けの錢を聞いてやり
帽子針ほつたて尻になつてさし
番附の錢を御門で乳母借りる
外科の箱小僧何だか甜めたがり
嫌な男も來ようなと淺黄いひ
毎日耳についたあと餅を投げ
譽れさは久し振りにて人が濡れ
二度とは連れぬと櫻へ下戸縛し
流行醫者駕に手紙が二三通
つくねんと花莚の上に三時坐し
四季折々のたはむれに母こまり

色香妙(たへ)にして常の下駄にあらず
火を一つくんなはけちな圍(かこひ)なり
江戸の客白じん骨を砕くなり
村の嫁今戸の土偶(でく)で雛祭
中秋はどらに實の入る時分なり
野に暮らす奴等が眞間へ二三人
駕に乗る迄四郎兵衛が前に立ち
袋ごとやると泣きやむげびたがき
素見目をはなさず見たをあげられる
松洞寺にはかに風のかはるとこ
名代へどうめゑつたかうめゑつた
一兩の床花手どりやつと二歩
百八を醫者おッことしぶッこはし
まいら戸に乳母よッかゝりのませてる
紫帽子こま下駄を御てんがい
つき出すがさいごむしやうに水をこぢ
神ばッて女房御はらい箱をしよい
氣つけ針たてられるまでぐどく也
旦那寺のばせを乘はもらはない
たびせつたにてうらば入りばかりする
二日正月を丹波の庄屋ふれ
唐本はかごにのる時斗りいれ
將門はあいさう過ぎて見かぎられ
文と手に鹽谷が妻もかんじ入り
あひもなくつき出し力おとしなり
金になるさうで留守居の紋をつけ
つれてにげなよと二條のきさきいひ
五斗俵を高尾自由にとりまはし
おそれ入りましたと琴をかたづける
萬木にすぐれゑびすや龜のじやま
やきながら女房のたべる甘露梅
三會目そのごをぬかずばゞァ出る
女房は三(さん)の下(しも)にてがなるなり
さりぬべきけいせいは皆下戸が取り
ほめられて此世にたッた十九年
三圍でふきまり故に行がばれ
ぢうのふをうまくつかふが三丁目
ふざけなんすなと煙管でやらかされ
世間ではとり用ひざる四つをうち
つれ〴〵はへつぴり坊主までをいれ
此ひしほ棄ててしまへとのたまはく
觀音へ女郎の出來がぞゥろぞろ
きほい三重でかけてく月のかご
せがれにはかないませぬと是善卿
結納と追手と道で行きちがひ
芝居のまへは行くまいとねぢけ人
かみにくつたくは快氣にほどちかし
こはい顔するあくる日は正月さ
ひよんな事嫁なた豆がきつい毒
勾當の分野に當り紫雲立ち
をじい事むすめざかりを角(すみ)に置き
いひまくられてだァまつて朝がへり
おれに當るといッつけるぞと妾
どこに目があるか大門しれぬとこ
子ばッかり出來てみじめな素讀の師
するさんをねらつてあるく妾が兒
をかしさは月を目切もともに待ち
のや〳〵だらけで母親異見也
乗るもんぢやないと馬場からびつこ出る
宵の内先づ賓引と申し立て

萬歳がたつと草履のけん〳〵也
あさがほはしをれてゆやへふみを出し
酒樽に駒のかしらも見えばこそ
何の日かおふくろ井戸へ手をあはせ
あそぶ事法あり線香をたてる
新高直につき二三日よごれ
牛半と名をかへさかなうつて來る
女郎の三つ買もした息子なり
堀のじやま吉野一艘のりはなし
ばたりといふと東海とよみはじめ
大きな狐つきをやすなりおとし
えりッくずはや子の刻におよぶなり
いゝのさと後家しんるゐと不和に成り
いゝ女ぢきにじゆくだんいゝをとこ
頼光の武具あらましはもらひもの
つれ〴〵の外にまゐらせ候も書き
勘當の跡甚七がものになり
おねがおちたにむかし〳〵のはなし
まつ黒に櫻の口をしめる也
とまりやの帳に口まめまかりでる

くろがねのはしをならして鯛をきる
いもみさる間に花よめはぬりたてる
けいせいのれき〳〵禿二人つれ
かみなり壁で僧正と御はなし
獣はうちまき發句では米をさげ
御代はならぬと女房無法なり
物干で大馬の勢をふゆつくし
いッくらもあるに着ものを嫁ねだり
吉次が通る道すがら金屏風
五六文の賃はなにさ〳〵なり
しやうわるは阿保親王の五男なり
母の留守けんどんなどで人あつめ
さいづちはちらをたゝいて直をつける
馬程な娘はわるい年生まれ
商買をあはてゝみやれと淺ぎうら
拾つたとこへ置いて來やと孟母
餅花をていねいに附けしかられる
源三位ありがた山のほとゝぎす
食ひたいものに節をつけ子は唄ひ
もみぢよう飯にしようと海晏寺

高倉へ隠居が來るとかぶろつけ
神子がひんぬくと笛ふきのしかゝり
勘當がゆりて八算けいこする
あつちからは玉藻こつちからは貴妃
身についたものをなんぞと照日いひ
呉服店八合目あたりでのどら
三會目癖の居所をいぢらせる
縁むすびきれいな顔はまれにくる
つれが常からふるしきと返事來る
上下がたつとかけとりしやべり出し
ばゞア茶をにて友だちをおこす也
謡本けだし息子のうそにして
女房のるす扱うらはいッかどろ
まだ跡にこりやと四五兩淺黄見せ
どうれいを大ぜいでいふ手ならひ子
どう〳〵といつて仲國笛を出し
今川で論語をおやぢしかつてる
庚申の夜はたけ長におよぶなり
金のきうじをよびつけるにぎやかさ
大きな内でぞんさへる信濃者

七つ目もあてにはならぬ本能寺
相撲入道の俳名東魚なり
手を出さッせえと物さし姑出し
井戸端でたてつけてのむ暑氣みまひ
醋をくんな御用あないちして居るよ
しッかりと賴むでもなし南無閻魔
前表は念佛を聞く屋敷替
ともに憂ふるで輿屋がいゝ直也
おれともに上は五人とてかけいひ
日本の地へ來ると下乘あひはなし
あつたら後家をたゞ置くと知らぬやつ
氣のどくさ醫者へつかひが二人來る
第三にやらぬとばゞアらんにとめ
じやうだんに飲ませて嫁はくッつかれ
きつい降りおもてをいなぶらがあるき
居つゞけをつかみ出す氣でおやぢ出る
やくさうで前の女房をかくすなり
去狀はおつてと何かしさいあり
僧正がかぶりをふれば燃えあがり
反吐の出るせんぎ遣手も色が有り

はねつるべ目の無い臼をからみつけ
あれ今湯へうせやァがらと棄とり
島田めは錢にならぬと遣手いひ
三河から來てつがもないうそをつき
井戸の中からおもしろい泥棒出る
下總のだいり紋からしてがげび
豪勢なうでで下の句取りはぐり
音羽のこぢよく風車取つてにげ
問ふにやおちずに石尊でかたる也
三本折らせて半四郎をたのむ
一國成敗按摩が一人なし
冥加の程も恐ろしくどくじゆする
御手を引き申せと石田世話をやき
二三人けころして來た女房なり
ゑびす講あつかましくも傘をもち
うつくしい髪三日目にほどかれる
東帶の袖へおやわんかくす也
一宿はをちこち人のとまるとこ
女房の相を見い／＼さそふなり
きみが一日のなさけにもうねだり

うんのよさ此八朔は頂戴物
夕だちで一斗七升河岸がたれ
文左衞門手まへ一人がおもしろい
富士道者下向吉原どまり也
によぼんにくしき僧正のかひはなし
唐様に筆屋はいじりころされる
でへ／＼といひながらのる俄武士
ほとゝきす土用時分はふるせなり
そりや笠をぬいだりけちなもみぢがり
孝行のしくじり舟ではしをかけ
津の守のやしきはよせと袴垂
ぼたん一本をふたァりの子になかれ
せつかんをしかけ笑ひにばゞァ出る
門番にさへ通り名をつけるなり
中宿は貸脇差もつて居る
ぬきん出て隣の時疫しよつて來る
鐃鈸をあばらへあてゝうなり出し
松洞寺何めんぼくに歸るべき
富士と吉原は江戸でも近所也
勘當は往生づくめゆるす也

しゝが谷大一座だとかぶろつげ
福神を貰つて雪駄を腰にさし
ぜひに八分でと手おひのねがひ也
おもしろ狸横に來ておこす也
醫者に似たものが一人であるく也
留桶をつかひ長屋でにくまれる
たばこ入食ふかと思ふ寒い事
つひには神明の市がばれ不首尾
のろしのあかりで落ちた物をひろふ
聲がよくなるとも一つ年をとる
神樂堂しんるゐ書がならんでる
むごい聲へはかんの出たやうしつ子
伊勢の刷毛秋葉と藥師なでる也
後の月きぬとさやとはすてるなり
產見舞長口上は御たいくつ
ぜげんさまたのみまするさ母おくり
盛りつけた上をおしなはねぢる也
たびねがひけいせいいッこ出來ぬ也
女房はもみぢを貰つてくやしがり
日本に死にそこなひが二人なり

立田姫是より息子うかれそめ
けちな舟遊山吉野をさがしてる
爰に一人のえいゆう有り敷きぞめ
仲人の舊惡の出る嫁じよやみ
をしい事嫁も小いぢがわるくなり
聟消えも入り度きおや子げんくわ也
ふくづいた小袖で淺黃土手を行き
おんがくをもんがくどなりつぶす也
見物亂暴かず〳〵切りおとし
傘で不沙汰の疵をおつかける
茶飯屋へなでつけ心やすく來る
女客ていしゆにこづきしかられる
手桶うり直が出來首をやつとぬき
耻かしいけんくわをひだち際にする
羽左衞門寺さとびくを下げてより
ぐるで入れぬと大門で女房いひ
洛中は光秀信士とぼすなり
一國は祝ひをねだる根をたやし
女郎見てわが家々へたちかへり
ぶきげんを横ッちやうから來てだまし

半殺しにして餘人へとやぶ醫者
とんだ事十夜を南紋日なり
もう一歩くんなようと母へいひ
ふられたと亭主せつない申しわけ
百も小言で納豆でたづねてる
よんでやる文あひだには畜生奴
やむことを得ず生醉をしばるなり
伯父の目にもなみだ座敷牢のわび
評判のたはらを橋へ出て賴み
折釘を打つて松右衞門一本きめ
嵯峨樣で障子へ一首書いて行き
正月のえんま芝居におされたり
手ぬぐひも娘がもつと品になり
けんのこゑ隣屋敷でべらぼうめ
ひつぎをおくりふとどきな大一座
入院の外のもの入りはかたづける
松の木をうろ〳〵先へまかりたち
こゝいらに門がほしいと田をめぐり
壁訴訟したら末世に本はなし
夕立のたんびに仁者かしなくし

雨やどり迄はぶこつな男なり
蜘の道ふやうに大臣こじつける
いとものあはれに木綿のいとをとり
魚鳥留せぬのは甲斐のはかりごと
ずつと來てをどり子袖をぶつちがへ
やれ〳〵も糸でをどり子ひき出し
はづかしさそだろうといふ病也
なんぼう怖ろしきものがたりは夜具
ざックりとつかんだ所を母おさへ
佛より若いのをもつまづい後家
さいた〳〵見さいな妾の弟
爪をとりかけて和尚の禮をうけ
間男の子もあてやすとだつきいひ
梅の木が大きな森に二三本
左様斗りに氣のつかぬやぼなやつ
釣つた鯛直ぐな針ゆゑ魚がおち
ばちびんをみんなが笑ふまつり過ぎ
くたびれたやつ口元へこしをかけ
水くみは小べり斗りの舟にのり
百人一首こんぴらさまに氣がつかず

尾張町通りぬけるとしづかなり
むねくそのわるいはなしを地紙する
五人のあごを御めかけはねだるなり
これもんでよんどころなく嫁おとし
箸の有るだけ書いて出すくれのふみ
とてもうせるならよし原へうせをれ
片目だがきりやうはよいと仲人いひ
隅田川二度とはうれぬ名所なり
江戸中を越後屋にして虹がふき
面白さやるそ白かみかねとよみ
明店へ若殿の行く十五日
三會目ひがわるいとは本のこと
神々の大たばを出す十三日
ふんごみと頭巾四郎兵衞から屆け
此味噌はいくら目するとなめて見る
すぢ骨をぬかれたなどとまけたやつ
愛宕山勸彌が屋根をさがしてる
はきものを持つてころびの母むかひ
うんを雨たんに見芋を先へかひ

詩をつくるのがいつちいゝ上戸なり
ばゞア正直金とると笑ふなり
がきやみの後はいやだと湯場でいひ
法螺をふく迄いひ立に庄屋の下女
信濃迄かはりごッこにおぶッさり
後家のいろ先年五兩出したやつ
あさつて迄にそまらぬと番所だぞ
袖の梅おあんなんしの藥なり
仲人は姑をのろふやうにいひ
琴爪をちんぼうへはめしかられる
下女の戀文もへッたくれもいらず
酢天蓋などこしらへて圍待ち
女房子も見つけ次第と長田いひ
ばいためが來てをるげなと伯父不通
笑はない子をあいされる氣のどくさ
はまぐりにひらめ女房は不得心
聞いてばかなもの赤子へものをいひ
まくるだと女をおどす關所前
三ヶ日だけとをよそにいびるなり
冬の内月三斗づゝくひこまれ

くたりうしやたいをきせ一といで居る
はなれ馬もらひにぬでこまつてる
孫も六人もと腕ふむこひきで
こんにやくをなげ出して追ふはなれ馬
四つ手傭むかしあいゝをいつたやつ
わらはせて見なと新造しやちこばり
筋骨碎身い玉虫母もち
牛のくそあわびッ貝は見て通り
盡買にゆかまいかやと淺黄同士
まき行燈ほくしていしやは御を出る
目移りがする筈すらりッとならび
あれとかとあきれるやつと後家は出来
若殿のぬけから奥ではどをする
向ふのが松だと石にけつまづき
もてるもてないは水もの代三歩
二度行かぬ氣なら吉原いッちとく
くわゐぬきはけつ王の代にはじめたり
油あげ二度目の使おとななり
賣の歯ばんとう色師とは見えず
下がしきをきせねでちゝする暇乞

四本さしたのが四つ手の直をきめる
太神宮を引きつれて御しゆつ立つ
ひやうし木に嫁居直つて口をふき
のこりなく皆出ませうと遣手ふれ
としま屋であはぬはめしのさいにされ
仲條は道人りだつてを二とこあけ
あいさつが無いとヤッぱし杖を立て
年明けの安目にみんなひつかゝり
やね般の咽せんごりにつぶされる
だきついて皆来いやいと五郎丸
病人にまぜものゝ有る大三十日
のみ口を湯番頭づよく引ッこぬき
ひどい事質屋を出ると無賴也
たべる外信濃惡氣の無いをとこ
生鯛は糸を喰ひ切るやうに見え
四文づゝついては女房おして見る
富の場へ財布をおとしわらはれる
鍋之介事五右衛門とあらためる
つよい泥棒も無いもの石燈籠
退出に仕事をやめて錦をふり

御めかけの藝元ばん國の寧器
草履取り祭へ取ついてしかられる
貧い寺の門内で四つ手きれ
一日に千兩迄はつかはれる
京斗り大きななりで木ぞう也
いせものがたりに太神宮なし
嵯峨樣の返事仲國もつて居る
置いて逃げやれと切りたのむなり
通ひの湯の登るはず夜具を入れ
撰はふくろへ納るとしづかなり
口をすくさせて花嫁こしをかけ
つくしろり小判を出せばにげる也
下手のまりけられるだけはろぬがける
麻まいとはもうしやせんと書いて居る
亭主が泥棒するでどこへも出ず
後家もみにつくつてけつくこのましい
師匠さまいろはのうちはこはくなし
馬車のそば龍太夫立つてゐる
手ぬぐひのはしにけん布を少し付け
すゝはき竹と見とは賣り

人のいゝ車力ねこだを敷いてくる
そんならばおめしと下戸にわりが付き
けいせいの御きげんをとるしはいやつ
嘉肴有りといへども初會はくはず
めづらしき龍宮米を藤太くひ
氣にしてはつまんでは見る顔のいぼ
けちな雛一けん店で買つて來る
いも見ざる間に御きたうに皆とられ
馬の金園ひに小袖ひとつ着せ
はぐれるなよと摺小木にとかまらせ
海ぞくの用心に戸をさす佃
玉川は江戸へ出がけに米をつき
嫁の芥子をうばひとり姑かき
音信贈答せぬやつへ名代
座頭のつめた跡たどん干場なり
人もさすなら我もさす有がたさ
うらゝかさ榮花のゆめをうりに來る
發句にもならぬかつをを伊勢屋かひ
不似合の上下申入と來る
肩車店子などへは下りぬなり

冬は書き春はむじにてくばるなり
けふはいゝ寐日だと雪をむごくする
上下ではだかの中へわけていり
脊中へも手のおよぶだけ嫁はぬり
質店のがきがと小ぢよく泣いてくる
鍋鑄掛切目たゞしい砂をもち
雨のみゝふさいで守はなぶられる
三つぶとんしよつては出たがすてゝにげ
雪ふりのもちやそび後で手にあまり
どつちでもおとりなさいとまぐろうり
木鄕の町酢いものでくつて居る
重をとる手を前だれでふいて居る
おしつめていゝ相談を長田する
せなァ小聲でかますから鴨を出し
しはいやつ七十五日はやくしに
皆落藥して丸いろは目立つ也
をかしい時は小便に師匠たち
うッちやると思ひ禮者のつらをむき
新宅のかへりにどこぞわるくいひ
うらやむを四つ手の中で聞いて居る

つかふ息子に福の神追つかず
となりあるきを馬でする鶴が岡
いはひなとかんざしで毛をかきわける
日本にかまいなさるなと貴妃はいひ
先の亭主に御無用とうんのつき
あをむくと髮結のどをのぞくなり
泥だらけみやげは捨てずしてかへり
高い水一升九十五もんなり
くれおそき闘はのびたりちどんだり
顔へ穴あけて楊枝を十本かひ
じゆずを下げてもどこやらが色師めき
百棧敷口さびしいと烟艸なり
うら口をしめて來やれと門すゞみ
べろ〳〵をしてたうがらしこりはてる
さんげ〳〵大國をぬすみました
わるくは無いが高いのでうれのこり
とゝさんと寐ならへといふ腹になり
鯉のくひにげやるまいぞ〳〵
かこはれへつぼが廻るとさかる也
車坂下を二度目の高尾行き

丸顔のおも長に成るはづかしさ
以上なら百つけませうと撿校
亭主があつての勞咳さじをなげ
息子の不得手地女と孔子なり
ふせかねをくさりでつなぐ六あみだ
新古のしやべつなくあげる大一座
けちなかたり天秤棒下げて來る
持參のつくを一目見ていやといふ
あゝらおもしろからずの雪の供
あちなばん古渡斗りうれのこり
子だからも身のさし合とぜげんいひ
秋葉からかへりに太郎坊へ寄り
堀の死跡へかたづくうんのなさ
安玄關障子をたてゝかぎをかけ

巳春吉例角力會　　催主　山下　櫻木組

八百の上下を着るありがたさ　　玉垣連　和笛
朝寐ばう六日に松を取はじめ　　伊呂波連　子好
兩方の木戸をしめろと髪をとき　　櫻木連　豊好
あすありと思ふはけちな女郎かひ　　鹿子連　美徳

相傘はだまつて通すものでなし
はきもの御用心を三浦屋で張り
俄雨はるか向ふで蟬の聲
よびだしは用をかゝへた人がかひ
茶屋なしにゆきやれ德だと安くされ
文など書いて居るのを上げべからず
きどすなど少しうなつて床へ入
人が傘さすなら我もいとだて
たが扇だか使つてるわたし守
まき紙はひよつとおとすとにげる也
瓜ひとつぬすめば畠中うごき
不仕合せ太鼓を見ると横へ切れ
春の生酔草履取挾箱
さそひてにゑくぼがあるで悟られる

まんさらの傘を越前屋と直し
うきあしだなといつて來る四つ手駕
出したり入れたり高砂金太郎
ごふく屋一軒でくらす六郎兵衛
坪皿を持つて碁ばんをわきへのけ
質屋から切れぶみの來るつらい事
生煮えなうちになくなる小鍋立
あつちからのおなじみと内儀さばけ
三月の火燵もすてたものでなし
美しさ二つのあさがきずばかり
文を無くしたでおッかない煤掃
けいせいの人別帳を賣りに來る

怖くない虎の尾をふむのどやかさ　　玉垣連　和笛
鈴の音を留めて法眼匕をとり　　鹿子連　鹿蝶
たこの糸ぶん取に大ぼやも出る　　櫻木連　かるた
馬鹿もあるものよし町へ大一座　　柳水連　素文
二三年白髪をぬいてやめにする　　玉垣連　山口

江の島を賣つて女郎に買ひあるき　柳水連　素文
取りたてのかぼちや屋根屋は振舞はれ　飛梅連　素鳥
あいさうにたいこは二つさくら艸　櫻木連　かたる
家根の雪前垂かぶりせゝつてる　鹿子連　美徳
蓑の市は其角このかた出來る也　櫻木連　東々
おしい事信長妻戸ぐるみやき　柳水連　玉簾
三つ布團天水桶に程ちかし　櫻木連　かたる
女房はさくらであなを見付出し　井筒連　白子
一家中四つ手はいらぬ近所也　飛梅連　聞之
春やしき秋は寺にて不首尾也　櫻木連　運町
二三人人質を出すはやるやつ　水池連　里井
あづまから憎まれものを染めて遣り　八重垣連　寸魚
柳うりどこだと聞けば隅田川　櫻木連　春松
初雪やせめて禿の一つかみ　柳水連　猪牙
將門をしめたを龍王へはなし　櫻木連　洗路
素見物きたなくたかるひまな見世　柳水連　玉簾
軒並び梅澤あごをつるしてる　櫻木連　木綿
生酔にこゝろ遣ひの金屛風　飛梅連　鳳頭
墓などは有そうも無い寶寺　櫻木連　如雀
餅をやく匂ひで上戸いとま乞ひ　飛梅連　聞之

傾城のうそをいはぬがつみに成り　玉垣連　山口
御預けの義士にもはぢぬ達磨有り　柳水連　雨譚
申入れますとなんだかはふり込み　櫻木連　かたる
とんだめにあつたと頰冠で來る　同　同
おめかけの惡い手本をだつき出し　柳氷連　聞之
西の内をくんなさいと泣いて來る　鹿子連　美徳
評定の內外郎（ういらう）を士卒かひ　櫻木連　木綿
世に極不器用な笛は按摩也　井筒連　高柳
勞咳の娘かならずとなり有り　八重垣連　寸魚
ゆるい黑木へ竹の子をさして出る　櫻不連　素鳥
ふられたといふに女房聞入れず　飛梅連　春松
庄屋年寄まかり出て雨の禮　伊呂波連　文車
內もゝでちらり〳〵とわなを懸け　櫻木連　かたる
口まねで小町あだ名が一つふえ　八重垣連　狐聲
ふき殼を飛車でおさへる玄關番　櫻木連　かたる
いや是からも御不沙汰と傘をかし　梅　連　兎丁
もそつとに致しましたと牛房下げ　櫻水連　木綿
とむらいのくづれ三歩は賣れ殘り　柳水連　宗文
放し鰻も太いのを選ッて居る　玉垣連　露日
たてつけて品川通ひ荒療治　櫻木連　木綿

いきな引取るとか房を引ふたなし　梅　連　鼠走
大口に十八文が本ぶらり　八重垣連　狸餐
祈事は時を定めぬもん日也　櫻木連　豐好
御祈禱をおみ様といひ咲ろ　井桁連　狐聲
あゝほしいなア百両に人だかり　伊呂波連　文車
ものは相談傘と花とかへ　櫻木連　春松
嘉六はよび人で彌八は貴人也　八重垣連　狸聲
綸い傘小雨にもさすふてえやつ　櫻木連　鳥故
借るのと見たはひが目か金屏風　東角川連　運町
二たびゑむと一歩取るはゝア也　同　借遊
十五日梅若の方かき曇り　櫻木連　近糸
娘の不首尾町人に立ちかへり　鹿子連　串枝
髪屋へ行くいで唐詩選習ひ　櫻木連　乙丸
呉服店はなをの切れた下駄をはき　井桁連　狐聲
御幣が出ると二十人うせにけり　水仙連　旭
すけべいたけいせいの出る三會目　柳水連　雨譚

已二月五日ひらき　催主　星運堂
補助　蔭秀堂

續角力會

おつを木とゑゑたか京の四月也　雨譚
きついゝ事火鉢の中に首すたり　長笑
六十五宮むらさきゝはぢめるなり　未文
乳をとん出してゑすゑけちをつけ　雨譚
一聲で五町をなぐるほとゝぎす　百千鳥
捨抜に痕る前所々でにくがられ　石斧
おはぐろをくゝんなと顔をもらかくし　長笑
三會目から人がらがぐつとおち　狹衣
花の外には松葉屋へ行くもあり　伍遊
一年に二度高き家にのぼる也　芹丈
くりかへし猪牙半分はふみに成り　五楽
もつと横柄にいひなと新世帯　雀芝
狼を聞いて鹿きゝこりはてる　石斧
ふとん三つはむせつぽいねだり事　和笛
大木の花見はものがいらぬなり　石斧
初手のおたふくめがと後妻へはたく　五連
渡しで傘を明けて見てしかられる　雨譚
栗の木の下へ毛ぬきを持つて来る　芹丈
眞間のもみぢは中川か火が苦勞　素鳥
わが家守来ればちやほや嫁はいひ　西喜
今買つた三と振袖ふるつてる　木綿

大一座美へさすおしのつよいやつ・　鳳頭
千両は衣にしてもうらがなし　和笛
あきらめのわるい若後家四火の跡　長笑
あぐらかく仲人九つ出來かゝり　素鳥
はなれ馬とらまへて來てしやべる也　五連
貧乏のかくしごつこは中の町　美徳
御用の外もかまはぬは十五日　文集
かはかしがつくで圍(かこひ)の所がへ　木綿
かたびらの下へ紅うら着てかへり　粟穂
しかられる所迄あるく寺の庭　素鳥
はぐれたら榎木の下と市兵衛いひ　車道
二十一日梅わかへ塚をたて　大鳥
金屏風のまへにゐちごや絽がすわり　雨譚
多田の藥師迄は伊勢屋連れに成り　伍遊
雪が降る内になおとりあげなし　梅舎
からあさり直段の出來た音がする　間々
四郎兵衛をしかつて追人かける也　如雀
仕合せは宗盛おろく不仕合せ　狐聲
かねやすは不斷祭の通るやう　美徳
杉ばしを火鉢へつけるざつならち　素文

百疋ぶんがあいさうをばゞアする　五扇
いやな事いやとおかねはいつてのけ　鶴遊
つばなうり一歩出されてべそをかき　伍遊
うるさゝは持參やつぺしつめる也　山路
ふんとしをしながらのぞく雪の朝　豐好
にけ道をあけてきざうをくどいてる　五楽
あさのみの一(ひと)つぶゐりが四十七　遮蝶
年を迄一割引いてせわをやき　三丁
一(ひと)寐入寐て高なわは月見なり　石斧
李花を冠にかざつたを二人連れ　五鳥
盃のもめるむかうにいゝ女　五楽
手のひらへ家内いつける月の客　春松
ありやこりやの名さね方と馬の内侍　狐聲
見臺へなほつて瓦拵へる　車道
のむ禮者所々にて供をおこす也　猪牙
初午はこよみで見出す祭也　同
いきせいひツぱり袋もぐさを下さい　美徳
男の出がはりおッちよッてつッと出る　百千鳥
ねんごろにかたればといふ神のちわ　芹丈
姫氏國の通りへさくら植ゑる也　鼠弓

非將碁でくらすは堅い川づかへ　近糸
せがき船切れた三など落ちて居る　素文
わるごうが入つて白紙へ判をおし　五扇
夕だちの一句いなりもはだし也　五鳥
ひどい事にげろ／＼を琴で彈き　玉簾
袖づまをひかれしだいに下女なびき　春松
大松と小松のさかひたゝくなり　霞朝
すひかづらみんなにすると馬ふんかき　三丁
梅玉のそろばん二十五けた有り　美德
わつちやアいやよとこわ高に娘いひ　滄水
暑氣見舞行水をするごくこんい　雨譚
顏見せのむすめは曾我に嫁で來る　霞朝
鈴ぐるみ十九匁の仕立代　門柳
まつ黑なくちや／＼をする恥かしさ　文集
正洞寺聟は門前ばらひなり　蔦故
毛氈はどこへ敷いても面白い　同
ひなのめしおらがへも來て載きな　横好
甲の座の客黄燒へ手を付る　芹丈
しかられて下女はき溜へごみを捨て　五樂
沙汰は無い事上げ下げを三歩する　芹丈

傘の直が出來拔ける程降れといひ　青蛾
銚子をも見たおや方でわけがよし　五扇
ふところの明く賣物を息子する　芹丈
なぜでもと鳥居の際に下女殘り　三丁
旅馴れたふりでせつちん先へ聞き　近糸
かゞみへ向ひ鼻など下女つまみ　滄水
茶碗はち網の中から出して賣り　豐好
關とりと信濃をよばる飯時分　門柳
命より大事にしたは高尾なり　素鳥
播摩屋が來たらば胴にあげようぞ　横好
屋根の有る岡持へ釋迦いれて來る　春松
川崎の品川と來る息子旅　美德
雨舍り茶瓶にかりて吸付ける　石斧
川留めにこり棧道を通るなり　同
龍神は歌と發句で二度操み　門柳
中山の石四目屋はくすり也　春松
女客白ちをなども聞いて出し　芳蝶
どうがへしもふけ小間物一本賣り　三丁
金屛風子にたゝかせる心なし　狸聲
うりものの富士は六郷そこらなり　龜遊

たんぽゝの草ばかりあるこがね原　霞朝
耳に蛸できいしたにと高尾いひ　狭衣
からかさを三日かりてる長いしけ　蔦故
どばで見た男がじぎをして通り　芳蝶
けちな雛蕎麥屋の膳ですぐに上げ　車道
此はなと心中しろと札を立て　狐聲
合羽籠部屋へは御用行かぬなり　美德
四火といふ沙汰を聞きもしわたしやアね　同
おかみ迄知らせて女旅へたち　豐好
にぎやか過ぎて儲からぬ出會茶屋　美德
提灯で立聞をするたはけもの　狸聲

巳二月廿四日開

春日町鹿子組
催主　美德
　　星運堂
補助　薩秀堂

誹風柳多留二十篇　終

誹風

柳多留二十一篇

此篇の初丁は、十四五とせ以前迄此道に名をとり給ふ若での上手名吟多かりしに、をしいかな世を身まかり給ふ。予うろ覺えながら彼秀吟をかきあつめ顯はせしは、御なじみのかた廿一篇の御回向あれかしと願ふのみ。

お妾のむつごとくれろ／＼なり　淺草 紅梅
高つきの菓子が屏風のあるじ也　小川町 車十
持參金出るはと見世で笑止がり　番町 梶葉
かんざしでかき／＼車いひこめる　神田 嵐巴
江戸家老若衆模樣出したがり　下谷 冬始
はやり醫者一かたまりに踊らせる　市谷 萬齢
氣ちがひのそれからたえぬ隅田川　麻布 龜甲
庚申は横にいつてもけどられる　柳原 千雀
車にてしきみ淋しく引いて行く　下谷 井印
嫁の髪巳午の間にやつと出來　青山 仙郎
雨やどり子の行けといふ氣の毒さ　麻布 きぬた
書着ない小袖は内で出來ぬなり　本郷 鐵砲
大徳寺水にはあはぬ所の名　青山 左盛
子のねひえよく日夫婦喧嘩也　麻布 似竹
二またはわけてはたらく土大根　丸山 百菊
あれにはな主がござると神馬引　下谷 綠枝
踊子の母にくらしいせきばらひ　八丁堀 月桂
身の重いうちはおはちも下さつた　下谷 陀陸
冬の田は山葵おろしのやうに見え　本郷 中菊
お妾はばちばッかりで利生なし　本所 淺眞
からす瓜垣根の外の命かな　吳陵軒 阿

ひの八午のとし末秋

歳旦はしたが歳暮がむづかしい
いくさは無いと見切つたでかさぬ也
お念佛いそいで嫁によつかゝり
まめぢやと申斗りぢやと持つたやつ
はじかみの祭禮なぞと論語讀
やつさずにぬれ事をする新五郎
紅葉ではないとまゝ母そにんする
廣袖を着て本繩がよく似合ひ
ほれぐすり傳に曰くは何事ぞ
旅もどり子どもが先へふれて來る
風に笠とられぬやうに口をあき
小びたひの有るやつえらいどらをうち
神棚にかるたのつてる屋形船
からのかゞみとはたれだと亭主きゝ
湯屋を片腕にきざみや越して來る
土手の雪かねのわらぢの跡ばかり
足元を鼠のあるく暑い事
車引後(あと)のたはらへむぐるやう
簞笥から遣手ふんごみ見付け出し
賣りぶりのわるさ癪だのつかへだの

町内のにくまれものが熱湯ずき
いびつては息子を獨者にする
今食へばいゝと不氣味なさしみなり
雨乞の歌もくどきがまじつてる
げじ／＼をすてる扇のいそがしさ
御用のみゝへおつゝけていたばさみ
ちやうはんばのたゝかい跡元結こき
有りがたさ人を殺すと殺される
座敷持覽探幽をかけておき
越後屋のあいさうになる雨がふり
ひらき戸をやたらして置くかたき持
町内へ來るとつまぐるにくい事
札紙のついたおあしを御さいもち
あれだきつくよと氣にするもちやそび屋
五三の通ひにむす子はえらい事
一つまなこが行燈の番をする
油虫羅漢をさしてはひ上り
書くもんだなと素見物いらぬ世話
すふわりが三歩どたりが一分也
內藏之介くしやみをしても醫者にみせ

臺の物丑滿頃にごうそごそ
畠の中で袖をひくものなアに
おはこびを山々願ふ六夜待
いんのこ／＼つんぼうねめられる
嫁の禮男の見るは顏ばかり
大あばたかゝアがきげんまかせなり
よういろんな事いひなんすのう
目うつりがすると三百間あるき
もうせんへのつて新造叱られる
またをくゞらうといふには嫁こまり
恥かしさうに吳服屋は無いといふ
にげようとぞんじましたとばか亭主
つかひに行つてかへらぬを一首入れ
丸い風ふくにはこまるかやば町
下(した)から出る御無心を殿御承知
からッ切座入もせずに松が岡
あはぬ角力は伊達ヶ關高尾山
問ふにはおちず石尊でさんげする
なんとしいせうどッちらも三會目
錢の無いやつにはどつこいと藝者

日本では行基菩薩と女郎也
道々もいけんでもどる松が岡
虎のなきごゑをきかれて儒者こまり
とりしめて一だんかたりみそをつけ
山といや川とこたへて四つ手かけ
えんが切れても大事ない下駄をくれ
をしみ／＼ふり袖をひとつ殘し
臼の禮袂と帶をはたくなり
白布を取つてばくらうよびにやり
にはか雨女がいゝと傘がふり
文覺はぐわえんにするといゝ男
夕立に馬を半分ぬらすなり
えきもない首持つて來て琴をきゝ
いつ迄とないたは鵺のいとこなり
龍宮は釣師をとかく聟に取り
寺町で孟母をきけば越しました
むらさきを品玉ほどにしぶんそめ
いたいけぶにん子どもがいつそなし
長吉點でよんだを他人知らぬなり
音さびしくぞかえりける四つ手かご

けつ王にはじまりさうな衆道也
いそ／＼としづか御ぜんの後につき
菩提所へからだと首が二度に來る
きなこつけ／＼お齒黑をつける也
申しおろしにした晩に又かつぎ
大根だの芋だのえの木だのと書き
田舍聟袴でしばりからげられ
まゝおやは紙で折つたる夜の鶴
遣ふはず親父さかッて入れたもの
かいぶんまひをまふ年で何あらう
げびた事鯛はきりでが無いといひ
こゝ通りなさいと袖をひさへ上げ
大黑はいゝがあぶりこ手がわるし
鈴の音で甲乙の座へならぶなり
あのぢい様のかいたのと額を見る
ふみを書いては取つといて病み出し
じやまな事伯父のむすめが二人迄
僧正の目合を見てはつかむなり
居つゞけに用ひてよしがちィらちら
石町の鐘でむかしは引けをうち

蚊の中に新造息がたえて居る
汁のみをかひに出すので弟子さがり
五つ目へいくらはけちな柳橋
朝がへりとあるこかげへおろさせる
たばこ入れから唐がらし搗屋だし
糸を切る鋏は女郎いらぬなり
つり合ひのいゝけいせいは直が高し
おれが顔みなよと嫁はつねのかほ
伊勢物語もつたいないと親父
ばん僧は松をぬいてる人に聞き
隣やしきでも月見どこでなし
盃は出たがまア後が長いわ
よけが七兩二歩いるとてるひいひ
流れ灌頂の近所で二疋釣り
ねどころをはしごの通る大あらし
やつぱり梅といふさうで公家てれる
町内のぎりさへすむと大一座
飛ぶぞと見えしが忽ち土手へ行き
勝つたやつそろ／＼にげて音さびし
切りおとし押しをおかれぬまでの事

下女のはら心あたりが二三人
他でころぶんはとけつがひろい也
雛よ金鎚よとしろうとの鰻
若後家は上りものだと和尚しめ
あの柿賣めと大地へぶッつける
よみの見物すい口でこれからさ
萬歳を嫁は敬して遠ざける
此どてはいくらだと惣さげて居る
死をぜんだうにまもらず男逃げ
よくきけば和尚の流れくわんじよ也
淤泥にそみた結構な伽羅をやり
引臼のいッくらも寄る安日待
當住大山ほつ／＼とたゝかせる
菰をかぶるぞよぐらゐはきくものか
金魚を片身上げておくけちな雛
はんめうを羊の中へ呂后入れ
手のひらへしたみ才藏下女へさし
節分にふだらくせんへもみ上る
ちゑの出るほど振袖はじやまに成り
もどりには道ぐさをくふとりャげ婆々

こじつけたさうでごわ／＼あろく也
たそがれの渡し釣師が二三人
口をしさ大わざものゝ御せんべつ
親にて候ものうたれ拙者うす手
きげんよく幽王身代をつぶし
をどり子は女の中で不人相
すなほにするとお高さま／＼
戸板でかこひはふり出し／＼
百年目矢來の中へいれられる
うれしさはあやめ白歯の殿を持ち
とんだ時いとまをねがひなぶられる
暑いのにお針手重いものを縫ひ
晝三の事だとなんだ初會なり
まことのけいせいかひ笠や下駄なり
ぢゞイとばゞアあつたとさ嫁はもめ
やめて居りやいやさと後家は出來かゝり
ふりさうな名の薄雲はふらぬ也
をどり子が來ると將棊をやめにする
ふもん言二十五程も候をいれ
法事客嫁の素顏を初に見る

松が岡女だてらな會所なり
取つて置きねえなにいらぬ縮を買ひ
をかしさは持參のこに見合なり
鳥にだもしかざるべきや四つ谷鳶
勅使さんなどと巴はやすくする
麥飯に茶は人らぬとみな食ひ
ふきげんさやりてあはゝの三太郎
ありがたい所で切れる三の糸
一やしきおつとり卷いて帆を上げる
たきつけろやいとひしこの首をもぎ
あん内かしれて六ねんはやくかち
枕言葉あらうのにそんれう屋
中宿のまへをげんぞくわらつてく
岡場町のたいこはどばの片手わざ
生醉の供ものひろひ／＼來る
何をして居たとこはめし又つめる
田原町からねらつてくふてエやつ
きやくぶんを松右衛中々がてんせず
木魚程のものを遣手さげて居る
一人子に草をわかつて赤がへる

いさゝかな用呉服屋にこしをかけ
ふみにじり〳〵番附おこし
いろむすめしゆん三夏六雛を出し
此へんの飴だとおやぢ目が黑し
から荷では植木かはうろくか知れず
客をしかつて出て御用しかつてる
どこ迄ころげるか見てる火ふき竹
たこの切れたををしむので妾げび
大國を手長島からかひに來る
二代目はあしぶみもせぬふくの神
かやぶきの椽からきざな聲を出し
娃で御座候と音兵衛はんをおし
荒繩で着物をしばるかや屋根屋
はやる奴寢かしつけてはどつか行き
是切の蠟燭のぞき〳〵ゆき
昔とつたきねづかで年忘れ
どらの入れものてッきばきぶちつける
夜は泣きひろは旅人のじやまに成り
半ぶ宛さすとからかさ戀になり
げんさいのくわは不器用に二本さし

おしうりに無駄の后せいへ來る
めしがすゝまぬで御用をぎんみする
ぼん〳〵がなゝぞと子もり笑ひこみ
芝居へは向ふのめりて娘ゆき
目のからむ時分にろちで母の聲
あみの目を大方うめてよい仕舞ひ
つめ〳〵をぽんたうにする遣手ばゞ
とんだ案文をそばから無筆いひ
まだ年や若いな繇さをに梅
どか〳〵とうろは弔崩れ也
歌でつき合へばゐのしゝ怖くなし
見ともなさ茶字をつまんで軒に立ち
かごちんをわけ〳〵あいつさればいゝ
やさしいこわいろ姑女上手なり
子をひとつにらめて置いて申しわけ
伊勢の話をきかれ局はこまり
しる人をひどくしばるは遣手なり
是はといふた燕籠で聞いて居る
なんだ勅使だと國香腹をたち
あの客僧こそと高輪まで追ひ

羽織は長さをいよはやせがれ着る
学貢の仕舞ひは升に入れて行き
あッたら船に坊主だわばゞアだの
二階を指さし間男をかへし
封達ひふきげんな客二人（ふたり）出來
長繻から夜通しとすねをさすり
三丁目どうかわづらひさうもなし
三會目わッちやふとつてゐんすによ
舅を元の伯父にするむづかしさ
御しまひとことわつて子は箸を置き
車引ほどの人數で息子ゆき
參りそびれたと何やら借りたさう
女房が出るとだアれか呼びあつめ
摘挾間つひに勝利を得ざるとこ
新見世のうちは二八にわさびなり
初物の内でかみなりいやなもの
しちりんの側で讀んでるみくじ本
湯へ行くのにも船にのる屋敷也
ふしておもんみれば又行きたくなり
かけひまの内干太根（たいこ）などをうり

から紙を品々こすと大佛(おほぼとけ)
三の糸小ゆびでまはし〳〵來る
一人づつ丸ごしで居るわるいうち
見物左衞門をあてに土手の茶屋
どてらかいとりで六尺どもかへり
金の番伊勢屋の息子よしにする
かく人もおほかんめれと辭退する
はらんでもいゝとはしから連れてくる
ゆび三本やつとの事で嫁ねぢり
白あがりの詩を屛風に張つて置き
來ればくるとて二人(ふたり)迄金糸かひ
めいを入べしにやたらにいびるなり
車どめ道をまはらぬ十五日
むごい事伯父化物をたどよこし
百しても鯛はおごりのうちへいれ
知れぬものあやめおいれのわるい人
米屋でも傾城屋でも物日なり
じや〳〵馬に友が出來たで事に成り
さとられぬ樣に謠であひづ也
よんだ當座は出ちやもどり〳〵

むねあはぬえりへは高尾つかぬなり
一町はさせほせ傘にかゝつてる
おこそうで惜しいめんめを嫁かくし
上下を着ると內でもかしこまり
おん弔のありがたさ大一座
論語をばめかけ側からひつたくり
ぬれて行く女かぞへる雨やどり
ひとりの客にあひかたが千も出る
三を一つに米澤をくんなり
去る時は九十兩ではすまぬなり
母おやの目には朝湯と見える也
盛遠はもとこ失ふ事をする
五百から一體ぬけて人にすれ
ほうそ神ふんだん達磨もらふ也
馬はねを秀卿が來てぶつこはし
亭主にあきの方三年ふさがり
頰ばると何もいはれぬのは小判
器量よい持參をと母をんな也
しら藝者母はうるさくつきまとひ
花鳥には行くが風月には行かず

三ケ日またずびくには見世をはり
白びやうし後生をねがふ風でなし
目がさめて居るとゐのしゝ怖ろしい
張りきつてこまるを恩にかけてくれ
朝がへり一度か二度はたしなめよ
まゝ母でいたしにくいと娘書き
兄弟で下郎を二人(ふたり)さしころし
高慢な後家地男はきらひなり
御たいくつ金をば谷へすつるやう
こはめしをくふは一座をせないやつ
宿下りすきまかぞへがいりびたり
けいせいはきつと坐るとげびる也
貫二てうばくり〳〵とかついでく
やくかして女房火ばちにあたつてる
產所から今のばッたりはなんだの
さむらひをまねても春は錢に成り
素見の中を素一步の氣の高さ
石だの橋だのと本所馬をとめ
酒はたべやせんがわッちや上戸口
俄雨せつちんで駕よばつてる

かひじやくし數萬のかはづ鳴いてゐる
小ざむらひおらが殿様まけこけた
てこずつたとこへ張良笛を出し
月のおッぱに勘當をおやぢつけ
すまぬ事母の湯灌は寺でする
座敷牢ふみをとゞけて母不首尾
大黒はそれから御ろんじやりませう
六月のひるねもほねがをれるなり
奉公人を置きあてゝきつい入り
大鳥毛高尾りつぱにふり通し
大一座三歩をまぜて氣がつまり
ひんのいゝ客は六郷さまを賣り
ぼんにつんでもとは金を安くする
火ばちの上であたまかき叱られる
呉服屋の通ひ山師のうちにかけ
繪そらごとゝはいはれない時鳥
屏風坂あたりお寢間のあつたとこ
血が出來て四五町あるく土手のちよき
むかし〳〵たゞすむ娘惜しい事
紫屋となりの紅屋こして行き

つり竿を出すは屋形のさびしさう
あんどんにとりそへ賣れ残つて候
息杖でちよつと見せてく金屏風
細見を大もじに書くせんさう寺
わり床でしごとして居る生藥屋
三年目かまくらがしへ縁につき
三つぶとん天水桶の下へ敷き
もみぢがり聟やるまいぞ〳〵
賣られる程のこんじやうと遣手いひ
三つ四つ搗いてつきやは一つぬぎ
化物のはなしを儒者は引ッ叱り
だい〳〵をこぶ巻にするいそがしさ
かへ玉をくはせ番頭ぬけるなり
講視の前へぜにばこ持つて來る
知りきつて居るに鶺鴒ばかなやつ
あたり見廻はし繪のとこを娘あけ
しちなんそくめつと女房あきらめる
つんぼうもあるもの棧敷にいつぱい
三會目箸一ぜんのぬしになり
後家が來てをどり子みんな嵯峨へ行き

すでにがつしすべき所へ送膳
なきごとをひらき直つて常世いひ
よめン女へあら鞍置いてひいて來る
思切つてとびねえなと舟のぎう
秩父の留守に孕んだで大おこり
妾のはねだり下女のはゆすりかけ
引汐でない知盛まだうらみ
ねとぼけて煤はき竹でわたり合ひ
ふといやつすりゑで一歩二百とり
古筆はえらまぬ神へあげるなり
二人(ふたり)してふり袖を着る十五日
御しのびの御供はだれも行きたがり
いなか大じん三つぶのを買ふつもり
堺屋や住吉屋から來て植ゑる
此雪に内に居るかとそやすなり
愚僧化しては醫者になるおもしろさ
正月を二百十一日にふれ
子おろしの札は夜(よる)來てはると見え
かるゐ澤馬ぬす人のしりが來る
ふくろ町口取やすみ〳〵追ひ

九十九はえらみ一首はかんがへる
かぢの葉よりは椎の葉を人は知り
三みせんの外にもしのびごまをうり
年號がさくらのうへににょッと出る
金儲け豆腐にむつをちよッと入れ
あらものやからはあはれな形で出る
以來足ぶみせぬ氣でくどくなり
子どもにも草履かくしを儒者させず
三つ布團つもらせて見て切れるなり
芭蕉葉を寺で貰つて叱られる
品川で打つたは寺で勝つたどら
藝者でどらを打つたのも百の內
あかるんだ雲斎で出る安大屋
齋日の矢取り尻だの天窓だの
大石の中に輕石一つあり
下女鴨をあんにすべいと錢で取り
大日坊が生きてると七兵衛
里の母惡根性で暑氣見舞
芝居をかづけて昔は女郎買
いろは茶屋俗をそびくに骨が折れ

もう取つてくださるなよと母は受け
まさかの時に質に置く鎧なり
沸湯よりひどくしたのは甲斐の國
阿房宮羅切したのが猾利なり
通者聾は眼に血をそゝぎ
朝はとうからおひんなり娵をねめ
おッかぶせられたといはにや釣合はず
本所の寺もふさがる大あたり
百のくち十兩ぬけた嫁をとり
皿に桃もつて置いたは西王母
かねびしやくぬすまれる迄せわがなし
いきかはりしにかはり出る下手役者
ごッた見世道中記だのはゞきだの
蚊が無いと其角千兩迄はつけ
ふとゞきさちかしい中は其氣あり
かまくらも三十迄はをしくなし
相談が出來ないはずよじやみッつら
こんざつさ雛に夜食がそつて來る
市の不首尾はゑびすやにてかつて來る
引きとりて無くてそとはに腰をかけ

百出して今をもしらぬ棧敷なり
父は子の爲にかくしてひるま買ひ
本性になるとたいこは寄りつかず
糸立や菰かはせて名をあげる
おそろしい顏で島田を遣手ねめ
來る時に小道へ寄らぬ三會目
幕よりも簾の花がおもしろい
六夜にはしごくのとこと市の正
田舍間につもる相馬の杢の頭
わがものにしては費へな女房なり
はまぐりも早々門を追出され
もう後家もやめねばならぬ腹に成り
勘當の息子に寒さばしであひ
元服も一どきにするごふく店
又明日と小田原の上座たち
手がるい船で日本の地へわたり
こしばりを袴羽織でくばる也
ぞろ引いてながしへかゝり叱られる
つまつた灰吹心わるくはたき
女郎のはなしさい中女房かへり

深更にねこの水のむ音がする
たまさかにやらうもはひるいろは茶屋
ふくろくのあたまを娘抓つてる
よし町へ寺澤流のふみが來る
師のかげを七尺さるともうあそび
はさみ箱から萬歳やねずみ出る
あら玉に遣ふはくれの御えん日
風呂敷をかぶつたあした蚊帳を出し
おめかけの不首尾縮貰數度の事
御臺所すりばち山のあたりなり
庚申に宵から寐るは世すて人
天德寺おんむくじッて藪醫見る
おもしろいはず二ケの津が寄つて居る
尾張町ぶら／＼するとつりこまれ
やッたらに升をせッつくひしこうり
下女はらのたつまい事か他言され
つとめと遣手で一兩はぢやうよと
袖に切先をおしあて二歩ひきやれ
夕だちや十二字たすと降つて來る
柿をくひながらばくろは乘つて行き

目がさめて眞間の紅葉をほんに見る
普門品半ぶんごろで横へきれ
かごかきの口からにげたあながしれ
三日ほど仕立屋さわぐ夜着ふとん
さてつひに來ないところと野掛道
よい妹もつてちやらくら武士になり
ばかな事いもとがしんで武士をやめ
魯の國の人と息子はつきあはず
いゝ女房きかぬ藥をせんじてる
藤の咲く時分は花の山でなし
都では花見白河では月見
をさまらぬ物が降つたと連おこし
かたみとて見れば小判もあはれなり
ばんづけを又御むしんと百桟敷
相の山手しやな女の居るところ
むづかしい文を花見の先で見る
納豆の鴨にはたゝきまける音
命をぢんかいのごとく藪醫盛り
うれのこりげに十日の見るところ
さういつて先づ見たのよと出來ぬ奴

花の雨哭しんまくにおへぬなり
いゝ智惠が出て御隱居へ下女かぶせ
にはか雨冬の蘇鐵のあるくやう
つけ木つき握拳はのこす也
畜生めとはあんまりなさゝめごと
八からがねよく／＼見れば手が二本
白壁を見ろと去狀ぶッつける
鬼のうでとりに供部屋からぬける
護國寺をぬけまいといふいぢッぱり
とぢくつて着ますと姑がのつよさ
繼やみと他人の目にははやくみえ
撿校はねかねて藏をたてる也
三百店に新造とさしむかひ
間のわるさ中條のまへ二度通り
よつぽどのたはけ座頭とつかみ合ひ
吉原のはりが江戸往來にもれ
口に稱名まなこには嫁をねめ
三十八年いきのびて筆をとり
尺八をふいて見ないと後妻いひ
から天竺はけつの毛をかぞへられ

兄さまは御馬やりもちはへこきなり
ひとりべえならまだしもとせな叱り
赤ぞめとすはうの内師いとこどし
顔がよごれたで風呂屋へはひるなり
興さめ顔で庫裡を出るかたい後家
芝居より高いさじきは繩からげ
れんぶつも四五へんいれるどぢやう汁
桃をぬすんだやつだのにめでたがり
いたい事月の上座へなほされる
嵯峨様をひよいとはふッて猪牙にのり
白ひげだからとなりには長命寺

あなたもかわたしも三(さん)と萬年屋
出がはりに勘定高いやつのこり
尾がしらをつけてまぐろを三井かひ
路地をしめますと戸のすきからのぞき
勞咳の母は近所のどらをほめ
百目がけよほど嵩じたばくち也
かさでわからぬでせんきに道をきゝ
水をねめつけてみゝずをつまみ切り
買食ひはいゝが賣食ひみじめ也
當分はのりもの町を後家通り
海遠うして淺くさでのりをうり

南無きやらたんのういやんなと孟母
もとゞりを切つて富本はほめそやし
大一座下戸は女郎をおらすなり
鋲打と四つ手すりあふ御えん日
金屏風明けてあばたの産婦出る
からで一ばんの智惠者をいひまかし
うッつい女郎がきたないむしん也
娘をむごく大あばた聟にとり
鍋取はしんとうつしにわらぢ也
急な事片々つれて中の町

午正月吉例角力句合

なり平を追ふのだに水いつ迯　　狐聲
げんざいくわを見て三味線けいこさせ　　一口
けいせいの峨眉ひそめる月の前　　芹丈
むなぐらをとつた程には書けぬ也　　かたる
壁土の中から時にあひに出る　　寸魚
うす舞へおもしをかける三會目　　かたる
をしい事吉野で仕舞などをする　　狸聲

雪打ち拂ひ夏の魚見せるなり　　狸聲
まなこは九郎兵衞だわへととらまへる　　中葉
加賀様の前角兵衞もたいこやめ　　木綿
人に鬼あつて百から四文取り　　かたる
錢車出見世の餅を引いゝに行き　　狸聲
旅だけに邪魔にならないやうに折り　　狐聲
誘ひ人がいゝで紅葉をたべました　　木綿
あいさうのいゝが將門越度也　　如雀

大坂からは女郎屋こして來ず　一口
御公お出妻は留守妻はるす　雨譚
御てさんは又江戸へかと腰を懸け　木綿
こび付いたほど錢のある舊賣　かたる
ほとぼりをさまして行けと母をしへ　文集
あやふやな主どりをずる黒い猫　和笛
一生行かん氣だにかう書いて來た　木綿
唐木屋はしまつて下駄を一度うり　玉章
ごま鹽をふつたは長い夢ばなし　芹丈
勾當の內侍から紫式部　雨譚
爲替金わたして座頭旅へ立ち　文集
はなし聽一日宙をおよいでる　糸柳
いひこめたさうで內儀がたゝかれる　木綿
かれを木にしたらば錢をぐつと下げ　文集
桶一つかけると細工寄つて來る　文古
伊勢平氏にしては築島は大氣　雨譚
梅柳雨木すでに並ぶとこ　玉章
今入の女中を比丘尼たちなぶり　敵吐
姉の彈くそばでだゞッ子三を下げ　霞朝
壁屋は泥をしるべに追つかける　洗路

年禮の廻り道するいゝかざり　狸聲
面白さ箱でうちんで花見なり　同
春工面よしとぜん寺札をはり　玉章
長つぼね穴のいなりの近所也　狐聲
棧敷番だんじきどもを追立る　洗路
切つても血の出ぬに番頭百貸し　狐聲
雨懸けで伊勢の三郎あるくなり　かたる
氣の毒さ碁筒から賽が一つ出る　狸聲
せいろうは卷舌でやるつかひもの　車道
こしらへ喧嘩ちろりが二つみえず　木綿
飯盛とさらにみえない品かたち　旭鳥
馬鹿な高慢おらがかさは吉原　雨譚
おくまが親父はら帯をせず生れ　木綿
がうてきよろこびますと四つ目いひ　三町
是からすけべェと戸塚へつかを立て　中華

右角力會結　催主　星運堂
　　　　　　　　　蔭秀堂

丙午三月廿七日開女柳追善句合

吉祥日にたてたる佛閣なり　五樂

[illegible]

よし垣へ目はなか出来て琴を止め

五人の内で下品なおよくしやべり

こゝの宮にも源三位鵺退治

[illegible]の子ども[illegible]重い筈

[illegible]

三人で一歩たらぬを二朱あまし

[illegible]

千人もはいで一重を身にまとひ

[illegible]

碁うちが来たで生押しの小袖也　石斧
つらやくでじゆ者も袋を一つ入れ　木綿
やねの無いやつを代りに出しやアがり　美德
引窓をしめ辨當を内で喰ひ　糸柳
男の皮をかぶつたをつかまへる　五樂
ふらそこを入れたでむす子内に居ず　芦露
なぜでもとむす子手拭かぶつてる　素鳥
あはアれな音でかた餅隠居喰ひ　雨譚
外のけいせいをかけると十匁　孤舟
泣子も目を明きいゝのを取るかたみ　二町
これは〳〵と川中の船がつき　高砂
はき溜めにつる門部屋に國家老　同
うッかりとはみがきを出すつけたあす　同
勝角力小太刀まとめて引つかつぎ　玉章
智勇けんびして居酒見世を出し　雨譚
長いもをたてかけて置きしかられる　蛩紅
湯治場でなんにも知らぬざんねんさ　東水
五六人屋形へ下着ぬいで出る　和笛
さくら艸春のにしきの小切れ也　梅舍
女郎と一つふところ三くだり半　五扇
飛鳥山しろうとなげても〳〵　孤舟
ふところで飯を盛つてる無盡茶屋　芹丈
三文が女郎もかはぬ氣になりやれ　三町
あらッぽい下女雛皿がわり納め　霞朝
むづかしい書置をよむころも川　さゞ浪
内心如夜叉梅きぬへみつをぬり　芹丈
圖はれへ不意に來るのは邪推也　石斧
なんだ石碑かと一つもよめぬなり　芹丈
口よせをあさけり息子しかられる　孤舟
よい〳〵わい〳〵みのかたつけろ也　金旭
たび戻りいしゆさしをする出來ぬやつ　間々
片がははにこついて居る雨やどり　青峨
あみの目から手を出すのは茶碗うり　美德
似たやうで杵屋と搗屋大ちがひ　狐聲
かけひまの内楊枝屋のめしかはり　木綿
三がいに居るを汐干に母あんじ　五鳥
おろすことと尤至極藥研堀　五連
おゝさうさ〳〵に市子かつにのり　運町
むづかしさ嫁小ぶくろへつッぱ入り　洗路
なべやぼり黑い手の出るいゝ日和　東水

十七はみめぐり十八はよしの　如雀
縫箔も紺屋もしらぬ苦勞也　車井
犬のせわもなく紺屋は干して置き　素水
ゆうべには醫者明日には僧と成り　麹車
時鳥ふぐこのかたのやからより　魚交
文使ひ遠くで一本ぬいて來る　美德
本望をたつしたよしをうつたへる　さゞ浪
紅葉をうりしまひ唐の芋をうり　高砂
たびおくり橋より川が人がふえ　門柳
女房のむかへに來るは一(いち)もんじ　高砂
しゆろう堂むかし時計のお間の跡　車道
おとなしさ櫃やつゞらを馬に付け　五鳥
人のちる時分に人の出るさくら　狐聲
浪人をこしらへるのが妾上手　五扇
乳のむはたれだなと來るふてェやつ　美德
下總でしりのつまらぬ雛祭　文石
ほれての多きいゝ男女房なし　高砂
上はくは九合しますと子路曰く　如雀
おそろしい童賴光二人しめ　石斧
櫻の本にて扨いかゞし給ふ　雨譚

男めかけの氣て居なと聟にいひ　芹丈
どこの隱居だか四人子房は出し　雨譚
おめかけは褒似を祖としねだり事　鳳頭
靈鷲山(りやうじゆせん)どう行きますと德兵衛　五岡
三年目二人(ふたり)よこして又むしん　鳳頭
行く氣は無いかと伊勢屋むだな事　狐聲
うはばみの目ぐらゐをさす村の嫁　狸聲
うらおもてある水茶屋ははやる也　芹丈
すりこ木をさすべきはずを鍋かぶり　雨譚
入定のまへに食傷一度する　鼠弓
景清がきず岡場所になじみ也　雨譚
越後屋の喜平次だんご賣りはじめ　湖水
ていのいゝばくちつぎほの弓を射り　高砂
あはれむべし秘藏小袖切りくづし　同
子の出來た見舞ひ夜食はきつい事　同
堅いやつとう〳〵お手をつけさせず　夢中
をかしさは鸚鵡も五人ぶちねだり　石斧
いッつけられるをこはがる江戸家老　高砂
屠所のあゆみでやう〳〵と草津也　門柳
道理之介をとり立てゝやりねェな　蜃紅

土弓場も美しいのを的に置き　五秀
鍋いかけしゆもくを持つて風を出し　高砂
ふくろ持で無い股唐人くどり　同
ころり行くところへ馬がかけつける　卯木
紙びなの幽靈花の宵に出來　高砂
とむらひの功德大赦が二三人　洗路
小山のごとくゆるぎ出て一歩取り　狸髪
姑嫁を見る事土芥のごとし　同
たんざくをお寺でもらふけちな事　芹丈
玉のをが切れるとのむにこまるとこ　旭鳥
ぼんによつたので六夜を仕舞ふ也　夢中
眞間から見れば正燈寺違い所　串柿
こしを目當にさかやきをたてでかけ　文古
慈悲な事けいせい馬鹿をふらぬ也　五帆
かみを結ふ下女ひらいたりつぼんだり　花笠
淋しさは下の句同じやうに出來　風車
若松を紙でこさへる氣のどくさ　美德
木食の大病食をゆるされる　高砂
いぼの願掛出來さうな所へかけ　玉簾
斬頭を生酔にしてこまりはて　高砂

長くしてくりやれ緣起にかりるのだ　芹丈
ねれかげんしんのごとしは神樂堂　如雀
撥をふくろに御きげんよう御出よ　鬼嫌
名代にとしまの出るはごふく店　石斧
のちに穴なし有り傳馬町の下女　梅舍
おきやあがれ下女虫干をいたしやす　玉簾
蟷螂が斧けいせいを妻そしり　五帆
いけつひをふんさくといふやりてばゞ　狐韋

天明六年三月

催主　清江
一口
補助　木綿

誹風 柳多留二十一篇 終

誹風

柳多留二十二篇

花のあしたより月の最中雪の夕べまで、言の葉ぐさのつきせぬたねの功なるえらみを書き寫して、とし／＼やなぎだると題するも此道のなかだちともなり好士考士のむつましきをねがふ事。

呉陵軒述

關札を打ちかへさせるふじの雪
子の口へしたんで內儀客へさし
臥龍梅見て妙計をたくむなり
仁和寺の茶番は事がもつちやうじ
居るとこを見たのが竹の吹き納め
平家をかたらぬと琵琶はねかしもの
どうで知れるにぶちまけなと鐵漿親
なんでもと思つたら後家ごそら剃り
よし原の狐女房を持つとおち
中の町あかるくなると時鳥
御しやべりが來たと產所へつッぱ入り

けちな嫁來い／＼年を一つとり
むだよせをしてそろばんの直を付ける
芭蕉もいけず大磯へ藥とり
はた道具つけて靑梅の嫁もどり
不二を見なくしてちからのおちる旅
大門へかり門の無い大一座
三人で二歩だがかへる／＼
狆を縛らせかゞみとぎ上がる也
母のるす通るものごとそ引きこみ
義經の首鎌倉でものをいひ
石山で一わり引けの書物出來

をしからぬ命春迄ながらへる
いんぷと見えますと針醫口ばしり
から鮭をしごく古風な內儀貰ひ
おやたちを內百番でだます也
はやくかへりなさいよ御取上なし
今夜はおれでしまひなと女房いひ
新造をかたに取つてるけちな晩
張良はんくわいを一字づつぬすみ
饂飩屋の見世にびつこや草鞋くひ
三味の弟子七尺去つてなめたがり
どうだなと戶へよりかゝるひなし賃
引きおひの浪人夫婦今はのみ
一しあんござると藪醫こはい事
天蓋を惜しいとほめる他人なり
梅若は二月のすゑに京をたち
四斗樽の中へすッぽり馬は入り
ばかな事ゐねむつて居てつんにがし
薄墨で昨十九日むすめ事
赤いきれ持つて鎧の渡し舟
松かざりいけ慾どしいものばかり

どこぞではわらの出さうな店に出る
誰となく起きた〳〵と花の朝
むづかしい鳥でおぼつかなくと詠み
楽天が又来ると人玉が出る
佐殿大とり燕雀をはなさず
人かひのむだぼね江戸の名所也
関所前女をなぶり〳〵行き
書に曰くけふし御げんと唐机
もう一度着て留めたがる嫁の袖
萩も紅葉も知り切つてござるぞよ
鎌倉がすむとあぶない所へ行き
瓜田は元より火燵もいましめる
思ひなし江戸町張がつよいやう
むごい事高尾つぶしに売つてやり
染めたものとてはふんどし斗りなり
内でくふ程鯛かふ中の町
硯のちりもふかぬがと御述懐
いざり松資朝それも捨てろ也
呼び申すもと労咳へおくりぜん
伊勢屋に鰹つんぼうに時鳥

関東べいは大さうなあだ名たり
旅の留守向うの女房だきこまれ
うりものゝ内へ目くされ入れて置き
傘ぶくろ嫁横を向きはめる也
縄をつかまへるやうに紺屋いひ
吹くもんだなどと楚軍で初手はいひ
糸だても買はれず上下で四つ手
後家こゝを読んでくんなとちッと出し
全盛の下でびしよ〳〵海苔を取り
おれ斗り売れぬと遣手きげんなり
口をしさ女房に世をせばめられ
起きッくらしやせうによと賑やかさ
浪宅へ四つ手みじめな迎ひ駕
わるがたい後家で権家へぱつと知れ
この雪に御太儀時にせがれ事
大わらひ嫁關取とおないどし
死皮と水をさゝれる売小袖
こも僧はまわたに針をつゝんでる
かゝる〳〵と赤子をだいてしかられる
数萬縷錦形屋は暮れに摺り

百人で一人はひどくおちぶれる
そばの皿かつぎ古法をもつて居る
石山の誓願寺のと寺ば入り
もゝ引を帯ひろどけで直ぎつてる
あらきだを百匁ほど出すなべいかけ
初のおはぐろに見物二三人
朝がへり今戸のけふに取りまかれ
光秀と長田ならびに信濃者
評判々々所は瓦橋
けづり懸盆提灯のかごで売り
あすは出勤しますると五はいくひ
岡釣は足でふまへて吸ひつける
すばらしさ男物着てくどいてる
能因は川どめなどのうそをつき
みす紙であふぐそばから取つてくひ
息子おもへらく三歩がものはあり
一台は辯才天のものになり
時ならぬ種服を着る五丁町
時も時わび最中おや孝行〳〵
小舟にのつた女房を息子もち

初に來た狆嗅ぐほどに〳〵
椎の木一本小だてに取つた松浦
女房が留守で圍ひに內を見せ
苫屋よりまきより鴫は人が知り
ゆげのたつ男判取はふり出し
母のゑくぼをつッついて乳をのみ
いも見ざる內にかしらをはかりこみ
はちす葉のにごりに後家はしみに來る
一引(ひとひき)ひかせなと黑い口でいひ
すまぬ事花筵の上で四ツを聞き
きゝおぢて二度目の高尾すなほ也
すばらしいのは鬮取のわらはやみ
おしまつきに寄り細見などを見る
豆いりをかんだり顏をしかめたり
鐵砲を賣つた金にて笈をかひ
正直などろぼ大黑斗ぬすみ
はらさんざ見て供に遣る遠目がね
くたびれを嫁はおゐどへ出して行き
上下は貸さう二百で來てくりやれ
三會目ばゞアも一歩女郎なり

介兵衛といふ人腎虛やみはじめ
つらい事素見に斗りほれられる
おゥいおい糸立さんと四つ手かけ
ぬきあきて毛ぬきを廻はす玄關番
はづしものとなづけ盜み物をうり
おゑんとおこう鳥居ぎはに立てる
十三日やれ首をもて足をもて
一ヶ國一冬江戸でくつて居る
勘當も二銚子目でゆりかねる
つくりしゝろも落ちぬべき供養なり
いもじ迄先から出來るうつくしき
のしめ麻上下で生醉樣通り
海と山とでかみをとくはづかしさ
小人(すうじん)に店を逐はれる素讀の師
義家はおどし賴政ちかに射る
妹と聟と勘當わびるなり
わるい口きいて其角は雨にぬれ
土用干女郎の宗旨にない事
まき藥へ具足を着せてばかにする
小夜衣やつと判じてはらを立て

なんぢつまよ夫よと宿ゆすり
をかしくも無いに茶臼を見て笑ひ
北狄よりも南蠻と芝でいひ
女郎買ふ金をおやぢはためて死に
手合ひぞろへだと盛長ふれあるき
手のひらで琴をおさへるほとゝぎす
おや子して四十五人の下知をなし
さぞ椎の實がならうとは野暮な猪牙
石燈籠買人があればうる氣なり
罪なくて配所の月を佃見る
口說き損じた女房は氣味惡し
覆水盆にかへり內々で入れ
物申の呆れて歸るするい內
樽酒であるのに內儀出す氣なし
退屈なもんだと堅い川づかへ
疊敷く助言の多い十三日
年玉そつくりよろよろ歸り
だアまつて針で突くまねうまい奴
具足櫃紙雛一つ紛れ込み
餅米を撿校むしやりむしやり喰ひ

黒猫を短い玉の緒で繋ぎ
七種をたゝく所へ碁の人
大人に乳を振舞つて乳母不首尾
うさんといふ匂ひ女房嗅ぎ出し
五十貫貸して編笠にも成らず
百人の天窓の上にしつけ方
むごひこと息子の側に黒い猫
こゝいらへすわりませうと暑氣見舞
かじけたりなまけたり二度義理で來る
金主がついて鶉ぶとん烟草ぼん
二萬石かはづとりまきないて居る
下戸へ禮いつて女房はそ引こみ
直し釘あたまの時はつよくうち
ひだるさを千住の伯父にたすけられ
月を仕舞ひついでに出見世をしまひ
竹槍のあし元へ來るかやゝふき
御びくにん人のほしがる顔があり
五十まし宙をとんでく根津の駕
くらべッこして白瓜を一つかひ
白むくは三月ながれ申し候

はまぐりの殼と息子をすてる也
八丈を着て蒸籠へ乘つてゆき
村だんぎ日のべ榎の木へはつて置き
歡がるただき繪といつてしかられる
そこ〳〵に見るは氣のあるもみぢ也
つゝ井筒ひやした瓜をのぞいてる
死にんせうよと息子冥利に叶ひ
まけをしみ隱居年增を上げる也
一ぺんはかさもかきやれとたはけもの
正月はたるから小粒つかみ出し
あみ笠をゑがほでかぶる柳ばし
妾が兄すつぽんつきをもたせてく
三丁目にははぬ店が三四けん
めづらしいおこゑがすると傘を出し
なみだにはもろくないのはしち屋也
品川でやくをよけるとふといやつ
たなへ上げよその內儀の不義ばなし
十人がよつて見たのでうれのこり
燈籠がなくなつてから八つ着る
內こうが付いたで剛にくまれる

はッつけよばりで出やしたと女房
字あまりの家名を付ける五丁町
むづかしい口で隱居くはへさせる
いびりてを澤山よせる談義僧
こそめでたけれと戸だなで留る也
わがどらを先へ咄して異見也
御主君はひとり無刀の御せきひ
口取にそびき出される妾が兄
ねごとにて女房晝行く事を知り
ひのへでも無いのにころす美しさ
北國なまりどうしいすからしいす
愛さうをつかさぬ氣だと貸さぬやつ
てへ〳〵のいたゝけのとてふりを付け
ねこもしやくしもと樂天おどかされ
ばんあたり行かうかどこへふみが來る
桑をつむ女房にほれるばかな事
かり金の穴をかゝアにほり出され
たま棚に院号の無い恥かしさ
西瓜ぬす人ねぢ首にして逃げる
百安で首をくゝつた店へ越し

妙義はるなをねだつてるかるゐ澤
ばからしさ馬にのつてゝ道をきゝ
あるかれぬはず琴箱を立てにしよひ
番太がところで一どら御用うち
すりもので袋戸を張る安いんきよ
俄雨四つ手に禿ふたりのせ
時鳥きいたは後徳大寺なり
ひどい事やりてと座頭同居なり
いそぐのにさて／＼子どもよけぬもの
遣唐使後は茶づけをくひたがり
ざん切りのさうを茶屋にてゆひ直し
ちゑが出て日くれから出る片しまひ
むごい死にやう楊貴妃と高尾なり
病人を祖とし八朔ころもがへ
俗にかこはれてかたみがひろいやう
をどり子の後へ練馬のせなア乗り
枕にのこるくすりとは四つ目也
四人（よつたり）と二人（ふたり）とむらひくづれ也
盧生はたきたてひやめしは最明寺
琴箱を横にしよひつきまはされる

もてんとすべからずふられじとすべし
ぬれッ手をふき／＼みごろどれ見せな
遠い寺亡者をそしり／＼來る
來たさうでかこひ格子に顔がなし
狂歌でもよんで見やよと中納言
金は持つたが手紙を書いたざま
丈にあまれる杖を突く小座ッ頭
つれがふられたがらつき合ひでふられ
百人一首かぢをも一人入れて置き
うらみぽい歌斗りよむ源三位
こんにやくを小便桶でうりに來る
熊谷は不承／＼のてがらなり
魚淵にをどる十目の人だかり
ゑぼしきてついぢの穴をよつんばひ
たいそうな引料の出た紅葉也
髪をそるゆゑごんは後家よしにする
おしろいときながら舟をしぞ思ふ
ぎんぎせるにて下知をして堀へつけ
江の島のしやうじんむごい事をする
時鳥左樣ならばとないたやう

最愛の夫人に別れやけに成り
三年は在鎌倉とかくごする
白むくでとかくさむけがしいす也
けいせいをくぼく見て居る損料屋
藏たてる迄はなすびをうゑて置き
禪寺はしらふの石碑出して置き
撿校在宿不成就日なり
病人をとりよせてみるはやり醫者
本じやうを先とわらぢをはいて出る
やきものゝうらをかへして初會ぎり
まさきのぴい／＼ふきながら野懸也
山ぶきの花だがなぜと太田いひ
あはれにもおもしろいにも吉野丸
百兩はきえ安いがあばたはきえず
手いらずの芋でながめる後の月
打ちしきに一つ十八かたみなり
かつたやつからうすに耳そばだてる
能書の通りぢや四つ目安いもの
あるきくたびれ關寺へたどりつき
米櫃の下へしかうときれたゝみ

くらがへして怪我あるなと妾が兄
うるさゝは初かりがねをすねで知り
初かつを高時犬にくらはせる
おくり膳美しいかときいて見る
中間は二百が藥で見えぬ也
もう死んだらうのとむごい尋ねやう
楊枝屋はざん米もうりさしもうり
じやの道をつか／＼行くと王子様
すゝき田は冬ばッかりの女郎かひ
たでくふむしもなく毎晩賣れ殘り
山崎を頭をかゝへ鼠にげ
南風で地中れいらくしたもあり
八まんの氏子月見のいそがしさ
九十九は古歌で一首はあたらしい
京の鬼さたを大津で貰つて來る
御女房といふやつをつれて來る
めづらしい魚鳥おッつかッつ出る
なりひらのだらくばなし本に出來
丸寐して居た帶をとく中直り
大坂のまつりへんしやう男子也

らく中はあややにしきの中を行き
づきんでもめしてと茶屋は笑止がり
四十二はから紙斗り見てかへり
楊枝やは戸板に豆を出して置き
さがし事女房はちうをとんで來る
始皇帝かべの中には氣がつかず
からやまとに無いきぬを藤太着る
歌をよむたびに小町は名がふえる
紅葉見て來なと出しなにかるくやく
くどきそびれてかんざしを又かりる
太神樂どんとうつてはひよいととり
若衆にほれたをしりめと申すなり
なげ入とちがひなげこみむごいなり
庄之助數萬の人をいひふせる
鉢卷へよろこびをいふ產みまひ
うさうが出るとむさう來る下女が部屋
貸し本の加筆いたつてのそ筆
筍をぬすんだやうに明智され
年よりに夫婦げんくわを息子させ
へやしろ黑助しやれて叱られる

らんのよさとろ／＼二人長尋ね
すばらしい勇ちゞイを鎌田持ち
ひいきの沙汰として兄貴召出され
双ものざんまいで神慮を仰ぐ也
公事宿に晝夜枕がごろッかお
初茸はほめてる内に出やむ也
けだものや虫けらの中仁王泣き
貰つて行くものは品々有るところ
是では地文だと突出ししかられる
せはしない猫かつぶしでくらはされ
虫の知る事を唐人氣がつかず
ねこだ敷く車力は人にうらやまれ
歸りにはごくらくを行くいかだのり
さいふから出たにはいかい御高なり
業平にとしよりあそん異見する
先たばこぼんでお姿庭へおり
住吉のとなりの國は四千石
あいさうのつきたけいせい金を持ち
くれなゐさまのお客を遣手ねめ
けいせいを勝手へ入れて松を立て

すてる神斗りで平家つぶれたり
じやうだんに堀の持佛のりんを打ち
顔に有るあざもやッぱり金をくひ
聞いたかと問へば食つたかと答へる
客を見送つて殘りをぐゥい〳〵
てへ〳〵をするとくいつみすぐにとり
たが來たか草履の見える一月寺
四五兩ですめばおふくろ請出す氣
のむとこがあるとは素見おきやァがれ
柳とはいふものじつはさくらなり
半㒵で黒染をする耻かしさ
白人と江戸も一日いひたい日
五つ目ははした佛がきらひなり
御よだれをおふきなさいと侍從いひ
こんどから行きなさんなと中直り
青苔衣に似て燈籠まけず
琵琶をひくまどへも一人二人たち
花嫁はかんがへもなく顔をぬり
よく〳〵のかはきばゞァへ淺黄寄り
こはめしもうれいな持は素顔なり

衣屋の嫁惜しがつて叱られる
宿通ひやめベイならと村の母
しやば中を尋ねましたとあろきいひ
合羽屋のかんばん火の見のひながた
二三疋鯰がなまずをうんだやう
往還をふさげ切見世たれて居る
おきやァがりますまいと出る朝がへり
ともかせぎ女房が舞へば笛をふき
いびりやうこそあらうのにすけべえめ
べゝは着せよいが小袖は着せにくい
色男たゝかれながら糸をぬき
さつま薯畑瓢簞植ゑた沙汰
棒組にいゝ御かつぷくと前置
切れた三持たせ信濃を買ひに遣り
甲の座は金屛乙座蓙のぬし
御はなし段々雷の聲に成り
孝行のしたい時分におやはなし
すみ口がいゝで江の島見て歸り
宿引は萬歳ほどのはしらだて
名句の手から椎の木へ二三人

むごい事さゝゆがすむと去つてやり
富士の外にもしれてゐる三笠山
新造迄はふりたらぬあきの雪
つき合ひをよくする聟はおん出され
御一所といふやつ平の盞をのせ
朝がへりおろかなものに異見され
みんななくなすと異見のしてがなし
おそれ入りましたを其角聞きあきる
としよりださうであみ笠迄わらひ
手ならひ子母をせめるとまた筆か
豆腐屋はさるやねずみに忙がしい
古ぼねに成つてみやこをひらくなり
よし金ゆゑにふられんなちからなし
くつきやうな射手は娘にかゝはらず
川さきへ參るかげまはもういけず
うぬがてに錢はもどりと素見いひ
盆前は天狗倒しにされる也
本ぼれと見ぬいて夜具をねだる也
くらぶしん大きな茶こしさし出し
いろは程あるのをこすと秋葉なり

ふんどしを女房さいそくしてあらひ
やぐら下やくしやと女郎居る所
おいらがにや具足があると御用いひ
其氣をおだしなさるなと外科はいひ
光陰をしむべしほりものが目だち
齒をみがきかけあをむいてものをいひ
くれなゐは全體しはいとこで出來
はぜつりの事をかくしもたまをもち
ありがたの御弔や大一座
耳よりのとこに大佛おはします
くきづけをくひ小半日齒をいじり
からくりをヘッぴり腰で覗いてる
山下でゐんとんゐんは知りませぬ
かうなされてはと龍女へ藤太いひ
すみさしを齒入ちよこ／＼遣ふなり
年始帳作左衛門と供がかき
息子をむごく大あばたよめにとり
異見するおやぢのむねに嫁があり
紮をならべて見るときやうがさめ
とらの尾もさくらの時はふんで行き

臆病な客やみの夜に成つて來る
二三通後妻書置おッかくし
子安貝女だてらなみやげなり
いたづらな後家内儀からふみが來る
渡しばであすおこすよと夜とぎ乗り
わけのある勅使を字佐へたてるなり
奥様の三味線ちッと不出來なり
先に日が二つあるから金をつけ
よみ人のしれぬは歌の川ながれ
茶の給仕させうはけちな見合ひ也
他人のはじまり兄よめをねらひ
古池のそばで芭蕉はびくりする
居角力の行司あんどん下げあるき
吸口をみがいてもてと親父いひ
御てかけの眷族おの／＼百石
かい間見は尻をつめつて代りあひ
書三は殘つてはぢにならぬもの
越後屋の稲荷を其角しやくる也
くたびれをのせる四つ手はもどり駕
いつちいゝちゑは夜伽を賣つて出る

盃の巡りじまひはあばたづら
死人に口なし置きみやげとぬかし
二ヶ國の橋の不足をわたし守
巖には女房とかうの望みなし
見くびつて二朱の屋臺へつれて行き
いもじが白いので後家出來かねる
四百三十七萬餘足していひ
今のあづま下りはねつこりと金
いやらしさめかけ此頃茶をはじめ
吉原と知らずにあてる傍腹
やゝよけへ行く振袖はうれ殘り
金ぐそをひるのは乳母のそさうなり
ばかな事陰間屋袈裟を持つて駈け
取縄も手錠も見える三みせんや
くやみにいつて先づといひ出しこまり
ひやうし木で福井の田地たゝき出し
守屋はつゝき頼豪はがアりがり
一ね入りしてもやつぱり錢の音
やかずにゐればやかぬとてかんをつけ
言葉多き質おきは品すくなし

どろぼうを一俵にするむごい事
ぬしの手で御箸入と書きなんし
がさ〳〵といふととんぼはつるむ也
勞咳の母はむす子をそゝのかし
遊ぶ事法あり線香をたてる
もう二ぜんつけてみやれと御新造
雙六の繪圖で出來たる御庭なり
をかしさは捨子をされてじまん也
ほの〳〵にあかしの殿の御立ち也
もぎだうな出代り馬でうッぱしり
かんざしで嫁鉢植の巣をはらひ
母親を生れもつかぬ通にする
ゆうべもてたを女房にらりにされ
氣の毒でありんすにへと來て倒れ
里がへり話さぬことは母聞かず
案内者讀めぬ額へはつれぬなり
どの羽織着てござつたと下女に聞き
雉子使けんもほろゝの御あいさつ
月に二度うゑ木を通すわたし舟
をしい武士そうめんびつへ入れて置き

日本ばしおし分けて見る買つたやつ
まかり違ふと孤だよと空を見る
息子の琴は勞咳の下地なり
ごふくやに無いのを拜む當麻寺
世つぎ村よい見得の乳母が來る
役不足だらけ素人の芝居じやみ
百棧敷そらおそろしく一人なり
にやはないもの淸玄の式部きやう
わた入がなぜおひえだか解せぬなり
とむらひは五人で一人はさみ箱
ゆうべ初會のごてれつがらんをいれ
唐の芋坪一式ではやるなり
田うゑに出すをおみやれと村見合ひ
郷に入つてがふ腹なはざんぎり
品川の醫者俳名は芝山也
俗めいた名はゑびすさま斗り也
一つ妾はしやうやうをこのむ事
小便を四十七人せずに居る
巡禮のやうに高德書いて居る
すねながら引つぱられ階子をのぼる

いもの無い月を品川二つする
いんくつなてらいけずるい國へたて
因果な事をいひたてる泣上戸
地獄から言づてをする延喜帝
勝つたなら逃げて來なよと女房いひ
ばちあたり正五九月に追出され
濡の幕下女のび上りしかられる
じやまな石夜はひとりで悲しがり
馬鹿りちぎきッかり五十懸けて遣り
せんたくにこそ上げたれと八百屋いひ
御機嫌を見ては論語にじやまを入れ
賀の祝ひ心中に出た迄はなし
夜伽同士初音のろんで寢たが知れ
ものをいふやうなさしみを島で喰ひ
蛤をすんでに升ではかるとこ
奥様を尻から出しに國をたち
頭寒足熱六月ふじの山
看病にはり合ひの有る事が出來
柳橋どらやたいこをつんで出し
そこ爰を押へて女馬にのり

獨かきは傘屋の見世へ負けて來る
結納が來ると伯父とは不和になり
もうどうもしえゝませぬと早太いひ
雨いたう降りつる夜内からひよぐり
魂を入れかへますと施主に立ち
またぐらのひつさけさうな下手の鞠

申の正月吉例花角力會是より

萬ざいで笑ひ命をのべるなり　川長
信濃でも京へ出たのはすないたり　嘉樂
きつい事十三里有る馬場を乘り　如雀
たいこ持らうのすけかへ見てにげる　中華
伯父迄がよると座敷のふえるさた　久鳥
こうえふをすると紅葉はだしがきゝ　古松
鈴虫は御簾間淋しく夜をふかし　豐好
大門をごふくや一家丸にする　同
年號も吉野の方はさくらさめ　木綿
安いこま下駄雨に八そくに付き　嘉樂
越後屋の蔵中姿かき廻し　かせき
う三といふから水の方が巧者　狐聲
夕べにはさいふあしたははさみ箱　中葉
ごまめでもすむと弱を安くつけ　久鳥
諸葛亮いゝ手廻しの石を据ゑ　嘉樂

割下水通り夜中ににげるおと
三浦屋の有る細見を親父持ち
金持へはだか參りのうつくしさ　川長
二三人海をも渡る厄ばらひ　狐聲
今川は父百人一首母をしへ　久鳥
三国の御留守にあるへい紛失　かたる
砂糖菓子格天井へ入れて賣り　玉章
耕作の道具迄持つ名魚なり　同
きいな事ゆゑ武者修行おん出され　同
元祿のころはつゞいてかたき討　仙羽
諺にも三人むづかしいばゞア　花口
額二つ池をのぞいてにくがられ　狐聲
所作事も太刀打ちも成るかぐら堂　玉章
さいろくといふ人念にねんを入れ　かたる
忠孝で有馬の湯治とめ申し　玉章
槍が降らないで素一分めつけもの　嘉樂
御職だけ一つ目の有るとこにすみ　橫好
わるいものふりますとは四五たびめ　和笛

下谷のは仕合せ芝は不仕合せ　鳳頭
返答はどうだとひどいくどきやう　中葉
きりやうの有る人年禮に早く出る　露舟
春の笑ひは箱根山こしてから　清江

右　催主　星運堂
差添　薩秀堂

午四月開き角力會

おとなをやりこめた歌も定家入れ　洗路
衣の袖を三度引くおそろしさ　中葉
名聞な浪の打つのは和歌の浦　高砂
御逗留鳩やからすの聲斗り　五樂
御歌で見れば住みにくいやうすなり　如雀
錢をたやさぬ工夫する安房守　雨譚
釣鐘はうそだが雨は本にふり　梅舎
伊勢がのは場所えらみなく出來上り　石斧
かきつばたけ高いざいごものが折り　素文
鎌倉を移轉大がねもちになる　石斧
是がわざさと一家中目をつゝき　五松
束帯の中へ女の生酔出る　文集
きれいなあだ名は待宵とものかは　五樂

下げる膳箸取つて遣る三會目　何がし
初物のそばでからすり鉢をすり　石斧
一（いち）ねん（は脱？）つみ十ねんはごしやうなり　露舟
ほとゝぎす有明たどんのこつてる　五帆
娘の子はへうかとよるとしに成り　文集
風のまへ日にともし火はきえるなり　玉章
十三年忌は座敷を持つてとふ　素鳥
本望さ娘兵法めに入らず　狐聲
狩衣をこまひの折れで度々やぶり　高砂
盆棚はみんなはたけの月たらず　古松
梅のなげ入れ白むくで生けて置き　五帆
おとゝひの梅若けさのつかみあひ　五扇
天井へ支へて曲がる影法師　五清
關東へいたちは道をきらぬなり　如雀
和らかにどれがあやめと源三位　狸聲
品川でどうぜいのますいせのかみ　糸柳
こりはてゝ油と醤油べつに置き　五松
人まろをねつぶして下女まくられる　五樂
堀迄のつもりに火繩切つて置く　魚麥
十年は蝶よ九年は花よなり　素文

あごでおふ縄は六味へたかるなり　五松
こはさうにさいかちの芽をつんでゐる　間々
錦木を薄雲直きに取入れる　雨譚
笑つては客が歸るとしかられる　玉簾
五六ぱいくらつて伯母をすてに行き　門柳
まんさらのむだ安產の使者のとも　石斧
新世帶たゝみのうへでみそを摺り　高砂
たゞで無い藥師と女房見ぬいたり　五楽
餅の丸藥を柳へ嫁はつけ　五帆
うらゝかさ嫁ぶくりやうへ豆を入れ　如雀
なびいた薄雲をば請出さぬ也　石斧
水斗りにげると思や月もにげ　五楽
針王に袖をあげ／＼二本かひ　横好
借が有るさうで御慶にねんが入り　五遊
つり合つたちやうちん堂にぶら下り　芝烟
立つて見ろ坐つて見ろとぜげんいひ　五楽
今近江ぐらゐを委やたら彈き　和笛
川施餓鬼よめものがたり舟がつき　素鳥
吉原に買はぬ女郎はないをとこ　石斧
羽二重をぺんぺらものとおやぢいひ　芹丈

りちぎな紅葉行きかへりにあやまり　高砂
かつぱしりたがるぐるりへ屛をかけ　五帆
隣から百かりて來て眞間へ行き　五清
きんせい東方どつどゝ降つて來る　五楽
しんしのみ箱女房出すいゝひより　高砂
他人がうの入つたはあべの仲麿　雨譚
三千の化粧流るゝ水道尻　高砂
いゝひよりよせ切れの戶を出して置き　車道
とりまいてぬしの八卦はあたりんす　五帆
生醉のわすれて歸る嫁の顏　五秀
其跡へ來るとはおしがつよいなり　玉簾
十七八のたんと居る吉野丸　芹丈
江戶は朝京は夕暮じまんなり　串柿
一度づつ茶にはされると釋迦はいひ　五蓮
麥わらのじやすゐを女房廻すなり　横好
かんばんのそうめん箱の裏へ盛り　丸水
秋葉から天狗がついて川をこし　素文
盜みついでに御みやもと心がけ　五閣
靑ぞらに毛引かりがね四五十羽　蜃紅
なん所をこして四會目へ上るなり　花菱

身に付いた果報と妾にくい口　何がし
むすこのもみぢやき直し／＼　芹丈
目あき千人も目くら一人に成り　美徳
かるさんのむしんたぶさを取つていひ　和水
ちん客を一人ねかしてどつか行き　五鳥
辻ばんは槍が通ると本を見る　糸柳
それとなくあれと／＼がいとま也　高砂
年明けといふのが女郎安目なり　文集
正夢のごとくにはなすふてえやつ　狸聲
釣りしのぶふり／＼をかけしかられる　雨譚
俗な男だと金好はぶかれる　梅舎
短冊が子がへりをして御らんしよう　門柳
寐たふりをのぞいてどつか又うせる　文集
反物で脊中をぶつてほしからう　鬼蝶
風呂鋪に手紙を包むちからなさ　雨譚
はなし亀やつこをふつて日をくらし　素鳥
藥資のは納めると人がちり　美徳
上下と褌並ぶいゝてんき　狐聲
憎い程いゝ聲だのと局いひ　文集
甘茶では喰へぬ鰹のはしりなり　丸水

竹光のけいこ一月してねらう　石斧
よめさえ／＼とぼたもちを七つくひ　素鳥
三人で一人魚くふあきのくれ　如雀
晝三を貧乏神とおやぢいひ　狸聲
足袋見世でゆびをかぢるが上座也　丸水
こゝいらにせうとは早い切りおとし　素鳥
つう仕立の猫かゝへてすゑて居る　雨譚
摺子木におしをかけたを公家衆持ち　五秀
風上へ廻つてすてる鳥のはね　古松
おそろしい酒妾久しい木ずゑ也　玉章
酉の町遣手へみやげ熊手なり　同
じれッたい文が花見の先へ來る　握機
仕舞ふ時ふたへ入れるはけまり也　高砂
顔見せの木戸ばん首がさかさなり　玉章
八百の身代笑ひつぶすなり　洗路
目もじならではわからぬと畜生め　文集
松のうち内儀毎晩のしをつけ　横仔
禿を袖にぶらさげてにげるなり　五閑
まああれも入れろはけちなやつと見え　高砂
そりやねいぴいだと姑くわい氣也　美徳

浄瑠璃坂は五段につゞいて居る　洗路
かつけ自慢はしよく過ぎた病なり　福邊
仲條の引札で下女くどかれる　福松
觀音を七兵衛は度々賣つて行き　狸聲
扨も妙國寺の蘇鐵だとほめる　美徳
御名代としてふとんが一つ來る　如雀
俗名に地藏は一つたらぬなり　美徳
木曾をだきしめひおどしをねだる也　玉章
木綿高直につき下女むふんなり　高砂
ちゞめるとさり狀程な初のふみ　伍遊
はつがつを女房の聲で呼びたらず　五鳥
八九人どろ／＼／＼と雨やどり　文集
子おろしを下女は八百へかひに行き　五明
三太郎ほめ／＼瓦こしらへる　素鳥
いゝはずさ三わりましの女郎なり（は？）　五鳥
ふか川八のゝ字かないでうしろ帶　福邊
丁がせつしやとく大寺へ初會ぎり　雨譚
茄子（醉び）づけで茶を呑むもげびたもの　鬼蝶
燈臺もとくら上髮ゆひらんびん　孤舟
氵と芋の門（ど）でかけ持ち　狐聲

俄雨骨をさしてくむごい事　福邊
島田より金谷が先へ請けいだし　志木
隅田川情が強いとすてられる　素鳥
持參金せいが半ぶん高いなり　洗路
かりに女郎とあらはるゝけいど也　玉旅
女房を參らせたがる練供養　芹丈
よッ程な水け駒留ひッた／＼　雨譚
紫と男ならびにむだづかひ　五樂
眞間の連米の薪のとはなしてく　狐聲
するが町みほの松原芝に持ち　口喜
兩國はいんろう田町袖をすり　素鳥
明き店に置くのは市のなぐれもの　同
けいせいは三人あとは遊女なり　如雀
梅の鉢うゑを賣る御えん日　寸魚
やきばへかぶせるやうなを扇着る　美徳
島田とは同じ木ならぬ下駄をめし　一町
雨の降らぬ前はもちとばかりいひ　高砂
火の中水のそこ迄もやき豆腐　福松
びんづるの生きたを湯屋に出して置き　梅舍
きつい降り俵が馬を引いて行き　叢文

ぬけがらの屋根舟の有る鳥居下　五松
よしはらも四十里先はけちなとこ　卯木
藪いしやの餘人へといふかるい事　高砂
大三十日柳ごりからつゞみ出る　文集
とんだ賣りもの雪隱のねこぎなり　蔦夫
道の記の口元でなくほとゝぎす　高砂
高野のをすぐに武藏へ引く所　一口
貞女にはこまりはてたと三浦いひ　車井

朝歸り座敷へ傳馬町が出來　如雀
みんな留守外科にねこそぎ見せる也　青峨

天明八申年初秋

右角力　催主　文集
　　　　　　　串柿
　　　　補助　芹丈

辭世

雲晴れて誠の空や蟬の聲　五月廿九日　本綿居士

右追善會柳樽廿三篇へ加入仕近刻出板

二代　呉陵軒

俳風柳多留二十二篇　終

誹風
柳多留二十三篇

浅草新堀端川柳叟年々萬句合の泉なるを利き分け、上戸も下戸も愽しむる其うまみを乞ひ請けて、如レ例柳多留廿三篇に汲込み書林星運堂へ送りはべる。各不二相替一御披被レ下ませ。

如猩

かるはづみなされますなと目出たがり
金屏風暑い時分におもにたて
月のうそ天に僞り無きものを
ばかりではいやだと櫻連れがなし
たをやかな音桐つぼの方でする
かんじんの禮を言はずに迯げて行き
ほころびる命を歌でぬひ置きし
よまうとて花を盗むもあぶなもの
白晝に門をたゝくは十三日
なぜでもと鳥居の外におゑん待ち
むらさきに成ると間もなく五日留主
かんどこがわるいで晝寐しそこなひ

白水の流れた所へ蓮が咲き
お花見のあしたさしての咄なし
年玉でなけりや一（いち）ばんいふ扇子
子煩悩抱く迄にして泣出され
うしろから鏡の顔へ笑ひかけ
たての歌横にして見りやかきつばた
いそがしさ十七寐るとお正月
生けたごへ小判を入れるめづらしさ
いろ〳〵な入れものゝ寄る後の月
田舍駕あるきながらにかたを替へ
いくぢなさ二人（ふたり）で飯や粥を焚き
色事のけもない内にいひ名付け

六七人にのぞまれて嫁はじめ
六あみだみんな廻るは鬼ばゞア
六月上旬てつぺんへ旅をする
六郷は舟より駕がおもしろし
はやる下女又飛入りが二三人
孕み句は世上へしれて小町なし
八朔に涼しいといふ仕合せさ
鼻ねぢり斗りがねだる嫁を取り
初舞臺などと新大屋をいぢめ
初午はをとこ禿に世話がやけ
八十年早く平家は運がつき
にぎやかさ浴油の下で舟がふね
にはか雨にこり〳〵と來るやつさ
握つてゝたいじやうを乞ふ放し鳥
錦繪と墨繪と行者もつて居る
女房の後門つめるぶんのこと
女房へせい目で居る大あばた
奉書（保昌）に包みかねるは袴なり
法眼のじひはのれんをくゞるなり
法師武者其夜ぶたれたやうに寐る

へんといふ逃げ道醫者は明けて置く
別當がうたれ神主なつて逃げ
砥石の外は何にもないきついしけ
殿様は鵜から巳後の御朝寐
道樂ものは川上へいつたさた
通らねばならぬ所に禿居る
道明寺慾をはなれてつめるなり
鳥籠の木になつて居る組やしき
耆三のあがつた跡へいゝ女郎
ちよツ／＼と逃げてかぢやの火にあたり
ちつとの事でも客の空言はとがめ
李白だと見えて石碑をよんで居る
兩腕の弟子雨も呼び雪もふり
隣家には船斗りなる御旗本
ぬす人に飛入りの有る市二日
ぬれた錢握つてちやア／＼よしかな
ぬりわんばうを脱捨てゝ下女も春
をなご共いつそうはつく月がしら
御禮參りをば廿に成つてから
奥行はあつちら間口二十けん
落すなとぐるり／＼としばるなり
押勝の男はすたりきつたなり
おし賣りの藝子に祇王祇女おされ
奥は花お部屋は曾我のねだり言
弟へ兄の花出しはぢをかき
わるい道手がいた塀をあるく成り
かげ清に三つ多いが不斷の名
鐘供養ばんくるはせが一人(ひとり)來る
かいどりを搗屋四五十ついてぬぎ
からぢやの內庭土のらうが見え
かまくらの牢は抱いてはひられず
甲の座に居るぬけがけの手習子
かゝる所へ小林は義士のじやま
かまくらに居るうち相の手もわすれ
かぢの葉はよん所なくちらし書き
かつぎどのおらが野郎はいなんだか
麹町冬はとりべに人だかり
かぶきの新參畜道へ落ち
凱陣の時は奥州ことばなり
がらくたをつんで隣へおとづれる
かうしんはさて不自由なつかはしめ
川立ちは川お妾はさんで死に
よせ本を三の糸にてとぢる也
夜(よる)見れば目斗りあるくからす猫
よ火をすへやれとおんぺい母かつぎ
よし廣は冬は打たない刀鍛冶
夜伽とはねつこりとしたうそをつき
たゝみを持ちあるき觀音をおがみ
立聞きをせぬと一首はすたるとこ
たびがけにしては折りめたゞしい歌
駄ちん馬かゞし引いてくさむい事
立ちどまり人をねめ／＼もちをこき
そば切りは嫌ひけんどんは五つ六つ
染物やこの一品は江戸へやれ
袖頭巾菊石(あばた)もつみを作らせる
月花もその內に有る一(ひと)かまへ
月にもて過ぎてかじちのさたと成り
ね過ぎたか四つ手手明きを二人(ふたり)連れ
奈良茶喰ひ／＼品川をむすこきめ
奈良の鹿座敷へ來ぬがめつけもの

長い縄おごくの聲を待つて引き
廊下ひそ〳〵聞男が二三人
宗近は狐がついて誉められろ
胸わるで来るとゆるさぬ和歌の神
六ヶ敷く言ふととひやは明け渡し
むごい事分け地へふとん一つ出し
馬からりつぱに落ちたは兼平
馬をしからせては馬子も一人前
うせものは存ぜず湯からむすめ逃げ
うるさくも晒ふみわけ鳴く所
うまさうに喰ふを見て居る雨やどり
いつそ野郎に成りねえと若い後家
家毎にどれも一人はにくまれる
色直し紹に成つて来るおもしろさ
のがけ道折りふし連れをなくすなり
おもひ出してはシテワキのさしで口
食摘の大破に及ぶ嫁の體
喰ふものでないのは花とほとゝぎす
配り餅から女人とてへだてなし
草刈よりは洗濯が嫁こはし

やなぎと娘こきませる楊枝見世
止みきつてゐざりとびつこ門を出る
まどがおりないで姑女すばらしい
枕がや二針三針乳母はじめ
傾城のいんぎんなのもげびた者
還俗をする弟子を待つ松が岡
化粧の間不時に明けるともゝんぐわア
ふの切れた傘やつと貸してくれ
筆をえらまず消炭で一つ付け
房楊枝横にうごかすはづかしさ
こまものや内靈寳が金もうけ
國府より手ざはりのいゝ三會目
こじ付けのさむらひの出る松の内
呉服屋の番頭家に杖をつき
小姑は丈夫な身かた二人まで
聲あらゝかに參内をとめ給ふ
小付けには成らず槍持あつてのり
是がかこ付けの寺さと内儀どし
ごみのする事をとゞけるいそがしさ
後家の髪此世で還ふほどは置き

御器量みそで六尺のかたやすめ
御供所のえんに青傘五六本
御殿山むなしく歸る所でなし
是が本の正宗だと後敷だぞ
婚禮に娘をさがすとんだ事
こんにやくの有るに菓子盆さらひ込み
この人にしてこの病軍師なり
戀のぬすみをさせぬから病ひ出し
勾當は大きな物着屋が出来
江戸の富士吉原宿へすべりおち
てばなしで川中へ出すいゝむすめ
天と地のつッかひに成る不二の山
あの客僧こそ大事よと品川
跡の車も一つ所かとむづかしさ
赤子の足をえいやつとたづね出し
あら世帯茶袋をぬふ針はじめ
秋の月もちろん一句ではすてず
あたゝか饅頭喰はれぬは市の正
荒海へ千鳥の鳴くは稲田領
あいさうのわるい石碑を嫁は建て

あんどんに取りそへ三分賣れ殘り
猿廻しもらふと後見せて行き
三味線をばつたりやめて通ります
三會目隅から今にまかりいで
細見にまでのけものゝやうに書き
きつい事隣しらずの呉服店
きんくわ一日のゑひとは中の町
金屏風野郞の上にぐらッかァ
氣に入つたのに樟腦をたんと入れ
きん句だに禿雪こん〱といひ
きつ事いゝ天氣だに夕立や
湯加減をしつたも百の内へ入れ
行く氣かといへばさん候といひ
めのうへに藪入を見るにぎやかさ
飯盛にゃよすぎ傾城には成らず
めの字からへの字に成るとつけ上り
見出されるまではほつても嫁いはず
見世先でくはへぎせるは居け文
見苦しさおともの下女がとちくるひ
箕の市斗りは江戸をあてにせず

見ともなさ茶屋の表にぼくかゞみ
しろかねの箸を鳴らしていひをくひ
新造の座敷かれ木に花が咲き
七本の槍はのこらずしづが作
車力どもなで切りだぞとかうう暴れ
猪猿は元より象まである町
尻ひつからげ立向ふ下手のまり
しやうじんを二つとどばのいらぬ事
十二銅羽子板にのせしかられる
尻のつまらぬ年明きは野郞也
十三はすわり三味線ころぶなり
ゑびすかう十日過したおもしろさ
柄を出して置いて湯汲は飯にする
ひざの猫ひざへ渡していとまごひ
ひきながら三味線はこぶ十三日
屏風飛びこし迯道は三百里
百里ほど有るを日づけにワキの僧
百兩はなく成り顔はのこつてる
ひんのいゝ棧敷つもつた雪のやう
晝まへは老いにけらしな楊弓場

ものゝけがよし町へ行く連れに成り
物語り直に本尊書き給ふ
物着星かたみを貰うなさけなさ
ものを言ふまへに生醉身もんだえ
船頭の足音を聞くいゝすゞみ
錢箱の有るが羅漢の組かしら
晴雨とも晝夜げんきなほとゝぎす
すがゞきも文も立つてく大一座
直ぐにひらくで釣臺は百ふやし
菅笠へあてがつて居るすひかつら
隅田川まではよさうと二三人
すきな事釣りにもてんや物が出來
禪宗のもみぢ息子の天魔也
二度目には三年ものゝ女房也
須走口を出ると直き田町也
仕合せは車むごいははかり也
水にをそはつて月見をにげる也
同日のろんは駿河と近江也
あなたは御こうしやと娘はたち也
いゝ仕舞ひどつちへなりと步行也

朝日の雪物さしでつもる也
付けざしを娘飲んだがおちど也
床花の口のこ茶屋へはねる也
品川で口がすべると愚僧也
からかつて居るは初鐵漿もらひ也
四郎兵衛が闇へも千鳥かよふ也
秋葉道木の葉てんぐは團子也
立ちまふやうに飛び込むは二百也
嫁はもう羅綾の袂切れる也
いつ見ても紅葉だとそびく也
名山の麓はなんで〳〵也
息杖で行くともらひはあはれ也
からかさをかさず借金はたる也
吉原の紅葉のやうな一寺也
傘もすぼめて持つとげびる也
あどけない商人筆をおつ付ける
夫婦しめやかに月代ぬすんでる
古近江の糸まだいゝにかけかへる
しゝが谷がよひを禿いッつける
店びらきかつかちめいてほえられる

たま〳〵は吉祥閣で顔を見せる
天蓋屋花に嵐をといて居る
もみぢのうらに摺子木を提げて來る
座頭の女房吸ふ度におッつける
二十九日から仲人やたら來る
十五夜を十一ふやし衣見る
十二文が酢を下戸にふるまはれる
西行は半ぶんよんで吸ひつける
いとだてをかぶり四つ手の後をかけ
天蓋屋男のかいた文見つけ
夕立にこり三百里たてつゞけ
上り段があぶないと治部氣をつけ
車引はなしをするにふしをつけ
惣勢は土手をおしてく吉野落ち
二人づつ御いとまの出るざつな内
三つまたで王のこしからころげ落ち
小まひかき烟管をわすれ廻り道
やつといふ團扇の下に仁王立ち
下馱をはく時棒組は杖になり
なけなしの一分つかつてひまになり

氣のどくなあげ輪四人ひまになり
かきつばた盗んだ娘よめになり
麹町役にたゝずが足になり
女房にほれると先が近くなり
谷汲で所のしれぬ人になり
番頭が江戸言葉ではげびるなり
うりぐひをぜげんの見込むむごい事
千住川吉野の通るさむい事
二十四そうに下馱をうるとんだ事
いふもさらなり番町でむごい事
十五疋早馬の出る不實な事
八朔に黒助で居るつらい事
うらの雪戸板だけか〱つみな事
金屏風おつかけに又寐の事
傘をさそなら春日野はきつい事
返答はどうだといへば春の事
大一座あみ笠ゑんりよすべき事
せんだんのふたばをぜげんほちり出し
觀音は千ちゆの見世を二日出し
何とぞ狆を御次へと猿廻し

俄雨ふるまひ傘を三井出し
腕押の地取りのやうな疊さし
ばかものも有ると仕立屋居所なし
無慾の全盛末世へ名をのこし
こはい事落馬六度で仲人なし
かんしやくは後で氣のどくだと斬し
語りてのおもしろがるで聞きてなし
かたみわけ田舍は繩と竿を出し
江北へ櫻をうゑておもしろし
賴光へ出たは笹蟹どこでなし
ふい／＼と出るのを伯父に母はいひ
にくいやつ亭主の事をきやつといひ
近過ぎて穴がしれると五百いひ
拍子木と手桶見倒しと四郎兵衛いひ
夢にだに小判は見ぬとたいこいひ
あがられやせんと秋葉で藝子いひ
かけ聲の合ひに小聲で何かいひ
たつた二度行つたに女房どらといひ
旅の留主見舞ひ一日むだをいひ
文やどんもうござんなと女房いひ

十貫目付くよと京の仲人いひ
さぶがつて質屋の見世でだゞをいひ
あまい酢で梅若をまた母はくひ
なんの氣も無いによし町やかましい
あら繩をがつしやうづつが根津でかひ
泣きめかけかゝへてはかり事にあひ
立すぐり居すぐりさせてぜげんかひ
女房の此ごろ髭をそりならひ
たね柿の助言をいつて一つくひ
まへだれをかけてのッぺい子供くひ
干うどん夜とぎ親わんにてくらひ
あぢな商賣茶をのませとちくるひ
太郎でも居ぬとこゝらはすばらしい
大一座一番首をいどみあひ
亂杭へとらまり太郎いとまごひ
迷ひ子に鉦のくだけるころにあひ
うんざりは男のそばに耳だらひ
髮が結はれて餘の家へ又かよひ
御めかけに出すをまゝ母恩にきせ
座敷牢數珠をねだつてこはがらせ

いゝ春にわかい嫁ごを引合せ
御持佛の下から下駄を出して見せ
韓信にいぢの惡いはへをかゞせ
吳の國の代もの越の見世で賣り
はかりへも高尾は裲を取つて乘り
するが迄行くは大きな拔參り
與道者歸りはよほど手が下り
女房にひかせ鼻ッたらし語り
額をするそばで一ぷく付けて遣り
九ツの鐘をあひづに賣れ殘り
月のまへかこち顏なが賣れ殘り
せいしうはならとやはたの中に散り
御しんぶの見る細見は槍が有り
人しらず生醉座頭目がすわり
五百人見物のます大當り
折るべからずが見えぬかと下戸呵り
舞をさめると懸け取りは又しやべり
取れぬ懸け猪牙を一艘棒に振り
信濃にてさぬきの事をよく繰り
行平とおんなじやうに嫁歸り

廿五丁かどみ座敷が出來上がり
あく迄喰らひとち狂ひ二ふん取り
もつれ糸おへたく成ると嫁に遣り
雛で足休め鶴までまた送り
握り人で居風呂桶をかりに遣り
交り見世一分うや〱しく坐り
去り状を有髪のあまに成つて取り
がた〱とふるへながらも嬉しがり
あかるみへ出されぬものを呼びたがり
下女籠の鳥だと文へかきやァがり
生酔を勝手で嫁はをかしがり
かきつばたどこか思ひの外はまり
芋が子はやとひかむろに出でにけり
こりや〱とお乳母はづした飛車をかり
川端の小僧あたまをはられけり
見せものにしたい白髪を詩につくり
人別をめでたい事でぬけるなり
内裏造營四分板と小わりなり
立てひざで打つがかぢやのていしゆなり
かはらけや一日こまをまはすなり

いせじまで晝間はかたい息子なり
そろばんでもらへば嫁もげびるなり
遣手の口と土手とが八丁なり
見世賣りをせぬけいせいは手がらなり
花咲かぬとはおい込んだじせいたり
きよとい趣向は女郎のやつこなり
申し子は夢ばかりでも出來ぬなり
三段切れで一切(いつさい)はさしみなり
よしやきみなどと西行りづめなり
幽霊も太眞殿(でん)はきえぬなり
すけん物二階に居るはしらぬなり
錢車若衆が一人(ひとり)まじるなり
惜しいかなあッたら息子りちぎなり
へんてつも無くぢいさまと火燵なり
梅柳山はざつとして渡るなり
しんからも出ますと外科の座なり也
上(うは)ざうり客がはいてはしづか也
かん所(そこ)が三十日できまるなり
猫の戀ぶたれる時がわかれなり
福來たるすなはち死すは髙尾なり

來ずといゝ人まで雷の見舞なり
首打落し灰吹の掃除なり
太鼓珠數で拜んで叩かれる
白無垢を脫いで浴衣で床へ來る
切落し迎ひは首を尋ねてる
ちんころを帶廣解けで捨てに出る
梅の木を後家はふさ〱しくさげる
こは〲に濁を打つて禮に來る
歌がるた下女股倉へ取溜める
めつかちは大事盲はむごくする
木でしたを見て來生きたを料らせる
輕石も一つ交つて義を立てる
法眼(げん)の勸めで四本木を植ゑる
吉原は儒道が一つ缺けてゐる
借金は春永にして禮に來る
虱にたとへ數の子で叱られる
ふんどしも入らぬと無理に貰はれる
御(おん)裝束を請合つて息子來る
はやり色かつかちめいて息子着る
白無垢を着てすみつこに隱れてる

唐人と布袋せなかを合せてる
持つたのと息子仲間をはづされる
一人客からけいせいへうぶ着來る
酒屋でもけんどんやでもぎよつとする
業さらし日本の地へも二人出る
女房をうかゞつて居てしかられる
舟がついてさふらふとぶら持つて來る
六夜待ま一もんじにかけさせる
とりやげばゞ目やにだらけな顔で來る
一生に一度我が顔見ちがへる
そば賣りは門をこはすを見てにげる
同類が有ると母おやこすられる
兩方の木戸がしまるとばゞア出る
くだすだれ一つかみ持ち立つてゐる
口をすくして勞咳にきらはれる

品川へ風をくらつた客が來る
はらあしきばゞア一分で笑はせる
だまされるたびに母おやちゑが出る
吉原のつぶれた夢を母は見る
這入つてゝ造作をする乘物屋
越前はいたしにくいと小間ものや
大丸のけつに大きな目ぐすりや
寺にかちましたとかりる祭前
駒はとめたが猪牙舟はとまらねえ
日あたりのいゝで大きな蕗が生え
船頭の左右ねッからわからねえ
一人のる舟はしあんの外を行き
地紙うりがまんが過ぎて風を引き
じやり〳〵が濟むと四人連れで行き
江戸見物には雀が一羽付き

げせぬ事めでたくかしくだしに書き
江州のさんは只取る事が好き
四人は皆がつ〳〵とぜんに付き
帳付けのぶんをも一人上げて置き
嘉平次はこはい奉公人を置き
富士の山三とまり程はついて行き
一人もの死ぬとぬかみそ迄さがし
生酔ひも祭の跡のにぎやかし
す一分は素見に少しひんがよし
かみそりを一ざるといで御さい出し
吉原の御つぼね並の人でなし
はらからのために大小ねだり出し
一族のかずに十三多いとし
ふきよりもぺん〳〵草が御意に入り　川角
やねふきも井戸ほりもしたみかど様　扇朝
京と江戸とで朝夕をそめる也　かたる
御本坊花の外には御ねり也　窓梅
ほんとうの嘉肴は江戸の四月出る　芹丈

酉正月廿五日開き吉例花角力會

差添　星運堂
勸進元　蔭秀堂

上之部

氏子等は夜寒くない家をたて　洗路

後つに成つてもとにいと／＼くどり　宿彌
いけたごへ四五本心あてばかり　清江
岡ばしよへ嫁も三年身をしづめ　鳳頭
花ものをいはねど落馬人がしり　かたる
河東ぶし内では後生ねがひ也　櫻木
ぶきよふへッついをぬる初ざくら　里山
四郎兵衛にとがまへられるふぐりなし　洗路
じやの引けものを朝日のばんにかひ　雨夕
生娘のうゝかいんにやか解りかね　雨譚
土こねのやうな女郎はしばられる　如雀
白ぬりの戸を月見過ぎたてゝおく　窓梅
けいせいを拜見に行くいけぬ事　雨譚
玄關番机にさせるけちなうち　柳雨
一足(いつそく)のくされと書いて豆腐なり　窓梅

中の部

おふくろの留守に仕上げる座敷牢　蜃紅
近年は二日裸によけい成り　いづみ
滄浪の水で豆腐屋洗つてる　窓梅
不二の夢果して川留めをくらひ　夢中
しよぼくない若衆なづなをうつて來る　山香

金づくでそろもな江戸にやありんせん　夢中
明き店といゝ手で書いて見ともなさ　里山
やね板をふみ／＼覺えませぬ風　丸水
それならばさうよと亭主卷かれてる　同
三浦屋の有る細見に人だかり　かたる
湯は付けたりでお妾もついて行き　雨夕
女房は外のどく立て斗りさせ　丸水
こッちらを亭主が向ひてやかましい　洗路
さいけんのひを打つ程にむすこ成り　里山
此針で釣れるものかと大けんくわ　狸峯
大きなだゞッ子引つぱる花のくれ　山雨
後三年めたつた手から權五郎　洗路
いしやは醫者だが藥箱持たぬ也　山雨
うれのこり御尤ながら二三人　左滿
物日の素見とび／＼にのぞく也　山雨

前之部

高座ではおとし咄しもありがたし　いづみ
よし町でもうとらまへぬ年と成り　雨譚
賣物だのにめつかちやあばたなり　宿彌
文覺と一休あたまにてすゝめ　芹丈

もろこし二本で五町を廻る也　玉章
自然生けちな花見をあてにやき　窓梅
あまり御强ひくだされなと禮の供　一口
大串をあたまへさして梅をほめ　茅窓
歸りには宿なしに成る筏のり　窓梅
扇子箱折ふし出てはつみ直し　糸柳
おもしろや猪牙にて松浦潟を行き　箕山
宿坊を十二にわつて御えん日　串柿
皮財布買つて勾當にくまれる　窓梅
かゞみとぎ若い男をつひに見ず　由香
ふてるはず二ッつ上を伯父よこし　窓梅
立雲の俄に見える向島　清江
梅よ干瓜と中の鄕大さわぎ　窓梅
源三位あくせく二合ほどひろひ　風車
其にくさ間男が來て子をしかり　窓梅
こりましたさうとお袋いつている　雨譚
いろはから京町へ行く上達さ　蚤紅
めしつぶを和尙はぜんへちつとのけ　芹文
履物をれんじへ角力置きはじめ　窓梅
なりッたけ調子を上げるさる廻し　宿彌

やつあたり鎌倉さして女房行き　凡通
額かずが女房大きな口をきく　鳳頭
着船の日から町人禮に出る　若竹
なう／＼あれなる御僧鴐やらう　箕山
なり花に飽きむだ花を亭主かひ　若竹
打敷の地黑しかたがなさに出來　凡通
金をためるのがうんつく上手也　洗路
古川とかけ品川といて行き　箕山
小使に階子をさがすいゝてんき　糸柳
百人並のきりやうだに金をつけ　凡通
あさッてはそばで見ますと島屋いひ　竹戸
けだものと並ぶと仁王あはれ也　窓梅
納豆のまづいを亭主いつかくひ　龜石
二聲で目のさめたのが下女じまん　丸龍
いけぬ晩女郎とッけえぺイにされ　雨譚
黑綸子片膝立てるむづかしさ　窓梅
菩薩にも氣々女郎だの官女だの　墨莚
かんむりを桃の下にて嫁直し　狐擘
おいらならまをかを着ると初がつを　横好
客でんで龍紋先へぬぎはじめ　窓梅

素見衆がいゝと田町の酒屋いひ　窓梅
祭に立てるを化け物持參する　雨譚
潮吹やおたふくをして髭をそり　其董
前表は死人の山の邊へ越し　洗路
猿廻し一人で來るはしづか也　柳雨
手ぬぐひをやつかいにする安息子　雨夕
にイこ〳〵ごぜ御物見の下を行き　宿彌
たいめんの幕で棧敷でもたいめん　里山
傘のかし手の多いのは其角　雨夕
大尾
折れ込んで御禮に石の手水鉢　霞朝

西三月廿二日開き本鄕天滿宮奉納句合

願主　串柿
　　　文集
補助　芹丈

御えん日までは氏子らそだつなり　芹丈
えらまねばこそ古る筆をあげる也　文集
天神を拜し時鳥をたづね　川長
目に三日程はすゞしき夏のたび　卯木
白酒の無い大內は玉のあせ　宿彌

大どらだ〳〵と雛をかつぎ込み　丸水
松洞寺切りで歸つて灸をする　雨譚
はらからは槍長刀でおどす也　宿彌
傾城をうつちやらせるに骨を折り　魚交
梅若は向ひも柳橋へよび　姫小
咲耶姬三國一のすそッぱり　夢中
十六で産みつゞがなくはかま着せ　若竹
烟草をばうんとねぢ込み下戶野がけ　雨譚
京都では梅を盜まれたと思ひ　夢中
蒻たけて針わざならふうんのよさ　文集
いゝ花をもらひうつりにやぶれ傘　若竹
つツつけて見ると茶わんを覗いてる　五連
番頭の手廻しわきで子をこさへ　丸水
うみ山にいゝ夏ものを江戶仕込み　雨譚
餘寒さりかね雛棚に梅つばき　左滿
うら付けで板の間を來る待遠さ　糸柳
あり〳〵はいゝがおつかけおん廻し　宿彌
三日程てら〳〵とする五月雨　同
生醉のある評判記茶人持ち　雨譚
康秀をめがけるけちな歌がるた　洗路

玉のきず弘法大師見付け出し　玉章
前九年具足のいしやうはつとなり　同
かい間見に斗り行くのに四つ手つき　雨譚
中(なか)かさと錢もつて出る一人もの　夢中
そりやァ草だァこんなのが嫁菜　由香
百人の內一人(ひとり)喰ふ初がつを　芹丈
文盲な孔子手くせがわるい也　如雀
ばァさまはまたまめかとはむごくきゝ　丸水
梶さまの御あつらへと繪馬やいひ　巵言
むごらしいのり賣首が二つなり　串柿
夢斗りなるかまくらに二三年　柳雨
羅漢寺に儲かると言ふ佛なし　豐好
牛の御前でのろついて息子行き　玉章
をそはつた通りにをがむ手ならひ子　横好
かろじ門を出る事仕丁なり　雨譚
雨やどり出ようとしてはよしにする　同
正燈寺ろれ口のよいもみぢなり　糸柳
金屛風の損料のみ喰ひをする　夢中
のぶといつらで宮樣のあとに居る　柳雨
玉にきず藏宿を出て猪牙に乘り　若竹

文の末梅の折り枝一つかき　串柿
こいつ無心だなと不人相であひ　雨譚
ちんまりとすわると女郎げびるなり　如雀
こはい役わりを六本杉でする　同
どれ程喰つたか信濃腹がくッちい　國香
まだ夜をこめて馬のなくは品川　洗路
去り荷物たッた半年つゞら也　門柳
おもだかとちやうせんぜめは向ひ合ひ　如雀
初がつをそばで茶わんをかき廻はし　國香
鶴は古いと入道は犬に金　雨譚
京都では衞門江戸では式部也　文集
はしごおりきると二階で雛をまけ　若竹
用がありや來やすと敷居やつと越し　丸水
嫁禮の衣裳かた付け雛を出し　左滿
八樽くらつて稻田をもくふところ　玉章
土みかど樣べい立てる田舍雛　花口
鍋いかけ古いこまひもちつと持ち　そころ
なぜ一人(ひとり)とかまへないと下女が宿　串柿
きついふり書寐も起きてかしこまり　横好
こよみ見て後生を年に二度願ひ　糸柳

一廻り程猪牙からも見えるなり　柳雨
ふらそこはちびり〳〵と青く成り　一口
にしきでゞのむがそだよと袖を引き　五蓮
練供養には女房を参らせる　芹丈
母嫁へもの日にゆだんさッしやるな　若竹
下げ錢でくどいたを下女いきどほり　門柳
大尾
神子を見てふとしく立てる宮柱　丸龍

申七月廿八日開き角力句合吳陵軒木綿追善會

地名には有るが色には出來ぬとこ　和笛
加賀もんもきつとしたのは光るなり　間々
二枚目の板も直成る奉行職　同
石山も二月ほどは紫衣寺也　和笛
長刀は愚か槍をもねだり出し　交者
御取立て殿のさいくと見えぬ也　口喜
とうにも堂にも緣ある靈寺なり　五樂
奥様を三味線ひきがざんをする　東里
木下川を猪牙の通るは十二日　芹丈
地女の八朔なみだぐんだ顔　如雀
秋の夜のたらぬは月のほまれ也　交者
おもしろし明き手の方へ松が見え　如雀
女房はきたない夜具へ一人ねる　鳳頭
注連繩で首引きをする二見潟　橫好
男どももらひ湯をたく雨大師　東里
ひッそりして御寺内のごみを掃き　雅交
吉原のうら門出るとしめられる　車道
吉原で聞けば赤子も愚痴な聲　來々
ぼたもちへ幡の餘りをかけて來る　紀原
玉に似たものを抱いてゐざり泣き　狐聲
寺還入りしてもほまれな官女なり　間々
松は替らぬ色だのに緣が切れ　仙羽
初節句貰ふたんびに立て直し　糸柳
見合ふのを出合と言つてしかられる　姫小
仙様は大じの客と三浦いひ　豐好
吉原で招く尾花はむづかしい　靜々
傘の明き籠で丸挑灯をうり　和笛
月のわへ熊が谷坊を連れ給ひ　紀原
見くびつておあし車を通り抜け　三丁
木村あづかり大坂の冬角力　和
賑かに精進をする本願寺　井

松が岡三年置けば用に立ち　豐好
野郎の細見を呉服店へ下げ　龜玉
馬の耳に風周倉に春秋　如雀
女房と中や絶えなん正燈寺　芹丈
外の客をば人しらず高尾ふり　同
けちな二の足妻(さい)にも申聞かせ　姫小
北斗の星が嫁入りにさはる也　如雀
かねにかこ付け庚申を嫁は聞き　同
骨の無いやうな男に下戸こまり　夢中
前九年後家にせぬのがみやげ也　姫小
とんだちゑをつけたのは華陽夫人　如雀
紀の國屋以來けいせい賣れのこり　糸柳
物着星妾がぶんやにあらはれる　玉章
大手が二十四からめ手が二十三　中葉
こびりついて紂王に殺させる　可候
百年忌御寺が歸り三味を出し　和笛
舟はまだ駕に醉つたはげびたもの　狸聲
白髭へかつ込んだのも八九人　中葉
吉原のひんかく月に影もなし　五扇
夕立にみめぐり牛のせをわける　花口

下駄笠につゞき材木きつい事　玉章
義を忘れたで直介に殺される　扇朝
しれ者也と引上げ見れば施無畏　串柿
西村をはんとに出たとなべいかけ　川口
馬から落ちて腰折れの名の高さ　玉章
石は生きたが死目にはあはぬなり　雅情
馬の生醉をばくらう賣付ける　洗路
夕立ちのあす觀音の御緣日　蔦故
三度が三度親わんで搗屋喰ひ　丸龍
三峰の犬にも負けぬ大根なり　洗路
五六百渡る〱と追ひたてる　蔦夫
喰ひつぶしやらう人別外に置き　姫小
目も鼻もなく横に寐るふてエやつ　玉章
いぶすより焚付けるのが憎いなり　丸龍
ぶつかへりさうな門から妾逃げ　仙賀
四郎兵衛が關所やぶりは高がしれ　夢中
死にかねるふとんの下に二三兩　五扇
秋來にけりとけいせいを驚かし　姫小
習はぬ經を覺えたで孟母越し　雅情
平家物語四五はい喰つて書き　如雀

ひやうし木で夜の間を打ゝ面白さ　夢中
應仁の亂山と川いぢり合ひ　芹丈
梅若の四十九日に柏餅　如雀
煎じかゝつては引きずり茶を焙じ　姫小
長じやの陣を張つている紺屋町　芹丈
八會目あたり白無垢しよつて來る　仙賀
退屈さ川を越す夢斗り見る　夢中
臺所へぬぐのは湯屋とこんい也　花口
ニア人はしやうじん物で淋しがり　車井
切手を見せて田樂を喰ひに行き　山路
御講でもないにどや／＼參るなり　一口
極樂の表徳和尚付けてくれ　車井
嬉野で見合よめりをいそぐ也　玉章
何やつがしわざか娘かぶりふり　文集
おし送り日本と江戸の間へ來る　夢中
御連名下ほれがらみ二三人　洗路
遊里のとらはれとなり母へ文
すゐきの白あへを女房ねだる也
和泉のつぼのその跡へるりのつぼ　文集
候べく候の三味線を見世で彈き　かたる

大礒でやう／＼馬を取りかへし　久鳥
はつがつを小半丁からげびた事　里山
どう工夫しても時計のわが餘り　同
六あみだ蛇迄出たり這入つたり　久鳥
わる口に耳なれてゐる後家のとも　かたる
芥子みそ錢でかはれぬうちの事　同
あく筆のやたら流れる八日過ぎ　雨夕
出まして留主とは御念のいつた事　里山
たむしの咒咀には木をらりにする　雨夕
百さじき茶食の留主にせまくなり　かたる
らんちうと號し蛙ッ子をあづけ　雨夕
二分あると二分すてゝ來る病なり　かたる
やがて死にますと姑女しれた事　久鳥
嫁の鎌倉手におへぬ事になり　里山

右追善會

催主　かたる
補助　櫻木連中

言の葉の茂る手向や一めぐり　語　凉軒

故人木綿門葉追善に記す

焼き筆の先づぶつ付けは玉津島　故人　櫻木

探幽は天窓の上に蟠まり　同　井賀

瑠璃殿に御門にたえずさんど笠　同　緣枝

植木屋の歳暮は明けて披露する　同　豆龜

天王寺斗りは額がごッちやごちや　同　芦夕

正直のかうへは神に見立てられ　同　たろく

本阿彌は鰯は見れど鯨見ず　同　巴江

右の七吟を思ひ出だせば其面影にあふ心ちして只回向するのみ。

如せい

寛政元己酉はつの秋

誹風柳多留二十三篇終

誹風 柳多留第二十四篇

功成名遂佛國へ身退れし新堀の先生年々撰の萬句合より柳樽今年に至り廿四篇に及びぬ。猶また此餘の秀句を後篇として部分にて出し好人の御求を希而已。

花洛庵一口

川柳追福三評句合入

酉八月十一日開き　川柳評

座像よりくどく世界をかけめぐり　狐聲
大坂は座頭に用の無いところ　笑艸
七去の外にもう一つ松が岡　如雀
舟ばたを鼓にうたふもみぢがり　笑艸
鶴龜をうつて女郎にかひあきる　和國
地女の年明きをまつ松が岡　口喜
風上にすわり鬮取しかられる　中葉
上戸をつれて氣遣ひな花を見る　狐聲
田町にてえんやらやつと豆本田　車道
あくびの中の川はゞが壹里なり　狐聲
忠臣は初手楠の木でのちは石　同
見物は眞間へうり人は正燈寺　祇樂
よき星の下へ幟をたてさせる　同
切れが有つてもひんのいゝ屛風なり　芹丈
だまかした大蛇で女房角がはえ　一雅
いゝ男どぶから女房つれて來る　口喜
こも僧の出直して來る大さわぎ　和笛
四ッまでは世帶じみてる二十けん　一口
はかまごしあてたを女房くやしがり　狐聲
女さかしくてもみぢらりそこなひ　串柿
商買にさゝはる地紙屋のあばた　狐聲
大人は六郷むす子正燈寺　一口
葡萄をくひしまひ灰吹をすてる　狐聲
借物とまんさら見える金屛風　中葉
大門を四民のいッち下でうち　玉章
三分なは賣れ切れたよと下戸だまし　洗路
直がでけんぢやとまねて行く鰹うり　中葉

中納言九條あたりにしるべなし
十斗り留守居は年をかひかぶり
海にたゝみを敷きつめるいゝひより
丈長の針巻とんだげびたもの
も一ぺん廻るかどうだ煮えきりやな
福原の後わたつみへつれ申し
看病に食傷をするまづいやつ
おとゝひのやうに又いふ染物屋
腹を脊にかへて山猫かへるなり
忠義さは鋲打つて行くぬけまゐり

箸紙はこれも小判のはしで出來
大象をぞろ／＼引いて馬喰町
一角と一片土手で仲間われ
傾城も月の障りはのがれ得ず
一けんまゐらうとばちを引つたくり
きらびやかなる長持をからで置き
そんなのも今來ませうと鰹賣
盜人はせがれ同類女房なり
こも僧と乞食にゆだんせぬ男

洗路　越の傘かり吉原へいつてもて　夢中
一口　ひげづらであま酒をのむみともなさ　一口
玉章　しん川の手がらは水をあびせられ　喜常
狸聲　百姓もどなるをきいてあきれてる　串柿
梅玉　ふところはでんがく切りと土手でいひ　米久
狐聲　兄弟が居ぬとだるまも無一物　寸魚
王章　四人のえんでよしはら通ひなり　文集
中薬　ぶん／＼と烟草はにほひ錢はなし　中薬
一口　八重垣組連會之終　催主　一口
洗路

どぶの坊ほどは花屋も生けるなり
くがいとは月雪花も入れるなり
杜若折角やればりんをうち
燈籠のあしたまばゆき中の町
二つ三つぐらゐは妾塗りかくし
ぬしの手で御箸紙と書きなんし
生きて居る念佛講を取りたがり
手拭でつらをぬぐつて無心なり
歩くたび一二兩づつ下駄がへり
百人の內で明け方一人聞き
神々の御かへり濟んで幕が明き
いッち日二ヶ國斗り漕いで居る
大さうな物は女郎の他出なり
いづくの浦でもにくまれる男
おいらだと離別ぞとかへる四つ手駕
どつさりと降ると初雪げびる也
次第に御淋しくもない男見え
かげ膳をすゑてる所へ武田寄せ

うしろの子前へ廻すがもり上手
けちな窓四角に壁をぬり殘し
きつい邪魔そどくのとなりひきたてる
木がらしの時分拵佛は花ざかり
萬ざいの跡で氣のないかまばらひ
嫁が出て發句をみんな歌にする
よの客がきッぱり切れて乳が出る
目をぱち〱でさそひ出す憎いこと
茶一斤だけまゝ母は馳走する
云ひわけをしたが間男おちどなり
寺の門番役德にしきみ賣り
凧の糸のびをしい〱賣つてやり
かるやきを買ひに他宗は通りぬけ
大坂で市の男ををしいこと
尤な事勞咳をごぜは病み
女房に負けるものかとたはけ者
ふとどきな目黒秋出て冬歸り
素一分を持つてそかいやこかアいや
蜜柑籠よりはむさんな四つ手駕
片々が他人で詑に手間がとれ

紅葉狩今は遊女がたぶらかし
忠臣の家老いたつて身が重し
止めてから出口の柳蛇のごとし
女にごふをはたかせる神事也
小刀を持ちづめにして栗を喰ひ
唐やうは一字はなすと讀めぬ也
僧は聞き俗には食へと釋迦をしへ
のうれんをいしやは扇ですくひ上げ
其角が無いとおたすけに出る所
お鼻毛をかぞへて居るが勤なり
切文は宵に歸つたあした書き
けいせいのあいそづかしを船でいひ
年の暮明けてくやしき嫁をとり
三會目呑みものんだり喰ひもくひ
東夷南蠻北狄へかり込まれ
來た當座下女吹がらを手へはたき
土俵からしろうとを呼ぶ急な事
御短氣引ごとにして又いびり
はなれ馬筆でとめたで功名し
北てきに女房は世をばせばめられ

時鳥きいたは後德大寺なり
しろうとの關取芭蕉葉へのせる
さもさうずさもあらんのが賣れ殘り
口びるで嫁かんきんを濟ますなり
貧乏をかくさぬ男源左衞門
あな有りやなしやの身でも戀歌よみ
あんちんは因果なとこへかくされる
母親に舞をまはせる雪のあさ
頼政は嫁の五器までひろひこみ
民のかまどをうるほした御放埒
二度目には月も親仁もすごく成り
三國で氣のそれたのを付けのぼせ
いゝ取組だがふしやうな天氣なり
生醉をいつそけいはくして寐かし
をしいものゝふをひやぞうめんにする
賣れいでもいゝと書三ぬかすつら
うぬぼれをやめれば外に惚て人なし
親分は殘念ながら杖をつき
不風雅な軍吉野でおつぱじめ
惡口はわつちがかぶと女房いひ

ほれて／＼ほれぬいたは淸玄
役がらで氣斗りつよい奥家老
あたい百兩一こくをぬかすなり
あれを呼ぶ氣だなと伯父が星をさし
德向きにかゝり大きな目に出合ひ
交り見世うかといゝのも揚げられず
爪音は嫁ばつくんに秀でたり
素人の女郎代金五兩なり
三角は目出たい藥袋なり
むしのえゝむりに娘に成つて出る
ふだらくの岸打浪を猪牙走り
人相のいゝ大どしま一分なり
鼓より才藏口をたゝくなり
素人が餅屋に成るといそがしい
いゝ日和つくりそんじた仁王出る
けちな客二月餘り寄りつかず
名の下へ二歳の居るは食時分
身で無いものへ骨斗りの傘をかし
おもしろや燈籠化して雪となり
正月もあかるく成ると嫁の禮

ひよく紋目黑邊からはやり出し
朝がへり御用を内へ見せにやり
嫁が出す水はりのけて目をふさぎ
鋏ともいはれずとんだめに出合ひ
丁どよい刻限御幣出して居る
をしいかな息子女房にこびりつき
芝中の穴掘どもをかりあつめ
からッ文斗りぢやと見ちやひんねぢり
五郎丸ふはりとぬいでしがみつき
いびきをかき／＼遣手いゝ往生
月のかげ日向に成つて母苦勞
切落し半疊かぶり雨やどり
たりひづみ金で直した嫁が來る
初會ではとなりの部屋へいつて喰ひ
重忠はあざむかれない男なり
石尊へ信心で行くかしたやつ
三河からきつゝ馴れにし門へ來る
十德の雪打拂ひうちはらひ
舞うて見せるによこしなと天乙女
もの着ぼし客災にあはんとす

巾着と遣手一所に口を明き
瀨戸物やぶく／＼としてあらためる
局の年明き甥や姪にかゝり
十一番目ゑぼし首すでのこと
くれの文口やくそくをはたるなり
若女形實惡を妾つとめ
鼻からけぶを出しながらふいて出し
ころしたもよこせば藪醫よい仕事
花でつき合つて置いたとそ引き出し
一本の木立ち屋敷の名をひろめ
長つぼね腹にたまらぬものを喰ひ
新五郎うはつく筈さきでござり
歌がるた人の丁場を嫁あらし
つな樣といふ文髙尾かゝぬなり
野郎の天狗子供にとりまかれ
ひすべし／＼と源三位に御意
吉原で初めて一のふりてなり
首二つうけ取つて生酔はたち
油壺ぐれんねた奴をあはせてる
中ぬきの中にこま下駄ころんでる

麻たふりの仕損どこのか上草履
まよふまい物かひッしと並んでる
高なわ迄は禪傘の御弟子なり
大黒は五戒の内のひとりなり
小判のはしと中おちをあらき煮る
納豆へ地理にくはしき所化が付き
假に女とあらはれてめしをたき
慾の皮張りさけさうなばゞア出る
盜人の目に花のさく土用干
はひやッてはしごをあがる大一座
娘が付いてもらひてなし百兩
もし旦那々々と四つ手かッちかち
母門で大腹立てゝござるぞよ
德を取るより名を取つたは高尾
明日も來たく成るもの木村よみ
三度目は張良からッ腹で行き
人立をはらつて赤子内へ入れ
人がらをぐつと見下す大三十日
金の有顔がけいせい上手なり
浦島は額でも書いたやうに成り

嫁に花もたすあばたの待女郎
塗りこめた曰く左官はしらぬなり
御ふられあそばすげなよと奥でいひ
臨終をほめ／＼藥禮受け納め
鵜時分迄はわる氣のないをこと
かぞへ日に杓子當りがいゝをんな
出は出たが二條の后立ちのまゝ
それいはぬ事か抱いてゝだアらだら
あまい酢でくはれぬやつははつ鰹
吉田小僧が命日にむすこ行き
まだいきが有るとたいこはつきまとひ
當日の祝儀八月すさまじい
子を捨てるやぶへ息子は金をすて
人よせにぬりたつて居る旅の留守
女房に恥をかゝせるやまひなり
柿の木の下へ氣付を持つてかけ
主人相知らずめかけは色をもち
なんとちゑがとわるい知惠を出し
引導をわすれたやうに和尚いひ
松過のけんくわは碁の相手なり

三人になるはちきさと姑婆々
それは氣の毒と道から醫者かへり
めでたくもなしとかん病あきはてる
梅はよんだが山吹ははぢをかき
あら世帶しかしねざめがわるい也
時々顏をちよびと見るほれたやつ
七文字へらして客を追つかける
二三俵のむとぬけてくはやり風
くらがりをこそり／＼と下女がいろ
中秋の頃大どらを愚息うち
吉原も市の仕込に文をかき
あはれむべし素一分にて雪におひ
いゝ男身の毛もよだつ文が來る
鍵ひねくつて撿校にじり寄り
中將棊覺えて居るが相手なし
そろばんを出して三度目止めにする
鬼子母神などを賣るのはやすいやつ
譽めことばそばにまじ／＼敵やく
寂滅爲樂から賑かなところ
櫻へもやらぬと女房でかしだて

目つぶしに後家百八を持つて居る
よし廣をさして貞盛おちをとり
奥中のよろこびめかけしつをかき
けちなみえ坊八つ山で駕に乗り
又初手の一分を出したふといやつ
生酔にげい子歸つたぶんにする
小間遣ひ二人(ふたり)そろへて三分なり
姑女はねこだと仲人出そこなひ
やぼなもの角兵衛及びくわいらいし
居候いんぐわと子供ぎらひなり
魚店にからまんらしい初がつを
立て詰めて線香花火を書とぼし
ごましほの毛うけへたまる口をしさ
花の留守聟つゝしんで相つとめ
首筋を押へたやうにたばこきり
すごいことばゞアこよひのあるじ也
我意趣を殿にいはせてしらんかほ
みんな見なくし拍子木でおんだされ
目に立つ疵はかまくらの權五郎
金屏風まだあそこだといふ道具

うるしやは外のの丶字は書かぬなり
むりないけんはたましひを入れかへろ
うけ出すがいな父で候母で候
百とると首がないから川を留め
まゝ母のていしゆはどれも少しぬけ
中の町なまけたやうに腰をかけ
若死をしあてた人は小松どの
女人成佛四郎兵衛へいとま乞ひ
小便のならぬを賣るは小間物屋
うすにめす迄は火の中水のそこ
行平の噂はたッた二人(ふたり)なり
さじの柄で妾をのける御大病
引け四ッがなるにけいせいほれ殘り
一分づつおれにわたせとこりたやつ
傘でこも追つかけて行くごくこん意
たうなすの天上をする下戸の内
もりあてた醫者はほどなく痛入り
錢は通用せぬやうな中の町
仁王さまなりに似合はぬおぐし也
手ばなしが川中へ出すいゝむすめ

いも見ざるまに茶代共置いてにげ
關守は二度夜が明けて大さわぎ
ごく無理なだめさしに來る切落し
初鰹玄關をふまぬさんねんさ
けちなやつ九月の十五夜にうせる
大師から觀音迄はうそばなし
わるくふりますとぶらりと角力取
蒸籠が度々におよんでそこがぬけ
中の町立ちはだかつて年始なり
月々に替はる上野の札のつじ
えゝしまいそれつりよこせつりよこせ
きたアないなりでおはぐろ賣りに來る
何といふ氣だか細見おやぢ見る
先(せん)のていしゆがよつて來て恥をかき
うそを書きつくしたおくに月のこと
のちの四ッなるほどけちなつらだわえ
貴公をまつこと久しと二十軒
仕立屋にけだものの有る祭前
春三夏六に娘ひなを出し
ちゞれ髪げびた所へほめられる

土用ぼしみすぼらしいが嫁のよさ
味噌こしで買ふは岡場の袖の梅
またぐらへ秤をはさみ糸をまき
關東べいをなぶらんと公卿出る
百人一首天神様に氣はつかず
どつかどう戸棚へしやがむ一大事
吉原でいッち高いはばゞアなり
客をとらまへる時には一文字
殿様をおなかへ入れてねだるなり
判取へおもたく渡す恥かしさ
有りッたけ着たとは見えぬ中の町
新しい出ばを息子はかんがへる
仲人を眞向きに成つてあそばされ
船に乗る時分正味の高尾なり
朝喧嘩となりの芝居まで邪魔し
酒呑みのきうあくの出る土用干
あの後家は堅いやつぢやと色がふれ
評議まち〳〵さらはれた娘なり
吉野丸どたり〳〵と堀へつき
筆まめな得意にこまるかし本屋
情なき一言嫁はふだんきゝ
天蓋のやうなを和尚ねだられる
馬士の新米どぶへたれて居る
行燈へ針はよしやれと和尚いひ
市二日突出しの出る楊枝見世
息子の手屆く所に金はなし
神道とじゆ道の米は雪とすみ
大黒屋市兵衛ゆだんせぬをとこ
圍はれの母ねんごろに回向され
亂れ矢の中を白齒があッちこち
なかぬやつめはしやば中に借りだらけ
腕おしの地どりのやうな疊さし
俄雨箸も持たない乞食なり
妻戸見て殘つたざくろ喰人なし
まんぞくに産むと親子でをどるなり
たゞの名の女しんざうこはいなり
内に寐た夜を女房にかぞへられ
駿河町飯を三石一斗たき
かぶらずに來る女房は小附食ひ
そら色は禿の目にも青く見え
きついこと男にせずにつれて出る
富士の夢丸綿めすと乳母判じ
玉むしはあぶない役をいひつかり
がた〳〵とするとさんまを焼いて置き
かつ込みそしやう斗り有るまつがをか
雨だれは首を仕舞つて通りぬけ
とゞめをば餘人にさせるさじかげん
眞向にかざし木具屋はへいで居る
三河から暮のきげんを來て直し
やんごとの有るつら斗り賣れ殘り
一箱を息子段々輕くする
いんぎんにいつて尺八ほどこさず
なまぐさくないを酒屋はむすび付け
大風の跡に萬歳かしこまり
嬉しさうに抱へて女房質屋出る
わびことに衣の見えるむづかしさ
切るの突くのとおどかして五兩取る
きついこと病後のなりが道具也
傾城のうでに俗名きりつける
一日は蛇の道になり衣紋坂

あみだへ参る娘錢ほどひかり
御免駕さゝいな用もいためつけ
出格子が立派に出來て山師めき
皿へ手を當てゝ時宜する暑氣見舞
ひとつの利劍抜持つて神樂堂
木に餅のなるほど目黒にてすゝめ
綱わたりすると高尾も玉のこし
御屋敷があるとそへ乳をゆりおこし
牛ざきを外科療治する氣の毒さ
四ッ人を息子いかして遣ふなり
代脈の因果とけふは不出來なり
草市へ目やにだらけな顔で來る
妾が兄事をかしくも鞭をさし
献立へ又ふりかへりこけをふき
娘の顔見せもあたりはづれ也
才藏は草履けんくわの中を出る
引け過の初會なまいき過ぎたやつ
片桐が爲にはちや〱のつぼね也
いッちいゝくせの生酔詩をつくり
さあばあ様御出だとだいこのき

大御無沙汰とえ樽の後へ來る
肩で風は切るが刀ではいかず
わづうかなぞり〱をする恥かしさ
腹斗りかしてりや妾いゝ女
行くもんだなといや素見うそァねェ
くらへそばへてみかどさん〱
品川のげびには面がしやくんでる
鰐口へずづともつてく十五日
淺めらがふざきあがると遣手いひ
どらのかさ秋はどつどと上るなり
ふさつてゝをねばをとつてくんな也
不屆さ聾痲の顔へ論語當て
なんの因果に大名に請け出され
しづゥかなとこで仲條はやるなり
美しい顔をふくらし船に乘り
金持を見くびつて行く鰹賣り
旅籠屋はちつとゝいへばちつと成り
うす雲は當世高尾は古風なり
一聲でわれも〱と顔を出し
素一分は用向きの無い中の町

よこしまな美食などする樽ひろひ
休めもうよしといはれて強く揉み
はらわたを入れかへにするさかな賣
かげまなど居さうな所いろは茶屋
九十九人は親のはらから生れ
ひんの盗みは大黒に目はかけず
朝歸りだん〱母へ火がまはり
時過ぎ時來たりよう〱と來る
ふみけして禮いつて出る雨舎り
傾城をつまらなくしたいゝ男
つれをはぶくは困窮な女郎買
きついせき乘物町へ嫁まがり
ゑぼし大紋でさんまを二つ買ひ
御后を芥の中でさがし出し
何となく悧いは吉原のばゞア
元服の仕着せ松坂こえたなり
疱瘡でびいどろが本當に成り
たれどごが有る迄ころり〱なり
はしり大黒を和向はくやしがり
越前は一生をさな顔うせず

こはい事こたつで餅をつく氣也
脊中にはめつたにすゑぬひとり者
素一分は吟味しぬいた金を出し
我が内の入牢馬鹿げたやうに見え
じやうがこはいと捨てらるゝ正燈寺
戀の世の中持參に先があり
雜煮と書物二百が物は喰ひ
萬歳ににがやせゝらやあざはなし
ふらすこもちよびり〱と青くなり
八月の一つまなこに客はにげ
かきつばた四字と六字の上に置き
むごいこと後家のぺ紙で鼻をかみ
殿樣へあたゝをする國家老
一子出家すれば飛虱ぬけ
意地づくで女房經をなめもせず
正燈寺手をかざしては西を見る
あの暎にてれたと息子くやしがり
あま逆さまな事なれど緣を切り
その外は裘だゝずに高尾ふり
憎い後家傳が口に付いて居る

すねた子のそばに母親あきれて居
三味せんがぱつたりやむとうさん也
禿が先へたばこ盆初會なり
座頭の坊松をさぐつて一分やり
賣物をかんがへて居る唐づくゑ
ぐつとおし出してお針はすひ付ける
ふつていた物を島田は色にもち
おいらんが名代きりゝしやんと寐る
重箱をもたせ餅屋でつもらせる
大あばたこんどもくなし三十四
御夜づめが長いと素見どくをいひ
くらがへを追詰めて行く小間物屋
藪醫者のかげで念佛講を取り
むすこの耳は馬面はかはづなり
ひだるいにまづい物なし破れ傘
素人にや横ぎけのするうたぎ也
とち盃を見付けて下女は隙をとり
御しんぞの出ぎらひ實は是がなし
坐禪〱わんぼうの地に紅葉はいかに
船をしぞ思ふ吉野の御延引

藤を見ながらにわづかな淺海也
きさらぎは寢て卯月には立つて居る
願ひごと有つて四つ手はしづかなり
おやぢよりまづ見限るはたいこ也
新造がしかると禿眞似をする
門禮はよこさぬ奴をねめて行く
おふくろがつッかつて置くなみのどら
後生をやめてやき餅にかゝつてる
定紋であたりをかこふ能い花見
江手へ出てゑぼしをしばしかりにきる
三度笠あれだ〱とゆりおこし
けいせいもあたりはづれの秋が有り
爪音は減じばち音うかされる
後家の内男の聲で鰒をよび
ころび出し糸屋は古いかけもとり
呉服ものつりをしながら賣るもあり
前妻は夾のからがねはんぎやう
あみだを賣つて新造を買ひに行き
てん〱にあそぶ穴ほるいそがしさ
牢へ顏出して持參を母すゝめ

美しい嫁空財布持つて居る
三年過ぎてあま店へ縁につき
大黒はぬすんでばちにならぬもの
大口に八文が賣るなづなかご
のし餅を着物のおしにいゝ仕舞ひ
猩々でからがうたひで呑みにくい
我舟へ船頭留守をさせらるゝ
大そうなうろくずを取る熊野うら
音のせぬどらを此頃和尚うち
大江山出見世の亭主不慮のけが
しりで穴上手に明けて人を入れ
さんげ〳〵借金で參りました
なさるともいはず御手がつきました
引けるのにこくら〳〵と店さらし

どうしなんしたとほたて貝へいれ
小木の花見いたつておもしろい
おれは〳〵と斗りむこ花の山
あゝしはくするのも伊勢屋虫のわざ
まだ御呼出しはないかと藥とり
膳立を崩して椀屋まけぬなり
大丈ぶおめかけ腹にあくまなし
大不了簡ゝて吉をむすこ入れ
石町へ内裏を移す賑かさ
三會目金の減る木を持つて出る
腹の減る婆に息子は飽きが來る
後の月すんでに牢を破るとこ
名は小さいが氣の廣い國家老
猫も杓子も吉原の邪魔をする

運のよさ土手へ來る迄男なり
傾城の筆筒何ぞがありはあり
雁を射た其矢で化鳥射て落し
いゝ天氣續いた後で嫁に成り
まはらねえ奴と女房の櫛を借り
白いさし足袋なぞをはき遣手出る
醫者と見えやうかと和尚初心なり
黒助の一社參りに息子出る
死にさうもないで念佛講をのき
惣銅壺拭きかけて呼ぶ初松魚
江口の太夫方便をいつそつき
あぢきある世の中で後家面白い
女の道のくたびれは尻に出る

追善　玉柳

年ごろ川柳の翁俳諧にふけりて、としく〳〵萬句合の批判に及ぶ、その評語つべし獅々吼に等しと。しかるをこぞの季秋　獅々吼聲をおさめて世を辭す。今年季秋諸連會して、かの翁の追福のために、二もゝちあまりの言の葉をあつむ。されど獅々吼殁してふたゝび判の詞をくはふる人なし。諸連ふるきをおもふあまりに、翁の舊知三人をあげてやうやく批判に及ぶになん。嗚呼三人よるといへども文殊の智惠の借用も出來ず、普賢ぼさつの乘給へる象をめくらのさぐるにひとし、さりとて捨置かんもほ

いなく、諸連獅々吼の餘波をしたひて、終に梓にいのちながらうす。名づけて玉柳といふ。ころは寛政辛亥年九月廿二日菅江序す。

菅江 葉十 評

柳にも雪をれのあるをしい事　石斧
むごい事役提灯で乳をもらひ　玉章

和笛 葉十 評

蝉丸に似た人をよぶ大法事　如雀
やれたつな〱で武藏數珠をすり　芳蝶
玉烟草見せるたんびにゆるくなり　串柿

菅江 和笛 評

御かごからわんといはれるつばた實　露舟
新造を平氣で遣ふかゞみとぎ　五鳥

菅江 評

袱はうり物買ひものは女郎花　如雀
皆ばゞアづれ五六人あみだがさ　柳雨
本郷を梅やしきにておつぶさぎ　夢中
お妾の手がら門外からも見え　百喜
八月二日大雪としちやいひ　文集
寐すごして嫁梅ぼしを顔へあて　洗車
薄氷をみちり〱と伽羅でふみ　門柳
松風を有髪のあまで三年きゝ　玉章
ふせがねに蓋をして置くだん義僧　芳蝶
看病をねめ〱しめる糸さなだ　麥雨
どろぼうさたがうんさりと平井いひ　洗路
やきもち坂であま寺の道を聞き　憙梅
なぜ教へないよとしめしかごを出し　柳雨
御夜づめに梶原が出て大さわぎ　花雪
にくらしいものは女のこんのたび　紀原
生れたとつれるさ中へよびに來る　鐵炮
出來たての顔でおひるを嫁はくひ　豐好
大當り口上首をふるばかり　文集
むごいやつ蛇の骨をかす俄雨　如雀
またもとのさやへ納めるばかてい主　芹丈
たゞもらふばゞアを遣手とはいかに　紀鳥
人にほれべきをぺらぼうぬにほれ　狐聲
たかをくゝり過ぎてきられなんしたよ　文集
いらぬ事持参ふたッつ三つかくし　未學
なま松葉あさつぱらから姑たき　亀遊

くすぐッたがらぬ子を持つばかてい主　夢中
けふは引きわけ見ずとてもしれた事　桝水
船頭をまたせ燈籠のあぶら虫　頭照
そのやうに誰にされたと下女が宿　紀鳥
あつけない遊び子にふし寅におき　川長
廣小路武鑑を見るのにぎやかさ　芹丈
大海で土ほじりするうらゝかさ　和國
借金の穴へ娘をうめるなり　文集
京町へいつてもはりはつよいなり　朱學
つらい事一年おきに嫁ふくれ　和國
ぬかるみへふんごんであるやす火鉢　車道
新造のあげづめむしろやぶつてる　丸水
ひなし貸しうせたでまぐろ買ひはぐり　青蛾
いやはやきのどくがき大將ふられ　芳蝶
もてねェでどうする物か夜具承知　雨譚
くろちりに一針抜きのしらみ也　歸朝
内のものとは合口とたはけもの　青蛾
はづかしさ尻ッぺた中あざだらけ　狹衣

葉十評

笠と下駄おッつかッつの御大祿　丸龍

一曜が六萬石の御高なり　芳蝶
雲のうへだから御門も月日なり　川長
ふじ山がなければはつち坊主なり　鐵炮
人間のたけり勞咳に妙やく　五連
ふきかゝるやね屋柳をむすび上げ　寸魚
まゝッ子にあてがつて置くおしの蝉　龜遊
甲斐の國まで白むくの裾を出し　川長
見手が多いで三月が嫁くらふ　青露
小兵でも坂東一のぼさつなり　如雀
時鳥月をかすつてないて行き　紀原
をしげなく嫁のまくばるかたみわけ　五連
根強いといゝさうな國甲斐駿河　姫小
中入後源氏軍に高尾山　川長
日にやけた御用いせ物語する　洗路
三年立つてから嫁もじまへ也　雨譚
御先まッ白と四つ手で息子かけ　露舟
ほころびを笑ふは內儀ぬふ氣也　芳蝶
初雪やひとりころびと女房よみ　和國
氣のはれた佛事三月十五日　蜃虹
女郎はつけ廻し客はつけのぼせ　鐵炮

稲づまはくもをゑぐつてどつか行き　閑之
傘と下駄及びかつぱもかりてくろ　芳蝶
氣にはかけられたよわける事を云ひ　丸水
回向院ねはんに猫もみえる也　鐵炮
わらでたばねた嫁の居るいゝ天氣　川長
とむらひからやみ付き息子かよひ　丸水
百の字があるでしまひの御歌なり　狭衣
かくれんぼ嫁のするのは大さわぎ　五連
升わなをひるまかけとく中の町　青蛾
亡者のこわいろをきくには水をむけ　玉章
星入りの女房を息子持つ氣なり　石斧
四郎兵衛が昔居た所かなものや　夢中
百兩で綿に包んだいもが來る　如雀
たんだをぬぐひよくきいた／＼　樹水
大きなどらは春の笠秋の下駄　芹丈
しお斗(ます)で下る三日のかみがかり　寫古
笠は上野でかね持は芝にあり　丸水
勘助を女にしたを麞によび　未學
はらい扇子箱見倒しはじめ也　丸水
氣のぬけた物は書闇の四つ手也　狸靈

女房にかみなり門で出ッくはし　露舟
廻り燈籠はおいらだと姿見物　川長
女竹から男竹へうつろいそがしさ　百喜
今戸では人間鬼をかまへ入れ　夢中
浮草よりも質草はよくながれ　川長
宿はづれ猿のせなかですひつける　丸龍

和笛評

詩ではくわん音碁を出せば文殊なり　川長
右左水と艸とで名が高し　和園
九躰そろふと一(ひと)やしき魚鳥留め　洗路
ひッかりと鳥かげのさす雪の下　門柳
めのさめた人が名歌を丸くする　窓梅
さてよくしやべる獵師めだと樂天　雨譚
井戸ばたの櫻でお秋名が高し　潮水
御法から花ちる里で大一座　箕山
御納戸金が吉原へ三度落ち　雨譚
極樂の道のりほどの句もえらみ　丸龍
本庄の蕎麥後に芝の粥を喰ひ　雨譚
嶽ものにひどい直段を其角付け　石斧
名月の御たづねものはうつくしい　如雀

じたらくにどや〳〵にげる都落　歸潮
からかさの内で庄屋は拜見し　百菊
大白月をつらぬいて二度おごり　雨譚
島原は名歌のぱつとしれる所　和國
三會目とんとおやまの如く也　文集
帆柱の木やりを殿ははがゆがり　窓梅
蚊にくはれ〳〵ほたるでよんで居る　歸潮
目出たいとまづ金屛風から仕舞ひ　ロ喜
二條通りを白丁と追人かけ　石斧
關東で下女上方ではけいせい　一ロ
氣の毒さぶさた見舞ひに雨がふり　麥雨
琴と三味せん過不及の病出來　芹丈
中の町扇子遣ひていもの禮　清江
箱入の玉川外の國になし　窓梅
七十九男で二十一女　川長
月のはしりを品川で和尚見る　露舟
じやと蚊の出るのは駒込の六月　春魚
猫におはれたで莊子はうなされる　如雀
うでのある内に櫻の歌を書き　未學
ねずの番がてら美濃では物語り　玉章

狼に衣重忠見あらはし　丸龍
ぬるい茶のやうにはいかぬ關ケ原　雨譚
かはごろもよりるゐのないから衣　川長
ちはやふるかゝさんやほめ〳〵也　ロ喜
陸奥で名をあげて駿河で名をとゞめ　同
當意即妙は木母寺の山號　麥雨
品の月かくれん坊はけちなやつ　柳雨
松のきどくをあらはして一分ゞ　川長
つッついて來たをひかれて禮參り　雨譚
こけィらでもてたと咄す川の中　頭照
親の名の次第に似合ふ三回忌　豐好
一升でいくらだといふけちなもゝ　龜遊
狼へ犬のついてる御殿山　雁古
しまの財布へ三味線をごぜ仕舞ひ　潮水
いやな下女淺間嶺に作るなり　門柳

寬政三辛亥年九月

俳風 柳多留二十四篇 終

催主　芹丈　丸水
補助　文集

誹風 柳多留二十五篇

年々歳々華相似たり。盡きせぬ水の言の葉に、柳の老木枯果てゝ此道既に絶えなんと、時に笛先生なるもの川叟の俳風を慕ひ、是絶えたるを繼ぎ捨れたるを起す聖教に叶ひ、翁の撰評にひとし。社中歳に闇夜に往きて燈に逢へるが如く、歡喜の美議〳〵と耳にみてり。予進んで家名喜多留廿五篇とはなしぬ。

寛政六のとし秋　市中庵主述

御具足へ枝をならさぬ風を入れ　門柿
春雨の御歌吾妻の御土産　玉章
四たび目の勅使は禮に行くの也　文華
秋の田へ白い手の出るおなぐさみ　麥仕
有りがたく出る御白洲は親子連　五連
千金の夜なべはおひさもとで出來　龜遊
下駄の上にたゝん事かたきは笠　雨譚
六十帖も紙の入るものがたり　三交
きれ〳〵によむ面白い歌枕　窓梅
僧正になつて枯木に花がさき　一山
おく様に十も若いので御意に入り　東李
二人に足跡ひとり芥川　丸水
奥の客一かはねてかしこまり　丸龍
一日の雛へは椀の實をあげる　狐聲
短冊でする色事の品のよさ　豐好
傘を貸す家の稲荷で雨がふり　ごまめ
八月の朔日雪と炭が出る　紀原
上方の祭り女のぼくを出し　龜鳥
大一座正風躰がもてるなり　芹丈
免許まで持ツてゝ嫁はねかしもの　かてう
咲くと手のたらぬ太右衛門が中十日　三朝
鹽竈の烟たえ〳〵十二年　芳蝶
花ざかり伊兵衛も一首よんで寐る　歌遊
くつを冠に蔵人は口ごたへ　如雀
一生にめでたき內をはき出され　三丁
此水を呑むなといふが玉に疵　連鳥
東帶の浪人二月下旬出る　湖水

是は〳〵と母の待つおそざくら　和國
しッぽりと和尚のくやみなれた物　孤雲
てきぱきとした雨の降る暑い事　千鳥
二百十文がかさをふきをられ　美德
門の立つまでは風來人で居る　狸聲
三夫婦の內だん〳〵に夜が明ける　吉川
あつちから喰付きさうな松魚也　長故
盗人は虎と熊とで名が高し　香貞
見世をはらせるはばら〳〵扇也　五鳥
猪の逸太樣の御長屋山師聞き　文子
白粉で富士を作つて馬鹿を待ち　紀樂
蝶々がとまりなむさんばうにする　浦舟
丸山でくぜつこはぜがおつぱづれ　珍鳥
折紙が娘へ付くと疵になり　子誠
酒たけなはに及ぶ頃ばゞァ出る　麥雨
大持參でつち其夜にうなされる　五鼠
大どぶをこす玉とりは男也　口喜
看病によく來たッけが解せやした　芋先
樫の棒見ると疝氣がはつて出る　紀鳥
油繪の障子を明けてどくをいひ　一馬

竈拂ちだんだをふむ油松　喜水
むくしれる朝顔に衛士火をしめし　湖舟
あいさびへまッかにすくがきついみそ　僊成
歌も句もはの字どまりは古てには　高麗
櫻の毛せん桃に出しておき　石斧
氣のきかぬ人と山吹おいてにげ　南子
遊び所をあんじてる病み上り　邑市
本性で歸るはげびた花の山　詠歸
だらうといふに嫁いゝえ〳〵　柳雨
其外の月はねうちのしてがなし　扇朝
はだか王らしくおいらん寶れのこり　供德
叱られる度にむす子の年がしれ　麹志
名の高い子供德利や瓶をわり　若竹
小うりをばいたしませぬとさじて居る　百菊
川留にこりて寢覺の蕎麥もくひ　川鳥
ずぶ六の客へ鍬鎌素湯で出し　桂里
江戸の馬田舍芝居でつがもねェ　東鳥
ひッかいたのが名代の申しわけ　東湖
どたばたを見ればかつをと猫と下女　龜水
さばけたをちき勞咳をかたづけろ　不醉

宿下り道をきくうち薬をちぎり　周栗
でェぶ降りすと素一分がこまつて居　湯安
小町の手がら洛中へかけこまれ　鳳頭
淺黃羽二重を振つたで名が高し　丸蔦
折鶴にふいとふくれる嫁の顏　姫小
四月上旬に小判をみそでくひ　里鳥
黑猫と小判を息子ながめてる　未學
ついちまで筋めたつとき大地也　花丈
お妾の十九家老は國をたち　今紀原
敗軍の螢扇の上を飛び　兎舟
西行も野郎の時は北をむき　康丸
電光までは玄德箸を持ち　宜川
扇屋の要東江流を書き　左笠
花の雨寢ずに塗つたをくやしがり　圓之
大風を吹かせに娘やどへ來る　東里
さくらより娘あぶないとしによみ　渡柳
醉つたふりでもいけぬもの大晦日　玉如
豐といふ娃を貰ふとひとりまへ　績席
和尙化して本田となるいすゝ川　顏六
唐からの直段で品がげびる也　澤志

雛の子へ肝を潰してうそをつき　角杏
あはアれな音であさづけ隱居くひ　波朝
蓮の葉の上へ書出し置いて行き　鬼鄉
禿にもたせ居風呂でよんで居る　柏之
虎髭のぶつたくりめと長牢場　守靜
忙しくきれ〴〵によむ下女が文　三柳
あれさもうおよしと油手でたゝき　聽山
大門のとびら片々五百兩　箕山
名はたいをあらはして居る呉服店　春魚
禿にも最中の月をねだられる　莞爾
大學に蟲の印までも書き　和泰
吉原の袖はおこはぢやとめられず　雅情
しゝ茸は下女牡丹から出來るかゑ　散木
有りがたや太郎冠者共傘を持ち　玉章

うッかりとお咄のやむ時鳥
おめでたさ槍も長柄も飛上り
桃の花冠へちるのどやかさ
御たいくつ晝夜霖耳に水の音
おく様のお癇委のとぎやく也
花の翌日御居間を毛虫一つはひ
われた田へ寶の水をぶちまける
惜い事袖とひたひに刄物也
けづりかけ程は殘して立歸り
羽ものか毛ものか覺束なくとよみ
琴箱よりは椀箱が御意に入り
待宵の昔まで只の侍從也
夌へふんごんで茶瓶かけ抜ける
霜月のけはひ十月髮をゆひ
太上天皇ばあ樣のゆづりもの
十兩に目のないやつが點を打ち
春や昔のとてふしから文通
百貝のぬけがらを持ち三をかひ
色直し緋縮を着て來る面白さ
さうこうへ首尾よくまたぎ嫁河原

いかして金を遣ふのは流行醫者
もつとこッちへよせといて月の事
年立歸りうつとしい嫁を見る
初松魚直を聞いて買ふ物でなし
暑い事重ねだんすで蟬が鳴き
數ならぬ身では喰へない初鰹
口上を庵室の戸に張つておき
手も足も出してごわ〳〵禮に來る
穩密を出し仲人へ返事する
もう六たび降うと下戸は精を出し
越後屋のゐびすやきもの源五郎
黑羽二重でかくれると知れぬ所
若い時の遊げい役に立つた子房
色紙の序そうめん買ひにやり
なぜでもの娘かならずとなりあり
めつからぬ樣に生醉送られる
くんひんな文字で反物の書付け
叉貝を捨てゝ行つたと茶屋笑ひ
家のまん中に宿札芝や出し
義貞を娘助成嫁で見る

伊勢屋の花見どこまでも花見也
うんのいゝ嫁ぼた餅へ袖をかけ
雞を一つ頼むと鬪でいひ
下女がおもても白々と花の朝
氣あがりがしたと煮しめの屑で喰ひ
とんだ雨だと瓦師は大さわぎ
あゝらあやしや細見を親仁見る
びッしよりくさりじねんじやう〳〵
ぼた餅を喰つたで首がまはるなり
今夜出た雲があしたはぬたに成り
江戸中に甥をくつてゝ飴をうり
大伊勢屋古せを二本百に付け
道具の大きいをくらべるあやつり
身がるに出たちごみがいたしませう
近くの他人湯を沸かし腰をだき
旅の留守まよけに里の母をよび
化けさうな傘をしぶ〳〵伊勢屋貸し
大坂の金逆桐が一分出來
辻番でしめを引つぱるいゝ天氣
油うり跡で水ばなほどまける

見物左衛門がから〻きに邪魔がられ
五十茶をやつぺしほめる雨舎り
にんじんのはひるは安い鱠也
つぶれねェみかん持つてる五軒の子
門口にらんぐひの有る宿紺屋
酒店でほり物をするらんがしさ
茶をきつし尻をつねる代百銅
親椀をたがへす様に信濃くひ
なぜあづき飯だと兄は聞きたがり
珍客に女房御用の耳に口
ころんだ子泣出すで猫はやる也
是は大へんと素一分雪へたれ
焼餅を下女はちひさく路次でやき
二十八からふんどしが白くなり
江口の遊女持りやうのちゞれ髪
はんじやうな土地箱入の水を呑み
こばんの上へまッすぐに雨は降り
七月六日黄白の鯖が出る
目出度さは月諸共にお使者出る
在五の机に香だのふくさだの

お妾のせうぶ刀は切れるなり
南北に新郁の出来る梯の春
よしのから兵庫へ仲人指をさし
行燈へうつさせて嫁爪を出し
しるよしへかりにいにけり金屏風
嫁の酌ちつと〻いへばちつとつぎ
かんざしをしるしにもらひ物すごし
あんまり沙汰があり過ぎて嫁こまり
嫁のうす芋かけに勝つ十三日
笹の葉へ折々からむみだれ髪
せわしなき寐耳に餅の音をき〻
ぞうげ一本に舟のよるきつい事
髭ををしんでおひはぎに一首よみ
螢飛ぶ下に哀れな扇なり
さア御らんなさいとゐざり玉を出し
腹のひきうすに玉哀だまされる
箱根から見れば大きにくぼいとこ
人がらな四人一座大ぐらひ
おやぢのは猿息子のは猫にあひ
辻番をたらふくにする妾が兄

奥行と間口の知れる息子の代
私儀勝手に付きと三代目
いたい事帯と袴で十二両
賞罰は指と髪とでわかる也
虫の付かぬ内と桐の木をひかせ
藪針醫あだかも蜂のさすごとし
わッちのは蟹牡丹さとはやるやつ
花物をいはず傾城落手する
來る人に嫁鶯や鵯であひ
哀れさは土手に火ばちの遣ひすて
大あせで持参古着屋ほどた〻み
こんにやくも鴨に入れ〻ばひんがよし
秋葉は料る金毘羅は見るばかり
花嫁をしちやの店でふんで見る
傾城は空言女房は小言也
よし原へそば喰ひに行くきつい事
わらぢの儘で川留めの咄也
百椅敷かと見れば隣の役者
いつきかしづかれて柳橋はもて
近松斗りは作者の一本木

蝶々と千鳥を鶴が引きあはせ
只事と見えぬ楽屋の大さわぎ
素見うッかりひよんとなる代三分
合紙にからかさ落手いたし候
蛇のみやげ女房も赤い舌を出し
あばたでも同直段ゆゑうれ殘り
萬卒は得やすくかへ玉を出し
とんだやつ李下へ袋を持參する
八十九日にきすをもう釣に出る
まぎれ扇を遣つてる玄關番
天文をかんがみ女房夜着をとき
神樂堂袴がないとまだはやり
はだしになつて立ちむかふ下手の鞠
素人の普請眞木わりなどが出る
神は歸らせ給ひけり三番叟
八百五町常体の晦日也
しつけそをぬいて禿はどうづかれ
あぶれ盃つんぼうへころんでく
うなぎ屋を止めた咄のおそろしさ
古椀をうつてあんころ餅にする

こんにやく屋を構はれ土こねになる
田の畔の時分はけちなほこら也
大だはけ茶みせで腹をわるくする
女房の留主に出て居る火打箱
目を口にして呼出すの面白さ
芳どのとうにたつたのを後家は買ひ
村の色をおじやるべェかと莚さん
闇はあやなし持參嫁孕むなり
九郎介へ白いゆもじで願ほどき
すたる物なし仲條へごぜがとれ
割海老にたこ婚禮にいゝ肴
おもだゝぬ枕言葉はお手が付き
干すは夏ぬれるは秋の御製也
象の出た翌日饅頭の御拜領
どこか風吹樣で無い名歌也
大名のつぼんで通る花の山
本降になり御不斷に御召かへ
御立身さゑん場こつぱだらけ也
今朝の花見がぬれようといらぬせわ
供奉の官人松の木のわきでぬれ

羽二重の腹を木綿で六月すれ
若死の鶴上下で料るなり
暑いはず花嫁小袖幕を打ち
仲國が行く道すがらさわぐ音
初めの姿引かへて禮參り
色事の願辨天へ座頭かけ
大相な庭籠さくらを植ゑて置き
お高い御用を女郎にたのまれる
外の木に泊まる鶯げびるなり
見しや夫れともわかぬ間に嫁隱れ
德の有る本道は苗字がしれず
とくほんの藥禮丸い一分なり
母親は子ゆゑの月夜にもまよひ
京都でも不沙汰の門は横にふり
野がけ道すくもへ銀の首を入れ
席正しからずとまでの安見合
其時分ぐにや雲といふ太夫出來
面白い雪見は扇づかひなり
神木の寐鳥のさわぐおそろしさ
ひとり娘だとかへつて犬が言ひ

すもゝはやつてきなさッつろと邪推へ
うぶきたひすゞめを二枚ほどたゝみ
大根が出たで盜人かぶじまひ
繼が糴米屋の隣さてこまり
歌がるたかいてとつてはしらすなり
とんだ花火をうれしがるおそろしさ
勘右衞門よしをからして鴉をたて
すまんまをたべさせ候と里へふみ
藪いもの見舞張子の虎をやり
尋ねわび衣服もぼろんじどかはり
軍に負けてめがねをば鼻へかけ
村ぶげん娘が逃げて芝居じやみ
つれ〴〵はいゝがまゐらせ候がきず
ほつ句の人倫ふぐの酒もつて來る
傾城及び百姓も苦勞たり
羽團扇であふぎ馬さまきついもの
君命をそむいて奥で留められる
あつかひが濟んでひなたへ二人出る
二階の窓にやごとなき盜みもの
てうちん屋やすい女郎はしらぬ也

せんべい屋斗り照り降りなしに賣れ
ねだられて戸棚へはひる大坂屋
彌左衞門からえんをきるちやうちん屋
よく茶にも醉はぬものだと持遊び屋
咄聞きたさに築地の餅がうれ
遲松魚短き足で伊勢屋買ひ
醉ださうだしんぜ申せと女房起き
雪見とは馬鹿々々しいと信濃いひ
火付けながらあい谷中でござります
ほれ藥佐渡から出るがいッちきゝ
朝寐ぼうかけ直を言つて起こされる
いたづらをしたか後家学でからげられ
書かぬのを踏臺にする奥道者
藪から棒の出たとこは小ぐるす
鳥籠へ蟹を入れとくめだかうり
せりといふものが出來たとけつの民
そばの客かむ内ふたつ明けられる
千早振ばアさま正五九月來る
御尤様と御殿にこしかわら
地ごくのこう麻おく澤で土用干

跡ぐさらかしの友達親仁入れ
着込はいたて春屋は飯をくひ
ふげん樣ぼんぷへむきのよい濟度
素見物かはせりや見事買ふ氣也
かるゐ澤絹三疋のどらをうち
夾講耳をすぼめて信濃くひ
また折もござりませうとは牛吉
かんじんのうまみは式部書かぬ也
千年も言おりになる放生會
名が折れてから名の高い杜若
法眼の屛風法眼明けて入り
きつとしたかたみ沽券に昆布そへ
するが町一ゑん是を領すなり
咲くや姫俗名おふじさまといひ
目の有ると無い紫衣の出る大法事
膝や手をはたいて翁かへるなり
むさし野で虫をあきなふ繁昌さ
不沙汰言譯もさせた名句也
旅日記八日目に付く杜若
傘さは無言でかはづ經を聞き

追善に柳の枝を手向なり
亂拍子聞えぬほどのつよい降り
萬歳が袖にあまつて嫁はにげ
まだ若いからと遺言きれい也
鎌倉で今道心を母尋ね
甲の座へ大屋のすゐるあづき粥
醉覺え四十五人が申しわけ
是で蚊もなくなりますと其角言ひ
初手は後姿を見せてうり
音羽の瀧と言ひきらず針が出る
鼎が歸り典藥で大笑ひ
三浦より姿海老屋ははねる也
曾我になる前表よひに梶原
芭蕉葉へあらしのかゝる古跡なり
中央にたんざして居る美しさ
嫁の禮巳午の間にやつと出る
歌人の知らぬ夕暮に息子行き
ちぎりくわんの木上下（うへした）の大ふらち
縫物は嫁歌までが上手なり
燒香の初筆上下（かみしも）あたらしい

水姓の字をくり出して孔子付け
顔の蟲嫁おちたかへ〳〵
善をぜんとし振袖で三分也
色惡の跡のやつしは鍛冶屋也
袴着を夷待つてるけちなやつ
かたうどなしにおらんかいまでをかし
美しい尼二三人しやかまゐり
百年後（あと）に泣いた日に魚類也
女房は旦那をもしと付けておき
早い書出し傾城の暮の文
商賣に身を入れてから夜具が出來
金のわらぢも有るだらうと豆腐屋
まッさをな顔踊子の病みあがり
引き物に見あき長興山と出る
身をしる雨がいつか止み後家作り
花かんざしをぬいて出る一ばん手
中の町忌中の札のないばかり
心中であらうと芥川で言ひ
ぬか袋目ロいぎやうに動かせる
鶴翼に備へ師匠の花見也

ふゥわふゎのれんに螢來てじらし
太郎からべらぼうとなり川をこし
朝鮮垣に指をくむむすめ形
まだおまめかとは聞かぬにおどる也
具足のつくろひと歩行く前九年
木馬にて立がけをおふ舂米屋
結ひ直すたぼからとんびからす出る
夜伽のえりへひイやりとへぎ生姜
あら面白からずの雪一分もなし
闇仕合ひ冬も蛙がないて居る
失禮なあいさつはおまへでもいゝ
息子の花見内を出る名のみ也
槍かつぎ連れて家中は使者に出る
向うより來る小てうちんそばや也
たま〳〵の芝居つうじにやたらきゝ
まあうゝといひなせェなと正燈寺
振袖を着たすつぽんに引きかへる
雨持屋六十四文はねのける
よろけはうだいにしておく野掛道
やけふこゑ三味せんひきがまぎらかし

千金の日を桃の木で子はをしみ
奥家老髪の毛の膏藥をつけ
着せかへて母をかしがる足のうら
惡たいの買喰ひ笞をあげてする
夫婦して雪打をするとんだ事
藥鑵西瓜をこきまぜる法事客
一の糸斗り付いてるはらひもの
乳が黑くなつてみのわへちつきよさせ
どッしどし來る足音が三分也
死にはぐれ大日本と書いて見せ
卵ほど嫁も夜なべのひざを出し
さしつこの弓がけをかけて舟をこぎ
ねじめたがつてぺんぺこを習ふやつ
雪の留守こたつで女房まふぐ食ひ
隱德をほどこすで下女いゝくめん
時は得がたし留守の內留守の內
雨戸に合栓あひくろゝやきもち
座敷牢酒落本を貸し叱られる
一躰分じん二三人横に行き
門松にみそをすらせるしはい奴

間男と亭主伊勢物語する
びり出入かと燒酎をついでやり
おくれの髪をかきあげて女醫者
お末から初手見せた手をもう二本
大男白ふんどしでぬるく見え
けつをまくつて尻を抱く切落し
蓮堀に氣を通しやなと池の茶屋
毛ば立つた三冊の秘書かりておき
雁列をみだしてばれる村出合
醉つたやつきんたま迄も肌をぬき
御隱居はのろりと出してなぜ笑ふ
きんたまを産みつるかたをお取立て
はえた年中將姬は尼になり
振袖のほまれは梅に時鳥
笹蟹の振舞膳をすゑて待ち
萬歳びつくり一休に出ッくはし
御稱美になま物の出る紫宸殿
奥様は聞きお妾ははやくくひ
琴の音の止む日七種爪をとり
音のした池へ翁のかげうつり

折鶴に斗り息の胥嫁は出し
ひイやりと子の筆をもぐ金屛風
爪の長いは琴よりも三味せん
先箱で出る助六は割下水
思はずしらず貞室は一句出來
譽められる度持直す日傘
式日の手紙日付けの下へ賀し
櫻からさくらへこける面白さ
お妾は柳左久良をこきつかひ
丈四尺位につもる秋の雪
滿座の中で色文を書いてゐる
お妾の勸めで銀のちろり出來
何杯にしろでは雪に齒が立たず
吹殼を後から拾ふ麗かさ
笑ひ過してほゝづきを嫁無くし
二階口までほゝづきが鳴つて來る
はがき吹散る古市の三會目
車留肩身を廣く嫁あるき
楊枝で一度剃刀で恥かしさ
布團を三つあつたかな奴がやり

釣初めと見え冷麥を擔ぎ込み
月の枕言葉苦勞でありいす
粟餅も嫌いや嫌や二十九日
四丁目もまだちらほらと匂ふなり
切遊び吾妻女郎に京男
小豆は公卿大角豆勇者也
棒の手を見せて和尚は馳走する
ひいきのさたとして團扇は買ひ
夫れ見たかとつて太公盆を出し
子守をばのがすなえゝとちやうはんば
さァ登るべいと頼義御がいぢん
醉を鹽茶でさましたは十四日
山の芋のと大木戸のよつでいひ
草餅のひゞき冠が横たはり
麗かさ垣根のひたし物が出來
大學や撥山日向にそつかへり
十三日うたが長いと叱られる
白妙の中をかすかにふぐの聲
繪に書いて置いてもすんだ簞笥也
二十つきでは不可也と子の曰く

結納が來たと桐の木はづッてる
茶瓶の火かりにかゝるを下戸おさへ
素見物首數を見る不繁昌
丁寧にさかもりをする御膳のり
分地へは從五位の服のやつを出し
母の雙六盤象牙ぬけてゐる
おそろしい十七文字はあたご也
能く有る扇富士でないやつは鶴
草摺のうでじつけんの內へ入れ
きつい事俵が米のちゑを出し
えしれない物を干しとく三丁目
うッかりとたいこ一分ではなをかみ
禿菊糸をきらせるとんだ嬖
少長が死に奧家老耳ふさぎ
打拂ふほどにお內儀夜着の綿
色事に女房燒明礬を入れ
べらぼうも有るものしるこ餅をしひ
伊勢で髮おき高繩では袖どめ
夕立に出るあどけない舟大工
あかんべいさせて目醫者は療治する

手や足でしひられたのは四天王
暑氣見舞丸づけを十いせやくれ
たどくさを下女にうたせる御不勝手
すいくわで歸り女房おこすなり
ちとをしへようかと代る下手將棊
花角力取らうと天狗日待也
氣の毒さ家財ごふんで書いて居る
百鬼夜行をこしらへる雨やどり
お土産に是もなさいと飛車を出し
ふげん樣一たびひちりめんをしめ
泣組へ小便組がけちをつけ
通俗の小便無用鳥居なり
古風なほれやう一心命なり
びりついてわれはわるかれ人よかれ
お祭りがいやさに美濃へ嫁入する
千金のあかりで式部夜なべなり
百のうはゞに駒引のあるおたか
たゝくとばちがあたるよと金屛風
暦見て机をなほす長閑やかさ
美しいうけで國からしばらくッ

錦着る所存で紅葉わけゐ也
伯父樣が常の座敷にして歸り
大樹な竹篩出し候をうり
なんとよごれはしまいがと翁いひ
羽子の子が松へとまると嫁はにげ
はね虫に姿まぶたをすはせてる
こしもとのいたづら狆を富士びたひ
鶏に蔦こたつの上に二三冊
嫁の灸もらしまひかのしまひかの
門松はさしに彌介を荷ふ也
たいまいを黒ちりめんで嫁つゝみ
嫁の指四五本にうどあひしらひ
たばこつぐ手へひイやりと三會目
かべちよろにおれがかりると野掛みち
上田の古着も大坂でひとはれ
十三日さゝツばほどのなますなり
嫁のおもては白々と十三日
駒形をかけて茂兵衛を親仁見る
土器に下戸むすびめをとらへてる
下戸ならぬ男にこまる花のくれ

たてよこに內中步行くいゝ女郎
酒呑みはまんぢうの子にしめられる
門松に薬のこつふをくゝしつけ
疊さしあたまへさびたもめん針
三會目生れかはつた女郎出る
三の切のしゆかう仲光がはじめ
さいもんをかたらッしやいと童子いひ
市すぎの月が遣り手の顏へさし
眞木のぬけがらを買ひ染物をする
時まはりおじぎをしてはしんを切り
馬鹿えといつて笑はせる鸚鵡石
茶わんは承知だからうたは御めんよ
流れのするの雪夜出る柳原
氣のわるさ後家けしからぬ太りやう
上下が一度にわれる鉢かつぎ
のどやかさ空にくちらの聲がする
てんや野にあれど染まらぬ口をしさ
てんやくと局さゝやくおめでたさ
一町は俄にかはるからかさ屋
並んで居ても三分ほど高いなり

七本は素肌でうごく嫁の指
お夜詰桂馬香車は歸るなり
はづかしさ富士の裾野がひろく成り
此ぬしと書いた書籍を娘もち
うら富士の歌をぶだうへ書いて遣り
桐の木は村の娘とおないどし
むごい事よくに目のない所へ遣り
鳴いて行く下で飛魚いせ屋かひ
濁(かつ)の官女椅かじれッたい

市中菴の舊友笛老人の摂紙をあつめ、家內喜多留の秀題をかりて一たちよつの卷に繼ぐ。しかも川翁のれん薬、高名の叢草にして春陽に萌ゆるが如し。予此道くらくお先眞平幾ニ御免ニ、筆を折つて爰に柳のはゞかりをこふ事しかり。

予　誠

誹風柳多留二十五篇　終

誹風 柳多留二十六篇

今や俳風盛んにて柳子之四方になびきなびかせしより、くさ〴〵の姿も此正風流に延臥題にかかはらず、一句言葉廣く森羅萬象貴賤となく、かみはあめのみまで愛する姑、しもは賤が家の賑ひを御詠に知り給ふも皆もるゝ事なく此風雅に止り、翁の樽之數廿四篇に滿ちて雪月花之盞を納めんとし給ふを、猶長かれと諸連子てうしの替りめを和笛老人へすゝめて判を乞ひ、五々の篇よりことしも一つおさへてつぎ著す言を、四方の雅叟の筆を勞せんもむづかしく、頓て墨を費す者は、

星運堂　菅裏

五月雨に下女のじれてる火打箱　藤枝
どさ〴〵と猫の子に湯を浴せ　湯島
せいたやつ歩でかき立て叱られる　紀鳥
本尊の御名を其まゝ額に書き　鳳頭

源氏繪を蓮花へ書くと哀れ也　窓梅
法官に着るむらさきは殊勝也　尾上
御秡川一夜明けると法の聲　里鳥
錢金のあひだに光る彌陀如來　鼠聲
神國は人をだまさぬ琴の音　五連
顔にてりはの色もなくたつた山　尾上
遊女とはあゝまりはでな化身也　同
手もつけず折るはけ高いかきつばた　同
椎が本秋は御法の船も見え　蘇竹
をしい事無常の風になびく也　文集
山では聞いてよみ野ではよんで聞き　蘇竹
勅使までほき〴〵とする孝の道　芹丈
法眼のすゝめ水干急に出來　門柳
ふみつけにした看板を足袋屋出し　柳雨
二十四にたつてくんなとかのえ申　三交
月を仕舞つて天道に見放され　狐聲
女郎の手を引きやッたらに曲り　紀鳥
引出しはすういゝ〴〵と何もなし　不醉
黑犬をきやんといはせて四つ手かけ　桝水
たッた十五雨でおすとあどけなさ　かてう

しほふきや天狗水茶屋にらんでる　儘成
たばこにせうぜと根津の文を出し　鼠聲
あんころを提げて來てもう出るな　窓梅
婆の後ずゐきの中で又はじめ　三交
おめかけの威勢は股で風を切り　鳳頭
三階で姫君肌をぬいで居る　尾上
鳥籠の中に髪切虫が居る　三朝
けふも又留守でござると諸葛亮　完示
しんじつさ櫛巻きで來る藥取り　樂子
一寸した雨を降らせる太神樂　尾上
そりや蛇と火縄でおどす野がけ道　東李
縄の入る盗人でなしかきつばた　尾上
淺草は高し音羽はふとい猿　東鳥
草庵の返事に添へる菊の花　尾上
月に又ござれと柴の戸をたてる　川鳥
けちな啼きござると頼政引きしぼり　鼠聲
おめかけの歌書細長い箱へ入れ　尾上
看病のやうに麻釋迦の箔を置き　龜鳥
他領まで嫁取上げる歌がるた　芹丈
めりやすを黄色に染める練供養　窓梅

黄金も借り貸しのある夏と秋　尾上
張立てのしやうじを破る色直し　門柳
出ぎらひといふ振袖は聟を取り　兜圓
欲の無い形見手跡が貰ひたい　孤雲
不斷着へつめたく戻る御延引　春駒
後はさみ箱がおめかけ不足也　丸龍
吉野から法名の散る暑い事　左笠
御地赤をぐつと茶に見る松葉色　春駒
山々嶽々を晴天十日見せ　門柳
から傘と人が花見の中へ落ち　尾上
御いんきよと聲をからして咄す也　桝水
間違ひあらたふとなの御馬也　鼠聲
本所に二三字京に一字なり　窓梅
禁酒だとおッしやりませと袴腰　門柳
風鈴の短冊讀める暑いこと　尾上
北は金南は絹で橋をかけ　湖水
雲長と宗祇和漢の髭をしみ　芹丈
歌枕だけ興津をば麻ずにたち　偶中
だアれかゞ居やすと歸るかねの禮　紀鳥
雷を這入り稲妻形にぬけ　鳳頭

船頭はへんてつもない松と椎　尾上
たま／＼の上下供に貝杓子　門柳
袖形で晝寐の顔の蠅を追ひ　霞朝
献立にふしを付けては子をねさせ　花丈
劫(こふ)に成つたと夕飯をわすれてる　鼠聲
屋敷中楊國忠が幅をする　尾上
馬狩りと趙高觸れを廻す也　窓梅
螢籠そばに史記だの左傳だの　柳雨
戒名を鳥に聞かせて放す也　窓梅
人程にしぼつて入れる花の琴　尾上
放生會ぬくめた方を鷹は見ず　かてう
三井寺や比良を服紗に嫁直し　鼠聲
燭臺をかりる使に何事だ　三交
暮れかゝる軒端見て居る美しさ　尾上
けんしきは花餝りにはから箪笥　蝨虹
苦肉の計略香ばこに小ゆび也　玉章
びんづら結うたやつかいを二人(ふたり)持ち　窓梅
玉菊へ手向け煩悩菩提なり　鼠聲
罌粟の花一りん取れば二りん散り　尾上
わるくない足どめは盃が出る　鳳頭

紫と鹿の子落合ふ中の町　不醉
桃から梅へ一(ひと)ぱんにくだる也　霞朝
小菊一帖楯にして高楊枝　曙山
駒下駄で生捕を引く中の町　偶中
光陰を座頭の急ぐすばらしさ　窓梅
けちな呉服屋しッかりと物を言ひ　門柳
さよ衣やぶつて五兩わきまへる　同
けふの上客とお針に蕎麥をしひ　桝水
じれッてえよの字廓下にあまる程　兎園
一鹽の鮨くし巻の女房干し　颯鳥
年忘れ年忌と讀んでしかられる　春駒
蟬丸をとつさまといふ座頭の子　三交
櫻から女房に杉の釘を見せ　五烏
長いしけばたり／＼と柿が落ち　梅枝
のッきりがあんじられるとお仲言ひ　春駒
水鐵炮をつるべ打つ暑い事　柳雨
役者の法事石橋や道成寺　如雀
にぎやかさ役者とてうち／＼する　三交
劒菱の大紋を着る俄雨　喜水
まゝ事の世帶崩しも泣別れ　玉章

鳩の豆揚家の傾賣つて居る　狐聲
すわり直されじやうだんだ〳〵　尾上
御寵愛石になつても又わられ　鳳頭
栗の木の榎になつて丹波道　如雀
名は七つあつて女のかなめなし　蘇竹
面色筋をあらゝげて五兩しめ　鳳頭
扨安く賣るなと枕紙にする　窓梅
どこへ出してもはづかしい嫁を取り　春駒
泥へ捧うたせて元の鞘へ入れ　古柳
しん中は世間にたッた二人(ふたり)也　尾上
身じまひ部屋の噂にも金の事　鼠聲
麥わらと赤土たばねせなアくれ　兎園
下女が痛藪から坊主呼んで來る　尾上
口ぐにがさつぱり池の茶屋ではげ　三交
伯もちあんをくじつてしかられる　紀鳥
傘のゑもりのやうにしたに成り　花丈
九牛が一毛もない長局
山伏へよな〳〵見舞ふ大天狗　左笠
藥師さまかはらけもありたこもあり　窓梅
兩方に正の字の附く御神[illegible]　窓梅

神徳は御番組へも入り給ひ　かてう
御扇子と笏で雨天の御挨拶　鳳頭
四角な口を吹き閉ぢて風は凪ぎ　蘇竹
餘の山と違ひ子寶迄も持ち　門柳
他人根生むづかしく書いて出し　叶
蘇ばかま野分けにひだを崩される　里鳥
法眼の請合ひで濟む御結納　文集
朝起きの鼻へ八重櫻か匂ひ　狐聲
どの子が日好き五月雨の名歌出來　隣狸
やつと舞やしたと神子は初ぶたい　竹二
目にはつた鈴で賑ふ神樂堂　川鳥
爪音で丈(たけ)に餘つた智惠を付け　同
御殿にも御寺にもなるよしの丸　三朝
竹寶をよけ〳〵鯖の御使者行き　柳雨
被など着てなまめいた見合也　一徳
二つ三つ啼せば秋の暮近し　叶
白酒を雲の下からかへて來る　一徳
琴を片寄せて隣の子をあやし　鼠聲
灸をすゑるも孝行の一つ也　門柳
年々花の高名は臥龍梅　曙山

ほとゝぎす愚案の所へ珍魚來る　三朝
笈の歌外の鳥だとつゞられず　かてう
紙雛はちやつとで取れぬ所へ落ち　一徳
負うた子にをしへわに口たゝかせる　柳雨
おひねりを投げて貰つて嫁拜み　窓梅
ほか目には蜜より甘い母と見せ　狐聲
公家の乳母けいあんをする黒木賣　里鳥
木ばさみも捨賣りにする中納言　柳雨
翌年の雪にはさくら炭を焚き　狐雲
禰宜の子の小癪てうちで拜む也　松歌
秋の田を二百十日に生酔する　三交
まんぞくに玉子を仕舞ふ大神樂　鳳頭
君が一日のなさけは惣仕舞　鼠聲
松の葉へ早蕨一本書いてやり　かてう
松根(しようこん)に上戸の供は大あくび　川鳥
神國へ寺の言葉は過言なり　柳雨
稲妻をぐだ〳〵にする師の御坊　里家
濱荻を他國の名にて伊勢はよみ　窓梅
御立身紅白棟にひるがへし　尾上
京染にしては五の巻色のよさ　里鳥

おく様は甲乙なしの糸で彈き　尾上
笛の音に琴の調子もくるふ也　偶中
あくる日に蜂の干上る御殘念　桝水
年よれば不精一字で返歌也　窓梅
梅山吹は文と武に手を取らせ　芋洗
釣がねは無銘面には銘があり　かてう
山もわる威勢の客をふり通し　川鳥
琴の身がまへで袴を嫁たゝみ　壽
長刀の流義を殘す白拍子　三交
十五日甲の座で見る大あばた　尾上
過分といふ禮豆腐屋はつに請け　春駒
三年の古疵屏風かさぬ也　窓梅
いびられに行くが女のさかり也　不醉
毛を剃るととんだ大きな物に見え　三朝
下女が部屋大一座とはむごい事　芹丈
旅の留守別條たッた一つあり　不醉
人こそしらね賴政がむすめ也　三交
金と錢てんびんにした御縁日　かてう
雨舍りするに及ばぬありがたさ　尾上
片方は四百餘洲の目をさまし　窓梅

夢の番附孝靈の後に出來　矢正
不二の歌自力で風になびきかね　不酔
通用のよひ御寺號を御建立　桝水
觀音の力で文武勝利を得　昔人
琵琶の夢近江の守に成らせられ　同
重陽はなんにも立てぬ節句也　如雀
白川の名歌能因黑くなり　古柳
二所立てる外山の金屏風　狸塁
立聞で末世へ殘る名歌也　文集
小式部は地利を功者に口ごたへ　雨声
神前できの字を五つよんで聞き　窓梅
ひんのよさどんすの塚へ手を合はせ　鼠声
なまめいた院號のある下屋鋪　長故
大茶の湯申の下刻にやつと濟み　柳雨
同じ刻限に三人淋しがり　隣狸
しのぶずり召し傾城にみだれそめ　門柳
ひんのよい腕づくですむ御右筆　尾上
上品なをどり子の來る鐘供養　同
つかみ取りには傾城はいかぬ也　同
箱根山櫻は茄子の通る頃　霞朝

ぼだいじゆへあつまつて啼く衣蟬　不酔
生國の極樂者を佐久間置き　窓梅
濟度のうちで大日は木綿もの　同
本膳にうまみを付けて國へたち　三交
玉のこしから引きおろす國家老　東李
おくさまの方には入らぬ筆のさや　尾上
商人のよききぬを着る御祭禮　竹苞
御年貢のからで初音のつゞみ出來　かてう
今以て綱へ手を出す御えん日　不酔
百人一首御の字のつく歌で疏り　窓梅
後の月見には野分けの卷を書き　尾上
花の無い春も賑ふ御本坊　窓梅
桃の宵奥は雲井の調子なり　一徳
どこへ行く氣だが二條を迯げは迯げ　尾上
古今武總の建立は九品佛　蘇竹
古近江としらず彈いてるひんのよさ　如雀
奥様と車座に居るおつれ〴〵　尾上
國家老わッちがおもふまゝにせず　川鳥
さよ衣つれ〴〵とした返事也　窓梅
七月の節句は酒が無銘なり　かてう

船頭に紫衣でおぶさる運のよさ　桝水
品(ひん)のよいたすきをかける御ぐし上げ　尾上
白石に先(せん)をとられる朝歸り　同
どこのだへとは失禮な金屛風　春駒
大勢を涼敷かへす見世開き　鳳頭
聲今さらにわづかなる嫁の琴　五連
月やどるらんで花嫁出にくがり　不醉
鴈がねのそばを白魚かけまはり　尾上
數ならぬとはむづかしい時鳥　是閑
喰物の小言も孔子いつて置き　雨譚
氏神は八幡と綱中上げ　同
功なり名とげて鱸やん〱　曙山
譽められるぬすみ柑子がころげ落ち　芋洗
江戸橋で道化を一人(ひとり)づつかゝへ　鳳頭
銘々にほめて引つこむ冬の月　川鳥
月見る月は此月のむづかしさ　窓梅
しやう根草娘をなぶるうらゝかさ　志夕
中の町そとはだかりはいゝ女郎　窓梅
からし味噌嫁のほめたが氣に當り　一德
たづねにくいのは小督より楊貴妃　三交

まゝ事のやうなで賣れる南禪寺　隣狸
むづかしさ精進をして緣を切り　尾上
投出した六位のそばに大びしやく　柳雨
うたうたひ顏をしかめる禿菊　志夕
隅田川是から聟の道はなし　不醉
船番所越すうち藝子汗をふき　尾上
不孝の罪で駟引く天の網　蘇竹
面白くない箸紙を女房くれ　文集
萬歲をならんで見なに姉こまり　窓梅
さアまけてくんなと櫛にほれて居る　東李
河東ぶし杖にすがつて隱居開き　不醉
未(ひつじ)さとあらそふ女房ふけて見え　かてう
てェ〱をしたらやらうに禿じれ　松歌
駒下駄で酒池肉林の中へ來る　不醉
目藥の看板眉は入らぬ事　雨譚
もうくける斗りとさがすたばこ入れ　鳳頭
又帶をかせかと河岸の姉女郎　一德
袂からちろりを出してくらはされ　鳳頭
足の木像足袋屋は持つて居る　柳雨
目がさめてあぢきなく喰ふ栗の飯　鼠際

はらみ句で點とりに來る下女の宿　如雀
ひそ〳〵と歎息をする出合茶屋　窓梅
色じやうがかげさりとてはおしい（をしい？）の事　文集
松竹で千里も祝す寅の月　三交
狂言にわつと冠の緒がゆるみ　偶中
御えらみの枝折にもなる紅葉也　蜃虹
歌によむ時はやさしい大江山　曙山
島がくれ行くほど曇り御見合せ　春駒
他人へは鉤としらぬが佛也　桝水
名の高さ五色にもれた唐衣　雨譚
どつ〳〵と笑つて雜煮二膳出し　桝水
賑やかな事老筆の鐵ものび　蘇竹
去りにくいわけは櫻の返歌也　一德
疊のうへの摘草は露茗荷　窓梅
結構な御天氣に娘鐘に出る　春駒
新藏を丸綿で出る嫁の雛　五蓮
御居間迄出る植木屋の歳暮也　尾上
山櫻しばられるのは手がら也　同
若草を白魚の喰ふうらゝかさ　蘇竹
十四日土藏のを出すいゝくらし　尾上

夫婦とげんじ三日目に客に來る　尾上
たいまいで御庭の雪の寸をとり　里泉
闇が敷春は來にけり豆をまき　柳水
すつぽんと鷺で赤子は喰ひはじめ　狐嶂
七寶莊嚴したのを妾さし　雨譚
塵引に弓矢たばさむいそがしさ　三交
法眼の世話であいたい替り出來　鳳頭
鶉聞き〳〵手あぶりをこしらへる　東李
賴豪の外は供物をかじる也　春駒
生醉の突當るたび花がちり　鳳頭
ひからびた餅を萬歳內で喰ひ　尾上
奥方に異名を付ける切落し　五蓮
かんばつた諷御子孫も繁昌　雨譚
ねからよめませぬとこてとほじり出し　紀島
不二の雪あてに川越し一分かり　蘇竹
雪見には馬鹿と氣のつく所まで　錦島
かんなくず蛙と同氣相もとめ　文集
高うは御座りますと出る鳥と魚　三交
ぬかるみへ娘を入れて螢にげ　不醉
逃げながら高まんをいふ一のもり　東員

黒木賣呼ぶとやんわりふり返り　錦鳥
三年でいろはを上げる本望さ　如雀
庭の面はまだかわかぬに粘やのり　曙山
綱が居た跡へ蠟燭取りひろげ　雨譚
提灯におよばぬと仲國は出る　鳳頭
おじいにちッとかしなよと十五日　紀鳥
印傳を明けて橘二分で買ひ　鳳頭
一(いつ)けん勝負丼をつきこぼし　曙山
七種(くさ)に伊勢屋もとぼしかけを取り　蘇竹
乳を貰ふ内栗虫を抱いて居る　東長
手を出して足をいたゞいたは子房　紀鳥
幕の文てえげえあかんべいをされ　鼠聲
座頭の坊足袋屋の前でけつまづき　同
三會目隣あるきをせずに來る　尾上
ごみかしやせうと紙屋へ鮒屋いひ　窓梅
呉服屋で反古帳を出す俄雨　鳳頭
寒が入りんしたとさ三文もなし　鼠聲
眞白な耳づくをよけ四つ手かけ　鳳頭
人だかり角木爪の障子也　雨譚
雪で見る書籍へ落つる水ッぱな　芋洗

五雨とる時は鼻毛をぐつとぬき　拼水
燒つぎ屋しかられ物の問屋也　五蝶
いゝ年で出合ひに通ふ尉と姥　窓梅
つみ草のはしりが來ると松がとれ　紀鳥
主人相しらずうろつく松の内　歌遊
三會目さつまに佐渡をあひしらひ　紀鳥
敷きぞめにはふり込まれたやうに見え　不醉
髭を撫でてる丸山の三會目　紀鳥
珠數袋嫁のけいはくはじめ也　鼠聲
鵜が行いて鷹が又來る間のわるさ　かてう
遊藝を孔明一度用に立て　玉章
孔明は松も通はぬ琴を彈き　四連
席に鞍置いても指のさし人なし　五鳥
切手をわすれ瓦師の河岸を借り　不醉
春太夫ちやう場に成ると嫁は逃げ　湯島
ひんのよい根こぎは千代のためし也　春駒
渡し場の名に斗りいふおだやかさ　尾上
夕ぐれに一首けだかい心まち　同
鷄明(はつめい)に花の枕へたち給ふ　同
未だ二人あるをしつたか二度と來ず　同

たつ時に跡のにごらぬ湖水なり　窓梅
われ勝にあら玉を汲む江戸の春　桝水
住國にない色を織るから衣　尾上
伊勢物語在宿で書いて居る　同
かの所はかうかと筋で隅田川　鳳頭
御延引すぐに雨中の花を題　春駒
年寄りの冷水でない美濃の瀧　同
五月雨の奥海に成り山に成り　尾上
百人で御機嫌をとる御延引　蜃虹
師は寒く弟子は涼しい名句也　尾上
鶴とにいふ字も舞つて居るのどやかさ　春駒
我としへ四字足したのが名句也　柳雨
をどり子にはまり切つたも一首入れ　尾上
美しいすつとの皮を御寵愛　鼠聲
よい花を見ながら水をくんで居る　尾上
きゞすのあさる所から御ひろひ　同
快晴さ筑波のふもと都鳥　門柳
牡丹花も程よくしめる二度の雨　尾上
彈き初めに嫁梅が枝はきつい事　柳雨
下げ髪へ薄のからむ芥川　鳳頭

琴の上毛虫が落ちてしばし止み　尾上
のどやかさ鍋がとれると釜が明き　同
御退出觸れに鞠場の羽子がやみ　かてう
始皇帝今朝の地震をおもひ出し　柳雨
孝行は雪と氷で名が高し　同
朝起をしては見に行く八重櫻　五連
きのふの姿引かへて御慶也　鼠聲
無拍子な蕎御笑ひ草に成り　不醉
嫁の來た春萬歳にきつい入り　鼠聲
琴の音にひらりとおりる文使　尾上
雨風で須磨の出船は手間がとれ　窓梅
長うたへ妾枝折をはさむ也　鼠聲
春の式法事おはり嫁の禮　尾上
上下に楊貴妃のある眞ッ盛り　同
嫁の禮おはるみじかに成つて出る　窓梅
男の中の豆入りが幅をする　尾上
うしよをひけなどと葵の上の供　雨譚
禮帳に去年とやいはん硯箱　窓梅
棊が仕舞ふと杣はつんのめり　春駒
雪打に口をすくする花の主　尾上

らにしほになんぞと地下の歌學振り　晝虹
蒲燒のすじ迄息子穴を言ひ　三朝
太右衛門は獅子太郎兵衛は牛を飼ひ　同
夕べから見えぬ茶わんに蕣あり　芋洗
又まりをつくかと瞽者の弟子はじれ
慈悲な事あいつとあいつ二度に出し　尾上
どの子が目好き古市の踊也　隣狸
筆に手は付けず墨をば賣る所　尾上
ばひ〳〵儒者もゆるすなと始皇下知　雨譚
里歸りぢゞイばゞアをまづ咄し　狐聲
嫁の供けちな小間物屋ほど持ち　窓梅
水雜炊といふ腹へ異見也　鼠聲
猫がはらんで一家中まゆに皺　尾上
三分ぐらゐは不斷ありさうなてい　同
どらでない四つ手麥わら細工つけ　鳳頭
本性を違へずいッちいゝへさし　窓梅
さう御座らうと存じたと飛車を逃げ　柳雨
すみ〴〵で大工をそしる疊さし　芋洗
買ひぞめは輪飾りのある四つ手也　鼠聲
卒都婆下りませイ出ませイと六位　雨譚

ひつぶの雪見鰒汁をくつて出る　尾上
生醉を蘖子にたのみ寐かし付け　同
古今の雜誰ぬり害で小だたみ　儘成
一寸した船中をする茅場町　尾上
骨ぶとな源氏荷なひで水を汲み　偶中
姫はじめ萬歳時分はづれ也　かてう
名のしれぬ花で伊兵衛は呼出され　松歌
花のまくそつと覗いて叱られる　儘成
千金の色の見えない不自由さ　鼠聲
船頭は無雅でをしへる都鳥　雨聲
きさらぎのそのもち月に西へ行き　鼠聲
桃林で蛤のなくのどやかさ　春駒
大へいに賣るは玄關の扇子箱　狐聲
から向きなさいと花嫁をすわらせ　五連
孝行は霞と霧におやに逢ひ　鳳頭
生醉の餅の上を毛虫はひ　不醉
山吹を出す頃傘をかつぎ出し　狐聲
暮の嫁二棹二月下旬來る　松歌
あみださまにくいばゞアへ爪はじき　芋洗
みなと川菊の流れるおしい事　五連

かねこの十郎びんぼうらしくなし　狐聲

一字づつ傘屋で賣れるのどやかさ　春駒

かんしんへ鯛のやうな口で賣り　錦鳥

代句だろうと九郎助の額をほめ　同

欲の有たけ聞いてとぶ放し鳥　芋洗

美しいばつかりの嫁二十七　偶中

雪の朝おのれ〳〵　我口

あんどんの柱かくしは茶漬見世　五蝶

才藏の向うへ木藏ならぶ也　狐聲

食に餅嫌ふは雪の料理也　東鳥

いゝ子の振をしてかゝア二分にする　鼠聲

月迫に餅屋は閑居遣ひ也　不醉

嫁茶アかはッしやりませに道を聞き　柳雨

由兵衛を口の酢くなるほど譽める　鼠聲

やれつくな〳〵と火繩ふり廻し　錦鳥

でんぐり返しする傘を伊勢屋かし　鼠聲

天の網問男敷様で押へられ　同

世渡りもさま〴〵鞍をくゞる也　東李

あくぬきを締めたので下女かんづかれ　不醉

役者附嫁どれ見せた〳〵　柳雨

隣へ嫁が来ると聞き病み出し　湖水

其名も月の色人を雨度買ひ　鳳頭

齒はたゝぬはず神詠も岩ほ也　春駒

にくい事金をしゆもくでかき寄せる　尾上

何の事はねえ初會は御儀式　松歌

よしの山これより上の句はきかず　矢正

もうよからうと藪入を母おこし　門柳

あくる日の群集は聞いてきたの也　丸水

ぬひはくや忙しい程しづか也　錦鳥

門徒宗の佛壇を三分で買ひ　狐聲

先生お目がさめたかなと玄德　松歌

忠臣は根づよく申す御諫言　東李

朝々きえる美しい不二の雪　尾上

大太刀をぬきさうにしてよしにする　同

糠ぶくろ二番せんじて母あらひ　柳雨

此糸で綴つて六十帖にする　忘梅

鼻につかへる飯をくふはづかしさ　五鳥

見かけは光りかゞやくがからッぽう　不醉

目にはさやかに見えねども恥かしさ　花丈

玉の輿橋ちらし諍論なり　三朝

順の峯入知る人は花ばかり　蘇竹
花の朝寶永山を下女作り　里鳥
もう五年おそいと達磨首斗り　五蝶
女郎屋へ衣で來るは旦那寺　如雀
鍬だこの手で吹殼ををどらせる　錦鳥
古風なる男ふんどしあごでしめ　三朝
内にない物ではなしと女房いひ　儘成
脈を見る鼎なんとか言ひはいひ　如雀
御意に入る箸臾様も柳ごし　川鳥
出合茶屋勿論すきやかゝり也　狐聲
銘のある石親分の門に置き　玉章
初の字は七十五聲ほどのうち　春駒
餅花を買ひにやらせて飯を喰ひ　尾上
信玄と道鬼相求めた軍師　如雀
片乳房握るが欲の出來はじめ　儘成
郭公聞き／＼二人討ちに行き　鳳頭
ぬけて出る咥を息子は工風する　狐聲
皷にも功の者明智をころし　鳳頭
艶藏人も卽言で落ちをとり　雨聲
汐を汲む邪魔と二色殘す也　窓梅

伽羅佛のあたりで桐の音を尋ね　狐聲
御延引花に一雨あつたやう　桝水
花色をしさうにぬぐ御延引　鳳頭
御ふばこへ根松の這入るうらゝかさ　春駒
萬歳の子に道を聞くかきつばた　三朝
御幕をとると短册へ人だかり　春駒
ひんのよい木のぼりをする花の幕　同
花の宴には早蕨の御重詰　松歌
櫻煮を重詰めにする花の宵　鳳頭
梅干や干瓜の邪魔其角する　窓梅
人の田へ水を引かせたのは其角　昔人
金屛風ことしはどれと御手あつさ　窓梅
打つ杖の下へはづれる父の慈悲　五連
夏の夜の碁に一手ふけ二手ふけ　尾上
ひらめの千聲より鰹の一聲　芹丈
隅田川母がたづねるからと迯げ　三朝
鳥籠のたかは二羽ぎり跡がたえ　矢正
罪でない虫を花よめころす也　東季
たゝかれて痛くないとて悲しがり　片岡
子を持つてしるとはおそいおもひ付き　昔人

いッちい〻事といまさかなどを出し　尾上
そんならしのび爪でもに嫁こまり　春鶯
白むくのすみ末世迄落ちぬ也　窓梅
南朝は嶺でたばれた武者も出し　昔人
夏と秋利息のつかぬ金をかし　鳳頭
ひんがしの明り吹きけす南風　蘇竹
さく〻らより讀菊娘ねだる也　錦鳥
見たり見せたりで一兩十匁　尾上
蝋は留守かとせんたくに綱は聞き　蘇竹
瓜田よりふらち豆腐へくつが入り　蜃虹
牛の刀で熊坂は料られる　狐磐
あなたは丑の御としかと吉次聞き　松歌
俗な繪合せ歌仙や業之也　松歌
鳥の名も替り息子の氣も替はり　不醉
花曇り貴から桐の梅を見る　柳雨
銀ぎせるのはなでやにを通す也　尾上
い〻息子内の朝顏斗り見る　花丈
すこうな鳳龍鐘の癖なり　蘇竹
千兩の中へ通りをすッとつけ　五連
世なら〱と悟つて耳を洗つてる　東鳥

おゐかけの妹婿子の二本さし　偶中
近付のおへ斷出す俄雨　五鳥
白い手で雁をかゝげる中の町　偶中
人づらを亂して歸る花の雨　五鼠
六月は銘あり五月無銘賣り　門柳
五月は捺へ六月はつぶみ賣り　昔人
青樓のふた片手ではしめられず　不醉
惚藥二貼國府の中へ置き　如雀
灰吹へ一寸越川嫁は乘せ　五鼠
色々と作りつくして横にさし　錦鳥
口は燒いたが桑名へは一番手　丸水
夜や寒く白魚に出る佃島　窓梅
四月朔日（わたぬき）に腸（わた）をぬかせる珍しさ　昔人
金の威光はこわい物緣に付け　中華
書判の請取りを出す伊勢の御師　窓梅
すゝきのそばでてえ〱を家内する　門柳
そつとよと嫁梅漬を賴む也　紀鳥
見通しに居るのに汐干母案じ　錦鳥
おちこちのたつきに猿を連れて出る　窓梅
江の島へ嫁たしなみの鶉蒲團　蜃虹

ちんがらこしい〳〵土用過ぎも干し　芹丈
つゥいつゐあゆみを渡り甕子乘り　尾上
ふる事を采女の宮と木辻町　東鳥
いゝ日和ほど腹のたつ花の留守　東李
駒下駄だらけ連彈きの上りはな　尾上
するゑ賴母敷くない所へ櫻植ゑ　不醉
居續けの髮べつ甲で撫付ける　松歌
燈籠を賣つて息子は損をする　花丈へ
大男二人土俵で貰はれる　狐聲
櫻田のやしきから出るつくし賣　如雀
雛の乘物後棒は乳母がかき　矢正
借金はぬけて外聞わるい春　尾上
朝歸り妹が物をいふ斗り　里家
深林人しらず竹の子を盜み　不肖
紅葉から袖打ちふつて聟歸り　春駒
相の山泣く子が親をすぐす也　五蝶
柏餅椎と松とのあひをこぎ　三朝
盜人を地黃のやうな目に合はせ　一口
花の數なると冬瓜はまだ安し　窓梅
村の嫁蕗や茗荷を掘つて來る　如雀

夢中に成るはず魂茶屋に置き　片岡
人別をめでたくぬけて名が替り　錦鳥
蛇の出這入りに賑ふ六あみだ　かてう
しぶ皮をむいてひらりと猪牙へ乘り　桝水
竹村の伊勢あだしはい所でなし　狐聲
堂守は塔から落ちた大工也　川鳥
生醉の女房寐聲で禮を言ひ　憐至
おどろかれぬるにそろ〳〵客は逃げ　尾上
寐入つたふりでまつてるも古風也　不醉
談義僧すしをつけるは手柄也　窓梅
おしめりがほしいと紺屋世恋を言ひ　片岡
廿日過ぎ素顏亂髮文を書き　玉章
因果な子だと賀の餅を里で喰ひ　錦鳥
重箱を隣へ見せて猫をかり　尾上
湊のごとく船がつく下手講師　中葉
鉢卷にあやまつて居る鰹賣　器水
納豆を春までのばす泉岳寺　窓梅
心中の前夜男のひざがぬれ　蘇竹
穴ばたの腰を卒堵婆へかける也　狐聲
顏を見に四匁五分買つて吸ひ　花丈

畜生にやおとりましたと乳を貰ひ　五鳥
むぐらもち時々上へふみはづし　里鳥
おまんまのおかず定紋割りて出し　同
つれ〴〵のまゝいが栗はゑみわれる　窓梅
釋門はむかし武門のあつた所　三交
おもふ壺へは落させぬ師の御坊　如雀
夜なべ細工のてつぺんは駿河也　五鳥
敷しまですればことわり納受也　里鳥
旅でない歌枕する春の宵　鳳頭
大和の櫻山城で伊勢はほめ　川鳥
御立身なまぐさい風門を吹き　かてう
舞鶴は空色に能い模様也　文集
つきまとふ狐を放す國家老　かてう
山吹と違ひ見事な梅の花　尾上
一御殿稻妻のする花の朝　三交
月の疵直打をしたも名句也　矢正
追々に割込の來る初のひな　五連
御表のおふじは高い顏をする　尾上
糸遊のたつ日は嫁の帽子針　狸疊
間紙が足らず献立引つぺがし　矢正

江の島はうい物といふ旅でなし　鳳頭
花よめは歯にきぬきせて笑ふ也　古豐
看板に日月を出し星をさし　かてう
愛相に嫁は一口なぶられる　儘成
三尺の劍四百の元手なり　狐聲
いけしはい女めだなと毛延壽　尾上
世帯道具が寄合ふと松がとれ　五連
彌生とさつきごたまぜの壇の浦　芋洗
はづかしく丸わたで來る伯父の内　狐聲
いたゞいてのんだ息子がいッちもて　柳雨
はてずるいやつと女房の櫛を借り　錦鳥
雛店へ素見のはずで娘行き　狐聲
狐にばかされ薄をしよつて來る　三交
身體無宿そこなつて夜具が出來　松歌
こたつほど咄しの出來ぬ涼臺　矢正
李下の冠桜の木の蟬袋　春駒
講親のあるのはけちなやかた船　窓梅
老いぬれば土場淨瑠璃の茶など汲み　中華
千代の春近く雲井へ登る也　門柳
雛〻有さひくい札は棚へ上げ　松歌

しやちほこは山と谷とに住まぬ也　東李
佛力で他人の馬にも踏まれず　如雀
繁昌さ開きに行かずに繪馬を見る　かてう
御立身魚に帆かけて乘つ付ける　里鳥
千両で染め萬年へ參るなり　東李
紫で源氏を包むいゝ涼み　錦鳥
目が覺めて見れば座敷に琴斗り　里家
丸いあたまがふたつある秋の暮　蓮雪
西海の波にたゞよふ香包　片岡
りんとうの會席書へ札が落ち　湖水
貧學の燈りにならぬ春の雪　器水
甲の座に居るぬけがけの手習子　錦鳥
奢紙を細工はじめに嫁こさへ　矢正
姑が出ると手のちゞむ歌がるた　一徳
まだおたのしみだと杖で呼戻し　矢正
一日は鹿相六日はしつて付け　榮桂
遠く遊ばずで伯父から所望され　矢正
遊山湯に行くは持つたが病也　片岡
仲麿はもろこし團子にて月見　孤雲
鶯の案内でひよ鳥をこえ給ひ　芋洗

三會目ふした恩札を呈す也　矢正
神慮に叶ふ飯をくふ伊勢屋也　虎同
旦那は正阿彌供は七厘あみ　美徳
盗人を捕らへ母親聲を下げ　錦鳥
伯にくるむと團子が餅に成り　如雀
景清をつかまへに出る十七夜　孤雲
するめ膳をきらひ息子は買喰し　竹苞
暑い事釣瓶ひとつに人だかり　里家
そりや頭巻だと傘を押ッ付ける　東鳥
瓜田へ沓を入れに來る留守見舞ひ　山々
伊勢の留守床やみにする不屆さ　三交
すつぽんの名は飛込んだ時に付け　儘成
獵かけは藻の柄杓で水をかけ　同
乳母が尻ほゝばりかねる枕蚓　東鳥
俄雨取りまけえェといふ身也　片岡
御婚禮おつしと言つて呵られる　孤雲
品川へはまり衣の楯がきれ　三交
長半坂だにちやう斗り二つ出る　曙山
七月下旬あァでおすかゥでおす　芦舟
ひまな見世爰にも四十騎の軍　曙山

喰つきのおかうべにやとる通ふ神　かてう
沐浴をして蘇生する暑い事　孤雲
御年貢につまり下駄やと寺へ賣り　松歌
貧僧を夢に見下女はかつがれる　東鳥
物置きの錠はぬかみそだらけ也　川鳥
名代は禿にすこし毛がはえる　儘成
腰よりはおれが立たぬと下女が宿　姫小
桐の木を切る頃娘ずゐが明き　喜水
香を疵にして店賃が百安し　矢正
秋一は天上はれた御出合　孤雲
若松染の綿入れで禮の供　鼠聲
かみなりの内で買つてる子の太鼓　狐聲
禿の力ものゝふを引きとめる　里蝶
小判のはしを連れて出る中の町　窓梅
だにほどな銀でお家様寺參り　鳳頭
村使ぬれて正月ふれて來る　竹二
つらい事棹をにぎつてこいで居る　三朝
たばこ盆取上げられてつィと立ち　窓梅
ていねいに西瓜をくつて下びる也　鼠聲
柿盗人を呼生ける馬鹿な事　狐聲

あたり見廻はして汁粉へ下戸這入り　一徳
不二みやげ古はあつたりなかつたり　鼠童
酢とこんにやくは紅葉から歸る也　窓梅
おぼろ月壁へ立てかけ下女はぬり　蘇竹
お袋が出て神さびる神樂堂　春駒
眞わたで首を包まれるはづかしさ　不酔
めかけのは干しぶえのする土用干　鳳頭
俄雨子のある嫁と引合はせ　川鳥
桐に巣が出來て御家中あんど也　不酔
歌人は居ながら一城持ちこたへ　尾上
桃の花見イ〳〵張飛引つかける　古柳
我夜具へ女郎を寐かすきつい事　狸聲
猫もあり狸もあるで嫁が來ず　曇虹
吸口をぬくやうにして嫁は出し　竹荷
山形が組子花かんざしで出る　如雀
萬字屋は草分けらしい家名也　狐聲
いさかひをしイ〳〵碁打中が能し　樹水
三番叟共をならべて高砂や　曇虹
鹿の晝寐を埋むほど八重が散り　松歌
けちな呉服屋勝手から茶を運び　窓梅

御立身目出たくへりし虫の際　不酔
五月やみあやめは本のさぐり題　春駒
すき通るから召したまふ緋の袴　五連
お妾はいづれの緒よりだかしらす　窓梅
瑠璃の櫻も咲きさうな所也　尾上
俄雨女房は梨子の花を出し　狸聲

誹風　柳多留第二十六篇　終

誹風 柳多留二十七篇

夫鷄旦に朝へ翁參りて歌をうたひ笛を吹を國柄奏と云ふ。こや裏の上下をやわらぐるの節會にや、爰に叟あり和笛子と呼ぶ。よく歌のはしなる前句に高判の一の人を定め、二三よりすへ大尾迄の位有る人のこゝろをやはらぐる古列による者ならし。ことしも年の始よりの點句をつゞめて廿七篇の册となす言を奏す。

覚政九之暮に灘、十の春櫻木に花を咲す。

仕立屋のでつち紫丸の伴を喰ひ　錦鳥
花咲かせばてァはつらかにくい也
鬼灯の香さと禿尻をかくし　孤舟
景物にすると四つ目を買つて居る　柳雨
薬研堀から來た乳母のじだらくさ　姫小
柄壺もあるに錫壺御寵愛　一雀
境内の櫻に息子用はなし　かてう
たいこ持算のぞげんで二分儲け　有峨

梅の花折つてかゝへを抑られる　二朝
つれ/\に有るは孔の無い大根也　寒梅
身ぶろには花のこぼるゝ福牛　蘇竹
結構な春と藤番に嫁はのべ　木印
我家の客梅で食ふ里がへり　埋草
高つきで首斗見える母のはた　川鳥
時鳥一ぼん槍をうつて來る　春駒
段かつら空を見い/\突當り　窓梅
晝よりは夜見た不二へ神酒を上げ　錦鳥
ひんのよい世渡り雀の實を拾ひ　三交
山門へ登つた汗を帆で拭ひ　川鳥
晝啼くと時鳥かおの寺ぬ所　窓梅
まんぢうは鍋で茶飯は鍋で喰ひ　三交
御殿山銀の扇に帆がうつり　錦鳥
海棠とさくら詩歌の花見也　鳳頭
金屏風ぬし有る所をしらぬ也　錦鳥
づぶぬれに成つてげん氣な時鳥　儘成
百へ入れたのは藪きりなどでなし　柳雨
家根船のむく鐘木馬しらぬ操り　矢丘
十七で稲をはらませ名を殘し　かてう

草臥れた方から礙笑ひ出し　錦鳥
袖の上から取つたのは怖くなし　春駒
紐引のたらぬは嫁の手がら也　窓梅
花盛り旅立をするさらし賣　名華
金杉の寅で息子は啌を吹き　東鳥
太平の陣屋の上をほとゝぎす　鳳頭
鶯のこゑに子の日の手がゆるみ　芋洗
能く咲いた根本で銀のけむり立　稲里
折つたのは三河しよつたは芥川　春駒
まな板を打つ逵達摩琴を聞き　鳳頭
御延引えいやらやつと日がくれる　柳雨
花のちるたびかはらけはそれる也　卜長
座敷中嫁のはびこる暑い事　かてう
賑やかさたはしで鯉を洗ふ也　春駒
龍宮へ行くとなんぞかぞくれる　三交
眞中にしようと息子大がかり　錦鳥
白魚の火も其頃は物凄し　同
越後から雪のはだへを嫁は見せ　稲里
六べんずりの女郎だけ美しい　春駒
賣切つて日向をかへる櫻草　三交

手拭は帽子を除けて畔を行き　東李
新場から安針町へ鳩はとび　竹二
身にならぬやうだと下戸の辛子味噌　素人
十三と十五の間で菊を背負ひ　喜水
屋敷春寺は廿(はたち)の秋を見せ　竹二
花の敵を棒で打つ本望さ　如雀
土佐坊は月でも頼む程に書き　錦鳥
そりや狼煙だと落ちた物ひろつてく　春駒
まだだめかなどと膏薬箆を拭き　くつわ
人同じからず花火の中を猪牙　姫小
歸りには世帯を仕舞ふ筏乗り　狐聲
すは鎌倉の大事ぞと仲人來る　錦鳥
印籠を見せ／＼下の關をほめ　竹二
初がつを下女は目で見て鼻でかぎ　千慮
夕立に五六俵賣る春米屋　狐聲
客が奴にされさうな江戸の張　狐雲
熊坂の足へとまつてみィんみん　古柳
玉子とぢの鹽辛木曾で喰はせ　湖水
猫にかづける生娘の爪の痕　姫小
彼のらしい奴か付き後家堀の內　柳雨

せき込んで奴の尻へ突當り　片岡
もし降らば芝居にしたと重へ詰め　門柳
しんがりを下戸があつめる花の山　里幟
通俗のつゞり看板を目醫者出し　春駒
雛の菓子五臟六腑のやうに詰め　一鷺
袷をば鰹の爲に縛せられ　松歌
精進のなきこを鉢へ植ゑて置き　木印
火鉢へも白箸をうつ料理茶屋　かてう
ひらめをなめさせて肴屋寄り付かず　三交
鏡へうつる乳貰ひを呼返し　門柳
水牛で若菜胡蝶の中のよさ　松歌
はづかしさ時候にもれた雛を出し　窓梅
鶴と龜とで蒲鉾をこしらへる　門柳
板じめを片袖見せるうらゝかさ　糸柳
門口へ師匠額堂ほどならべ　かてう
來る年も御講に目だつ緣遠さ　鳳頭
奥様はなしと滑石の草履取り　狸叟
神酒の名にいゝは木綿屋七つ梅　里幟
蝶々の生酔なぶるのどやかさ　狐歌
有りがたき臥猫の跡に高枕　かてう

南海と東海瑠璃の左右也　竹二
祭日のあしたはきッとした群集　桝水
よい御手をさいふへ入れる惜しい事　銀杏
神詠にこりて交えき船斗り　かてう
かり物の内へは入れど手がら也　鳳頭
初子の日引きに行くとは面白し　芋洗
國家老五百匁付けて猫を捨て　川鳥
哉どめの名句狐の足をとめ　柳雨
左右には琴眞中はつゞみ也　かてう
御加増へ農具を持つた魚が來る　同
御院號おらもしらぬと花の山　三交
ぬれた桔梗へ山吹の花を出し　春駒
桃青が塚は尻から日があたり　如雀
七十匁不易にならぬ美しさ　蘇竹
菊作り帶に手紙を置きわすれ　川鳥
爪音に藪蚊を拂ひ〳〵聞き　鳳頭
入相をおつもりにする花の山　同
入聟の相談からす猫が聞き　偶中
詩の出來るたびに德利がかるく成り　狐聲
槍先で取る給金は下座見也　窓梅

我戀を人にしられる御祭禮　東李
上つてもいゝと格子でのたまはく　來二
端折る時片足少しづゝ持上げ　鬼蔦
蚊屋のこゑ鰹の邪魔をして通り　窓梅
孝行に乘れば靜な四つ手駕　鳳頭
細見で見ても香車の場所はやり　曙山
帆を上げるやうに首引負に成り　同
錦より篇をよろこぶ國の親　矢正
棒の手を馳走に見せる深大寺　錦鳥
齒に當る肴を遣り手嬉しがり　狐聲
はた持の名に八助はきつい事　矢正
柱から生れたやつが餅を喰ひ　子誠
病上り此通りだと腕まくり　松曉
女房は留守臺所の賑やかさ　鬼蔦
賑やかなすだれをおろす大當り　窓梅
大根の荒事をした事も書き　同
湯氣のたつ顏を鏡へ嫁うつし　來二
春の夜は櫻があるで直が落ちず　錦鳥
年一つ寄つてよろこぶ四十三　一德
逆緣ながらと妹をのぞまれる　木印

目一ぱいお付けなせヱに嫁こまり　儘成
諏訪の湖狐が馬をのせる也　片岡
元よし原で見るやうに嫁裝ひ　曙山
桐の木の目で娘の年がしれ　喜水
流鏑馬の供辨當を萩で喰ひ　木印
三味線は琴より人がたんと迯げ　窓梅
お月さま見通しだよと母異見　同
柄杓おつとり大名に付いて行き　鳳頭
足元を鞠場で見るは下卑ぬ也　孤雲
夜討の無人口取りやめかけ出る　春駒
異見聞く袂に月の仕舞文　湖水
山吹は現金小菊掛けに成り　窓梅
返す書きわすれた義理を伸上り　錦鳥
御建立橋は津島と玉津島　かてう
汐と諸共に御次へばゞア引き　春駒
日本へ唐のむすめが矢の使　鳳頭
御褒美の後は不用な緋の袴　錦鳥
田樂の御庭で出來るのどやかさ　三枝
人和にしかずと興風一首よみ　孤雲
夫婦別有り牛を牽き機を織り　松歌

御好の人には風雅な四季三　如雀
御小僧と雛とくらべる奥御殿　川鳥
たばこぼん蹄へ出魂をかけさせろ　かてう
孝行の徳は竹までに名が高し　川鳥
白たみにおどろき千鳥音を戻し　かてう
押賣の佛比丘尼が二人出來　雨聲
呼展す御番つよらにたから箔　柳雨
五分ほどもやッとよごれる嫁の箸　信成
歌がるた嫁取つたのに下女さがし　糸柳
もつれ糸嫁へわたして目をこすり　竹二
腹帯を地藏の御月番にしめ　三枝
鍍箔屋廻しへ人が寄りたかり　錦鳥
源左衛門酒だと銚子貰ふ所　窓梅
寐所の相談をして餅を置き　千慮
喜三太は内へ呼込む猿廻し　喜水
切餅を宗旨違ひの櫛へ詰め　狐聲
越後から羽根のはえてる獅子が出る　片岡
穴かしこ御堂一盃尻だらけ　和園
仲人がひらくと花も開く也　錦鳥
梅の歌氣かたむけ聞いて居る　高山

梅の花武道で一番名を上げる　錦鳥
山ざくら都の人に宿をかし　名葉
鐙迄御袖の屆くしをらしさ　川鳥
花の外小倉へ秋の御神詠　古梅
御先祖は手取卓熊能書也　錦鳥
鞭を目出たく二十五人召し　矢正
年號のほまれ寶と大伽藍　春駒
鴟よりも化鳥の多い吉田町　ふくべ
一睡のうちに髪ゆひ江戸へ着き　狐聲
ぬき足で折りに行くのは寐入花　片岡
麥ばたけ夕べころんだ所迄　鬼蔦
山伏のあたまへ相模灸をする　喜水
それさまァでかく御座ると輕井澤　ふくべ
大日は眞岡普賢は緋縮緬　如雀
象は獣店からとしつたふり　狸壘
にくい事鶏のそら音をはかる也　錦鳥
三味線が有るで近所に三筋町　里織
賓ぶね鋸の刃の帆を上げる　鳳頭
肴屋に鯛より目だつ二三本　川鳥
師匠への識者礼をしよはせられ　姫小

蕎麥好と見えて藪から坊主出る　蘇竹
礒草の蠟石となる暑い事　連雅
桐の木を外法に見せる御不勝手　喜水
驅ける内斗りは揚るけちな凧　窓梅
若衆から野郎の錢を師匠取り　柳雨
來ぬ人は花と風との間に見え　里鳥
鶴羽も魚鱗も今は臺にのせ　門柳
桐の實のやッたら出來るおめでたさ　鮮至
柏木と蓮生妾大手から　里鳥
見臺をのけお枕をさせ申し　門柳
上品な符帳を付ける花の山　初春
紫を着てから内で年を取り　紀鳥
東帶へちひさく建てる金屛風　狸皐
御晝休で居續けをほつ立てる　孤雲
むらさきの暖簾をかける御祭禮　三朝
十五夜にふくべを切つて大さわぎ　如雀
桐の木へ妾は爪がたゝぬ也　三交
一日は淸涼殿のむすめ守護　無太郎
ゆびへ紙卷くは保養の琴の爪　狸皐
望まれてのばした爪はひんがよし　春駒

花嫁ははたらく事にことを缺き　曙山
しやんと着かへて花嫁は内に居る　舩鳥
ほとゝぎす手桶の箍のはねる音　丸龍
山を見て來やとむいてる瓜の皮　春駒
柴垣へつないで笛をひつとゝめ　鳳頭
朝歸り女房は鐘を出た如し　錦鳥
雉子斗り世話のやけない桃太郎　すゞめ
灸てんの蕎色になる金太郎　友呼
きつとした辻番草履買つてはき　柳雨
手のひらへ底豆を出す角兵衛獅子　すゞめ
へうたんや山から里へこいで出る　東鳥
頭熱足寒で四つ手は一分取り　かてう
ちんこへ火はねるといかけおどす也　雨夕
鼻息を考へめかけねだるなり　三交
天地の出合楊貴妃織女なり　鳳頭
花の山石にもたへぬ人だかり　一德
紅白で男女のしれるのがけ道　窓梅
ひッそりと神酒を備へる師匠様　丸龍
羽子のこの二つ三つ出るいゝ飾り　窓梅
筑紫から一度師匠へ御通ひ　三交

坂に押す車の休む御えん日　狐聲
日ざかりの手前の中を[illegible]　竹二
御大名く着なへる所に一構へ　窓梅
松がえの隣へからむ町の春　錦鳥
あら玉に愛敬のある聲者來る　春駒
二こゑときかぬは梅にほとゝぎす　東鳥
八重の櫻は人情の御世話なし　松歌
わた入の十二ひとへを雛は召し　窓梅
ほのなゝの巻きぞへに逢ふ花の留守　春駒
永日の時を期さぬはいむ禮者　かつう
賑やかさ鹽鯖にて目に青葉　窓梅
興もやかましいは寺桐茶欄　喜水
上下の影法師毬をもつて逃げ　かてう
夜ぞふけにけりと下の句嫁仕廻ひ　片岡
今踏んだ雲で三島の雨舎り　芋洗
縮變紙を嫁と娘がまたせとく　柳雨
三會目心あまりて夜が足らず　松歌
芋鼓中へ人間と傘が落ち　三交
日に焼けた嫁ほめられる宇治の里　芋洗
むらさき帽子口紅粉をうばふ也　門柳

若女の金手を握つては言延ばし　雛小
宗所に分地の出來るけちたげく　窓梅
経世帶隣ではもう梅におと　狐聲
事は解けるに女房はまだ解けず　窓梅
御縁日下向に雛を嫁そゝり　竹二
山形は蛙の聲を遠く聞き　矢正
一粒の豆をいつおと風車　風化
のがけの先達火縄をふつて來る　如雀
安立闘かご字磐じやく並べとく　錦鳥
地人のまづき人參の鉛也　如雀
たゝかれる烟管禿はみがいてる　左櫻
あくたもくたも后だのばゞアだの　窓梅
弓と矢の外も戌亥を御守り　松歌
ものゝ具の身幅もふえて御凱陣　川鳥
船玉を住吉丸の中へ置き　鳳頭
神國の徳には孝の數しれず　錦鳥
鏡山通りすがひに寄つた歌　如雀
横笛に鈴虫の舞ふ神樂堂　轡王
平家なも?の名所の人が書き　窓梅
手打が續くと鳩は家根へ逃げ　東鳥

きつい事天ぴッかりの放生會　狸聲
櫻町の院御馳走役は嫁　かてう
氏神も一人はしれた四天王　曙山
振袖へ後見のつく男坂　錦鳥
御局が附き鳩のまたさせ申し　皷音
野邊はみな亂筆になり時鳥　木印
雁つらを亂し杜箱へ嫁入れる　如雀
雛店へ昇殿をするよき買人　狐聲
食ごのみせぬと孝行しれぬ所　柳雨
見出される迄はほつても嫁いはず　錦鳥
瓜田より不埒の出來る麥畠　狐聲
村持参顔迄いつそはたけ也　同
けちな柿だとしほ吹きのまねをする　柳雨
ぼた餅にはうろくの入る十二日　鳳頭
前金に取るはず病氣よこね也　姫小
仕廻部屋うゐてん〳〵の身の咄　志夕
物着星質を置きにく馬鹿な事　かてう
其もと亂れ御局が牛をもち　一徳
あらおめでたやめでたやと仲人賀し　かてう
廣さうな名でせまいのは乳母が池　一徳
明かずの門へ少將は九十九夜　偶中
千代田から移す千歳の御山號　名華
千金を日毎さづかる御神恩　矢正
筆道の外にも願ふちから石　錦鳥
白妙の中へ山鳥おりる也　窓梅
三ケ國金箔のつく梅の花　三朝
兄弟の花で夫婦の名を上げる　雨聲
神木の松風通ふ琴の町　東鳥
はま弓へ鴨居々々と聲をかけ　川鳥
ほとゝぎす口舌の腰を折つて行き　霞朝
御てん山息子の連に人だかり　鳳頭
はい水の陣をはつてる放し龜　湖水
盆栽は女竹男竹の先手後手　志夕
着て見やと母は口から髭がはえ　東鳥
八朔の傾城は季の違つたの　春駒
こわ色が聞きたさきどす嫁は彈き　かてう
糸道にはさみをかりる久しぶり　すゞめ
追込んだ匂ひ袋は蚊やり也　鳳頭
合戰の時は周倉手明き也　錦鳥
首斗りよそ行きで居る俄雨　榮桂

夜ッぴとい紅葉見るだと女房言ひ　僊成
能じよとはいゝ女かとたわけ者　芋洗
どつこいどつこい生捕つた暮の嫁　如雀
引當ては五兩とこたつこしらへる　錦鳥
鮫が橋からこさらつく賣女出る　雨夕
髭なかば新しい顔一寸見せ　志夕
琴よりも足を引くのを暮に呼び　是樂
星の名をふたつ覺えるすゞみ臺　一德
いゝ息子内のおまんま斗りくひ　器水
糸を繰くやうに花嫁餅をくひ　僊成
横の物竪にして嫁琴をやめ　窓梅
にッこりと重い返事の對を切り　爲仁
高砂をうたふは堅い醉ひざまし　錦鳥
燒香は煙をつまむやうに見え　有幸
母樣へまゐる封じめ妾でつけ　川鳥
かき立てゝ隣の嫁を待つて居る　萬仁
安産をしらせながらに紙を借り　偶中
新造も新酒も人のさめ安し　來二
新造になる迄三度名が替り　同
得しれぬ女新道の店へ越し　孤雲

挽割を貰ふ虚無僧わらぢ也　萬仁
四斗樽の水月に二度よく賣れる　糸柳
湯を出して足をいたゞくはとうふや　春駒
田舍間に作るが花の繁昌さ　木印
其ひどさ僧正壺のふたする　如雀
又來ても老若男女二人(ふたり)あり　三交
御こたつを明けて御登城召をかけ　京柳
夜の鳥時の鳥とで名を上げる　窓梅
三日月の光蛙はおそれ入り　有幸
實のならぬ花から歌の種が出來　錦鳥
ぬれ事は雨より外にない女　有幸
雪の松一枝青い名句也　錦鳥
四たび目の風で牡丹の花は散り　萬仁
このしろの配膳をする屋敷守　窓梅
ごぜめいた物さと妾おッこなし　木印
音に聞く鼓を禮者打詠め　喜竹
上下で配るひじきはのしを付け　春町
御持拂で稲妻のする門徒宗　鳳頭
三つ蒲團孝不孝あるぬり枕　東李
毛せんへ陣取をする嫁手から　川鳥

愛相に嫁藪入に一首まけ　かてう
川中で團扇でさます小豆粥　川鳥
繼母の讒言銚子の月見也　名葉
十二文串髮へさす初卯の日　門柳
惡方(あくがた)の出しさうな見世切りもぐさ　霞朝
こんどから一人で來なの面白さ　かてう
木か枝か葉かさぼてんはしれぬ也　丸龍
杉の葉の中からせなァよろけ出る　隣松
下卑た風鈴ゆげの立つ上で鳴り　蘇竹
德向の女房あたまを筆でかき　川鳥
髮ゆひは年の寄るほど締りかね　窓梅
しのぶともいふべき所に娟の足　蓮雪
佛御前はけごろかとむごいやつ　狸聲
氣のつよい女髮ゆひ床で聞き　有俄
唐櫛にひらめの殘る煮賣みせ　鞠志
おきやァがれ馴染んで見れば泣上戸　花丈
みんな鈴ふり立てゝ見る神樂堂　如雀
僧正を送り溜め小便をする　姫小
ふとしきは豐島に立てる宮柱　名葉
名代は袖から先へすわるなり　ふくべ

六角な火を兩方へとぼす也　虎周
科の次第を言立てゝふつり切り　如雀
年一つ甕子四五年かゝる也　丸水
逢ふ事の絶えて難儀な坊主持ち　片岡
島臺を女房に脊負はせ笛を吹き　矢正
耳は馬つらは蛙ご母こまり　川鳥
片身こそ今は仇なれ安鰹　三交
字餘りの鰹は伊勢屋喰はぬ也　狸聲
はしり大黑を布袋はくやしがり　川鳥
つら／＼おもんみれば閨ふのも損　三交
暮らしよく成つたは安いほとゝぎす　如雀
矢をひろつては木枕へ立てゝ出し　三交
行當りばつたりといふ下手の鞠　姫小
補伏せのあたまで這入る市二日　無太郎
廿二三の子の尻も母ぬぐひ　如雀
豐後ぶし湯屋で語るはきつい事　榮桂
夜着をとん出し股引を語る也　三交
病上りある夜女房にしかられる　丸水
鍋の數かぶつて顏に火がもえる　姫小
嘸御草臥と殿樣遠廻し　かてう

春三は花夏六には質を上げる　辨八
客にしられぬは五町の雪明り　丸水
賑やかな三夕檢義月見也　窓梅
二分ありやなしやと地下の隅田川　ふくべ
松の木の化けたを詠めでたがり　窓梅
年禮に禿は腕がぬけるやう　錦鳥
けいせいの涙で内のくらが漏り　器水
春の日を日當三圍待合はせ　矢正
實婿出家侍諸あきんど　美徳
よくどしいやつが福茶に痲付けェず　和谷
色白なやつと連れだつ願解き　矢正
當分は浪人の多いはねつるべ　野暮
鉢うゑの松の木を出すいたい事　糸柳
なみ〳〵と無筆の入れる硯水　亭々
村の弟子げッそりとへる拔參り　松歌
暦をも尻から明ける忙しさ　儘成
功成り名とげて櫻ひんぬかれ　曙山
撫牛の夢は歎きぞめ苦勞也　三朝
掘れば竹埋めようとすりや釜が出る　柳雨
もみぢにも松の位は二本ぎり　三交

もみぢからむすこと智の中は絶え　窓梅
いゝ保養片袖留めるのがけ道　松歌
中ぬきはふられた客がはいて行き　糸柳
鳳凰も蓙へ下りて箸を取り　矢正
ぼた餅の相談もちをつく時分　狐聲
雪ふり風聞おもひ出すどらが事　和園
柿の木の賣買丸い金でする　隣狸
下戸の禮水つた芋をぐつとぬき　柳雨
腹とあたまの頭ぬけなは賓術　芋洗
逆桐をやるのは母のはかり事　窓梅
通言はおやぢの耳に逆ふ也　曙山
暮の嫁かけ取斗りほめて行き　器水
かうゑきをせぬ市のたつ御立身　窓梅
茶斗りは二把にたばれた物語　曙山
元日の禮眠くない人が出る　一徳
書人よりよみ人のすごい時鳥　如雀
八つ橋の元祖むらさき衣也　水兒
芳禮と眞綿の間に肉く見え　萬仁
御謡がすむと唇も細字也　竹二
冬の汁一字より二字ひんがよし　柳雨

ひんのよい藝者の並ぶ十二段　志夕
鹽引の中で鼓の市も立ち　矢正
工商の上の座に置く槍と鎌　三交
くだ物でいましめておく沓冠　窓梅
天下太平謠かとめかけきゝ　同
琴の音をおつ片付けて嫁の禮　雨聲
白魚がはねると古歌が一首減り　曙山
雪月花かけたで嫁は負にする　錦鳥
肩衣にぼうしを見せて緣を組み　狐聲
島を折る所で切戸を開いて行き　鳳頭
只も行かれぬが不沙汰の成始め　春駒
糸道のなくなるほどに世帶じみ　すゞめ
四五年の口をはたいて傘を借り　鬼蔦
四年たつても漏を置く不孝者　春駒
ぬれ事の二度目は那智の瀧を受け　銀杏
机より矢立はけちな玄關也　棠桂
さげ籠のふたにして行く肴臺　鳳頭
駒の頭へ手をかけて水ようし　矢正
焼繼ぎの御出人が出來下女不首尾　鬼蔦
擂鉢の鳴るは小まめな一人者　山壽

きすり人の來るをまち下女柏餅　柳雨
うなぎ賣女房をたぶり／＼賣り　稻里
左樣では逆と奥樣おいやがり　窓梅
梅が香を土産にする御祭禮　三枝
神樂から稻妻のする金屛風　左櫻
ひんのいゝ其日暮しは花の幕　窓梅
鋲打の轎にならぶうらゝかさ　鬼蔦
飛梅の愛宕から來る御緣日　埋草
三笠山晒し搗いてる人に聞き　東李
それのいた／＼と嫁の前へ出し　春駒
元服に異見も交ぜてほめる也　錦鳥
竹の子は孝行薬は不孝也　同
大ゆかを明けてまつてる里の雛　窓梅
孝行はかじつたすねをさすつてる　姫小
角物を琴柱に遣ふ村木屋　かてう
がんぢやうな織姫を見る野掛道　如雀
蛤が三升來たと嫁ふくれ　川鳥
とや切らんかくや切らんとつくね芋　來二
のろ／＼としては居られぬ丑の月　かてう
こくしやうになぞとほしがる御留川　喜水

かる燒ほどに戰の見える麗かさ　來二
吉原は重三茂兵衞は丸の内　春駒
たばこぼんから嬉野は見付け出し　鳳頭
しかられる側にしなびた唐の芋　柳雨
大釜の月代近所鳴り渡り　志夕
むじなめらなぞと女房は寄せ付けず　錦鳥
顏の鐘下女を夜鷹にこしらへる　名葉
師匠さまなまこの表替をする　狐聲
薪賣りせなア突合ひせないやつ　如雀
そばがきへおろしを交ぜる輕井澤　木印
伊勢からも大小便の世話をやき　偶中
手入らずのいもを貰つて年を取り　錦鳥
しんぼうを母が見るので罪がらめ　かてう
額頭もあやめ抱くとは露しらず　三交
出見世に居ますにこまる朝歸り　狐聲
ぬか齒太刀とは富士川でいひ始め　鳳頭
草雙紙見料に紙鶴を折り　錦鳥
春の野をせり賣りに出る櫻餅　如雀
夜具の損料で三分が物はあり　狐聲
若衆の施主をしめたのは橋の上　高山

上の句はよしおよみなんしともてる　春[illegible]
籠の中に神様と[illegible]い事　三車
はづかしさ嫁しんの無い帶をしめ　東雨
涼臺みんな立たせて雲逃げ　其虹
孟宗が御袋は齒が丈ぶ也　如雀
ぬき構を取る時二人手をふるひ　信夜
牛の御前様だとかけぬける也　如雀
竹箒立てると御供ばか歸り　東鳥
吉原の外聞になる意地を張り　五連
十團子詠めにならず喰へもせず　雲朝
蓼酢がよからうと浴衣でふいて居る　偶中
名を呼んで置いて行きやれは新しい　正德
船の出るのをうどん屋へ濡れて行き　里鳥
美しいはずあたい三分也　鱗至
氣のわるい名句を千代は鼓屋で言ひ　東水
正燈寺どうだといへばしれた事　猩聲
樹下の納涼團扇賣紙帳賣　柳雨
二度の團子で身代を粉にする　如雀
男の狂亂紅葉の枝をもち　把菊
重箱をまだ女も見ず明けて見る　鬼蔦

夜具の臺誰に見せても長持さ　無太郎
都鳥つゝかけきしに猪牙は行き　鳳頭
はつ旅は灸も支度の數に入り　片岡
うき船で漁火を焚く罪な事　柳雨
行きたけの合はぬを親の嬉しがり　虎同
切艾二度の雷句にあぶれたの　松歌
顔淡にして五百兩持參金　龜鳥
子雀をねらふ鼠の恐ろしさ　梅雨
御所出だといつて石垣はやる也　川鳥
月雪花や學ぶが花ぢや學ばれず　里鳥
壁へくつ付いて花嫁はしよる也　春駒
藥持の日延は顔を汚してる　志梅
燒ぼこり拆ときえんをだます也　狐聲
異見いひ盡し母親手を合はせ　門柳
惚くさらかしにして置く内氣者　五連
高祖と頭巾大そうな廻りくら　芹丈
引摺起しませうかと張飛じれ　青好
おばアさんのさと娘は立かける　紀鳥
淺間のぬけた噺かえと諏訪で聞き　雨蘆
山ふたつ雪と月とで唐へしれ　孤雲

はる〴〵大儀と奥様およろこび　松歌
瀬平に咲いて貞女の名を殘し　里織
汐水がたねて業しみが出來　山壽
浮舞へむだに煙草遣ひ詰め　三交
櫻色とは嘘にない厚なことば　春駒
たのもしい矢立の中へ櫻散り　鳳頭
松よりも櫻に近き遠の禮　儘成
高野山むかし隠した歯を納め　喜水
むすんでも〳〵しゆすじれつたい　山壽
妾にでも御出なさいと次郎左衞門　喜水
ばらりッと汐干は人を蒔いた様　竹二
古市で大和廻りへ疵を付け　かてう
針めどを二人前づゝ娘通し　鈴和
高き家に登りて大工餅を投げ　儘成
せい斗りとは母おやのおろか也　同
何事が出來たか通ふ里の母　喜水
美しい鬼が去られた跡へ來る　偶中
いゝ米屋よだれたらして五六疋　東水
伏間添乳に亭主遣はれる　松歌
どこぞへ落ちたらうと鼓屋拾んでる　錦鳥

盆前の拂ひは鼻であひしらひ　知術
もういくつあがると藝者闘合はせ　五連
[illegible]　一徳
廿日過蜆を買つてしかられる　ふくべ
乳母が鬼のろり／＼とかくれんぼ　鵜枝
路地のかゝアを拂分けて油賣り　亭々
[illegible]　千鶴
[illegible]　狐聲
鎌倉の繪にふぐりのない御寺　同
かぶき見ながら人形のおもしろさ　吉川
居すまゐのわるいも女罪に成り　歌連
てゝら一布も集に入りひんがよし　東李

誹風 柳多留二十七篇 終

柳多留二十八篇

幸紅花荷のゝてに申送り候。殘暑之刻彌々其御地御店御はんたのよし賀し候。このかたむや〳〵の闇のさゝはりなく年々風雅行はれ、最上川のぼればくだす笛興の點取に、象潟のうらみこひなき評は、かの蕤の中將のたづね給ひし、あこやの松に木がくれなく候。ことしも道野邊の淸水流るゝ柳樽、櫻木に御のぼせと存候、御かへしに早々御越のほどこねきこそ以上。

扶桑に此道の盛うなるをしらさえと、遠く羽陽の好人よりいふみを其儘廿八冊めの糸口とし、はたかの地の連句を編のむすびとなすことを書肆がいふ

いたゞなる文のりごとをうく
十あまりひとつの年月の最中　雨夕

三月と五月源氏の隣が出來　雨夕
かふたちに咲らず橘返咲き　柳雨

も深くも吉事師樋をめかけらみ　如小
御廣敷かはゆい馬とぞゥろぞろ　桃木
大老女まじなひほどに片はづし　鶴丸
千切小擲にくゝつた青龍刀　狸汁
向うから越すものゝ無い年の坂　菖蕾
をしい武士印籠目貫鍔の緑　玄竜
鳳凰が一日渋に化けて出る　鶴丸
かはいらしいからと唐木屋を手水　雨譚
外にない進物夜具へのしを付け　松獄
癪が痛うよすも物日過の事　狸汁
番附で嫁おはぐろをにえ付かせ　柳雨
嫁のはぎ短しといへど百兩　雨譚
逃げて來た新造前をよく合はせ　幸調
山吹を持つた大津繪暮餘り　孤舟
暮の嫁片足金を繼いで來る　雨々
やうやく冷氣右手に葱あひしらひ　延年
其晩は片ねれに成る機の足　まゝ成
かはらけでこつさに語る櫻艸　鶴水
ほの〴〵に明石も須磨も作り立て　風頭
琴箱の花時分行く下やしき　玉章

あくびのふたを一本づつ公家衆持ち　まゝ成
眞綿で首をつゝまれるはづかしさ　不醉
めかけのは干しぶえのする土用干　鳳頭
けふも又留守でござると諸葛亮　完示
どこへ／＼と猫の子に湯をあびせ　湯島
荒れにぞあれし喰ひつみへ嫁は辭宜　左滿
ぶる／＼物で名を殘す天王寺　春駒
へしに屠蘇預けて下戸はかけ廻り　紀鳥
市に行きむすこ鼠をしよつて來る　青好
てこづるといふ傾城を淺黄買ひ　柳雨
あかるくかへり云譯はくらいたり　尾上
鯉の看板書いて出す向島　丸龍
虛無僧はまゐらせ候ではかどらず　同
逃げたら夫れでいゝわなと內侍とめ　雨譚
團子の物日をとツとこなとしよはせ　春駒
それぢやア吉原の道だ大たはけ　ふくべ
据風呂を垣根ごし呼ぶ組屋敷　雨譚
日出たいと目の出るやうは大違ひ　同
大わらひ道で下の句おもひ出し　桝水
雲をつゝんで十五本文を出し　喜水

仕合せさ足を袋へ入れる也　孤雲
地黄のむ側に大根美しい　一德
やッと麻やしたと剃刀かりて行き　桝水
有こん／＼と地口行燈仕舞ひ　雨譚
白髪の若者粉を掩いて居る　狐聲
取替へて下女は鯨を片身買ひ　矢正
素見にもうとんぜられるつらい事　雨夕
替玉さなぞと持參のおくり膳　梅子
もう娘花見に小豆飯を焚き　歌笑
七つ目の繪でお姿の年がしれ　素調
百へ入れたのは雀にならぬうち　柳雨
山々の眞ッ青になるほとゝぎす　湖水
蹴まりの屏風へうつるいゝ棧敷　春駒
吉野丸吸物が出て船がちり　鳳頭
新宅の柱に冬のしみる音　名華
花嫁の手際秋の田苅る如し　雨夕
持つた嫁けふは藤だの桔梗だの　三交
庖丁をはすに遣はぬ京の夏　鳳頭
蒼朮を焚かぬ日鐘馗立てるなり　同
聾者の恋に松虫の走り也　陣々

新錢座鶴と鳳凰しりくらべ　虹朝
榎でもいけぬと嫁は松で切り　萬仁
夜や寒し衣や薄しにごり酒　虎同
留守番へ飯のありかと水滸傳　春駒
酢はこゝにあるよと夜伽替り合ひ　名葉
窮窟な物見垣根へ窓を付け　三交
鳥追は琴に合はせて彈き步行き　鳳頭
物わすれするなと梅へ御神詠　谷秀
上野から見れば寶の山ふたつ　すゞめ
元日は夢と箒に用はなし　不醉
あどけない名札の見える日本橋　龜水
御祭禮嫁の新客一御殿　かてう
奥家老髮は流行のいさ葉也　龜水
藝者一組米で來るのどやかさ　雨譚
むらさきの鯉は濁らぬ橋の下　不醉
金の字が付くと屛風もかりられる　一德
忙しさ根のない松を二本うゑ　糸柳
多猾な武士をとッちめる國家老　文集
樟腦の匂袋を嫁こさへ　一德
交ぜ肴ほどに並べる御師の狀　交調

春永といふが油斷のはじめ也　名葉
糸道は御藏の間をながれ込み　龜水
さア御時宜〳〵と乳を引放し　芋洗
人のおもて白々と加賀者する　雨譚
ゆかた着て出しなに筆の軸を切り　里笑
御饗應春の日ながくまだ暮れず　春駒
御本坊雛を飾つて見たい所　志夕
晝顏の花は式部が筆にもれ　ふくべ
蛤をつむ所九條あたりなり　孤雲
はづむのは姉うなるのは弟也　春駒
錠前に禿三つ四つ口をまげ　儘成
付いてゆく母も一段聞きおぼえ　古柳
宿下り芝居の夢がさめたやう　志夕
しれぬはず番町樣と斗り書き　喜水
撿校の庭は女房のさし圖也　古柳
二三疋狐を午に買つて來る　柳雨
下屋鋪垣根をひたし物にする　かてう
うろたへて並べる將棊負けたやつ　友呼
碁の留守を間男打つて替にする　壽々女
歌がるた人づてならで下女取れず　川鳥

唐茄子を入れたで平が安く見え　雨夕
黒鯛をからしで旅の留守に喰ひ　霞朝
えんまの日丁稚二百と帳に付け　三交
お門違ひさとそろ〳〵出來かゝり　譚雅
路地口の笑ひ歯入が出して居る　すゞめ
おしつまつての御祭も金屏風　孤雲
ひげなでて來たは大きなこけ衣　不酔
木のうごく度よみがへる暑氣見舞　かてう
どの子が目ずき眞中の子は三分　三朝
鹿島さまおあきなさるとばゞアなり　玉章
頭をば大家へ遣ふ料理人　矢正
村の花嫁びやう打の鞍で來る　不酔
封の儘居つゞけにある母の文　矢正
村渡し二棹庄屋もどさせる　玉章
股引で角町河岸へあがるなり　雨夕
さアきめろ〳〵と隅田の七ッ過ぎ　芹丈
いろけない紅葉こんにやく土産也　玉章
京の廻廊へ江戸ものどさらおち　桝水
車引娘をひとり擧めなくし　柳雨
にはとりを握り拳で呼んで居る　芋洗

山歸來まづかさばつた藥也　芋洗
戸守に母の來て居る旅の留守　かてう
ついぞ着ぬ物を大名箱へ入れ　孤雲
目に青葉切りて句のなき京の夏　ふくべ
六十のうちに虫けら五六疋　三交
お妾のゆびは裸で動く也　儘成
扇箱はづかしくない拂ひ物　孤雲
隣から戻つて雛をせつく也　桝水
座頭より返事拜聞いたし候　孤雲
野がけ道畔をゆづつて火を借りる　陳々
多葉粉入ほめて娘は帶へあて　柳雨
かき餅を嫁川止め明きへつめ　錦鳥
玄米女色お袋へ二人ぶち　儘成
しかられる手引座頭の足を拭き　孤雲
連彈きは色氣付いたが笑ひ出し　桝水
歌ばなし石屋がするは辭世也　丸龍
風呂敷の高低になる送膳　すゞめ
板の袋をかぶせとく御定杭　丸龍
米のぬけがらを疊屋搗いて居る　門柳
花咲かせぢゞイが來たと新造いひ　竹二

芋見ざる間にかしらを量りこみ　松歌
弱さうな周倉五月はじめ來る　春駒
秋の野すつたるかり着して女房出る　丸龍
お釜のぱく〲にならないは慈童　雨譚
伊勢屋の生酔酒だか鰹だか　護畔
迯げた後仕打がみんな分る也　喜水
そこだよといはれて下女も一首取り　糸柳
山越につん迯げべいと輕井澤　狸壘
獅子の下あごで家根船飯を焚き　龜水
おいらん様はどうぢやなと淺ぎ洒落　竹馬
首斗りするのは安い入替はり　春駒
むしがれゐてんびん棒が太過ぎる　龜水
御しのびは鈴の鳴る場へ蜘が下り　雨夕
月かげは弓張り鳥は矢のごとし　川鳥
ほとゝぎすぐッと末座で一人聞き　同
金銀の扇を遣ふ瑠璃の山　春駒
不二山は武鑑で見ても一つ也　錦鳥
我庵で見れば左右は月と花　雨夕
清水で飛ぶとぶたれる花の山　錦鳥
山櫻詩でほめられる花でなし　一徳

見聞する物に手爾葉を翁つけ　かてう
當もなく二條通りをおぶひ出し　三交
花よめにさしつめ望む後の月　梅子
嫁姑流儀を名のるひんのよさ　十口
名物の二つで宇治は夜をねせず　魚好
美しい捨物のある三保の松　喜水
涙の手しほむらさきの實ばえ也　芋洗
未來記の仕舞いろはを響めて置き　雨譚
夕顔を御報謝といふ様な公家　延年
笠木からづぶにあびせる久しぶり　雨譚
たすきがけの口上味噌こしで來る　狸汁
後生だとくどかれお竹こまる也　錦鳥
とちぐるひあとひつそりは新世帶　桝水
棒組曰く如才はねい旦那だよ　延年
あたり近所へはづかしのありはらみ　雨譚
瓦燒く釜はぶざまな口を明け　龜水
えんどう豆はとび色にはぜて居る　虻内
廿五は欲心のない手を合はせ　鳳頭
夕立は帳にくはしい呉服店　平喜
供のぶらかさで娘の內が知れ　鼠聲

八つの耳ふり立て歸る手習子　窓梅
一つ身をうしろで合はすせゝかましさ　鳳頭
碁の客が來ぬでしッかり押がきゝ　三交
御詠歌に出るはかゝアのすがれなり　長故
ありがたさたまさか井戸で鮎を汲み　雨譚
千金を入れ萬年へ禮參り　三交
まこと名鳥と萬歲下に居る　雨夕
正月にいゝ御領地は二本松　一徳
後京極源氏にもれた虫を聞き　雨譚
中ほどへ定家女郎屋ほどならべ　松歌
しのぎの百本も出來る笠を召し　雨譚
奥樣い御ぐしにとんび鳥なし　かてう
袖かき合はせて又來春とたち　雨譚
玉の水樽で計つてわける也　志夕
門松のひつじ穗時分嫁の禮　交調
花の莚毛虫一つで座が崩れ　有幸
富士筑波左右に江戸の渡りぞめ　壽々女
文武の雨舍り黃蘗揮說　雨譚
源平に呼分ける夜の恥かしさ　交調
公家の子といふが一年立つてしれ　孤雲

よる年を諺の手爾葉に遣はれる　壽々女
葬るたんび家内へ嫁も暇乞　和國
門禮に鳥追ひ曲り形にひき　門柳
おとなしい息子俄にどらに成り　三交
目藥と鼻のあたりへ書いて置き　姫小
俄雨四つ手にのつて出來心　鳳頭
手拭を錣にして居る御手廻り　有幸
煮たまゝで女房つき出す泥鰌汁　姫小
素一分はともに消えなん雪の朝　名華
灸點を胡粉でおろすくろん坊　萬仁
太平の籌は時雨初がすみ　かてう
賑やかさ寶の山の花ざかり　蘇竹
白鳥の山田へ下りる夏と秋　鳳頭
春左近夏は右近が匂ふ也　三交
御虫干跡に四五枚いてふの葉　同
奥樣は正風ていの御むつごと　芹丈
ひんのいゝ遊び手で取り鼻で利き　鳳頭
包妙にして桐の下駄に非ず　霞朝

未三月廿七日開き

吉祥天も住みさうな御山也　三交

松竹の御門をくゞるかんこ鳥　矢正
御菓子は水の濁らぬ所で出來　柏之
御意怖うない御門番身共也　泥鼠
たいがいな馳走箒で庭を掃き　左滿
東寺から歸ると御庭からッ掃き　泥有
二階へは膳の出て居る百人一首　春駒
門松に取附きすがり申入れ　雨譚
禪寺切りで歸るのは無一物　同
花の宵今道心の澤山さ　泥有
ほとゝぎすうかと刺身へ箸の軸　春駒
のれんをかゝげ雪を見るごふく店　三交
神酒徳利一つこはして二つ買ひ　笠雫
鈴の音にまがきの花は咲揃ひ　錦鳥
御はらひへ柄を付けてもつ太神樂　雨夕
お布施をとられ和尚様飯を喰ひ　龜水
青く日の裏から當る田植笠　芋洗
書く度に股をひろげる文廻し　偶中
無事な三めぐり早道へ二百入れ　柳雨
こんな笠よせと忠盛叩り付け　雨夕
軍兵の不足付木で間に合はせ　柏之

身代が廻はると首が廻らねえ　護畔
しらぬが佛輿屋から市へ出し　雨夕
夜着の綿女房に內をせばめられ　笠雫
蝙蝠羽織を柳の下で買ひ　泥有
三十一年早く死にをしがられ　孤雲
だかる子へ愛相へんな面をする　龜水
安い花見立つ時けつをひつぱたき　雨夕
がんにふの入つた娘は聲がはり　狸汁
とつくりの間へ植ゑとくたうがらし　雨夕
だゞ廣くはき溜中を南瓜這ひ　同
內井戸で下女が返事がこんと言ひ　龜水

大尾

穴も無いくせに面影をしむ也　雨夕
ありがたい御代は竈にたつ煙　柳枝
御所近く匂ふ名所の八重櫻　萬仁
芙蓉とは水ぎはのたつ御立身　春駒
江戸染も京染も入る百人一首　鳳頭
石山で須磨や明石の物おんじ　志夕
はんじやうさ薄はだしに見る斗り　春駒
十軒が十けんながら公家の宿　三交

四五日は雛に押される花の山　鳳頭
花の山御幕一重の取りしまり　春駒
虫干の序に二日出して遣り　鳳頭
樽數のはどれも後月結うた髪　同
七種に道具のたらぬ新世帯　素調
雛分けに母縄を入れしかられる　川鳥
新宅の柱に冬のしみるおと　名葉
けいせいは長蛇の陣を敷いて待ち　虎同
海上へずらりと並ぶ平家方　霞朝
下手の鞠手の前足のふみ所　姫小
極彩色の大津繪を暮に呼び　松歌
貰つたり預けたりするいゝ天氣　糸柳
ゑり紙の吹きちる中で高いびき　門柳
九十匁を奴にする日賑やかさ　菜桂
駒下駄に勇みを付ける櫻也　かてう
餘所で着る夜具を息子は仕立てさせ　湖水
箸紙が出來たで息子くらひこみ　狸蟲
唐草の袙あんには息子なり　曙山
ひよッ子が二羽つく範の鳥三分　かてう
二十八歳で人間界へ出る　一徳

お職から遣手は嫁へ引合はせ　錦鳥
佛ともしらず一兩二分で置き　柳雨
追つかける方がみかんの皮をもち　器水
はだか嫁もつとも豐後名取り也　かてう
ぼた餅も里でくふのは角があり　錦鳥
暮に取る御鬮びつこか一眼か　中葉
けちな晩御免なんしがだらに來る　器水
日かげいの豆のはちけたく四火をするゑ　門柳
物がたり疵のない夜の月で書き　三交
子規不二の素顔を見て歸り　喜水
松風へ横笛ひんのいゝしのび　木印
舊都の名歌八重櫻山櫻　如雀
山櫻よみ人しらぬ者はなし　錦鳥
旅をしぞ思はず廻るかきつばた　同
雨には烏帽子狩衣は風に遣り　門柳
空色を見合はせてぬぐ花の雨　孤雲
堪忍の折紙今に直が落ちず　錦鳥
せんをかふやうに吉野は堀へ着き　喜水
さア牛も休みやと機を下り給ひ　雨聲
そこのきたまへ人々よ嫁の出端　如雀

山吹を出して實のある遊び也　狐聲
七月の節句にやつと窓を出し　錦鳥
座敬牢出したさに母放し鳥　一德
塗樽をふくべのよけるのがけ道　如雀
喰ひかけの芋忠盛へくださるゝ　同
唐の軍に晉曲がふたつ出る　同
御褒美の名は隱れなき蓑と笠　名葉
御旅行は昔に聞えた御出立　三交
御立身拍子木迄も加增する　萬仁
內心もぼさつで書いた物がたり　芹丈
有明も只有明も名歌なり　柳枝
出遣ひのやうにして行く十五日　鳳頭
八景を一つ抱きこむ源三位　同
紙びなは雨具を召した立姿　志夕
みだれて今朝は御機嫌とおぐし上げ　蘇竹
石で手を詰めたは綱がはじめ也　鳳頭
柳櫻をこき交ぜて母しかり　霞朝
おめかけは二世と三世の間の物　同
一(など)まくを內所で咄す御代參　かてう
ふさ楊枝横に動かす耻かしさ　倣成
取ればとるのを愛相に嫁とらず　陳々
手や足を藥へさしとくいゝ日和　素調

午の十月十八日開

御虫干達磨の側に古今集　虻內
めかれせぬとはひんのいゝ花見也　桝水
たましひを入れに國主へ御出生　かてう
味方見ぐるしいも定家一首入れ　雨夕
乘返す時は一盃月がさし　かてう
山のこしどこかへこして漕戻し　名葉
雲井にまがふ白波ははかま也　不醉
法眼をいたみ入らせる仕合せさ　春駒
金銀の風さくらより匂ふ也　桝水
幕はよしかなと屛風を出しに行き　春駒
朝嵐桑名の飯もしづか也　錦鳥
相馬公家小松菜などを引きに出る　三枝
卯の月は痳て卯月には立給ふ　春駒
なたまめのやうな桐油を弓にきせ　偶中
ひんのよい大食四人一座也　柳雨
色品もなく龜井戸の神樂堂　竹二
色も酒もすきだが鰹はきらひ　雨譚

下戸の盃へ生酔助言する　一徳
無筆を抱き赤蛙買つてゐる　かてう
十五ならもう身を入れてなぶられる　霞朝
淺黄より白むく遣り人きらふ也　かてう
絹心のないは寐て居るくすり取り　狸畳
疊替丁稚は足をねめられる　有幸
べつ甲はどちらの道に女もの　ふくべ
牡丹餅ぐるみしてやつた口塞ぎ　かてう
牛若と名付けて局秘藏する　陳々
二ケ國のうるほひになるいゝ花火　名葉
道行でいッち太儀は長右衛門　魚角
中元の祝儀大部屋かゑと下女　かてう
美しさ裸で舟を持參なり　姫小
口からなんぞ出るやうに嫁笑ひ　柳雨
馬程な牛を局は持つてゐる　桝水
唐木綿姿の幅も廣くなり　石斧
折鶴と羽子の子に嫁いきを出し　斧丈
半さんあなれとは嫁にきん句也　東里
ひんのいゝぶんぬきをする花の朝　鳳頭
舞の手も珠數と替はりし嵯峨の奥　柳雨

はな紙をおッこちさうに嫁は入れ　催成
せつぱ詰つて金きせの嫁を呼び　古柳
鬼の留守せんたく嫁の水調子　志夕
嫁の顔數首に見える頃に逢ひ　霞朝
花の散るたんびに見える白いもの　友呼
雪の立居にもえ出る緋縮緬　蘇竹
むだな事初會にちッと上げやせう　かてう
ばゞアの顔三度來りや笑ふ也　姫小
大文字を雑巾で書く十三日　鳳頭
義太夫の本ふん付けたやうに書き　友呼
かけ向ひ尻をまくつて產の世話　鳳頭
大ひきずりの女房はひのえうし　同
藪入をのせてさんまを買つて居る　桝水
生酔はつぶれる時に見世を出し　孤雲
いさ寄つてあたり給へや亭主留守　柳雨
丸山の女郎和漢の味をしり　陳々
金屏風嫁の自筆でかりにやり　かてう
梅の花だんべいといはせるつもり　松歌
ほころびはひつぱり梅は丸くよみ　同
世間の嫁は手利きだの柔和だの　同

三味線を牛の引つぱる賑やかさ　糸柳
竹椽へどろをかけてるいゝ普請　雨譚
是は種々御丁寧と俵藤太　同
大人を見るに利ありはいゝ天氣　同
そんならいゝわさと關寺の所化衆　同
ばん臺の雪打拂ひ直き出來る　譚雅
なぜきうくつに寐たんすえ畜生め　雨譚
茶はうじへ姫のりと書き下げて置き　雨夕
あんころの催促ごみが致しましよ　有幸
ちつとづつ出る太股にけつまづき　糸柳
一分するかはらけ隱居秘藏する
小便をたれ／＼猿は臼を掩き　龜水
安助言けつから金をくらはせろ　同
そこが後生だと若後家くどかれる
新世帯お仕事をする庚申
蚯蚓の怨靈ちんぼうへ取りつき
其味も相變らずに姫初
陰間の起請けつ判はきついこと
福引に下女は手前の顔を取り
留守をよくしたのと嫁は福を抱き

野掛け道人もきゞすの聲を出し
春道のつらさ上戸の連に下戸
子故の闇に行燈を晝とぼし
船を折りかけて禿は漕ぎいだし
蹈潰す火玉を貰ふ野掛け道
けちな酢こはだの皮を飯に貼り
稽古場のやうに板前掛けて置き
いそがしさ餅に正月物を着せ
米舂と鐘撞の氣は十文字
琴爪をはづせばそとの人がちり　春駒
いくらだと正宗の直を聞きは聞き　尾上
植ゑに出た田を見て通る玉のこし　川鳥
蜜柑をも鹿へあたらぬやうに投げ　如雀
十三夜だと仲國は栗毛なり　春駒
なまりぶし切るのに關は未だ櫻　連鳥
黒猫をいぢり代脉ひッかゝれ　紀鳥
呉服屋の他行强力連れて出る　同
變た事斗に他人の弓矢出し　三交
盃のならし白髪の嫁が出來　松歌
花盗人の肩さきを毛虫はひ　鼠蝶

風車子持ちの神が賣りはじめ　かてう
風呂舗の模様はつひぞ見ない花　東鳥
馬鹿者もあると仕立屋居所なし　錦鳥
ぼた餅に暖簾を分けて付けてやり　川鳥
灌佛のゆびに成るまで伊勢屋待ち　窓梅
里遊とはおのしかと母文を出し　一徳
膳なかば欠落をするよわい酒　恋梅
二日出の猪牙船宿のたから船　鳳頭
ぬか袋明けずにおきやと母の聲　芋洗
秋冷がつのつてけちな鹽さんま　志夕
茶を出して女房火入へ手をかざし　川鳥
けちな晩八疊敷に狸寐る　平口
宵はまち侘び夜中には腹がへり　姫小
小便に引窓へ出る高瀬乘り　風化
疝病の藥時ならさるをする　柳雨
上氣した女中御湯殿あけて出る　桝水
又降りだらう雷電に九紋龍　春駒
子を愛す額は物ぐるはしく見え　尾上
にぎ〳〵をしてぬか袋嫁こぼし　償成
いづれ姉やら妹やら聟がもめ

まづ桐を植ゑ雛市へ亭主行き　蘇竹
山形を明店にする嫁を取り　糸柳
反古張りや似つらで螢追つかける　川鳥
相違あらざる自筆さと御殿持ち　曙山
見なさらばいやよと豆を嫁つゝみ　五鳥
母苦勞夕べも梅が三つへり　川鳥
目明き千人まつて居る古本屋　和圓
花鳥風迄は異見で置きたれど　宜明
晦日にはきッと入るよと鑓を選り　一徳
花相同じ松の内と名月　雨譚
やく年の三年前にめがね買ひ　丸龍
およしなんしと張肘で振りもぎる　百馬
八つ山おろしはぜをやめさせて飯　雨譚
唐の助六韓信をくゞらせる　百馬
喰ひつみの海老賣店に殘つてる　狸汁
坂を上ると井戸綱やはま綱や　美徳
新道のあたりから出る白拍子　萬二
尻も曲らぬを品川十匁　雨譚
夜道には先箱に成るけちないしや　護畔
蕭くずにして行くけちな雨舍り　すゞめ

池の茶屋玉に疵なは惣後架　矢正
下卑たがき餅屋の前でつるさがり　錦鳥
ふてた下女炭消壺にもたれてる　白花
袖を引切ると琴をば置いて逃げ　歌笑
齒のぬけためかけ當主の脚をなめ　同
雪や氷とへだつれど同じ孝　和谷
子を掘ると子を埋めるのを孝へ入れ　春駒
一もん惜み唐土へ三箱やり　丸龍
山鳥や啼く鹿も嫁手とらまへ　松歌
十三度嫁は金剛力を出し　霞朝
女ッ切れの見世に居ぬいゝくらし　三交
先祖の山莊なくなしてありや〳〵　芹丈
高つきのそッくり残るいゝ棧敷　栟水
重ね着をする物でなし小夜衣　呉竹
京染にしても桔梗はぢきにさめ　木印
近道をよくしつてるも下卑た物　雨譚
尻を引ッからげ駈出す名句也　宜明
武士で懸直をいつたのは小十郎
歌がるた膝の下からほとゝぎす　偶中
耕して農具をさがす水の跡　名葉

譯が付き雛迄よこす新世帶　素調
鐘を出て見れば江戸中傘をさし　春駒
月夜は作り時雨にはえらむ也　三交
へんてつもなく三井寺の朝の鐘　雨夕
いづれへも通用の能い御山內　三交
かつを木をいかして繪馬の時鳥　雨譚
四ツ前迄に朝顏の卷が出來　雨夕
仕の江につくと月落ち鳥が啼き　名葉
のッ引のならぬ名歌で官女へり　錦鳥
孝靈五年すさまじいむぐらもち　丸龍
虫の音も賣買にする繁昌さ　かてう
脊中にも輿(こし)の付いた御馬也　二久
梅と梅との眞中(まんなか)が榊なり　雨夕
御飾りを見るのは下卑ぬ鍋覗き　同
ひんのよい入札鼻を當てにする　柳雨
席いまだ定らざるは初の雛　有幸
廣敷へ町駕で來る美しさ　霞朝
ばゞア仲間でもさつまは大あたま　蘇竹
腕の灸までは殿様氣が付かず　譚雅
磨葭(みがきよし)のつい立に鍔掛けて置き　雨夕

年玉のやうに辨慶投げてやり　交調
のびをした木魚を釣す弘福寺　丸龍
美しい狐男のまげを切り　龜水
十二銅づつの喰ひつみ湯屋は出し　かてう
家の居る所と外科殿を教へ　雨譚
評判の傣としやれるにはか雨　同
月花で二度恥かしいのは娘　有幸
地守りは冬の年貢にたんと干し　交調
腹の灸點笑ひやむ迄はまち　桝水
角兵衛にしそばで小言をぬかすやう　龜水
分別は後架湯殿は無分別　矢正
剃刀をへの字の穴へさして置き　龜水
新造の客眠いのにじれつたさ　桝水
やあゝ旦那といへば下女わたしかの　交調
袖口の仕上げは二つ三つならし　三交
賀の餅は腰の强いが自慢也　陳々

羽州山形連會

霞から秋風長いうそをつき
嫁の帶そばで苦にするあつい事
金につまづいて踊子ころぶ也
からかさで盗人の來る菊の苗
生きた雛をがんでかへる鶏合せ
碁の客に勝手は將碁倒し也
手まへ免許の元信を庄屋掛け
風鈴を扇でならすあつい事

美濃屋と近江屋縁組は相應し　志夕
留守番へ飯の在所と水滸傳　春駒
息杖のたんびに下女はくゝし上げ　友呼
碣石を目のないくせに撫廻し　錦鳥
左官屋の戸袋斗藏造り　かてう
子の泣くに早乙女足をぬきかねる　風化
小便の下座を切つてる草履取　有幸
落頭ともにたつてく大一座　同
角兵衛獅子まくを明けるが仕舞也　雨夕
茶屋の名を聞き〳〵傘を引きたばね　鳳頭
ひろさうな女は馬の内侍也　姫小
秋ぬれた衣を夏の山で干し　矢正
加茂よりはやさしい奥の競馬也　鳳頭
名僧を掘り若殿御誕生　かてう
蕗茗荷御國から來て芽を吹かせ　矢正

一下り讀むとたづねる母の聲
土用干し疊のうへの廻りみち
干瓢の結びは口の中でとけ
引越しの道具配料猫をだき
御十念質屋はしたに仕てわたし
女房の癪八朔の雪あたり
普賢の開帳冥加金として三分
蜆汁ていねいに下戸喰仕舞ひ
丸藥は手の筋なりにかけ廻り
生娘の氣でしかるのを下女笑ひ
美しくなると輕石捨てられる
尻の毛があたまへ生える角兵衛獅子

二 卷 目

杉の葉をよけ〳〵糸をたぐり行く
簔一つ有るとやさしい名はたゝず
鐵砲のせんくづ貰ふ妙國寺
大鳥毛其後(のち)ねからふり人なし
猫に取らせろと衆徒等も初手は言ひ
茶畑の茂りに晝も光つてる
獅子と蝶廿日あまりは中のよさ
俄雨水かけろんをおんながし
羽衣を見失ふまで口を明き
鳴子引く氣持で母は咳をする
柳櫻に生酔をこきまぜる
かきつばた切つて振袖しぼつてる
相の山神道流でぜにをうけ
保昌もはかまのくせは直しかね
歩一つに二人(ふたり)三人立ちさわぎ
銚子から硯へしたむさむい晩
ウ冠女に着せて賣りひろめ
ごふはらさくどき落せば川が明き
おはぐろを下女公家惡のやうに付け
奏を兼帶に隱居の下女つとめ
八功德水で出合は手をあらひ
とんだ不具(かたは)は奥山と花の色

再篇に追々諸州の點句を著さんことを思ふ。好人笛叟點秀逸あらば、表德を印し送り給ふ事を願ふ。

風誹
柳多留二十八篇 終

誹風 柳多留二十九篇

遺　叙

連歌に古式あり、俳も夫より出て、一巻の首尾、三句のわたり付てふことのありて、道にたどくし。今の前句は一章に問答あつて、孝貞忠誠にかんじ、はたたはれたるには、冊子に向うて獨り笑を催し氣を養ふべしと、古呉陵軒のぬし常にのたまひしを思ひ出して、雪成舍菅裏廿九編の口に口眞似して、たゞ世の雅君子に口のはたをつめられん事をおそる。

寛政十二算月見月

鶴瓶へひゞく月宮殿の舞　三交
兼題は鵜で當座はほとゝぎす　儘成
細布を問はれ能因こまるなり　未學
箕はてにはを種々な物へ付け　龜水
第二本岩と松とに捨てゝ置き　孤雲
室町と雨替町は餘所のうち　不醉
端午勢時代違ひの屯なり　川鳥
鯉をねらつて切る様に鍾馗見え　雨譚
御太刀と御馬をもめた紙へ書き　交調
唐人は瓜と李を大事がり　雨譚
間はづれな楊枝鷹匠腰へさし　かてう
船子ども舞を覗いてしかられる　前田
瓜に茶をのませへちまと引つかへる　柳雨
おいらんの飛切鈴にかゝはらず　交調
かたい紙おくんなんしに間をさせ　盤客
二人行き一人は親に憎まれる　すゞめ
腹を突出して鱠をやたら喰ひ　蝶々
白い卷きずるめ庚申こしらへる　雨譚
素人芝居どやされる鋼だらひ　同
御詠歌はむかしふさいだ口を明け　喜水
湯風呂はひッそりと土佐節を語り　雨夕
惣菜を聞いて向うの人を呼び　名董
迷ひ子を金でたいこがさがす也　交調
しつくすと庭へ出て見る料理番　喜水
槍提げた向うからしやうぶく　名董

蛇の目をも汐の目にする大嵐　芋洗
素人の細工鉈だの木割だの　かてう
紅の附木を出した大蛇賣　同
生酔を巻付けて來る下戸の首　丸龍
西瓜賣矢間を明けて覗かせる　柏我
脊を腹に替へるいせやのなまりぶし　雨夕
五文くりかけてあげうといやなやつ　柏我
鐵莚に腰押に來る村公事師　霞朝
洗濯の時は足駄を尻へはき　東長
足駄の老込ゐざりの手にはかせ　雨夕
大なんぎ荒打ふんどしがはづれ　有幸
ゆびでくで茜を汚す村芝居　丸龍
長局笑ひをとこのちゞれ髪　竹二
雨だれに切られたやうな髭を出し　鬼文
女郎はおけし惣髪は地もの也　頓丸
御産所をふき合はせずに御誕生　三交
千に一つは蝶々と美人なり　不酔
うらゝかさ六位の服を毛虫はひ　雨夕
逃水も白水に成る繁昌さ　錦鳥
千載に日陰の櫻一本いれ　かてう

御離縁の後は猫またやしき也　かてう
野馬臺の通俗物を與で書き　霞朝
鍋ぶたのうへに目に立つ茗荷の子　錦鳥
名句にはなるとはしらぬ樽拾ひ　不酔
九月咲くふじは十一日さがり　雨夕
松はつれないが櫻はつれがあり　錦鳥
呉服店一日藏がものを言ひ　同
鐵釘を直すに師匠骨を折り　三交
水の面にてる月浪を息子行き　不酔
延喜の代櫻の方へ毛虫坐し　雨夕
御二人は植木屋の出る百人一首　三交
木隠れの月は手爾葉のねだり事　春駒
見はぐつて名句と成つたほとゝぎす　雨夕
十三の春十七の名を殘し　孤雲
雨やどりより大さうな水舍り　錦鳥
色紙の付くのは若い男竹　竹二
夕顔は官女山吹はおしやらく　雨譚
かたい紙鶴と金の札に成り　鬼文
外聞は萩で實義は女郎花　可候
紅葉植ゑべき社だに柳也　雨譚

橘中からをんなの仙人が出る　白志
非業の死でも御年の上頓政　雨譚
近江からふせりませうと美濃へ言ひ　雨夕
急度した相手で遊ぶ乳付の子　亀水
きめ所をきめて年増に靜なり　松歌
口をしくない虚無僧は立派也　杣路
下疳ではないと鼎の譯咄し　同
根上りの松といふ身で蛸歩行き　東鳥
かねて夜討と定めたる蕎麦の客　交調
ゐんまの冠のみ口を二本さし　亀水
歩をなく〳〵しはぢき將棊は法度也　雨譚
ぶたと心安くなつた藥取り　把菊
醤油樽分に過ぎたる鐵一つ　僊成
顔へ出ぬ悋氣仲人もてあまし　喜報
君命をはづかしめさるのは相模　春駒
竪縞の箱で賣つてる心太　雨夕
持参嫁鼻があぐらをかいて居る　同
見くびりなさんなと下女二百かし　喜水
浅妻に似たが三十二文なり　交調
女房の損料ていしゆ五兩取り　丸龍
口へ出た蚓見て嫁くはぬなり　栟水
傾城のはだしよく〳〵腹が立ち　同
後の月盃の無い銚子なり　不酔
わるい奴ねぎをかやれとねぢつてる　霞朝
妾の目見えおすき見はきつい事　文集
もう一首ねだると二位になる所　春駒
むらさきにぼんやりくもるいゝ屏風　呉竹
五十年綟子の團扇を顔へ當て　芋隣
明けろくを打つた手が豆腐屋解せず　雨譚
印形で來るきつとした寒見舞ひ　雨夕
陰中の陽は和尚の緋の衣　芋洗
短册にするられ御用世に傳へ　かてう
あさなは昌平本名は芋洗　雨夕
割込みに咲く朝顔はいびつ也　名葉
お月さま次第と文をやたら出し　雨夕
いくぢない形で聞き〳〵十三里　矢正
雪月にねぐらのもめる雨の月　かてう
白茄子の側で見付ける嫁の芋　川鳥
運の盡き俵に米を見付けられ　柳雨
鐵棒で御免の女郎送るなり　錦鳥

朱で假名を付けた大字へ人だかり　雨譚
矢車のやうに並べて鯵をやり　庵略
名の上を引裂かれるは負けたやつ　盤石
ばたアらばたら初會の上草履　雨譚
狼はなみだで出來る衣がへ　竹二
柄に手をかけねめ廻すと齒磨　龜水
人間にあたふべき衣は並木　雨夕
辻番の百ひろを出す放れ馬　東長
植木屋の燭臺はんどおッぷせる　かてう
旅立のなりて白玉賣つて來る　雨夕
おッぱじけさうに莇豆馬へ付け　かてう
女房の我意を顯す煮た鰹　雨譚
見料に土手で西瓜を奢る也　同
あら身でも折紙の付く暮の嫁　呉竹
鶴の舞ふ度にゐぼしが動く也　錦鳥
紀にもかけずに名を替へた歌人也　窓梅
悴に御問ひなされイと是善卿　雨譚
針も心も眞直な釣人なり　盤谷
不二山にはつ雪の降る暑い事　晋風
八景でてりふりなしは三井の鐘　窓梅

三味線をじやんといはせに國を立ち　寛洲
甘い御意なめ過ぎて居る舌たるさ　芋洗
どう考へても山吹初手解せず　可候
御首尾よくさがれば嫁の旬(しゆん)はぬけ　把菊
一息ついて和田の原嫁はよみ　曙山
ひとりでに起きて宿下りなぶられる　窓梅
かつら男をまつて居る中の町　雨夕
近くば寄つて目でも見ろ三分也　仰山
あたりを拂つて三分が賣殘り　雨夕
たばこ盆うろぬく側につらい事　窓梅
稲妻をさせてふり向く中の町　松歌
嫁ころり〳〵仲人あん氣也　東鳥
ばちは袋に納まらぬい丶藝者　盤谷
火鉢から出る幽靈はおもしろい　川烏
大口舌膝立直したてなをし　甘梨
わたしがせいに成ると嫁燒初め　盤谷
ほいろのやうな月を芝居で下げる　丸龍
貝詰めは空腹のしたすき油　盤谷
見こし入道でいろはを教へてる　春駒
芝居へやりやしたと母矢取也　喜水

はじまりを四五人首ほど乳母覺え　丸龍
まりこの喧嘩拍子木をやたら出し　庵略
あたまてん／＼足でする角兵衛じし　龜水
おきあがれこふしたれにもころぶ也　同
雞とつがつて出來た角兵衛じし　三交
ぼた餅をこづく如くに持參され　雨譚
一生奉公かゝとにたこが出來　寛洲
かつら男が上ると下るかつら姫　かてう
繁昌さ舞へども下りるせきがなし　矢正
笠がよう似たと言人の無いを召し　窓梅
沖のかもめでは傳授にならぬ也　雨夕
すれ／＼な男女の交る六歌仙　錦鳥
とめは申さぬが追剝がよとよみ　三交
名の高い姫は高尾をよせ付けず　窓梅
兄は腰簑弟は緋のはかま　可候
もみぢ亂れて品川へ流るめり　窓梅
水は妙だと有常へ暑氣見舞ひ　雨譚
けいやくが濟むと玄德から始め　柏之
生醉を家づとにする花の雞　可候
すゝきおひけりが息子の頭痛也　窓梅

いたい事あすこの袴爰の帯　柳雨
ぼッたりと散るは會式の櫻也　すゞめ
玉の盃底なきが眞間へ行き　雨譚
毛延壽市で賣るのを書いて出し　同
おばあさんのは秋の田がよめぬ也　晋風
産んだ夢見て夜の長い里の母　東鳥
毛氈へお直り候へ鈴の音　東々
けんしきも肴も崩す三會目　かてう
牛若は大長刀に二度出合ひ　寛奴
俄雨上戸かけ込むしる粉もち　柏之
大的の後を通る風ぐるま　喜水
おそろしさ六文ぬけた首で越し　雌小
罪に成る珠數を持つてる蠅釣り　窓梅
釣船の茶飯しよう事無しに焚き　盤谷
もり替への中で喰へぬは女郎也　喜水
四十九で持つたていしゆは大ぐらひ　盤谷
引馬で大門を出るとんだ客　潭雅
庖丁で土手の間地を打つて見せ　つばめ
新酒を上げますと遊びをしめて來る　川鳥
下女ちろり白衣で出して叩られる　鄉山

やきもちで下女鐵網の内へ寐せ　雨夕
眞ッくらな夜宮他國に無い神事　窓梅
ぬらくらとしては刈られぬ神事也　寛洲
箱の水蜘手に分けるはんじやうさ　錦鳥
かすゥかに月と日をよむ遣唐使　窓梅
かじかんだ手で竹のこの皮をむき　つばめ
鉢植の梅日當りを追廻し　雨夕
一曲輪秋來ぬと目にさやか也　姫小
一箱の主でも鶴で入れぬ所　川鳥
鳥の名をふたつに分ける渡し守　窓梅
高い鼻低くしに來た善界坊　同
桃の枝かい敷きぶたのさし身也　柳雨
母へくつ付いて花嫁すわる也　雨夕
仲國が馬枝豆をふるまはれ　大喜
不器量は暮迄のばす大社　窓梅
木枕で型を嬉しく寐付け得ず　漁川
人まねこまね八朔の更衣　雨譚
霜天にみち三角な雪が降り　柳雨
煮る芋をひとつ殘せと大卅日　雨夕
明日のうらは今日休みなり　同

引け過の廊下羊の反吐のやう　やなぎ
ふり上げて待ちぶせをするむぐらもち　花丈
輕業の年明國で杣に成り　矢正
賣れるほど飴屋は頬をふくらがし　すゞめ
くだり賣り水を五合もつて來る　窓梅
こわくない化物を下女こしらへる　雨譚
虎の皮より恐ろしい緋ぢりめん　龜水
腰元の宿割膝でにぢる也　かてう
圍女の折々どぼす石どうろ　玉章
湯豆腐はしきし田樂はたんざく　かてう
落葉の頃橘くんじゆなり　錦鳥
敷しまをおり出す人のひんのよさ　矢正
梅の側春木町とは面白し　門柳
がんぱつに天水を呼ぶ寶の井　玉章
松はぬらさず山吹はずぶぬらし　同
遠縁に結ぶむすめの持參金　雨夕
ちるらんよりもちりんすの面白さ　芹丈
牛馬も虎の匂ひをかいで居る　柳雨
戸の有る女郎しよい投げや腹やぐら　門柳
湯殿から手を出して折る桃の枝　柳雨

赤とんぼもじ肩衣に朱鞘なり　雨夕
山の神團子を投げる月見すぎ　玉章
齋日の土弓遠足よりもねれ　竹二
聟が來てらんめんにするいもつなぎ　矢正
はやりいしや駕に手紙が二三通　同
奥様のおひろひお下心なり　蘇竹
千代の春野邊に沓跡殘るなり　かてう
御法をば眞如の月がさえて書き　東李
且又は地下人のするうたまくら　柳雨
水の無い月に雨降る山は明き　矢正
下屋鋪あさるきゞすに琴がやみ　川鳥
行暮れる頃に櫻の下へゆき　錦鳥
花の江戸だけに水迄枝が咲き　有幸
眞ッ直な雨にはぬれぬ時鳥　玉章
雪の日は文臺に乗る樽ひろひ　芹丈
二ヶ國のうるほひに成るいゝ花火　名兼
十返りも付けさせてうる御えん日　柳雨
蚊やの中千代は小首をかたむける　芹丈
友の手土産いゝ役者いゝ女郎　柳雨
十指(じつし)のゆびさす所いゝむすめ　霞朝

ちやうちんの影から禿ひよいと出る　錦鳥
おつかさん御手かへとよむ雪の朝　門柳
一つ此むすめの門に四つ手駕籠　芹丈
物干ぢや日傘の實否分り兼ね　かてう
猫となり杓子と成るも孝の道　同
開運を女の願ふたこ藥師　芹丈
金をつかはぬどら者は在五なり　玉章
美しい若後家ほんの命取り　文集
二人寐の蚊屋ひろく成りあつくなり　魚角
しん道できれ／＼に成る盆をどり　萬仁
いたづらな御手とお脊中流してる　柳雨
他國から富士へ代參一度立ち　玉章
百に無い鏡を六歌仙へ入れ　三交
水繩で大工迯水追ひ無くし　姫小
十月は自前をかせぐ大師さま　霞朝
軒端の梅は數百軒つゞくなり　門柳
法眼入來御次ぎ迄匂ふ也　石斧
下谷でも小鼻うごかす御えん日　霞朝
急た事始皇を爪ですくふ也　石斧
お姫様乞食仕立てに貝をする　萬仁

仕合はせな娘は母におふはたり　文集
ある縞の魚拾より直が高し　玉章
ぬれた袖嫁鎌倉の松で干し　萬仁
白むくの裏からきれる弱い客　三交
小姑に世事で片袖縫ひまける　かてう
白きを見れば夜ぞ更ける紋日也　三交
後家入は彼十目の見た男　姫小
芳町で尻とり五文字いゝあんじ　文集
長歌のくんどくをする品の僧　同
お客とは女の枕言葉なり　芹丈
蜘一つ野中を歩行く有りがたさ　柳雨
お伊勢様鋲打で賣る忠臣さ　玉章
日本に一つは橋の一里塚　錦鳥
青空へひつ付きさうに鶴は舞ひ　霞朝
十七八で名高いは雨と花　文玉
簾串があたつてをしい枝が散り　桝水
孝行は田町須田町向島　桝雨
日本は鹿に鞍置馬鹿ばやし　三交
嫁ちよびと手を月に出し花に出し　桝水
辨當箱の大將の名を殘し　三交

摺子木の棒引客と禿する　玉章
大文字を書くが扇の要なり　川鳥
これ切の棧敷茶屋から扇箱　かてう
面白い粘入三枚で三分　柳雨
紂王はきやん玄宗はおむく好き　文集
籠の鳥三度目からは餌づく也　玉章
すきな事藝子染めたりはがしたり　柳可
甲に似せて水牛を下女はさし　同
鰐足の出るもことわり鮫が橋　紫菱
替りもの蔦の中から芭蕉出る　霞朝
衣の薄い漁父が出て言ひまかし　石斧
外に無い山おぐらでも百一つ　東里
つる音に矢よりもはやく乗付ける　同
御立身ころはて鯛のあらをにる　玉章
妾が反吐奥中で胸わるくする　同
紅白の姿を作るはづかしさ　文集
三ちうが一つかけたで養子也　雨夕
和漢の忠義たばこうり肴賣　柳雨
松のきどくを顯してりゑん狀　玉章
鋏虫庭籠の口へそうろ〳〵　三朝

御秘藏は足の八本無い斗り　東里
南州は牛北州は馬を越し　玉章
袖口へ後家念佛をちッと出し　石斧
十露盤のお舟に乘せて丁稚ひき　霞朝
まぎれふんどしへ去狀そへて出し　石斧
青空を羽箒で掃くのどやかさ　文集
御座敷でちるはきのふの御家づと　同
裾が淋しいとあやめは其當座　石斧
最明寺大きな木賃泊りする　三交
あくる日はいざこざ聞かん都鳥　玉章
强い暑氣付髮がくり／＼する　霞鳥
八雨の外は讀まずにひろひこみ　同
女房はけんのん性で尻を出し　東李
新玉の門を出入るおもしろさ　芹丈
天と地の間を九里餘も登る也　雨夕
白水を脇へ流して粥をうゑ　霞朝
名の高い夜ばひ立田の山を越し　三交
立つ時に從大きな羽音させ　萬仁
釣臺の桐油で戻る御殘念　桝水
道成寺おらが地主と大家擧め　三朝
舟もよからうとさしみで呑んで居る　桝水
初音をば聞いた斗りのほとゝぎす　有幸
長崎と唐は江戶でも向ひ合ひ　萬仁
目が覺めて眠つた親を思出し　雨夕
十五夜の花たて御用取りに來る　萬仁
不居さ屛風を池の上へ立て　文集
夢ならばさめな／＼と下女もがき　霞朝
むくれは金の下にある御家柄　雨夕
唐土はおろか天迄御手が知れ　桝水
鶯のまゝ子を一羽集に入れ　同
撿校に成るに大坂かゝはらず　三交
傾城に緣の有る木を住寺うゑ　有幸
堺論濟んで初段に庄屋成り　玉章
跡へ廻しなとせき込む歌がるた　桝水
鳥籠へみかんを入れて口をしめ　雨夕
はやるやつ守本尊は千手也　文集
けいこ場のやうに板まへかけて置き　萬仁
柱までみち／＼われる娘のへや　玉章
紅は玉座紫御ひざもと　芹丈
辨天と天神の間かすむ也　霞朝

隨一の客ずゐ一の女郎なり　芹丈
松風を象牙でふせぐにくい事　霞朝
僧正の腹あしくする椀たけ　三朝
並の屛風へは冷ぞうめんを出し　桝水
宗任が生捕られたは春と知れ　石斧
人を茶にしたと梶原くやしがり　雨夕
いそがしさ餅に正月ものを着せ　桝水
立ちさうにして又咄す女客　かてう
雨舎り嫁はしよつたりおろしたり　石斧
范蠡は干物はうらぬ男なり　三交
割箸を片々無いと大笑ひ　三朝
朝日の利益新造の客を呼び　玉章
精進日女郎簞笥へ手を合はせ　同
すみの方からも手の出る三會目　雨夕
輕井澤織女も交る大一座　かてう
吉原の鐵炮四季にかゝはらず　三朝
堀の鶯聞いて來るねれた嫁　芹丈
有りがたさ御庭一ぱい江戸の町　雨夕
髭なでて來たは大きなこけ衣　不醉
後姿を見せぬのはさくや姫　雨夕

本望さ島と一箱目立つなり　文集
鳥籠の口鶴がおりしめる也　かてう
むかごつるはびこる二十餘年也　三朝
ほの〴〵を讀まぬは不人相で寐る　桝水
花のちるたンび小つまを大つかみ　文集
わび言のそばでしほれるかきつばた　桝水
木のうごく度よみがへる暑氣見舞ひ　かてう
殘暑迄陣をはつてるいゝ質屋　同
通ひ路に文や袖すりいゝ名也　玉章
孝行も四つ手不孝も四つ手也　雨夕
あかるい手書き四里四方書きちらし　玉章
大あばた角兵衛に錢を入れたやつ　雨夕
旅の氣休めは女房が大あばた　同
唐の首三つ付いてる安花火　三交
吉原も一度締めうりしたところ　同
神鏡へ一羽々々にうつる也　桝水
龜井戸のふぢ其時のふぢでなし　矢正
あすありと思ひ吟ずる花の宵　文集
田は稻荷畑は狐で名句也　三交
耳に蓙目に月斗り置いて行き　霞朝

錢金もなる木繁花の御縁日　矢正
よしの山藝者を一人捨てた所　三交
浮舟で篝火を焚き蓮をほり　雨夕
下りはで堀を出て來るやかた舟　霞朝
ひざもとへひた／＼と來る三會目　同
龍宮の聟をも入れる厄拂ひ　三交
うぐひすの冠を虫が着て光り　同
毛氈をたゝむと階子ばッたばた　桝水
どつかどう豆腐の中へ下駄を入れ　同
寺に無い釣鐘龜井町に出來　三朝
土手を行く女房目尻が上つてる　雨夕
出て行くもすさまじいねと雪の朝　同
髪を結ふにも張りかたを入れるなり　三交
肥後米の俵をしめたやうに卷き　かてう
折にふれ地下をうらやむ緋の袴　錦鳥
春日の緣で結構な笠を召し　芹丈
蜂もとんぼも名の高い勇士也　かてう
雨の音狩場の屋根のやかましさ　雨夕
人王の供は大かたなりあがり　霞朝
盗人の兄嫁歌が上手なり　芹丈

金銀を猪牙と四つ手で捨てに行き　三交
平家方末期の水の當からさ　霞朝
二命をかけてめつからぬやうにする　文集
日を喰つたむき身を下女にふるまはれ　霞朝
恐悦さ蕗の島へ種を蒔き　文集
梅つぼを出る六月の御献上　雨夕
御物入鶴のびつこが千羽出來　文集
神佛の外に燈明手がらなり　芹丈
一箇所はさくらの中に水車　かてう
木曾殿斗り山吹に實をならせ　雨夕
月に村雲花嫁に頭巾也　同
あいさうに福々しいと嫁を譽め　桝水
狐火を一月とぼす賑やかさ　霞朝
江戸風にお見えなんすとお針言ひ　芹丈
そのなれ初めは明店と下女が戀　同
歌仙で見ても丁紐を相模とき　三交
御吉例籤から竹をさし上る　錦鳥
御安産あし邊に田鶴の鳴く時分　石斧
大雨後此松俄に垣が出來　雨夕
しけるはず雲のうへからたつの口　三交

春の日に拔参りする大どしま　三朝
とつときの御顔物見へみんな出し　霞朝
八景が嫁のふくさにちッと見え　三交
羽子の子で嫁左きゝ見付けられ　石斧
瓜畠狸は遠慮なしに喰ひ　雨夕
行燈も戸ざさぬ土地の賑やかさ　同
息子には竹娘へは虎の菓子　不醉
生醉の前を合はせる草履取　石斧
牛房の次に書出しを又配り　三交
女房に七十五日貸が出來　霞朝
賴光の寐間の笹がにおッかなし　芹丈
三月と五月のやうな壇の浦　同
五條ばし其頃何かしら拾ひ　雨夕
親のばち湯殿で當(あた)る松の内　不醉
家老のはちと大ぶりな石を建て　霞朝
洗つたらとんだばく物手塚取り　同
ほころびた衣手に箔縫合はせ　錦鳥
ちんほうのありさうも無い美女御前　雨夕
いざさらば翁も酒がなると見え　玉章
御姿の歌書は枝折に撥を入れ　雨夕

はき溜の鶴鳥籠へぜげん入れ　三交
毛氈の上ぬき足の見ともなさ　霞朝
半日かゝり餘所行きのあたま出來　文集
雪ころばしを息子するいたい事　霞朝
麥畠からびくをさげおよいでる　玉章
疊屋に有る古近江は直にならず　三交
奥様にお指折らせる川づかへ　霞朝
ほの〴〵の鏡うれしい顔うつり　三交
鋲打を黑棚にする花の山　かてう
兄弟を見に行く春の宿下り　三交
鳴物なしに尋出すどら息子　文集
女郎よりまだも鰹と女房言ひ　同
おさへた〳〵五雨で事が濟み　雨夕
餘寒去りかね中の町そだを植ゑ　玉章
番がさと蛇の目あやしい茶屋の奥　かてう

芹丈追善　業評　雨夕

てんねんと鳥も慈悲ある御山也　かてう
紫のゆかりはるりの伽藍なり　窓梅
くわん音と地藏百首に入らせられ　文集
切りかぶも掘れと僧正下知をなし　同

ほとゝぎすよりも奥様お待ちかね　晋風
文殊より普賢ぼさつは乗りおくれ　一徳
江戸染の色不可なりとのたまはく　三交
迷子の塚で名所がひとつふえ　同
嚢砂とはかんしんしたるはかりごと　同
四角な文字の中でよむ三笠山　不酔
魚尾の黒子で妾斗り御寵愛　文集
松と紅葉の眞中を花が散り　有幸
世を去つた翁朝日とうしろあひ　川鳥
人丸を枕時計に奥でする　霞朝
御打身はいかゞさて〳〵いゝ御歌　窓梅
入山に星じるし代金三歩　美徳
威風りん〳〵と花かんざしが鳴り　虹内
底ぬけの軍をしたは桶はざま　譚雅
今のだつきはほうらくを弾いてゐる　雨譚
辭世の側に勘當はうづくまり　かてう
海上で知盛ひとり口をきゝ　有幸
痲むい眼と佛頂面とさし向ひ　鬼郷
ざんねんさもう孝行はならぬ也　文集
精進のさかな朝夕たゝかれる　別井

源氏が寄つてかしましい御廣敷　霞朝
笑ひなんすから猪出來ぬと新造　桝水
入相の頃に鞠場は香るなり　有幸
箸紙も禿こはがる死んだ客　名菓
何も無いさうで干物をやく匂　鬼郷
くらへども其あぢはひは入歯也　儘成
どこで落したとは無理な尋ねやう　三交
腹のいゝとんびこくうに高く舞ひ　聰水
時は今五ツだもッと咄しねェ　英子
まうご戒やぶつて合はぬ百旦那　汐風
狸痲入りを狐來てゆり起し　泥有
傘に呑まれたやうなせまい路地　英子
金をしぞ思ひ引舟いせや借り　門柳
玉みがかざればぜげん連れて來る　狸墨
細見に醬油の印だと御用　文集
上段によきをかまへて眞木を割り　蝶々
二つ三つ切る眞似をするちんこ切り　汐風
みかん籠霜よけをして苗を賣り　三交
さうち下女たなびく蜘を手で拂ひ　英子
だいぶけつしろと講中吸付ける　門柳

弘法大師の御作なりかけま　三交
同　和笛評
物しづか公家衆のわらし稀な事　雨夕
釋尊は施主斗りでも五百人　矢正
御舞臺の側はしやうなう匂ふ也
家の寶となさばやと錫徳利　蝶々
大地へむだ指をさす京の釋迦　英子
増上寺空に知られた雪ばかり　丸龍
知恩院ふる日に建てた堂と見え　かてう
佛閣も櫻も奈良は匂ふなり　丸龍
ほとゝぎすよりは奥様お待かね　晋風
唐で譽めるは雪の山雪の舟　一徳
文臺の出るは風雅な手向也　桝水
忠臣は達磨の衣色を上げ　玉章
有りがたい百首にばゞアふしを付け　郷山
おふはれた禮は共儘寺號也　矢正
山號は息子寺號は母を入れ　雨夕
ちゝぶ坂東西國を貝へ入れ　窓梅
寶が降りますと簑や笠を出し　門柳
手ばしこくして呵られる金屏風　文集

ほの／＼と芝居も内はからす飛び　門柳
事大さうにほころびる小夜衣　蛇内
水車龍の住むのは花の山　玉章
下屋敷竹の子時分花のうら　同
行水と晝寐の間にはしを懸け　同
もちつと下げてくれ給へとお留守居　雨譚
春なれや娘何かは知れずじれ　鬼郷
二三帖源氏虫賣持つて居る　三交
清盛は佛せゝりを床でする　霞朝
海上で知盛斗り口をきゝ　有幸
味噌をすれには重氏もこまる也　かてう
なから半じやくで仕舞つたは義仲　偶中
母の千聲より親父の一こゑ　雨夕
藥喰見て居る顔のうつくしさ　文集
尻をたゝいて損をしたは秀郷　雨譚
甘露梅へも山形のほしくだり　門柳
年々歳々玉菊は客をよび　霞朝
ひんのよい素見机のうへでする　狐聲
ほとゝぎすしごきの帶のとける頃　素調
早手廻しに鐵漿（かね）親へぶちまける　文集

金言を聞き〳〵銀を廻してる　門柳
四十七つかへば鯉も無常なり　交調
茶器迄も所持でおいらんしゆらい負　霞朝
役者にしてもゆび折の杜若　三交
しらぬが佛お竹どん氣は無いか　雨夕
ふんばると籠いつぱいのきり〳〵す　同
ぢゞイとばゞアこきまぜる彼岸中　郷山
手の内の報謝斗りをお竹する　窓梅
月よりも息子が先へもれ出る　文集
物になる禿郎席喹をつき　雨夕
あねヱは女郎弟は角兵衛獅子　同
いゝかと思ひ尻ッぽを豕はふり　亀水
長髪へ鷲やかゞしを差して置き　交調
生けたごをおさへ助六にぢて居る　かてう
無緣だと見え不斷着な石佛　矢正
髠香を傾城の挾くまづい事　窓梅
そのつらで芥子をかけと亭主言ひ　美德
精進ものゝかなしさはのめぬ也　丸龍
小姑も芝居願はぐるになり　霞朝
心中に竹村札ひつぺがし　雨夕

もてぬやつすッくと立つて帯をしめ　春駒
いゝ鳥が來たぞと松のうへで言ひ　有幸
引出して小鍋だてする飴細工　雨夕
長嬪をさげて淋しい肴臺　丸龍
花を見るつらかと女房過言なり　春駒
中宿へ御用聞者に賴まれる　かてう
くらはせるやうに鏡でたぼを見る　有幸
安漏斗椀へきせるの羅宇をすげ　亀水
下座敷を六部は作り付けにする　美德
かるゐ澤太夫あかねの三つぶとん　狐壁

催主文集

誹風柳多留二十九篇 終

誹風

柳多留三十篇

寶暦七丑どしの頃より　川叟初て萬句合の催ありしより、年々日日のはんえい言葉につくしがたく、一會の寄高二萬五千六百餘員に及びしは、實に稀代の判者といつつべし。其撰の秀句柳樽廿四編に滿ち、五々の編より廿九編までは和笛子の評なりしを、予又古翁の撰置かれし句々にて三十編より嗣編して、諸君の御求覽をこひねがふのみ。

文化元子年　花洛庵一口誌

物着星大たばに出る夜着ふとん
日は西へあつさは石に殘り居る
好色な男はけつく妻持たす
小便も此やしきではこらへる氣
まよひ子の札あく筆ではんじかね
下手のよむ本は鼻からふしが付き

いんろうの中で目出たく毛がはえる
人間の巣立ちなるべし宮まゐり
親の目をがつしき乳母がせわでぬき
萬歳におくの岩戸も少し明き
ひとさかり疏飯(そしい)を喰ひ水を吞み
いとしやと云ひ／＼直切る拂ひもの

晴天に井戸が笠着る下手の鞠
開山は廟所の内のいもがしら
損をするかたへうなづく若ざかり
三人できすならやう／＼五六疋
元日の町はまばらに夜が明ける
空を見てさもくやしげに糊をすり
いにしへは某今は何もなし
釣がねも引卷きさうな長い文
情にてうかむ瀬もなき井戸の紺
いん判のふくさで母は目をぬぐひ
となりさと鎌でをしへる遙先き
いき出しの無い呑口はしやうなき
ほめながら合點のゆかぬ實もの
子を持つてやッぱり親の恩になり
大佛は衆生さゝどの錢と化し
大判は財布へはひるものでなし
よし原の脊ぼねの様な中の町
立聞きの雪に足跡置いて行き
おとがひで額の筆法はねてほめ
書付の下には切れがありたがり

百石を敵に貰ふ向ふきず
殿の名を引摺つて行く後押へ
間男は首を拾つて蚊に喰はれ
浪風も相應にたつ男なり
釣臺もさられる時はひよろつかず
申し子は神と間男するこゝろ
じれッたさ帶をしめれば紙が落ち
宮雀ここにあらはれかしこに出
地謡も共に湯となる道成寺
釣好きは廣い海にて氣をつめる
かんしやくは折々顔に藝をさせ
夫さへ知らぬ所をいしやが知り
おくの手は鎌倉道を知つて居る
うかみ出る時乗物の供に醉ひ
人宿でまだ聞いて居るほとゝぎす
わたくしは〳〵とてにげッ尻
山高うしてたつとがるけんどん屋
大黒を盗んで手桶置いて來る
足おとで二つにわれる影法師
うそと餅つく覺悟するとしの暮

附木屋は腕にまかせてぎッくぎく
穴を出て穴へ入りまた穴の世話
羽子の子をとりにおとなを借りに來る
日向むきいつもかはらぬ蝿たゝき
借金を傘でしのぐで片身ぬれ
貧乏にして大黒は隨徳寺
おはぐろを付けて娘はやぼになり
說法の場でさへ欲のすわり所
しやくぢやうも遣ひ様にてどら如來
吸口で灯をいぢり消す碁打客
藥師より杓子の利生はやまはり
神々の手のくぼほどな山をしき
日本ばし何里々々の名付おや
國々の理窟を泊める馬喰町
無いやつのくせに供をでッかくし
門松は甲に似せて穴をほり
太子講うち氣な手合あらばこそ
松に降る雪は禮者の間ぬけさせ
見に來るも知れぬと顔にへげるほど
三方は片足あげてうり付ける

御内儀の名は細見にまだ消えず
作病もおなかがへればまめるなり
井戸替への日數斗りをかぞへて居
御初にと斗り姑を楯にとり
關守も淋しい日にはもの咎め
掘出しといふ斷りは井戸茶わん
へそくりを子の雷につかまれる
遠山の裾に綿かきのまうけもの
のしになる蚫の貝のふたおもひ
子のやみに油をさしつかきたてつ
しまがらを見て反のまゝ肩へ當て
菅笠の紐があくびをちつとさせ
蚊やり火を給仕の盆で消して行き
見めよけりやするほどの事御意に入り
竹槍は切落しても元の槍
うら白が草ずりになる具足餅
夫婦旅聾は道づれ夜はなさけ
琴爪で灸のまはりをしらべさせ
共譯をかんでしまつてぶッつける
鶯がよければ籠に慾が出る

言ひにくい手をもちやくちやに畏り
擔いだはうそ手を引いて逃げた也
一のもり喰うた樣なり鯨帶
紙入が胸につかへるをりこゞみ
さしがねで寐たり起きたり轉げたり
晝過の娘は琴の弟子をとり
口紅粉が時々殿の耳に付き
まッ黑に烏をつんだほしか舟
大判を一分に崩す餅むしろ
失念といつぱりつぱに生根なし
振袖を船にして行く勝きしやご
親ゆゑに逢うては出ぬ物狂ひ
千心にふしぎな男側に寐る
かんにんのとこには棒が邪魔になり
羽に判の有るので骨が叩きよし
獵人の念佛は玉のそれた時
朝鮮で引きぞ煩ふ桔梗の根
仕送りが付くと御妾おんだされ
江の島の掃除は浪が箒也
傾城も誠になればひれが落ち

女郎から樽同前の文を入れ
腹のたつ時は笑ひに念が入り
出る顏が居なりの顏へあてこすり
おはぐろが付かねば顏へ皺をよせ
御亭主が留守で鰹を手負にし
料理人客に成る日は口が過ぎ
狩人の下手に村中棒がふり
火繩をば買はぬとたばこ身にならず
我戀は札錢出して顏を見ろ
請狀が濟むとかひたい物斗り
あら打に左官ばかりはほんの顏
樽酒が德ぢやとおもふたはけもの
殘る蚊のはかなく顏へ行當り
秋風の寒く吹消す宇治の夜
朝顏は酒の呑まれる花でなし
摺子木を市から市へ喰ひへらし
顏に火を焚いて祭の鍋の數
樹々染めて寺を寺にはして置かず
二三間先から内の脉を見る
人に言ふ異見を聞いちや一人前

籬ごしのみやくは病の綱渡り
雲の帶ほどけて山はまッぱだか
色男いまだ大家に預けられ
舟ちんの外に茶ほど釣つて來る
虫の音にもう冬の氣が女房付き
片かげが付いて出かける涼舟
衣屋で見ても氣のうくひぢりめん
元日の規式に隙な汁のわん
身代はなくしまゐらせ候かしく
かしあげの砂は天地へ身をそがれ
切文を見て居る顏は顏でなし
芝居になる前表宵にげじ〳〵
ふん切つた事も知らせず四火をするゑ
取卷いて雪乞の句をよみなんし
叱つたり笑つたりして金をため
鷄もなけ鐘も鳴れ〳〵振られた夜
振袖の引込ちゑはむごい事
鶉から土間へ仲人指をさし
初陣の人から先へ見立てさせ
針仕事手のかるくなるほとゝぎす

大黒のすねをかじらぬ大三十日
雛店ではづかしさうに直切つてる
是程と言つてきせるの尻を出し
細見に素人は細く店をかり
御物見は皆とッときの顔斗り
言立てにする裸身の美しき
うしろ見にあやふく見える茶せん髪
掘出した佛を錢で又うづめ
大黒の住んだ一間は在家めき
入れ所も有るに乳の下やぼな事
負公事の方へ娘は行きたがり
傾城のりんきははさみさいく也
傾城を地者にするで地面うる
一夜に染めた紫は黄をうばふ
干うどん夜伽親わんにてくらひ
人別を目出度い事でぬける也
ものゝけがよし町へ行くむすこづれ
内裏造營四分板と小割なり
わるい道手が板べいを歩行く也
地紙うりがまんが過ぎて風をひき
天井を物置にするいしやの内

げん俗をする弟子を持つ松が岡
目と耳はいゝが口には錢がいり
翌日むすこ五六人居る髪結所
川立は川御妾は産で死に
居眠を覺ます遣手のせきばらひ
立膝でうつはかぢやの亭主也
十露盤で貰へば嫁もげびる也
物着星かたみを貰ふなさけなさ
ほころびる命を歌でぬひ直し
谷汲で親にはなるゝやうにぬき
色事のけもない時にいひなづけ
車引咄をするにふしをつけ
毎日々々灸をばあしたにしよう
がらくたをづんで隣へおとづれる
細見にまでのけ物の樣に書き
あかるみへ出されぬ者を呼びたがり
月のうそ天にいつはりなきものを
下女かごの鳥だと文へ書きやァがり
人寄を百人すればひんがよし
氣のどくなあげまり四人隊になり

獨り乘る舟は思案の外を行き
持つたのでむすこ仲間をはづされる
口々に妾をにくむ御大病
ふみこたへ〱して姑死に
白むくを着てすみッこにかゞんでる
糀屋の内庭土の牢が見え
一月斗りけいこして寺を出る
さつとした瀬戸物夜の市にうれ
鹿を追ふ獵師にたいこつきまとひ
いま〱しいふくの神は持參なり
面壁はかざり御門はかざりなし
四つ手駕まがる目當ての榎木也
生醉も祭の後の賑やかし
髪が結はれて餘の家へ又通ひ
月花も其内にある一かまへ
ふの切れた傘やつと貸してくれ
おとで向内に針箱かゞみ立
這入つてゝ造作をする乘物屋
文を書く側に淺黄はぶッ倒れ
瀬戸物屋ほどがらづかす南禪寺

さむがつて質屋の見世でだゝを言ひ
病人を取寄せて見るはやりいしや
つぶれ前ぜげんまで來るむごい事
尻引つからげ立向ふ下手のまり
大手は甘酒からめてはかるやき
道具屋にあるのはにげた具足也
大三十日儒者平仄があはぬ也
母をころすか嫁出すかとむすこせめ
出した文みんないきるといゝしまひ
嫁がのろひ殺しまするすると姑やみ
まけをしみ骨と皮との馬を見せ
御殿山むなしく歸る所でなし
傾城の世話のないのがほとゝぎす
戀の盜みをさせぬからやみいだし
槍はさみ箱で道具屋店をかへ
女房にこび付いて居るみぐるしさ
獨者死ぬとぬかみそまできらし
よせ本を三(さん)の糸にてとぢる也
三味せんもね糸になつて流行る也
船べりへ吹殼はたくやす涼

はつ鰹どッさり來るとげびる也
傘をさそならかすがのはきつい事
首などがぬひ付けてあるいゝ干物
武夫をやめ百人の列に入り
簑の市斗りは江戸をあてにせず
八朔は百姓よりは苦勞なり
調合がさつそく出來た夢を見る
ふんどしもいらぬとむりに貰はれる
通らねばならぬ所に禿居る
朔日の雪物さしでつもる也
交り見世一分うや〱しく坐り
船頭の足音を聞くいゝすゞみ
えり人で据風呂桶をかりにやり
ちよこ〱と逃げてかぢやの火にあたり
もつれ糸おへなくなると嫁にやり
竹馬の馬子は古着をうつて居る
あくまでくらひとちぐるひ二ふん取り
鳥かごの木になつて居るくみやしき
きん句だに禿雪こん〱と言ひ
返答はどうだといへば春の事

ひきながら三味せんはこぶすゝ拂
四人が皆がつ〱と膳につき
うせ物は存ぜず湯から娘にげ
嫁よんで直をするどらば高が知れ
にしき繪と墨繪と行者持つて來る
三だん切つて一(ひと)切はさじみなり
よ火をするゑやれとおんべい母かつぎ
業さらし日本の地へ二人(ふたり)出る
月の前かこち顔なるうれのこり
どこへでもくッついて出る馬鹿亭主
はな毛をのばし取膳でくつて居る
ちひさな腹が踊子の病み上り
内甲見ぬいて質屋かさぬ也
かやの聲かすかに聞いて雨やどり
にえきらぬ内に中屋の藏が見え
川べのめり落ちさうなが名木
青空がなくなつてから花はじやみ
ごぜがつら所存が有つてはらぬ也
手ぶつちやうかやに乳房を二つ三つ
不屈な智恵生酔に金をかり

精進けつさいをして法狀をとり
谷中への年始三日と當てゝ置き
くどきいゝやうに若後家とり廻はし
應仁は山と川との軍なり
扨珍らしいたいめんで傘はない
中の町傾城に威の付く所
見定めるまではほつても嫁いはず
歌のちんが餅だから詩は酒だろ
江南の花北國へ三年うゑ
鳥さしは一先づひざり笛を吹き
ふられたらおこも〳〵と內を出る
市二日むすことうから仕切どき
御むかひは先づ嫁からと願つてる
衣桁にはいつぱいたんす何もなし
きのふまで白いやうじが黒く成り
惚れられるほどは殘して後家の髮
鈴の音をとこをよせる美しさ
よし原で雀といへば戀に成り
俄雨嫁をくづすに人だかり
こびり付いてゐるのと誘出しに來る

さゝもあがりますげにと姑いひ
杖にあごきけて木ちんを直切つてる
おやぢのつらが十有つてむづかしい
寺號とは大まちがひな紅葉なり
いゝ年をして傾城のじやみを買ふ
引導最中玉だの丁子だの
顏はうつくしいがつらはにくい也
さつとした婚禮仲人ひとり者
町人のげびは座敷へ藏をたて
名付たりあたりで盃がもうくもる
借のあるやうに萬歳國をたち
ぶく〳〵として改める瀬戸物屋
兼好は毒だといふが呑めるやつ
見切らぬと果てしのつかぬ渡し守
めん服で居れば禿もこはくなし
春は姉夏はおとうと尾張町
研ぎすまし胴切にするちんこ切
眞ッ白にするので重い衣がへ
なぶられた腰元ちんをけしかける
內證へ入ると傾城あはれ也

三味せんで土手八町をつき直し
虫干のはなッぱりには嫁のもの
傾城の氣ばらしになる後帶
立つて居る樣に棧敷に角力取
ほめ言葉役者ひや〳〵物で居る
をしい事さられた年に姑死に
おはぐろに禿手なべをさげて來る
待人來らず大師へ參るなり
をしい事盲つんぼういせや也
結納を茶屋から申し訴人する
ちよッきり一寸した舟へむすこのり
にくい事御離緣の使者妾が兄
昨夕には霧翌には舟と言ひ
じやうはりが有つてせつない御椅上け
麥二めん座敷の內を廻り道
うぶけた傾城知るよしが來てあげる
毒と書いてもすばらしい直段也
三味線のかはりに枕取出し
夏の月其夜半分ほめて置き
長唄をまへびろにやめ廻ります

三年は男日でりの旅へたち
母をせびつて行くうちは人がよし
よし原へ夫婦して行くつぶれまへ
日にやけた男御用に何か聞き
浪間を分けて緣の無い寺へ行き
傾城の尾羽打ちからすいゝ男
砂をはたいて居る内に馬見えず
こじきかと思へば四つ手かりて居る
何宗か知らず和尚が雛をかひ
袋棚何も無いのでげびぬ也
傾城をかける秤は京になし
娘でも居るかとまづい夜側也
御内儀が若衆になりて皆な惚れ
いゝ夢を見て粟の飯まづく成り
材木はまうかるものと遣手言ひ
御美しかつたさうだと後妻言ひ
二三俵あたまのわれる人がのみ
一時(いち)にきせるをはたく供ぞろへ
びいどろをさかさまにして嫁はしひ
から傘をかして泥坊よばりする

鮎ともろ共に踊子さびるなり
智恵の出るまではきせるを廻してる
負けぬ氣で惣花を打ちそれッきり
こび付いて居るのを御さい引出し
をしいたんすを傾城はあそばせる
双ぶくらで芋をむくのが花の宵
大あせで天上人を相手どり
むす子のたうげは八月がむづかしい
金のなる木を駒下駄でながめてる
ことのはし後家へ小判のかたみわけ
にえきると四つ手はさけび／＼かけ
どつからの文と内儀にもぎ取られ
細見をいせやはとんとかへり見ず
夕立にさしかゝつてのむしんなり
けちな晩廊下ばッかり音がする
待針で手をやたらつくくけならひ
花色の褌をするどやのかゝ
後帶前へまはすと氣さん也
請出されからしりに乘る輕井澤
桶が來ると箒を内侍立て

芋の親嫁にはゑごくあたるなり
きやく様のうでが鳴るぞと輕井澤
お袋をくるみばかして來た紅葉
遠乘の供ひとりふえ二人ふえ
梅花を折つて武士へ出し恥をかき
絽とちゞみ斗りおつゝく金屛風
聖人とむすこ此頃中たがひ
浪風を山にたゝせて名歌也
四民のいッち上(うへ)に居てもてぬなり
鳥のない里で一(ひと)聲繪馬が鳴き
あたら物ばい女にしたは高尾也
よしの勢しづか玉屋へ大一座
ふきぐみを姑はにがい顏で聞く
三つぶとんぼん女の及ぶとこでなし
笠紐の痕がと内儀久しぶり
乘りつけぬさうで附木を籠へ入れ
よく見れば四つ五つある美しさ
馬付の花うりも來る雛まつり
傾城のたんす飯時あけるなり
床花をうらへ取りこしもてるなり

ごふく店天命しつて女房もち
まッかふへかざし木具屋はへいで居る
きつとした形で瓦をしろとうり
よし原を一見せうとたはけ者
振りは九よ留めは三よとてんがい屋
としよりの冷水うりははやらない
琴もやみ歌がるた止み氣のおもさ
三太郎四五人でかしうけ出され
親父の耳へもれ出る月の事
女房ととちぐるつてるひやうたくれ
椎の實のからは袋へ入れてすて
色外に顯れ四火を止めにする
目の玉が十づつよつてわるくいひ
琴柱程榎木を越えて緣に付き
湯島おろしにばち音も交つてる
盗人こんじやうあばたへ文を付け
はだか人形美しい嫁かざり
出格子をひつしよつて行くばかな形
堅いはず御門は石でねだは鐵
早いはず四つ手にひとり先ばらひ
杵屋とみゝ屋しやうばいに似合はぬ名
けちな事素見とび込む水のおと
俄こもかぶりを共角こしらへる
うろたへて座頭に評をかくす也
こがね虫よりはだか虫むすこよび
千ごりを取る内衣うばひとり
勘當をしても母親ゆすられる
ごふくやも女房の有るはげびる也
をどりさい中門やぶり〳〵
金屏風札をうるのでげびるなり
二つ三つ廻して手斧つかふなり
日を追て大へいになる九百兩
向うのひとゥの跡仕立屋アなり
歌がるた乳母は十まいこみて入り
はまぐりは桃のみやこをふいたやう
わらびの中にいぢの有る墓二つ
顔はさるからだはぶたで持參なり
十ヶ年有餘ものびたむすめなり
名の高い村木屋紀文とよくま
くらがへされてけがあつた姿が見
聲色のけいことなりでべらぼうめ
持參金せないとおもてさたになり
三會目には正躰をあらはせる
むりな事ひとり居なよと女房死に
男といふもの千日見ずに居る
推量の通り八百屋の唐のいも
きまぐれな隱居としまにせうといふ
女郎は付廻はし客はつけのぼせ
あゝらやうがましやと百座でしやれる
山谷舟一寸さはるとあの世也
こんにやくをぬくと重づめ百ちがひ
一廻り一分餘につくわりになり
佛師屋をしても惠心はくへる也
一生けんめいの聲を出すえゝふしん
京染も六十帖は美し〳〵
上天氣寐と三味せん先へやり
げきりんの樣な御顔がうれのこり
鈴の音にうまみのぬける御着帶
ありがたさ錫やるまいぞ〳〵
業にまかせて五畿内をそゝのかし

射落した後はけだかい人だかり
どなただえさうは明かぬと花のるす
八千をのけて其餘は京で鳴き
二人(ふたあり)へ二度に異見はじひなこと
殿までのちじよく刀を置いて立ち
米相場ゑぼしすはうでたつてゝる
しかたなく米屋かぶりにむすこする
辨當のふたへつくしで書いて見る
身うけがおとくと番頭さすが也
雉の文候べく候に書かぬなり
されども此人そうめんやたらくひ
三味せんを折る程のまじはりはなし
勘當の内江戸中でかみをゆひ
いろは茶屋にて女郎をかひならひ
晝行けばかまはぬ歌はたつた山
やぼなあそびは茸狩に男舞
ふりのあみ様〳〵文をふるい出し
そッちへ行つてゐろとお袋金を出し
せき候はあら心なのものもらひ
けし坊主とう〳〵えらい國をとり

肴屋に一分の首をおとさせる
くたびれたさうで姿をあすしまひ
頼政は水たくさんなうたをよみ
火のきえたたとへにもれたにぎやかさ
中宿は上封(うはふうじ)して持つて來る
あてもなく煩ふ娘十八九
言葉たゝかひことをはり去り荷出る
よしの山引つきりもなくほめて置き
となりの椽の下で糀をつくる
孫六はむこ引手にはよいかたな
乳の出る女房をあいた口へよび
用のあるなりで折節じやすゐ來る
勝にげでひんのいゝのは陶朱公
切落し火打を出すは八ッ下り
二虎食をあらそひくつわ金もうけ
いさゝかな渡ししろちと舟をこぎ
から傘をぐる〳〵廻し直をつける
あらしの庭へ雪のふるおもしろさ
袋の弓の出ぬ様に御注進
十五日の御ざんねんを十四日

江戸のはり三會目には
門の戸へ大入と書く旅のるす
梶原は歌をよむのがめつけもの
友だちに寐るぞ歸れとひとりもの
御内儀をつめりおどけにしてしまひ
貰つたかしてぼたもちにかどがあり
こんぴらの神酒をひらいてはぜを釣り
辨慶とあてたに干だらくりやアがり
うるさくは米かし桶と手紙來る
はたらいた僕傘もかり下駄もかり
角兵衛じしどこで死んだかげせぬ也
八まんの前をすた〳〵明智にげ
兵法を知らねばわるい目つき也
公家の長柄は八九寸上をさし
かはづの三郎大磯すけん也
たんすにもありんすといふふぜい也
むりなこと富の取れぬをはらを立ち
きほひの身あへてそこなひやぶつてる
かどひしがあつていゝのは火打石
ひかへろ〳〵ともぐらもちねらひ

一つぶとんへぶつすわりいざを言ひ
文使むすこがるすではじまらず
赤ゑいてひッそりとするおやくゑん（原文のまゝ）
二人扶持妾こそぐり出だすなり
神風にもらこりはてゝうせぬなり
利がねの下女を御かみへおして出る
内くらへみつじに四十五人來る
うらはかへして中ぬりはにげる也
一の資ものはお竹のうけ狀
寐た人をさじでおこすではやる也
間男に女房の年が三つ上
御生國御寺の名までたん生寺
稚に牛をもちゐねてんま町
荒木をもしたゝかふんだ初衛門
米つきは箸をしごいてくひかゝり
いも神にほれられ娘直が下り
繪の樣に扇が谷を四五羽まひ
はやいこと五十三人手ぐりなり
むらさきの石のすゞりで書きのこし
地名をば其まゝにして花の山

大王を百姓にもつ御大ろく
仲人がなれば一萬二千兩
駿足のわが刻限に鶴が岡
大黑の御宮は錢の出たのなり
ふり袖をまるめる側にいゝ男
ありがたさふだんの帶をしめて居る
根のはえたそさう三十六丁目
とらはれの入札になるつらい事
外ぼりをうめると四つ手まだはやり
六百九十ほどじどう若く見え
花の宴もみちの賀をもむすこ好き
おんみつを不二のふもとでつぼねいひ
空にならつて名月をへんがへる
間紙をしこたまあまし叱られる
結ふ度に丈長をたつふたしなみ
殿にいはせて美しく知らんかほ
おッかならしい札のある日本ばし
雙六とれいしの側に美しさ
そうめんの邪魔して洗ふ硯石
あやふさは花と芝居と首ッ引き

國みやげにと見倒しがうしやあがり
めづらしさきく一聲も百歩一
燈籠の後は傾城八九なト
屛風倒れて御はつかと嫁はいひ
一本づかひの武士二きでおつちらし
いたづらに智をさそつてよわらせる
笑ふ門泥坊の來る市二日
素讀と豐後となり同士べらぼうめ
いさぎよく白むくを着る五丁まち
片じまひむすこよッ程ちゑがつき
みンなめすならとから手で下女は來る
ゑんせうを玉屋はおもしろくつかひ
うそも少しはつきますと女衒いひ
よし町の尻を旦方までくらひ
亭主は三めぐり女房はうたぐり
水滸傳酒を呑んでは目をまはし
中條へごさいの女房つれて行き
片そぎの宿へ辻番手を入れる
別に穴あけぬに娘きずものと
切上げたたらひふんどしつけて置き

賓惡をしあてゝ後の女房來る
桑の木の下で女房をめつけ出し
またおれだなどと切つてる番たばこ
御立身雨ふらぬ日もみのと笠
こはい物立ぎえのした鼠なり
人面獸心油揚をねだり
七夕に無筆こよりをよつて居る
足代を引くと地主の無心なり
土器の錢後へ來て下戸はらひ
居なじんで此頃は花ものをいひ
こび付いて居て補に留守といひ
いふもさら也ばん町でむごい下女
けんをけんとして上戸は呑んで居る
どうで見せねばならぬ齒をかくす也
女にあてられ快氣がむづかしい
やッぱり鶴のよはひ程御もの入り
御手かけの指十指よりこはい也
こぬ人を入れ百人につがふする
ふけい氣な顏を高尾がしても來る
子どもよッからかさかして上げろなり

さッき見たはんにやびつだに阿房共
がくやのばくち鎌倉の諸大名
五六日ゑ桝のあかぬきつい下戸
おそろしき中條金をかすうわさ
あのにげるざまはと張飛又名のり
はしごまで御むかひに出るけちなばん
つか〳〵と這入つて升を引つたくり
さかやきそつて髮ゆつて質をおき
間男は此はしらだと官女いひ
下手のけん手水をかける樣に出し
女房にあきやるなよとたはけもの
あけすけでやるのが女房きついみそ
あぐらをばやはり〳〵旅見まひ
大たばに褄をとるのは中の町
小べんを女のざいにひよぐる也
ねぐるしのあしたひらめが大さがり
おし入で聞けば此さうりはだれだ
げびた戀寐所へそろり〳〵はひ
よし原は朝日品川夜のみだ
うそつきの御師匠ばん三分なり

業平にされたははぢにならぬ也
地黃のむうち間男が出來るなり
ふだらくの岸うつ波をのりこえる
したく金來てはきだめを鶴は出る
唐土にないのは山の四方めん
開く時いなづまのするよい屛風

誹風 柳多留三十篇 終

誹風 柳多留三十一篇

此編は一口子の志を繼ぎて古川翁の撰みし神社奉納の額等の秀句高點を集め、末に和笛追福の句を合せて三十一編となし、諸君子の高覽をねがふのみ、

文化二丑の秋　花山麓　玉章

たなつもの持つて發句の禮に來る
かんばんに生國を書くいゝ男
雲中に雪をせり出すよい天氣
生田流華陽夫人が引きはじめ
姫の氣に合はず高尾は所がへ
田毎程けいせいの出す月の文
賴政の後家が通ると茶つみ云ひ
せんすゐと築山夜の間に出來
きつい事あやめの題で一首よみ
百社をうつたあしたから狐つき
ちッとペえ何かいはしつたれば降り

凡ならぬ早乙女お住お吉なり
とんだ事夜中にお取たてが出來
六玉川ひとつは男せたいなり
當分は嫁にげ込みにかゝつてる
ほゝづきの仕上に遣ふつまはじき
藏宿でかりずと來なと高尾いひ
つむりてん／＼が十兵衛むねん也
びいどろの中でおよぐをねこねらひ
さわ栗の下駄で通つた方がもて
飯時やかみをゆふとき藤太來る
ふく將に金がなくつてろけんなり

古里寒く大めしを喰ひに來る
見所が御ざるとやぶ醫四ふくもり
まんぢうは喰はず阿部川もちはくひ
い印へたのめと內へとゞけもの
いろ客だなどゝ新造をいやがらせ
琴の師の守り本尊十三夜
ぶをとこは尻をわるのにかゝつてる
よくそさうなさると婆々ァ帶をさせ
江戸半分はむし干しの金屛風
殿さんと只の家老はこはくなし
時鳥なきつる方は北野なり
花の雨ぞんじもよらぬ女客
赤はぢよりは白はぢのつらい事
初午に丑の御前はいゝついで
いゝ子だいつて遊びなと娘出來
氣が氣ぢやアねえのに笑ふ年の梅
雲井に笠があらはれて芝居也
大黑をおがみ蛙のはなしする
むりな意趣おつこちた木を根から切り
いろ男百の內では神祇なり

神田川堀わる人をふり通し
此雪に御苦労ときに悴事
おそろしさ釘ぬきの入る病なり
おまへはおまへはとむなぐらおせきとり
江戸のあたごはなげずとも町ですみ
わび事で師匠から出るなきッつら
安仁者坂で車へかたをかし
待ぶせは髪切丸をとぎすまし
つらあてにこゝろ盡しを嫁しらべ
市川と杉山紙代が四もん
直きにまけたで女房はちッと買ひ
項羽が伯父さまと子房こん意なり
和かんの瓶わり温公と勝家
しやうりまいかぶッかちりを連れてくる

春秋にあかねぶとんをねだるなり
十二文が酢を下戸にふるまはれ
夕立にうれいの形で女客
ふく神はするを見玉ふ二日の夜
はきだめへ鶴おめかけのおなかなり
虎が墓もろこし原の近所なり
川どめの狀を二人でよむにくさ
色このまざるは關所を越えて行き
道具屋にあるのは逃げた具足なり
南北に新都のできる賑やかさ
鶏ではじめ鳳凰舞ひ納め
天井を物置にするいしやの內
わるい道手が板べいをあるく也
目と耳はいゝが口には錢が入り

げんぞくをする弟子を持つ松が岡
初午は男禿にせわがやけ
花の山ごぜ杉の木の方をむき
那須野をさしてふりかへりふりかへり
文左衛門けいせいにちともたれぎみ
松茸の夢こんれいとうばはんじ
尻ひつからげ立むかふ下手のまり
大くぜつかこひ一枚起證かき
はこ入をくどきはじめは亥の日なり
よし原のつぶれた夢を母は見る
人しれず生酔座頭目がすわり
頼光へ出たはさゝがにどこでなし
はんじやうさ水も四角に地をむぐり

武州川口天満宮奉納額面句合

地下は桑原大内は桑の門　芹　丈
比叡颪よく朝閑けば妻戸沙汰　門　柳
僧正の鼻はその後たかくなり　口　喜
大名の手せんじ利休させはじめ　丸　龍

あく筆の後悔蝉やとんぼなり　若　竹
丸綿で黒ねこをなでいとまごひ　鼠　弓
勘定あつて傘はたらぬなり　千　鶴
鼠の外にのうのあるからす猫　岸　口
馬を飛びじやりをけたてゝ四つ手駕　亀　遊

野にばかり紫あつてさへぬなり　鼠弓
天顔のうるはしからぬられ殘り　芹文
娘どしかけにしてとる千早ふる　清江
萬治いぜんはどらうちがゆやで出來　狸聲
勞咳の譯を聞きほす極こんい　川長
千雨のつゝみはむす子からくづれ　同
かけこみの嫁もみに出るはなし鳥　如雀
かはり錢やりてのこしに五六文　川長
庭は付けたり帳場へのあかりとり　龜遊
見世開きあつかましくも戸をたゝき　一馬
をかしさは古歌を吟じて百棧敷　五連
書いたもの物をいつたは北野なり　美德
かくし引出しへ入べきものはなし　五鳥
これからは楊貴妃櫻だとそびき　洗路
鳥が九羽あやふい所へうろふ出る　玉章
吉原でひにんのさうをはたす也　洗路
泥中のはちすほつてる寒い事　露舟
おめかけのきんげんばかり御もちゐ　川長
寢つゞけの蛇の目さました名歌也　若竹
いきてとぶ柱のできるあつい事　龜勇

しよいつゞら紺屋ほし場が遠く也　門柳
三味せんのまんなか頃へはしをかけ　曾木
けいせいにふくりんかけた御奉公　露舟
神事ないゆゑ橋がたいこなり　貴柳
そろりそろりとわらはせる新左衞門　錦州
にくい事けつく便りの多い後家　一馬
川口へ吉野ののぼるさむい事　口喜
本とうの醫者になりなとしなだれる　若竹
しぶ柿は來年くふをむいて居る　千鶴
かこはれへくる法類はごくこん意　門柳
きくは聞いたがくふ事はなんとして　湖水
お十夜はあんじる程の旅でなし　豐好
よめる人にはつりあはぬ網がすき　姫小
つめらうのやうにわいわい書いておき　錦州
春の雪せいかい浪のなかで喰ひ　洗路
ぐわんぢやうな雛は是ぢやと村の市　丸水
江戸のまつらがたに駒をとめる石　狸聲
五年たつてもふしんせぬのも不孝　露舟
子をもてば白魚迄がまづくなり　芳童
湯女のへあがり與中でにくまれる　玉章

ねれるのをたのしみにして笛を吹き　串柿

麻布神明宮奉納句合

神慮にも御苦勞のない木曾路なり　和笛
一ケ所は和かんへひゞく時の鐘　門柳
駿河へは九引いて近江一殘り　門長
逃水を追つかけて來る文づかひ　五連
ロあけに忠義なものへ酒をうり　寸魚
人のおもてしろ／＼とむすこ不首尾　和笛
おぼえずとよいに猪牙船乘りならひ　五扇
名代にいつつけられるげびた事　若竹
むす子のかけとり大方舟で來る　同
ゆきたけのたらぬ羽織をはふり出し　清江
撿校になりかねるはず人がよし　若竹
夜るよ中仕立おろしとはふりだし　五英
やつばらをかたづけに出る國家老　若竹
おもしろくないと親父はきげんなり　姫小
百兩を男からとるうつくしさ　五連
まんろくに城をしてゆく國家老　同
百兩で一生あかんぺいをされ　晩器
其つみをゆるし呼びかへす美しさ　柳順
居つゞけをとなりでしかる一人者　五連
はんじてはみたが藥師寺きのどくさ　同
かはいや寢顔みてゐるもてぬやつ　同
つらい事八九の蚊屋へひとりねる　同
きもの大きさ斗のごとく二度月見　雨譚
ゑちごやを又がしにするにわか雨　魚交
家業づく四五年むりな袖をふる　門柳
花を見てたゞすみますかとほつごん　雨譚
おそろしい車に九十出して乘り　夢中
野や草を江戸へ見にでる田舍もの　丸龍
二十四さいたる染羽の矢とむすめ　川長
ころんでもよごれねえのが名句也　蔦故
袂をしぼりお久しうござりやす　玉章
つまりんせんが寄合うて書いて居る　五連
いそがしさ三百五十四五日め　川長
廣い江戸すて小ぶくろへ嫁はいり　雨譚
ばんは古市だと石がものをいひ　和笛
米の直を下げたも二人(ふたり)百に入れ　若竹
ざんぎり本多のゆひちん一分なり　雨譚
大師河原へつれ立つた七十五　清江

ついそこへ來たとははたりにくい貸　丸水
ほんとうに紙をやぶるは小松殿　如雀
なんのかのとて大門へそびきこみ　和國
大綱小づな十もんじあつい事　川長
雨やどり貧朝ばかり一人まへ　狸聲
必よした乘りはと送りものがいひ　清江
座頭の枕にはなれたがづわうへい　暁器
行燈とぼたもちは大きなところ　和笛
はかまだれ馬どろぼうでみそをつけ　洗路
笠のうりだめ熊坂ねらつてる　五連
十三里先きで男をそしつてる　風車
まあちつとねきへつけてと手代乘り　由香
雪ふりにごくべつこんな客を呼び　玉章
松の内手の大きいははねだされ　丸水
せいろうで島がくれゆくむまい事　夢中
お生さんお田さん來なと琴を出し　可候
ひよい〳〵と帶をどらせ下女はかけ　五連
あつい事牛王を菓子屋みせへ出し　玉章
あの榎から飛ぶのさと野掛いひ　柳雨
刀かち手もなくひぢをおぼえられ　丸水

四郎兵衛に非番をさせるきつい事　露舟
じやうだんな堀のみそなどすつてみる　若竹
玉子のつとは玉子と見えるなり　夢中
やきもちの供にはたゞのせうゆしへ　同
ぬり立つて下女さそふ水くみにでる　五連
たゞすの涼み十兵衛で大さわぎ　芹丈
大めしを喰つてるとこへ岩が落ち　洗路

上總國長者町地藏尊奉納句合

二十五の内でしれよい御すがた　如雀
したく金來てはきだめを鶴は出る　川長
もろこしにないのは山の四方めん　芹丈
三つゆびで手まねきをしてにげろなり　三丁
殿さまの外は殘らずむかふづら　未學
開く時いなづまのするよい屛風　夢中
此上もたき上田に五たんなり　未學
劍術の間に竹の稽古なり　同
きぬた出されると夜ばなしかへるなり　丸水
うそと思ふと女郎買しまひなり　串柿
しあんがでると男ぶりぐつとおち　文集
定家卿地藏尊をもえらみ入れ　玉章

あべこべさ公家衆を歌でいひこめる　同
一度かたかへるとふみが袖になり　如雀
せい人のうそは井戸から錢を出し　文集
御城下の名も名月にさしさはり　芹丈
撿校と座頭のじぎに人だかり　柳雨
蛤はすふばかりだと母をしへ　柳順
花の宵狆のしたくも二尺ほど　串柿
不男の娘の居所訴人する　姫小
あつもり及きぬうりもゑからうする　洗路
幽靈の月見をたのむこはい事　車道
とびらひやふくをあんちするから簞笥（原文のまゝ）　芹丈
わるいはず雨うでになる嫁をとり　車道
さら地ではいや番町のやしきがへ　柳雨
一ッ束の柿八十五むしッくひ　門柳
ほめぬ事世間のひろい女なり　文集
百人に一人（ひとり）はさいのかはらなり　芹丈
かんじそこなひ犬のしりをがんでる　如雀
大山へどうか試合にまゐるやう　紀鳥
つくぼうさすまたぎゞとして觀世音　洗路
二三本座しきにあふぎ明けはなし　三丁

夜具のむしんは云出すも安大事　串柿
しろうとのうるし置き所やかましい　如雀
かりるには悶なす時はあらゐなり　門柳
もう匁（め）にかけさうなものだと薄雲　雨譚
金箱に灰吹のつくとんだとこ　串柿
履物へ灸もすゑられぬと高尾　洗路
主人相しらず番頭藝者なり　雨譚
よくよッかゝるぞと下戸はうるさがり　由香
吳の國で目ぬきの男伍子胥なり　洗路
蓮のどんぶりへ護國寺水を入れ　門柳
淋しいよふはい御ひねりまとこ上げ　鼠弓
出來立ての男をなぶるいすゞ川　東水
江戸にないのがやつこと五月女なり　串柿
廻りどうろう四萬六千人　同
先箱で來るを留守居は待つてゐる　柳雨
よび出しをほつたてじりでかつて居る　玉章
ふとどきさざい家のあそぶ所へ行き　三丁
ゆどのさんへ願をかけて御手がつき　夢中
巧言令色で客すくなからず　來賀
うんと云ひなんせんとつめりんすによ　文集

八朔に四郎兵衛しごくよい名なり　柳雨
羅生門六位長柄を持つてくる　狐聲
百人のすけて七夕はやくなり　洗路
ゐざりのかけたは資朝はつにみる　如雀
ぐわんといつてしまつたのは鐘供養　川長
えらしりをならべ庄やの田うゑなり　和笛
つき出しの御用木綿のもやうもの　芹丈
猫をなでるを里の母見てかへり　窓梅
精靈もこつさに錢の懸るもの　唇虹
ようござりませうと馬くろこしをのし　柳雨
ほり出しをする氣で五町中のぞき　狐聲
先ぐりに去状のくるまつがをか　未學
洛中でたんごの袴うるさがり　窓梅
質屋迄表德のつく粹な事　串柿
論語はしらぬが細見は講釋　五連
麥めしがいやで身うけがばれるなり　唇虹
とぎやかとおもや大工の入るしごと　玉章
あつい事じやかごの中へいもをいれ　霞朝
入鹿を〆めた此かたはかまがきれ　洗路
むごい事二へうこさへる村のふぎ　門柳

仲人はあばたの事をいもといひ　三丁
片月見せんものすけん八九人　蔦故
火けしつぼ一つにふたを五つかい　一柳
だて風は高尾がむねに合はぬなり　洗路
手おひや脚半で女の淺黄出る　同
きつい事二十里あら身だらけなり　口喜
孔明が彈いたも生田流と見え　如雀
宿帳をつけるとみんな御いしや様　串柿
はらからに迄御姿は糸を引き　芹丈
うすべりの縋を廻國たれて居る　玉章
けぶりのたえぬ箱の有るじんしや也　芹丈
持參金口が二つ多いなり　夢中
五文目ぼしへ米を入れるあら世帶　雨譚
人丸の苗字へさをを持つて來る　狐聲
くへもせぬ柿をしぶやの伯母がくれ　芹丈
人のうれひをよろこんでむす子出る　窓梅
釜をぬすまれたばんむす子大もて　如雀
すりこをばふきあはせずがなめはじめ　串柿
もめるはずさられる工夫斗りする　文集
へいごしに七つの娘見えるなり　夢中

人先へちやんとしたくをせきやする　如雀
こはくないはき庭のあるけん長寺　窓梅
開眼をすると一休ぶうらぶら　串柿

田畑村早川普門院寺内西行庵奉納句合

あみだ道西行庵はきつい事　洗路
さすがおく樣御花見のねだりごと　和笛
十七里先きに淋しい名を殘し　名木
三味せんの千てうもはれさうな猫　如雀
のまぬやつ辨當くふと花にあき　串柿
傘どこか貴樣は貴樣は貴樣は　洗路
二つ三つくしやみの上をほとゝぎす　魚火
はざくらはすてものにする中の町　宿禰
色白ではなすぢ通り金がなし　同
金をいかして遣ふ客身にならず　露舟
めづらしさ雲井はるかに聲がする　狐聲
のりきよといへばあらくれ武士のやう　同
うるさくは晒ふみわけ鳴くところ　横好
天下泰平華陽夫人ひき　玉章
井戸ばたに茶わんのいはれくらべこし　文集
にはか雨けつ王の代にふりはじめ　如雀

歌修行とがらしこそ〳〵きゝ出し　川長
はづかしさはじめて太ッちようになり（原文のまゝ）　三丁
のめつたりおきたり琴のひきならひ　魚交
生醉にえん日のあるかみな月　同
のッつけてひらり下りると鳩はにげ　門柳
耳に目をぶらさげおやぢ大こゞと　柏之
すいたやで見合さつそく出來るなり　川長
十三里先きだにたつた四里たづね　文集
孔子ののたまくとよんでしかられる　川長
はぢかいた公家は梅園中納言　柳雨
よしはらが引けますさうとほりをほり　夢中
よし廣の太刀がこはいとだつきいひ　露舟
何ものか門をたゝくと正燈寺　花口
見てや止みなん月ぱくのえんさだめ　雨譚
細見はよつぽどやつておつかける　串柿
いつためて置いたか女房帯をかひ　五扇
一疋になるとおもへば女郎かひ　文集
ざこねもいつそ手廻しなえんさだめ　五扇
名代（なだい）のごけを甚左衛門で見かけ　鞠志
女をいけ取り手がらは四郎兵衛　文集

鬼のかぶッかじりひどく〳〵し上げ　洗路
榎木の僧正もちやの向ふなり　如雀
車でかけをぎつたは木曾義仲　洗路
兄よめに歌人をもつたふてえやつ　玉章
をか引をしそこなつたは五大ゐん　如雀
あつい事うらぢうらか〻あだらけ也　同
石龜の側になまづが二三疋　露舟
なぞ〳〵も兼好二つ三つ書き　川長
二條どの御用とおつて下るなり　露舟
綾瀬を通る屋根舟に唐の芋　芹丈
天しる地しる二人(ふたり)しる御用しる　同
舎弟に百石玄米女色なり　雨譚
後生のわるいしやうもんをごけはもち　五鳥
よく下で見てはいるぞと百さじき　雨譚
まつりのけんくわ迄書いたものがたり　如雀
失禮のうりもの〻出る市二日　同
みなとへつくと親舟は子をおろし　夢中
おもしろさ五十二るゐの外のおど　狸聲
あの探幽はにせ筆ともてぬやつ　芹丈
もの〻ふの藏には多いほと〻ぎす　如雀

げじ〳〵をあふぎへとれば手へつたひ　狸聲
庵に笠見えるは近所あるきなり　露舟
かし元は四郎あるきは藤九郎　芹丈
かきつばたとつたらあとは後厄(うしろやく)　文集
けちな道しゆもくをもつてこすつてる　玉章
ひの衣式部に居どこ奪はれる　洗路
蔦よけの縄が西行氣に入らず　如雀
戸板をば布きせにするよい天氣　露舟
豆いりはまづ饗應のはじめなり　門柳
きつい事東魚を汐干がりにする　洗路
切りおとしでも立てをする大あたり　雨譚
下を見ておごりの出たはひえい山　丸龍
目ぐろたこやくしそしてとおやぢき〻　洗路
もみぢかへ古句々々とてんにせず　宿禰
女房はちよつ〳〵と取替へたいもの　夢中
世をすてる外に猫迄すてたまひ　洗路
しろうとはあみと一所にふりよな事　玉章
出來ぬはず酢屋の娘を蒟蒻屋　同
手取りばひとりのかり着を御師でする　丸水
あの松こそと出た石にけつまづき　如雀

吉次が來そて熊坂はひるねなり　如雀
だいてはひらず石川は一首よみ　雨譚
はんにや經よまぬと鍋のそゥこぬけ　三丁
夕べには喧嘩あしたは御慶なり　露舟
白粉のまくばりをして變なつら　三丁
一粒ものこさぬやうに木賃くひ　文集
晝三を母にねだるとつがもねえ　同
三人にすくはれ萬民をすくふ　丸水
もてぬ夜はなほうらめしき朝ぼらけ　露舟
はやざきを土の牢からかつぎ出し　玉章
そとへ出て母あんじてるおそざくら　門柳
けいせいに間男のあるけちなばん　文集
ぬすんでも目に見えぬもの人のほね　夢中
食傷はけろ／＼とけさ起きて居る　丸水
かつをにていせや七十五日やみ　姫小
あいつらがさくはいおらア氣にくはず　千鶴
からさきへ風かすじるとあはづなり　我雄
しよく人の汁を千日下げて行き　横好
箱根山こしたなすびは馳走なり　清江
あの義理の此のぎりのとて出られやす　花口

ろくな用ぢやア有るまいと飛車を成り　姫小
なへものゝうれぬ所が目ぬきなり　丸水
おうたばう彈いてくれをれ抔としやれ　串柿
あてのみにすみそを入れるつりのふね　同
目をくぼませて後家の男はにげる　口喜
のがけ道青葉の笛をふいて行き　同
土筆賣しやうねにせうとなぶられる　和笛
肘をまげ枕草紙をよんでゐる　柳雨
抓められたごぜほれぬしを考へる　可候

日暮里西行庵奉納即吟額面

白がねは猫こがねをば鶴へつけ　紀原
旅むかひ鮫頭にゐたはむかしなり　玉章
かはせのうちで紫屋へ拂ひする　口喜
淨るりひめの一ぞくをおとりたて　玉章
西行はしろねこむすめ黑いねこ　車道
じぎあひも時によりけり大一座　文集
品川をうらからそゝるうらゝかさ　玉集
雨やどりこじきの中に中納言　如雀
目出度くもらふ牡丹餅はかねが付き　如路
源氏もちつと解けて來て病出し　芹丈

一年はおぼこに見せる金屏風　如雀
すべらずば芭蕉信濃へ行くつもり　同
こほりのわたり初は狐と御用なり　清江
仲人の目がねとり出すだんになり　蔦故
三度笠目あてにふらり〳〵行き　口喜
赤合羽あしのしろいでとつかまる　清江
仲人はまあ法楽にみろと言ひ　和園
玉屋のあけ初め曾我のまつり　清江
入り王をおつかたづけて膳を出し　紀原
そらだきをよつぽど釜の下でする　寸魚
退屈さ無間の鐘を突かうかの　串柿
大一座むり往生はじゆずをもち　狐聲
うぬ猿め〳〵と袖はひだるがり　玉章
衣のたてもほころびる谷中道　芹丈
嵯峨のおくよい新尼が二三人　同
長命を純し短命な塚へ行き　同
口近い湯かげんをしる佐吉なり　同
風俗はけいせいていの御奉公　口喜
文盲な蛙はまじり〳〵出る　蔦故
むねわりに布袋和尚と湖羽すみ　紀原

奉納の句々は是にかぎるとにはあらず、依て次篇に又々諸方の額面等をほこらさがしゝて著すべし。
同好の雅子後覧を待給へかし。

文化二年丑六月朔日浅草新寺町於二西光寺一開巻
桃井庵和笛追善句合兩評點句百四十四吟
川柳風　催　惣連中
文日堂評

御靈山鳥も佛法たもつなり　古鳥
雲隠れから光なきものがたり　虻内
二ケ國の間へ人橋かけて置き　丸成
千代田村地形の度に鶴が下り　窓梅
したがふと紅葉の御殿出来る所　玉章
奥御殿畫書にさびる御簾中　紀源
東方に瑠璃は叶ひし靈地なり　丸成
佛法最初字餘りの額をかけ　集鳥
桐の光で鳳凰は雛を出る　錦鳥
吉良びやかなるお寝巻が涙だらけ　玉章
きつい事笠木も見えぬ程に降り　五鳥
鬼のすむ山をやさしく一首よみ　孤雲

吉原を丸でかつたは文左衛門　柳雨
東西に闘取の有る宗旨なり　孤雲
義を結ぶ上へ毛蟲がぶら下り　窓梅
侍の一粒撰りにかなを付け　如雀
花に啼くものを炬燵の側に置き　一徳
軒下へ花を咲せる俄雨　五鳥
孝靈に生れて今に二十（はたち）なり　雨夕
九郎助の氏子百から三歩なり　東水
をしい事指を三本嫁は捨て　丸水
幾千代と思ひし蚊屋の時雨なり　竹二
武を捨てゝ阿漕にくるり丸くなり　斗丸
秋吹けば草苅笛も哀れなり　東鳥
一蓮托生蓮飯の出逢ひ　雨夕
團扇さへ右へ持たせぬ孝行さ　斗丸
茶筌髮二番せんじに花が咲く　古鳥
寺々で産湯わかすと郭公　門柳
胴切りの名歌を取るが嫁上手　雨夕
晝三買をべら坊と親父言ひ　狐聲
結のしの晝寐の上へ花が散り　霞朝
鐘のなる寺は築地か淺草か　邑市

殿様をよい〳〵にする美しさ　夢中
筋隈を出して親玉きめるなり　芋顔
嵐にはたちぎえのする燈籠客　雨夕
鰐口を惣名代に乳母叩き　斗丸
信玄の生れ替りはふてえやつ　玉章
さねの能い鎧着て出る女武者　丸龍
だんまりで聞いた異見は身に染まず　柳枝
料理茶屋連理の箸を付けて出し　李什
きつとした異見は障子の切張り　一口
和尚のくやみ中啓で衿をかき　かてう
長異見鳩や烏をまぜて言ひ　車道
御持佛へ御寺を燈すきつい事　英子
うなつても氣にかゝらぬは藏の内　玉章
よい法事芳町へ迄花が降り　矢正
闘の地藏で笑ふまい〳〵　東水
ひよいと飛びついてはしごく善の綱　桝水
吸付けて出しさうな見せ勸學屋　登川
野暮で無い名は通天の紅葉也　丸龍
をしい事お月さまより一つ下　馬口
鹿の落角を喜撰は度々拾ひ　丸龍

あるへいを遣ればはにかむ茅花(つばな)賣　窓梅
花をくれなゐにして仲人ひらき　同
をかしく無いに乳貰ひ笑ふなり　李竹
暑い事ねずみに庭をかけさせる　斗丸
いんぎんに謡をしかる菖蒲革　松人
負けて居なさいと擂鉢かして遣り　川鳥
早いものだねと茶飯のふたを取り　萬舞
文殼で日々あらたなる枕紙　古鳥
江戸前の息子はぬらりくらりする　交鳥
是でからうつかみましたと綱咄し　五帆
小半丁くんなと鼻をひくつかせ　玉章
ざん切を田町の床は待つて居る　同
又玉やだとぬかすわと鍵屋言ひ　窓梅
玄翁は石泰成は尻をわり　狐聲
親鸞と弘法うら腹をゆるし　孤雲
言語同斷雑炊が腹へしみ　露舟
文錢を六文夜鷹くやしがり　玉章
雨頭の犬へ大ぜい人だかり　如春
股くらの報謝ばかりはお竹せず　狐聲
枝豆は氣の有る顔へ鞘ばしり　東鳥

窓梅評

音曲で極彩色の花が降り　雨夕
君子の爭ひで時服御頂戴　礫川
御寺號で時代の知れる靈地也　萬二
餅花の散る入相は芝で撞き　丸龍
宿かるなとはありがたい笛の音　礫川
野暮でない名は通天の紅葉なり　丸龍
靈山は鳥も佛法たもつなり　古鳥
ほとゝぎすしかも左の大臣(おとゞ)讀み　美徳
即菩提假名書にして名を殘し　礫川
二階住居の門番は文殊なり　孤雲
來年は又來年の櫻なり　かてう
音樂の音色に名のみ殘るなり　東鳥
浪風を悋氣にたてぬ龍田山　玉章
寺參り鶴のたつのを見て通り　亭々
湯かげんを盜んだ鍛冶は片手わざ　丸水
ゑぼし首はねるとからし買ひに遣り　門柳
傘の供は後生のよいのなり　紀源
溜息を互にかくす廻りくら　美徳
褄を取つては笑はれる若い尼　礫川

一字づゝ假名のはたらく十四日　丸龍
祭禮の喧嘩も書いた物語　五鼠
盜人は酒屋餠屋に借りが出來　菅裏
美しさ切落中あをむかせ　柳枝
何よりの紀念名主が判を押し　かてう
御家中の舌にあたらぬやうに賣り　柳雨
二十五の内にけいせいひとり見え　玉章
そりや梅の花さと言へど知り人なし　丸水
賣つて遣る鏡に顏のいとまごひ　如春
げぢ〳〵につひあさつてと紺屋いひ　菅裏
山門を魚鳥のくゞる放生會　竹二
極樂の先踏出しに西光寺　春駒
あきの方萬づよしとの御評定　丸水
欠には善くさめには惡を吹き　美徳
古錢買待たせて鍵はどこに有る　すゞめ
きつい事茶筌で立てる貞女なり　狐聲
吸付けて出しさうな見世勸學屋　登水
風の穴まだふさがぬに月を喰ひ　古鳥
りんの音花嫁おやと云つて起き　礫川
法(のり)の綫腰辨當で艛舟なり　門柳

大施餓鬼十六文の舟遊び　李什
色々に用立てられる咳ばらひ　期程
天道樣がゆるさぬと人が云ひ　露舟
高縄の灸は他國の山を見せ　如春
もてゝも行く氣ふられても行く氣也　露舟
燒香に會釋のないが血筋なり　矢正
子を呼んで因果ふくめる金屛風　門柳
淨瑠璃に笛を合はせるきつい事　礫川
楊枝見世正月ものを市に着る　車道
吉兵衞の有る評判記二朱で買ひ　雨譚
親元へ手取つた金は十九兩　車道
ぞんじ參らせ候と下駄を履き　一諸
蕪汁でなま長い額よんで居る　如雀
近くの他人朱と丈布取かへる　同
大丸は越後屋がうへにたゝん事　雨夕
女房と乘合にするたから船　如春
三日には紙屑籠へ船を入れ　同
桶と花持つて定紋見て歩行き　錦鳥
七種が過ぎては禮も拍子ぬけ　礫川
纏袋包みかつぱをそびいてく　古鳥

四つ手駕大悲のちかい道を抜け　五鳥
洗濯の槲が知らせる後の妻　すゞめ
佛壇で風はせぬ孝心さ　錦鳥
水茶屋けとくしんしたりしなんだり　玉章
ぐわんにしくどく表具や珠數を出し　濱朝
夏桃は一つ賣つてもつみ直し　春駒
乘合に湯あがりもある茅場町　由之
あら世帶はづかしさうに紙を買ひ　すゞめ
讀み賣は何をふんだかうたをやめ　友呼
縁生男子女だに土左衛門　菅裏
念佛も四五へん入れる泥鰌汁　東水

誹風柳多留三十一篇 終

俳風柳樽拾遺

古今前句集の序

やまとうたのこれもかたはれにしてひとつ心のたねよりそよろつの句合とはなれりける世の中にありとあることとわさしけきものなれは心におもひつくことを見きゝするたひに出せるなりはなたれてなくうなひこ水あめねふるにてつちのうちにもいきとしいけるものいつれか是をいはさりけるしぶ茶をも入ずして雨の日のねふりをさましめに見えぬへひりの神にもはらすちをよらせふう婦けんくわの中をもなほしすかぬあさきの心をもなくさむるはこれなりこのまへ句むさし野のひらけはしまりけるときよりいてきにけりしかはあれと世にいひはやせることとは享保の頃にはしまりあらたまりて寶暦のとしのうちよりそはやりけるそのよにはだいのもくもさたまらずむつかしくて句のこゝろつきかたかりけらしちかき世となりてそさてあまりむつかしがらぬだいはいたしけるかくてそ花よめをめてやぶ入をうらやみかこはれをあはれみ後家をかなしふこゝろことと葉おほくさまぐ〳〵になりにけるとをきところへいそく四ツ手の足もとはかけこゑの走るにしられ高きひやうし木の音も番太がひちの力に鳴りて犬ほゆる中田甫まて聞ゆることとくに此前句もそのとくなるべしそも〳〵まへ句のさまむつなりはいかいのほくもかくそ有へきそのむつがひとつにはそへの句

わかとのがてきて一夜にさくほたんといへるなるべし

ふたつにはかそへのく

はすのみのとぶを見てゐるかゝり人といへるなるべし

みつにはなづらへの句

あの子ならさんひやく出さふ佛たなといへるなるべし

よつにはたとへのく
　ていれしたよりも野菊か御意に入といへるなるべし
いつゝにはたゝことのく
　くふときはおいらもこゝの子にならふといへるなるべし
むつにはいはひのく
　一生の極さいしきは嫁入の日といへるなるべし
いまの世中色にそみ人の心あたになりにけるよりさしあひの句たはれしことのみいてくれはむすこのへやにむもれ木の人しれぬことゝなりてまめやかなるおやちのまへにはあさかへりのなはしにならぬことゝなりにたりそのはしめを思ふにかゝるへくなんあらぬいにしへのよゝのてんじや春は梅のみや秋は月よみのやしろに奉納をすゝめつつあるは花にことよせてたよりある品川にあくかれあるは紅葉を思ふとてたんほのぬかるみにまとへるこゝろ〳〵を見てさかしおろかなりとゑらはれたりけんしかあるのみにあらずゆひわたにたとへちさんきんの山をうけてむこをいはひよろこひ身にすきたのしみ心にあまりゆとうふのけふりに人をまち松虫の音に寒念佛を思ひ高砂町すみよし町相生町のやうにおほへ男たてのむかしを思ひ出てかくらのみこのおひねりにもまへ句をいひてそなくさめける又春のあした芝居へゆくを見秋の夕くれにとうろうのうたをきゝあるはとしのよるにしたかひよめとむことをいひりくろあふら入商を見てわか身をおとろきあるはきのふはこくふ銀きせるとおこりおは打からし世におちてはたいこもちも見ぬふりとなりあるは出合のさしきをかし仲條ののれんをくゝり土弓の娘をなかめふられてかへるあかつきをかそへあるは根津の客のいいふしをいひもてる

もてぬにつけてつれを恨みふしのうつしをわせ田につきなかすの凉みも今はもとのみつまたになるときく人はまへ句にのみ心をなくさめけるむかしよりかくつたはるうちにもしんぼりのときよりそひろまりにけるかのほりのはたに川柳てふ人なん前句のひしりなりけるこれはてんしやもとりつきも力をあはせたりといふなるべし秋の夕部大川にとまかけて行船をはみな人の目にまんちうと見て春のあした奥女中のわたぼうしはかはやなきか心には雪とのみなんおほへける叉山の手に露まろといふ人ありけりこれもあやしうたへなりけりされとかはやなきは露まろかしもにたゝんことかたく露まろは川やなきかかみにたゝんことかたくなんありける此人々をおきてまたすくれたるてんしやもくれ竹のよにきこへかたいとのより〳〵にたえずそありけるそのころかち句をあつめてなむ柳たるとなつけたりけるこのほかのてんしやとりつきのかけふたにひろこりろしのはしらにおほかれとまん句とのみいひてさはよらぬなるべしかゝるに今十日の雨五日の風によつの海波しつかなるよりうら〳〵のしろ水なかやのほかまてなかれひろき大路のゆきゝつはなの穗よりもしけくしてよろつのたみくささま〳〵のことをしつゝ遊ふあまりにいにしへよりありとあるふりにしゑらひを今とり出し後の世にもつたはれとて寛政七年ふん月なかはすきの友たちみつからひきひろけてなんそれか中に櫻をうふるより土手のほとゝきすをきゝ二度の月雪見としの市にいたるまてまたつるかめにつけてもとみのけんとくを思ひ人にもいはすみそはきけいとうを見て草市をまちあすか山にいたりてかはらけをなけあるは春夏秋冬にもいらぬくさ〳〵のまへ句をゑらひてちゞはたまきなつけて古今前句集といふ山下の花の會たえずほりのふねかすおほくなりぬれは今はあさねしてそんしたうらみもなくとをだごのおそなへ

とよろこひのみそあるへきそれまろらことは名はみかきのにほひもなくしてむたなることのみふさやうしのなかきににたれはかつは人のみゝにおそりかつはまへ句の利口にはち思へとたはこの煙のわれらにいたるまておなしくこの世にむまれてこのことの時にあへるをなんよろこひぬるかはやなきなくなりにたれと前句のことゝまれるかなたとひときうつりことさりたのしみかなしみゆきかふとも此まへ句のもしあるをやかはやなきのいとたえす松のはのちりうせぬたくひにまさきのいけかきなかくつゝきとりのゐたるあとひさしくとゝまれらはまへ句のさまのくしたるこゝろをなくさむるとをしられん人はおほそらのほしのかすのことくにこのしふをあふきていまをこひさらめかも

誹風柳樽拾遺 第壹

初篇

春之部

寶暦中

禮帳に徳兵衛とこそ書かれたり
松のうちみないかさまにひつかゝり
豆うちはやあら旦那もひく〳〵いひ
歌かるた人といふ字に手が五ツ
正月ももう半分にけづりかけ
まけこける頃は睦月の末つかた
やぶいりのなんにすねたか六あみだ
壹分さへ出せば生國より存知

明和中

かけとりがとぼして來たで春でなし
中宿へまじめなかほで申入れ
貝杓子だぞと麻上下でいひ
あがるなといはぬ斗りの帳を出し
上下のあとへうちやる貝杓子
一日の御慶こたつへとりよせる
四十二の灘をのりぬく寶船
たから船逆艪にしても同じ歌
初子の日かぎざきをする御遊也
殿様も御すきと乳母へよろけて來
内井戸へ七くさひとつとんといひ
なゝくさの杓子は舌がまはりかね
寐せ付けておりはの乞目呵りに出
此やうに書くと帳屋の干して置き
米びつで藪入を待つ下そなへ
めしたきの一ぺんさがす事納め
毛すゐので二へん通した春の雨
ようふるぢやないかと殿も御次迄
買ひつけぬなどと内裏を貳朱に付け
ひなまつりこれからかうは姉さんの
かしましく階下にならぶ雛の客
雛棚のひよ鳥越をねずみ來る
家にかつひなはおあしで淸めたの
質屋からみもすそ川のながれ雛
逆鱗のやうな内裏はうれのこり
人おなじからず三月五日なり
ちりめんもとは肝煎の出ほうだい
すみだ川もう脊笠の事といふ
麥めしと書いて榎へのたくらせ
是も一興と野がけはたれる也
いッちよく咲いた所へ幕をうち
内々で茶わんのくゞる花のまく
花の山ぬいた〳〵があらしなり
花のるす悠然として虱を見

安永中

桐の木でしたがら〳〵を禮者くれ
下戸の禮四ツ谷赤坂麴町
辭儀をし過ぎて上下で二八なり
萬歳に乳母たましひをばいとられ
かう申す才藏きりで嫁はにげ
無造作なものは大屋の小松引
天顔のうるはしからぬ母のひな

天明中

人がらはばつぐんちがひ申し入れ
元日にいけしやあ〳〵とよみがへり
町内はまづしらふにて申し入れ
初夢を二日にするは得手勝手

奥中へ一鹽あてる花の雨
梅に鶯櫻になまゑひ也

拾遺

元日の夜は氣のしれぬ人通り
裏白は叉をくゝれと生れつき
萬歳がほしをさしたる夫婦中
年禮に來て泣言の谷わたり
まんざいはすつとの皮の足つかひ
門松も甲羅に似せて穴をほり
萬歳はみなけいはくにふしをつけ
懸り人數の子などはころし喰ひ
追羽子にまけてせなかの數しれず
玄關番とほぼえ程なあくびをし
飯は能い物と氣の付く松の内
もみくちやな唐土の鳥は下女がうち
余所へ行く澤庵づけの出たちばえ
正月を片身をろせば小豆粥
物わすれはじめは粥に毛を生やし
鳥追のしかられて行く店おろし
一年に壹度身代よなけて見
門口に下女がおやぢはいなゝかせ
一寸の草にも五分の春の色
しよひつゞら出來ると下女にしよはせて見
豆いりを喰ひ／＼あとの數を聞き
皮切りは女に見せる顏でなし
回向院ばかり涅槃にねこが見え
御りんじう二月に虫の聲を聞き
しやちほこの下はあくびの廻り持
ひきかへるのたり／＼と罷出で
一錢で長者の緣を切てやり
年禮にしうとのわせる彼岸過
芝居をばやめて內裏の願ひ也
らうがいが出ようとおどす囲ひもの
こんにやくのぎざ／＼きつい自慢也
角兵衛獅子五百が舞うて立ぐらみ
小侍蜘蛛と下水で日をくらし
おちやつぴい節句の禮に早く來る
白酒をきれいに呑んだ鼻の先
あさつきのなますしんぜて猿轡
曇つても先づ出かはりの義理はすみ
御しなんをうけましたらとめしにつき
御ゐんきよをあまロに見てめしにつき
山の神おこぜ斗りをめしにつけ
人主を三文出して買ひに遣り
花の山いつそころせの三下り
やみ雲といふ雲の出るのうてん氣
野雪隱身をのがれんと前へ出る
山の手の目見えは井戸を覗いて見
儉約で一つまなこの下女を置き
うたゝねの顏へ一冊屋根にふき
人代は是も同じく役者にて
まん丸くよめ菜の殘る犬の糞
小べんの矢おもてに立つ供女中
五百生先はともあれ花の宴
蝶々の近付でない袖もなし
今もつて氣ちがひの來る角田川
ひとり見る花にくびれた酒をのみ
かるわざへ殘りすくなく日があたり
扨けふはひとへ羽織で大あたり

（第一終）

誹風柳樽拾遺 第二

夏之部

寶暦中

光陰の一幕すぎてほとゝぎす
鰹より女房をほめて鼻をかみ
人宿でまだ聞いてゐるほとゝぎす
かきつばたかへるは聲を呂に落し
のみ過ぎた疊の醉は入梅に出る
竹の子はぬすまれてから番がつき
羅生門本店よりと書いてはり
夕だちの樂屋と見える雲の峰
夕立を四角に逃げる丸の內
水論を分けいかづちの中直し
年玉を寺は夏からこねまはし
土用干留守とこたへてまつぱだか
舌うちでふるまひ水の禮はすみ
夕だちに五所紋をみなくはれ
洛中の汗が川原へまかり出で
いなづまのくだけやうにも出來不出來

明和中

よしきりに地をうたはせてほとゝぎす
初鰹そろばんのない內で買ひ
葬禮を見て初がつを直が出來る
珍客へじまんの數を輪切にし
五月のは八十二斤內儀もち
辨慶の使かさごでのんでゐる
やかたから何もかゝらぬ釣をたれ
武者一人(ひとり)呵られてゐる土用干
かみなりはいつかけのある雲を出し
甲冑をたいした所へ暑氣見まひ
こはさうに膝へ手を置く精好平
六月はその日歸りの內裏雛
口上がすむと西瓜の手をはなし
夕鯵もてんびん棒も上へそり
すゞみ臺天はどうしたものといふ
夕すゞみずしりと俵落すおと
さあ陣を引かうとはひる涼み臺

安永中

つり合はぬものでつばうと時鳥
初がつを山ほとゝぎす嫁の禮
聞いたかと問はれて喰つたかとこたへ
十兩はしまひ見せやれ初がつを
いをが違ひやすと鰹ふりむかず
しはい伯父壹年ぎりの槍をくれ
から風呂のやうだらうさと象にいひ

天明中

意趣はいしゆさしみは刺身けちなやつ
のぼりには女房とかうの望なし
次男へはへろ〳〵武者にのしを付け
大汗で殿上人を相手どり

拾遺

白魚のあとへうまるゝところてん
藤かづら松一生のほねがらみ
藤棚へいんげん豆がすいさん
笠ぬひの針は山また山めぐり
御たん生嫁をにらめる日をあらい
誕生のゆびは松魚と郭公
はつ松魚是も左の耳で聞き

初がつを旦那は羽がもげてから
はつ鰹煮て喰ふ氣から錢も出來
かゝり人覺悟してくふ初がつを
あす來たらぶてと櫻の皮をなめ
横町はまだふみも見ず鰹うり
金持と見くびつて行く初がつを
當年の茶を煮るうへを郭公
ほとゝぎす月をも見せず嫁は取り
初がつを買人の方にひれが有り
竹の子のやうだとあげをおろして居
竹のこもまだやはらかで齒につかず
三絃も風聲の出る入梅の內
見せずともよいに太刀實ひらり拔き
山椒みそ何れあやめのかしは餅
辻番へ傳がさし岡のかしは餅
年玉の中から夏の風を取り
御藏まへぬれて通るは地かた也
もの干も年に一度の古今集
片かたのあきらめて行く俄雨
梅干に餅の戸板をそめ直し

まんぢうを足へのみこむ麴町
鳴りやんで折目をたゝむ普門品
弓杖でやれひやつこい〱
通り町うろたへて來た蟬のこゑ
物中に手間を取らせるまつばだか
俄雨いくぢのあるは折てはき
相傘にひれの有るのが大家なり
やかたにも捨がたの付く料理ふね
立浪をもう風呂敷にして仕まひ
遠きおもんばかり茄子のへたを干し

（第二終）

誹風柳樽拾遺 第三

秋之部

寶曆中

そうめんは皿の中にて袖だたみ
月へなげ草へ捨てたるをどりの手
代官は野分庄屋は申わけ
すゝきかる鎌三日月の見えかくれ
あかぎれが切れると茄子もしまひ也
新そばの客は給仕にたばかられ
大屋から勅使をうける月見をし

明和中

盆うたは首二つのがおんどとり
草市へまけろ〱と日があたり
押へればすゝきはなせばきり〱す
絹の羽織蛩が着るとしまひ也
なまゑひのとかくしくじる紅葉がり

安永中

ことやうのすがたも見える俄雨
枝豆は旦那のかほへつッぱじけ
はやみちへ二百は無事な目黒也

天明中

友だちへえんまの廳で御用あひ
座頭金十五夜お月見てをどる
うどんより外にしあんのない紅葉

拾遺

短冊の外ははさみの細工過ぎ
朝がほも鳴海しぼりの見世を出し

朝がほはおかまがへしにながめられ
七夕に虎の出さうな長つぼね
なま出來な所へ棚經もう仕かけ
祐天の似せなど貰ふあら世帶
二の足で間男の買ふ納め太刀
虎の威を五種香うりもちよつとかり
盆をどり是非なく乳母も地をうたひ
よし原の脊ぼねへともす人だかり
下女が灸ゆでそら豆を二合買ひ
井戸がへに出るかんざしは銀ながし
やぶいりに旅だちほどないとま乞ひ
宿下りこんども灸をするゑはぐり
姑の湯治は嫁に相應し
挽臼のうたを見世から笑ひに來
宵のくもはし〱迄も行きわたり
大水はうつはものにはしたがはず
十六夜にまづ一ツばいはくらくのみ
有明を陰氣な大家のぞいて見
御順捻ぎゝどう〱といもをくひ
道光庵草をなめたい顔斗り

蕎麥喰つてさて入湯はとまるべし
雪隱へ先をこされて月をほめ
先づ御膳すんだわなどとひとり者
屁をひつてをかしくもなしひとりもの
御製にももれしかまどのひとりもの
八重むぐらしげれる宿の不精者
平澤も柿うりほどは見ぬかれず
御所柿へばいをふくんで夜討をし
よく見れば手のとゞくだけしぶい柿
煮なはるかやきなはるかとまぐろうり
葡萄棚なつたで旦那大騷ぎ
菊たばこ御くろうなしの顔でのみ
引窓に夕ぐれひとつ引きもどし
夜は御免だと隣へきぬた貸し
すりこ木で下女も砧の加勢をし
いたゞいてしきせのふそく舌を出し
堀江町風しづまつてさへまいも
海晏寺まつかなうそのつきどころ
妥もとはとうにお立としやうとう寺
紅葉がりどつちへ出ても魔所ばかり

山に色つけては風に聲かはり

（第三終）

誹風柳樽拾遺　第四

冬之部

寶暦中

ぼた餅も精進落をゐのこにし
御はんじやうさまに手を取る奥家老
十月は十萬兩がめしを喰ひ
付聲でえびすの鯛は嫁へ賣れ
帶ときの繼穗になりしかた車
初雪をほめぬむすこがものになり
はつ雪やワキは酒屋へ申シ付け
としまやで又八文が布子を着
すゝはきに巴もつひに生捕られ
ふく汁とにらんだ大家長ツ尻
年のくれはなしの奥に春が有り
はま弓は一家の義理の丈(せい)くらべ
鹽引で打つてかゝれば柿でうけ
年わすれしなのを呼ぶに太郎冠者

とし忘れわすれずと能いかほばかり
藥禮の時はこつちで七かげん
くまさゝはかつをの腹で春を待ち
節分の鬼切丸は赤いわし
書出しでぶちのめされたやうになり
くらへども其味いかに大三十日
返答はなゝ〳〵なんと大晦日
いつはりは人間におり室の梅
人の尾を大晦日には狐が見

明　和　中

戸かくしとおつかつかつに國をたち
信濃をばお寺のやうに直をきはめ
かもなどがつゞくものかと又百匁
もう外に死ニ人なしかと鰒を買ひ
雜巾で大文字をかく十三日
そりや神の〳〵と下女は箕でおはれ
てうちんで掛けばゐんきよのかと聞
夜一夜地主の餅で寐つかれず
もう民を撫うとしやれるとしわすれ
懸り人たとへのごとく市へたち
見付かつて此大黒はいくらだの
年の市弓は手桶にをさめたり
革羽織着て御嘉例の土手をこし
市過はぜねの入る事とろつぴやう
やればとるものだと餅のさうだんし
花よめののしとかく月迫し
かけ取のいひぐさになるかゝり人
からめては女房のふせぐ大三十日
かけとりが來て御めん鍋わるく云ひ
持もつて來たと師走はかたをつけ
大三十日九尺二間はめつぱりこ
かけとりへ内儀傷寒だとおどし
色文だのぞくなといふ大三十日
大晦日首でも取つてくる氣也
大晦日すかさず下手〳〵と來
大三十日そく災ばかり取得也
やくはらひいつち仕舞にかゝり人
居風呂に下女が居る内春になり

安　永　中

ゑびす講亭主の曰くきつひしけ
ゑびす講飯たけなはに及ぶなり
綿入がなぜおひえだか解せぬ也
死なぬかと雪の夕にさげて行き
おれだわえほえるなといふ十三日
お里へと書いてすわりへくはへさせ
御人體にもと大黒とりもどし
いけずるいやつに一ツぷく屠蘇をくれ
すりこ木で牛房を料るとしの暮
云ひ延べはたゝき牛房で閉えかね
大三十日内儀誠しやかにのべ
いそがしく大屋長やへつりをかけ
此しぎでござると巨燵ものをいひ
いつかいゝ春におもてはなつてゐる
なんざんのうぶ聲といふ扇うり

天　明　中

炭部屋も尋ねて見ろと十三日
御子孫もはんじやうおつとよし〳〵
大晦日儒者半尺があはぬ也

拾　遺

夜そばうり立聞をして三聲よび
五節句の外にゑびすが苦勞させ
ゆびの出る足袋が御よりの講がしら
なかんづく澤庵時分錢がなし
信濃ものぶらり／＼と直うりをし
米相場はなすも耳にかゝり人
藏まへといふ米びつをもたせられ
御不勝手しやぼんのやうな玉が落ち
辻番の布子は西へ入りたまふ
本ぶりに成つて出て行く雨やどり
染ものをあるく火鉢にあたらせる
四五年も御講に目立つ緣遠さ
淺漬の汐みちくれば沖の石
朝事から歸り大根のふたをとり
夜咄に女房のかほへむくみが來
かほみせが見たいといつて舌を出し
姑の日なたぼつこはうちを向き
かゞみとぎことしもきつい御成人
わり床につとめてあるく寒念佛
懸り人引込紫衣をかぶつて寐

こはめしが足袋やせつたに化けてくる
ひえまするなどと火ばちで洗ふやう
ふし穴を座頭の見出す寒い事
めしの湯へあさづけといふ水の印
いざさらば居酒屋の有るところまで
雪見には馬鹿と氣の付く所まで
ゆき見とはあまり利口の沙汰でなし
ふく汁をくはぬたはけにくふたはけ
それほどに命をしいかふぐもどき
ばかめらと雪見の跡に呑んでゐる
雪を見に行かば女房の無いところ
女房の夜なべは夏の晝寐なり
寂寞として先生は鰒を喰ひ
ふぐ汁もくはさらにやアと姑ばゞ
鐵砲の皮をくれろと三ばいめ
ふぐ汁を一つはちすとしやれて喰ひ
夜むかひは旦那をおろし／＼來る
墨つぼもこしやくに寒の内をしり
印肉も火鉢へあてる老となり
二度添にしてそばがきをまゝこにし

寒念佛いき過をいふあらひ髪
寒聲も金にするのはあはれなり
乳もらひの後陣に亭主棒をつき
すゝはきや思へば此金うらめしい
ふつた下女見せ付けられる十三日
來年の樽に手の付くとし忘
とし忘とう／＼一人水をあび
ふんごんで煤を取るのが旦那也
地さはらの頭巾山椒を一木きめ
三分一入唐をするくれの市
正身の化ものになる市二日
衣紋坂もゝ引とまで月迫し
親の目を股引でぬぐ年の市
くれの市毎年ぬすむりちぎもの
大釜のつるんだ時のいそがしさ
正月の餅は内儀の名付おや
節分に遣ふしきみは生きて見え
西海へ鬼神をはふるいそがしさ
寶船晦日の浦に着きにけり
大晦日こゝをしきつてから攻めて

奥中へ一塩あてる花の雨
梅に霞桜になまゑひ也

拾遺

元日の夜は氣のしれぬ人通り
裏白は爰をくゝれと生れつき
年禮に來て泣言の谷わたり
萬歳がほしをさしたる夫婦中
まんざいはすつとの皮の足つかひ
門松も甲羅に似せて穴をほり
萬歳はみなけいはくにふしをつけ
懸り人數の子などはころし喰ひ
追羽子にまけてせなかの數しれず
玄關番とほぼえ程なあくびをし
飯は能い物と氣の付く松の内
もみくちやな唐土の鳥は下女がうち
余所へ行く澤庵づけの出たちばえ
正月を片身をろせば小豆粥
物わすれはじめは粥に毛を生やし
鳥追のしかられて行く店おろし

一年に壹度身代よなけて見
門口に下女がおやぢはいなゝかせ
一寸の草にも五分の春の色
しよひつゞら出來ると下女にしよはせて見
豆いりを喰ひ／＼あとの數を聞き
皮切りは女に見せる顏でなし
回向院ばかり涅槃にねこが見え
御りんじう二月に虫の聲を聞き
しやちほこの下はあくびの廻り持
ひきかへるのたり／＼と罷出で
一錢で長者の縁を切てやり
年禮にしうとのわせる彼岸過
芝居をばやめて内裏の願ひ也
らうがいが出ようとおどす鬮ひもの
こんにやくのぎざ／＼きつい自慢也
角兵衛獅子五百が舞うて立ぐらみ
小侍蜘蛛と下水で日をくらし
おちやつぴい節句の禮に早く來る
白酒をきれいに呑んだ鼻の先
あさつきのなますしんぜて痰欝

曇つても先ヅ出かはりの義理はすみ
御しなんをうけましたらとめしにつき
御ゐんきよをあま口に見てめしにつき
山の神おこぜ斗りをめしにつけ
人主を三文出して買ひに遣り
花の山いつそころせの三下り
やみ雲といふ雲の出るのうてん氣
野雪隱身をのがれんと前へ出る
山の手の目見えは井戸を覗いて見
儉約で一つまなこの下女を置き
うたゝねの顏へ一冊屋根にふき
人代は是も同じく役者にて
まん丸くよめ菜の殘る犬の糞
小べんの矢おもてに立つ供女中
五百生先はともあれ花の宴
蝶々の近付でない袖もなし
今もつて氣ちがひの來る角田川
ひとり見る花にくびれた酒をのみ
かるわざへ殘りすくなく日があたり
扨けふはひとへ羽織で大あたり

（第一終）

誹風柳樽拾遺 第二

夏之部

寶暦中

光陰の一幕すぎてほとゝぎす
鰹より女房をほめて鼻をかみ
人宿でまだ聞いてゐるほとゝぎす
かきつばたかへるは聲を呂に落し
のみ過ぎた疊の醉は入梅に出る
竹の子はぬすまれてから番がつき
羅生門本店よりと書いてはり
夕だちの樂屋と見える雲の峰
夕立を四角に逃げる丸の內
水論を分けいかづちの中直し
年玉を寺は夏からこねまはし
土用干留守とこたへてまつぱだか
舌うちでふるまひ水の禮はすみ
夕だちに五所紋をみなくはれ
洛中の汗が川原へまかり出で
いなづまのくだけやうにも出來不出來

明和中

よしきりに地をうたはせてほとゝぎす
初鰹そろばんのない內で買ひ
葬禮を見て初がつを直が出來る
珍客へじまんの鼓を輪切にし
五月のは八十二斤內儀もち
辨慶の使かさごでのんでゐる
やかたから何もかゝらぬ釣をたれ
武者一人（ひとり）呵られてゐる土用干
かみなりはいつかけのある雲を出し
甲冑をたいした所へ暑氣見まひ
こはさうに膝へ手を置く精好平
六月はその日歸りの內裏雛
口上がすむと西瓜の手をはなし
夕鰺もてんびん棒も上へそり
すゞみ臺天はどうしたものといふ
夕すゞみずしりと俵落すおと
さあ陣を引かうとはひる涼み臺

安永中

つり合はぬものでつぱうと時鳥
初がつを山ほとゝぎす嫁の禮
聞いたかと問はれて喰つたかとこたへ
十兩はしまひ見せやれ初がつを
いをが違ひやすと鰹ふりむかず
しはい伯父壹年ぎりの槍をくれ
から風呂のやうだらうさと象にいひ

天明中

意趣はいしゆさしみは刺身けちなやつ
のぼりには女房とかうの望なし
次男へはへろ〳〵武者にのしを付け
大汗で殿上人を相手どり

拾遺

白魚のあとへうまるゝところてん
藤かづら松一生のほねがらみ
藤棚へいんげん豆がすいさんし
笠ぬひの針は山また山めぐり
御たん生嫁をにらめる日をあらひ
誕生のゆびは松魚と郭公
はつ松魚是も左の耳で聞き

天明中

嫁も最う羅綾のたもと切れる也
すぐにひらくで釣臺は百ふやし
もしちつとあれへと仲人いゝきげん
瓜ざねを見せてかぼちやと取ッかへる
いゝくらしはだかで嫁があまくだり

拾遺

髪置に乳母もがうぎなびんを出し
人體を見て鹽をさす料理人
おんづまりかゝア左衛門をあひに出し
おやわんへいゝえ〳〵とふたになり
やきものと小僧を一人(ひとり)ことづかり
じゆんさいの吸ものと迄覺えしが
いわし煮た鍋で髪置三つくひ
今日の儀はといふのが亭主わき
釣臺のかへりびくにを買ふ氣也
仲人もかいしきをせぬむすめあり
仲人はあつたら口に風をひき
仲人は屏風をたてゝ一つぶち
仲人はあばたの數もかぞへて來
仲人は雨までほめて歸るなり
親ゆづりだと盃をしやぶらせる
御治世は質にも戸ざさぬ外ぐるわ
弓はふくろ先づ三絃をはりかへて
ものをくふ質をばとらぬ御代となり
太平の世は兵法もはらごなし
二の膳は野馬臺なりに喰つて置き
仲人は醉うていふのがほんの事
酒もりに雪隱さしておち玉ふ
こんれいの座敷でこむらびらきがし
酒のなる客吸ものを二度にすひ
四百づつ兩方へうる仲人口
生酔の腹を見ぬいた料理人
次の間はしつぱりとする料理人
安くなるほど吸ものははねてくる
こんれいのあしたむすこは見世でてれ
初がねを熱鐵の氣で嫁はつけ
待女郎おんなじやうに上氣をし
仲人の内儀およれとひとつ打ち
はつ〳〵に引越してゐる嫁の下女
兩親は耳よりの儀とそばへより
ものゝふの油じみたる長まくら
かたぎぬであれさ〳〵と仲人し
產所から一文やれと見世へ云ひ
後(あと)のりはさま〴〵な事思ひ出し
嫁の下女上下などへ着かへて出
その内で味噌吸物は身うち也
長柄もちいけじやうだんをりつぱにし
泣く事は無いと供にあづきめし
御樂だと大きく耳のきはで云ひ
おさびしうござりませうとばうしとり
嫁のへど其時分だと見世で云ひ
駕籠わきにつくが持參の大家也
高札の序文のやうな聟をとり
おれとしたことはと笑ふ里の母
本所から出るふり袖は賀を祝ひ
夜着ふとん干してひよろ〳〵醫者へ行き

（第五終）

誹風柳樽拾遺　第六

離別之部

寶暦中

仲人も是迄なりや犬とさる
思ひきりとり〳〵になりにけり
松が岡あひみ互の癪をおし
まつが岡十六文の顔はなし
去ツた明日ものをさがすにかゝツて居

明和中

をさまらぬものだと見世で嫁の事
姑の遺言去ツてしまへなり
かまくらへござれあま酒しんじよ也
すりこ木でぶちまゐらせと里へ文
くやしさは在鎌くらへ書いて遣り

拾遺

うきふしをこめて配所の竹たるき
けんとくが苗字へあたる新五郎
居酒屋を出ると迷子高くよび
しんこんにてつして顰は出る氣也
ぶんさんにうつかりと咲く冬ぼたん
すりこ木を持つ場を亭主筆を持ち
鎌倉に居るうち合の手も忘れ
いきがけのだちんに嫁をいびり出し

（第六終）

誹風柳樽拾遺　第七

羇旅之部

寶暦中

日本の言葉を知つてはらをたて
旅なれぬうちは桑名で口をやき
御夜しよくをうかり〳〵とくつたばち
あしの湯の客と書付せぬばかり
船も漕ぐ岩本院の草履取
案内者てにはの合はぬ歌をよみ
連レ同士くわくしつになる宿をとり
投入の干からびてゐる間の宿
石山をすべつた月が膳所へてり
高輪へ出るとわすれた事ばかり
とひや場で竹にすゞめは氣をいため
諸國からふくれたかほは馬喰町
大津からあのおしやんすを聞きはじめ
赤坂と御油の間で頭痛がし
御はらひに付くあいさうは江戸で出來
近道を生ものしりで山をこし
初旅へ晩は是ぢやと二本出し
居風呂のみやくを見にくるとめ女
翁さび人なとがめそ旅ばおり
江の島へ口でばかりの連がふえ
とめ女十六町のそんをさせ
若い衆へはなを明かせる宿をとり
道中に男一疋はだかで居
馬喰丁ばきり〳〵と手を叩き
道の記に枕二つは喰ひかくし

明和中

かるゐ澤膳のなかばへすゝめに來
品川へ着くとあたまをしらけさせ
はたごちん外の二百がうき〳〵し

上の字を出しかけてくる馬喰丁
切先て麥わらぶえの直を付ける
旅ざとうしやうじん張の三味をもち
旅あんま蜂にさゝれるやうな針
旅だちはばでながはやくくたびれる
湯治から歸つてわるいげいがふえ
きやしやな手で室の出ふねの綱を引き
案内者兒が淵にてをちをとり
とめ女もめん／＼のわかれなり
名物の内だと御油ですゝめてゐ
きちん宿とこやみの夜とはやなりぬ
御入部にぽつちりの入る供をつれ
板ばしと聞いて迎へは二人へり

安永中

川どめに手にはを直す旅日記
くたびれた跡を見て出る鴻の臺
龍池まで是非と座頭のねがひ也
あのげんき戸塚迄よう行かうぞい
よたんぼうめがと鶴見で待合せ
旅迎へ是書入（いれ）のひとつなり
とめ女をとりのやうに出して置き
日坂は喰はれぬとこを縄になひ
眞間へ來てなんのこつだとむすこ云ひ
川の口明いたと後架までたゝき
長追ひ無用と六郷からかへり
一りうものこさぬやうにきちん喰ひ

拾遺

湯汲場へ顔をつつ込む馬喰町
菅笠で犬にも旅のいとまごひ
ふんどしをするが湯治のいとま乞
御傳馬でいけばやたらに腹をたて
道者をば麺のやうなめに合はせ
淀の景繪では車の假名をつけ
道中で霜よけらしい獨にのり
のりかけの壹分そこらの床も見え
麻がへりの小つぶでいたむ旅まくら
宿引を呼んで爰では出來るのか
名物をくふが無筆の道中記
一二もく湯治がへりはつよくなり
品川へ來てなが／＼の口なほし
ふんどしを猿にとらるゝ草津の湯
三日めは川ばたまでも行く氣也
同行は身をのがれんと前へ引く
宿引はたらひを出して紛失し
はたごやもかるい客には重い夜着
奥さまのゆびの間違ふ川づかへ
追分はまたをひろげて道を聞き
旅のごぜ跡をひかへてしたひ行く
鎌倉へ來て百づつが手を合はせ
赤坂のしうち伊勢迄なぐさまれ
佐屋廻りきちこ／＼と頭痛がし
光明寺夫婦火急に思ひたち
遣唐使ふき出しさうな勅をうけ
あべ川で馬はきなこをあびて行き
宿引は本陣わきが口につき
紀の路ではみな獨身の浪がうち
川ごしはとんぼのつるむ氣味があり
くたびれを大坂へ積む十三里
まをとこは大和めぐりもすゝめに來

道中の夜は旅人のすきにあけ
兩の手を出して二見のものがたり

（第七終）

誹風柳樽拾遺 第八 上

戀之部

寶暦中

出雲からしかられさうなえんむすび
しめかへす手が龍宮へついとゞき
大學がつい宮古路にだきこまれ
丁子茶で通ちかひの目をあらひ
水茶やへ來ては輪をふき日をくらし
人間に尻目といへる飛道具
三味せんのきぬたは秋をしらぬかほ
地紙うり油つぼから出てあるき
しのぶ夜の毒にもならぬ石燈籠
紅粉ふでの物いふ譯をしらぬ親
うれしさをとりかへさるゝ鐘のこゑ
提帶は儀式のこしのひやうしぬけ
理不盡な事で補ふ御部屋ずみ
手入したよりも野菊が御意に入り
御茶の間を焙じ直して御ぜんさま
やね舟にすだれおろして歌とよみ
一分のび二分のび後家のみだれがみ
言譯ももはやとゞかぬ帶の尺
小のむし達者でこまる長つぼね
うつくしいやつこの顔は七つぎり
いもむしで日ごろの意趣をはらしけり
うらみいふ聲がくもれば目にしぐれ
戀のみやく茶臺の下で取つて見る
さそふ水あらばと母は氣を添し
忍ぶ夜の蚊はたゝかれてそつと死に
氏なうて玉のこしもと酢をこのみ
逃あしのむこはま弓に射とめられ
長つぼねてり／＼法師脫衣させ
若とのが出來て一夜にさくぼたん
信心が付くと娘のむづかしさ
一丁の血をうごかした宿下り
秋風のむなぐらとつて女郎花
入込へ山と川とのやくそくで
ひといびき聞いてくせもの墨をすり
下皿をしたんでもまだ書きのこり
前帶に〆てひたもの尻をなで
額にも新地の出來る一さかり
疊さん大またに行くうきよごさ
娘から逆よせにした聟をとり
居風呂に吸口の入る長つぼね
まへだれへ味噌つき棒のそれ矢が來
見ぬ顔に惚るゝ質やの土用干
殿様をから堀にするうつくしさ
水茶屋の娘の顔でくだすはら
長つぼねではおさらばのかたをかへ
人質をもつためかけの口が過ぎ
後家の身に油の多い帶を〆め
其次のまとはのし目でいため付け
ぼた餅のくせにきなこをたんとつけ
にしきゞは仙臺がしにたてしより
人相見めつちやな顔に曲をいひ
論語よみ思案の外のかなをかき
なぶるとはもつたいないと下から出

やき餅を下女はちひさく路次でやき
げら／＼と笑ふ娘は成佛し
りんきには旦那が負けて埒を明け
八人の天狗がのいてどらをうち
かゞみとぎわるい男とさとりきり
寒のべに顏を見い／＼あつくはき
おてがけといはぬ斗りがあたまへ出
御いんきよがなでるで光る下女が玉
思ひ入のさるが手もとへ笑ツて來
美しいびんぼふ神に氣がつかず
だん／＼にそんならの出るおもしろさ
めのたまに追ひはさるゝ美しさ
ほれてゐた突目へ乳のはしり過ぎ
すべらかし尻のあたりで蝶がまひ
ほれぐすり聞いて翌日おん出され
うす／＼は姉もしつたる手風也
おさらばに傍のかゝる長つぼね
飯入へ果報な男牛をひき
やぶ入の母へみやげは髮の出來
いがぐりに頭巾かぶせて小一年

つんとした内儀のみえる夜講釋
折ふしは笏でおいどをちよいとやり
石塔の赤い信女をそゝのかし
おはぐろのしまひに怖い舌を出し
はたち迄大からくりの袖をふり
色男ちろりのやうなはおりを着
だき付いてあす氣のすまぬ人たがへ
すぢかひに合せかゞみの目がすわり
蚌一つ御家老までが舞をまひ
てきばきと嫁はそばから杖を出し
ばかむすこ胴〆の有る嫁をしよい
同行のある駈落はおもしろい
戀むこはどさくさまぎれつツぱひり
土弓場の娘をちやらで射ておとし
細工場に手を切さうなまどがあり
勘當の見ならひに出る舟ゆさん
おさらばを窓から一つはふり出し
けいせいに三本たらぬうけ狀し
いろばゞアころがきなりの鬢を出し
やぶにらみ横すぢかひにほれにけり

いせじまも娘の方へぬけまゐり
藥出す下女がその手のみやくを取り
もみうらに吹かれて土手へ氣がのぼり
本名はこしもとでゐてかたきやく
折ふしはつんとするのも道具也
梅干は男ひでりの供につれ
異見よりきつい女房をさづけられ
大和茶を十人なみで思ひたち
いつの間に男に馴れた琴のつめ
茶臺から返事をゆびのうらつたひ

明和中

大黑は鼠のやうに里へひき
袖頭巾くらひこませる道具也
御はしたは宮重二本ひんまくり
いも虫は錠口番の手にかゝり
むづかしい顏をして居る俄後家
蝿たゝきこれさいはひと嫁のしり
菰がさの是より左めかけ道
長い日にふたつは出來ぬ嫁の髮
はなよめの供はあひるとやくわんがし

居風呂の立つ日は歸る女客
さばかりの娘なれども謎におち
遠ぜめにまづその子からかあいがり
足音にくらひこませる座頭の坊
あんどんのひばらで縫ふがむすめ也
桁ゆきのながいあたまのうつくしさ
伯母が來て娘のなぞをやつとゝき
ぬかみそへ思ひ切る手のうつくしさ
しやうじんはわつちがかふるなどといひ
客分といふ分の字に説があり
さりとては又といふ時かきくもり
たんぼゝの二三文ある裾もやう
つりがねをくし笄にするおそろしさ
二の膳のやうにめかけの床をとり
丈長で〆めてかぶりを二つふり
物思ふ身をたてかけるはこばしご
はま弓を妾はあごでかんちやうし
やぶ入が來て鶴翼に床をとり
おめかけは小べん無用じろりと見
やうきひの供をしてゐるかゝり人

かみさまのじまんの下女に手をくはれ
姶に母は蛾をふかせる氣
ぢごく迄妾をつれる塔の澤
おつりきな御紋だと下女あたゝめる
下女が髮あんどんべやの匂がし
かの後家に和尙桂馬をうたれたり
めき／＼と產婦三ツ四ツふけて見え
此ごろのやうさと御殿中で抱き
御妾の下女一口もくらはれず
湯がへりを見たであばたの論がやみ
手の筋をふるへて出すも女の氣
ほれたとは女のやぶれかぶれなり
ねこまたはどれ／＼／＼と姉がとり
やぶいりはやぶかのやうな供をつれ
大事をしのひこまにてかたり出し
下女が髮大いんきよからたゝりが來
そばかすが有つて三評通りかね
ねつて行く先へ守とたばこぼん
のぞく文筆で一太刀してやられ
御めかけはまづ火いぢりを斷はられ

ひきがたり母はたばこをわきへぶき
御めかけのりんきすたつたことをいひ
そんぶりがおかしかつたとあとで云ひ
家老とは脊中合せのうつくしさ
女ぼうもきりをふくほど世帶じみ
横丁へ見事なものがまがつたよ
おれもよい男とごせをくどいて見
よくしうと百人なみの嫁をよび
おしろいにひゝだけの入る口をしさ
おめかけのうんのわるさは狆を抱き
十五點などと宗匠ふりかへり
生ばんとう寢るを極樂世界にし
此ふくさをがんで置きやれなどと見せ
琴の弟子あいささやうはいかぬなり
人先へめかけのきせるひしげたり
御めかけはひづらはつても此世ぎり
御書院へ一足廻る三日の月
よめの帶自力でしまりかねる也
すがた見へ二度めは針をくはへて來
御めかけは二ッ三ッ四ッわかくいひ

しよこなめた下女は今年も〳〵居
には鳥をどうせうのうと下女は追ひ
ころび寐の下にぼつきと筆のかさ
御局はやりての人のよいの也
鐘車うつくしいのをたゞ通し
くどかれて娘は猫にものを云ひ
せうかちのきみかと殿も初手は聞き
はかまごしひそかにうらみ中上げ
けいこ所も出して遣らうと後家の文
能いきみと女中のわかる車留
あしおとがすると哨の題をかへ
船頭もあとのばゞアは義理でだき
武士はいやなどと御三の間ではなし
御めかけの親もと樂取も來ず
御切手にかぼちやを持つてひかへて居
まぜこぜになつて御ふねへ入らッしやり
さびしさを荷へば折れるいひなづけ
あいわつちや小町さなどとついとたち
かんざしをとられて姑それ見やれ
御めかけのきよくる腰元只でなし

初がねに乞食のくれた名をかへる
竹馬を呼びつゝでやるきつい世話
ふんばりのやうにみがくと姑いひ
うそゥやと下女あまだるい目附をし
べかつかうなどとたんすへ帯を入
殿斗り安いめかけと思召し
ごみだめのつる鉄打にはねをのし
いやらしい下女まへだれをふみしだき
黒吉の顔が持參でまつぱだか
御代參だん〳〵事かもつてうじ
五分ながへ扇を出して中へたち
やねふねでまゝ事をした妾也
是ばかり着て來やるのと里の母
そればかり着て出やるのともういちめ
小べんのくせに容顔びれいなり
よい女どこぞか女房きずをつけ
めりやすは女のぐちにふしをつけ
ふぐ汁に夫婦別あるうつくしさ
づはらんでゐますとにちる下女が宿
嫁の下女けんぼで明たはなの穴

うは氣ならいやさと下女がぬかしたり
おくさまの十九妾のひがとまり
長つぼね屋根や一日きぬをしめ
ぬつぺりと和尚妹で候と云ひ
片まみへ落すと嫁は手でふさぎ
しかられて娘はくしのはをかぞへ
くどかれて後家とひけたにしよさをくり
下女が色來たですりこぎ手につかず
里の母來るとお客の事を聞き
功勞をへると泥鰌も猫にばけ
御薬といふつらかと下女を見世で云ひ
ぼた餅とぬかしたと下女いきどほり
御どく斷第一ばんに鈴をかき
前帯で一足おそくどくを聞き
貝はりを娘一心不亂にし
貰らうよりましと娘にワキをさせ
下女が戀むねも銅壺もかきくもり
若後家の不食すこぶる珍事也
ふぐ汁のやうな物だと妾を見
寒彈は小言をかたるやうなもの

桃色になつて車をやり過し
きり〳〵を云ひなと椀をすかして見
むぽちやわる娘こんがう力を出し
ロべにの時くちびるにそりをうち
御妾はこくうむてんに匂はせる
あけくれと書いた所をくりかへし
内ぞゆかしき鴉わきの美しさ
水茶やでせい一ツばいが手をにぎり
つくねんとごせはあばたをかぞへられ
下女いびりいはんや嫁においてをや
黒がもはあひるのやうな下女とにげ
首二つ取ッてりつばに恥をかき
取もつた下女一ッ反とあてゝおき
女きやくまづ重箱をはしらかし
うつくしい下女そろばんへのせて置き
茶や女せゝなげほどな流れの身
たれるばん古い小袖を二つ着る
庚申のあした二人の宿をよび
針妙の寢言もちつとためてから
まきさつぱほどなでむすこみがいて居

子が壹人出來てそれなりけりに成り
七ツ口是も〳〵とくゝしつけ
虫のはふやうだと茶びんそつと云ひ
御めかけのやど見いりがきなどでのみ
嫁の禮だいぶけつしるなどといひ
硯より外に知り人のない病氣
くすの木にをさ〳〵まけぬ妾なり
かね付ける下女くれなゐの舌を出し
ねたやうにしても御しんがもめかへり
くどきぞんさうせぬものと跡を引き
じつとしてゐなと額の蚊をころし
芋虫のやうに腰元しようちせず
うどん屋のしたちがいゝと嫁はいひ
おばで候めいで候のとすきて行き
水茶やで打つとはしごくやぼな沙汰
厚木から置いた女でもめかへる
つね體のなりで番頭どらを打ち
とび切の顔でふんしがわるい也
黒吉のかほを棧敷のはなへ出し
くれなゐの頬ふくらして下女は迯げ

七代はたゝる〳〵といつて出る
あらひ髪濱染のやうにしぼり上げ
うつ向いてみやくを見せるがとまつたの
地女に一盛したがめかけなり
仲條がものさと後家は大丈夫
かみなりの落るひやうしに後家も落ち
じよさいにはせぬさと下女をたらしかけ
葉櫻になつて折々あぢな夢
こしもとへ來て盃のねばりが出
うつくしい敵は夜うちと心がけ
つみがみに成つためかけのよいしまひ
豆めしを上げうと所化になぐさまれ
圍はれは下着ばつかりたんと出來
物申を娘は奥へしよつてにげ
どうしても大またに成るうらもやう
あいにくの事さと内儀餅にてれ
なめたのはないかとなぶるやうじみせ
いんぎんにいふがりんきのはじめ也
いそがしい日といふとくる小間ものや
御めかけの壁一ケ國へひゞいたの

對にして出ても水際たつて見え
ぬきぐしを取る時右の足を引き
そのくしは誰が施主だといやがらせ
姉さんへはかりのはねるたばこうり
御めかけははらみこじれて緣につき
箸をとらせうにはこまる宿下り
他に事をよせて半途に下女を下げ
御妾の疵には一字ほつてあり
引のしに娘は下女にだまをやり
園はれの下女とひじやうにかけられる
ほめられた下女ちやはんと迯げて行き
むづかしい星におくさま御あたり
花よめの花はおぎやアで根にかへり
はな入れのぶつかへる程女房たて
存生(ぞんじやう)の內からみさをくづれてゐ
かんざしを借りて息子のかくやつさ
おてんばにかまひなんなとてんばいひ
おめかけの仕事と來てはとんだ事
淺つけをなほ〳〵害にねだる也
よりたまへあがりなんしと新世帶

色の世と隣の茶やのばゞアいひ
登分とは下女ばくたいのむしん也
賓券の名あて娘の大あばた
持つほどの物に針妙ふさをつけ
御湯殿でそちもはひれと御じやらつき
御ふくろはかぶつて行くの迄はがれ
飛石の間をちゞめたき女中客
樽酒の利害女房はふのみこみ
おつとせいころばぬ爲の藥の名
女房を有るものにして店おろし
婦がなけりや飲めぬと舟へしよびく也
花見さと下女かる石で手をあらひ
愛想のよいをほれられたと思ひ
格外の持參見せものほどに見え
御めかけとからかつてゐるたはけもの
御酒きげんより見ぐるしいさゝきげん
容態をいふと腎虚(じんきよ)とのみこまれ
女房はやかぬがたてゞいぶすなり
いつをいつまでと園ひの母はいひ
花の外には松の木のやうな下女

花の山氣のふれさうな御院號
井戸端で身ぶりが過ぎて下女すべり
つき袖であいさ左やうとしようちせず
色男じゆばんでのどをしめるやう
女には御ゑんつたなき淺黃うら
晝ばかりつとめて下女は重年(ちようねん)し
ほそながく嫁のゆづけの音がする
げんぞくの當座愚僧がちよッちよと出
かたみだにしをつて息子懷中し
御妾のいきほひ股で風をきり
そのぶんに差置きがたきとまり客
しれて見な臺座後光と圍(かこひ)云ひ
なんたびもおまへに似てとあいさつし
聟えらみする內柳臼になり
今月の米はくろいと圍(かこひ)いひ
抱いた子になりたいなアと車力いひ
いつそもう豆腐がばたり〳〵おち
たばこ入やつてはくどく淺黃うら
先殿のふかく御ふくろさまだらけ
よんどころなくとは後家のきついうそ

不受不施のくせに容顔美麗也
若後家のたばこむさうの箱から出
しかつても／＼嫁うすぎなり
川口屋帯がとけたといつてやり
俄雨うばはおせゝだのとはしより
かたぎぬで見なすつたのと新枕
むなぐらをとる所なき二日ゑひ
ほつぺたを下女むらさきに作る也
殿さまはすばやい方とつぼねいひ
御たねをも宿しましたと宿は云ひ
めん鳥のすゝめと姑故事をいひ
物思ひ下女おやわんへ汁をもり
二道をかけてと下女はいきどほり
具足櫃のはたぼの出た男也
若ざかりかたのごとくの不如意なり
御めかけはみぜんをさつしこかす也
ふり袖で星霜を經るやまひもの
あつかひで村間男は五俵出し
ぶき女さて褒めしは上手也
かれ芦の中にあやしいやねぶあり

産んだお子よりは妾がだゞをいひ
佛眼でちやんとしてゐる下女が酌
ぎんなんがさぞならうのと淺黄うら
御物見に餘つた顔を塀へ出し
二代めに銀のきせるでぶつつぶし
うるはしい聲でさま／＼／＼と呼び
ぬけた夜着いますが如くふくらませ
下女が帶蛇か蛙をのんだやう
仲條へ行くより外の事ぞなき
やく女房千人なみの下女をおき
せんかうは尤も後家のたてるもの
とんだ後家裸になつてぬり立てる
あかゞりで下女天もんをかんがへる
どうなりと迄によつ程錢を入れ
おふくろといツつべき玉ぬすんで來
かきの皮からむくものとずつと立ち
貞女をば餅をつくまでやつとたて
かごかきと下女同樣に尻をふり
かみしめて見て味の出るふつたやつ
くけあげて猫にはましと引ツぱらせ

ほれたのが來れば後(あと)からられたが來
青傘のかたぶく方に車引
重年(ちやうねん)をさせなさるかと水をむけ
つべこべとあらゆる事を殿へつげ
つゞら笠目ぼしい下女を二人つれ
花の朝狆もつれてと御意なされ
氣があれば目も口ほどにものをいひ
やぶ入をむざんなるかな只かへし
こうばいのはやいたぼだと屋根で云ひ
ほれられたおやぢ愚案に落ちかねる
くどかれてあたりを見るは承知也
御妾はこつぶですういすいとのみ
御めかけの床に新もの五六冊
引きさばけさうに駒下駄はいて來る
手でくんなさいと淺黄はこしをかけ
高わらひかくしおほせたあとの事
相傘をいたちごつこのやうに持ち
くつさめに下女へツつひの灰をたて
こりや又の腕に女のふくみ状
兩道をかけて針妙重年し

歌がるた大先生とよめをほめ

安　永　中

勞咳はしのびがへしのうちでやみ
時に應じて娘ともとなへたり
ものとりと見え禪門ととちぐるひ
小べんに起きて女ぼう碁をじかり
石うすにこび付いて居る淺黄うら
はらむばん妾切られた夢をみる
組をたてめかけに出るはにくい事
貞女ぶり今ぢや元直にしかねたり
百助をどう思ふ氣か下女は買ひ
御めかけは書物のはしも見ぬ女
只でさへ笑ひやだのにかねの禮
ぶつかけがよいと花よめいひかねる
下女が文(ふみ)あだかもはなしする如く
壹疋の相撲にをすが五六疋
つんとした女のそばに淺黄うら
ぽつきりと折れさうなのをむすこさし
御意に入るやつは外さまの女なり
かねへんをせしめるゆゑに鈴がなし
よく／＼のたはけ女のこもかぶり
いゝなされかたと女房下女にいひ
なにさもう隱さん事と醫者はいひ
いち上りなどで岡崎彈いて居る
大和茶でねがひある身の長ばなし
新月の色だにふるい女房なり
やみにあやあるで娘の門すゞみ
くびツたけとはあてがつたくどきやう
湯殿からわすれた時分嫁は出る
こむかひて入れたで後家へみな不通
取もちはひゆうどろ／＼とおどしかけ
下女が文(ふみ)書いてはくつてしまふ也
持參金にはかに藏が十五たち
下女がそば事をかしくもねぎをさり
看病が美しいので七をなげ
後家の供じよさいのあるが壹人(ひとり)付き
小便と後にぞ思ひしられたり
御外戚付いて歩いたばゞア也
晩年に及んで奥の〆くゝり
おはぐろへ下女うかゞつて解せぬ也
御しゆうしへやるぞ／＼と臺(とう)にたて
帶代も二分ぐらゐのは水もくみ
よくせきが烟草ぐらゐと下女見切り
娘はやわきの下から用をたし
なに巾しやせうと後家の供はいひ
色男臍から二寸うへでしめ
乳ともゝを出さねばたぼは出せぬかの
しめかへす手を殿様にいたゞかせ
御亭主のすき見生死のさかひ也
おくさまと妾の組は大ちがひ
火まはしにおめかけ日なしかしと云ひ
兩袖にけつまづくほど緣どほさ
茶を五六十ばいのんで手をにぎり
わつちがやうなものとおもしろく成り
奥さまの琴にさまよはあはぬ也
ものとりの娘と出來ぬやつがいひ
目やはなの代金として二百兩
殿様を外へはやらじ鈴のおと
小便をたれる女も一トきりやう
あんどんのかたはらに住むうつくしさ

今までの事を湯にするやかましさ

一大事花よめどうか屁が出さう
二十けんさいげんもなく茶をくらひ
乳ばなれださうだに嫁はきえたがり
出しけたに結ふのが妾上手なり
大願成就若後家とものをいひ
風きりを切らぬが親のぶねん也
とまり客內儀初手からふのみこみ
娘の出來そこなつたへ二ケ所つけ
おさんばかりで暦には茂兵衛なし
やうじでもふしでもなくて腰をかけ
どうれいと下女片ッぺらぬつて出る
一物の有る後家あとへ年もとり
なま長い袖ひるがへしをどるなり
女房を小楯に取つて見世を出し
御一人一兩づつと下女が宿
御めかけは木太刀を持つて勝利を得
團扇ではにくらしい程たゝかれず
ひよめきを銀でかき〳〵嫁はたち
國家老來て肉屏風たゝませる

持參金何ンぞといふと頬へかけ
四五反たいてとのさんへ〳〵
きれでしたたぼを唐犬額(たうけんびたひ)すき
そこから用を云ひなよと出來ぬ也
下女がせな皿をねぶつてめしを喰ひ
てふあしのむかうに日なし立ッている
とてちりで雲井の曲へけちをつけ
びいとろで二はいあふつて嫁は彈き
手の內へむすこを入れる大年增
間男は直をしてせぬが手ぬけ也
おらアもういやよと帶でたゝく也
女のたましひ馬鹿げた男研(と)ぎ
子をふたりすてゝおや〳〵とんだ事
三絃とあかの他人の傀儡師
ものさしを持つてござれと納所云ひ
やしき中わつちが思ふやうにする
こはい事めかけ四相をさとる也
ちゑの出ぬ時はこたつへ腰をかけ

天明中

いきほひまうにのゝしるは妾(めかけ)が兄
蓮を見にむすこを誘ふいやな後家
あの銀杏何年ほどと淺黃いひ
どこでもいゝにていねいに尻つめり
御局が卯の時雨(ときあめ)の故事を云ひ
歌がるた人のちやう場を嫁あらし
ま男といはれず和尙くやしがり
平澤でよこ手うつてる馬鹿亭主
手ぬぐひのよりをもどすは出來たやつ
いつそおもしろく喰込むあらせたい
來たさのを彈くさいちゆうへ國家老
うつ向いてかくかんざしはものになり
いやらしさめかけ此ごろ茶をはじめ
遠吼の四五けん先で四花をする
後家ざかりだとほめやうも有らうのに
若とののぬけが奥ではゞをする
佛より若いのをもつまづい後家
猫よりも齒をまつ黑にするがよし
いもじまでそつちでせいとい〻むすめ
四つまへは老いにけらしなやうじ見世
女にあてられ快氣がむづかしい

えて吉が來たとむかうの女房いひ
はらからのために大小ねだり出し
下女文をよんでもらッていきどほり
おしろいの間くばりをしてへんなつら
切文の使がつ〳〵してかへり
　いせいにふくりんかけた御奉公
地女の年明をまつ松が岡
沙汰のかぎりはめしたきと悴迯げ
明の方見るうち下女は迯げしたく
きやつ氣があると思ッたらもう無心
言語道斷乳ばかり持つてにげ
とんだ事和尚衣の袖をとめ
ちつともほれず茶を二はい錢五文
やくそくを下女はとつくりねてしまひ
（第八上終）

誹風柳樽拾遺第八下　三篇

戀　部

拾　遺

おとなしく成ると目付キがわるくなり
此ごろは途方もないとたゝく尻
十三と十六只のとしでなし
かくす文ぬからぬ顔で鶴に折り
うつくしい顔ですたつた紋をつけ
母の名はおやぢの腕にしなびて居
よい娘母もほれ人のかずに入り
蟻一つ娘ざかりをはだかにし
出來ぬやつおよしなさいとかたく云ひ
藪入を霞に見そめ霧に出來
馬で來るのでよめん女とはねる也
訓讀のやうだと閨ヒ三を下げ
淸書にちつとちいさい下女が文
女にはいつそ目のある座頭の坊
くどかれて乳母抱いた子に聞合せ
あてもなく下女ふら〳〵と戀病ひ
若後家の豈勾當をこのまんや
下ひもといふはもめんの事でなし
千金の御めかけ一字でも引けず
石の飛ぶ夜はあたらしい顏二つ
おせ〳〵の三絃めかけ達者なり
閨はれは猫のひたひを上草履
好物なはした二三度つきかへる
ねつからのきぞういもじがきらひ也
うらみいふ下女井戸づなの毛をむしり
馬鹿亭主つなぎの多い子を設け
眉毛をば取置にする娘あり
かし本にくすんだ娘入れあげる
こつそりとにらめる娘しやれたもの
帽子針くはへて内儀ひざまづき
かねつけてとがの次第はしられたり
一ッぷくを引ッぱりにのむ女きやく
まくら繪をのぞいて下女はけしからや
にくらしいみな西川はごぜにかき
一さかり何か封じて取ッておき
はり箱に有るせつかいはふさがつき
針ばこの内は一生かたつかず
まへ帶になればうしろがはるかまし
此裏になんとも解せぬ娘あり
色男ちとそろばんはにちう也
尼になる場を氣で喰つて嫁に成り

あいさつのたびかんざしは場所をかへ
色男乳母がなさけを餅につき
親の恩十四でしつた娘あり
女同士どこしかあらを見出し合ひ
ごぜはみなゆび分量で化粧をし
下女が戀日に三度づつ實を見せ
心づけあぢに氣の付く下女がやど
一長屋引きずりをしる火うちばこ
あいさうに一つはたゝく乳母がしり
はりもの丶杭を舂屋が打つてやり
はへさかり一わり顔のつよみなり
請人と人主のある御新造
ほれぐすり十日過ぎてもさたはなし
くどかれて給仕は盆へ渦をまき
へつつひは下女が戀するおしまづき
かの下女とかの草履とりちら〳〵し
ようかしな娘の所は袖ばかり
其下女が書は木で鼻おつこくり
むだ骨の夫婦ある時願をかけ
勘定で馬をばやめて妾にし
長局けげんなものを賞翫し
毎月のことをごぜよくしんまくし
長つぼねがくやで聲をからして居
生娘は膝ツ小僧に五人力
下女が文めしのたらぬをおもにかき
能い男貧乏神の氏子也
我首をひよんなところで高く買ひ
間ちがひでたゝいた尻が封じて來
後家のとし內ばにあてるいやなやつ
出かはりのなみだにしてはこぼし過ぎ
山ねこは娘の功勞へたのなり
くろ鯛を命にかけて下女は喰ひ
あなかしことはおもしろい文のとめ
御めかけは打ちものわざはかなふまい
下女だけにさすがりんきも六ッあたり
鎌くらのいけすへ嫁は身をはしけ
やぼな事女房のはちを月夜にし
圍はれに母のまがひを付けて置き
明けかけたふすま元直にしかねたり
しゝ喰つたむくひでをしい袖をとめ
古近江がほしいと妾ねつをふき
長つぼね願ひのならぬうせものし
抱いた子にたゝかせて見るほれた人
勘當はぬけ裏などもくらからず
仲條でほつたんからのことをいひ
學問が棚へ上ッてこゑがはり
目にたのむ乳から味に道がつき
はやり目が女房を置いて下女へ行き
肴屋の猫の氣で居る奥家老
ちく生めなどといふのもほめ言葉
にぎりたい手へちよつぽりとおしてやり
ぼたもちも棚にあるのは御手がつき
女房はたんぺいきふに馬にのり
大名のかりろ道具ははらばかり
かきがねに返り忠ある化粧部屋
地黃丸書はのみつゝ夜はきえ
御家中へ棚から落ちてあんどさせ
枝豆でこちらむかするはかり事
眞實にはでな詞はなかりけり
ものいはぬかつら男もしのぶ夜は

こそぐつてはやく請取る遠めがね
大和茶の亭主を見たる人もがな
ねんごろにみな西川はこぜにかき
かたいやつがうぎに尻を引ッつめり
藪入をなまものしりにしてかへし
やぶ入が來ると其の藪ちやくやし
居ずまひのわるい内儀でうれる見世
毒斷の一つは聞きも云ひもせず
しのびごま何ぞ云ひたいすがたなり
腰元はきつかけのある威をふるひ
こらしめのために稲毛の伯母へやり
女どらぶつでなし又のむでなし
御めかけもうきふしんこの近所の出
戀やみは金もちの子のやまひ也
若とのよこねなんともげせぬ也
すかしては小姓切腹道具也
かたびらの衣通(そとほり)ざつな女なり
仲條の下女は前車をじろ／＼見
こま下駄の本音をはくがめかけ也
重箱のやうな駕から御ぼたもち

御不幸のあとを腰元へいどんし
袴腰氣づよくあてぬ意趣ばらし
二親は白鞘物でうる氣なり
下女が手はおや／＼／＼とわたに逃げ
あのかほへへちまの水はへちま也
下女が文梵字をひねるやうに書き
ふらツきよな夜はふんどしのひとへ帯
やぶ入のうちに水とも小のむし
御妾の疵は鼻から煙を出し
かの後家へ和尚桂馬と打たれたり
下女ふぜいなどとちんじる若旦那
いさかひをしい／＼腹を大きくし
くどかれて乳母はこくうに子をあいし
はねられた意趣に丙(ひのえ)を吹聴し
かたさうに見えてすこぶる女ずき
見倒屋(みたふしや)ついでに後家も仲人し
くどかれて下女すりこ木をはじいてる
ほとぼりをぬく内むすめかゝり人
御隠居のめかけしやかうを取氣也
後家の下女穴ほりなどとふかい中

奥行の無いもみうらのはづかしさ
おめかけはぼう／＼まゆがいつそへた
咄のはあれかと後(あと)で舌を出し
とく心の下女大山の近所なり
その手代その下女ついに九尺店
御亭主の御用の外は車どめ
御口番あのね／＼をたんときゝ
親るゐにろくなのは無い玉のこし
新枕明日横町の湯へはひり
三の糸だらうと糸屋起きて出る
御妾の胸さん用は大きすぎ
丸わたのうちでかすかに返事をし
もみくちやは中條流の道具也
いたづらをする手を糸のわくに借り
しぶむけて十人なみの顔をもち
新しい妾の方へかた荷づり
何くはぬ顔で男にけつまづき
錠口へ牛造作のかほを出し
りんきゆゑ七つ鉢へも八つあたり
行末は誰(たれ)肌ふれん紅の花

いつそとは口舌の中の置字なり
のり物も虎のうんだるたか蒔繪
石うすの後家も世に出るはねつるべ
文の矢のうらをもかゝぬかたい後家
茄子漬の入る献立に札が落ち
奥家老不粋な役をつかさどり
讀まんどし書かんどうしの戀も戀
おしろいでけツくよごれる後家の顔
うれしさに二つ飛んだる箱ばしご
ころぶ家江戸の娘が抱きおこし
箱入もふた親の手を釘ばなれ
底倉でいかけてもとの釜となり
御情がいく夜つもつて里へ扶持
布袋には旦那もちつと手傳た
手にあらば桂馬うちたき姉妹
閧干して後のつまらぬ丙午
けいせいに三本足らぬ娘あり
無理いとまりきんだ男荷をかつぎ
母おやがしやもので娘くひつかせ
いたづらなやつとは親のきついやぼ

生靈はわたりがついて看病し
箱入にすれば内にて虫がつき
うつくしい手のかけまはる琴の上
へどの出るせんぎが濟んで宿へ下げ
のぞき地になつても妾つくり立て
御妾はこがしが來たできえるやう
おれともにかみは五人と妾いひ
振袖を古來まれにて御たづね
袖づきんくらひこませる道具也
ゆくわんばのきはならいやと圍云ひ
澤庵の石をおろしてぜつにかけ
居ゑられて七兩二分の膳をくひ
物思ひやぶいり已後の事と見え
火箸にてやぼめ〳〵と書いて見せ
よそ行をかりまゐらせに下女はあひ
こしもとはかたき持ゆゑ床をかへ
おしろいをした下女首をついだやう
くどかれて紺屋のやうなうそをつき
ほれ藥ふらん〳〵とをどりの手
後家の代になつてどうやらかうやらし

ほんのりとするのが嫁のかくしげい
下女が文づゞら短くぐちをかき
くし卷へわざと斗りのたがをかけ
にぎらせてこつそりきえる文使
掛ものゝやうに妾をとりかへる
色男はしたに斗り産をさせ
事缺げにおはるる下女は横ツとび
人見しり乳母が口舌にちや〳〵を付け
りんきにもあたりでのある鋼だらひ
つめりたい柳を包む緋のはかま
うつくしい手の松明はかやの内
盗まれた顔へやう〳〵日があたり
雪隱はしごくの文のよみどころ
若い身でなま兵法な後家をたて
おしゆびよい內とは下地ある事の
血まよつたなどとまをとこ云ひわけし
きもいりの茶盞で出すはめか奉公
出かはりで娘の戀のはしが落ち
やせぎすは乳母がじまんの亭主也
いせ講へその後懲りておやぢが出

こしもとは雨戸くるたびおどかされ
死ぎはに呼ぶ女房へ茶をかづけ
しぼらしい道具に遣ふ白あばた
あを女房しごく白いの異名也
人はしがかゝつて妾ゆるぎ出し
嘘ゥやと引つぱたかれる草履とり
御供まち帶がとけたとふりむかせ
金鐵の如く娘はふるひつき
戀に實が入れば稽古にやせがつき
文鎭をめかけのえりへ入れて行き
色男うぬぼれのした新無間
くどかうで夜食の椀をふいてやり
すてられぬ文も屛風の蝶つがひ
玉だれの內ぞゆかしき一トさかり
干瓜を八艘飛で下女はにげ
姉のすく紋は妹の氣に入らず
ふん切ッた事もし得えず四火をすかゐ
腹筋も女のよるはつやがあり
提帶はふうのうまみを棚へ上げ
のんなのは見ぬと女のいふ女

分別の外といふのが戀のかぶ

（第八終）

誹風柳樽拾遺　第九

哀傷部

寶暦中

片棒をかつぐ夕べの鰒仲間
南無女房ちゝをのませに化けて來い
胡麻鹽もひたひに有ればあはれ也
中日に死んだ遺手はけがの內
直が出來て念佛申すはや桶屋
施主はみなぶたれたやうなあたまで來
若後家の忘れてゐれば寒たまご
よし原へ廻らぬものは施主斗り

明和中

とゞめをば余人にわたす七加減
弔ひに名斗り遣つてすます義理
龍宮のくやみ冠脫いで行き
つかに手をかけて弔ひ追ッて行く
首くゝりつらあてにとはたはけ也
上下で是だと兩日なでて見せ
懸り人樽ぬきにして葬られ
あつらへたやうに姑女頓死する
それもさうだと上下を脫ぐやつさ
それおもんみれば行くやつ五六人
上下を脫くと無常も戀になり
氣がそれたとて弔ひを母うらみ

安永中

遺言は只大じやもの姉の事
もりころすので藪醫者も名が高し
施主の禮巾着切もうけける也

天明中

無常の風にさそはれて大一座
二代目の佛は內で湯をあびず
いゝかげん損德もなし五十年
人といふものはしれぬと大一座
戒名を御宰は茶屋へ聞きに行き

拾遺

鐃鉢(にやうはち)で行く相談がわかりかね

なま長い經であつたと土手で云ひ
此佛さまも御好きと舟にのり
とぶらひのあたまにしては光り過ぎ
弔ひが淺草邊できつい事
黑豆のへどなどをつく大一座
大一座やき場の分もふたり上げ
弔ひに行くも嬉しいひとさかり
醫者衆も辭世をほめて立たれけり
なく／＼もうかとはくれぬかたみわけ
かたびらはかたみの中でうすいえん
鬼王へ知りやる通りとかたみなし
客殿の娘は袖で鈴をふり
たが爲の春よしきみもみどりして
いやがりし机のうへにまくらめし
人魂の頓死と見えて矢の如し
人魂も勞咳やみはぶら／＼し
人だまのいぢけてとぶはかゝり人
金もちの人魂行きつ戻りつし
ゆうれいのみな横に行く平家方
ぬきんでたゆくわん出店の亭主也

いツかどにして狆を出す無常門
輿屋へは葬禮なれた人をやり
愛想にこし屋の内儀べそをかき
石塔の中に眞赤なたちすがた
遠くからつツ突いて見る衣川
代脈がちと見直した晩に死に
うねくつて飛ぶ人魂はしうとばゞ
かたみ分けうらみつらみのはじめ也
入道は眞水をのんで先へ死に
こわめしに目玉の有るはあはれ也
千ごりに行くのをこし屋じろ／＼見
わるがたい山ぶじめだと庄司云ひ
又上るためとはこし屋出そこなひ
四五日はぜげんの末期ひく／＼し
又死んでてん／＼舞の講がしら
うかませてくれろと嫁にあづさ弓
定業と見えてやりてはかくで死に
つみらしいものはとぶらひいくさ也
めいどへははみがき一つみやげにし
一旦那死んでよし町までも知れ

大一座元がとぶらひいくさなり
今ごろは灰になつたと燈籠見

（第九終）

誹風柳樽拾遺　第十

釋教部

寶曆中

おしやかさまうまれ落ると茶づけにし
戻りには釋迦と錢との丈くらべ
めりやすが出るとひしやくで身ぶりをし
鈴鹿山味方の旗はもちおもり
木母寺も十六日は愚にかへり
よし町の穴を後住がうめてゐる
願かけたうへに地藏をしばりあげ
目の色をかへて不動は名を弘め
迷ひ子の地藏ぼさつは月行事
如來さまつんとさんなの御手つき
御びんづる德用の無い願をきく
鈴鹿山是ぞ外道のくだり坂

仁王をばまぐろのやうに建立し
引導をつッ込にする泉岳寺
分別の外に和尚の如意を持ち
本尊がものをいつたら傘一本
新がほを一廻りみる御符とり
談義場はしもげた男世話をやき
箱根からこつちにややぼな地藏あり
双盤を打出すと嫁生きかへり
せんたくに井戸をかへほす鬼子母神
高野山人見しりする橋があり
六あみだ此世の道でうんじやうし
とうろうの伊達も佛の道から出
はらのたつ時精進をおつこちる
五あみだにしてもらひたき尻ッつき
ぼんなうの犬がくツつく後家の數珠
佛神へ御無沙汰申すほどのまめ
淺草に鰐口斗りだまつて居
くらい道汗をかゝせた石地藏
寒念佛いつも朝湯の開闢（カイビヤク）し
お談義のるすには壁に耳もなし

天神をあたへて行者失せにけり
觀音の千の矢先に五百うそ
江戸へ來て役者をたのむ神佛
捨てた世も拾うて見たき御ひざ元
人足も何千武州雜司ヶ谷
新尼の小便組とざんげして
僧正の人さへ見るとゆそうめん
淸水の慈悲は飛ぶなと櫻さく
開帳も千手たらりの五月雨
しらこゑであなんと外道もんちやくし
折ふしは佐藤兵衞の時のゆめ
近道に寺の胴腹つき通し
すみぞめとかはるも戀のたりひづみ
還俗をしても半分殊勝也
目蓮はかうばしさうな母にあひ
音樂にわけぎのやうな笛も有り
如意輪はさられたやうなすがたなり
びしや門はからしのきいた顏ッつき
車座で二世安樂のつぶをえり
寒念佛そば湯の禮にちやんとうち

金札も大師につれて山めぐり
念力の度に仁王はきたながり
けいせいも現當二世のうしろ帶
井戸がへに水かゞみ見る角大師
ゑんまさまたのみがひなき口を明き
脇道へ吸込みたがる蛸やくし
大佛は見るものにして拜まず
番所（ばんどこ）も蓮のうてなの御より講
旦那寺草葉の外の見人（みて）に成り
よし町のあなに後住は肝をけし
たましひのごたつく上に常念佛
立春の片々よめぬ門の札
精進をわすれはせぬとへらず口
觀音も不動もくらひ道具也
角大師いざ參らうの御すがた
當麻寺聞きぼれのする名が殘り
過去帳の毛引亡者の屋敷わり
訴訟にも緣起をまぜる寺の公事
大佛のものまゐらぬも世のたすけ
寺請が入用かして御參詣

たゞたのめとは物入りを思召し
護國院しよぎやうむじやうの逸走り
かんばつた聲でじくねる寺小姓
箔付かぬ内は衆生に手を合せ
大悲の矢六本ましたなますのこ
大王は二人かぶろを盆へもり
如意輪は工面の出來ぬ御すがた
稲妻も敷居の高い金閣寺
色六部小ゆびをはねて鉦をうち
精靈の馬の目きゝは下女にさせ
錫杖とおんなじやうに首をふり
仁王さま幕を引かせる御すがた
藤澤で拔身のぶんは右へきれ
突出しのしなんも心外無別法
釋迦如來さうりかくしの身で生れ
難波から閻浮提金のつれになり
百旦那もろこしをむく如くなり
おびたゞし猫がくやみに來ぬばかり
朝大師などと狐を馬にのせ
御詠歌のくびれた所へこのと入れ

佛にも木性金性京と奈良
戀死の諷誦には和尚作を入れ
御だんぎをおむくな娘よく覺え
山門へ霞のかゝる母のこゑ
念佛のころがる内儀たのまれる
掃除番百度參りをすさに切り
笈摺を縫ひ〳〵嫁のつやを云ひ
だゞびろくとんしやへ居る座頭の坊
當住の作りしつみは松ばかり
をしいかほ十萬ぺんでふいとたち
宗體をほめ〳〵造るかつをうり
親玉にやりてが成つて淺草寺
在郷寺二汁五菜もいもだらけ
兩袖をさがして後家はじゆずを出し
帶ときの其あくる年成佛し
音頭取南無きんみやうとはねて投げ
奥女中一あみにうつ御内陣
どつちらへ切つても數珠屋ほめてやり
釣がねは人相書でこんりふし
馬工郎のときたまにぎる納所の手

大佛を一身ごろづつこんりふし
旦方の折々迷ふ大晋寺
談義僧のり地の時に目をふさぎ
靈棚も氣のはる所中の町
一所緒〆のやうなふもんぼん
當麻寺機のあまりをよごしにし
棚經をかんてうらいによんで行き
信心といふはゆさんの片身ごろ
だんりんへ通る僧だと思つて居
よくづらのはつたを遊行額で見
せんかうをたて〳〵先の嫁をほめ
まだ喰へる後家だと數珠や跡で云ひ
俗坐禪よほどつくしたうへの事
むつごとに和尚脇さしねだられる
せん垢離にぬき手を切るは他人也
嫁入の場を入院とはむごい事
谷汲をしまひたまごで一つのみ
善光も木佛なればうつちやる氣
せがき船松を置く場にめしをもり
甲州は鹽もほさつの數に入れ

一旦那覺つて五兩三度付き
御縁日たこも頭香をたきつゞけ
御下向などとあは雪はすに出る
村正を和尚とう／＼餅につき
兩大師五言絶句でものを云ひ
親の氣は大師河原のつもり也
みな色と金ぢやと閻魔帳をくり
角大師湯番をにぢる御すがた
前の世の和尚車をひどく引き
御きどくでござるが和尚座付也
千ごりがおよぐと岡でかんをする
いんだうがすむと魔道へ引込まれ
二ぼさつはあるかつせえと本田いひ
袈裟衣あれは殿様喰つたやつ
百だんな和尚のかほはうろおぼえ
若後家はいかい功徳とくどかれる
淺草寺見附で聞けばつきあたり
ひがん中嫁のわらひの本音が出
からかさで橋本町へおつこちる
後家の供しきみをさげて舌を出し
目黒在正五九月に髱を出し
くねきしへ押付けらるる百だんな
笈摺はみかんにはじめ柿でぬき
御はむきの嫁常香をふだんもり
狼にころもめかけの御院號

安永中

初がつをかと僧正の無我で聞き
海遠し浪切不動とはいかに
百だんな糸びんにして葬られ
大佛も元いろ事で出來給ふ
へんぽんとなびくと吉野仕舞也
代参のむねにぼんなうぼだいあり
梅わかの四十九日はかしはもち
首のいふなりにえんまはさばく也
青銅十疋でめしも喰ひ酒ものみ
弘法は一村おならふうじこめ
つまぐるは後家百八か萬八か
月の出をそらいろの手で拜むなり
二疋めは子にねだられてはなし鳥
念佛を十人ほどで引きのばし
お竹どのどうだと凡夫尻をぶち
慾心成佛とやり手への回向
茶にされた元祖は四月八日也
ふよ玉ばかりが廿五の中になし
船頭も兩しんぼだい二まいつき
下化衆生つむと吉野は仕まひ也

天明中

鳩を射るやうに左右にしやにかまへ
川せがき嫁ものがたり船がつき
善人があるので龜がむごくされ
されども此人そうめんをやたら喰ひ
皿に水もつたをかへる百だんな
百だんなへは豆太鼓くばるなり
供部屋へ寢て前生を思ひやる

拾遺

たもとから今日は是ぢやと數珠を出し
唐人を入込にせぬぢごくの繪
數珠をもつやり手は内が不首尾也
四斗樽へ數珠の切れたをためて見せ

村で聞きや大僧正も血のあまり
朝參り主馬と七兵衛もく禮し
煮やつこで堂をほめ〳〵のんで居る
千の手で引くに三保の谷氣が付かず
三世相下女ことの外苦勞がり
三世相下女ははなはだらくるいし
善光も初手はかつぱと思つてゐ
法印の手はいろ〳〵にこくらがり
おびんづるあやかりものとそばで云ひ
子を持つて百萬遍も片手わざ
江戸疱瘡おもきがうへの墨衣
仁王さまどれも極樂おとし也
大王は笏をのまんず御口つき
高野山立引のよい灯がとぼり
をがみんすとは天人が云ひはじめ
赤い名を黒くしたがる里の母
護摩だんは上るとすぐにおろくに居
百旦那寝まきのまゝでおもんみせ
親の日にあたつた下女は二つかみ
新納所先づ盛膳へせこをいれ

穴ほりは花いけなどへ火をはたき
善光はほり出しものの元祖也
御みくじでもらつた嫁もにくがられ
高とうろひくいはどうかまけのやう
かぐはなはすかした迄も帳へつけ
佛師屋はあみだの首で子を愛し
五百年已來在家をこしやくにし
夕だちにふげんぼさつはかちで行き
探幽はあたまのうへにわだかまり
龍神も源氏の田へは水を引き
異國から納豆もらふ小松殿
常念佛三日も止めて死にたがり
四斗樽が大師の跡を追つて行き
護摩壇の蚊は追ひはらひいのりのけ
ときばうず念ごろふりは香をもり
寒念佛きほひのやきの廻つたの
九年めにいのめのあたりぶよ〳〵し
大かぼちやさとりの祖師の姿なり
佛師屋ははしたに仁王とり廻し
蓮生は中でもひたひ生きて見え

方丈は四十七聲くわつといふ
生娘と見えて藥師へ朝參り
かんきんに此世の事がちら〳〵し
五百から一體ぬけて人にすれ
分別のよい分別が無分別
鬼どもをてんがくにする雨がふり
大瀧はこんじやうぼねを丸あらひ
平内は神と佛のまぎれもの
上人の眉にしゆしやうが五六本
木食をとめて夜中に木へのぼり
へぎいもと海苔では實がのめぬ也
折々は大津繪に似た御かんきん
不動さま縛つて置いて突く工面
大瀧でさんげ〳〵をぶちのめし
ぬれ佛をがんだ跡でたゝく也
僧正のいもとふたへになつてわせ
ひしやくから六百卷をうみ出だし
湯豆腐も衆生さいどにまかり出で
橋板は佛師の見世にわらつてゐ
十念の聲もあじろにのりのとく

極樂の道をしらぬがほとけ也
竹の根をほるとは釋迦も仲人口
借りたため俗の談義をきく御寺
身の內の文珠を鼻にぶらつかせ
二ぼさつはおいらがといふ立ち姿
鐃鉢を乳にして居る立ち姿
羅かん寺は萠黃の蚊屋のやうに呼び
江口の太夫方便をいつそつき
うらに來て聞けばおととひ象にのり
三年忌切りで淸盛無緣なり
しきみうりきつい舟間をいひならひ
千垢離によび出しのない中てんぐ
けいせいのおやはぢごくへ七度落ち
常念佛さもいやさうな後世也
引導は思ひ出しては何かいひ
かんきんにいけみが付くとしまひ也
餅好は我石塔に工夫なし
紙帳では自業自得の屁の匂ひ
御詠歌のかなきり聲が嫁いぢり
小角はふたりかぶろに鬼をつれ

わたばうしだけは佛師も心得て
弘法はわが身つめツて見ぬと見え
弘法も只は居まいとうらを行き
分別の外と文珠もとかれたり
ながしのわきで大日をくどいてる
しらぬこととて大日へ還つて行き
念佛講すでにとらんとつかまつり
鳴り止んで折目をたゝむ普門品
鈴鹿山外の觀音ではいかず
よんだから來たと禪僧いつたやう
母おやは百度まゐりの立番し
かぐはなはまゆをひそめて言上し
お袋はたゞこつくりをねがつてゐ
鬼子母神ひとりうんではさしをなげ
札箱にばあをしてゐる角大師
御利生もいざりの立つははぜらしい
弘法のふりで四五日くひ倒し
血の池へ赤鬼ばかりせめにやり
またぐらへ柊の生える角大師
佛緣のうすひ峠の坊主もち

羅かんたち二百五十は出合なし
尼になりや蚊やの出入も春の鹿
かぐはなを呼んでえんまは鯖を買ひ
西方と寂光淨土いぢり合ひ
大津繪の出る開帳はあだでなし
福祿壽よくは坊主になられたり
女をば魚類のうちへ入れて置き
額へすぢ出ると燈明錢と云ひ
こもそうはもらはいでものすがた也
手覆(ておひ)かけながら小遣くだせんし
願人は吸物わんの箱をもち
かるやきを買ひに他宗の通りぬけ
えんまさまぬり樽といふあたまつき
旦那寺喰はせて置いて扱といふ
提灯に釣鐘まける淺草寺
てんがくがふると鬼ども逃る也
びんづるのなで所なき戀の願
やぶいりの數珠をもつ日はつけやきば
ふとゞきな目黑秋出て冬歸り
あの世からさぞ姉さんが〱

姉の跡とんだ時にもゑかうをし
水入になつても唐子寵愛し
草々へ異香くんじてとろ〳〵出
指を切るからは九ほんの淨土迄
放生會いづれも夫にござりませ
奉加帳どうしなさるとやりてが來
淺草へ來たのでむすこふかきとが
弔をよろしいすぢとむすこ云ひ
佛力で行くよし原のせはしなさ
たいこもち前世は土手のきつね也
にえさらぬつれは本來無一物

（第十終）

誹風柳樽拾遺 第十一 四篇

神祇部

寶暦中

一萬度大きく守り給ふなり
辨天もほこらに似せて池をほり
牛車泥の下地に蒔繪をし
いざこざも無くて渡らせ給ひけり
大黒のすきは大根のぶんまはし
內陣にゐるで初穗のそれ矢が來
伯母君の腹にたねまく神の德
羽衣をかへしてしまやおさらばへ
太神樂頭は獅子で尾は奴
太神樂のどのあたりにのれん有り
事ふれの詞に乳母の乳があがり
二見にてとまり〳〵の白狀し
二人にて青海原へ竿を入れ
まきせんの時は羯鼓の音がくるひ
代參は道から神と不和になり
富士の蛇は六萬坪の主となり
雨の宮と聞いて下駄やは手を合せ
瘡守の本地を開けば赤合羽
元日に關八州の毛を拾ひ
太神樂よめ入りをする故事を云ひ
戸がくしも神樂の間鬂をぬき
朝な〳〵故鄉の方へ何か云ひ
伊勢の御師勅使のやうなとり廻し
注連繩で二見の石の首ツ引
託宣で三尺下をこはがらせ
奉加帳曾我の老母が附はしめ
叶うたりその滿ずる夜とびら明き
髮結ふがきらひのやうな矢大臣
町內の佛とらへて猿田彥
つまむほど道陸神に箔を置き
神主は人のあたまの蠅を追ひ
さるだひこあたごの下でもくれいし
榊もち沈香もたかずへもひらず
逆桐の開帳をするえびす講
祭から戻るとつれた子をくばり
正一位でつちに告げてのたまはく
ぬけまゐり此春思ひたちのまゝ
あら事と出ねば神にもなりがたし
福祿壽四五人まへの頭痛がし
煤掃に白雪餻を引ツからげ
三輪の神どぶをまたぐとだまをやり
福祿壽おじぎの時はあとしざり
太々の夜着にひとりはをしいもの

かまはらひ是非なく鈴をしばし貸し
神樂獅子首をねぢるといとま乞
笛賣は通りかぐらをちつとふき
七度半おちやつぴいほどかけあるき

明和中

戸隱は油の直段ぐつと下げ
鯛で無い時はうつちやる西の宮
戸隱は手のはひるほど明くを待ち
おごるのをねめ〳〵守るいつくしま
よしはらを卷軸にする大やしろ
たからぶね逃げて來たよな御すがた
祭禮に獅子は毛ぼりのうでが込み
神たちのるすにゑびすのねたり喰ひ
みりん酒を上げて撿挍拜をなし
越後屋に長逗留の風の神
乳母が子も御幣の下にちゞこまり
しやう神と申すは夏の神でなし
太々の連中澁茶が難所なり
そり橋は乳母一生のなん所也
神樂堂小ゆびをはねて幣を持ち
ゑびす樣人たがひにてぬすまれる
盃の道をわすれるさかきが來
神樂堂心ばかりの足びやうし
大やしろ只の午にはひとりあて
御はしたのまたには足らぬ女坂
大ぶくをのめとかさもり夢想なり
きめひきがすんでかなでる羽衣の曲
につこりと人魂を見る時まゐり
いちッこをよぶと女房の市がたち
宵まつり盆に小豆の通り雨
御出生たゞせば口へつがたまり

安永中

びしや門の外は足弱斗り也
しり目など遣ひかぐらを奏す也
細見は相對にする大やしろ
いつくしま年季を切つて守るなり
見世へ出て元直をしやべる狐つき
下戸向の神さま牛の御ぜん也
何いのるらんとあんまりむごい事
狐から上り天狗で日をくらし

天明中

大黑をぬすみ一もくさんにかけ
異な所へあたつてわらふ神樂堂
盆前は天狗倒しにされる也
眞先のいなりおさきに遣はれる

拾遺

女神まづしかられ給ふ世の教
神代にもだます工面は酒がいり
かうも手のぬかれるものか神のぜん
たんせいをぬきんずべくがかなめなり
住吉は此漁父などと下から出
猿田彦いつぱし神の氣であるき
猿田彦はなをにぎつて汗をふき
首ぐるみ打ちまぜにする曲太皷
えい山のあてで一日ひとつなり
雷も法性坊へわたりに來
神道者もりや十分理だといふ
樂天はへぼくたおやぢだと思ひ
うさの神ちやアふうにした歌をよみ

神馬引武士のめしをもくつたかほ
神子のあなぶんまけて行くかまはらひ
洛中はそれともしらず蚊屋をつり
時平の相伴をするめいわくさ
加茂川を胴切にして參內し
三度めのちよくしをこらへかつこむ氣
神樂堂ゑぼしをきたがむことなり
いものかはでもむかうかとじやまになり
神佛も二十余年はためておき
さるだ彥さながら錢も拾はれず
神無月さんせん箱の肉が落ち
飛入は御師でちひさくかしこまり
神前でなまものしりな手をたゝき
かなめ石よもやと神もにげをよみ
鳥越でくへば神田ではらがへり
神の馬うやまふ施主にへをかゞせ
神託をのこらず聞いてやけどをし
大こくも惠方からくりや安く見え
たから船はうろくの入る神もあり
湯豆腐を喰ひにげにする風の神

さいせんをのんで神輿をよろけさせ
事ぶれが來ては今年もいやがらせ
きのえ子に二また大根氣がつまり
もゝしきの勝手を知つた雷が落ち
別當は狐や馬で茶をわかし
御めかけについてほこらをねだり出し
狐つき旦那のはぢの店おろし
うしろから追はれるやうな猿田彥
太かぐらたばさんだのが上手なり
御眞筆つまる所は錢の事
江の島は三冊ものの宮づくり
祭禮にもやしのやうな四てん王
明星の茶屋から御師に見かぎられ
祭禮にまことあらはす鍋一つ
童子にはあたり武士には不老不死
是見よと御禮參りに男坂
盜人にすてられてゐるゑびすさま
かまじめの內めしたきはかしこまり
卷舌の唐人の出る佐久間町
神樂堂立聞らしくあるく也

三輪の神ちよつかな事でためさるる
太神樂御うばの尻を横に喰ひ
うつくしい方へ神代もかたうどし
時政へあたへた跡へ風がしみ
祭禮に天の羽衣二日着て
釜はらひよその銅壺の評判し
御きたうへ口舌をまぜるおかめじやう
御代參神と君とへちやらをいひ
大黑は三分そこらの米をもち
御はらひも內から脊負ふは哀也
御きげんを肩でうかがふみこしかき
釜はらひじや〳〵馬ほどに舞をまひ
土だんご喜十を遣ひながら買ひ
仲條は山の荒れたでこり〳〵し
あづきもち五つそなへて五つ喰ひ
なら茶喰ひ中黑の旗えりへさし
もらはれたやうに寢て居る御師の夜着
朝おきをして御ぞんじの神を追ひ
艸も木も寢るに女の神まうで
あま犬も廿五日は馬にされ

船頭の居所にこまる寶ぶね
胸の火がもえてあたまを手燭にし
つめられぬやうにと禿願をかけ
禿から目にもろ／＼の罪を見て

（第十一終）

誹風柳樽拾遺　第十二上

故事

寶曆中

神代より日月今に地におちず
神農のねごとは舌の音ばかり
おしやかさま生れ落るとみそをあげ
新造を部屋もちにして身退き
夕がほの中へかぼちやはまかなくに
日本へ思はせぶりの笠のひも
文盲な駕籠の寢て行く須磨明石
二四不同なかりし三五夜中の詩
龍宮へよくは積つて縄を下げ
悪龍の中にはだかの立すがた
借錢のよけいはいやなゆづりもの
酒もりのいさこざとはんみやこ鳥
夜半に君ひとり行くらん盗みぐひ
分散に世をうつせみのからだんす
すり鉢をふせて西行たばこにし
北州の千年つかひ過ぎたる身
怪我をした鐘三井寺で疵もいゑ
父母います内は餅にて食傷し
天國が出て干ものをとり込ませ
鶯の巣におち付きし一家中
氣づよいと氣の長いのが九十九夜
盗まれて伽羅の行衛は水いらず
河内まですきには夜半に身をやつし
樂天もちくらが沖で逃ッ尻
色外にまだあらはれぬ山歸來
八つ橋をしてうにかけるかきつばた
禁足をわすれて笑ふ橋むかふ
三寸の舌は藤戸の浪のひら
高安へ通ふたんびに井戸の事
山を出て阿羅々遣手に宮づかへ
寶劍は尾先名珠は臍から出
九重も塩は土扁で通用し
片假名に四角な文字は手を引かれ
一（いち）賣つて萬物をしる呉服店
優曇花（うどんげ）を小麥の花と覺えてゐ
ほれた同士るすにのこんの雪の肌
似せ醫者と人に語るな女郎花
藥喰人目も草もかれてから
子はこたつ親仁はころぶ所まで
風をいたみ鼻に持たせる袖頭巾
こしもとにおもやとられし飛鳥川
八朔の雪は吾妻の香爐峰
でんがくはむかしは目で見今は喰ひ
素一分の威光でぎうと召されけり
在る井戸を置いて河内の水をくみ
いけにへの氣でこしもとはよりに立ち
よめぬ場へ蜘先生の引きまはし
五條には夕がほらしい宿もなし
すがゞきに咸陽宮に灯がとぼり
なりひらも腰辨當でからごろも

いけにへのこはめしと迄納りて
日本と唐土へつかふ舌があり
奥州の土にはあはぬ紅葉あり
田舍醫者使は來たり馬に鞍
獨吟は表八句でたばこにし
麴屋の梅の花とは見たれ共
水茶屋で世の人口をたばこにし
あだぼれの文に結びし縄すだれ
鎌足へまつぱだかにていとまごひ
與右衛門は見せものに出す思案もし
猫またをとらへて見れば後の母
秀郷はあたま見い〳〵あいさつし
美濃の屁を近江のはなにくさがらせ
西行と狩人ひとつ店にすみ
はくりやうは欄間をみると思ひ出し
ことはりやなどと出さうな日からかさ
筆法の外に一流ふるひ出し
行平は五風十雨にやせがつき
草履とり名殘のうらを聞きはづり
むざんやなはしごの下の草履とり

隣から借りやう貧家のなれ〳〵し
赤穗ぢやの行德ぢやのと中納言
はすはとは女三の宮のわたりなり
垣間見に鼻の出てゐるさるだ彥
姑の御意に七步の詩をつくり
そのむかし茶たねの發句中の町
むねちかはそら恐ろしき手間を入れ
屠蘇袋是しんめうの衣くばり
ぬばたまを遣ひ覺えて片じまひ
三五から夜中に出さぬ娘の子
みことのり世々にくもらぬ後の月
若いとてどうせう不定世のならひ
信玄の武勇に道鬼相もとめ
落ちざらめやはと奥さま仲人し
お目見えの敷居にくねる女郎花
禁酒ぢやとぬかしながらの山櫻
家やしき愛別利喰ふ是非もなし
十八で老にけらしな座敷もち
御幸まで峯のもみぢ葉ちらずにゐ
なきにしもあらずと書いたくれの文

むかしからしれぬで人のいのち也
我いまだ精進といふ日をしらず
孝行にすれば天からつかひが來
いそがしい軍なかばに行暮れて
神農はたび〳〵腹もくだして見
生娘をとう〳〵たらりたらし込み
八重がきもつくらぬ内に女房を
新五左の巣に入りかはるほとゝぎす
横ざけは富澤町の春がすみ
一度きるゆびでまじなふ二度のかけ
はごろもを返さぬ内はめしも炊き
正宗と親が極めて箱へ入れ
業平も親の前では矢大臣
有明の月と詠んでも配所の身
大織冠するり〳〵とだまをやり
鉢ともに一步そこらへ三ケ國
むかしだけ末つむ花と毒づいて
駒とめてとも有りさうな土手の雪
王祥のやうに内儀は綿を入れ
笛の音は垣根こしから問藥

仙人をしろう人にするうつくしさ
そのむかしせんたくの場へ人がふり
田圃からむかうにあたる鬼が城
枳に成つていつぱし縫ひならひ
祇女が母やりてのやうな口をきゝ
ほうはうのふわ／＼を喰ふ阿房宮
いのられて玉藻前はおならをし
ものかはの又上を行くうそのかは
おつぼねは柳さくらをこき遣ひ
親仁へは古今無双なうそをつき
あやめうりどぢやう汁とは出來心
唐人も廿四色に子をいぢめ
ふんどしを故郷へかざる角力とり
石山は女筆指南の元祖なり
鹿子餅買は右近衛大納言
我國の梅の花にてはりこまれ
大織冠伽羅の油を買つてやり
小便に都落ほど立つさじき
さよ姫の外に思案は中はしら
黒ぬしはそつとてる／＼法師をし

仙人を生捕にするせんたくし
始皇帝うちへ合羽をとりにやり
猿と蟹ちとした譯で軍をし
七人は藪蚊を追ふにかゝつて居
新造のけだし天より座しき持
かりそめに風のかけたる藥なべ
建立のあたま斗りは我見ても
帶といふものは日本のうしろつき
朝夕にくへばこそあれ米のめし
さればこそ人の候柿のかげ
薪河岸は上で股野が骨が折り

明和中

龍宮の家尻を切つて義理を立て
白澤は膓しやうもんで人を見る
はまぐりに追つかけ(られ？)てほらの貝
しどの海士すきの道からつけ込まれ
せみ丸をとつさまなどとよく見立て
玉とりを追つかけて出る太刀の魚
口留はおみなへしよりはじまれり
こきまぜる物の有りたき中の町

少將はすこし風氣も押して行き
もえ杭へもえろ／＼と雪がふり
物干は下から通をうしなはせ
むらのもの其角をやつと云ひ覺え
よしはらの鳥羽の離宮はたがをかけ
薪水の勞をたすくる下女が色
北野では義理づめで鳴く時鳥
素盞嗚へ尻尾の先を引出にし
仙人の場へ水汲が來てくどき
桝花女ははなかんざしの元祖也
ふて娘古今獨歩なあいさつし
束帶でかばやきをする御祓川
西行も風呂敷ほどは世をのこし
七足の內みそを煮る工面をし
たいこもちどらを打たせて陣を引き
弓は綿鐵砲は湯とをさまりて
下着をばうろことしらぬ美しさ
吳魏蜀の一つはなれて木挽町
のッきッて緋のはかまとは化けもばけ
すみだ川今もあゆめといふところ

白骨に成つても歌はやまぬ也
むらさきのむらをうばひしこんききやう
龍宮はなんぞかみやげくれる所
關寺はけんたいぶつたむくひなり
えい山の勅使時平をしり目で見
陽虎ではござりませぬとのたまはく
素一分は心ぼそくもたゞ一騎
火の付いたやうにお七は逢ひたがり
からかさで飛んだはなしも若ざかり
石が有るさうだと郭巨初手は云ひ
兼好はあつかましいと後で云ひ
うつくしい顔で楊貴妃ぶたを喰ひ
村雨を相談づくで先へ寢せ
天人も一度人別帳につき
三日はあゝひだるいとのたまはく
兼好は中宿などもする氣なり
まづ笏はおぶふじやまだと腰へさし
歌の會にごりを打つたかほばかり
烏にだもしかざる内儀うつくしさ
半太夫天命をしる人ばかり

ぶちまけるやうだと勅使もぢ／＼し
小便をしては顔淵書物を見
北辰のやうに伴頭大あぐら
早蕨もまだ光陰のにぎりつめ
關寺で久しいものと勅使云ひ
傾城はあしたにまげて夕うけ
白拍子とは間拍子のよい女
生醉は七書にもれたはかりごと
羽ごろもをてん／＼舞でとりかへし
呉服屋は小敵と見てあなどらず
蟷螂が斧だと婆ぶつ坐り
さめ肌がきざで安珍すつこぬけ
あんちんははした錢などおつことし
安珍は死ぬまでとんとかくれた氣
入王のやうに吉野は堀へつけ
寶劍はおろち下戸なら今に出す
學問のじやまだと螢一つやり
虱など卒堵婆のうへでつぶしてゐ
神農は質草ばかりなめて見ず
らんとめもしらず河内で疊さん

ちやらんぽんよせと孟子の母はいひ
湯の盤の銘に曰くのもん所
山ぶしの寢ごかしにした法も有り
此あとは鳩でございと左慈はいひ
梅の木の化けそこなひと時平云ひ
くわらりツと晴れて時平をとりあつめ
朝やけのした日に始皇狩に出る
寢言など云ひはせぬかと盧生云ひ
朝歸り天高けれどせぐくまり
うちまきが下つたかのと小町聞き
片いぢな事だとわらび取がいひ
となりとはひさしの事でふはのせき
井戸ばたの茶わん有常ゆだん也
さくら子はもの見高さに母にあひ
わらぢ喰ひまでは能因氣がつかず
歌といふものも覺えしあがためし
小侍はや這ふほどに成りにけり
白羽の矢立つてこしもとおこり出し
六月はほしひをくらひ水をのみ
ある夜のむつごとに親へ五人扶持

天命につきて素一分もらはれる
百人の中で唐紙へ一首かき
あんちんをぜげんはきついやぼと云ひ
身上りと出さうな所へ蜘が下り
豐年の貢所かとむかひ云ひ
其時のかみなり臍に目はかけず
後の月時なる哉とまげるなり
夕立の句にあやまつたいなりさま
下女が部屋是なんめりと忍び込み
明る日はいざこざ聞かんみやこどり
かけとりは去年とやいはんすがたなり
さもやんごとなき女郎の質をおき
大晦日のがれつべうはなかりけり
何をかくさうと勅使に妻戸見せ
雛にこもふき合せずの尾張町
すそはりの女春日の里にすみ
夜や寒き衣やうすき倒れもの
我庵の蜘切丸は竹箒
よしはらの格子も時にあはぬ也
女房は憤怒の相でをがまれず

かんむりをなほさぬ場にて一つもぎ
人同じからず花見のなかまわれ
朝がへり妙智力にていひぬける
工面する内此界の四つを聞き
女郎花御座きりといふ一首也
やぶれたるおんばうを着てうたひ出し
御妾はもと民間に人となり
紅葉で夫婦の中もたんぬべし
ふり袖の天命をしる吉田町
霜天にいたゞき二十四文とり
御妾はひつぷの勇でふぐも喰ひ
あくた川神代もきかぬふらち也
加賀みのでむすこは飛んでさんらんし
酒斗りかつてにしろと孔子いひ
朕々といふが盧生が寢言也
へえけえに行くとむすこは内を出る
生きものを十有五にてくひはじめ
百人一首末へ行くほど身もんだえ
待宵にみぜんをさつし女房ふて
とまつたがあたら櫻のとがになり

心地例ならぬは男ほしいなり
御妾の聲うつばりのちりも落ち
持參金からき命をのがれたり
落日にもみぢ見る氣はさらになし
正燈寺むすこ無明の酒に醉ひ
月以來女房やしんをさしはさみ
御相伴洛中鍋も釜もわれ
正宗もはしごの下でわたすなり
女房に舌は有りやと太鼓いひ
ふられると武勇をふるふ國詞
座しきもち何か書籍も一部見え
質屋からみもすそ川のながれびな
もてぬやつちぎりも今宵斗りなり
元祿の生れふんどしあごでしめ
孔明は三會目から帶をとき
新造はみないせ武者の鎧を着
諸客床に入るの門也と勸學し
今はむかし我繪馬を見る請出され
やくそくは尾上のかねと夕まぐれ
客の無い姉へ反哺のかんざまし

大一座先陣すでに堀へつき
大一座後陣はいまだ秋葉に居
貴公を待つこと久しと二十軒
鳥もなけかねもなれ〳〵ふられた夜
惣花のちる下かげは寒からず
馬道に馬のりすてておち給ふ
物まへの客あやふきに近よらず
吉田町みな雑兵の手にかゝり
大門のやみに陽虎はとらへられ
伏勢の大將軍はやりてなり
あけぼしはかたぶく迄の月をみる
肺肝を道々くだく朝がへり
北狄（てき）の爲に遊里にとらはれる
素見物たからの山に入りながら
座敷牢時に蠡范伯父き也
よるといふ扁に鳥だと筋でかき
百人一首きゆうせん筋も一人（ひとり）見え
妻捨の月は世間にあるならひ
小便をするは玉藻のよるゐなり
町の子のおじやがよいと母はいひ

竹の子はあんまり母のわるねだり
手長島けんくわに腕がこぐらがり
むすこども符節（ふせつ）と合せたる所
おしろいもそのよ消えては其夜ふり
中の町月丁山に小百いり
かこひもの普天の下にそつと置き
引四つを打つと八島へ逃げるやう
御妾は日々に靈驗（れいげん）あらたなり
本店の娘唐本仕たてなり
いづれとは少しあやめの不足なり
ひよく連理は平人の痴話でなし
なきにしもあらず箕輪でそだてさせ
深草ですその切れたるかたみわけ
玉川の水は孤ならず隣同士
それ下女をぶつは苦肉（くにく）のはかりごと
文筆もぴん〳〵として座敷もち

安永　中

細見を四書文選の間に讀み
品川へちよきは血氣の勇で乘り
そも〳〵どらのはじまりは花見也

すりこ木へもろ手をかけて禿引き
雪中にさけぶを聞けば四手なり
いたはしやむすこ銚子の帥になり
度々勅使よの儀にあらず雷の事
座敷もち琴棊書畫まで取揃へ
三十日とはめかりのきかぬ神事也
配所でもいきまな所はすまのうら
樂んで婬せず歸る淺黄うら
御はきゝの官女天竺うまれ也
頼政の射通しさうな吉田町
朝がへり女房めつたに和睦せず
馬はものかはと品川よむところ
にやあ〳〵とないたで鞠が大不出來
おふくろへどらうそつけば金おこり
朝がへりしやア何ほどの事あらん
ずんごうの鱸（すずき）やアんと范蠡（はんれい）いひ
ゆすり金何かはもつてたまるべき
供はみな歸すに評議一決し
暮の文あはれなりける次第なり
なんでうの事やあらんと土手をこし

李太白一合づゝに詩をつくり
范蠡が寢てから越の手代ぬけ
もと盜物と惡龍あきらめる
五六人花のあたりをよきて行き
天竺の唐のと玉藻すれたもの
吉原で武道勝利をえざる事
やりてばゞ朝三暮四の小言也
夜這星下女が分野へ落る也
上物をしこんで呂不韋仕出したり
ま部屋とは落字と見える下女が文
雪中のちぎりとむすこ題を出し
業平はとあるこかげの元祖なり
人を茶にしをると徐庶はとつかまへ
典藥頭賴政をあぢに云ひ
槍の出た藪は小栗栖ばかり也
春宵一刻價は三分也
借宅で出來たは源氏百人一首
破竹のいきほひで四手土手をかけ
大一座元がとぶらひ軍なり
ある内はいつきかしづく太皷持

いさめるとあなだと始皇おどす也
りんき應變にしたがふ朝がへり
嫁娘南北朝の雛をたて
はんだいにかりにゐにけり初鰹
母親は祇王が供につれはじめ
女房の言むべなる哉廿日過
紫に不相應なるゆかりあり
澤瀉を神農横ににらめつめ
大才をいだいて嫁はほどこさず
臈たけた娘かならず隣あり
父母をしへざれど愚ならず遣ふ也
たなつもの持つて折々せなアくる
ぶりがれんまねるで母は店をかへ
御妾の股をば家中くゞるなり
吉原斗り月夜かと女房いひ
雛の昇殿ゆるさぬでだゞを云ひ
なま長い御名はこの花さくや姫
つはもののまじはりもする娘なり
雁門のはしごへのぼる酒きげん
人もをしとは龜菊が事と見え

客まさに遣らんとす其聲かなし
怪力亂神をかたる太皷持
再會を期して大門から別れ
日本の寐言だといふ月の歌
釜よりはおやぢ良夜に目をぬかれ
三十で死ねば藝者もめやすけれ
天竺浪人をなめて御惱なり
ひやめしのあつものをくふかゝり人
當今いまだ御幼稚でかきまはし
大三十日亭主二階で琴を彈き
始皇帝八尺ほどは飛びあがり
古渡りの官女といふは玉藻なり
どろさめで貰つてぜげんはこきむくる
はてらちのあかぬ坊主と時平云ひ
二千里も行くほど氣ばる月のかご
徹してはとほさけらるるやりてばゞ
いうぜんとさやをしごいてかごを出る
よしきりは伊勢もなにはも同じ聲
おもんぱかつて片町へかばやきや
あくまで黑い羽二重でむすこ出る

後家の供古今獨歩の大たはけ
雁みんなみへおもむくとかゆくなり
養老の瀧迄下に〳〵なり
かねてたくみし事なればたれるなり
くわい〳〵のくわいと下野さして飛び
義時は違勅の罪でござりやす
どろばうとなんだあなばた追ツかける
でんがくのかんばんお梶書いてやり
下女が鼻うた臺所のちりが落ち
路次の行粧はなやかに二人連（ふたりづれ）
朝がへり人のおもてもしろ〳〵と
愚者も千慮と藪醫者にかけて見る
五位の裝束ですがゞき彈いて居る
せちゑをしまつてくんなよと下の關
かつたいのまどで孔子のよまひごと
吉原にゐるにへきらく迄たづね
一歩にて烽火臺ほどわらふ也
ぬかるみへすけん飛込む水のおと
女日でりもみめぐりの神ならば
ふとゞきはふるきをすてゝあら世帶

北國の方に人氣が二日たち
をかしさはそのころ土手へ馬やらう
唐の人魂を日本でめつけ出し
長の道中白張のまゝでつれ
かぜふけばどころか女房あらし也
たこのむと夢見て出來た子が妾
生醉にぼん〳〵つらをみだす也
杉もとは他家で扶助せぬ男なり
實語教富士と布袋をそしるやう
內裏雛離宮へ仕まふ御不勝手
はやくかへりなといひ〳〵石になり
生醉を後家は敬して遠ざける
おのしもしたれはせぬかと祇女が母
から衣ぬひめ〳〵にほねををり
ほらの貝だらうと近江中で云ひ
楊貴妃ももとかつがれた女なり
髮結床御用勸進帳をよみ

（第十二上終）

誹風柳樽拾遺　第十二下　篇五

故事部

天明中

後宮で朱三（じゆさん）〳〵とうまいこゑ
朝歸り女房鬼一口にくひ
袖はふれども三十のうへわらへ
すつてんとんを僧正は道で聞き
もてぬやつつれなく見えし別れより
鎌倉のさばきを受ける氣のつよさ
座敷牢烏羽の離宮がはじめ也
五音相通を女房さとつてる
たちまふべくもあらぬ身の廿四五
矢一つ來つて飯もりにとゞまり
鍬の柄はくされて馬喰丁を立ち
くやしくば尋ね來て見よ松が岡
あしの葉の笛とはきげん上戸也
仙人さまあとぬれ手で抱きおこし
堯舜の代には錠前直し來ず

月花はおやぢ小言の定座なり
夜や寒きとは傾城のねだりごと
素見とは神ならぬ身のかこひかご
しづまつて杜の劍をやつと抜き
壁に耳有つて引四つ聞付ける
蜘手かくなはに書いたをずつとよみ
琴箱を先へよこして祇王祇女
しりやけざるがひちりきをならつてる
まづ最初松葉のていを御目にかけ
連が能いとてせうが入り母はたべ
やみとなり雲と成つたるおもしろさ
鎌倉の御代に飛金もうる出來
地獄からことづてをする延喜帝
大音寺の方むかひてよめとらず
まゝツ子の代には太皷にこけが生え
主人相しらず四つからするの事
壁訴訟したら末世に本がなし
月蝕の生れ畫三にはならず
なんぼうおそろしきもの語りは夜具
母の恩はなはだかるいめかけなり

くわんぬきはけつちうの代に始まれり
あぢきある世の中で後家面白し
表徳を田夫野人も雨で知り
けいせいの好事は門を出づるなり
秋の月だれも直うちのしてがなし
紅葉がり今は遊女がたぶらかし
仲秋のころ大どらを愚息うち
六條の鹽はそんだと徳大寺
おれは／＼と斗りむこ花の山
うそもつきあへず紅葉でくらはされ
業平の書ねは大分あてがあり
わがせこがくべき宵也質をおき
ほとゝぎす有明たどんのこつてる
他人からの入つたのは安部の仲磨
手桶のあたらしきは冠になり
平仄のねつから合はぬ正燈寺
頼政は水澤山な歌をよみ
鹽がまのけぶりもたえて數珠や町
いもが子はやとひ禿に出でにけり
同日の論は駿河と近江なり

韓信に意地のわるいが屁をかぐし
進んではたいこ退いてはやぶ醫
無禮講衣通姫の給仕也
夜の鶴ばかりめでたくないたとへ
捨つべきものは弓矢也度々ふられ
よしや君などと西行理づめ也
出來ぬやつ三度ふざけて身しりぞき
凡女にあらず女のわらは二人つれ
滄浪の水で豆腐屋あらつてる
のう／＼あれなる御僧かごやらう
玉の疵弘法大師見付け出し
見てや止みなん月迫の衣紋坂
なぞ／＼も兼好二つ三つとき
あの探幽はにせ筆ともてぬやつ
まゝ母のわるい手本を呂后出し
口が辷つて瓜坊を孟母買ひ
安遊び父母は只その病を憂ふ
賞は指をくれ罰はざんぎりにし
夜顔の花もまがきに咲いてゐる
雪の四手のねだり非法に過ぎ

女だねつきて二代のきさき也
大膽な娘のあとへ餅屋こし
孝靈四年あれを見ろ／＼
隣で勘當くちびるほろびたり
よしはら中をへんれきし只かへり
二三人死に玉川へ札をたて
その女をにくみ其顔をにくます
金帛をさゝげ三度目もてる也
西瓜をば下黄泉へつけるなり
貞節な新造の出るけちな晩
未明に歸宅する内はいゝむすこ
平内が先祖せんたく見ておちる
學者虚して曰くすくない哉腎
狼のくそ火にくべて笑はせる
士太夫よりももてるのは庶人也

拾遺

長いもの風味寛仁大度なり
よいしめりなどと時平(しへい)も初手はいひ
能くつてもすかん手風と時平いひ

五右衞門はなまにえな時一首よみ
雨蛙すぐに其角が脇をつけ
八景はよけれど油斷ならぬ所(とこ)
母は子のためにかくして一つぬき
撿挍(けんぎやう)は手引が有るで蛇におぢ
百囀す内化ものは待つてゐる
喰ひますかなどと文王そばへより
ちらし書き田舍へ行くと蜘が下り
ぬつぺりと我敷島の道ならで
風ぐらゐ神農の屁でほんぶくし
しゆみせんも父の恩にはかけね有り
蒼海も母の恩にはこしつきり
うつかりとのつたは狸不料簡
亂拍子生醉のふむひやうし也
後のシテ太平樂をいつて出る
どつちらもすきで大蛇はしてやられ
四百年納まるもとはまはりくら
けだものと女で石が二つ出來
伊勢ものはみなひおどしのたばこ入れ
人相見無心に行つて只かへり

改元の日はかたことを店へふれ
蚊に喰はれ沖津白波斎生め
淸姫がげぢ／＼を見ておゝこはア
器用より好といふ字が師匠さま
難波では甚六伊勢で馬鹿と呼び
本艸を讀んで料理が不物ずき
光陰もこよみで見れば蛇のごとし
干ものは散つてかならず隣あり
壘やは手の舞ひ足のふむ所
外科へ行く鼎は道のはんじ物
ふろしきも今は何をかつゝむべき
あやまつて論語のぞいた牽頭(たいこ)
よく見れば疵の有るのがほんの玉
源氏の繪つまり／＼は雲でにげ
石麻をなめぬばかりのかゝり人
出來合で間にあふともゑなみのもん
何棚が飛ばうと時平おつけなし
ひどいのに法性坊は道で逢ひ
結構な所さと繩はたぶらかし
落葉かくなるまで姑いぢめる氣

そのころは法性坊と書いて張り
唐は額日本は箱でとしがより
孔明が跡で近松韃をせめ
雨乞も袖乞もして名をのこし
人丸を片身おろして明日の朝
むらさきを見ては京でもあきれべい
篁は事めいさいによみ置かれ
何ごとのおはしますかは海のから
もてぬやつかんら／＼と打ちわらひ
國境美濃の方ではゆだんせず
七十にしてなりふりにのりをこえ
まづ耳のはやいがもりや氣にくはず
清姫は推量の能いをんななり
じや／＼馬も己が丘隅はよくしつて
めぐり逢うて潮と鯛と貝じやくし
ちよつ／＼と重い葛籠のうしろを見
伶人は日まちにいけぬ役者なり
將門のうへをこしたるなまづのこ
新川は上戸のたてた倉ばかり
還俗は九族天にせうしかり

三聖の酸いもあまいも勝手づく
松風のちゑで萬餘騎吹きちらし
かみなりに召すりんげんは本の汗
韓信といへばまたかと聞く異見
田舍うばそろり／＼と漁父に成り
竹の子を親にほらせて喰ひたがり
こりはてて函谷關に時計出來
摩耶夫人以ての外の御なん産
學問がたけて孔雀の尾はたてず
侍參金いとやんごとのあるのなり
神農のやうにくはへて嫁をねめ
石になつたは蛇になつたは淸と佐用
よめねえ本が出やしたと左官いひ
かなへ舞を見さいなと初手はいひ
容體をいへばかなへのうなづきて
越前で度々小西利運をし
法性坊出來合の戸をひとつたて
歌一首有つて咄がけつまづき
作病は法性坊が元祖也
よい鵺さなどと賴政どくづかれ

十二段三歩らしいが琴をひき
仙人も還俗をしてのりをうり
はまぐりに母はのぼりをふかせる氣
百人においれのわるい花の色
大織冠よくむぐるのに文を付け
うきねするうらみはかもの祭から
其時のはなをインヂヤかもしらず
寐ごかしはゆり若どのが元祖也
夜ざくらは役行者のしらぬ道
明店へ出るいばらぎは袖を引き
其手代其下女書はものいはず
わるがたい下女君命をはづかしめ
陰陽師やぼな女郎に買ひあたり
かへす文今は歌ではかなふまじ
まめ男衣冠たゞしくふらちをし
雞は朝まつりごと怠らず
心まち衣通ひめが元祖なり
玉のこし大きな殿のかつぎもの
ほれ帳を九十九夜めに消して置き
遍昭はもう一ぷくとそらへ云ひ

その時の和尚は後家の見飽をし
壁がはり月清見潟ひくく云ひ
唐土では瘤の有るのを后にし
親たちはたんぺい急にむこをとり
おめかけは四條あたりのてんばもの
桝花女の出る土弓場は入があり
菊慈童かげまにすると德なたち
浦島は無事かと藤太尋ねられ
關寺で逢つても口はたつしやなり
不二の煙は自力ではなびきかね
隣から源五郎鮒をひとつくれ
大黒にやいやだ〱とさくら姫
米つきはあしたにくるを夕いひ
松浦姫なみだはみんなじやりに成り
業平はよからしもないばゞアと寐
道成寺湯灌場へやる氣がつかず
見にくるか〱と日々にあらたなり
夜半にやとゆるす所に意味が有り
とのさまの御意はいなともいはつゝじ
寐すがたを見しやそれともわかぬ母

きげんよく河内通ひの頭巾ぬひ
歌ばかりよくてさつぱりはじまらず
しり取りで藏人一首やりこめる
茶釜とは化けた内でのそさうなり
貞女でも石に成るとはわるがたい
桃太郎地震のゆるを直にしり
なべのぞき異國の王がはじめけり
神託がすむと業平まかりいで
兩介は屁にむせながら引きしぼり
樂どのは侍一人坊主にし
石山で出來た書物のやはらかさ
兜巾などなで〱娘くどいてゐ
只居ようよりと行平思ひつき
西行もむかし鍋取公家くらひ
井戸かへに冠と笏を引上る
瓢簞をうつちやる胸に何もなし
網でさへまだるい中に直ぐな針
龍宮の門番ぐにやり〱と出
川ばたへ來た時髮はもうほどけ
はきものにゆらの湊のしやつぴたい

おのが身をあなめ〱とよぶすゝき
仕まふ時夫婦別あり內裏雛
蚊と蠅は酒池肉林がわき所
煤掃にけふのかたびらむねあはず
ながらへば又此ごろはふぐをくふ
能因はいけまじ〱とわらぢで來
うら店で琴を彈くのもはかりごと
祇王祇女世をあぢきなく鍋ゆづり
羽衣がなくても娘てんじやうし
日藏へ此通りだとみことのり
蛇になるも脇ひらを見ぬ娘の氣
斷金の交りうたひからおこり
まんろくに城をして行く國家老
女島まびく藥は正氣さん
女護島くしやみをするとばゞを呼び
歌の會供は長屋で夢の會
玉手箱仕まふ時にははふり出し
腹帶をさせて鎌足譯を云ひ
鐵棒は俊成坊の先へ立ち
包めども後鳥羽の院のおとし胤

白むくに煩惱あればぼだいあり
孝行に逢うて古猫五年生き
いかにやの時分小鍛冶は火をおこし
惡筆がよつて筑紫へやるくめん
筆屋などかりが有らうと時平云ひ
どの蚊屋へ行つても時平つき出され
よむたびにとかく頼政とくがつき
隱居が來ても明けるなと時平云ひ
隅田川所の人は鷗なり
過ぎたるとおよばざるとがかゝり人
鍋二つかぶるかはりに通りもの
日本はお客の方へせんをさせ
鶯もかゝられぬ子がひとり出來
いけにへにあらねど娘ゑばになり
一さかり六十餘州後家差配
浪人の渡世浮木の龜井さん
雪隱で東方朔をかじつて居
かみそりもこふのうへにて闕字有り
得手するは野々宮になるうたひ講
ひよつ子は皆ふは〱の關をこえ
其任にあらずと帳場追出され
むかで山までは其日に死にきらず
女郎買極意は人の和にしかず
ふんばりはさがなき母の言葉なり
ほの〱に明石も須磨も支度出來
魯と衛は梅とさん〱さくら也
素一分の雪天我をほろぼせり
苦肉とは見世引過のはかりごと
一寸のむしんに五分のだまし有り
天命をしつて新造ばかり買ひ

（第十二終）

誹風柳樽拾遺　第十三上

戰場部

寶曆中

遠ぼえもならぬと弓の先で書き
弓ながす日も鎌くらはふところ手
鴻門の會に益なき楯をつき
ほろ武者はふくれてみたりしなびたり
源氏から大工が出たとなぐさまれ
平家ではぼちや〱らしい船を出し
一門の仇は禪尼の慈悲から出
辨慶は心中させぬ札をたて
平家をば三千兩で明けわたし
殘念とはら切る場所をうもれ木の
ひき目から縊目になつた源三位
秀鄕はあぢなみやげを貰つて來
鵺をゐたつかれにかづけ宵から寐
忠つなが來てじたばたと埒が明き
白浪になつて辨慶汗をふき
佐どのは氣でくつてゐる木の根有り
山科にゐて關東のみやくをとり
源左衛門先づ花ござをかりに行き
熊坂もつひに覺えぬ胸さわぎ
爲朝はまづふんどしに氣を配り
猫殿といはれて公家は鼠まひ
細い手で尼將軍は世をにぎり
越王はまづ仕合せとむしがよし
煤はきに孔明は子を抱いてゐる

だゞツ子のやうに俊寛愚痴を云ひ
部屋がたへ來るいばらきは伯母に化け
かげぼしの馬も世に出る勢ぞろへ
重忠は巴とくんで手をあらひ
いかさまにかけて佐々木は高名し
椎の木のかげに待駒はつて置き
頼朝は後家にぞつこんのみ込ませ
正成は鼻をふさいでさいをふり
あと王手らしく繼信討死し
櫻木にちんぷんかんを書いて落ち
九代目の末にまちんの直が下り
景清はむきみのやうな義理をたて
爪音も時にとつての百萬騎
四天王うでを返して首をとり
湯にはひるやうに陳平船にのり
實盛は守袋を上着にし
將門はくづしのきかぬもんどころ
怪我あるなどと高綱ちやらを云ひ
大磯にきゆうせんすぢの地藏あり
八陣の出口にまよふ白びやうし

牛若も道中すがら汁の事
いばらきも見たやうだとは思へども
小便の時は巴は陣を引き
北條も娘にや紋をかへて付け
さいご屁は大藤内がひりはじめ
陣中で巴は馬に二つのり
越王は跡で茶わんで酒をのみ
能登どのはのみを逃した顏ツつき
いばらきはちゑをふるつて元直にし
骨折も腰越ぎりのみゝつとう
大江山うつくしいのをくひのこし
弓手には外科をさらつて大江山
手ばなをばいばらき童子かみはじめ
枝のある刄ものは蜀のやぐら下
金時はくはへ烟管で角をもぎ
豐年の雪とは常世いひはじめ
猪早太見世物師から札をとり
借錢をなすの與市や要ぎは
白旗のそば切いろのめでたさよ
大江山炙の無いのを客へ出し

補がよくは精進料理にし
時致はむちをかじつて息をつき
ねんごろなあたまをかりるゑぼし折
名劍に屁ごゑのない手間を入れ
僧正の中で鞍馬はうでをこき
官金を日向勾當曾我へ貸し
時致は重目にふつていけどられ
清正は人參ばたけふみあらし
淸盛の御符に經書いてやり
入札の無いを淺利は申しうけ
田村丸ふつてわいたる力を得
能登殿はおはぐろつぼを提げてのり
からさけをせんば煮にするてるてひめ
鞍馬をばかけ落頃がこゑがはり
兄弟の質朝比奈が置いてやり
惟茂がつめるあたりはとらの皮
熊坂は茶つぼのやうなあたまつき
怨靈は消えて源氏の浪になり
湯上りを見せて侍從は元直にし
實檢を見て寐そびれる白拍子

義盛はおみやげらしい子をそだて
頼光をはじめ梢へせうべんし
忠盛も師走はひどい水をあび
實盛はまんがちな氣で若くなり
六波羅へばんくるはせな佛が來
牛若ははね元結の元祖也
大床の前へむすぶの鶴が落ち
忠盛の高名の場を犬がなめ
御落馬をいそがしい場でかぞへてゐ
能登どのは二人禿で入水(じゆすゐ)をし
巴にも見ぬかれ給ふうちかぶと
帯までもより合つてとく十二段
十五夜は手燭ついでに小便し

明和中

連判は二つ巴に巻いて置き
及腰鴇の尻べた笏でぶち
二三ばいのむといばらき頭痛がし
ぎり／＼の所で常磐いろをかへ
壇のうら笏で四五はい盛つて喰ひ
熊谷はまだ實のいらぬ首をとり

佐殿(すけどの)もいたしかゆしのふくみ状
平家から檢使にあきる五條橋
渡邊ははじめて粗相つかまつり
兼平の手本は滅多ならはれず
木曾どのは御部屋さままで腕をこき
范増は王手飛車手をかけたがり
石塔の中でひとつは木綿もの
清玄は見こし入道の二ばんばえ
仲綱は宿札の有る馬にのり
義朝は湯灌を先へしてしまひ
綱が伯母見しやれ／＼とつのめだち
枕繪のうら打をする前九年
人の手をかりて信長はらをたて
土左衛門になるな／＼と下知をなし
本望は松明(たいまつ)で見る寐がほ也
金時が親類書に山の神
相馬公家歌のかはりに五文字をし
怨靈は彦七ひとりめどにとり
知盛をしやぼんのやうにいのりけし
權五郎うき繪のやうに城が見え

御曹司嵐和歌野で軍をし
賴政は五月七月うろ覺え
楠はたてかけて見てをかしがり
忠盛も師走はそつと抱きとめる
錢まうけ有るか無いかと最明寺
梶原は耳を出しなの元祖なり
義經は八艘とんでべかこをし
平家がた小便もせず舟にのり
手のこんだ化物の出る紫宸殿
山入はにたり四人(よつたり)つよい人
鎌倉はしつけのふかい牢へ入れ
おつを吹くなどと項羽も初手(しよて)はいひ
舟蟲に門院はじめ總に立ち
源左衛門すでにうたひで出るところ
家督公事(くじ)時政といふおやぢが出
賴政が死ぬと假橋願に出
强い事待賢門のいも軍
朝比奈の内で兄弟年をとり
首帳のよせ算するに小西が出
猪早太さるだ／＼と引ツつるし

不調法ものと五條の橋でいひ
しつこしもなくて信頼思ひ立ち
公時は嶷々たる道が上手也
うつり氣な坊主と嵯峨でわるく云ひ
ときの聲聞くと能登殿一つのみ
九代まで伴頭持で相續し
つめるにと透間をさがす白拍子
わるい日をくつたは甲斐の座頭也
あさつてに源氏の旗はかゝはらず
櫛巻にしろと二位どの下知をなし
兄イめはねれたものだと和田が云ひ
山吹を大引ずりと巴いひ
源左衛門あじろに組んだ足袋をはき
來た〳〵と二度にかくれる椎のかげ
元直だと小山田太郎討死し
熊坂は松のうへからひよぐつて居
渡邊はうかつなものと御諚あり
四天王首實檢に角をもち
育王山和尚おしこみ案じられ
鷄が岡袖でをがんだところなり

清盛は初手はおこりだなどといひ
ぬかぬ太刀とは甲州でいひはじめ
始皇から見れば清盛小僧也
辨慶に一本かりて弓をとり
ゐのまたも手こきんなればかぶじまひ
五條坂御慈悲願ひに毎日出
常陸坊風來ものの元祖なり
三人へ面目ないと破風をやめ
惡源太幽靈などは手ぬるがり
御みこしをふるがいやみの元祖也
賴義はふるまひ水の元祖なり
はたし狀大かたならぬ事と見え
氣を腐らかさッしやるなと最明寺
勝軍むかうで挾いためしを喰ひ
うぬ見ろよ〳〵と股をくゞるなり
病氣までおごりがましい火のやまひ
雜兵はまた來ましたと後三年
最明寺じたい庄屋へかゝる所
和田どのへ冬奉公人は奥のえん
安藝守時分はしごく信者也

存念がかゝらいではと三浦云ひ
死水をとつたは今井ばかり也
諸太夫は篠塚たつたひとり也
ちつとばか矢口ではなす太平記
山師めがなどと張飛も初手はいひ
ぜんたいが眞田の與市ぶしやう也
清正はりうさ川迄追ふ氣なり
最明寺うたがひぶかい勢をよせ
三保谷がはたいたぎりで陣を引き
三人は承知金時おらアいや
本能寺安土の意趣で高みで見
ちとおたりなされぬ方と熊野はいひ
鈴鹿山竈だ〳〵と初手はいひ
御手にあふなと保昌は異見する
かの馬にのつて來たかと最明寺
懐に抱いてゐたのに滅され
子のために常磐小便組となり
孔明は外の六地をいつかしめ
やりてをばばらしはぐつた次郎左衛門
よいじぶんひッぱづしたる熊野御前

やれ很太はよしやれ〳〵と最明寺
神田では古狀揃の橋をかけ
やみくものうへは相馬の内裏也
ふところ手したのに綱は氣がつかず
最明寺まだあるかのとかへて喰ひ
入道は眞水をのんで先へ死に
小松殿一人(ひとり)後悔先にたち
前九年年賦のやうに首をとり
後厄(うしろ)などと正成をしがられ
世話やきも西八條にこり〳〵し
先こくはなどと蘭丸次で云ひ
至極おんみつと和田から狩場の圖
鳴く聲は鵺本名はむじしれず
御みこしをすゑて樊噲云ふ氣也
文覺は一ッぱい喰ツた坊主也
寺岡は車の先へ杖をつき
秀吉が出て小田原のこけをひき
竿先になつてとあやめたつてとめ
祐經は蟲の息にて五寸ぬき
うけ人をよべと松下せきにせき

一生を汁かけめしで見かぎられ
松下もおそい事だと初手はいひ
源左衛門さぼてんなどはとうにうり
腹にゐた時で有つたと巴いひ
常陸坊いきまな所へつれ申し
わけのよい男は彌平兵衛なり
源左衛門人にくれたと贅をいひ
片うでに成る郎等を岡部もち
かぶ汁で淺間左衛門五はいくひ
秀吉のつとめたところはちらし也
熊坂も頭巾一つの祖師になり
頼政のはした其日に名をかへる
引ッかへしの幕で明智はしてやられ
佐野の馬戸塚の坂で二度ころび
楠に歩三兵にてなぶられる
官軍とおめか付(つき)とがいぢり合ひ
一家中へちをまくるをうき繪にし
思ふむね有つて時政ちゝくらせ
信連と萬事かけ合ふ源三位
前九年元は女房出入なり

じやうかいは常磐の方へ付けたい名
ふろ狸めがと千早のよせ手いひ
なき女ならば楠まだはねる
栗めしはどれだ〳〵と諸ぐん勢
珍事ちゆうやうと烏帽子をそつと取り
楠に似て高輪の石になり
雜兵はもんどりを切るめしを喰ひ
夕すゞになると頼政すゝめに來
三百もあとの事さと武の内
口をすくしたと忠つなあとで云ひ
どつとほめたりと一來法師云ひ
清盛も時疫だらうと初手は云ひ
かん病に佛御前は手がほめき
おはぐろにしろと景清舟へなげ
楠はしかけとほめる軍をし
勾當の内侍で番が大ぐるひ

安　永　中

前表は清もり水をのんで見せ
箱根よりこつちで化けた五郎丸
三つ口が下知かと座頭はらをたて

鵜とまあどう一つにとあやめいひ
御姿は故事を云ひ〳〵宿でまひ
舞の内辨慶は出て舟のせわ
平家追討の時とは風かはり
あゝらめづらしやは怖い土左衛門
あくる日はもう鵜の繪圖〳〵
鵜の繪圖うりに來たのは角をつけ
蛇皮線をひくが伍子胥は氣に入らず
痳病の毒もあいつと伍子胥いひ
吉田町賓盛程の身ごしらへ
藤九郎舌を出したが落度なり
なまくさい事未來記にかゝれたり
人くらひ馬に純友口が合ひ
氣のきいた女は華陽夫人也
やみ〳〵と旭は泥の中で消え
魚籃(ぎょらん)近所かと頼光聞きたまひ
わるい事よしなと巴首をぬき
五條坂かつぱやの子はうんがなし
與次兵衛が門を光秀やつとにげ
豆飯の喰迯げをする諸葛亮

平家の代ほしかも一度はやる也
海までがいふなりになる運のつき
人參を行長どのに見てもらひ
應仁のたゝかひ紙と烟草なり
五月雨三日てらすはときあかり
ひたたれは打敷にもと木曾納め
百やらうわさと盛綱だます也
焚置をせぬが勘すがおちどなり
「杖なしで三韓くだりかけあるき
官軍の惣大將はあさねなり
三尺の劍が高祖は口につき
松永がりつぷくとんだ茶がま也
高倉は御いとしなげにだきこまれ

天明中

ひとりでにほろびやせうと内侍云ひ
そりや木曾がくるとでんぐりがへす也
こぢつけのみかどをふねへのせ申し
八文がのむうち五郎のつてにげ
たばこでもあがれと小平六はいひ
楠がどうかしようと内侍いひ

もうどうもしええませぬと早太いひ
大江山出見世の亭主不慮な怪我
おしいもののふをひやぞうめんにする
ゆつくりとねる氣でみやこうつし也
さぞ後家も貞女だらうと幕を出る
景清がきず岡場所になじみあり
土弓場もうつくしいのを的におき
こびりついてて楠にるすと云へ
ついほろびますと頼政すゝめこみ
まけをしみ骨と皮との馬を見せ
五郎丸おまちなんしとだきとめる
ほころびる命を歌で縫ひなほし
かる石も一つまじつて義をたてる
ほんとうに紙をやぶるが小松殿
頼義は又出直してたゝき合ひ
楠が來ると箒を内侍たて
三度目は張良四ツ明けにしかけ
よかれあしかれ長刀も馬もあり
あれが口にはかたれぬと諸葛瑾(きん)
道具やにあるのは迯げた具足也

すつほんの甲らで槍のけいこ也

（第十三上終）

誹風柳樽拾遺　第十二下　六篇

戰場部

拾遺

村正はさく〱汁とをさまりて
源左衞門鎧を着ると犬がほえ
降參がすむと一度にひだるがり
知盛はけんくわ過ぎての棒をふり
凱陣の日にはなまゑひ五百餘騎
百合若の弓はつぶしにふんで置き
伊豆ぶしも八代迄はだしがきゝ
日本勢一人奇南の口利きをし
佐野の馬さて首をたれ屁をすかし
保昌は九條あたりへむかひに出
義盛は世帶くづしを申しうけ
佐野の馬かんろのやうな豆をくひ
相馬公家おつこちさうな雲のうへ
今見ろよとは重盛のいひはじめ
五人張相手の出來ぬ見倒屋（みたふしや）
妖怪の中でも鵺は細工なり
含狀ひゞあかゞりは書かぬ也
將門は朕が不徳のへらず口
諸事前の通りと觸れる後三年
久しぶりふければよいと子房云ひ
佐野の馬下馬にゐる內人だかり
賴政はいゝ見せものと射ておとし
耳たぶのよい唐人が蜀をとり
坊さまはもうおいくつと源三位
破つたと聞いてあこやは願ほどき
それでこそ武士だ〱と最明寺
腕づくで參らぬ事と綱はいひ
一門のうらみをたゝむ傀儡師
鵺を見に百人一首ほどよりたかり
義朝のかうべもしやくる道具也
いかん事とは能登殿がいひはじめ
馬の屁のみけんをかする小侍
はしご屁を高點にする無禮講
南朝へ枝葉もかたく參內し
ふんどしをかりて一番けちをつけ
玄德はかゆいところへ手がとゞき
湯にはひるとき入道はぢゆうといふ
本能寺はしの歩をつくひまがなし
仲秋はひとつ〱にいぢめられ
しりッ尾（ぽ）をとらまへはぐる能登守
大江山捨子の功勞へたのなり
賴政は御惱の前に小便し
かねがさき弱い馬から喰ひはじめ
迯足に笠置の城を一首よみ
五十膳ほどと書來て金をおき
迯疵の療治に醫者の口をぬひ
薪ざつぱ是下々（しもじも）のとび道具
六彌太は符帳の付いた首をとり
源左衞門さつくと着ずにそつくと着
ちやらくらを多田の滿仲喰ひはじめ
和藤內親には二貫生れまし
一字づつ化けて屋敷のやうすを見
鎧をばめさしにしたる御弓勢

源左衛門ひんふくりんの鞍をおき
梶原が塀には毒を書きちらし
汐時にばんくるはせな玉をなげ
和藤内どつちつかずの供をつれ
伏木から出るとしこたま小便し
三保谷がかへりはえりに日があたり
蒲殿はぐず／＼としてしまはれる
飛車角のみんななり込む一の谷
灯ともしはわるい思案の笠を着て
入道にあつちへいけとみことのり
旗持はしびれのきれるみなと川
搦手（からめて）へ摘草に出る白拍子
源三位入歯をかんでくやしがり
むじしれぬ事をねこどのあひしらひ
烏帽子親勘當の時すくふ役
きげんよく十八日は陣をひき
一の谷がく屋新道からまはり
鍋蓋と釜の蓋とでいぢり合ひ
扨らちがあかぬ／＼と能登守
高盛りをつねなら巴くふ氣也

白拍子口舌のあとで和睦をし
頼朝（らいてう）をはけついでには大き過ぎ
骨付（ほねつき）の方を尊氏しめておき
鑼かずあべこべにする諸葛亮
若い氣のおやぢと樋口申しあげ
あいつめはもと黒鴨と明智いひ
教經の入水あぶくが三つ出る
白拍子びしや門さんへなどとしやれ
辨慶は四日一歩の出立なり
いばらきは伸びを一本半分し
三韓は女にまけて七ふぐり
鵺をまつうちに早太は髭をぬき
猪の早太尻尾で肩を喰ひつかれ
いばらきもおばに成るまで片手わざ
趙雲も後家しめの場はりちぎ也
官軍のまけばら立ちに一首よみ
忠盛は歸ると糠で手をあらひ
つなよりも角仲間では伯母をほめ
金時の系圖はたつたひとくだり
平家でははうろくの入る舟を出し

百石は敵にもらふむかふきず
計畧といふはすぐれたうそツつき
韓信は楚へとつときの水を出し
講釋のかたきは明日へ迯げのびて
猿虎に合せて蛇の役不足
鵺の屁にくちなは毎度當惑し
不用なもの虎のくび猿の胴
源三位毎度そくらをかひにくる
蚊を追つておすゝめ申す源三位
狀箱がくるとよばるる太夫坊
忠度は勝手をわるく取つてなげ
平家方みな舟ばりて癪をおし
四天王となりへさして舌を出し
忠盛はてつこにおへぬ子をもらひ
おたまりはないと笠置のみことのり
主從で鵺に十ケ所疵をつけ
とりあつめものを頼政射ておとし
祐經は久しいなりで討たれけり
白拍子はた色を見てついと立ち
ゐのまたは何さく／＼でこしをかけ

小松殿よいしまひだと舟で云ひ
兄弟の夜討は紙帳目にかけず
陣太鼓うたせて見なと白拍子
白拍子阿房らしいと四五枚見
宵立が有ると祐成よびにやり
入道は冷えた女を〳〵と
義朝とおれとはどうだなどとぬれ
山伏にたび〳〵ばける源氏がた
分別の外に入道子をたすけ
義盛は粟津が原でふるひ付き
御妾は大きな腹で首をぬき
織信を損にして置く勝軍
あんのぢやう日本で跡のとひ人なし
なからはんじやくで義貞ずるけ出し
よきむこを伊東入道とりはぐり
重氏はぼだいの爲にみそをすり
かねふさはわるずゐまはす男也
清盛は尻みやの有る後家を持ち
鳥の海きりをとほして逃げて行き
たてるとも剃るともつかぬ武藏坊

大磯へ馬士はせい〳〵おくれて來
五郎丸其後チはねた沙汰もなし
祐經は狩場へたつにかげがない
猪早太十ヲよとなアとやればいゝ
大物へなた豆が出てちや〳〵を付け
百合若の弓は鹽氣の手をきらひ
忠盛はまづ滑石を買ひにやり
六はらに三人揃ふ女の氣
みつものを手塚の太郎買ひかつぎ
婚禮に佛頂面なゐの早太
兩介はうさいゑんにもめされたり
大江山座敷あるきも鐵の棒
關五つ越して關羽はとげをぬき
和藤内毛生藥をあごへぬり
鷹匠の氣で僧正はうでを出し
趙雲の鎧はしめしくさくなり
佐野の馬やつぱり武士の馬でゐる
赤貝をむく手付あり含狀
平家では鷲の位ををかしがり
うつくしい流人大めしくらひ也

信玄はしこたま借りて焼きころし
桃の木の下で三人五升のみ
四天王血にまじはつて人を喰ひ
源左衛門よくも鎧をくはぬなり
羅生門胴がねの有るうでを出し
喜三太は馬のたらひで行水し
注進のたびに平家は後家がふえ
直實は不承〴〵に高名し
忠臣の家老至つて身が重し
月毛にのつてきつとした文づかひ
五郎丸廿九日は氣くたびれ
平等院毛うけのやうな古跡あり
富士川で三絃を折る白拍子
地色をば伊東が舘に御坐の時
茶に醉うたふりで玄德のあいさつ
山門の衆徒は神輿をたてにつき
次郎左衛門捕手は猫のくそをふみ
大さうな蛭が小島の袖頭巾
五すゐてん首はなけれど子はそだつ
夜講釋張飛ないきは頬冠り

武藏ぢやと紀伊て土佐坊丹波色
退治してから足弱のつれがふえ
祐成がかけば芥子を引つたくり
祐經は二度目の疵が深手也
うぬぼれて司馬仲達は逃げる也
清盛の醫者は裸でみやくを取り
高倉の宮さればこそ御落馬
兄弟は相撲女にくらひこみ
居風呂の鬪は師直が書きはじめ
はしちかい湯殿鹽冶が越度也
螢さへまけて平等院へにげ
うよひよがなかどうなりと常磐云ひ
五つ緒の車はいゝが大くらひ
むさすみをもつて樊噲たゝく也
あやふやな首で一曲一かなで
六人にまかれたやうなせんだん女
牛若のさやへさはつて飛びあがり
だんのうらなんでも後家は十九文
そりや見たかとは東門で云ひはじめ
さやあてをするは大工と疊さし

あはよくばなどと腰元御ねらひ
長つぼね淺漬の時巴が出
ぬかぬ太刀一生無事で高名し

（第十三終）

誹風柳樽拾遺　第十四上

青　樓

寶曆中

大門を鷹もじろりと見て通り
ごく樂と此世の間が五十間
蝙蝠に山椒くはせるいゝ時分
待つ顔へさくらをり〳〵ちりかゝり
親ゆびの次にうす雲小むらさき
世の中はくれて廓は晝になり
すがゞきとたまご〳〵で幕が明き
すさまじいやたい骨だと素見云ひ
立てひざで文をかくのも姿也
うつ向いてゐるのが心待ちと見え
地廻りが來て即席の毒を云ひ

日うつりがして舟宿を寒がらせ
角町はなほ〳〵書に見物し
素一歩はあだやおろかに遊ばぬ氣
江戸町へ戻れば元の顔はなし
うれたのが賣れないかほを見てあるき
素一歩の心ぼそくも只一騎
舟宿へ來て狼も醫者に化け
提灯であがるはしごは氣がちがひ
六段目趣向いぶかし紅葉がり
傾城を買つたとにらむ親仁の眼
人の親の寺と思はぬ大音寺
戀といふ正味な所はつまむほど
來たかともいはず來たともいひもせず
箸紙が出來りやむすこの城が落ち
奥さまに成つても太夫のやにが見え
大事がる髮におしげもなじみ客
我好いた客の來た夜のあがり下り
片しぐれ茶やが異見も聞く夜也
二朱は二朱だけに傾く月の客
身揚を紅粉でしるした疊帳

傾城の藏にして置くたばこ盆
たそがれに出て行く男しりしらず
箕輪にて見ればやりても凡夫也
戸障子が女郎買には行くまいし
老武者も一歩の手際見せたがり
しつぽくへ通りかゝりし上草履
證文でかさぬ金をも文でかし
新造はまだとこやみの夜着ふとん
山の神通ふ神をばこなみぢん
眼に立つたもん日しまつてさつときれ
なほ／＼を先へ見て行くおもしろさ
紙ばなをちらして今は屑ひろひ
全盛も光にとける床の雪
傾城のなみだで藏のやねがもり
大門をそつとのぞいて娑婆を見る
桜の花にあれ見や主の紋がとぶ
吸殼を禿をよんでたづねさせ
燈籠でやみ付いたのは消えやすし
長持の間に四五寸禿道
風引かぬやうにめしませ猪牙とやら

初雪にまづ惣領へ錠がおり
來た顏は文のうらみの十分一
やくそくの猪牙に目のまふ艸履取
椎の木を怪我ではうらみ猪牙で譽め
細見の鬼門に直るやり手の名
素一歩で二人一座の夜の雨
壁ぎははみな緋緘の鎧着て
角の無い鬼のうまるる五丁町
どのうそが本の夫婦にならうやら
からなればはじめのうそがはづかしい
おもしろい場はなくなつて所帶めき
二朱分をそつと廊下でうみおとし
九郎介へ化けて出たいの願ばかり
身ひとつを田毎の月のうきつとめ
船頭はまづ口先の舟にのせ
吉原は下から先へ夜が明ける
夜かぐらのあなを荒出す山の神
こんな腰ありと出口に植ゑて置き
傾城を立賣にする京の町
子を賣つた金いなづまのやうにきえ

お內儀は淺草餅を取つてなげ
かつぱではかほのぬかつた流れの身
地女に成つてむかしの店おろし
京町の猫はかよはぬふしみ町
調法なものの邪魔なは女房也
いかだのり猪牙の行衛を見失ひ
百文のまはりははやい羅生門
初會には筆句のやうな文がくる
白むくと云ひつぶされぬ紋を付け
ゆゐごんをそろり／＼と舟にのせ
吉原の狐は人に尾を出させ
裏の塀半分こして直が下り
角道をつくと內から呼びに來る
朝見れば枯野のやうな臺のもの
爪切れて足輕ふたり中の町
身のいたむものは座敷の松の風
新造の四五度飛付くけづりかけ
蟹の出た穴をのぞきに來る禿
貝やきへ比翼の紋の行きちがひ
明日までの遺言を聞く草履とり

身揚(みあがり)が來て墨つぼをこくらかし
女郎屋の勝手へ廻るそばぶくろ
つき出しの袖ははしごへ引つかゝり
細見のなじみのかほへやにをつけ
はしごから見立てた客の二度は來ず
うけ出され脊中に帶はおちつかず
平内が臍のあたりへ文をつけ
かよふ神雪隱神と仲がよし
名代が濟むと羽織はめしとられ
うれのこり騒がぬ體でひだるがり
ものまへの文は禿もさぐつて見
名代のいらぬ銚子をかへに行き
中宿は他人のやうにおもはれず
大門の口でちひさい評をいひ
疊算合はぬ筈也坊主客
夜着ふとんよしはら中のそばを喰ひ
床の間へ女郎の藝は有りツたけ
傾城の土蔵をまたぐ煙草盆
身揚(みあがり)の場へ七夕の影がさし
くらがへは鴇のくゞつたる面を出し

二朱よりも一分のうそがおもしろい
月夜にも四斗樽ほどな提灯を
こせ〳〵と何(たん)ぞ云ひたい遣手の氣
はな紙に書くはうらみの相印
たまりけり遣手は鼻をかんですて
まへだれに成つたがさいごむすび髪
たいこもちすゐが嵩じて乞食めき
間夫にあふ夜は白無が帳につけ
伴頭が來て桶伏にのびをさせ
草履とりふしよう〳〵に猪牙にのり
太夫しよく百で四文もくらからず
舟宿へ内のりちぎをぬいて置き
雨だれに追廻はさるる伏見町
しん禿もらつたやうなうそをつき
自身にはおはぐろ付ける事ばかり
十三になると禿を厨子へ入れ
なまぐさい云ひ譯に出す草履取
表徳(へうとく)を俄に土手で付けてやり
あひかたの手にゆれてゐる小提灯
雀形(かた)たゝいて雪の注進し

切れ文をにちやり〳〵とかんですて
何の手かしれぬ夜更の硯ぶた
夜遊に出てはかんきをうける筈
素見とはよほどひだるい道具也
七種(なゝくさ)を田の中で聞く首尾が出來
吉原の鰐が見入つて紙がちり
初雪に死んだ女郎のうはさが出
侍は座はると直に時を聞き
きれ文をはらひのたしに出して見せ
河岸づとめむかうの人に事をかき
醫者よりも禿の力瘤になれ
船宿(ふなやど)は持佛(ぢぶつ)へ文を上げて置き
椋鳥に引導わたす馬喰町
うそをつく顔をじろ〳〵草履とり
ものごしできりやうをさとる客がとれ
中宿の子は化けるのをじろ〳〵見
傾城をうけ出したので身も出され
燈籠見に行つて女房はうつたまげ
土手の雪思ひ出しても足がひえ
巾着は亭主を砂利場邊に置き

あんどんと首引の時見立てられ
上草履ばた〳〵と外へ行き
手のひらをはかりに遣ふ文が來て
九郎介を見かぎるやうな願ばかり
傾城の品玉にする袖づきん
姉女郎吹出すやうな傳授をし
女房は山姥といふ系圖也
をがみんすなどといはれて舌を出し
傾城の義理はちよつ〳〵と風を引き
娃つる女郎のそばにくすりなべ
起きなんしなどと狸へよりかゝり
大門を出ると思案にけつまづき
よい思案雷神門を二度通り
身揚(みあがり)はふしようぶしようにゆるりと寐
吉原の夜は晝迄にやつと明け
身揚が來てはお針の邪魔をする
切れ文をなまがみにしてたてくだし
ひよんな事したと思ふはしらずに居
新造の鼻をつまんで歸りけり
客のゆびものぬきぼしが出來たがり

御げんとは虎此かたのことばなり
硯ぶた喰ひ〳〵連ゝはかん病し
けいせいは千兩やしきかへて喰ひ
傾城のたま〳〵あてる袴腰
ほゝづきは禿へはさむ水ざかな
節句前封を切らずに中がよめ
新造は紙子羽織で飲みにくる
燈籠も茶やへ行くのはのしを付け
なまもてなやつが禿にくらはされ
相方にふしぎ打たせるつけのぼせ
了簡の外に一兩ふら〳〵し
影法師も八朔からはふとくなり
のべ紙をかほへ一枚ひらつかせ
をり〳〵は河岸へながるる草履とり
まへかたな客を符帳でこね廻し
旅人のふすぼりくさい八王子
化けて出る帯は脊中にすわりかね
やくそくでくれば火鉢もおこつて居
とんぼうも猪牙も南へ尻をむけ
まちなんし羽織の襟がばからしい

上草履片々夜着へたゝみこみ
襟元で女郎のゆびに怪我をさせ
地女ははしごで重い音があり
大判も禿が見てはにくらしい
女郎よりやり手がほれる遊びやう
新見世に作り直しが並んで居
筆持つて連れの表徳聞きにくる

明和中

淸搔(すがゝき)もみそするやうな四ツ時分
手みじかにいへば口舌もむしん也
敷きぞめは目貫のやうにぶつすわり
吉原も中山道は難所なり
より合ひをつけてふられたうらに行き
町風に化けて一日氣をはらし
しつけ岑は茶やの女房にくはへさせ
いつ來ても神はあがらせ給ひけり
居つゞけへなまにんじやくな母の文
まづ聞かれそこで役者が横に來た
ひぜんまで二人禿は對にやみ
客二人座敷と部屋に功をうち

友達を異見した夜はひとり行き
番頭がやう／＼みいらとりおほせ
よいかげんせんから限りでしやべり止め
里の文宵から來いとあぶながり
三度づつ喰つてやり手にいぢめられ
護國院別れをつげる相圖也
新やりて一日ましににくがられ
角町をのけて入れたきなには町
草履取百貫河岸と出かけたり
今くれる日にけいせいはかゝはらず
吉原へ樒のもとでかりに行き
惣じまひわづらふ禿またがれる
河岸の文商人などの手でとゞき
摘草のやりては笊を持つて出る
つまむにもたらぬかぶろに氣が置かれ
茶や女どつちつかずのとりまはし
もらひ引きいく度か部屋へこぞり合ひ
眉毛ぬきながら禿をいぢめて見
發端を聞けばやりてはうばあがり
通り名はあんどんわきにかゞやかせ

うしろゆびさゝれた女郎天上し
鍵もつて禿春駒唄つて來
友達にほねををらせた女房也
しらやまへ堀の亭主が案内し
地廻りは河岸へ田にしのつぶて打ち
傾城の火燵は住所定らず
太鼓持土鍋のふたを明けて見る
大一座どこだ／＼と御床入
舟宿の拍子木にうつ封じ文
ことづける文で頬などなでて見る
守（まもり）をば衣桁へかける二才客
かき立てて二軒あかるい河岸の顔
かぶろよぶ二聲目のはたいこもち
年明けの丁度女のちゑざかり
はまりけりうらに夜食を對に喰ひ
茶やが來りや屛風の内で時を聞き
燈心をやき付けにするねずの番
にくむとはやりても高をくゝつて居
かならずえとは傾城の脈所
文の末禿の風も書いてやり

傾城はまづ寐勝手をいぢつて見
供部屋で何かやりては問ひおとし
名代はなだめつくしてよびに行き
女房の異見一歩が薪をつみ
大どぶの向うにのこす上草履
みそらしく下りの有るを咄して居
我身さへ持ちあつかふにかぶろまで
彩色の裏に墨繪の大音寺
きぬ／＼におさらばの無い首尾に成り
むなぐらをとつての後が女なり
八朔は金鷄鳥も鶯になり
よい客を三の糸ほどあぶながり
そつとやる文は禿を筆でよぶ
うけられて初めて並の口を利き
鼻唄の出る名代はうつくしい
燒きものの寐がへりするはのまぬ客
くやしくも禿にまけることより引き
心中はほめてやるのがたむけ也
床花の禮に夜ひと夜つめられる
居つゞけに顏よりひどいあらが見え

みす紙で狸の顔を二つぶち
中宿で屆けこぢれた封をきり
いけすかぬ時長刀にあいさつし
名代を取つて笑ふを遠く聞き
女房になつて無筆なあるきやう
姉女郎三の糸ほど口をきき
くれるかと思へば鼻をちんとかみ
引出しの奥へ屆かぬかぶろの手
子をだいて見てすきんせんなどと云ひ
八朔は我有りツたけしろくなり
左樣をば紅葉あたりで迷子（まひご）にし
こつくいの有るをくすねて袖づきん
ちと斗りそね崎と出るかすり疵
口まつは上手で逢つたとかるく云ひ
靑樓へなどと家内をつんぼにし
つけて居る禿は爪をかくして居
二度通る雷門はふんぎれず
おもしろく無いと尻きりはしよつて來
夜講釋などといひ／＼再發し
やきものの身をもつ人と同道し

寐ごかしといふてかへれどふられたの
客の屁をさそくの遣手しよつて立ち
舟やどは二度ほどしんを切つて行き
草市へ出る三會の美しさ
疊さし部屋持の名は覺えて居
受けられて來ても譜代のやりて有り
女房の鬼門にあたるさくら咲き
狼が送れば狸先へたち
たつた腹つい名代と寐てしまひ
引け四ツにばちをあくびのふたにあて
毛氈へ孔雀はゞたきして座り
中の町末たのもしく無いところ
おとなしくなると團子の汁を喰ひ
朝歸りめし焚などへわらひかけ
四ツ時分かたづをのんで彈いてゐる
もてぬやつ何か地口を云ひたがり
朝がへり灰よせなどとすりちがひ
大變とやりて剃刀持つて下り
頰杖でかへし申しやはけちな客
千兩のみだけで通るえもん坂

惣じまひ家の外聞實義なり
奉加帳どうしなさるとやり手が來
鶴下りた茶屋へたいこは馳せ參し
性わると禿そばからさいはじけ
心中の追人に親のゆるし文
身あがりは遣手へあてる道具也
晝三は保養にはちと大き過ぎ
大一座商賣などをあてさせる
やりてよくおつこちもせず上り下り
またなにか借りに來たかと姉女郎
大一座大かたおもてばかりなり
俗名でてんねき行つて爲になり
わりにして一たい損な附けまはし
座敷もち店を追はずに床をとり
初會にはまづおしきせの通りにし
魔道には扱いろ／＼な穴が有り
三味せんをばらがきにひく音に浮れ
しんじつになるとたがひにやぼになり
俗名をあらはしてから所帶めき
駒下駄をはき／＼ぬしをつかまへや

まん中に寐てもまたれずひよく蓙
桶ぶせはたうとう皿をねぶる也
素見物土手で小田原評定し
つかまへた禿褒美にはやくねせ
袖の梅のんで上着のまゝで寐る
にえ切らぬ連レは高尾の墓へ行き
よいちゑはみぢんももたぬたいこ持
身揚は御報謝などとおどけて來
袖とめは孫のかた付くほどかゝり
上書を見てかんざしでこぢはなし
新造は死にはぐれめとそつと云ひ
もてぬ夜は本を見い〳〵おあいかへ
とばせたといひ〳〵茶屋を先へたて
六つ切りの門でかごかき一人まし
吉原は後架へ行くにてれる所
素見目をはなさずゐたを揚げられる
四五會目かぢり付いてもとる氣也
腹だつた禿壁などむしつて居
三四會あたりへ遣手からんで居
うれしがるそばに禿は泣いてゐる

子どもやァなどと廊下を呼びあるき
愛想を遣手へいふ夜みじめ也
草市に禿買ひたいものばかり
引けまへに素見と茶挽いぢり合ひ
よい客が付いて返事を二つさせ
もうよいと茶屋は禿を引きはなし
さかづきをすゝぎへはさむ古いやつ
下書きをして新造は見てもらひ
節句前くゝし付けなとやりてが來
居つゞけに高をくゝるは質子也
盃で鹽梅をする小なべだて
中症をこはがつてゐるやりてばゞ
たいこもち遣手がたつと舌を出し
若いもの片手握つて呑んでゐる
袖どめをくらつて來たが厄落し
それ〳〵でやせた遣手も疵のやう
灸すゑる禿の顔を見にたかり
突出しの親は人參たんとのみ
異見する茶屋は地道にとる氣也
惣わりにして中宿も連れて行き

いただいて飲むと傾城わきへむき
高尾以後小ばんで面のはりてなし
どんなでもよいには妓夫もこまりもの
すががきを中ごしでひく人ちがひ
かへらうのひくの山のでとりが鳴き
何かしらしよはせて送る中の町
しん〳〵な事だと女房舌を出し
角田川かへりははしごのぼるなり
たつた二朱おごれ〳〵と引きずられ
筆で蚊を追ひ〳〵見世にあぶれてゐ
甲子や是から先が傳授事
大一座そりやとなげ出す耳だらひ
かたいやつ臍をほしがる門から出
大口舌かぶろあたりをかたづける
一軒の禮でふさがる中の町
早乙女の名などを太鼓呼んで見る
朝がへり敷居は一のなん所也
一たびはおもしろくねる北まくら
大口舌たいこ工夫をこらすなり
新造は入歯はづして見なといふ

年明けの顏は狐のおちたやう
ぶらやまひ猪牙にのせるは荒療治
相談が出來て田樂せつくなり
約束をやりてまで出て一火する
物前の客危きにちかよらず

（第十四上終）

誹風柳樽拾遺 第十四中 篇七

青樓

明和中

ひよくござあちらむく夜の名ではなし
とぼるまで西瓜を喰つて待ちあはせ
新造はお針のそばにちゞこまり
雪の朝むかひをやぼなやつといふ
朝がへり氣のどくなほどよいにほひ
豐年のみつぎ所(どこ)かとむかひ云ひ
謠講不參の分は猪牙にのり
心まちかき立てる灯にむしも來ず
せいはらをもんで名代さづけて來
十ヲさしをもらつて禿蚊が苦勞
なじみ客ねかしはせぬがきついたの
新造のねぬも一つのふしん也
隅田川烟管をはたきさあどうだ
もてぬやつかんら／＼とうちわらひ
葬禮のもどりにふらちしごく也
病人も顏出しさせる惣じまひ
かけて來た禿しばらく耳に口
雪くつて土手を行くのがむかひ也
田樂のあし手まとひは女中づれ
御てさんがむりなと銚子引ツたくり
やめてから出口の柳蛇の如し
桶ぶせのをはり初もの新兵衛
風花の内は居つゞけにえきらず
旅は母よりはぐに骨がをれ
まづ下女のぶんさと橫へむすんで居
たいこもち狩にまかせてかり倒し
切れ小口名代出すがさいごなり
ゐつゞけはおとゝひちゑを出したまゝ
たいこもち金になる屁を二つひり
心中をさつとするのは手だてなり
血眼になつて禿をふりはなし
あどけないやうで無心にぬけめなし
田舍者水道尻までつきあたり
物いまひだけに月見を二度くらひ
約束に烏に指の血をすはれ
ゐた跡をたゝいて見世にてれてゐる
ぬしなどはめでたいかぶと土手でいひ
眞崎へつけたが事のおこりなり
聞きほして見れば禿のちゑでなし
ほとゝぎす土手でと口がついすべり
なんにせい向ふへ越せとすみだ川
もらはれて太皷の地口おちがこす
女房に土手で逢つたは百年目
兵糧がつゞきませぬと土手で云ひ
袖留がすむと明部屋さづけられ
廿日過ぎ遣手ちん／＼ばしよりで來
朝歸りいふほどの事ろくでなし
中宿の內儀おどけて脉を見せ
たんすから出た駒下駄をしらぬふり

水あげが濟むと遣手もさまをつけ
娑婆已來などとまへかた行つた連レ
卷紙が無くてうらみに相印
床花をもらつたあしたきえるやう
銀ぎせるふられて疵を付けはじめ
敷きぞめに隣座敷は壇をおし
そらねいりのつ引きならぬ蚊にくはれ
羽子の子がそれて禿のかたくるま
こまりんすなどと名代三度くる
うしろから例のつかへをもんでやり
素一分もぜんたい我が金でなし
勘當は雪か雨かのあげく也
すべつこいかほに官金入れあげる
後の月生きたいわしでのんでゐる
切れ文を火ばしですつといける也
かへりには人買になるすみだ川
二十けんすこし燒くのもはむき也
はいけいをするをやりてはあざわらひ
傾城のしやんと坐りしもの思ひ
のみにばか行かうと古い顏で云ひ

かみしめて見れば三歩は三歩也
たまはよいと亭主はふとく出る
なきやんだかぶろ太皷と指ツきり
素一分は雪にふられて消えるやう
いき過ぎた禿鐘場がいゝといふ
三會目あたり歸るとさがして見
暮の文くそをくらへとよみしまひ
ものさしで昨夜(ゆふべ)氣(け)をつく呉服店
衣紋坂四斗樽ほどな日があたり
今晩のかきぬきといふ太皷持
新造は火を吹いてだとのみに來る
大一座けふの佛と口ばしり
割床も繪の方へ寐る姉女郎
見申したやうだと遣手のんでさし
一さかりおもしろく寐る北まくら
吉原の方へ死んでも枕をし
名代はとつくごねたとさびしがり
時鳥きゝんしたよといふばかり
つんとして女房國子をやいて居る
おつとつてまづこれにさしつかへ

隅田川品によつたらおそい所
わごれめはなんぞときめる淺黃うら
ばんしうが寐かれをつたと土手で云ひ
見世に居てくれろと土手できねんする
おやぢまだ西より北へ行く氣なり
たにしではのめぬが事のおこり也
呉服屋もよくはやるのへ二人(ふたり)つけ
後を見ぬ人の乘るゆゑ猪牙といふ
文つかひ道など聞いておびき出し
おまへのがほつとう人と内儀いひ
結ばつた帶をちうと解き
寐入るのを死んだといふはいけぬ晩
輪をふくの稽古で禿目を廻し
朝がへり行く時ほどな智惠は出ず
新造はある夜一座にかはかされ
とぶらひのうらはどうぢやと湯屋で云ひ
吸付けて出すは凡夫のわざでなし
二度と行く所では無いと三度行き
つき合ひも久しいものと女房云ひ
ちつと上げ申しんせうとかちりうけ

仕まひをば來るにして置く盤ざん
二かいから遣手風が見世へふき
もてぬやつ髮結床をかへて見る
花ざかり一日山へうけ出され
八月の二日質やへ雪がふり
もらひ引きどつちへ來てもよりかゝり
新造の袖死金に疵をつけ
かした子にうつり香の有る中の町
淺黄うら入梅などといやがられ
うそつかぬ傾城買うて淋しがり
禿までたぺんせんとはぬかしたり
傾城のえんは出雲の當座帳
もらふならみんな遣らうと大一座
もてぬやつすて鐘までもよく覺え
晝見世は子を抱いたのと見立てられ
おやぢのは息子が買つた妹（いもと）也
三會目心のしれた帶をとき
かたまつた禿の中に楊枝見世
案のぢやう去られた跡へ年が明き
泣くつらが此くらゐだと女衒（ぜげん）云ひ

飲みんしたなどと座頭をちよろまかし
素一分の無念道々追越され
どうもきのどくと新造つれて來る
もしくれもせうかと遣手罷り出で
飽きはててゐる傾城に長つぼね
すゝぎをば迯げても月にとつかまり
きやつといふ禿は晝の毛むしなり
心外とやいはん息子片月見
勘當の前夜よつ手の底がぬけ
暮のふみ哀れなりける次第なり
ふしようして寐なとかつつくろつて寐る
素見物百何がしのおごり也
行つたのさばか〳〵しいと内儀ねる
かたびらでくるを小袖でまつてゐる
此暮のかほが見たいと女房いひ
あと月のすゝきがどうか招くやう
吉原は町人ふぜいはぬとこ
おじひだと小菊を二まいもらひに來
朝がへり下女おはむきに不人相
さそひ人（て）へ女房からんだ事を云ひ

盃をさすがむすこのいただきて
とやあらんかくやあらんと朝がへり
新造のうきが友には鼠なり
ものなりをおさめぬも有る大一座
手がきゝんせんとめそ〳〵禿なき
みゝづくのやうな遣手の影法師
舟やどの女房ふかみへちよいとつき
疱瘡でをしい隱居が一人きれ
心まちすしやあんまのこゑばかり
ふけわたる廊下を遣手のつさのさ
くれの文まづそのかぶはないといふ
氣にほれんしたと淺黄を茶にしたり
それもさうだと上下をぬぐやつさ
もてぬやつ女房の方がはるかまし
あてはめたものは遣手のわらひ也
鐘の鳴るまで性わるを付けまはし
しんかきで色ぶみをかく罰あたり
わるがみへぺにとすみとの文もかき
たばこやのたよりまつまの日の長さ
こひの道こんぴらさまもかゝりあひ

新造はふる氣ではなしねる氣なり
わたしをば化かした氣さと内儀いひ
町内で間もなく死んでうらに行き
小便のるす引出しへ二ふん入れ
四ツを二度聞いたが手代落度なり
ほと丶ぎす聞きんしたとはとしま也
紅入れもけがれたらうと女房云ひ
まだ出來ぬ顔へしかける淺黄裏
わるもてのしたは太皷が作意なり
ぐつと寐てやりんしたとはむごいやつ
御めん／＼小傳馬町のつけまつり
い丶年でしからばといふ隅田川
ゆうべのは口舌けさのはけんくわなり
ちやう／＼と紅葉の枝で亭主打ち
はながみをかざしては見る心まち
さあ雪だ出たくなつたと女房云ひ
あつけない夜を傾城にすねられる
小便を坐つてしろと女衒いひ
後の月さいおうの義とおやぢ云ひ
女ばうのはら月にたち花にたち

夜ッぴと夜紅葉見るだと内儀云ひ
まづ殿へあんどんわきをたてまつり
素一分をなげるは紀文巳後の事
是からははめだと藝子堀で云ひ
買ひものがちがふとおそく市へたち
どんなのへ行くえと内儀聞きたがり
親達はお孤にやるを云ひあてる
内のこたアぐつとながせとすみだ川
柳だの櫻だのとて出られやす
内儀の名むかししつあやなどと云ひ
冥利だにちよつとよらうと正燈寺
けふしとは暦に見えぬ日づけ也
にらみくら三時してゐる不景氣さ
皆おれが惡だけゑ丶と隅田川
さあおもが白くなつたと簑で出る
花よりもまづ女房がものいはず
新造の口に入齒を置きわすれ
うちにないものではなしと女房いひ
新店の内儀どこからあまくだり
中の町おつこちさうにこしをかけ

みすかみへ包むはつ穂のしまりなさ
簑を着て新造二階中あるき
きん／＼を覺えてむすこ内に居ず
どうもよくすると隱居の犬はまり
座頭の坊火鉢の跡をた丶いて居
月花に女房はこ丶ちれいならず
しばられた前をやりての直ぐ通り
夢に見んしたと眞赤なうそをつき
傾城の癪人を見ておこるなり
弔ひのあたまにしてはひかり過ぎ
ぜんたいが高尾も土手をこす氣也
はだか王らしく毛氈うれのこり
吉原へなぐれてそばのへどをはき
床柱しよつても見ずに年が明き
弔ひに泊つて來たがおちどなり
縛られた女郎のそばに袖づきん
櫻まで損料で咲く中の町
たべんせんなどとはてうじはじめ也
はつだよと二階をほづきあるく也
やぼなやつふられた事をひしかくし

五六寸お針のるすにさいはじけ
大一座くろ豆のあるへどをつき
お笑止な事と中宿いつたきり
銚子からさすらへの身としやれた文
暮の文三の切りほどあはれ也
ふところへはじめて高尾五百入れ
惣花はすゝぎのわきでわたす也
戀無常などとおどける大一座
出して來やなどと國分を買ひにやり
時過ぎたうらに禿のまづのぞき
禿までのみなんせんと口を出し
鈴の音しばらくあつてお職出る
かみなりがのむとしかると禿いひ
朝がへり下女が事までがなり出し
花の枝もつが男のものくるひ
すりこ木にすがつて禿引いてくる
淺黄うらいらぬ地者のきらひ事
初會から喰はせて太皷二分もらひ
田樂屋いさうつたてといふところ
事急に及んで息子羽織なし

內の月ではまうしふの雲はれず
かけむくのやうに田町でやたらぬひ
喰ひものの能い所にする大一座
新造は二階を廻り〳〵寐る
つき出しは高提灯で來たの也
あと金がおそいと見世へ出すと云ふ
おはぐろを酢か酒しほのやうに買ひ
おもしろいまつたゞ中へ遣手出る
あやしげな新造出して身しりぞき
よい春だのとは大きい中の町
ねごひのがいんきよのだぞと大一座
しらひげの邊から持病さいほつし
女房のへゝんと笑ふ連レが來て
土手のまん中で去り狀かけといふ
女郎衆にかすなと子守斷られ
座しき持ち琴はあゝして置くばかり
御しんぞはおさうに石をだかせる氣
座しきもち親和とやらがかきんした
朝がへりはかりがたきはおやぢなり
名代に出したり下で遣つたり

橫に行つたを雪隱だなとおもひ
新造をあやして太皷たゝかれる
おまへほどなものがと內儀いやみいふ
古句ではもうおふくろも點にせず
しげみやアなどと呼んでは又いじめ
かね四ツといはつしやるなと姑云ひ
尋常に御出でなんしとみなはだし
見世へ出すと直にと內證いひ
まづ施主が出たわと亭主あんど也
月も日もけふにあたつて久ふられ
月の座が明いて居んすと文がくる
新造にみんなのまれる奇應丸
あら世帶こはらしい手になりんした
苧で髮を結ふ傾城のめづらしさ
花紙であふいでいつそ醉ひんした
緋ちゞみを着たのが隱居目にとまり
かさものだなどとふとつたやつをかひ
結構な事吉原で卒中風
くれの文今死にますと書いて來る
文つかひけんもほろゝの目に出あひ

枷ばし如渡得船と乘つて出る
安穩にかへしはせぬとすみだ川
面倒なひつたてろえとすみだ川
雪女郎買ひに旦那は出られやす
覺えんしたとお針のを引ツたくり
御めんなんしと來て何かそつといひ
大ゆびと小ゆびをねんしこれ〳〵さ
節句まへ艶書數通に及ぶ也
禿まで見わすれたのにうらで候
とらまつて下りなと新造ころをかけ
ふじの夢まづ八朔をくらつたり
田樂をくふ内まゆ毛かぞへられ
たちいせぬとは新造のいへぬ事
煙草をばおたちなんしたかえといふ
質の利はしりいせんとはいはれまい
疊屋がやぼで簞笥をひよいとのけ
きやうこつなお子だと遣手蜘をすて
簞笥から駒下駄の出るはんじもの
禿さへもゝいろほどはうそをつき
あんかにてあたゝめられた事もあり

あんぽつにいたしませうと若いもの
おれもさう思つたなどと逃げたあと
せんぎしろ文でもあろと逃げた跡
にげて居てよく來も來たり呼びも呼び
うかむ瀬に氣はおよげどもながれの身
時にまあ善はいそげだ見たてべい
むつとした耳へかすかな上ざうり
口先でさすられたはらぐにやとなり
九郎介をしらぬはとりゐ越さぬやつ
金の出た紅葉だのさと内儀いひ
桃林女房の苦がひとつ殖え
此ごろは宗旨をかへて内にゐる
無事なやつ内のあんどんばかり見る
辻番のじぎにはこまる朝がへり
だんなもしいつそぬまだとゆする也
門番はつなをゆるめて二百とり
さんぎりにしなとどろ〳〵上ざうり
雪のばんかぢけて來ぬと新造いひ
月見過ぎ馬鹿が鐵砲うつたやう
淺黄うらまくらの紋をくどく聞き

もてぬやつ廊下を馬のあるくやう
じれつたいので床柱すれる也
ひつぱりのもみぢとはえと女房聞き
九郎介はどうぞと思ふ願ばかり
しつぽこをどつと來て喰ひばつとちり
膝へふる雨に息子のくらひこみ
羽二重のきう所を禿引つつかみ
毛ばだつた文をとゞけるあんま取
名を一字かゝれて淺黄うれしがり
二度横に行くのはだめになるのなり
ふる雪を口へ入れんと禿そり
うらの文一座のこらず同じ文(ぶん)
大口舌馬か牛かの上草履
なきにしもあらず箕輪でそだてさせ
そだ〳〵と駒下駄をぬくすばらしさ
中宿はかさね井筒で異見をし
雪かきで七里けつぱいよせ付けず
けつちやくをして紅葉をすてる也
火の付いたやうな文だとよんでゐる
あやなしの初手は脊中を二つ三つ

猪牙の直をきめぬいてのる淺黄裏
明店と書いてはりたいたんす也
もうせんのうへであいの手ばかりひき
思ふ事かなはねばこそふりつける

安永中

二三人むすこに神がのりうつり
きなはるといつて遣手にしかられる
紙花は淺黄ぐあんにおちかねる
名代の部屋へくやみが二三人
あはれむべし終にむすこはさしき牢
ふところにおまんが有るとかぶろ云ひ
淺黄裏おゝ熱いめにあはぬ也
新造はけつきの勇でうでをほり
新造の客は山屋の事といふ
十人が十人初會たべんせん
傾城は度々おちのくるはらをたて
淺黄うら度々敗北をして歸り
案じんがいゝととなりの内儀云ふ
濡事師には棒ふなと大一座
上草履ねつてくるのは氣のないの
行かぬかと天水桶へゆびをさし
引ケ過の客小びたひのある男
寐るばかにしてむざ〳〵ともらはれる
片月見むすこ少しも氣にかけず
いふなりになりなと隱居大のもて
有るふりをするが若氣のいたり也
熟睡に遣手めつたにならぬやつ
新造に云ひこめらるゝ淺黄うら
しつたかを淺黄の客はいつそ聞く
小夜ふけて風情ありげな忍駒
正燈寺あとさとわらひ〳〵行く
道行きの有る事だよと文をまき
ちと尻をふつたりと出す若いもの
まかりこしさんと淺黄へ名をつける
三會目ははなはだ趣意をわるくにげ
はらあしく淺黄は見立直す也
女郎屋のおまけは内儀申ます
女房のりくつ吉原みぢん也
弔ひをきよめるのだと勸めこみ
傾城に夜なべをされるけちなこと
惣花に針とまなばし罷り出る
文一つおろそかにせぬ淺黄うら
いけぬ事何を聞いてもしりんせん
入王に成つて女房えんをきり
死すべき時に死せざれば日本橋
一(ひと)療治して見ませうと伯父はいひ
女房の威有つてたけき朝がへり
小子供の有るに何んだと女房云ひ
さし合の有るに淺黄はたはぶれる
かけて來て禿あのねを三ついひ
たんぼ道火は有りんすのおもしろさ
若い筈内では年をとらぬ也
十二座のしまひに出ろと亭主いひ
耳だらひ水雜炊と入かはり
ほころびをぬふ内たいこ土俵入
うつ向いてゐるのをあげてながらるゝ
仕合せなわれは物だとぜげんいひ
暮の文二百兩ほど書いて出し

みつしみし來ると禿はかしこまり
よつぴと夜淺黄これなあ〳〵といひ
遠くからちよつとかざして息子吸ひ
どうもにえきれなんせんといつつける
當分は御延引だと封をきる
氣がもめんすと九年母の皮を喰ひ
小便に行くときの字屋らりにする
たいこもち身に引つかけてどらをさせ
すつこんでゐやすまいよと雪の朝
吠えたので二分ちがつたと女衒云ひ
吉原斗り月夜かと女房云ひ
うかれてるつらを見たいと女房云ひ
たのもしいやつ猪牙舟にかじり付き
朝がへりうしろめだくも茶屋がつき
そこらをばぬかるものかとことづかり
おめへがた慾を知りなと遣手云ひ
すがゞきに合せてめゝずのたくらせ
ならずやと家名をかへる息子の代
米つきのおこす後に息子立ち
遣手の催促いたゞきやせうなり

ようしをるさかいと手代はまるなり
名木を越すとお園の下へつき
わらひがほ現が金だとたいこ云ひ
おやどもが叱られますとなぜいはぬ
さあ征卒はそろひましたと紅葉がり
もみぢ見にいきやせうかと舌を出し
紅衣がふたりつきますと太皷いひ
おいらも出ませうと女房いやみなり
三つぶとん承知〳〵で五人きれ
どけへ神輿をすゑようと土手で云ひ
あがる氣で來ぬとは持つて來ぬの也
目あき千人かよへどもうけ出さず
まゝ子ざん中の島のが三歩なり
もうわらふまいと新造かしこまり
御女儀の御無用と堀でたつてとめ
天道さま次第のも出る大一座
かりの名はおぢ本名はぜげん也
馬鹿な形り手桶をかぶり引きずられ
正直なおやぢ紅葉も萩も喰ひ
大一座ねきものまでもさらへ出し

江戸のまん中へうろたへもの二人り
牛のぬけがらを中宿しまふなり
にげた後禿は醉つてたわいなし
三つぶとんよつぽど月へちかくなり
侍のあそび大小なげ出し
新造とさいつさゝれつふりよな晩
をかしくはなけれど一分だけわらひ
いやアまだ御ざなされると素見云ひ
醉ふと寐やすと前置のそのいやさ
大抵の金では無いにいたゞかず
貴所はすなほだと紅葉の下を出る
あぢなばん三分の口はうれのこり
細見を見せいとまどへ首を出し
と出た所は素見と見えまいの
ふところを廊下へ呼んで聞合せ
是でけがれが濟まると大一座
先妻に世話をやかせた今のなり
眞闇な吉原へ來る青梅縞
やぼにして居る事だよと通なやつ
二十兩くんなとかるくおぼえたり

寝たふりでじろ〱客の相を見る
昨夜は御苦勞と穴のむじな來る
燒香の順にと笑ふ大一座
紅葉とかけてうそと解くきつい事
うれのこる手の筋だろと遣手云ひ
信心なおかたへ月をわりつける
目ざましに三絃をひくつらい事
軒までもとゞくは伯父のしきゐ也
あまり間の無いは白むくお月さま
どつちらがべらぼうだかと起きて明け
さした晩夜伽を一人りつけて置き
しよいものゝうちへ月をも入れておき
直の高いやつには屋根をかいて置き
鈴をふる灯をとぼすのが相圖也
夜着の損料を淺黄は三分出し
氣の毒でありんすねえとあばた出る
ちゑまん〱たるうそつきお職也
吉原へはじめて伺候つかまつり
しよく過ぎた年忘だと猪牙へのり
生きた吉原を番頭終に見ず

大門でみんなむだすりこ木といふ
相應に素見も內は不首尾也
屁ひとつになる說法をおやぢ說き
紅葉かと聞けばさん候といふ
借りた子に乳をさがされてぞつとする
武士たるものを脊中にてあへしらひ
梅見とは新板かはりましたうそ
そらいびき心でわらひ文をかき
はてめづらしい對面と土手で云ひ
恩愛のわかれをぜげん屁ともせず
役所を明けてかいつまんでのはなし
江戸へかと格子をあらひながら聞き
死花が咲くとはけふの大一座
吉原へ男のちゑをすてに行き
無緣法界壁際に五六人
一分で面をかけかへる遣手ばゝ
萩寺に內儀の首がかしぐ也
腹のたつ文はいつでもねぢられる
秋冷の一義がすむとどらの事
あの一座とつてくらひとやりて云ひ

なま醉に一トりくついふ阿房者
ごふはらが起してまはる大一座
おさらばをあいといふでもあるまいす
一つ家のあるじ迄出る三會目
一度もてたを生きたうち咄す也
あまい酢でくふはおふくろ斗也
姉さんがたんとゐたよと尻がわれ
吉原の本地はまこと待乳山
大一座人のふんどし二三人
秘事はまつ毛だと紅葉を袖へ入れ
おのたられなさるものかと四手云ひ
うんじやうをしたふりをして母にあひ
それが國土の費だと女房いひ
つじつまのあはぬはなしをおやぢ聞き
家つきの女房つけり〱いひ
聟土手でそうやうさまへいとま乞ひ
たはけめといつては髭を一本ぬき
三會目よんどころないことばかり
ぬける晩よぎと枕にのみこませ
朝麻のぐるり紙くずや切れた三ン

初會にはあてがひぶちを喰つてゐる
かりもので見世に後光が二日さし
あやかしが付いて屋根船堀へつけ
今夜いくやつもあらうと芋を喰ひ
おれが目をねぶつたらばと名句也
左りまへの子新造が抱いてくる
面白くないはおやぢの尻目也
若だんな足袋がきらひで嫁がもめ

天　明　中

傾城に女房面談する氣也
つらい事折〳〵ばちで膝をひき
惣じまひだん〳〵もゝんぐわアが出る
女房にさくら〳〵とうたはれて
商賣をほんとにほれてやかましい
にえきらぬやつらと四手あざわらひ
目明千人じやもつらは賣れのこり
月もはや影かたぶきて朝がへり
よつぴと夜他出してゐるむごいやつ
御繁昌様からといふ三會目
かん病づかれで四手で寐て歸り
長追無用と六郷からわかれ
三會めしやくしあたりがべつになり
月の座へ息子はひらき直るなり
よく〳〵の馬鹿吉原に三日ゐる
其時ばゞア大音聲でわらひ
奇應丸のんでねつからきゝいせん
いつなりととゞいた時がけふし也
眞崎(まつさき)の稲荷に女房ばかされる
未明に和尚かん當のわびと見え
どぎまぎ〳〵してとんだやつをあげ
文などを書いて居るをあげべからず
こうるさいゐさとりの出る三會目
ごふといふものをにやして女房まち
素見物かんにんづよい男たり
大勢ぢやござりやせんと遣手いひ
けちなばん女郎の二ばんばえをかひ
鞠がくづれて猪牙舟とかはります
いひにくうありんすねえと氣味わるさ
人は武士正九ツに女郎買
本惚と見ぬいて夜具をねだる也
ゆうべもてたを女房にらりにされ
女房の夢見のわるい三會目
淋しさに宿をたち出で二朱はまり
引け四ツが鳴るに傾城ほれのこり
きつい事略ふくでくる嫁をとり
むりな異見はたましひを入れかへろ
傾城の代脉の出るけちなばん
賣するゐを買つて新造くるしがり
大不料簡えてきちをむすこ入れ
御夜詰がながいと太皷どくをいひ
おやぢよりまづ見かぎりは太皷也
しくじり女郎見倒しの直にふまれ
うさんといふ匂ひ女房かぎ出し
多田で無い藥師と女房見ぬいたり
御名代として布團が一つ來る
花が三文ではすまぬ中の町
文のくるたんびに息子ちゐがつき
三文が女郎も買はぬ氣になりやれ
紅葉をうり仕舞唐の芋をうり
あてもなくはらみ新造しかられる

御隣は加賀様かへと高尾聞き
きまぐれな隠居年増にせうといふ
うそもすこしはつきますと女衒云ひ
暮の文とり〻にかゝぬなり
床花がすむと女房をせんぎされ
いつまで見ても紅葉だとそびく也
ちるらんの頃からがいゝ中の町
中の町おつうじくねて腰をかけ
あまい酢で梅若を叉母は食ひ
かういふ算段と花のかげへより
箪笥にも有りんすといふ風情也
なけなしの一分遣つてひまになり
八朔が百性よりは苦勞也
國分より手ざはりのよい三會目
土こねのやうな女郎はしばられる
醫者は醫者だが薬箱もたぬなり
賣れのこり御もつともなが二三人
こりましたさうと御ふくろ云つている
正燈寺ぎりで歸つて灸をする
岡場所で無いをまゝ母恩にかけ

つまりんせんがより合つて書いてゐる
ざん切本多の駄賃が一歩也
山の神團子をなげる朝がへり
こんがらはよしせいたかにこまりんす
がら／＼と鳴ると夜分のていを見せ
細見の末にいびりて一人づゝ
ふところは田樂切りと土手で云ひ
禿につかまると入墨ではすます
見ならひも二三人有る正燈寺
引けまへはしんここたれてねぶる也
三會目布袋の姉がまかり出る
身代をなげて見ねばと太皷いひ
居喰あり禿におざう二ばんまけ
おもしろい筈床代か三歩也
おどれめといへば禿はをかしがり
一生懸命けいせい赤がつぱ
ばら緒の中ぬきはおれとふられ客
なく娘そばでくだんの如し也
孝不孝二なつらべるぬり枕
朝がへりしきゐは箱根八里也

首尾の松たび／＼見たで不首尾也

（第十四中終）

誹風柳樽拾遺　第十四下　八篇

齋檮部

拾遺

さかづきと小判決していたどかす
上さうり引ケ四ツからはよこにはき
新造へ砂の降つたるものがたり
悪所とはばちのあたつた言葉なり
桶ぶせは元手の入つたはぢをかき
隅田川わが思ふ子はむかうなり
燈籠に目附かつたらと見得を云ひ
引けまへのあくびは壁のわきから出
新造とばつくんちがふ客の年
素見物秋の末よりぶらつかす
座頭客半分死だ女郎かひ
うらの夜は四五寸ちかく來て坐り
かへる猪牙寐釋迦も有れば達磨あり

客のないうさには紙もなかりけり
大門の迷子はあしたかへるなり
朝がへりもてるやつから咄し出し
御きのどくなどと座敷を追つたてる
名代をねせてきれいに口をきゝ
名代はついちよべこべと口走り
寐かへりに客は目鼻をあぶながり
烟草盆のまぬやからもかゝへてゐ
店受に立つは太鼓がなさけなり
ゐつゞけは二寸切らるゝかくご也
謀反とは大さうらしい一分なり
たましひも下谷へくるとすわるなり
伏勢の起つたやうに惣じまひ
かつもつてなどとちんじる草履とり
せうかちの點などおろす遣手ばゝ
生むすこに太鼓は打たせたがるなり
かへるふね山谷の河岸へ入齒をし
鞍替のあはれはかぶろ對に泣き
愛想をよくふられたはしかたなし
新造はのむと力がつよくなり

つれて來た女房よち／＼一手桶
目付ヶ繪をねから遣手はのみ込ます
起請とは裸にせうといふ事か
大一座ふられたやつが起こしばん
連れの名をふられたやつは生でよび
もてぬやつ舟宿へ來てわりをいふ
御親父へそのめりやすが聞かせたい
年增買ひ明ける／＼にくらひこみ
炭はねて引ヶ四ツほどにどつと立ち
寐ごかしにするのみならず屁をかゞせ
吉原でふられた男あづさに出
薄ずみで歸らぬ筈の手紙が來
俳名の無いのを遣手うれしがり
飛ぶやうな舟で有らうと問ひおとし
もたれては客の羽織をむしつて居
新造のあぶれに亭主ひねらせる
ゐつゞけの戻りは安い烟草にし
腹のたつ裾へかけるも女房也
風ふけばとて又一つ着せてやり
ほころびを縫ふけいせいは床もよし

香車先づくやうに出す柳橋
居つゞけに初めて見出す白あばた
出てゐるかなど提灯吹消させ
名代を聲高にしたはづかしさ
閉口といひ／＼しやべる太鼓持
桶伏はさかさにふるひとつたうへ
ゐつゞけの馬鹿／＼しくもいゝ天氣
どうせうの相談をきく矢大臣
引ヶ四ツにひけものなどを買ひかつぎ
禿來て鼻から烟を出せといふ
灸を無になされますかと襟を折り
分散のまづ金高は女房なり
大門を口といふので水道じり
もてぬやつ馬のねかへりする如く
ぜげんの子女を玉と覺えてゐ
氣は有りやなしやとす引く隅田川
來ぬ内は禿の名など聞いてゐる
ふた親の人と思はぬ太鼓持
ふんどしはどうだと禿まくられる
ぎう／＼と淺黄のうらの客がよび

心まち奥齒にもののある夜也
中ぬきのふんごんである中たんぼ
女房をたのしんでくるすけんぶつ
ぬけがらのあとへ引込むほまちもの
そら痳入りへんな所をのみがくひ
里の文まづとよからはころしよみ
名代と帶引をする役者あり
八朔の雪ころばしは客がする
新造の內は年增のだめをさし
ねだられて禿にやりし烟の輪
京町へとまりがらすの袖づきん
きの字屋の臺にはびこる始皇帝
中宿の火熨斗は化のかはへあて
惣じまひ座しきの內は皆草履
疵のない人は通らぬふしみ町
ねたふりで逐一に聞く上草履
小姑のやうにあつかふ遣手の子
みす紙で招きや遣手が直にくる
東風かぜのふく夜は見世で伽羅が入り
雪こかし遣手のしかるところまで

初雪の下見におきるたいこもち
かごちんを齒へあててとる雪の朝
禿呼びや遣手の尻をまはり道
ゐつゞけのかへり馬糞をみやげにし
伏勢は大門口をたてにとり
まづ先へすゝみ出たりたばこぼん
上ざうり後トから來るもわきへきれ
廊下から秋を覺える上草履
衣紋坂夜は一人り明け二人り明け
其うちに一兩二分のうそも有り
きぬ／＼の袖から雲の雨おこり
落かしらつゝ込にして惣じまひ
中田圃本氣であるく所でなし
蒸籠の峰に一はけひぢりめん
地廻りへいけにへにする殼があり
新造の夢は廊下をかけまはり
傾城の腕に逆修を入れて置き
あの騷ぎとめて見せうと臺を出る
もらひてが名をばやりてと付いてゐる
箸紙の廻りに喰ふは無銘也

堀の茶は味も覺えずのみのこし
床へ來ていやみに櫛をふかくさし
ゐつゞけは女護の島のふろに入り
ふり切つて歸らんとすれば羽織なし
無いといふつはものが出て戀の關
格子からのむ一ぷくは連れの恩
口取のやうに新造先へたち
名代がはづせば跡は横しぐれ
中の町火のふる上へさしかける
大直し時分遣手にやつとやり
大一座後生大事に名を覺え
もの思ふそばに禿の春をまち
けいせいの癪とはまづいせうゆのみ
吉原へ尻のとげるはつむぎで來
五十間行く內門のきはにたち
隅田川連れがわるいとかどはかし
戻りには田町にしやれのたられぬ
傾城は人をたのんでひとつぶち
ふられると內のやつめにあだをなし
珍說があると太鼓はすゝみいで

大一座のろつこいのはいもをしよひ
火廻しに禿引ケ四ツたんといひ
すきんせん事とちぎりにぶら下り
おれならば貫目が有ると遣手いひ
あやかれと後（あと）で禿をかけて見る
とぼされて一の谷ほどかけ下りる
夜る斗り重いにうらの約束し
新造の聲は氣海の邊から出
土手で逢ひどこへ／＼と手をひろげ
毛の赤い禿一旦坊主にし
もしちよつと來なは初會のけへど也
くらつたりなときのじ屋はさげて行
名代にほとけのやうな女郎が出
文つかひむすこをはすに呼出し
つめられるのもよしあしの有る事の
取るものを取ると太皷はしづか也
新造は三度聞かれて耳ツとう
やりくりに禿を對にはだかにし
欺きぞめはりつぱに馬鹿をつくす也
わりひさでいかに船頭どのといふ

もてぬやつまだ藥でもやる氣也
もてぬやつ田町で犬にほえられる
廿日過ぎ文でおつかけおんまはし
名代をとれとはよくもぬかしたり
新造のおやぢは村の呑ミたふれ
やりてばゝ毛ぬき合せにいもじをし
寒うそをつけとやりてはせつてうし
素見物何の因果で來たといふ
草履とり禿へさして汗をふき
地女に毛むし二つで化られず
とろろうの客は一別いらいなり
追出しといはずに客をゆりおこし
年明けは出しがらをくふ氣味が有り
坐る時やりての跡を三つうち
ひそ／＼と廊下に顔がとゞこほり
足音に廊下中から火をもらひ
ちよろつこいやうでももげぬ禿が手
光りッ木禿はしごく大事にし
暮の文いやなきみだと封を切り
月に來てくれろだらうとふうを切り

一の糸新造よんでくひきれず
こちらから三ばんめだとあごで云ひ
わりえびを袖から落す大一座
上（うは）がきをたのみに來たにあひをさせ
傾城の年は晝夜で二むかし
大晦日さらに遊君らしくなし
ふけいきな事だと行燈かきたてる
そらねいりあまり鼾がりちぎ也
まだ來なんせんかと緣へ腰をかけ
よく／＼のりつぷく客はたれて置き
つれ合の日さと遣手は梨子を喰ひ
大一座軒をならべてふられけり
耳こすり案にたがはず貰ひに來
佛神の外に燈明一つあげ
新造をすく內むすこ人がよし
請合つた我もかへらず正燈寺
眞崎はにぎやかゝえとよりかゝり
暮の文まくらにあててうなされる
來なんしたかと一（ひと）あみうつて坐り
せがれめがしかりませうと土手でいひ

しやちほこを見たと禿のふいてうし
十三日やりて一期の引けをとり
くれの客とんにがすなと姉女郎
名代に脊中合せてほとゝぎす
燈籠見に夫婦と現じ來りたり
あるまじき事と新造目ざとくし
京町の鏡をあるく田草とり
うけられて引ヶ四ツごろは大いびき
惣じまひむかふで一人(ひとり)見世を引き
やきみそに禿をまたぎ〳〵越え
生醤油でくふ女郎は通りもの
傾城の死靈はずんどわけがよし
女房の有るのが知れて喰ひつかれ
丸まげになるてふ桃の里はなれ
客の氣をくみ〳〵うそをながれの身
女郎買雨にも通ふ釘のをれ
すゞしさは座しきをぬける鐘の聲
楊弓は新造ほどな張をもち
腹立は禿へそれる女郎の手
新造はかねのなる木によりかゝり

うつゝにもまくらは客の方へこけ
異見する場所でかゞとがついはづれ
新造はかあいがられて裾がきれ
傾城は手づめに成つて氣にほれる
盃へうけた斗りでわりをくひ
傾城のれかしもの也糸切歯
よの客がきつぱり切れて乳が出る
そろばんで喰つてる人に夜具の事
けいせいの尻をつめつてしかられる
二度目には月もおやぢもすごく見え
えりにえり揚げたらむごい目に出合ひ
ぬしの手で御はし入れとかきなんし
禿に追はれ敗軍のこゝろ也
百兩と手桶あづかる若い者
下馬よりは下乘のさくらおもしろい
みかんかごよりは無念なよつ手かご
吉原も市の仕込に文をかき
うそを書きつくしたあとに月の事
空とおやぢには知られぬ秋の雪
ばけて來た狐狸をおこす也

傾城はとつぱづしても恩にかけ
へんな晩御めんなんしがやたらくる
袖の梅道樂らしい藥の名
もらはれた夜は兩方へ蚊がはひり
舟やどは沖へ〳〵とかぢをとり
吉原はふり袖に目のつかぬ所
ふり袖の前帯をすくいろおやぢ
手管とは何の事だと淺黄うら
格子からのぞけば筆にりきみが來
緋ちりめんひもの無いのが本の事
料簡がつくとふんどし白く成り
傾城のゑくぼにはまる家やしき
朝がへり盗人ほどに工夫をし
紙びなで男禿は火をおこし
素けんぶつはし女郎には目もかけず
中宿でまづ初手のから封を切り
緋ぢりめん虎の皮より恐ろしい
謡講四五度おやぢくはせられ
淨玻璃へてつきりうつる遣手婆々
ふいに來た客は唄にも氣がまはり

手一そくすへたが土手でとちぐるひ
ふづくつて出たと袴を茶やでぬぎ
鼻糞をくつて禿はしばられる
行違ひ猪牙に馴れたるみやこどり
ふんごみでよもやは女房ゆだん也
大一座のむやつ中へ〳〵と出
千兩の小判はゆびに切があり
盃をとるとやしきとのみこまれ
矢大臣まかりならぬの御すがた
二わり引のふとんにて寝るけちなばん
むごい事分地へふとん一つ出し
むつごとに七ツの年から十五年
おやぢからうけとつたりやその次は
朝がへりいのちに別義ないばかり
さうりとり上をまなんで百倒れ
思ふさまむしんいはせて十四郎
傾城の口笛をふく節句まへ
うんといひなんせんとつめりんすにえ
三歩だけ事嚴重にうれのこり
惣さいはあらめと禿口ばしり

素一分はげしなりませであんどすな
文つかひ或はいさめ又しやくり
則とたばこぼん斗(はか)のこつてる
頬張つて置いて禿はさがりんす
三會目あたりなますへ箸をつけ
かこはれの店うけに成おわい〳〵
太皷持ぞんじの外に酒もなり
なんでうの事やあらんと土手で云ひ
草も木もねるにまだ來ぬ初會の夜
伏勢にえりのこされしわらひずき
つくばつて咄して行くは姉女郎
聞きなさいおまへのうちもつれだとな
見申したやうだと烟を内へひき
これがまあ釣れたと女房舌を出し
袴にもこりたと女房腰をあて
女房の名言をいふ節句まへ
娑婆以來是は〳〵とそりかへり
わび事がすむとぬつぺらぽんにされ
新造に異見いはるゝ年でなし
行くなではないとは粋な異見也

九十匁も廿四文も同じゆめ
風に身をまかす柳の一(ひと)かまへ
通ひけり江戸中の猫あげや町

（第十四下終）

誹風柳樽拾遺　第十五

長　歌

寶曆中

傾城に三本たらぬむすめあり
三味せんの撥をあくびのふたにして

明和中

厄年のごぜ三絃をふみをられ
いたづらな御手だと藝子わるびれず
まづ是で御免と藝者三を下げ
すひがらを消しなと撥の尻でつき
世をすてたやうに踊子えんにつき
踊子に四五十らへで氣のわかさ
吉野丸火繩くさいが五六人
喰ひつきやすぞえと藝子うるさがり

硯ぶたあんと明けなと藝子云ひ

安永中

數十騎を撥一本であへしらひ
からかさのおややきものと藝子云ひ
知れぬ筈使踊子屋とたづね
それがしもまりか歸ると藝子しやれ

天明中

御めかけは三んをくんなの娘なり
武士の會席へおや〳〵二三人
蚊ツくひを詞の時に撥でかき

拾遺

めりやすは女のぐちに節をつけ
糸のくるうち手のひらを撥でかき
二上りが過ぎて身代三さがり
盃がすむと三絃枕につき
踊子の膳に今來た三の糸
三の糸ぷつきり切れる聲のよさ
踊子の下駄八の字にぬいて置き
踊子はあまさかさまな供をつれ
踊子を一味やかたへ調合し
新橋はそこりんせうとげいこいひ
踊り子は夜氣にあたつたなど〻いふ

（第十五終）

誹風柳樽拾遺　第十六

鄙ぶり

お定り通杉戸の前へ坐し
品川は波打ぎはへ床をとり
品川へ六夜の客が來迎し
わきさしをもどせば茶屋はかのを出し
高輪の地代にこもるほかけぶね
品川はしつぷかなのがためになり
餅花は承知〳〵と若い者
人足も馬もうけ込むわかいもの
品川の衣桁もゝ引などもかけ
品川のきやく牛町に氣がつかず
戸塚からとは見えまするゐは〻〻〻
入船を見なと初會のやつにいひ
戸塚からはやくて四ツと妓夫はいひ
品川は同じ風味を橋でわけ
やつぺしに浪をほめるは初會也
餅花を提げて難所へさしかゝり
扇の間よりも涼しいかけづくり
心まち岸うつ浪の音ばかり
栗餅は犬にくれろと氣がちがひ
いつはりの詞の花はつけにさき
品川で同行五人など〻しやれ
やぼと化もの品川に入りみだれ
賣れぬやつ馬の尻斗りかいでゐる
牛はうし連れで南の大一座
みめよからざるを杉戸へたてかける
言譯の御みやをめせと桐屋云ひ
品川の汐干はよほどふかみ也
大井川よりも品川首ツたけ
きぬ〳〵にかしくらといふ鍵の音
光陰を四ツに切ツた迎ひかご
切あそび見てゐるやうに迎が來
その氣では來ぬといひ〳〵引きずられ
とてちりの内に太鼓はさゆをのみ

線香で假り寐の夢の尺を取り
つりの二朱かやのおもしと成にけり
丸山でかゞとのないもまれにうみ
丸山でひげ人參を花に出し
丸山へ來てばあ〳〵にしてかへし
丸山にさんご珠をうむ女あり
四百宛折〳〵母はたばかられ
丸山へよこさけのする返事が來
松明でそゝつてあるく輕井澤
輕井澤杓子定規な文がくる
まきぞへにあつて女房も山歸來
わり床に戸板など出す輕井澤
どぎついを吸付けて出す輕井澤
おも手代不慮な事にてかさをかき
馬を買ふほどでうけ出す輕井澤
おりよかつてくれさつしやいと輕井澤
弓手にはどびん馬手には釣の錢
洛中の螢は顔がひかるなり
えり屑で女衒切りうりおつぱじめ
茶屋馬宿が付いて來る輕井澤

留女石算時分けいきあげ
丸山は義理がわるいとひげをそり
出女のかゞみへうつる馬のつら
大口舌へたにさはるとくらひ付き
かんひよこな地廻りのくる輕井澤
四會目を四くらといふは輕井澤
此月も三度四くらと輕井澤
そこまめでゐつゞけを打つ輕井澤
早乙女をすゝいでは出す輕井澤
輕井澤太夫ばん下をくゆらせる
めしもりは夜食をしひる氣味が有り
丸山の客は一萬三千里
ほれたのを通辭一人りがをかしがり
丸山でとるむなぐらはぼたんがけ
切見世は唄を通してひよぐつて居
切見世はからいちがいに烟草にし
切見世の一間こなたでみそをすり
切見世は新造出すに戸のふしん
ちかい内來なといひ〳〵小べんし
切見世はさてうがひをしきりをふき

切見世は壽大將の匂ひがし
いつ來なるなどどびん切なで付る
たれながらそけへよりなとあごで云ひ
にはとりのやうに切見世いそがしい
切見世はいた〳〵しいも出して置き
切見世のおしよく鼠を寵愛し
あまつ子をみれんなやつが買ひにくる
切見世は多ばこの煙でもや下り
切みせはばく〳〵〳〵と一ぷくし
そゝらずとよつていきなとたれていひ
かたいやつ四十八銅きつと置き
いただいて呑もくやしき山歸來
切見世はつき出すやうにいとま乞
切見世に立ぎえのする頬被り
とやの子を出して日なしへ云譯し
おしろいを霜とみらるるはづかしさ
四十から老には入らぬ吉田町
河岸へ出るかつぱは鼻をぬきたがり
客の有る間船頭また火をし
また火してねるほどおちよ買ひこなし

提灯で見てぬつたとは／＼
たつ事のならぬを舟であきたはせ
およんねんしと材木がものをいひ
本所から出るふり袖は賀を祝ひ

友色ぶり

寶暦中

よし町は通ふ佛と封に書き
よし町でふかくあはせた前を明け
踊子とかげまをあげてまゝ子立
よし町でだかりあふのは不首尾也

明和中

關東の子はよし町へむかぬ也
よし町へ謗法罪の客がとれ
よし町は文と手がみの間をかき
よし町で釜の鳴るのは吉事也

安永中

ふり袖を着して後家のあいて也

天明中

よつほどなたはけかげまをつれて逃げ
生醉になつてかげまを一度買ひ

拾遺

背に腹をかへてよし町客をとり
しろもののはなはだよわる女客
よし町で年増のぶんは二役し
よし町へあべこべと出る門徒寺
よし町で南部に遣ふすとりぶた
薹過のかげまはしめろやアが出ず
かげま客しりのしまひのつかぬ物
牛はものかはと陰間へつぼねいひ
よし町で女の客はかへりうち
そこくらでいかけて元の釜となり
しりのつまらぬは年明のかげま也

（第十六終）

誹風柳樽拾遺 第十七

雑體

思はせぶり

年代不同

初午にうしの角もじ蜂がさし
湖へ三本通り毛をはやし
みちのくの思ひは同じ薪ざつぱ
ゑぼし犬もんでさんまを二つ買ひ
松風も左の手にも通ふらじ
ぼた餅も獅子身中の虫をやみ
忠常はだん／＼行くと田町へ出
小便にちと物の怪のすがた有り
よいほどに風をおこしてすゐとくじ
大國は鐵のはしらが間男し
おはぐろの駄賃に一本しやぶらせる
下坂を買ふとまをとこよりつかず
好物は三百〆も喰ひなくし
北山の雨にたとへし人ごゝろ
鵜のまねをすると他國の水をのみ
四十二の親は心得違ひなり
ぬけたのとぬけぬがおよぐ麥ばたけ
箱入になつて蛙へ遠ざかり
奥さまと三句にわたる美しさ
松客を油上にする坊主あり
稲妻が二つ光るで後家としれ

かんじんの夜は神田にころりと寐
島へも寺へもこぼす化粧水
借金と交代をしてくれは鳥
若い後家丸てうちんの直うりをし
二代目の窮鼠かへつて猫をとり
ものかはのかどの取れたる五百疋
かたまりは箱へおさめて手をあらひ
高安へ通ふたんびに井戸の水
袞龍の御衣せんたくに二分かゝり
榎の僧正は餅屋の向う也
にぎやかさ廿六人一座なり
石川やはまのまさごはかしら也
勅答を梅干桶のふたで出し
丸勝の首尾は月落烏啼く
おばの出た跡は鱗に月がさし
かけすてのやうにうら島としがより
黒主は武玉川からぬすみ出し
菊五郎舌の屆かぬ假名も有り
朝鮮をにはとこにして凱陣し
西海の戰場までも木の芽つけ

意地凝つて腕つかみ合ふ十三日
姉女郎まんぢゆう一つわざと喰ひ
中納言小田原町の犬を出し
立聞をせぬと一首はすたる所
儀同三司といふべきはつけまはし
花の雨思へば諏訪といせの神
弟子は北師はひんがしにあとをたれ
百人一首一人の歌は俵にし
ひやうし木を引つたくるとの咄し也
高尾よりおらが四寸が緣遠い
齋日は中天ぢくにひゞきあり
川竹の溺ぶみをすればこはいかに
かげま茶屋祗園ばやしへ灯をともし
のれんから牛膝のみえる後押へ
いつはりの有る夜也けり唐のいも
消して又あめが下しる五月とは
雷も左り勝手におちかゝり
ぬす人のしんるゐもある十三日
大內のふはむきに成るめしを喰ひ
大坂で大出來江戸で二役し

月毛にのつてきつとした文つかひ
よつ引いた故事を云ひ出す鮫が橋
爲朝は餅は餅やと書いてたて
勘當の一日二日帆かけ船
よび出しは信田の森へ消えて行き
若殿の遣ふ桂馬は鼻が利き
氏神と現じて女ふるひごゑ
名代はいはんすなとて罌粟の花
忠信はごま鹽にして取つてなげ
曉々にたゝんで仕まふ詞あり
大好庵氣の毒がつて水をやり
さすまたをはいた坊主に人だかり
大詰に炭が一俵生きて見え
中腰になつて五文がさゆをのみ
しのばずのふたは釜より早く明き
大敵をほろぼす太夫安がられ
すつ込んで居やれと亭主牛を見せ
川ばたで左衛門一分が錢をかひ
內外に帶がメツてはしたに寐
見付ケのは二寸七分の寸はづれ

干大根茶屋のはだなにとりまかれ
とんだもの産んで一村名がかはり
四たびめの竹はめでたく黒くなり
あたまこつきり岩でする本望さ
取に來た狼鹿にとられたり
化ものの渡りが付いて物まうで
進物をちくらが沖でごまかされ
氣のおもい妓夫へ一分の灸をすゑ
鶯をつぶしのやうに拜見し
木戸〱へちよけまちよけの札を張り
さんごじゆのしらぬふりする毒も有り
九州に入むこらしいなみがうち
世を捨てて十六兩二分廻國し
勘忍を二百度して箱をさし
一本の榎に三度はらをたて
はし〱はなむさんぼうの地形をし
遣唐使妾のみやげそつと出し
もろ〱の書を見ひらいて藪に入り
地ひゞきがしてせんたくの湯を貰ひ
後足を呼んで日まちに落をとり
たましひは口にのこつて煮えこぼれ
手ぬぐひを唐のあぶみにかけて置き
そら錠で居ながら尼の口が過ぎ
ごまみその後卜緣遠いめしをくひ
遠くおもんばかつて桑のはしで喰ひ
芋の葉のるすとかぶりをふる斗り
百日のけいこむやくのせつ生し
廿年立つてはりかへたのがしれ
大晦日紫雲たなびく御不勝手
一里塚近所沽券の高い所
靈寶にうす氣味わるい寺があり
三枚におろした跡が東大寺
そば切に遊行の供の口が過ぎ
味い音を出すは左のゆびの先
念佛も三百兩ではめにつき
心中はさし錆からのおもひ付き
しのゝめに女房まわたをしごいて居
檀林へ通る僧だとおもつてゐ
夫婦して十兩遣ふ久しぶり
そりや〱とごぜに滑石またがせる
大原はしやくし果報なまつり也
ぬきんでたどさアあたごて火をもらひ
穴いなりするが町から尻がわれ
五人目のまをとこ運のわるいやつ
世の中は二寸七分に四寸九分

（第十七終）

誹風柳樽拾遺　九篇

第十八

戯場

寶居中

嫁の髮酒呑童子の時分出來
しばらくの聲なかりせば非業の死
三甫右衛門一段高く無理を云ひ
いつそもう路考が出るといつそもう
狂言と思ひながらも沖の石
井戸がへのやうに五郎を引出し
よくふかく舞臺のそばで雨にぬれ
見世ものの太夫といふは鼠なり
まねかれてしやんとをきては我を折らせ

切おとし平等院へ乳母がしり
助六は江戸一番の頭痛もち
雪隠の龍左衛門にびつくりし
あと頼む扇の芝の切落し
女房にうなされてゐる女形
樂屋からまける合點のかたきが出
聲色も小田原までは通用し
八兩で三百兩の場をつとめ
切おとし蜜柑の皮を町おくり
大詰に出て御味方と譯をつけ
出遣ひの顔に文三が生れ付き
しばらくがあたまをみんな横につけ
幕の内矢挾間をぬけた飯を喰ひ
はきものであたま尋る和泉町
油みせ是も同じく役者にて
我思ひせめて樂屋ですりちがひ
とつぱづし樂やの石をふみつぶし
聲色に折紙のつく連の中
三つ股は高尾已來のどんぶりこ
幕引のはかまにさして禮義なし

はけ長はこんりんざいの聲を出し
彈がたり御兩人とはあぢをほめ
切落しでも御屋敷をつゝぱらせ
旅役者落馬で所作の所をぬき
三味せん屋ぢゞいの代には外記で喰ひ
八百久が乾物箱は壁にかき
猿廻し一僕つれた氣であるき
居酒やで番場の忠太いやがられ
狂言の切はどぢやうに酒をかけ
かたき役はやい因果のめぐりやう

明和中

兄弟は手付けを取つて日のべをし
兄よめも芝居願はぐるになり
頭取がしらせを打つと塀が落ち
うぶぎぬはやつたかいなですまぬ也
愛想に茶屋の女房は一幕見
楊貴妃にめしを焚かせて豐後節
七夕をながす竹にてしかたをし
三甫右衛門北野へむかぬ役者也
手水鉢のつ引ならずごんといふ

ふり袖のむぬ打をくふぬれ事師
牛若になつた若衆を聞きにやり
二ばんめが出たと妹のかへす書
梅が枝ゑはおもとの實まで拾ひ込み
切落し立てばおやまとなぐさまれ
此幕がほねだとみんなはなをかみ
十郎はぶたれる時に糸をぬき
葛の葉はやぶれた所をよけて書き
鉢卷をせぬと助六太神樂
凡百餘年と端に高慢し
三立目のあたりに茶屋へ來て着かへ
屋根仕合ぼうふりのある水をのみ
おほくみで見るのが馬の女房也
見るそらは無いとさじきでねんねさせ
おせまかろなどとはかまで折りをあげ
丹前は何もないのにむすぶなり
大薩摩朝比奈ぎりでねかしもの
宮芝居いかにも曾我が貧に見え
ぬひ紋の事でさじきを二日のべ
夕藥師などとおくまは作つて出

ほんとうの年は保名に九百の餘
鹿子餅につこともせず折ふしゐ
たゝかれる方が豆藏上手なり
なる神はして〳〵どうだなどとぬれ
女形下手を出でて遠からず
手にものがいつそつかぬと結びをし
二芝居見たでとりまく長つぼね
子が泣いて隣さじきへかぶ人相
かんしんの時に胡粉で書いて出し
霜月は思案のいらぬ橋になり
八百七の時分は戀もりちぎ也
手まへから顔が見たうはないかいの
豐後ぶし由兵衛どのでさゆをのみ
鼻唄はうぬが勝手にふしをつけ
ちぐはぐの顔はもらつた棧敷也
門弟がよつてくやみにふしをつけ
古近江で彈いて見ようとめくらへび
せなかから肴をはさむ切おとし
旅芝居小町あかねのはかまを着
百さじき承知〳〵とおん出され
花道をまご付く下女に落がくる
がくやではよりとも公の部屋はなし
たび芝居後家二三俵どらをうち
うられてもやつぱりお輕名をかへず
顔見世のくじにこしもと信をとり
花道をのつし〳〵とかなつんぼ
輪をふやすやうに景清しばられる
鍵まへの無いが一棹由良之助
市松のあたりで帶がふりほどけ
勘平は麴町へも折〳〵出
河東ぶしどれも朝湯にはひる人
たてものは魚蠟かぎ〳〵はねまはり

安永中

なにとばしござりませうは竹田みそ
日蝕の生れ初段にだゞをいひ
大あたり野郎傘者をおんならべ
死にさうなそばに毛氈出して有
親玉が内はあれさと釣つて居る
猩々は何か尋るやうに舞ひ
はなれ藏ぞめよ〳〵と母のぞき
狂言のふさくはあぶら虫がつき
紋所あたまにあるはあぶらむし
やるまいといはねば手もちぶさた也
ワキの僧たばこ盆でもほしく見え
立身をした馬申しあげまする

天明中

古渡りのおやぢをもつた和藤内
ほの〳〵に明石も須磨も支度出來
河東ぶし内では後生ねがひなり
そも〳〵相撲のはじめより降さう
うらなつて來たと棧敷をせまくさせ

拾遺

宮芝居百石ほどな工藤が出
惡がたは油見世など思ひ切り
大風の出て行くあとのかゞみたて
追はぎのやうに舞臺で勘當し
十郎がせりふはどうか異見めき
手にあまる所で河津の位牌が出
手水鉢ぶたれた上で金を出し
幽靈はにぎりこぶしで引きもどし

新水は毛を引いたのを紋につけ
此場をば赤木のつかでまづすまし
火縄賣りやぶ入といふ藏をもち
小千石ほどにがくやの窓をあけ
花道へ井戸かへほどなとりてが出
引導のやうに義太夫序びらきし
番付けの代門番にちよつとかり
時致がるすをねらつてさいそくし
堺町人の毛なみをいふところ
女形淺黃のあごをせつながり
よく聞けばみづからといふ年でなし
常陸坊飛魚らしいひげが生え
いり酒をひゆうどろ〳〵にしてしまひ
千兩は舞臺に一人しをれてゐ
雷藏に宵から光る長つぼね
芝居では先づたからものふんじつし
友達のひや〳〵思ふほめ言葉
火縄賣ほつても別火くはせぬ氣
手のひらへけんくわをのせる切落し
させにくい祝言などと恩にかけ

幕引のへんてつもなく見しられる
勘當は扇でぶつが故實也
草摺は引かずとじたい切れかゝり
百姓の作り上げたる菊之亟
疝氣をも癪にしておく女形
首はまだ舞臺に置いて湯にはひり
吉の字の上唇が黒くなり
幽靈はきえて棧敷へのみにくる
朝比奈は御神酒の口で髮を結ひ
福山はちとあやふやな傘もかし
久松へくれた四季施と見くらべる
耳のわきかき〳〵お七そばへより
たこの足これ九太をまく道具也
なま壁はきつい毒だとお七いひ
祖師堂をまづお七が出吉三が出
本妻へわたす信田の置みやげ
我うそで感涙ながす門左衞門
美しいせなかを引いてすひつける
ふけいきな御子だと乳母は木戸を出る
下さじき餅を喰ふやうに首を出し

闇仕合そこひのやうな手つきをし
賴朝はてれつくてんで出はひりし
床びらき會料だけはうならせる
へどをつく璧梅幸にさも似たり
ふりつけ師さうさ〳〵とごみにむせ
久兵衞が紋は何だかしれぬ也
つらの皮うしろへなげるくろんぼう
楓江はからだとあごで二ツゆり
をかしさは女形にはほれぬなり
大ざつま張飛のやうな聲を出し
しよう事も内儀の奏者今の貧
若殿に成ツたを和尚買ふ氣也
きんたまの有のが路考ふそくなり
さみせんもともにいきばる大ざつま
しつぱりとたのむとさゆをくんでやり
友切は根太の板にて刄がこぼれ
十四郎一あく出してにる手つき
せり込みに骨を折らせぬ美しさ
打出しにしつかりにぎり合つて出る
橋のはしらがきえて嬉しがり

おもしろい日を急用が白くよび
かほ見せと見える女中のあるきつき
五段目に成て寳のかずそろひ
若とのやうには見へぬつるの丸
御らうじろ手も相應と保名云ひ
梅が枝は利足にとんと氣がつかず
忠兵衛は二兩ならしにつかひすて
（第十八終）

誹風柳樽拾遺　第十九

雑　上

寳暦中

光陰にけつまづかせろうろふ月
身の上にふと氣が付いて夜が長し
一生のそんは舟からさやばしり
ねそびれていつその事に飯を喰ひ
もめんもの着るがさとりの這入り口
里扶持もとらずあひるの子を育て
食ふ時はおいらもここの子にならう
聞く人も心で五わり引いておき
蓮の實のとぶを見ているかゝり人
錢湯で思はぬたびのせんたくし
たましひが研屋の見世にならんでゐ
一方は紺屋でふせぐ鞠がゝり
かたばきに直してかるい手を通し
氣のすんだ所へ蠶につけこまれ
半分は枕へわける五十年
九尺店土紋がかりて引のばし
御物好治る御代の槍のさや
金平（きんぴら）も今は女の名となりて
口上を半分猫にしてやられ
町人の冥加が盡きて二本さし
盃へほこりのたまる不得心
あら打に隣のくらの肩をかり
男浪より女浪のかぢが取にくい
なる場所でならぬも飛車の一ト器量
御手打の場を平生のりちぎが出
かゝり人隣へはらを立てに行き
あたりからにぎりこぶしを貰ひに來
書過の娘は琴の弟子をとり
まけてかつ利は拝領のごばんじま
てん／＼にじやうるりあらふ風呂の中
まゝ母のつみは戸棚で毛をはやし
てうちする手で萬石をにき／＼し
一ひしやくかけて石碑の銘をよみ
宗桂ははしごのやうな弟子をとり
我れがちにめんぼくもなき天下一
葱斗り喰ふも一あしちがひ也
へこまれて使のこまる菓子袋
正月は品川までと子をだまし
子を持つて近所の犬の名をおぼえ
小刀のひよどり越はつくねいも
くわん音に一面たらぬ顔つつき
ふた取つて是は七十五日なり
御異見の飛火のしたる一つ穴
無地〔「物に」脱？〕しやうもやうのたち違ひ
さくらには蛸も本意なおくり號
重箱の煮しめは橋で愚にかへり
松右衛門仁義稈教戀無常

能く寝ればねるとてのぞく枕がや
茶と斗り名にのみ今ははつむかし
鬼とよぶ身も乳もらひの夜の鶴
引ずりはなべのおゐどで風をしり
よみ人しらず座中みなくさがらせ
本あみも多分のかたへ札がおち
琴の手でをり／＼足もしらべさせ
さそはれた帶は左りへまはり過ぎ
水馬とも出られず海士は針仕事
眞中に一本はえた鬼もあり
見付ケからわさびおろしが出てしかり
からしみそほめて氣のどく御娘ご
皇帝のあしにあたつた草履取
たゝかれてゐるが女房のかちいくさ
ながつぼね染井のやうな名がならぶ
然ればといふ所から先をよみ
初かつを煮て本妻を大事がり
勝公事に足のひよろつく御膳かご
おとごせの顏に似合はぬちらしがき
いた事のいた印のといひならべ

よい小袖着ると内儀はろくろくび
組屋敷通り名の有る犬をかひ
筏乘りたゝみの上へ世をのがれ
かんにんのまつ先へ子のかほをみて
石町で出しても同じ鐘のわり
切株へ時分つかひのえの木茸
片乳は里子へひゞく鐘のこゑ
大和茶にちがひないかと大屋さま
梅干が出ては家内の毒をけし
御尤／＼とて町おくり
帆をかけて遣れば異見が春とゞき
國々の理屈をとめる馬喰町
わが尻はいはず盥をちいさがり
うたゝねの團扇の風が母の恩
年玉の藥ですますかゝり人
止む事を得ず居にそりをうち
添乳してつひせんたくが夢になり
右の手にうちはを持たぬ株になり
江戸の水のむと油をうりたがり
唐の繪はねまきのまゝの女也

かごの戸がはづれて二度のいとま乞
蝙蝠の店を追はるる橋ぶしん
油氣のないからかさをむりにかし
紋所を一つ半分つけたがり
百兩はちとてんびんの力わざ
四の字でも小つぶ四つは氣にかけず
大小にさゝれたやうなとり廻し
御隱居をなされと口をへの字形り
一生に仕出したおやぢ口が過ぎ
俗名でよべば藥種はやすくなり
かゝり人へらへいとうにいぢめられ
入王と聞て火を引く料理人
たいどくの蝿を追つてるかゝり人
引こした先も隣にあうむが居
かゝり人一分が薪をながめて居
あさつきをもやしてなりと喰ひたがり
こしもとは隱居の足を繪にかまへ
勘當の訴訟のたしに髭がなり
かん當にゆきたけ母のそらづもり
さし身にてひやめし强ひる下戸心

ひゐはゐる親はそみらか手をあはせ
いたづらがしかられてゐる日本ばし
へつらひもなき燒米のふくろ也
腹を切る事もをしへて可愛がり
ねそびれた下女はめつたに薪をくべ
あいさつを內儀は二つ櫛でかき
眞中に番所のあるにじがふき
御つぼねは白ちりめんの化粧顏
かゝり人あたまのうへの蠅を追ひ
かゝり人屋根から落ちて酒にゑひ
棒端(ぼうばな)にかりのやどりのむしがれい
もののふもとりゐをこすと白くなり
碁をくづす音に若黨よみがへり
庵かりて申わけなきいかの臺
またしても前の佛で小いさかひ
綿摘はみかんの皮も肩へつけ
乞食能わりなのやうなばゞアが出
靑海苔やいつの年でもたづねさせ
乳もらひの茶の有所も覺えてゐ
萬人の口へなげ込むにせ一歩

てうちんを京間に張つたけんどん屋
甚六をしかり過してたづねに出
子分だけ中平樂をいひならひ
新宅をほめる座頭はとげをたて
臺所へ追人のかゝる病上り
竹の子は火をする垣へ顏を出し
堤から村見くらべるくわいらいし
持參でも有るかと人にからかはれ
帳箱に尼將軍はひぢをつき
かゝり人二八一ツで二度あるき
まゝ事はどぶへはひつた子がおきやく
腕をこきや龍は肩から天くだり
むな高にめかけのあに二本さし
つけのぼせみな足もとのくらいうち
首代の金を亭主は實檢し
あら世帶舅が來ては棚をつり
ゆるさぬと尻をはしよつて迯げて行
家賃より高ひ染ちん着る女房
四十四部程は話もうそらしい
どうしても樣が似合ツて手代むこ

こしばりにむかしの夢の影法師
針妙の目見えはしまで脉をとり
ねせものを賣つて身代おきあがり
まよひ子の名を八兵衞と呼んで行き
酒五升蛇が蚊をのんだやうな事
師匠さまはだしで迯げてよろこばれ
一言もいはず女房のうちになり
商人の道にかしこきわらひやう
遣ふ金うちとのものに煮てくわせ
叉折も有らうと腹をたてのこし
さんとめへ羽二重が來て手を合はせ
雨のやむうち傘をねぎつて居
かせぐよりあそぶ姿にほねがをれ
乳母や乳母おれは臍から生れたか
當腹の子供はみんな羽織を着
思ふさま引つたくらるるしはんばう
より合ふと人のあたまの蠅をおひ
束帶はのりのきゝたるすがたなり
しからるる口にへちまの十ヲばかり
根性をさかさにためす獅子の親

引出しへあくびをさせてぴんとしめ
親ぶんの子はまいら戸で立ならひ
かゝり人五百兩ほどかんにんし
門弟は目玉のやうな額をあげ
地廻りの正月ものに下駄が出來
着て見やと母は俄にひげがはえ
湯風呂から紺のからだで出現し
鬼のあごてくまひくまに髭がはえ
唐人とまつりで寐にのびをさせ
番頭は首じつけんをしてまはり
長廊下座頭を一人ことづかり
國の親手ごたへのする封をきり
吸口は是ほどといふ道具なり
女房は旗色を見て茶をわかし
とらの直を聞いてみやげも首をふり
娘鬼角にしやうねの紋をつけ
ものさしで猫のぶたれるえりいはひ
松の内五文で仕きるおやぢあり
あさぐろい男がならぶ大つゞみ

あくたいの見習に出るぼんをどり
料理場のたばこ無用は味噌が筆
かゝり人おほくびなりの餅をくひ
晝の内夢を見て置く瓜の番
藏宿は侍冥利聞きあきる
時々は國から釘を封じて來
大太刀へ卷つきさうな肌をぬき
つき袖で乳母のすねたはかしこまり
角兵衛獅子ありさうもない羽がはえ
青ざめた顔に雜煮が別に出來
かゝり人何をするにも手くらがり
高楊枝はなはだひどい道具也
生醉に安いふんぺつかしてやり
三月は大津繪も來てめしにつき
かゝり人質屋の使巧者なり
やつとうをちつと覺えてかくのてい
ふせぎ矢は乳母が合點て仕り
わん箱と一所にかりる小侍
わづらつて人並にくふ信濃者
敷のしの上にあぐらのかひころし

そろばんの師匠門貫のうらにすみ
本ぶりになつて出て行く雨やどり
やきめしの手つきで乳母も獅子の列
あぶらむし折〳〵湯屋の桶をつみ
つき袖でせこすりをする内のおば
私もとんとこれからつかまつり
槍稽古みなにんにくでつきとめる
古着買米あげざるとしめしかご
かゝり人疱瘡をした餅をくひ
ぬきぐしに引立らるる病上り
をさまらぬあたまでかつぐ納太刀
ひよめきにはぼこん〳〵の氣味があり
立引にらんまのやうなうでをふり
あやすきにくると辻ばん水をうち
棟梁の馴染で餅が塀を越し
一長屋氣ぬけのしたる梓弓
上下を着るとねぢれて鼻をかみ
入れかへの催促にくるあかとんぼ
思案する肩に一すぢ繩すだれ
元結こき餘る咄は引きちがひ

糸びんの自剃は川のふちを行き
けぶたいが來ると咄をいけて置き
夜よりは晝見るための石燈籠
通り名は系圖の中をすぐとほり
なまきずはがき大將の御身のうへ
のどが餅につまりましたと書いて見せ
二のわんの蓋中かさとくんでをち
九州はたが關取のたねをまき
通さぬは通さうための道ぶしん
すりばちの音に引かれて參りたり
服忌令己れ斗りが活きて見え
かけ針の場をかゝり人相つとめ
むかしから碁ばんの腑は四角也
仕送りも作りしつみのきえてから
風車外山の風のふきあまり
うたゝねをくまどるやうに掃いて行き
鏡臺も鳶の產んだる高まきゑ
淸書にしらぬ字のある親のかほ
物申といはるる程になりにけり

明和中

藥取とう／＼解けぬはんじもの
しやぼん賣めんぼくもなく吹きあるき
てんねきは乳母もお丸ですます也
母親は勘定高いさかおくみ
御出入三人扶持で泣ねいり
勾當はまだ氣のすまぬ杖をつき
まかなひは齋米(ときまい)の入る宿下り
風呂しきの印は嫁の作でなし
古道具屋鍔をなで／＼おくつて出
ふんどしのきらひな男碁はつよし
店うけにしかられてゐる男だて
すた／＼はかざりを分けて小べんし
在鄕ばゝ角切角(すみきりかく)にはしよつて來
切米がよけりや化ものやしきなり
明店へ一聲すてる納豆うり
江戶の水あかりをたてる紫屋
右／＼と麥から顏を出して云ひ
氣ちがひは繪にかく時は笹をもち
まめいりで近付になる心外さ
乞食能二三町づつかして行き

ひやめしをたひらげて行く下女が母
かけ合にうは言をいふ將棊さし
すぢかひに近付になる座頭の坊
まけ將棊にげるたんびに御手は何
ひしこ煮た鍋でたがひに不沙汰也
たしなめば惣身のかゆい狐つり
油屋で升あらためは供をよび
引かいてとめかす賣はまけて行き
今少し是商人の極意也
仲直り疵のあるのがのんでさし
かゝり人一つ巴のやうに寐て
座頭の坊からばりをして立聞し
貝合セすむうち乳母は一(ひと)まはり
屁をひつてをかしくもなし獨りもの
ふきげんを人にしらるゝ鳴子曳
はりものを生捕にする我雨
かし供はやりは／＼のやうに持ち
世なみよくはやらせたがる太神樂
通り者小袖の下へゆかたを着
母の繪で松葉の出來る傘ぶくろ

横町へけんくわの聲のなぐれこみ
藝の無い座頭玄關から上り
生酔の大のきまりは反吐をはき
中をよくしやれと鷄へ母のこゑ
ひねくると小便にたつ御藏前
もめんにる音をとなりでうまく聞き
ぼたもちに角のあるのはもらひもの
出格子を鳴らしてあるく樽拾ひ
張ものをはづすに胡麻のはねる音
しうわりとそちらへ尻をおうばどの
しんし賣御堅勝でと腰をかけ
附ケ家老兩刀なども遣つて見る
おとろへた山師の見える辻八卦
組頭などゝはげみをちつと付け
女房を叱る斗りが馳走なり
徳むきな女房は筆で髮をかき
四五日は嫁が〳〵と吹聽し
江戸言葉鎌倉ほどにやつがつき
藏宿は立たぬ〳〵は屁ともせず
かゝり人あのね〳〵をうるさがり

しからずにとなりの嫁をほめておき
かみ合ひに旦那の邪魔な小侍
二三人兩國橋に屁がたえず
先生へいかゞと問へばそんなもの
辻番はしもげた男事をしり
横にねるきさごはじきは難所也
一ツづつ蛙をしまふ池の音
いたみ入るなどとりつぱに引つたくり
醫者殿はけつく饂飩で引つかぶり
人相見げほふあたまに故事を引き
丸藥でえんがはの日を追ひまはし
寐わすれた下女はやたらに薪をくべ
わたし船もく禮一つくひちがひ
光陰は隱居のうへにとゞこほり
口笛で土藏の内を見てあるき
國の親ふうたいを見て封をきり
蕎麥切にあら打ほどな給使が出
新道は咄の中の人通り
紫もけんくわも合はぬ京の水
座頭の坊隣などへはそらで行き

行先の犬とこんいな小侍
孝行に土佐を一段聞いて行き
せう事がないとはかどの取れはじめ
杖の方〳〵とてふみこまれ
あふらげ屋出るよりはやく手者に逢ひ
女房を叩り過ごして飯をたき
大釜の月代をそるやかましさ
たがかけの今日休じろ〳〵見
つことない寐ろは異見の以上也
かゝり人せんたくをした飯をくひ
光陰を人だまにする樂隱居
水車かはりごつこにふんはづし
陣笠へ武張つた大屋紋をつけ
それさんまわれ共でひぬ界論
ねんごろな脈は朝湯の歸りにし
藏前の手代その手はくはぬなり
乳母が宿へちまの水の御用聞き
夜着の裾ねせ付けられし恩送り
先の名が長くて樣に頭がつかへ
一評議する氣の一家末座に居

脇寄れに何の事だとそつといひ
ぶつこぬきとは情なき言葉なり
いらぬ事などとしかるが主の禮
おつとつ一さゝれまするど柳原
見倒屋なさけを知つて不如意也
安隱居どぶをさらふを役目にし
かなぼうは大屋をじやらすやうに引き
まだいきてゐるかとむごい尋ねやう
隣から一番來いと柳原
呉服屋は付紐のある反故を出し
入王を子にくづさせて夜食にし
長むしで下モ〳〵遣ひころされる
向ふから硯を遣ふかゝり人
女房のるす押入レへおつつくね
俄客勝手の遠いそばを出し
はて猿がもちさと山師すゝめに來
助惣にして番頭は繩をかけ
姑女の股はれんぜんあし毛也
うたゝねの腰より下は女なり
御太刀をもきめるといへば安くなり

邪魔かられますとしきみをえりかへし
下女が伯父のがれぬものをくどく云ひ
藥賣り日がな一日血判し
そり橋を先へ渡つて口をきゝ
隱居どら唐津なんどをまげにやり
さべ人の女房綻ふたつ縫ひ
とでもない時分干だらの舟がつき
近邊にからまつてゐて母を剃ぎ
新酒屋れうじな事はいはぬ也
閉門へ心よく這ふ蔦かづら
親分は水淺黃まで着た男
馬の糞寒山子へ禮をのべて喰ひ
刻限を聞き〳〵角行の道をつき
幾代餅義理一ツぺんの茶をのませ
座頭の坊どうれと一つすけてやり
歌がかるた野郎鼻のうへでなし
麥めしの味もわすれた長い公事
ひとりもの胴震ひする飯をくひ
代脈はやんまを追うた小僧也
いつそ身につくとまぐろを乳母は喰ひ

御直だんがよいと藏宿かぶりふり
ちりめんのふんどし見せてさしをうり
貝杓子びんへ付けたが弓をもち
九十九で死んで一年をしがられ
玄關にあくびをさせる七加減
よつぽどな厄落しだと湯屋から出
雨の手であくひをぐつとさし上る
氣は心だと越後屋をねぎつて見
さうであろさうで有らうと里の母
おらがのは年季をまつと藥とり
長尻と狸寐入のこんくらべ
草履取りよろけるなりに供をする
直の出來るうちは大根の毛をむしり
大喧嘩ふんどししたは湯番也
江戸まへの奉公人は世話がやけ
座頭の坊とのに逢はうと大きく出
料理人もとが八百屋のかけ倒
相こしで箱をころすはしはい醫者
御しんぷははち拂だと二兩出し
物思ひ久しいかけを思ひ出し

やぶ醫者は肩先へ來たもん所
ふけ米を座頭へ五俵おつ付る
有合の顔にてしかみ火ばち化け
たいそうな道さと按摩もんでゐる
けいあんは九だと爰ではいひなさい
やもきのをよそではよしやとごぜの母
のびの手で直に受取るくすりばこ
棟梁の矢だねがつきて人は散り
御神輿もするゑるといへばげびろなり

（第十九終）

誹風柳樽拾遺 第二十 拾篇

雜部下

明和中

乳母が母油のやうな酒といふ
のむ手引座頭もともによろけて來
おらなどもあゝならうかと里の母
ひゐきよとは何の事だとおしな云ひ
高倉の宮だと馬場でなぶつて居
十鳴ツた時計のそばに子があそび
正宗を喰つたと質屋そつと見せ
家督公事後家はきいろな聲を出し
分散に無盡のからが十五六
氣上りがするとぴい／＼引つたくり
あら世帯何を寄進にせうと云
御中入四百四町は新手なり
御祐筆人を遣ふも筆の先
あて事もないと春屋におこされる
爰をよく聞けと御ふくろ糸をこき
那智黒をがらり／＼とふんで行き
一月の利をすべつたり油賣り
小侍しりの丸いを二本さし
二か三かしれぬとごぜにさぐらせる
てうちんがきえて座頭に手を引かれ
ありんすが第一姑氣に入らず
ちくいちにかつけなさるるかゝり人
にころばしどこい／＼といふさかな
藥種やに(?)錢をにぎつてわすれて居
後添の內儀いちことしいちり合ひ
へぼ瓜のやうにからげる一人扶持
おしかけへ少し手拔のざんを出し
こいつめがわざをいたすと針醫云ひ
だらうとはしつかりとせぬ言葉の義
よい様を書いて來たかと座頭の坊
昨ばんはなどと互に舌を出し
かゝり人さじきを聞きに二度やられ
切腹をしたかんばんは固本丹
丑寅にあたつて家のめんをとり
御飛脚も久しいものと座頭云ひ
しなの宿けだもの店のやうに寐せ
大つゞみのどへとげでもたつたやう
兵法がたけてきよろつか／＼し
下やしき先殿様の御氣に入り
御ひいきのすまふは勝つて風を引き
今死ねば嫁がうかぶとくすりとり
がんぶつな御子だはちつと不出來也
辨當に入歯の殘る土俵ぎは
草分の大家火鉢にかじりつき
ふんどしへ大小をさすゆりかへし

勘定はかんぢやうといふ他人宿
たつた今入るあたまだと自身番
内談と見えて火鉢へかほをくべ
猿轡人面疔へはめのこし
手紙には狸臺には鯉をのせ
あしたでもすつてくれろと角行(かく)をなり
風なみがわるいとかくす火ふき竹
おつゞきがあるかといつてわるく云ひ
かゝり人はやりやまひの使者にたち
生れても抱きやァしないと姑ばゞ
供かへりまづうつちやつて來たといふ
なんぢらは何をわらふといん居の屁
ねぶたがる子を出づかひにしておこし
しかられた針妙つういついと扱(こ)き
からかさに思ひがけないませさかな
居酒をば不仕(つかまつらず)とむごくかき
分散に狆をば醫者に押つ付る
呉服見世何やらいふと持つて來る
伯父が來てとかく他人の飯といふ
江戸みやげ車長持などへ張り

浪人は長いものから喰ひはじめ
盗人の糞を見てゐるたちのまゝ
本性をたがへず扇子二本さし
ある事さなどと盃二つ出し
雨やどり來さうなものと見得を云ひ
もく禮に手を打つたのは久しぶり
日なしかし豆大師などかぞへて居
やぶ醫者は淺黄鴨などつれてくる
時計とはぜんたい合はぬ乳母が腹
扱いきやくいたしたなどと王をにげ
ぢゆうくうな事ばかりいふ宿下り
入相に大工かんなの三をさげ
かゝり人俵屋しごく合藥
化けて出てたまるものかと里の母
たもとから出ると草履も金に成り
小侍第一口がさやばしり
いきが切れますとのこぎり貸してやり
おもの師は雪をさすのは持ちやせぬ
ふきぶりのやうによませるちらしがき
口へ出るやうだと藥種屋を歸る

青鴨をつれたで醫者の安くなり
布袋竹こゝを握れとうまれつき
早起も朝ねもならぬかゝり人
こうばいがのろいと家根屋子をしかり
能筆で小遣帳の見ともなき
松板を越えた今年のしきせもの
ごんざうでからくりほどはあるく也
女客物申などと笑ひこみ
たばこまで細末をのむかゝり人
劍戟をふつて藥をうり付る
くどいても質やの手代貞女也
本草の通り代脈しやべる也
作病を入れると四百五病なり
おやといふ二字と無筆の親はいひ
しめろやとすき切れの有る聲を出し
本玉のまなこでにらむ嫁のかほ
御じぶんはどうだとたつた一度聞き
年よりがよると咄に砂がふり
鉢巻は先あかさたなはまやうり
ひよつこはみなふは〱の鬪をこへ

親のすね今をさかりとかじる也
つけのぼせたばこの虫をとりにやり
二代目は人のものだと左官いひ
下直とやいはん舂屋へさしみなり
ぜいたくをいひ／＼廻はす銀ぎせる
通りぬけ無用で通り抜けがしれ
いかとやうにもと五匁わたすなり
すりばちと隣合せの安玄關
此鯛は七ツ時分とおして見る
かたすみへ朝痲の旦那はきのこし
斷りの手紙でえりをぐつと拭き
すつぽんの名は飛込んだ時につけ
おもくろくなりは成つたと飛車を行
庭造り拂子の先へ植直し
密談は客へ火箸を一本やり
よつぽどのきげんさぼてん買つてくる
ごく冥利盡きて座頭に押へられ
四疊半蓼酢をまはし／＼のみ
天國（あまくに）だぬくなと奴おきかへる
ふり袖を四人（よつたり）つれるはやり醫者

後架から扱なんざんと痔持出る
千年のうは汁を吸ふ一家中
はるまねをいたしましたと手引云ひ
姑女の發句小姑ワキをつけ
代脈はけつくちんぷんかんを云
火をいぢり消して異見にひまをやり
五々廿五きれとしなの笑はれる
上下で朝つぱらからきこしめし
酒樽の腎虚おつたて尻でゐる
棚釣つてわざとあたまをぶつてみる
ほり出しの鍔を夜食の膳へ置き
倒者二百ですつか／＼ひだち
鰯煮た鍋よと傘を横へさし
小侍とびらの乳にぶらさがり
手ぬぐひをぬらしてはひる詰將棊
廟の戸へたづねましたと書いて張り
國家老江戸へかぶりをふりに出る

安永中

鵜のつらは凡慮の外の所へ出し
本のがのやうに代脈ひざをたて

御扇子をちと拜見とよめぬ也
膳たてをするが椀やのまけしたく
江戸いんきよとはまつたくのつけやきば
のつぱしらかすも主方のひとつ也
おらが大家は小人と儒者はいひ
炭をつげやいと異見のさえかへり
賣色を一わり入れて札が落ち
二尺ほどある侍をひとりつれ
ひがいすな机にかゝる縫箔屋
きんにようは御世話と子分禮にくる
鳩尾までおしな三度が三度つめ
どいつらも締心の有る藥取り
かるわざを出るとそり橋ふところ手
えてものにいい日だのうとぶらりくる
つかないよなどと番頭とりあはず
母かたのおぢは一わりこはくなし
此ごろの日よりくせさとかされ也
大坂や痲言を書いてやねへおげ
ひやめしの時借をするひとり者
夜着を着てゐてむてつぱち斗り云ひ

あみがさでさつぱつの音をふきあるき
分散の見世に小野郎まで本多
あつぱれな手で賣居ェと書いて張り
大學ををしへ切らずにこして行き
明き店の左右鍛冶屋に粉な屋なり
じだらくな形で虚無僧武をはげみ
まゝ母は銀のきせるの證據人
つらの皮あついで雨にぬれぬなり
容態書に猫などをじやらし候
はるばかりだとは紺屋の六段目
御物遠御用立候かさとかき
人がらへ傘一本かしなくし
くせのある酒で鯨の太刀をはき
仕立屋はいや〳〵をして縫つてゐる
首ばかりゆゝしく見える本升屋
目はないが耳はそろへてもつてゐる
媒介(なかうど)はやれ幕をかせ琴をかせ
越の傘かりて耻辱をすゝぐ也
ぶつまねはにぎりこぶしへいきをかけ
丸合羽おらんだの名はフルトキル

まつすぐな高砂うばがしなん也
ふきぬきで通るが前の地主也
物中にさあ事だわと料理人
爪に火は心よい日が二日あり
飯時は雛祭だと下女は云ひ
髪結のひまはおうくれ送れなり
かなづちをかぎ〳〵屋根屋つまみぐひ
御立身なまかべへ馬のりかける
じつていな息子しるかけめしを喰ひ
いそがしいものはゐねぶるあたま也
やぶ醫者はうきめをみせて世を渡り
村のものしをえりぬいて門に寐せ
しゆろ箒白もも引で一本きめ
痳病のうしろにきつと下座をきり
辻番の棒持つて出たぶんの事
でんがくをしかつた旦那おつことし
燭臺のけぬきが無いと下女は云ひ
うつぽぽがしたさ妹にむこをとり
すがきをでんぶに弾いてわたを打ち
町内に人は無いかとぶたれぞん

からかさを持つて先(せん)のはかはり也
いふ事をきかぬ生酔木から落ち
中直りおはぐろつぼへ拾ひこみ
仕送りが付いて鞠場へ臼を置き
瓜坊を三疋つれて角兵衛獅子

天明中

どう〳〵におんぶして行く奥家老
なんのおこはだか使にそつと聞き
しは、いやつなんぞといふと時分がら
あす(さ?)はとうからおひんなり乳母こまり
なにとも中かねぬから借りにくる
觀音様ものむのかといなかもの
するが町と有るのがわたくしが傘
漆屋は外ののゝ字はしらぬなり
もりあてた醫者は程なくいたみ入り
水仙を一手(ひとて)いくらと直をつける
何となくにくいすがたを姑もち
へんといふ迯道醫者は明けて置き
思ひ出してはシテツレのさし出口
しほふきやおたふくをして髭を剃り

百兩で一生あかんべいをされ
富士の夢下女すり鉢をぶつこはし
御かくごはよしかと笑ふ剃りならひ
紋屋賣の聲のよいのを女房呼び
通りもの圖ぬけのだるま二朱で買ひ
二分かりて早速かへし二兩ふみ
かゝり人どつどと笑ひしかられる
妾か兄尻馬にのる事は妙
傘をさそなら春日野はきつい事
寐そびれた夜は藏をたて家をたて

拾遺

物かしら足り三寸の舌に出來
はしの歩がすむと双方一つぶくし
二分出たは紙屑買の親の代
袖口を二つ鳴らして嫁をよび
返事かく筆の軸にて王を逃げ
かゝり人寐言にいふが本の事
口ぢかい化ものでまづ一つ消し
歌一首有つて啀がけつまづき
のびをする手に腰元はついとたち

三圍りをため小便の揚げ場にし
按摩とりいびきが出ると手ぬきをし
聟のくせ妹が先きへ見つけ出し
改元の日はかた言を店へふれ
御かへりに雪おろしほど長つぼね
口上の句讀手ぬぐひかたをかへ
黑木賣り負けぬあたまを重くふり
かゝり人むかしをいふとはりこまれ
出ぎらひといふ姉さまはとた／＼し
本ぶくのもとの如くにしはくなり
御物師は吹がら一つ氣がちがひ
きも入もはしたぐらゐは外とに置き
車留きびしい筋をふたつ引き
手のすぢを見ると一すぢけちをつけ
てうちんを消せといひ／＼飛車をなり
ねんねこの腰は左右へすこしふり
三聲目のたのんませうは草履取り
外科の供とかく委細を聞きたがり
羽二重はよわいつよいの沙汰でなし
師匠さま親るゐ書の伯父になり

親かたの系圖を開けば樽ひろひ
一通り座頭に啀すゞりぶた
ばかされたやうに日雇の二本さし
その氣味といふが師匠の逃げどころ
尺八は衣裳のいゝがいつちへた
ねがはくば嫁の死水とる氣なり
藏前でよんどころなくそりをうち
脇目からしつきやくまけな和中散
師匠さま一うねづつにねめ廻し
まづ盤の足をねぢこむ下手將棊
僧正の氣に入るおやぢせき碁なり
子をあいす内は本氣の沙汰でなし
よいはよいがとは女のそねみなり
しんこんにてつして聟は出る氣なり
藥種屋のやつと聞とる山歸來
こもそうは貰らはいでもの姿なり
すつぱぬきみんな逃げたでもつたもの
ちつぽけなやぶで大きなすゝを取り
料理人運氣もすこしかんがへる
竹馬と下女わけのあるていたらく

あて事もないと産所へおひこまれ
人様の居るのに御用氣がつかず
持参金嫁なけなしの鼻にかけ
持さん金いとやんごとのあるの也
姑ばゞ分散してもまだのこり
姑ばゞおらかうつそりどのと云
豊後ぶし一流乞食かたり出し
つがもないどうこ高利を出して買ひ
石のふた息子の代にはねのける
見世までも顔出して行く里の母
紫屋一とかたならぬうそをつき
自身番ちやうじがしらはあつけもの
なぜくぼく見たと天秤ぎはへより
嫁の時から手こさいにいけぬやつ
小便をかうしてよいと里の母
よくしめて寐ろといひ〳〵盗に出
じやうつかひなてうな事で來たと言
姑ばゞ田舎の産を定規にし
とばしるは我もわれだと火がまはり
片意地な下女どこまでも屁をちんじ

さゝやきははしらへ疵を付けて行き
癪持のくせに大根を赤くそめ
數珠ぶくろよめのけいはく初め也
云ひふせる氣で蠟燭のしんを切り
蠟燭のしんきる事も安大事
けだいなく湯へくる内儀ふとる也
かゝり人いもむしほどのはらをたて
唐人はあくびのやうな笛をふき
鼈甲屋くるつた所をついでやり
折檻をこねどりらしくさらつて出
死金がたまると親父しにこじれ
くすり箱一皮むくと江戸の色
たち入つた咄の多い御藏前
こんにやくやいそぐ仕事はあしをぬき
やはらとり遊行のますでいたがらせ
子をつれてきつと路頭に迷つて居
小一年嫁の一家のちら〳〵來
おくさまも元をたづねりや一寸戸
大名の過去は野にふし山にふし
酒のかん理に落ちたのをふるまはれ

來るとまづ異見巧者は藏へ呼び
清書をほめるとあぢにかしこまり
おちやつぴいはさみ將棊かたつしや也
馬の屁の眉間をかする小侍
なきむしの若殿附はひつそくし
男坂えこぢに道は附けぬなり
やはらとりかういたしたらどうなさる
むなぐらを岡さきにするやはらとり
おはくろが喰ひつくやうにかゞみを見
下手のまりどこぞでくゝり頭巾にし
仲人はよしんばなどとわりをいひ
傀儡師とかく奥齒にものがあり
うたゝねの謡は尻がつゞみ也
外科はまづ場所のわるいが口に付き
おちやつぴい湯番のおやぢ云ひまかし
喰ひかけてあいさつの時分にもち
まないたは烟草の時にけづらせる
ぞんの外隱居の臍に垢ばかり
こも僧の親はきゆうせん筋と見え
乳母ばかり禮奉公に直がさがり

雪隱で手間どる親仁一つ手すき
かち將棊いかに〳〵とならして居
丈くらべまづ一番が大たはけ
剃身賣ぎやうさんにして一つまけ
糸卷のむかうに亭主をどつてゐ
居眠を木地にして居る座頭の坊
嫁のかほ見い〳〵薪を一本引き
ぢきにくる筈で辻番あやしてゐ
向後はいたしませぬを乳母がいふ
小間物屋錠口番に二番まけ
中のぼりまいばん蕎麥の施主がつき
手ならひ子蜂の如くに路次から出
晝の譯茶からをあけに出るを待ち
しはん坊土鍋のふたにおてらの名
雨の夜はをりふしひよぐるやぐら番
奈良へ行く人にくれ〴〵石の事
泥棒め茶に行くつらの唐物屋
牛方のめしは車にぶら〳〵し
新大家後生大事に繩をもち
小便にいとまをねがふ手習子

御きんとうなどと内儀ははかつて見
迷子札女房のちゑでかなにかき
義太三味はのり地の所でうなる也
つるねぶと伏勢ほどに打つて出る
やとり木をうゑかへてやるかゝり人
當座帳棒をしよはせて暇をやり
ひやめしのみいらを灸の時に出し
藏宿へつゝ一つぱいの手紙つけ
小侍殿を屛風にしてあるき
しめろやア浄るりでなし歌でなし
生むすこはうしろへたんと皺をよせ
おはぐろはしく〳〵かぶる内につけ
鵜のまねをするごぜはした金も貸し
雲助の無いが御庭のふそく也
仕送りは不風雅斗りあんじ出し
麹町芝のやしきへ丸で賣れ
あぶりこへ顏をならべる外長屋
水汲のねんごろぶりは茶をしかけ
さいづちで湯屋の男はうけこたへ
樽ひろひ三ばい漬の匂ひがし

身を投げてからは女も男の名
姑ばゞ鎌倉さして追ふ氣也
隱居家をねめ〳〵歸る里の母
跡をとる手代へちまな男なり
眞間へ行く人は女にひりつかず
呉服屋はたより少い下駄をはき
入王は前九年ほど手間がとれ
母の恩ふかみのしれる志度の浦
黑木賣かね合を見て小便し
米つきは舌をぬくのがしまひなり
せんたうへ乳母はつるべと手桶もち
やゝあつて出る取次は女也
喰つぶすやつにかぎつて齒をみがき
御出入ねがつて唐のきふじに出
おつぺしよるやうに馬上の禮を受け
中直りおふくろさまを下にとり
ふろしきをとけばかぼちやと伯母の文
添乳していふ献立はふしがつき
口ごたへしをるといふが主のまけ
みそツつたれ袴で茶屋の亭主が出

おんじやくをなんでも小僧くふ氣也
久しいの何のかのとて茶斗出し
おくさまは二の段でわる御一生
ひやめしをまじなふやうに茶をかける
習はぬ子つひに兵糧ぜめにあひ
虎の鳴聲を聞かれて儒者こまり
姑ばゞこんどの世にはやりてなり
見えをするやつが質屋の一旦那
姑女は嫁の時分の意趣がへし
辻番にいかけたえりも一人り見え
姑ばゞ甲州月に二斤のみ
もつとねてござれに嫁はきえたがり
姑女のとん死のしらせうそのやう
大名になるとくれぬが一所也
小兒科は虎の脉など取つて見る
皇帝は恭立のやうな御すがた
すばらしいせきも大家の道具也
葬禮に足袋をすてぬは得手かつ手
抱守のわりなき無心餠一つ

ねがひけり枕をうりて五十年
くしやみすりや糞をくらへも道具也
算盤へしたむ小原のせはしなさ
重ばこへおいしい聲がよりたかり
木の股を出た顔をする與家老
おつぼねはとびげたのある鐵漿をつけ
沙汰なしといふ虫も病む長つぼね
眞中に本店からの内裏雛
眞中にあんよはお下手ぶら下り
眞中に橋をかけたも一トむかし
眞中に船頭の有る紙の舟
明六ツはあたまの上を鳴つて行き
かくれみの下心のわるひたから也
倹約でざく〳〵汁に聞があり
唐人を初ものにするたのもしさ
おつぼねは日のくれさうな後帶
在所をば七年あとに死んでおき
〆て遣るおゐどを一つとんとほめ
よびやうにつかへていちこ呼はぐり
あいさつにむだな笑のある女

女房のゑんか一むら引率し
本朝のへな〳〵物をさづけられ
木のさいをふり出しさうな御庭あり
口上を下女は尻からゆすり出し
ごんぼ尻こゝろばかりのへびをする
朋輩が醫者の娘で事にせず
六尺はこん〳〵ちきの所作があり
入れ智恵の紙子は嫁の里から出
番頭も屁をゆるされし一器量
ためて置片袖足らぬ年となり
おちやつぴい鼻の穴から煙を出し
紋所も二重瞼は女めき
庖丁がやぼでなますの片男浪
すひ付けてまじりけのないたてたばこ
三度めは親仁を質におくところ
ぬのきせて無い用人はよはく見え
きようより好といふ字が師匠さま
かゝり人七十五日いきのびず
よつぴいてひやうとはなさぬかがしかな
ふかい事ゑくぼをうめる家やしき

お宿かといへばきのふの手を合せ
親分の腕に無銘はなかりけり
頭巾には着るほどかかる福祿壽
門番にすこしぢごくの沙汰もあり
友達を母は歩などであひしらひ
重ばこへそつと饂飩の袖だゝみ
丸尺店長いもらしひ梁ばかり
呉服屋は縫上げの有るへんじをし
すてがねは左りの方へにぎりつめ
小娘のきさごばじきの一もとで
御家督を日かげの花のおとしだね
呉服屋の手代も客の見立もの
によつき／＼永代橋の冬木立
船頭はまた井戸ほりをあぶながり
とりあへず捨子の親を鬼にする
丸薬のひざをころげるその早さ
綿入は呑んで酒着る男あり
手足にて風呂へ入水のぬかぶくろ
こがらしに松前中がしやちこばり
三年酒下戸のくるしむ口あたり

中打やひれで大工の識をたて
たゝく戸の手は前かたににぎりつめ
さんごじゆはふとんを敷いて見世にゐる
錦織り龍一疋に日のくれて
腹たつて出る傘はひらきすぎ
ひやうし木へひまな下座見の髭がはへ
にくい中しんるゐ書の時を期し
重ばこにとり巻かれたる四方が見世
やくそくのちがつたやうなはねつるべ
せとものの布袋は肩で小便し
雨だれの路次は猪首に通りぬき
關とりを産んだ腰にもものあたり
色あげにちら／＼殘るおぼろ月
かねめぢやと古かね買になぐさまれ
たもとから口ばしを出すはらひもの
ながいので品玉をやるはかりいも
夢さめてそこらあたりをさがして見
伊豆倉の鼠木綿は象になり
人に物只やるにさへ下手があり
はながみに唇といふきいたやつ

拂もの只とるやうで一と思案
うたゝねに夫思ひをすそへかけ
根つぎしてよんどころなく聯をかけ
ものさしでたらぬ／＼とたゝいてゐ
針たては千秋樂に腹をなで
昨晩の日待の禮にくる草履
ねんごろに在所の狀はのりかため
客のあるたび／＼しかる九人前
子を持つてやう／＼親のばかがしれ
こしねらで目ばかり光る姑ばゞ
だきもりへ乳母はおならを云ひおくり
月代を剃るとりきんで耳をふき
こしもとは時計元直にしかねて居
御めかけはなんぞといふと祈禱にし
先地主よんどころなく大屋にし
里の母くんねぶつたらしけこむ氣
めし焚が死んで手療治やめになり
おれがいふなどと一斤とりに遣り
役者ほどゑどつて久喜の玄關にゐ
長つぼね廻りに乳をのませて見

餘の儀ではないとはいやなかゝり也
乳母同士たいけつになる柿ひとつ
おちやつぴいあゐは紺やにこざんやす
髪結のねぢつて付けるぼんのくぼ
面ならば作とも見える姑婆々
尻聲の無ひに呉服屋氣がつかず
どろぼうに見せてもといふ柳原
髪ゆひも財布で出るとよく廻り
國の状おこしのやうに分けて遣り
一ツぺんはあはらふそくをみんな買ひ
ひきかへるかけものを見るすがた也
てんば乳母切金入の御子をだき
わかだんないかつかましくはらかへり
茶ぶくろ地判取帳のしきせなり
本家からこだはりのくる嫁をとり
あなどつて小唄をうたふいんきよ付
子そだてが無いで娘は無筆なり
本束を取つて此ごろ夜をふかし
中のぼり箸をとらせにや合點せず
紅粉猪口を一ツぱいなめた乳母が顔

半口のくせに無盡で口をきゝ
うたひではねつからほれた場がしれず
にぎ／＼のあとは家内の大わらひ
見世の衆の指南と乳母は笑止がり
姑婆々まづ孕んだが氣に喰はず
大勢にひだるがらせて調合し
里の母醫者へ鬼さと咄してゐ
子天狗の呑むほどわかす鍋いかけ
赤がへるごぜはひそかに味をしり
豆いりに慾氣はないと兩手出し
其後はおやぢ娘とまとを見ず
藝の無いのは撿挍のつかはしめ
乳母が顔あやしてごぜはわらはれる
御妾のげびは第一無病也
證文にぐちを書かぬは日なし也
ぶんぬきがよいと妾のかきまはし
よめの下女是も袈裟ほどにくまれる
まげぶしのひよめきにある鏡硏
辻番へけばえのわるひめみえが來
羽二重を着るが紺屋の不調法

糸びんの旦那はものが云ひやすい
金んぴらの夢を見てゐるまくらがや
二代目はざつくばらんにつかひすて
女房の料理はみんなはすに切り
けんげうは玄關で切られはぐつたの
しかられた手引片足ふみこませ
姑ばゞ乾金などを一分もち
かいどりで五十まけろと柳原
嫁どのやなどと化猫聲で云ひ
人間の鼠とらずはかゞみとぎ
がた／＼と來りや裏からと見世で云ひ
去るためし有りと女房も匕かげん
犬の糞段々あとへいひおくり
青いもち喰ひ／＼ゆびを二本をり
大坂はにしめの味のかはる所
土場太夫とたんにまけた男なり
客よきのうへに一本いなびかり
近日に御供一寸のがれ也
むくろんげ惣大將は十三四
江戸喧嘩此はツつけで先を取り

俄醫者三丁目にて見たをとこ
時のかね三ツは人のせきばらひ
けんげうになつて久しいはらがたち
馬士のあし二百目ほどに引ツつゝみ
仕事師はやぶ蚊のやうな聲を出し
女房は手心で行く藏のうち
一寸のひまから五尺盗出し
石うるし夫婦げんくわの見世を出し
久しぶりたがひに道でそりかへり
乳もらひの袖につつぱるかつをぶし
門々で谷の清水にふしをつけ
片うでを棒にして行く一手桶
くらやみで男まさりのうけこたへ
甘味には忘れ苦味には手を合せ
琴になり下駄に成るのも桐の運
植木賣せんじつまつて唐がらし
かなつかひ醫者と石屋の門違ひ
瓢簞に胡麻とは下戸の仕業也
月代に白雲といふ邪魔が有り
うろたえてうゐらう餅をびんへ付け

ならづけにひよつとおの字を付る下女
時借のうその手爾葉も根もかれて
鼈甲のふより買人のふがきれぬ
よくどしい所でまうける小間物屋
客の氣になつても見たり庭つくり
かせぎ出すくらは夜の目も鼠かべ
上(うは)ぬりのうへを又塗るかべぞしよう
仕送りに醫者も及ばぬみやくを見せ
捨る髪有れば都のかもじうり
學問とはしごは飛んでのぼられず
來るほどのものにあだ名のなづけおや
夏中も臍に怪我なくまづくらし
日本の下馬に異國のともまはり
はまぐりはあくびのうちに家を立て
うそ〳〵と來て物申のいらひどさ
笑うたもあとからこけるすべり道
のぼつても峠をしらぬ慾の道
げんぷくの仕着せ松坂越えた也
人とめに肴屋とつてかへす也
女房にまけるものかと大たはけ

春三夏六にむすめは雛を出し
反古染の男きやりのおんどなり
かゝり人唐様書いてしかられる
かゝり人御座きりといふ腹をたて
ためになる番頭いとこちがひ也
なにもかも大福帳とかゝれたり
茶がまにはよしやれと狸云ひおくり
爪に灯をともしおほせし江戸生れ
臼の後家茶人の庭へえんにつき
引ものにして人の氣をそめ直し
はらんでは狸もつゞみそつと打ち
耳に入る義より目に入る利のなみだ
さんずゐにひよみのとりが中に立
あねは彈き弟は論語卷之一
七ころびぎりと見えたるかゝり人
やむ事をえず唇にそりをうち
なかんづくなどときせるで與二郎兵衞
下借腹(げしやくはら)と云へばどうかきたなそう
うはばみの大がいをいふ醬油樽
貴札とはむかしは板で御意得たか

平皿にはんぺいといふあぶれもの
かゝり人たつみ下りに腹をたて
こよみにもかたな脇さしあとや先
石工のおぼえた歌は辭世斗
挽茶にもはないきといふ青あらし
よくうれる足駄外法の上り坂
家彫の馬は草より手間を喰ひ
團子からぬひ習はせる宇津の宮
十種香は惣身のちゑをはなへ出し
置ぬしの損とはむごい鼠喰ひ

番頭はにせ首などは喰はぬ也
御いんきよへ人身御供の美しさ
おらが山姥とはよほどうんての名
とばしるの知行へかゝる美しさ
新造は句讀のきれぬはなし也
あげ足を取らう〳〵と姑ばゞ
着せはきだからすまないとおざう云
方圓は錢ほどひかる寒の紅
酒樽もすでにさいごのいきづかひ
買つて來た喧嘩も今は賣る氣也

かんにんの戻りは棒が邪魔になり
附髪を黑ちりめんがつれて行き
こしかたを思ふなみだは耳へ入り
ぬかごからかばやき迄のうき苦勞
をさな子のころんでなかぬほめ言葉
工夫してきのふへもどる紺やかた

（第二十終）

誹風柳樽拾遺 全

川傍柳

川そひ柳初編序

十圍にして樹抄糸のごとくなる物は柳。百尺にして枝葉地を拂ふ物も柳。隨代めつた虛空と種れば、陶潛わづうか四五本うゆ。章臺の柳はやたらに折れて叱られる。雪中の柳はをれさうにしてよしにする。多き柳の其中に、平生柳の賞すべきは、夕淺草新堀のほとり、川そひ柳の事なるべし。その柳のことの葉や纔に俚語をもてすといへども、敢て一ぱいを述るにたれり。故自然になびきて世の風俗をさとし、もつぱら靡きて古今の人情に通ず。名は下里巴人の易に居て實は陽春白雪より難し。嗚呼川傍柳なるかな。

安永九庚子年中門　朱樂菅江序

印
印

川傍柳　初篇

子正月五日開

惣花に生きとしいける物が出る　眠狐
大坂といひたい所にきらず桶　盛久
万歳を嫁おゝせつなく〵　桝水
恥しい涼み小べりへ水がつき　秋紅
羽子のこをかさぬ子を嫁たゝくまね　一甫
人相のよしあしを知る法一分　葉十
喰ひつみへちよいと猪牙へ乗り　眠狐
抱いた子をなげさうにしてよしにする　米子
娑婆中にこはい物なき三年目　眠狐
まだ骨を一本も買はぬ馬鹿な形　同
ぬれにぞ濡れて蒼朮やく〵　五英
江の島へ四十二羽程とんで行く　亀遊
いゝ智恵を出して太皷にかツ消され　秋紅
桐の大木をねかして嫁をせめ　葉十
文は届けようが金はうさんだよ　同
俄雨元手をやたらかしてやり　米子
よく御手が鳴るぞと仕舞ふ役者附　東里
大困り嫁出女にとつかまり　閑々
ゆうべの病氣屠蘇散で快氣也　眠狐
いゝ年でお痛く〵とお金いひ　門柳

正月十五日開

口惜しさ蛭子が一つうれ殘り　葉十
永の留守女房酒屋は直ばらひ　眠狐
船迄が血氣さかんに見える也　葉十
あかるい方は出して置く炬燵の手　亀遊
強ひたのを下戸内へ來て腹を立て　青峨
芭蕉の片腕から大雨がふる　泉河
おいらんえおいらんえゝと象の後　秋紅
井戸の中から鼠と猫とを上げ　五楽
しぼり上げく〵紫に染め　眠狐
物申をいふ筈硯水がなし　一甫
生娘はかう〵〵がありく〵くひ　鼠弓
むねを合せて坂本ときらゝ坂　米子
翌來いと目見えを歸す花の留守　眠狐
女郎の手から水のもる面白さ　一甫
金魚は一口喰つて吐いて見る　五鳥
足音の度に湯殿で嫁しやがみ　燕子
女房に髪を結はせて眞間へ行き　閑々
婆々ア迄紐をゆるめる三會目　泉河
しんく〵と積るにもめるもらひ引　泉河
圍れへこも僧上る大さわぎ　青峨
父は柳母はさくらだとおもひ　三朝
どの道に歸る思案の橋でなし　一甫
百三十里も花嫁は行くおもひ　五連
子をかりて笑ふ時分に淺黄來る　五鳥
廿四五妾憎まれ盛りなり　葉十
餅花を下戸取りあつめ持つて來る　八中
わざとぶたれに羽子のこの邪魔をする　一甫
寄らば切らんず勢で藥うり　五楽
鶯のくそで小ざむは錢儲け　三朝
一生の片目お金にきん句なり　亀遊
もち喰のむざとは名月をしよはず　泉河
朝顔を親仁見て居るにはこまり　五英
けつの毛を四五本殘しやめるなり　牛瀧

正月廿五日開

愛敬が高尾しぜんとわるく成り　桝水
三分しよしめて鎌倉の戻り駕　桝水
婆アを入れて一兩に息子買ひ　閑々
ゆうべも公の御噂とどら仲間　一甫
突出しが見立てられると人がちり　閑々
袖口をならしてちつと手をかしな　梅枝
湯屋敷はるかの沖に琴の音　八中
内に寢る人とは素見みえぬなり　五樂
切つて放せばあやまたず堀へつけ　牛瀧
戰場へよもぎ菖蒲を賣つて來る　閑々
よくころぶ聲だと留守居譽めるなり　一甫
石塔へとかまつて啼く衣蝿　同
詑言で息子は廣い座敷なり　秋紅
女の世話になつてると卜者いひ　藥十
桐の木の上に雁々十三羽　三朝
一文の凧は竿だけ上つてる　龜遊
うつぎ杯切つて火繩をまき付ける　眠狐
むごいこと島田金谷の間で死に　泉河
一生の遠道をして緣を切り　眠狐
寺へ來て鈴を鳴らして母は泣き　龜遊

牛町で評判をした女なり　泉河
とんだ事生醉坊主持にされ　五鳥
仲條でつみだといつてかつけられ　秋紅
作兵衛様は御宿かと大晦日　一甫
景物がいゝのでへんな點を取り　米子
おもへば相模重寶な女なり　八中
えいとう〳〵といふともう曇り　鼠弓
長屋中寄つていたづら者へすゑ　米子
三日月を二つこそげるをしい事　鼠弓

二月五日開

松をとる中を一客送られる　閑々
二度めのは匁に掛けると十五〆匁　泉河
愛敬の出る迄灸をするゑなり　五鳥
惣花の隣やつたら手をたゝき　五扇
によい〳〵と竿の立つてるきついしけ　閑々
いかに春だつてとせつく草紙賣　門柳
數の子をなくなる迄は選つて喰ひ　東里
波のうつ音斗りきく本望さ　閑々
晴天の棧敷女ッきれはなし　一甫
ちつと居ないと撿校はあの人や　眠狐

はやり醫者すでに無刀で出る所　一甫
乘り合でひそ〳〵嫁は評をされ　眠狐
大きな口で一つ國を嫁はいひ　同
のぼるべからずへ駕かきもたれてる　眠狐
柿の皮むいて十六日に出る　龜遊
鬢を出す内へつついをつかみ出し　五鶴
九月蚊屋女房への字へてんを打ち　鯉丈
玄關へ通して置いて鎖ぬき　一甫
座敷が無いで里扶持が滯り　門柳
かるたの助言是からさ〳〵　一甫
詑言の歸りおつけをあつためや　燕子
ぬしにあやかりなんすなと子を愛し　鯉丈
乳母が來て鼠のふんをほき出させ　藥十
けふは御屋舖さと若くなつて出る　閑々
家名が不吉で緣きり喰はぬ也　三朝
十斗り大きな袖でかくす也　眠狐
はんま千鳥の友呼ぶはづぶに儀太　鼠弓
實名はしらず五に懇意也　五鶴
白酒に醉ひ洛外へおん出され　五雲
早追ひだのに南無さんと嫁かくれ　眠狐

たつた今留つた川へ仲右衛門　泉河
口で切るのがめんどしく鎌で切り　龜遊
よし原に居るから里見山といひ　鼠弓
股引はそこら切さと內儀いひ　龜遊
廿人木にすると書く茶の字也　五樂
團子がないとかつ命に及ぶ所　五盛

二月十五日開

色直しだにだつこせう／＼　鼠弓
江の島の留主に妾の高笑ひ　閑々
栢をかみわつては琴の邪魔をする　鼠弓
からくりを賣つて淋しい花火賣　閑々
佛迄指さしをする初鰹　門柳
地幅をまたいで追人はこきぬかれ　泉河
遣ひ習ふ子の骨を折る瓜一つ　善橋
母の跡追つてはしごを二三段　秋紅
たいくつをすると泣出す公事相手　桝水
はやるやつひへかたまつてあるく也　葉十
ひたひにも紫筋を出しどなり　閑々
呉服店猫のひたひへ竹がはえ　眠狐
丸綿をきせぬと顔がやき切れる　鼠弓
御用の笠をかり水をくんで來る　五鳥
雪を燈火としてよむ急な文　閑々
貧な子はしかられながら糸目持ち　鼠弓
はした金めらを追出し門を打ち　五樂
けふも二分ふんだくつたと情のなさ　一甫
これで居て小面のにくいかねの禮　眠狐
楊貴妃は小原で一つのんだやう　一甫
十三本とう／＼榎嫁は越し　同
えいやつと廿貳の春緣がきれ　眠狐
文が長くて小便がしたく成り　泉河
万八へ糸を通して後家は持ち　眠狐
横ツぱらたゝいてつき屋飯を喰ひ　同
したく金ゑくぼの外は無疵也　同
渡し守鏡をもつて追つかける　秋紅
わつちらが年が寄らぬと鐵漿の禮　眠狐
だまつてる蟬をまゝつ子持つて居る　一甫
こんだからかしてやるなと鍋を捨て　三朝
二尺長いで女房とみえぬ也　葉十
恥しさあかのまんまにとゝ添へて　泉河
はやり醫者一人殺すと二人ふえ　同
色男△△くれろにはこまる也　梅枝

二月廿五日開

鼎舞を見さいなと初手はさわぎ　一甫
江戸ならば人死にのある田植也　桝水
灸をあつがつて鬮取笑はれる　一甫
能く見える堂八方へ目を配り　菅江
短命なくせに長びく病也　鼠弓
首尾の松萬民これを賞翫す　眠狐
附子を入れますと斷るけちな醫者　一甫
あたりを急度見廻して文を出し　同
ものいみで守護する鬼のきれツぱし　眠狐
十八ぐらゐの鬼では後家たらず　泉河
施餓鬼から歸つて母は猪牙をとめ　秋紅
遣手の顔も三度來りや柔和也　眠狐
まゝ母の留守に梓の聲がする　鼠弓
から汁を喰ひ／＼下駄の咄也　五鳥
手前でくふのだと瓜を安く付け　一甫
座頭のむねをたちわると金が出る　同
咽笛をねらひさうなへ一分遣り　鼠弓
すばしりの魚でん棧敷への馳走　桝水

不器用なやつが柏の葉へくるみ　葉十
薬をうつ音で生酔目を覺し　龜遊
鋲打の供明店を二軒かり　魚交
人立の中からしやぼんふいととび　鼠弓
わるい持遊（もちあそび）赤繪を子に預け　五鳥
樽底になつたと下戸は腕を入れ　三朝
ふり袖を四ツ目殺しにして仕舞ひ　眠狐
大日如來の尻を水くみつめり　泉河
どつ〳〵と笑つた後へ猿が來る　一甫
かんざしでかくのがそだと仲人いひ　同
金つかふすべも入聟知つてゐる　眠狐
あさつきはあいそづかしの鱠也　三朝
とめた荷をみれば葛籠にてんとくじ　眠狐

三月五日開

近星を見に出てこなを挽きおくれ　桝水
蛤にひらめの交（まじ）る大あたり　魚交
椎の木をこだて矢を射るやうに漕ぎ　五雀
太夫とは菰をかぶらぬ禮に附け　水砥
ございよと呼んでとらせる右の爪　桝水
太郎が軒も笠木ほどみゆる也　菅江

七けんの外は不沙汰なその當座　五雲
上野からこぼれたやうな法華寺　秋紅
深窓に十有九年やしなはれ　眠狐
いそぐ旅六文ぬいて待つて居る　眠狐
古歌を百よんで仕舞ふと疊也　秋紅
こも僧に出ぬ日は乳をもらふ也　鼠弓
抱留めたので十分一をもらひ　泉河
今に降るぞえと槍賣直（ね）切られる　閑々
蠅の生捕捨所にこまつてる　鯉丈
四位と太夫の間を行く面白さ　一甫
岡場所はこれがいやだとうろたへる　同
奇な事を言うては鳴らす梓弓　同
おいてくんなさいどこのか海晏寺　水砥
そらを二度見たが息子の落度也　梅枝
二度三度あしをはこんでやつともて　閑々
ぱつち〳〵と屋根舟の靜也　魚交
じんじやうにおはぎはいゝが下女ちつ　五扇
鎌倉へよこ付けにして三分也　五連
太師から歸りに安い雛をかひ　門柳
せんべいを下げてつゞらの先（さき）へ立ち　眠狐

そこ豆が十三出來て縁がきれ　泉河
傾城四五ふくで息子快氣する　秋紅
どつこいといひ〳〵芭蕉二三丁　一甫
四ツ目屋はつけぬと淺黄じやうを張り　五雀

三月十五日開

跡へ來てつばなの錢を下戸拂ひ　葉十
槍賣のしきりに通る時あかり　一甫
よしきりの巣を見た切りに和尚する　秋紅
大門の前も日月おそひ也　八中
度々ふくら雀にしたでつるされる　一甫
艸深い所に二人いゝ娘　五樂
はぜつ子が居たと岡釣のぞかれる　鼠弓
嫁庭で見上げ見おろす松の内　五連
いゝ旦那百軒程の割に付き　鼠弓
金色（こんじき）の文字すわつたを局着る　眠狐
範頼はぐつと上座にだまつてる　水苔
かん略な法事位牌を二つ出し　秋紅
さばかりの男羽織にうづめられ　眠狐
こはいものおみくじも第十九番　五樂
馬には乗つてみろ赤のまんま也　龜遊

下向をすると海になるいゝ間合　秋紅
後家に成つても養育金日に三分　魚交
おく病さ舟の廻りで斗拾ひ　鼠弓
柳から氣力なうして聟歸り　眠狐
笠あてをかぶつて橋に馬鹿な形　同
嫁のあら大きくみえる目鏡也　同
禿來てなんとかいふと立つて行き　同
ほしか船母おさらばよ〳〵　鼠弓
たつた三年遁世を嫁はする　一甫
古塚のたゝりと母へト者いひ　同
新しい金を二八に崩す也　燕子
袂をば先へ廻してよめの禮　水砥
三文判をいくらだとたはけもの　五丸
こゝは禪宗と四五人追手也　桝水
金時を産みさうなのへ一分やり　一甫
兩方へ抱いてのませるはづかしさ　五鳥
あないちに野郎の交るみともなさ　鼠弓
品川はたいこ五丁は百をつけ　門柳
金ツ喰ひ柚ざね顔の娘なり　五丸
蓮の葉ともろとも男かぶりふり　魚交

悠長な夜ばひ枕を持つて行き　葉十

三月廿五日開

駕籠代は三文酒手一分やり　梅枝
初り〳〵とみよしへ松を出し　鼠弓
間のぬけたかさご二人で賣つて來る　眠狐
花よりは團子に女房ゆだんせず　長笑
そら色を召すと觸出す花の宵　三朝
垣根が隣のでかぼちやを二つやり　秋紅
二階ばり迄あぶながる病也　龜遊
鬼すだれはづして琴のはらひ物　五扇
俄雨みりんをのみに寄るやつさ　長笑
太皷持くやみに來たがはじめ也　秋紅
待ちわびる耳へ蛙の聲斗り　眠狐
餘の町とちがひ雪迄金にする　五扇
やね舟のへさきへ立つてのびをする　葉十
桃の木を上田へ包む子煩惱　門柳
娘の顔を見つめると立つて行く　秋紅
三味線箱からとゝだのあんもだの　一甫
玉だれの内へ茶めしをくつて入り　鼠弓
死んでくりやるなとほまちを母は出し　秋紅

口をすぼめてひらく物やつと借り　門柳
鐵炮をひよつと崩してこまつてる　鯉丈
夜櫻を見捨てて土手で團子也　一甫
かまくらに居るで万年草は浮き　鼠弓
つツ突きあつめたで子に二本さゝせ　魚交
日をぐつと見定め夜着やふとん解き　五鳥
甲冑のねばついて來る永いしけ　鼠弓
よらば斬らんず勢に下戸こまり　一甫
鹽からを喰ふとつて朔日にのみ　泉河
まゝつ子は一日はなをたらしてる　梅枝
あいさびの上へ鎧をなげかける　一甫
買色に取るとあはれでない柳　同
よほどの婚禮渡しに二三ばい　鼠弓
恥しさどれが兄やら弟やら　一甫
高野六十扨つゞいて藥研堀　泉河
琴ではわれる三味線で生える也　同

四月五日開

男の姿で人目の關をこし　葉十
どらの詫大工のするがしまひ也　長笑
郭公逃がした顔で縁へ出る　魚交

禿衆はおまけ銭はもどり〳〵　魚交
うしにも馬にもふまれず女郎買　泉河
すゐりやうのわるさにきびに土團子　鼠弓
因果な娘兵法が上手也　鼠弓
にが〳〵敷も御咄をかッけされ　桝水
手習をしろとぬかすとでつちいひ　門柳
矢一筋來て土筆取は逃げ　一甫
猫のまん中に焼いてる鹽まぐろ　秋紅
大伽藍面白がつて咳をする　眠狐
江戸中の家數を知る呉服店　同
恥をかゝせぬのが後家の越度也　門柳
たつきもしらぬ山中に切れた凧　鼠弓
魚物をばたちものにして緣を切り　梅枝
秋葉からあるいて歸るわるい風　秋紅
はらんだる物を井戸堀抱き上る　同
乳母は喰ひかけてあゝ〳〵大水だ　菅江
虎の威を古郷へかりるふといやつ　五連
箱の中にて灸斗りすゑて居る　鼠弓
三度の神正直帶をとくなり　水砥
根生わるにしやべらせて嫁御辭宜　同
毛氈を側からめくるつらい事　一甫
靈顯あらた品川の尻がわれ　龜遊
後の月五寸角からさえわたり　鼠弓
きやらへ穴六つ明けても歯がたゝず　眠狐
げん金にけいはくを云ふ呉服店　水砥
大將と見えやうがなと暑い事　一甫
薄田は月見も仕舞ひかねぬ所　眠狐
氣の毒さ刀を持つて追つかける　一甫
お見立〳〵と醤油樽を下り　魚交
にが笑しい〳〵芋を譽めて喰ひ　梅枝
茶飯たきながら押入片付ける　門柳
水引で結はへたやうに息子〆め　魚交
醫者が見放すと天狗をよばる也　五鳥
あいみん納受でやつと二人に成り　一甫
髭切りで剃つた痕嫁薄みどり　鼠弓

四月十五日開

一人逃げ二人逃げ生醉と歌　眠狐
三味線を屛風の外へほからかし　秋紅
思按して娘かんざし返す也　眠狐
あつたら若いものぺんぺこを習ひ　門柳
恥しく芝居を一度娘みる　眠狐
麹町井戸の廻りに座頭居る　梅斧
四郎兵衛が男と思ふ運のよさ　一甫
もてたやつ四つ手の外へ度々あまり　菅江
あまりりんしよくで柏の木から落ち　桝水
稲光根生わるがはやしたて　魚交
爪斗りしまつて跡を嫁賴み　長笑
桐油などかけて天國賣つて來る　門柳
八ツ過に出る月迄もの日也　龜遊
ぜんさい〳〵我れは是大根　鼠弓
石切りに見知られる程美しさ　同
鯉をくひ〳〵ともかくも〳〵　一甫
すゐりやうをして若後家をくどく也　秋紅
金持つて出たので娘しれかねる　同
人化してまんぢゆうとなる面白さ　一甫
腕がぬけさうさと返す乳澤山　葉十
駒下駄を野暮な草履の中へぬぎ　一甫
御茶瓶を道々こぼすおくればせ　鼠弓
女房氣で庫裡を出歩くにはこまり　五連
新造をひや水が來て上げる也　眠狐

せんべいを下駄と草履の中で焼き　門柳
さはつたらころびさうだか人を見る　龜遊
ころぶ氣はなしかと蓑で誘ふ也　五鳥
羽根でさすられてばつかり娘ゐる　鼠弓
鯛龜の眼つッつく松を植ゑ　魚交
弓せんのたづさへ供(そなへ)しよつて來る　門柳
人家をうごかして嫁はあるくなり　五雷
にぎやかさ供部屋に蛇が五六疋　五扇
つき合へば四手(よつで)無口な男なり　眠狐
春日野が親父はゑびすやのかゝへ　泉洒
こん夜やらずばあたけ出しさうな婆(ばゞ)　菅江
願ほどきやら帷子に袖頭巾　眠狐
らんかんに人をならせるいゝ涼　五鳥
小づらもにくいが大づらもにくい也　水砥
角田川よき泊り家の候なり　秋紅
あれが椎の木屋敷だと下座見いひ　眠狐
一人ものとん死をしたで譽められる　五丸
小便を遣つてもらつて女郎抱き　一甫
今こそいさめ笈摺を嫁はぬひ　鼠弓

四月廿五日開

伊勢物語へ艾をのせて干し　鼠弓
そつちへいつてなと女房金を出し　同
雨性な娘袖からふつて出る　菅江
かなしき哉や紅裏(べにうら)をとりかへる　鼠弓
逃げこんだかむろ後から太皷也　秋紅
小袖着て居るのがほんの涼也　同
やれ御物遠と御新造膝へとり　鯉丈
ぼろを見て女房ぞつとするといひ　一甫
我國の梅より椎はしやれたもの　鼠弓
顏にあざ二つ出來るをしい事　一甫
關取のこはぐ\かけるすゞみ臺　長笑
眞鍮の花瓶へ斗り松を立て　眠狐
なみよりは十ケ年餘の娘也　水砥
損の仕ついで鞠場から女郎買　一甫
娘ともいはれかゝさんともいはれ　長笑
口へ袖あてて晝寢へ棒を引き　眠狐
口は四郎奥には九郎で賑かさ　水砥
是が一德と四(よ)ッ人(なり)出來心　鼠弓
一盥(ひとしほ)すると實體に息子成り　秋紅
ふけば飛ぶものではざつと笑ふなり　魚交

茶飯が過ぎて三重がくるしさう　門柳
げびたもの二三文ある硯箱　鼠弓
其日から禿の榊名をかへる　同
大當りうしろにも目が五六百　五鳥
七所(なゝところ)ばいをふくんで禮に行き　菅江
菅笠で日高取つたが仕方なし　眠狐
三會目まづめあかしへ一分やり　一甫
けちながき扇を持つてついてくる　同
腹さんざ喰つて山椒の方がいゝ　同
向うらで聞かしやれと木藥屋　桝水
罪なことめぞの無いのととりかへる　一甫
押入で扇で湯などはりこぼし　門柳
我腕をわが手で持つてのびをする　一甫
かはいげもなく笑ふのはせゝら也　龜遊
せつけうの寒聲畠中へ出る　同
やれじやれるなよと秤にかけて居る　眠狐
骨が入るぞへと傘かしてやり　一甫

五月五日開

いびられに行くが女の盛(さかり)也　鼠弓
をしい事月にたとへる物をとり　一甫

おせきこつちへ出て居やと苦労さう　泉河
破れ傘五六本あるずるい内　五鳥
労咳があるで淋しい雛祭　一甫
から皮を半いさかひで亭主買ひ　鼠弓
おれが面白くないよと守歸り　五丸
放れ馬嫁は輿屋へかけ上り　眠狐
臼や杵けいさんにおく御金印　門柳
朝かへり婦の長舌を聞いて居る　一甫
尼寺をおしへ雲助百もらひ　鼠弓
仲條姫のやうなのがおろしにくる　同
恥しさするめの小口切でのみ　眠狐
紙で手をふいて押繪を誉める也　一甫
仁和寺の玄関にこ〳〵外科が出る　眠狐
帯代を書いた手で來る離縁状　鼠弓
毒薬へんじ明かに顔を見せ　五鳥
呑むかして潮は内儀きつい事　菅江
ひんな兄弟を藪入見て咄し　鼠弓
鶏を御用一はしくつて見る　五扇
島中の女が新さん〳〵　五雷
剃刀をあてると寝ててかぶりふる　菅江

人参の鉛したゝか後家はもち　鼠弓
卵塔の脇で釣つてしかられる　一甫
氣の多さ醫者に成つてと閨やき　水砥
せんごりに十九人とは氣にかゝり　五連
瞽女の色口跡のよい男なり　門柳
鯉をおろして蒼朮をたいて居る　梅斧
岡釣を寺の男が叱つてる　五扇
さてこそと遣手のさわぐから寝床　眠狐
光陰矢の如し嫁もう縁が切れ　鼠弓
ふんどしのはづしちんが金三両　泉河
花の留守下女がぬき捨這ひ歩行き　同
くそ漬のかんざしせなあ二朱に賣り　眠狐

五月十五日開

急な客玉子を二つぶちこはし　一甫
濡れた白むくを衣桁へ八つ干し　鼠弓
ごほん〳〵で灸がすゑにくい也　一甫
縫ひ出來た小袖の上に四方面　鼠弓
いはほそびえたへ海鬼灯を付け　同
仁王経よんでる所へ伯母が來る　同
これでも元はいゝ傘とかしてやり　一甫

たとへ忘れても女は汲まぬ川　門柳
道中記なんにするのか嫁は買ひ　梅枝
餓鬼が飯くふと吉野はさびれ也　五扇
中途ゥにして四書抔を賣拂ひ　五鳥
鶏の啼く迄馬鹿な歌かるた　眠狐
廿五にしては若いと獵師いひ　同
人見しりせず書見世へたれて來る　菅江
御曹子名香をはき通ふなり　門柳
糠をふりかけさせ水をあびてくる　鼠弓
艾ついでに灸ぎやうに艸双紙　三朝
姉さんと坊が居るのと鏡みせ　一甫
氣がるな花嫁二度めと評が付き　五丸
こいつふるとみたらば手を附けべからず　泉河
根性のわるいかゝアと濡れて來る　秋紅
縫箔屋本田へちよいとさして立ち　一甫
傘斗り返しなさいと女房いひ　長笑
角兵衛獅子伯父らしいのが笛を吹き　門柳
外聞のわるさ乳付けが二人來る　一甫
きらずを付けて伽羅の下駄みがいてる　梅斧
嫁の髪けふの内には出來る也　五英

十九丁の縄を渡るおもしろさ　五雷
おふさまン早いとおひでみせを出し　鼠弓
御家老も出しておやりとふといやつ　五雷
饅斗先へくふなと母しかり　五扇
七廻忌三廻忌にて垣をゆひ　鼠弓
むらさき裾濃ぬぎ捨てて女郎買　一甫
石垣へくつ付きこゞめ餅をくひ　泉河
白粉を掬して下女はつけて居る　一甫
四手の稽古天王あたり迄かけ　魚交

五月廿五日開

五扇
かアきイつウばアた成る程杜若　眠狐
駒下駄を川へ落してはやされる　長笑
庚申をあくる日聞いて嫁こまり　秋紅（船志改）
あつさうにともる向うにならんでる　万馳
生憎な事片々は三會目　五鳥
ごふ腹さ宵ッぱりするやつを買ひ　亀遊
目の用心をして禿耳へ口　眠狐
たはいなく寝るも生酔ぶきび也　五鳥
一日はゆゝしくみえる土用干　一甫

榎茸はゑたに異名もう付けず　鼠弓
ほろ蚊屋を馬鹿々々しいと酔がさめ　秋紅
白髭は年寄をまく社なり　水砥
姿見へ脊女つくねんとうつる也　眠狐
ろくろ斗りをおんらしくかして遣り　梅斧
笑はれる顔落ちたかゑ／＼　一甫
袖口を買つてる隣酒を出し　同
今の事おきめなんしと袖でぶち　同
酒にする所か馬に蹴倒され　眠狐
ひぢ坪が鳴るとふしみせみんな引け　鼠弓
朝の雪叔父伯父が寄つてゐる　一甫
豆腐屋の身代下駄の直ほどなし　眠狐
榎を飛越すと娘に化ける　泉河
あく迄ぬれて蓬菖蒲やしやうぶ　一甫
芳兵衛といひさうなのを後家は買ひ　鼠弓
はたを綴りかけて野掛へ火をはさみ　五扇
薄雲はみちのくと名をかへたがり　一甫
猪牙のあやかし山神のたゝり也　五扇
無いとみえ亭主帳つけ斗りする　万馳
ばあさまを四五間かつぐ放馬　五連

行さんよ平さんようと二人泣き　鼠弓
ふがひなさ薄を分けて息子逃げ　桝水
切手の入らぬ田楽はまづい也　菅江
いちッこを御用笑つてしかられる　眠狐
百旦那もくせい折つて叱られる　三朝
引ッときを着ておがくずをよびに出る　門柳
桑の門出ると御醫者か一人出來　亀遊
放馬さかさに抱いて乳母はにげ　眠狐

六月五日開

扶桑を向いて念ずると蜘が出る　桝水
二條通を眞直によつて逃げ　泉河
人にいやるなよと禿に乳をのませ　鼠弓
なんだ玉をつらぬき小袖をもらひ　一甫
後の紅葉もじや／＼ばると車切り　同
一笑わらつて顔の袖をとり　亀遊
錢ありの市立ち大門へ這入り　一甫
琴を直して嫁を引つぱつて來る　藥十
持つて來た嫁いやな事いやといふ　一甫
よくすればするほどげびる三會目　藥十
三味線をさうでは無いと爪で弾き　秋紅

小鍋だてにゑ切らぬ内みんな喰ひ　華十
いやらしさ妾二箸やしなはれ　長笑
叶つても譯のいはれぬ願ほどき　龜遊
うろたへた蟬は鎧へ來てとまり　鼠弓
生涯を半分白歯にて踊り　菅江
馬のあッちらを通つてむごく濡れ　米子
いちどきに百宛笑ふいゝ女　一甫
雨宿り五人で蕎麥を一つくひ　梅枝
松の内尻の丸いを二本さし　鼠弓
よわさうな形で敵を討ちに出る　長笑
中に化物がゐますといかけいひ　眠狐
いゝやうにいへといひ〳〵猪牙へ乗り　桝水
口をしくない虚無僧の面白さ　一甫
おばァさまといはれ若後家はちぢみ　梅斧
渡世とて常の下駄をばはかぬ也　鼠弓
口中をすゞやかにして箱根越す　門柳
寺の歸りに尺八を買ひに寄り　万馳
えんまの廰をかけぬけて尼に成り　五扇
柿の木の上であやまる馬鹿な形　一甫
髮結は鯉をくはないやうな髮　眠狐

とんだ御亭主と子の膳先へすゑ　眠狐
行くべし〳〵と沓をぬき放し　菅江
持ちもつて來てとゆすぶる松の枝　龍巴
戻りには淋しく歩く車引　龜遊
くどかれるやうに花嫁脈を見せ　一甫
善光寺邊かと明徳利を遣り　五英
しんどやと休む茶代は五六文　門柳
辯をふるつて白練を卷上る　眠狐
本田あたまで今あきる四書をよみ　秋紅
吸付けて傾城肩の方へ出し　眠狐
餅屋の向うのが榎の僧正　門柳
猪首に着なし上下と咄してる　一甫
才藏は居催促までわらはせる　水砥
棒組やしつかりだなと三會目　万馳
仕合せさ黑い狐へいとま乞ひ　一甫
のんだ茶の殘りをはふるげびたやつ　万馳
山號を書いたのれんを下戸くゞり　門柳
ねだられて母いが栗を竿でぶち　五扇
二三人おろして加賀へ歸る也　鼠弓
三年の内に歯もはげ眉もはえ　眠狐

焙烙をふせ上下で付けて居る　米子
産婦へは隱して一人里へ遣り　一甫
おびんづる嫁どうしたか腹を撫で　龜遊
嫁埶にかけては爪が長い也　長笑
番手桶精好平へ詫をする　秋紅
おせきさんまあだまりなと雨隣　龜遊
流し目で娘弓矢をうちつがひ　鼠弓
夕べも公の御噂と本田いひ　青峨
手を握る所へぎんなん一つ落ち　鼠弓
感應肝にめいじ百兩とる也　同
傾城の鈴なりへ行くきつい事　一甫
觀音樣の脈を見てくたびれる　同
きり〳〵配れ地主へは鮭がつく　五連
子守側からいたゞきな〳〵　一甫
金時を峨々たる道で遊ばせる　鼠弓
おんなじ事をいひ止むとたはいなし　米子
渡りましたと百旦那追出され　眠狐
遣手が表徳金笑とつける　門柳
婆アの長咄し一分くれろ也　一甫
内の雪隱へ隅田から聟歸り　泉河

尻がちつとまがつたで二百兩　泉河
國自慢下女六齋に市が立ち　五扇
しりが痒いといゝ事を陰間聞き　水砥
好きな後家ころんでも只おきる也　龜遊
間男で割に合はぬは八枚なり　五扇
どこの質屋だいひなよと下女せたげ　眠狐
あした敵をうちますと御十念　門柳
生醉はぶち殺されたやうに寢る　眠狐
稗畑二三段買ふ子煩惱　門柳
こんぱくが屋根に居るのにもうくどき　一甫
知つたふり下女おひらきをやたらいひ　眠狐
庚申に御仕事をするあら世帶　船汀

六月十五日開

關屋の卷を讀みかけて灸をする　鼠弓
灸よりは男が娘おそなはり　門柳
白壁を見るともめ出す旅歸り　五連
夕立最中たのんましよ〳〵　五鳥
薄雲は又候下駄のもえッくひ　門柳
寄合へ四八斗りの娘來る　一甫
ためきつて嫁鎌倉へいつつける　長笑

野がけ道嫁なんじふな事が出來　一甫
五條あたりへ豆いりや犬ッころ　鼠弓
二つ三つしづくをふつて菖蒲見せ　眠狐
ほゝばつて女房をじらす雛の菓子　燕子
そろ〳〵引(びき)に生醉と涼臺　泉河
間紙(あひがみ)のしこたまあまるやり放し　門柳
勅答がすむと太鼓を廻す也　桝水
晝三の一(ひと)足よぢるにはたづみ　鼠弓
四五文が花火暮るるを待ちかねる　龜遊
郭公時々羽根を出して飛び　眠狐
薺(なづな)うりあるいて來たが元手(もとで)也　同
やれそれといふ内に破風(はふ)を蹴破り　一甫
嫁夜着を洗つた晩はたはいなし　門柳
一筋に見たいでひんからな棧敷　菅江
八朔に帷子を着る運のよさ　鼠弓
華陽夫人だよと嫁を引いて出る　同
豆いりをする内はいゝきげん也　五鳥
まだもてさうな物と思ふ四會目　五英
賣るふしの味をしらぬがよく賣れる　眠狐
日本の上り口から聟はづし　船汀

ほんにおれを入れなんだと鹿州もの　一甫
日歸りの富士は六郷そこらなり　水砥
夜(よ)ッ一夜(ひとい)鼠の箱をくらはせる　一甫
壁土をあがるなよウと鰻賣　三朝
下女せなに味噌をかへなと馳走ぶり　門柳
貴樣は醉はぬおれが醉うたとだまし　鼠弓
觀音へ日參をして手を握り　梅枝
土用干小袖で乳を飲んでゐる　鼠弓
聟の表德を歸柳と付ける也　一甫
觀音は信じ大日をば殺し　眠狐
どこの野郎と云へば母きこえます　同
親ぢいに因果地藏の前であひ　水砥
つき出しとみえて田中へ植込まれ　秋紅
突ツぱつたすだれの内でのんでゐる　眠狐
そこら見て袂の桃を御用喰ひ　五扇
龜澤町の湯で炭部屋の噂　同
顚まぐろ取卷いてゐるかゝアたち　同
舟やどの女房がしりを二寸ぬひ　龜遊
豆腐庖丁で削つてくべてみる　水砥
元結あげかけて五右衛門をはらみ　鼠弓

六月廿五日開

耳へおつ付け損料屋が來やした　五雀
ほゝづきを出すにも禿鍵が入る　燕子
不審紙だらけな四書の拂ひ物　一甫
衣屋へ一分四匁拂ふなり　眠狐
女郎買だと云はぬから母案じ　菅江
呼んでくる内勝負附杯をみる　万馳
乳もらひに顔のよごれた男來る　眠狐
床柱から盃をついとなげ　万馳
突出しはやく病神の娘なり　門柳
いごきなさるとおゐどを縫ひやすによ　一甫
暑がりのくせにいらざる鎧着る　眠狐
べら坊な紅葉利根な川向う　梅斧
泣いたはよその子だのうと嫁だまし　一甫
鏡とぎの娘だと嵯峨でそしり　鼠弓
衣類の入れものは女郎持つてゐる　眠狐
どうれいと川の向うへいひに出る　鼠弓
瞽女の文ばつちらがつて讀んで遣り　同
大坊へ舌を出し〳〵くやみ也　泉河
車かゞりにかけ出すを家老留め　門柳

金屏風立てにやうられぬ肴也　泉河
店請は銚子二人は江戸言葉　桝水
しかの宵ッぱり狸はらを立て　泉河
紅葉見てそして〳〵と女房いひ　一甫
たもとからやき飯を出す百桟敷　同
わるい所へ御國からようお出で　船汀
縁先へ引きずつて出る耳のあか　眠狐
田植から一月置いて奴なり　五雀
初がねの下女は茶臺を置いて逃げ　一甫
錦の直垂を着さうに後家作り　鼠弓
あたりみてちよツくら盗む雛の菓子　一甫
口遠な船を蟲賣二三艘　鼠弓
下女が荷をだあ〳〵〳〵とせなァ付け　門柳
うたひ初め寺でおも湯をのんで來る　鼠弓
雨宿りあたまの上へ餌をはこび　五鳥
爰でのんだらとはけちな花見也　眠狐
五連

七月五日開

狐付き出來て隣は妻を去り　鼠弓
大門を薙髪で出るの恥しさ　一甫

こしの鍵下げて女房は芋をゆで　長笑
親父のあくたい死人迄賣りをる　一甫
よみ人しらず憎まれる門へ張り　桝水
奥の院階子でのぼる正燈寺　五扇
道中にやりも一本連れて出る　八中
上下の鳴る方へさす恥しさ　眠狐
色白な筈年に二度日に當り　同
うたがるた姑かくして火にくべる　長笑
女房に聞けがし謀書よんでいる　三朝
何もない雛を見てゐる暑いこと　長笑
きん〳〵たる初會云ふことにこまり　八中
むごくおし付けて十文上げませう　一甫
巡りあふ迄丸ぐげへ一本さし　眠狐
米や酒やッぺし駈ける俄雨　岸口
行水をぼちやり〳〵と嫁遣ひ　五鳥
月界長者二度ながら惣花　五雲
茶屋を倒したで御殿山へ廻る　五英
かたき討小金の宿で形（なり）をかへ　船汀
子のあたまちよつとたゝいてしらん顔　一甫
三會目帶のとかれぬ氣の毒さ　同

目を眠つてる內腹掛をとめます　一甫
ほとけの世話をやき過ぎてかんづかれ　万馳
坊さんこれは憚りと椀を出し　一甫
十二日立つと金喰ひ娘なり　眠狐
間男をとかまへたあす質を請け　一甫
大あばた亭主のつらをはりに來る　眠狐
木の鯉は本所木の鯛日本橋　眠狐
いらぬこと下女は百度目を配り　眠狐
しやば中が寢しづまつたにうせぬ也　五雲
やす／＼と二人になる恥しさ　五扇
石が聲色馳走の一つ也　鼠弓
正燈寺中尋ねうと土手でいひ　秋紅
燒筆を二本火鉢へつけて出し　鼠弓
常磐の國へ嫁逃るむづかしさ　梅斧
むごい事衣の中で袖をふり　五扇
師走の小をよろこんで叱られる　一甫
鯨の油で煮た牛房下女は喰ひ　五扇
容顔を崩して解毒嫁はのみ　一甫
豆をいり／＼ぶつかけさ／＼　同

七月十五日開

いそがしい醫者危きに近づかず　桝水
喧摘の次に淺井が首を出し　鼠弓
賑かさ家に勝ちたる屛風立て　眠狐
金屛風立てると猿や象通り　泉河
よし仲の如來を丸屋持つてゐる　万馳
りんしよくな棧敷くッつき合つてゐる　一甫
夜の明くを待つてちんころ捨てる也　眠狐
權藏と云ふ中間（ちゆうげん）が作り出し　泉河
うまいこと草履を横にはいて來る　五扇
五つかくして打つて來る面白さ　一長
溷濁で客をもてなす賑かさ　五連
一せん二錢三せんと嫁かぞへ　一甫
目を覺し下女は木櫛の炭（灰？）をふき　眠狐
あの大黒をみせやれとふといやつ　一甫
よしか放すと古近江をわたす也　鼠弓
鎌倉の田樂むかし羽根がはえ　鼠弓
下駄をうッちやつて芭蕉は歸る也　同
子の曰くといつては咳をせき　桝水
不都合な金主を女房こしらへる　五連
象のあとから珍しく賣つて來る　泉河
お屋敷へ大ぶきげんで後歸り　鼠弓
はえぬきの階子の側で獨イ／＼　眠狐
縮きる高尾紫式部也　鼠弓
幕切つてから二三寸嫁はしより　秋紅
きさな事御經のくずがたまる也　水砥
そらに川出來ると吉野さびれ也　一甫
をしいことした跡へ嫁藍をぬり　一甫
素見の喰殘しに四手（よつて）はすべり　眠狐
勾當の內汁とめし／＼　葉十
義理はりもしらず土藏を又立てる　桝水
百持つて當らぬ方へ這入る也　一甫
大一座下戶えり取つて仕舞ふ也　眠狐
奉公に四五日上がる不屈さ　長笑
御室の兒はくうふくな紅葉狩　水砥
書いてゐる側に野郎の根付也　龜遊
恥しさ花嫁眉間尺に成り　五扇
ぬいて上げますと西瓜を二つぶち　一甫
椎の木と云つて賣色にならうか　一甫
植ゑたを見ようと金杉門へ出る　眠狐
娘をねらつたがお袋が出來る　泉河

在家より一月(ひとつき)早く月を見る　五雲
むつかしさ息子茜里(いうり)にとらはれる　梅斧
山門へあがる禿は男なり　桝水
御はうびの向うに泣ッきつら二人(ふたり)　鼠弓
座敷牢二百八十兩のどら　岸口
散る迄は樽まだ明かぬ〳〵　燕子
木のまたに位牌のみえる十三日　鼠弓
淺疵を眉間へうける大さわぎ　一甫
ぼんぼりの後から碁盤持つて出る　同
下女がせなかますをおろし腰をかけ　水砥
下駄かたし持つて日待の禮ながら　鼠弓
數珠さら〳〵とおしもんで後家だまし　同
ころびがだいやで三味線は引きり　一甫
つら〳〵おもんみるに芳町は損　同
黒い牡丹餅を獄屋へ母は出し　鼠弓
なぜつめる〳〵〳〵と笹ばたき　同
蛤をくふと榎が遠くなる　同
下女鼻のぐつとすつ込むほどふとり　秋紅

七月廿五日開

大名のしづかに通る俄雨　眠狐

江の島へ行くが撞木の突きはじめ　一甫
御土産を持ちよいやうに沽券(こけん)也　水砥
駕舁が擧むれば雪もげびる也　青口
中抜をめし豆腐屋へいとま乞ひ　鼠弓
文使ひ枝豆賣とすり違ひ　一甫
花の雨民家へ琴をかつぎ込み　五雀
元服を女はちびり〳〵する　一甫
月落烏啼いて女房はらを立て　梅斧
家内出て月夜に花を拾ふ也　五烏
裝束を取ると水呑二人(ふたり)出來　梅斧
澁紙の袋羅綾の脇に置き　鼠弓
女郎買の背頂だに母あの子　一甫
靈場に不相應なる川一つ　眠狐
わッきやッと云ふ内本田ぽたり落ち　同
中氣をば隣へはこぶ十三日　鼠弓
眼病の持つたほど縫ふいそがしさ　梅斧
大名がこはいものかと高尾いひ　一甫
よねまんぢゆ初手一口(ひとくち)はあんがなし　鼠弓
判取は居る所迄返事する　眠狐
日本から京の短冊竹がみえ　鼠弓

うッついやつにかねもとが七所　鯉丈
梅の繼穂とはふてらッこい妾　鼠弓
呉服店紺屋を見る前で叱り　一甫
お袋の肩など息子もむやつさ　同
十六夜は宜しくもない使者だらけ　鼠弓
辨當は出來たに尻を撫でてゐる　一長
出來ぬやつそこにやお鉢が御座りやす　眠狐
どういひくるめるかあまつ子をさづけ　葉十
三會目ちつとも座敷明けぬ也　一甫
牛鐘の下で四手にひらり乘　眠狐
風呂敷をぬしの出る迄使ふ也　狙遊
一分のうけ取お休みなされませ　五連
戀のおも荷を菓子屋の男かつぎ　菅江
杖もつて追つかけられる初の老　秋紅
泊り客女房ひそ〳〵蚊屋の事　一甫
名代をもう歸らうの番に付け　菅江
奇特なる餞別笠と柄杓也　鼠弓
俗おどし法印光る袈裟を掛け　五扇
場所がらで取押人(とりさへにん)も五百石　葉十
金屏のうしろ酒だの醬油だの　一甫

銚子言葉で臨終をすゝめてる　同
こゝへも半丁下駄をちつと見せな　門柳
二三日歯のぬけた子は恥しい　鼠弓
うら口を〆切る時分榊來る　一甫
なに親をだましませうと息子いひ　同
嫁爪をえんやらやつととがらかし　同
かけ取の前で錢箱ぶちまける　同
わるずゐで是にお出しなさりまし　桝水
氣にかけて母四つ灸といひ直し　一甫
當にするなとは息子ひきよう也　同
石に勢あつてかたまる赤穂鹽　亀遊
どろ／＼の手をとり孔子よまひ事　岸口
ひもじからうと振袖の儘で抱き　万馳
後にも目の小千ある大あたり　五扇
せめてうみ落す迄嫁置きたがり　一甫
これでも物に成らうかとぼろを出し　同
祇女が出た後で障子を張りかへる　鼠弓
よそでよくはたらいて居る不精者　桝水
おつと手をふいて見なよと三つ物屋　五扇
丸漬を黄色なきれでふいてゐる　眠狐

たつ波の中へ豆腐をもつて出し　五扇
三年が間有髪の尼になり　一甫
捨藥一ぷく置いて香婆歸り　同
手を出して足をいたゞくは豆腐屋　八中
きれでした文を宿下くれる也　水砥
譬諭品の聲豆藏の中でする　鼠弓
無鹽君呼んで身上立直し　一甫
調法な癪を傾城持つてゐる　同
けしからぬ麁葉うまさうにせなァ呑み　菅江
氣をとり直し／＼嫁はらみ　靑口
比丘尼でも買ふやうに出す百旦那　一甫
宿おもひ下女かはり味噌などもらひ　門柳
いゝ涼四五人屋根でかけツくら　鼠弓
いゝすゞみあたまの上をあるかせる　眠狐
間男の母これきけよ／＼　菅江
松根を皆かんざしであらす也　鼠弓
金や角座敷へまいて仲違ひ　五扇
小附めし下戸ぺろり喰ひ／＼　眠狐
藥禮に出た金斗り十九両　岸口
大釜は後の家へよくうれる　泉河

しん切は取つて貸しやれと姑いひ　泉河
ふじ山をみるが花見の大當り　長笑
越中がはづれ隣の園を出し　門柳
人にいひなさるなとは後の祭也　五連
虱くひ／＼わらんぢを作つてる　一甫
枕縮を美服の影でこそとみる　同
店屋の傘で小網町迄かへり　菅江

牛込御納戸町
安永九庚子年仲秋吉辰　催主　蓬莱

川傍柳初篇　をはり

川傍柳第二編序

夫れやまと歌は、出雲八雲のことの葉を始として、三十文字あまり一文字とはきまつたれど、それをはしをつて十七文字、げに舌だみあるあづまぶりや。言葉はなまるかしらねども、人の心を御種人參ちつとも鉛はござらぬと、雅とし雅な人々達いづれか前句を、いはざりける。その得意の句に至つては、風調羅漢寺の螺より高く、餘情は麴坊の親井戸より深し。其井戸側の川傍柳去年梓にちりばめしより、いま一本を植添へてつきぬ事哉〳〵と、前句は流々しあげし一册、既に續川そひ柳といふ。

天明元辛丑のとし五月　朱樂菅江題 印 印

川傍柳　第二篇

丑正月五日開

人よせを素袍で二つ三つならし　五楽
おつと火の所は爰と琴の弟子　秋紅
愛想づかし針箱を持つて立ち　同
杉箸を音無川へ流すなり　鼠弓
ほめぬ事萬歳を嫁始終きき　五楽
高慢なやつらを始皇とツちめる　雨譚
我身つめつてねだられぬ三蒲團　亀遊
人間でかねをたつとく呉服店　水砥
振袖で小島ケ崎のかゝア出る　鼠弓
うつくしく成つて俵をたのむ也　雨譚
長閑さはむくろじに羽根はえて飛び　連雅
みんなではいくらに薺賣こまり　眠狐
のむやつらとは下戸のいふ言葉也　亀遊
嵐の前に傾城は氣がもめる　同
やはらかな異見聞いてる初手のどら　五扇
烽火臺程に六十四本あげ　雨譚
言名付今では中がわるいやう　雀芝
下女出入内儀も里へ五六日　秋紅
まくら元わき目もふらず書いて居る　雨譚
四ツ目屋はきかぬと女房負をしみ　菅江

正月十五日開

佛在世以前は魚に羽根がはえ　五盛
雛の日はあいそづかしの鱠喰ひ　錦江
くゞりから入れようとして下戸とまり　眠狐
傾城化して客となるあぶな事　雨譚
きのふのめしを伴頭と下女と喰ひ　水砥
黒い唇で乳もらひよび返し　眠狐
禮の供爪をねだつてしかられる　錦江
水茶屋へ多辯なやつがさきへ立ち　雨譚
ぶちまけて四ツ手は常の聲に成り　亀遊
ごふ腹ささアおあたりとついと出る　眠狐
そつと掘りなよたどんだと女房いひ　五扇
俄雨合羽着たのは近所なり　秋紅
中にかゝらせ給ふのが三分也　米子
三分だけ又格別なうそをつき　眠狐
寶舟海の中から呼びに出る　梅枝
目にたゝぬかたはは小野の小町也　五扇
氣の毒でありんすと無宿を出し　雨譚
岡釣にむら重籐をたづさへる　五楽
馬に酒醉がさめると手におへず　素鳥
人の門口で書初仕舞ふ也　雀芝
大門と田圃へ追人五六人　秋紅
石菖の根で洗つては嫁をねめ　五葉
町中で櫻をあびる面白さ　五扇
深更に矢挾間から出す三の糸　亀遊
作兵衛が女房辯舌ふるつてる　船汀
鯉を喰ふ内供船でおッぱじめ　米子
船大工こんにやく島を教へてる　鼠弓
日本を越すとありんす國へ出る　船汀
牡丹畑にむつくむく呂布が見え　菅江
異口同音によし〳〵と松洞寺　雨譚
いやらしさ下女酌に出でぐうな〳〵　玉簾

正月廿五日開

樟脳を面倒しさうに四書へ入れ　五楽
おもしろかるから朝夕番に附き　玉簾
おかしさは初がねを子に泣出され　亀遊

けふ切のさくら禿に折つてやり　鼠弓
三會目婆ァに菊の花を遣り　鼠弓
女房の高慢ちつと出なさいよ　龜船
おらぶち打擲はせないよと姑　玉簾
赤松をぶつさいて屠蘇買ひに來る　泉河
廿日過こつそり祝ふしはいやつ　仙郎
どつこいといつて生姜の直を付ける　梅枝
かつぽくはいゝのに耳が損じてる　鼠弓
客で御座候でおかれぬ腹になり　五雲
こがねむしより美しい裸むし　龜遊
毛虫をはさんで琴をせつく也　五樂
妹はわッわといつて灸をする　鼠弓
下卑た意趣かぼちやのつるを根から切る　眠狐
いくらする皿だかむごい屋敷也　秋江
きつい事役所をからつぽうにする　眠狐
色直し箱王乳をのみたがり　雨譚
風の上げたる古簾づぶに儀太　鼠弓
俗物の嫁ならいやと息子云ひ　玉簾
眞鍮ふくりんの鞍にて村の嫁　雨譚
さんしよ魚野郎あたまの娘喰ひ　鼠弓

角田川向うの人は聟斗り　五扇
すりなんし若くなるよと新造いひ　玉簾
人も無いやうに三口下女を置き　眠狐
黒いはなたらし古椀買を呼び　鼠弓
大名の門へ初會はつき當り　同
中將は其後も春日野へ通ひ　雨譚
えッちらおッちら高倉通ひ也　玉簾
湯に入つて女房出勤いたすなり　菅江
もうどうも手ぬきのならぬ茶椀箱　水砥
じつとして吸はせてて見る晝間の蚊　米子
元旦の鳥が啼くのに後に來る　雨譚
紋つけも六つあるのはげびる也　船志
物申を下女羽子板でたゝく眞似　雨聲
狆が吠えると女房をなで廻し　滄水

二月五日開

銚子にて太皷のまづい事を知り　秋江
御家老の知行公家衆の口に乘り　雨譚
去られたは愛想のいゝ内儀なり　五扇
初鰹妻がたはけを御らうじろ　雀芝
雀形立てて高尾は不快なり　鼠弓

恥しさその日の芝居身にならず　玉簾
嫁大聲上げ針が出やしたよ　雀芝
千金の子はとう／＼大小さし　雨譚
せつかちの傾城買は四まい也　同
若後家の今にもしれぬ口をきき　龜船
他人にまでもいびられる嫁の琴　玉簾
二分かしてお針かんざし三本取り　秋池
十九の年に姑女が鬼を産み　船灯
あんのぢやう封を切つたら女筆也　秋紅
それからそれ迄が息子ロッ辯　玉簾
平灰を合はせ親父をだます也　雨譚
鋸の齒をたてる内嫁隣　鼠弓
金銀米錢芋には事かゝず　五樂
氣の毒な夜伽赤子の聲はなし　五扇
大ぶりな咳には女房油斷せず　梅枝
いそがしく染めたがさいごづ横柄　玉簾
高縄で袖留をする不居さ　同
三年のうちに月代すりならひ　眠狐
探幽はいやよと丸山の女郎　菅江
奴もゝ引でさやう／＼と切られ　玉簾

神明佛陀の冥感で百兩　雨譚
頑丈な遊君の出る輕井澤　同
くり引にして生醉たつた一人　同
干大根ははだなだと情を張り　五鳥
和らかな石を持つてる彌三郎　眠狐
其朝は豆腐六十二丁賣り　船汀
日を覺し下女足をかき又いびき　連雅
うしろからはる眞似をする雪の供　燕子
額下へ松を出すうち皷唄　鼠弓
わしはのみますがと姑嫁へいひ　眠狐
口說くとは無理な事ぢやと在五いひ　雨譚

二月十五日開

螢の卷は近所からおもひつき　雨譚
性わる一代記を石山でかき　同
いふもさら也三分ッつの傾城　同
仕立屋を一軒埋める三蒲團　同
後妻の夢おたふくが出てにらめ　五連
去狀へ文をいつけて亭主出し　眠狐
そのごぜえすをやめをれと親父いひ　雨譚
里歸り後からは馬に鈴がなし　門柳
天のあたふる物をお針迄取り　雨譚
みんな見放すに藪醫の賴母しさ　眠狐
此頃はちと野邊へとそゝのかし　五扇
尼達に毎朝嫁はくさからせ　眠狐
一人の娘あり持參百兩　雨譚
毛があると僧正も讒言にあひ　同
いゝ見切潰れたをきく三年目　五楽
鰒といふ字だものあてよみに鰹　菅江
いたましい後家牡丹餅の中へ產み　鼠弓
おひみては文ほどに無い女郎也　錦江
一分の證文は小菊へ書く也　五扇
紫の月代しよつて嫁あるき　玉簾
都方より出たるがはたる也　鼠弓
四手かご月下の門で一分取り　雨譚
雛祭下戸おゝせつな〳〵　錦江
ばく〳〵するのが一人と仲人いひ　水砥
三度目翌る日消息持つてくる　雨譚
越後の切通し富士の見える所　船汀
富に當つた氣でじやもッつらを持ち　水砥
ぼんのくぼゝりになるとおッかじめ　雀芝
雨の手に砥を持つて下女叱つてる　眠狐
三文と一分かゝると女房いひ　船汀
吹がらを大雲寺から消しに出る　鼠弓
雜箸を焚いては一分宛にする　龜遊
くどかれて下女やきつけをさし直し　同
鐘藤太ではをかしいで俵也　眠狐
早く御國へ歸りなと妾いひ　玉簾
もう譚はきゝんせんよとぷつりやる　五連
大持參寢小便など垂れる也　素鳥
耳たぶのいゝ唐人が蜀を取り　雨譚
本ぬりの杓子はみせの影で賣り　五扇
流行醫者おんなじたちが十九人　五雲
魚を釣るとはうそ八百の親仁　玉簾
杉の葉をさつさとくべて叱られる　眠狐

二月廿五日開

一日を大事にくらす宿下り　眠狐
まづい事それもさうさと後家おもひ　龜船
まだ文も見ずうるさがる廿日過　五連
妾が娘の寢る所と十三日　五雲
笑つて下りし禿を叱つてく　眠狐

十三日迄は丸ごしにて這入り　玉旒
信玄の納所めつかち坊主也　八中
素天窓で行平歸洛したとみえ　五樂
無筆へ文をつけ御新造へしれる　五扇
見かけより二條の后氣がふとし　五樂
熟睡をおこして渡す通ひ箱　玉旒
つき出しの噂素見の連が出來　鼠弓
美女を一ちよぼ見て仕舞ふと御手水　雨譚
くらい晩手前遣ひが通る也　水砥
かならず馬にのりやるなと姉御いひ　雨譚
殘つた六文をやから鉦に遣り　同
ぬけたとげ持つて廻つてみせる也　五雲
高慢をいつて熊坂しめられる　雨譚
花崩れ杓子果報な大一座　船汀
傘屋の娘むね姫と付く所　芦夕
四月もう駈落のあるわるい内　五樂
物の味一日しれぬ恥しさ　玉旒
たちものは男とそして魚類也　五盛
聲のやさしいが座頭の女房也　同
まんぢゆうの皮をかぶつたいゝ男　雨譚

ごそらとすると居風呂で嫁しやがむ　五連
戀しくも尋ねて來ない所へ迯げ　雛遊
資朝は植木屋で傘かりはぐり　眠狐
あした來なんしと伏見へ子を返し　鼠弓
天社日嫁をしい事／＼　五連
炬燵蒲團を間男が請けてやり　鼠弓
家中が闇いあやふし鹽まぐろ　同
雨と霜斗りが金にならぬ也　五盛
護摩の木のやうなへくだり付けて出し　船志
間男の沙汰を天狗はきゝあきる　五連
行平も松ケ岡ほど居て歸り　菅江
御亭主の脊中をあやし／＼行き　秋紅
東夷南蠻西戎は岡場所　鼠弓
ちやうはんも碁盤でするは品がよし　芦夕
さも可愛さうに姑女引合はせ　玉旒
夜ふけ人しづまり肴あらす也　菅江
前表は娘灸するゑから習ひ　五連
紺紙金泥の着物で局出る　雨譚
撫廻し五一の金をさし初め　鼠弓
普化禪師の末門に入つてさがし　泉河

此髪をどうせうといふ病上り　玉旒
杜若ぬすみ俵屋せんじてる　鼠弓
三人前を一人して息子かひ　船汀
座頭共高利を取つた甲斐もなし　眠狐
代脉へ片腹いたくみせる也　雨譚

三月五日開

きゝなれて嫁近頃はかんませず　多笑
鐵漿の時笑はぬ人と不義が出來　五樂
花がうつむくと嵐がしやべる也　水砥
おぼこ娘も祭から氣がそれる　菅江
其人の膝へのさ／＼三毛の猫　雨聲
美しい北の方を息子はよび　五連
なんの日か遣手から手で拜んでる　眠狐
いもを賣る娘二百が元手也　五扇
きたないばあさんおいらんに逢はうとさ　鼠弓
だまあつて居るから娘すゑられる　玉旒
大風は空定めなき町をふき　鼠弓
ぱつ／＼と遣ひ高氏物にする　雨譚
屠所のあゆみで仁和寺へ立歸り　攝州
三口の子を義理らしくあやす也　秋紅

退屈さきのふもけふも水の音　玉簾
網の目へ斷り出羽の郡司いひ　五雲
晴嵐に泥だらけなる放馬　雨譚
しつてるに鶺鴒櫻植ゑました　眠狐
せめられて爪ツくそ程嫁ならし　青口
嫁膝をもうかくしても〳〵　五連
さかさ事ばあ様九十だに達者　船汀
ころがして居るを四手ばうるさがり　五連
本性でつけては出來ぬ初鰹　龜遊
抱いて來て見りや盗人はかねを付け　青口
けんどん屋覗いて嫁はいゝえ也　秋紅
三ツ蒲團太皷らしいが一人附き　五扇
鏡とぎ杯は通せと富樫いひ　船志
餘の木の間違へ三十六丁　泉河
菱喰を法師の首へぶら下げる　鼠弓
手をおしのけてぬらされる恥しさ　水砥
海上禪林の前から醫者に成り　鼠弓
かゝあが三味線とゝおが持つて來る　同
賴政はいゝみせ物を射て落し　柳尾
合槌は狐狸は火をおこし　水砥

死にかはを大分つるすいゝお寺　水砥
三味線をすとしが内と船切手　秋紅
重年を出されるやつがそゝのかし　芦夕
翠帳紅閨にけろりと初會の夜　雨聲
羅綾の中へ二三本竹を植ゑ　同
もめる筈妻と女房が同居する　五葉
北山の狩人後生願ひ也　雨聲
質屋へつん向けて輪取をそなへ　鼠弓
何か出るのが女郎屋のくされ也　同
女房顔するがにくいと納所いひ　同
西行は消炭壺の影に居る　五扇
聲がするやうだと笑ふ松燈寺　玉簾
朝がへり御機嫌だよと女房いひ　同
いゝ料理ほめ〳〵舟で楊枝也　鼠弓
入道の前へ障子をもつて出る　船志
其爲わけて口上はくれろ也　雨譚
もつぱらに衆道へ通ふふとい後家　船汀
娘は持たうもの町人をやめる　鼠弓
ふしも一袋たもれとこしを掛け　雨聲
あいお客様と柄樽を持つて來る　眠狐

陽をうて居るから五陽破る所　菅江
下女が文よしなにはくみわけられず　菅江
船頭とさしで乘つてく面白さ　眠狐
武道ならそつちでせへがはきき也　五連
みたらしへ紙をなげ込む不屆さ　鼠弓
色をかへ品をかへさま〴〵な月　玉簾

三月十五日開

さあといふ時の鯛をばさでとり　雀芝
一蒸籠一人で喰つて不首尾也　龜遊
朝歸り四ツ手所をあてゝよび　鼠弓
くどきそびれてめりやすを二つ上げ　五雲
後の月息子も心づくし也　五雀
燈籠はきのふけふ又面白し　曾木
駒下駄と草履をしまひ母上り　長笑
落着は如何〳〵と隅田川　玉簾
一生を半分傾城でくらし　水砥
是もおれが子かと郭子儀はおもひ　五扇
禽獸に右幕下物を入れ上げる　雨譚
むす子の鶴は車ひく程かゝり　同
若後家は是聞けがしにカアンカン　玉簾

こいつが出ると降りやすと立騒ざ　五雲
春の日に見つくされぬは石燈籠　曾木
伯父様で候などと二本さし　玉旛
鷹も朋輩だのに恥辱をあたへ　雨譚
情のなさ下戸平皿でのめといふ　眠狐
いびり燒火を眞黑にしてしまひ　五連
天命はまゝつ子顏に五つ六つ　五扇
貞光は袴を馬につけて來る　船汀
せんたくに來るかとおもやころぶ也　龜遊
山城と武藏の間に豆腐みせ　門柳
姑のもので聟をもてなすでもめ　五連
代筆の文つれ〴〵と返事せず　水砥
すり子木へつッかけて見るとろゝ汁　龜遊
ぶち殺しさうなきせるで息子のみ　雨譚
甲子で雜兵へいとまを賜り　五盛
芋を直切る顏つく〴〵女房見る　五樂
里の母今頃はもう寢たかなり　多笑
花の雨おもしろがつて叱られる　雨譚
鼠ッ子おれにゝんなと十三日　五扇
霜天にみち百膳を喰に出る　五雀

放馬座頭に娘ぶツつかり　菅江
二十六兩は和尚に過ぎたどら　船志
百貫の娘をよんでどらがやみ　雨譚
讒言にかけてはすごい娘也　船志
まつ虫の角をたゝいて嫁をねめ　燕子
大小をさしながら又來うずによ　鼠弓
蛙がなくから土手へ來たとしれる　五雲
强い風ふぐさをあごで下女おさへ　鼠弓
藥取さん早いのと渡し守　五雲
をかしさは持參怪談本をよみ　眠狐
紙花といつたら生花に成らうか　船汀
大山の梢にむごい女衒也　鼠弓
あくびをしたのをと隱居は見立て　雨譚
千載にてんぼう百人にめくら　同
雲の出る國を蛭子はつひにみず　五連
内にばつかり遊んでるやゑ齒の子　鼠弓

三月廿五日開

氣のわるさ跡から傘をさして出る　眠狐
草履札禿のほどく急な事　秋紅
名もあらうのにばち當りめと妓王　玉旛

椎茸が嘸と屋敷を俗に譽め　雨譚
さし合ひのきは迄かすり式部書き・　同
三分が三分で買へぬとするな母　錦江
振袖の瞽女が二ア人うれ殘り　五樂
十斗り目のある母で病み出し　同
隣迄連れて來たには母こまり　同
八九里行つてきかしやれと渡し守　五連
素懐をとげんと水茶屋にこび附き　雨譚
廻狀に藝子の産んだ事も書き　菅江
たいまつでいと尋常の魚を取り　五雀
舞鶴を戸張の嫁がめつけ出し　水砥
鹽からい煮染を上る御延引　龜遊
忘れた扇明けて見て禮をいひ　玉旛
ひツかいたなといひしなに又かゝり　五雲
養老の瀧へは甘露寺を勅使　雨譚
ふり袖で中條へ來るすたりもの　五雲
扨とよの後は氣色がわるく成り　五盛
初手狐後の鳥羽には龜が附き　水砥
七たびめには矢をしよつて落給ひ　玉旛
智惠が出て女房茶椀をゆでてゐる　五雀

十両の禮金とんだ顔の嫁　葉十
大あたりうしろ目高くほめられる　門柳
つめりさへせぬと後添いゝ女　攝州
白川の水の流れは隅田川　眠狐
塗桶にするめがたちで二度目來る　五雲
婆ア出て女へ斗り楊枝賣る　眠狐
ゐのこから自今お心安く成り　五盛
下戸恩にかけ〱一つぐツとのみ　眠狐
姉からといつてる内に妹にげ　同
秘文をとなへると亭主支度する　五楽
北國方より出でたるが大ぐらひ　雨譚
忠兵衛が女房にきけば笑つてる　素鳥
陽虎ではござりませぬと陽虎いひ　船汀
それ扇それきせるよと下戸の世話　門柳
玉でなかいゝのに足をたゝつ切り　雨譚
どうよくな客が歸ると大氣也　同
先の鐵漿にて歯を染めるいゝ娘　船汀
さがりを拂ひ色代をして歸り　雨譚
朔日に店立ひどい大屋也　五雲
さむさうな内裏をせなア買つて來る　柳門

四月五日開

琴唄を只よんでみてあくび也　鼠弓
妹は琴某は馬が下手　青口
時鳥やう〱河岸に二三本　素鳥
氣の毒さそこだ〱と去荷來る　攝州
旅迎しやべツたかして不人相　三朝
十四五荷去つて簞笥が一荷くる　燕子
いたゞき過ぎやすと下戸へ茶屋返し　五楽
鯉の細作りをつゝむ工夫する　鼠弓
無念さは太夫棧敷に公事相手　素鳥
一人寝た夜を遣手にかぞへられ　雨譚
祝ふ筈越後屋ぐるみ夢に見る　門柳
評ばんの窓に白鳥の德利　泉河
ふんばりと親父は口に毒を持ち　雀芝
花火よと呼ぶと御用はどつか迯げ　眠狐
ぬき〱に疊をかへるしはいやつ　船汀
いくとつて出なと女房見ぬいたり　眠狐
かたまつた所迄車かつぐ也　秋紅
年始申入れます爰にも座頭　雨譚
疊へ書いてみせたのでもう覺り　五楽
光りかゞやく形をして無心也　五楽
つんぼうと禿を叱る奥二階　秋紅
吉原が德だと一度買つたやつ　攝州
ぐわたぴしと下女邪魔にする琴の箱　素鳥
朝がへりおざうもそば杖をうける　玉簾
丹後への勅使は武者の小路也　雨譚
井戸の向うが有常卿の内　五扇
息子の三組はとんだ高いもの　雨譚
富士と傾城で諸侯をおツ挾み　鼠弓
たてし屏風の裏形が高尾いや　玉簾
戸棚から女郎が出たで母あきれ　五楽
新造のあくびあばたへうつる也　攝州
いつ振れ舞つたとは極わるい生酔　滄水
鯛の湯漬に山椒の芽あひしらひ　雨譚
去りながら天氣次第と伊兵衛よみ　玉簾
いゝむすめをば持たうもの大晦日　鼠弓
夕立は踊子の脊を分ける也　門柳
水茶屋で一把焚切る日の永さ　眠狐
やらねえと花に嵐があたる也　五雀
にくい事壁へけぶりを吹いてゐる　連雅

細見をかへりみざるはむすこ也　蛙聲
縁切りと見たて東慶寺をさしへ　眠狐
傘を借用とはまづい暑氣見舞　秋紅
馬の小便を佐吉は初手に出し　眠狐
どろぼうは逃げたと云ふに嫁ふるへ　五扇
なに馬な物だとたはけ者はいひ　雨譚
ちよつとさわるとおてうぎに下女はのり　玉簾
島かくれ行くを御宰はあぶながり　同
さし身ふるまひ子母錢をいひ延べる　攝州
こはい顔妹聟へ引合はせ　鼠弓
あの内は玉揃ひだと四手云ひ　錦江
鎧一縮する所へたのんましよ　雨譚
いくらの事か駕舁とゐたけだか　眠狐
青菜小菊今はお江戸の刀さし　五連
兄イだけ梅にはそれる氣てんなし　眠狐
つらの皮厚さ樂屋へ手水なり　鼠弓
宿帳につけぬ泊りが爲に成り　秋紅
よしきりで客のわかれるけちな所　五樂
禿を引きさきさうなへ一分やり　雨譚
これ以て可愛氣のない妾が母　玉簾

嫁と娘でよその子をつい泣かせ　雀芝
買ひ放しにもなるまいと土手でいひ　攝州
駕には人の無いやうに四手かけ　同
捨扶持といはれたが母無念なり　燕子
放生會母は十九羽施主に付き　門柳
妹の灸一所二ところ　眠狐
初ぢやさかいと棧橋で反吐をつき　青口
臺座後光をしまはせる品となり　水砥
住吉と人丸烟艸盆を持ち　龜遊
以後をたしなめておつけをあつためる　燕子
甚兵淺が女房とう／＼泣殺し　船汀
座頭の小便日和にけちをつけ　攝州
かゝり人膳に蕨のかみちらし　門柳
かねの脇差だと質屋くどいてる　龜遊
緣遠い振袖の來る万年屋　水砥
何さ歴々もおろしにござります　雀芝
誰ぞに逢つたら正燈寺といやれ　眠狐
紙屑の附いた竹くず雨に借り　甲鼠
娘のまやもの橘をぞうろぞろ　龜遊
氣の毒なこと疵物を母自慢　錦江

お捨と付ける町内の金ッくひ　五盛
園者さうだと櫻草がいひ　雀芝
旅づかれ女房ゆるしつひきはなし　菅江

四月十五日開

八文で櫻の跡をふみかため　鼠弓
ふんばりといへばなぜゑとこはい顔　五連
大汐に松をかすつて猪牙通り　菅江
きり／＼たゝめ西瓜だぞ／＼　鼠弓
とんだ日もある物去荷すり違ひ　五樂
中川で生醉笠をやつと取り　眠狐
ひれつをいふなと後棒すごいやつ　雀芝
江戸で田へ這入ると女郎くゝされる　船汀
崩れた塀の間から勢子見え　五樂
氣のいゝ娘蛇がなめ蜂がなめ　青口
安たばこ盆へ古釘一本つけ　五扇
金閣寺くりに草鞋が二三足　鼠弓
おの字名を付け先づ九尺店へ置き　同
よく蒸籠の來ることと多門いひ　船汀
物見から鯵よ廻れのひんのよさ　雀芝
絽の蚊帳へ這入り白むく一つぬぎ　鼠弓

おとつさん内に居なよとむごい事　玉簾
かけ道は妾の舍兄ばくちどら　雨譚
駒下駄で大きな坂をこして來る　蛙聲
おつかない事聞馴れぬ醫賁　眠狐
葉ざくらに成つてものめる所也　船汀
下女上り内儀脊中はゆびだらけ　鼠弓
どちらも齒なれど爪だけひんがよし　玉簾
眞桑瓜持つて發句の禮に來る　秋江
とり／＼化生の姿で俄雨　玉簾
まな板へ千兩のせる願ほどき　青口
眉をぬらして念佛を嫁となへ　船汀
濕がよく成ると布子を一つ捨て　五扇
幻術を女郎おこなふあぶな事　船汀
赤く縫ふ袋に用がたまる也　青口
かけて來て三つ糸屋の戸をたゝき　同
大谷撿校で居れば死なぬ所　雨譚
そつと出る家を四手ではこぶ也　青口
調子を合せてよこせと留守居いひ　雨譚
尤もさ座頭と座頭つき當り　船汀
告文を讀んでうんつく太郎左衛門　雨譚

口寄せに聞けば啞さへ愚痴を云ひ　青口
御白洲で要之助は乳をのみ　鼠弓
かたい和尚は丸腰で斗り出る　眠狐
唐物で鳥羽屋けかぶを仕舞ふ所　雨譚
押入を取巻いて泣く三の切　青口
自分用でも土手は行きにくい所　龜遊
賣色に月花を結ぶむつかしさ　雀芝
居風呂を焚きかけ馬の足に出る　鼠弓
わすれて年を經し傘を內儀かし　五楽
一文が茶を買ふ上で時鳥　門柳
表德で夫と咄すその當座　鼠弓
爪音が止むと奥から座頭出る　連雅
野雪隱上田のみえるのどやかさ　青口
素見物目かれせぬのを上げられる　雨譚
遣手小便に行き舟すつと浮き　雀芝
たれながら下女繰返し卷返し　門柳
あを向いて居る土左衛門へ御幸也　眠狐
どらに別れて母直に德願寺　鼠弓
村談議果が死ぬと入りが落ち　青口
素麵にたのんませうで御用來る　眠狐

掃く程來ると禪寺で噂也　青口
常念佛壘をたゝく眠い事　鼠弓

四月廿五日開

能辯の德は分一を度々しめる　雨譚
吉野一艘で繪馬堂おッぷさぎ　雀芝
撿校の掛物かねのかたに取り　眠狐
三會目佛のやうなばゞあ出る　同
遣手のおもさ船にのせて知るべし　菅江
政事をいろひたがるのが妾落度　雨譚
直が成つてげぢ／＼の出る石燈籠　連雅
眠くさへないと新造笑ふ也　葉十
鼻が低いのと茶をのみながらいひ　秋紅
袴着た所かたさうで／＼　五連
女陸尺大八をいじめてる　攝州
朝歸りどこへ出しても女房勝ち　眠狐
やいの／＼を聞きあきるいろ男　蛙聲
耳にあまつて撿校は妻を去り　眠狐
膝と談合をして嫁一人旅　菅江
五六人目で柏の葉女房買ひ　五楽
娘と窓を親父見てこりはてる　鼠弓

十四人はやおきをする花の朝　水砥
おしたてはえゝよといふで顔がしれ　雀芝
大風の後は伊兵衛が宅に成り　亀遊
きのふ迄縮で居たにぶッかさね　華十
いゝ女公家を百度あるかせる　玉簾
夜鷹同前とは親父情なし　攝州
齋日は手拭へ糠つゝむ也　鼠弓
駒下駄へ又しかけたと鳩をおひ　同
村女房子ぐるみ帯をしめ直し　亀遊
美しい茶のみ友達二十人　蛙聲
不禮な口上御年に不足なし　雀芝
二三疋しよはせる奈良の新世帯　素鳥
正燈寺高尾が寺と母おもひ　燕子
にくい事からし擂てゝ留守といひ　五楽
花から實色に打ちこして不首尾　雨譚
松影に三日禅僧かくれてる　五連
黒猫を物臭太郎抱いてゐる　五楽
小性あがりを雪隠へぼッ詰る　鼠弓
句作りのわるさ蓍の盛のと　玉簾
中秋の御禮日息子二日喰ひ　船汀

三囲にまけず弓町降らす也　鼠弓
崇寧を握り八百屋へかけて行き　五楽
二分のこだはり正林へ一分やり　攝州
足をくらへも袴のはひんがよし　鼠弓
おめへのは二十四かえと庚申　五鳥
柏めん鳥の訴人を御用する　五扇
けつを談ずる所だにびり出入り　船汀
夜鷹も傾城の内だとじやうを張り　鼠弓
足音がすると論語の下へ入れ　五楽
これがお顔の見納に母は喰ひ　同
出格子で往來を留める聲のよさ　錦江

五月五日開

正燈寺おつと皆まで宣ふな　雨譚
五人一兩誰が歸る〳〵　五楽
一度につるべはなつ川中が船　雨譚
神祇組客を馬から引きおろし　同
待人來らず質屋へ禿行き　秋紅
ありがたさ百二十歩で蜘はきえ　玉簾
冠と兜の間へ時鳥　眠狐
晝三を男のさいに買つてみず　鼠弓

降るとつてこまる物かと曾我を見る　亀遊
鵠の觜羅浹へひゞきわたる也　素鳥
寺の庭見るふりをしてすゝめ込み　水砥
時鳥僧正茄子はまだか也　雨譚
菖蒲から雫がたるで降るをしり　眠狐
老人をこえて若アい所へ行き　鼠弓
役所にゐゝすからと禿口上　雨譚
とめた荷の中に白米二三升　五楽
御座敷へ規矩準繩の氣の毒さ　雨譚
雛を一つあふつて簑をしまひ　鼠弓
半元で一むかし居るむすめ也　亀遊
降るも又可也と花の芝居好き　雨譚
假葺をかついで五月賣つて來る　同
序が小鼓で大詰が暦也　鼠弓
照つたり降つたり越えて行く面白さ　玉簾
ぶざまなる物ふけ過ぎた柏もち　眠狐
するめを喰つて居る所へ御立なり　鼠弓
培烙でどら燒をしてこまつてる　五鼠
餅くひたさうに榎は口を明き　連雅
先刻の間違信濃者とわび　芝扇

玄關番かとおもつたらぬツぺらぼう　五扇

七尊び八おき留守居の御新造　鼠弓

鳥さしの後(あと)から子供五六人　五扇

茶うけに口を吸はせるとまだはやり　五樂

せめて向ひの地迄はと舁渡り　五盛

女にはゑんどう武者とあきらめる　水砥

初五郎樣へと兜ざらに來る　船汀

さすが禪僧肴やにかけはなし　五盛

手足のない草履で焙烙を取り　泉河

革羽織はいで切見世くゝし上げ　鼠弓

はねをつく歲かと姑初小言　骨木

六十〆とは高尾からいひはじめ　泉河

後架(こうか)出て女房俄に臼を挽き　燕子

ちゆうしん／＼／＼と藤四郎　雨譚

美しい娘手水でぶつこはし　玉簾

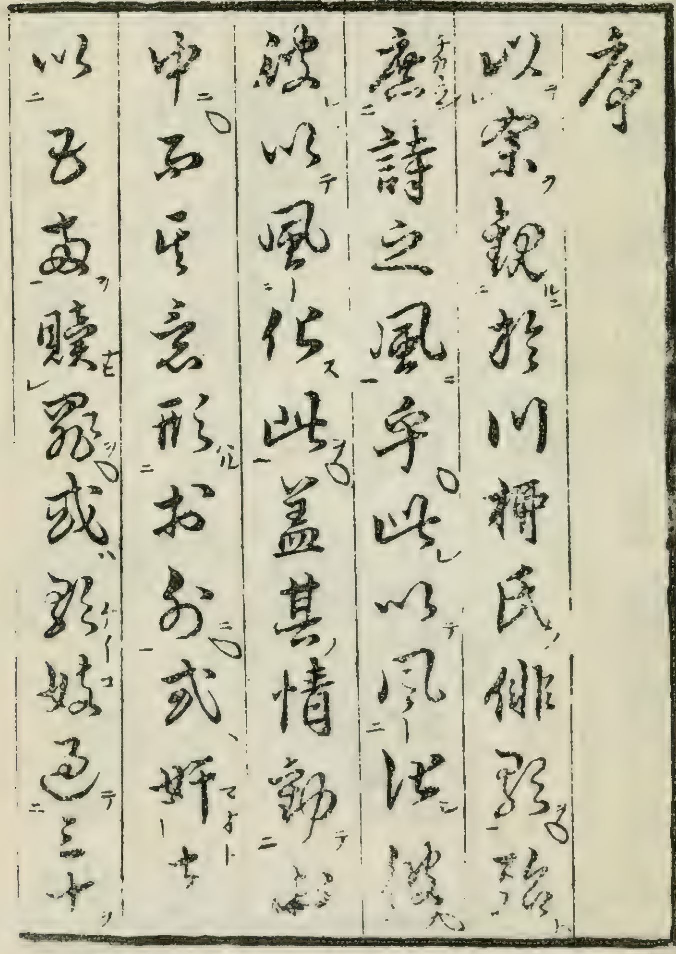
牛込御納戸町

天明元辛丑年五月吉辰　催主　蓬萊

川傍柳　第二篇　をはり

序

余を以て川柳氏の俳歌を観るに、殆ど詩の風に近からんか。これ以て彼を風化し、彼以てこれを風化す、蓋しその情中に動いて、その意外にあらはる或はまおとこ



五兩を以て罪を贖ひ、或は歌妓（けいこ）三十を過ぎて眉を畫く、廿間の茶店、風雨腋に生じ、百錢の勾欄（さじき）、汗全身を濕す、狡兒相女（さがみ）にまじはり、浮屠（ほうず）軒岐（いしや）にいでたつ、これ皆淫行の語にして、

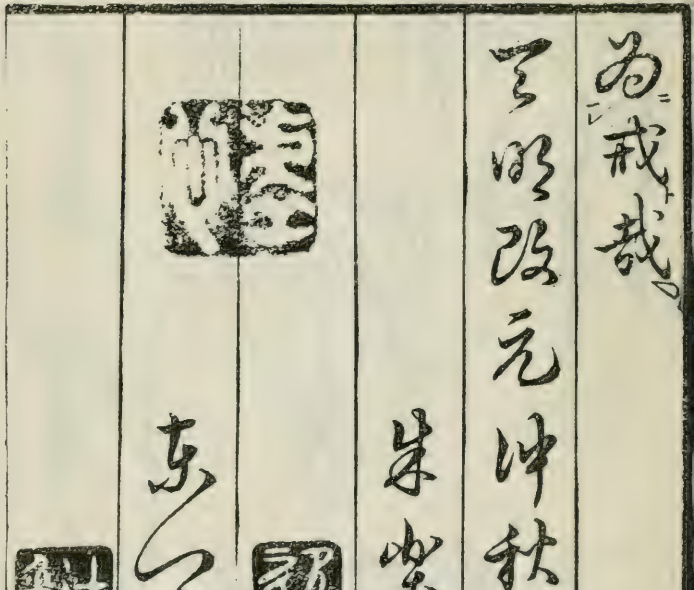
畫レ眉ヲ廿軒ノ茶店風生ニ兩腋ニ
百錢ノ勾欄（サジキ）汗濕ス全身ヲ
狡兒（マハリ）相女（サカミ）ニ浮屠（ホウス）與ニ軒岐（イシヤ）
豈皆淫リ語ニテ而數ス鄙惡ヲ
讀ムレ之ヲ者自ラ樂シミ乎君
乃號シテ爲ヒ撰ラ甚麗與之以ナ

鄭衞の聲に類す。然りと雖も、之をいふ者自樂み、之を聞くもの乃ち絶倒す、苟もその蘊奥を探らば、以て戒となすに足らんか。

天明改元仲秋

朱樂菅江

東郷西隣書




蘭香戯畫

川傍柳　第三篇

丑五月十五日開　川柳評

時ならぬ衣替へ島へ参詣　雨譚
鼻のさき斗りあらつて眞間へ行き　五樂
秋風ぞふく中川の關をこえ　鼠弓
つゞやそこらでやれやれな〱　五雲
氣のつかぬ名代ちつと行つて來な　船汀
素人に成つた當座の恥しさ　東里
隣まで淋しがらせる糸車　同
何事と葭簾おきれば俄あめ　眠狐
やかましい程啼く下をなまりぶし　同
腕まかせ石で半鐘くらはせる　錦江
かんらからとぞ笑ひける三會目　雨譚
切れ文としらずあの人御太儀よ　五樂
不屆な命衣へつゝむなり　五扇
見立違ひか又いまの子をかりる　鼠弓
傘を半本女房貸して遣り　五葉
また見世へ烟草盆出す氣の毒さ　秋紅

ゆきては戻りをどりては鈴をふり　玉簾
相談まち／＼で屋形さがる也　素鳥
大地に鰹みち／＼て伊勢屋よび　眠狐
梅の盛りには生酔出來ぬ也　玉簾
雪の朝親父火箸をしやにかまへ　同
萬陀羅を柳の朽ちた所へかけ　鼠弓
御用の外を四人でかつぐ也　錦江
初會に花を遣つたよと下戸笑ひ　五樂
妾が兄亢龍の悔泥鏝をあて　攝州
下戸とみえ屈原餅をねだる也　五扇
駒下駄が三足槍が三本也　五雲
とんだかわいゝ御供を大屋くれ　水砥
鹽竈の跡百八軒ほど建て　攝州
膝行頓首して内儀しつけ取り　雨譚
田を植ゑる所みせべいと村仲人　五扇
嫁抱きたがつてちよつくら乳を見せ　雀芝
東岸が太郎西岸四郎也　五盛
汚泥にしまぬ花を見て不義な事　雨譚
向ふのふし見世はる眞似して笑ひ　眠狐
深泥に美女のまみれる神事也　雨譚

さたの限りは飯たきと悴逃げ　雀芝
醫者衆火動とおつしやると女房いひ　同
米見桝取が内儀でやかましさ　五樂
むごいこと向ふ桟敷へ瞽女を置き　葉十
ぬれの幕などで仲人返事させ　門柳
一喧嘩すんで赤子に灸を据ゑ　秋紅
おれが死んでも弔ひにやるか見ろ　龜遊
三度目は張良四ッ明にしかけ　雨譚
啮にしてはうるさいと嫁はいひ　攝州
三年が内間男のたいくつさ　五盛
よかれあしかれ長刀も馬もあり　五雲
禿につかまると入墨では済まず　船汀
父は子の爲にかくして金をため　眠狐
なに捨てる物と剃刀遣手とり　五樂
車のながえに取りついてさあしやれ　鼠弓
人がらのわるさ廊下へ錢をつき　五樂
そら辭宜をするなと亭主下に成り　五連
柏餅念頃ぶりは味噌もやり　門柳
あしか四五疋つれて出るいゝ女郎　菅江
昆布巻を嫁は帯ひろどけにする　眠狐

涙玉をつらぬき後家寺参り　雨譚
十罪の遣手家内の質をとり　芦夕

五月廿五日開

十九帖目を讀みかけて床につき　五楽
此金屏風御所持かとぶしつけさ　雀芝
なんぼ丸腰でもぢきにわかりんす　秋紅
つらの皮むきため衣染める也　五雲
今のあと弾いたら撥袋返そ　水砥
今夜の誹諧古句だと女房いひ　雀芝
榎の僧正の前から四ツ手きれ　門柳
意趣は意趣さし身はさしみけちな奴　五楽
かづけるにてんな所は紅葉也　五雲
一つきこしめしてなんぞ弾き給へ　玉簾
あす店を追はれるとても初鰹　燕子
二三人年寄りむきがうれのこり　五楽
下手な事晩に逃げるを遣手知り　同
口がすべつて瓜坊を孟母買ひ　攝州
母に手をひかれてむごい鐵槳の禮　青口
尺八を髭むくじやらな男買ひ　水砥
さうさなくほどける紐に五兩出し　五楽
見習も二三人ある正燈寺　五楽
外にない事とぼロで花見也　鼠弓
牝馬を一度牽いて出て懲りはてろ　五楽
用のある人斗通るきついしけ　眠狐
下駄足駄一そくにして女房貸し　竹露
戀歌の手柄僧正はうたぐられ　攝州
むらさきと山は一夜が本の事　龜遊
山吹を見ながら蛙とかまへる　攝州
奥の手を出さず長篠持ちこたへ　雨譚
ざんぎりでたゝき放しに息子され　葉十
知識行く況んや俗においておや　攝州
犬の居る所と煮うりやを教へ　雨譚
世の中は廣し奥屋へ年季來る　眠狐
とを/\の所をついてくぬけ参り　同
振袖で月をかくして弾きに出る　水砥
女房のいんぎんねから怖くなし　秋紅
ざん切の母懲りやれよ/\　五雲
こそ/\と咄し大雲寺で別れ　錦江
石坂を鬮取一つ置に下り　眠狐
以後は見のがしにせぬぞと馬鹿亭主　雀芝
問ひつめられて上ぬりをおさうする　玉簾
こそ心得たと息子羽織なり　同
聞かれた爲だと紅葉へ顔を出し　同
紺屋の息子あさつてにして亡び　鼠弓
お袋はいとしや土手をえツちおち　玉簾
女房は二十八丁下に待ち　錦江
三河島へ落るよと下戸とらへ　鼠弓
畜生の皮をかぶつて鬼童待ち　雨譚
あまり可愛がり養子を抱いて寐る　五扇
はたちを頭にならべおくいゝ娘　船汀
ぼた餅の俎板へのる五丁町　攝州
三味線のあとからからりころりなり　玉簾
幻術の指南どら先生がする　船汀
安遊び父母はたゞ病を憂ふ　菅江

閏五月五日開

暑いこと枕一つをもちあるき　曾木
おそいうらたいがいもてた初會也　雨譚
琴はたま/\三味線は毎夜也　秋紅
いちのきたなさ生ぬるい西瓜喰ひ　眠狐
六國もとく氣女房の大晦日　五扇

たのむ木のもと欠落をいたす也　玉簾
さアぬける程降つたりと御延引　雨譚
武士の會席へおや／＼二三人　水砥
誰が只貰ふもんだを聞いて病み　五樂
踊子の草履で歸る急な用　長笑
判取に成つて見たがる樽拾ひ　鼠弓
金を殺して遣ふのをやりてほめ　五英
是はどうだと盃の手をとらへ　葉十
あきた事毎朝うせてどら咄し　五葉
月雪のまん中生醉の多さ　曾木
儀同三司といふべきはつけまはし　雨譚
伊勢の留守女房度々綱をひき　雀芝
伊勢縞で見る燈籠は二の替り　素鳥
時鳥迄はきかれぬわるい内　五樂
賞は指をくれ罰はざん切にし　雨譚
いそぎ廻つて盗んだら獵師なり　水砥
油手をふいてきしやごをほき出させ　五雲
手に汗をにぎつた事のないたはけ　龜遊
月見ればちゞに悲しき御後室　攝州
行燈の横手で母はそつと泣き　玉簾
新造衆はむだ笑ひだと遣手いひ　水砥
木のやうなはだなを娘かありかり　攝州
懐から出してすてんぽうを盛り　雀芝
公家惡の開山夏の桀王也　玉簾
あざだらけなを雲雀山へ捨てる　鼠弓
一軒の女郎は彌陀の光なり　秋紅
そも／＼相撲の始より降りさう　水砥
夜顔(よるがほ)の花も籬に咲いてゐる　脊江
てんがい屋爪を返して又泣かせ　青口
呼びだだつけが仕合せな御新造　水砥
氣味わるさ瞽女がにこォりにこり也　玉簾
蛔のありたけは新造ころげてく　青口
ばたくさが疵市村の東側　玉簾
あの凧を見ろと子のさいかくす也　眠狐
衣の楯もかんませぬいろは茶屋　東里
出たからうなと傘で愛す也　五鳥
お半長右衛門ばくちのやうな色　雨譚
切落し座頭からべを傾ける　錦江
紅葉には家路を忘れ行泊り　攝州
劍の本地がすんで茶飯を喰ひ　雨譚
美しく織るに鍛冶屋の業さらし　青口
二人切落しへ遣つて廣い也　秋紅
念佛最中上總から通し駕　五扇

閏五月十五日開

これからははした金だと門を明け　五樂
やう／＼と御次へ下がるやぐら下　東里
駒下駄で酒池肉林の中へ來る　五扇
去る約束で歸つた處勘當　同
産み申したで節刀をたまふ也　雨譚
勅使のしけは叡山がはじめ也　同
攝州に所替せぬ御神號　同
割膝でふんばりへ義理入りやすか　五連
始皇帝が朧まんぢうをはじめ　泉河
もう二人(ふたり)ほしいはけちな初鰹　五樂
宵の朝霧雨になる御延引　玉簾
越後屋の脇にちつさな越前屋　泉河
氏より育ち國主でもふればふる　青口
繩でたばねても男の見る棧敷　水砥
けふから並の袖になるをしい事　五盛

たゝかれた禿目の玉きつとなり　素鳥
がんぜなさ傾城の乳を見てだまり　秋紅
拜むのに少し笑つて子を願ひ　鼠弓
さき〴〵の世話をいとうて瞽女白歯　秋紅
母親にばかりおそれる座頭の子　鼠弓
死に行く高尾みんなにうらやまれ　眠狐
その文月の七日の夜いやらしさ　曾木
雨ふり風間おもひ出す御歸洛後　眠狐
何出入だか吟味所でなぐさまれ　靑口
稻荷では降らせ狐はよりつけず　同
たゝかれる抱守井戸でばァをさせ　眠狐
たち消えがしたに鼠を捨てて逃げ　同
棒組やどこの内儀もあのくらゐ　鼠弓
御取立の武士隱し藝聲色　玉簾
みいらにもならず折々かき廻し　眠狐
入らぬこと寸の延びたを舍弟さし　雨譚
せらがみのたかつた奴を隱居揚げ　玉簾
駿河の國の住人は引ヶに來る　雨譚
神佛二月つゞいて緣の世話　玉簾
是ははや弘法寺に着いて候　鼠弓

目出たくもない高盛は幡をたて　眠狐
をしげなく蛭子は出して見せる也　龜遊
ねぢがねと見えるお袋腰に鎰　雀芝
高笑ひしてくりやんなと和尚いひ　播州
裏店の嬶ァを雇ふいゝ涼み　靑口
馬鹿なこと母も紋日を苦勞がり　同
夜が明けてうんざりとする嫁を取り　玉簾
浮氣後家男わらべを相手どり　雨譚
こはだの鮓をもぎ取つて遣手ぶち　五樂
つか〳〵と來て花道を抱きおろし　五鳥
帳へ首いつけたやうに番頭見え　眠狐
紙幟眞鳥と眞田うれのこり　同
蘇秦が辯にて牽頭は五丁說き　菅江
わるさでも腹のたゝぬはからし也　鼠弓
今坂を見い〳〵しめる京眞田　五鳥
俗家へは北寺方へ南あて　船汀
本能寺ぢやといのと涼み大亂　雨譚
伊弉諾は鶺鴒御用犬で知り　船汀
何茸か苞にして來てせなァくれ　眠狐
行燈を十九日から晝ともし　龜遊

子に乳を見せたのと淺黄は見立て　雨譚
呑中間敷と靑い顏で書き　五英
姿が兄十本の指の先へ立ち　水砥
飛んで行く四手のあとできやァん〳〵　眠狐
かうかの内でも姑女耳を立て　玉簾
雪隱をかり佛壇をめつけ出し　雀芝

閏五月廿五日開

樟腦は太平の世の匂ひ也　郁李
仕合せは蒙古退治を妾飾り　眠狐
にくいこと和琴の達人をいびり　雨譚
雪の四手のねだる事法に過ぎ　同
けちな鞠片ッぽうづつ沓をはき　五扇
たきたてを喰つて越後へおしよせる　五雲
次の蒔繪から菓子盆斗り也　鼠弓
關取に貰はれたあすの恥しさ　五樂
嫁はもう猫の身持を里へ遣り　鼠弓
これからは蛾眉をひそめぬ恥しさ　同
かね〴〵貴公の御世話にてと十兩　梅斧
衣縫ふそばであつたら事をする　五雲

十五斗桝場で音をさせて出る　五楽
椎は大名で榎は出家なり　鼠弓
年明の内で四ッ手は酔つぱらひ　同
凡ならぬ女に小女二人　雨譚
鐘を突く内脇へよる雨舎り　眠狐
田植見の崩れ蘇鐵へ二三人　鼠弓
底がぬけ鰹うら店這入る也　亀船
茄子がきらひで常不斷叱られる　眠狐
蚊ッ喰ひを詞の時に撥でがき　門柳
殿中をかぶりあはれなぼていふり　秋紅
かたつけてから氣のかたを藝子病み　鼠弓
買つて見もせずに親父惡所よばり　五扇
女だねつきて二代の后なり　郁李
杉の葉へ酔つたと見えて藝子たれ　素鳥
のうノヽと嫁のして行く車留　眠狐
わるい屛風もござらぬと常が常　五楽
喰物で勅勘得たは木曾斗り　玉簾
大太刀をひねくり妾威を振ひ　雨譚
たくはつを里扶持に出す口惜さ　五雲
日雇賃爪だと禮の供につれ　五雲

留守かして聲のありたけ嫁笑ひ　連雅
新造は寝るも笑ふも二人前　郁李
佛の事は打忘れ鬼を買ひ　青口
ちつとも惚れず茶を二杯錢五文　雨譚
無縁坂騒いでおりるホッ端客　素鳥
明方の月も紋日の數に入り　梅枝
猫を乗るのが一鞍三十二文　鼠弓
引ヶ前はしんここだれて眠る也　玉簾
仕立屋はかしこまるのが禮儀也　攝州
二つ三つにぎり糠袋をあける　鼠弓
大膽な娘のあとへ餅屋越し　五雲
北狄の蠻語はりんすなんす也　李牛
五六人腹を立つてる藥取　鼠弓
すみやかに唐の賓客をかへし　同
しらみだらけなおはらひを配る也　同
とんだなぐさみはうろくで人を炒り　五扇
女房の留守耳かきに迄こまり　鼠弓
役不足いふなと猿田彦にする　同
小皷をはやめて嫁を迯がす也　玉簾
とけた帯引けば茶碗をふり上げる　鼠弓

高縄がすなはち化ける所なり　連雅
大難儀くどいた娘泣きやます　雨譚
とッぱひやろから見て居る馬喰町　鼠弓
さいくッきやうと息子は野邊迯り　同
石燈籠手附を二百置いた切り　同
緣頬を娘のいざる松の内　梅斧
一聲二節三が寐小便なり　鼠弓
引出物して三會目もてる也　雨譚
もうよからうと庚申の明け方　船汀
四ッ忠へ無口な御用たのまれる　門柳
うるさくいやさちと乳をいらはせえ　鼠弓
三會目布袋の姉がまかり出る　雨譚
にぎり飯くひノヽ所拂ひ也　鼠弓
明の方見る内下女は迯仕度　同
連理の枝は紅葉と榊なり　同
どれにしたまふと初會を覗かせる　五鳥
師走來た嫁打置かずつかはれる　玉簾
峯頭について前へ出る大一座　門柳
一はのがれたが十五是天命　雨譚

六月五日開

日本の掘出しものは富士の山　甲鼠
雪よりはえゝ物の降る江戸の富士　五楽
孝靈五年あれを見ろ／＼　八中
花の山まばら欠けして叱られる　雨譚
宇治の大臣は仰向きながら下り　郁李
先の方あるので兵庫丸にする　鼠弓
姉は彈き弟は論語卷の一　同
口惜しさ隣の屛風人だかり　五楽
正燈寺まだ素機嫌で同意せず　雨譚
たまげたつらで呉服屋を覗いてる　雀芝
女房を持つべからずとどら仲間　五雲
仁心を門で譽めてゝ甚暑也　五連
煮花を出して不馳走な暑氣見舞　眠狐
よくだまされるで僧正殊勝也　同
むごい事たま／＼の里繼母也　曾木
變生男子大阪の祭なり　眠狐
二朝母はもつと寐や／＼　雀芝
女房にも見せたい程のいゝ女郎　同
見たいが山々六ッ指の子を愛し　鼠弓
きやつ氣があると思つたらもう無心　五扇

釣合はぬもの行燈で金屛風　鼠弓
上下でごくにもたゝぬ物をくれ　五英
御用達しつかりとした供を連れ　梅枝
身代を投げて見ねばと牽頭いひ　五連
この窓は誰が張つたと旅戻り　五楽
身上りはかき立てる灯に虫も來ず　素鳥
見立てられたで借りた子が後を追ひ　鼠弓
柏餅ねこそげ膳をならべ立て　同
卷きながら文をよんだで見ぬかれる　雀芝
けちな餓鬼蛇より李を嬉しがり　船汀
東西の寺であばたを選り殘し　連雅
引越しの車で時をつくる也　鼠弓
意地のきたなさ持拂迄さがす也　眠狐
團子を喰つたはこゝらだと枯野見る　鼠弓
四方面女房の用は足を上げ　同
ひんのいゝ無心は琴を御恩借　五連
土用干所か女房が見えぬ也　眠狐
とんだ賑か蛇の道をおして行き　葉十
半口のやつが無盡でいさをいひ　素鳥
後先は半纒中は衣なり　水砥

ちよつと口つけてと撥の手を握り　鼠弓
さわがしいものは節句のはじめ也　同
あぶれたを鬼一口にやりこめる　靑口
鴛鴦のふすまをねだる痛い事　雨譚
髪結をこはいあたまで追ひあるき　眠狐
鏡とぎさて油氣のない男　鼠弓
高直なやつ三味線の中に座し　眠狐
てう／＼しい王だと秀郷はいひ　雀芝
正直を直しなんしと遣手いひ　歌石
かけやでぶたれ申候二三人　五楽
當り不當りに構はぬ後家芝居　玉簾
宗盛とつけてお里が知れる也　靑口
鬼灯をちよつといつける渡し金　同
わるくいふ沙汰を大石嬉しがり　玉簾
さくや姫のやうなが神樂を奏し　五扇
烈女傳せゝら笑つて後家はきき　五楽
美福門院鳥羽のいゝ后なり　雨譚
うつむいた男の側にいゝ娘　五連
朝日さす大内山のむつかしさ　玉簾
まくら蜘をくださいと御用使　鼠弓

馴染客禿の繩を解いて遣り　青口
お安い御用と書くなと姑いひ　五楽
あかつたり大明神豊國也　雨譚
居喰あり禿に御草二番負け　素鳥
日待月待嫁琴をはたられる　玉簾
鴻に意趣ふくまれてゐる恐しさ　五楽
紙漉の耳へ淋しい四ッ手駕　鼠弓
隣で勘當唇ほろびたり　雨譚
子煩惱手のこつぽうを摺つて抱き　玉簾
眠らぬをかけに禿は肩をもみ　秋紅
妻が留守にて候と四通書き　鼠弓
耻紅葉傘さげて寺を出る　五扇
神子のおひがらしは釜の前で舞ひ　同
八つのは幣一つのは拔身なり　眠狐
春女房吉田屋へ二分やつた也　雨譚
りう／＼はつしと紅葉で女房ぶち　鼠弓
首二三級ぶら下げる煮賣茶屋　雨譚
諏訪の箸半いさかひで亭主借り　素鳥
雪のかたまりあさつてにしてとける　鼠弓
千年も生きのびますと初に喰ひ　眠狐

讀めもしないで唐様をやたらほめ　眠狐
言語道斷乳ばかり持つて迯げ　雀芝
面白い箸床代が三分なり　雨譚
水茶屋で忽ちきまる袋持　素鳥
わたしや今年も重年とあばた下女　甲鼠
朝がへりこは／゛＼嫁もやいて見る　玉簾
擂鉢をふせたはげびた見立なり　五楽
うつとしく遣手のからむ三四會　素鳥
岡場所も松ケ岡ほど離があり　雨譚
湯の沸きさうな庵にて蕎麥をくひ　同
吉原中を遍歷したゞかへり　同
いッち日かち／＼山は一人者　鼠弓
百旦那へは豆太皷くばる也　同
嫁路銀十三匁持つて迯げ　五連
梅には鶯竹には帳面也　玉簾
か丶様の子とは自然といはぬ也　綿糸
舍那王の尻金箱ですりこはし　素鳥
ひちりきの稽古利口な沙汰でなし　五扇
うよ／＼する程蛇がと仁田いひ　五楽
たわいは無いのさ内儀は歸つてる　雀芝

とんだ事和尚衣の袖をとめ　龜遊
御覺悟はよしかと笑ふ剃り習ひ　眠狐
千日寺に百日紅咲いてゐる　玉簾
ふじ山は穴八幡へ遠からず　泉河
あれが口にはかたれぬと諸葛瑾　東里
烟草入を忘れからつぽうにされ　八中
ねぢり出し／＼振る神樂堂　五連
妾が見きやたつへ上るやうに乘り　五楽
きたアねえ顏で春屋はかしこまり　鼠弓
蚊屋賣の聲のい丶のを女房呼び　攝州
器にしたがひ水牛はうれる　青口
土藏へ來なと日中に聟をよび　鼠弓
其夜ねれるは水無月の神樂堂　菅江
よくころぶはずさ蘗子はお坂也　船汀
晩をたのしんで一日笛を吹き　龜遊

六月十五日開

なぶられて娘ほころびなげ返し　眠狐
女房子のあるはちつさな呉服店　鼠弓
男坂おりかけて見てよしにする　五雲
三ツ蒲團乞食へくれる不慮なこと　五扇

殿風をふかせいま／＼しい女　鼠弓
松江の鱸を喰つて目がさめる　五樂
おどれめといへば禿は笑ひ出し　素鳥
御子孫も繁昌おつとよし／＼　東里
上下で抱いて見る子は二三間　鼠弓
おとなしくして居られうか數通來る　玉簾
花は格別菊は罪があり　李牛
二三人死に玉川へ札を立て　秋紅
さあ／＼まづお上り片手づつ着る　多笑
品川の月緣側をねだる也　綿糸
柳だあ／＼なとゆりおこし　五英
小でつちの掛取べそをかいて來る　多笑
うや／＼しくもこつぱだの干物だの　青口
いたづらを言ひたてられる鐵漿の禮　眠狐
愛想者が子をつれて戻つてる　播州
川向うでも食つては寐／＼　五雲
通り者圖ぬけの達磨二朱で買ひ　素鳥
氏なくて兒はこは／＼馬にのり　菅江
作左衛門流ですがゞき彈いてゐる　玉簾
むづかしさ石の門からおん歸り　五扇

後の尼娘々とうたはれて　綿糸
舞臺を仕舞ふと菓子屋の男くる　同
ねだり事をば地聲にて四ツ手いひ　雨譚
廿より下を手がける天蓋屋　綿糸
やッと獨代さと四書の直蹈する　五樂
盛つて見たけれど藥をたのまれず　郁李
鎧着たなりで西瓜を切りくらひ　雀芝
青墓を入ると千十三人　素鳥
その女をにくみ其顏をにくます　甲鼠
商賣が商買女房までくすね　雀芝
魚物を斷つと吉野丸さびれ也　玉簾
生藥屋捕手をからいめに合はせ　眠狐
迷惑な相伴子守すゑられる　五扇
破れたるおんばう買つて笊へ入れ　菅江
儒を穴にしたから鹿を馬にする　東里
から草が千葉にみえる祭過ぎ　鼠弓
金帛をさゝげ三度目もてる也　雨譚
染色の山からぬける面白さ　玉簾
つひに佐々木がのり勝つは出合也　菅江
秩父の留守に戸田川がとまれかし　雨譚

醫は醫なり山の御客は山と知れ　雨譚
恐しいこと紅閨をねだられる　同
くせに成つてはと宿下り母起し　同
もしちつとあれへと仲人いゝきげん　同
人俗の私も出る三會目　鼠弓
隣で火もらひ女衒へ烟草盆　眠狐
をかしさは南光坊をいひちがへ　船汀
作左衛門夢中でないは本多なり　雨譚
勞咳は長命丸がおそなはり　綿糸
六立目始まりさやうと池の窓　雨譚
あの四ツ手一分〆たと釣瓶蕎麥　鼠弓
西戎と山僧たてをついてゐる　雨譚

六月廿五日開

さばかりの大河を松はおよぎさう　八中
そろ／＼と娘物着がおそくなり　眠狐
京の水まだ／＼出來ぬ色があり　綿糸
寺入をして六十帖したゝめ　玉簾
妹は富士拙者めは茄子の夢　綿糸
いつしよけんめい傾城赤合羽　雀芝
西瓜をば下黃泉へつける也　鼠弓

寐たふりで見りやひじき迄取りくらひ　眠狐
艸市のあとへ地引をかつぎ込み　素烏
生酔に成つて陰間を一度買ひ　鼠弓
でつち入三人半ではこび切り　雀芝
あまりうろたへ三男をうばひ取り　眠狐
翠帳紅閨と華陽は謡ひ出し　船汀
奥行が七間娘一人なり　鼠弓
うまいこと四郎兵衛が目をぬく手段　文祇
あつめ銭かつぎは箱へ腰をかけ　素烏
貞節な新造の出るけちな晩　雨譚
未明に歸宅する内がえゝ息子　五連
上の祭は氣のわるい男が出　雨譚
軍配がよさに長篠持ちこたへ　玉簾
あら世帯よそへ出た日をかぞへられ　雨譚
去年來た信濃で道の世話がなし　素烏
鳴りものにかけては平家おそろ也　雨譚
三味線堀は駒込のふじの跡　連雅
泉水の船武左衛門にかゝはらず　素烏
紫に着かへて宇賀のたまうで　雨譚
三浦屋をみち／＼させる供をつれ　鼠弓

かみ様の留守に御亭主蟹をかひ　多笑
花の外には日本で團子なり　鼠弓
深川で逢へば番頭野暮でなし　五扇
鍵を皆持つて女房他出する　眠狐
ふしぎな御縁で身上立直し　五連
呂太后毒害は手に入つたもの　雨譚
おりんめにさとられるなと下女へ遣ひ　五扇
甚兵衛は懐手にて蝿を逐ひ　眠狐
もり殺すので藪醫者も名が高し　素烏
今あいた四ツ手だらうであつたかい　鼠弓
妾帶をやつとこさァとしよつて立ち　玉簾
鯉のあつものをくらつて聟わかれ　雀芝
十三年の稽古だと不器用さ　玉簾
盲は染める材木屋門を打ち　雨譚
追人の歸り泥足がひからびる　鼠弓
奥御殿とかく松坂こゝえたへ　多笑
こも僧は皆坊主だとじやうを張り　龜遊
生娘にこりて白龍膏をかひ　鼠弓
平内が先祖せんたく見て落ちる　泉河
十人が九人身をなげたらう也　龜遊

御大事の物に度々來る新世帯　東里
杉垣の前でお經の切つぱし　眠狐
一しきり東寺をむごくさびれさせ　雨譚
下女が櫃せなァは明けてたァまげる　梅枝
炭部屋も尋ねて見ろと十三日　李牛
眞崎でそろひも遊ぶ不料簡　素烏
いひなんすものさとのべをさがす也　船汀
女だてらに大黑をお市取り　同
三味ござれ讒言ござれいゝ女　同
赤羽根といや得心で四ツ手のせ　同
みやびかなる女あり三分なり　五樂
汐合を見てお願ひと若い者　船汀
こはくない呑人そろ／＼涙ぐみ　綿糸

七月五日開

お妾の顔を闕守先へ見る　素烏
素一分はまん中を行く中の町　同
拙者めも御供ともてぬ連が出來　文祇
生酔もなく草市へ嫁は行き　鼠弓
女をおぶつた公家／＼と聞き／＼　五樂
人の手をかりて傾城人をぶち　素烏

名木は米の中から枝を出し　鼠弓
紅葉のくづれ駒下駄の音にたかり　曾木
見ともなさ二八の門へ槍をおき　鼠弓
娘でもあるかと引つこした近所　同
江戸廣いが下駄の切賣は一軒　郁李
庄之助女を見ぬと天氣なり　鼠弓
突出しのお針へ助ける廿日過　門柳
舟頭が水をゑぐると猪牙かける　八中
罪科をいひたてもとゞりを女郎切り　船汀
垣亭の門に駕舁八九人　梅枝
どうれいといつといてのみ一つ取り　鼠弓
齋藤が切手で佛他出する　玉簾
日本の地へ蹈込むと酒手なり　船汀
惣仕舞錢でも高いつらが出る　素鳥
大一座からつ切りなが二三人　同
けふの作者はどなただと女房いひ　玉簾
ひつたくつちやァ飛んで行く四枚也　同
燈籠見物精靈は棚へ上げ　菅江
すは狐が渡つたと我も〳〵　郁李
くれなゐは榊へ植ゑてかくれなし　眠狐

ぼたもちの椀をよめん女もぎはなし　素鳥
御爲に相成候とてあばた　曾木
返答をすぐに栢莚紅葉哉　雨譚
馬鹿なこと鏡をいぢり月をくひ　五樂
女の童(わらは)がまぼこを物してぶたれ　雨譚
千兩は箱の外(そと)から見た斗り　八中
巾着を切るを見ながら神子は舞ひ　鼠弓
春屋へは蕎麥屋の箸をつけて出し　同
一日(いつちにち)にくまれ口へ紅をさし　龜遊
あらめくらめがさま〳〵な望み事　雀芝
赤羽の鳥居をこすと醫者に化け　連雅
古骨の片荷に椀が五つ六つ　雨譚
つや〳〵と髮を結はせて湯場を立ち　素鳥
二度からをくつて桝わなやめにする　眠狐
伊達なことはッつけ杜金でだみ　雨譚
又はだかそこで親父が腹を立つ　龜遊
嚢中のものをさぐつて遣手麻る　雨譚
つき合で左官もまじる大一座　素鳥
本望さ一箱すてて島へ行く　五扇
鐵が無いと大童子になる所　玉簾

蟬のなく下に子供が二三人　五扇
貳分かりて早速返し二兩ふみ　五樂
瓜實(うりざね)を見せてかぼちやと取りかへる　鼠弓
牛込先生とんだことをたくみ　五雲
伊勢は使者三河ははやし方が來る　五扇
旅歸り荷もほどかずにもめかへり　玉簾
にぎやかさ廿六人一座なり　文舐
地代百納めさうめん食つてくる　門柳
それ馬〳〵〳〵と壹騎なり　鼠弓
せなが進物で砂糖をなめなくし　眠狐
月落ち烏啼いて四ツ手又盛り　曾木
菅笠と雪駄はぶきな中の町　八中
ばゞアそばからねぢつて抓(つね)りなよ　雀芝
馬鹿なつら江戸橋へよるいそがしさ　鼠弓
炭だらけになつて笛を吹きたてる　玉簾
しやうねの尻尾を照魔鏡へうつし　鼠弓
顔を筋だらけにし月清見潟　眠狐
大けんくわ烏帽子をきたが相手也　五雲
江戸是切りの處にて和尚しやれ　玉簾
鈴をふりたて行燈へたきつける　五扇

大坂の寺に天狗はふしをつけ　眠狐
氣のよわさ蛇を殺して寐つけえず　五樂
口まめがしやべつたあとで御沙汰なし　八中
いつ食つたか蝙蝠山椒が名代　雨譚
喰物でいじろきのないいゝ棧敷　五雲

七月十五日開

孝行に十月小袖を着てくらし　文祇
力孤にして及ばぬは島田なり　船汀
海は一國山は三ケ國なり　玉簾
王明動不いのらせることはいこと　雨譚
齒を磨きながら呼ばはる三番叟　鼠弓
目へ乳をもらつた人と不義が出來　同
なければなくて濟むものを嫁をしみ　五雲
梨花一枝ちつとこゝをと雨舍り　東里
突棒と三味線打越しをきらひ　雨譚
どやされる音で棒組行くべえわ　五樂
生醉の時くどいたで出來こじれ　船汀
女房に座敷を渡す下戸なやつ　竹露
内股を見ぬいて目見ェ御返し　綿糸
天道にも捨てられて變替の文　雨譚

笑ひの中に刀をとぐ遣手なり　雨譚
ぶきびな苞が岡釣の邪魔に成り　水砥
今朝のぼち〳〵内に居るをしい顔　沓木
それあたま〳〵と這入る願ほどき　鼠弓
時鳥三圍へおつこちたやう　五樂
片鐙なくし家中の笑ひもの　同
貴樣どれおれァあれだと素見いひ　雀芝
子供の生醉女郎に貸したなり　沓木
法界々々で藝子をさびらかし　水砥
猫舌に義仲にえつく飯を强ひ　菅江
賤が家に公のまします通り町　鼠弓
木の葉でもなくて善界は風に散り　眠狐
釣針と疑ふものを嫁はそり　鼠弓
澁紙袋わきへよせ酒を出し　同
消息で舟宿猪牙をまねく也　同
耋三の右や左は一分なり　同
傘へあたまをたゝみ込んでかけ　五樂
いぢりはきこえたが蒟蒻が解せず　雨譚
二百ないやつは三枚橋に待ち　船汀
神酒をすゝめて手習子いとま乞ひ　眠狐

きついしけ島田金谷は人だらけ　素鳥
山中に笈斗りあるむごいこと　五樂
十さしの直を女房にあてさせる　鼠弓
入聟はお慈悲〳〵と正燈寺　沓木
けころの屛風白髮三千丈　鼠弓
家根舟を追ひ拔いてもう松浦潟　連雅
願ある身だに南でつかひすて　玉簾
いかいたはけと入定をむごくいひ　五樂
衣着た狼女ばかりくひ　東里
序に金比羅へと房前旅行　雨譚
爰でふせたいと數寄屋で大工いひ　雀芝
他人の始りといへど兄出世　玉簾
松の内餅が邪魔だと夜蕎麥いひ　眠狐
五十三次を春日野江戸で見る　玉簾
豆腐の相手に初茸入れたやう　船汀
おてんばの方がましさとこりた母　五雲
碇の側にあれ切つた臺のもの　鼠弓
ふところでかぞへる茶代五文なり　同
打見には何不足なき女郎也　雨譚
大夫の三へちんがらこ〳〵　五樂

渡し舟飛んであがるは飛脚也　素鳥
學者虚して曰くすくないかな腎　盞覇
玉の出る花火を母の留守にかひ　鼠弓
ころび藝者のしゆりやう祇王祇女也　同
馬の尻などへ君子は近付かず　八中
い丶寺を一度明智はしてもらひ　文祇
した馬とぼんござ合羽籠のあと　龜遊

七月廿五日開

奥様のこと存じたがいけぬ也　玉簾
繪馬は啼いたれど鰹はない所　眠狐
蒸籠へうその革文箱を添へ　五樂
書きつゞくればあやしうぞ客思ひ　閑々
おろかな料簡地女をきき立てる　同
御妾の妹をもらひにくまれる　五樂
御妾とたてつきからき沙汰にあひ　雨譚
奥口にたのみお針にさげすまれ　五樂
挾箱片々琵琶の側におき　門柳
花の留守もうかなと嫁なぶられる　曾木
歸りにはかしましくない呉服店　眠狐
坤軸もくだくる斗りい丶普請　雨譚

あてにした月が男の心なり　攝州
わざと店子に成つてゐるい丶くらし　秋紅
泣く娘側で如件なり　鼠弓
耳盥あけたを下戸は恩にかけ　同
我内へおしわけて入る長崎屋　同
惚れ所もあらうに女郎襟にほれ　李牛
本望さ紫雲のやうに見せるなり　五樂
人を見ることは傾城上手なり　梅枝
三文につけたが四ツ手きげんなり　曾木
降られるとみぢんはけちな正燈寺　五樂
東寺の門番その頃庫裡へ寢る　眠狐
そも／＼是はおつかない土左衛門　同
雨の木戸うつと他國の人はなし　船汀
年増よくはらを人目に見せぬ也　眠狐
首に箱かけてぶッこつない男　青口
通庵が　しづに任せ芝居也　雀芝
わづらはぬ笞で新造ゆるされる　五樂
むすこの市は大美々々也　曾木
袖の浦様へと蒸籠山のやう　門柳
愚鈍沙彌肴のかえ名とッちがへ　雨譚

口ふさげ後妻蠟に一つする　門柳
あるやつさうち粉も取らずみんな練り　五樂
上州ものの仕業だと源三位　曾木
御新造口のさがないやつに問ひ　玉簾
花嫁に六七人で所望する　眠狐
駒二疋櫻の元へぬきすてる　鼠弓
鐵漿をあつためやと梨子をかじつてる　同
唇さむく切文をよんで居る　門柳
傾城にまで泣事を隱居いひ　雀芝
座頭へも三年濟さぬ孝の道　鼠弓
葉櫻に來たがさつさと石碑よみ　門柳
元船で笑ふも知らず鼎舞　五連
春と秋氣のはづかしい人出入　青口
どふっ娑々アが細腰につきまとひ　菅江
あのとゝはからいと雪をみせて居る　五連
ばら緒の中貫はおれだとふられ客　鼠弓
田樂で崩す小判はあてがあり　素鳥
遣手喰ふ栗二つ三つもらつたの　閑々
じいろじろ下女が見て居るかたみわけ　攝州
人の買つた鰹は大きく見える　五樂

格段安い紫を瞽女は着る　泉河
一本遣ひな兵が二人出る　眠狐
ゆでた鍋團子が一つのこつてる　鼠弓
首尾のよい内に西瓜を賣ると逃げ　綿糸
きさなことおばゞへこ／＼罷出る　閑々
緣づくと親の咄で顔が知れ　攝州
士太夫よりもてるのは廉人也　雨譚
うらなつて來たと棧敷をせまくする　五扇
改年の御慶こゝにも笑つてる　五連
須磨の京などは萬歳はぶく也　五樂
水損のあぜを蹈分け女衒來る　閑々
遣入りはじめの遣入り納めが炭部屋　眠狐
杉の葉へたれる娘は金に成り　五鳥
大嵐柄ばかり持つて此通り　八中
只の茶屋らしく田樂あふいでる　五樂
大屋來て二人に髪をたばねさせ　眠狐
極烟草ずきできたないきせる也　同
梨子割や胴切になる赤とんぼ　素烏
逃げたのを知つてるに去りました也　眠狐
鳥はものかは角兵衛へ十二文　鼠弓

わざと爪とりなんしよともてる也　閑々
下がかりたかみで案じ／＼書き　靑い
小ぎれいな女半途にさがる也　錦江
白いのは夜へ廻してたつて賣り　秋紅
いつところに亂髪にて文をかき　梅枝
大あたり作り六月まで遊び　玉旗
是さ上下が茶もみだと年男　同
菰の中から雨具持叱られる　五扇
障子を立てるとは生娘明け／＼　五樂
田の中へ駕から美女をぶちまける　郁李
澄源は大きなことをおもひ立ち　雨譚
車坂聟を引きずりおろす也　同
いゝくらし裸で娵があまくだり　秋紅
一里塚がからつくと出女さびれ　水砥
掛人どつとと笑ひ叱られる　曾木
一年に一度社檀がなまくさし　鼠弓
酢をこぼし／＼あゆみの板をくる　雀芝
茄子漬にぎ／＼をして女房出し　五扇
狼の糞火にくべて笑はせる　攝州
天象に戀をむすんだ文が來る　五樂

妾の兄尻馬に乗る事は妙　雨譚
口をすくさせて梅若から別れ　門柳
緣の下疊の下で死ぬ氣なり　曾木
檀風を眞中頃でむすこやめ　鼠弓
年ばいの人にむじつのなんをきせ　攝州
橘を十斗袖にぬすむなり　五雀
とぼ口でちわをしてゐる中の町　鼠弓
木下川の猪牙は女房の願ほどき　素烏
納所來て椀をつッ込む合羽籠　鼠弓
朱三をふつたらもう厭なと貴妃はいひ　同
半金二兩二分後は當月中　五樂
命とりめと甚兵衛が名言　五扇
おつかない名ばらもん僧正なり　雨譚
松の内家内ばかりで夜をふかし　文祗
牝雞あしたするときは國を立ち　李牛
近いうちごんせと後家を送る也　閑々
毛延壽なりたけ鼻をひくく書き　眠狐
耕し植ゑたくるみ三文で買ひ　雨譚
てつかりとすると本町草履也　門柳
そぼろ丹前を伴頭うるさがり　攝州

圍れの所まで福寺らしく見え　門柳
客をうつちやつて娘の汐干狩　眠狐
こはい顔一年に二度御用見る　鼠弓
現金さ帶を解いたり送つたり　五樂
南天をなてると紙を持つて出ろ　李牛
もみ大根御用の笠へあてがはせ　素鳥
田樂を喰ひ〳〵知れし御事さ　連雅
小蒲團を片荷に付ける戻り駕　門柳
やけ死んで丸い小判の高利なし　同
今はあだなれ芳町でつかひすて　攝州
道筋はくもがをしへる松ケ岡　梅枝
水引と粘入をひく蛭子講　同
善女人觀音經に二十人　鼠弓
ほころびを縫ふをお針はをかしがり　五扇
せきばくの苫の扃を出て四ツ手　雨譚
寢ましたといふにやつぺし戸を七つ　錦江
細見のすみに地ものの名が一人　龜遊
そらにしらるるは大きな凉なり　閑々
とらへると龜の子からだばかり也　秋紅
百出して居たり立つたり斗りする　五盛
大騷井戸へ西瓜を下女落し　五扇
吉備津宮雨もりなどをふんごかし　雨譚
稻妻は女郎の植ゑた田へ通ふ　素鳥
傾城のたんす其夜のものばかり　龜遊
氣に成つて女房のころす油虫　青ロ
尻やけ猿が琵琶の直をつけてゐる　鼠弓
先づ供は笠をうつちやる雨あがり　同
かつぽれたせな織る側にそぺつてる　閑々
蕎麥粉をつなぎに入れたを夜中賣り　菅江
不參するのみならず文書いて居る　雨譚
轉ぶかんばん兩袖をふまへさう　門柳

牛込御納戸町
催主　蓬　萊
天明元辛丑年仲秋日

川柳評　川傍柳　初篇 二篇 三篇　出來
同　四篇　來寅年出板
板元　池之端仲町　長谷川新兵衞
下谷竹町　花屋文次郎

川傍柳 第四篇

寅正月五日開

太神樂寢卷のまゝを抱いて出る　十口
そりや出たよいかぬ事だと花の宵　李牛
錢は入らないで紅葉の尻がわれ　同
夕涼だれか着物をひつかくし　十口
氣に向いた方へ鳥さしあるき出し　眠狐
虫干のさたのないのを息子よび　玉簾
日に五合づつ妾五人にくはせ　雨譚
地ふくの際で雲助に一分やり　梅枝
文庫から長持の出る暑い事　龜遊
下戸の禮棒であるいて歸る也　同
よればさはれば與中で彼がさた　玉簾
御身こゝろすなほなるによりねだられ　雨譚
山の芋うなぎに成つて羽織也　五遊
のの字を段々ふとくする庚申　雨譚
何より孝行な事を養子する　同
口を大きく明いてゐる日の永さ　鼠弓
海老へ來る鳥追つてる玄關番　眠狐
亂に及んでしばられる花の下　雨譚
大道へかまどの出來るいそがしさ　梅枝
やれ／＼と喰ひつみの子をひつ放し　眠狐
失禮な事かみさまもおすき也　雨譚

正月十五日開

二三人見い／＼行くと海に成り　眠狐
梅屋敷まだ生醉の顏を見ず　五雀
見ともなさ馬の上から咄してる　竹露
萬歳も四五人渡る佃島　眠狐
疱瘡のくすりにむごい時鳥　梅斧
兩方の烟草盆行くつらいこと　十口
二の返しには唐棧を四手のせ　眠狐
組入を買つて來なよと馬鹿女房　李牛
大當り死骸をやつと片付ける　雀芝
女房邪推で芝居ではないかな　五扇
そこは始皇だけ唱歌を聞分ける　雀芝
一ツ文道をしらず妾が兄　雅情
つめらねば傾城手持不沙汰也　五雲
辨天へ一月置きに堅い後家　眠狐
かねに怨はかず／＼ござる掛取　五扇
おもしろくないとは素見尤な　梅枝
つれはみんな年寄だと母油斷　李牛
のびをする如くに凧の糸を賣り　十口
まん中にむんずと坐してるが三分　雨譚
雨やどり鰹をいじり叱られる　五樂
母への返事麥飯で封じてる　攝州
おつと一度に立つまいと舟がゆれ　五扇
晩に來て聞くと三味せんかりて行き　同
田樂をくふからしれし御事さ　梅枝
目見得乳母聞けば三十三といひ　十口
だゝをいふのを舞臺でおつとめる　雅情
裏から一人來なんしともてた奴　連雅
十五日幕と屛風の施主が出來　梅枝
まぐろ賣おろすと犬が寄つてくる　雨譚

正月廿五日開

裏店のすつとはづれに正一位　雅情
女郎をかゝ樣と云ふむごいこと　卜文
かんざしをさした率頭を禿追ひ　鼠弓

醉覺めて見れば陰間を抱いてゐる　攝州
銚子の口をいたゞいて下戸はなめ　梅斧
緣遠さ向うの酒屋うるさがり　雀芝
踏垣の鎰借り石尊へ日着なり　五扇
不器量は年始がてらに逢うた嫁　眠狐
常が常本の謠をとめられる　雨譚
親にだまされ持ちやるなとどら仲間　攝州
十四日までは仕立屋五六けん　五樂
すり火打うつてる所を渡ります　雨譚
ぬかるものかへと袖から羽織也　卜口
本店をたてに女房のりんき也　雅情
よし垣に人のなつてろ嫁の藝　五扇
旦那より家來の方が笑はせる　眠狐
師匠樣二軒つゞきに店をかり　同
かんざしをふきながらもう行つて寢や　李牛
とんだものふくさとまんぢゆうが名代　鼠弓
小細工はなる手ッつきのくだり賣り　雨譚
千差萬別なる姿俄雨　玉簾
十七里四方へ少し通り雨　鼠弓
四五人前の蛇を持つて聟歸り　萬枝

六月一日淺草淺間社開

谷七郷をまごついて嫁あるき　梅斧
男女の愛着夜鷹をいだく也　雨譚
價千金で客留の札をはり　雅情
うれしいかどうだと淺黃花をくれ　五樂
よぎもなき無心三井へあつらへる　眠狐
汲む度に佐吉は指を入れて見る　半黃
背藥のあるが細見明地たり　鼠弓
姑のものと相聟で嫁出る氣　五遊

二月五日開

駒形で見竹町で見牽頭駈け　燕子
もや／＼のわけで俄なかねの禮　素鳥
先づこんをいひきらぬうちどうろ／＼　多笑
島を賣りや三口とそこら遊ぶなり　卜文
花の雨奥中をしぞおもふなり　眠狐
傾城はかすかな所に義理が有り　素鳥
賣るうちにもう買ひにくる扇箱　雨譚
綱ぶつて伴頭藏へ引つたてる　連雅
さい尻でちり毛かいてるつゝみ唄　鼠弓
夕立のたんびに三分一に成り　攝州
知り申さねえときとくな渡守　五樂

千兩で四手一挺おめき込み　卜文
早い御花見左兵衛樣の奥方　水砥
勘彌で札賣切り候いゝ天氣　玉簾
正月はきのふに成つてよめの禮　攝州

二月一日開

大笑鼠花火を狆がほえ　眠狐
いやはや氣の毒師匠番犬ふられ　雀芝
をかしいと嫁ふり付けたやうに立ち　繼遊
きつい行過銀ながし取りあげる　五樂
御免駕唐紙半切二三つう　鼠弓
太夫とは見えず清水屋權次郎　同
爰にあはれをとゞめしは十九才　李牛
藏中をちび／＼飲んで直が出來る　繼遊
萬歳の一間こなたで嫁ころげ　水砥
居風呂の仕舞どぶから湯氣が立ち　鼠弓
大和茶屋やはらぐ風俗ではやり　半黃
おいてゝへ居るよ／＼ともてた奴　李牛
足の裏まで匂つてもてぬ也　眠狐
ごふはらさ隣へはひる沓のおと　李牛
あてちがひ蛤二升桃の花　鼠弓
掛が着いて候と刀を杖　李牛

爰は大見世と四五人すぐ通り　鼠弓
おらが嫁聞いてくんなと姑いひ　五扇
笛吹の引つぱりたらぬ午祭　眠狐
魚鳥留の札でしらみをも潰し　鼠弓
八朔の熱い所へうられてく　眠狐
姑女に聞けばすなほな嫁はなし　五扇
古椀を買ひにへぼくたおやぢくる　鼠弓
奥様をゐしきに敷くと局いひ　玉旛
伯夷叔齊しなのとは大ちがひ　鼠弓
四ツ人寄る。とけしからぬ悪い智恵　素鳥

二月十五日開

其氣では植ゑぬ柳が爲になり　五樂
牡丹一輪で持佛をおつぷさぎ　鼠弓
蒸籠の蓋をあけると神が吠え　攝州
見人のある程才三は勝にのり　玉旛
二三人大名向きが賣れのこり　連雅
下戸が出て二百引かせる初鰹　十口
糸だては困つた人に賣るの也　水砥
幕明の役者うごいてつつぱひり　雀芝
遠くからしつ叱られる野かけ道　眠狐

馬鹿なとりなし間男は一統だ　五樂
さも浦山しさうに子を抱く女郎　ト文
なげきかなしむとぼゝに四手駕　同
あら世帯一夜ぎりにて仕舞はせる　攝州
内に女の子去つたのとは見えず　十口
行燈へはら／＼毒があたるやう　雀芝
こゝに居やせうと棧敷の鼻へ嫁　眠狐
こり／＼としたと下村車力出る　鼠弓
紫帽子後家の氣を奪ふなり　眠狐
道具はさみ箱の後から下駄でくる　梅斧
藏宿を出てから四手早いなり　眠狐
海に居たとはあべこべに平目くる　雨譚
ほうづきをほき出し禿返事する　梅枝
おはぐろは女房持出す十三日　鼠弓
いづれおろかはない内に三分なり　雨譚
奧州は會者相州は定離なり　攝州
はぜのくふ盛りにはでな寺參り　五扇
帳面へ付けてくんなと息子それ　竹露
抹香の火鉢でせなあ吸付ける　水砥
のまいでも飲んだで仕舞ふ仲直り　竹露

團子のくしで早乙女は足をつき　鼠弓
近い内來なとから／＼錢の音　同
土用干娘一口いゝきげん　雨譚
緣の下のぞくは御用邪推なり　雛遊
なめくじをつかんで座頭こまつてる　五樂
長いふみおもふ寢ざめの枕もと　鼠弓
芝居へ一人取揚へひとりやり　同
ある夜のむつごとにあてにしていんす　李牛
銀のやうなるかんざしは下女も持ち　ト文
壁土の中で座頭はがなつてる　燕子
何の出入りかなぶつたり叱つたり　竹露
割菜でも只よりやましと大だはけ　梅舎

二月廿五日開

云ひさうな顔して後家に金をやり　五樂
こりはてて女へもどす揚元結　李牛
大きなだゞつ子を總つれあるき　眠狐
觀音で顔をあかめるへんくつさ　燕子
讀んでも眠くならぬ本息子かひ　五樂
待遠さふくさを奥で譽めてゐる　鼠弓
母が麥めしで娘が直に賣れ　眠狐

毎晩御たいくつあばたとおたふく　水砥
わるいれうけん大黒は質物だ　ト文
耳へ口あてるは何んぞくれろ也　亀遊
錢車じやら／＼ものを履でおし　雀芝
がつかりとお針八朔ひさて居る　素鳥
雲中に聲あり辨天が見える　五楽
寝は借物とお妾不首尾也　播州
素通はなりやせんよといゝ男　竹露
馬工郎の一鞭あてる俄雨　同
下駄と燒味噌に高尾は引つぱられ　五遊
二百兩持つて行どにこまつてる　五扇
犬を叱つて乳貰ひを内へ入れ　同
十軒で乳母が見付ける里の母　ト文
ところてん喰つてる奴を御菜ねめ　鼠弓
七で顔直したに九でをしいこと　水砥
茗荷のまへで見とれてる馬鹿野郎　甲鼠
丁字屋の濁りをとつて息子行き　梅枝
道のあんまり上手なも下卑たもの　十口
いゝ方の目もいらぬ氣で國を立ち　甲鼠
もうせんをまくつて納所一つ出し　眠狐

家樽を置いて人相を云つてゐる　雀芝
そんなお繪では御無用と人のよさ　同
しづかにしなよ今に出す亀の首　鼠弓
盃に手をあてて太皷を廻す也　眠狐
だまり／＼と花嫁の食のよさ　玉雁
讀んだだけ息子三年こたへてる　播州
駕かきのちつとよおれる雪こかし　眠狐
願うたり叶うたり聟と伊勢屋出る　雨譚
業が煮え畑の柿を根から切り　五楽
はな貴が黒羽二重で五六人　眠狐
磯の禪師が附いて來て二分取り　同
其年の外科おしつめていゝ仕事　雨譚
輕井澤おもたい夜具を出して着せ　鼠弓
四方山の咄の後で金のこと　同
嫁雑巾をはれ物にさはるやう　梅斧
ほとゝぎす見なくす迄は詠めてる　梅枝
三つ敷く上が地者ではやる也　眠狐

三月五日開

親舟も尻をはしよつて汐干潟　曾木
見習の分は四五人うれのこり　五楽

大名と乞食を女房くやしがり　五楽
よつぽどの無心遣手も列座也　同
是ばかりわしが落度と意地つぱり　竹露
御氣に入り古鄕寒き女なり　亀遊
そこへ捨てまいぞと叱る犬つころ　鼠弓
土手をすた／＼と身持のいらぬこと　水砥
もう廿四文買はうはけちな難　五楽
鳥の毛を物干棹へつけて賣り　五扇
おもてふせなる傾城はあけぬこと　雨譚
新五郎手足を折つて乗つて行き　五遊
臺所に傘でかけ取待つてゐる　眠狐
四五日は先づ寄り付かぬ旅戻り　五扇
横に五度うなづくと杜若　五盛
いゝ息子となとみぢんに太皷する　雨譚
唯でさへ手を置く妾のひがとまり　眠狐
田楽を焼くうち拾ふさくらんぼ　鼠弓
天にあらば月地にあらば敷初　李牛
床花をたしかに浅黄わたしてる　鼠弓
しんしにてはるかに舞ふを嫁をしへ　五遊
うつかりといまだ娘の氣でつめり　五楽

清洲の使者の屋敷向うてころひ　雨譚
放馬袋町から引いて出る　鼠弓
やかましいはず妹と是もんだ　卜文
いくぢなさ毎日なくす藥紙　鼠弓
留守ながら文句を華陽作る也　玉簾
連環を行はせるは玉屋なり　雀芝
四萬九千五百石は御益也　雨譚
北方に顔よきひとり三分也　十口
お里の使雛と見え乳母は駈け　竹露
不義者見付けたと五兵衛とつかまり　五樂
間男も座頭は五兩一分とり　龜遊
せなァ來て牛いさかひで引っこませ　燕子
あら世帶鐵氣が出るにこまつてる　卜文
火打箱下女うけ取つて直につけ　眠狐
二十六挺の四手を急がせる　李牛
外聞のわるさ持參が孕んだり　眠狐

三月十五日開

鎌倉へ義理で立つてく雨隣　雀芝
おもしろさ燈籠昨日切ですみ　鼠弓
ほとゝぎす未だほていの手に入らず　五盛

三ぶとん大奉書の熨斗包　鼠弓
手をとると娘からだをちゞこめる　十口
きついこと婆ァが一人賣れ殘り　五樂
いけぬつら人の客衆をよく覺え　骨木
戸一枚うるさく思ふほとゝぎす　素鳥
お熊以後とび八丈が賣れ出し　眠狐
蛤も梅も女房もう食はず　五扇
芹摘の笊に田螺が十斗り　素鳥
しんし賣江戸なれたのは無腰なり　雅情
出格子をにらめて通る俄雨　五盛
目見得來て身持の嫁を奥へやり　卜文
失禮と知りつゝ一人寢せておき　梅枝
寢所のないが四五人うれのこり　雨譚
あぶなっかしい女房をおやぢ持ち　攝州
運のよさ赤合羽にて娑婆へ出る　五連
野郎めと居續を伯父安くする　鼠弓
をかしさは齊がけ直は云ひませね　眠狐
二代目はむつの花さく國へ行き　玉簾
とんだこと下女はき溜と浮名立　五樂
お小柄はなどと古句で落手する　李牛

有りふれた娘は息子不同心　雨譚
方丈は留守だが蜂はこはい也　五樂
女房の聞いてる內は眞間咄　同
雛は屋根へ逃げるがやっとなり　十口
場で貸した金をせつつく花の暮　五樂
地を打つてせなァ妹に意見なり　雨譚
妾が兄湯治落馬の打身也　眠狐
杉の板脊中にしよつて見とれてる　玉簾
庚申をうるさくおもふ新世帶　雨譚
鯛をならべてあいちつと／＼　五連
正月は黒田三月小笠原　水砥
出來物の横へ根のはるけちなこと　五扇
大詰に足ばかり入る役者出る　眠狐
そつこら中のよごれる藥なり　甲鼠

三月廿五日開

五十里も先を手に取る呉服店　龜遊
氣がもめんすと九年母の皮をくひ　雅情
ちやうどなら乗りやせうは只の駕　五樂
花戻りしほれたつばな蓮華草　五扇
駿河様滝江様も御たいくつ　桝水

よし原は何でも一分する所　眠狐
時鳥さくらをぬいたあしたくる　五雲
むかしに成つたと花見のおやぢ同士　五樂
時候たがはず鳥も出る魚も出る　梅枝
猫が證據人金子五兩出し　鼠弓
生抜の女房と見えてじやばる也　玉簾
向うの子禿をやつて取りよせる　五盛
あの菊を見やれと艾あぶつてる　五連
こはいことお針に借りて心待　五雲
むねんの涙天蓋でかくすなり　雨譚
何不足なし葬禮に杖を持ち　鼠弓
聖天の横そつぱうへ漕いで行き　園松
裏口でわん／＼いつた晩に迯げ　五扇
星入の顔が四五反うれのこり　五鳥
切入りの中へ餘の儀にあらず也　雨譚
あの嫁が行かばと芝居はづす也　五樂
いゝ涼はなが見たくば吉野丸　鼠弓
空へ指さして笊の直つける也　梅枝
間があるに丈高はこゞむ也　鼠弓
もしへ紙を一枚おくんなんしよ　李牛

あれどうもかゝ様えゝと菓子迯げ　鼠弓
伊豆みかげ橋をも井をもふみこはし　雨譚
あさましい根性骨をばゞア持ち　曾木
幕明の奴手桶をふり廻し　鼠弓
野郎の宿下り高い所へ上り　五鳥
借りに來た時は正直さうな顔　十口
傘で小言いひ／＼薄買ひ　彌柳
わるい持遊と青梅とりあげる　眠狐
樽の栓關所／＼で御用出し　五扇
酢い酒をのみなさるかとせなへ出し　五樂
娘を賣れと陽兵衛や源兵衛いひ　同
高砂や石なけけちな初節句　五盛
二十一日のあるものをそれ師持ち　梅枝
からだは帳面首は番頭也　五盛
二三度はしかつて里の母かへし　川里
癜醫者の玄關四つ目の狆が居る　五扇

四月五日開

秋來ては櫻のあとへ灯をとぼし　五扇
いづれも様と連立つて眞間へ行き　五樂
古寺の紅葉女郎と化けるなり　五雀

外でまろけろとはむごい直切りやう　李牛
摺鉢のわれても末にあはぬ縁　五扇
臺髪のたがひ畫三附けまはし　雨譚
氣をかへて上總から出る月を見る　五樂
おもしろさやりての外は小袖なり　鼠弓
あら世帶井戸の向うでうるさがり　五扇
一番に來たが奈良屋の藥取　眠狐
逆桐小判一兩にやつと賣り　同
子を賣つた跡へ捨子を貰ふ也　同
さかさまに回向してゐる十九日　五遊改東之
下駄で來て本町通り大こまり　桝水
清ぞりが濟まぬと嫁をさがす也　五樂
へろ／＼武者を召連れて御慶也　玉簾
じつとして居なんしなといむごい奴　李牛
急度した馳走生きてる魚か(を?)買　五羽
行水の相伴に來る一人者　同
けふはもう上るなよやと腰をあて　玉簾
田舎下女平氣で江戸を馬にのり　十口
むつかしい姑をおらあもつたもの　川里
運のつくばひはらんだへ手をつける　五鳥

時鳥なくに三つ口目見得なり　眠狐
雛買つて來てちやらくらを女房いひ　雀芝
兄弟他人のはしめ鼻をかくなり　五連
夢々うたがふことなかれ大根　鼠弓
二つ三つたゝいて嫁の自慢也　素鳥
ふんどしへ脇差をさす醫者の供　眠狐
目黒の不首尾栗飯が石のやう　雅情
芋ばかり丸めて下女は叱られる　李牛
ふとい奴小判のやうな物をもち　五鳥
信玄公のけんびきははらぬ也　水砥
四手駕内からのせるむごいこと　卜文
亂鬢長髪でそこら覗き込み　連雅
丹精をぬきんで四手にて通ひ　玉簾
醉がさめ見ればからだを巻かれてる　雨譚
嫁內で草履をはくはきらひ也　五盛
あそこで舞ふと羽子板を日へかざし　同
とうがらししたゝか食ふも下卑たもの　眠狐
地ひゞきをさせて淺漬さげて出る　同

四月十五日開

諸色高直川手前川むかう　桝水
どつとと笑ひ孝經を茶屋でよみ　五樂
くどかれて菊石疑深い也　十口
地離れのした嫁息子呼ぶ氣なり　眠狐
煙の出る箱を息子の先へさけ　同
男の矢取つて慾心なやつが射る　梅斧
出ず入らずでなし息子の黒小袖　水砥
水も汲み手鍋もさげたお釋迦様　門柳
夏の正燈寺お袋迄くはず　東里
一重は不氣味な醫者の藥箱　眠狐
云ひつけもせぬと禿も見ないふり　五樂
唯來ると愛敬のあるかつを賣　素鳥
かなづちのあたま何處へか飛びなくし　鼠弓
ずつと來て乗るのが四手機嫌也　桝水
ふつまりさとう／＼母の聟になり　五扇
釣つて來た鰻是非なく汁で煮る　眠狐
淺倉でないか立派なりで出る　五扇
もとゞりを切られ殘念びんしけん　鼠弓
金をころして使ふのはちりき也　文祇
いうにやさしき物干で取りたがり　雨譚
有りあまるから行きなさるのさよしさ　李牛
銀の害息子一口やしなはれ　雨譚
解脱上人か猪牙からちつと見え　五扇
賣れのこりいゝ弔ひの口が降り　同
ふり袖を將棊頭にむごいこと　眠狐
脇差をさした女郎を縛るなり　卜文
他人になるまで肴を喰はず居る　十口
夜更さふけに何事か及よばり　玉簾
とかまると地聲に成つて蟬はなき　五雀
黒猫のおかげでねずみ取になり　亀遊
四五人にあたり古骨伊勢屋賣り　眠狐
夫よ妻よと云ふ事は相模なし　玉簾
一幕に成つて落ちつく百棧敷　李牛
呉服屋でぶちのめされに万左衛門　五扇
申し／＼御女郎と淺黄うら　門柳
馬で居る癖に女房直き出さず　梅斧
蛇をくれた客衆と禿覺えてる　五扇
間男は灰吹にまで手をあてる　東之
中堂へ寝ころぶを下戸引きたてる　五樂
舟の名を書いて踊子呼びにやり　素鳥
けじ／＼に關取馬鹿な形りで逃げ　鼠弓

聞かつせえ二疋産んだと姑いひ　五狄
豆腐に紅葉是と云ふいはれなし　十口
おしやらくを乗せてせなアは江戸へ出る　雨譚
隣の女房はいただと狐附　鼠弓
一文錢を道へをじやく／＼　卜文
わるい癖とかくに飲むと切りたがり　五扇

四月廿五日開

むつまじく夫婦づれにて松ケ岡　雨譚
かくべつな物三味線は不調法　五盛
きついこととお近いうちがどうろ／＼　五樂
多門兵衛が大八をいひこめる　五盛
日の永さ下葉の墓所へ行當り　雀芝
喜悦の眉をひそめてる三會目　雅情
向うのを笑つて内の豆をまき　彌柳
渡したけれど渡されぬ下手の鞠　雨譚
しひられて上戸山椒の方にせう　五扇
酒買つた内で教へるあら世帶　五扇
四つ手を見送つて泣いてるおけんつう　門柳
へつついと鉢合せして目が覺める　梅枝
病人へ半病人が四火をする　五樂

鶯は上手にあるく梅の枝　素鳥
おとこをいたしめて平川へはひり　雀芝
推量をしてくれかしに後家作り　五扇
さて安い物と吉原買ばなし　眠狐
をかしさは女衒の娘いゝきりやう　燕子
その昔四手女郎も買つたやつ　鼠弓
こまつた奴と雪沓を伯父貴はき　桝水
不案じは龍王武士へ鐘をやり　眠狐
件頭を男のくどく氣の毒さ　李牛
明方に女房辰巳にあがる也　梅斧
買つておく瓜は畫寢の覺め次第　素鳥
酒の直段に茶の賣れる美しさ　卜文
長髪にひつときこはい地主さま　五扇
ぼた餅に目口のついた運强さ　李牛
唐犬に剃付け座頭おして出る　眠狐
一生を葭簀の内で見て貰ひ　五雀
壁に家名を書かぬので品がよし　雨譚
しばられた飛脚を杣が來てほどき　眠狐
うつくしい相模車へがきをのせ　五扇
嚢中自ら鏡なくて素見　梅斧

ゆるされる時も勘當叱られる　玉簾
妹聟までを痛めて緣に附け　五樂
富士山を大きな下駄で越して行き　眠狐
合羽籠先がとまるとらんがしい　李牛
いそのかみ式部が枕詞なり　玉簾
梅に鶯柳に幽靈也　雨譚
はじめてと見えてきよろつく中の町　桝水
一二寸かき立てゝ又墨をすり　李牛
今頃は和尚さかりをたばこ見せ　桝水
くさつても鯛を伊勢屋はくはぬ也　眠狐
おれを見て鶏イ／＼と云ふやつさ　東之
はらさんざ待たせておいてくれろ也　李牛
よつぽどの腹立お針立つて追ひ　同
買つたらばどうすると聟胴をする　同
角兵衛獅子はや朝飯であるいてる　東之
阿羅漢の段々殖える大當り　雨譚

五月五日開

井戸へ手をあてゝ後妻聞きたてる　五樂
一段にして鎌倉で遷化なり　雨譚
一口のんちや婆ア下におき　李牛

さいかち虫の飛ぶことを子は知らず　眠狐
けちなこと厩へ猫を連れてくる　桝水
まだ早し／＼紅葉へ寄りたまへ　五楽
琴爪を足でいためるやりばなし　李牛
今質を置く所へくる心待ち　雨譚
素手で来て大門を打つ次郎左衛門　文祇
ちよつちよと立つと思つたらくれろなり　李牛
あらひ粉をくれさうな形にて弓矢　雨譚
よし町の淋しさ薺賣つて來る　文祇
くれん返したと物さしひつたり　李牛
一帖の小菊大勢禮をいひ　文祇
いざさらば手合にむだな鶴イ／＼　桝水
いゝ間合外科おくり膳ふるまはれ　眠狐
片瀬の留守に大どらを息子うち　鼠弓
田も青々と正月を庄屋ふれ　ト文
夫婦してきれいなとこをはいてゐる　梅枝
人のよさゆふべの金を持つてくる　李牛
二月(ふたつき)と十五日嫁はづかしい　龜遊
銀杏の木小楯にとつて阿闍梨待ち　桝水
二三人くゝり榎を根から切り　五扇
哥字をば毎晩死んだ人の作　眠狐
牛の脊をわけて六夜は牛つぶれ　五盛
娘で喰ふ中(なか)に大平楽な見世　十口
三分一灰を女郎は客へ出し　眠狐
棒組やもてさうもなき手合だの　文祇
隅から隅までづらりつと嫁ひいき　門柳
なんの唯居ようと後家をそしる也　文祇
暑いこと五六に下女はぶつちがひ　五扇
手の煙(すゝ)をはたき棒組呼びたてる　雅情
按察法眼盤水寺でしやれる　眠狐
虎の威をかりて家中の笑ひ者　雅情
八兩を仕舞ふあとから十五兩　五盛
百合若の末孫と寢るけちな晩　東之
万八をくり／＼嫁をにらめつめ　五連
むかうの人禿は鼓唄でよび　李牛
なり込むとてつこにおへぬどやのかゝ　素鳥
たて直すうちまな板へ足をのせ　眠狐
まて／＼と障子のたつた船返り　五楽
嵐のあした夕がほの汁を喰ひ　素鳥
葉ざくらに成つて門なみぬいて捨て　梅枝
印判の墨賣つたとこつひに見ず　五扇
行く道と來る道のつく森の芝　素鳥
十三日小鳥は梅につるされる　李牛
百出してほつきあるくにかゝつてる　五盛
馬鹿な事夜遣の耳にほとゝぎす　同

五月十五日開

のろつこい味噌で平日のさしみ也　眠狐
三味せんを度々拾ふわるい酒　五盛
冬の月より文儘のおつかなさ　五扇
間數(けんすう)は五寸廣いかせまい土地　眠狐
碁をうつそばに二百疋げびた事　桝水
先妻の子をばおやぢが抱いてねる　五扇
がらくたを干してる嫁の美しさ　玉簾
若殿を設けたで一生法華　雨譚
ちつとおひろひ遊ばせと在五云ひ　文祇
親父盛んに金藏へ灯をとぼし　素鳥
面黒い門をくゞつて花見也　桝水
丸腰は可也淺黄でぶつこはし　李牛
うかりける人とはげしく姑(しうと)取り　雀芝

ころびの種類お表へ目見得也　雨譚
高縄で我は化けたとおもへども　梅斧
ほたるなどおみやげにしてすゝめこみ　玉簾
羽二重の門番のゐるむづかしさ　同
姪だのに貰つてみればにくい也　五盛
おさすりを貰つてあとが痛いこと　多笑
たて引でからかはを食ふ馬鹿なこと　梅枝
我敷島の道ならでかるたの繪　眠狐
三國志貴翰の所は飛ばす也　雨譚
どろぼ〳〵と大黒屋おっかける　十口
親父も吉原宿には度々とまり　雀芝
縁日に衣紋つくって御用出る　玉簾
えい〳〵と二三度いふと問屋也　十口
おふみさんやおかうさんがどうろどろ　龜遊
ほゝづきを嫁える程に〳〵　栟水
琴の上あるいて行つて縁を切り　五樂
目くら縞着せ琴の師へ通はせる　眠狐
おやぢいが叱りまするとなぜ云はぬ　李牛
かるた船堀へつけろは勝つた奴　素鳥
ひらめかし驚く下戸を追廻し　梅斧

身振や聲色で母の金を取り　雀芝
千石持つてあら骨を折る男　龜遊
内かぶと見抜いて釜を安くつけ　東之
水貰もぢゝいはぬるいやうに見え　眠狐
鍋のふた寸をとらんで二度あるき　李牛
花見ほどふつくりならぬ紅葉狩　山生
あたまから先へ坊様蚊にくはれ　五扇
摺鉢をかりて亭主のあらを云ひ　同
飛んだ美しい奴を武士はおそれ　雨譚

五月廿五日開

入相をしむは金のない花見　攝州
もう一つおなめなさいと嫁へさし　五樂
鏡臺や鏡を拂ひ琴を買ひ　同
二人で二分閣にしよう〳〵　同
つゞきましてよい御天氣膳に居り　雨譚
うるさゝはから重箱と文が來る　眠狐
燈籠はあとの祭も賑かさ　五扇
きれいな仕方首取らず金とらず　同
女房さへあたりがいゝとねだるやつ　卜文
おはぐろの中からちりを六本出し　梅枝

からかさを擔いだ分は恥でなし　卜文
四五會目取りつからしと遣手出す　五雷
一晩に再縁をするいゝ女郎　雨譚
五兩おい十兩おいともてるなり　李牛
油屋は二代生藥屋は一代　雨譚
丁字屋の濁りなき身と息子成り　同
小づらのにくいはをんなの皷なり　十口
假りに娘とあらはれて二分しよしめ　五樂
觀世流のきゞすを藝者あひしらひ　玉簾
眞先は當世へ向く稻荷也　五樂
みんながなぶるからと關守通し　五扇
鎧と小袖いれかへて敵討　同
目立つ筈冬木の中へ紅葉也　眠狐
夕立に取込んでやる隣の子　五盛
しらねいと見えて十一眞桑瓜　五樂
左りに二分握り右りでたぶをなで　五雷
その上に牡丹餅にして姑くひ　雀芝
吹竹のあるのにおしな口で吹き　雅情
くそのやうな仕舞だとかくれゐる　雨譚
井戸端で聞けば女房が理窟也　悟扇

蛭子も見せろは人のよいの也　十口
にくい口富でも取つて去りなさい　五楽
浅利と名字付いていゝ妾が兄　桝水
新造の袖棒ほどに引つぱたき　素鳥
おむづかるなと鬼灯を下女まとひ　桝水
回向院ぶつしやう猫の面をきかれ　彌柳
暑いこととんぼ座敷を通りぬけ　眠狐
仕さへすりや外にわるぎのない浅黄　五連
後刻御意得ようとさえぬ一座也　李牛
日の暮れなるまゝに鏡臺に向ひ　東之
にぢる宿より憎い内儀の笑ひ　玉簾
うぬはまあ／＼と遣手しばりあげ　李牛
はしをりかゞみ琴にこり馬にこり　玉簾
あつちこつちへころり／＼とはやり　雨譚
四書の間に三冊のりいれ摺り　同

六月五日開

奥様とこしもと二人賣れ残り　五楽
此主湯王とたらひへかきつけ　泉河
底なきのあたり書きさし文を書き　同
覚よき初會三月十五日　五扇

四五人も落ちて土橋をかけ直し　素鳥
是おれを見て行けといふやうな松　雨譚
わづかな善根鳥さしに念佛　同
一陣の雨で呉服屋ワイヤワヤ　同
武士は傾城町家ではばいた也　五連
切文の使の衆やとやりて喚び　五楽
大一座から約束はそねまれる　李牛
御手紙啓上と書きひつさばき　眠狐
みやげに買つた蛇の舌でうそをつき　雀芝
おつかさんといふのにと泣くむごいこと　雨譚
姉始めぱち／＼もので片付ける　李牛
いとじんじやうな妾だが太つぱら　雀芝
座元がどうしてかうしてと地紙賣　東之
ふつつりと息子四五日思切り　五楽
牡丹や萩の名をかりて俗な餅　雨譚
池までは手のとゞかない奥家老　雨譚
品川で精進向は先へうれ　卜文
借りた子におもしろがつて嫁くはせ　眠狐
正燈寺とうに後さと笑はれる　李牛
刈豆をのけて百万遍はじめ　眠狐

暑いことあはびをつるし水を打ち　梅枝
よく爪を取るぞと姑小言也　五連
かゝつてゝいびるさうだと里の母　玉簾
見ぐるしさから花生が掛けて有り　眠狐
行ふ者也ヤア巾着がない　泉河
雁高と語るが女中解せぬなり　五雷
古事來歴をはなつたらししやべり　玉簾
傘を伊兵衛へ返す次の年　素鳥
茶代をば一分置いてく憎いこと　眠狐
寝所へ細工を仕掛け手代脱け　雀芝
名高さは五色にもれた唐衣　雨譚
四つをうちますれば闇と侍ります　同
二百兩がいもを買つて一生くひ　泉河
万歳が歸ると嫁はのろり出る　多笑
鎌倉で無理な所望に二人逢ひ　雀芝
お妾に物を云はれぬおつかなさ　十口
あたりをきつと見廻して又眠り　五連
あつためてくんなと女房一本入れ　雅情

天明二壬寅年
牛込御納戸町
催主　蓬莱

川傍柳第五編序

川傍柳の水にしたがふや渭水に綸をたるるに似たり。柄井の翁が滑稽をこのむや木によつて魚をもとめつべし。こゝに小車のうし込連中、くれ竹の四谷の好士、日々に唱へ月に和して翁の精選にあづかる、すべて五車にみてり。嗚呼川傍柳の水にしたがふや方圓の器のごとく、はたよく翁世とおし移りて、もはら風詠をこらす。好士の咳唾りつ玉をなすより柳の糸につらぬきとめて一小册となせり。あゝ川傍柳の水にしたがふや潺々としてつきず、柄井のおきなが風流のいたれる、綿々としてたえず、たちよる道の柳かげ一もとよりして終に五もとにおよぶ。されば翁をしてふたたび五柳先生とせん乎。

天明三癸卯季夏六月　朱樂菅江

（書判）

川傍柳　第五篇

卯正月五日開

萬歳に乳母客札が二三人　五扇
云ひづくに成るとむらさき時鳥　五樂
中程で安いとおもふ九十川　素鳥
元日に牛からで居るだゞ小僧　水砥
祭禮のあした笑止な鉦太鼓　眠狐
舊臘はお日がらもよくけちな嫁　同
居喰ひなら親に成らうと智惠がつき　雀芝
細見を持つて息子の甕腰なり　間々
今時分うせてと遣手上り下り　五樂
出來ぬこと嫁才藏の眞似をする　同
衣よりたつとく見える三つ蒲團　五扇
皿に桃盛つて傾城あやしてる　五盛
紙子着て川へはひるをかついでく　泉河
着類のかはり蓋物を入るゝ也　梅枝
むごい事すがゞき覗き〳〵彈き　五樂
なめものをうんと持たせて和尚出る　眠狐

いたい晩(原本不明)い笑を床で開く　間々
あとをひかへて慕ひ行く下り取(さがり)　同
空寢入りのツぴきならぬ蚊にくはれ　素鳥
いツしよ懸命聟渡しで左様なら　猫遊
女房に腹一杯をあばたされ　東之
女房が留守で一日さがしごと　五風
松の木のせりさげの場が嫁の出端　水砥
正月をする氣で家中煤を取り　泉河
仕舞つた詮議其文をそこで讀め　五樂
飲む禮者心當りが二三軒　春松
さかなの樣に御師の狀つみ交る　雀芝
氣の附かぬ病和尚の腎虚也　五盛

正月十五日開

預ける物だと子供の禮の供　攝州
氣味のよさ團扇の下に十日居る　万疎
賣据(うりすゑ)を公家と武器(ぐ)とに借りられる　同
ちりめんざこは吳服屋の硯蓋　素鳥
琴を逆(ぎやく)に据ゑて下女は叱られる　魚交
男と女半分づつ濡れて行く　五風
よく〳〵秘藏女の子置いて去り　五扇

馬鹿な事さへ人をして金をかし　雀芝
地幅を越えて大船に嫁は乘り　水砥
三秋にわたるものみんなみの月　素馳
にじくると見えて孔雀の尾を求め　万疎
縮緬に松の模樣と追人いひ　五樂
二つ三つ妹をはいて縁につけ　同
三ケ日團ひの内にこびりつき　攝州
勘太郎さんが消炭を喰ひやんす　雅情
持參にすぐに孕まれて恥しさ　攝州
お留守居の中へ娘の親が來る　水砥
かみさんをかゝあが寄つてこなす也　東之
子を一人(ひとり)拾ひ梅の木根から切り　五盛
朝見れば土手に裏白藪からうじ　五樂
おめえさん(蝕字不明)申したとばゞアいひ　水砥
おどけ人聞きおぢをして嫁出かね　五樂
内匠があつて小間物を安く賣り　魚交
いやア立派だと霜月十五日　眠狐
通なことと堅い鳥居をちつと見せ　泉河
矢車の上をしきりに時鳥　間々
縫出來た布子一晩(ひとよ)敷いて寢る　素馳

其晩ねこを買つた奴は微塵
安禮者文庫を片身提げて出る
五つの藏へ仕舞つたでたからもの
眞間の連ちと謠でもうたはずや
見ろがしにしよはせて通る中の町
夢があたつて結納をばらす也
地女の年明きを呼ぶいゝをとこ
孟宗がおふくろ勘三の金元
お齒黑を蘇鐵のもとへ捨てに下り
下女夜着をこがし火鉢を取ヤげられ

正月廿五日開

あかしやア住の江やアと美しさ
勞咳下地乘物町を通る
のみかけを吸ひ〳〵廻る宿下り
運のない年明あばら屋へ戻り
女はらから有り姉はふきりやう
鞠の邪魔をしにすつとの皮が來る
干蝶賣仕舞つたは馬鹿な形
一時に下されませと厄拂
亭主の手握つてすまぬ火燵なり

泉河　八ツ過ぎに浦淋しくぞ成りにける
五扇　をかしさは太皷の女房無口なり
泉河　一客が歸るとさがし事をする
眠狐　つれ(吹？唄？)(原本不明)て息子女郎をねらふ也
間々　今見れば女郎も茶屋も高み也
雅情　小野郎を唐犬にして藪醫連れ
五樂　こはいこと咄したまへと亭主出る
泉河　まんぢゆうを積み新しい象が出來
素鳥　三味線は扇團扇は木挽町
五樂　歸つたらみ(し？)(蝕字不明)めと大工こさいてる
治に亂を忘れぬやつは本升屋
水砥　房事とはなんでござるに醫者こまり
泉河　お妾のやう〳〵出來る晝下り
眠狐　すゑた子を擧めると肌を抜いで見せ
素驍　嵐で落ちたと里から栗や柿
水砥　又つらまへて放し龜〳〵
五盛　名代に跡取女郎さづけとく
眠狐　三十一年早く死ぬむごいこと
雅情　廣がつて火鉢へあたり叱られる
間々　馬鹿らしいことは茗荷の謂れ也

眠狐　うこんの一ツ身隅つこで嫁は縫ひ　素驍
同　唐獨樂をそとで廻はせと叱られる　素鳥
間々　寢たふりを心に笑ひ文を書き　雅情
五風　よつぽどの下りばア樣御江戸入り　眠狐
五樂　勘兵衛と當兵衛御帳消しに出る　東之
五風

二月五日開

間々　佛の焚いたおまんまを凡夫喰ひ　素驍
水砥　百兩がつらは夫もよごすなり　万疎
五盛　ほとゝぎす大きな鯉魚の上を行く　素驍
素驍　唯來ても撿校見えのわるい奴　五扇
眠狐　今朝越した渡を運のわるい嫁　同
万疎　紫で龍の都へはひる也　五樂
素鳥　はてさ渡せば渡したと申しやす　同
攝州　箕輪の湯吸付けながら暇乞　素鳥
五扇　まんざらの睦鯛のすし〳〵　間々
五樂　そろ〳〵と焼けぼつくひの髮がのび　水砥
同　奥様はめるお妾にぎる也　雅情
龜遊　海中に人聲蛤を拾ふ　五扇
五扇　長刀をのけて外には何なりと　五樂
雅情　あぢな晩蒲團が六つ賣れ殘り　同

寺の若衆を横柄に後家つかひ　魚交
中の町あらおもしろの春邊やな　攝州
上手に成るのがくやしいは尺八　泉河
百社日を九郎助にして五六人　眠狐
皮切の濟んだ處へ嫁の禮　五盛
姑女はいけまじ／＼と又はらみ　眠狐
西村が見世釣鐘の菰被り　同
うろたへた鮎で紙漉沓るなり　雀芝
子に三味線をたゝかせる暇なこと　間々
捨てゝ置け仕方があるを母案じ　万疎
生酔にこ（蝕字不明）そばへたは舟に酔ひ　魚交
びいどろを吊（つる）すは親父不呑込　龜遊
錢の手を洗つて嫁は叱られる　五樂
いッくらも封じのまゝを在五持ち　五盛
女房や下女うるさがる飲出合　五扇
呼ばれると手拭を解く地紙賣　間々
顔見世に行くわく／＼と暖簾かけ　龜遊
急な客ちりめんざこへ海苔を入れ　雅情
三布團仕立屋乗つて見て笑ひ　眠狐
立て掛けた三味線どうか轉びさう　五風

油屋の小刀光る程切れず　龜遊
塗桶の穴へかき餅入れて喰ひ　魚交
珍しく三味線の鳴る親父留守　間々
なぶられる娘近日行くのなり　水砥
子供等が新五左衛門を取しまき　五風
絹賣へ前後から出て待てといふ　眠狐

二月十五日開

傾城の傾城を買ふつらいこと　五扇
松（蝕字不明）斗（ばか）來るで嫁子の里が知れ　五扇
俄雨椎の木は照り松は降り　眠狐
毎夜小判でなくされて聞きたてる　攝州
目は持たねえが六拾貫目は溜め　雀芝
とんだ盗人さ娘をかつぎ出し　五扇
づう／＼と醫者の跡から出家行き　素鳥
けちな晩取るに足らざる女郎出る　眠狐
心も晴れやらず女房月へ上げ　魚交
あれとあれあいつとあいつずるい内　五樂
水賣は盆から錢を引ッぺがし　春松
うつかりと烟草つぐ手へめッけもの　眠狐
猿返す手紙ひつかき申候　五樂

狀差へうしろを向けて文をさし　魚交
飽きたこと今日も小糠のやうに降り　五扇
すつぽんと鮑の異見を罕はされ　五風
くもつかむやうな詩を出して讀ませ　泉河
油けをのべにて拭くと箸に成り　眠狐
三味線が二挺と琴の拂ひもの　水砥
御子息へ進ぜましたともめるなり　五樂
風呂敷をかぶつたあした蚊屋を受け　五扇
だまつて歸りなんすなと新造寝る　攝州
嫁の禮いなり様のおゑんま／＼　五盛
女房を捨てものにして旅へ立ち　五明
そこが呉服屋大勢に手を拭かせ　五鳥
伊勢町に夜は箱入男あり　龜遊
五十に成つて小間物は不料簡　泉河
わが身はおれが憎いかと淺黄聞き　攝州
つらの悧いのは夫婦の六部也　同
紂王は狐幽王犬がくひ　水砥
獨り者蚊屋を丸めて仕舞ふなり　素鳥
けころ買ふ事は女房もしらぬ也　五風
うしととらこくうに買つて放す也　梅枝

十五けん間口分散秋の末　五扇
人をうつむけにしたる側に淺黄　五樂
もみながら座頭のふくす十四經　磯柳
息が切るゝと雪を喰つてはかける　間々
いゝ下女を置いたと内儀凡夫也　泉河
品川の客を太郎兵衛遣つてる　攝州
行きがけの駄賃言直に嫁は乘り　龜遊
鐘馗大臣のおふくろはどをする　泉河

二月廿五日開

年明の故郷へにしき脱いで來る　素鳥
精進日鰹を貰ひ日の永さ　五鳥
三年忌傾城で弔ふ孝の道　五扇
慾な事お袋樣を連れて逃げ　同
我に成つて和尚寢て見る逆柱　五樂
舞臺の下で芥子だのおろしだの　泉河
江戸ッ子の妙は身代つぶす也　魚交
扇うち敷き座を組むけちな花見　間々
さしみ皿程のへとぼす五丁町　龜遊
松坂を越えねば錢はつかはれず　雅情
此頃松をたてたに竹の園生　水砥
嫁の琴上巳の院の御宇とかや　水砥
いもうとと合傘つらい目に出合ひ　眠狐
琴へつばきをしやすよと姉の擊　五樂
三つ敷く中に疊の上で二分　魚交
なぐさみに一枚買つたやつが取り　五盛
假名附の衆方規矩にてもり殺し　五扇
大雪の中にお針が二三人　五風
十と九の糸の切れたが氣にかゝり　五樂
よくもねえ鶯鼓醫飼つて置き　攝州
金の碇にまんまるな綿を掛け　雀芝
いゝ天氣聟をめつけに七日出る　五鳥
まいす坊主めがと嶋津くやしがり　雅情
勘當はのゝ樣を二度喰つた奴　五盛
紅葉の下で目つかちに成つて借り　龜遊
人の慾すぢかひにさす大一座　攝州
おはつどのあれほとゝぎす／＼　春松
けちなこと宵ッ張りするやつを買ひ　龜遊
ていらくになぶらっせいと下女いかり　万竦
雪を喰ひだんごを喰つて叱られる　梅枝
けんどんが喰ひたいといふ蕎麥嫌ひ　眠狐
皆殺しだぞと鍋蓋おさへてる　龜遊
百棧敷あんまり譽めて叱らるゝ　春紅
坪の中あてそこなつて眞つ裸　五扇

三月五日開

よの花はねつから遣手すかぬ也　龜遊
はづかしさ夫婦で傘を一本借り　万竦
天下泰平見物が五六人　水砥
四神相應の地甚右衛門見たて　五盛
ねだる子に無いとかぶせる菓子袋　素鳥
春日野がお客は名古屋山三也　雅情
四日にはねぢ首にして箱へ入れ　同
首中をせめせつてうをする息子　雀芝
何の實か芭蕉へ落ちた夜の音　素鳥
膝の上膳立てけちな棧敷なり　五扇
四月ほどあからさまには嫁いはず　雀芝
すりこ木の出るのは安い朝歸り　五盛
紫蘇畑色つや／＼と雨が晴れ　素鳥
花活をおつさばくほど桃を立て　龜遊
きつい見え空琴箱や空簞笥　五樂
深川の土の中には猫が居る　泉河

はァさまが六人連でくたびれる　五風
なれたもの和尚悔みは上手也　五明
生酔に供があるのでこはくなし　間々
信玄の負けは一目してやられ　五風
袖のある火燵の出來るけちな内　五扇
大黒といふ人仕合せな女　水砥
乳貰ひの夜は米七しやぶらせる　龜遊
出雲は合はせ相模ではひツぱなし　攝州
いたい事空に知られぬ雪をくひ　万疎
廿日ほど通つてやつと手を握り　雅情
西河岸の下卑はかはらけ色を干し　雀芝
おらが紅葉を賣るげなと和尚いひ　水砥
金がぴくつくにやツぺし手をたゝき　眠狐
盗人も車に乘ればおもしろい　水砥
鼻息があらく成つたで娘迯げ　五樂

三月十五日開

ちり毛から水をかけるが三分なり　泉河
泣く子には勝たれず輕い罪を取り　五樂
後(あと)で居續をしたくなる三會目　同
人間に成ると太皷は見ないふり　眠狐
紅葉見に例年行くがいまだ見ず　魚交
筋違(すぢかひ)へ猪牙を片手で押して來る　眠狐
在所の姪を息子へといやな沙汰　龜遊
惜しい見世なぜ仕舞ふかと十四日　泉河
悪い奴下駄を日當につツかゝり　五樂
餠賣に紙を一束してやられ　水砥
もうよしと梶原うろへ申上げ　東之
下戸斗り揃つて馬鹿な大一座　眠狐
一(ひと)ころびころぶとちつと靜なり　五樂
泣事をいひに女房の姉が來る　同
嫁きやつと飛びのいたあと尺を取り　五明
一貫かりてくださいと人のよさ　攝州
不屈な工夫一旦(たん)請出され　五樂
小指で結び私とあの男　同
氣の毒な手紙然れば悴事　同
ふがひなさ向ふは塀の所へ行き　眠狐
五六年無い袖を振る縁遠さ　龜遊
仰山な家作が奥山で見える　魚交
口書に天蓋を脱ぐ本望さ　五扇
われた皿新參の下女めつけ出し　眠狐
もう二人(ふたり)ほしいはけちな棧敷なり　春松
江戸の女郎の田へ這入るふとどきさ　五樂
思出しやいゝと中落下女しやぶり　五明
一(ひと)月そこらの稽古にてねらひ　五扇
吉原の響は松に花が咲き　眠狐
醫者が逃げると町内が懺悔する　万疎
鼻聲で卑劣な願をかける也　五扇

三月廿五日開

鐵漿で此中うちのもめがしれ　五扇
袖の上から出したので取りにくい　東之
曲げぶしをゆるがして見て一分やり　五樂
又頼みますと車力へ孟母來る　東之
御退屈の御方九十五文づつ　泉河
遣手ありたけ笑はせる材木屋　龜遊
美しさ又と此世にないきりやう　万疎
後棒は肩にくらべて切つたやう　門柳
襁にて母の日をぬく若い後家　同
又來ようではなしとけちな吉原　泉河
があさ／＼籠に五六羽放し鳥　魚交
今出ると雛箱しよつて待つてゐる　眠狐

泣聲で井戸掘たゝき起される　雀芝
首一つ請取申候什物　泉河
吉野紙うるしをこすが力業　素鳥
あれ程の道具が三荷半に成り　雀芝
ひとり者後月とつた床へ寝る　五風
金ならたつた三分だに賣れ残り　五鳥
杜若脇にゆがんだ土藏あり　眠狐
芳町をはじめて通り大こまり　五鳥
板橋へ身内ばかりで旅迎ひ　五扇
譽めながら素人に眉もませてる　眠狐
朱硯を持つて氣にする咄し聲　十口
鴨よりか錢で取りなと女房いひ　五盛
仕合せ三十が九つこつちもの　魚交
去り状を書く手へ母はすがりつき　眠狐
いもうとの方ならと聟じやみる也　五盛
日本の衣で折れぬかきつばた　龜遊
目を明けて見せなと格子からなぶり　五樂
むごらしい掘出物を女衒する　間々
いきに騒いでへこたれる野掛道　魚交
日の永さよく笑ふ子を借りにやり　素鳥

四月五日開

角屋敷ばかりけなるい嫁を呼び　魚交
氣をさぐり合ひ三鬮に小半日　五樂
乳母抱いて握りこぶしの下を逃げ　五扇
傾城のかうべに龜が八九匹　万疎
忙しい日に病人は跨がれる　素鳥
感ぜぬものこそなかりけり湊川　雅情
蜘のこと誰がいふとなく唐へ知れ　泉河
腹の立つむかうへ飛んで光つてる　万疎
一番は隣へしめる見世びらき　五樂
大汗になつて軍を干してゐる　五風
ばあ様の目玉を貰ふ賣れ残り　龜遊
行法つたなく狐になぐさまれ　五扇
事のはし留守の巨燵に五六人　五樂
業さらしごぜのお袋來てがなり　五扇
もてた裏九年母ぐらゐをばたべる　雀芝
生酔は放し鰻をみんな買ひ　魚交
いゝ馬鹿さ涼んだ石で汗をかき　万疎
雲雀舞ふ下にどこだか五六人　眠狐
くたびれて針金賣は腕を替へ　同
小づらの悄いは若衆の女郎買　雅情
嫁はこはがるがばあ様へ／＼　龜遊
樟腦は今日九重に匂ふなり　門柳
小夜着きて淺黄のふくさちよびとかけ　雅情
行燈をぐるりと張つて大笑ひ　泉河
衣より羽織へ綫をかける也　十口
尺八に普化禪師とはいゝ名也　泉河
二百餘人の中で一番短氣　五樂
目立つまで里子を置くの横着さ　門柳
忠岑の久離を切つた小猿也　泉河
不惜身命髮を切り指を切り　同
鰯の直が出來やしたと嬶ふれ　魚交

四月十五日開

御勝手がよつぽど知れる時鳥　五盛
花鳥風までは異見で置いたれど　五樂
暦見て棧敷を借りる恥かしさ　水砥
顔を苦にする内所帶いかぬ也　烏口
方々で產のある度嫁こまり　五明
こじつけの帝猿島郡なり　龜遊
もうかまはねえあの事で又不緣　五樂

怠状を乞ひ／＼迷子連れて來る　間々
奉公も三兩からは名のりかけ　素鳥
さも憎さうにお妾を一字ぬき　五盛
けちな晩酒と夜食で一分なり　五樂
はやり醫者元船からも呼びに來る　素鳥
女房に犬を附けとく馬鹿亭主　魚交
繁昌は猫も杓子も金に成り　龜遊
日の永さ箕輪の里に小傾城　春松
口へらず精進物がいゝと云ひ　魚交
ちつと來て語りやせうは下手な奴　間々
下戸を見込んで此文を頼みんす　魚交
大帳を持つて能辯二三人　雀芝
女房に柱をちツとみやげ也　龜遊
うまいこと娘團扇で招く也　春松
心腹を娘あかすと婚姻じやみ　魚交
落附いた仕方四五日過ぎて去り　五樂
晩にかゝ様が來るよとむごいこと　五鳥
四谷御門の外で三味線指南　泉河
村のどら小百坪ぺいおん無くし　播州
三分では銅壺を買ふと素見する　五鳥
かたり斗りでも陽虎は喰へる面　雀芝
四季をり／＼に戯れておん出され　間々
踊子の堅いが扇二本さし　雅情
肴くひ仕舞つて御用しかつてる　万疎
石魂たちまちあらはれる十四日　泉河
茶をぬつた天氣で花見やめに成り　五風
羽ばたきをして挽臼の禮をいひ　素鳥
貴樣も御茶をなさるかとぶしつけさ　春松
白がねの光放つて妾出る　五盛
人參をおつかなさうに藪醫盛り　五扇
槍よりも針には物がいひ安し　五鳥
足强を四人やとふ面白さ　春松
馬の足まさか素人でもならず　十口
御職女郎のいけぬ手を家うち似せ　雀芝
靈寳に拜ませさうな下駄を召し　雅情
新五郎輿へ這入つた心也　春松
板の間へきりたゝツ込むいたづら子　魚交
燒味噌を燒いてるとこへ日なし來る　五風
看病にのけたい顔が一つあり　素鳥
ふるさと寒く大飯を食ひに出る　十口
吉原で下に／＼が紀の國屋　五風
三圍はよせと鳥居を越えた奴　水砥
くさい物蓋して娘もめてゐる　五樂
扶持かたを階子の下で渡してる　五風
槍踊下女はひらたへはしけられ　万疎
眠い筈三時役所へ詰めてゐる　春松
みんな賣切と出し賣馬鹿な形　水砥
下女が耳なめると赤い箱が來る　五龍
阿房宮三りん坊に垣を結ひ　播州
呉服屋へ駈込のある俄雨　五扇
下戸が側から雉子燒さ／＼　雅情
おちやるなと尻をはしよつて嫁やり　万疎
天王樣のあくる日に鉦太鼓　龜遊
赤松の葉と根を橋の名につける　門柳
此頃は日和下駄だと原田いひ　雅情
錢で面張りにふられた根津の裏　門柳
二百六十四文木戸へかつぎ出し　五樂
角力取一目ににらめつけられる　播州
江の島へ日づけおやぢの自慢也　魚交
傾城を片腕にして母苦勞　同

四月廿五日開

現金の通ひを以て借りに來る　水砥
よい所へ御出きぬ張息子持ち　魚交
三文の中にあはれな杜若　雅情
負けて居りやいゝ事にして又紅葉　五樂
櫻姫や龍田姫がさそひ出し　水砥
十二一重はおそろしい化けの皮　同
にくいことかゝさま迄が人見知り　五樂
をかしさは母脱殼を起してる　同
田樂は豐島牡丹餅は吉原　水砥
しんしにて嫁ほとゝぎす／＼　春松
いゝ事を言つては笑初させる　万昧
わるい事此地内へも建つげなの　五樂
五六本足のはひるをはきたがり　魚交
こゝに三兩かしこに五兩勘當　五扇
鎌倉を戻れば桃や栗が成る　水砥
ひまなく魚の取れる頃伊勢屋食ひ　魚交
折釘に熨斗と箒とぶらさがり　素鳥
馬道の向うは降るに日が當り　門柳
寒いこと障子へ花を切つて張り　雅情
名聞なこと吉原を丸で買ひ　五樂
すめぬこと姉が三つ四つ下に見え　同
紫の袖や袂で飯を盛り　龜遊
下女が文よんぺうれしく候と書き　五風
小便に槍をつかせて見ともなさ　泉河
江戸がふさがつたで京へあがる也　龜遊
大わらはの姿で去り狀を書き　五盛
娘を貰つたと七十五日まで　鳥口
楊枝屋の出見世はけちな穀屋也　雅情
目に見えぬ大物入りは衣なり　龜遊
おろすとてくたばるなよとせなアいひ　五樂
四手駕つるんであるく見ともなさ　春松
しらみの子下女小刀でけづッてる　雅情

五月五日開

品川も旅で泊ればねむい所　素鳥
三布團女郎上手にあがるなり　泉河
三人掛りで仕立てる夜具布團　同
失禮と知りつゝ内儀不興なり　春松
見ないふり迯げようと迄いつた奴　五樂
馬鹿なこと鰹をくらひ水を飲み　春松
富士は知れたこと竝に呉服店　泉河
疱瘡は妾五つか六つの年　五扇
柏餅守歸るとはおん出され　間々
見料が出るとさつぱり素見なし　五盛
ばあさまの折々拜むいやな井戸　五樂
いゝ旦那百二拾軒まへもくれ　龜遊
御入滅はるかの後に楷子出來　泉河
子が出來て入らない指が三本なり　五扇
白壁で手習をして叱られる　五明
馬引いて白いお飯をくひに來る　春松
下女を踏台になげしの羽を取り　五扇
柄の附いた提灯を出しすべりやす　間々
女房は漕ぎ出す舟へ笠を投げ　五盛
身にしまぬ釣をしてゐる草履取　五樂
天文を見て女房は夜具を解き　龜遊
三會目そこで親父が腹を立て　泉河
釘抜へ簪さらひ込む煮賣見世　五扇
待たせやう常の通りと壁へ書き　五明
ぬれ藁さげてといひなと嫁をせめ　春松
罪なことせなあ四五疋たのまれる　五盛

おれは孔子だと陽虎は二度かたり　五盛
ほとゝぎすすりに見込まれさうな顔　雀芝
おとッさんおよしなさいと飛んだこと　五風

五月十五日開

恥な事茶屋盃も出さぬなり　五樂
鯉をくひ田樂をくひ近く成り　烏口
人丸にはぢをかゝせるねごいこと　五樂
やるぞ白紙金とよむ太皷持　龜遊
明後日まで拜借と金屛風　閒々
此田樂はどうすると亭主立ち　雀芝
拔身にてしやくりを止めて叱られる　五明
吉原の松の葉いやな心ざし　五樂
隣のが緣附いてからどらに成り　同
見倒しと云つたと素見腹を立て　春松
手を借りて心の動く灸の蓋　素鳥
女房の繻絆でさわぐけちな奴　五樂
とぼ口に枕の見える暑いこと　五扇
井戸替がすんで横着者が出來　魚交
おそのやおそよ腰を細くしたがる　泉河
いゝ男振だと遣手くゝし上げ　閒々

うかゞつて見なとしこなす地紙賣　東之改 伍遊
たまさかに擂鉢の鳴る一人者　閒々
長尋ね二人で烟艸見世を出し　五樂
糸だては我を張つて出た奴が買ひ（原文疑はし）　五盛
俄雨ぶとうな傘を娘さし　魚交
その方がおもでちッとはかじる也　五盛
深窓に養ひ過ごし四火をする　五明
糠袋ごぜうんざりな顔をする　雀芝
下女情人に銀のをねだりしかられる　閒々
名の高い酢屋昔はべに屋也　泉河
太郎坊などと秋葉でしやれる也　五鳥
返さぬとざん切の來るこはい金　五樂
下女一人男二人をぼい出だし　五明
ちつぽけな熊手買ふほど負け殘り　五盛

五月廿五日開

杯を娘苦にして母へさし　雀芝
船へ出た留守へ言置く暑氣見舞　五風
養子娘だと思つたらさうかえ　五樂
ばあ〳〵と百二十人たまげてる　雅情
乳貰ひに老人のわるい婆ァ來る　閒々

雜なこと論語をかぶり貴賤也　五樂
耆婆が來い扁鵲が來い娘死ぬ　泉河
三文ほどの言傳を息子いひ　素鳥
湯戻りの笑を聞けば輕井澤　龜遊
無理な事買はうといふと壼を入れ　雀芝
愛敬を二ッつ落す惜しいこと　五風
あの娘蜂がさしたと惡い沙汰　春松
菱形のいし〳〵上ぐる貧な雛　五盛
松井と椎井の中猪はしり　泉河
ひがらさは一人が九文六分づつ　五樂
風吹きの烏横ぞッ方へ飛び　五明
動くなと緣の下から旅戻り　五樂
雛にさんまの天窓ぶッつける　万疎
見附から久しい中へ聲をかけ　素鳥
三文と附木へ書いてけちな梨子　五風
唯袖を引くと踊子あかんべい　五樂
養由基とう〳〵笄を取りはぐり　泉河
いぢらしさほくろの様な乳をさがし　雅情
むごいことと檢使へ捨子笑ひかけ　春松
お初にを當分いふのはづかしさ　雀芝

樂なことねだると作るばかり也　五扇
おくればせに僧はたゝく宿の門　五盛
いやな下女くされ布子で作り立て　五扇
御小身門おし開きせなア出る　五風
見ともなさ槍を持たせて醉ッぱらひ　春松

六月五日開

上下を脱ぐと言葉もずるくなり　五風
六郷を靜に越える三年目　五扇
いつそ響めましたと返す金屛風　魚交
やれ〳〵草臥れたと怪しい紅葉　同
大小言見世のたばねをする者が　五樂
ハアおん出されなんしたかえと平氣　間々
妻がうたぐりましたと眞間の連　魚交
眞黒に牛の寝て居る宵月夜　素鳥
廿日過ぎ事を好みに息子行き　間々
おが屑も人屑も出た材木屋　五樂
針みぞの時斗お糸〳〵なり　雀芝
冗談とどさあで一首出來るなり　龜遊
耳かきに一つ程づつかゞみとぎ　五風
後の月盃のない銚子也　泉河

先づだまりやれとかすかな時鳥　五明
自然鎌倉へ御序母の文　五盛
交りなしのおまんまを喰ふ馬喰町　伽遊
人影を見ると額を嫁おさへ　五樂
二代目の金はすは〳〵動く也　百馬
あら世帯手廻しをして夜食也　五風
仰山なもの傾城の他出なり　雅情
ころぶと金を二分拾ふいゝ子也　間々
碁の客は大概にして女房寝る　素鳥
俵屋を懐庵つきにおもふなり（原文疑はし）　雀芝
胸算用の違つたは長田也　雅情
又何か無心大ぶろしきと文　五樂
六阿彌陀宵に大屋で鍵をかり　五扇
田樂をくひともかくも〳〵　春松
嫁の針箱耆過にばかり出る　間々

六月十五日開

隅田川ちと向うへとそゝのかし　春松
三味線が二挺と琴を世に殘し　五盛
あれも見た是も見た間もなく迯る　五扇
いふといふつもり返さぬ後家の金　五樂

隣では小言大薩摩の稽古　五風
大あくび時々焼香〳〵　泉河
いゝ天氣錢をほしがる人が來る　素鳥
放れ馬どぶから座頭あげてやり　五扇
年忘れ隣でも今朝おそく起き　龜遊
客の邪魔一軒につき一人づつ　五樂
猫がさかるで物干へ嫁出兼ね　間々
油斷した振で地主を聟に取り　五樂
いさぎよく身代仕舞十四日　泉河
口書を取られるやうに聟咄し　春松
蒸籠でさきの饅頭喰ひに行き　百馬
八九のくるしみを聟引受ける　魚交
格外の大安賣赤穂屋なり　泉河
きついこと四手一貫五百取り　間々
柏餅味噌を入るゝと仕舞ふ也　五盛
着て居て縫はせ屁をひるぞ〳〵　万疎
先供は鍬を投げるを待つてゐる　五鳥
座敷牢お袋急度叱るなり　龜遊
下女不首尾たび〳〵首を二つ出し　五鳥

六月廿五日開 下谷玉泉寺毘沙門天奉納　願主　春松

願ほどき百たび足を運ぶなり　五楽
もうよしと藥をのまぬ八十九　素鳥
鶴龜の膳に宗和が五六人　同
我國の梅よりしやれは松と椎　龜遊
河内屋へ通ふを女房苦勞がり　芦露
神木の側で他人に異見する　五楽
流れの中のどろ水は遣手なり　芹丈
御寢巻の小袖なりとと照日いひ　水砥
山水にぬッぺらぼうが網をひき　青峨
すまぬもめとうとう聟が出るに成り　間々
大風に包まれて行く樽拾ひ　春松
もうつくに及ばぬ杖は長くする（原文疑はし）　雀芝
落し文あくたもくたを書きならべ　五楽
片側はあくびたら／＼ほとゝぎす　泉河
三年の内にお經もよみならひ　春松
傾城の振袖口が遠いなり　雅情
竪（たて）がもめんだと御内儀見あらはし　五楽
御不勝手口の巧者なやつを置き　雅情
袖口一つでも恐入つて賣り　泉河

山伏の羽織着て出るひまなこと　素鳥
甲冑で目出度い船に召させられ　同
小遣のたまりを附けるさわがしさ　雀芝
供の傘（からかさ）で娘の内が知れ　金旭
又乳か針があるよと片寄せる　横好
大こまり龍の口から降出され　五盛
知れてるに師直様の御自筆さ　五楽
寶さかつて三浦屋へ二度這入り　青峨
子の聲で呼んだで高い眞桑瓜　間々
小玉のうちは不景氣と藝子いひ　芹丈
中直りはあ／＼思ふ酒を出し　雀文
そりや當る當ると嫁の前へ据ゑ　春松
猪牙の道わけて高瀬はかゝつてる　五楽
どつこい／＼と二階へ子煩悩　加多留
おれはへんなものに似たとのまたはく　泉河
強い不斷着を毘沙門様は召し　五扇
鎌倉の迎ひに伯父の岡右衞門　魚交
又一（ひと）小言聞くのだと供歸り　五楽
味噌の珠數つなぎを軒へ干しておき　五扇
大ぼやが寄つてお龜を望むなり　五鳥

又折りもござりやせうと出來かゝり　泉河
夕立は帳にくはしい呉服店　雅情
伴左衞門關所近所の生れなり　泉河
土用干鎧をぬぐと眞つ裸　蔦故
惣仕舞土の牢から二人（ふたり）出し　龜遊
ぺん／＼の側に立派な扇なり　金旭
鏡とぎ前をひろげて歩く也　春松
おやぢいに因果地藏の前で逢ひ　魚交
餅を燒くつもりで炭を買つておき　泉河
ほとゝぎす帷子竹や竿竹や　同
大きな石で四位のみをぶつつぶし　同
讀んでる本で鼻づらの蚊をなぐり　萬踈
鯉は生煮え田樂と極る也　五盛
百膳は鰤一式で間に合はせ　魚交
すゝり泣き康頼成經はこまり　五楽
看病に息子をやるが先づ不念　雀芝
蚊の中に立つてゝ母の異見なり　五楽
かうのものといふは大根のはたらき　加多留
あざとさは雪見の留守で湯をわかし　五扇
江戸の不二六郷目から氣がそれる　水砥

生酔をひよつと押へてもてあまし　春松
お願だ二十四文と根津の鶏　五楽

しめッほさ栗南天の花盛り　五明
けちな雛様ふろしきを敷いてゐる　車道

霍亂と藪醫者見立てる車引　金旭
おくろものつん出し夜着の綿を入れ　亀遊

干物があるとしらせる門涼み　魚交

舟の無い六郷を越すおもしろさ　亀遊

七介が來る内四手待つてゐる　同

宿の鶏山のさやのと合言葉　青蛾

火熨斗にておんのけられるかじけ坊　萬疎

直千金一こくな門を〆め　芹丈

本能寺窮鼠却つてとんだ事　雅情

天明三癸卯年六月

牛込新納戸町
蓬萊

川傍柳 第五篇 をはり

板元

池之端中町
長谷川新兵衛

下谷竹町
花屋久次郎

昭和二年六月　十日印刷
昭和二年六月十三日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝部
第二十六卷
川柳雜俳集
（非賣品）

編輯發行兼印刷者　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番・一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿六卷及追加篇二卷 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一卷 第二卷 西鶴名作集 上下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懷硯 ○近代艶隱者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土產 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目玉鉾

第三卷 芭蕉全集

正篇 ○蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懷紙 ○曠野 ○ひさご ○猿簑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿簑

附錄 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四卷 第五卷 近松名作集 上下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河浪鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○栬狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衞壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繋馬

第六卷 第七卷 淨瑠璃名作集 上 下

○雪女 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○椀久末松山 ○お染久松袂の白しぼり ○八百屋お七 ○笠屋三勝廿五年忌 ○心中二つ腹帶 ○傾城思升屋 ○愛護若塒箱 ○富仁親王嵯峨錦 ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大內鑑 ○苅萱桑門筑紫𨏍 ○敵討襤褸錦 ○御所櫻堀川夜討 ○釜淵雙級巴 ○ひらがな盛衰記 ○鷓山姬捨松 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記

第八卷 歌舞伎脚本集

○參會名護屋 ○兵根元曾我 ○源平雷傳記 ○百夜小町 ○傾城淺間嶽 ○成田山分身不動 ○中將姬京雛 ○丹波與作手綱帶 ○傾城壬生大念佛 ○鳥邊山心中 ○嶋髮歌仙櫻 ○心中鬼門角 ○伊勢頭戀寢刃 ○漢人漢文手管始 ○五大力戀緘 ○金門五三桐 ○四谷怪談 ○與話情浮名橫櫛

第九卷 浮世草子集

○傾城色三味線 ○傾城曲三味線 ○傾城歌三味線 ○世間息子氣質 ○浮世親仁氣質 ○世間娘氣質 ○咲分五人媳 ○傾城禁短氣 ○商人軍配團 ○棠大門屋敷 ○鎌倉諸藝袖日記 ○日本新永代藏 ○御前義經記 ○好色萬金丹

第十卷 怪談名作集

○御伽婢子 ○狗張子 ○玉箒木 ○虛實雜談集 ○怪談登志男 ○近世百物語 ○西播怪談實記 ○茅屋物語 化物判取帖 ○豐年珍話集 ○實物語 ○怪談實錄 ○英草紙 ○繁々野話 ○雨月物語 ○垣根草 ○莠句冊 ○近代百物語 ○怪談記野狐名玉 ○怪談名香富貴玉 ○清誠談 ○臥遊奇談 ○深山草 ○怪異前席物語 ○古加良志草紙

第十一卷 黃表紙廿五種

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記

○啌多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千祿本
○江戸生艶氣樺焼 ○莫切自根金生木 ○文武二道
万石通 ○孔子縞于時藍染 ○心學早染草 ○即席
耳學問 ○盧生夢魂其前日 ○馬鹿長命子氣物語 ○
世上酒落見繪圖 ○桃太郎發端話說 ○十四傾城
腹之内 ○金々先生造化夢 ○忠臣藏前世幕無 ○
世諺口紺屋雛形 ○稗史億說年代記 ○御誂染長壽 ○
小紋 ○的中地本問屋 ○人間萬事吹矢的 ○人間
萬事吹矢的(草稿)

第十二巻 酒落本集

○傾城買四十八手 ○契情買虎の巻 ○嫖客三體誌
○娼妓絹籭 ○遊子方言 ○月花餘情 ○百花評林
○大抵御覽 ○異素六帖 ○廓中奇譚 ○辰巳の園
○和唐珍解 ○通言總籬 ○辰巳婦言 ○令子洞房
○寸南破良意 ○仕懸文庫 ○猫射羅子 ○道中粋
語錄 ○聖遊廓 ○錦の裏 ○三教色 ○契國策
○眞女意題 ○甲驛夜の錦 ○田舍芝居 ○婦美車紫
𨿸 ○起承轉合 ○梓町甲閨 ○古契三娼 ○滸都
酒美撰 ○夜半の茶漬 ○志羅川夜船 ○穴學問
○狂訓彙軌本紀 ○娼妃地理記 ○遊僊窟煙の巻
○女郎買糟味噌汁 ○美地の蠣殼

第十三巻 讀本集

○昔話稲妻表紙 ○本朝酔菩提 ○日本水滸傳 ○
旬傳實々記 ○三七全傳南柯夢 ○飛騨匠物語 ○
天羽衣

第十四巻 滑稽本集

○風流志道軒傳 ○古朽木 ○阿多福假面 ○指面草 ○人
遠茶懸物 ○無彈砂子 ○小紋雅話 ○奇妙岡藥 ○浮世風
呂 ○早變胸機關 ○客者評判記 ○浮世床 ○人間萬事虚
誕計 ○同上後篇 ○假名手本藏意抄 ○一盃綺言 ○古今
百馬鹿 ○八笑人 ○七偏人 ○柳巷訛言 ○市川評判圖會
室の梅 ○福來雀 ○一雅話三笑 ○言葉の花 ○鯛の味噌津

第十五巻 人情本集

○春色梅暦 ○春色辰巳園 ○春色惠之花 ○英對
暖語 ○梅見船 ○閑情末摘花 ○假名文章娘節用
○八萬鐘

第十六巻 第十七巻 第十八巻 南總里見八犬傳 上 中 下

第十九巻 膝栗毛其他

○東海道中膝栗毛 ○木曾街道膝栗毛 ○六阿彌陀詣

第廿巻 第廿一巻 修紫田舍源氏 上 下

第廿二巻 第廿三巻 和文和歌集 上 下

○眞淵歌文集 ○蘆庵六帖詠草 ○桂園一枝(景樹)

○うけらが花(千蔭) ○琴後集(春海) ○宗武歌集 ○曙覧歌集 ○藤簍冊子(秋成) ○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿四巻 俳文俳句集

○五元集(其角) ○五元集拾遺(同) ○五元集脱漏(同) ○雜談集(同) ○類柑子(同) ○玄峰集(嵐雪) ○其袋(同) ○去來文草發句集 ○ひとりごと(鬼貫) ○鬼貫句選(鬼貫) ○七車(同) ○とくとくの句合(素堂) ○韻塞(許六) ○風俗文選(同) ○葛の松野(支考) ○笈日記(同) ○雅文消息(許六・野坡) ○蛙合(仙化) ○俳諧職人盡(寥和) ○鶉衣(也有) ○蕪村句集(蕪村) ○蕪村文集(同) ○新花摘(蕪村) ○寫經社集(同) ○十番左右句合(同) ○明鴉(几董) ○續明鴉(同) ○新雜談集(同) ○井華集(同) ○太祇句集(太祇) ○春泥句集(春泥) ○三春日記(蓼太) ○芙蓉文集(耳得) ○白雄句集(白雄) ○骨書(樗良) ○俳ざんげ(大江丸) ○はいかい袋(同) ○曉臺句集(曉臺) ○佐渡日記(同) ○おらが春(一茶) ○一茶句集(同) ○鼠の道行(成美) ○成美家集(同) ○蔦眼集(道彦) ○鶴芝(士朗) ○斧の柄(乙二) ○續繪歌仙(宜麥) ○屠龍の技(抱一)

第廿五巻 狂文狂歌集

○古今夷曲集 ○萬載狂歌集 ○萬代狂歌集 ○四方のあか ○四方の留糟 ○千紫萬紅 ○萬紫千紅 ○めでた百首 ○かくれ里の記 ○(石川雅望の作では)狂文あづまなまり ○吉原十二時 ○(風來山人のものでは) 風來山人六々部集(前篇) ○風來山人六々部集(後篇) ○風流志道軒 ○(手柄岡持のものでは) 我おもしろ

第廿六巻 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十篇 ○誹風柳多留拾遺四篇 ○川傍柳五篇

追加篇 第廿七巻 歌謡音曲集

○義太夫(近松名作集及浄瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。)

○傾城阿波の鳴門(八つ目・順禮の段) ○艶容女舞衣(下の巻・酒屋の段) ○戀娘昔八丈(下の巻・鈴ヶ森の段) ○桂川連理柵(下の巻・帶屋の段) ○廓文章(吉田屋の段) ○傾城戀飛脚(下の巻・新口村の段) ○碁太平記白石噺(七つ目・揚屋の段) ○花上野譽の石碑(四つ目・志渡寺の段) ○木下蔭狭間合戦(七つ目 竹中陣屋の段) ○蝶花形名歌島臺(八の切・小坂部館の段) ○三十三間堂棟由來(平太郎住家の段) ○玉藻前曦袂(三の切・道春館の段) ○八陣守護城(八の切・正清本城の段) ○生寫朝顔日記(宿屋の段) ○壺坂靈驗記(澤市内の段) ○近江源氏先陣館(八つ目切・小四郎切腹の段) ○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○禿萬歳○灸すゑ嚴の疊夜着○酒中花○水調子○うかぶ瀨○ぬれ扇○亂髮夜編笠○助六所緣江戸櫻○常陸帶花柵○道成寺○淨瑠璃供養○都鄙○熊野○泰平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季○松づくし○泰平船づくし○高砂松の段○神樂高砂○羅給の島臺○萬屋助六心中○自然居士過去物語○源氏妹が宿○夕霞淺間獄○尾上雲賤機帶○源氏十二段○賴光大江山入○鉢の木○與作小萬夢路の駒○道行三度笠○鵜飼石和川○お夏笠物狂○競牡丹○源平妹脊の鷄合

○常磐津節

○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○兩顏月姿繪（葱寶）○戾駕色相肩（戾駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靫猿○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木）○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲緣苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新らつぼ）○新負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女○戾り橋○三保の松○松の島○三世相錦繡文章（おその六三）○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）○ゟ連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髮戀曲物（松風）○新茂懺悔睦言（扇寶高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姬）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春○榮能春延壽（長生）○北州千歲壽（北州）○四季三葉草○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山所深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花姿色同（山歸り）○月花玆友鳥（山姥）○筐花手向橋（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮塒鴎○道行旅路の嫁入（八段目・おかけ參り）○六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）○〆能色相圖（神田祭）○造銑菊睦言（菊畑三菊）○菊嬉閨睦言（お岩）○倭假名色七文字（手古舞）○重褄閨の小夜衣（白絲）○明烏花濡衣（浦里）○梅柳中宵月（淸心）○日月星晝夜の織分（夜這星）○初櫓噂高島（三人吉三）○貸浴衣汗雷（夕立）○忍逢春雪解（三千歳）○色增艶夕映（雁金）○花雲助相肩（雲助）○青海波○助六曲輪菊（助六）

○新内節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染抱柏（花園平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞夢○累身賣の段

○薗八節

○道行相合巨燵（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥邊山○花街の色糸（植木屋）○道行菜種の亂咲○江戶の繪姿（おひな吉三郎）○道行綠花房（お花半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛巨燵の段○夕霧

○江戶長唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子（相生獅子）○二人椀久○英獅子亂曲（枕獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣○京鹿子娘道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○風流妹脊の杜建（杜建）○門出京人形（水仙丹前）○亂菊枕慈童（菊慈童）○鑰入解脫衣（解說）○劒烏帽子照葉盞（劒烏帽子）○柳雛諸鳥囀（鷺娘・うしろ面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま○乘掛情の夏小立（與作）○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○童子戯面被（めんかぶり）○衣かづき思破車（やれ車）○童獅子○教草吉原雀（吉原雀）○相生獅子○擲染分紅葉（うはなり）○隈取安宅松（安宅）○御代松子日初戀（小松曳）○其容形七枚起請（こもそう）○關東小六後雛形（淡島）○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉敵顏鳥（三重霞傀儡師）○舞扇薗生梅（舞扇）○濱松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲蠶）○戀男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀罠奇掛合（犬神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）○閨鼓姿八景（節季候・心猿・晒女）○正札附根元草摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姬・四つ竹）○其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○四

新獅子○三升猿曲舞（猿舞）○石橋（外記の石橋）○老松○不動○七所御攝初鐵漿（西王母・戴入娘）○大和い手向五字（官女・牛若）○外記猿○復新三組盞（初雁の傾城）○廓三番叟（廓三番）○歌へす〴〵餘大津畫（藤娘・閻三の座頭・閻三の奴）○月雪花蒔繪の巵（月の巻）○拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢簞鯰）○八重霞賤機帶（賤機）○後の月酒宴島臺（角兵衞獅子）○御歳玉海老手遊（とんび奴）○吾妻八けい（八景）○六歌仙容彩（業平小町）○姿花後雛形（小鍛冶）○初子日○俄獅子○外記の傀儡獅○初しぐれ○猩八景○花翫暦色所八景（助六・景清・新鷺娘）○勸進帳○花兄弟十二月所作（若菜摘・鍾馗・雷）○島臺○軒端松○士農工商○秋色種○雛鶴三番叟○花見車○手習子○織どの○常磐庭○鶴龜○五色の絲○今樣小鍛冶○柳糸引御攝廓（裸三番叟）○壽○鞍馬山○翁千歳三番叟○丹前○菖蒲ゆかた○喜三之庭○紀州道成寺○連獅子○時雨西行

○歌澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇 廿八巻

謡曲三百番集

○脇能物

○高砂○弓八幡○志賀○淡路○御裳濯○代主○佐保山○松尾○養老○老松○白樂天○放生川○鶴龜○東方朔○白鬚○大社○寢覺○源太夫○道明寺○難波○鶴祭○輪藏○富士山○江島○賀茂○嵐山○氷室○逆矛○要石○和布刈○竹生島○九世戸○岩船○金札○吳服○西王母○右近○繪馬○鱗形○玉井○内外詣

○修羅物

○田村○八島○箙○忠度○俊成忠度○經政○通盛○兼平○頼政○實盛○巴○清經○朝長○敦盛○生田敦盛

○三番目物

○野宮○井筒○芭蕉○采女○東北○梅○佛原○墨染櫻○身延○半蔀○夕顏○定家○江口○楊貴妃○雪○二人靜○千手○六浦○藤○杜若○羽衣○誓願寺○小鹽○雲林院○遊行柳○西行櫻○陀羅尼落葉○源氏供養○大原御幸○吉野靜○住吉詣○松風○熊野○草紙洗小町○山姥○祇王○胡蝶○吉野天人○鷺○葛城○龍田○三輪○卷絹○檜垣○關寺小町○鸚鵡小町○姨捨

○四番目物

○三井寺○櫻川○柏崎○百萬○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蟬丸○花筐○斑女○加茂物狂○水無月秡○籠太鼓○富士太鼓○梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○碪（砧）○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景淸○弱法師○俊箟○攝待○鉢木○土車○高野物狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服會我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○枕士童○菊士童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○錦戸○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石○小鍛冶○鵺○舎利○谷行○雷電○國栖○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏○絃上○海士（海人）○當麻○來殿○松山天狗

○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々○翁○大典閑曲曲舞獨吟○護法○豐千○千引○常陸帶○空蟬○鶏龍田○阿古屋松○[illegible]式部○鶉○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛花○十番切○笠卒都婆○隱岐院○明智討○柴田○北條○吉野詣○高野詣○池贄○鞠○碁其他

以上日本名著全集、第一期出版「江戸文藝之部」全廿六卷及追加篇二冊は、第十一卷黃表紙廿五種を第一回配本として每月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦縮切りましたが、會員數の增大に件ふ多量製產の利得を以て、益ゝいゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には須たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので每月の會費とは別。從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）

